

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第197集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

矢田遺跡 VI

古墳時代住居跡編 (3)

1 9 9 6

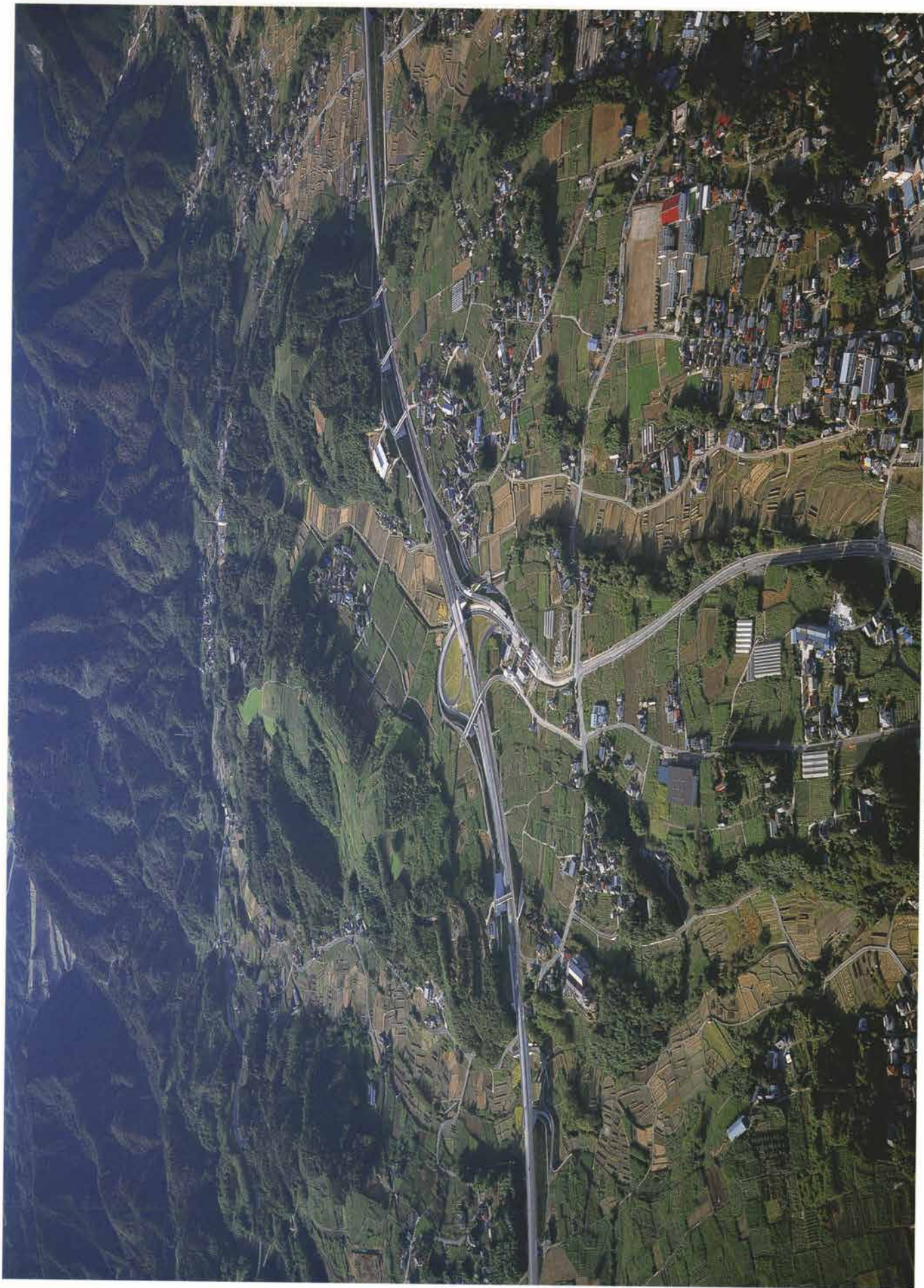
群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第197集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

矢 田 遺 跡 VI

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



矢田遺跡（現 吉井インターチェンジ）と周辺の地形（北から）



108号住居跡遺物出土状況全景（西から）



108号住居跡遺物出土状況全景（北西から）



108号住居跡出土土器

序

吉井町大字矢田は、国特別史跡多胡碑の碑文中に見える多胡郡の郷名「八田郷」の地名を現在に伝えている歴史的に由緒有る地です。この矢田の南の地を高速自動車道の上信越自動車道が通過、また吉井インターチェンジが建設されることになり、同地に埋蔵文化財の所在が認められたため、建設工事に先だって昭和61年度から平成3年までの足掛け6年にわたり発掘調査が行われました。歴史的に由緒有る地にふさわしく、90,000㎡の調査対象面積から古墳・奈良・平安時代の住居跡750軒有余が調査され、多胡郡の歴史を解明する上で大きな成果を上げることができました。

発掘調査の成果は、平成元年度より8年計画で調査報告書刊行のための整理事業をおこない、同年度より「矢田遺跡発掘調査報告書」を逐次刊行し、既に5冊を刊行してきました。そして整理事業7年目の今年度第6冊目がまとまりましたので、ここに「矢田遺跡VI」の調査報告書を上梓することにしました。第VIの報告書には、古墳時代中期の住居跡3軒と同時代後期の住居跡138軒の遺構・遺物が報告されています。

発掘調査から調査報告書刊行まで日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、吉井町教育委員会、地元関係者等には終始御指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表すると共に6年間にわたり発掘調査を担当した職員の労をねぎらい、併せて本報告書が多くのかたに利用、活用されることを願い序とします。

平成8年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡」の発掘調査報告書である。本書は古墳時代住居跡編(3)で、矢田遺跡の調査成果の分冊の6である。古墳時代住居跡編は本報告書の刊行をもって終了する。第4章の中で、古墳時代全住居268軒の規模一覧、土器の様相等の調査成果の一部を報告した。現在『矢田遺跡VII』の整理作業が進行中であり、整理の進展に伴い、奈良時代でなく、古墳時代に変更された住居が数軒存在する。そのため古墳時代の住居数は増加する予定である。
- 2 矢田遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田606・607番地ほかの周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用した。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（勢多郡北橘村大字下箱田に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～平成2年8月27日、平成3年11月5日～11月26日
調査担当者 鬼形芳夫(昭和61年度専門員、現高崎市立高南中学校教頭)
依田治雄(平成3年度専門員、現中里村立中里小学校教頭)
中沢 悟(昭和61～平成3年度専門員)
春山秀幸(昭和62・63年度調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭)
関口功一(昭和63・平成元年度調査研究員、現群馬県立前橋南高等学校教諭)
内木真琴(昭和61・62年度調査研究員、現群馬県立前橋工業高等学校教諭)
富田一仁(平成元・2年度調査研究員、現群馬県立境高等学校教諭)
関口博幸(平成2年度調査研究員、現安中市立第二中学校教諭)
 - (2) 整理 整理期間 平成6年4月1日～平成7年8月31日、整理担当者 中沢 悟
 - (3) 事務 常務理事 白石保三郎(昭和61～63年度)、邊見長雄(平成元～4年度)、中村英一
事務局長 井上唯雄(昭和61・62年度)、松本浩一(昭和63～平成3年度)、
近藤 功(平成4～6年度)、原田恒弘
管理部長 大沢秋良(昭和61年度)、田口紀雄(昭和62～平成2年度)、
佐藤 勉(平成3～5年度)、蜂巢 実
調査研究部長 上原啓巳(昭和61～63年度)、神保侑史
総務課長 斎藤俊一(平成4～6年度)、小淵 淳
調査研究第2課長 岸田治男
総務課 国定 均、笠原英樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義、大澤友治
関越道上越線調査事務所
所長 井上 信(昭和61～63年度)、高橋一夫(平成元・2年度)、阿部千明(平成3年4月～11月)、松本浩一(平成3年12月～4年3月)、吉田 肇(平成4・5年度)
総括次長 片桐光一(昭和61～平成元年度)、大澤友治(平成2・3年度)
次長 原田恒弘(昭和62年度)、徳江 紀(昭和63～平成2年度)

課長 長谷部達雄(昭和61年度)、鬼形芳夫(昭和62年度～平成2年度)、
依田治雄(平成3～5年度)

庶務課 係長代理 黒澤重樹(昭和61～63年度)、宮川初太郎(平成元～2年度)
主任 国定 均(昭和63～平成元年度)、笠原秀樹(平成2・3年度)、
吉田有光(平成4・5年度)

6 報告書作成関係者

編集 中沢 悟
本文執筆 岸田治男(第1章第1節)、中沢 悟(第1章第1節以外)
遺構写真 鬼形芳夫、依田治雄、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、関口博幸
遺物保存処理 関 邦一 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
土橋まり子 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託員)
小材浩一、小沼恵子 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)
遺物写真 佐藤元彦 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
遺物観察 中沢 悟
整理補助 皆川正枝、島崎敏子、富沢スミ江、木暮紀子、木暮美津江、岸 弘子、堀米弘美
委託関係 【航空写真】 蠶青高館 たつみ写真スタジオ
【遺構測量、遺構・遺物トレース】 蠶測設 蠶測研
【石材鑑定】 陣内主一

7 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

8 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、50音順)

吉井町教育委員会、井上 太、小林昌二、小安和順、陣内主一、関 和彦、堤 隆、津野 仁、
永嶋正春、仲山英樹、平川 南、茂木由行、矢野健一、矢島 浩、渡辺 一

9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故)新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、
新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、井田松寿、今井 好、
浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、
金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、
栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢 治、小嶋八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、
佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、
紫藤カヲル、紫藤 孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、
神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、
高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 満、寺尾克代、
中村いち、櫛島静子、(故)櫛島豊統、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、
林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ヶ島富二郎、
三木時一、宮下憲子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、
山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、(故)吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子
上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。(敬称略、50音順)

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

住居跡 1/60、竈 1/30を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。
- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す（国土座標第IX系）。


- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。



甕・甑・壺・鉢 1/4、高坏・坏・蓋・甕 1/3、石製品・鉄製品 1/2

それ以外はその都度縮尺を示した。

実測図中に口縁部のラインが中央の垂直ライン右側でわずかに欠損しているものがある。これは口縁部の残存が $\frac{1}{2}$ 未満であるために、復元実測したことを意味している。

- 5 遺構実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  焼土  粘土  炭

(遺物)  吸炭による黒色処理  内面漆又は吸炭、外面吸炭

その他の場合はその都度示す。

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボル・マークは下記のことを示す。

● 土器類 △ 石器類 ▲ 鉄器類 ★ 紡錘車

- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
図版目次
抄 録

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過	3
第1節 発掘調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	4
第2章 地理的環境及び歴史的環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 基本層序	12
第3章 古墳時代の遺構と遺物	15
第4章 調査成果の整理とまとめ	410
第1節 古墳時代の住居について	410
第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について	435
第3節 ま と め	454

発掘報告書抄録

写真図版

付図 矢田遺跡全体図

挿 図 目 次

第 1 図	矢田遺跡調査区及びグリッド配置図	4
第 2 図	矢田遺跡と周辺の遺跡分布図	8
第 3 図	矢田遺跡周辺図	9
第 4 図	基本層序概念図	12
第 5 図	本報告住居及び周辺遺構分布図	13
第 6 図	14号住居跡実測図	15
第 7 図	14号住居跡出土遺物実測図	16
第 8 図	15号住居跡実測図(1)	17
第 9 図	15号住居跡(2)・床下実測図	18
第 10 図	15号住居跡新東竈実測図	19
第 11 図	15号住居跡出土遺物実測図(1)	19
第 12 図	15号住居跡出土遺物実測図(2)	20
第 13 図	17号住居跡実測図(1)	22
第 14 図	17号住居跡実測図(2)	23
第 15 図	17号住居跡出土遺物実測図	23
第 16 図	18号住居跡実測図(1)	24
第 17 図	18号住居跡実測図(2)	25
第 18 図	18号住居跡床下実測図	26
第 19 図	18号住居跡出土遺物実測図	27
第 20 図	22号住居跡実測図	29
第 21 図	22号住居跡竈・出土遺物実測図	30
第 22 図	30号住居跡実測図	31
第 23 図	30号住居跡出土遺物実測図	31
第 24 図	31号住居跡実測図	32
第 25 図	31号住居跡出土遺物実測図	33
第 26 図	53号住居跡実測図	34
第 27 図	53号住居跡出土遺物実測図(1)	35
第 28 図	53号住居跡出土遺物実測図(2)	36
第 29 図	53号住居跡出土遺物実測図(3)	37
第 30 図	77号住居跡実測図	40
第 31 図	77号住居跡床下・竈実測図	41
第 32 図	77号住居跡出土遺物実測図(1)	42
第 33 図	77号住居跡出土遺物実測図(2)	43
第 34 図	89号住居跡実測図(1)	45
第 35 図	89号住居跡実測図(2)	46
第 36 図	89号住居跡竈実測図	46
第 37 図	89号住居跡出土遺物実測図	47
第 38 図	105号住居跡実測図	48
第 39 図	105号住居跡出土遺物実測図	49
第 40 図	107号住居跡実測図	49
第 41 図	107号住居跡竈実測図	50
第 42 図	107号住居跡竈掘り方実測図	51
第 43 図	107号住居跡出土遺物実測図(1)	51
第 44 図	107号住居跡出土遺物実測図(2)	52
第 45 図	108号住居跡実測図(1)	53
第 46 図	108号住居跡実測図(2)	54
第 47 図	108号住居跡実測図(3)	55
第 48 図	108号住居跡実測図(4)	57
第 49 図	108号住居跡実測図(5)	59
第 50 図	108号住居跡出土遺物実測図(1)	61
第 51 図	108号住居跡出土遺物実測図(2)	62
第 52 図	108号住居跡出土遺物実測図(3)	63
第 53 図	108号住居跡出土遺物実測図(4)	64
第 54 図	108号住居跡出土遺物実測図(5)	65
第 55 図	108号住居跡出土遺物実測図(6)	66
第 56 図	108号住居跡出土遺物実測図(7)	67
第 57 図	108号住居跡出土遺物実測図(8)	68
第 58 図	108号住居跡出土遺物実測図(9)	69
第 59 図	114号住居跡実測図	75
第 60 図	114号住居跡竈実測図	76
第 61 図	114号住居跡出土遺物実測図(1)	76
第 62 図	114号住居跡出土遺物実測図(2)	77
第 63 図	117号住居跡実測図	78
第 64 図	117号住居跡竈実測図	79
第 65 図	117号住居跡出土遺物実測図(1)	79
第 66 図	117号住居跡出土遺物実測図(2)	80
第 67 図	119号住居跡実測図	81
第 68 図	119号住居跡床下実測図	82
第 69 図	119号住居跡竈実測図	83
第 70 図	119号住居跡出土遺物実測図	83
第 71 図	127号住居跡実測図	85
第 72 図	127号住居跡竈実測図	86
第 73 図	127号住居跡出土遺物実測図(1)	86
第 74 図	127号住居跡出土遺物実測図(2)	87
第 75 図	129号住居跡実測図	89
第 76 図	129号住居跡竈実測図	90
第 77 図	129号住居跡出土遺物実測図(1)	91
第 78 図	129号住居跡出土遺物実測図(2)	92
第 79 図	147号住居跡実測図	94
第 80 図	147号住居跡竈実測図	94
第 81 図	147号住居跡出土遺物実測図	95
第 82 図	148号住居跡実測図(1)	96
第 83 図	148号住居跡実測図(2)	97
第 84 図	148号住居跡竈実測図	98
第 85 図	148号住居跡出土遺物実測図(1)	99
第 86 図	148号住居跡出土遺物実測図(2)	100
第 87 図	148号住居跡出土遺物実測図(3)	101
第 88 図	149号住居跡実測図	104
第 89 図	149号住居跡床下実測図	105
第 90 図	149号住居跡竈実測図	106
第 91 図	149号住居跡出土遺物実測図(1)	106
第 92 図	149号住居跡出土遺物実測図(2)	107
第 93 図	156号住居跡実測図	108
第 94 図	156号住居跡竈実測図	109
第 95 図	156号住居跡出土遺物実測図	109
第 96 図	157号住居跡実測図	110
第 97 図	157号住居跡貯蔵穴付近実測図	110
第 98 図	157号住居跡竈実測図	111
第 99 図	157号住居跡出土遺物実測図(1)	111
第100 図	157号住居跡出土遺物実測図(2)	112
第101 図	160号住居跡実測図	113
第102 図	160号住居跡竈実測図	114
第103 図	160号住居跡出土遺物実測図(1)	114
第104 図	160号住居跡出土遺物実測図(2)	115
第105 図	162号住居跡実測図(1)	116
第106 図	162号住居跡実測図(2)	117
第107 図	162号住居跡出土遺物実測図	117
第108 図	164号住居跡実測図(1)	119
第109 図	164号住居跡(2)・床下実測図	120
第110 図	164号住居跡出土遺物実測図(1)	121
第111 図	164号住居跡出土遺物実測図(2)	122
第112 図	165号住居跡実測図(1)	123
第113 図	165号住居跡実測図(2)	124
第114 図	165号住居跡竈実測図	125
第115 図	165号住居跡出土遺物実測図(1)	125
第116 図	165号住居跡出土遺物実測図(2)	126

第117図	167号住居跡実測図(1)	128
第118図	167号住居跡実測図(2)	129
第119図	167号住居跡電実測図	129
第120図	167号住居跡出土遺物実測図	130
第121図	168号住居跡実測図	132
第122図	168号住居跡電実測図	133
第123図	168号住居跡出土遺物実測図	133
第124図	171号住居跡実測図	135
第125図	171号住居跡電実測図	136
第126図	171号住居跡出土遺物実測図	136
第127図	173号住居跡実測図	137
第128図	173号住居跡出土遺物実測図	138
第129図	175号住居跡実測図(1)	139
第130図	175号住居跡実測図(2)	140
第131図	175号住居跡電実測図	140
第132図	175号住居跡出土遺物実測図	141
第133図	194号住居跡実測図	143
第134図	194号住居跡新北電実測図	144
第135図	194号住居跡出土遺物実測図(1)	144
第136図	194号住居跡出土遺物実測図(2)	145
第137図	199号住居跡実測図	146
第138図	199号住居跡電・出土遺物実測図	147
第139図	210号住居跡実測図	148
第140図	210号住居跡電実測図	149
第141図	210号住居跡出土遺物実測図	150
第142図	214号住居跡実測図	151
第143図	拡張以前に想定される214号住居跡実測図	152
第144図	214号住居跡床下実測図	153
第145図	214号住居跡電実測図(1)	154
第146図	214号住居跡電実測図(2)	155
第147図	214号住居跡出土遺物実測図	155
第148図	217号住居跡実測図	156
第149図	217号住居跡出土遺物実測図	157
第150図	220号住居跡実測図	158
第151図	220号住居跡電・出土遺物実測図	159
第152図	232号住居跡実測図	160
第153図	232号住居跡出土遺物実測図	160
第154図	238号住居跡実測図	161
第155図	238号住居跡電実測図	161
第156図	238号住居跡出土遺物実測図	162
第157図	239号住居跡実測図	163
第158図	239号住居跡電実測図	163
第159図	239号住居跡出土遺物実測図	164
第160図	245号住居跡実測図	164
第161図	245号住居跡出土遺物実測図	165
第162図	251号住居跡実測図	166
第163図	251号住居跡床下実測図	167
第164図	251号住居跡新東電実測図	168
第165図	251号住居跡旧北電実測図	168
第166図	251号住居跡出土遺物実測図	169
第167図	255号住居跡実測図	171
第168図	255号住居跡電実測図	172
第169図	255号住居跡出土遺物実測図	172
第170図	256号住居跡実測図	173
第171図	256号住居跡電実測図	173
第172図	256号住居跡出土遺物実測図	174
第173図	258号住居跡実測図	175
第174図	258号住居跡床下実測図	176
第175図	258号住居跡電実測図	177
第176図	258号住居跡出土遺物実測図	177
第177図	259号住居跡実測図	178
第178図	259号住居跡出土遺物実測図	179
第179図	262号住居跡実測図	180

第180図	262号住居跡電実測図	180
第181図	262号住居跡出土遺物実測図	181
第182図	267号住居跡・出土遺物実測図	181
第183図	278号住居跡実測図	182
第184図	278号住居跡新北電・旧東電実測図	183
第185図	278号住居跡出土遺物実測図	183
第186図	283号住居跡実測図	184
第187図	283号住居跡電実測図	185
第188図	283号住居跡出土遺物実測図	186
第189図	295号住居跡実測図	187
第190図	295号住居跡電実測図	187
第191図	295号住居跡出土遺物実測図	188
第192図	302号住居跡実測図	189
第193図	302号住居跡電・出土遺物実測図	190
第194図	303号住居跡実測図	191
第195図	303号住居跡床下実測図	192
第196図	303号住居跡電実測図	192
第197図	303号住居跡出土遺物実測図	193
第198図	305号住居跡実測図	193
第199図	305号住居跡電実測図	194
第200図	305号住居跡出土遺物実測図	194
第201図	307号住居跡実測図	195
第202図	307号住居跡電・出土遺物実測図	196
第203図	310号住居跡実測図	197
第204図	310号住居跡床下実測図	198
第205図	310号住居跡出土遺物実測図(1)	198
第206図	310号住居跡出土遺物実測図(2)	199
第207図	312号住居跡実測図	200
第208図	312号住居跡電実測図	201
第209図	312号住居跡出土遺物実測図	201
第210図	319号住居跡実測図	202
第211図	319号住居跡電実測図	203
第212図	319号住居跡出土遺物実測図	203
第213図	321号住居跡実測図	204
第214図	321号住居跡新北電・旧東電実測図	205
第215図	321号住居跡出土遺物実測図	206
第216図	325号住居跡実測図	208
第217図	325号住居跡出土遺物実測図	209
第218図	326号住居跡実測図	210
第219図	326号住居跡床下実測図	211
第220図	326号住居跡電実測図	212
第221図	326号住居跡出土遺物実測図(1)	212
第222図	326号住居跡出土遺物実測図(2)	213
第223図	327号住居跡実測図	215
第224図	327号住居跡電・出土遺物実測図	216
第225図	327号住居跡出土遺物実測図	217
第226図	328号住居跡実測図	218
第227図	328号住居跡電・出土遺物実測図	219
第228図	330号住居跡実測図	220
第229図	330号住居跡電実測図	221
第230図	330号住居跡出土遺物実測図	221
第231図	332号住居跡実測図	222
第232図	332号住居跡出土遺物実測図	222
第233図	333号住居跡実測図	223
第234図	333号住居跡電実測図	224
第235図	333号住居跡出土遺物実測図	224
第236図	338号住居跡実測図	226
第237図	338号住居跡出土遺物実測図	227
第238図	342号住居跡実測図	228
第239図	342号住居跡出土遺物実測図	229
第240図	344号住居跡・電実測図	230
第241図	344号住居跡出土遺物実測図	231
第242図	346号住居跡実測図(1)	232

第243图	346号住居跡実測図(2)	233	第306图	396号住居跡出土遺物実測図	283
第244图	346号住居跡出土遺物実測図	233	第307图	397号住居跡実測図	285
第245图	347号住居跡実測図	235	第308图	397号住居跡電実測図	286
第246图	347号住居跡出土遺物実測図	236	第309图	397号住居跡出土遺物実測図	286
第247图	348号住居跡実測図	237	第310图	401号住居跡・床下実測図	287
第248图	348号住居跡出土遺物実測図	237	第311图	401号住居跡電実測図	288
第249图	348号住居跡周辺遺構重複関係図	238	第312图	404号住居跡実測図	289
第250图	350号住居跡実測図	239	第313图	404号住居跡電実測図	290
第251图	350号住居跡床下実測図	240	第314图	404号住居跡出土遺物実測図	290
第252图	350号住居跡電実測図	240	第315图	416号住居跡実測図	291
第253图	350号住居跡出土遺物実測図	241	第316图	416号住居跡電実測図	292
第254图	351号住居跡実測図	241	第317图	416号住居跡出土遺物実測図	292
第255图	351号住居跡電実測図	242	第318图	417号住居跡実測図(1)	293
第256图	351号住居跡出土遺物実測図	242	第319图	417号住居跡実測図(2)	294
第257图	352号住居跡実測図	243	第320图	417号住居跡新東電実測図	295
第258图	352号住居跡電実測図	244	第321图	417号住居跡旧北電実測図	295
第259图	361号住居跡実測図	244	第322图	417号住居跡出土遺物実測図	296
第260图	361号住居跡電実測図	245	第323图	420号住居跡実測図	298
第261图	361号住居跡出土遺物実測図	245	第324图	420号住居跡床下実測図	299
第262图	362号住居跡実測図(1)	246	第325图	420号住居跡電実測図	299
第263图	362号住居跡(2)・電実測図	247	第326图	420号住居跡出土遺物実測図	300
第264图	362号住居跡出土遺物実測図	248	第327图	423号住居跡実測図	300
第265图	363号住居跡実測図	249	第328图	423号住居跡電実測図	301
第266图	363号住居跡電実測図	250	第329图	538号住居跡実測図	302
第267图	363号住居跡出土遺物実測図	251	第330图	538号住居跡電実測図	302
第268图	368号住居跡実測図	252	第331图	538号住居跡出土遺物実測図	303
第269图	368号住居跡電実測図	253	第332图	539号住居跡実測図	304
第270图	368号住居跡出土遺物実測図	253	第333图	539号住居跡床下・電実測図	305
第271图	370号住居跡実測図	254	第334图	539号住居跡出土遺物実測図	306
第272图	370号住居跡出土遺物実測図	254	第335图	544・547号住居跡実測図	307
第273图	371号住居跡実測図(1)	255	第336图	544号住居跡出土遺物実測図	308
第274图	371号住居跡実測図(2)	256	第337图	547号住居跡出土遺物実測図	308
第275图	371号住居跡電実測図	257	第338图	545号住居跡実測図	309
第276图	371号住居跡出土遺物実測図(1)	257	第339图	545号住居跡出土遺物実測図	310
第277图	371号住居跡出土遺物実測図(2)	258	第340图	548号住居跡実測図	311
第278图	382号住居跡実測図	260	第341图	548号住居跡電実測図	311
第279图	382号住居跡貯蔵穴実測図	260	第342图	548号住居跡出土遺物実測図	312
第280图	382号住居跡電実測図	261	第343图	579号住居跡実測図	312
第281图	382号住居跡出土遺物実測図(1)	261	第344图	579号住居跡新北電・旧西電実測図	313
第282图	382号住居跡出土遺物実測図(2)	262	第345图	579号住居跡出土遺物実測図	314
第283图	382号住居跡出土遺物実測図(3)	263	第346图	581号住居跡実測図	314
第284图	385号住居跡・出土遺物実測図	265	第347图	581号住居跡出土遺物実測図(1)	315
第285图	387号住居跡実測図	266	第348图	581号住居跡出土遺物実測図(2)	316
第286图	387号住居跡出土遺物実測図	267	第349图	581号住居跡出土遺物実測図(3)	317
第287图	388号住居跡実測図	268	第350图	582号住居跡実測図	320
第288图	388号住居跡電実測図	269	第351图	582号住居跡新北電実測図	321
第289图	388号住居跡出土遺物実測図	269	第352图	582号住居跡旧東電実測図	321
第290图	389号住居跡実測図	270	第353图	582号住居跡出土遺物実測図	322
第291图	389号住居跡床下実測図	271	第354图	584号住居跡実測図	323
第292图	389号住居跡電実測図	272	第355图	584号住居跡新貯蔵穴実測図	324
第293图	389号住居跡出土遺物実測図	272	第356图	584号住居跡床下実測図	324
第294图	393号住居跡実測図	273	第357图	584号住居跡新東電実測図	325
第295图	393号住居跡電・出土遺物実測図	274	第358图	584号住居跡旧北電実測図	325
第296图	394号住居跡実測図	275	第359图	584号住居跡出土遺物実測図	326
第297图	394号住居跡電実測図	275	第360图	587号住居跡実測図	326
第298图	394号住居跡出土遺物実測図	276	第361图	588号住居跡実測図	327
第299图	395号住居跡実測図	277	第362图	588号住居跡出土遺物実測図	328
第300图	395号住居跡床下実測図	278	第363图	589号住居跡・床下実測図	329
第301图	395号住居跡電実測図	279	第364图	589号住居跡電実測図	330
第302图	395号住居跡出土遺物実測図(1)	279	第365图	589号住居跡出土遺物実測図(1)	331
第303图	395号住居跡出土遺物実測図(2)	280	第366图	589号住居跡出土遺物実測図(2)	332
第304图	396号住居跡実測図	282	第367图	589号住居跡出土遺物実測図(3)	333
第305图	396号住居跡電実測図	283	第368图	601号住居跡実測図	335

第369図	601号住居跡竈・出土遺物実測図	336	第432図	708号住居跡実測図	390
第370図	602号住居跡実測図	337	第433図	708号住居跡出土遺物実測図	391
第371図	602号住居跡出土遺物実測図	338	第434図	718号住居跡・竈実測図	392
第372図	603号住居跡実測図	338	第435図	718号住居跡出土遺物実測図	393
第373図	603号住居跡出土遺物実測図	339	第436図	719号住居跡実測図	393
第374図	606号住居跡実測図	340	第437図	719号住居跡床下実測図	394
第375図	606号住居跡床下実測図	341	第438図	719号住居跡竈実測図	395
第376図	606号住居跡竈実測図	341	第439図	719号住居跡出土遺物実測図(1)	395
第377図	606号住居跡出土遺物実測図	342	第440図	719号住居跡出土遺物実測図(2)	396
第378図	607号住居跡実測図	343	第441図	723号住居跡実測図	398
第379図	607号住居跡出土遺物実測図	343	第442図	723号住居跡床下実測図	399
第380図	650号住居跡実測図	344	第443図	723号住居跡竈実測図	399
第381図	650号住居跡出土遺物実測図	345	第444図	723号住居跡出土遺物実測図	400
第382図	668号住居跡実測図	345	第445図	725号住居跡実測図	401
第383図	668号住居跡出土遺物実測図	346	第446図	725号住居跡竈実測図	402
第384図	685号住居跡実測図	346	第447図	725号住居跡出土遺物実測図	402
第385図	685号住居跡床下実測図	347	第448図	726号住居跡実測図	403
第386図	685号住居跡竈・出土遺物実測図	348	第449図	726号住居跡竈実測図	404
第387図	687号住居跡実測図	349	第450図	726号住居跡出土遺物実測図	404
第388図	689号住居跡実測図	350	第451図	738号住居跡・床下実測図	406
第389図	689号住居跡床下実測図	351	第452図	738号住居跡竈実測図	407
第390図	689号住居跡竈実測図	352	第453図	738号住居跡出土遺物実測図	407
第391図	689号住居跡出土遺物実測図(1)	352	第454図	741号住居跡実測図	408
第392図	689号住居跡出土遺物実測図(2)	353	第455図	741号住居跡出土遺物実測図	409
第393図	690号住居跡実測図	354	第456図	古墳時代住居分布図(1)	411
第394図	690号住居跡竈実測図	355	第457図	古墳時代住居分布図(2)	413
第395図	690号住居跡出土遺物実測図	355	第458図	竈の造り替えの認められる住居例(1)【6世紀後半】	419
第396図	691号住居跡実測図	356	第459図	竈の造り替えの認められる住居例(2)【7世紀前半】	420
第397図	691号住居跡竈実測図	357	第460図	矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(1)	436
第398図	691号住居跡出土遺物実測図	357	第461図	矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(2)	437
第399図	692号住居跡実測図	358	第462図	矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(3)	442
第400図	692号住居跡床下実測図	359	第463図	矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(4)	443
第401図	692号住居跡新西竈実測図	359	第464図	矢田遺跡周辺から出土しない内斜口縁の高坏と模倣坏	447
第402図	692号住居跡出土遺物実測図(1)	360			
第403図	692号住居跡出土遺物実測図(2)	361			
第404図	693号住居跡実測図	363			
第405図	693号住居跡床下実測図	364			
第406図	693号住居跡竈実測図	365			
第407図	693号住居跡出土遺物実測図	365			
第408図	694号住居跡実測図	366			
第409図	694号住居跡竈実測図	367			
第410図	694号住居跡出土遺物実測図	367			
第411図	695号住居跡実測図	369			
第412図	695号住居跡床下実測図	370			
第413図	695号住居跡新東竈・旧北竈実測図	371			
第414図	695号住居跡出土遺物実測図	372			
第415図	696号住居跡実測図	373			
第416図	696号住居跡竈・出土遺物実測図	374			
第417図	698号住居跡実測図	375			
第418図	698号住居跡竈実測図	375			
第419図	698号住居跡出土遺物実測図(1)	376			
第420図	698号住居跡出土遺物実測図(2)	377			
第421図	699号住居跡実測図	378			
第422図	699号住居跡竈実測図	379			
第423図	699号住居跡出土遺物実測図	379			
第424図	700号住居跡・竈実測図	381			
第425図	702号住居跡実測図	382			
第426図	702号住居跡竈実測図	383			
第427図	702号住居跡出土遺物実測図	384			
第428図	703号住居跡実測図	386			
第429図	703号住居跡床下実測図	387			
第430図	703号住居跡新西竈実測図	387			
第431図	703号住居跡出土遺物実測図	388			

図版目次

巻頭図版	矢田遺跡(現 吉井インターチェンジ)と周辺の地形	図版 58	689・690・691号住居跡
	108号住居跡遺物出土状況全景	図版 59	690・691・692・693号住居跡
	108号住居跡出土土器	図版 60	694・695号住居跡
図版 1	矢田遺跡全景航空写真	図版 61	695・696・698号住居跡
図版 2	第5次・第4次調査区住居群	図版 62	698・699・700号住居跡
図版 3	14・15号住居跡	図版 63	700・702・703号住居跡
図版 4	17・18・22号住居跡	図版 64	703・708・718・719号住居跡
図版 5	22・30・31・53号住居跡	図版 65	723・725・726号住居跡
図版 6	53・77号住居跡	図版 66	726・738・741号住居跡
図版 7	77・89・105・107号住居跡	図版 67	15・17・18・31・53号住居跡出土土器
図版 8	107・108号住居跡	図版 68	77号住居跡出土土器
図版 9	108号住居跡	図版 69	89・107号住居跡出土土器
図版 10	114・117号住居跡	図版 70	108・210号住居跡出土土器
図版 11	119・127号住居跡	図版 71	108号住居跡出土土器
図版 12	127・129号住居跡	図版 72	108号住居跡出土土器
図版 13	129・147・148号住居跡	図版 73	108号住居跡出土土器
図版 14	148・149号住居跡	図版 74	108号住居跡出土土器
図版 15	149・156・157号住居跡	図版 75	108号住居跡出土土器
図版 16	157・160号住居跡	図版 76	108号住居跡出土土器
図版 17	162・164・165号住居跡	図版 77	108号住居跡出土土器
図版 18	165・167号住居跡	図版 78	114・117・127号住居跡出土土器
図版 19	167・168・171号住居跡	図版 79	127・129号住居跡出土土器
図版 20	171・173・175・194号住居跡	図版 80	129・147・148号住居跡出土土器
図版 21	194・199・210号住居跡	図版 81	148号住居跡出土土器
図版 22	210・214・217号住居跡	図版 82	149・157号住居跡出土土器
図版 23	217・220・232・238・239号住居跡	図版 83	157・160・162・164号住居跡出土土器
図版 24	239・245・251・255号住居跡	図版 84	164・165号住居跡出土土器
図版 25	255・256・258号住居跡	図版 85	167・168・171・173・175号住居跡出土土器
図版 26	259・262・267・278号住居跡	図版 86	175・194・199・210号住居跡出土土器
図版 27	283号住居跡	図版 87	214・217・220・239・245・251・258号住居跡出土土器
図版 28	283・295・302号住居跡	図版 88	259・262・267・278・283・295号住居跡出土土器
図版 29	302・303・305号住居跡	図版 89	302・305・307・310・319・321号住居跡出土土器
図版 30	307・310・312号住居跡	図版 90	325・326号住居跡出土土器
図版 31	312・319・321号住居跡	図版 91	326・327・328・332・333・338号住居跡出土土器
図版 32	321・325・326号住居跡	図版 92	342・344・346・347・348・350・361号住居跡出土土器
図版 33	326・327・328号住居跡	図版 93	362・363・368・371号住居跡出土土器
図版 34	330・332・333・338号住居跡	図版 94	371・382号住居跡出土土器
図版 35	338・342・344号住居跡	図版 95	382・387号住居跡出土土器
図版 36	344・346・347・348号住居跡	図版 96	388・389・394・395号住居跡出土土器
図版 37	350・351・352号住居跡	図版 97	396・397・404・417・420・538号住居跡出土土器
図版 38	352・361・362号住居跡	図版 98	539・545・548・581号住居跡出土土器
図版 39	362・363号住居跡	図版 99	581号住居跡出土土器
図版 40	363・368・370・371号住居跡	図版100	582・584・589号住居跡出土土器
図版 41	371・382号住居跡	図版101	589・603号住居跡出土土器
図版 42	382・385・387・388・389・390・391号住居跡	図版102	606・607・689・691・692号住居跡出土土器
図版 43	388・389・390・391号住居跡	図版103	692・693号住居跡出土土器
図版 44	393・394・395号住居跡	図版104	694・695・698号住居跡出土土器
図版 45	395・396・397号住居跡	図版105	698・699・702号住居跡出土土器
図版 46	397・401・404号住居跡	図版106	703・718・719号住居跡出土土器
図版 47	404・416・417号住居跡	図版107	719・723・725・726・741号住居跡出土土器
図版 48	417・420・423・538号住居跡	図版108	鉄製品・切子玉・土玉・白玉・白玉末製品
図版 49	538・539号住居跡	図版109	紡錘車・未製品・飾り石
図版 50	539・544・548号住居跡	図版110	火打ち石・砥石・15号住居跡出土土器も編み石
図版 51	543・544・545・546・547号住居跡	図版111	18・31・53・77・117・119・129号住居跡出土土器も編み石
図版 52	579・581号住居跡	図版112	108・149号住居跡出土土器も編み石
図版 53	581・582・584号住居跡	図版113	160・162・165・173・251・310号住居跡出土土器も編み石
図版 54	584・587・588・589号住居跡	図版114	321・327・333・346・371・382号住居跡出土土器も編み石
図版 55	589・601・602・603号住居跡	図版115	385・395・396・582・601・694・695・719号住居跡出土土器も編み石
図版 56	603・606・607・650号住居跡		
図版 57	668・685・687・689号住居跡		

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から開始され、平成3年11月26日を以て終了した。本遺跡は、旧石器、縄文、古墳、奈良、平安、中世の遺構が検出された複合遺跡である。これまで本遺跡付近は、北方2.5kmにある「多胡碑」や『統日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八(矢)田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八(矢)田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。調査報告書の作成は調査と平行しながら平成元年から開始され、これまでに『矢田遺跡』平安時代住居跡編(1)1990、『矢田遺跡II』平安時代住居跡編(2)1991、『矢田遺跡III』平安時代住居跡編(3)1992、『矢田遺跡IV』旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編(1)1993、『矢田遺跡V』古墳時代住居跡編(2)1994 が刊行されている。今後、本書『矢田遺跡VI』古墳時代住居跡編(3)1996 のほかに、『矢田遺跡VII』奈良時代住居跡編1997、『矢田遺跡VIII』住居跡以外の遺構編1997 が刊行の予定である。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
石器ブロック	旧 石 器	1	黒曜石製・台形様石器他総数12点
礫 群	旧 石 器	1	5点の礫により構成される
竪穴住居跡	縄 文 中 期	3	加曽利E 3、埋甕(屋外) 7、土壌が検出されている
	古 墳 前 期	5	遺物は少量である
	古 墳 中 期	5	
	古 墳 後 期	約258	
	奈 良	約175	
	平 安	約273	
	時 期 不 明	約 23	
掘立柱建物跡		約 20	
住居状遺構		約 30	
溝		約 70	
井 戸		約 20	
この他、土器廃棄場2、粘土採掘坑1、小鍛冶3、方形居館址1、ピット多数などがある。また、整理作業の進捗に伴って、総量に若干の上下はあるものと予想される。			

◎本報告は、古墳時代の竪穴住居跡141軒を対象としている。

(53号住居跡は『矢田遺跡V』で報告済であるが、遺物の報告漏れが多く確認されたため追加して再報告した。)

3 まとめ

調査範囲からは、旧石器時代の遺構・遺物を始め、縄文時代中期の集落の存在が判明した。弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。

や た い せき
矢 田 遺 跡 VI

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

第1節 発掘調査に至る経緯

上信越自動車道(関越自動車道上越線)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査(昭和49年)をはじめとし、文化財に関係する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それを受け文化財保護課は調査を実施、同60年3月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の6年間(後、修正があり昭和65年度=平成2年度までの5年間に変更)、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年4月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町南陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジにあたる当遺跡は、インター中心部、それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。調査期間は約5年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はS T A No.109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡を中心に740軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに膨大な量であることから、のべ9年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別(地域を加味する)に実施し、最終整理で全体をまとめることとしている。

今年度で6年間整理作業を実施し、本年度は昨年度に引き続き、古墳時代の住居跡が対象となっている。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本調査区は、吉井インターチェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のS T A No.106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標X = +26, 800、Y = -75,000を原点として5 m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

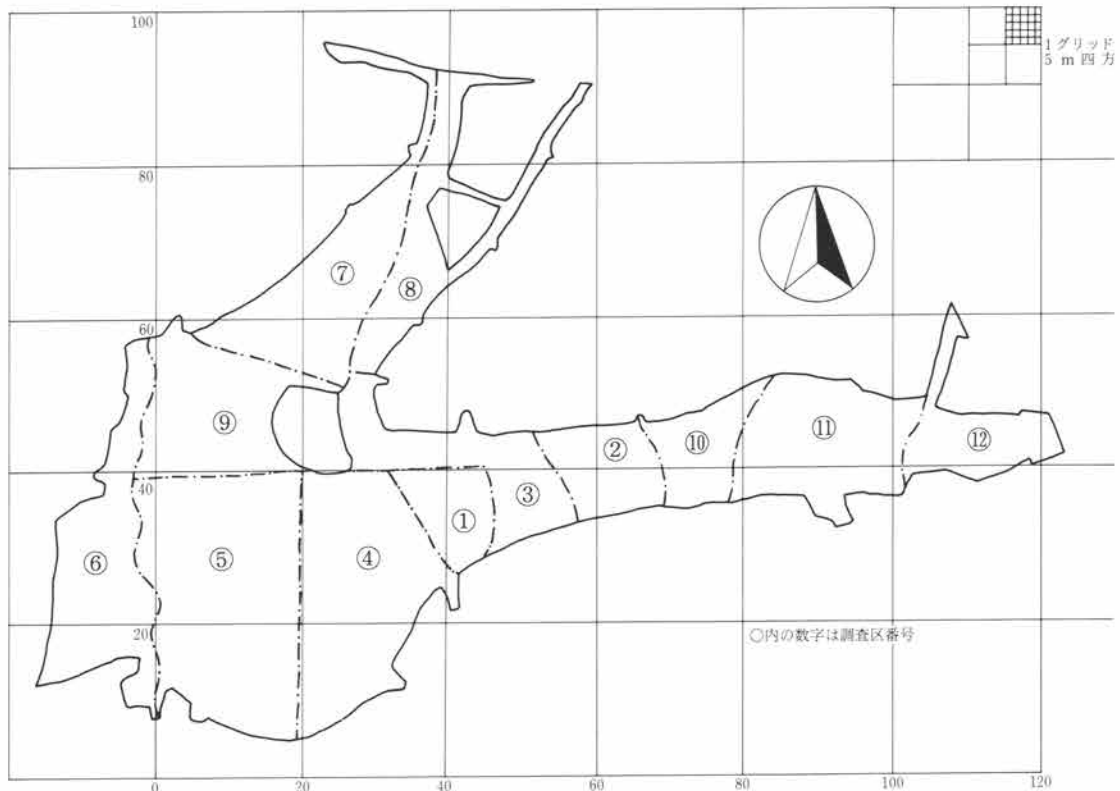
2 調査の経過

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、調査を一時中断し中山(多胡蛇黒)遺跡等の調査を行っていた時期などもある。そのため調査自体に丸六年を費やした訳ではない。調査の経過を記した「調査日誌」はB5ファイル5冊にもなり、経過報告では残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌(抄録)」を掲出してみる。

調査日誌(抄)

◎1986年度の調査

- 5月21日 現場作業の開始、第1次調査区の表土掘削開始。
- 29日 発掘作業員の雇用を始める。
- 6月2日 第1次調査区の調査を開始する。
- 7月1日 第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。



第1図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

第2節 調査の方法と経過

- 9月10日 第1・2次調査区の空撮を行う。
22日 第4次調査区の調査を開始する。
- 10月6日 第3次調査区の調査を開始する。
24日 第2次調査区の調査を終了する。
- 12月11日 第3・4次調査区の空撮を行う。
- 1月9日 第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 3月12日 第4次調査区の空撮を行う。
14日 現地見学会（～15日）、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
25日 1986年度の調査を終了する。
- ◎1987年度の調査
- 4月15日 1987年度の調査を開始する。
5月8日 第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月11日 第4次調査区188号住居跡から「八中寸」の文字瓦が出土する。
10月2日 第4次調査区の空撮を行う。
7日 第5次調査区の調査を開始する。
- 11月6日 吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
- 1月21日 第4次調査区の調査を終了する。
- 3月8日 第5次調査区の空撮を行う。
12日 現地見学会（～13日）、2日間で655人程が見学を訪れる。
25日 1987年度の調査を終了する。
- ◎1988年度の調査
- 4月15日 1988年度の調査を開始する。
6月7日 第6次調査区の調査を開始する。
7月19日 第7次調査区の調査を開始する。
- 10月8日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。
総数7685名にのぼる見学者が訪れる。
27日 第5次調査区の空撮を行う。
- 11月7日 第5次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
14日 第6次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
- 12月1日 第5次調査区の調査を進める。
18日 第10次調査区の調査を開始する。
- 2月13日 第8次調査区の表土掘削を開始する。
23日 第7次調査区の空撮を行う。
28日 第9次調査区の表土掘削を開始する。
- 3月24日 1988年度の調査を終了する。
- ◎1989年度の調査
- 4月10日 1989年度の調査を開始する。
7月10日 第7次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
9月26日 第8次調査区(北側部分)の空撮を行う。
12月21日 第8次調査区の空撮を行う。
22日 第9次調査区の679号住居跡から「物ア(部)・一八」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 1月8日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
2月27日 第11次調査区の表土掘削を開始する。
3月9日 第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
23日 1989年度の調査を終了する。
- ◎1990年度の調査
- 4月9日 1990年度の調査を開始する。
5月1日 第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
11日 第8・10次調査区の空撮を行う。
14日 矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
16日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日 第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
- 6月18日 第11次調査区の空撮を行う。
20日 第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日 第11次調査区の50-88グリッドAT層下から、矢田遺跡で初めて黒曜石製の台形様石器が1点検出される。
- 7月2日 第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。
AT層下からチャート・安山岩製の台形様石器2点を含む総数12点の石器が検出された。
- 8月27日 第12次調査区の空撮を行う。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を中断し、多胡蛇黒(中山)遺跡の調査に入る。
- ◎1991年度の調査
- 11月5日 未買収地関連の調査を開始する。
12日 旧石器試掘調査を開始する。
26日 空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1節 地理的環境

群馬県は関東地方北西部の内陸に位置しており、周囲に新潟県・長野県・埼玉県・栃木県・福島県が接している。地形的には、北部及び西部が山地をなしており、中央部から東部にかけてが平野部である。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には鑓(かぶら)川が東流する。この鑓川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村、下仁田町、富岡市、甘楽町、多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏(からす)川に合流する。鑓川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高は、下位段丘面で10~15mを、上位段丘面で50~60mを測る。この段丘面は各時代を通じて様々な土地利用がなされてきたが、現在は下位段丘面が水田として、上位段丘面が主に桑畑として耕地利用されている。

本遺跡は上位段丘面上の多胡(たご)丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150~160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、西谷川の旧河川流路が確認されている。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺は、上野三碑の一つである「多胡碑」の存在や多くの古墳等が知られ、古くから地域の歴史に深い関心もたれている。最近では開発に伴い多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も多く刊行されている。それらの研究成果から地域史における当遺跡の位置付けがなされる必要がある。ここでは、他の報告書等を参考にしつつ周辺遺跡を簡単にまとめてみた。

旧石器時代

吉井町周辺においての調査例は少ない。発掘調査された遺跡として当矢田遺跡をはじめ神保富士塚遺跡・多胡蛇黒遺跡・多比良追部野遺跡等がある。始良・丹沢火山灰(AT)を含む時期の粘土層中を中心として多くの石器が出土している。特に甘楽町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡で大量の石器の出土が認められた。また、藤岡市内では北山遺跡が良好な内容を示し、緑野遺跡群でAT層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

当遺跡からは中期の住居跡が3軒と埋甕や土壙が検出されており、旧石器とともにすでに「矢田遺跡IV」で報告されている。他に遺構の発掘調査された遺跡として多比良追部野遺跡・入野遺跡・神保植松遺跡・神保富士塚遺跡・長根安坪遺跡等が知られる。しかし吉井町内においては大きな集落遺跡は発掘調査されていない。

弥生時代

当遺跡からこの時代の遺物はわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。この地域で多く発掘調査されている遺跡の中で、黒熊遺跡から多くの住居と方形周溝墓が、川内遺跡からは20軒の住居と方形周溝墓、長根安坪遺跡から36軒の住居が、さらに甘楽町天引狐崎遺跡で40軒の住居と4基の方形周溝墓、また天

引狐崎遺跡の西に接する白倉下原・天引向原遺跡では57軒の住居と2基の方形周溝墓が検出されている。このように規模の大きな集落が点在する一方、当遺跡や長根羽田倉遺跡では大規模調査にもかかわらず遺構は全く検出されず、また他の多比良追部野遺跡や神保植松遺跡等の遺跡では検出されても極めて少ない。このように、大きな集落遺跡と小規模な遺跡が分布するといった遺跡の様子が想定される。

古墳時代

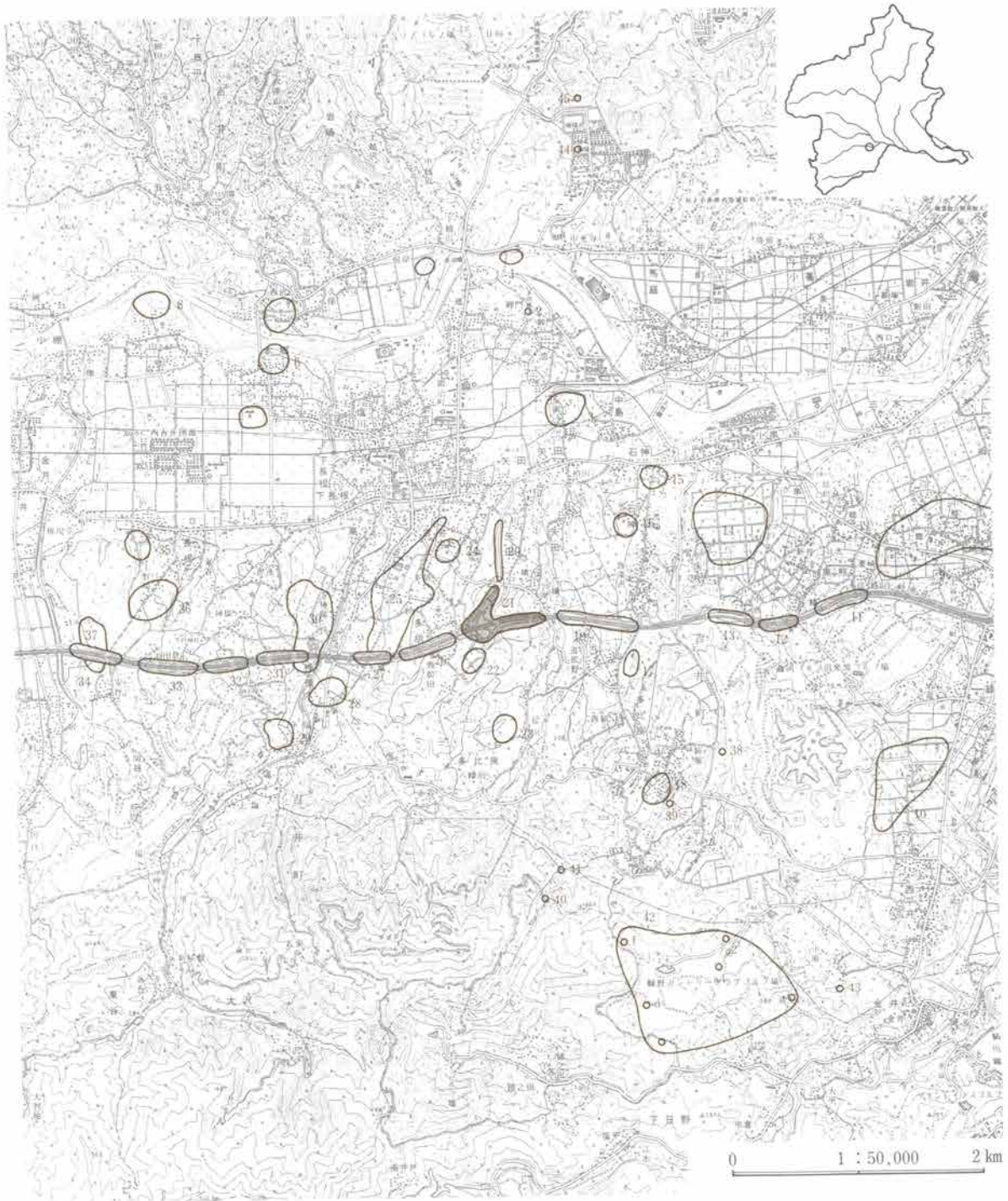
前期～中期に於ける集落遺跡の規模は甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡から31軒の住居と1基の方形周溝墓が調査されているが、他の遺跡での検出例は少ない。近くの遺跡としては神保下條遺跡や神保富士塚遺跡、また長根羽田倉遺跡等で知られるがいずれも2～4軒と少ない。しかし後期になると集落遺跡の数と住居数は爆発的に拡大してくるようである。当遺跡ではこの時期より多くの住居が造られるようになり、隣の多胡蛇黒遺跡や多比良追部野遺跡等でもこの時期をもって一気に集落が大規模に形成されて行く。また入野遺跡や黒熊遺跡群においてもこの時期に多くの集落が営まれている。墳墓としての古墳も群集墳として多胡古墳群、塩Ⅰ・Ⅱ古墳群、山の神古墳群をはじめとして多く認められるようになる。なおこの地域の古墳に関しては右島和夫「遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』1992に詳しい。

また、当遺跡でも出土の認められる石製模造品を出土する遺跡が、この時期から多く認められるようになる。特に甘楽の谷では、原石の滑石や蛇紋岩が鍋川の上流の雄川や大沢川から採集されるため石製模造品を製作する遺跡も多く確認されている。報告書の刊行されている石製模造品を製作した主な遺跡として、甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1989、梅沢重昭「笹遺跡—鍋川流域の滑石製品出土遺跡の研究」『群馬県立博物館研究報告』第一集・第三集 1963・1966、藤岡市教育委員会『F-1竹沼遺跡』1978等があげられる。

奈良時代・平安時代

古墳時代後期の大きな集落遺跡は、多比良追部野遺跡のように奈良時代・平安時代になると住居数が減少する遺跡も認められるが、当遺跡や隣の多胡蛇黒遺跡のように多くの遺跡では住居数が大きく増減することなく、継続的につくられ続けているようである。住居以外の遺構として黒熊中西遺跡において平安時代の寺院跡が検出されている。礎石建物が6～7棟、テラス遺構9面からなり、礎石建物は寺院の主体となる堂宇、テラス遺構は付属的な施設や工房あるいは空間面等と考えられている。また黒熊八幡遺跡・多比良追部野遺跡・長根羽田倉遺跡では、天仁元年(1108)に降下した浅間噴出のB軽石下の水田遺構が調査されている。「多胡碑」は当遺跡北方約2.5kmに位置する。この碑は多胡郡設置に関する記念碑とされ多くの研究がなされている。古代律令制下における動きの一つとして上野国分寺に供給した瓦生産に見られるような古代窯業生産もこの地域で開始される。県内の須恵器生産窯はそれ以前の限定された地域での生産と異なり、8世紀前後をもって各地で窯が築かれて多くの製品が生産されるようになってゆく。この地域では吉井町多比良から藤岡市下日野・藤岡市金井の一帯にかけての山林部分を中心として多くの窯が築かれるようになる。この地域では8世紀前後から10世紀にかけて11箇所27基前後の窯が確認または想定されている。その中の21基が発掘調査されており、この地区には更に多くの窯の存在が想定される。これらの窯は須恵器と瓦を生産し、金山瓦窯跡で焼成された瓦は上野国分寺創建時に築かれ、また滝の前窯跡においては国分寺補修段階において多く瓦が生産された事が指摘されている。

第2章 地理的環境及び歴史的環境



(国土地理院1:25,000「富岡」「上野吉井」「高崎」「藤岡」を縮小して使用)

- 1 川福遺跡 2 多胡碑 3 塚原古墳群 4 富岡遺跡 5 東吹上遺跡 6 本郷古墳群 7 道六神遺跡 8 片山古墳群
- 9 白石古墳群 10 竹沼遺跡 11 黒熊栗崎遺跡 12 黒熊八幡遺跡 13 黒熊中西遺跡 14 黒熊遺跡群 15 祝神古墳群
- 16 入野遺跡 17 東沢遺跡 18 中ノ原古墳群 19 多比良追部野遺跡 20 椿谷戸遺跡 21 矢田遺跡 22 柳田遺跡
- 23 山の神古墳群 24 川内遺跡 25 多胡古墳群 26 多胡蛇黒遺跡 27 神保下篠遺跡 28 塩I古墳群 29 塩II古墳群
- 30 神保古墳群 31 神保植松遺跡 32 神保富士塚遺跡 33 長根羽田倉遺跡 34 長根安坪遺跡 35 長根宿遺跡 36 西場脇遺跡
- 37 安坪古墳群 38 下五反田窯跡 39 滝の前窯跡 40 末沢I窯跡 41 末沢II窯跡 42 下日野・金井窯跡群 43 金山瓦窯跡
- 44 彦田谷窯址 45 ヌカリ沢A窯址

第2図 矢田遺跡と周辺の遺跡分布図



第2章 地理的環境及び歴史的環境

周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
1	川福遺跡 (吉井町馬庭)	奈良・平安時代の住居跡5軒、溝2条等、土器集中地点あり。8世紀前後の須恵器蓋を多く出土。	吉井町教育委員会1986『川福遺跡調査報告書』
2	多胡碑 (吉井町池)	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一つに数えられる。和銅4年(711)多胡郡設置に関する記念碑とされる。	『吉井町誌』1974『群馬県史・資料編4』1985ほか
3	塚原古墳群 (吉井町池)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査。
4	富岡遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代中期の遺物包含層。平安時代住居跡4軒、浅間B軽石の純層堆積。	吉井町教育委員会1989『富岡遺跡』
5	東吹上遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡1軒、平安時代1軒。	群馬県立博物館研究報告第8集1973『東吹上遺跡』
6	本郷古墳群 (吉井町本郷)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	
7	道六神遺跡 (吉井町本郷)	平安時代住居跡1軒、溝6条等。	吉井町教育委員会1986『道六神遺跡』
8	片山古墳群 (吉井町片山)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
9	白石古墳群 (藤岡市白石)	古墳時代中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の大群集墳からなり、終末古墳も含む。	
10	竹沼遺跡(藤岡市西平井・緑埜)	旧石器時代の石器、縄文時代中期住居跡3軒、弥生時代後期から古墳時代前期4軒、古墳時代後期17軒、滑石工房址9軒ほか。	藤岡市教育委員会1978『F1群馬県藤岡市竹沼遺跡』
11	黒熊栗崎遺跡 (吉井町黒熊)	古墳時代と平安時代の住居跡と小鍛冶、掘立柱建物跡、平地神社跡等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『黒熊栗崎遺跡』
12	黒熊八幡遺跡 (吉井町黒熊)	旧石器時代の石器、縄文時代埋設土器、奈良・平安時代の住居跡130軒以上、礎石建物、掘立柱建物跡等検出。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
13	黒熊中西遺跡 (吉井町黒熊)	古墳～奈良・平安時代住居跡78軒、平安時代の礎石建物跡6棟、平安時代の道路遺構7条、井戸、土坑、鬼瓦、経軸端等出土。寺院跡を特色とする遺跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1992・94『黒熊中西遺跡(1)・(2)』
14	黒熊遺跡群 (吉井町黒熊)	縄文・古墳・奈良・平安時代の大集落。	吉井町教育委員会1981～85『黒熊遺跡群調査報告書』(3)(4)等
15	祝神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	
16	入野遺跡 (吉井町石神)	縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡、中世の墓墳。	尾崎喜佐雄1962『入野遺跡』他吉井町教育委員会1985・1986
17	東沢遺跡 (吉井町多比良)	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1987『東沢遺跡・折茂東遺跡』
18	中ノ原古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
19	多比良追部野遺跡 (吉井町多比良)	旧石器時代の石器類430点出土。縄文・古墳・平安時代の住居跡、平安時代の水田、江戸時代の溜池等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
20	椿谷戸遺跡 (吉井町矢田)	縄文時代中期、古墳前後期、奈良・平安時代の住居、中世土坑等。	吉井町教育委員会1989『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
21	矢田遺跡 (吉井町矢田)	本報告。	群馬県埋蔵文化財調査事業団1990～96『矢田遺跡I～VI』
22	柳田遺跡 (吉井町矢田)	古墳～平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1989『柳田遺跡』
23	山の神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
24	川内遺跡 (吉井町吉井)	縄文時代中期の土壌、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓。中世の井戸。	吉井町教育委員会1982『川内遺跡一図版編一』
25	多胡古墳群 (吉井町多胡)	古墳時代後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげている。下條1～3号墳を含む。	

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
26	多胡蛇黒遺跡 (吉井町多胡)	旧石器時代の石器・礫、古墳時代後期～平安時代の住居跡174軒、掘立柱建物跡、溝など。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『多胡蛇黒遺跡』
27	神保下條遺跡 (吉井町神保)	5基の古墳、古墳時代前期3軒・奈良3軒の住居跡。中世の館跡・溝等。大量の埴輪・古墳時代前期の住居跡より鏡・鉄斧・鎌・管玉・ガラス玉等出土。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『神保下條遺跡』
28	塩Ⅰ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
29	塩Ⅱ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	
30	神保古墳群 (吉井町神保)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。	
31	神保植松遺跡 (吉井町神保)	縄文～平安時代の住居、中世を主とした掘立柱建物跡・土壇・井戸・城の堀、古墳時代の方形周溝墓等。遺物として板碑・石臼・五輪塔・陶磁器等出土。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『年報8』
32	神保富士塚遺跡 (吉井町神保)	縄文・古墳・奈良・平安時代の住居跡。掘立柱建物跡・溝・土坑・土器集積祭祀跡等。出土遺物として石器・紡錘車・勾玉等。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『神保富士塚遺跡』
33	長根羽田倉遺跡 (吉井町長根)	古墳～平安時代の住居跡133軒、掘立柱建物跡11棟、井戸11基、土坑93基、溝18条、祭祀遺構2基等。出土遺物として滑石製模造品・紡錘車等の滑石製品。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『長根羽田倉遺跡』
34	長根安坪遺跡 (吉井町長根)	縄文～平安時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓、古墳、土坑、配石遺構等。遺物として勾玉・紡錘車・鉄鏃・ガラス小玉・金環等。	《群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『年報8』
35	長根宿遺跡 (吉井町長根)	中世の溝2条検出。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
36	西場脇遺跡 (吉井町長根)	古墳・平安時代の住居跡、奈良時代の遺物集中地点等。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
37	安坪古墳群 (吉井町長根)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。古墳群南側の一部を、長根安坪遺跡で平成元年に発掘調査。	
38	下五反田窯跡 (吉井町多比良)	3基あったと思われる、2基発掘。1号窯は全長7mの地下式無段無階登窯、2号窯は、全長5.5mの地下式無段登窯。坏・甕・瓦・風字硯・羽釜等出土。9～10世紀。	国土館大学文学部考古学研究室1984『考古学研究室発掘調査報告書』
39	滝の前窯跡 (吉井町多比良)	窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。坏・甕・文字瓦出土。9世紀末～10世紀前半、瓦は上野国分寺に供給されており、国分寺補修期の瓦生産窯。	須田茂1989『吉井町・滝の前窯跡の採集遺物とその性格』『群馬文化』
40	末沢Ⅰ窯跡 (吉井町多比良)	2～3基あったと思われる。林道設置で一部切断されている。1基を発掘調査。窯体の北約半分は無い。地下式無段無階登窯と思われる。蓋・坏・盤・甕・瓦・土鈴等。8世紀前半代を中心としている。	国土館大学文学部考古学研究室1984『考古学研究室発掘調査報告書』
41	末沢Ⅱ窯跡 (吉井町多比良)	Iと同様に、道路拡張により窯体の一部が2基、灰原と思われる一個所が確認されている。	
42	下日野・金井窯跡群 (藤岡市下日野・金井)	藤岡市教育委員会により、ゴルフ場建設に先だって分布調査が行われ、地点ごとにa 2・a 4・c・d・f・gと表記され、発掘調査が行われた。a 2地点で3基、a 4地点で1基、c地点で4基、他に2～3基の窯体が存在していると思われる。d地点で1基、他に製鉄遺構3基調査、g地点で5基の計16基の窯跡が調査された。8～10世紀。	近日中に報告書が刊行される予定である。発掘担当者、古郡正志氏の御教示による。
43	金山瓦窯跡 (藤岡市金井)	3基の窯体が存在し、2基が発掘調査されている。1・2号窯ともトンネル式無段登窯で、全長4.4～4.5m。鏡・字・男・女・文字瓦のほか、須恵器甕等出土。上野国分寺の建造に伴って開窯されたものと考えられている。	坂詰秀一1966『上野・金山瓦窯跡』
44	彦田谷窯址 (吉井町馬庭)	彦田谷窯址は、昭和53年南陽台住宅団地の造成工事中に見発された。同年8月吉井町郷土資料館で発掘調査され2基の窯址が検出された。出土遺物は須恵器で瓦は出土していない。器種は坏・盤・埴・蓋・鉢・甕等である。	吉井町教育委員会1995『ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書』
45	ヌカリ沢A窯址 (吉井町馬庭)	ヌカリ沢A窯址はゴルフ場建設に伴い平成5年12月から平成6年2月にかけて調査が行われた。調査の結果1基の窯址が発掘され須恵器の坏・埴・皿・高坏・壺・鉢・甕・瓶等が出土した。須恵器の坏の底部は回転糸切りが主流である。また高坏がこの段階まで生産されていることが特徴である。	吉井町教育委員会1995『ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書』

第3節 基本層序

矢田遺跡は、前章で述べたように鑄川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が現れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘楽の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいことに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第I層 いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間A軽石(As-A)を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第II層～第VII層は、いわゆる関東ローム層である。

第II層 明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石(As-Yp)を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第III層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子(径2～3mm)を若干含む。第II層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

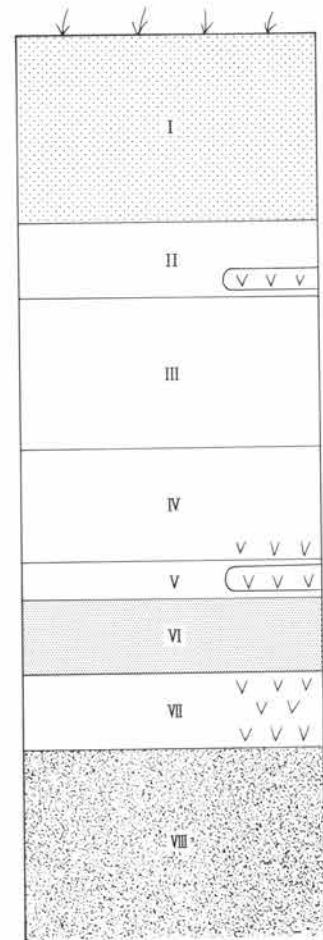
第IV層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第III層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石(As-Bp)を含む。

第V層 明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

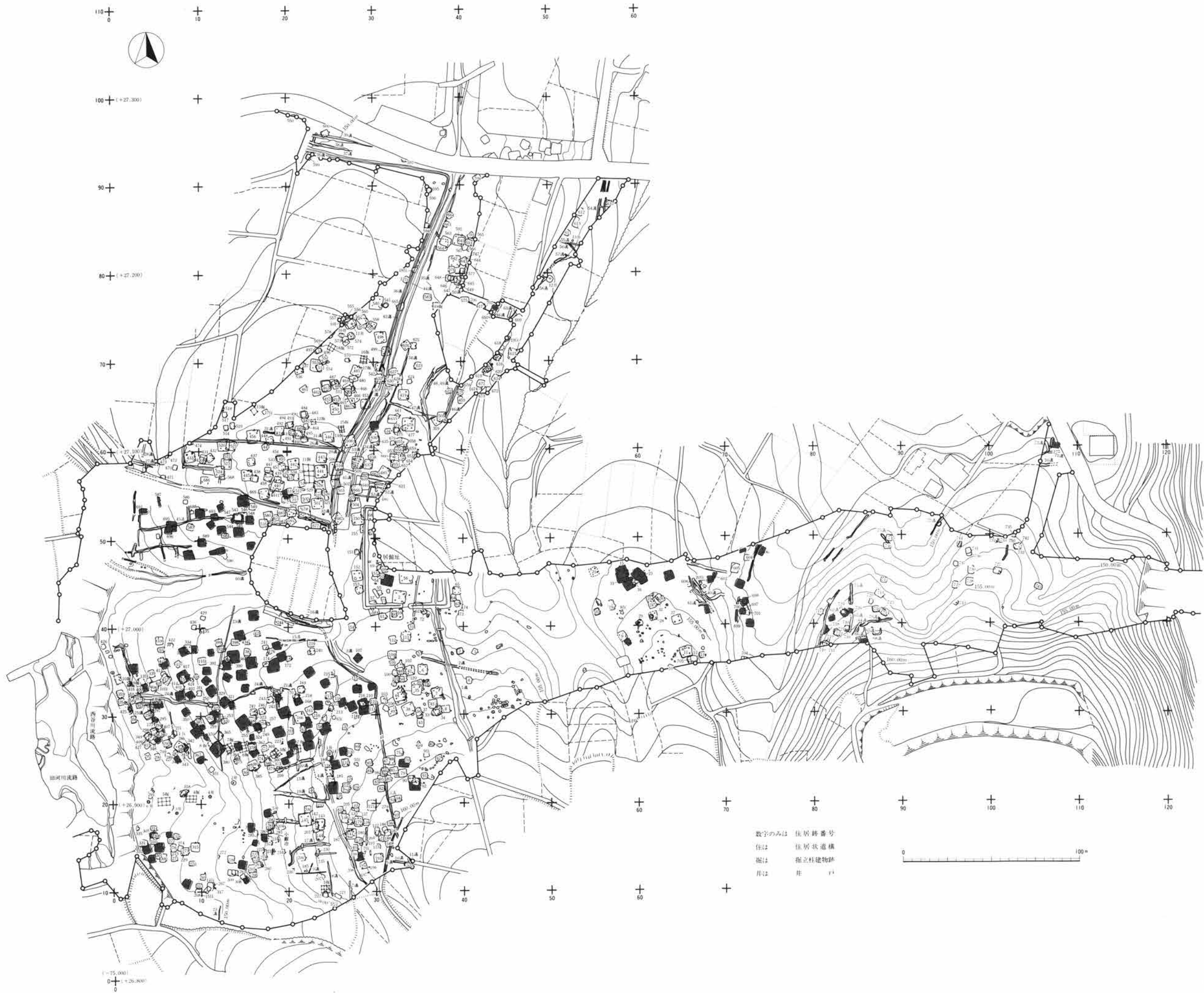
第VI層 暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石(As-Mp)を含みやや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第VII層 浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第VIII層 灰白色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に始良丹沢パミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第4図 基本層序概念図



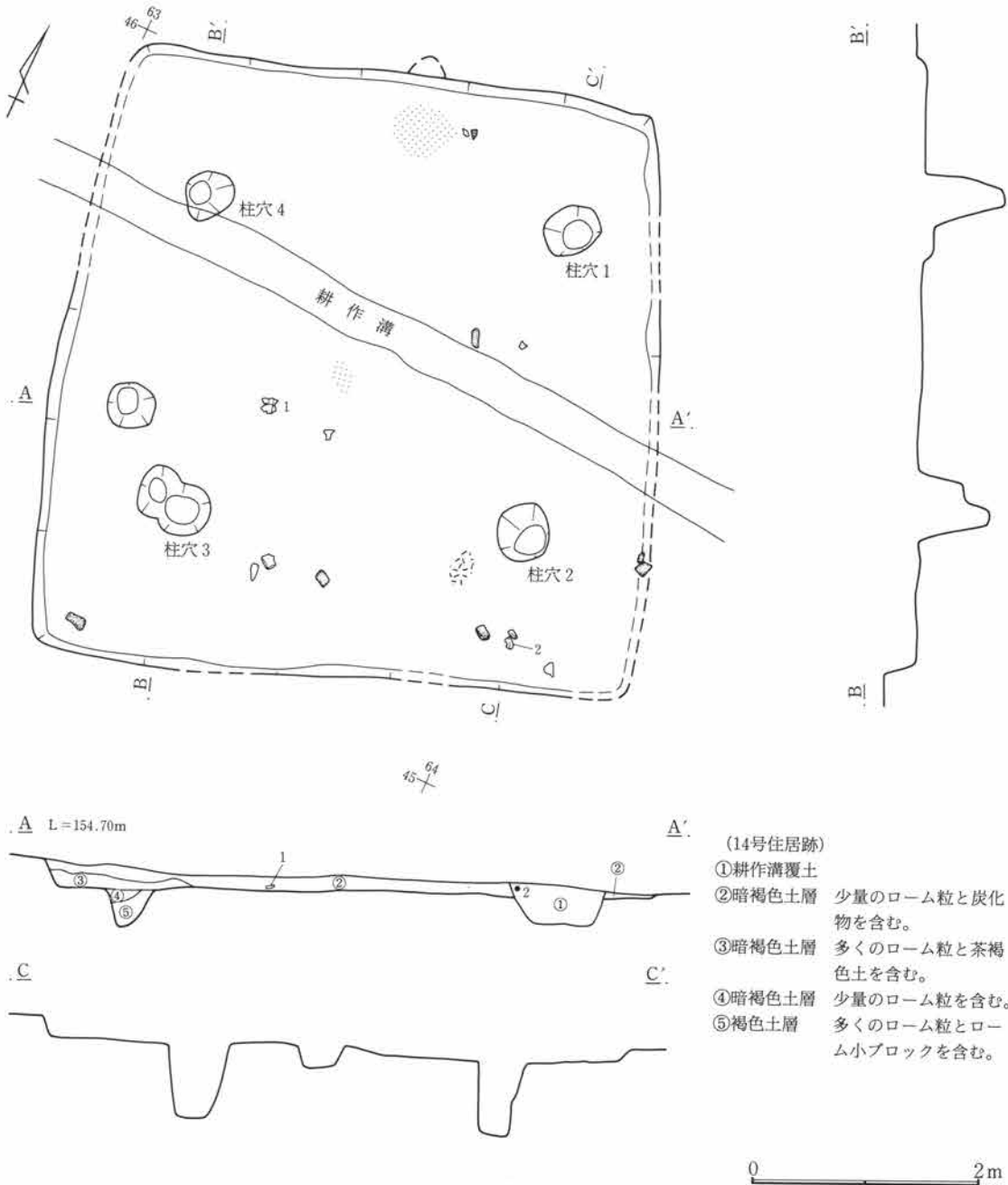
第5図 本報告住居及び周辺遺構分布図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

14号住居跡 (第6・7図、図版3・108)

位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、46-64グリッドに位置する。

概要 本住居跡の位置する調査区は幅の狭い台地上に位置し、表土の流失が多く全体的に住居の残りが悪い。本住居も確認面から床面までが浅く、覆土の多くを耕作溝により掘り込まれており一部は床下まで達している。北壁中央部付近の床面に焼土粒が多く残っており、この部分に竈が築かれていたものと思われるが、袖部の高まりや燃焼部及び煙道部の掘り込みは残っていなかった。



第6図 14号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

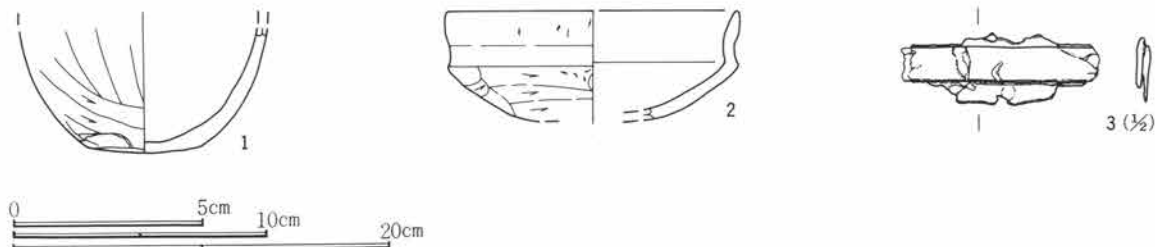
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、良好な床面は残っていなかった。

柱穴が4本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西5.40m、南北5.25mである。壁高は残りの良い南壁部分で26cmである。柱穴1は径52cm深さ83cm、

柱穴2は径45cm深さ68cm、柱穴3は径53cm深さ58cm、柱穴4は径44cm深さ72cmである。

遺物 土師器の甕や坏のほかにも多くの甕の破片が出土している。



第7図 14号住居跡出土遺物実測図

14号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
7-1	土師器 小型甕	床面+3 胴部下半 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 6.0	①粗、3~5mmの片岩粒を少量含む。②酸化焙、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面~胴外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。
7-2	土師器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.6 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。砂粒と粘土の動きが明瞭。口縁部横ナデ。稜は鋭角で明瞭。
7-3 108	鉄製品 不明	覆土	長 (5.2) 幅 0.9 厚 0.3 重 3.73		名称及び用途不明。 2枚の細長い板状の製品か。

15号住居跡 (第8~12図、図版3・67・108・110)

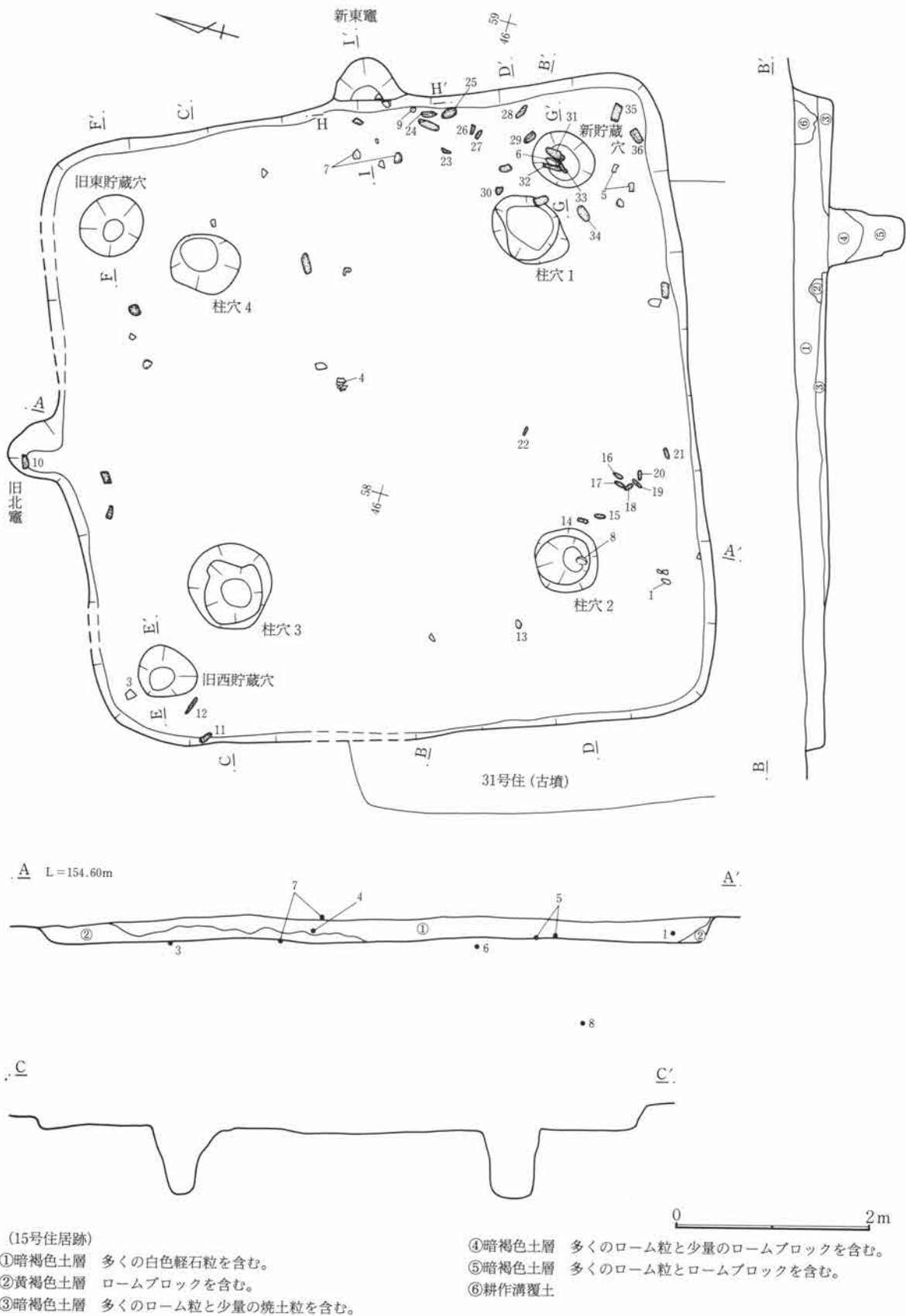
位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、46・47-58・59グリッドに位置する。

概要 14号住居同様に表土の流失が多く、確認面から床面までが浅い。覆土の多くを耕作溝により掘り込まれていた。古墳時代の住居5軒と平安時代の2軒の計7軒が重複しており、本住居は古墳時代の31号住居と重複している。本住居は31号住居の北側大部分の床面を掘り込んで造られていた。また31号住居は南側で重複する古墳時代の17号住居にも床面を掘り込まれていた。17号住居は東側で平安時代の16号住居により床下部分まで掘り込まれていた。新旧関係は31→15→17→16号住居である。竈は北と東の壁面に造られており、いずれも残りが悪く床面上に袖部はほとんど残っていなかった。東壁面の竈は床面上の燃焼部の位置から多くの焼土粒が、また竈周辺から多くの土器が出土している。北壁面の竈には床面上に焼土粒はなく、周辺から土器の出土も認められなかった。これらの特徴から北壁面の竈が壊され、新たに東壁面に造り直されたものと思われ、新東竈・旧北竈と呼称した。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、良好な床面は残っていなかった。柱穴が4本掘られており、新旧の竈に伴い2個の貯蔵穴が掘られていた。

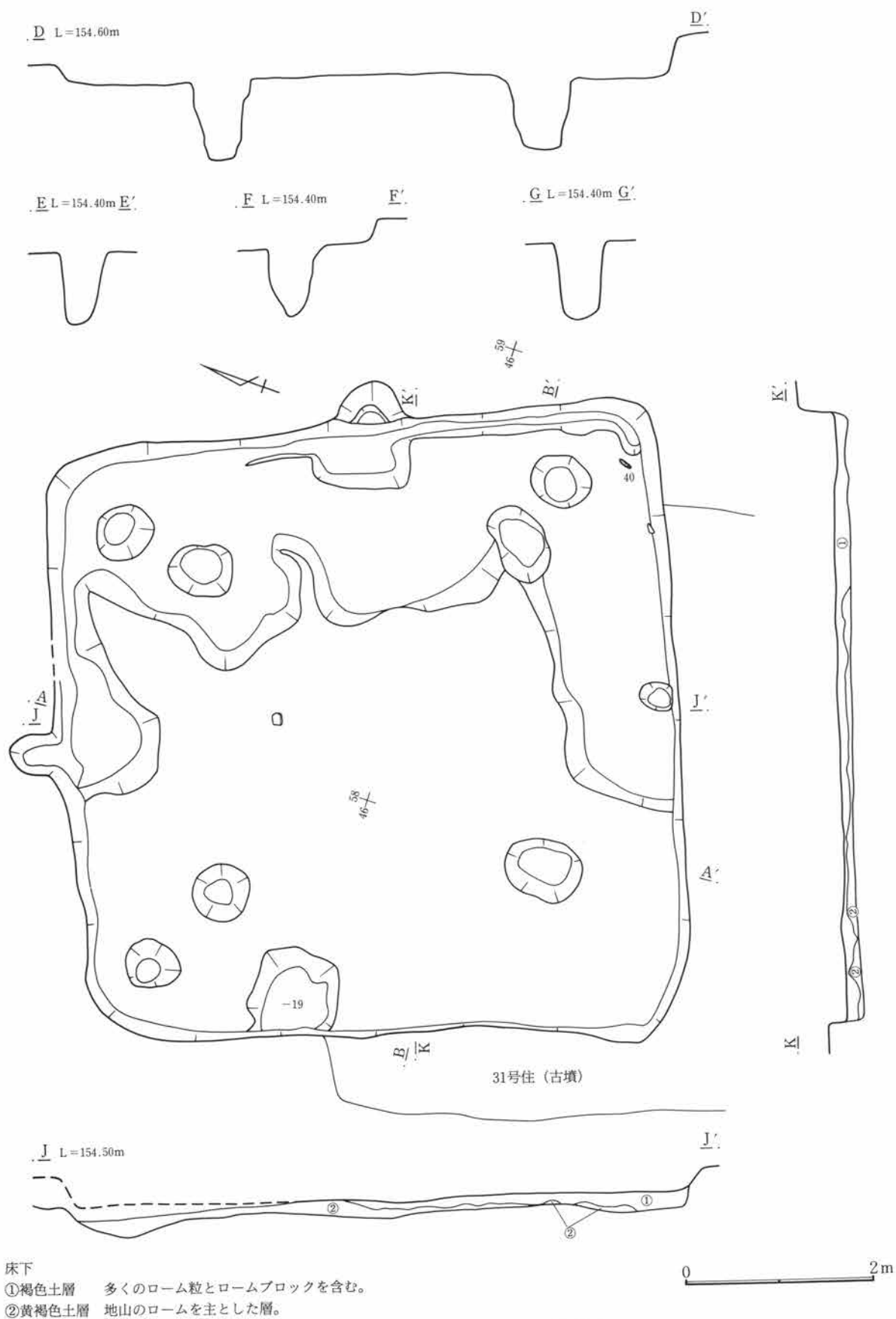
規模 東西6.45m、南北6.40mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。柱穴1は径71cm深さ75cm、柱穴2は径64cm深さ79cm、柱穴3は径86cm深さ70cm、柱穴4は径73cm深さ68cmである。新貯蔵穴は径61cm深さ76cm、旧貯蔵穴は径67cm深さ73cmである。

遺物 竈右側と南壁面付近に多くのこも編み石が出土している。



第8図 15号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



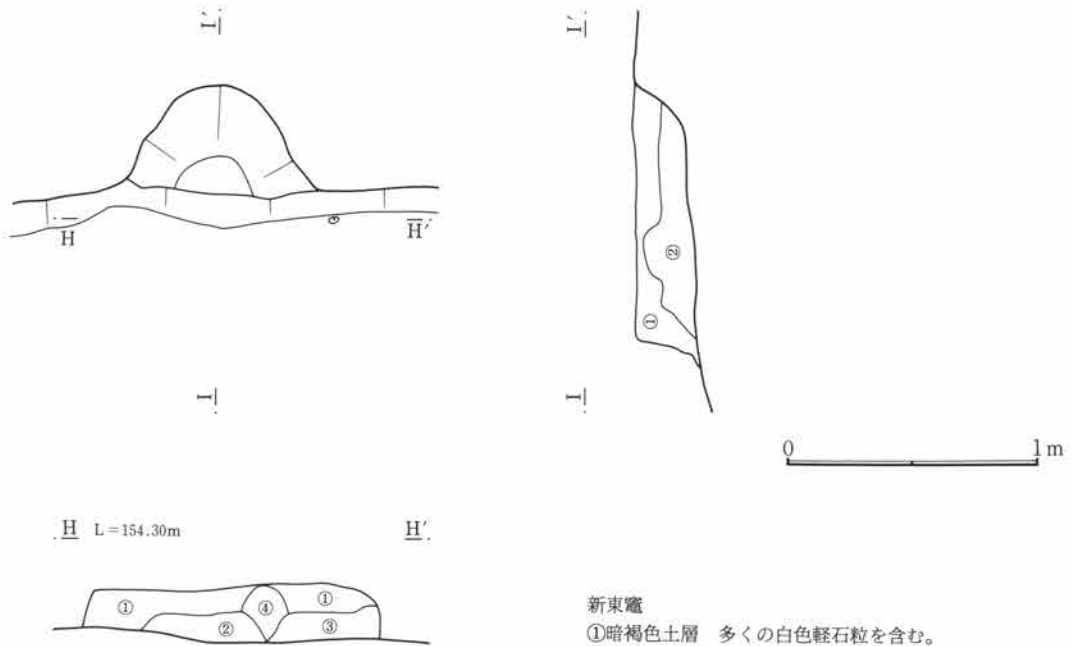
第9図 15号住居跡(2)・床下実測図

(新東竈)

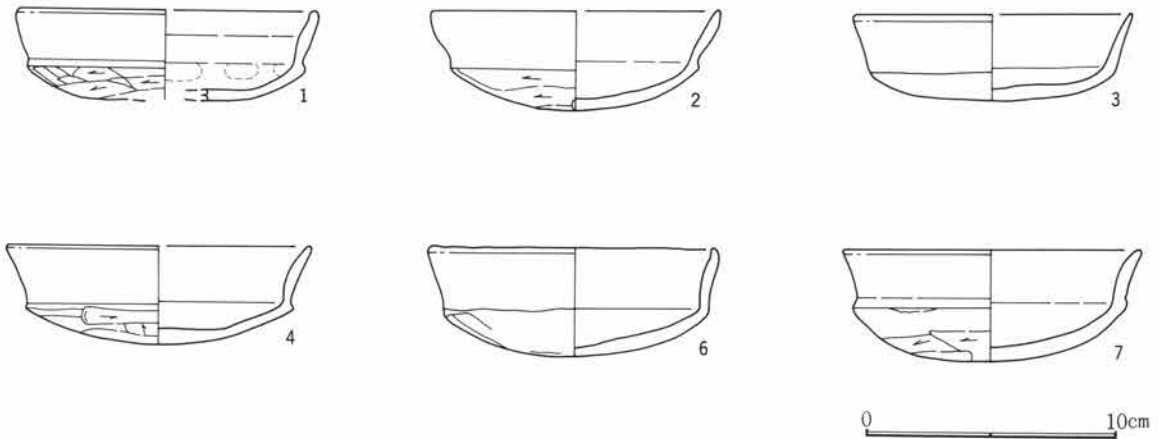
位置 住居東壁に造られている。残りは悪いが、袖と燃焼部の多くは床面上に位置するものと思われる。
 構造 床面上に位置する袖や燃焼部の多くは壊されて残っていなかった。燃焼部に多くの焼土粒が出土した。
 袖石や支脚石等は出土しなかった。
 規模 残りが悪く、煙道方向・両袖方向とも不明である。

(旧北竈)

概要 住居北壁に造られている。壁面を掘り込んで煙道部が造られていたが、床面上に位置する袖部や燃焼部は残っていなかった。焼土粒の出土もほとんど認められなかった。

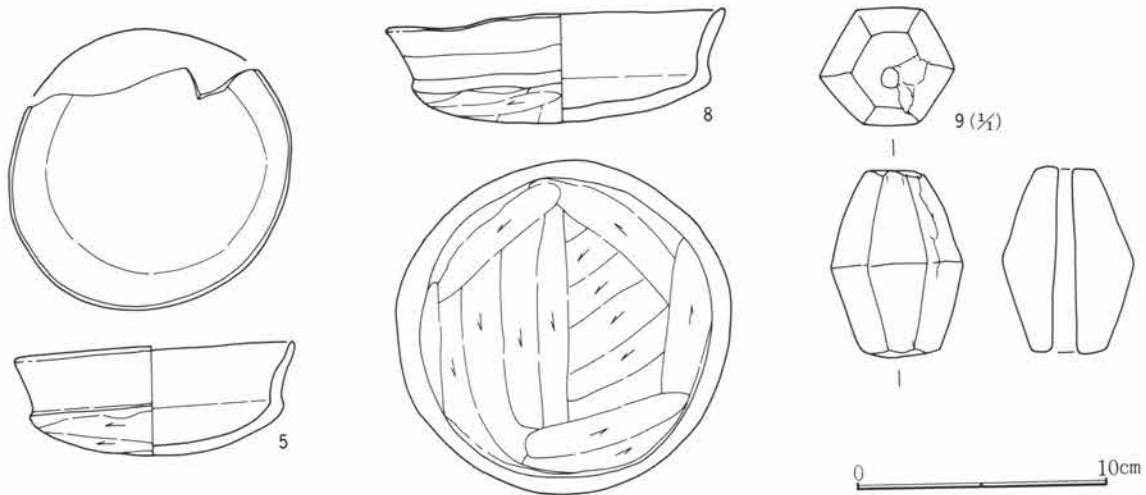


第10図 15号住居跡新東竈実測図



第11図 15号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第12図 15号住居跡出土遺物実測図(2)

15号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
11-1	土 師 器 坏	床面直上 口縁~体部 1/2残存	口(12.0) 高(3.7) 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面横ナデ。 内側底面に指頭圧痕あり。
11-2 67	土 師 器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2残存	口(11.5) 高 3.9 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が粉状でへらの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土が粉状を呈する。黒斑は全く認められない。
11-3 67	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.0 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を大量 に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が粉状を呈しへら単位不明。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土がやや粉状を呈する。
11-4	土 師 器 坏	床面直上 破片	口(12.0) 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の広いへら削り。器表面は密のためへらの単位不明瞭 な部分も多い。 口縁部横ナデ。黒斑は全く認められず胎土が粉状を呈する。
12-5 67	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.1 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が粉状を呈しへらの単位不明瞭。 外傾する口縁部が上端でやや立ち上がる。 黒斑認められず胎土が粉状を呈する。
11-6 67	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 11.6 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであると思われるが、胎土が粉状を呈しへらの 痕跡不明瞭。 黒斑認められず胎土が粉状を呈する。
11-7 67	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.9 高 4.4 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が密で粉状を呈するためへらの単位不明 瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められず胎土が粉状を呈する。
12-8 67	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.4 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土がやや粉状を呈しへらの単位は明瞭でな い。口縁部中段に1条の沈線あり。 胎土がわずかに粉状を呈する。
12-9 108	石 製 品 切 子 玉	東竈内 ほぼ完形	長 2.4 孔径 広0.3 狭0.12 厚 1.5 重 8.0 ③透明		水晶(石英)六角錐形。中央の軸穴は片側より穿孔されている。 表面はていねいに磨かれて光沢を持つ。
10 110	こも編み石	床面直上	長 13.8 幅 7.4 厚 2.8 重 350		安山岩。下側ほぼ全面欠損。側面の凹凸部不明瞭。石器の剝 離か。
11 110	こも編み石	床面-3	長 13.4 幅 7.6 厚 3.2 重 490		絹雲母石墨片岩。片側の側面はわずかに打ち欠かれて凹状を 呈し、他の側面にわずかに小さな凹凸部を持つ。
12 110	こも編み石	床面直上	長 13.2 幅 3.5 厚 3.1 重 198		石墨片岩。断面が三角形を呈する石である。両側面の凹凸部 は認められない。
13 110	こも編み石	床面-6	長 15.4 幅 6.3 厚 2.5 重 430		絹雲母石墨片岩。やや偏平な石である。両側面中央部がわず かに凹状を呈する。
14 110	こも編み石	床面直上	長 9.0 幅 5.0 厚 2.8 重 198		絹雲母石墨片岩。側面に小さな凹凸部が認められる。
15 110	こも編み石	床面直上	長 10.3 幅 4.4 厚 1.7 重 140		緑簾緑泥片岩。小さく偏平な石である。片側の側面に細かい 凹凸部が認められる。
16 110	こも編み石	床面直上	長 9.4 幅 4.3 厚 2.3 重 135		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に凹状を呈する。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴・備考
17 110	こも編み石	床面直上	長 9.1 幅 4.6 厚 2.3 重 180				緑簾緑泥片岩。小さな石である。両側面中央部が大きく凹状を呈する。
18 110	こも編み石	床面+2	長 9.7 幅 4.2 厚 1.9 重 145				緑泥片岩。両側面中央にゆるやかな凹状を呈する。
19 110	こも編み石	床面+2	長 10.8 幅 5.0 厚 2.7 重 223				点紋緑泥片岩。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
20 110	こも編み石	床面直上	長 9.7 幅 3.9 厚 2.3 重 150				緑簾緑泥片岩。小さな石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
21 110	こも編み石	床面直上	長 11.4 幅 4.1 厚 1.2 重 98				緑簾緑泥片岩。片側の側面は打ち欠かれ、他の側面に大きな凹状部を持つ。
22 110	こも編み石	床面直上	長 9.2 幅 3.6 厚 2.5 重 120				点紋絹雲母石墨片岩。断面が三角形を呈する小さな石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
23 110	こも編み石	床面直上	長 10.2 幅 4.5 厚 2.0 重 135				絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない小さな石である。片側の側面中央部にわずかな凹状を呈する。
24 110	こも編み石	床面+23	長 16.6 幅 5.7 厚 3.2 重 545				絹雲母石墨片岩。断面がやや三角形を呈する石である。両側面中央部にゆるやかな凹状部が認められる。
25 110	こも編み石	床面+30	長 16.5 幅 7.8 厚 3.8 重 790				石墨緑泥片岩。幅の広い肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
26 110	こも編み石	床面直上	長 11.6 幅 3.8 厚 2.6 重 192				絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
27 110	こも編み石	床面直上	長 10.3 幅 4.6 厚 2.2 重 175				緑簾緑泥片岩。片側の側面にわずかな凹状を呈する。
28 110	こも編み石	床面+8	長 15.6 幅 5.7 厚 3.7 重 530				点紋絹雲母石墨片岩。断面がやや菱形を呈し、片側の側面がわずかに凹状を呈する。
29 110	こも編み石	床面-4	長 13.7 幅 6.0 厚 4.0 重 605				緑簾緑泥片岩。肉厚な石である。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈する。
30 110	こも編み石	床面直上	長 18.7 幅 6.0 厚 4.2 重 700				緑簾緑泥片岩。両側面中央部にゆるやかな凹状部が認められる。
31 110	こも編み石	床面-2	長 18.6 幅 7.5 厚 2.5 重 635				緑簾緑泥片岩。やや偏平な石である。片側の側面が打ち欠かれて凹状を呈し、他の側面は小さな凹凸部がある。
32 110	こも編み石	床面-2	長 18.5 幅 5.8 厚 3.1 重 535				絹雲母石墨片岩。細長い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
33 110	こも編み石	床面-2	長 15.9 幅 5.5 厚 3.0 重 415				絹雲母石墨片岩。細長い石である。片側の側面中央部に小さな凹凸部が認められる。
34 110	こも編み石	床面+2	長 15.2 幅 6.9 厚 3.0 重 590				点紋緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈し、他の側面中央部が小さく打ち欠かれている。
35 110	こも編み石	床面+3	長 17.5 幅 6.9 厚 3.1 重 558				絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
36 110	こも編み石	床面+3	長 15.3 幅 6.5 厚 4.2 重 760				緑簾緑泥片岩。断面がやや菱形を呈する石である。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
37 110	こも編み石	覆土	長 12.8 幅 8.2 厚 3.1 重 495				絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
38 110	こも編み石	覆土	長 10.2 幅 4.1 厚 2.5 重 150				絹雲母石墨片岩。小さな石である。両側面にわずかに凹凸部が認められる。
39 110	こも編み石	覆土	長 11.8 幅 3.2 厚 2.6 重 135				点紋石墨緑泥片岩。小さな石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
40 110	こも編み石	床面直上	長 16.2 幅 5.7 厚 3.2 重 420				絹雲母石墨片岩。片側の側面が大きく欠損している。

17号住居跡 (第13~15図、図版4・67)

位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、45-59・60グリッドに位置する。

概要 古墳時代の住居5軒と平安時代の2軒の計7軒が重複している住居群の中の1軒である。本住居は北側の古墳時代の31号住居の南東部分を床下部分まで掘り込み、東壁中央部付近を平安時代の16号住居により床下部分まで掘り込まれていた。3軒の新旧関係は31→17→16号住居である。本住居の残りは悪く、床面上の覆土の多くは残っていなかった。さらに3本の耕作溝により床面部分まで掘り込まれていた。そのため31号住居と新旧関係を一時逆に考え発掘を進め、新旧の確認ができた段階で本住居

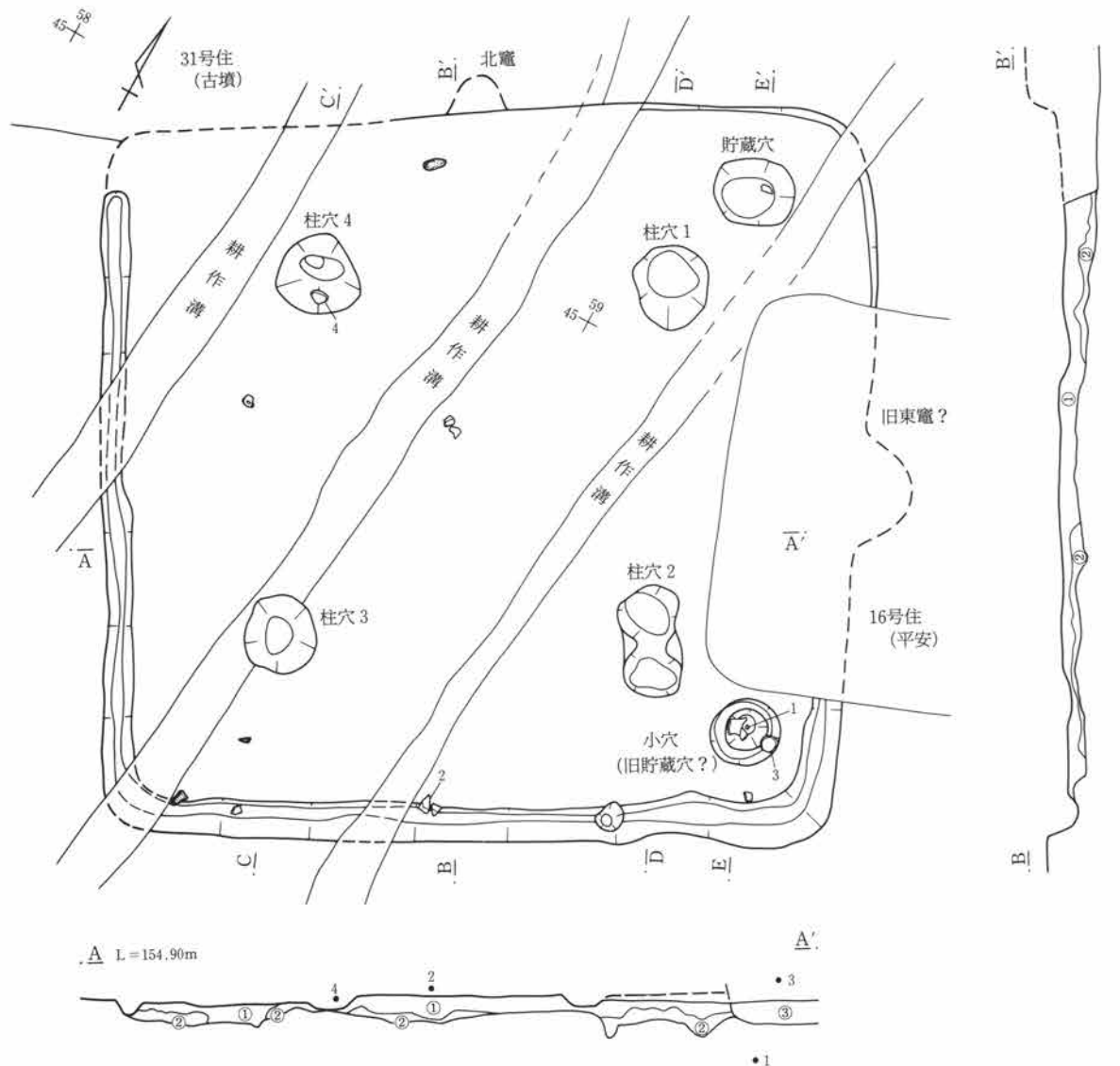
第3章 古墳時代の遺構と遺物

から先に調査を進めた。31号住居と重複している北壁中央部に造られていた竈の確認も遅れたが、この部分に築かれていたことは確認できた。また南東コーナー部分に旧貯蔵穴と思われる小穴が確認されていることにより、旧竈が東壁面にも造られていた可能性がある。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、良好な床面は残っていなかった。柱穴が4本と貯蔵穴が掘られていた。南東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴も確認された。また壁溝が南及び西壁面下に掘られていた。

規模 東西6.54m、南北6.18mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で10cmである。柱穴1は径64cm深さ61cm、柱穴2は径51cm深さ68cm、柱穴3は径62cm深さ72cm、柱穴4は径68cm深さ88cmである。貯蔵穴は径69cm深さ67cm、小穴(旧貯蔵穴)は径54cm深さ64cm、周溝は幅25cm深さ13cmである。

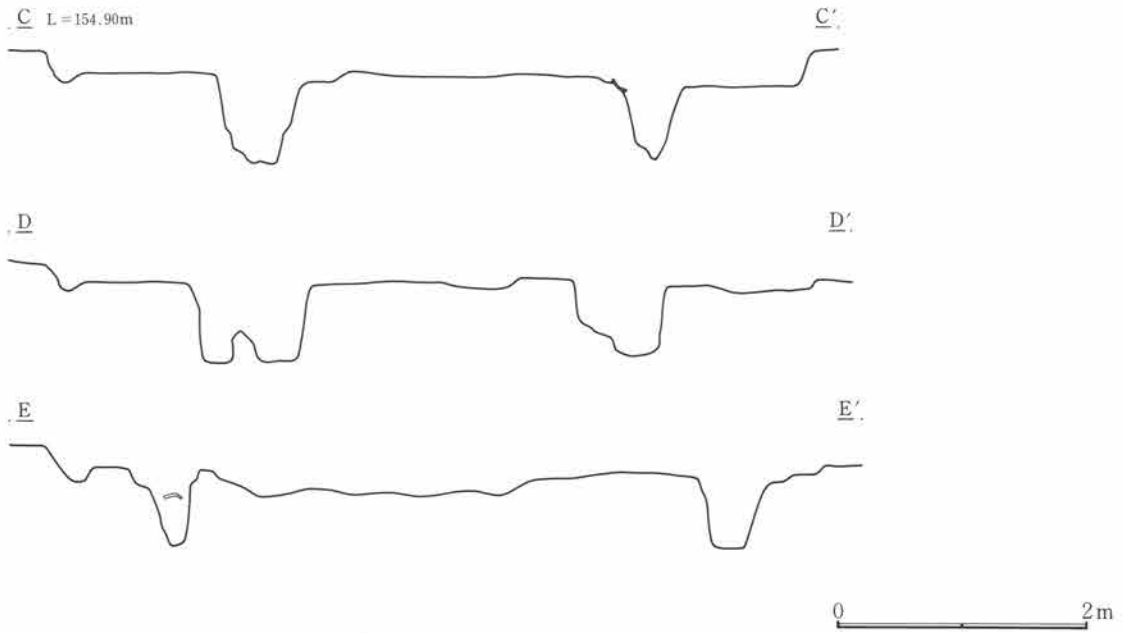
遺物 土師器の甕や坏のほかには鉢の小さな破片が出土している。



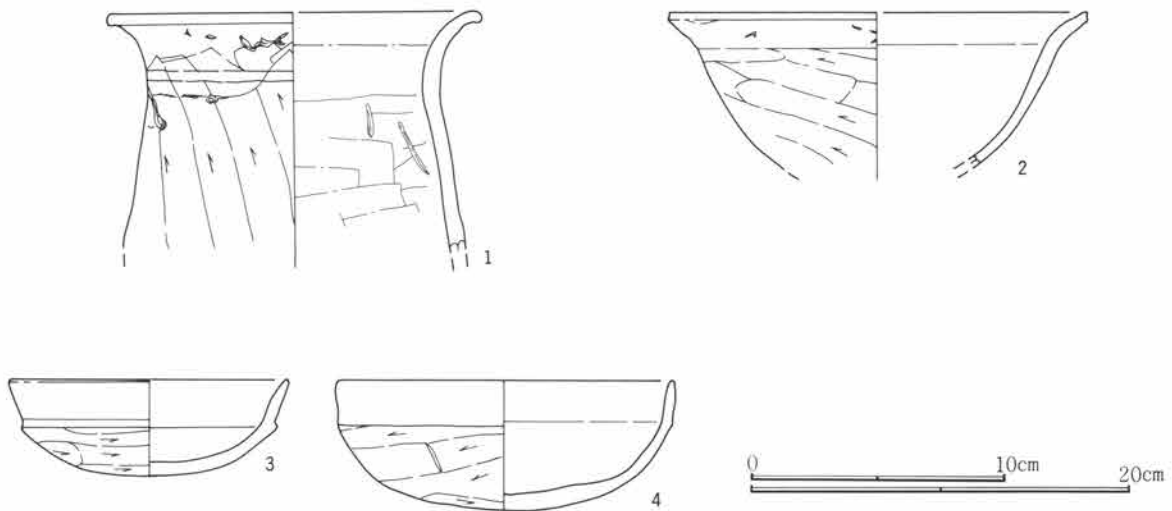
(17号住居跡)

- ①褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ②黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ③16号住居覆土

第13図 17号住居跡実測図(1)



第14図 17号住居跡実測図(2)



第15図 17号住居跡出土遺物実測図

17号住居跡出土遺物観察表

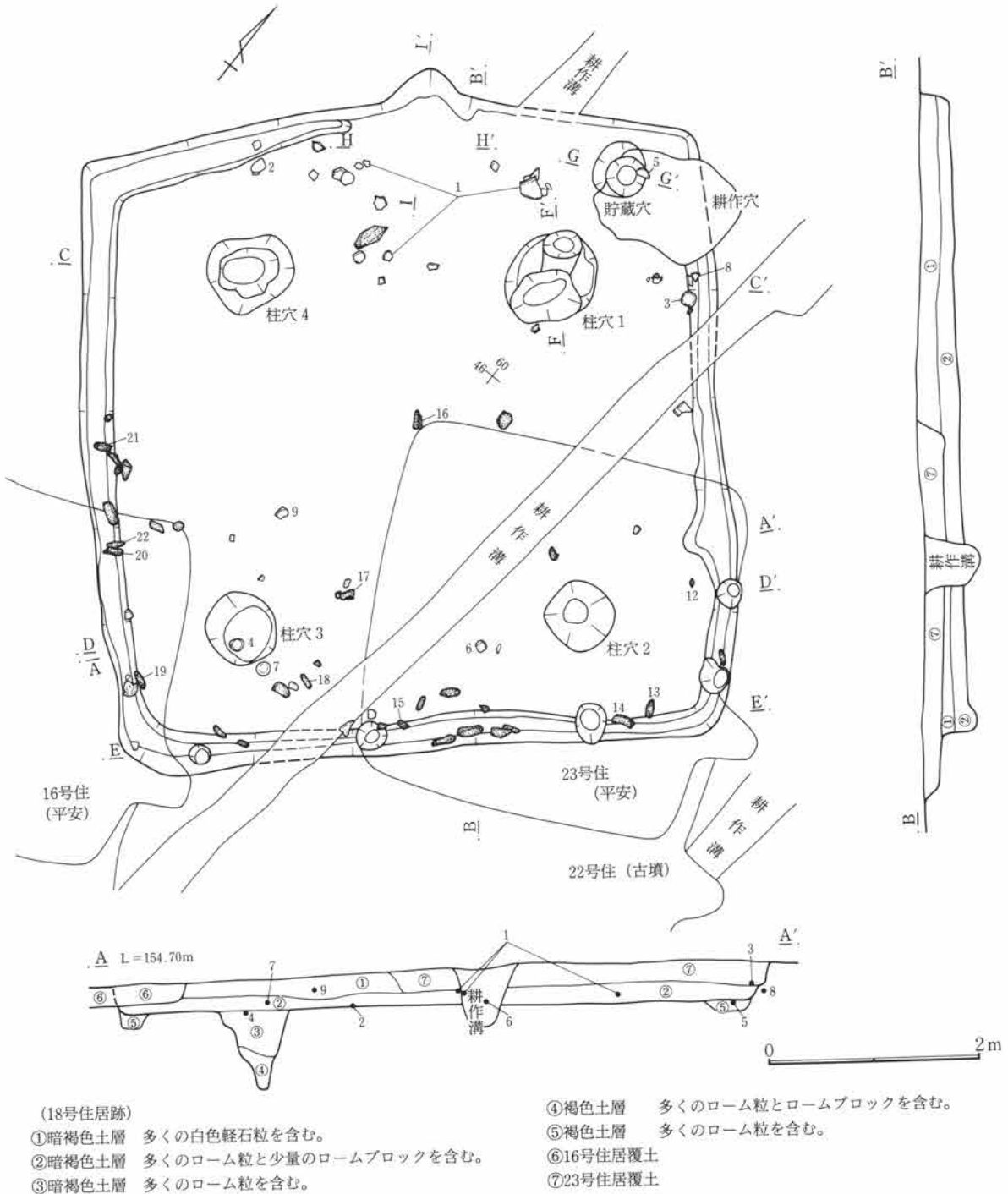
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
15-1	土 師 器 甕	床面直上 口縁～胴上 部1/2残存	口(19.6) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③褐色	胴外面深いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
15-2	土 師 器 鉢	床面+10 1/2残存	口(22.2) 高 — 底 —	①密、多くの赤色粒と少量の片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。一部に吸炭による黒斑あり。
15-3 67	土 師 器 坏	床面+16 1/2残存	口 11.2 高 3.8 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の動きなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。黒斑全く認められず、胎土がやや粉状を呈する。
15-4 67	土 師 器 坏	柱穴内-10 1/2残存	口 13.4 高 5.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。胎土が密で砂粒の移動が少ない。ヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

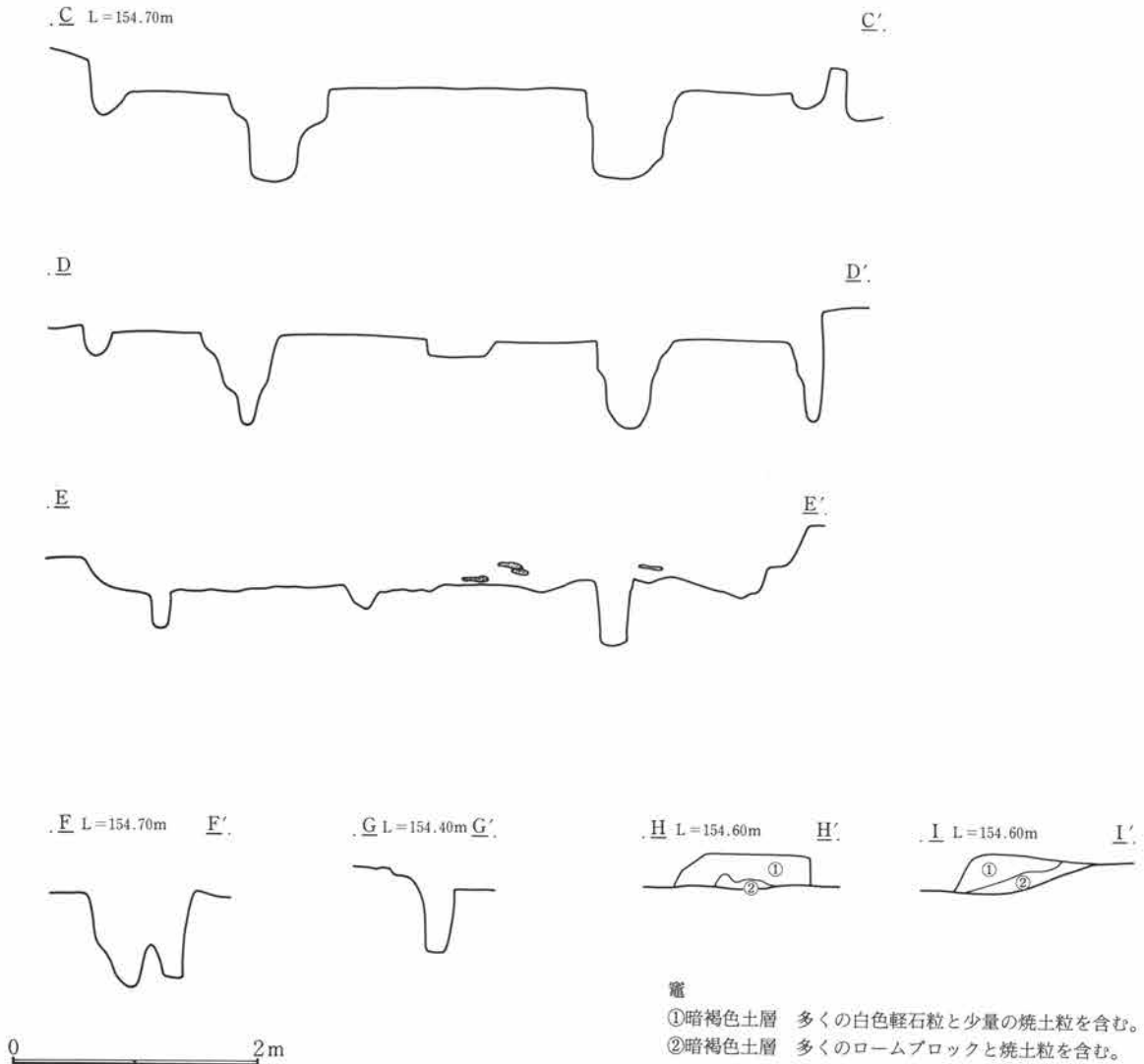
18号住居跡 (第16~19図、図版4・67・108・109・111)

位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、46・47-60・61グリッドに位置する。

概要 古墳時代と平安時代の住居4軒の重複している住居群の中の1軒である。本住居は古墳時代の22号住居の北側を床下まで掘り込み、本住居の南東部分を平安時代の23号住居、南西部分を平安時代の16号住居により、床面に近い覆土を削り取られていた。4軒の新旧関係は22→18→23→16号住居である。ほかの住居同様に多くの耕作溝により、覆土や床面部分まで掘り込まれていた。また貯蔵穴部分に攪乱による土坑が掘られていた。



第16図 18号住居跡実測図(1)



第17図 18号住居跡実測図(2)

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本と貯蔵穴が掘られていた。また多くの周溝が壁面下に掘られていた。

規模 東西6.03m、南北6.01mである。壁高は残りの良い西壁部分31cmである。柱穴1は径85cm深さ76cm、柱穴2は径66cm深さ72cm、柱穴3は径68cm深さ72cm、柱穴4は径82cm深さ76cmである。貯蔵穴は径51cm深さ74cm、周溝は幅18cm深さ16cmである。

床下 床下調査により4本の柱穴の内側が高く、柱穴部分の床下が深く掘られていることが明らかになった。

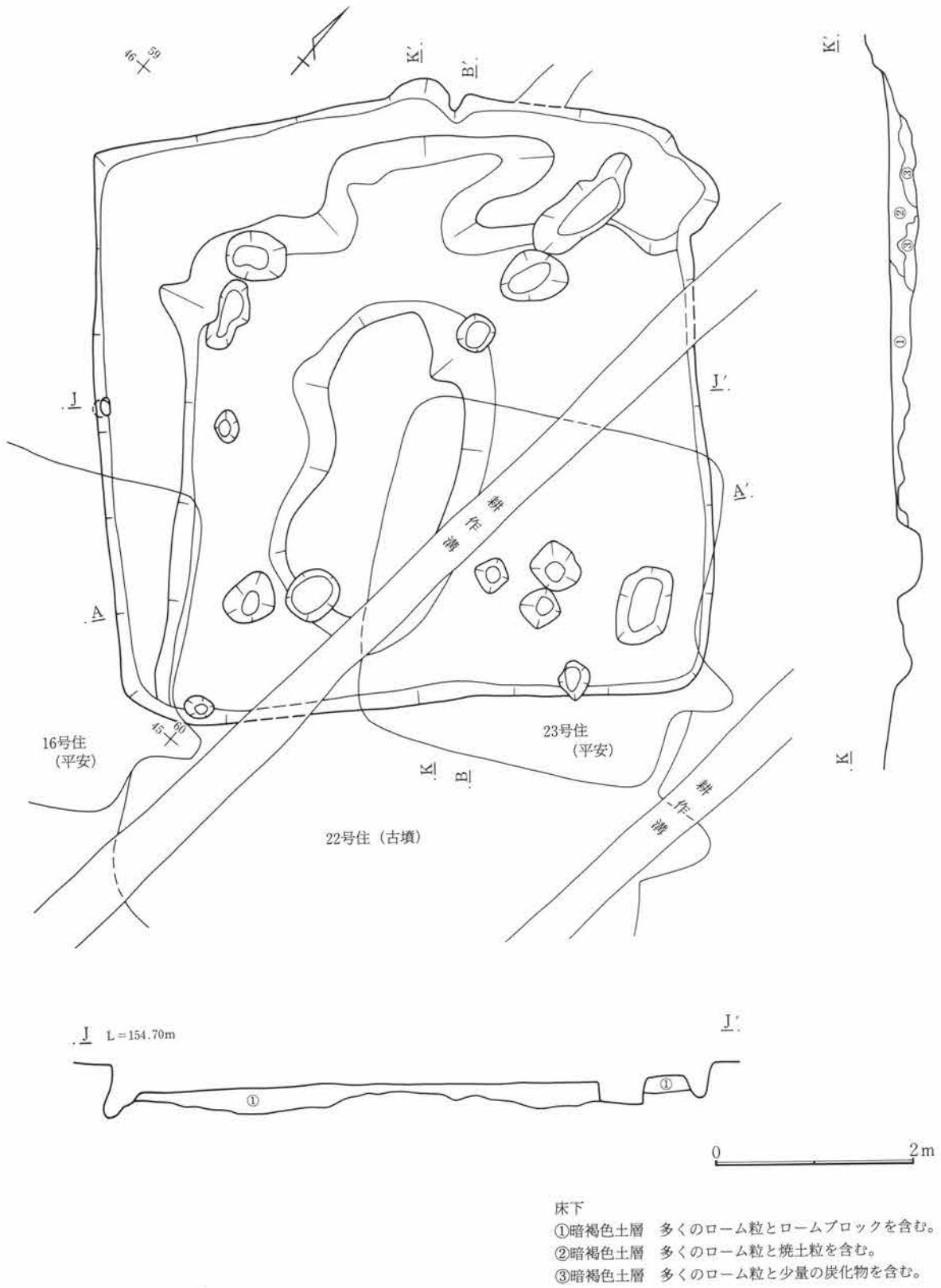
遺物 新旧の混在が認められる。3～6の坏をもってこの住居の時期を想定した。

(竈)

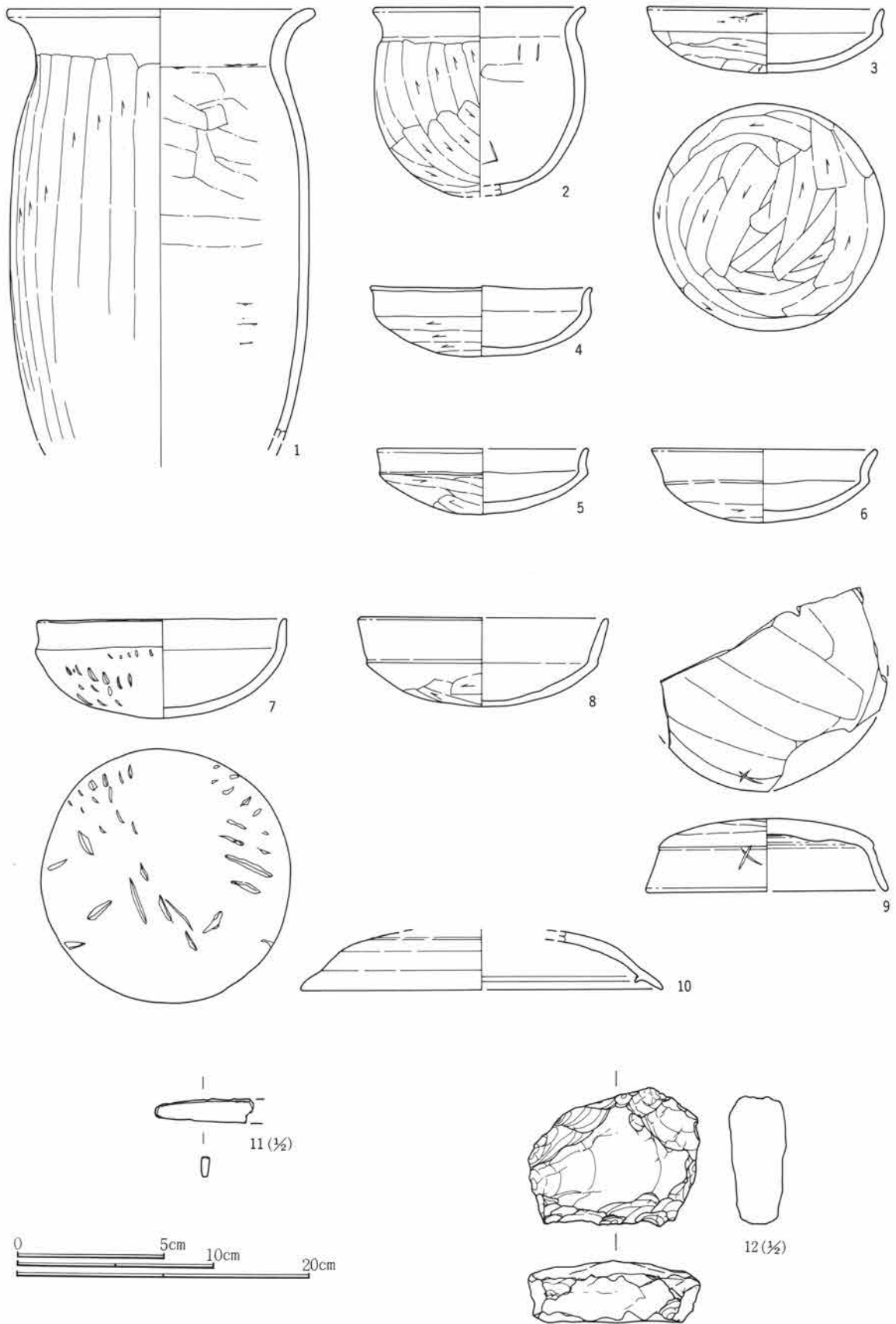
位置 住居北壁に造られている。残りが悪いが袖と燃焼部の多くは床面上に位置するものと思われる。

構造 床面上に位置する袖や燃焼部の多くは壊されて残っていなかった。燃焼部に多くの焼土粒が出土した。袖石や支脚石等は出土しなかった。

規模 残りが悪く、煙道方向・両袖方向とも不明である。



第18図 18号住居跡床下実測図



第19図 18号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

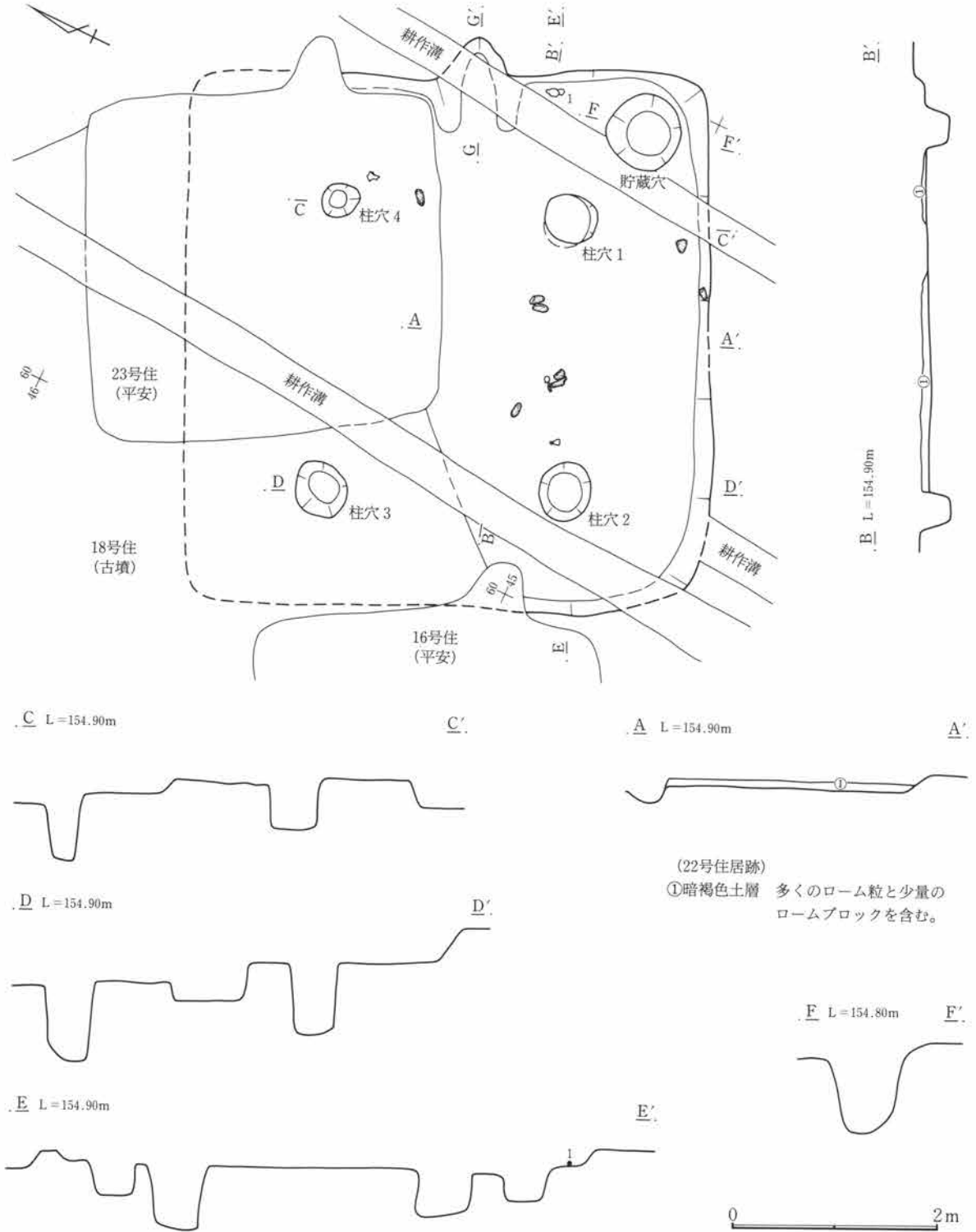
18号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
19-1 67	土 師 器 甕	床面+11 口縁へ胴部 1/2残存	口 21.2 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
19-2 67	土 師 器 小型甕	床面+7 口縁部1/2 胴部1/2残存	口(14.6) 高 12.9 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り。砂粒の移動は少ないが器表面に多く目立つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
19-3 67	土 師 器 坏	床面+5 完形	口 12.0 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面黒色	底部外面へら削り。へらの単位明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は明瞭。 全体に少し歪んでいる。
19-4 67	土 師 器 坏	床面+2 完形	口 11.4 高 3.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められず。胎土がわずかに粉状を呈する。
19-5 67	土 師 器 坏	貯穴内 1/2残存	口(10.8) 高 3.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部が短く少し歪んでいる。
19-6 67	土 師 器 坏	床面+10 1/2残存	口 11.5 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が密で粉状を呈するため、へらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。少し歪んでいる。 黒斑全く認められず胎土が粉状を呈する。
19-7 67	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 12.7 高 5.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削りと思われるがへらの単位不明瞭。へらの圧痕が多く認められる。口縁部ナデ。内面ナデ。
19-8	土 師 器 坏	床面+23 1/2残存	口(12.8) 高 — 底 —	①密、雲母粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。 口縁部横ナデにより器表面密。
19-9 67	須 恵 器 蓋	床面+21 1/2残存	口(12.4) 高 3.6 口(12.4)	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部と口縁部とを分ける突出部の稜はほとんどなく、凹線がめぐらされている。口縁部は丸い。天井部はナデ。 内側天井部に多くのロクロ目。
19-10	須 恵 器 蓋	覆土 破片	口(18.6) 高 — 口(18.6)	①密、1mm以下の多くの白色粒を含む。②還元焰、硬質 ③上面降灰による灰黄褐色・下面灰色	天井部全面降灰により自然釉が付着。へら削りの状況不明。 カエリは小さくていねいに作られている。
19-11 108	鉄 製 品 刀子	覆土	長 3.4 幅 0.8 厚 0.25 重 1.44		刀子の基部と思われる。 残りは比較的良好である。
19-12 109	石 器 未製品	床面+11	長 4.7 幅 5.9 厚 1.9 重 90		滑石片岩。加工痕は認められない。紡錘車等を作るために集落内に持ち込まれたものと思われる。
13 111	こも編み石	床面直上	長 15.2 幅 5.3 厚 2.9 重 395		点紋緑泥片岩。両側面が深く打ち欠かれ凹状を呈している。
14 111	こも編み石	床面直上	長 17.6 幅 7.2 厚 2.3 重 480		点紋緑泥片岩。偏平な石である。片側の側面中央部に大きくゆるやかな凹状部が認められる。
15 111	こも編み石	床面直上	長 15.3 幅 5.6 厚 2.6 重 320		絹雲母石墨片岩。片側の側面にゆるやかな凹状部を持つ。
16 111	こも編み石	床面+17	長 15.4 幅 4.5 厚 2.9 重 320		絹雲母石墨片岩。細長い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
17 111	こも編み石	床面+11	長 13.9 幅 5.9 厚 2.7 重 415		安山岩。断面が長方形を呈する石である。側面中央部がわずかに凹凸部を呈する。
18 111	こも編み石	床面+24	長 15.0 幅 5.2 厚 5.9 重 360		緑簾緑泥片岩。片側の側面が大きくゆるやかに凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部を持つ。
19 111	こも編み石	床面+4	長 18.6 幅 6.6 厚 3.1 重 545		絹雲母石墨片岩。両側面に打ち欠かれた凹凸部を持つ。
20 111	こも編み石	床面+5	長 15.7 幅 6.5 厚 2.1 重 440		点紋緑簾緑泥片岩。両側面に小さな凹凸部が認められる。
21 111	こも編み石	床面+4	長 16.9 幅 6.2 厚 3.6 重 600		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部にわずかな凹凸部が認められる。
22 111	こも編み石	床面+4	長 15.4 幅 5.3 厚 3.8 重 440		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈している。

22号住居跡 (第20・21図、図版4・5)

位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、46-61グリッドに位置する。

概要 古墳時代と平安時代の住居4軒の重複している住居群の中の1軒である。本住居は古墳時代の18号住居により北側を床下まで掘り込まれ、北東部分を平安時代の23号住居、西側部分を平安時代の16号住居により床面に近い覆土を削り取られていた。4軒の新旧関係は22→18→23→16号住居である。ほか



第20図 22号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

の住居同様に多くの耕作溝により、覆土や床面部分まで掘り込まれていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、柱穴3と柱穴4は18号住居の床下調査により確認された。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。南壁面下に周溝が掘られていたが、明瞭ではなかった。

規模 東西5.18m、南北は不明である。壁高は残りの良い西壁部分34cmである。柱穴1は径54cm深さ48cm、柱穴2は径57cm深さ66cm、柱穴3は径49cm深さ79cm、柱穴4は径30cm深さ80cmである。貯蔵穴は径72cm深さ53cmである。

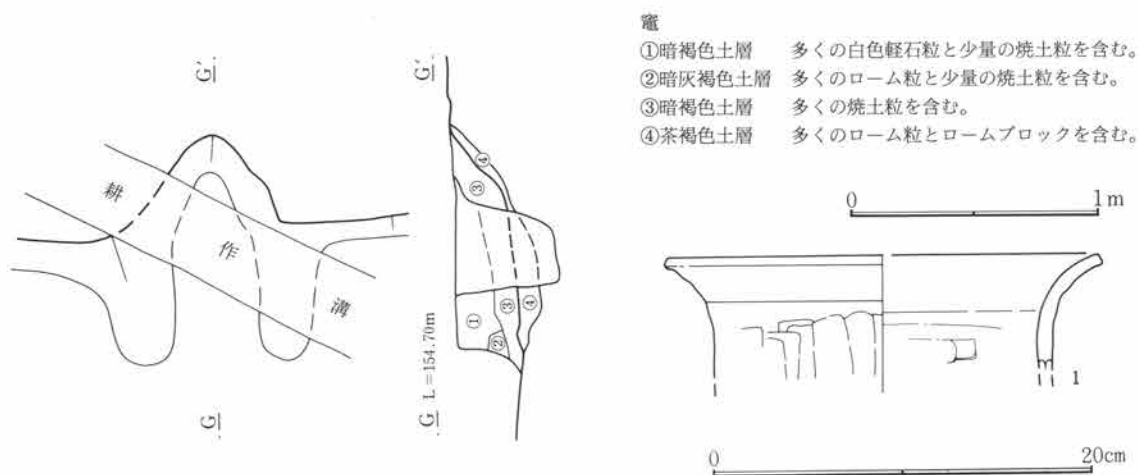
遺物 図示できたのは土師器甕の口縁部小破片である。ほかに甕胴部破片が46片出土している。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。残りは悪いが、袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 耕作溝が竈の中央部を掘り抜いている。そのため袖部と燃烧部の多くが削り取られており残りが悪かったが、床面上に位置する袖は一部残っていた。燃烧部付近からの焼土粒の出土は少なかった。

規模 煙道方向91cm、燃烧部幅35cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量の焼土粒を含む。
 - ②暗灰褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ④茶褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第21図 22号住居跡竈・出土遺物実測図

22号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
21-1	土師器 甕	床面-3 破片	口(23.4) 高 - 底 -	①粗、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい赤褐色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。口唇部が平らに削られている。

30号住居跡及び竈 (第22・23図、図版5)

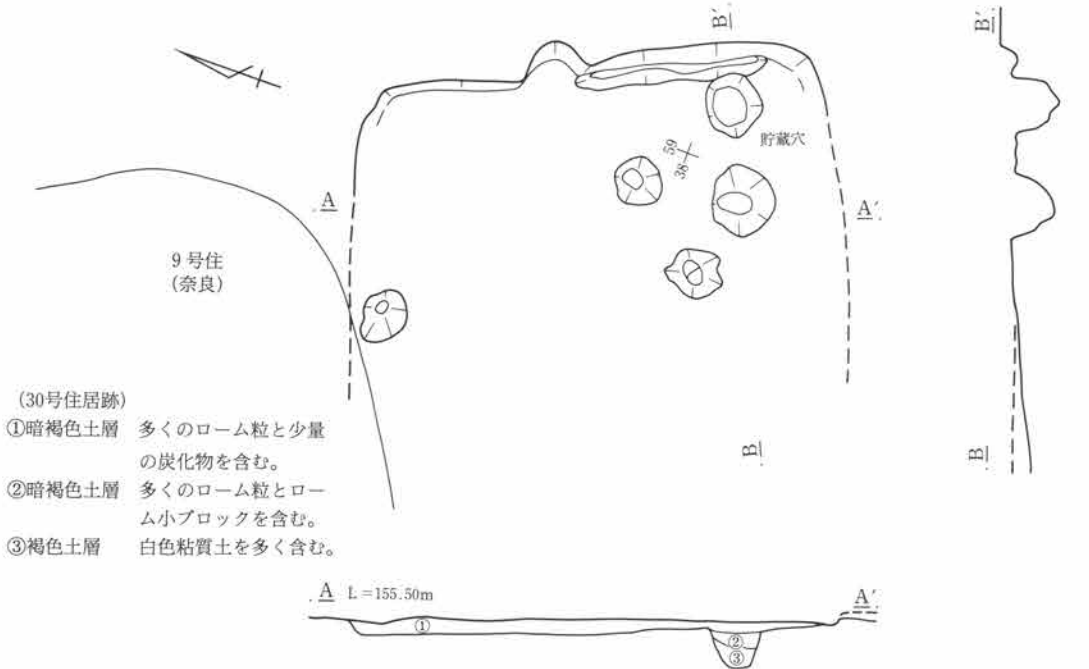
位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、39-59グリッドに位置する。

概要 本住居は西側の低地に向かって低くなるなだらかな傾斜面に位置し、表土の流失や耕作により削られ残りが悪く、床面より上の部分は残っていなかった。特に低地に面する西側の残りが悪く、床下調査によっても住居範囲は確認できなかった。奈良時代の9号住居と重複しており、北側の一部が掘り込まれていた。竈が東壁面に造られていたが、残りが悪く袖や燃烧部は不明である。また焼土粒の出土も少なかった。

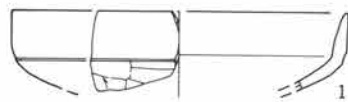
構造 床面はほとんど残っていなかった。竈右側に貯蔵穴が掘られており、ほかに小穴が4個掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北推定3.65mである。壁高は床面がほとんど残っていなかったため不明である。貯蔵穴は径46cm確認面からの深さ44cmである。

遺物 出土遺物は図示した遺物のほかは、土師器の甕胴部破片9片と須恵器の甕胴部破片4片である。



第22図 30号住居跡実測図



第23図 30号住居跡出土遺物実測図

0 10cm

30号住居跡出土遺物観察表

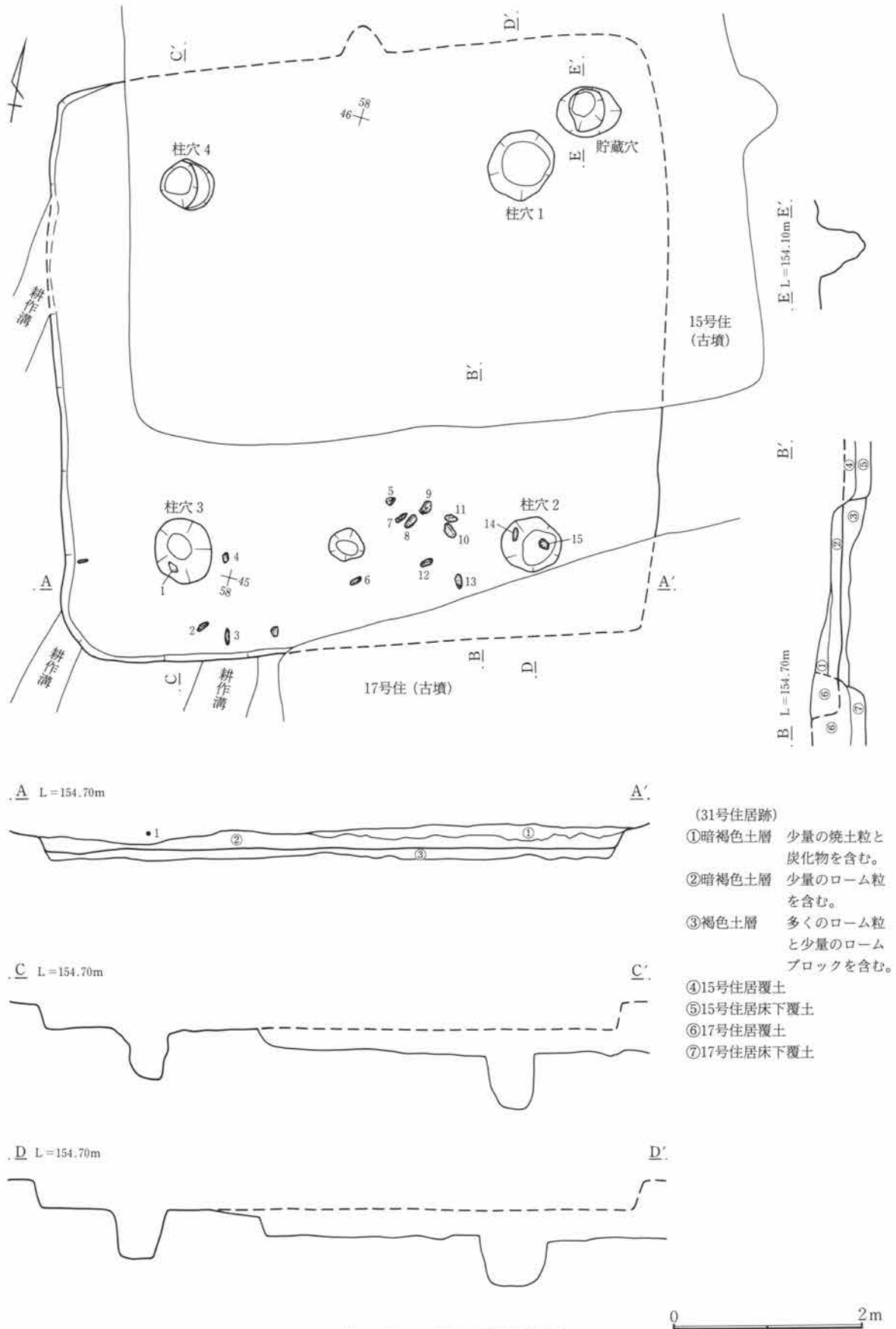
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
23-1	土師器 坏	覆土 破片	口(13.3) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。稜は低く明瞭でない。

31号住居跡 (第24・25図、図版5・67・111)

位置 本住居跡は、第2次調査区にあり、46-58・59グリッドに位置する。

概要 古墳時代の住居5軒と平安時代の2軒の計7軒が重複している住居群の中の1軒である。本住居は北側を古墳時代の15号住居に、南側を古墳時代の17号住居により床下部分まで深く削り取られており床面が確認できたのは全体の約1/3である。3軒の新旧関係は31→15→17号住居である。竈も残っていなかったが、15号住居に床面を削り取られた北東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が確認されたため北壁面に竈が造られていたものと思われる。

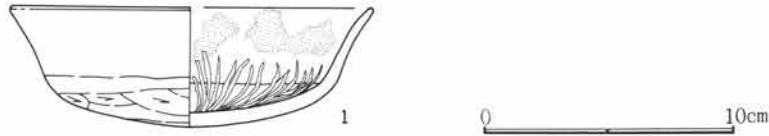
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本と北東コーナー部分から貯蔵穴が確認された。2本の柱穴と貯蔵穴は15号住居の床下部分にあたる。



第24図 31号住居跡実測図

規模 東西6.33m、南北5.99mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で26cmである。柱穴1は径70cm深さ79cm、柱穴2は径63cm深さ53cm、柱穴3は径60cm深さ57cm、柱穴4は径56cm深さ83cmである。貯蔵穴は径67cm深さ86cmである。

遺物 南壁面周辺に多くのこも編み石が出土している。土器の出土は僅か1点である。



第25図 31号住居跡出土遺物実測図

31号住居跡出土遺物観察表

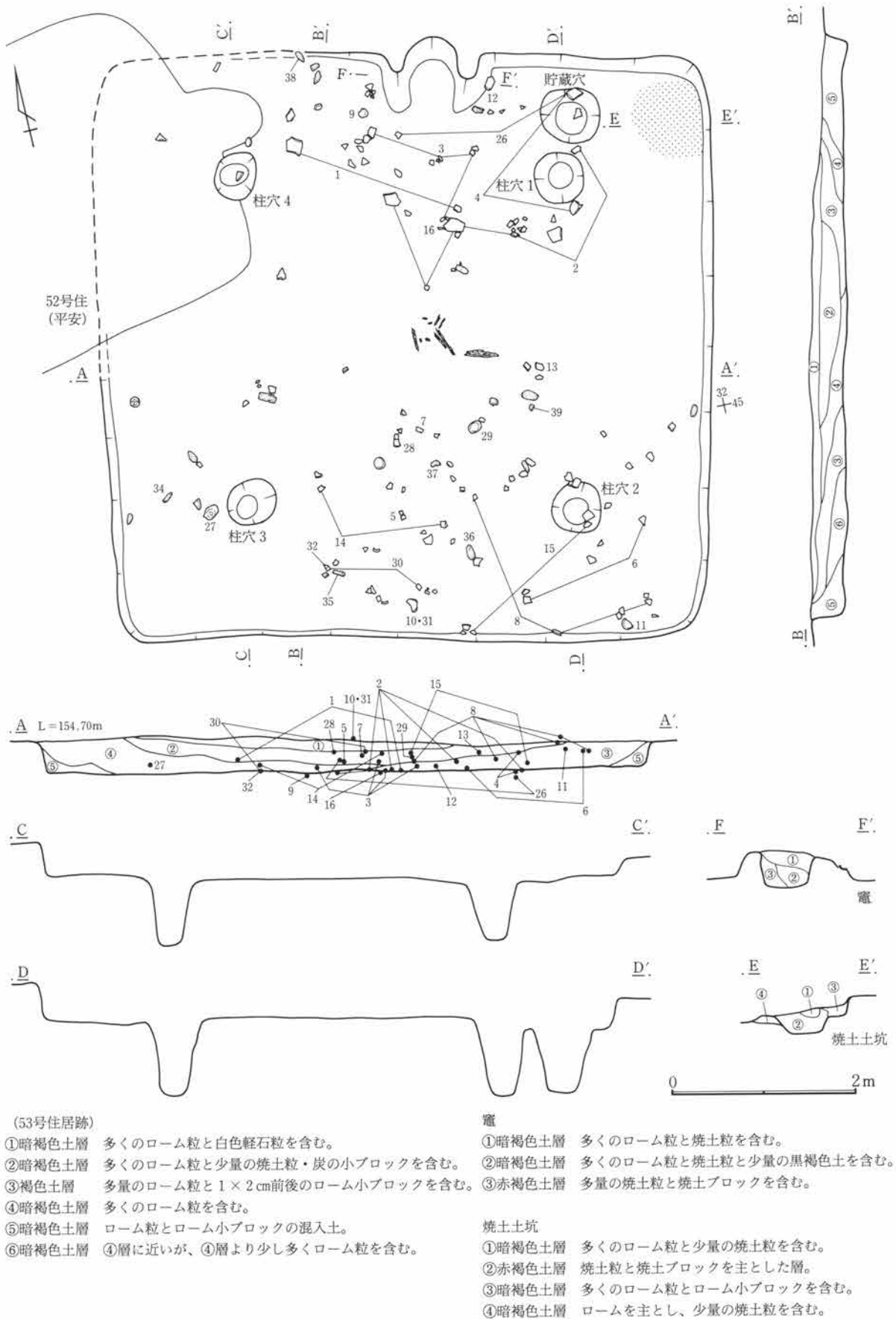
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
25-1 67	土師器 坏	床面+17 1/3残存	口(14.5) 高 4.7 底丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面へラ削り。少量の砂粒が移動し器表面やや粗い。内側全面に放射状のへら磨き。
2 111	こも編み石	床面+35	長 13.1 幅 7.2 厚 2.4 重 350		緑簾緑泥片岩。全体にまわりが打ち欠かれ、自然面は表裏2面のみである。
3 111	こも編み石	床面+41	長 14.9 幅 5.2 厚 5.1 重 585		点紋絹雲母石墨片岩。1つの面全体が剝離。側面の凹凸部は認められない。
4 111	こも編み石	床面+28	長 13.8 幅 8.3 厚 3.3 重 670		点紋緑泥片岩。幅が広く偏平な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
5 111	こも編み石	床面+30	長 7.3 幅 7.6 厚 3.7 重 320		点紋絹雲母石墨片岩。約1/3欠損。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
6 111	こも編み石	床面+26	長 12.7 幅 5.3 厚 4.2 重 480		絹雲母石墨片岩。断面がやや三角形を呈する石である。片側の側面中央部に打ち欠かれた深い凹状部が認められる。
7 111	こも編み石	床面+26	長 13.6 幅 7.1 厚 4.4 重 595		絹雲母石墨片岩。片側の側面にゆるやかな凹状を呈し、他の側面にわずかな凹凸部が認められる。
8 111	こも編み石	床面+27	長 14.5 幅 7.5 厚 2.7 重 465		絹雲母石墨片岩。やや偏平な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
9 111	こも編み石	床面+27	長 15.6 幅 8.8 厚 3.0 重 720		点紋緑泥片岩。偏平な石である。片側の側面は大きくゆるやかに凹状を呈する。
10 111	こも編み石	床面+28	長 15.3 幅 9.3 厚 3.1 重 675		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面中央部にわずかな凹凸部を呈し、他の側面は打ち欠かれている。
11 111	こも編み石	床面+27	長 13.5 幅 7.4 厚 4.4 重 605		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
12 111	こも編み石	床面+27	長 13.2 幅 7.0 厚 6.0 重 770		緑簾緑泥片岩。断面が三角形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
13 111	こも編み石	床面+35	長 11.8 幅 6.3 厚 4.1 重 550		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
14 111	こも編み石	床面+10	長 14.8 幅 7.4 厚 3.8 重 625		緑簾緑泥片岩。両側面の中央部が打ち欠かれ、凹状を呈している。
15 111	こも編み石	柱穴内-15	長 14.5 幅 8.4 厚 3.1 重 610		絹雲母石墨片岩。幅広いやや偏平な石である。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。

53号住居跡 (第26~29図、図版5・6・67・108・111)

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、46-32グリッドに位置する。

概要 北西に位置する平安時代の52号住居により、北西部分を床面近くまで掘り込まれている。52号住居の床面は本住居跡より約10cm高い位置に造られている。住居北東コーナーに大量の焼土粒の堆積した土坑が確認された。幅は90cmで中央部の最も深いところでは深さ40cmである。多くの部分は床面下に位置するため、床面を一部掘り大量に火を炊いたものと思われる。住居使用段階でこのような事が行われたら、恐らく住居は燃えてしまうため住居放棄後に行なわれたものと思われる。また床面中央部から床面より10cm前後高い位置で炭化材が多く出土している。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は3.6mの柱間でほぼ正方形に



第26図 53号住居跡実測図

配置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西6.50m、南北6.20mである。壁高は残りの良い南壁部分で41cmである。柱穴1は径52cm深さ80cm、柱穴2は径55cm深さ81cm、柱穴3は径48cm深さ72cm、柱穴4は径58cm深さ72cmである。貯蔵穴は径62cm深さ82cmでほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕や坏と10個の小さな土玉が出土している。木の葉型の坏3点が出土し注目される。

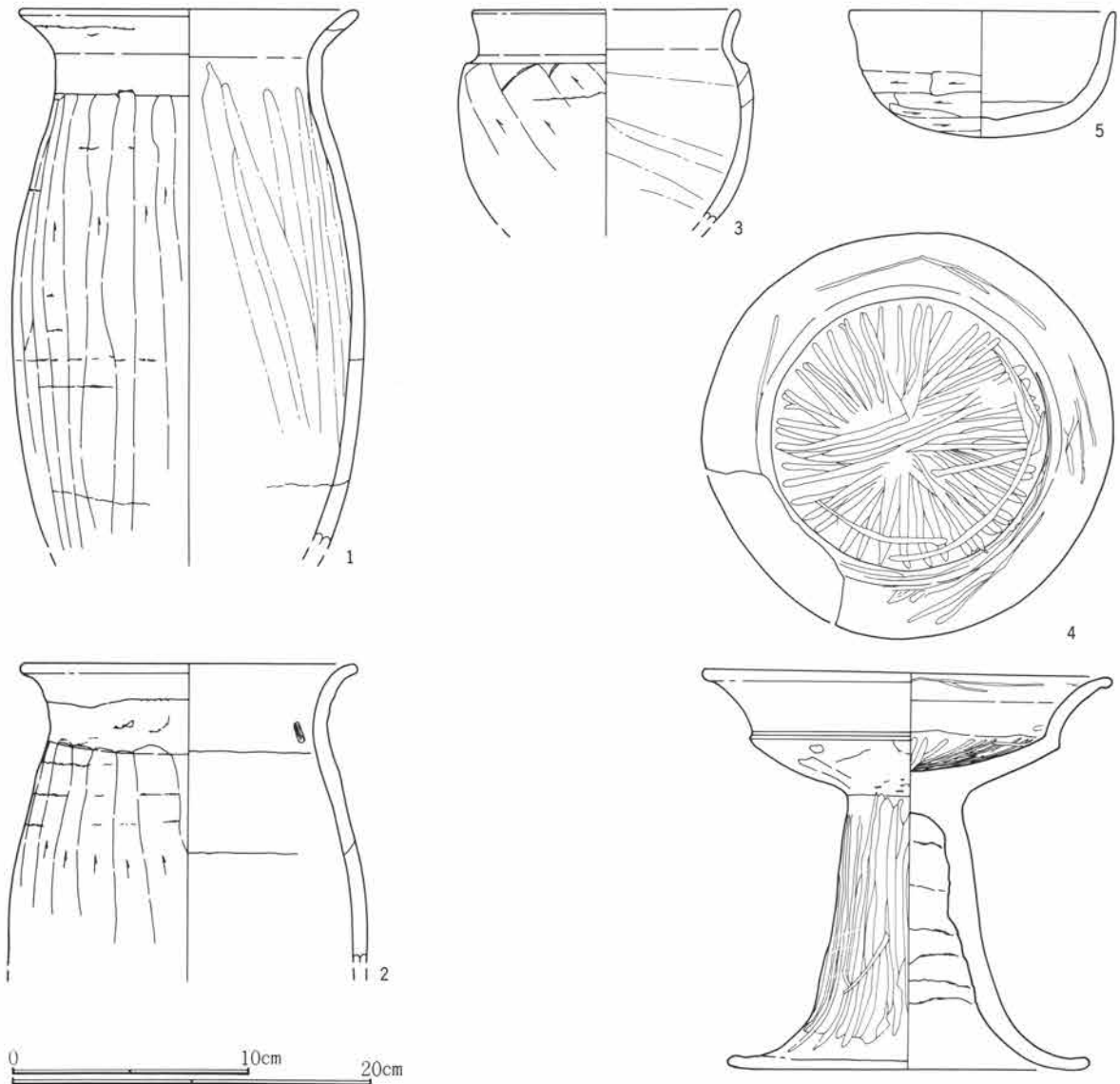
(竈)

位置 住居北壁中央部やや東寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

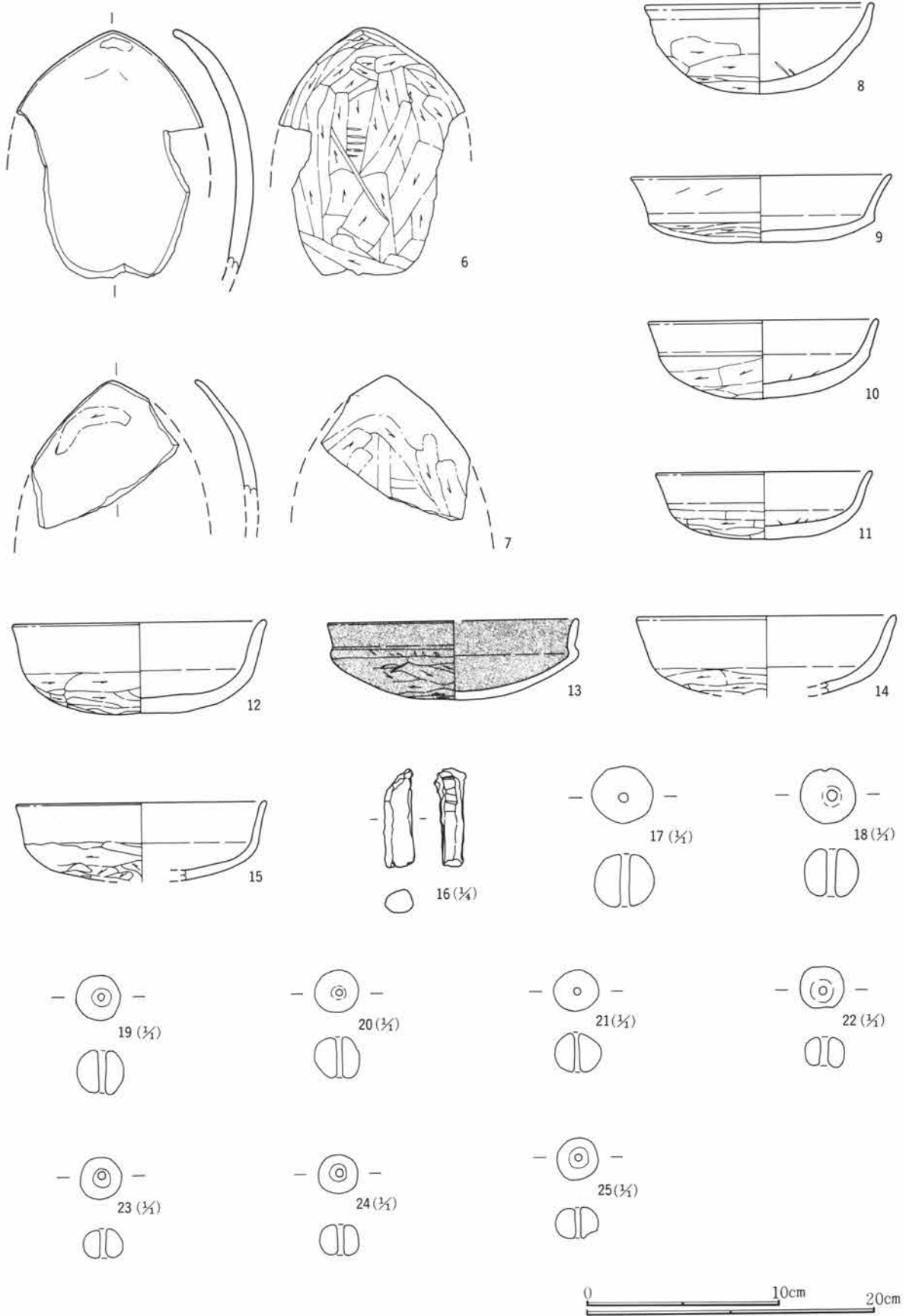
構造 両袖部分はほぼ良好に残っており、袖はロームを用いて造られていた。袖石や天井石は出土しなかった。燃烧部より多量の焼土粒が出土した。

規模 煙道方向110cm、両袖方向82cmである。

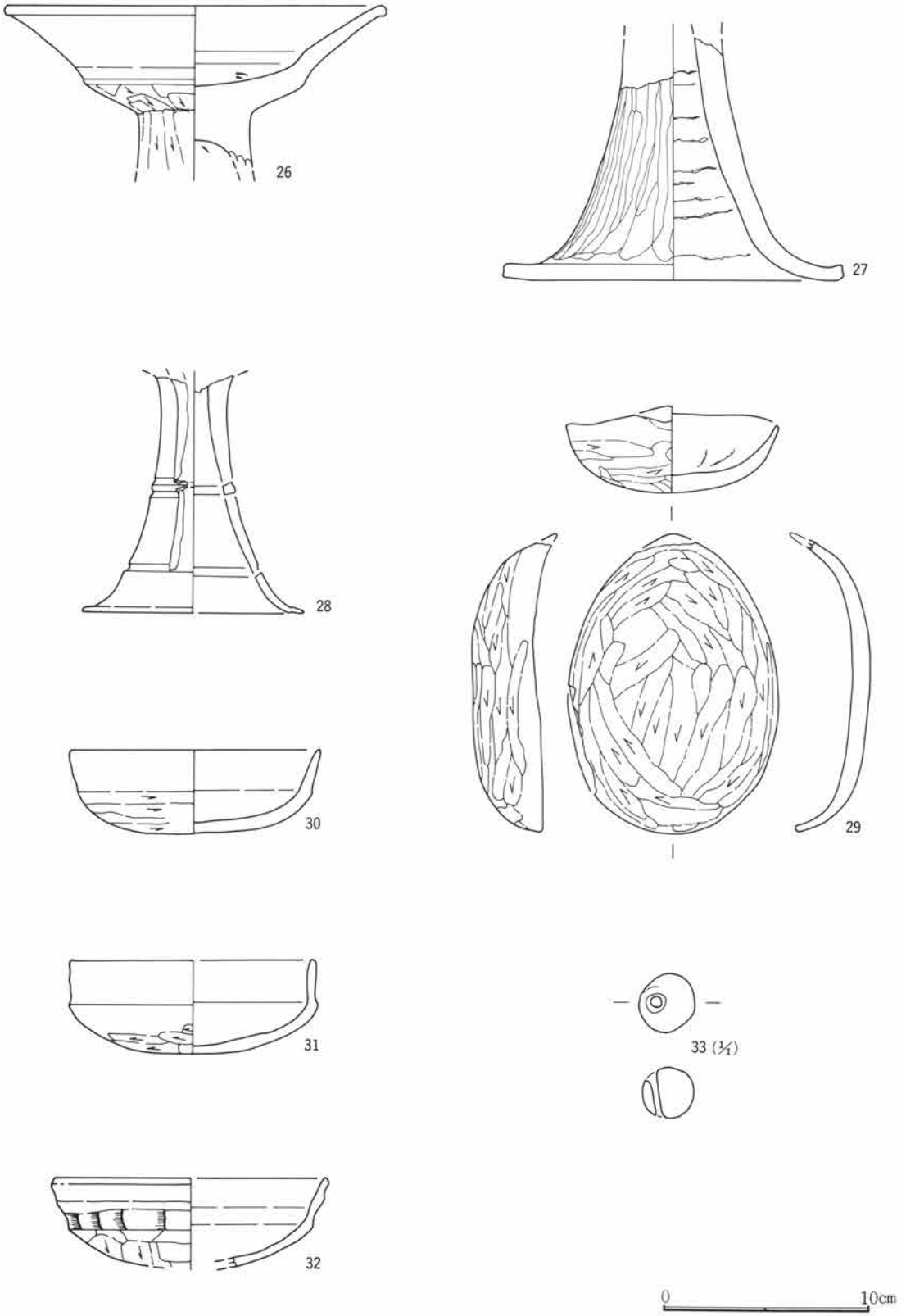
本住居跡は、『矢田遺跡V』で既に報告済であるが、掲載洩れ遺物のため、あらたに追加報告とする。なお遺物実測番号は、『矢田遺跡V』の後続とした。遺物写真以外は、すべて『矢田遺跡V』分とあわせて掲載した。



第27図 53号住居跡出土遺物実測図(1)



第28図 53号住居跡出土遺物実測図(2)



第29図 53号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

53号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
27-1	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{4}$ 残存	口 18.8 高 — 底 —	①粗、3~4mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部輪積後でいねいで密なヘラナデ。内面は指によるでいねいなナデで、輪積痕は残らず。
27-2	土師器 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.6 高・底 —	①粗、3~4mmの片岩を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴外面に輪積痕が残る。外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面はでいねいなナデ。ナデの単位不明。
27-3	土師器 小型壺	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.0) 高・底 —	①粗、2~4mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	幅広いヘラ削り。胴表面全体の器表面が粗い。口縁部横ナデ。胴内面でいねいなナデ。
27-4	土師器 高坏	床面-8 ほぼ完形	口 16.7 高 16.6 底 15.0	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラ磨きで光沢を持つ。脚内面に輪積痕が残る。坏底部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。坏内面全体に放射状ヘラ磨き。
27-5	土師器 坏	床面+9 ほぼ完形	口 11.0 高 5.2	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面もでいねいなナデ。丸底。
28-6	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部周辺は、削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。内面でいねいなナデ。出土例の少ない木の葉型の坏である。
28-7	土師器 坏	床面+16 破片	— —	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は主にナデで、ヘラ削りの痕跡を消している。内面もでいねいなナデ。出土例の少ない木の葉型の坏である。
28-8	土師器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.8 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。内側底面にヘラの工具痕あり。
28-9	土師器 坏	床面-5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.6 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部はヘラ削り後、でいねいなヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
28-10	土師器 坏	床面+33 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.1 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。
28-11	土師器 坏	床面+22 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.4 高 3.4 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	稜は明瞭でない。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底部にヘラの工具痕あり。
28-12	土師器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.2 高 4.7 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部幅の狭いヘラナデ。口縁部横ナデ。内面底部ナデ。稜は明瞭でない。
28-13	土師器 坏	床面+19 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 4.1	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	明瞭な稜を持つ。底部幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面に黒漆か。丸底。
28-14	土師器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.5) 高・底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部表面は剝離しているため、不明な点も多いが幅の狭いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部ナデ。
28-15	土師器 坏	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高・底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部表面は幅が狭く長さの短かいヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ナデ。
28-16	土師器 甕	床面直上 棧状片	— —	①粗、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	断面長方形に近い形にヘラ削り。
28-17	土製品 土玉	覆土	径 1.0 孔径 0.15 厚 0.9 重 1.0	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-18	土製品 土玉	覆土	径 1.0 孔径 0.15 厚 0.8 重 0.8	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-19	土製品 土玉	覆土	径 0.8 孔径 0.15 厚 0.8 重 0.5	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-20	土製品 土玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.7 重 0.4	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-21	土製品 土玉	覆土	径 0.8 孔径 0.1 厚 0.7 重 0.4	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-22	土製品 土玉	覆土	径 0.7 孔径 0.15 厚 0.5 重 0.3	①密	色調 表面黒色・断面にぶい赤褐色。 小さな土玉であり、一部欠損している。
28-23	土製品 土玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-24	土製品 土玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
28-25	土製品 土玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密	色調 表面黒色・断面にぶい赤褐色。 小さな土玉であり、一部欠損している。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
29-26 67	土師器 高坏	床面+3 坏部のみ完 形	口 18.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。坏底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の砂粒を含む。
29-27 67	土師器 高坏	床面+6 脚筒部 $\frac{1}{2}$ 下端部 $\frac{1}{3}$	口 — 高 — 底 16.5	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面筒部ヘラナデ。内面弱いナデで多くの輪積痕が残る。下端部横ナデ。
29-28	須恵器 高坏	床面+17 脚部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 (10.8)	①密、1mm前後の砂粒少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	2段透しの高坏の脚部である。中段に2条の凹線。下段に1条凹線あり。
29-29 67	土師器 坏	床面+14 一部欠損 ほぼ完形	口 14.0 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面はていねいで密なヘラナデ。砂粒や粘土の移動は少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。出土例の少ない木の葉型の坏である。
29-30 67	土師器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口 (12.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。胎土が密でヘラの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデ。胎土がやや粉状を呈する。黒斑は全く認められない。
29-31	土師器 坏	床面+26 破片	口 (11.8) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央部ヘラ削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
29-32	土師器 坏	床面+16 破片	口 (13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部下刷毛を用いた横ナデ。痕跡が簾状文状に残る。
29-33 108	土製品 土玉	覆土 完形	径 0.9 孔径 0.1 厚 0.8 重 0.6	①密 ③黒褐色	丸く作り、乾燥前に軸穴を穿孔している。軸穴は中央よりずれている。吸炭により全体が黒色を呈している。
34 111	こも編み石	床面-22	長 15.4 幅 6.7 厚 5.6 重 895		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
35 111	こも編み石	床面+16	長 13.5 幅 4.2 厚 3.7 重 245		絹雲母石墨片岩。断面が三角形を呈する細長い石である。三面にわずかな凹状部が見られる。
36 111	こも編み石	床面+27	長 14.3 幅 7.3 厚 4.2 重 750		安山岩。片側の側面中央部がゆるやかに凹状を呈している。
37 111	こも編み石	床面+1	長 13.4 幅 7.4 厚 2.3 重 600		緑簾緑泥片岩。幅の広い偏平な石である。片側の側面にわずかに凹状を呈する。
38 111	こも編み石	床面直上	長 15.3 幅 5.1 厚 2.8 重 360		絹雲母石墨片岩。1つの面全体が剝離。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
39 111	こも編み石	床面+3	長 13.2 幅 8.7 厚 2.2 重 420		絹雲母石墨片岩。薄く偏平な石である。片側の側面中央部にわずかな凹状を呈する。

77号住居跡 (第30~33図、図版6・7・68・108・111)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、25-34グリッドに位置する。

概要 平安時代の76号住居と竈北側の北東部分で重複している。76号住居と床面の高さはほぼ同じであるため床面は掘り込まれていないが、重複部分の覆土と壁面は削り取られていた。住居西壁付近の残りが悪く、住居範囲の確認も困難であった。西壁部分の形が不自然であり、一部認定に疑問が残る。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西5.95m、南北4.62mである。壁高は残りの良い南壁部分で15cmである。貯蔵穴は径89cm深さ49cmである。

床下 床面中央部の床下から床下土坑が、また北西コーナー部分に掘り込みが認められた。

遺物 竈手前部分に竈で使用されたと思われる石と共に、多くの土師器の甕や坏が集中して出土している。

(竈)

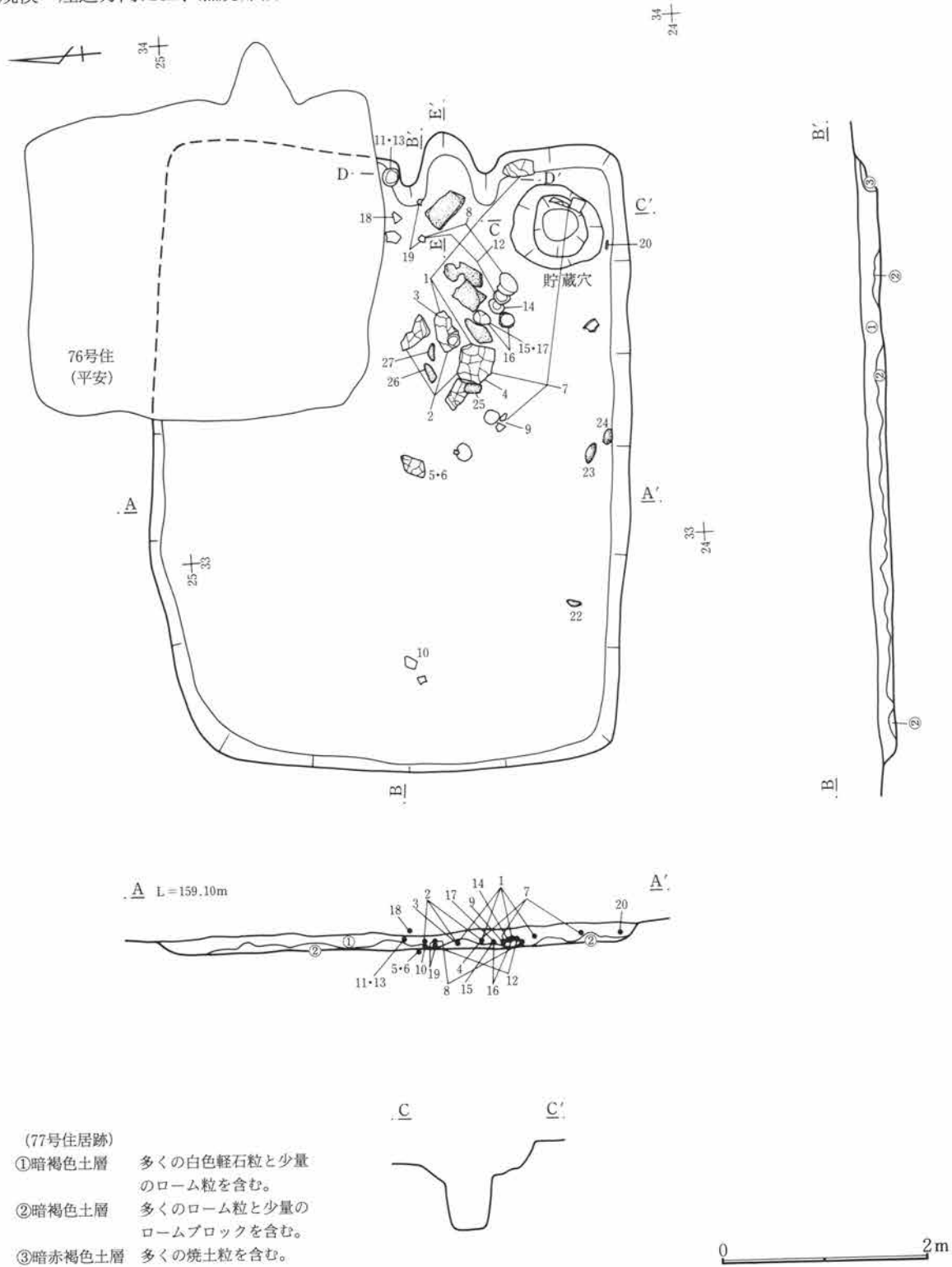
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分の床面上に、焚口の天井石として使われていたと思われる風化した大きな石が出土した。ま

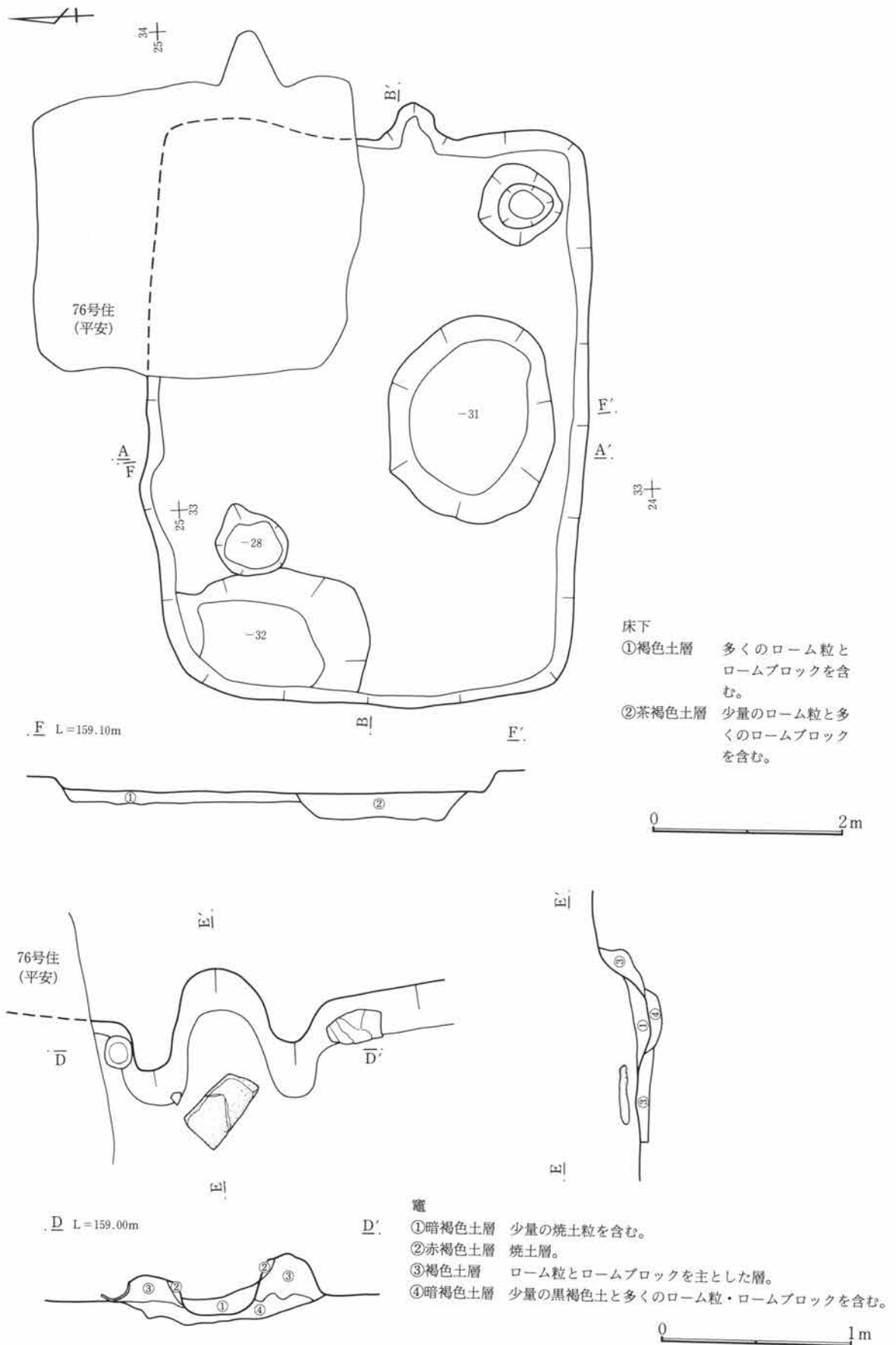
第3章 古墳時代の遺構と遺物

たほかにも大きな石が2個、焚口手前部分からも出土したため、天井部分に石が使われた竈と思われる。しかし残っていた袖部に袖石は使われていなかった。燃烧部上部の一部が焼けて焼土化しており、燃烧部から少量の焼土粒が出土した。

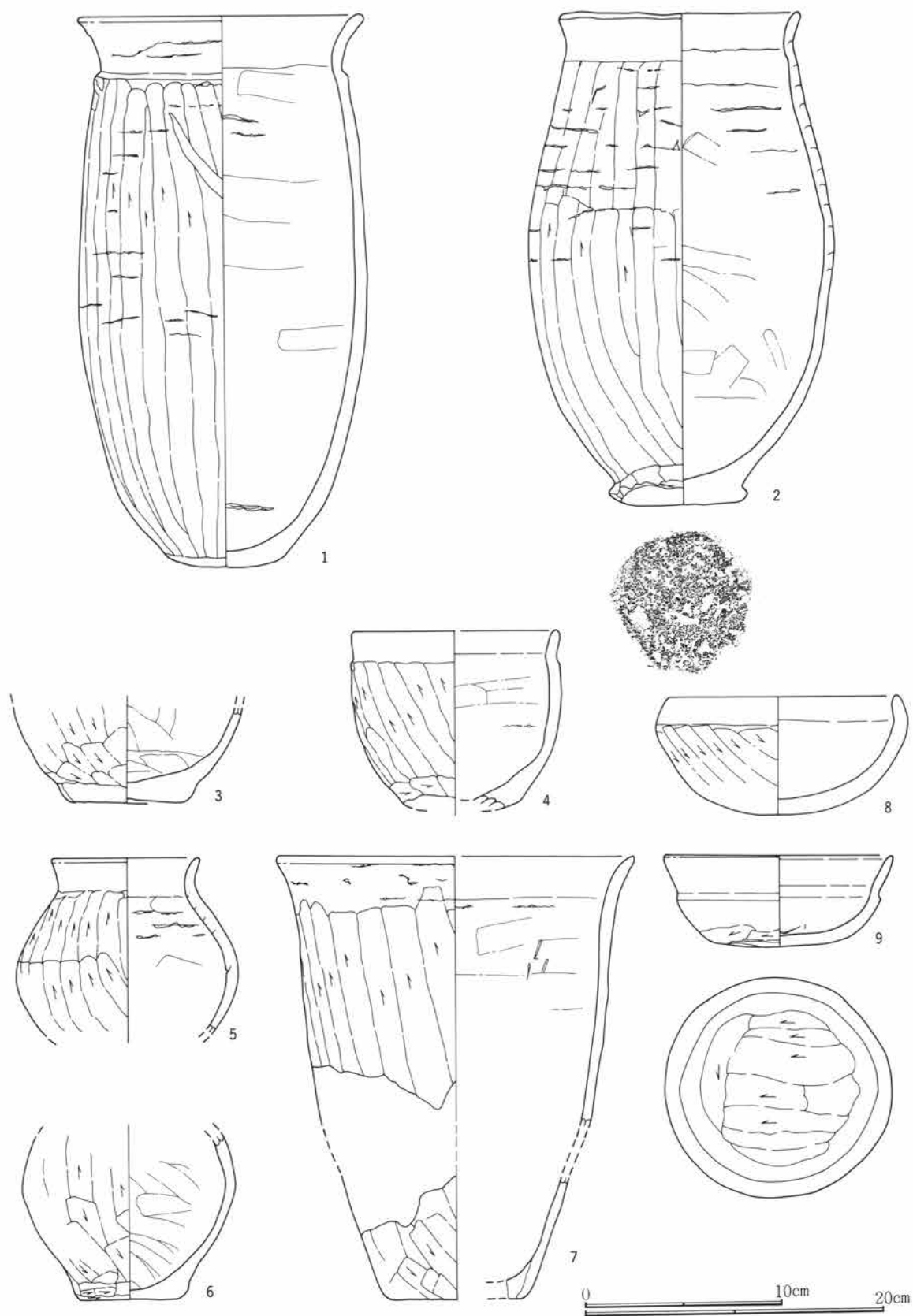
規模 煙道方向72cm、燃烧部幅44cmである。



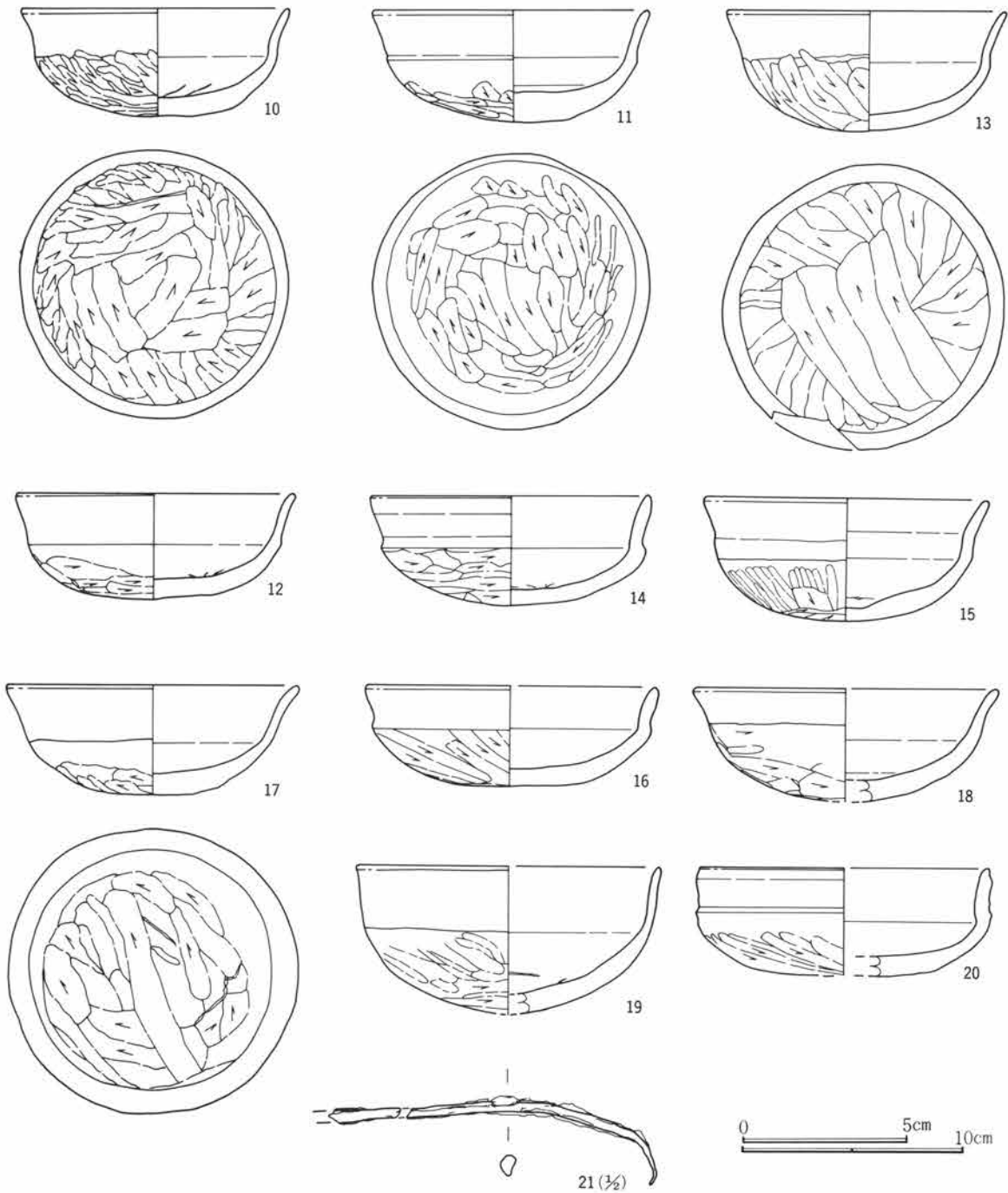
第30図 77号住居跡実測図



第31図 77号住居跡床下・竈実測図



第32図 77号住居跡出土遺物実測図(1)



第33図 77号住居跡出土遺物実測図(2)

77号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
32-1 68	土 師 器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴 部 $\frac{1}{2}$ 底部完	口 19.4 高 36.9 底 8.0	①粗、3~6mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデにより器表面密。
32-2 68	土 師 器 甕	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴 部 $\frac{1}{2}$ 底部完	口 16.4 高 33.0 底 9.4	①粗、3~6mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデ。胴部内外面とも輪積痕が残る。全体に雑な感じのつくりである。
32-3	土 師 器 小型 甕	床面+2 胴下半 $\frac{1}{2}$ 底面完形	口 — 高 — 底 7.9	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削りとナデ。胴部外面弱いナデ。器表面に多くの砂粒が目立つ。内面ナデ。

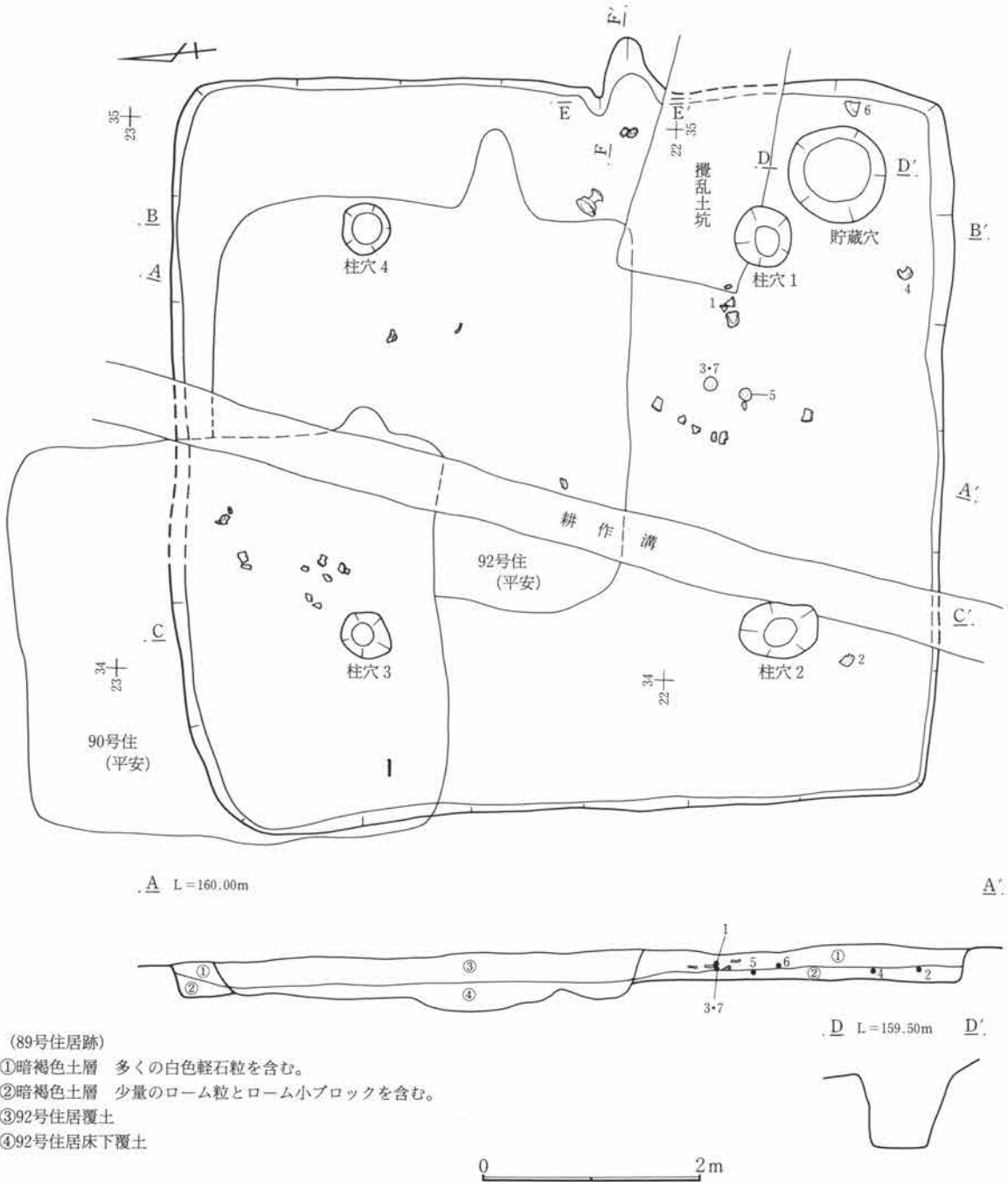
第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
32-4 68	土 師 器 小 型 甕	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴~底部 $\frac{3}{4}$	口(14.0) 高 — 底 7.4	①粗、2~4mmの砂粒を大量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面~胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が特に 粗い。内面ナデにより器表面密。 底部は器内が厚く欠損は人為的になされたものか。
32-5 68	土 師 器 小 型 甕	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 10.0 高 — 底 —	①粗、2~8mmの砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにより器表面密。 雑なつくりの甕である。
32-6	土 師 器 小 型 甕	床面+2 底部完形 胴下半 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 6.7	①粗、1mm前後の長石粒と片岩 粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底面ナデ。胴部外面へラ削り。内面ナデ。外面はへラ削りによ り粗く砂粒が目立つ。
32-7 68	土 師 器 甕	床面+1 口縁部 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$	口 24.0 高 — 底(10.0)	①やや粗、1~3mmの砂粒と片 岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	椀を持つ甕である。胴部外面へラ削り。内面ナデにより器表 面密。 口縁部は歪んでいる。底部は胴部と接合しないため図上復元。
32-8 68	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.8 高 5.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 器表面全体がわずかに剝離している。
32-9 68	土 師 器 坏	床面+1 ほぼ完形	口 11.4 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	平底に近い底面へラ削り。底面周辺ナデ。口縁部横ナデ。内 面ナデにより器表面密。 底部外面の一部に吸炭による黒斑あり。
33-10 68	土 師 器 坏	床面+10 完形	口 7.3 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内外面に多く黒斑	底面細かいへラ削り。粘土がササラ状になっている。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側底面にへラの圧痕あり。
33-11 68	土 師 器 坏	床面+5 完形	口 12.8 高 5.0 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面底部黒色	底部外面へラナデ。ナデ後の器表面密。底部周辺ナデ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底面周辺にへラ削りやへラナデは認められない。
33-12 68	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.7 高 4.8 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒色	底面へラ削り。椀に近い部分の底部ナデ。口縁部横ナデ。内 面ナデにより器表面密。 外面の口縁部~底部 $\frac{1}{2}$ 吸炭により黒色を呈する。
33-13 68	土 師 器 坏	床面+5 ほぼ完形	口 12.8 高 5.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒褐色	底面へラナデ。一部へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデによ り器表面密。
33-14 68	土 師 器 坏	床面+2 ほぼ完形	口 12.8 高 5.0 底 丸底	①ほぼ密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側底面にへラの圧痕あり。
33-15 68	土 師 器 坏	床面+2 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.0 高 5.6 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央へラ削り。周辺部へラナデ。内側底面中央部が凹状 を呈する。 黒斑全く認められず。
33-16 68	土 師 器 坏	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口(13.3) 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。削りの方向も周辺部から中央に向かうやや放 射状を呈しており、やや異質。 器内が厚い。
33-17 68	土 師 器 坏	床面+2 ほぼ完形	口 13.4 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。粘土がササラ状になり器表面やや粗い。 底部周辺ナデ。口縁部横ナデ。内側底面にへラの圧痕。 底部周辺にへラ削りが行なわれていないやや異質な坏。
33-18	土 師 器 坏	床面+12 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く、片 岩粒少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土はへラ削りを用いない整形等やや異質。
33-19	土 師 器 坏	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.9) 高(6.7) 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部へラ削り。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部の器内は厚いが口縁部は薄い。
33-20 68	土 師 器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面丸味の刃部を持つ幅の狭い工具によるへラ削り。 稜付近の底部ナデ。
33-21 108	鉄 器 不 明	注記ナシ	長 10.0 幅 0.65 厚 0.6 重 4.30		錆割れが発達。鍛造鉄と思われる。 名称及び用途不明。錆化がひどく、断面形も不明。
22 111	こも編み石	床面+2	長 16.2 幅 5.9 厚 4.0 重 620		緑簾緑泥片岩。中央部が肉厚な石である。片側の側面にわず かな凹状部を持つ。
23 111	こも編み石	床面+2	長 14.8 幅 8.7 厚 3.6 重 700		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部が打ち欠かれ凹状を呈し、 他の側面に小さな凹状部が見られる。
24 111	こも編み石	床面+2	長 16.2 幅 8.6 厚 4.6 重 1020		絹雲母石墨片岩。両側面にゆるやかな凹凸部を持つ。

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
25 111	こも編み石	床面+2	長 15.3 厚 4.0	幅 8.6 重 1060	緑簾緑泥片岩。幅の広い偏平な石である。片側の側面が打ち欠かれわずかに凹凸状を呈している。
26 111	こも編み石	床面+4	長 18.5 厚 5.0	幅 7.8 重 1180	緑簾緑泥片岩。中央部が肉厚な石である。片側の側面がわずかな凹状を呈している。
27 111	こも編み石	床面+4	長 14.9 厚 4.7	幅 4.6 重 505	点紋絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。

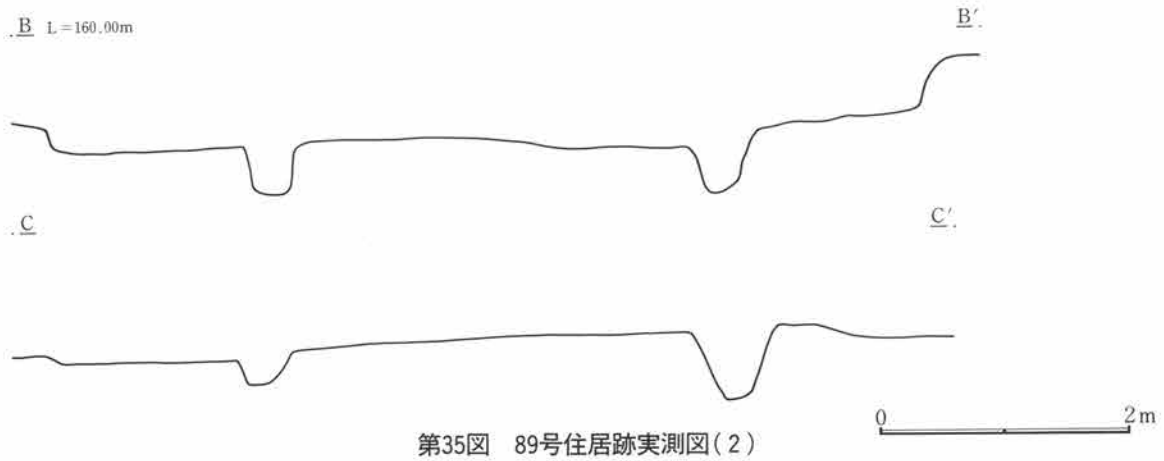
89号住居跡 (第34~37図、図版7・69)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、22・23-35グリッドに位置する。



- (89号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ③92号住居覆土
 - ④92号住居床下覆土

第34図 89号住居跡実測図(1)



第35図 89号住居跡実測図(2)

概要 平安時代の2軒の住居と重複しており、住居の北側を92号住居に北西コーナー部分を90号住居により床面から一部床下部分まで掘り込まれていた。新旧関係は89→92→90号住居であった。さらに耕作溝により住居の中央付近を床下部分まで掘り込まれ、竈の右側部分を通称イモ穴と呼ばれている土坑が掘られており、竈の右袖部分が掘り取られて残っていなかった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西6.62m、南北7.14mである。壁高は残りの良い東壁部分で38cmである。貯蔵穴は径67cm深さ86cmで、柱穴1は径52cm深さ42cm、柱穴2は径51cm深さ50cm、柱穴3は径47cm深さ35cm、柱穴4は径48cm深さ43cmである。

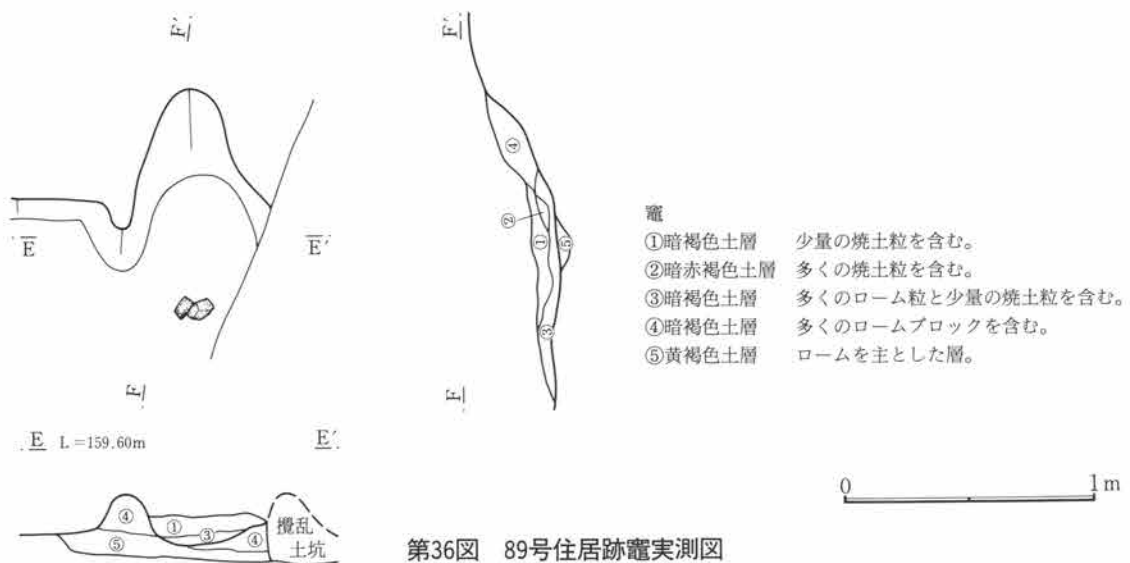
遺物 破片を含めて出土量が少ない。須恵器甕の小破片が注目される。

(竈)

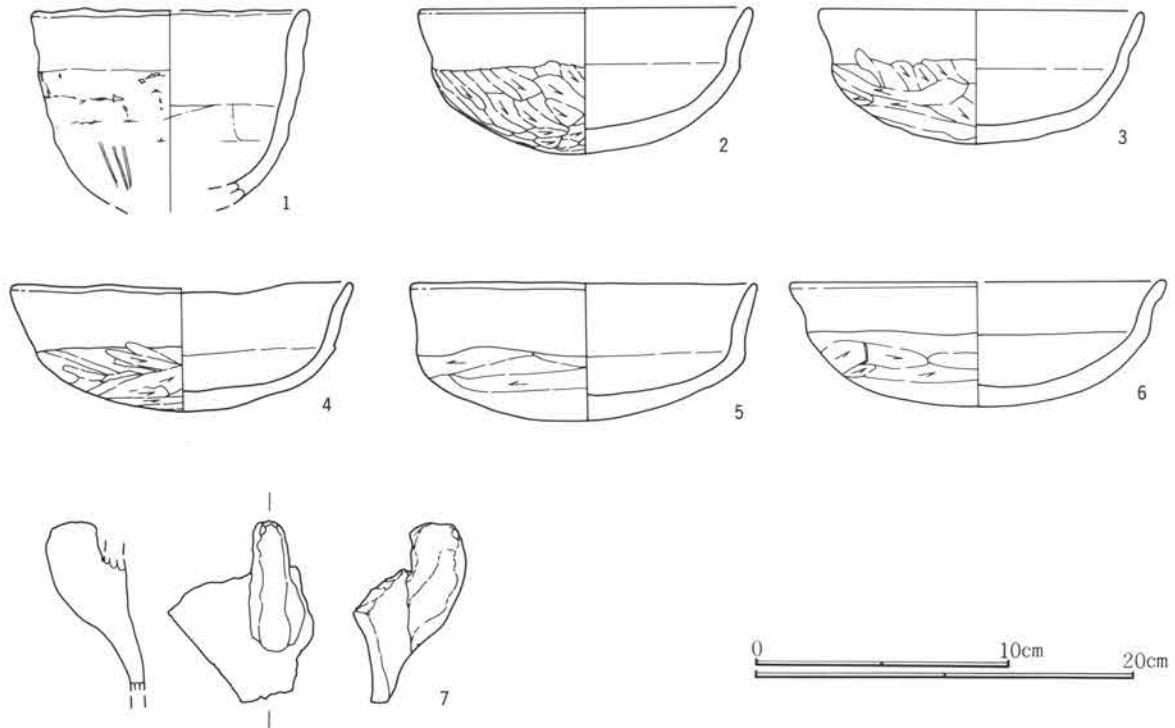
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 左側の袖部は残っていたが、右側の袖部は手前部分を土坑により削り取られていた。燃烧部の奥壁部分は焼けて焼土化していたが、燃烧部から出土した焼土粒は多くなかった。

規模 煙道方向72cm、燃烧部幅54cmである。



第36図 89号住居跡竈実測図



第37図 89号住居跡出土遺物実測図

89号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
37-1	土 師 器 小 型 甕	床面+7 1/3残存	口(14.8) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色・一部黒褐色	胴部外面ナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に整形が雑である。
37-2 69	土 師 器 杯	床面+11 口縁部1/2 底部3/4残存	口 13.2 高 5.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの面は光沢面とササラ状の面あり。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
37-3 69	土 師 器 杯	床面+7 ほぼ完形	口 12.7 高 5.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。明瞭なヘラ削りは認められず、口縁部~内側底面ナデにより器表面密。底部の一部が吸炭により黒色を呈する。
37-4 69	土 師 器 杯	床面直上 ほぼ完形	口 13.6 高 5.1 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の狭いヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部外面の一部吸炭により黒色を呈する。
37-5 69	土 師 器 杯	床面+5 完形	口 13.8 高 5.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部表面が剥離し、細かな凹凸状を呈する。底部周辺部凹状にヘラ削り。内面ナデにより器表面密。
37-6 69	土 師 器 杯	床面+8 1/3残存	口(15.0) 高 4.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、器表面は粗くヘラの単位は不明瞭。口縁部横ナデ。
37-7 69	須 恵 器 瓶	床面+7 把手のみ	— —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	ヘラ削りは全く認められず。ナデにより整形している。瓶の把手と思われる。

105号住居跡 (第38・39図、図版7)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、34-30グリッドに位置する。

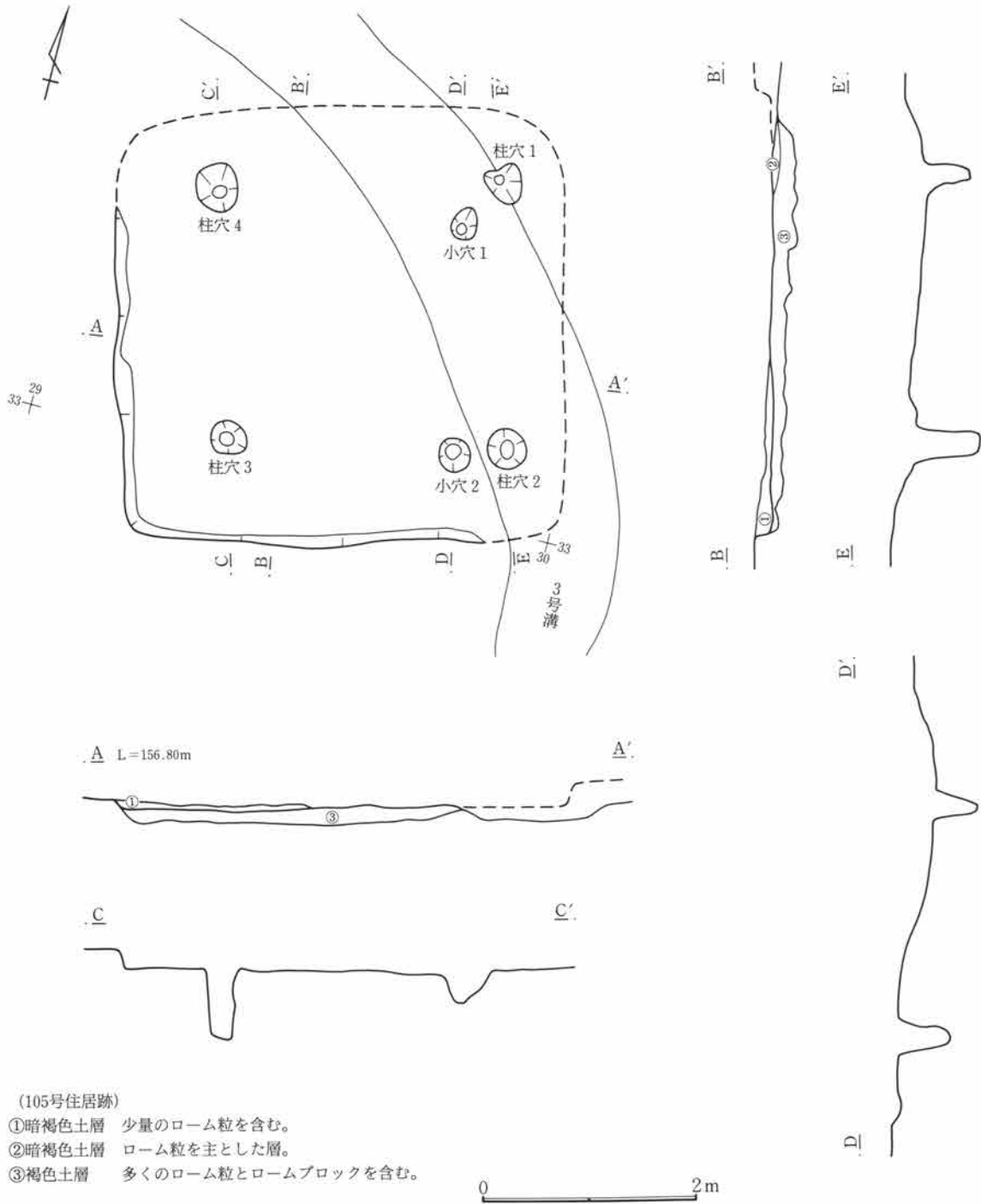
概要 南西部分に床面が残っていたが、北西部分の多くは床下部分まで削られていた。さらに北東部分は3号溝により床面下まで掘り込まれており、全体に残りの悪い住居であった。竈は全く痕跡も確認できなかった。竈が不明でも多くの住居の場合、竈に近接して貯蔵穴が掘られている場合が多いため、ある程度の推定は可能であるが、この住居では貯蔵穴も掘られていなかったため全く不明である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本、小穴が2本掘られていた。

規模 東西不明、南北推定3.98mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で22cmである。柱穴1は径36cm深さ68cm、柱穴2は径37cm深さ78cm、柱穴3は径33cm深さ62cm、柱穴4は径40cm深さ33cmである。小穴1は径26cm深さ72cm、小穴2は径30cm深さ42cmである。

遺物 出土土器は図示した土師器坏2点が全てである。



第38図 105号住居跡実測図



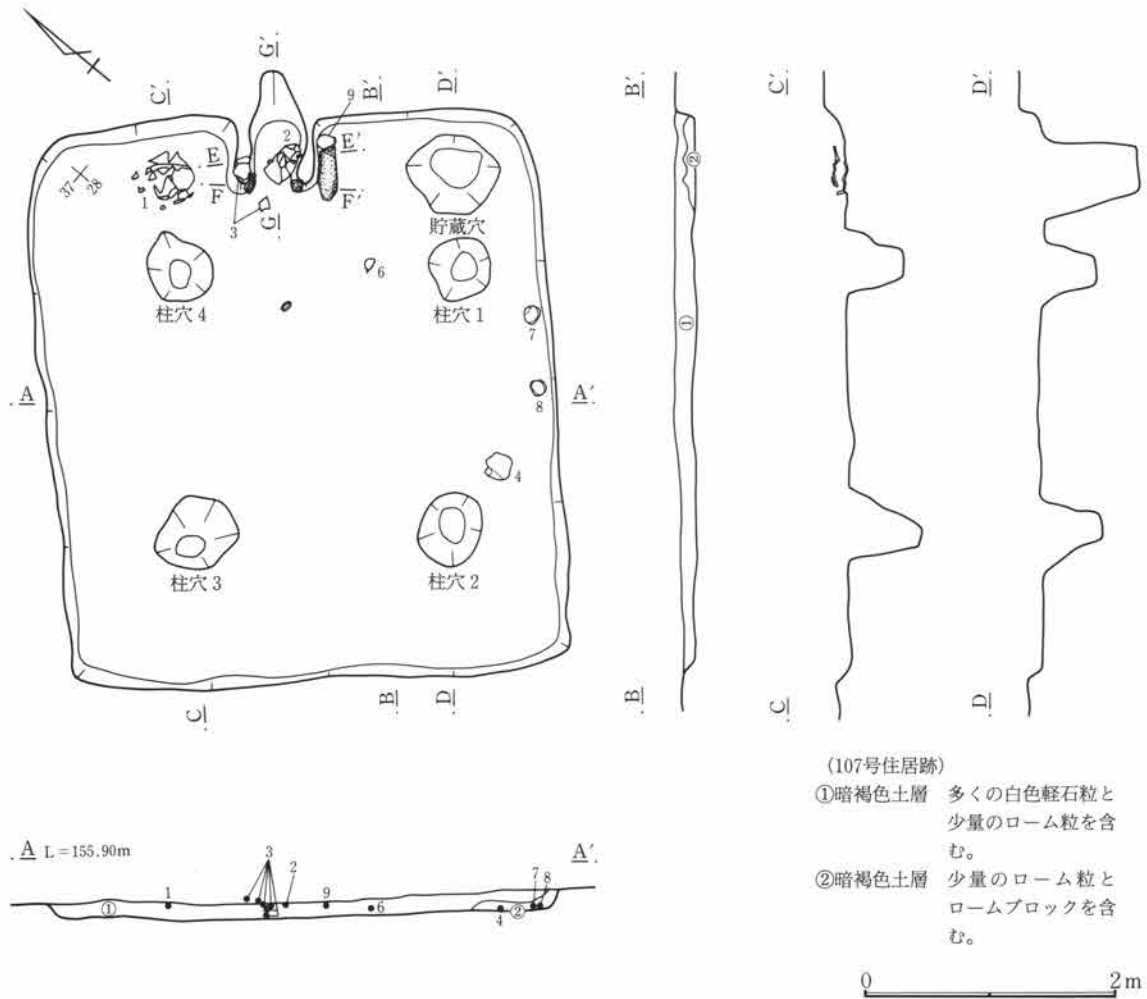
第39図 105号住居跡出土遺物実測図

105号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
39-1	土師器 坏	覆土 口縁~体部 1/2残存	口(14.0) 高(5.5) 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面中央へラ削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
39-2	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(14.2) 高— 底—	①密、少量の砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面浅いへラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

107号住居跡 (第40~44図、図版7・8・69)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、37-27・28グリッドに位置する。



第40図 107号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

概要 表土の一部を耕作溝により削られているが、他の住居との重複もなく比較的残りの良い住居である。特に竈の残りが良好であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西4.15m、南北4.51mである。壁高は残りの良い東壁部分で27cmである。貯蔵穴は径76cm深さ70cmで、柱穴1は径51cm深さ30cm、柱穴2は径50cm深さ35cm、柱穴3は径66cm深さ50cm、柱穴4は径52cm深さ39cmである。

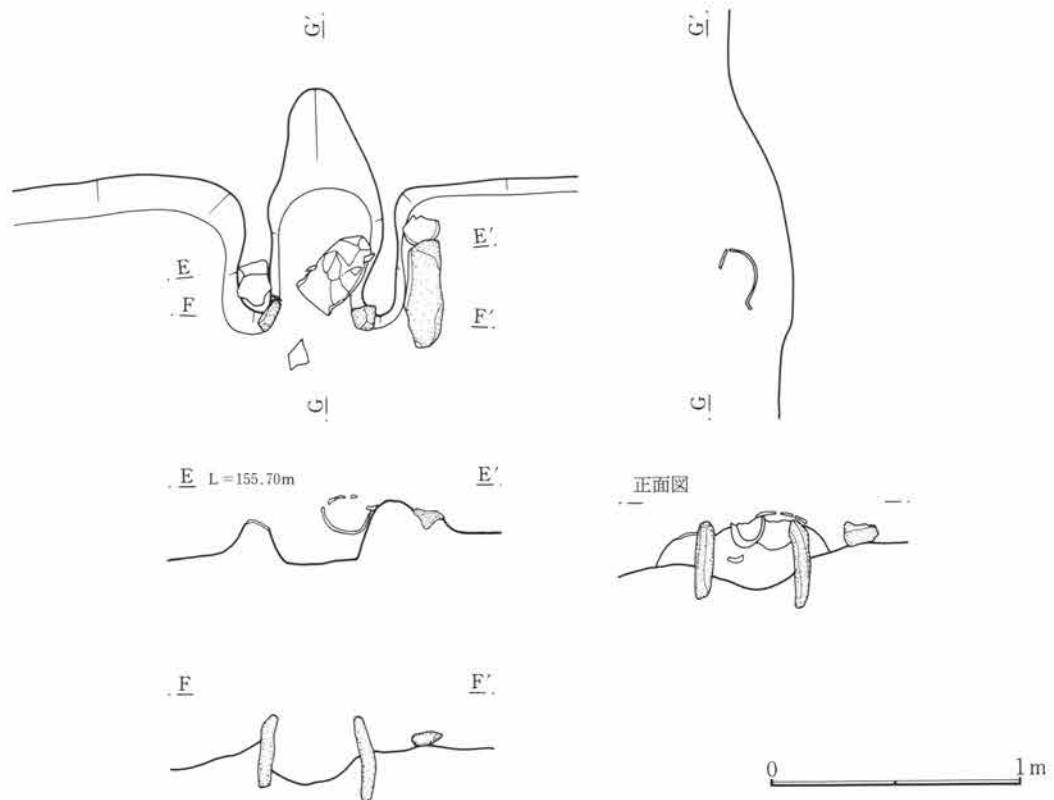
遺物 竈周辺に多くの遺物が出土している。漆の塗られた坏が目立つ。

(竈)

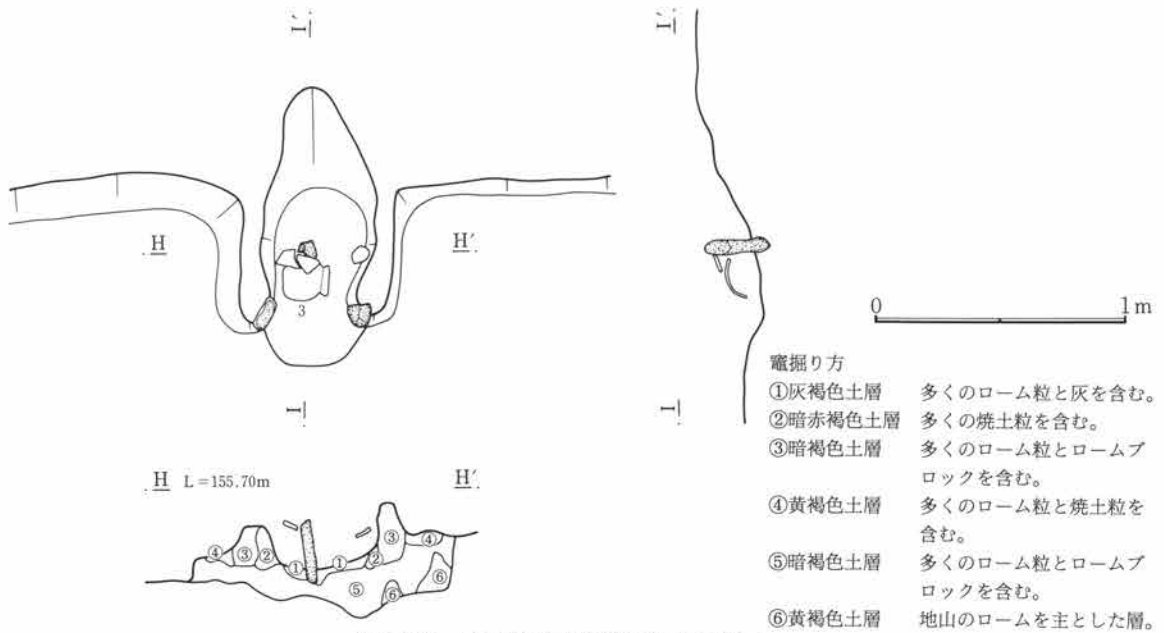
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分の左右の袖石と燃烧部中央やや左よりに置かれた支脚石がほぼ使用時の状態で残っていた。また焚口の天井石が右袖部分の外側に外されて置かれていた。燃烧部にはほぼ完形の甕が倒れた状態で出土した。竈内からも甕の破片が多く出土した。燃烧部を中心に多くの焼土粒の出土も認められた。このように残りの良好な竈であった。平面図は上面と下面の2枚を作成し、多くのエレベーションと一部正面図を作成した。また調査を進める中で土層観察より残存状況の把握に重点を置いたために図面はエレベーションを中心とし、セクションは掘り方部分のみとした。

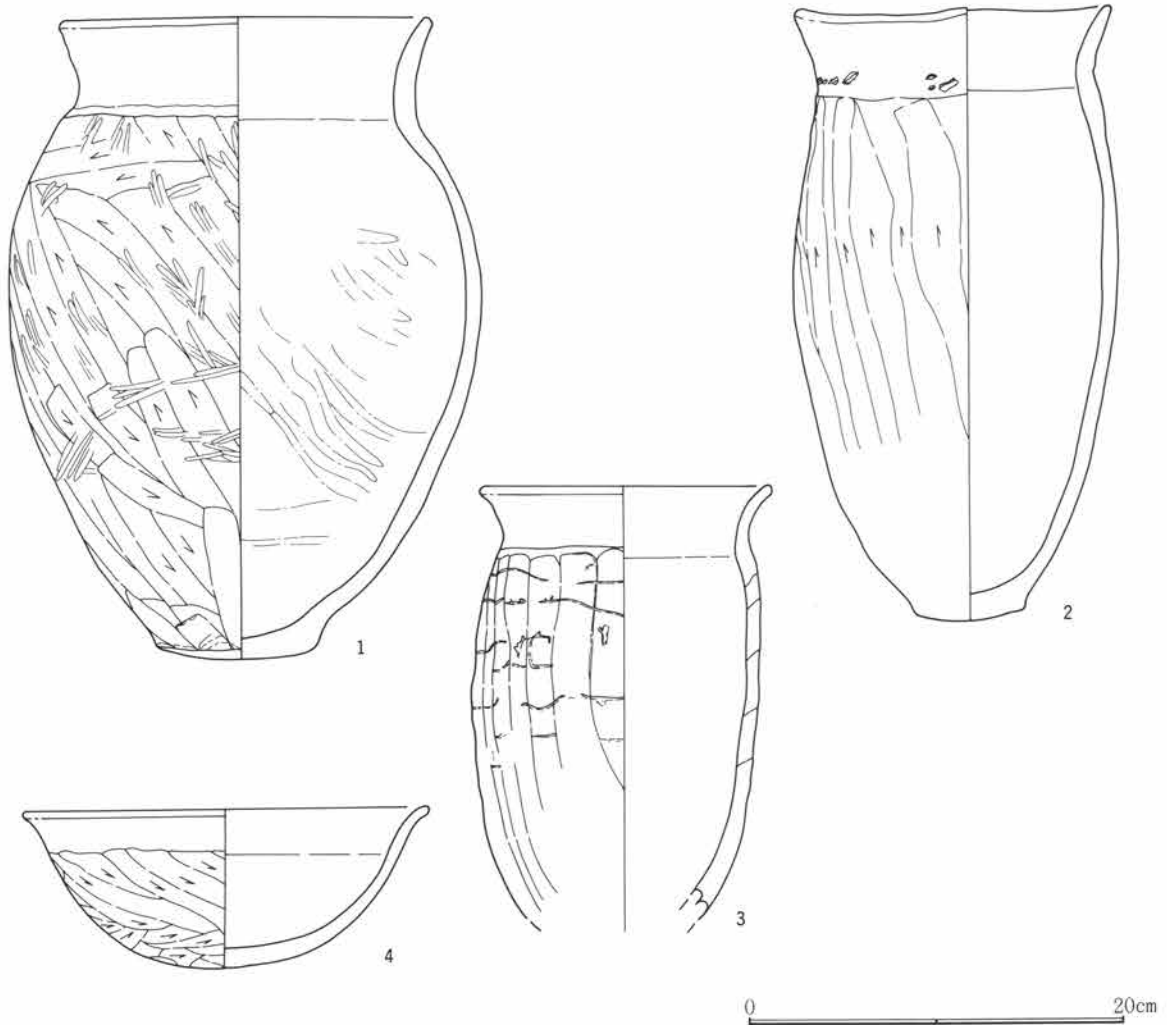
規模 煙道方向95cm、燃烧部幅45cmである。



第41図 107号住居跡竈実測図

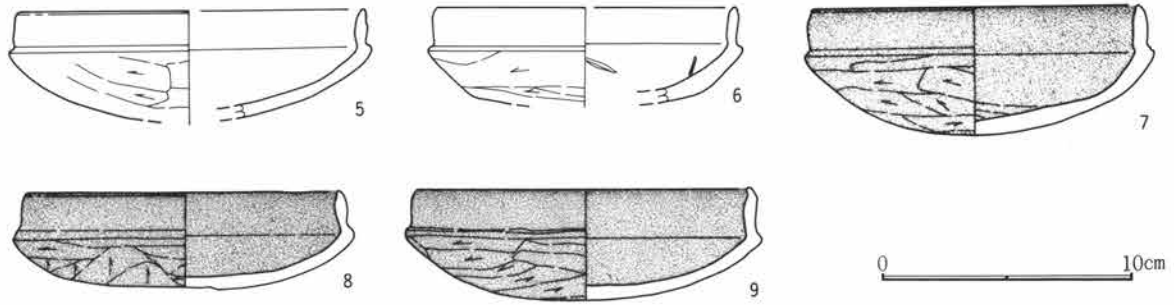


第42図 107号住居跡竈掘り方実測図



第43図 107号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第44図 107号住居跡出土遺物実測図(2)

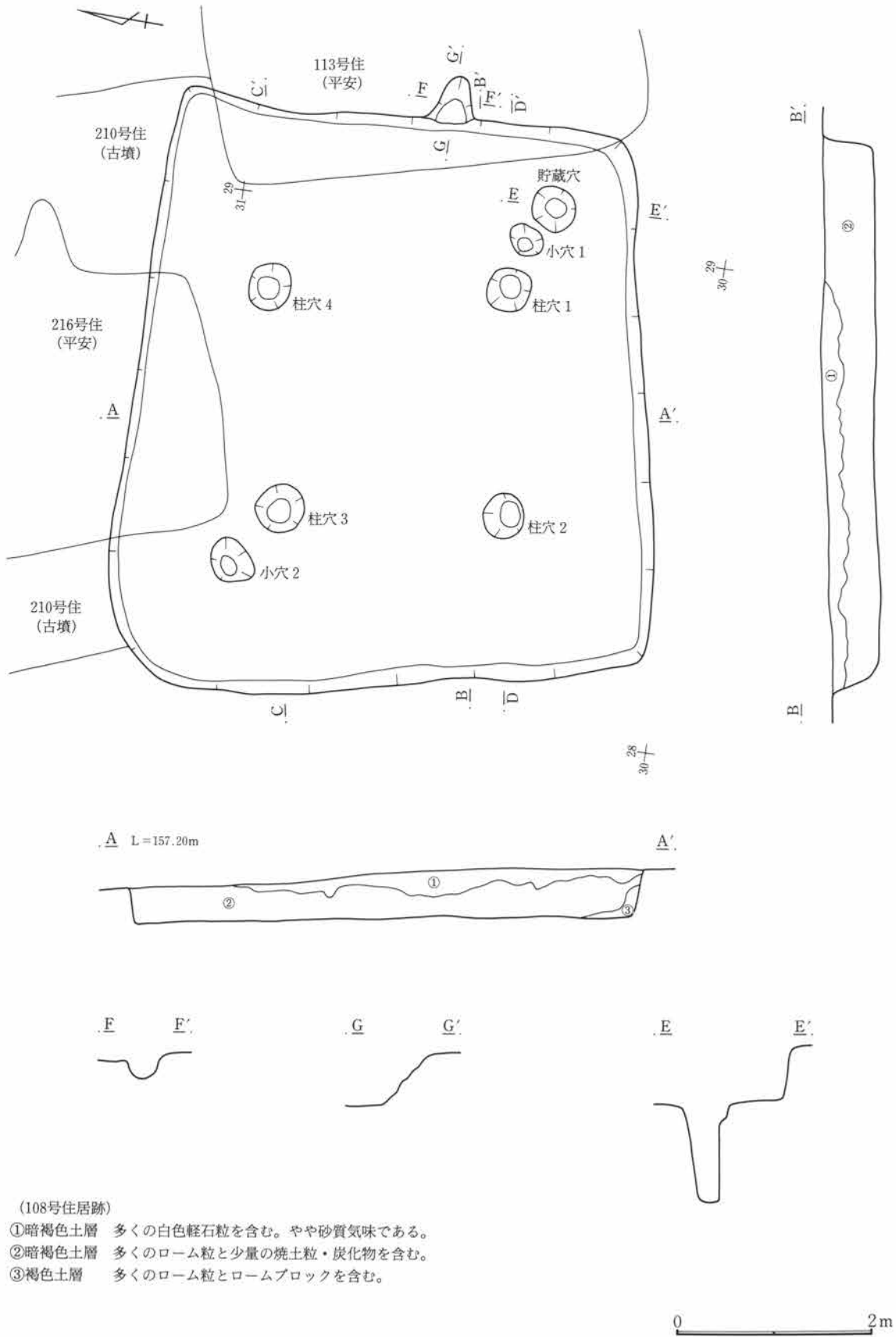
107号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
43-1 69	土 師 器 壺	床面+6 ほぼ完形	口 19.8 高 33.8 底 8.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く、3~4mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り後細かなヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部の器肉が厚く区画が明瞭である。
43-2 69	土 師 器 甕	竈周辺+10 口縁部 $\frac{3}{5}$ 胴~底部 $\frac{1}{5}$	口 16.7 高 32.4 底 5.8	①粗、2~4mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。下半部は器表面が粗れており整形方法不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部が少し歪んでいる。
43-3 69	土 師 器 甕	竈周辺+4 口縁部 $\frac{3}{5}$ 胴部 $\frac{1}{5}$ 残存	口 15.6 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒褐色	胴部外面ナデ。一部ヘラナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
43-4 69	土 師 器 鉢	床面+2 ほぼ完形	口 21.6 高 8.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
44-5	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{5}$ 残存	口(13.8) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細かいヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
44-6 69	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{1}{5}$ 残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は高く明瞭である。
44-7 69	土 師 器 坏	床面+5 $\frac{1}{5}$ 残存	口 13.1 高 5.0 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒色・断面橙色・底面黒褐色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内側底面中央に4本の凹条のナデあり。口縁部外面~内側底面黒色。底部外面吸炭による黒色。
44-8 69	土 師 器 坏	床面+4 完形	口 12.6 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部の断面が菱形に近い。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
44-9 69	土 師 器 坏	床面+6 $\frac{1}{5}$ 残存	口 13.3 高 4.3 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・表面の一部黒色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れが少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。

108号住居跡 (第45~58図、図版8・9・71~77・108~110・112)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31-29グリッドに位置する。

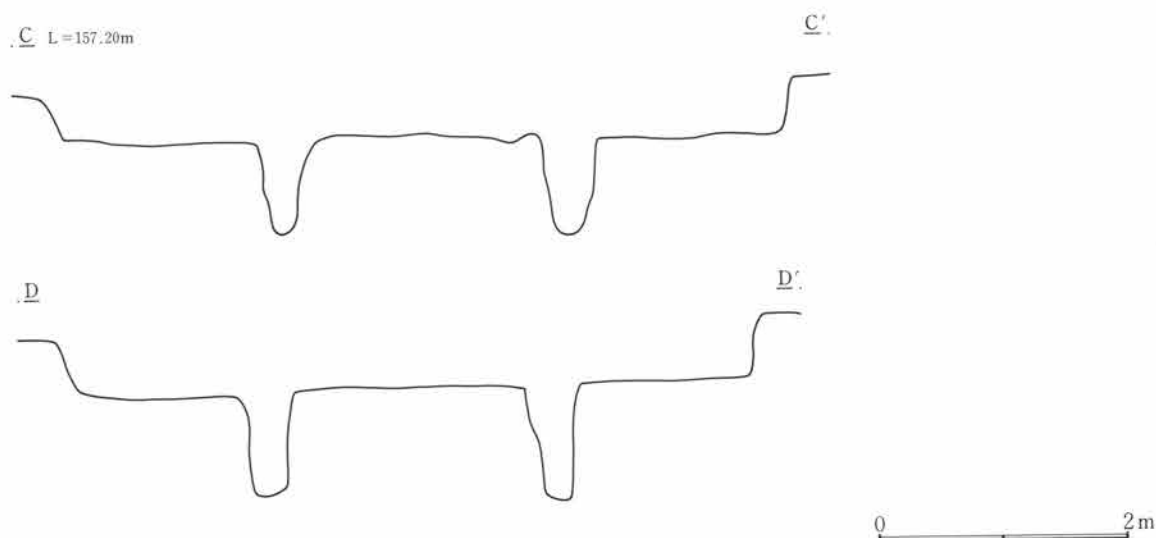
概要 平安時代住居2軒、古墳時代住居2軒の4軒重複の中の1軒である。北側の一部を平安時代の216号住居により覆土上面を削られ、竈の造られている東壁面を平安時代の113号住居により同じく覆土上面が削られている。また本住居が古墳時代の210号住居の南側部分を大きく床下部分まで掘り込んでいる。新旧関係は210→108→216号住居また108→113号住居である。竈はほとんど壊されており残りが悪かった。この住居の最も大きな特徴は膨大な出土遺物である。丸胴の壺を中心にして細長い甕や甑と少量の坏が住居の中央部に折り重なるように出土した。発掘時においては多くの破片として出土したが、復元により破片の多くが接合しほぼ完形となった壺も多い。出土状態も住居が埋まる中で土器捨場として使用されたような状態ではなく、床面からほぼ10cm以内の所に大部分がまとまって出土している



(108号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。やや砂質気味である。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第45図 108号住居跡実測図(1)



第46図 108号住居跡実測図(2)

ため、ほぼ同時期に丸胴の壺を中心とした壺と甕類がこの住居に持ち込まれていた可能性が高い。もしそうであるとすれば、これほどの大量の土器が住居中央の床面付近に置かれていては、この住居は生活できる状態ではないはずである。この住居に造られていた竈は既に機能していない状態となっていた。おそらく生活に使われなくなった住居を壺や甕を中心とした土器の貯蔵所として使われていたものが、上屋の崩壊またはそのほかの理由によりそのまま放置され埋もれたものと思われる。住居内より出土する土器類は通常坏が多く壺や甕が少ないが、この住居では壺や甕が大多数を占めており坏が非常に少ない。さらにこれらの坏は壁面周辺から多く出土していることにより、ほかの壺や甕類と出土位置が異なる。おそらく坏類の多くはこの建物が住居として使われていた時期のもので、壺や甕類の保管に建物が使用された段階のものではないものと考えられる。これらの状況からこの住居は最終段階において壺や甕等の土器の貯蔵施設、または土器の集結場所として使われていたことも考えられる。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。柱穴1と貯蔵穴の間と柱穴3の外側に小穴が掘られていた。用途は不明である。

規模 東西5.88m、南北5.58mである。壁高は残りの良い南壁部分で52cmである。貯蔵穴は径46cm深さ98cmで、柱穴1は径46cm深さ94cm、柱穴2は径43cm深さ92cm、柱穴3は径52cm深さ83cm、柱穴4は径46cm深さ88cmである。小穴1は径33cm深さ66cm、小穴2は径42cm深さ52cmである。

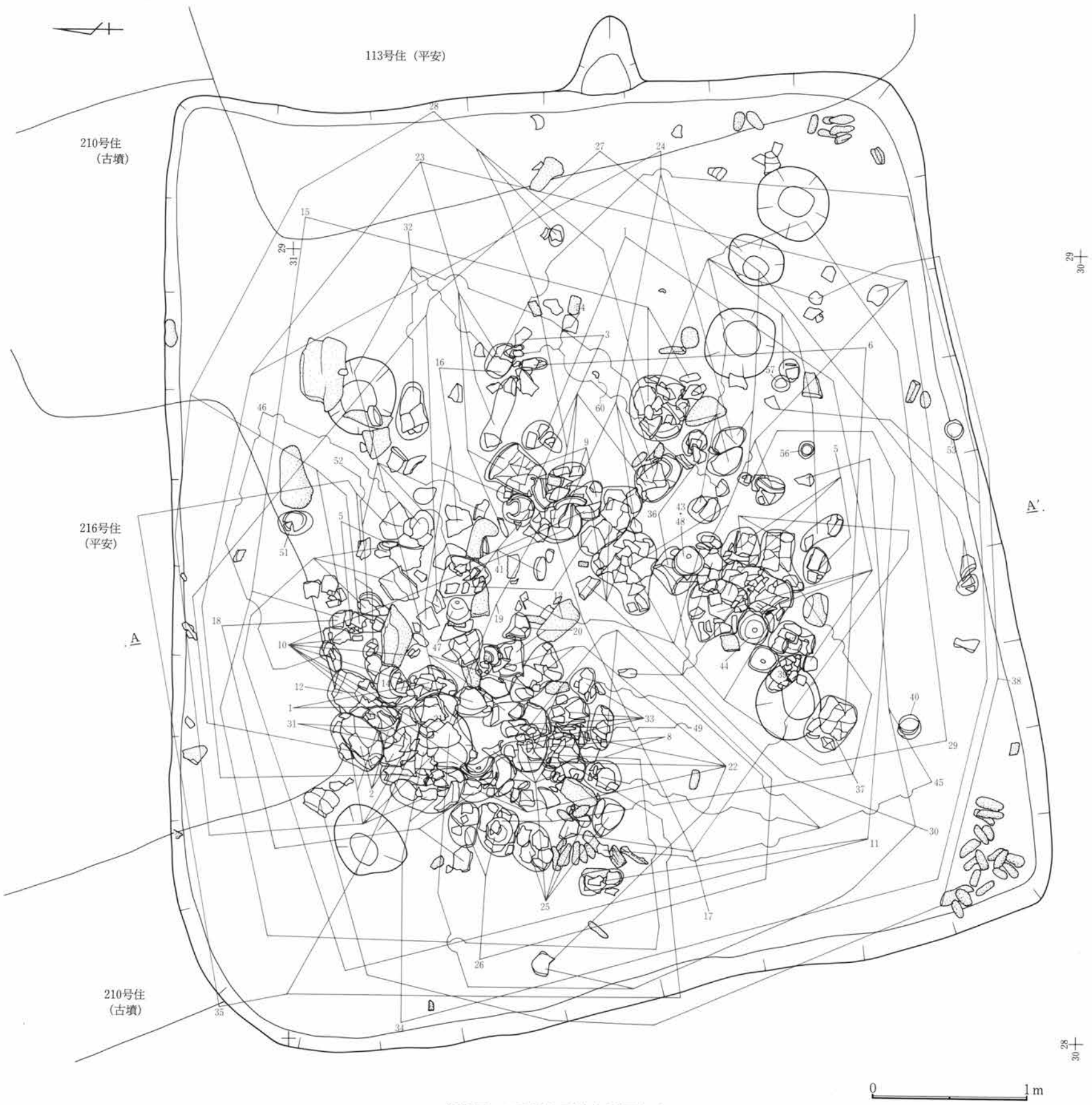
遺物 概要で述べたように大量の土器が出土している。破片を含めると1767点の出土である。

(竈)

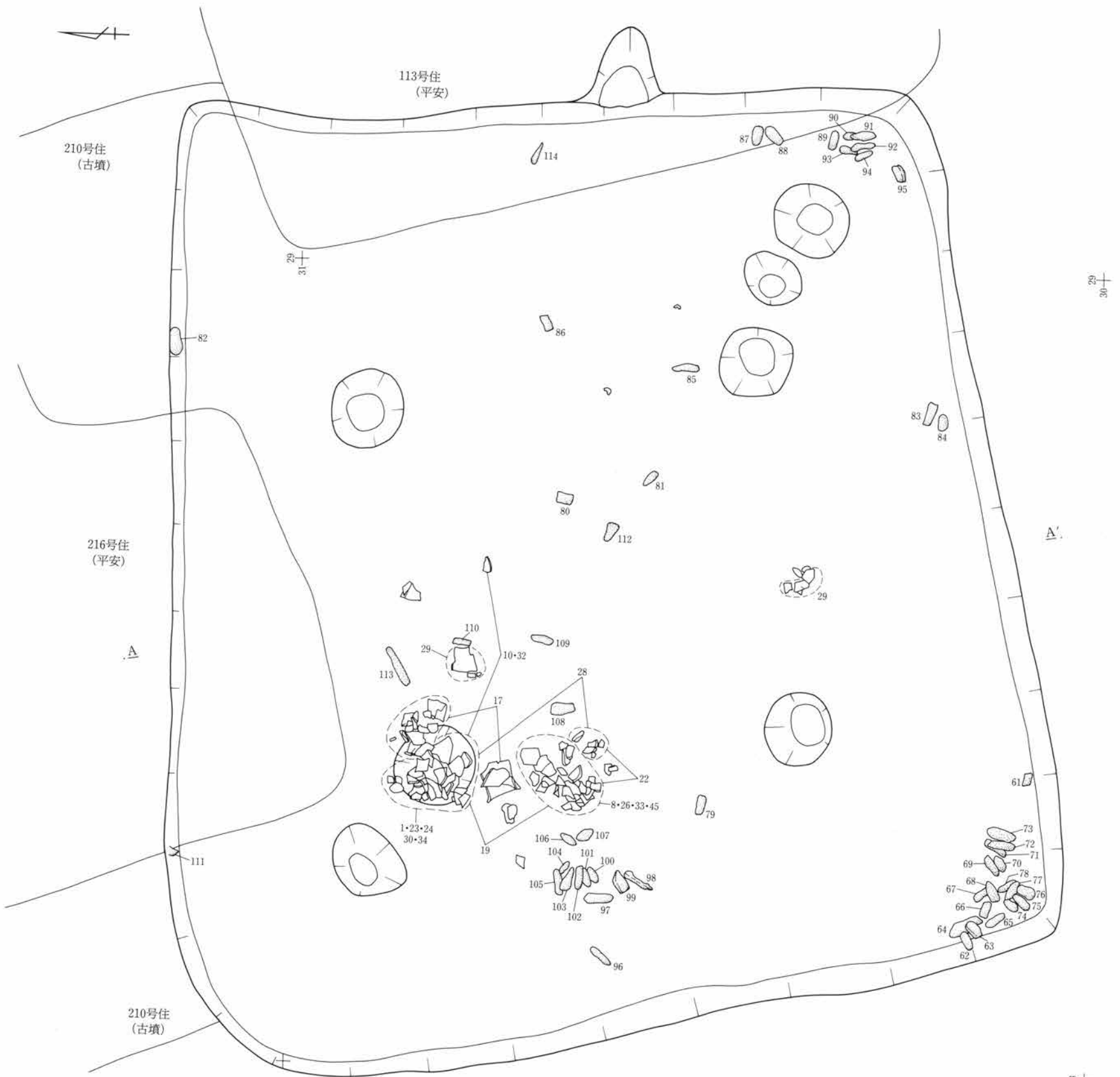
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置するものと思われるが、床面上には残っていないかった。

構造 床面上に位置する燃烧部と袖部は残っていないかった。取り外されていた可能性が高い。壁面を掘り込んで造られていた煙道部からの焼土粒の出土は少なかった。

規模 煙道方向と両袖方向とも残りが悪く不明である。



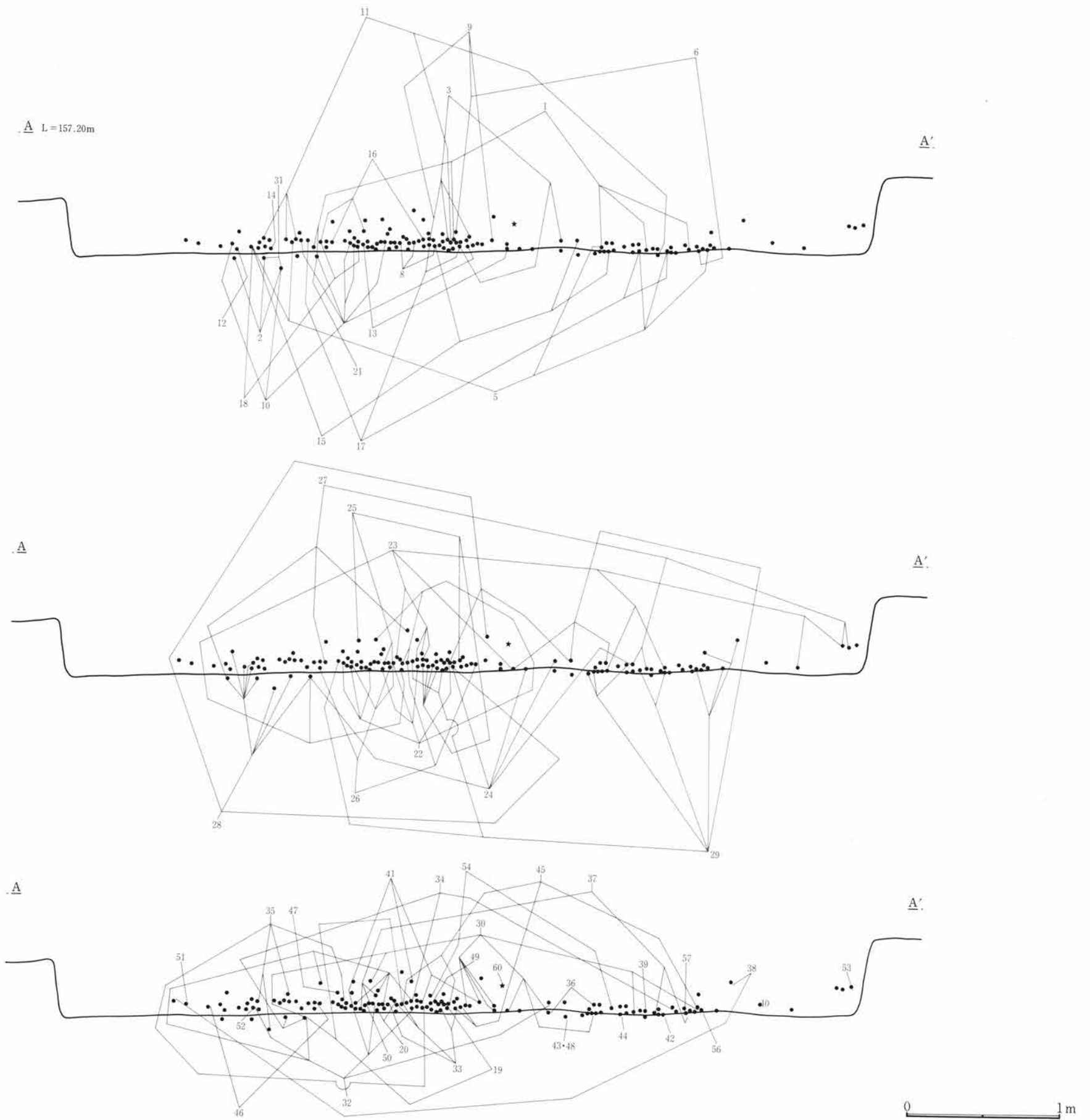
第47図 108号住居跡実測図(3)



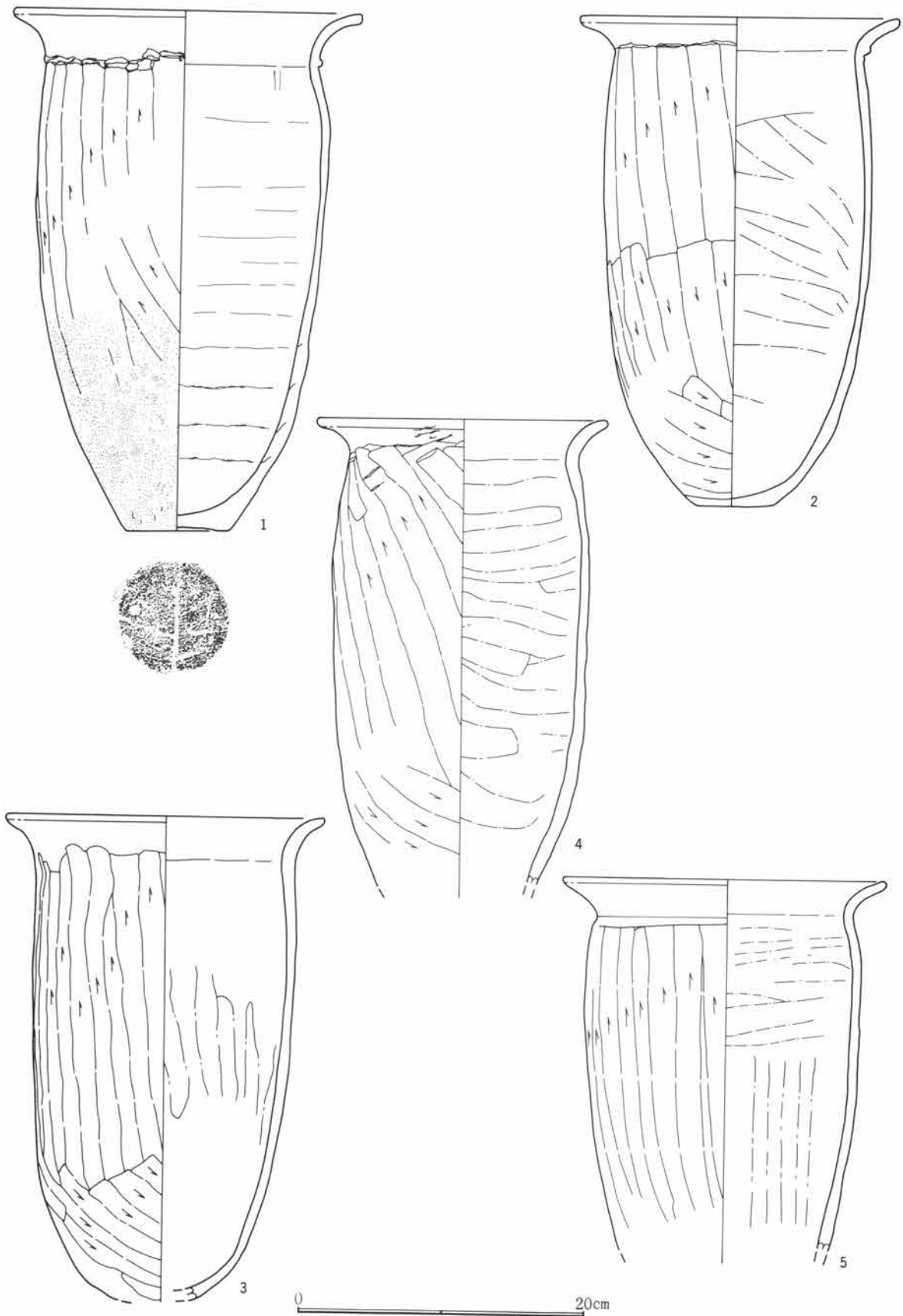
第48图 108号住居跡实测图(4)

0 1m

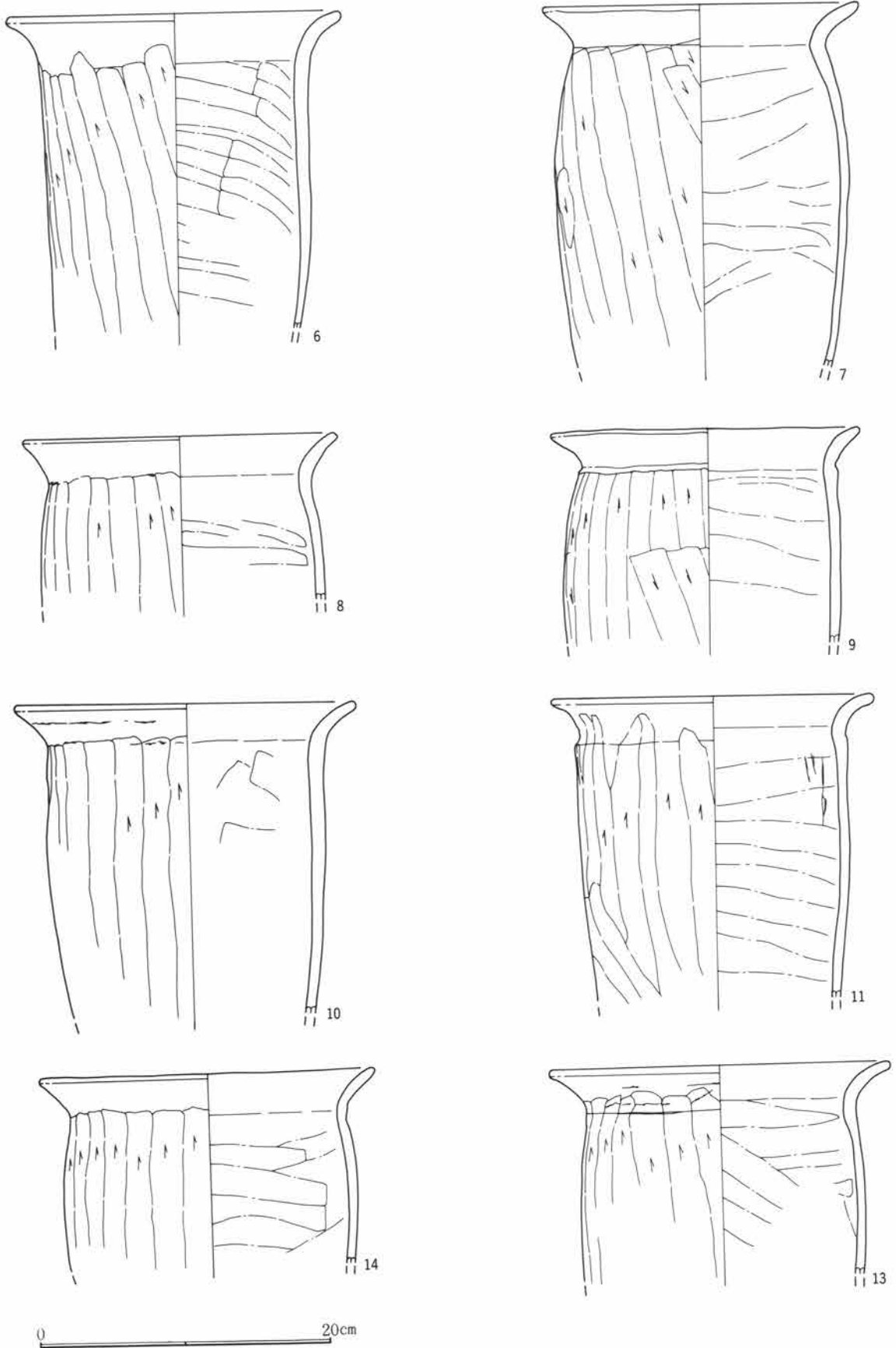
28
30



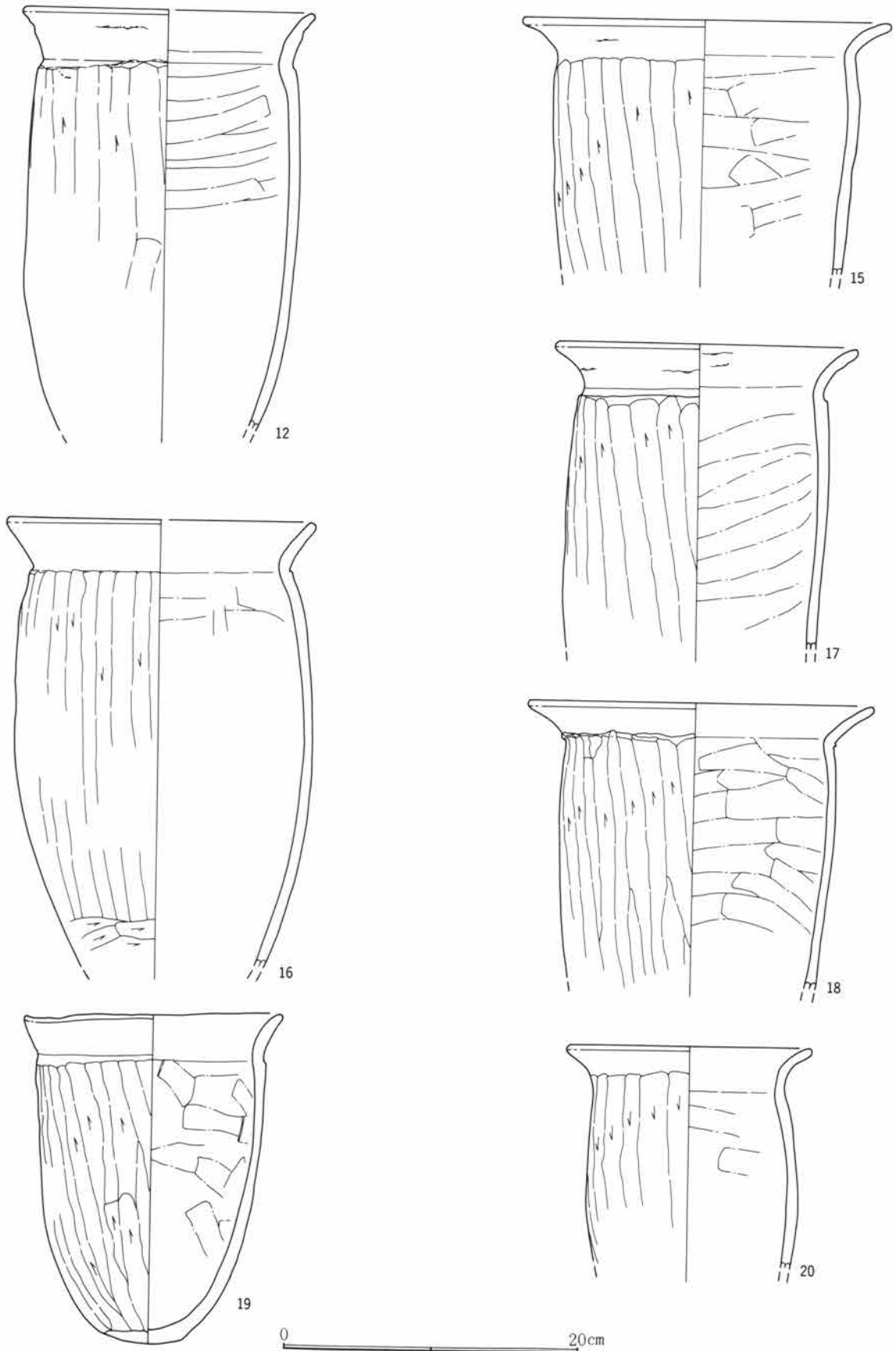
第49图 108号住居跡実测图(5)



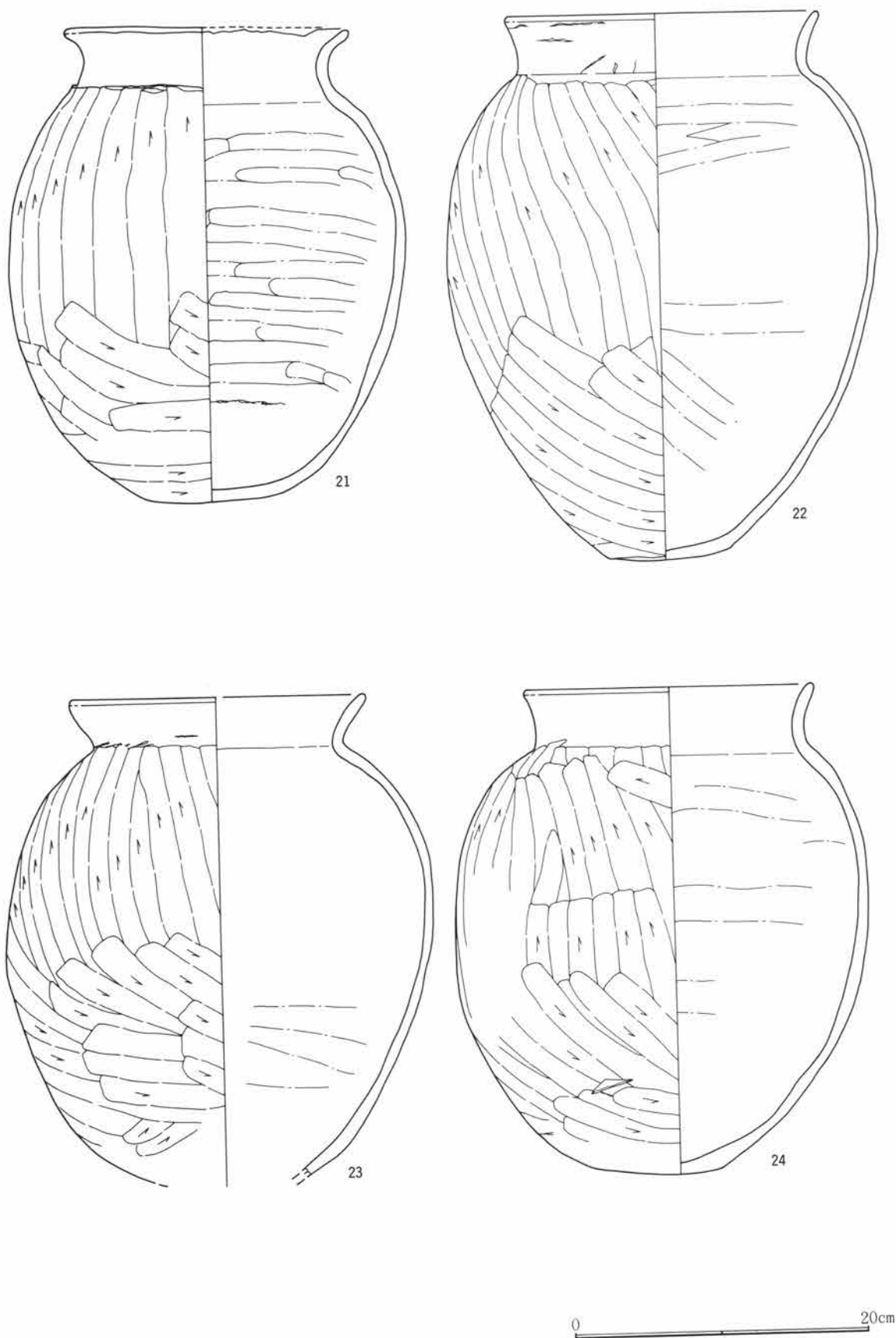
第50図 108号住居跡出土遺物実測図(1)



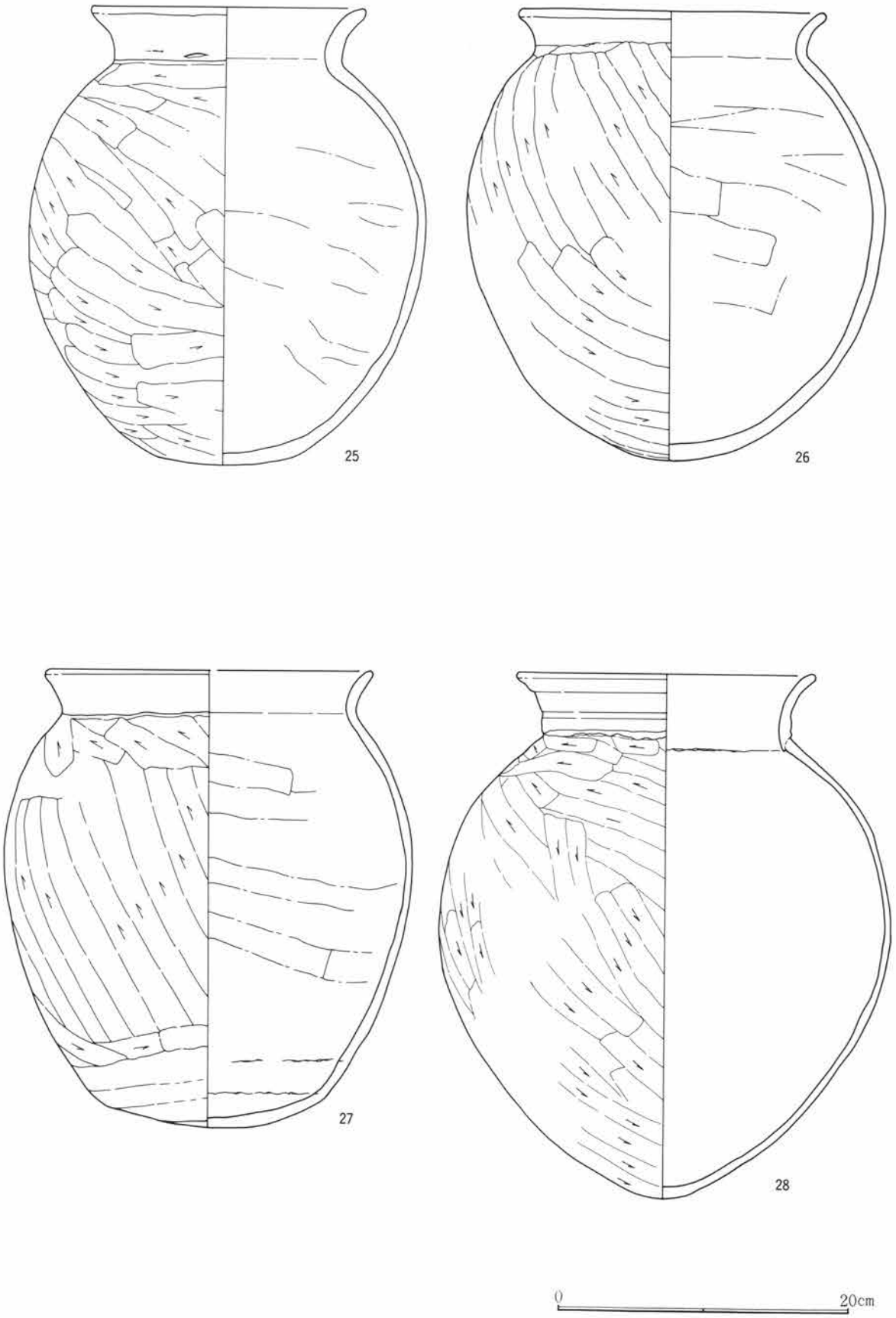
第51図 108号住居跡出土遺物実測図(2)



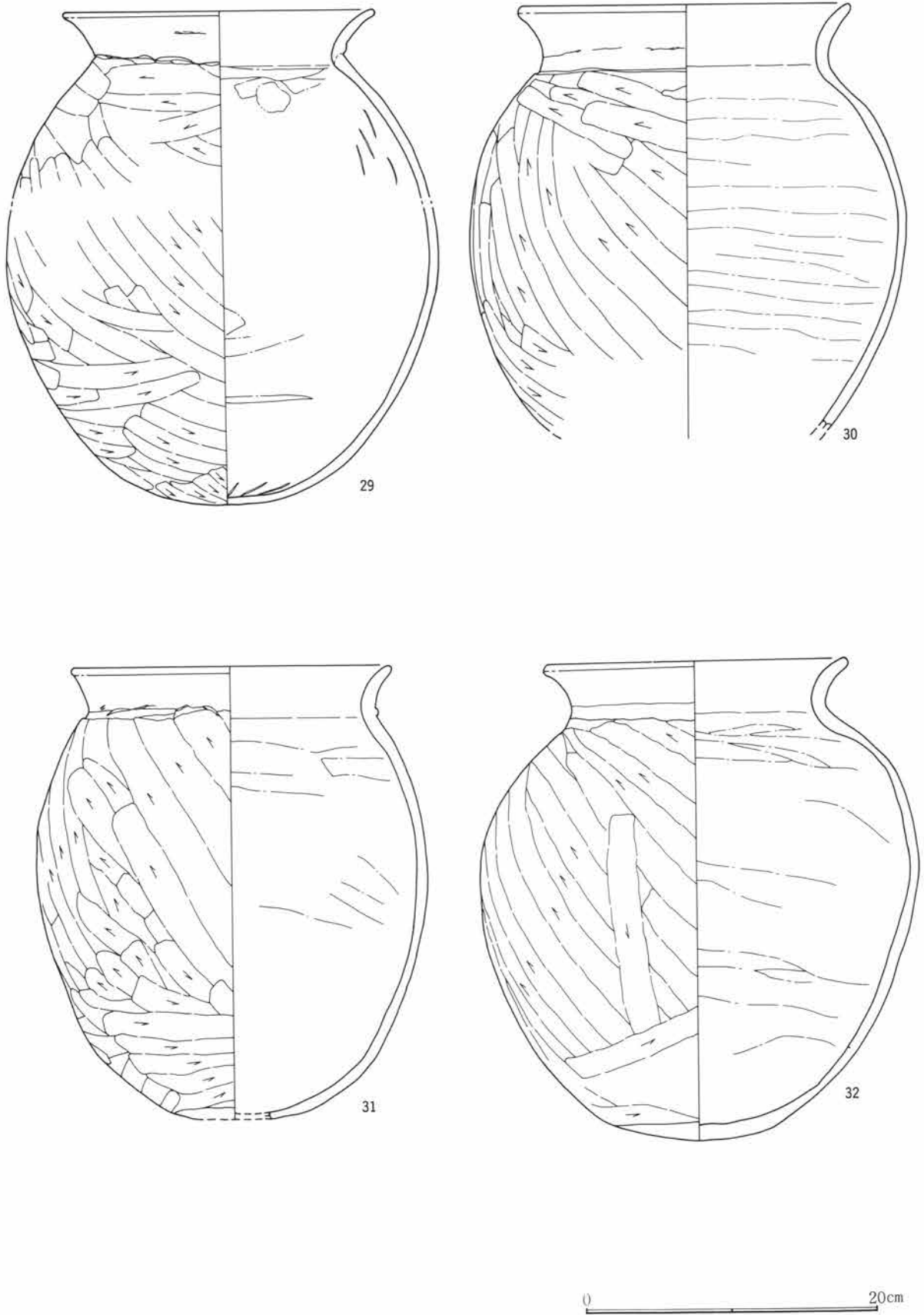
第52図 108号住居跡出土遺物実測図(3)



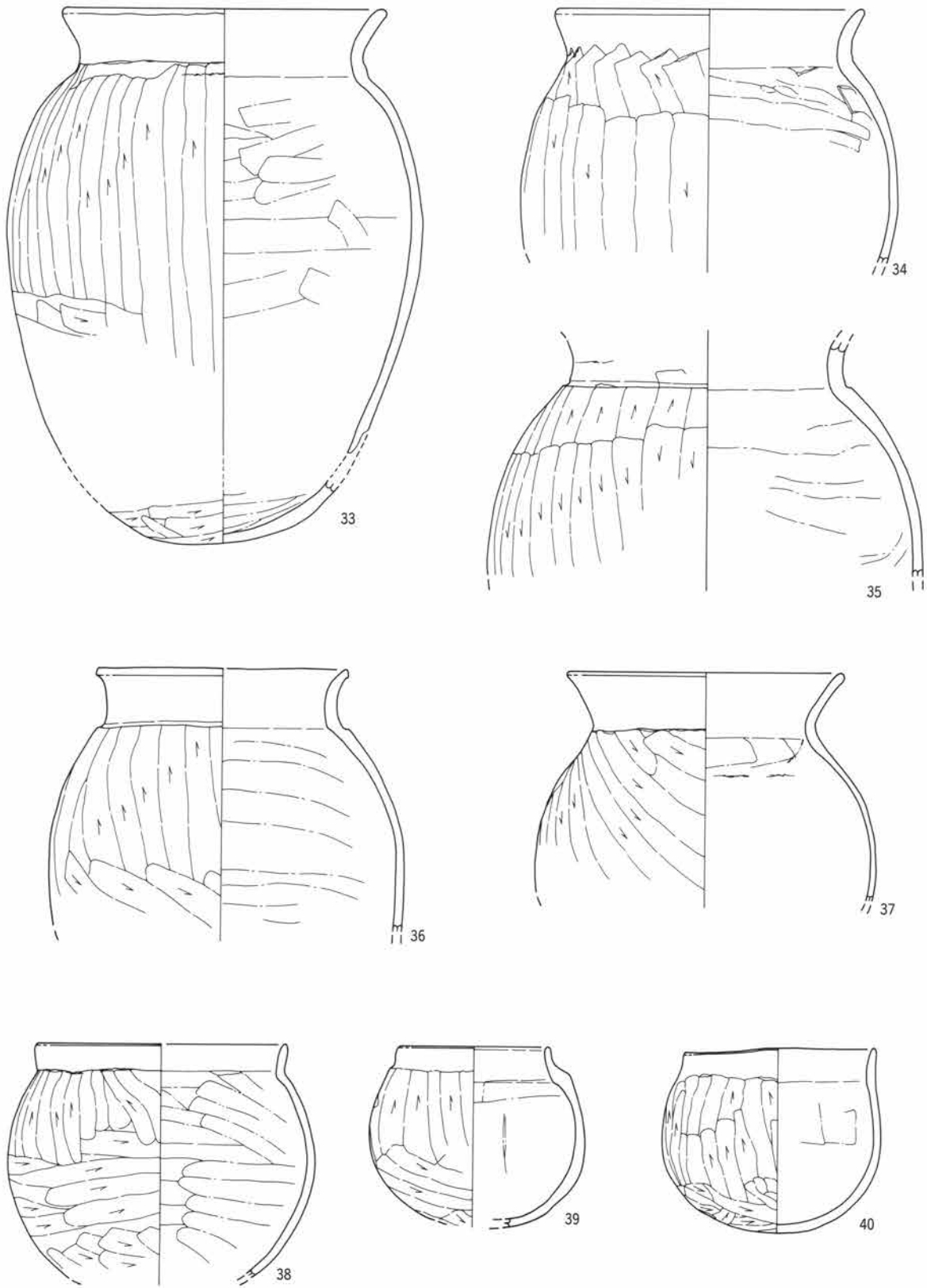
第53図 108号住居跡出土遺物実測図(4)



第54図 108号住居跡出土遺物実測図(5)

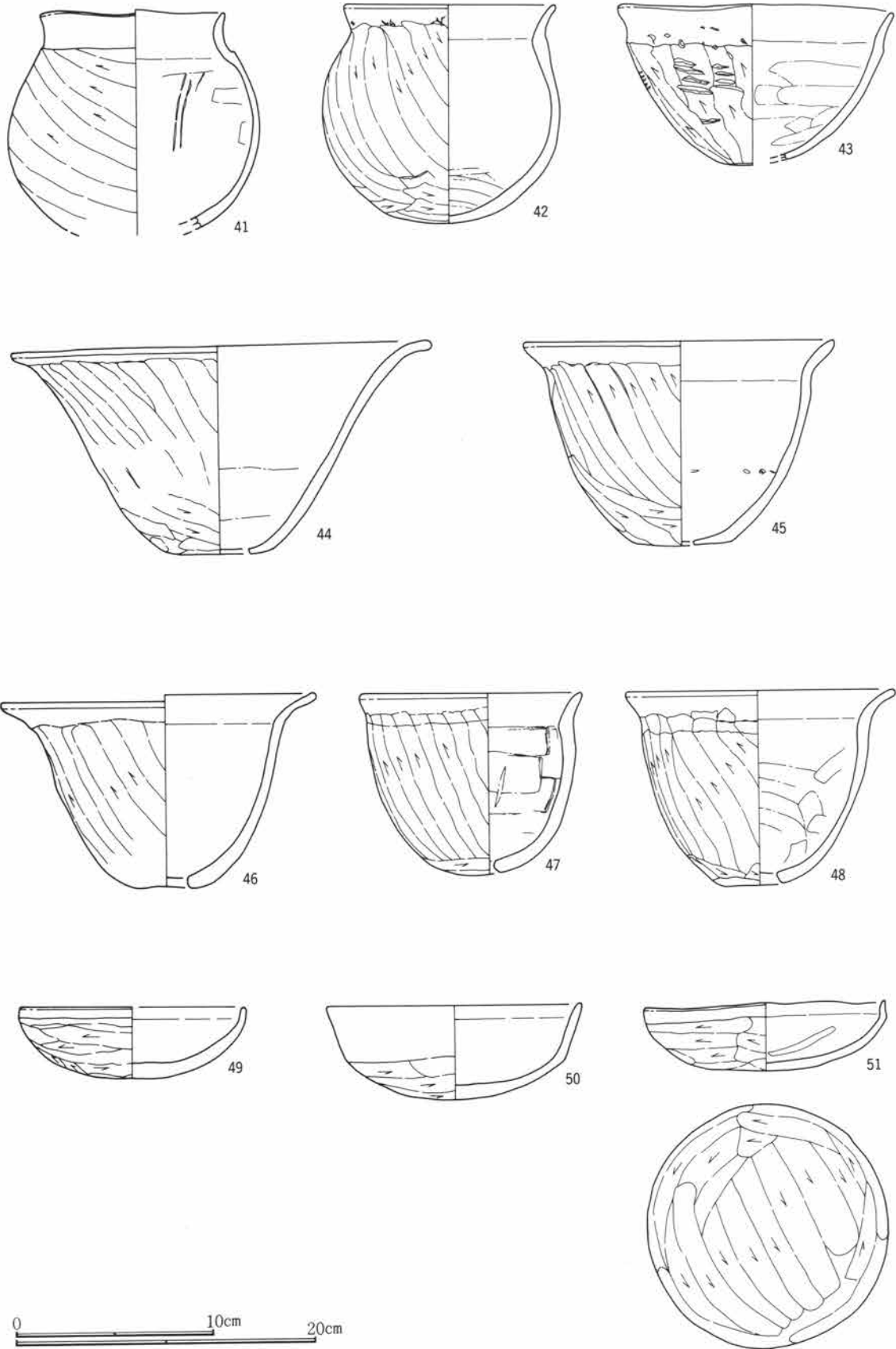


第55図 108号住居跡出土遺物実測図(6)

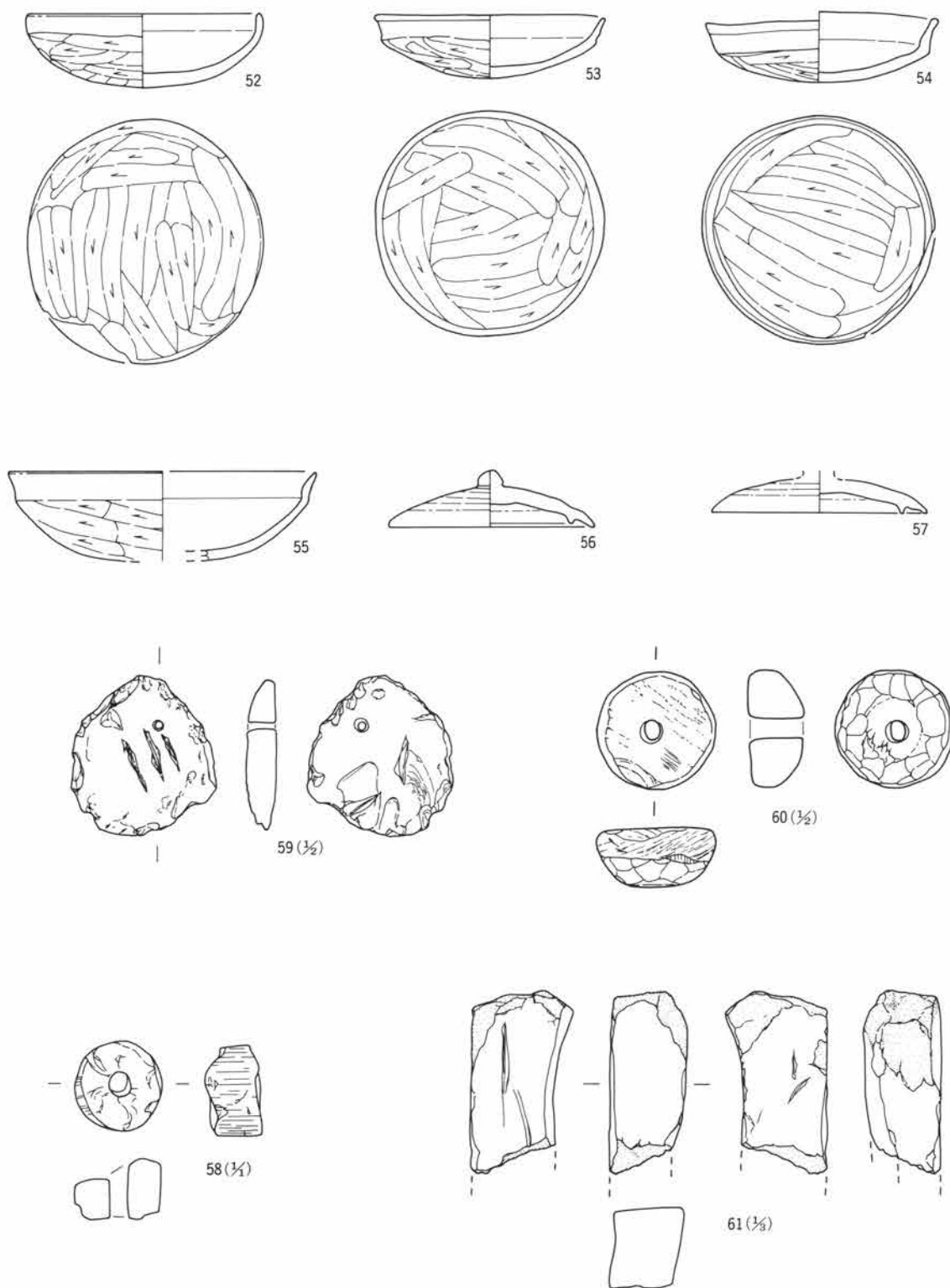


0 20cm

第56図 108号住居跡出土遺物実測図(7)



第57図 108号住居跡出土遺物実測図(8)



第58図 108号住居跡出土遺物実測図(9)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

108号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
50-1 70	土師器 甕	床面+8 口縁・底部 完形胴部 $\frac{1}{4}$	口 24.2 高 35.7 底 7.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面一部黒色	底面木葉痕。胴部ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。 胴中央部以下に多くの粘土の付着あり。
50-2 70	土師器 甕	床面直上 胴下半~底部 $\frac{1}{2}$ 他完形	口 22.0 高 33.6 底 5.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面一部黒色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。頸部にヘラの削痕が多く残る。内面ナデにより器表面密。
50-3 70	土師器 甕	床面直上 口縁~底部 $\frac{1}{2}$ 他破片	口 22.0 高 33.2 底 (5.5)	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は多くなく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部まで薄く削り、段は持たない。
50-4 71	土師器 甕	覆土 口縁~胴上 部完下部 $\frac{1}{2}$	口 20.0 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く、8~10mmの小石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胴部外面に大小の砂粒が多く目立つ。
50-5 71	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.4 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面~胴上部橙色・以下暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が移動するが、器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密。
51-6 71	土師器 甕	床面+3 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 22.8 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色・胴外面口縁部下黒褐色	胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が移動するが器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
51-7 71	土師器 甕	覆土 口縁部完形 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 21.6 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面一部黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胴部はヘラ削りにより器内が薄い。
51-8 72	土師器 甕	覆土 口縁部~胴 上半 $\frac{1}{2}$ 残存	口 21.4 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部強いヘラ削りで器内を少し削り落としている。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
51-9 71	土師器 甕	覆土 口縁部~胴 上半 $\frac{1}{2}$ 残存	口 21.0 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く、4~6mmの砂粒少量含む。②酸化焰、硬質 ③内外面暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
51-10 71	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 23.4 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 器表面に多くの砂粒が目立つ。内面ナデ。 頸部付近の器内が最も厚い。
51-11 72	土師器 甕	床面直上 口縁ほぼ完 形胴上部 $\frac{1}{2}$	口 22.1 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く、4~5mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒は目立つが移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胴部の器内は薄く削られている。
52-12	土師器 甕	床面直上 口縁部~胴 上半 $\frac{1}{2}$ 残存	口(20.0) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。 内面ナデにより器表面密。
51-13 72	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 23.2 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の多くは黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにより器表面密。
51-14 72	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 23.0 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
52-15 72	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 25.1 高 — 底 —	①粗 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部外面黒褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面がやや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
52-16 72	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(21.0) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒褐色	胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒は目立つが移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
52-17 72	土師器 甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 20.4 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③内面にぶい橙色・外面黒褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
52-18 72	土師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 23.4 高 — 底 —	①やや密、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面一部黒色	胴部外面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。
52-19 75	土師器 甕	覆土 口縁~胴部 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 17.6 高 23.4 底 5.8	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴下半黒褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。一部器表面剝離。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
52-20 75	土 師 器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 16.6 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが多く目立つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
53-21 73	土 師 器 壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 19.5 高 32.5 底 9.5	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面~胴上部橙色・胴下半黒褐色	底部~胴上部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 26の甕に近い胎土である。
53-22 73	土 師 器 壺	床面直上 口縁ほぼ完 胴~底部 $\frac{1}{2}$	口 21.6 高 37.2 底 8.5	①やや粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。 器肉が薄く歪みの少ない丸胴の甕である。
53-23 73	土 師 器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部欠	口(20.4) 高 — 底 —	①やや粗、2mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底面の器肉が薄いため、欠損したものと思われる。
53-24 74	土 師 器 壺	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 20.0 高 33.0 底 9.6	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴下半の一部黒色	底部~胴上部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
54-25 74	土 師 器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴~底部 $\frac{1}{2}$	口 19.2 高 31.6 底 10.0	①やや粗、2mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・胴部外面一部黒褐色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。 胴部の器肉は薄く削られている。
54-26 74	土 師 器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴~底部 $\frac{1}{2}$	口 21.4 高 31.0 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③内面~胴上部橙色・下部黒褐色	底部~胴上部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 28の甕に比べて器肉が厚く、大きな砂粒を含む。
54-27 74	土 師 器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部完	口(22.8) 高 31.6 底 9.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面にぶい橙色・外面黒褐色	底部~胴部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにより器表面密。 ヘラ削りにより器肉は薄く仕上げられている。
54-28 75	土 師 器 壺	床面直上 口~胴上部 $\frac{1}{2}$ 下部 $\frac{1}{2}$	口 20.8 高 36.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色・胴下半黒褐色	底部~胴上部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が全面粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部~胴部の器肉が薄く削られている。
55-29 76	土 師 器 壺	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 21.6 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面全体をていねいに繰返しヘラ削り。小さな砂粒が移動し粗い。 底部も薄く、ヘラ削りにより丸く仕上げられている。
55-30 75	土 師 器 壺	床面+20 口縁完形 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 23.2 高 — 底 —	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
55-31 73	土 師 器 壺	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.0 高 31.0 底 (8.8)	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴下半黒褐色	底部~胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 頸部にヘラの打った痕跡あり。 ヘラ削りにより器肉が薄く仕上げられている。
55-32 76	土 師 器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴~底部 $\frac{1}{2}$	口 21.0 高 33.0 底 11.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面一部黒色	底部ヘラ削り後ナデ。胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が少し移動しているが粗さは少ない。内面ナデにより器表面密。 胴部の器肉はヘラにより薄く削られている。
56-33 76	土 師 器 壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部完	口 22.7 高 — 底 丸底	①やや粗、4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴下半黒褐色	底部~胴部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部は胴部と接合しないため図上復元。
56-34 75	土 師 器 壺	床面+11 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口 20.8 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
56-35 76	土 師 器 壺	床面直上 頸~胴上部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
56-36 75	土 師 器 壺	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(16.9) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
56-37 75	土 師 器 壺	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 器肉を削り薄く仕上げられている。
56-38 76	土 師 器 壺	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(16.8) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	胴外面横方向ヘラ削り。肩部・口縁部に向かうヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにより器表面密。
56-39 77	土 師 器 小型壺	床面+11 $\frac{1}{2}$ 残存	口 10.3 高 — 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部~胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
56-40 77	土 師 器 小 型 壺	床面+6 完形	口 12.8 高 12.3 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部～胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部は少し歪んでいる。
57-41 76	土 師 器 小 型 壺	床面直上 口縁～胴上 完形下部 $\frac{1}{2}$	口 12.4 高 ー 底 ー	①やや粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。砂粒の移動は少なく器表面の粗れも少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全く認められず口縁部が歪んでいる。
57-42 77	土 師 器 小 型 壺	床面+5 ほぼ完形	口 14.4 高 14.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面～胴部外面へラ削り。小さな砂粒が移動し器表面がやや粗い。内側底面へラナデ。上部ナデ。胴部のへラ削りは強く、へらの単位は明瞭である。
57-43 77	土 師 器 鉢	覆土 底部中央欠 損	口 18.4 高 10.6 底 5.4	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰赤色	底面～胴部外面へラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部はへラ削りにより薄くなり、使用段階で欠損したものと思われる。
57-44 77	土 師 器 甗	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他 $\frac{1}{2}$ 残存	口 28.0 高 14.0 底 6.4	①やや粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部～胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。部分的に器表面が剥離している。内面ナデにより器表面密。底部中央に径38mmの小穴あり。
57-45 77	土 師 器 甗	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 20.8 高 13.6 底 6.6	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤色	底面へラ削り。胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。へらの単位は明瞭である。胴部内面ナデにより器表面密。底部中央に径23mmの小穴あり。
57-46 77	土 師 器 甗	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 21.1 高 12.9 底 5.4	①粗、1～3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面へラナデ。大量の砂粒が浮き出ているような状態で目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部中央に径23mmの小穴あり。
57-47 77	土 師 器 甗	床面直上 完形	口 14.9 高 12.1 底 丸底	①粗、1～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部中央に径7mmの小穴あり。
57-48 77	土 師 器 甗	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他完形	口 18.0 高 13.0 底 4.6	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部中央に径21mmの小穴あり。
57-49 77	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.4) 高 3.6 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いへラ削り。幅の狭い口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
57-50 77	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.8 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内面の一部黒褐色	底面へラ削り。小さな砂粒が大量に移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土中にブロック状の粘土を含む。
57-51 77	土 師 器 坏	床面+5 完形	口 12.2 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面黒色	底部へラ削り。へらの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土がやや砂質である。底部外面吸炭により黒色を呈する。
58-52 77	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.0 高 3.5 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へラ削り。へらの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
58-53 77	土 師 器 坏	床面+17 完形	口 11.0 高 3.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。へらの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑は全く認められない。
58-54 77	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 10.9 高 3.2 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底面の一部黒褐色	底面へラ削り。口縁部中央やや上位に1条の沈線あり。内面ナデにより器表面密。少し歪んでいる。
58-55 77	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.6) 高 ー 底 ー	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。器表面やや粗。口縁部～内側底面ナデにより器表面密。胎土がやや粉状を呈する。
58-56 77	須 恵 器 蓋	覆土 完形	摘 1.2 高 2.6 口 9.8	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部へラ削り。天井部中央に乳首形の摘がつく。カエリは口縁部より突出していない。
58-57 77	須 恵 器 蓋	覆土 一部欠損	摘 ー 高 ー 口 10.2	①密、1mm前後の砂粒をわずかに含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部へ右回転へラ削り。カエリは高く鋭利に作られており、口縁部とはほぼ同位置。乳首状の摘は欠損している。
58-58 108	石 製 品 白 玉	不明 完形	径 1.4 孔径 0.3 厚 0.9 重 2.4 ③灰白色		滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後わずかに調整している。
58-59 109	石 製 品 飾 石	覆土 完形	長径 5.0 短径 4.1 厚 0.9 重 33.9 ③灰白色		滑石片岩。表・裏面とも中央部にノミの打痕。側面わずかに磨き、上部に1個の穿孔あり。
58-60 109	石 製 品 紡 錘 車	床面+17 完形	径 3.7/1.7 孔径 0.7 厚 1.7 重 35.2		滑石片岩。側面上部荒砥削り。下部は刃物を用いた削り。上下面は磨かれ光沢を持つ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm)		①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴・備考
			長	幅	厚	重	重	
58-61 110	石器 砥石	床面+9	長 8.5 厚 3.7	幅 4.8	重 190			流紋岩。四面を砥石として使用している。中央部の磨耗は少ない。
62 112	こも編み石	床面+8	長 13.8 厚 3.0	幅 5.6	重 420			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈し、他の側面は小さな凹凸部がある。
63 112	こも編み石	床面+7	長 13.3 厚 4.5	幅 5.5	重 580			絹雲母石墨片岩。肉厚の石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
64 112	こも編み石	床面+4	長 24.2 厚 4.6	幅 7.9	重 1,520			緑簾緑泥片岩。断面は三角形を呈し細長い石である。側面中央部に凹凸部が認められる。
65 112	こも編み石	床面+8	長 13.8 厚 2.5	幅 5.2	重 300			絹雲母石墨片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈するが、他の側面に凹凸部が認められる。
66 112	こも編み石	床面+4	長 14.3 厚 3.1	幅 7.3	重 470			絹雲母石墨緑泥片岩。両側面中央部に複数のわずかな凹状部を持つ。
67 112	こも編み石	床面+4	長 11.1 厚 2.3	幅 5.1	重 240			絹雲母石墨片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。
68 112	こも編み石	床面+4	長 15.2 厚 3.5	幅 6.5	重 525			緑簾緑泥片岩。表面の一部欠損。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
69 112	こも編み石	床面+4	長 15.5 厚 3.1	幅 4.7	重 346			緑簾緑泥片岩。片側の側面が凹状を呈している。
70 112	こも編み石	床面+5	長 12.7 厚 3.0	幅 5.5	重 310			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に一部打ち欠かれた凹状部がある。
71 112	こも編み石	床面+4	長 14.3 厚 2.0	幅 6.5	重 330			緑簾緑泥片岩。やや偏平な石である。両側面中央部に凹状部が認められる。
72 112	こも編み石	床面+5	長 16.3 厚 2.2	幅 5.0	重 345			緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかな凹状部を呈する。
73 112	こも編み石	床面+4	長 14.7 厚 2.4	幅 7.5	重 430			点紋絹雲母片岩。やや偏平な石である。両側面がわずかに凹状を呈する。
74 112	こも編み石	床面+6	長 13.9 厚 2.8	幅 6.7	重 545			絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状は認められない。
75 112	こも編み石	床面+7	長 16.2 厚 2.5	幅 7.9	重 460			絹雲母石墨片岩。片側の側面に打ち欠かれた凹状部が2ヶ所ある。
76 112	こも編み石	床面+7	長 14.2 厚 3.0	幅 7.0	重 475			絹雲母石墨緑泥片岩。片側の側面が一部欠損している。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
77 112	こも編み石	床面+8	長 14.5 厚 2.1	幅 5.3	重 260			絹雲母石墨片岩。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
78 112	こも編み石	床面+5	長 15.2 厚 2.8	幅 5.5	重 455			緑簾緑泥片岩。不定形な石である。側面中央部に凹状部が認められる。
79 112	こも編み石	床面+3	長 12.2 厚 2.2	幅 5.5	重 248			点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に軽く打ち欠いたような凹状部がある。
80 112	こも編み石	床面+8	長 13.1 厚 3.3	幅 7.5	重 645			絹雲母石墨片岩。片側の側面が打ち欠かれて凹状部がある。部分的に赤色を帯びている。
81 112	こも編み石	床面+20	長 13.6 厚 3.4	幅 4.3	重 320			点紋緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
82 112	こも編み石	床面直上	長 14.7 厚 3.5	幅 7.6	重 570			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部にゆるやかな凹状を呈する。
83 112	こも編み石	床面+4	長 14.3 厚 3.4	幅 5.9	重 520			緑簾緑泥片岩。断面は三角形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
84 112	こも編み石	床面+5	長 14.5 厚 2.4	幅 7.0	重 385			点紋緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部にわずかな凹凸部が認められる。
85 112	こも編み石	床面+7	長 15.3 厚 3.0	幅 6.6	重 520			緑簾緑泥片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が数個認められる。
86 112	こも編み石	床面直上	長 14.2 厚 3.8	幅 5.2	重 490			緑簾緑泥片岩。肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
87 112	こも編み石	床面直上	長 13.6 厚 2.7	幅 6.5	重 350			点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな凹凸部を呈する。
88 112	こも編み石	床面直上	長 14.5 厚 2.9	幅 5.3	重 390			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈する。
89 112	こも編み石	床面直上	長 13.0 厚 2.0	幅 4.2	重 235			緑簾緑泥片岩。1つの面が全体に剝離している。両側面にわずかな凹凸部が認められる。
90 112	こも編み石	床面+7	長 12.8 厚 2.9	幅 6.3	重 375			絹雲母石墨片岩。両側面中央部にゆるやかな凹状を呈する。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

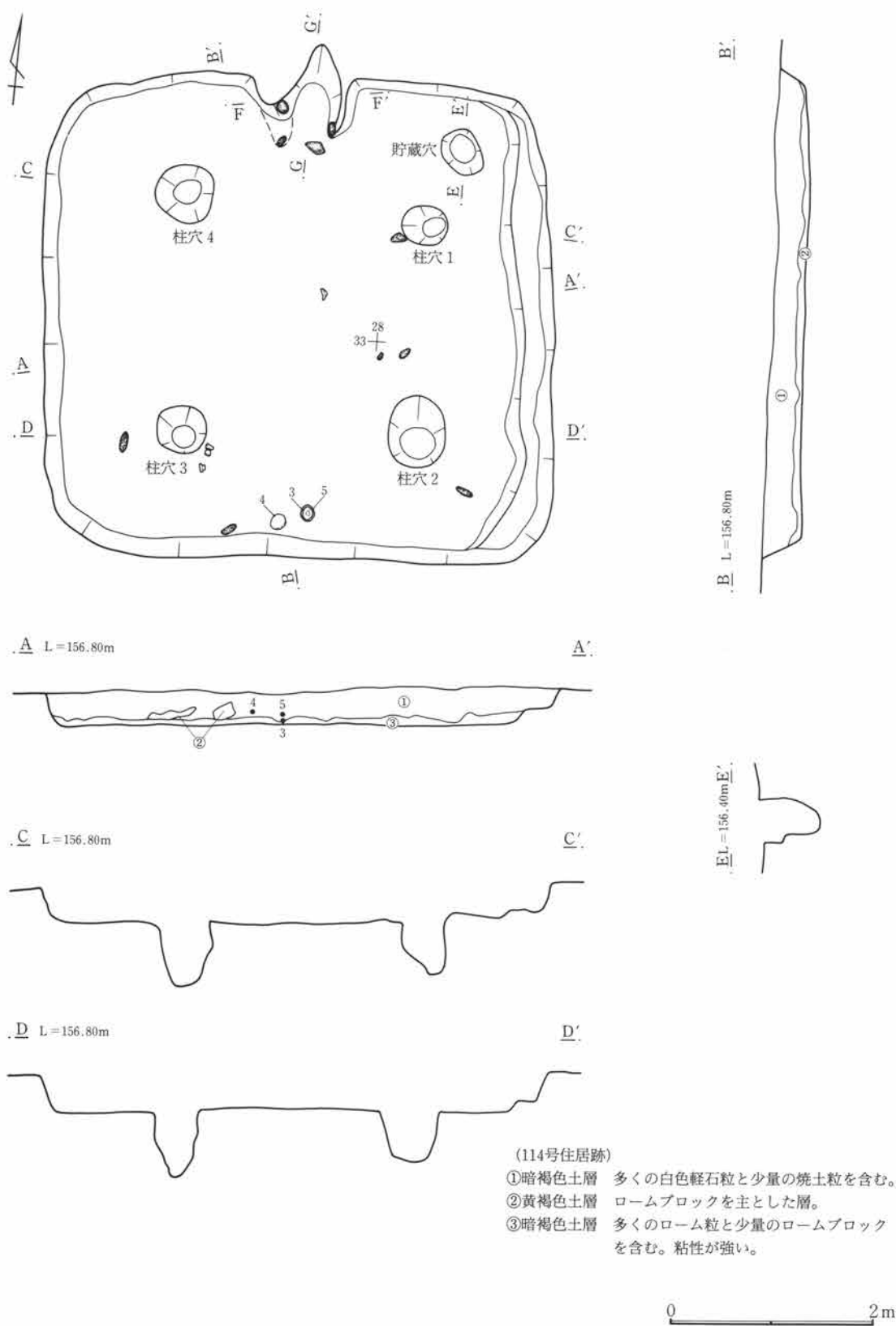
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm)		①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴・備考
			(g)				
91 112	こも編み石	床面+9	長 厚	17.2 4.5	幅 重	7.1 740	緑簾緑泥片岩。中央部が肉厚である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
92 112	こも編み石	床面+7	長 厚	15.7 3.7	幅 重	5.6 475	絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部を呈する。
93 112	こも編み石	床面+6	長 厚	12.6 2.3	幅 重	5.3 210	絹雲母石墨片岩。片側の側面に打ち欠いたような小さな凹凸部が認められる。
94 112	こも編み石	床面+6	長 厚	13.4 3.5	幅 重	6.5 490	点紋絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
95 112	こも編み石	床面+8	長 厚	12.9 2.0	幅 重	6.9 325	点紋絹雲母石墨片岩。扁平な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
96 112	こも編み石	床面直上	長 厚	16.7 3.6	幅 重	4.5 405	点紋緑簾緑泥片岩。中央部が肉厚な石である。両側面中央部に小さな凹凸部が認められる。
97 112	こも編み石	床面直上	長 厚	16.7 3.2	幅 重	6.8 645	緑簾緑泥片岩。断面はやや台形を呈し、側面はゆるやかな凹状部が認められる。
98 112	こも編み石	床面直上	長 厚	18.8 3.3	幅 重	5.6 506	砂岩。1つの面が大きく剝離し不定形な石である。
99 112	こも編み石	床面直上	長 厚	13.2 3.0	幅 重	7.2 445	絹雲母石墨片岩。片側の側面に凹凸部が見られ、他の側面に打ち欠かれた明瞭な凹状部が認められる。
100 112	こも編み石	床面直上	長 厚	14.4 3.7	幅 重	7.3 580	絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈する。
101 112	こも編み石	床面直上	長 厚	14.1 3.6	幅 重	7.0 530	緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈する。
102 112	こも編み石	床面直上	長 厚	14.1 3.5	幅 重	4.2 465	緑簾片岩。片側の側面に明瞭な凹凸部が認められる。
103 112	こも編み石	床面直上	長 厚	15.2 3.2	幅 重	6.0 385	絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない。片側の側面に小さく打ち欠かれた凹状がある。
104 112	こも編み石	床面直上	長 厚	15.7 2.5	幅 重	6.4 410	絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に凹状部が認められる。
105 112	こも編み石	床面直上	長 厚	15.3 3.6	幅 重	4.2 445	点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面にわずかな凹凸部が認められる。
106 112	こも編み石	床面直上	長 厚	13.2 2.9	幅 重	5.0 340	緑簾緑泥片岩。両側面にゆるやかな凹状部が認められる。
107 112	こも編み石	床面+26	長 厚	13.9 3.5	幅 重	4.1 380	緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
108 112	こも編み石	床面+26	長 厚	13.4 3.7	幅 重	6.9 570	絹雲母石墨片岩。両側面中央部がわずかに打ち欠かれ凹状を呈している。
109 112	こも編み石	床面+4	長 厚	12.2 2.9	幅 重	6.1 330	点紋絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
110 112	こも編み石	床面+10	長 厚	14.3 2.7	幅 重	7.0 440	絹雲母石墨片岩。両側面中央部がわずかに打ち欠かれ凹状を呈している。
111 112	こも編み石	床面-7	長 厚	13.5 2.4	幅 重	4.9 210	緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかに打ち欠かれ凹状を呈している。
112 112	こも編み石	床面直上	長 厚	13.6 4.0	幅 重	6.6 640	緑簾緑泥片岩。肉厚な石である。片側の側面に炭素が付着している。
113 112	こも編み石	床面+5	長 厚	21.0 4.6	幅 重	4.8 770	点紋絹雲母緑泥片岩。細長い肉厚な石である。明瞭な凹凸部は認められない。
114 112	こも編み石	堀り方+5	長 厚	14.1 3.2	幅 重	6.1 350	絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。

114号住居跡 (第59~62図、図版10・78)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、33・34—28グリッドに位置する。

概要 住居東側の壁面近くに床面より一段高い面が確認されたが、用途は不明である。竈付近から右袖部分の床面にかけて多くの攪乱が入り、竈の上面が壊されていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。



第59図 114号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西5.03m、南北4.71mである。壁高は残りの良い南壁部分で39cmである。貯蔵穴は径37cm深さ57cmで、柱穴1は径56cm深さ53cm、柱穴2は径63cm深さ50cm、柱穴3は径46cm深さ66cm、柱穴4は径66cm深さ67cmである。

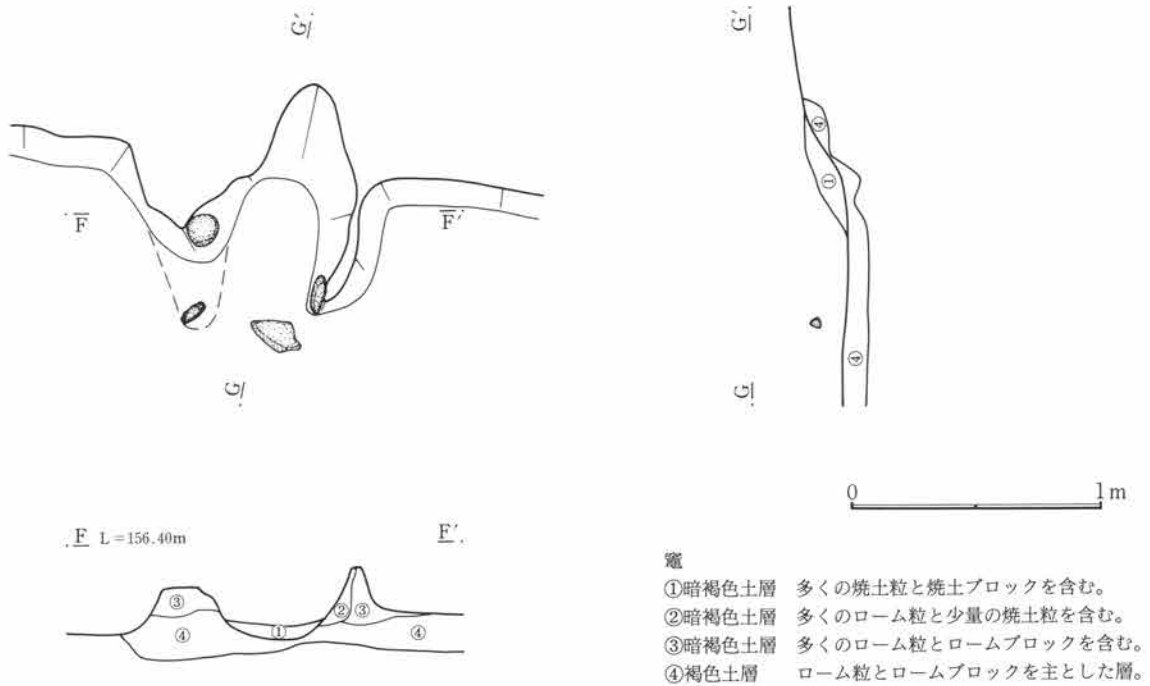
遺物 土師器の坏が出土しているが、破片を含めて出土量は少ない。

(竈)

位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部分は攪乱を受けて残りが悪かった。右袖部は残り袖石も据えられた状態で出土したが、左袖部は残りが悪かった。しかし袖石らしき石が立てた状態で残っており、位置から考えて袖石の可能性が高い。焚口部分の床面上にも火を受けた石が出土した。燃烧部を中心に多くの焼土粒の出土が認められた。

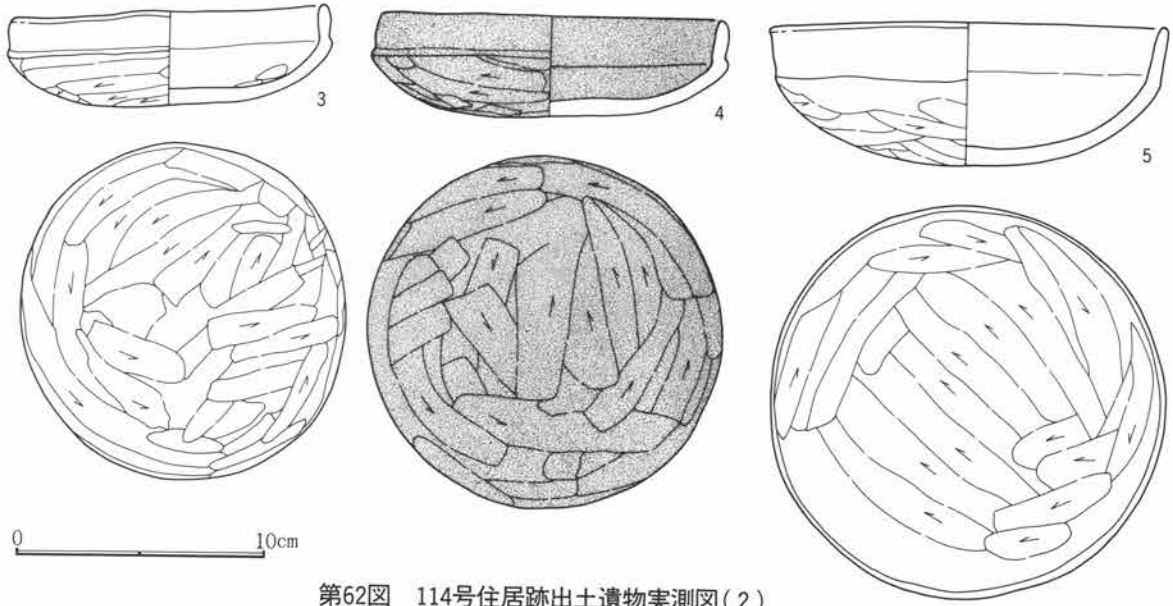
規模 煙道方向91cm、燃烧部幅56cmである。



第60図 114号住居跡竈実測図



第61図 114号住居跡出土遺物実測図(1)



第62図 114号住居跡出土遺物実測図(2)

114号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
61-1	土師器 小型甕	覆土 破片	口(13.5) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面に多くの輪横痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデ。
61-2	土師器 小型甕	覆土 破片	口(12.2) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。頸部~口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
62-3 78	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・底面暗赤褐色	底面へラナデ。ナデの部分がわずかに凹状を呈する。口縁部横ナデ。内側底面に指頭圧痕あり。底面に吸炭による黒色部分あり。
62-4 78	土師器 坏	床面+10 完形	口 13.6 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面にぶい赤褐色・断面橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内面黒漆。底面の一部吸炭による黒色。
62-5 78	土師器 坏	床面+10 完形	口 15.6 高 5.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面密で、へらの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を少量含む。黒斑全くなし。

117号住居跡 (第63~66図、図版10・78・111)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32-26・27グリッドに位置する。

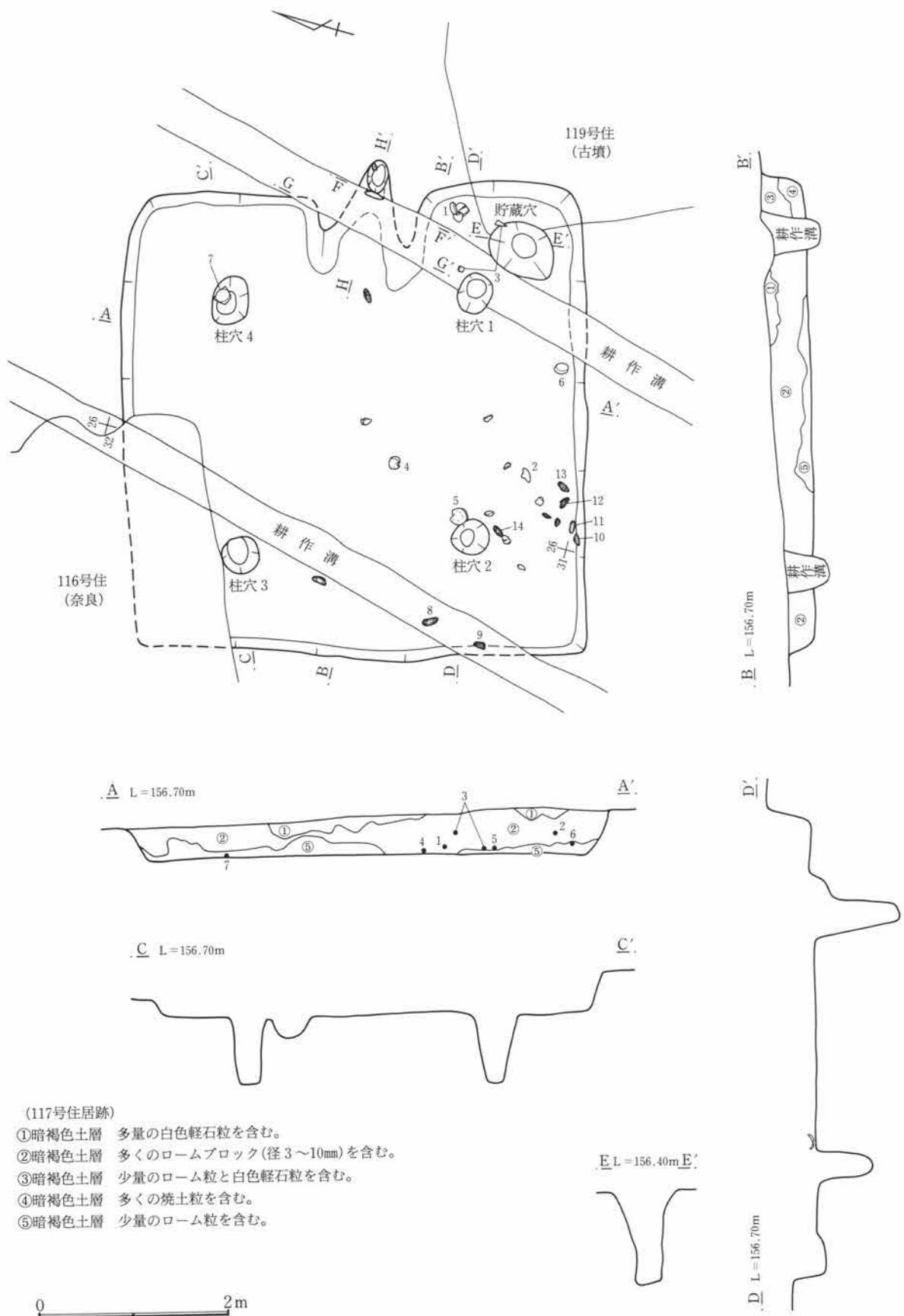
概要 3軒が重複している住居の中の1軒である。住居北西部分を奈良時代の116号住居により床下部分まで掘り込まれていた。また狭い範囲であるため明瞭ではないが、南東コーナー部分で同じ古墳時代の119号住居と重複しており、本住居跡が119号住居を床下部分まで掘り込んでいるものと思われる。新旧関係は119→117→116号住居である。南北方向に走る2本の耕作溝により、壁面や床面及び竈の中央部が掘り抜かれていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西4.72m、南北4.83mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で39cmである。貯蔵穴は径45cm深さ90cmで、柱穴1は径31cm深さ88cm、柱穴2は径40cm深さ56cm、柱穴3は径41cm深さ74cm、柱穴4は径39cm深さ77cmである。

遺物 この時期の住居では貴重な須恵器の坏と坏蓋がほぼセットとして出土している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



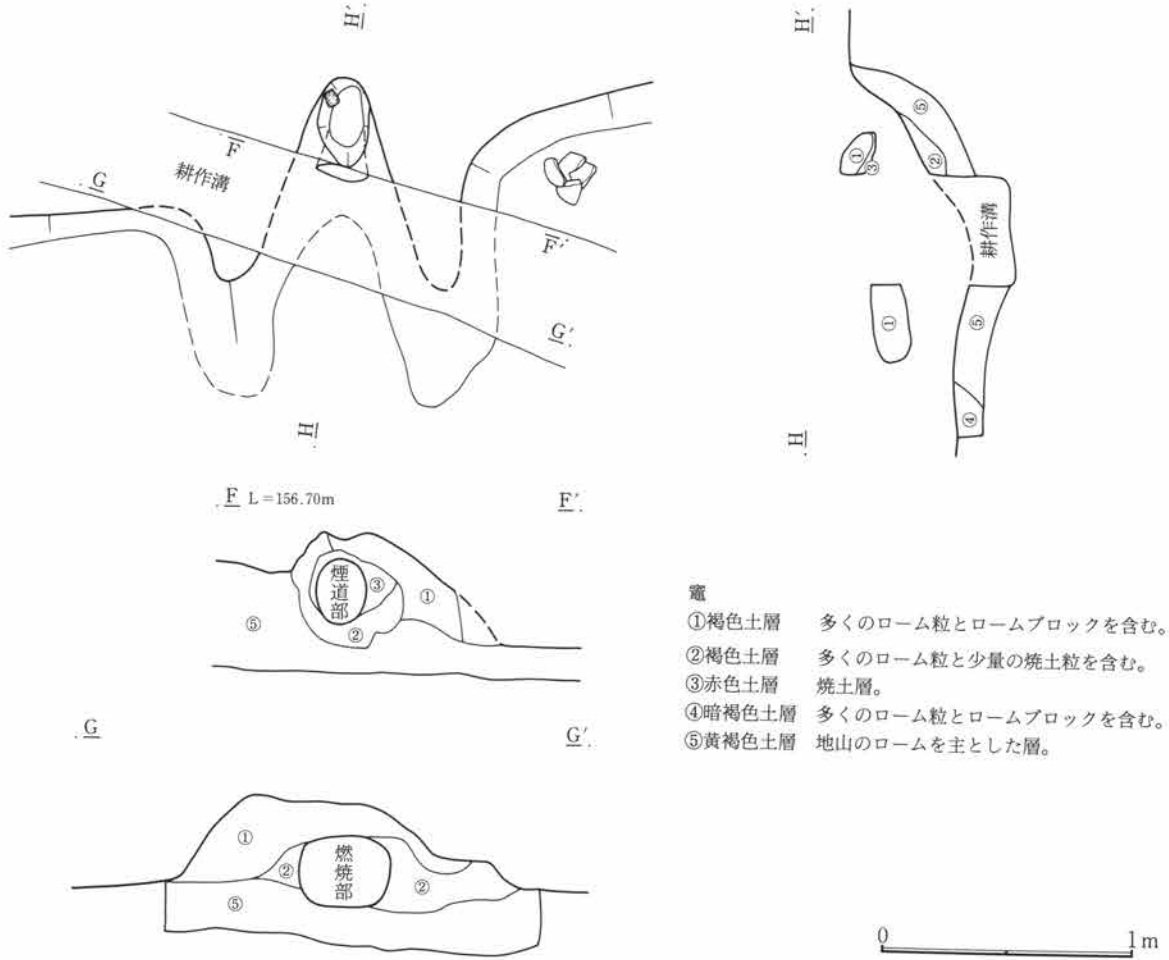
第63図 117号住居跡実測図

(竈)

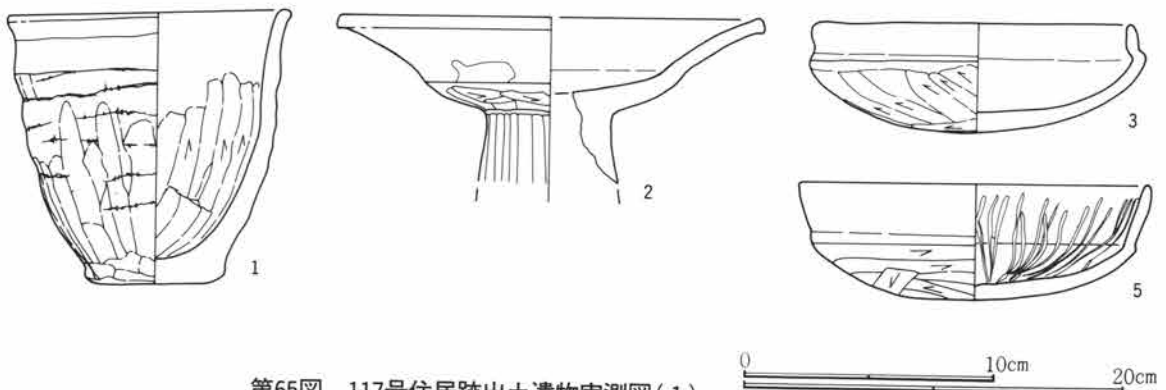
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 竈の中央部である燃焼部が耕作溝により掘り込まれており残っていない。しかしロームを多く用いた袖や天井部の一部は残っていた。断面で煙道部が観察できた数少ない調査例である。石は焚口付近に1個出土したが、ほかに袖石や天井石等が出土していないため、竈を造るときに石は使われなかったものと思われる。

規模 煙道方向125cm、燃焼部幅52cmである。

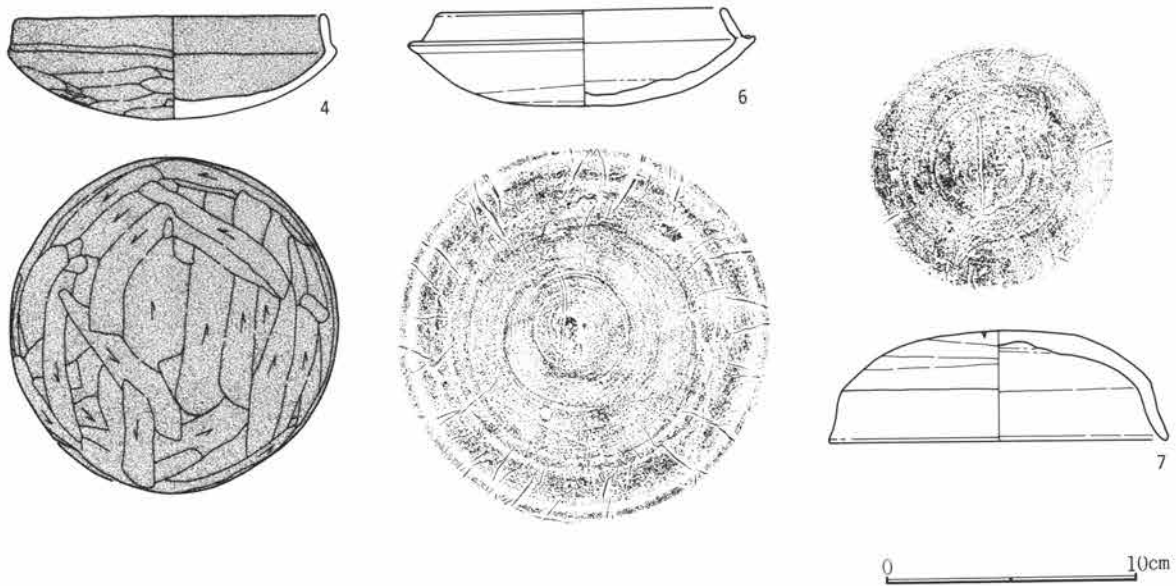


第64図 117号住居跡竈実測図



第65図 117号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



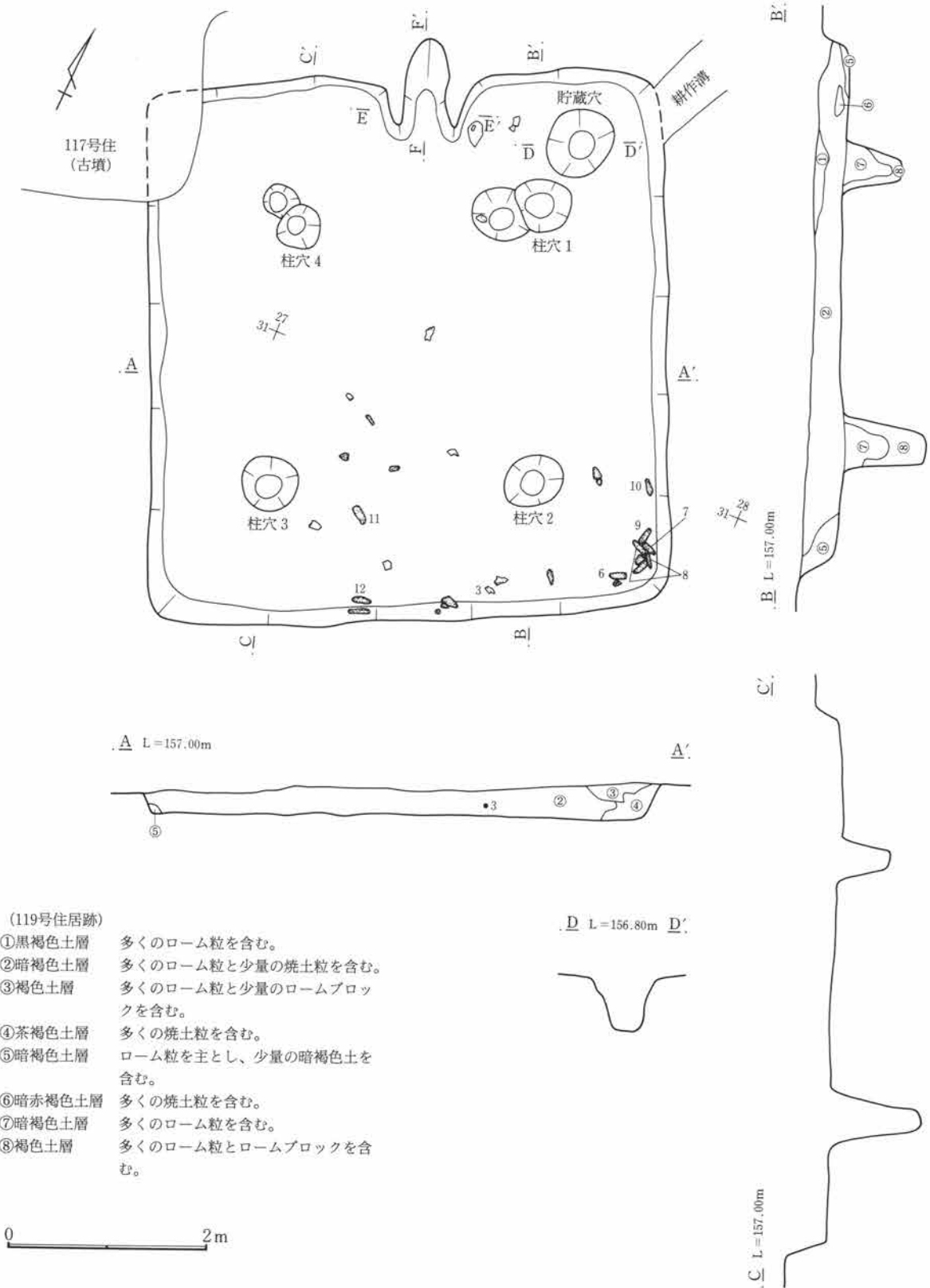
第66図 117号住居跡出土遺物実測図(2)

117号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
65-1 78	土師器 小型甕	床面+2 ほぼ完形	口 15.0 高 14.4 底 7.4	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラナデ。胴部外面ヘラナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ヘラナデ。
65-2	土師器 高坏	床面+25 1/2残存	口(17.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色・一部黒褐色	脚部外面ヘラナデ。坏部底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口唇部ヘラナデにより平らに整形。内面ナデにより器表面密。
65-3 78	土師器 坏	床面+16 床面-1 1/2残存	口 12.4 高 4.3 底 丸底	①密、灰色の粘土をブロック状に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動しヘラの単位比較の明瞭。口縁部外面～内側底面黒漆。外側底面吸炭。
66-4 78	土師器 坏	床面+4 完形	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色・表面の一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面～内面に黒漆と思われる痕跡。底面の一部吸炭。
65-5 78	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 14.0 高 4.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面放射状のヘラ磨き。
66-6 78	須恵器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 11.4 高 3.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	立ち上がりは短くなり、強く内傾する。全体に浅く偏平である。受部は短くやや上向きである。底部3/4でいねいなヘラ削り。
66-7 78	須恵器 蓋	床面直上 完形	口 13.4 高 4.3	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部3/4ヘラ削り。稜はほとんどない。凹線も認められない。口縁端部は丸く仕上げられている。
8 111	こも編み石	床面直上	長 16.3 幅 7.3 厚 4.3 重 895		絹雲母石墨片岩。断面は方形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
9 111	こも編み石	床面直上	長 15.2 幅 6.4 厚 1.9 重 295		絹雲母石墨片岩。やや偏平な石である。片側の側面に打ち欠いた凹凸部が数個認められる。
10 111	こも編み石	床面+24	長 14.9 幅 5.7 厚 4.1 重 510		絹雲母石墨片岩。断面は三角形を呈し、片側の側面中央部にゆるやかな凹状部を持つ。
11 111	こも編み石	床面+17	長 13.8 幅 5.4 厚 4.7 重 500		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
12 111	こも編み石	床面+12	長 12.3 幅 7.3 厚 3.4 重 545		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
13 111	こも編み石	床面+11	長 16.5 幅 4.2 厚 2.2 重 255		点紋絹雲母石墨片岩。下の面全体が剝離している。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
14 111	こも編み石	床面+10	長 21.2 幅 4.7 厚 3.5 重 665		絹雲母石墨片岩。細長い石である。片側の側面中央部に小さな凹状部を持つ。

119号住居跡 (第67~70図、図版11・110・111)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31・32-28グリッドに位置する。



第67図 119号住居跡実測図

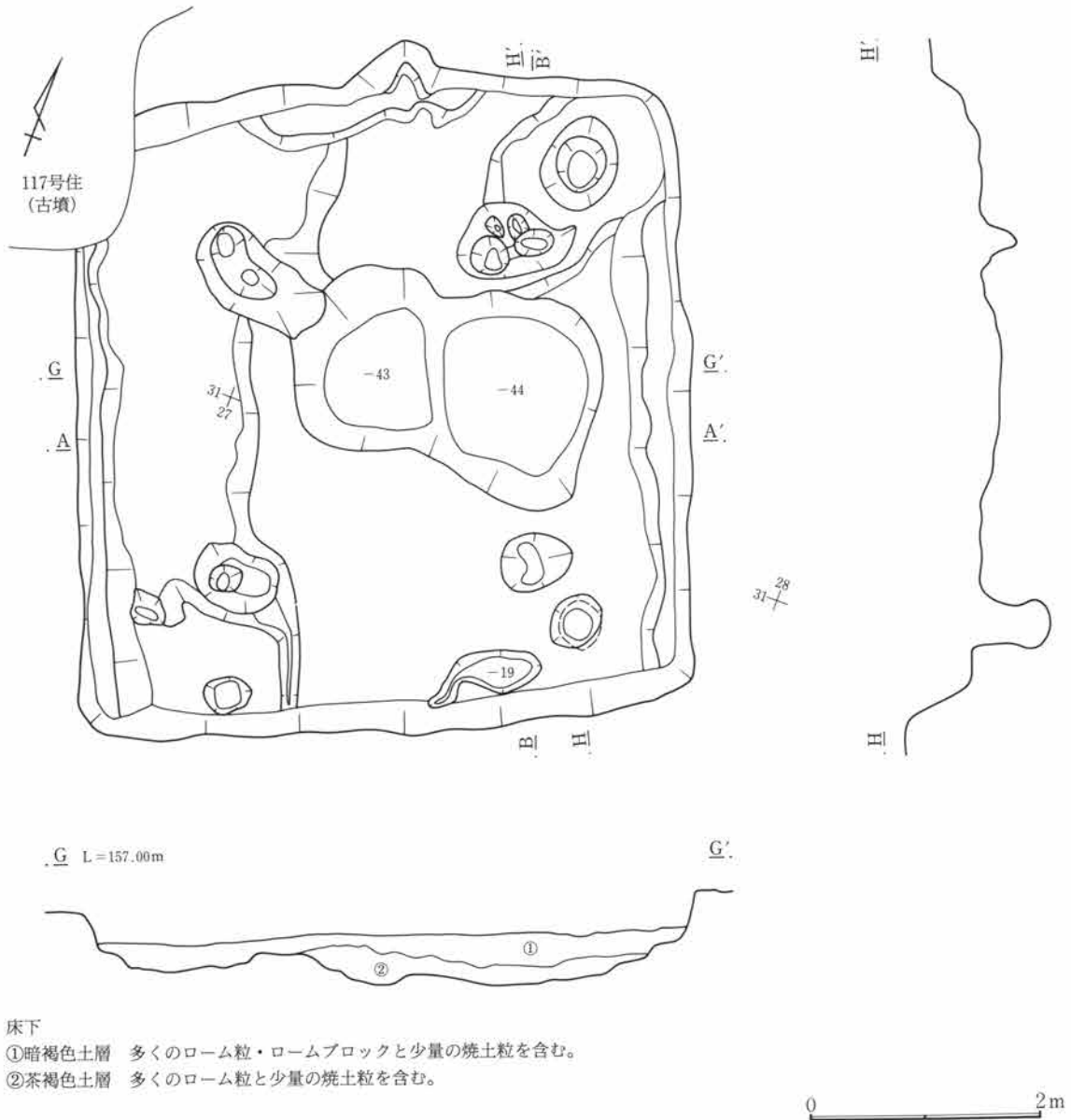
第3章 古墳時代の遺構と遺物

概要 本住居は同じ古墳時代の117号住居と北西部分でわずかに重複しており、117号住居により床下部分まで掘り込まれていた。狭い範囲であるため明瞭でないが、本住居跡が117号住居より古いものと思われる。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。柱穴1の南西側と柱穴4の西側に小穴が掘られており、柱穴の掘り直しのあった可能性がある。

規模 東西5.23m、南北5.46mである。壁高は残りの良い東壁面部分で35cmである。貯蔵穴は径69cm深さ58cmで、柱穴1は径58cm深さ58cm、柱穴2は径59cm深さ83cm、柱穴3は径58cm深さ95cm、柱穴4は径48cm深さ59cmである。柱穴1の南西側の小穴は径61cm深さ64cm、柱穴4の西側の小穴は径29cm深さ65cmである。

遺物 図示できた遺物は少ない。南東コーナー部分にこも編み石がまとまって出土している。



床下

①暗褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと少量の焼土粒を含む。

②茶褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。

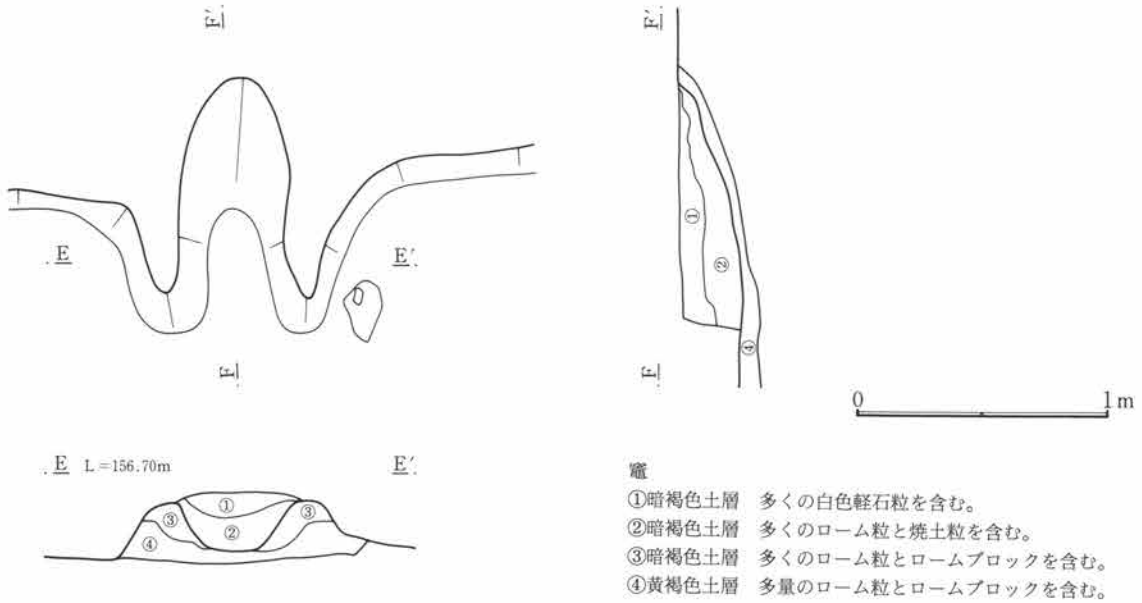
第68図 119号住居跡床下実測図

(竈)

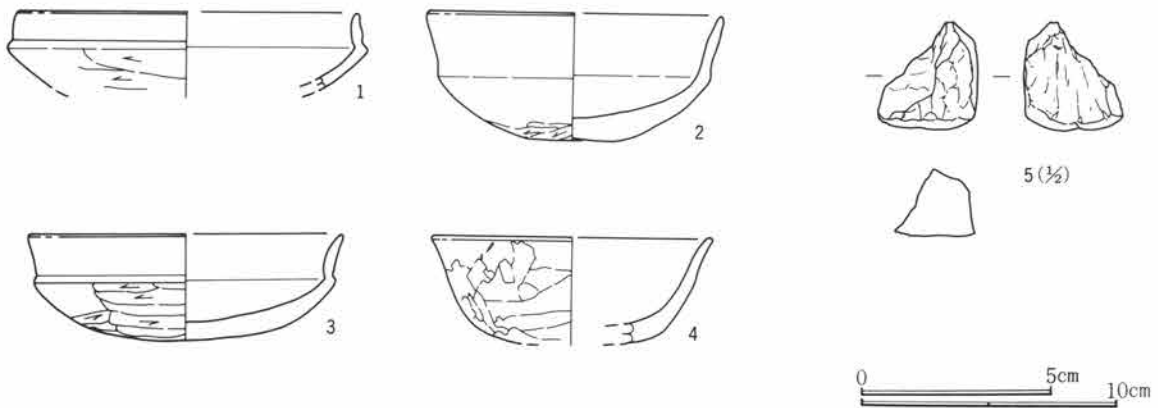
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 床面上に両袖を持つ比較的残りの良好な竈であった。竈内より石は全く出土しなかったため竈を造るときに石は使われなかったものと思われる。

規模 煙道方向102cm、燃烧部幅45cmである。



第69図 119号住居跡竈実測図



第70図 119号住居跡出土遺物実測図

119号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
70-1	土 鉢 器 坏	竈内覆土 破片	口(13.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面幅の広いヘラ削り。小さな砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面と口縁部外面の黒色は黒漆か。
70-2	土 鉢 器 坏	覆土 口縁部破片 底ほぼ完形	口(12.0) 高 5.0 底 丸底	①密、わずかに砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央ヘラ削り、周辺ナデ。口縁部～内面底部の器表面密。重量感のある坏である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
70-3	土師器 坏	床面+12 破片	口(12.7) 高 4.2 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。稜は鋭く全体にいてねいなつくりである。 口縁部外面～内側底面は黒漆か。
70-4	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(11.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒と雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面～口縁部ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 稜を持たない小さな坏である。
70-5 110	石製品 火打石	覆土 完形	長 2.8 幅 2.6 厚 1.8 重 13.2	③浅黄橙色	小さな珪石の破片である。火打石の可能性もあるが不明。角は使用されてなく鋭利である。
6 111	こも編み石	床面+2	長 14.2 幅 6.8 厚 3.0 重 490		点紋絹雲母石墨片岩。下側の面が全体に剥離している。片側の側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
7 111	こも編み石	床面直上	長 17.7 幅 8.8 厚 4.1 重 880		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
8 111	こも編み石	床面直上	長 15.3 幅 5.6 厚 3.5 重 550		絹雲母石墨緑泥片岩。下側の面が全体に剥離している。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
9 111	こも編み石	床面直上	長 13.7 幅 6.0 厚 5.4 重 610		絹雲母石墨片岩。断面は三角形に近い肉厚な石である。片側の側面は幅広く剥離している。
10 111	こも編み石	床面+1	長 18.3 幅 6.2 厚 3.6 重 660		絹雲母石墨片岩。片側の側面が凹状を呈し他の側面中央部に小さな凹凸部がある。
11 111	こも編み石	床面+2	長 17.6 幅 5.5 厚 5.0 重 660		緑簾緑泥片岩。両側面にゆるやかな凹状部を呈する。下面大きく欠損している。
12 111	こも編み石	床面直上	長 16.7 幅 7.0 厚 3.4 重 590		緑簾緑泥片岩。片側の側面にゆるやかな凹状部が認められる。
13 111	こも編み石	覆土	長 18.6 幅 8.2 厚 3.4 重 800		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面中央部にゆるやかな凹状が認められる。

127号住居跡 (第71～74図、図版11・12・78・79)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、22・23—25・26グリッドに位置する。

概要 本住居は平安時代の181号住居と重複しており、竈上部を含む住居の北側覆土上面を削り取られている。さらに西側は4号溝により削り取られて壁面部分は不明である。このように残りの悪い住居であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。柱穴3は上部分を4号溝により削られていた。柱穴1の西側と貯蔵穴の西側に小穴が掘られていたが、攪乱等によるものと思われる。

規模 東西不明、南北6.95mである。壁高は残りの良い東壁面部分で46cmである。貯蔵穴は径58cm深さ84cmで、柱穴1は径61cm深さ62cm、柱穴2は径61cm深さ78cm、柱穴3は径61cm深さ87cm、柱穴4は径48cm深さ92cmである。

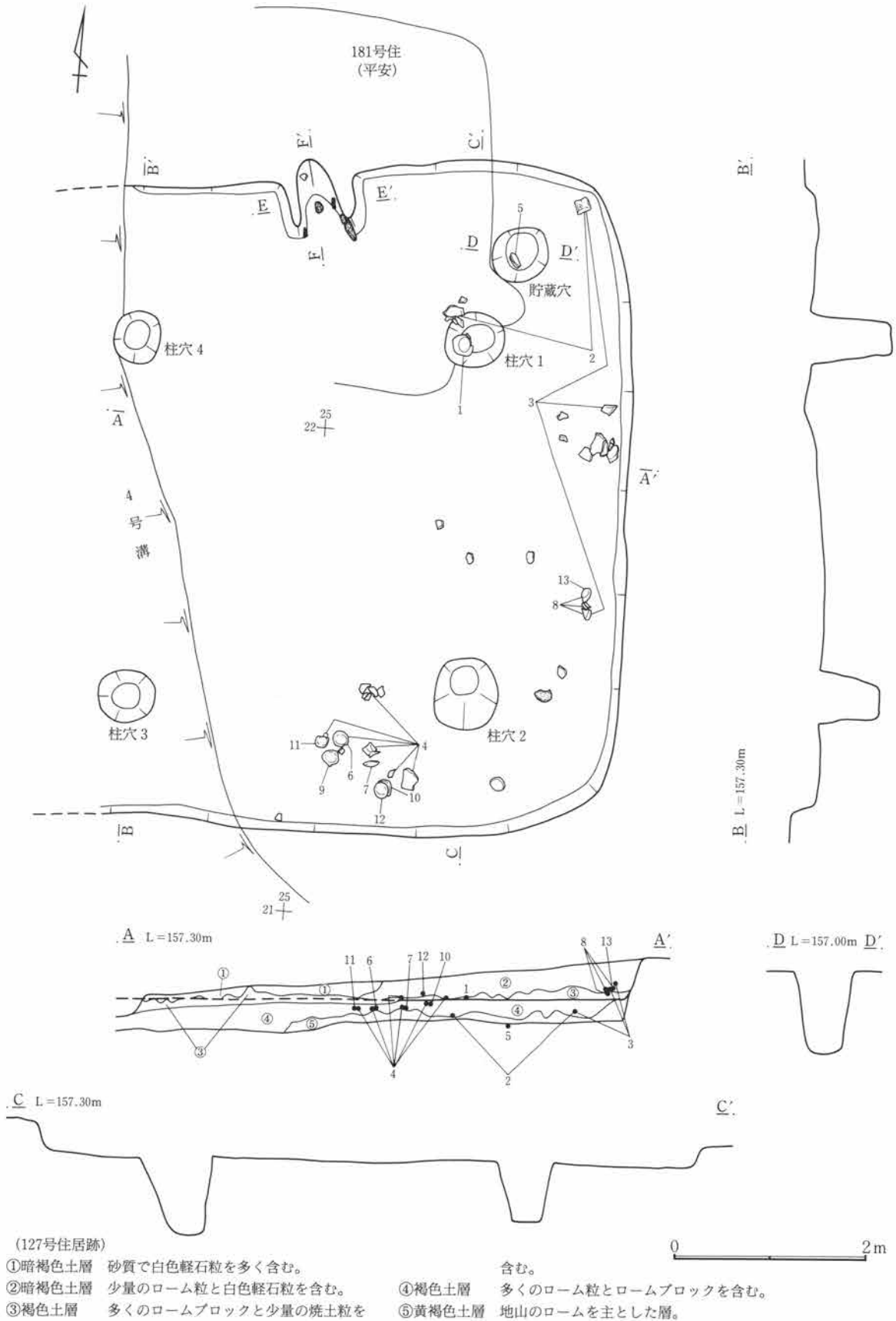
遺物 東と南壁面付近から多くの土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

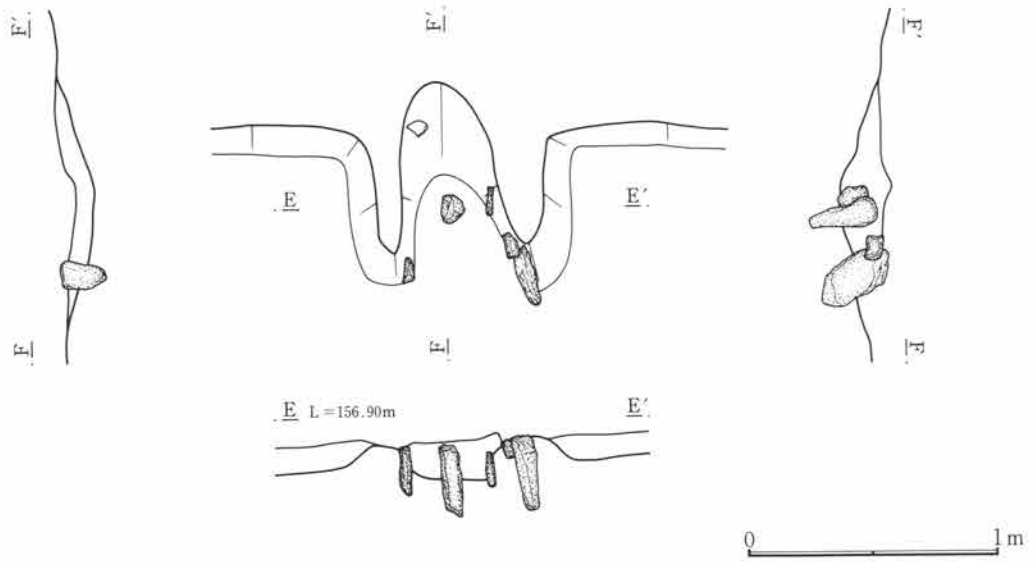
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口の両袖部分と右袖部分に垂直方向に立てて据え付けられた袖石が3個、右袖石に接して小さな石が1個、さらに燃焼部に支脚石が据えられた状態で出土した。天井石は出土しなかった。このように多くの石を使用して造られた竈である。図示した図面は平面図・正面図・側面図であり、セクション図は作成していない。

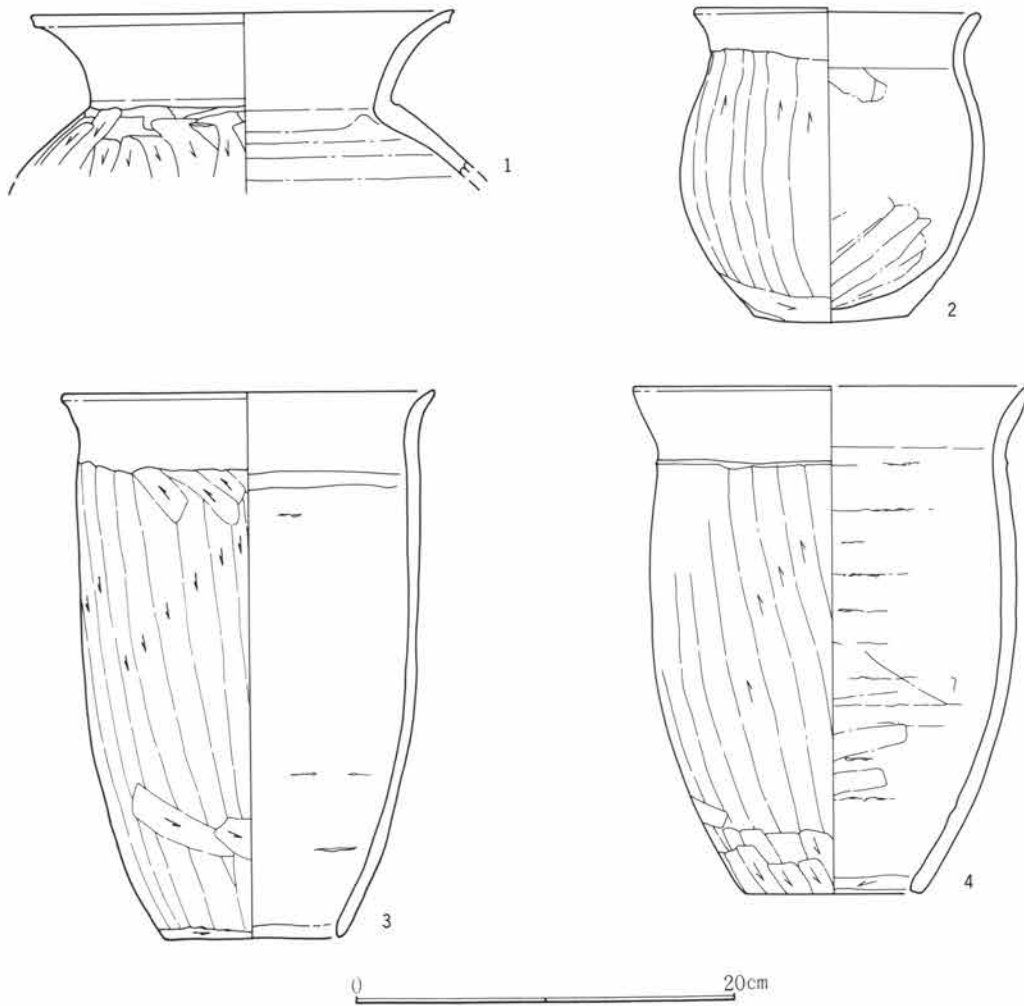
規模 煙道方向83cm、燃焼部幅41cmである。



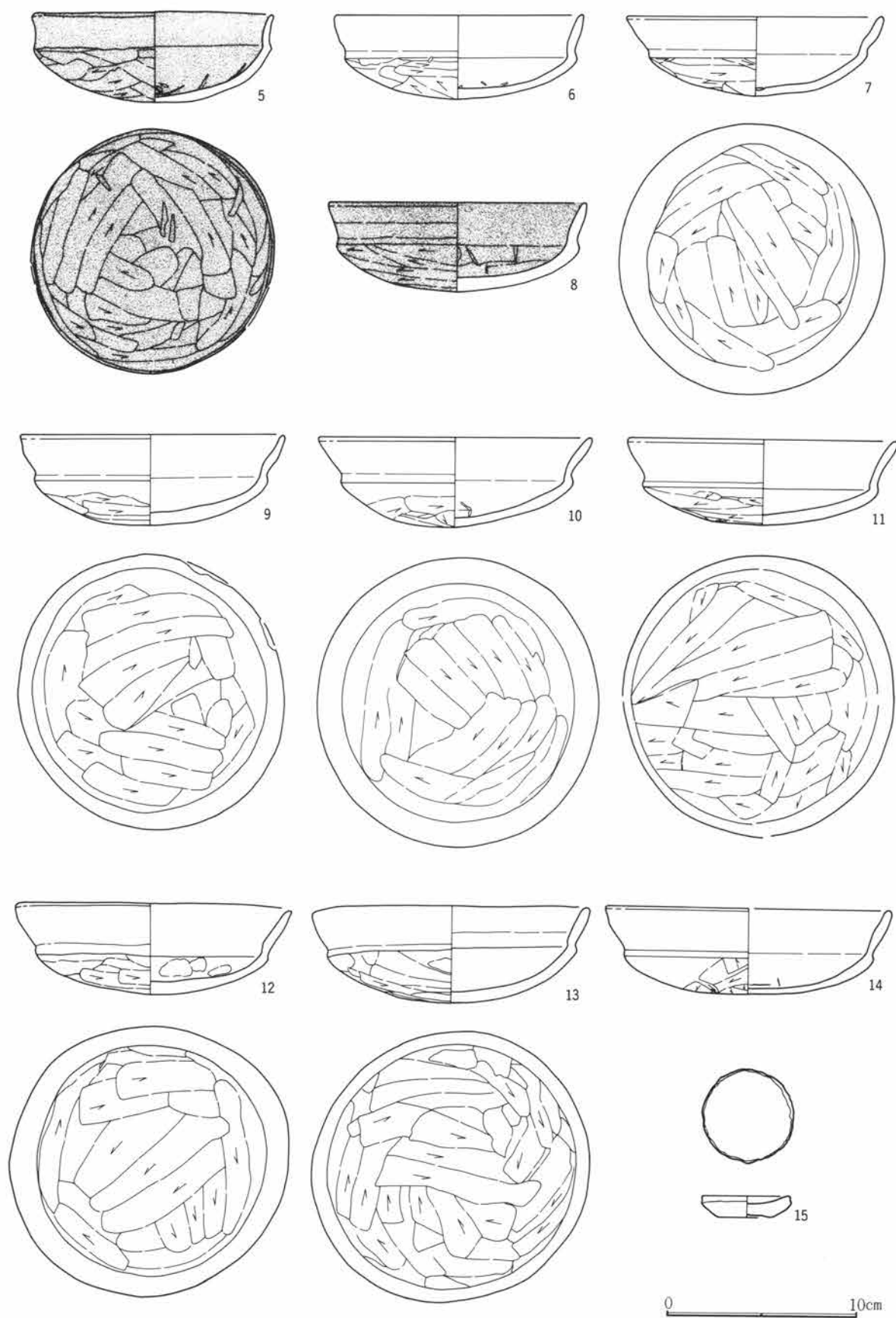
第71図 127号住居跡実測図



第72図 127号住居跡竈実測図



第73図 127号住居跡出土遺物実測図(1)



第74図 127号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

127号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
73-1 78	土 師 器 壺	覆土 口縁～胴上 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.6 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面浅黄褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口唇部は丸くなくコの字に仕上げられている。 光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。
73-2 78	土 師 器 小 型 甕	床面直上 ほぼ完形	口 15.4 高 16.5 底 8.4	①やや粗、1mm前後の砂粒を少 量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラナデ。胴部外面下部ヘラ削り、上部ヘラナデ。口縁 部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
73-3 78	土 師 器 甕	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口 19.8 高 29.0 底 9.4	①やや粗、1～2mmの砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面 ナデにより器表面密。 光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
73-4 78	土 師 器 甕	床面+2 口縁部小破 片 他 $\frac{1}{2}$	口(21.0) 高 27.0 底 9.6	①粗、2～3mmの砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒色・内面橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。 胴部外面は強い吸炭で、断面も半分以上吸炭が認められる。
74-5 78	土 師 器 坏	覆土 完形	口 12.6 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面灰褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内面の漆は黒光りしている。 口縁部外面～内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
74-6 78	土 師 器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 13.4 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 黒漆は認められない。
74-7 78	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.8 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。砂粒の移動は少なく器 表面の粗れは少ない。内側底部中央が凹状を呈する。 黒斑全く認められず、胎土がやや粉状を呈する。
74-8 78	土 師 器 坏	床面+22 完形	口 13.8 高 4.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 口縁部中央に一条の沈線が一周している。 口縁部外面～内側底面に黒漆が一部残っている。
74-9 78	土 師 器 坏	床面+7 ほぼ完形	口 14.0 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。底面の周辺部はナデ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
74-10 78	土 師 器 坏	床面+4 完形	口 14.7 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底部ヘラ削り。砂粒の移動は少なく粘土がササラ状になっ ている。底部周辺はナデ。口縁部横ナデ。
74-11 78	土 師 器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口 14.3 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
74-12 79	土 師 器 坏	床面+13 完形	口 14.6 高 4.8 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。底部周辺にヘラ削りの ない部分あり。口縁部横ナデ。内面ナデ。 少し歪んでいる。
74-13 79	土 師 器 坏	床面+22 完形	口 14.4 高 5.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面ヘラナデ。ナデの部分の器表面で一部に光沢を持つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。
74-14	土 師 器 坏	覆土 口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.0) 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細かいヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面 密。
74-15 79	土 師 器 小 型 坏 ?	覆土 ほぼ完形	口 4.7 高 1.1 底 2.4	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	表面全体ナデにより器表面密。名称、用途とも不明。

129号住居跡 (第75～78図、図版12・13・79・80・109・111)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、25-26グリッドに位置する。

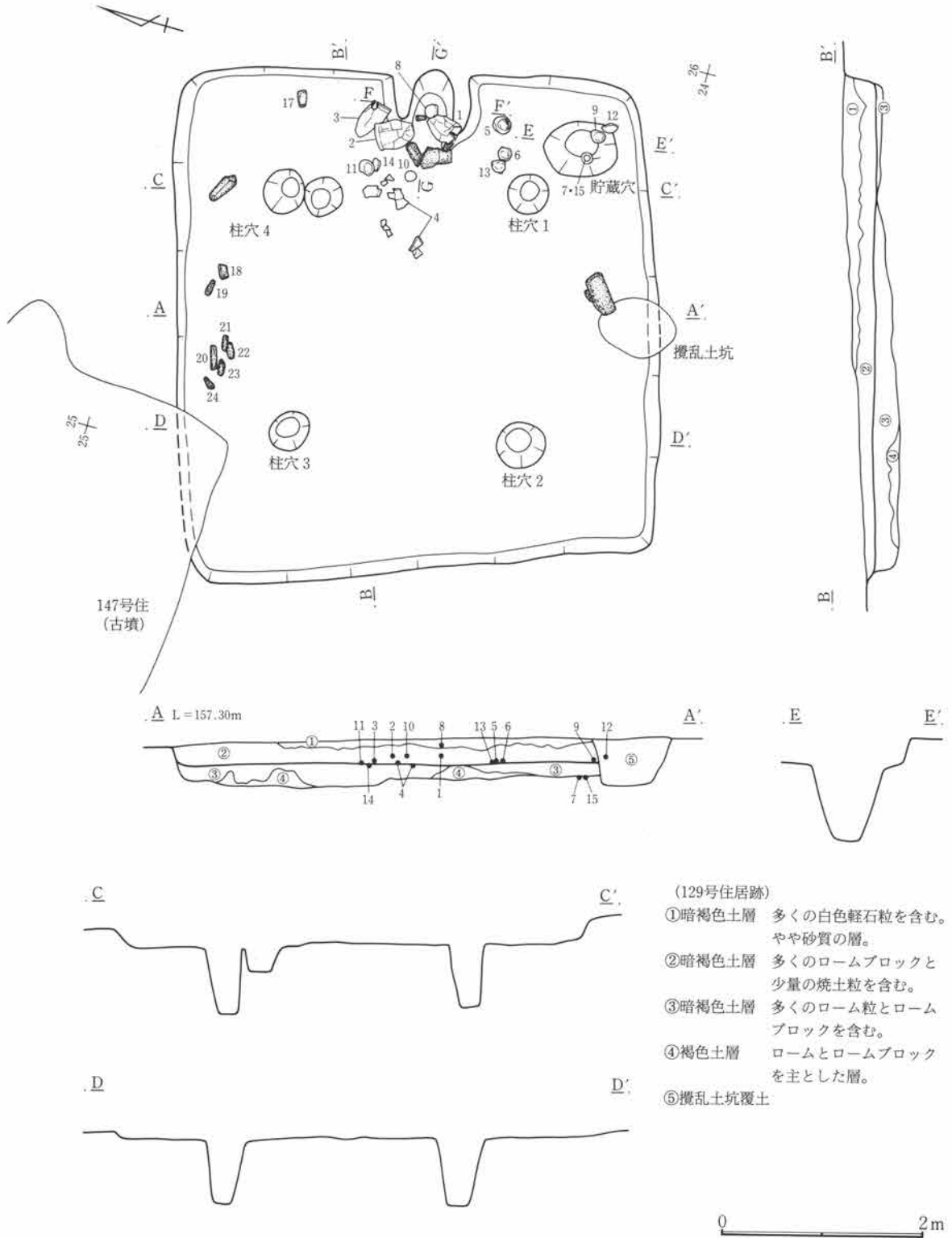
概要 本住居は同じ古墳時代の147号住居と北西部分で重複しており、覆土上面を削られているが、壁面下部と床面は削られていなかったため住居の範囲は確認できた。南壁中央部付近の床面と壁面の一部を攪乱土坑により削り取られていた。竈の残りの良い住居であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。柱穴4の南側に接して小穴が掘られていた。

規模 東西は北壁面部分で5.05m、南壁面部分で4.75mでやや大きさが異なる。南北4.73mである。壁高は

残りの良い南壁面部分で29cmである。貯蔵穴は径75cm深さ71cmで、柱穴1は径39cm深さ61cm、柱穴2は径48cm深さ61cm、柱穴3は径39cm深さ68cm、柱穴4は径36cm深さ67cmである。

遺物 竈周辺から多くの土器が出土している。5の小型甕は出土例が少ない。



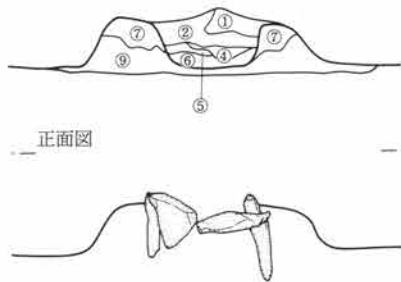
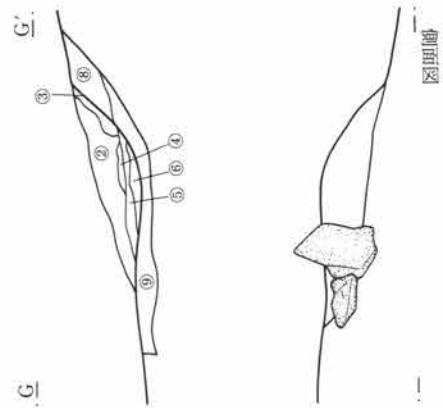
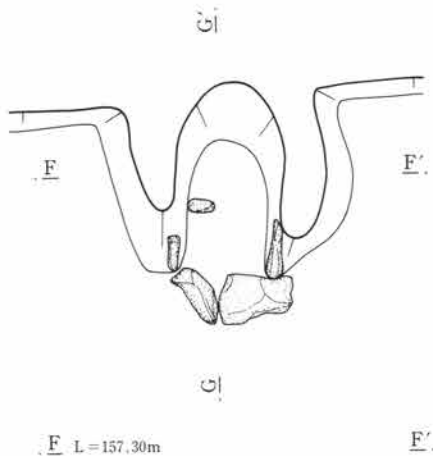
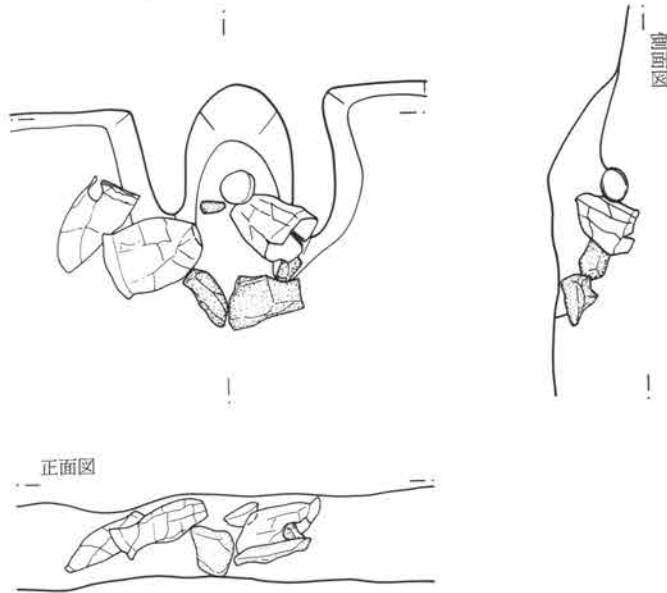
第75図 129号住居跡実測図

(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの良い竈であった。焚口の両袖部分と燃烧部中央左寄りに支脚石と思われる石が、ほぼ据えられたと思われる状態で出土した。また焚口部分に天井石が割れて崩れ落ちた状態で出土した。竈内にほぼ完形の甕が左右に転げ落ちたような状態で、また左袖外側部分に袖にもたれかけたような状態でほぼ完形の甕が置かれていた。また焚口部分に甕が、さらにほぼ完形の坏も竈周辺に多く置かれていた。このように使用時の状態を良好に残した竈であった。通常のセクション図のほか、平面図・正面図・側面図をそれぞれ2面用いて細かく図示した。

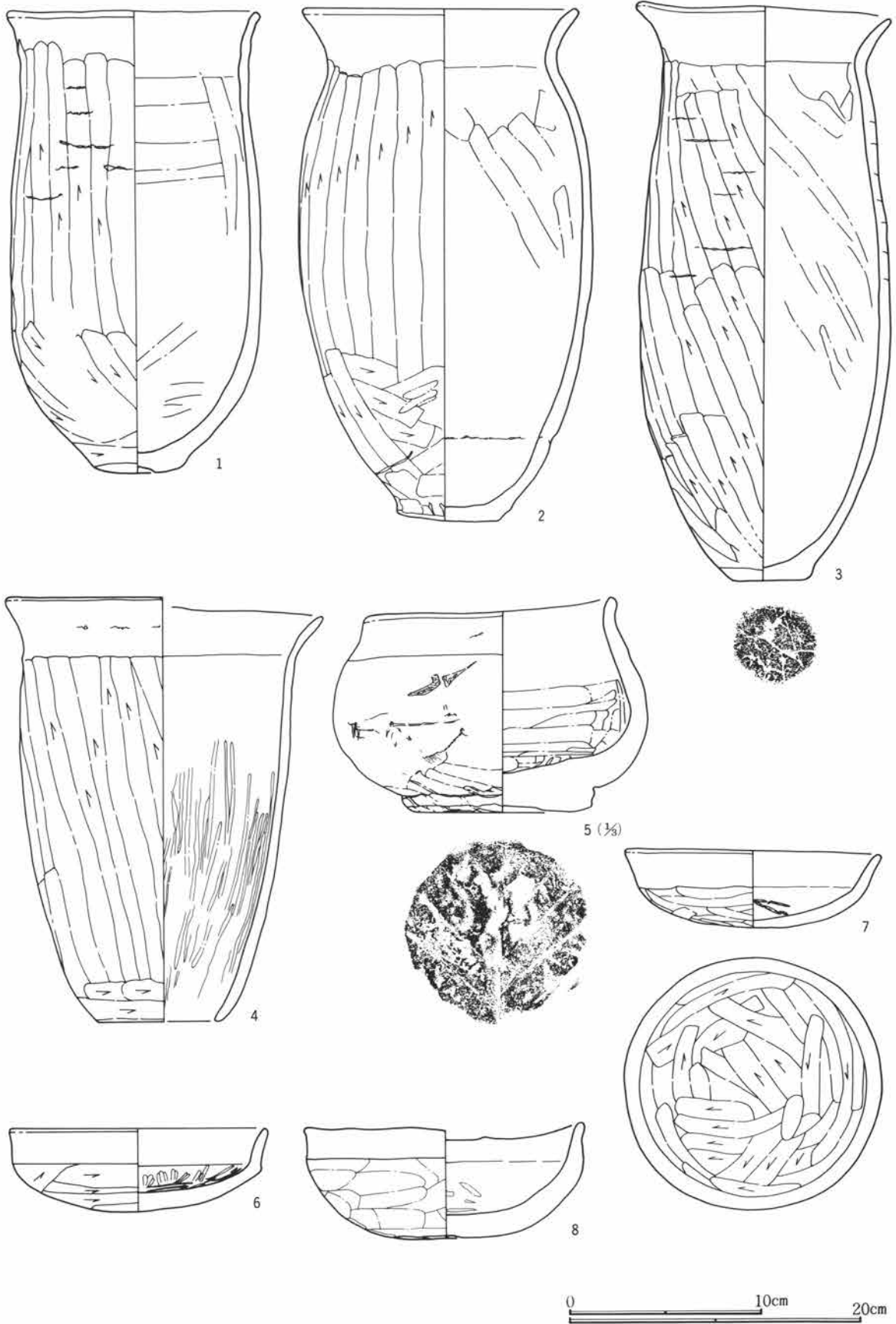
規模 煙道方向75cm、燃烧部幅38cmである。



竈

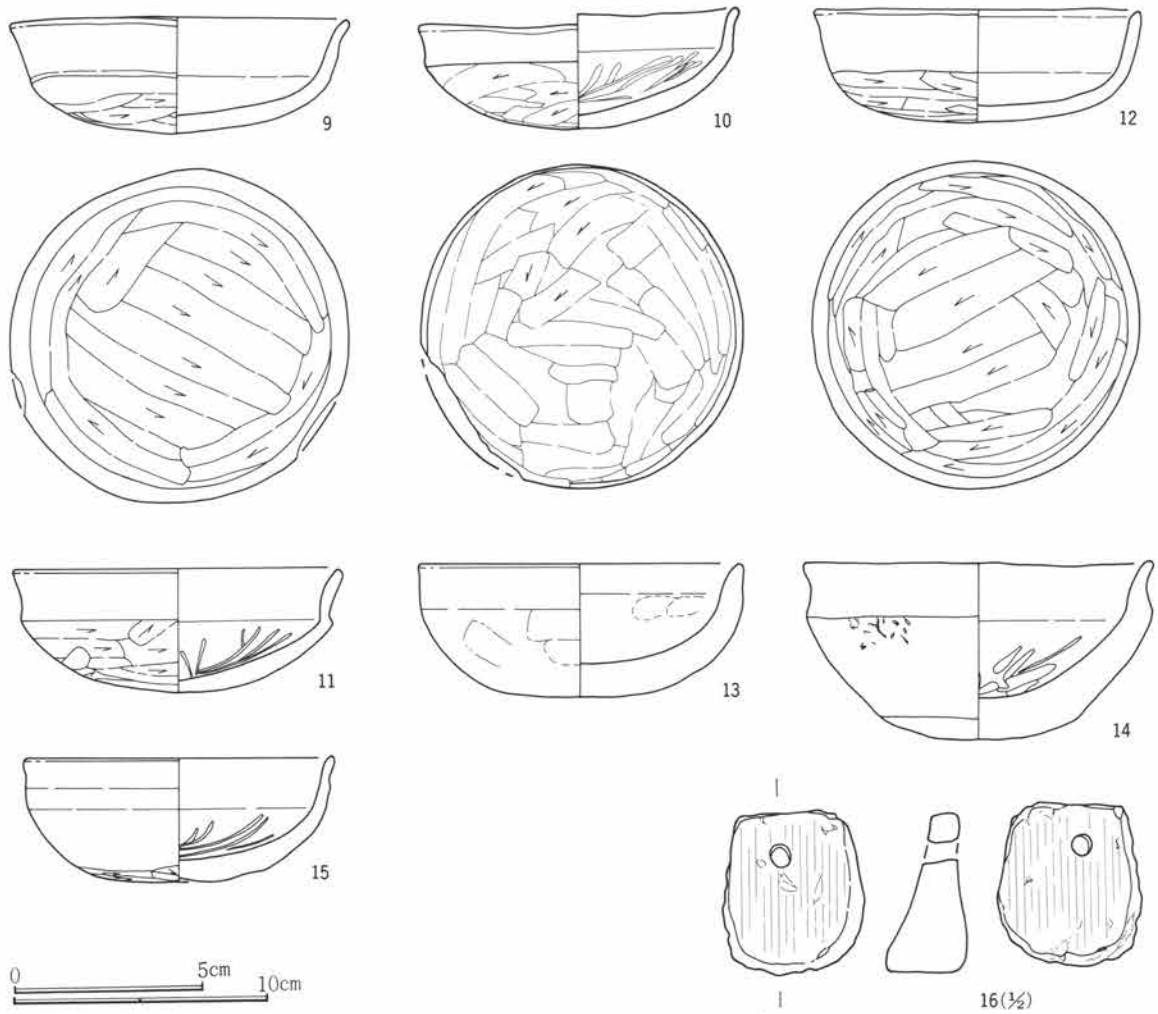
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④黒褐色土層 多くの炭化物を含む。
- ⑤暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ⑥赤茶褐色土層 少量の焼土粒とロームブロックを含む。
- ⑦褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑧褐色土層 ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。
- ⑨黄褐色土層 ロームブロックとローム粒を主とした層。

第76図 129号住居跡竈実測図



第77図 129号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第78図 129号住居跡出土遺物実測図(2)

129号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
77-1 79	土 師 器 甕	覆土 口縁~底部 1/2残存	口 17.6 高 31.7 底 6.2	①粗、2~5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒褐色、外面1/2橙色・下1/2黒褐色	底面ヘラ削り。胴下半ヘラ削り。上部ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデにより器表面密。全体にやや歪んでいる。胴部外面に輪積痕が残る。
77-2 79	土 師 器 甕	覆土 1/2残存	口 19.1 高 35.2 底 7.0	①粗、2~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・胴下半外面黒褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
77-3 79	土 師 器 甕	覆土 口~胴下半 1/2 底完形	口 17.6 高 39.5 底 4.8	①粗、3~5mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③上半部淡橙色・下半部黒褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削り。砂粒は目立つが移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器高が40cmに近い最も長胴化した甕である。
77-4 79	土 師 器 甕	床面直上 口縁部1/2 胴部1/2残存	口(22.0) 高 29.0 底 8.4	①粗、4~6mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・にぶい橙色	胴部外面下半ヘラ削り。上部ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面ヘラ磨き後吸炭により器表面密。内面のヘラ磨き部分は密で光沢を持つ。
77-5 80	土 師 器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口 13.0 高 10.3 底 9.2	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。底部内面に指によるナデの痕跡が明瞭。底部が体部にめり込むような状態となっている。
77-6 79	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.4 高 4.2 底 丸底	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内側底面に多くのヘラ磨き。
77-7 79	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕あり。光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。黒斑全くなし。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
77-8 79	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.5 高 5.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に器肉が厚く歪んでいる。
78-9 79	土 師 器 坏	床面+11 ほぼ完形	口 13.4 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。一部に黒斑あり。
78-10 79	土 師 器 坏	床面+10 ほぼ完形	口 12.8 高 4.5 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒をやや多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の狭いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内側全面に放射状のヘラ磨きあり。口縁部の一部に吸炭による黒斑あり。
78-11 79	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.0 高 4.9 底 丸底	①粗、2~4mmの片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデ。放射状のヘラ磨きあり。甕に近い大きな砂粒を含む胎土。
78-12 79	土 師 器 坏	床面+14 完形	口 13.0 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。黒斑全くなし。
78-13 79	土 師 器 坏	床面直上 口縁一部欠損 ほぼ完形	口 12.8 高 5.2 底 丸底	①やや粗、小さな粘土をブロック状に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデでヘラ削りやヘラナデなし。口縁部横ナデ。内面ナデであるが、雑な整形である。器肉が厚くやや異質な坏である。
78-14 80	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.0 高 6.9 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底面にヘラの圧痕と一部に打痕あり。ヘラ削りは全く行なわれていない。不均質な異質な坏である。
78-15 79	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.4 高 4.9 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面中央部ヘラナデ。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。放射状のヘラ磨きあり。甕等に見られる大きな砂粒を含む胎土。
78-16 109	石 製 品 飾 石	覆土 完形	長 4.2 幅 3.9 厚 2.2 重 35.4	③灰白色	流紋岩。両方の広い面とも砥石状に磨耗。側面と底面は自然面。底面に鋭利な刃形あり。上部に1個の穿孔あり。砥石として使用後転用し、飾石の1種として再利用か。
17 111	こも編み石	床面直上	長 14.6 幅 8.5 厚 4.2 重 915		絹雲母石墨片岩。幅の広い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
18 111	こも編み石	床面+1	長 17.1 幅 7.6 厚 3.3 重 740		緑簾緑泥片岩。片側の側面にゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が認められる。
19 111	こも編み石	床面直上	長 19.7 幅 5.3 厚 5.6 重 910		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
20 111	こも編み石	床面直上	長 14.3 幅 6.9 厚 3.7 重 680		緑簾緑泥片岩。断面やや菱形を呈する石である。側面の幅が広くわずかに凹状部がある。
21 111	こも編み石	床面+1	長 19.8 幅 7.9 厚 5.7 重 1,258		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に打ち欠かれた凹状部を持つ。
22 111	こも編み石	床面+1	長 15.6 幅 7.1 厚 3.4 重 635		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がゆるやかに凹状を呈し、他の側面に打ち欠いたような凹凸部が認められる。
23 111	こも編み石	床面+1	長 17.3 幅 8.2 厚 4.8 重 1,060		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
24 111	こも編み石	床面直上	長 14.8 幅 8.2 厚 3.8 重 720		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
25 111	こも編み石	覆土	長 17.0 幅 7.0 厚 4.3 重 600		石墨緑泥片岩。断面がやや三角形を呈し、片側の側面中央部にゆるやかな凹状部が認められる。

147号住居跡（第79~81図、図版13・80）

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、25・26-25グリッドに位置する。

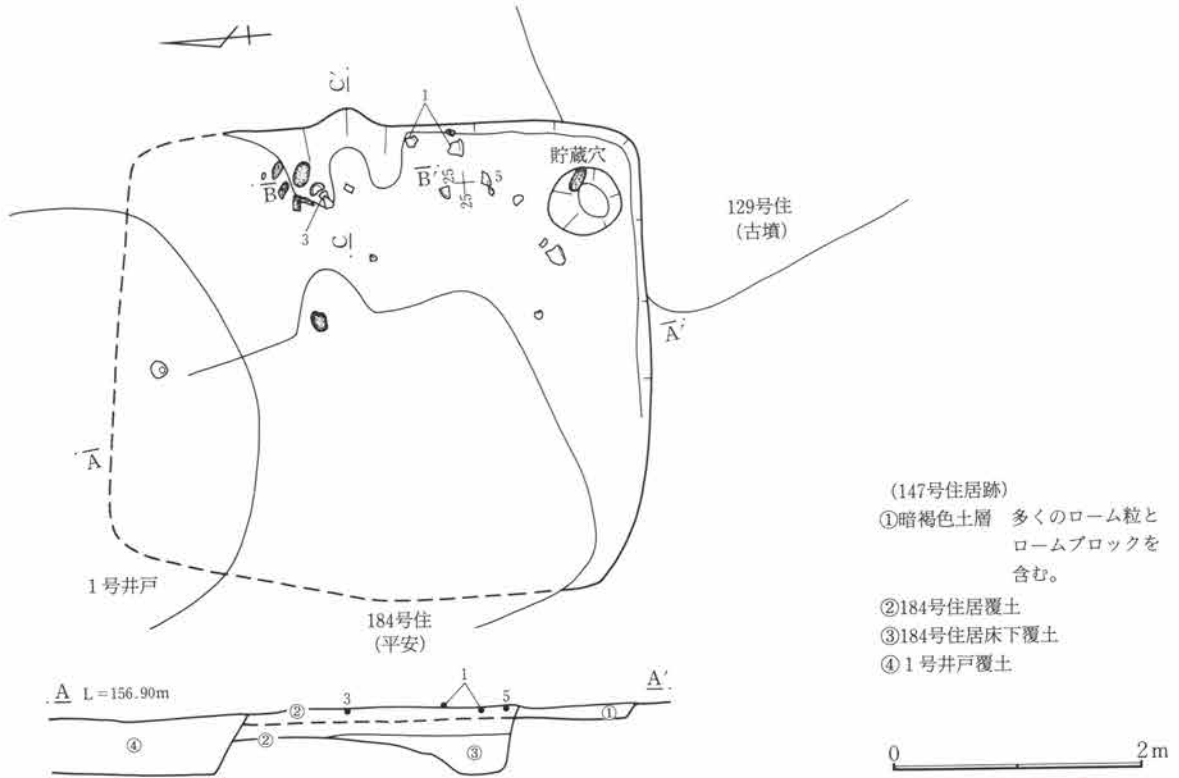
概要 本住居は北側を1号井戸により掘り込まれ、中央部西側を平安時代の184号住居により床面下まで深く掘り込まれていた。南東コーナー部分では同じ古墳時代の129号住居と重複しており、本住居が129号住居の覆土上面を掘り込んでいる。

構造 床面は竈周辺部以外残っていなかった。ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.65m、南北は不明である。壁高は残りの良い東壁南側部分で17cmである。貯蔵穴は径57cm深さ22cmである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

遺物 破片を含めた出土量は多いが、図示できた土器は少ない。竈周辺から多く出土している。



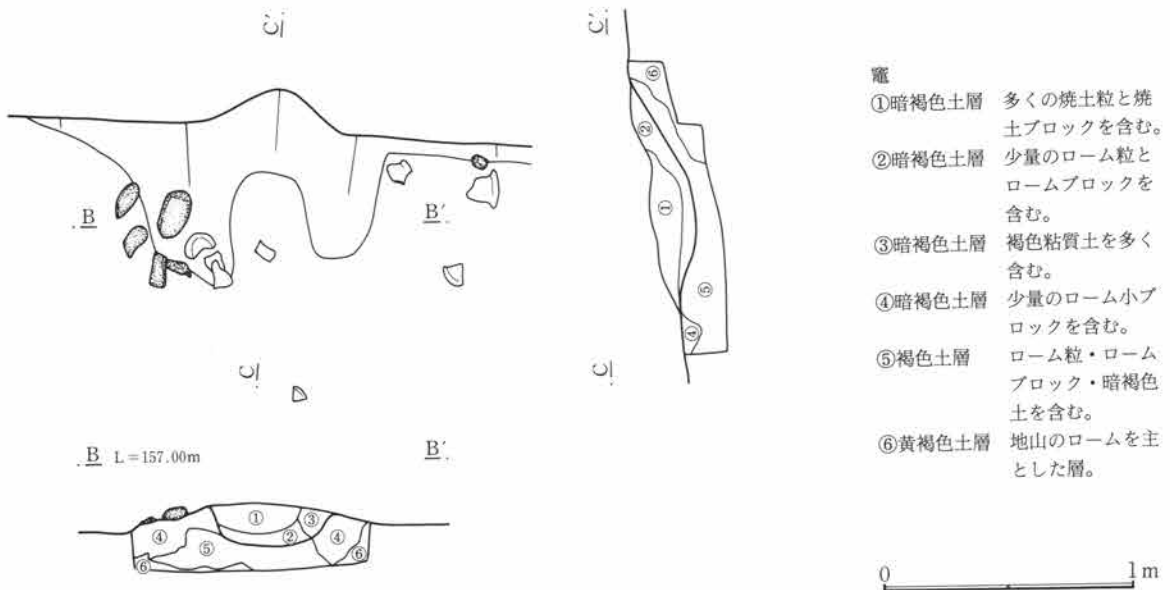
第79図 147号住居跡実測図

(竈)

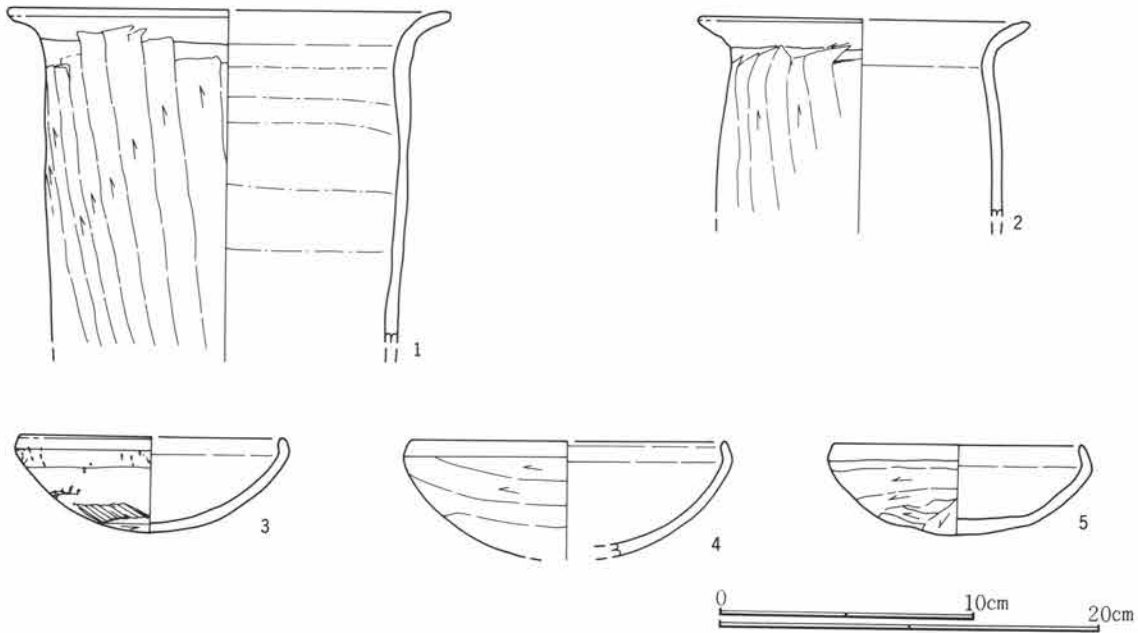
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの悪い竈であった。左袖外側に3個の片岩が、袖上に2個の粒子のやや粗い石が出土した。この2個の石は竈に使われた可能性があるが、袖全体の残りが悪いため不明な点が多い。竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向78cm、燃焼部幅46cmである。



第80図 147号住居跡竈実測図



第81図 147号住居跡出土遺物実測図

147号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
81-1	土師器 甕	床面+2 口縁部~胴 上部1/2残存	口(24.0) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③赤褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
81-2	土師器 甕	覆土 破片	口(18.0) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③内面黒色・外面暗赤褐色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面の黒色が特徴的である。
81-3	土師器 坏	床面+5 口縁部~底 部1/2残存	口(10.8) 高3.7 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土は粉状を呈する。
81-4	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(12.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	底面弱いへら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
81-5 80	土師器 坏	床面+4 1/2残存	口10.2 高3.5 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	底面強いへら削り。多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。へらの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土は粉状でなく砂状である。

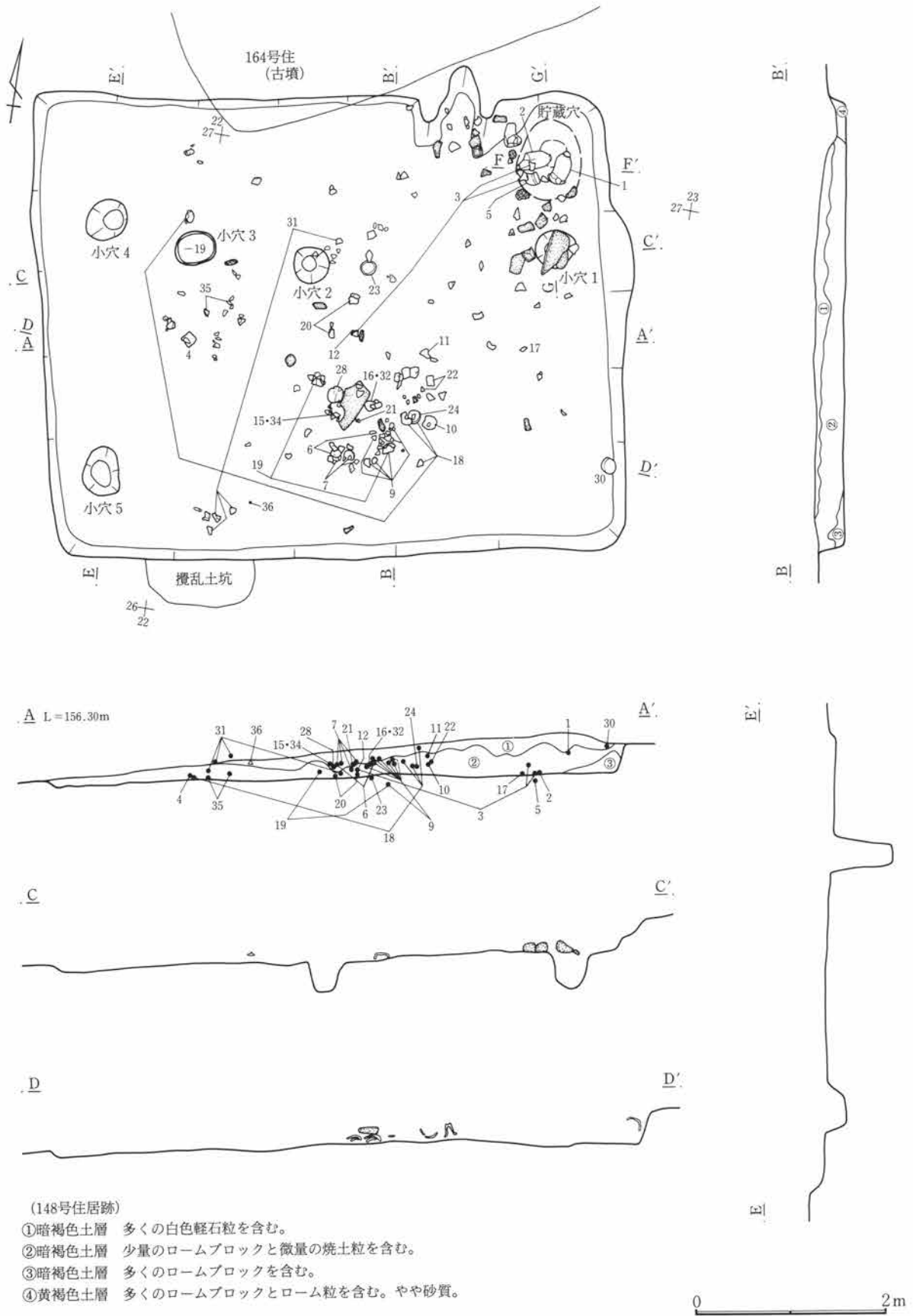
148号住居跡 (第82~87図、図版13・14・80・81・108)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、27-23グリッドに位置する。

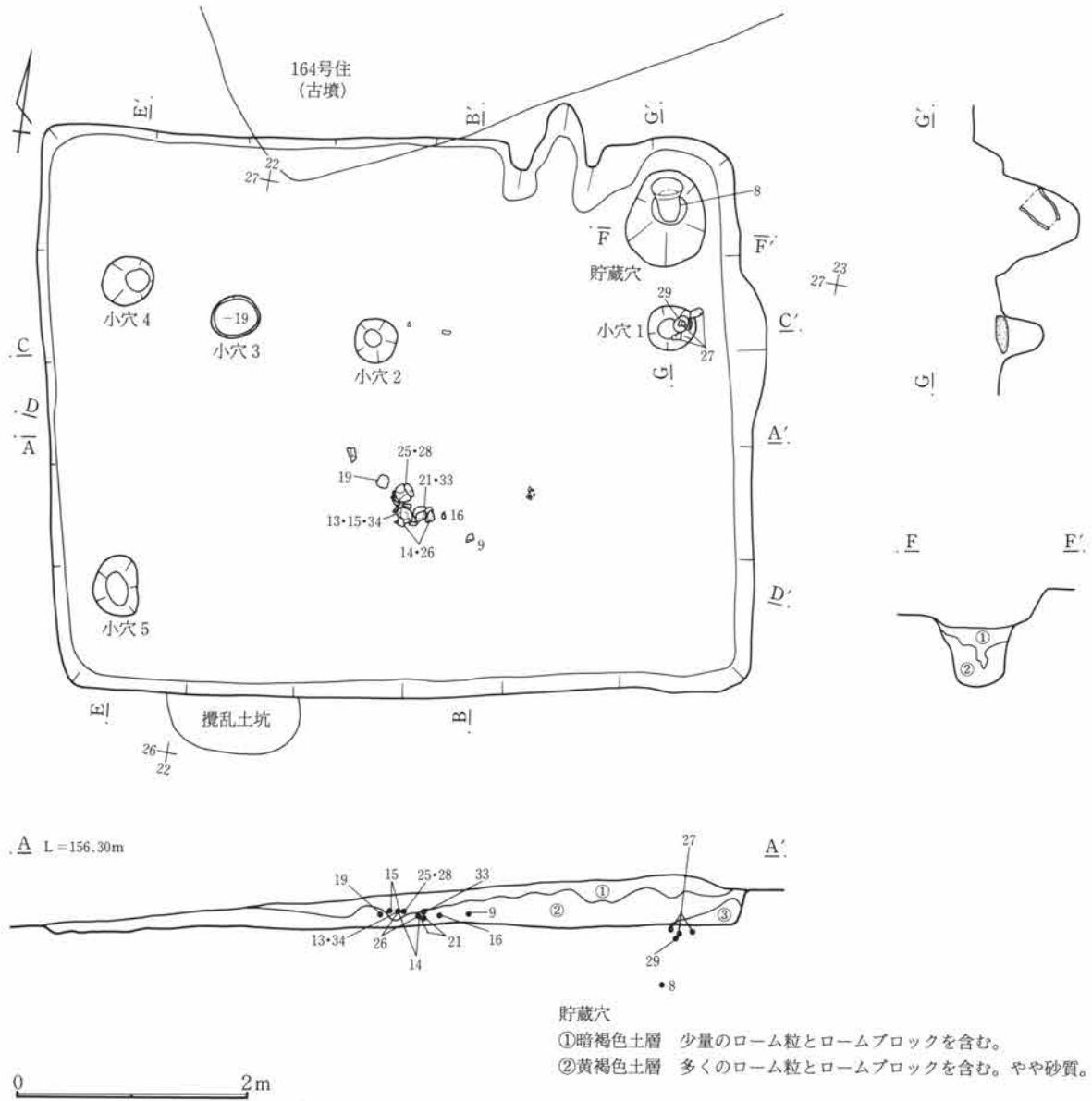
概要 本住居は同じ古墳時代で本住居より新しい164号住居と北側の壁面部分でわずかに重複している。重複部分の壁面と覆土の一部が削り取られている。床面中央部や竈周辺から多くの土器が出土している。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、底部から完形の甕が置かれたような状態で出土した。貯蔵穴が使用されなくなったと思われる段階で床面とほぼ同じ面まで埋められ、その面にほぼ完形の甕2個と小型甕1個が散乱したような状態で置かれていた。小穴が5本掘られていたが、配置や深さが一定していないため柱穴は掘られていなかったものと思われる。

規模 東西6.02m、南北4.80mである。壁高は残りの良い東壁南側部分で32cmである。貯蔵穴は径67cm深さ63cmである。小穴1は径42cm深さ32cm、小穴2は径37cm深さ37cm、小穴3は径41cm深さ19cm、小穴4は径45cm深さ75cm、小穴5は径39cm深さ26cmである。



第82図 148号住居跡実測図(1)



第83図 148号住居跡実測図(2)

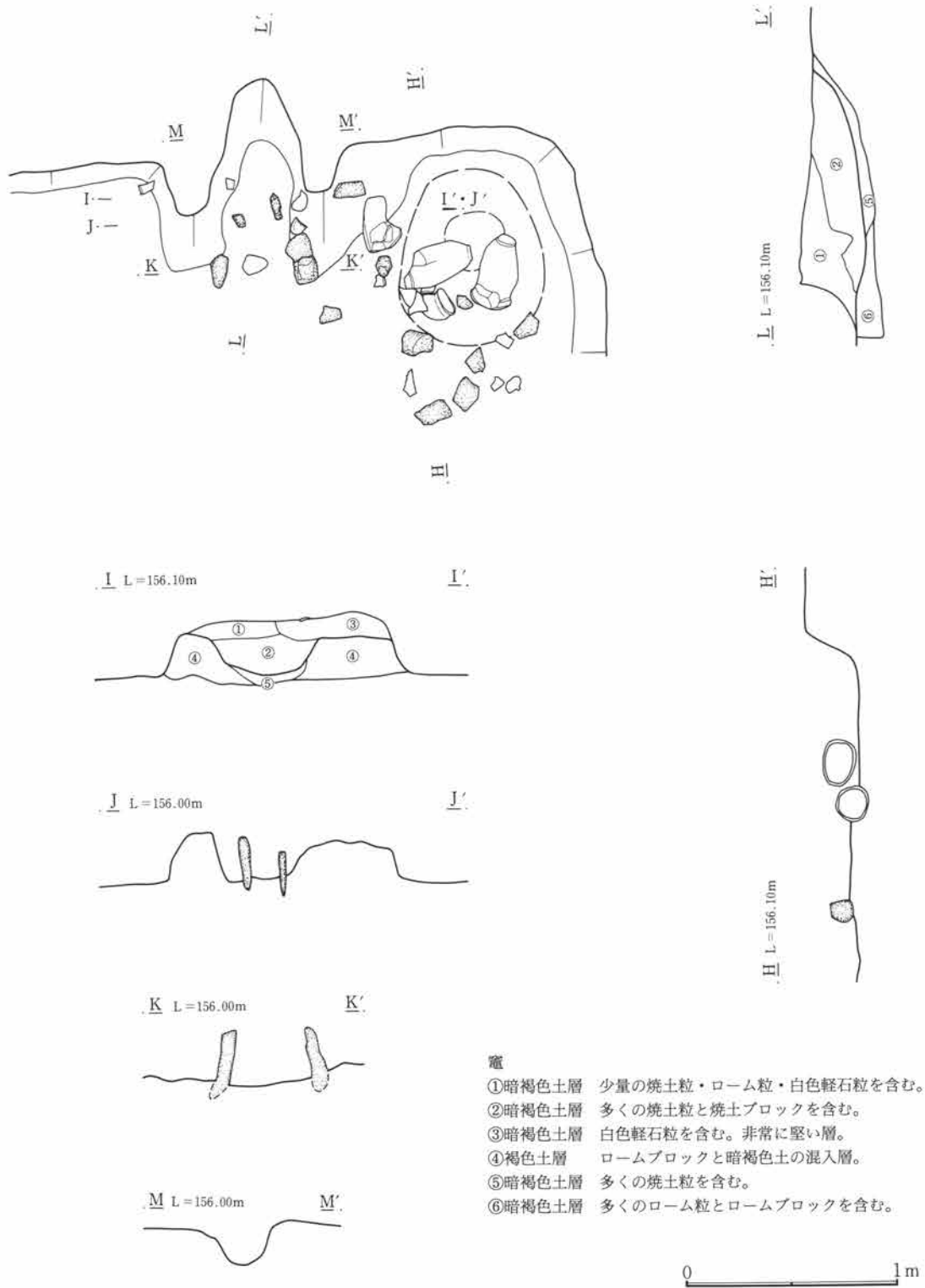
遺物 貯蔵穴から出土したほぼ完形の土器のほか、中央部やや南寄りの床面上に、天井石に似た平らな石が出土している。その石の周辺や下からも多くの土器が出土し、その多くが実測可能である。

(竈)

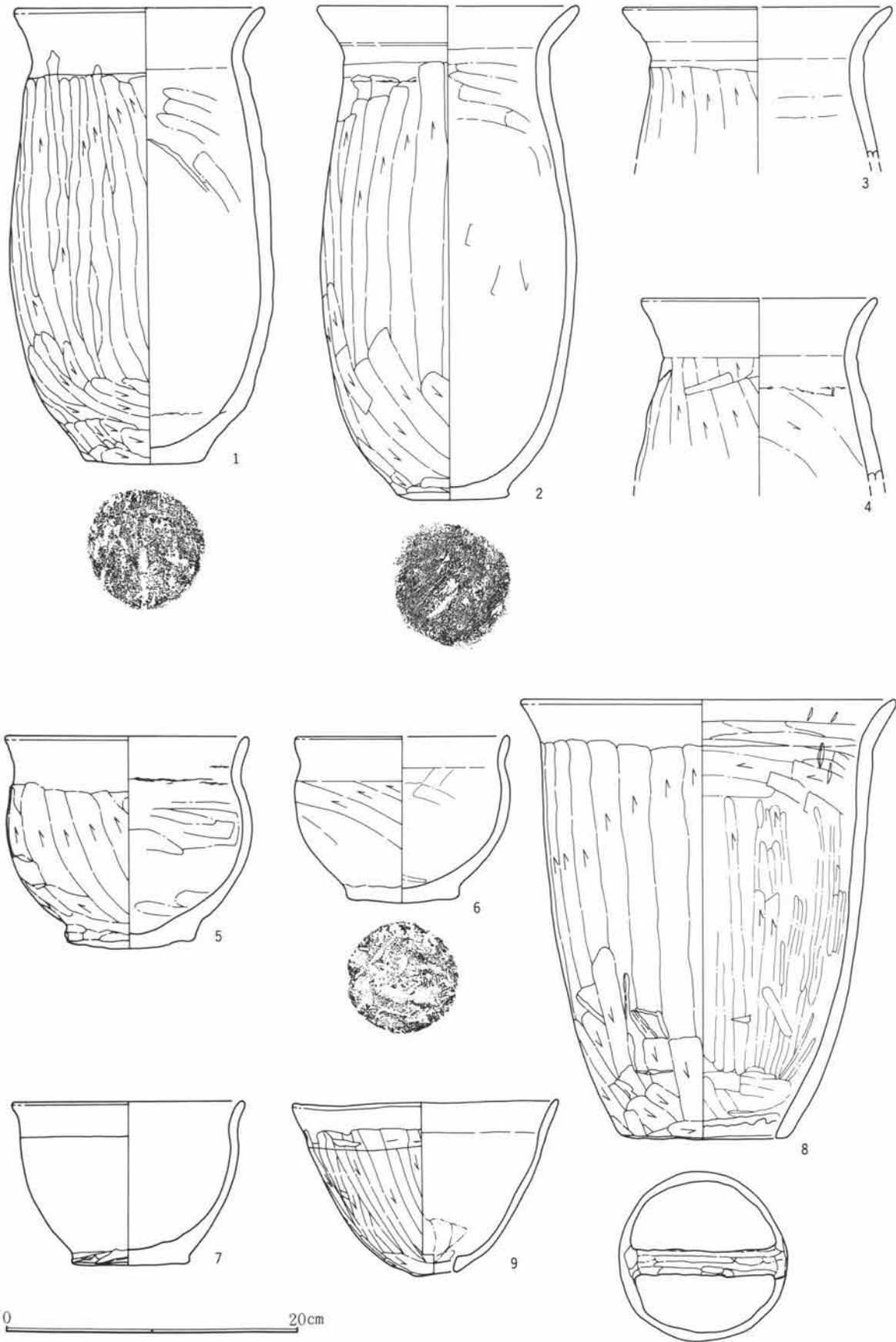
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの良い竈であった。焚口の両袖部分と燃烧部中央に2個の支脚石と思われる石が、ほぼ据えられたと思われる状態で出土した。また焚口の天井石と思われる大きな石が、貯蔵穴手前の床面部分から他の多くの石とともに出土した。貯蔵穴上から出土したほぼ完形の大小3個の甕とともに、竈に架けられていたものが壊され、竈右側の貯蔵穴から貯蔵穴手前部分に崩し落とされた状態を示しているのではないだろうか。いずれにしても多くの石を用いて竈が造られていたことが推定できる。

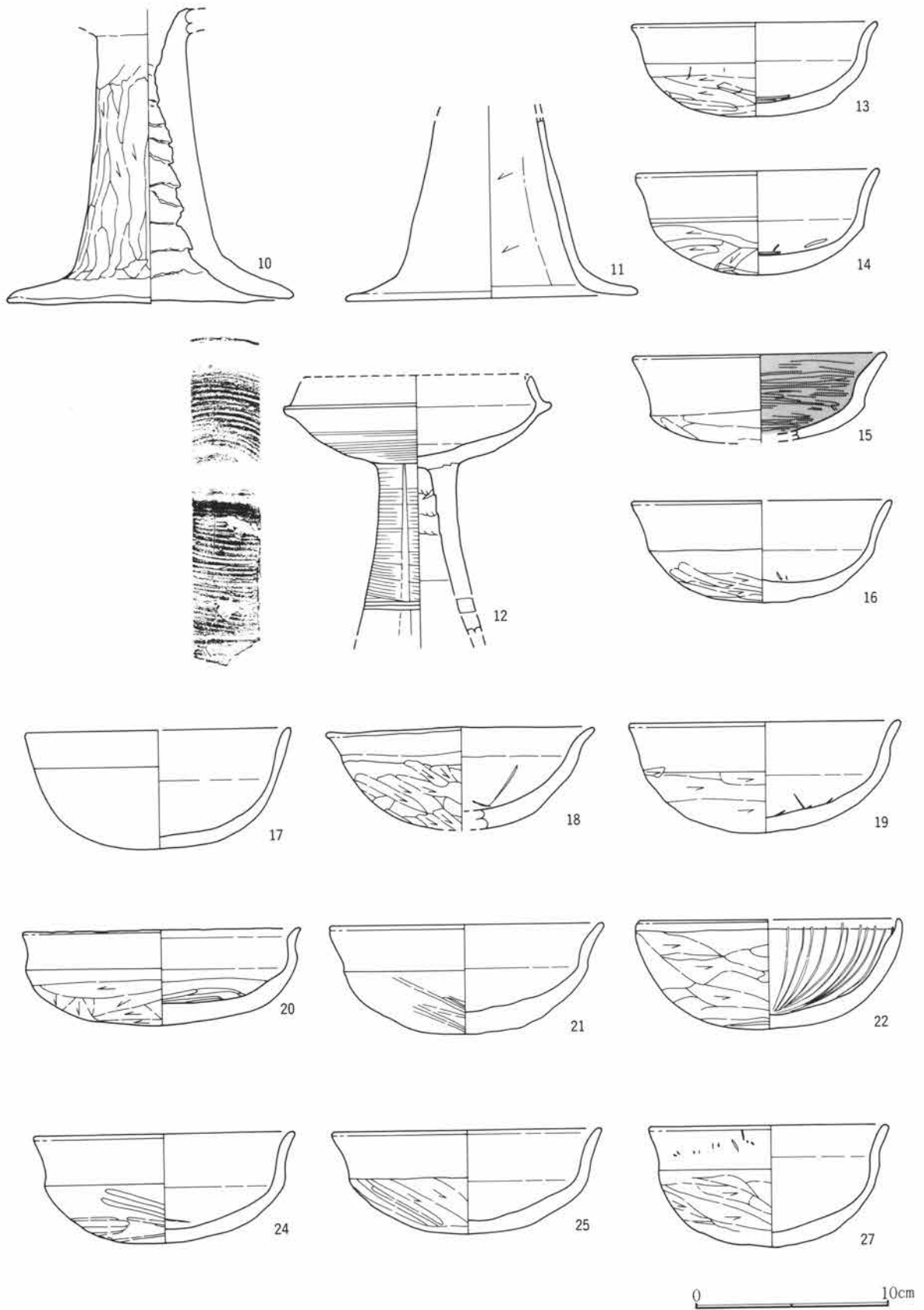
規模 煙道方向96cm、燃烧部幅46cmである。



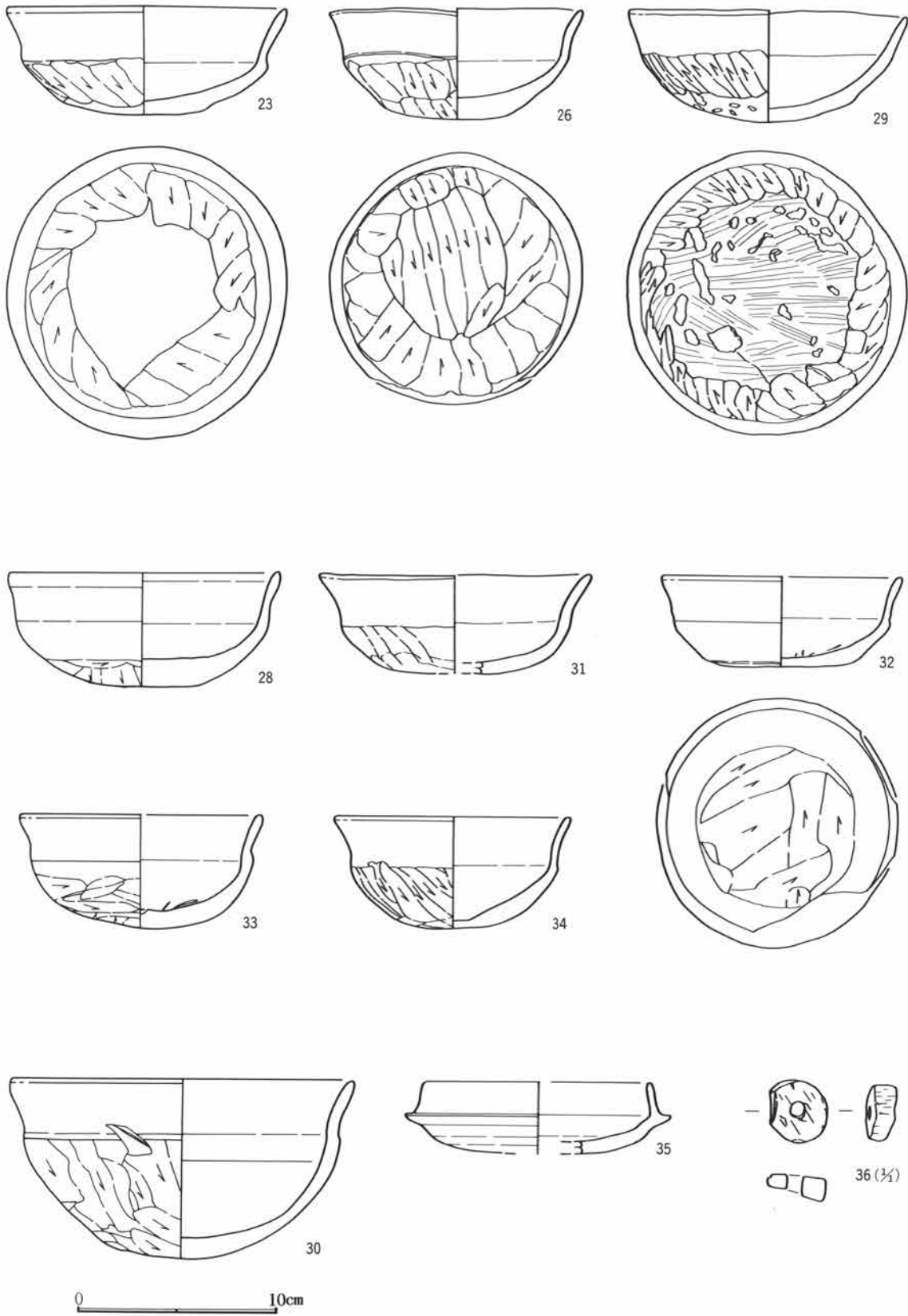
第84図 148号住居跡竈実測図



第85図 148号住居跡出土遺物実測図(1)



第86図 148号住居跡出土遺物実測図(2)



第87図 148号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

148号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
85-1 80	土 師 器 甕	床面直上 完形	口 17.4 高 31.7 底 8.0	①粗、2~4mmの砂粒を大量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・外面下半黒褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移 動は少ない。内面ナデにより器表面密。 均整のとれたていねいなつくりの甕である。
85-2 80	土 師 器 甕	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴上 半 $\frac{1}{2}$ 他完形	口(18.0) 高 34.5 底 7.8	①粗、3~5mmの砂粒を多く含 む。片岩粒が目立つ。②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色一部黒褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表 面が粗い。内面ナデにより器表面密。 全体に均整のとれたていねいなつくりの甕である。
85-3	土 師 器 甕	床面+7 口縁~胴上 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.8) 高 — 底 —	①粗、3~5mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	胴部外面浅いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデ。
85-4	土 師 器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(16.6) 高 — 底 —	①粗、3~6mmの片岩粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。大きな砂粒が目立つが移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
85-5 80	土 師 器 小 型 甕	床面直上 完形	口 17.0 高 14.6 底 9.0	①粗、2~4mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少なく器表面の 粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 器表面に多くの砂粒が目立つ。
85-6 80	土 師 器 小 型 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.0) 高 11.3 底 7.8	①粗、2~3mmの砂粒を多量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表 面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部を高く作り出している。
85-7 80	土 師 器 小 型 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 16.3 高 11.1 底 8.0	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒 を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・外面の一部褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。内 外面とも多くの砂粒が目立つ。
85-8 80	土 師 器 甕	床面直上 完形	口 25.6 高 30.4 底 11.5	①粗、2~4mmの砂粒を大量に 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・胴部外面の一部黒色	底面に一本の棧を持つ。ていねいに貼り付けている。胴部外 面ヘラ削り。多くの砂粒が目立ち器表面が粗い。内面横方向 のナデ後、縦方向の細かなナデ。磨きではない。
85-9 80	土 師 器 小 型 甕	床面+5 ほぼ完形	口 18.8 高 11.8 底 2.8	①粗、1mm前後の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色 胴部外面下半の一部黒色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが粘土がササラ状を 呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部に径23mmの小穴あり。
86-10 80	土 師 器 高 脚 甕	床面直上 脚部ほぼ完 形	口 — 高 — 底 15.0	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒色	脚部外面ヘラナデにより器表面密。内面には輪積痕が鮮明に 残る。 脚部横ナデにより器表面密。
86-11	土 師 器 高 脚 甕	床面+12 脚下半~底 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 15.2	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ナデ。内面ヘラ削りで器内を薄くしている。 黒斑全く認められず、やや胎土が粉状を呈する。
86-12 80	須 恵 器 高 脚 甕	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③灰色	長脚2段透しの有蓋高脚甕である。透しは3面。底部~脚部刷 毛目あり。
86-13 80	土 師 器 甕	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.8 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面は曲線状の刃部を持つヘラによる削り。内側底面中央部 ヘラの圧痕あり。 黒斑全く認められず。14の甕に近い。
86-14 81	土 師 器 甕	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.6 高 5.2 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒をわずか に含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面は曲線状の刃部を持つヘラによる削り。ヘラ削り部の中 央が凹状を呈している。 黒斑全く認められず。13の甕に近い。
86-15 81	土 師 器 甕	床面直上 底一部欠 他ほぼ完形	口 13.2 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面黒色	底面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き後吸炭によ り黒色を呈している。
86-16	土 師 器 甕	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 。 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.6) 高 5.1 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面曲線状の刃部を持つヘラによる削り。底部周辺はナデ。 口縁部横ナデ。内側底面中央部にヘラの圧痕あり。
86-17 81	土 師 器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 。 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.6) 高 6.0 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒 を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 ヘラ削りは認められない。
86-18 81	土 師 器 甕	床面+7 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底 部ほぼ完形	口 14.0 高 5.2 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの部分の一部は光沢を持つ。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。 やや粗雑な感のある甕である。
86-19 81	土 師 器 甕	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口 14.1 高 5.6 底 丸底	①粗、3~4mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なくヘラの単位不明瞭。口縁部 横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面とも多くの砂粒が 目立つ。

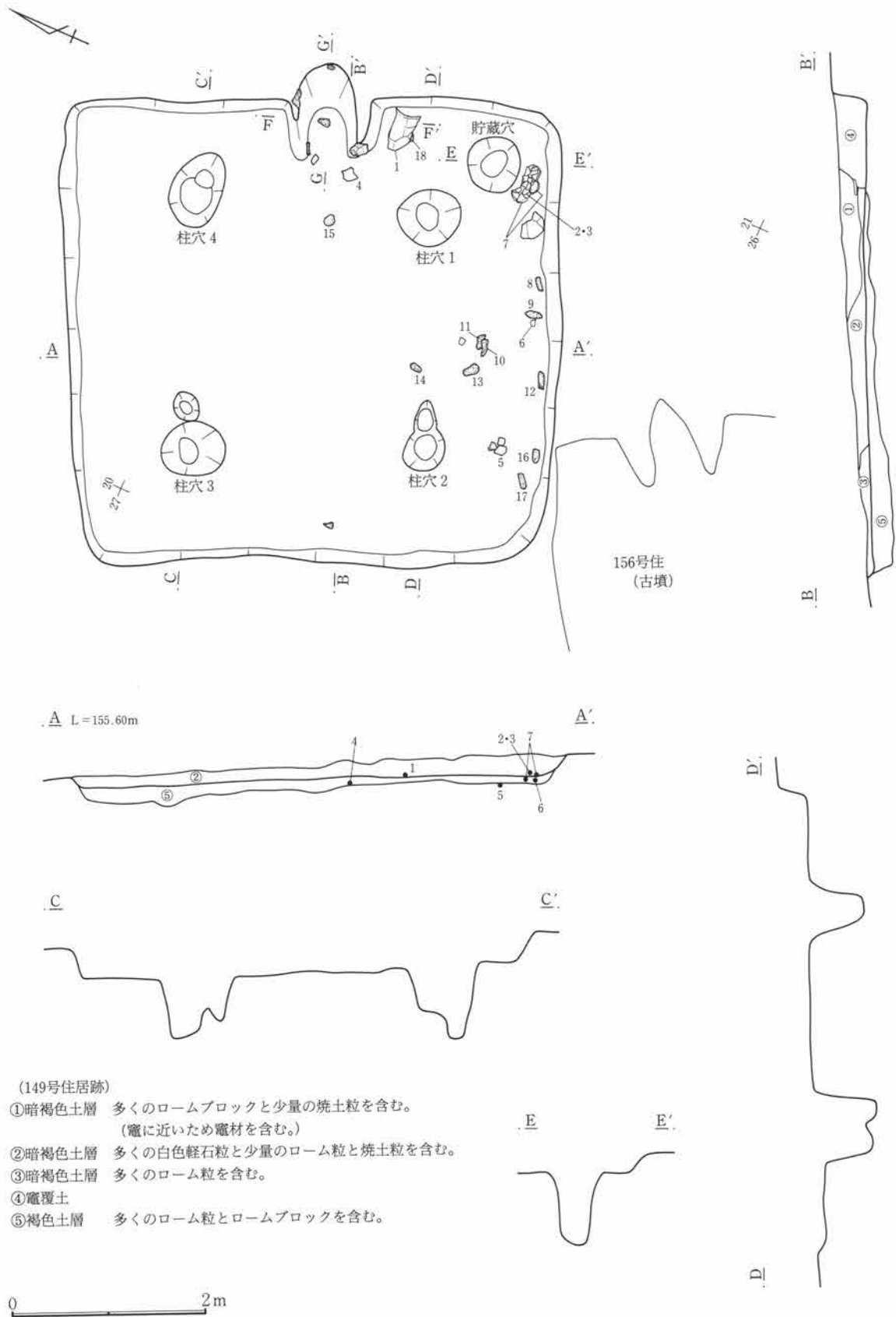
挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
86-20 81	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 14.5 高 4.3 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。4×12mmの砂粒や30×40mmの粘土ブロック等が多く、ヘラの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面指ナデ。底部外面の一部黒斑あり。特に大きな砂粒が目立つ。
86-21 81	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 14.2 高 5.5 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。一部ヘラ磨き状の整形。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 ヘラ削りなし。底部の器肉が厚い。
86-22 81	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口(14.0) 高 5.5 底 丸底	①密、多量の雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動はほとんどなし。内面に多くの放射状のヘラ磨き。 雲母の混入と底面のヘラ削りの特色により他産地製品か。
87-23 81	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 14.2 高 5.4 底 丸底	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底部中央ナデ。底部周辺部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕あり。 整形方法が異質である。胎土は6世紀後半代の壘に近い。
86-24 81	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 13.7 高 5.5 底 丸底	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。一部ヘラ磨き状の整形あり。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 ヘラ削りなし。他の19~21の坏より砂粒は小さく少ない。
86-25 81	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.1 高 5.2 底 丸底	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。一部ヘラナデ。器表面全体がやや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内外面とも、多くの砂粒が目立つ。
87-26 81	土 師 器 坏	覆土 口縁部1/2 底部完形	口 12.8 高 5.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部中央ヘラナデ。周辺部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 やや粗雑な感じの坏である。
86-27 81	土 師 器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.5 高 6.1 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部凸状のヘラによるヘラ削り。削り面が凹状となっている。特に底部周辺にヘラ削りが多く中央部はナデ。
87-28 81	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.7 高 5.6 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部中央ヘラ削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部の厚いやや雑なつくりの坏である。
87-29 81	土 師 器 坏	覆土 完形	口 14.0 高 5.5 底 丸底	①やや粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央部ヘラ磨き。周辺部ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
87-30 81	土 師 器 坏	床面+8 完形	口 17.3 高 8.8 底 丸底	①やや粗、1~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土はわずかに粉状を呈する。
87-31 80	土 師 器 坏	床面+7 口縁1/2 他ほぼ完形	口(13.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面全体ヘラナデと思われ、ヘラ削りは不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部が深く、ヘラ削りも不明のためやや異質な坏である。
87-32 81	土 師 器 坏	床面+6 口縁部1/2 底部完形	口(12.0) 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。粘土がササラ状に移動し器表面やや粗い。底部周辺ナデでヘラ削りなし。口縁部横ナデ。 底部内側にヘラの圧痕あり。
87-33 80	土 師 器 坏	覆土 1/3残存	口(12.4) 高 5.6 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。底部周辺ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕あり。
87-34 81	土 師 器 坏	床面直上 口縁部1/2 底部完形	口 12.0 高 5.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒と粘土の移動によりヘラの単位明瞭。内側底面中央が凹状を呈する。 黒斑は全く認められない。
87-35 81	須 恵 器 坏	床面直上 1/3残存	口(12.1) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。口縁部は細長く内傾している。
87-36 108	石 製 品 白 玉	床面+15 完形	径 1.4 孔径 0.2 厚 0.5 重 0.6 ③灰白色		滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後無調整。発掘時に側面一部欠損。

149号住居跡 (第88~92図、図版14・15・82・112)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、27-21グリッドに位置する。

概要 本住居は南西部分で同じ古墳時代の156号住居と接しており、覆土上面では重複していたものと思われる。残りの悪い住居であり出土遺物も少ない。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られ



第88図 149号住居跡実測図

ており、柱穴が4本掘られていたが、それぞれの柱穴に接して小穴も掘られていた。

規模 東西4.85m、南北5.16mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で28cmである。貯蔵穴は径54cm深さ59cmである。柱穴1は径66cm深さ50cm、柱穴2は径48cm深さ53cm、柱穴3は径68cm深さ74cm、柱穴4は径58cm深さ56cmである。

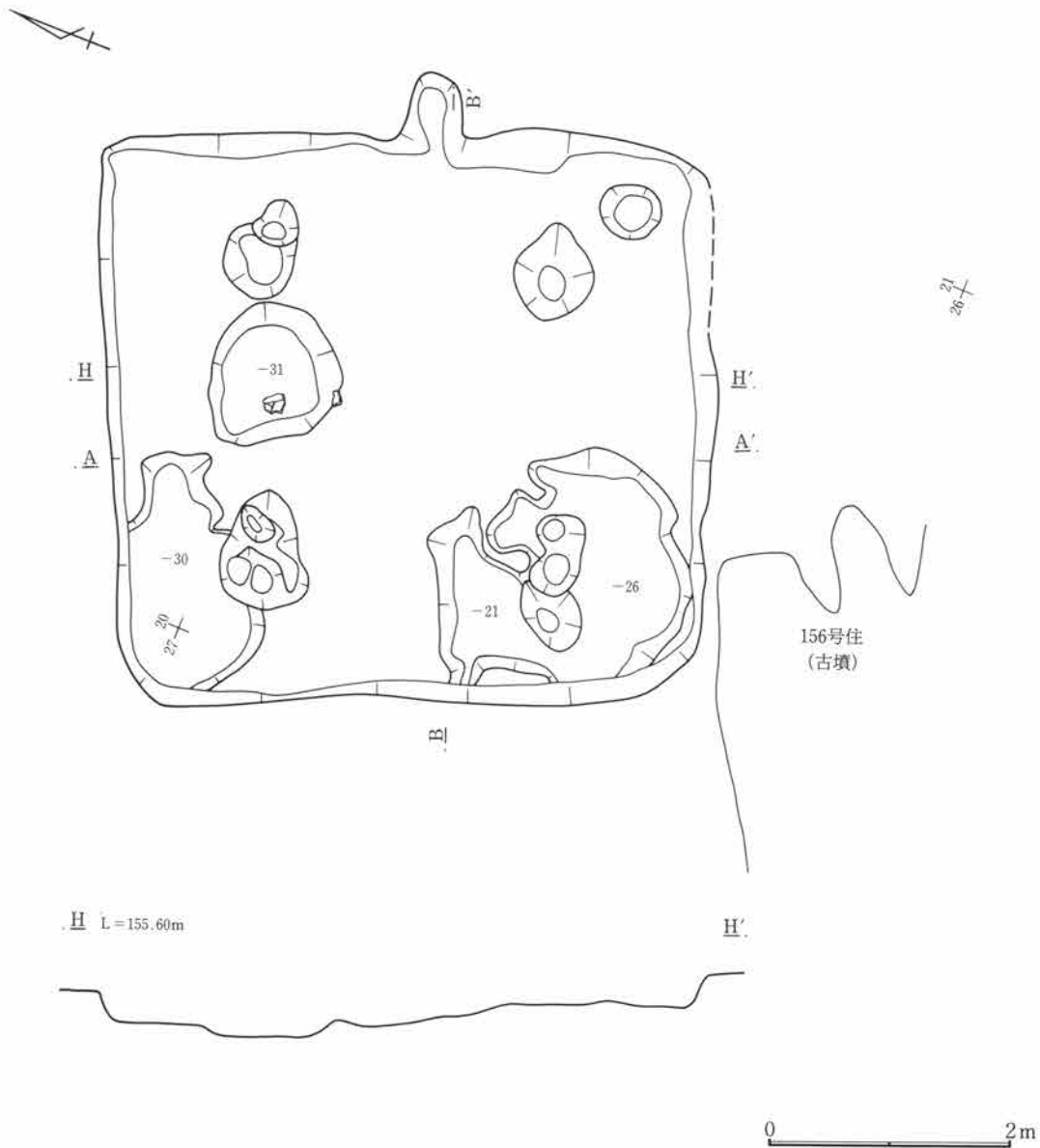
遺物 竈と貯蔵穴右側から土師器の甕が、南壁面付近からこも編み石が多く出土した。

(竈)

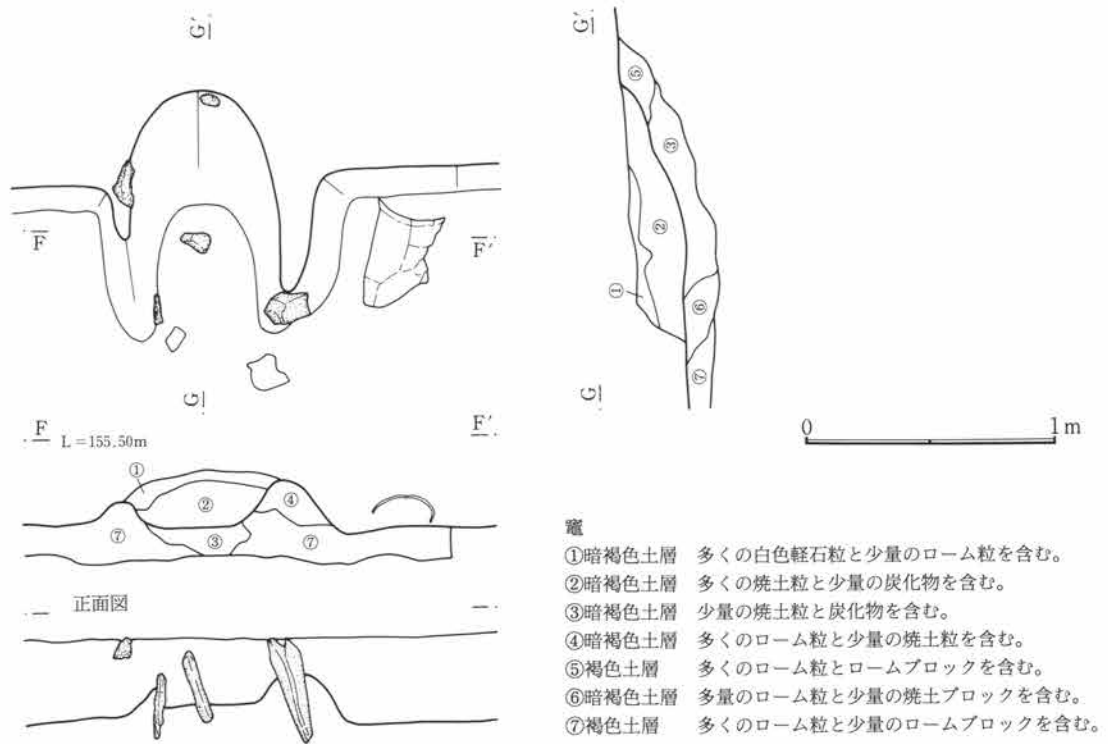
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口の両袖部分と燃烧部中央に支脚石が、ほぼ据えられたと思われる状態で出土した。焚口の天井石は出土しなかった。竈内より多くの焼土粒が出土した。

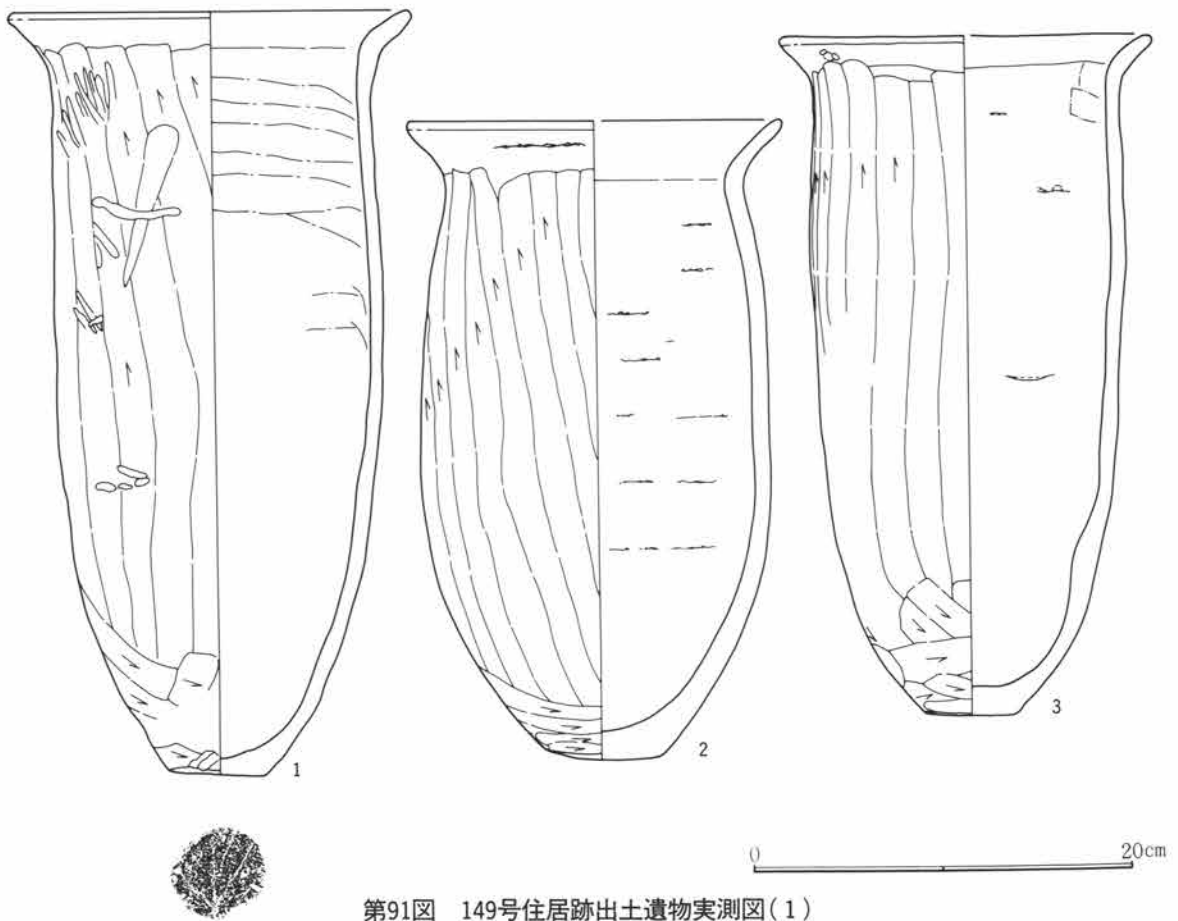
規模 煙道方向98cm、燃烧部幅52cmである。



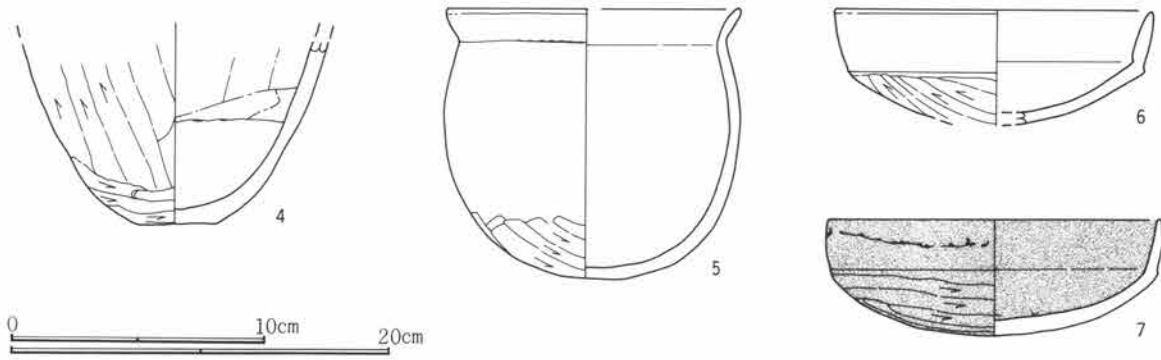
第89図 149号住居跡床下実測図



第90図 149号住居跡竈実測図



第91図 149号住居跡出土遺物実測図(1)



第92図 149号住居跡出土遺物実測図(2)

149号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
91-1 82	土 師 器 甕	覆土 ほぼ完形	口 21.5 高 40.4 底 5.6	①粗、3~5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴部下半黒褐色	底面木葉痕。胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。部分的にへラ磨きあり。 器高が40cm以上と高い長胴甕である。
91-2 82	土 師 器 甕	床面+5 口~胴上部 1/3 底完形	口(20.0) 高 33.8 底 6.4	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ナデ。胴部へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面胴部に輪積痕が残る。胴部外面に多くの粘土が付着している。
91-3 82	土 師 器 甕	床面+5 口縁部1/4 胴~底部1/2	口(19.8) 高 35.7 底 5.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色・一部褐色	底面へラ削り。胴部外面へラ削り。小さな砂粒が多く移動し、器表面やや粗い。内面ナデ。 長胴の甕で口縁部が短く、底部の器肉が厚い。
92-4	土 師 器 甕	口 胴下半~底部 1/2 残存	口 - 高 - 底 4.4	①粗、1~3mmの片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデ。多くの砂粒が目立つ。 内面に粘土の接合痕あり。
92-5 82	土 師 器 小型甕	床面+5 口縁部1/2 胴~底部1/2	口(15.6) 高 14.2 底 丸底	①特に粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③外面にぶい赤褐色・内面黒褐色	底面へラ削り。胴上部ナデ。外面全体に多量の砂粒が目立ち、器表面は特に粗い。内面は密であるが砂粒は目立つ。 3~4mmの片岩粒を少量含む。
92-6 82	土 師 器 坏	覆土 1/2 残存	口 12.6 高 - 底 -	①密、1mm前後の砂粒を多く2mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色一部黒褐色	底面へラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。へらの単位は明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部の一部吸炭によりやや黒褐色を呈している。
92-7 82	土 師 器 坏	床面+2 1/2 残存	口 13.2 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面の一部黒色・他橙色	底面へラ削り。器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部外面~内側内面に黒漆の痕跡あり。
8 112	こも編み石	床面直上	長 11.4 幅 5.9 厚 4.8 重 550		絹雲母石墨片岩。短い肉厚な石である。片側の側面が打ち欠かれて凹状を呈する。
9 112	こも編み石	床面直上	長 15.0 幅 5.8 厚 3.0 重 410		点紋緑泥片岩。片側の側面中央部に小さな凹状部を呈する。
10 112	こも編み石	床面+2	長 15.8 幅 7.3 厚 2.8 重 530		石墨緑泥片岩。やや偏平な石である。側面にゆるやかな凹状を呈する。
11 112	こも編み石	床面+2	長 13.8 幅 8.2 厚 3.7 重 625		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹凸部が認められる。
12 112	こも編み石	床面+2	長 15.0 幅 6.6 厚 3.6 重 660		石墨緑泥片岩。両側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
13 112	こも編み石	床面+1	長 12.4 幅 8.1 厚 3.0 重 530		絹雲母石墨片岩。幅の広いやや偏平な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
14 112	こも編み石	床面+4	長 11.7 幅 6.4 厚 3.7 重 435		点紋緑泥片岩。両側面中央部にわずかな凹凸部を持つ。
15 112	こも編み石	床面-3	長 13.4 幅 9.0 厚 3.0 重 545		絹雲母石墨片岩。幅の広い石で両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
16 112	こも編み石	床面-3	長 13.0 幅 6.5 厚 2.6 重 400		絹雲母石墨片岩。片側の側面が浅く縦長に打ち欠かれ凹状を呈している。
17 112	こも編み石	床面直上	長 17.0 幅 6.2 厚 1.8 重 340		絹雲母片岩。細長く偏平な石である。側面はゆるやかな凹状を呈している。
18 112	こも編み石	床面+2	長 12.4 幅 6.2 厚 3.0 重 350		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。

156号住居跡 (第93～95図、図版15)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、26-21グリッドに位置する。

概要 本住居は南西部分で同じ古墳時代の157号住居と北東部分で149号住居と接している。おそらく2軒とも覆土上面では重複していたものと思われる。残りの悪い住居であり出土遺物も少ない。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、貯蔵穴の南東で住居のコーナー部分に小穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.36m、南北3.51mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で17cmである。貯蔵穴は径56cm深さ43cmである。小穴は径35cm深さ14cmである。

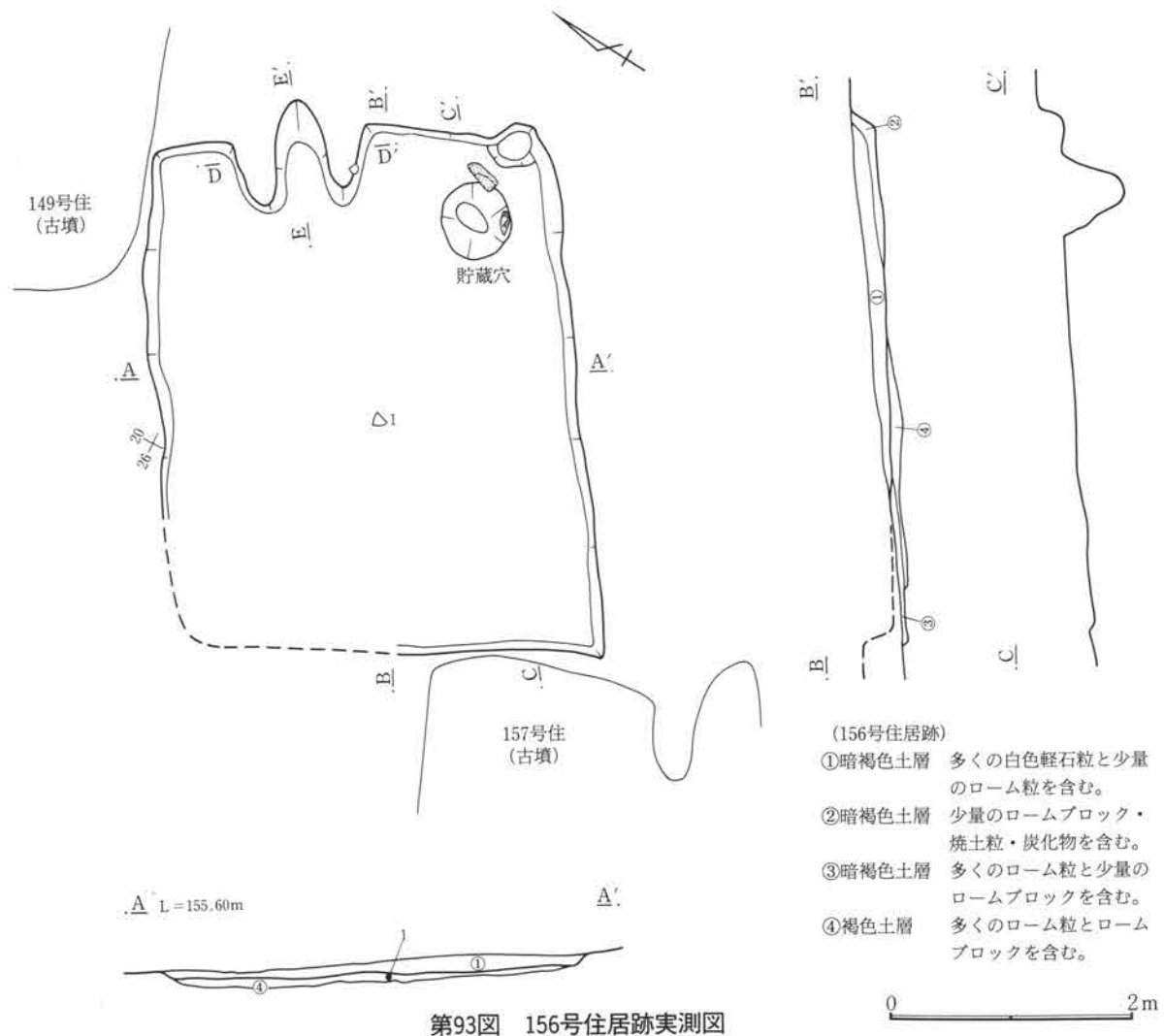
遺物 破片を含めて18点の土器しか出土していない。

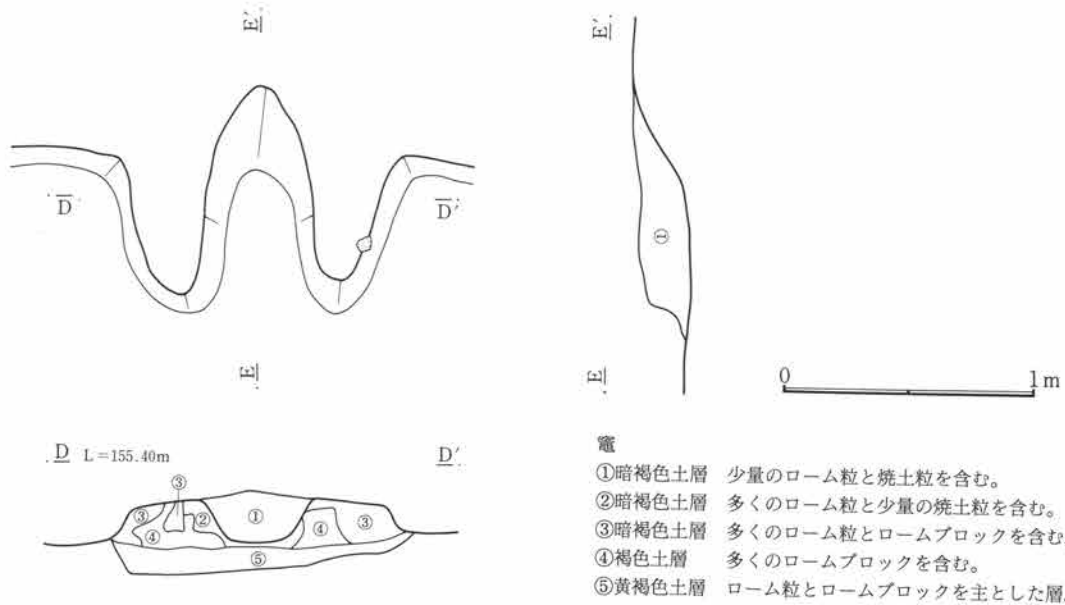
(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

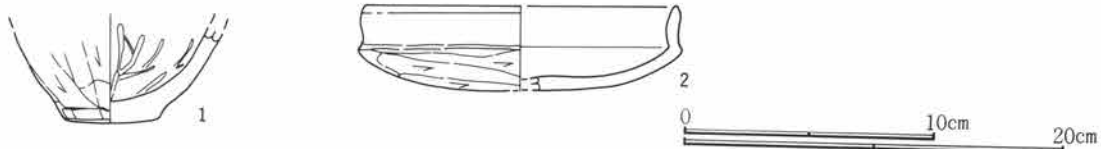
構造 竈内や焚口付近から石は全く出土しなかった。ロームを主に用いて造られた竈であったものと思われる。左側の袖部上面に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向87cm、燃烧部幅41cmである。





第94図 156号住居跡竈実測図



第95図 156号住居跡出土遺物実測図

156号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
95-1	土 師 器 甕	床面+3 胴下半~底 部ほぼ完形	口 — 高 — 底 5.0	①やや粗、1mm前後の砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。胴外面ヘラ削り。内面でいねいなナデ後ヘラ 磨き。
95-2	土 師 器 坏	覆土 破片	口(12.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。

157号住居跡 (第96~100図、図版15・16・82・83)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、25・26-20グリッドに位置する。

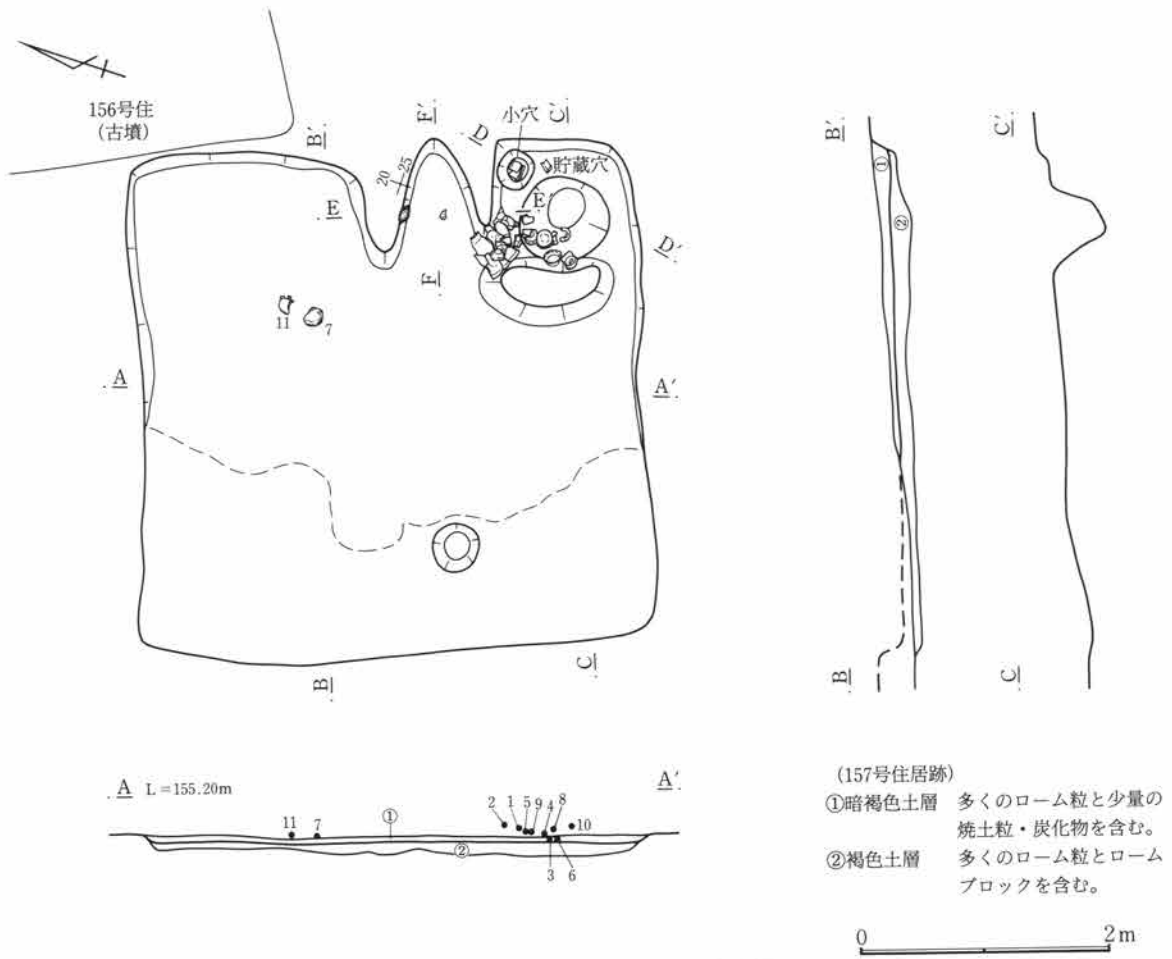
概要 残りの悪い住居であり、竈の造られていた住居の東側部分の壁面と床面は僅かに残っていたが、西側の床面1/3は残っていなかった。本住居は北東部分で同じ古墳時代の156号住居と接している。おそらく覆土上面では重複していたものと思われる。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、状態は悪かった。貯蔵穴が竈右側に掘られており、貯蔵穴の西の床面部分に帯状の僅かな高まりが認められた。貯蔵穴の北東部分に小穴が掘られており、内から土師器甕の口縁部が出土した。柱穴は掘られていなかった。

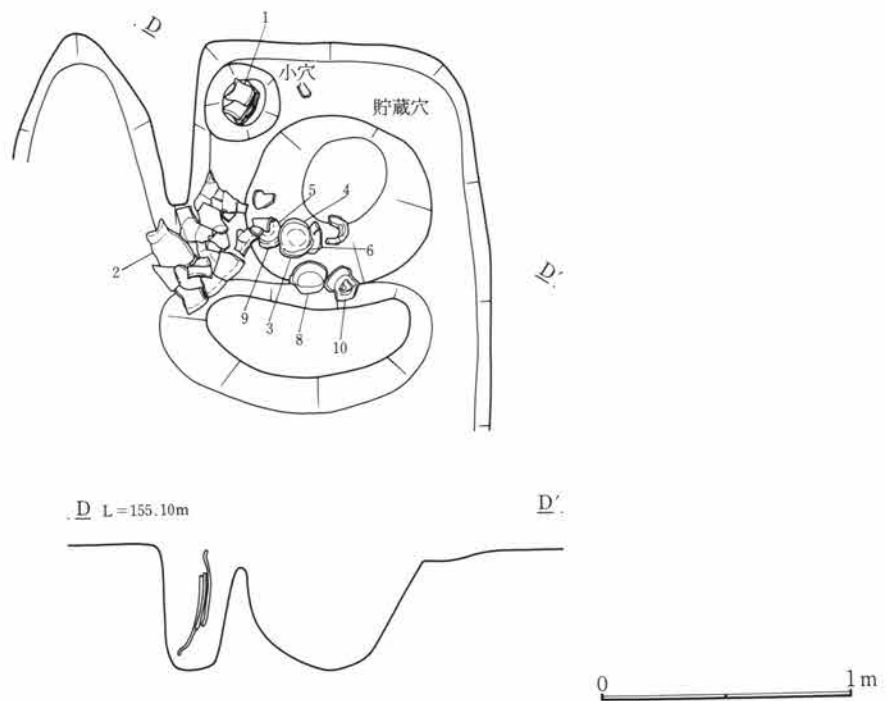
規模 東西4.03m、南北4.05mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で9cmである。貯蔵穴は径65cm深さ31cmである。貯蔵穴西側の帯状の高まりは約3cmである。

遺物 貯蔵穴手前部分に集中して土師器の甕や坏が出土している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第96図 157号住居跡実測図



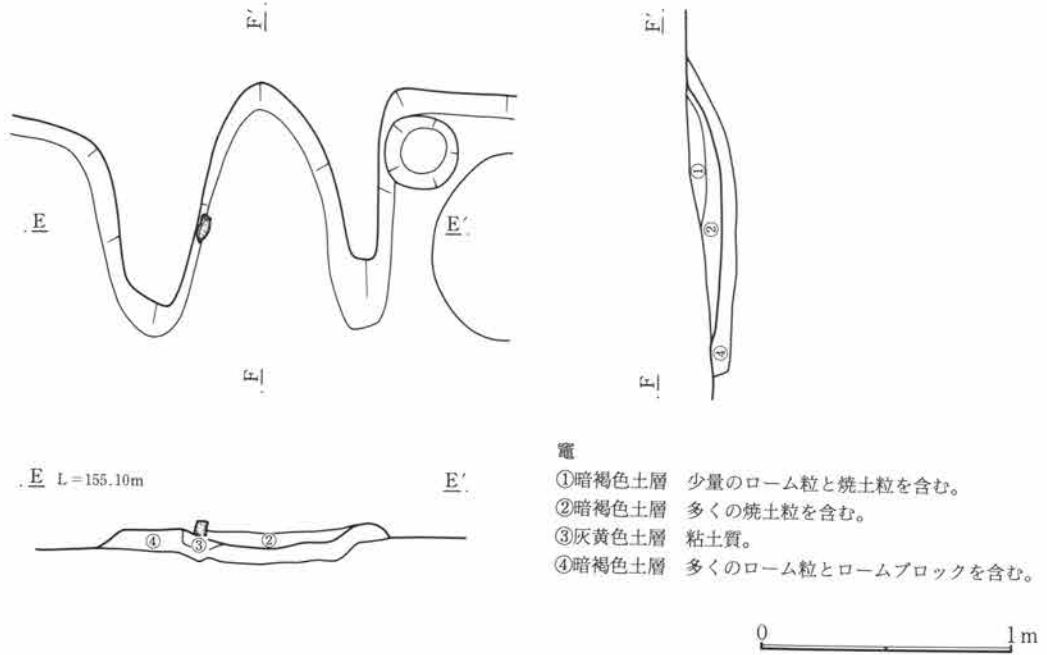
第97図 157号住居跡貯蔵穴付近実測図

(竈)

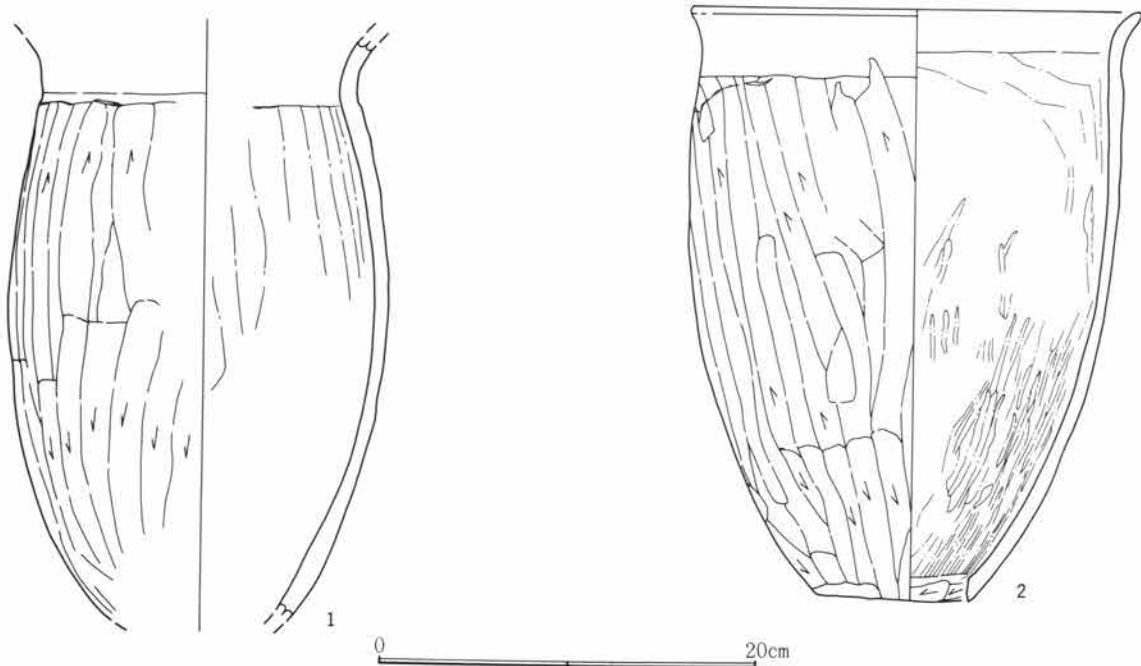
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りの悪い竈であり、上の部分は削り取られて残っていなかった。竈内より小さな石が2個出土したが、いずれも小破片であった。竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向98cm、燃焼部幅55cmである。

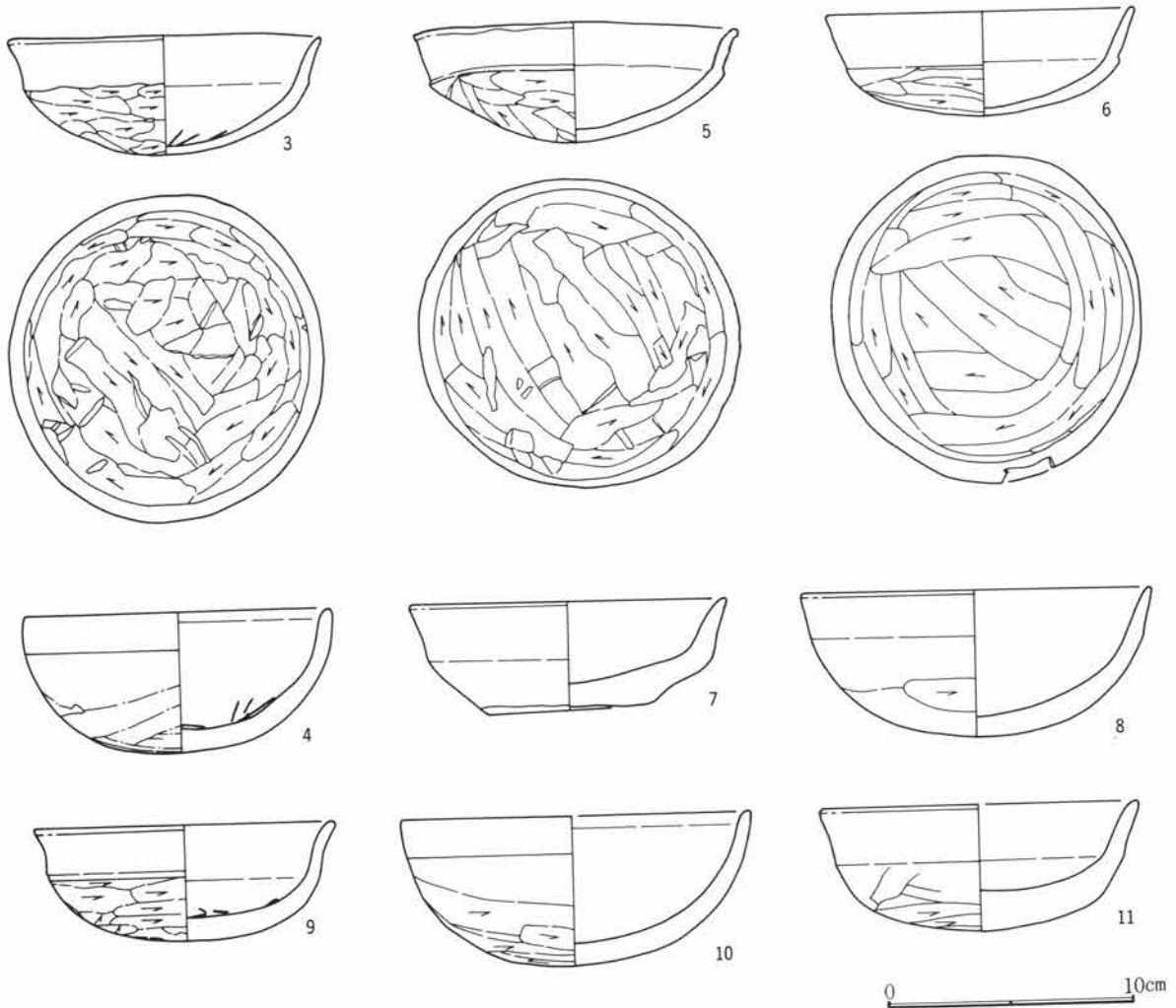


第98図 157号住居跡竈実測図



第99図 157号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第100図 157号住居跡出土遺物実測図(2)

157号住居跡出土遺物観察表

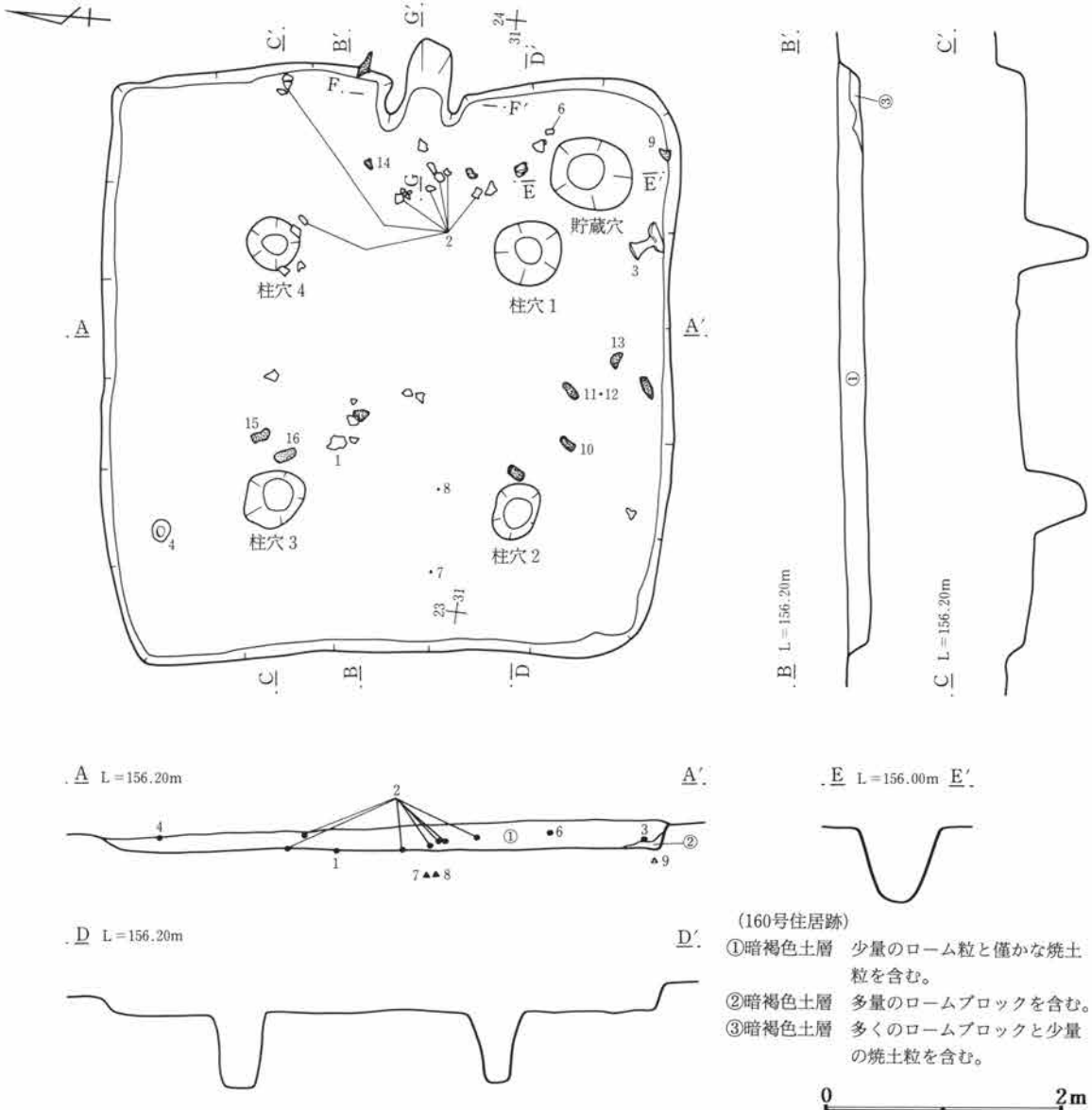
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
99-1 82	土 師 器 甕	ピット内 口縁・底部 欠他 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 —	①粗、3~5mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面~胴上部橙色・下部黒褐色	胴部外面強いヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
99-2 82	土 師 器 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 28.3 高 31.7 底 8.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。内面ナデとヘラ磨きにより器表面密。
100-3 83	土 師 器 坏	貯蔵穴内 完形	口 12.8 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細かなヘラナデ。砂粒の移動は少なく器表面密。部分的に光沢を持つ。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕あり。
100-4 83	土 師 器 坏	貯蔵穴内 床面直上 完形	口 12.6 高 5.5 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削りも一部行なわれているが、多くはナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
100-5 83	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面の一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に歪んでいる。
100-6 83	土 師 器 坏	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 12.6 高 4.2 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が密でヘラの単位明瞭でなく、ヘラの新旧関係は明確でない。口縁部横ナデ。黒斑全く認められずいねいなつくりの坏である。
100-7 83	土 師 器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 12.8 高 4.3 底 6.7	①やや粗、1mm前後の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。器肉が厚く器高の低い異質の坏である。全体に少し歪んでいる。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
100-8 83	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 14.4 高 5.9 底 丸底	①粗、1~4mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。一部ヘラ削りの痕跡あり。口縁部横ナデ。口縁部 以外のほぼ全面に多くの砂粒が目立つ。 稜は全く認められない。
100-9 83	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.3 高 4.6 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の狭いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面 面密。
100-10 83	土師器 坏	床面直上 口縁部1/3 底部1/3	口(14.4) 高 5.9 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密 であるが、多くの砂粒が目立つ。
100-11 83	土師器 坏	床面+3 口縁部小破 片 底部1/3	口(13.5) 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③外面 にぶい橙色・内面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより密。 吸炭により黒色を呈する。 器肉が異常に厚い坏である。

160号住居跡 (第101~104図、図版16・83・108・110・113)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31・32-23グリッドに位置する。

概要 住居の残りは特に悪い状態ではなかったが、竈の残りが悪かった。



第101図 160号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西4.94m、南北4.85mである。壁高は残りの良い南壁面で2cmで、貯蔵穴は径68cm深さ67cmである。柱穴1は径58cm深さ61cm、柱穴2は径40cm深さ65cm、柱穴3は径50cm深さ56cm、柱穴4は径46cm深さ57cmである。

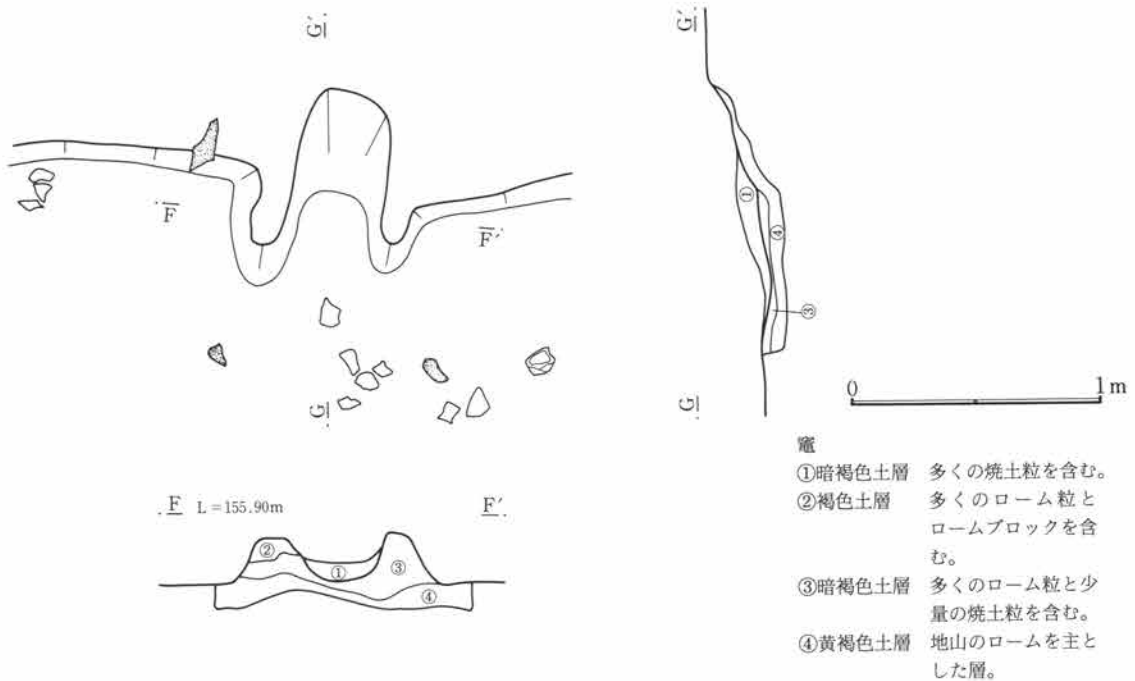
遺物 図示した他に土師器甕の破片が多く出土している。砥石と鉄鏃の出土が目される。

(竈)

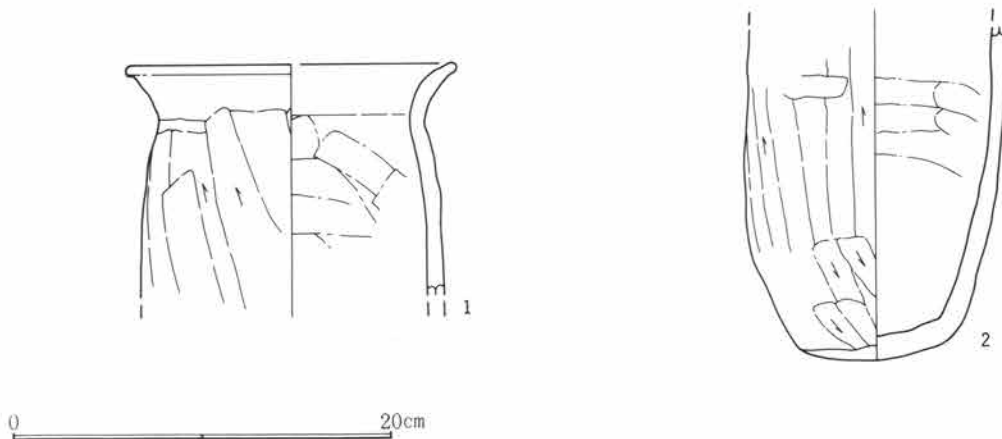
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの悪い竈であり、上の部分は削り取られて残っていなかった。竈内より石の出土はなく、燃烧部分を中心として多くの焼土粒が出土した。

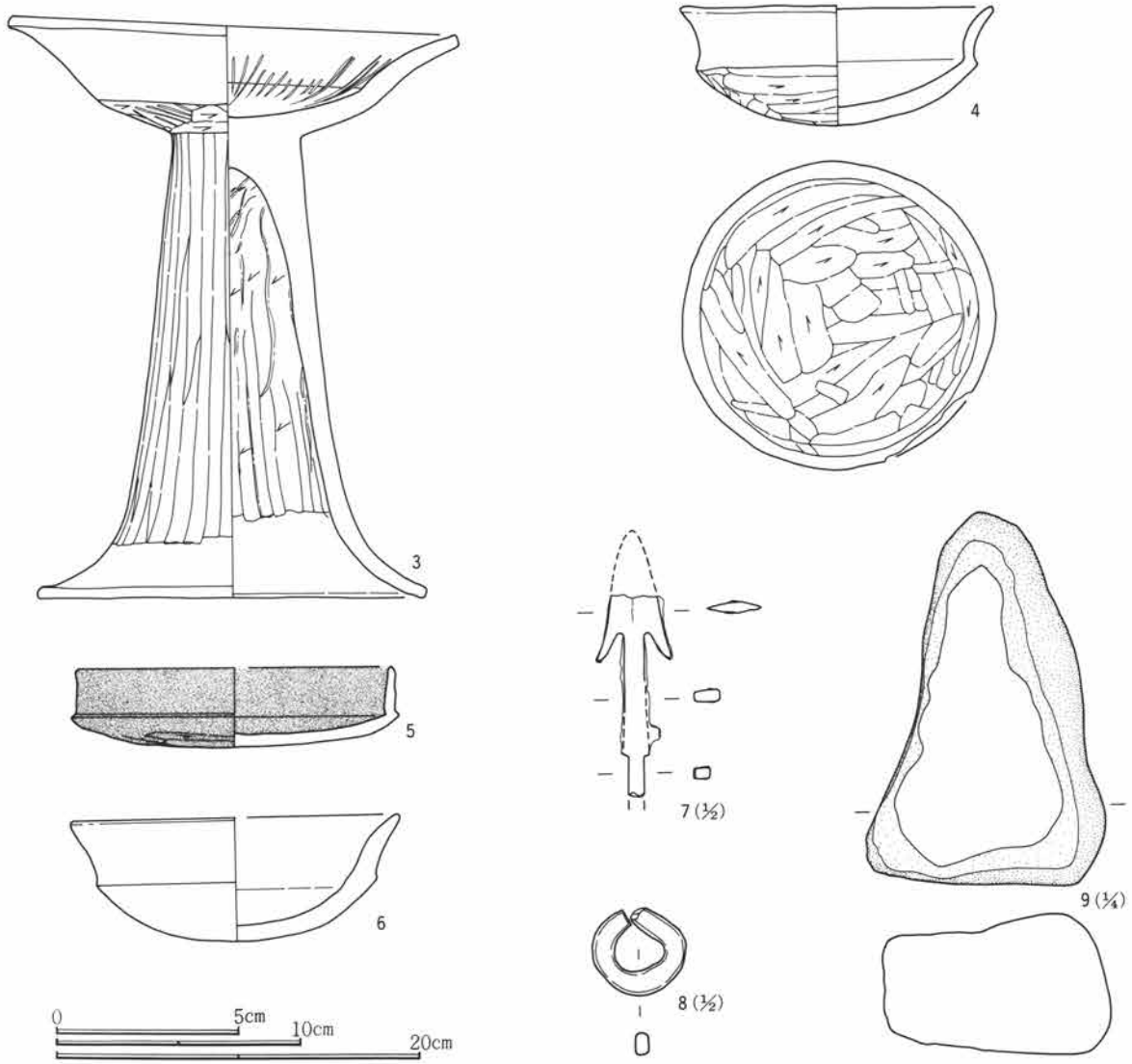
規模 煙道方向76cm、燃烧部幅35cmである。



第102図 160号住居跡竈実測図



第103図 160号住居跡出土遺物実測図(1)



第104図 160号住居跡出土遺物実測図(2)

160号住居跡出土遺物観察表

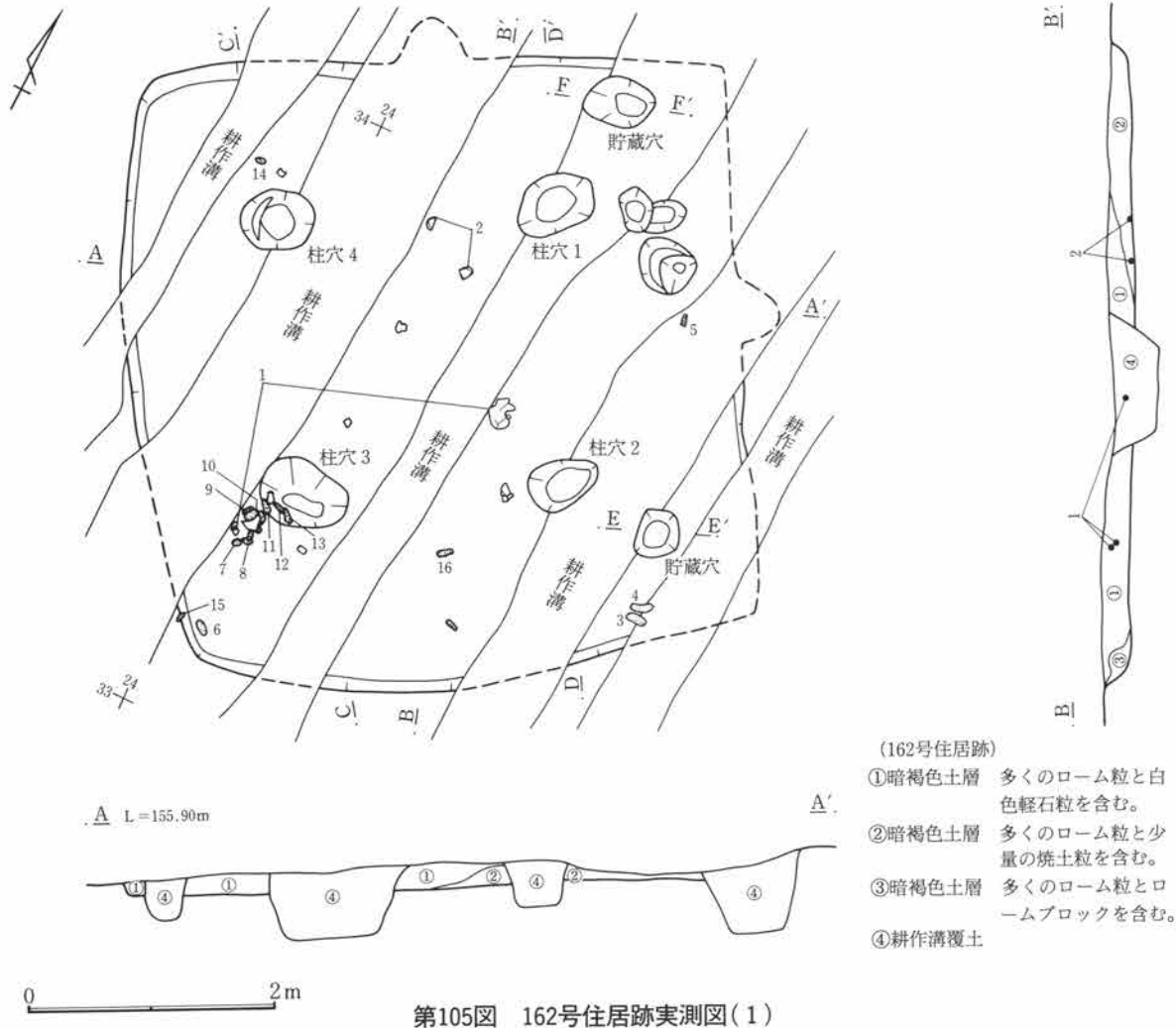
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
103-1	土師器 甕	床面+11 口縁部~胴 上部1/2残存	口(17.6) 高— 底—	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面粗れている。口縁部横ナデ。内面ナデ。
103-2 83	土師器 甕	床面直上 胴下半~底 部1/2残存	口— 高— 底7.0	①粗、1~4mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底面ナデ。胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。へらの単位は明瞭でない。内面ナデにより器表面密。大小の砂粒が内外面に目立つ。
104-3 83	土師器 高坏	床面+10 坏部1/2 他完形	口18.2 高23.3 底17.8	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面へらナデで器表面密。内部へら削りにより輪積痕を削り取っている。坏底部へら削り。口縁部横ナデ。脚の長い高坏である。
104-4 83	土師器 坏	床面+4 完形	口12.8 高4.9 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へらナデ。ナデの部分は器表面密。底部周辺の一部はナデのみの部分あり。口縁部横ナデ。内面ナデ。一部分に歪みあり。
104-5	土師器 坏	覆土 口縁部小破 片 底部1/2	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面弱いへら削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭により黒褐色。
104-6	土師器 坏	床面+15 破片	口(13.6) 高5.0 底丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	器表面全体が粗れており、へら削り等の痕跡は確認できない。胎土がやや粉状を呈する。

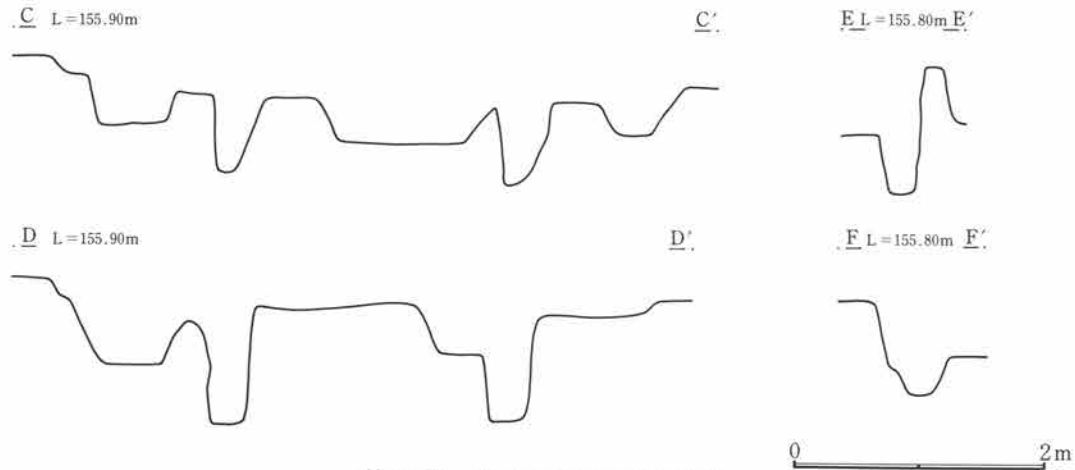
第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
			長	幅	厚		
104-7 108	鉄製品 鉄 鎌	覆土	長 5.5 厚 0.5	幅 2.1 重 5.70			先端部は欠損しているが、鎌身部に逆刺部を持つ鉄鎌であり、関部も比較的良好に残る。
104-8 108	鉄製品 耳環 ?	覆土 完形	長 2.4 厚 0.5	幅 2.6 重 6.50			断面は丸ではなく隅丸の長方形である。耳環に似ているが、用途及び名称不明。
104-9 110	石製品 砥石	覆土	長 20.4 厚 6.5	幅 12.1 重 2,900			安山岩。一面を砥石として利用している。自然石で他に加工痕なし。
10 113	こも編み石	床面+10	長 13.0 厚 3.0	幅 8.1 重 640			緑簾緑泥片岩。偏平な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
11 113	こも編み石	床面+7	長 13.3 厚 4.0	幅 7.8 重 570			絹雲母石墨片岩。片側の側面が大きく欠損している。
12 113	こも編み石	床面+7	長 19.0 厚 4.2	幅 5.7 重 640			絹雲母石墨片岩。細長い石である。側面にわずかな凹凸部が認められる。
13 113	こも編み石	床面直上	長 14.8 厚 4.2	幅 6.5 重 650			絹雲母石墨片岩。両側面に明瞭な凹凸部は認められない。
14 113	こも編み石	床面+4	長 14.2 厚 3.4	幅 8.7 重 660			点紋絹雲母石墨片岩。偏平で幅の広い石である。両側面に明瞭な凹凸部は認められない。
15 113	こも編み石	床面+3	長 16.3 厚 3.5	幅 6.5 重 630			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
16 113	こも編み石	床面+2	長 18.4 厚 3.5	幅 7.4 重 750			緑簾緑泥片岩。両側面中央に凹凸部が認められる。

162号住居跡 (第105~107図、図版17・83・113)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、34-25グリッドに位置する。





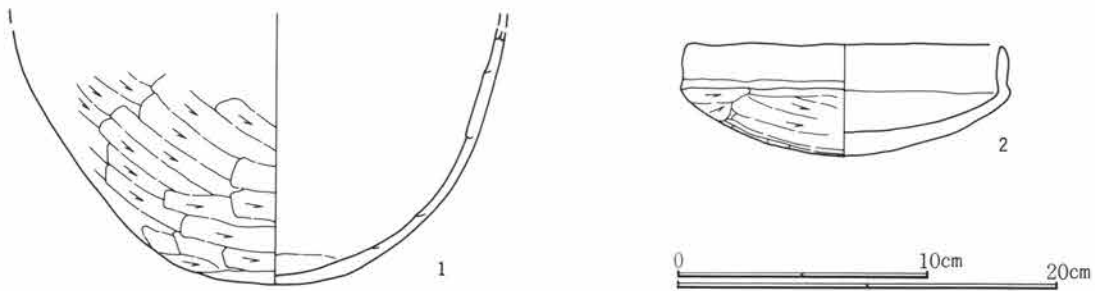
第106図 162号住居跡実測図(2)

概要 表土の流失が多く住居の残りの悪い地区であり、さらに南北方向に走る5本の耕作溝により住居の多くの部分が床下まで掘り込まれていた。そのため非常に残りの悪い住居であった。竈の造られる北・東壁面中央部も耕作溝により掘り抜かれ残っていない。北壁面近くの覆土より焼土粒が出土していることや、北東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が掘られていることにより、北壁面に竈の造られた可能性がある。また南東コーナー部分にも貯蔵穴と思われる小穴が掘られているため、東壁面にも竈が築かれていた可能性がある。

構造 床面の残りは悪かった。ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴と思われる小穴が前述のように想定されるそれぞれの竈の右側に、また柱穴が4本掘られていた。

規模 東西5.01m、南北4.91mである。壁高は残りの良い南壁面で15cmである。北東コーナー部分の貯蔵穴は径41cm深さ70cm、南東コーナー部分の貯蔵穴は径39cm深さ86cmである。柱穴1は径46cm深さ84cm、柱穴2は径39cm深さ86cm、柱穴3は径58cm深さ62cm、柱穴4は径49cm深さ62cmである。

遺物 全体に出土量が少なく、図示できた遺物も少ない。



第107図 162号住居跡出土遺物実測図

162号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
107-1 83	土師器 壺	床面+11 胴下半~底 部1/2	口 — 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・底部外面黒褐色	底部や胴部外面ヘラ削りにより、小さな砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。ヘラ削りにより器肉を薄く一定に仕上げている。
107-2 83	土師器 坏	床面直上 口縁部1/2 底部1/2残存	口 12.4 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面幅の広いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体的に少し歪んでいる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
			長	幅	重		
3 113	こも編み石	床面+15	長 16.0 厚 3.3	幅 7.0	重 540		絹雲母石墨緑泥片岩。片側の側面が大きく打ち欠かされている。他の側面の凹凸部は認められない。
4 113	こも編み石	床面+15	長 13.5 厚 2.5	幅 6.3	重 350		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
5 113	こも編み石	床面-20	長 16.4 厚 2.2	幅 6.7	重 420		緑簾緑泥片岩。片側の側面に小さな凹凸部が数個見られる。他の側面は浅く打ち欠かされている。
6 113	こも編み石	床面+5	長 13.6 厚 4.1	幅 5.7	重 440		絹雲母石墨片岩。肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
7 113	こも編み石	床面+15	長 15.5 厚 2.9	幅 4.7	重 385		点紋絹雲母石墨片岩。断面は三角形を呈し、側面に小さな凹凸部が認められる。
8 113	こも編み石	床面+16	長 12.0 厚 2.5	幅 4.7	重 260		点紋緑簾緑泥片岩。側面中央部にわずかな凹凸部を持つ。
9 113	こも編み石	床面+22	長 15.3 厚 3.0	幅 3.8	重 285		石墨緑泥片岩。細長い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
10 113	こも編み石	床面+9	長 11.6 厚 2.7	幅 5.3	重 274		石墨雲母片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
11 113	こも編み石	床面+17	長 13.3 厚 3.1	幅 5.1	重 300		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
12 113	こも編み石	床面+7	長 12.3 厚 3.6	幅 4.6	重 330		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
13 113	こも編み石	床面+9	長 11.6 厚 3.5	幅 4.5	重 250		絹雲母石墨片岩。1つの面が大きく欠損している。側面に凹凸部は認められない。
14 113	こも編み石	床面+9	長 14.5 厚 2.6	幅 5.3	重 288		絹雲母石墨片岩。片側の側面がわずかに打ち欠かれて凹状部を持つ。
15 113	こも編み石	床面-13	長 11.6 厚 1.8	幅 4.5	重 145		絹雲母石墨片岩。1つの面が全体に欠損。凹凸部不明瞭。
16 113	こも編み石	床面-2	長 12.3 厚 2.1	幅 5.5	重 220		緑簾緑泥片岩。片側の側面にわずかな凹凸部が認められる。

164号住居跡（第108～111図、図版17・83・84・109）

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、28・29—23グリッドに位置する。

概要 本住居は南西部分で同じ古墳時代の148号住居と重複しており、148号住居の北壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。また北側の竈に近い部分で平安時代の163号住居と接している。北壁面に新北竈が東壁面に旧東竈が造られていたが、住居の周辺には多くの小穴が掘られており、2基の竈はこれらの小穴により壊されていた。新北竈は床面上に袖部が少し残っており、4個の石が竈部分から出土した。旧東竈は3個の石と床面に近い覆土部分より少量の焼土粒が出土したが、床面部分の袖部は取り外されて残っていなかった。

構造 床面は残りが悪かったが、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。新旧の竈に伴うと思われる貯蔵穴がそれぞれの竈右側に掘られていた。新北竈に伴うと思われる貯蔵穴の南東部に接して小穴が掘られていた。床面に攪乱等による多くの小穴が掘られていたが、柱穴は4本と思われる。

規模 東西5.65m、南北5.47mである。壁高は残りの良い南壁南側部分で19cmである。新貯蔵穴は径59cm深さ97cm、旧貯蔵穴は径45cm深さ73cmである。柱穴1は径31cm深さ76cm、柱穴2は径54cm深さ48cm、柱穴3は径47cm深さ38cm、柱穴4は径30cm深さ69cmである。

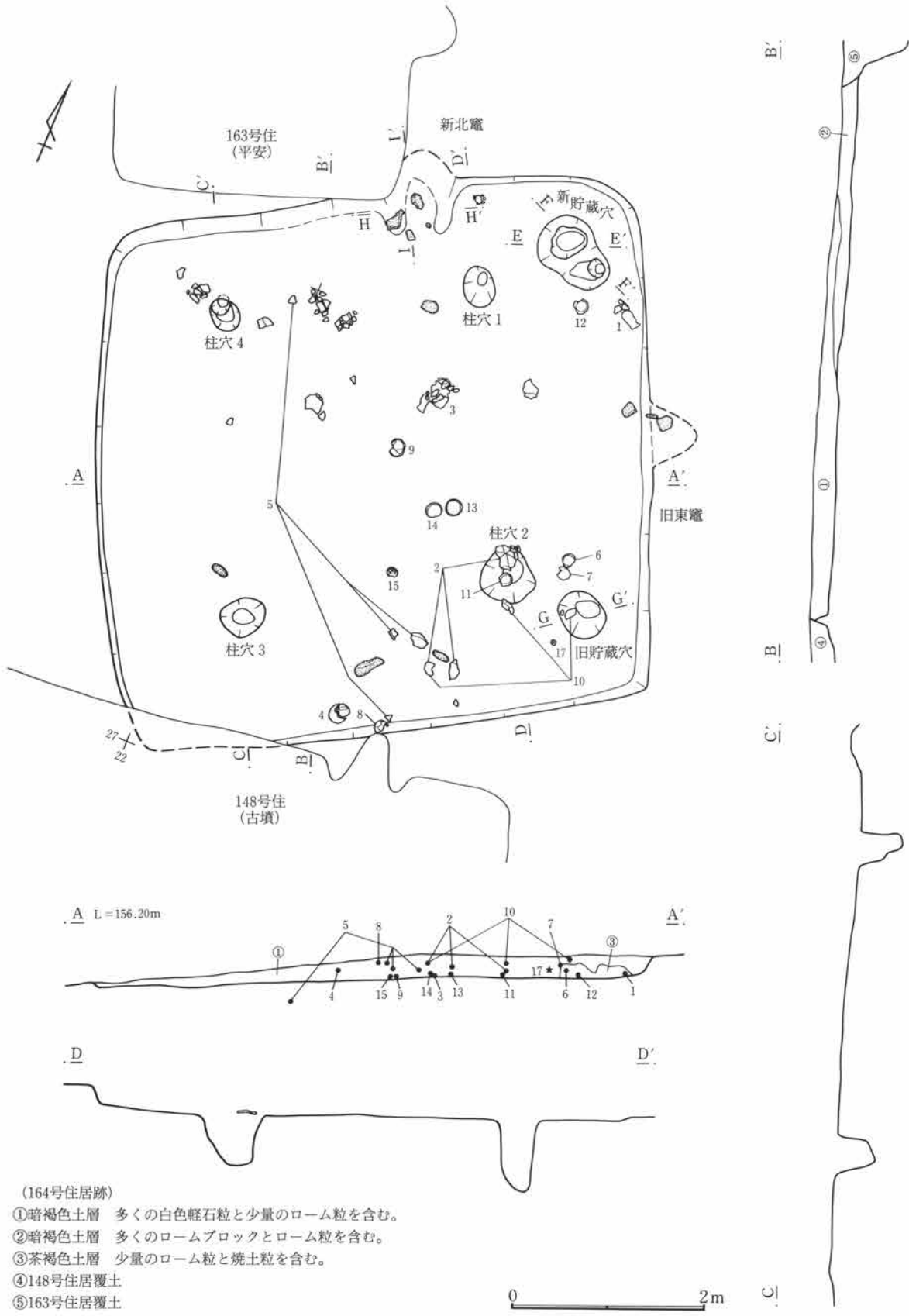
遺物 多くの土師器の甕と坏が出土している。

（新北竈）

位置 住居北壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 小穴により多くの部分が掘り込まれ残りは非常に悪かった。床面上に位置する袖は悪い状態ではある

が残っていた。竈内より4個、手前部分に1個の石が、また竈内より多くの焼土粒が出土した。



第108図 164号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

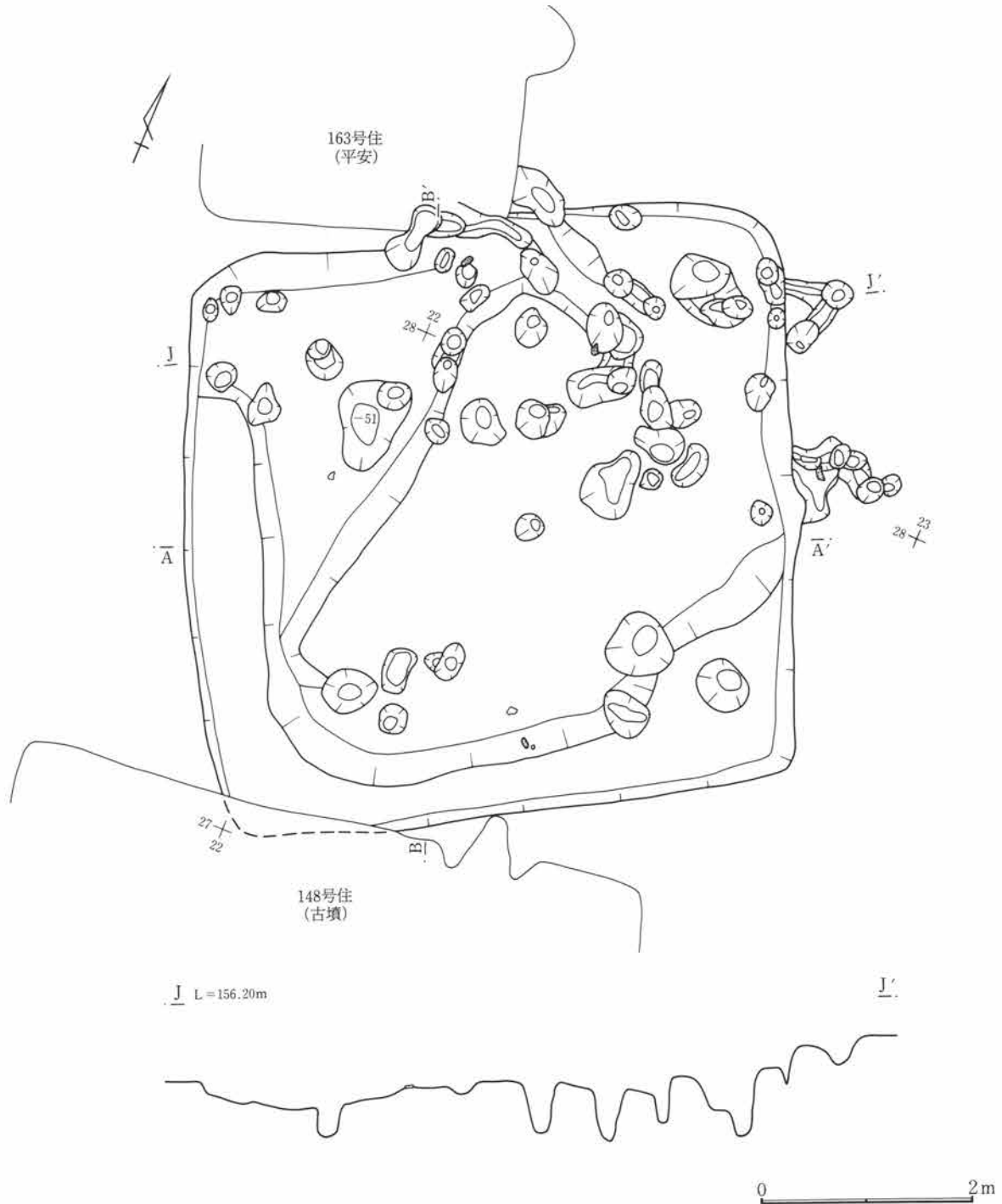


新貯蔵穴

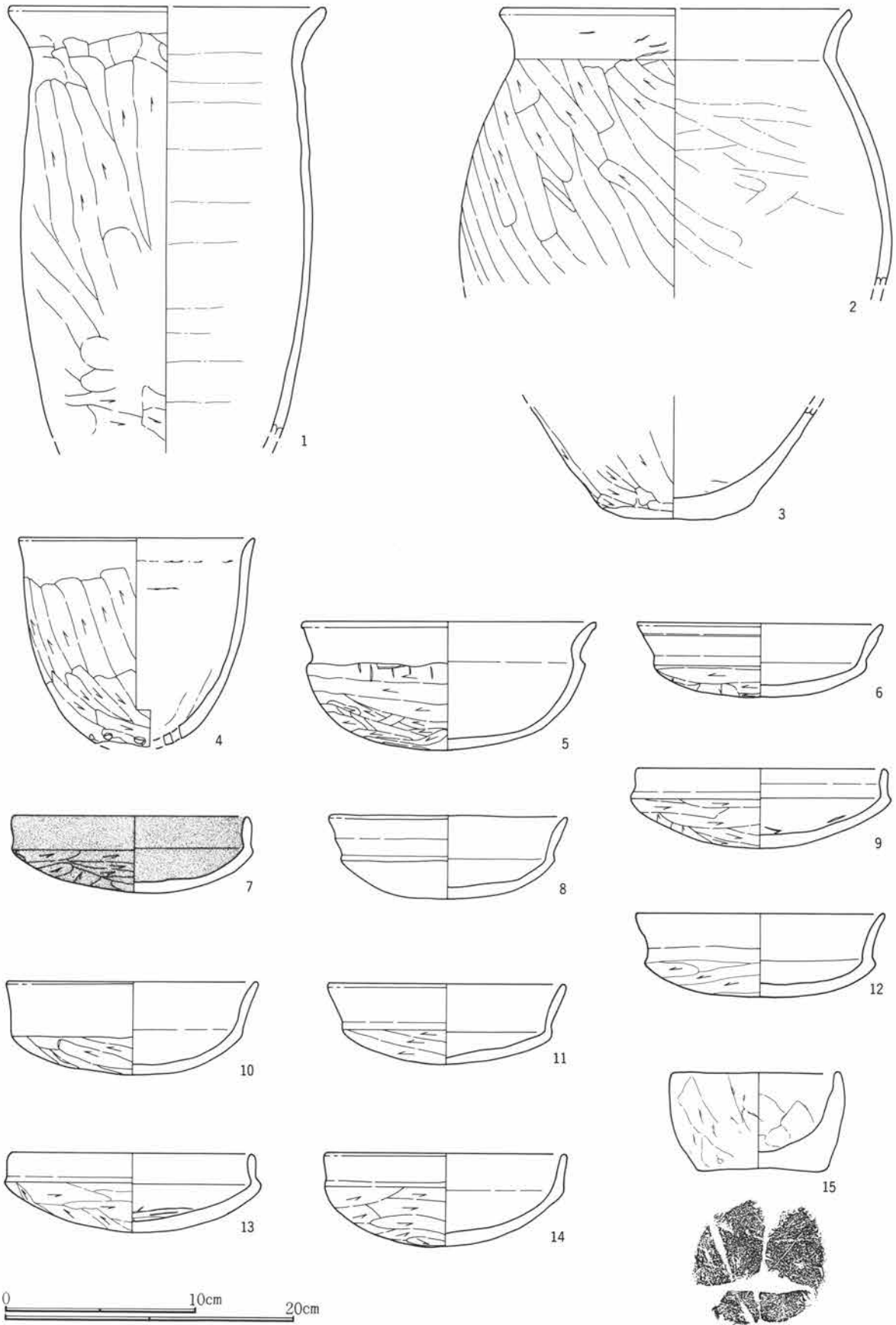
- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

新北竈

- ①暗褐色土層 多くの焼土粒と少量のローム粒と炭化物を含む。

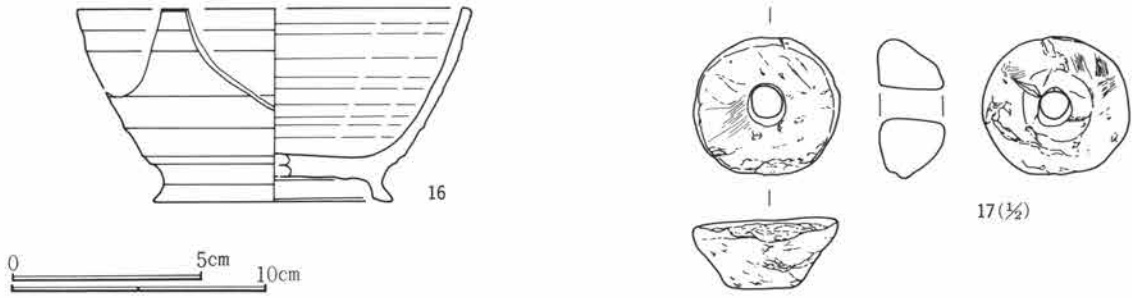


第109図 164号住居跡(2)・床下実測図



第110図 164号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第111図 164号住居跡出土遺物実測図(2)

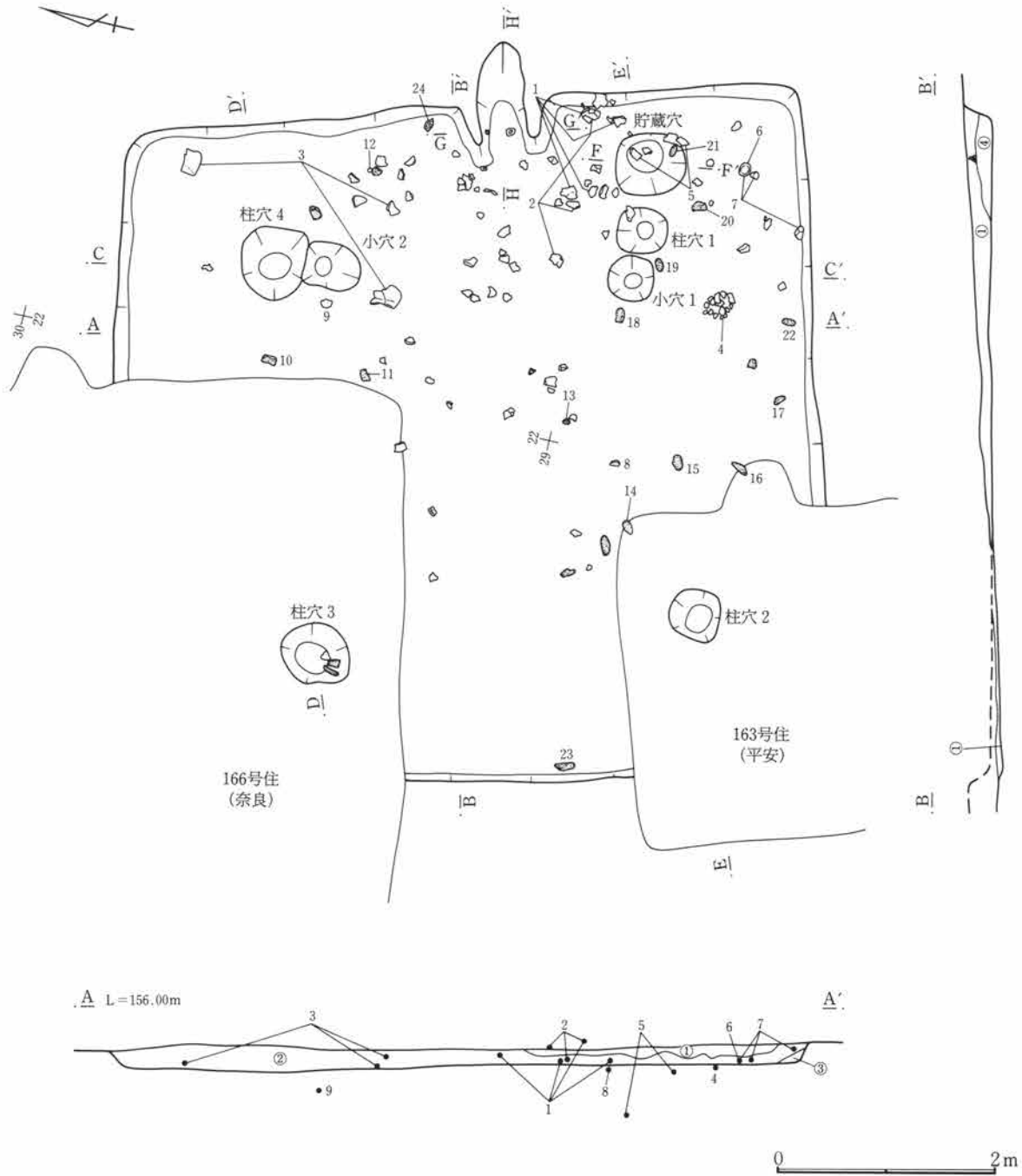
164号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
110-1	土 師 器 甕	覆土 口縁部~胴 部1/2残存	口(22.0) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を大量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面へら削り。大量の砂粒が表面に浮き出しており、器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。 内面にも大量の砂粒が浮き出ているがやや密。
110-2 83	土 師 器 壺	床面+6 1/3残存	口(24.5) 高 — 底 —	①粗、10mm前後の小石を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・黒褐色	胴部外面一部へら削りと思われるが、大部分へらナデ。 砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。
110-3	土 師 器 甕	覆土 胴下半1/3 底部1/2	口 — 高 — 底 9.7	①粗、3~4mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③底面、胴外面赤褐色	底面ナデ。胴外面へら削り。内面ナデにより器表面密。 8×10mmの小石も含む。
110-4 83	土 師 器 小 型 甕	覆土 口縁~胴部 1/2 底部1/3	口 16.6 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部に5個の小穴が穿孔されているが、大部分は欠損しており不明。内面はナデにより器表面密。
110-5 84	土 師 器 鉢	床面+6 1/2残存	口 20.6 高 8.9 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動は少なく、器表面は比較的密。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 ていねいなつくりである。
110-6 84	土 師 器 坏	床面+6 完形	口 12.7 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。多くの小さな砂粒が移動し器表面やや粗。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められず胎土が粉状を呈する。
110-7 84	土 師 器 坏	床面+9 1/2残存	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面にぶい橙色	底面幅の広い強いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより 器表面密。 口縁部外面~内面黒漆か。
110-8 84	土 師 器 坏	床面+6 1/2残存	口 12.4 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが器表面密で、へらの単位ほとんど確認 できない。 黒斑全くなく、胎土が粉状を呈する。
110-9 84	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 13.0 高 4.1 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面弱いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
110-10 84	土 師 器 坏	床面+8 完形	口 13.0 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 口縁部の傾きが左右で違う。口縁部の一部に黒漆か。
110-11 84	土 師 器 坏	覆土 完形	口 12.4 高 4.2 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が粉状を呈しており密なため、へらの単 位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑は 全く認められず。
110-12 84	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 12.8 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められず、胎土がやや粉状を呈する。
110-13 84	土 師 器 坏	覆土 完形	口 12.8 高 4.1 底 丸底	①密、2mm前後の片岩粒をわず かに含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側底面中央にへらの圧痕あり。 内外面にわずかに黒斑を持つ。
110-14 84	土 師 器 坏	覆土 完形	口 12.7 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。粘土がササラ状にわずかに持ち上がり、器表 面やや粗。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
110-15 84	土 師 器 手 捏 土 器	覆土 一部欠損	口 8.8 高 5.0 底 6.5	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒色・一部にぶい橙色	底部ナデ。口縁部ナデ。内面ナデ。指でなでた痕跡が多く残 る。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
111-16 84	須恵器 埴	覆土 口~体部一 部底 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.6) 高 7.6 底 9.5	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面灰褐色	胴下端ヘラ削り。口縁部内外面に多くのロクロ痕。高台はていねいで端部が外側に張り出す。 金属音のする硬い焼成である。
111-17 109	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 3.9/1.9 孔径 1.1 厚 1.7 重 30.2		側面がわずかに凹状を呈する。表面に荒砥状の削りが認められるが削りは浅い。蛇紋岩自体の材質が悪く多くの気泡を含む。

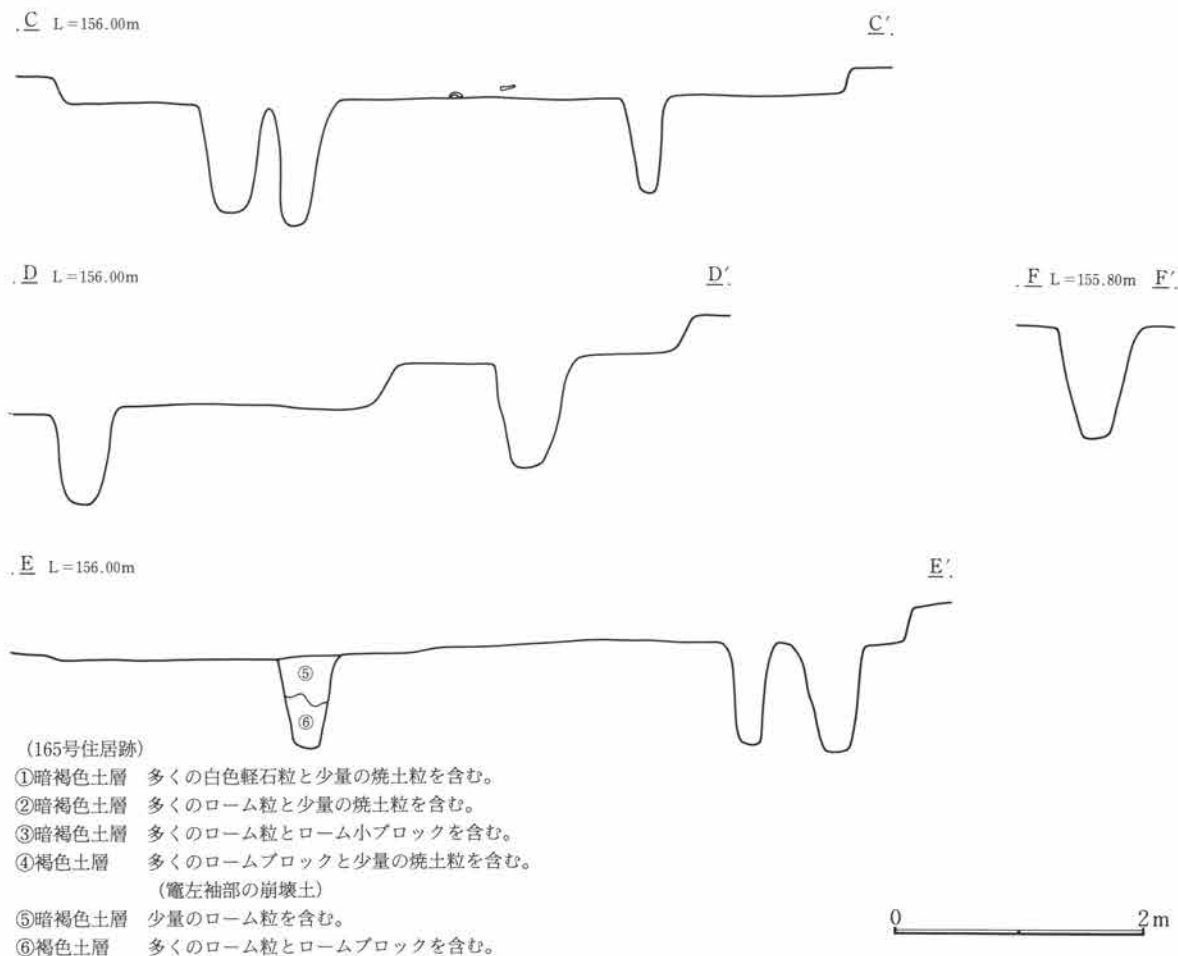
165号住居跡 (第112~116図、図版17・18・84・113)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、29・30-22・23グリッドに位置する。



第112図 165号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第113図 165号住居跡実測図(2)

概要 本住居は南西部分で平安時代の163号住居と、北東部分で奈良時代の166号住居と重複しており、両住居により本住居の重複部分は床下部分まで掘り込まれていた。このように重複住居により多くの部分が壊されていたが、竈の造られていた住居東側部分の残りは良好であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、また床面には4本の柱穴が掘られていた。また柱穴1の西側と柱穴4の南側に接して、小穴1と2が掘られていた。柱穴2と3は重複住居床下面から確認された。

規模 東西6.17m、南北6.31mである。壁高は残りの良い東南壁南側部分で28cmである。貯蔵穴は径62cm深さ88cmである。柱穴1は径46cm深さ77cm、柱穴2は径46cm深さ83cm、柱穴3は径58cm深さ84cm、柱穴4は径64cm深さ91cmである。小穴1は径42cm深さ71cm、小穴2は径42cm深さ99cmである。

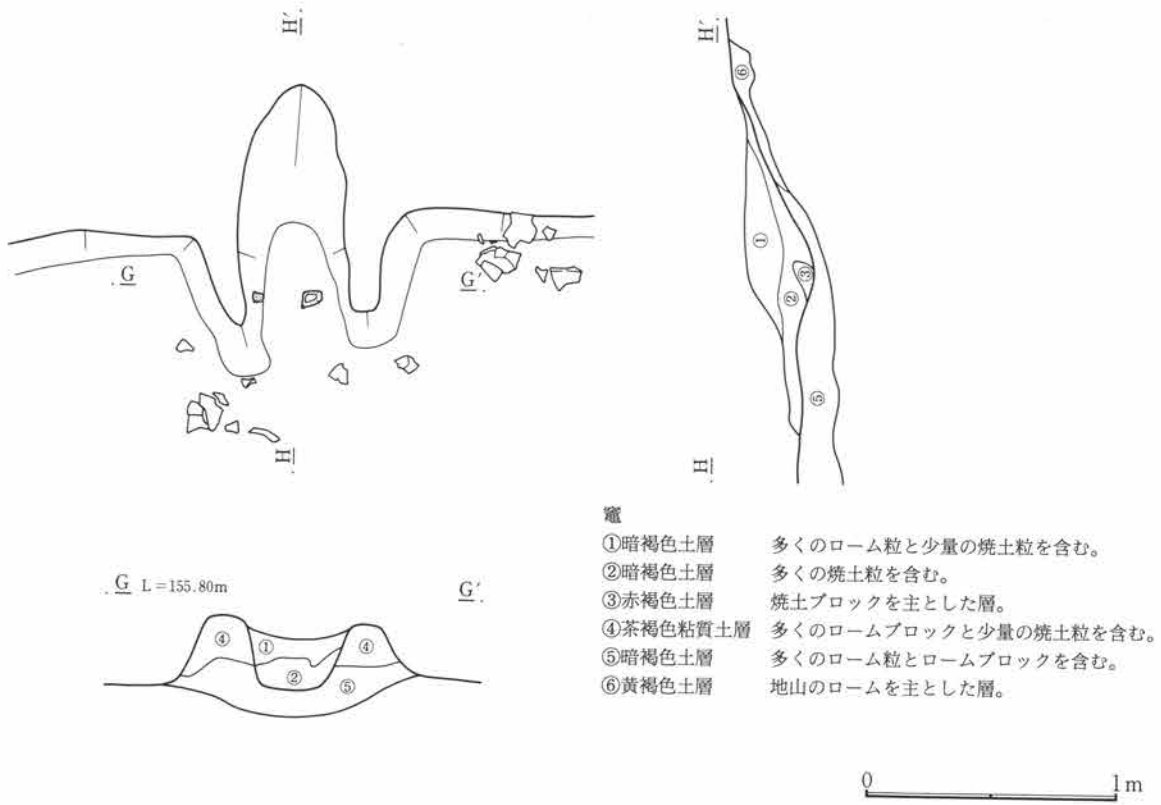
遺物 竈付近から多くの土師器の甕や坏が出土している。木葉痕を持つ4の甕は出土例が少ない。

(竈)

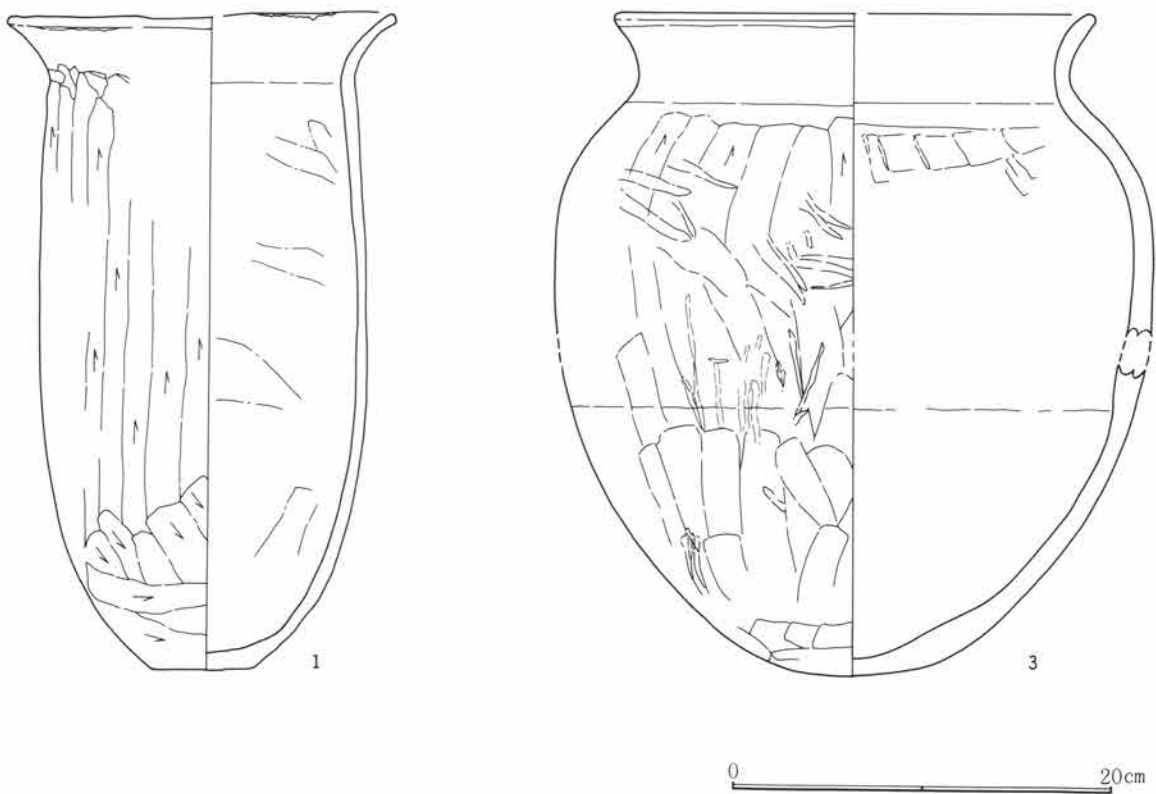
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 竈上面は踏み固められたように非常に硬い土で覆われていた。竈内や周辺から石の出土は無いためロームを主に用いて造られた竈と思われる。燃烧部中央付近の床面に支脚石を埋めたと思われる痕跡が確認された。

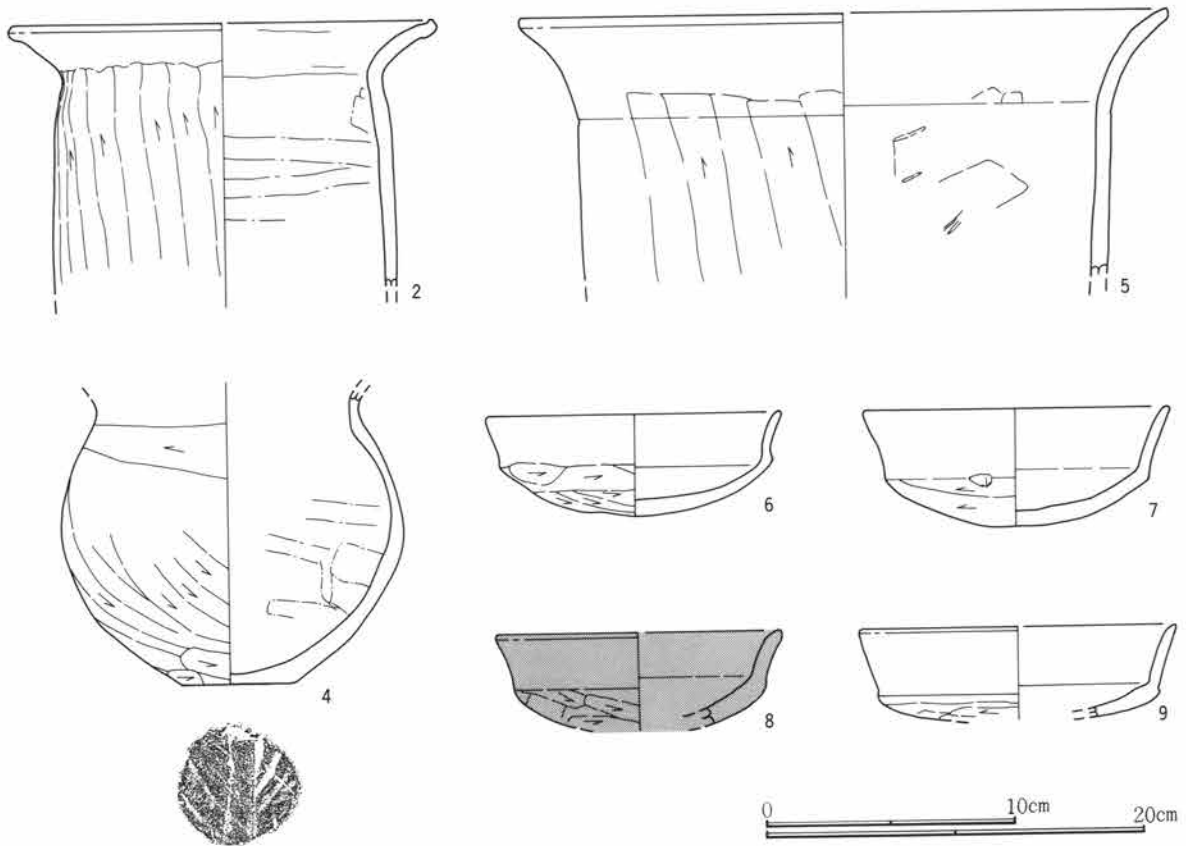
規模 煙道方向115cm、燃烧部幅43cmである。



第114図 165号住居跡竈実測図



第115図 165号住居跡出土遺物実測図(1)



第116図 165号住居跡出土遺物実測図(2)

165号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
115-1 84	土 師 器 甕	床面+3 口縁~胴部 1/3 底部1/2	口(20.8) 高 34.5 底 5.6	①粗、1~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。均整のとれたていねいなつくりの甕である。
116-2 84	土 師 器 甕	床面+7 口縁~胴上 部1/2残存	口(22.8) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒は目立つが、器表面の粗れはひどくない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
115-3	土 師 器 壺	床面+2 1/2残存	口(25.6) 高(35.0) 底 丸底	①やや粗、3~4mmの砂粒と片岩粒を少量含む。雲母含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部細かなヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。ヘラ削り後一部ヘラ磨き。口縁部横ナデ。大きな砂粒を少し含むが、器表面は密である。図上復元実測。
116-4 84	土 師 器 壺	床面+1 胴上2/3、胴 下~底完形	口 — 高 — 底 6.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面木葉痕。胴部外面強いヘラ削り。胴上部外面の器表面が剝離している。頸部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
116-5	土 師 器 甕	床面-48 口縁~胴上 部1/2残存	口(24.8) 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部吸炭により黒色	胴部外面浅いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
116-6 84	土 師 器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 11.7 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土が粉状を呈する。
116-7 84	土 師 器 坏	床面+6 1/2残存	口 12.2 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が粉状を呈しているため、ヘラの単位不明瞭。
116-8	土 師 器 坏	床面+2 破片	口(11.4) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面・断面とも黒色	底面ヘラ削り。ヘラの単位不明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデ。表面全体が斑点状に剝離している。表面・断面とも吸炭により黒色を呈している。
116-9	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体が密である。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm)		①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴・備考
			長	厚	幅	重	
10 113	こも編み石	床面+6	長 13.8 厚 3.0	幅 6.5 重 510			雲母片岩。偏平な石である。片側の側面が凹状を呈している。
11 113	こも編み石	床面+2	長 13.7 厚 2.5	幅 7.3 重 385			絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
12 113	こも編み石	床面直上	長 13.5 厚 4.5	幅 5.2 重 500			点紋緑泥絹雲母片岩。中央部が肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
13 113	こも編み石	床面+1	長 16.1 厚 3.1	幅 7.6 重 480			緑泥片岩。片側の側面の一部が大幅に剝離している。
14 113	こも編み石	床面直上	長 12.7 厚 2.3	幅 6.8 重 350			点紋緑泥片岩。片側の側面中央部に打ち欠かれた凹状部が認められる。
15 113	こも編み石	床面+8	長 15.3 厚 1.9	幅 8.1 重 370			絹雲母石墨片岩。下の面が全面剝離し、両側面にわずかな凹凸が見られる。
16 113	こも編み石	床面直上	長 14.4 厚 3.2	幅 5.3 重 395			絹雲母石墨片岩。細長い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
17 113	こも編み石	床面直上	長 11.5 厚 2.9	幅 6.3 重 330			点紋絹雲母緑泥石片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
18 113	こも編み石	床面直上	長 16.3 厚 3.0	幅 6.9 重 560			点紋石墨緑泥片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈している。
19 113	こも編み石	床面-2	長 12.8 厚 3.3	幅 6.5 重 460			点紋絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
20 113	こも編み石	床面直上	長 15.4 厚 3.2	幅 6.3 重 450			安山岩。不定形な石である。片側の側面中央部が凹状を呈している。
21 113	こも編み石	床面-10	長 13.7 厚 4.1	幅 6.4 重 570			点紋絹雲母石墨片岩。肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
22 113	こも編み石	床面+3	長 14.7 厚 1.7	幅 6.7 重 230			点紋絹雲母石墨片岩。下の一面が剝離している。側面がわずかに凹状を呈する。
23 113	こも編み石	床面+2	長 17.2 厚 3.0	幅 7.1 重 610			緑簾緑泥片岩。両側面中央部が打ち欠かれて凹凸部を持つ。
24 113	こも編み石	床面+14	長 15.2 厚 2.6	幅 7.5 重 440			紅簾絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に小さな凹凸部を持つ。

167号住居跡 (第117~120図、図版18・19・85)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31-20グリッドに位置する。

概要 竈の造られていた東側部分の残りは良好であったが、西側は3本の耕作溝と攪乱土坑及び耕作等により壊されていた。特に南西部分の残りは悪く、床面調査の段階でその部分は範囲確認を行った。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、また床面には4本の柱穴が掘られていた。また柱穴1の南東に接して小穴1が掘られていた。

規模 東西6.33m、南北6.15mである。壁高は残りの良い東壁北側部分で32cmである。貯蔵穴は径80cm深さ50cmである。柱穴1は径46cm深さ42cm、柱穴2は径52cm深さ61cm、柱穴3は径36cm深さ48cm、柱穴4は径49cm深さ49cmである。小穴1は径42cm深さ43cmである。

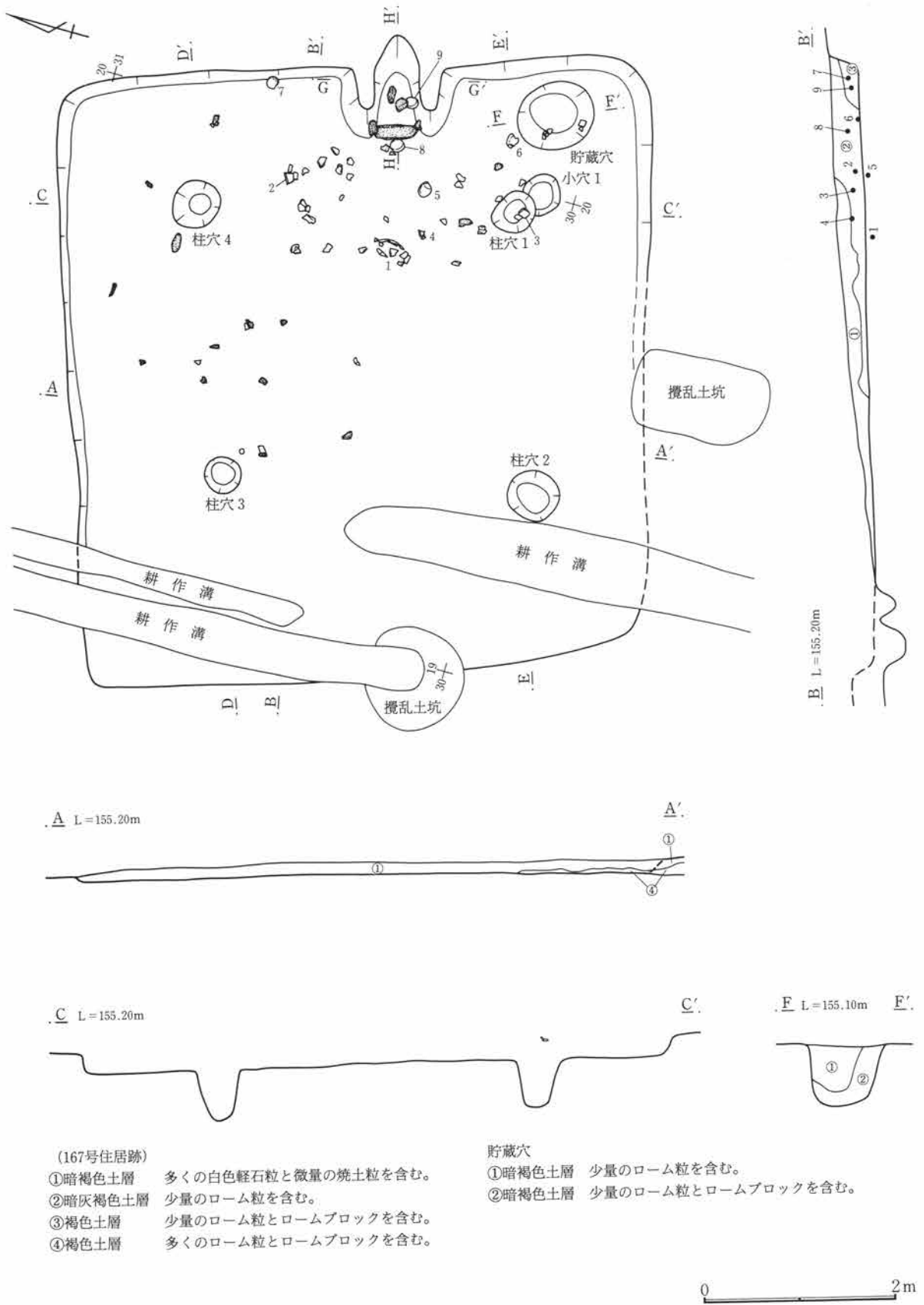
遺物 竈周辺に多くの土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

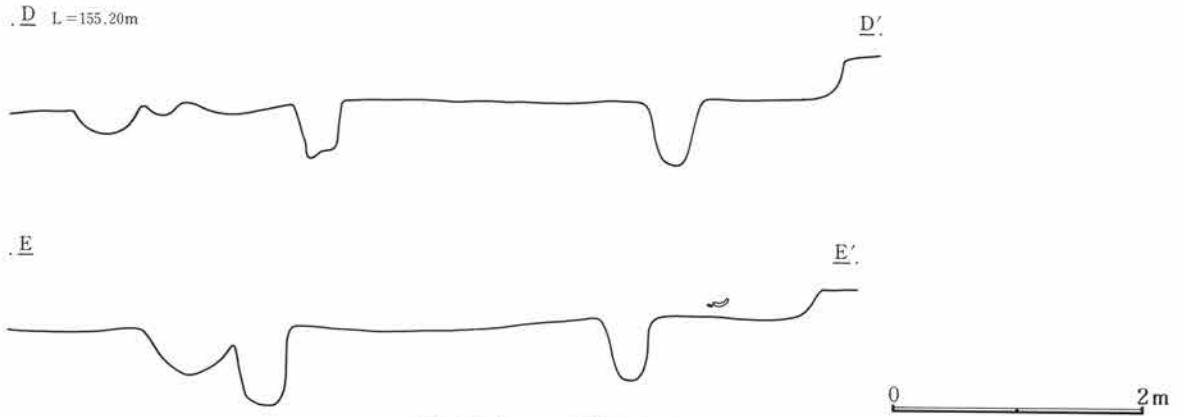
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 ロームを中心とした竈材の一部が、位置は少し移動してはいたが、覆土上面に残っていたようである。また両袖部の袖石と天井石が焚口部分に落ちかけた状態で出土した。竈内の甕等は外されて残っていなかった。また燃烧部のほぼ中央部に2個の支脚石が少し移動していたが、ほぼ使用時に近い状態で残っていた。このように残りの良好な竈であった。

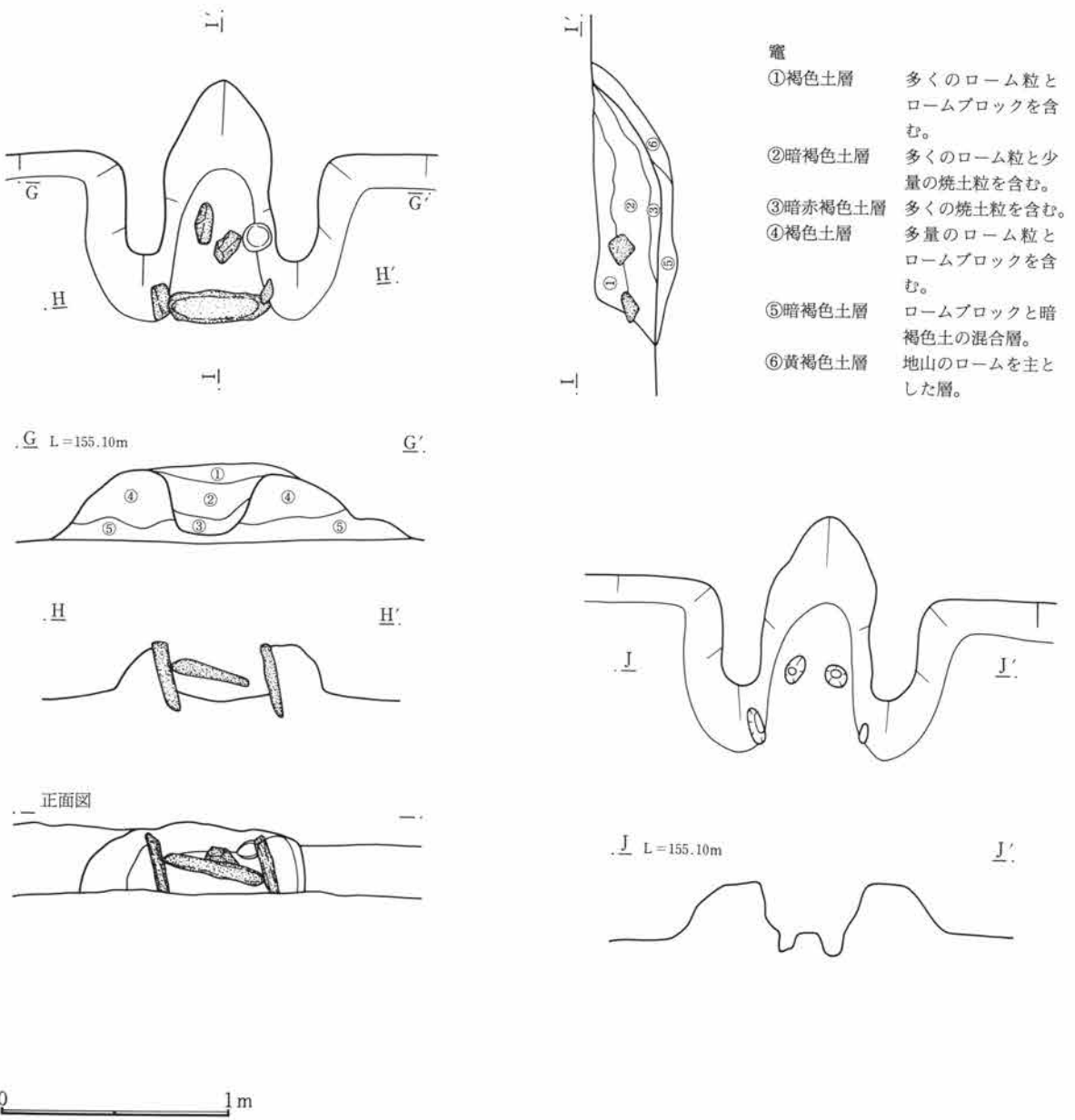
規模 煙道方向103cm、燃烧部幅42cmである。



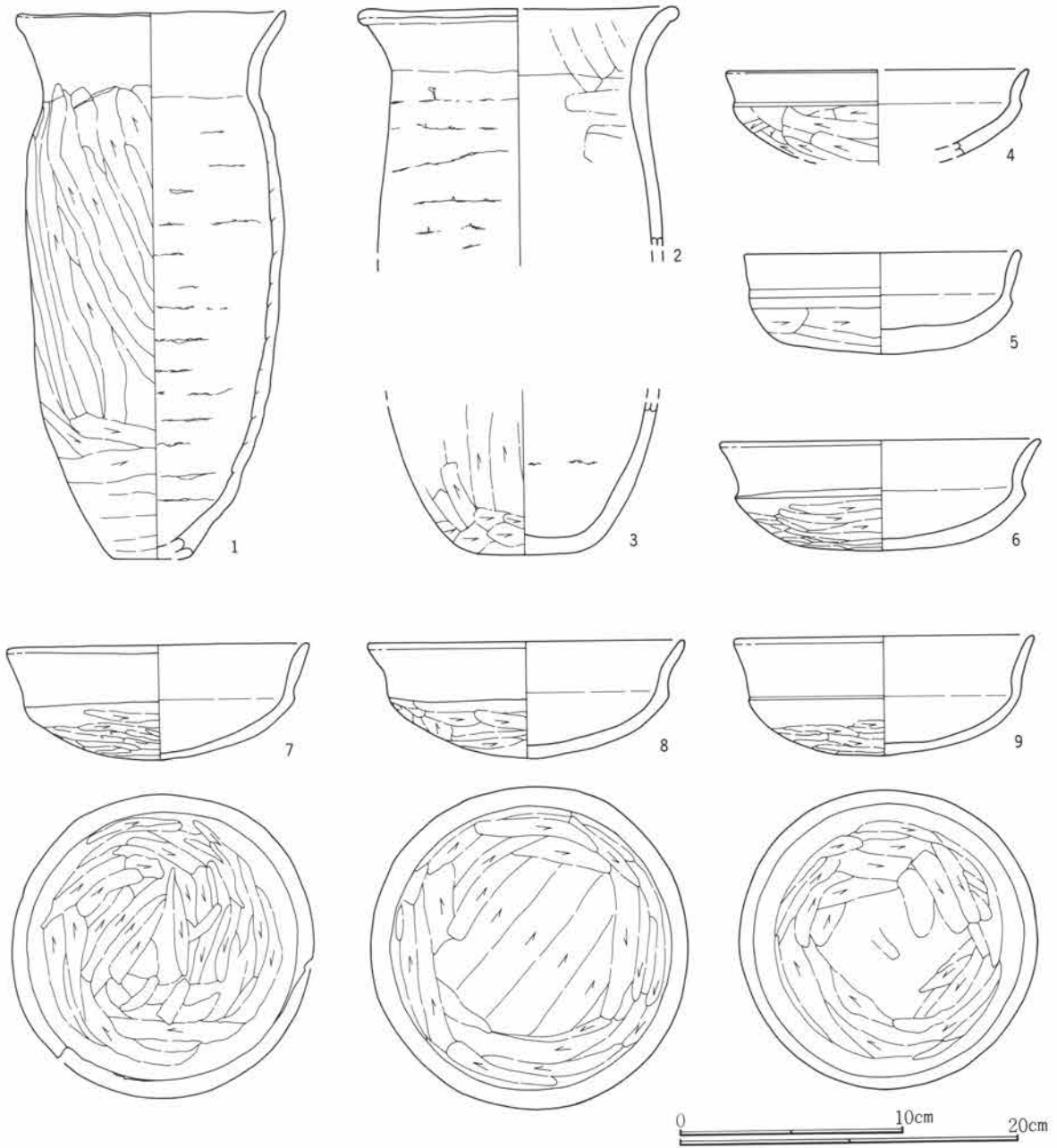
第117図 167号住居跡実測図(1)



第118図 167号住居跡実測図(2)



第119図 167号住居跡竈実測図



第120図 167号住居跡出土遺物実測図

167号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
120-1 85	土師器 甕	床面直上 口~胴部 底部破片	口 16.0 高 32.3 底 5.0	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	胴部外面ヘラナデ。ナデの部分はわずかに凹状を呈する。砂粒の移動は少ない。胴部内面に多くの輪積痕が残る。全体に至っており、雑な感じの甕である。
120-2 85	土師器 甕	床面+20 口縁~胴上 部残存	口(19.1) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面の輪積痕はていねいに消しており確認できない。
120-3	土師器 甕	床面+21 胴下半 底部残存	口 — 高 — 底 6.0	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底部内外面黒色	底面ナデ。胴下半ナデ。胴部ヘラ削り。内面ナデにより器表面密。

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
120-4	土 師 器 坏	床面+18 1/3残存	口(13.4) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面赤褐色・外面黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部外面吸炭により黒色を呈する。
120-5 85	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 12.4 高 4.5 底 丸底	①やや粗、2~3mmの片岩粒を わずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部全体ナデ。明瞭なヘラ削りの痕跡は認められない。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部の器肉の厚い坏である。
120-6 85	土 師 器 坏	床面+21 2/3残存	口 14.2 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの部分の一部に光沢を持つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
120-7 85	土 師 器 坏	床面+30 口縁部1/2 底部完形	口 13.4 高 5.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒色	底面ヘラナデ。ナデの部分器表面密。底部周辺部ナデのみで ヘラナデなし。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部外面の一部吸炭により黒色を呈する。
120-8 85	土 師 器 坏	床面+20 完形	口 14.2 高 5.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒色	底部中央弱いヘラナデ。その後周辺部強いナデ。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。 底部内面が斑点状に剝離している。
120-9 85	土 師 器 坏	覆土 完形	口 13.4 高 5.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を大量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。中央部と周辺部はヘラナデなし。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。

168号住居跡 (第121~123図、図版19・85・109)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32-21・22グリッドに位置する。

概要 住居北側で平安時代の218号住居と重複しており、その部分は床下まで深く掘り込まれていた。2軒の竈は接しており、本住居の左袖の一部も掘り込まれていた。また西側には1本の耕作溝があり、その部分は床下まで掘り込まれ、住居の周辺には多くの小穴が掘られていた。全体に残りの悪い住居であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に2つの小穴が連結しているような貯蔵穴が掘られていた。床面には柱穴とも思われる小穴が5本掘られていたが、位置や深さが一定していないので、柱穴と断定できなかったため小穴として扱った。住居周辺の多くの小穴が住居内にも掘られた可能性もあるため、柱を持たない住居の可能性も考えられる。

規模 東西4.41m、南北3.97mである。壁高は残りの良い東壁北側部分で23cmである。貯蔵穴は48×70cmの楕円形で深さ52cmである。貯蔵穴の北側の小穴は深さ40cm、南側の小穴は深さ52cmである。小穴1は径51cm深さ23cm、小穴2は径35cm深さ34cm、小穴3は径40cm深さ28cm、小穴4は径57cm深さ46cm、小穴5は径49cm深さ94cmである。

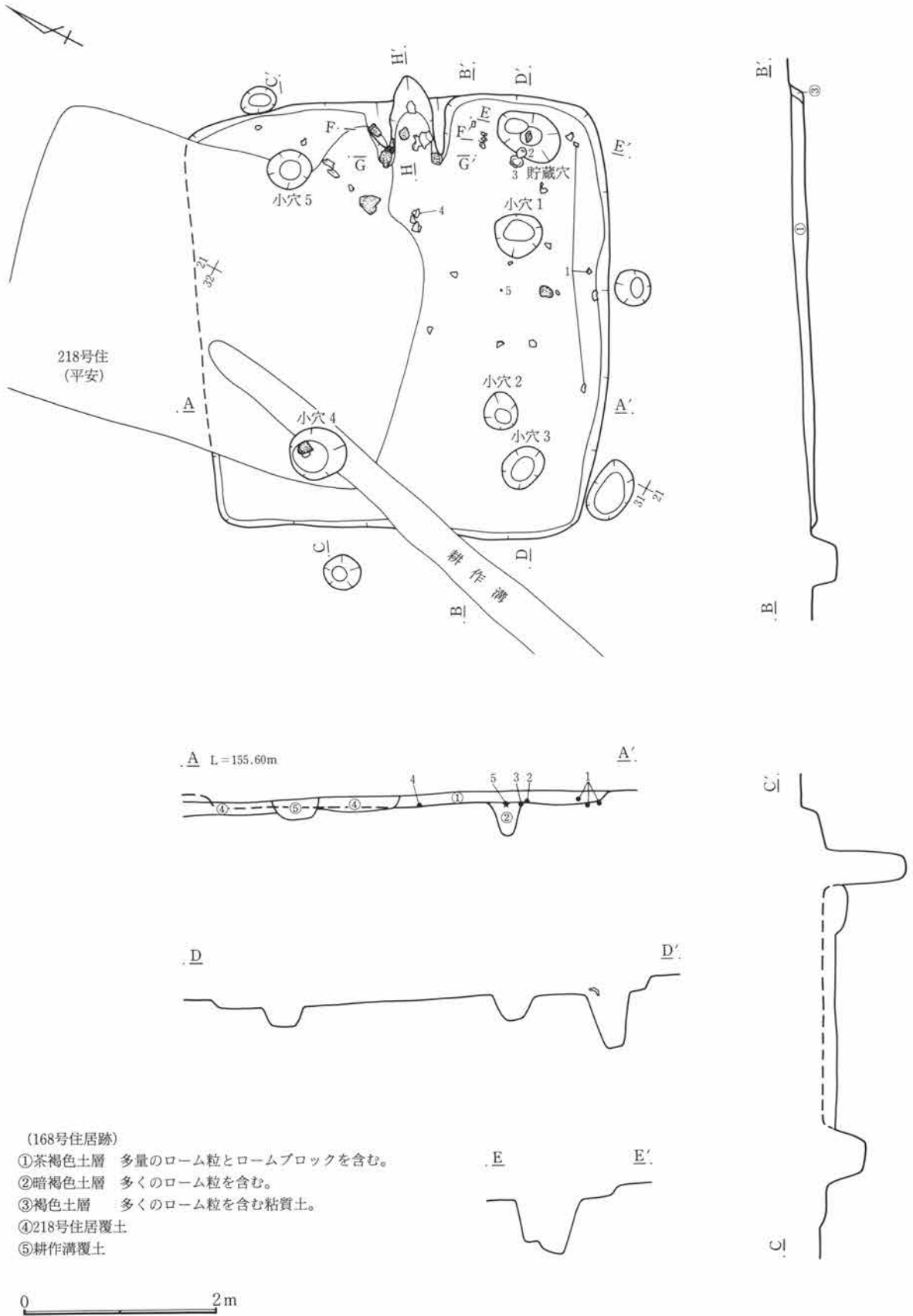
遺物 図示できた遺物は少ない。紡錘車の出土が目される。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

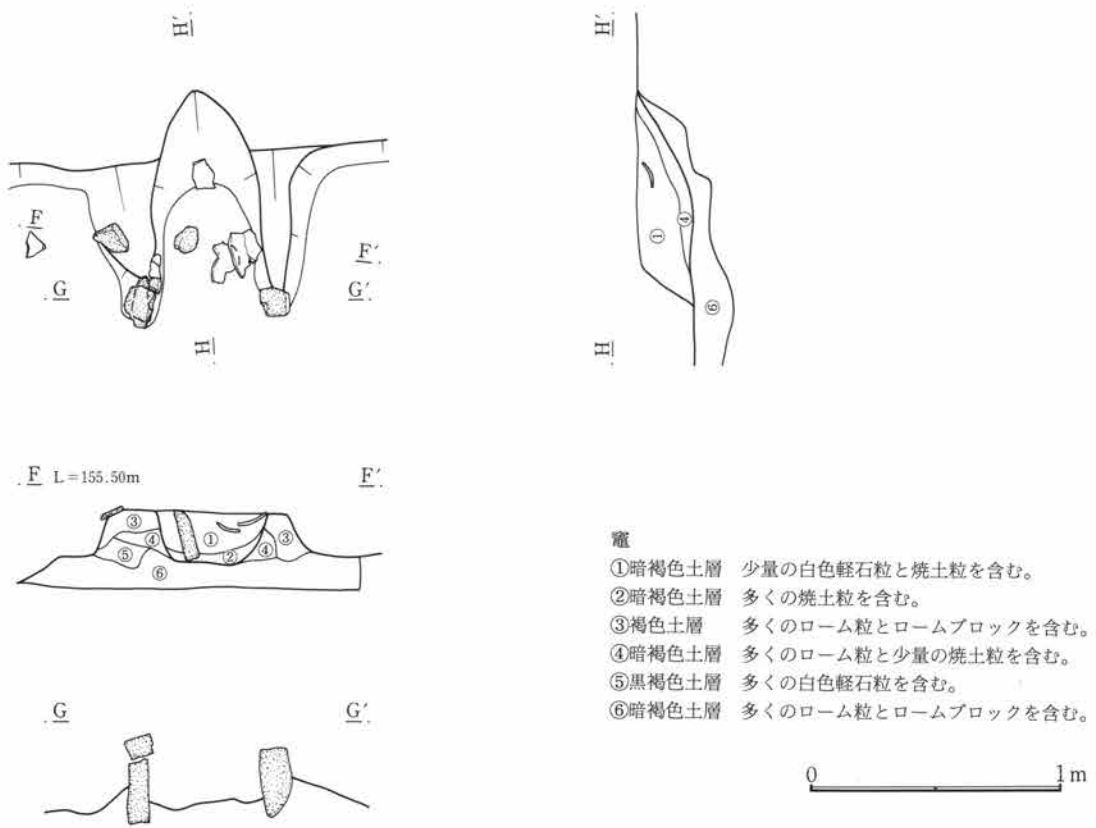
構造 袖部の袖石と燃焼部の中央部左よりに支脚石が左方向に傾いてはいたが、ほぼ使用時に近いと思われる状態で残っていた。しかし調査に慎重さを欠いて壁面に近い袖部を掘り抜いてしまった。

規模 煙道方向94cm、燃焼部幅43cmである。

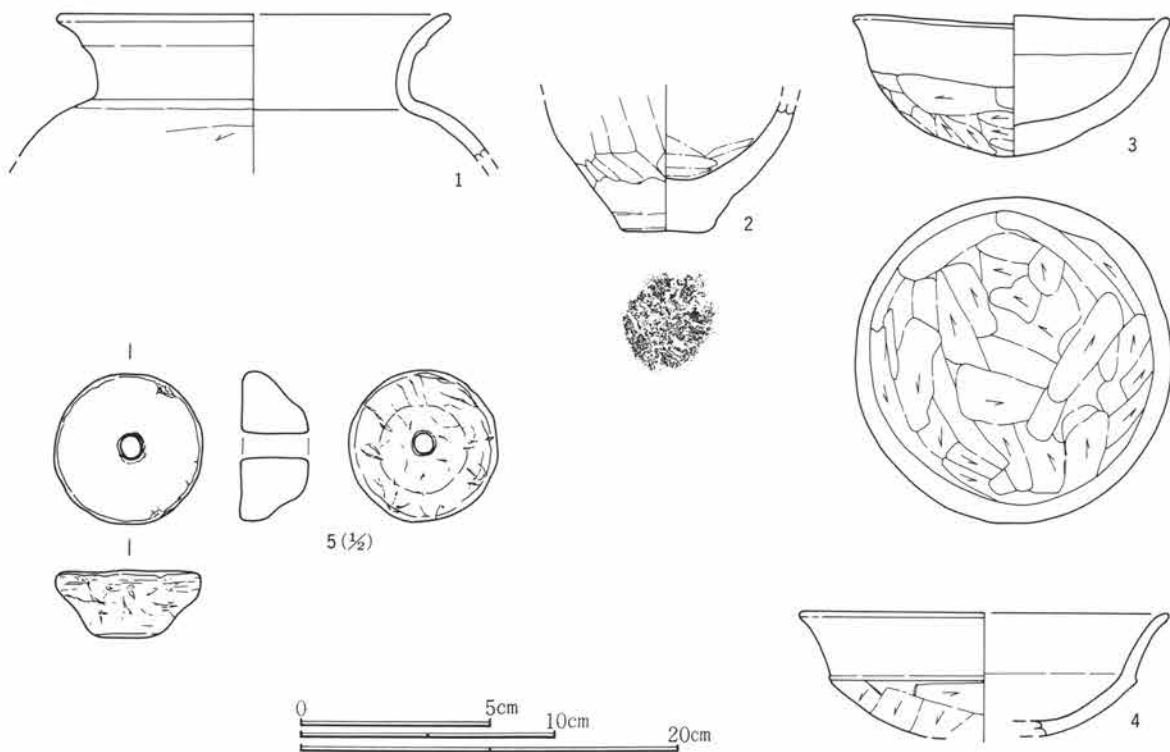


- (168号住居跡)
- ①茶褐色土層 多量のローム粒とロームブロックを含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ③褐色土層 多くのローム粒を含む粘質土。
 - ④218号住居覆土
 - ⑤耕作溝覆土

第121図 168号住居跡実測図



第122図 168号住居跡竈実測図



第123図 168号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

168号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
123-1	土師器 壺	床面直上 口縁部破片	口(20.8) 高— 底—	①粗、1～3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
123-2 85	土師器 甕	床面直上 胴下半1/3 底部完形	口— 高— 底 4.8	①粗、6×11mmの片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面灰黄褐色	底面ナデ。胴部下端ナデ、下部ヘラナデ。ヘラにより器肉を削り取る。整成はなし。内面ナデにより器表面密。
123-3 85	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 5.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。一部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 全体に少し歪んでおり、雑な感じの坏である。
123-4	土師器 坏	床面直上 口縁部小片	口(14.6) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
123-5 109	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 3.9/2.4 孔径 0.7 厚 1.8 重 37.4		滑石片岩。側面がわずかに凹状を呈する。表面に荒砥状の削り痕を残すが全体に磨かれ光沢を持つ。

171号住居跡 (第124～126図、図版19・20・85)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32・33—19グリッドに位置する。

概要 住居西側で時代の特定のできない242号住居と重複している。両住居とも残りが悪く、住居範囲の決められない部分を持つ。本住居の床下中央部付近より242号住居の竈の痕跡と思われる遺構が確認されていることから、本住居が242号住居より新しいことが考えられる。また242号住居は出土遺物が無いが、竈の位置や覆土の状態からおそらく古墳時代の住居であると思われる。南東部分は多くの攪乱と2本の耕作溝により床下部分まで掘り込まれていた。

構造 良好な床面は残っていなかった。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。床面には他の住居で見られるような大きさの柱穴は掘られていなかった。しかし床下調査により柱穴とも考えられる小さな小穴が、ほぼ方形に配置されて確認されたので疑問も残るが、柱穴として想定した。

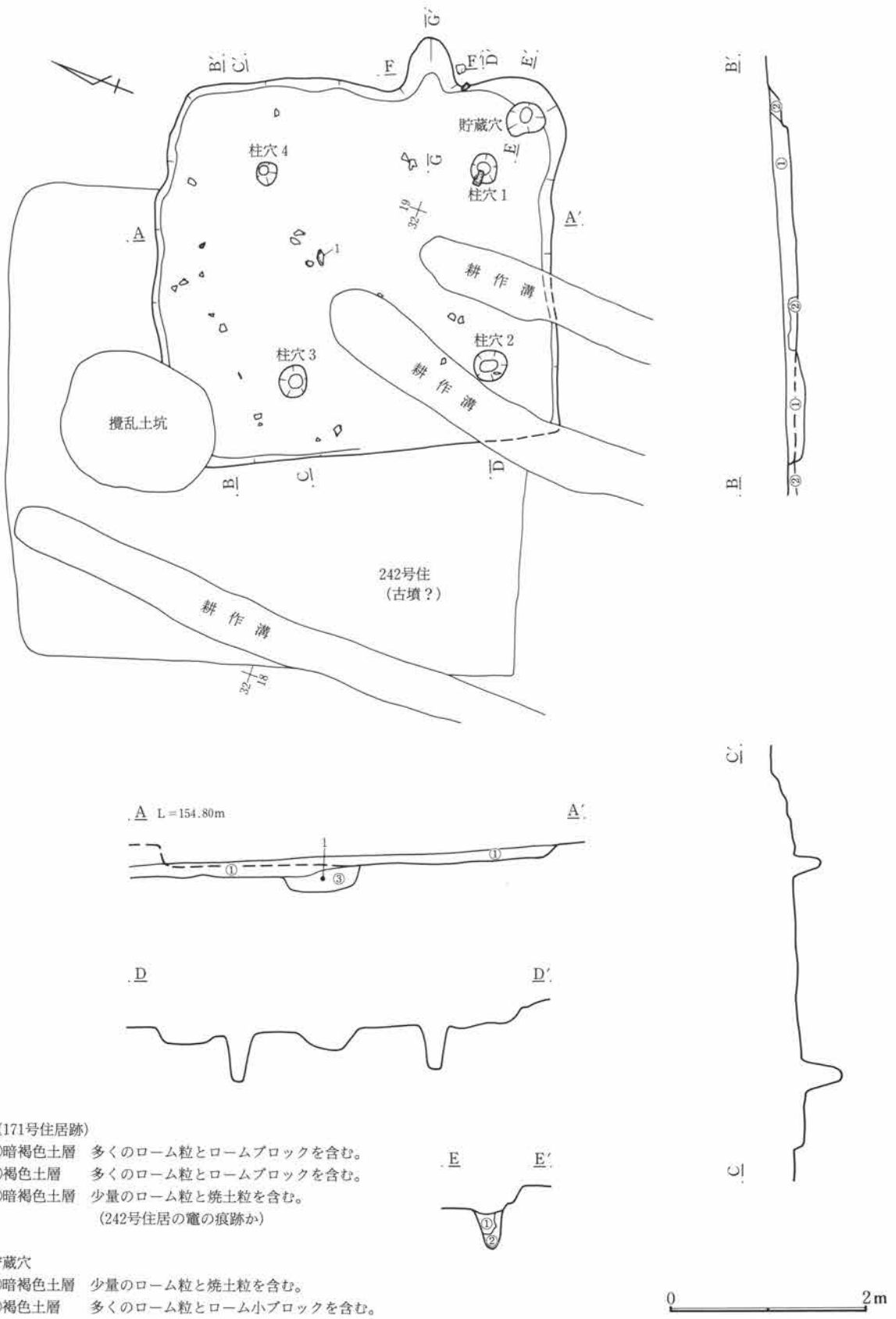
規模 東西3.93m、南北4.03mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で15cmである。貯蔵穴は41×32cmの楕円形で深さ39cmである。柱穴1は径23cm深さ43cm、柱穴2は径35cm深さ56cm、柱穴3は径31cm深さ55cm、柱穴4は径21cm深さ36cmである。

遺物 図示できた出土量は少ない。破片として多くの土師器の甕胴部が出土している。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要 住居同様に残りが悪く、床面上の袖部分は全く残っていなかった。壁面に掘り込まれた燃焼部の一部と煙道部からの焼土粒の出土も少なかった。



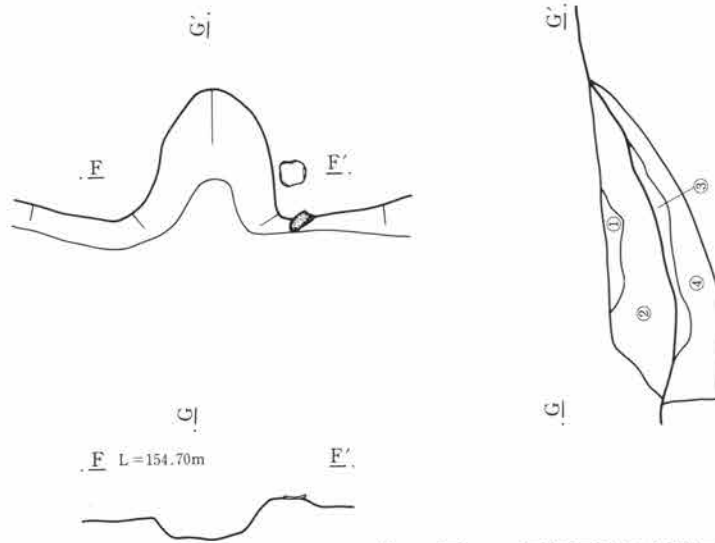
(171号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ②褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ③暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- (242号住居の竈の痕跡か)

貯蔵穴

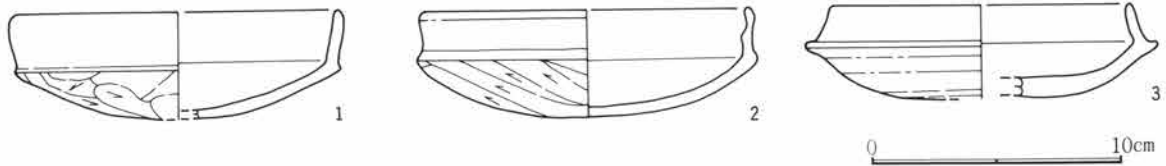
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第124図 171号住居跡実測図



- 竈
- ①褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 少量のロームブロックと少量の焼土粒を含む。
 - ④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第125図 171号住居跡竈実測図



第126図 171号住居跡出土遺物実測図

171号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
126-1 85	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.0) 高— 底—	①やや密、2～4mmの砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。均整のとれた良質の坏である。
126-2	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.2) 高— 底—	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面にぶい褐色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。表面の黒色は吸炭によるものと思われる。
126-3 85	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口(12.0) 高— 底—	①やや粗、1～2mmの砂粒をわずかに含む。②還元焰、硬質③灰色	底面下半右回転ヘラ削り。底部中央がやや持ち上がる。口唇部は丸い。

173号住居跡 (第127・128図、図版20・85・113)

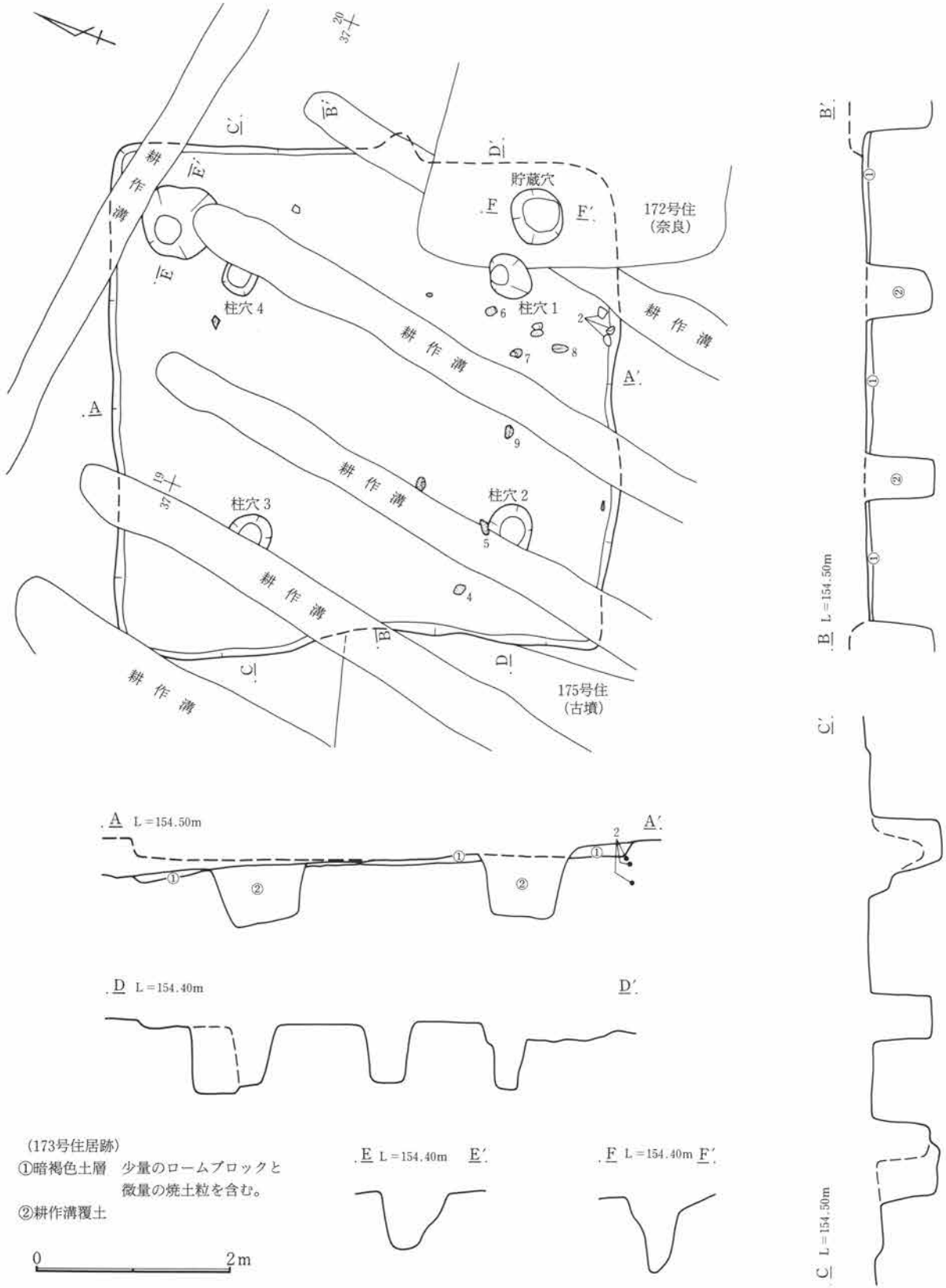
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、37-20グリッドに位置する。

概要 南東部分で奈良時代の172号住居と重複しており、その部分は床下まで深く掘り込まれていた。南西部分では古墳時代の175号住居と僅かに重複している。重複部分が僅かであることや掘り込みが浅いため、新旧関係を確認することはできなかった。また6本の耕作溝により住居の多くの部分が床下まで掘り込まれていた。竈は東壁面に造られていたが、耕作溝により大部分が削り取られており、煙道部の一部と焼土粒が僅かに残っていたのみであった。このように極めて残りの悪い住居であった。

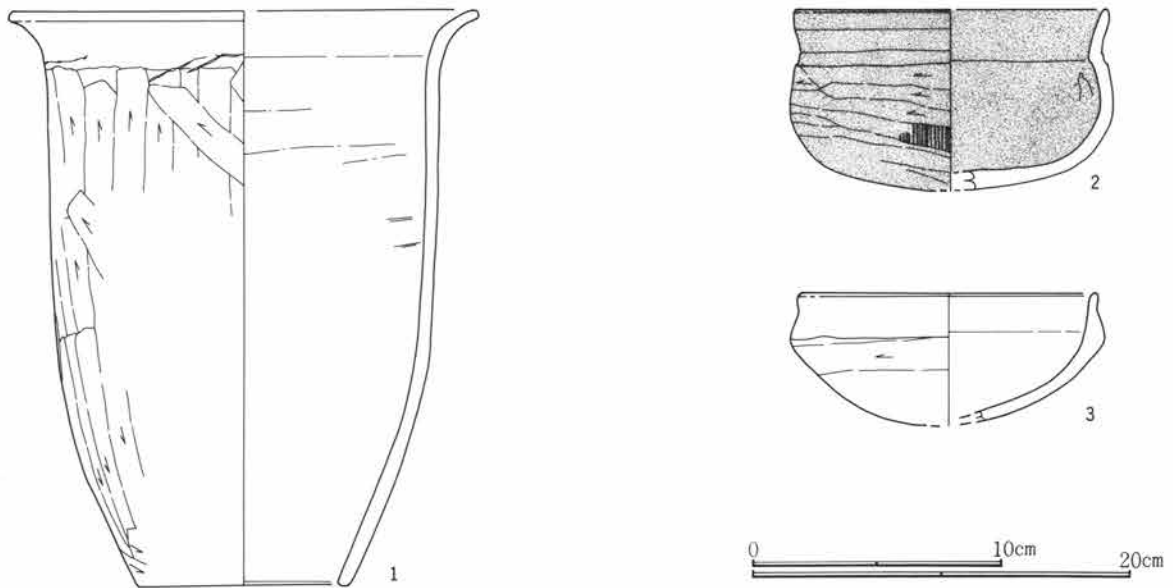
構造 良好な床面は残っていなかった。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は耕作溝により一部が削られているが、4本掘られていた。また北東コーナー部分にも貯蔵穴に似た掘り込みがあるため、北壁面にも竈の造られていたことも考えられるが、焼土粒の出土は無く竈の確認はできなかった。

規模 東西5.23m、南北5.12mである。壁高は残りの良い南壁面で15cmである。貯蔵穴は径55cm深さ91cmで、北東コーナーの貯蔵穴に似た掘り込みは径51cm深さ60cmである。柱穴1は径45cm深さ60cm、柱穴2は

径49cm深さ59cm、柱穴3は径41cm深さ60cm、柱穴4は径35cm深さ22cmである。
 遺物 図示できた遺物も少ないが、破片も少量である。



第127図 173号住居跡実測図



第128図 173号住居跡出土遺物実測図

173号住居跡出土遺物観察表

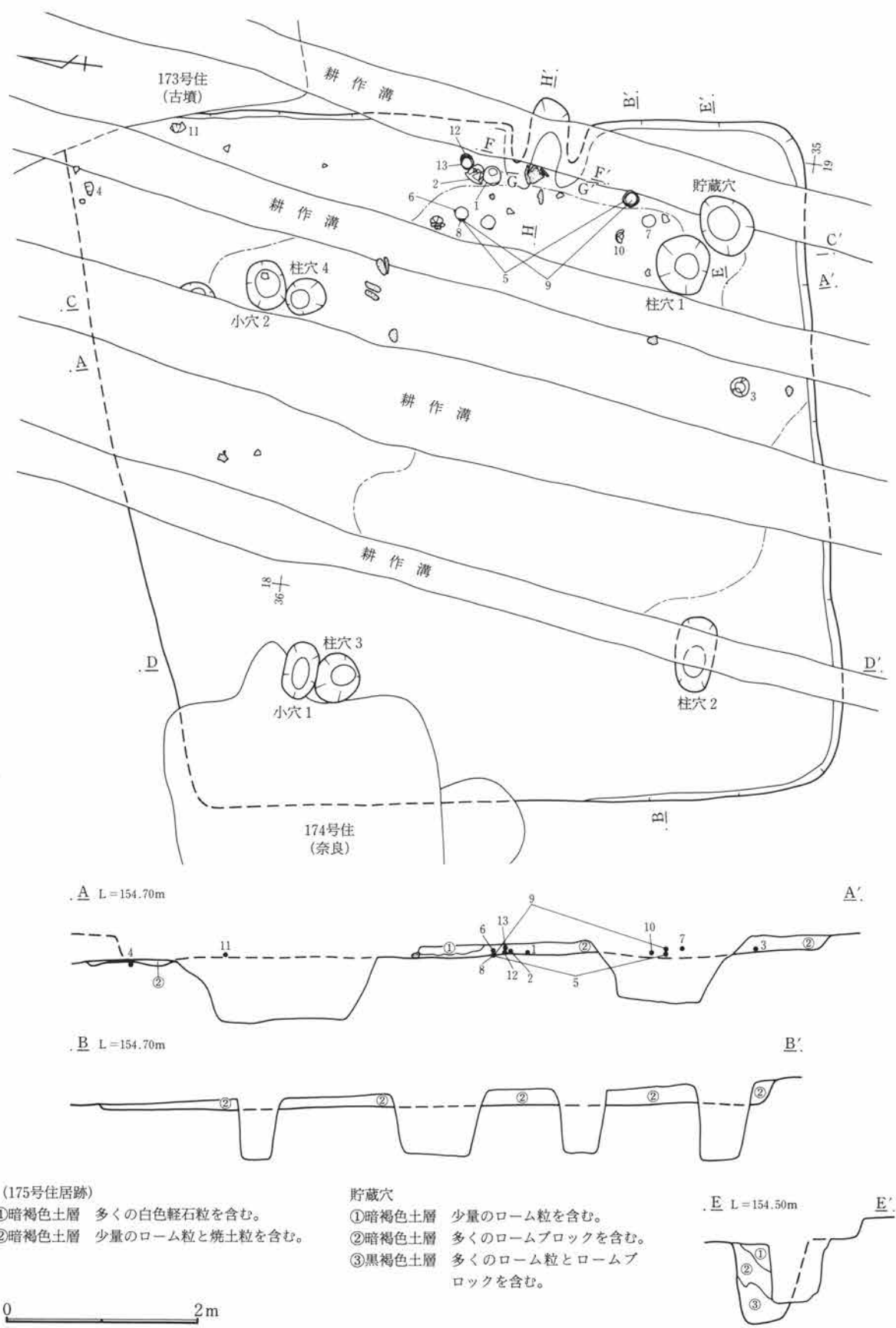
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
128-1 85	土 師 器 甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{3}$ 胴部破片	口(24.8) 高 32.0 底(11.3)	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴下端はわずかに残存。
128-2 85	土 師 器 小 型 壺	床面-5 $\frac{1}{3}$ 残存	口(16.8) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰 ③内面赤褐色・外面黒色・断面にぶい黄橙色	底部~体部強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部内外面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
128-3 85	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{3}$ 残存	口 12.0 高 — 底 —	①密、やや粉状を呈し砂粒含まず。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。内面ナデ。器表面全体が密。黒斑認められず、やや粉状を呈する。
4 113	こも編み石	床面直上	長 16.7 幅 5.4 厚 3.6 重 510		輝緑岩。側面にわずかに凹状を呈する。
5 113	こも編み石	床面直上	長 14.5 幅 4.9 厚 3.4 重 460		点紋絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
6 113	こも編み石	床面+2	長 10.6 幅 7.2 厚 3.2 重 320		石墨緑泥片岩。片側の側面にわずかに凹状を持つ。
7 113	こも編み石	床面+6	長 12.2 幅 6.3 厚 3.6 重 510		点紋絹雲母石墨片岩。大きく打ち欠かれ短い石となっている。側面の残存は少なく明瞭な凹状部も認められない。
8 113	こも編み石	床面+4	長 12.6 幅 8.3 厚 3.3 重 550		緑簾緑泥片岩。1つの面剥離。片側の側面がゆるやかに凹状を呈している。
9 113	こも編み石	床面+3	長 13.1 幅 7.2 厚 3.6 重 550		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。

175号住居跡 (第129~132図、図版20・85・86)

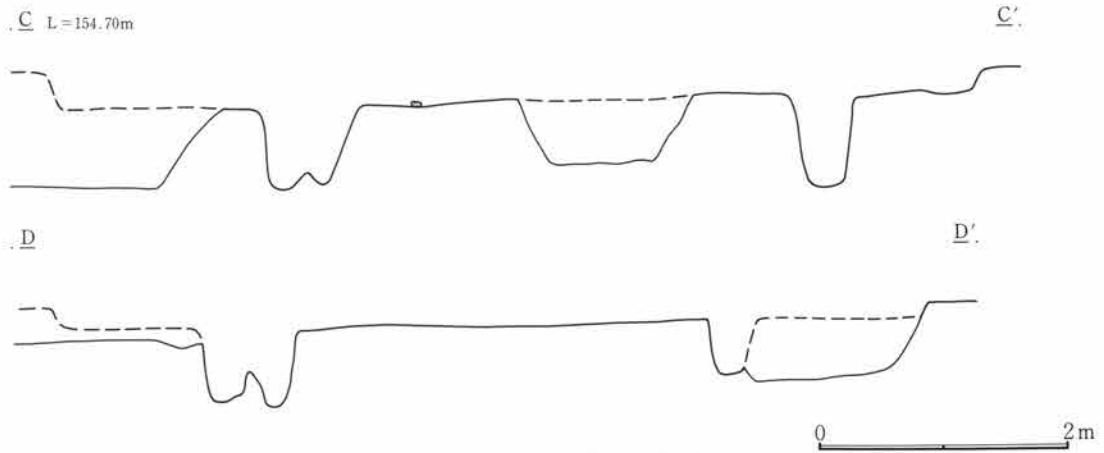
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、36-19グリッドに位置する。

概要 北西部分で奈良時代の174号住居と重複しており、その部分は床下まで深く掘り込まれていた。北東コーナー部分では古墳時代の173号住居と僅かに重複している。重複部分が僅かであることや掘り込みが浅いため、新旧関係を確認することはできなかった。また4本の耕作溝により、住居の多くの部分が床下まで掘り込まれていた。竈が東壁面に造られていたが、耕作溝により燃烧部と袖部の大部分が削り取られており、焚口部分と煙道部の一部が僅かに残っていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、床面には柱穴が4本掘られていた。柱穴3と4の北側に接して、柱穴と思われる小穴が掘られていた。



第129図 175号住居跡実測図(1)



第130図 175号住居跡実測図(2)

規模 東西6.99m、南北7.01mである。壁高は残りの良い南壁面で15cmである。貯蔵穴は径53cm深さ76cmである。柱穴1は径54cm深さ66cm、柱穴2は耕作溝により掘られているが、現状で径36cm深さ40cm、柱穴3は径49cm深さ69cm、柱穴4は径40cm深さ63cmである。小穴1は径36cm深さ65cm、小穴2は径39cm深さ67cmである。

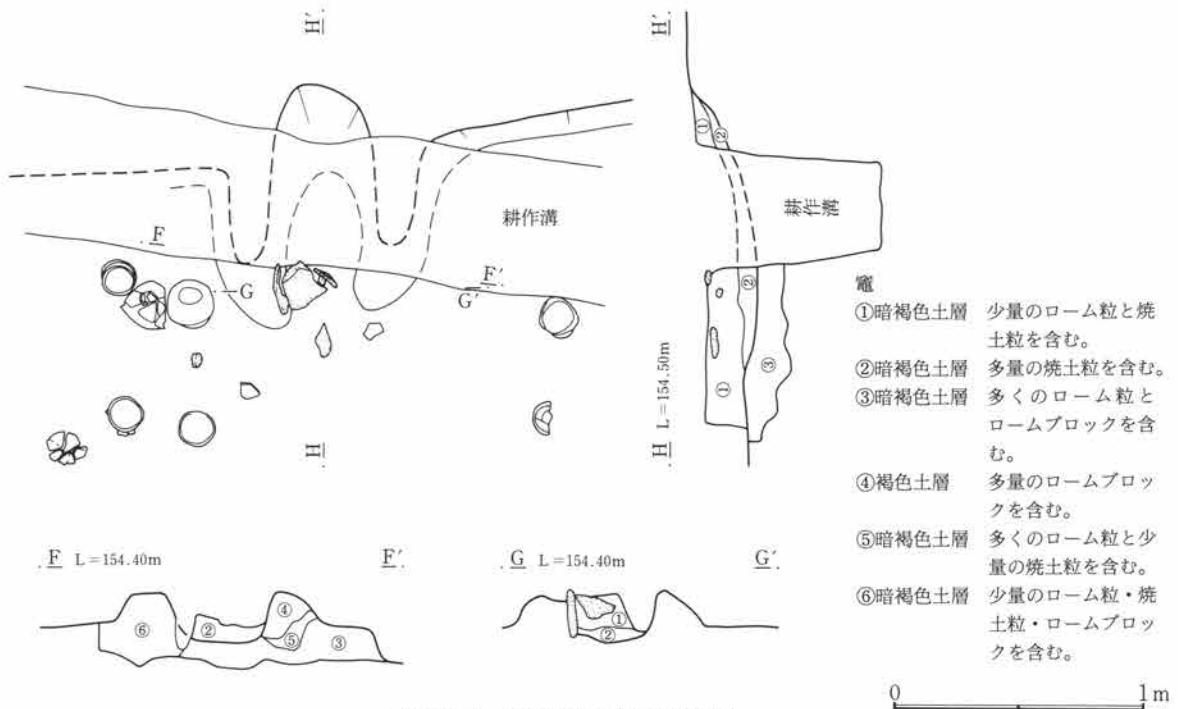
遺物 竈周辺に多くの土師器の坏が出土している。

(竈)

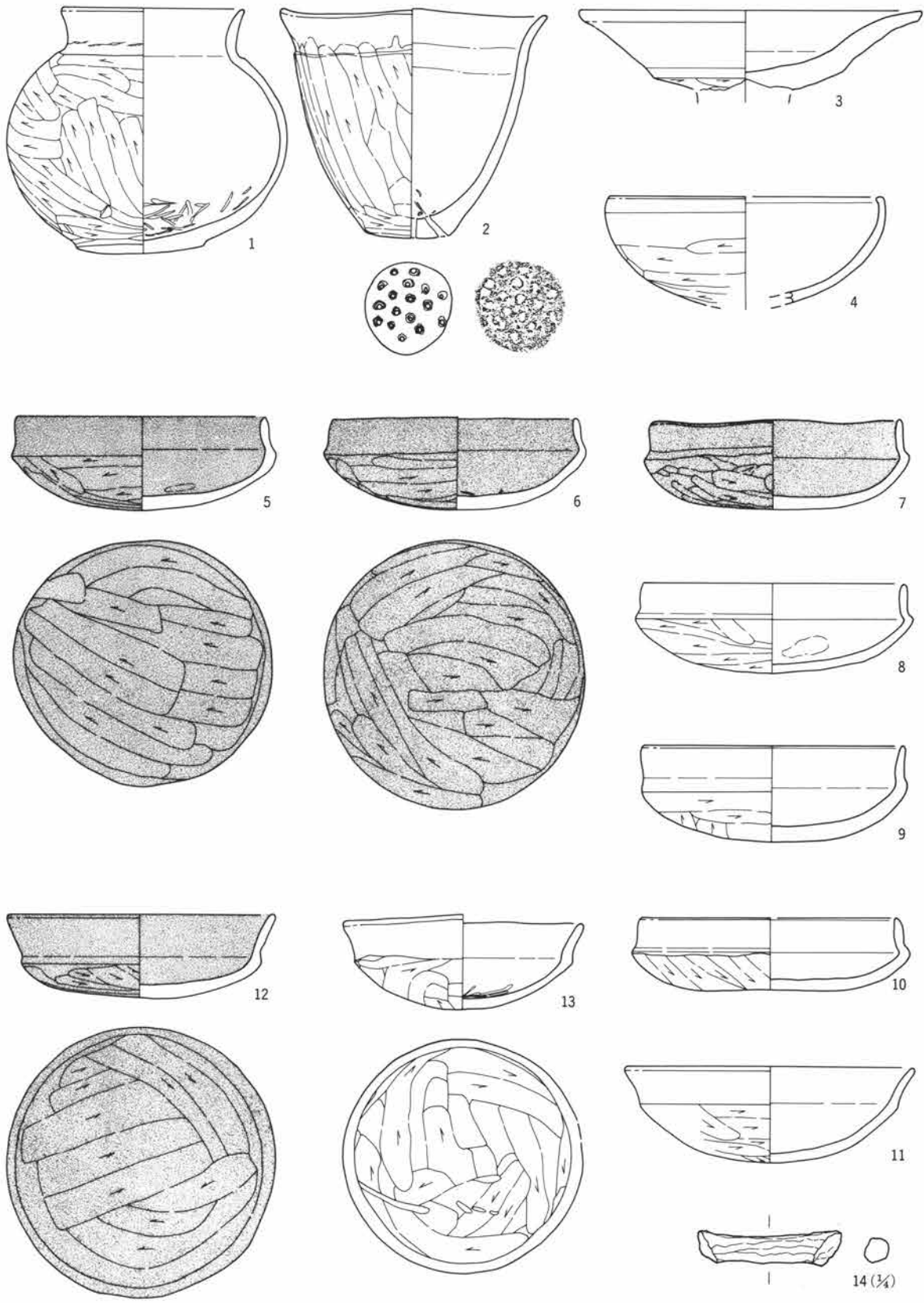
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 耕作溝により燃烧部と袖部の大部分が削り取られており、焚口部分と煙道部の一部が僅かに残っていた。焚口部分は左袖石と焚口部分に落ちかけている天井石の一部が残っており、その部分と残された煙道部より竈の様子が推定できた。残された燃烧部を中心に多くの焼土粒の出土が認められた。

規模 煙道方向96cm、燃烧部幅43cmである。



第131図 175号住居跡竈実測図



0 10cm 20cm

第132図 175号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

175号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
132-1 85	土 師 器 小 型 壺	覆土 完形	口 12.4 高 16.4 底 8.6	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。胴部外面ヘラナデにより器表面密。 口縁部横ナデ。内面ナデ。他の土器と異なり搬入土器か。 光沢を持つ雲母状の粒子を多く、ブロック状の粘土を含む。
132-2 85	土 師 器 小 型 甗	覆土 ほぼ完形	口 18.1 高 15.5 底 5.8	①やや粗、1~2mmの砂粒を多 く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。17個の小穴が穿たれている。胴部外面ヘラ削り。 多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面ナデにより器表面密。
132-3 85	土 師 器 高 杯	床面+3 杯部のみ完 形	口 17.3 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	杯底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体が密 である。 光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
132-4 85	土 師 器 杯	床面+3 1/2残存	口(13.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部内傾。 内面ナデにより器表面密。
132-5 86	土 師 器 杯	床面+1 ほぼ完形	口 12.5 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③断面にぶい 赤褐色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 口縁部外側~内側底面黒漆。底部外面吸炭。
132-6 86	土 師 器 杯	覆土 完形	口 12.4 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面赤褐色	底面ヘラナデ。器表面は密で一部に光沢を持つ。口縁部横ナ デ。内側底部にヘラの圧痕あり。 口縁部外側~内側底面に黒漆。底面吸炭による黒褐色。
132-7 86	土 師 器 杯	床面+5 1/2残存	口 12.7 高 4.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデに より器表面密。底部吸炭により黒色。 口縁部外側~内側底面黒漆。黒光りしている。
132-8 86	土 師 器 杯	覆土 完形	口 13.2 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表 面密。
132-9 86	土 師 器 杯	床面直上 1/2残存	口 13.2 高 4.8 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表 面密であるが、砂粒はやや目立つ。 表面全体が吸炭により黒色を帯びている。
132-10 86	土 師 器 杯	床面+2 1/2残存	口 13.1 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面暗褐色・断面にぶい褐色	底面浅いヘラ削り。口縁部横ナデ。器表面は全体に密である。 底面の一部に黒漆状の付着物あり。
132-11 86	土 師 器 杯	床面+4 1/2残存	口 14.6 高 4.8 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑は全く認められない。
132-12 86	土 師 器 杯	覆土 完形	口 13.6 高 4.2 底 丸底	①密、光沢を持つ雲母状の砂粒 を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・表面の一部黒色	底部ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが器表面はやや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部外側~内側底面に黒漆の痕跡が残る。底面吸炭。
132-13 86	土 師 器 杯	覆土 完形	口 12.2 高 4.7 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面がやや粗い。 口縁部横ナデ。内側底面に放射状にヘラの圧痕。
132-14 86	土 師 器 甗の棧	覆土 棧のみ	長 9.7 幅 1.8	①粗、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	表面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。 棧がそっくりはずれたもの。

194号住居跡 (第133~136図、図版20・21・86)

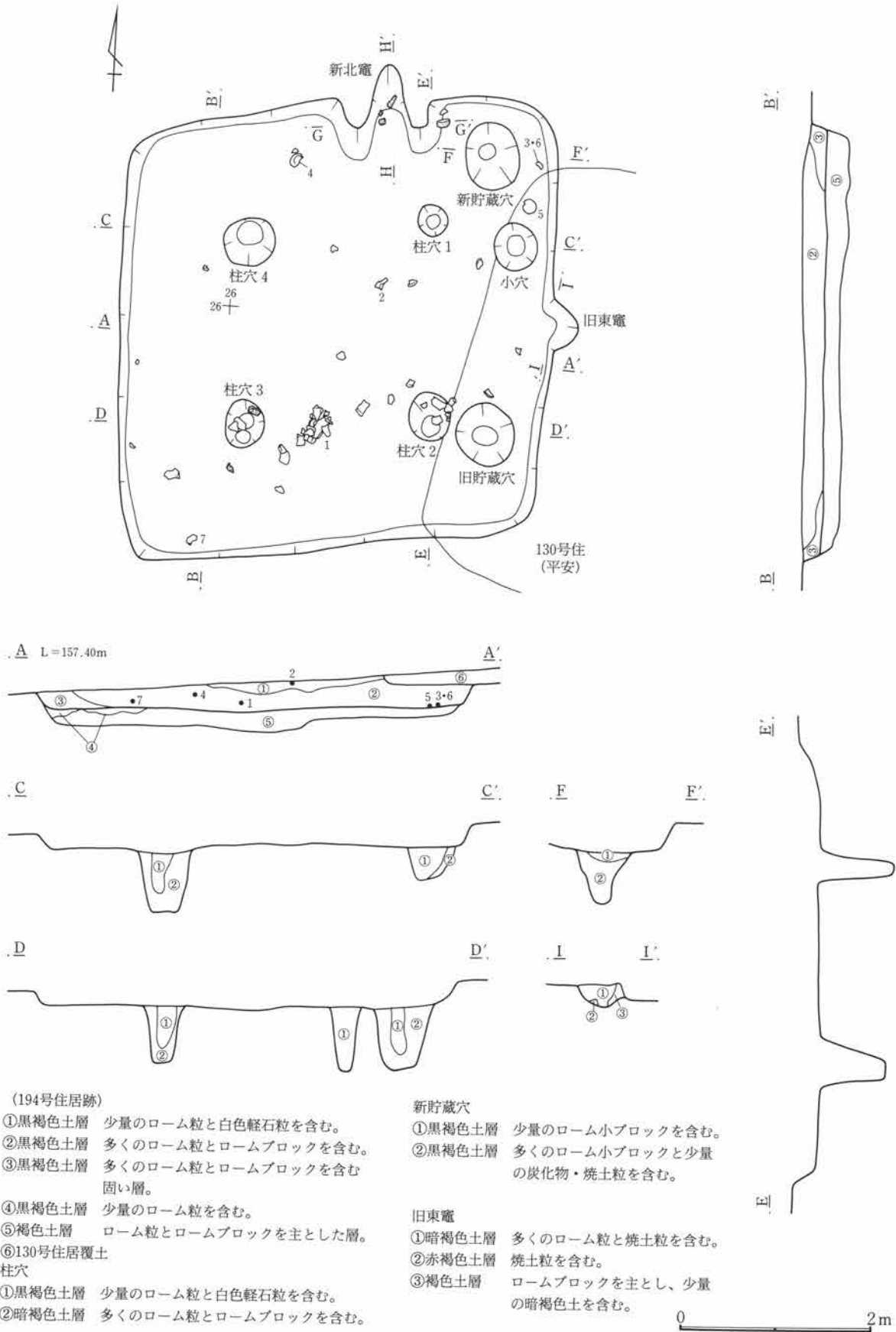
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、26・27-27グリッドに位置する。

概要 東側部分で平安時代の130号住居と重複している。しかし130号住居の掘り込みが浅いため、本住居の壁面下部や床面は削られずに残っていた。竈が北壁面と東壁面に造られており、北竈が最後まで使われていたため新北竈とし、床面上に位置する袖部分の取り外されていた東竈を旧東竈とした。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。新旧竈の右側に貯蔵穴が、また床面には柱穴が4本掘られていた。また柱穴1の東側にやや掘り込みの浅い小穴が掘られていた。

規模 東西4.51m、南北4.51mでほぼ正方形を呈する。壁高は残りの良い南壁面で25cmである。新貯蔵穴は径59cm深さ56cm、旧貯蔵穴は径62cm深さ65cmである。柱穴1は径28cm深さ77cm、柱穴2は径43cm深さ67cm、柱穴3は径38cm深さ60cm、柱穴4は径55cm深さ70cmである。小穴は径50cm深さ36cmである。

遺物 土師器の甗と杯が出土しているが、出土量は多くない。



第133図 194号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(新北竈)

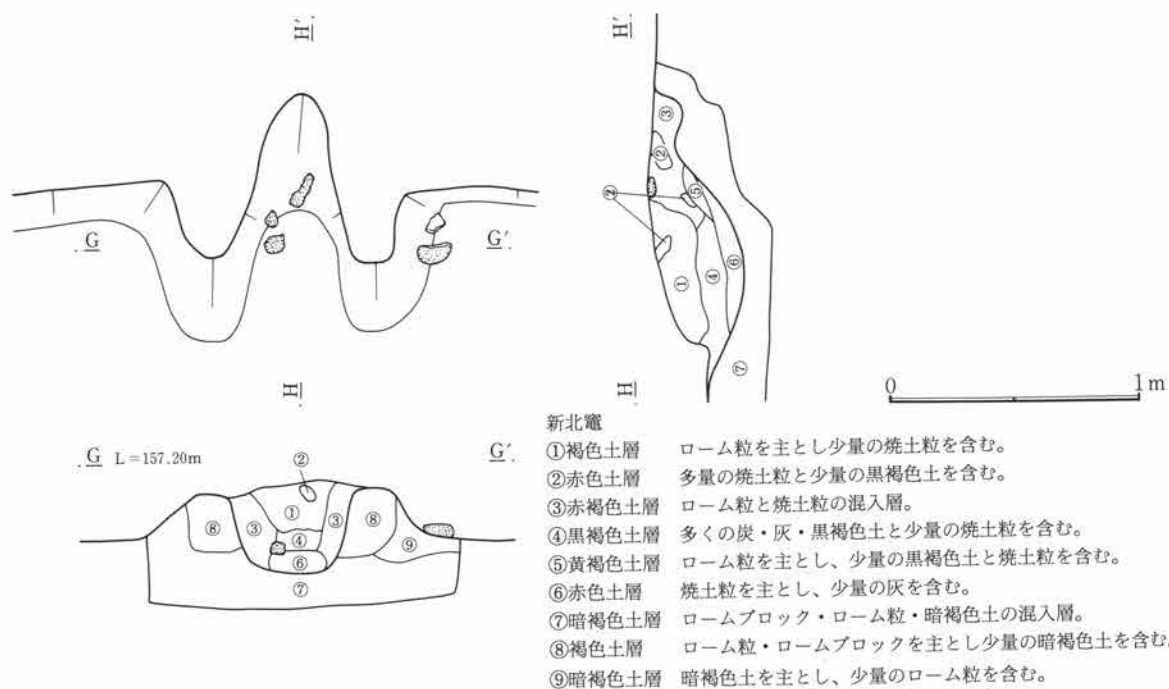
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖部や煙道部が残っており、比較的良好な状態の竈であった。竈内や袖部から石は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈であると思われる。燃焼部付近より大量の焼土粒が出土した。

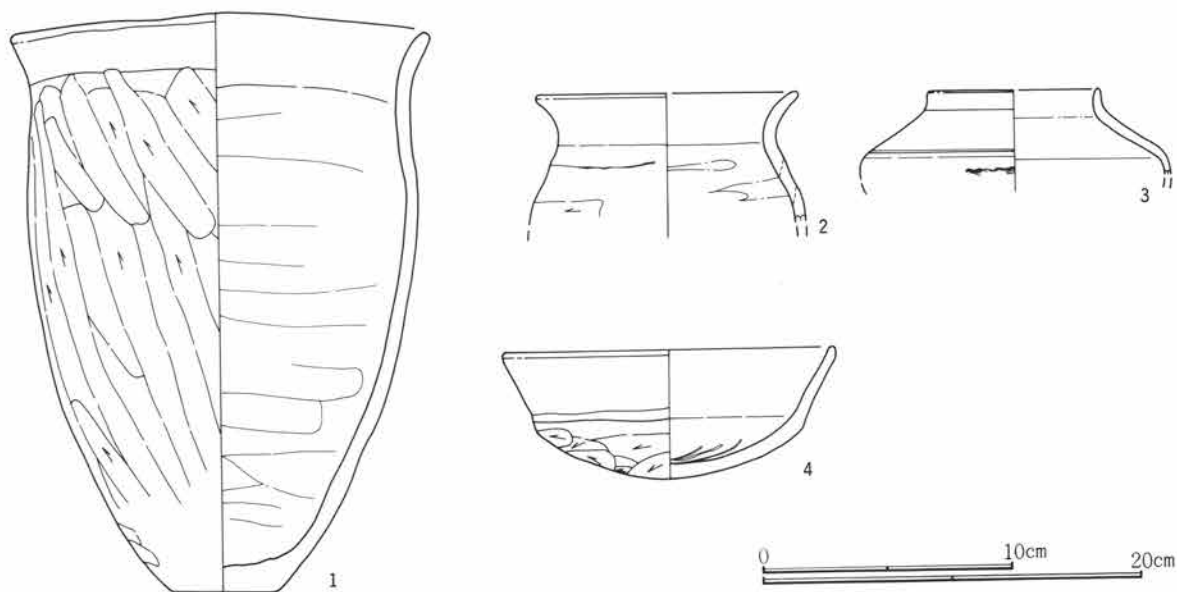
規模 煙道方向98cm、燃焼部幅48cmである。

(旧東竈)

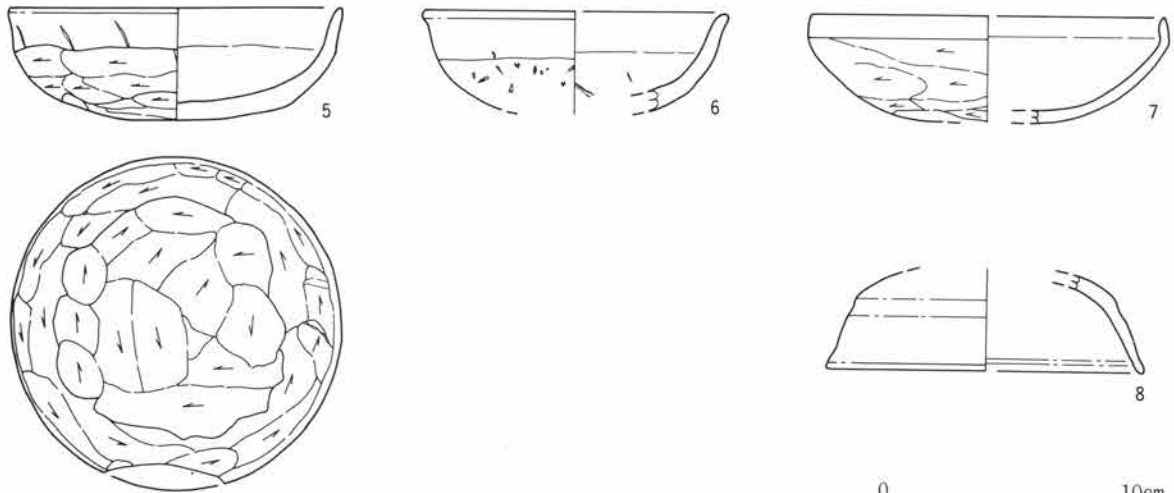
概要 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置すると思われるが、その部分は取り外されて残っていなかった。壁面に残された煙道部より多くの焼土粒が出土した。



第134図 194号住居跡新北竈実測図



第135図 194号住居跡出土遺物実測図(1)



第136図 194号住居跡出土遺物実測図(2)

194号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
135-1 86	土 師 器 甕	床面+11 口縁部ほぼ 完形 他 $\frac{1}{2}$	口 22.4 高 30.4 底 5.4	①粗、3~4mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・胴外面下半の一部黒褐色	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴部外面下半の一部の表面が剝離している。
135-2	土 師 器 小型 甕 破片	床面+23 破片	口(14.0) 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒色・内面灰色	胴部外面の多くはナデ。一部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
135-3	須 惠 器 短頸 壺 破片	床面+5 破片	口(9.2) 高 — 底 —	①密 ②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面にぶい橙色	肩部端に1条の沈線。肩部下に波状文。
135-4 86	土 師 器 坏	床面+14 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.1 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕。少し歪んでいる。
136-5 86	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.3 高 4.5 底 丸底	①密、少量の砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部中央ヘラ削りで、粘土がひどくササラ状になっている。底部周辺部通常のヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。底部中央は表面がササラ状になりひどく粗れている。
136-6	土 師 器 坏	床面+5 口縁部小片	口(12.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は不明瞭。器内の厚い坏である。
136-7 86	土 師 器 坏	床面+8 口縁 $\frac{1}{2}$ 残存 底面 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高 — 底 —	①やや密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③褐灰色	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面がやや粗い。内面ナデにより器表面密。ほとんど褐色を呈さない。
136-8	須 惠 器 蓋	覆土 口縁部小片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、少量の砂粒を含む。②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面橙色	稜はなく天井部と口縁部との境界に浅く広い凹線が巡る。口縁部内側に1条の沈線が巡る。

199号住居跡 (第137・138図、図版21・86)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、14・15-29グリッドに位置する。

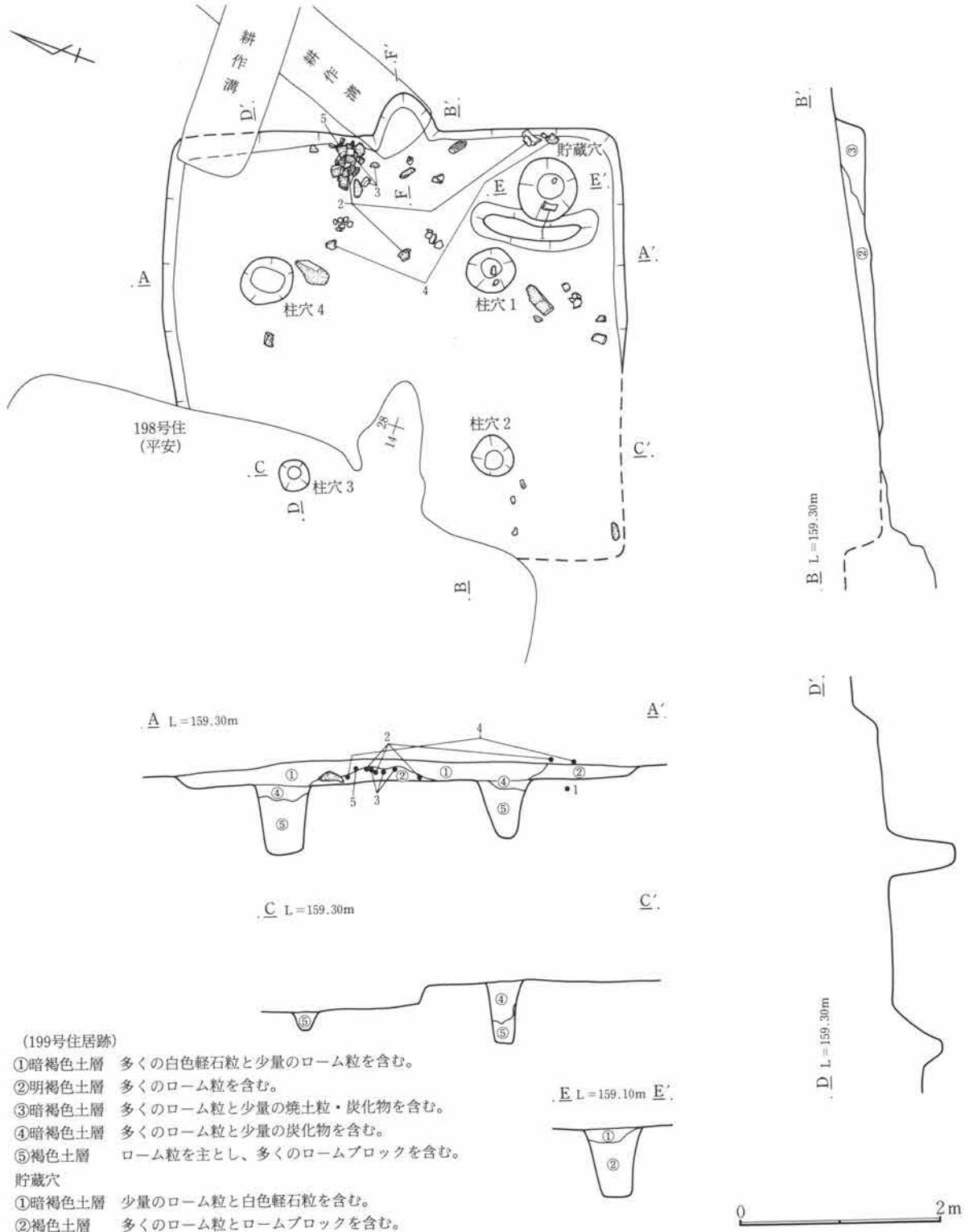
概要 南西方向に向かって低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い南西部分は削られており、南壁面の一部は残っていなかった。その部分で平安時代の198号住居と重複し、198号住居により床下部分まで掘り込まれていた。竈の造られていた東壁面部分に2本の耕作溝が掘られており、この溝により壁面の一部と竈の上面が削り取られていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られており、貯蔵穴の西側の床面部分に貯蔵穴を囲むような低い帯状の高まりが認められた。柱穴が4本掘られており、柱穴3は重複している198号住居の床下部分より確認された。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西不明、南北4.58mである。壁高は残りの良い東壁面北側部分で27cmである。貯蔵穴は径58cm深さ54cmである。柱穴1は径51cm深さ38cm、柱穴2は径41cm深さ69cm、柱穴3は径25cm深さ51cm、柱穴4は径54cm深さ62cmである。

遺物 竈周辺に少量の土師器の甕と坏が出土している。



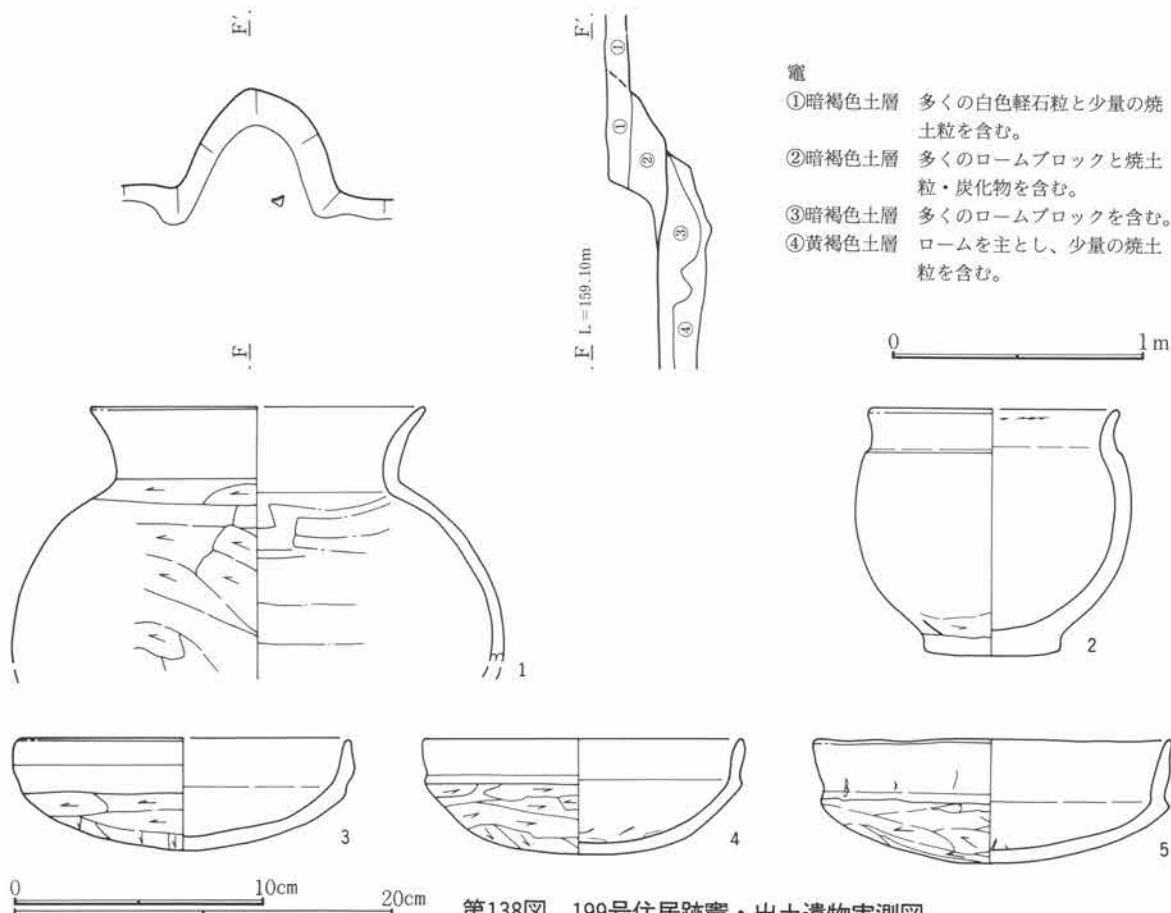
第137図 199号住居跡実測図

(竈)

位置 住居東壁に造られている。他の住居の竈より壁面を多く掘り込んで燃焼部が造られている。

構造 床面上に位置する袖部分はほとんど残っていないが、竈内から石は出土しなかった。しかし左袖部分の外側に、竈に使われたと思われる天井石を含む多くの石がまとめて置いてあるため、多くの石を用いて造られていた竈と思われる。住居が使用されなくなった段階で竈が壊され、まとめて住居内に残されたものと思われる。燃焼部付近より多くの焼土粒と炭化物の出土が認められた。

規模 袖部分と燃焼部は壊されているため不明である。



第138図 199号住居跡竈・出土遺物実測図

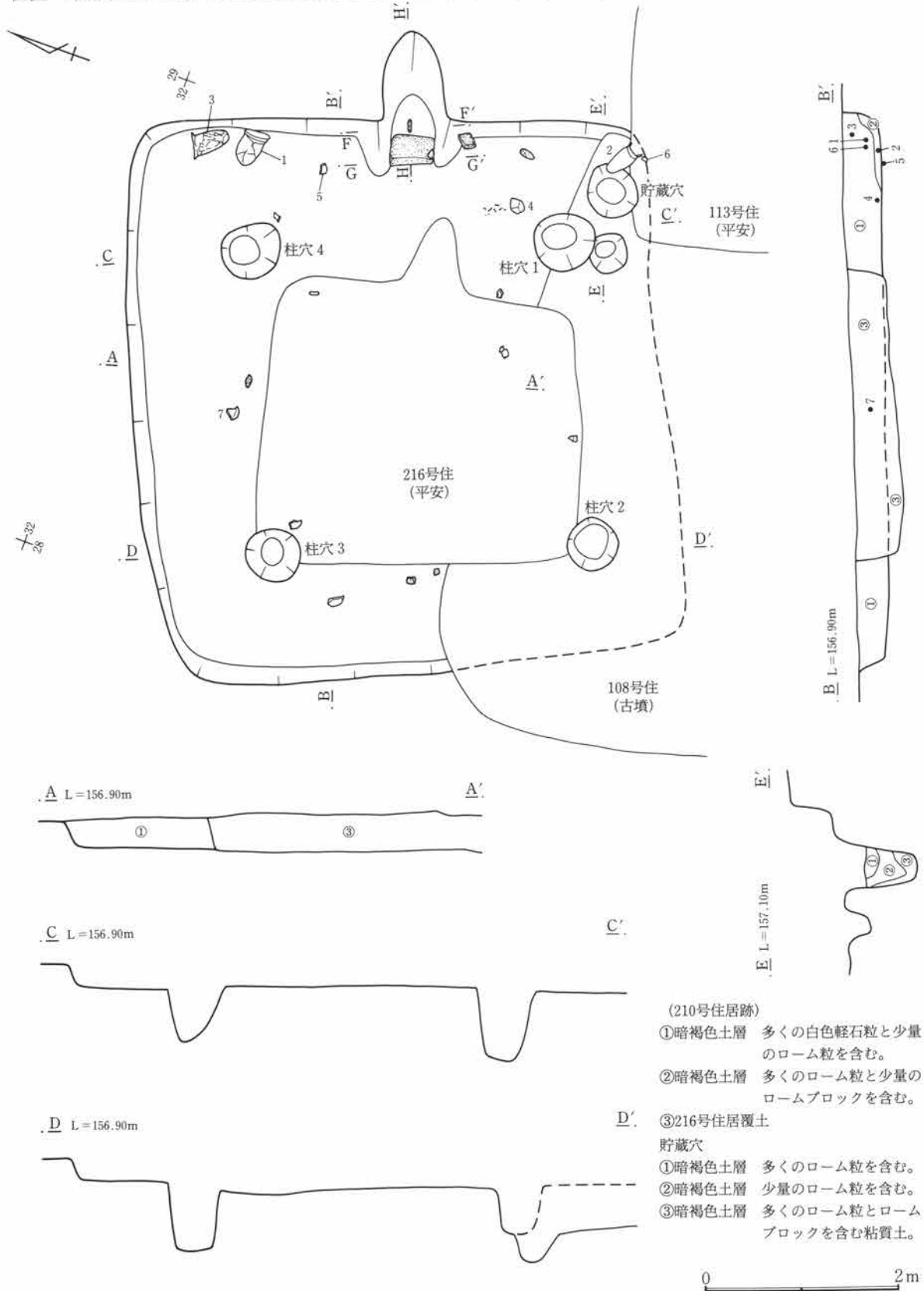
199号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
138-1	土 師 器 壺	床面+22 口縁～胴部 破片	口(17.8) 高 — 底 —	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴上部深いヘラ削り。砂粒が小さいため器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
138-2 86	土 師 器 小 型 壺	床面直上 1/2残存	口(13.3) 高 13.0 底 7.0	①やや粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部下端ヘラ削り。上部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
138-3 86	土 師 器 坏	床面+2 1/2残存	口(13.4) 高 4.4 底 丸底	①やや密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面幅の広いヘラ削り。多くの小さな砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。表面の黒色は吸炭か。
138-4 86	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.6 高 4.6 底 丸底	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい橙色	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面底部中央にヘラの圧痕。
138-5 86	土 師 器 坏	床面+10 1/2残存	口 14.0 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色・一部黒色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕あり。口縁部外面～内側底面に黒漆と思われる痕跡あり。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

210号住居跡 (第139~141図、図版21・22・70・86)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32-29グリッドに位置する。



第139図 210号住居跡実測図

概要 住居中央を本住居より小さな平安時代の216号住居により床下部分まで掘り込まれている。また南東コーナー部分を平安時代の113号住居に、南側を古墳時代の108号住居により床下部分まで掘り込まれていた。そのため南側の住居の範囲は明らかでない。新旧関係は210→108→216→113号住居である。竈の残りは比較的良好であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。柱穴1の外側に小穴が掘られていた。用途は不明である。

規模 東西5.75m、南北不明であるが、貯蔵穴や柱穴の位置等から推定すると5.30mである。壁高は残りの良い西壁部分で34cmである。貯蔵穴は径53cm深さ80cmで、柱穴1は径57cm深さ77cm、柱穴2は径51cm深さ56cm、柱穴3は径55cm深さ72cm、柱穴4は径58cm深さ54cmである。小穴は径42cm深さ33cmである。

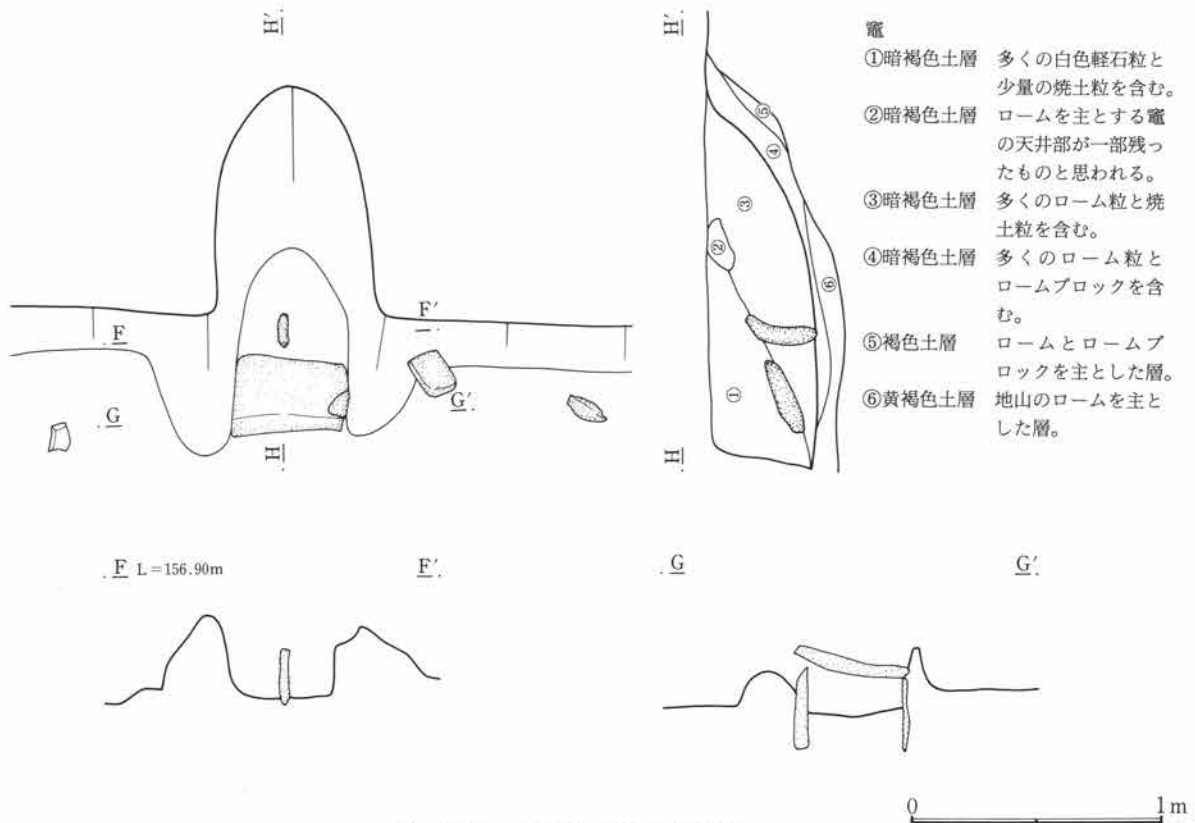
遺物 竈の造られている東壁面に接して土師器の甕が3点出土している。

(竈)

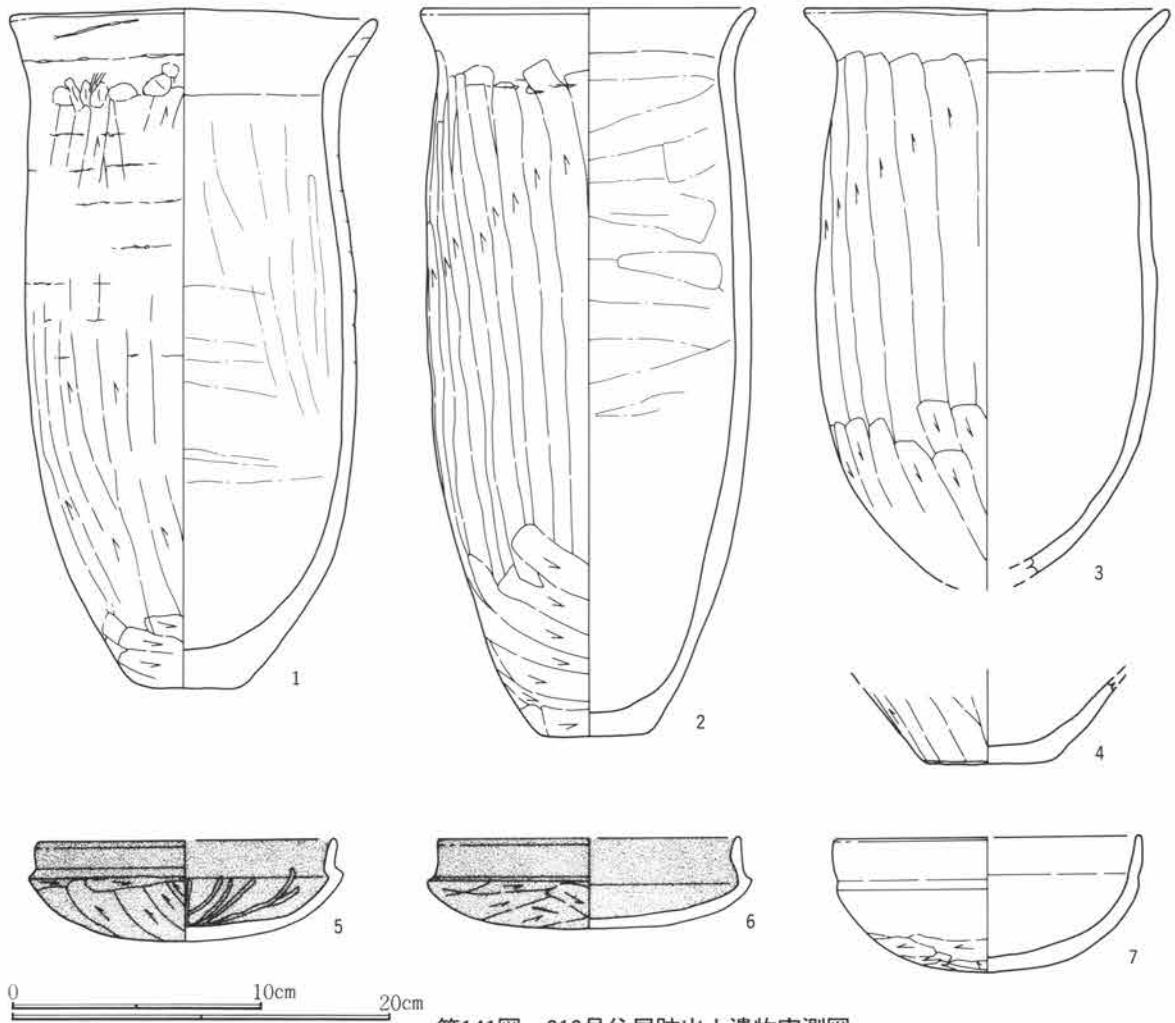
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分の左右の袖石と燃烧部中央に置かれた支脚石が、ほぼ使用時の状態で残っていた。また焚口の天井石が袖石から外れて、焚口部分に少し落ちかけたような状態で出土した。燃烧部に甕等は置かれていなかった。燃烧部と煙道部の境部分の天井部が一部崩れることなく残っていたようである。燃烧部を中心に多くの焼土粒や焼土ブロックの出土が認められた。また右袖の外側部分に天井石に使われていた石とほぼ同じ石の破片が出土した。竈に使われていた石と思われる。このように残りの良好な竈であった。

規模 煙道方向148cm、燃烧部幅35cmである。



第140図 210号住居跡竈実測図



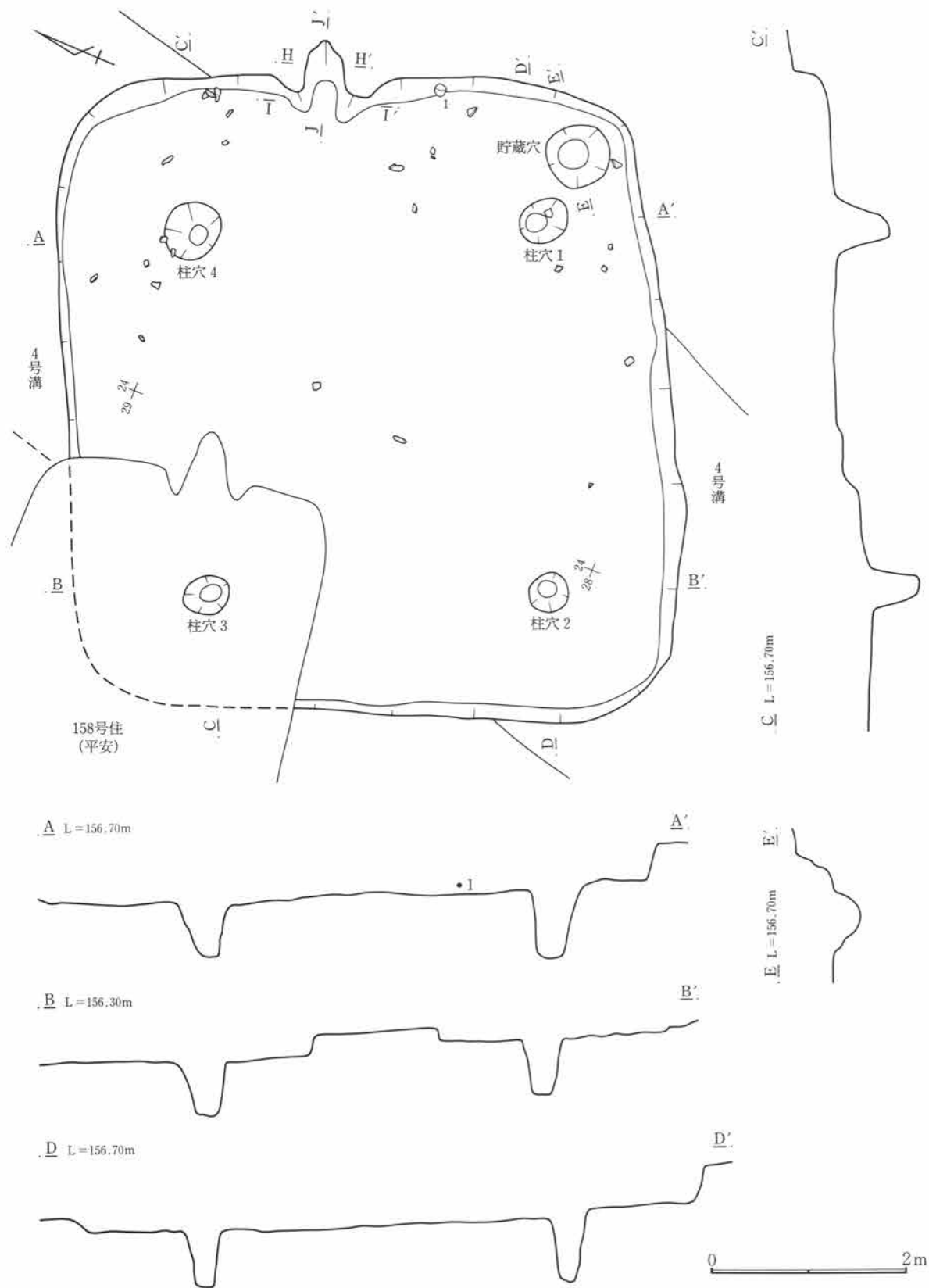
第141図 210号住居跡出土遺物実測図

210号住居跡出土遺物観察表

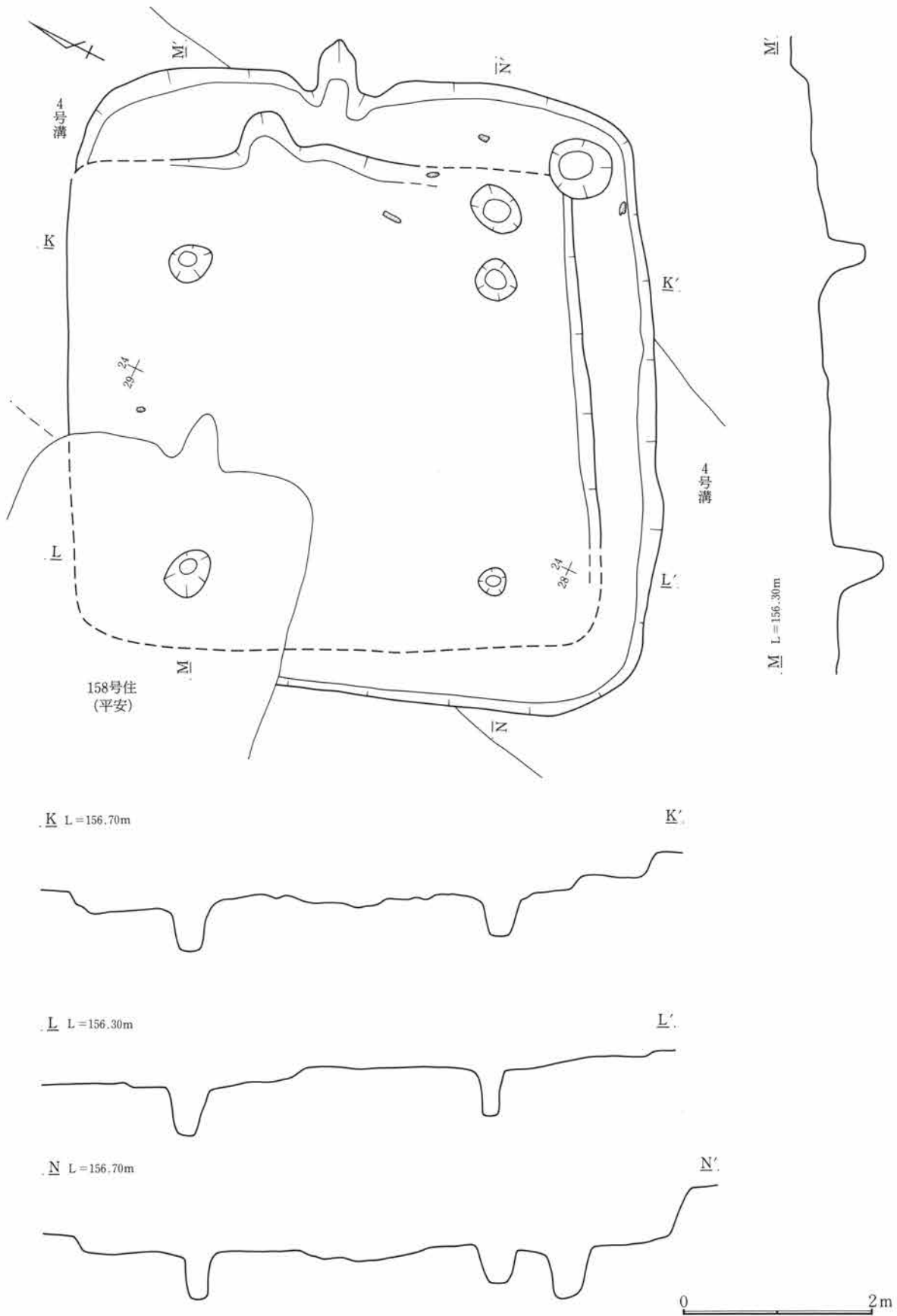
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
141-1 86	土師器 甕	床面+14 ほぼ完形	口 19.4 高 36.3 底 5.6	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動はほとんどない。多くの輪積痕が残る。 胴部の器内は薄い底部は厚い。
141-2 70	土師器 甕	床面+1 胴下一部欠損 他完形	口 17.8 高 38.2 底 6.0	①粗、2~3mmの砂粒を多く、4~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 均整のとれた長胴甕である。
141-3 86	土師器 甕	床面+36 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{2}{3}$ 残存	口 19.4 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。1mm以下の小さな砂粒が多く移動している。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
141-4	土師器 甕	床面+15 底部完形	口 — 高 — 底 7.0	①粗、3~4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴部外面弱いヘラ削りとナデ。内側器表面の多くが剝離している。
141-5 86	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高(4.0) 底 丸底	①やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面灰褐色	底面幅の広いヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。内側底面放射状のヘラ磨き。 口縁部外側~内側底面黒漆。
141-6	土師器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.0) 高 3.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口縁部外側~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
141-7 86	土師器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高 5.3 底 丸底	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面中央ヘラ削り。周辺ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

214号住居跡 (第142~147図、図版22・87)

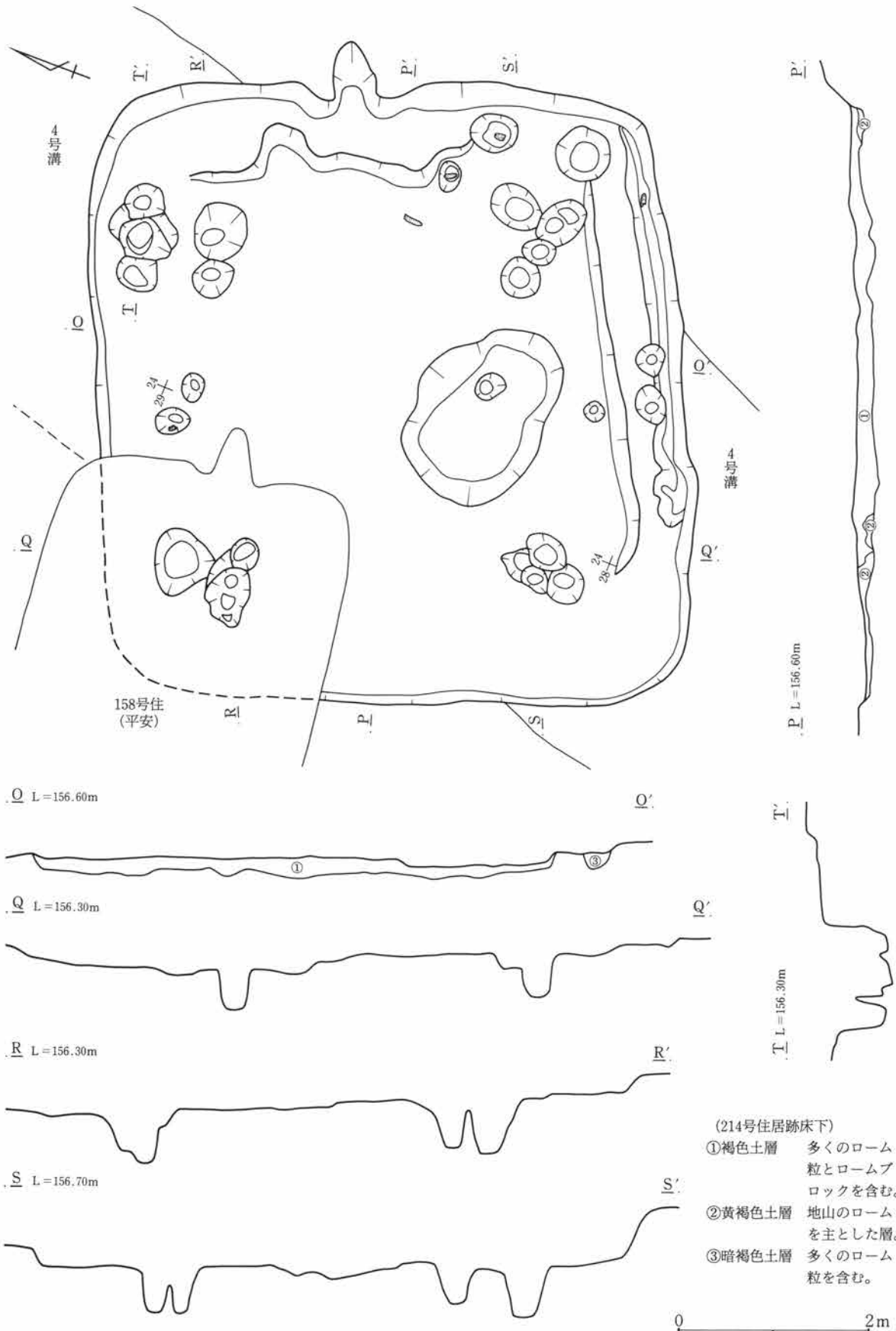
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、29-24・25グリッドに位置する。



第142図 214号住居跡実測図



第143図 拡張以前に想定される214号住居跡実測図



第144図 214号住居跡床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

概要 北西部分で平安時代の158号住居と重複しており、その部分は床下部分まで掘り込まれていた。また南北方向に掘り込まれている幅の広い4号溝により、住居の中央部分が床面付近まで削り取られていた。このように残りの悪い住居であった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。浅い貯蔵穴が竈右側に、また柱穴が4本掘られていた。

規模 東西6.45m、南北6.25mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で50cmである。貯蔵穴は径66cm深さ17cmで、柱穴1は径54cm深さ68cm、柱穴2は径40cm深さ70cm、柱穴3は径48cm深さ84cm、柱穴4は径56cm深さ71cmである。

床下 床下調査により、柱穴と思われる多くの小穴、竈手前部分から竈の掘り方に似た掘り込み、竈の右側に貯蔵穴と思われる小穴が、また東壁面の内側に壁と平行する一段高い壁面の痕跡とも思える高まりが確認された。これらの痕跡から2軒の住居が重複していた場合と、一回り小さな住居が拡張されてより大きな住居が造られた2つの可能性が考えられる。調査段階では拡張された住居であると判断した。拡張以前に想定される住居平面図は別に作成した。また柱穴と特定できない小穴や掘り込みも多いためすべての掘り込みを床下平面図で提示した。

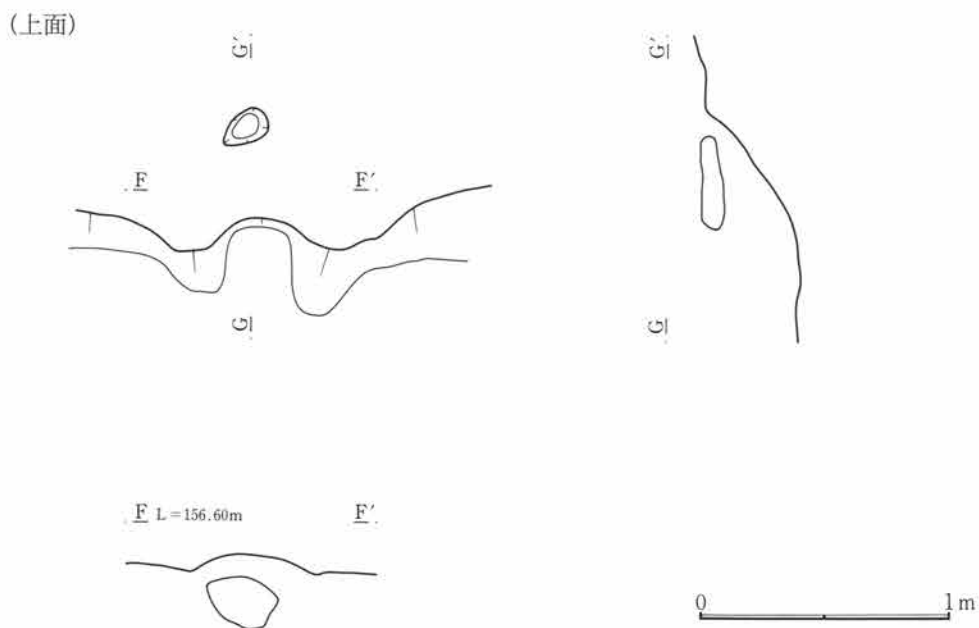
遺物 出土量が少なく図示できたのは2点だけである。

(竈)

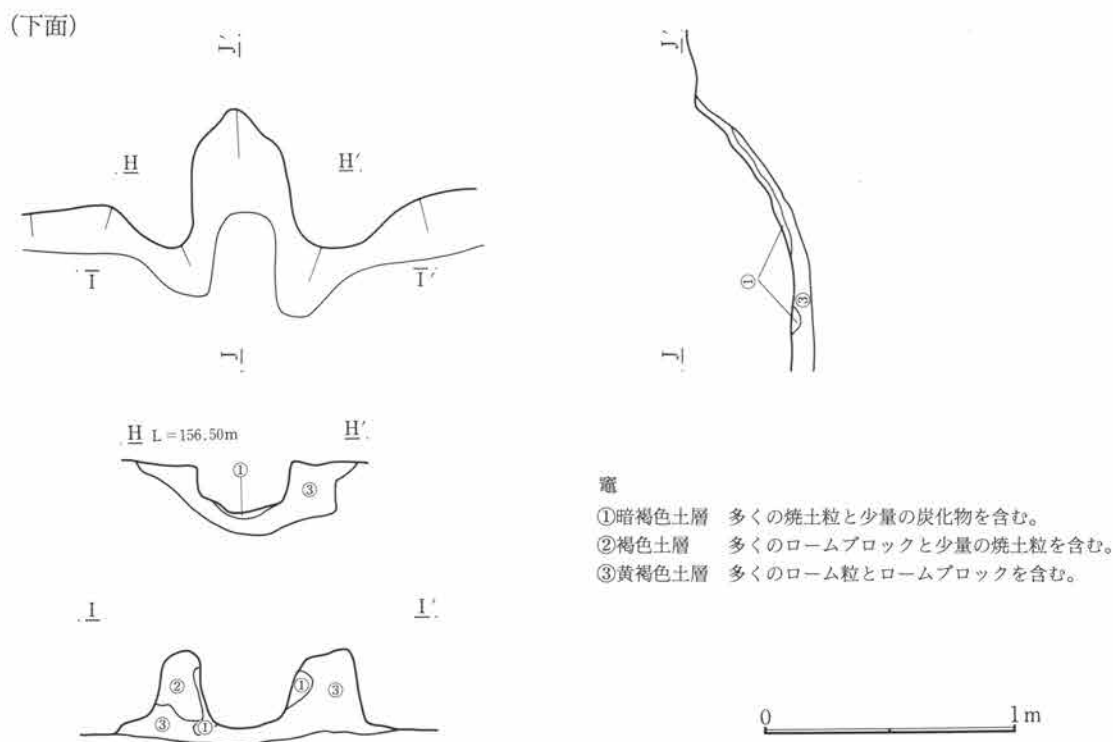
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 壁面部分から外側の煙道部の天井は良好に残っていたが、床面上に位置する両袖部や燃焼部の多くは意識的に壊されたためか残っていなかった。竈内や周辺からも竈材に使われたような石は出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。燃焼部付近に多くの焼土粒の出土が認められた。

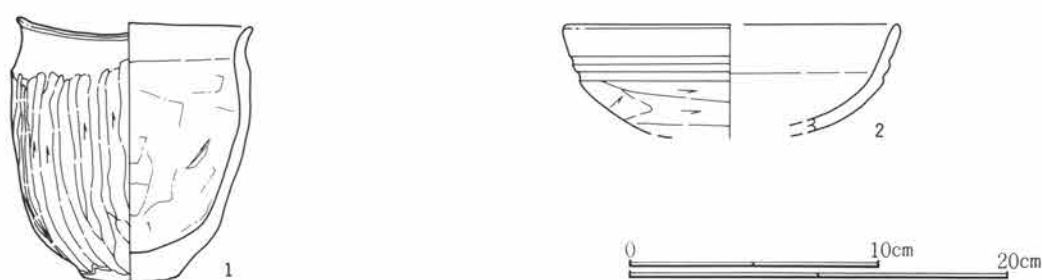
規模 煙道方向83cm、燃焼部幅38cmである。



第145図 214号住居跡竈実測図(1)



第146図 214号住居跡竈実測図(2)



第147図 214号住居跡出土遺物実測図

214号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
147-1 87	土 師 器 小 型 壺	床面+5 完形	口 12.7 高 14.0 底 5.2	①粗、5~10mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に至んでいる。
147-2	土 師 器 坏	覆土 口縁部小片	口(13.6) 高 — 底 —	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部に2条の沈線が一周する。内面ナデにより器表面密。

217号住居跡 (第148・149図、図版22・23・87)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、35・36-23グリッドに位置する。

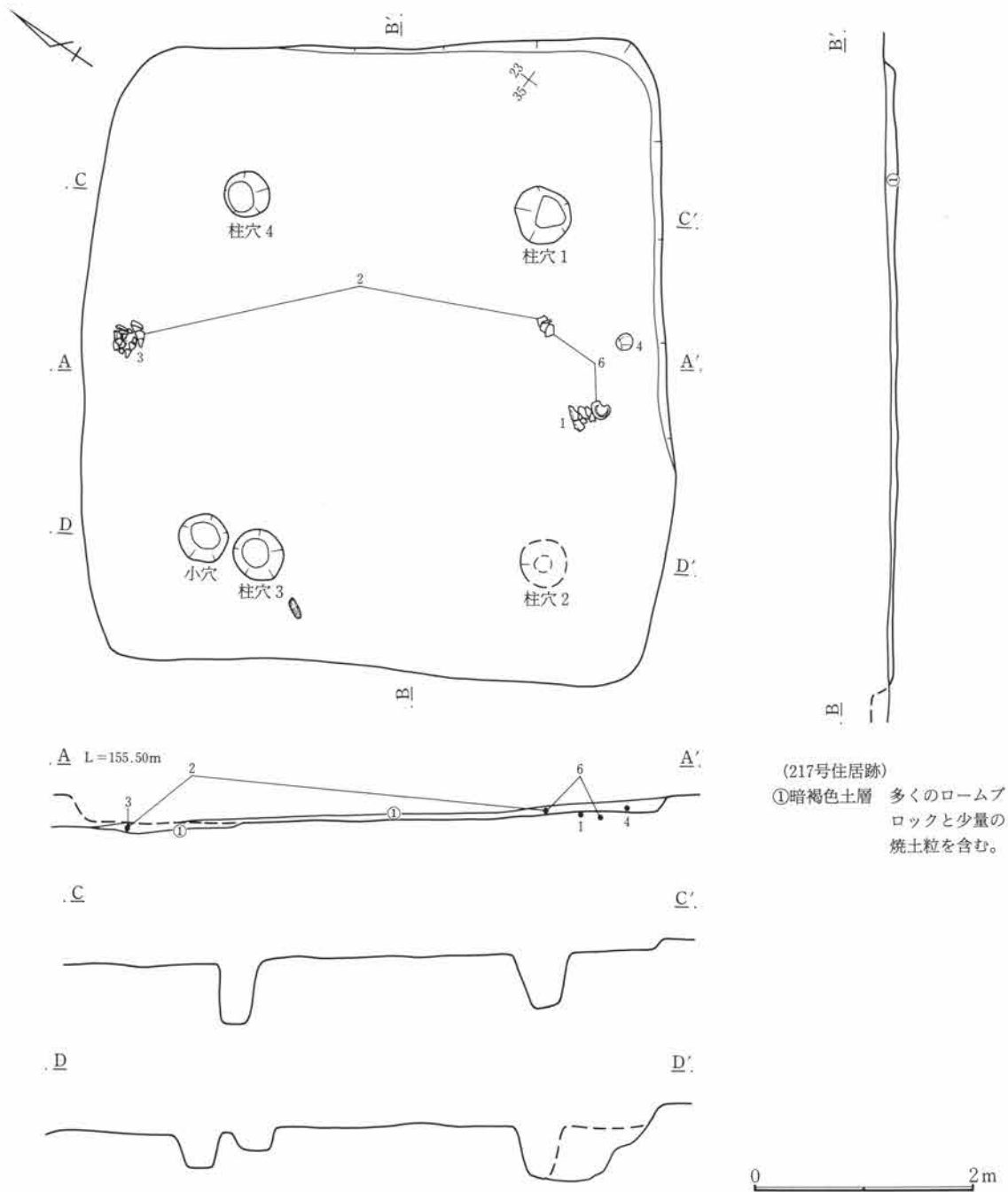
概要 残りが悪く覆土の大部分が削られており、壁面は南東部分以外では残っていなかった。床面も西側は一部残っていなかった。竈がどの壁面に造られていたのかは、痕跡を留めていないため不明である。多くの竈に伴う貯蔵穴も確認できなかった。南西部分に縄文時代の風倒木痕がある。その部分を掘り込んで貯蔵穴が造られていた可能性も考えられるが明らかでない。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。僅かに残された床面であるが、堅く踏み固めてあった。柱穴が4本掘られているが、柱穴2は縄文時代の風倒木痕の暗褐色土層の覆土を掘り込んでいるため、検出が困難で明瞭な柱穴は確認できなかった。また柱穴3の北側に小穴が掘られていた。

規模 東西5.34m、南北5.37mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で17cmである。柱穴1は径51cm深さ43cm、柱穴2は推定径41cm深さ44cm、柱穴3は径45cm深さ24cm、柱穴4は径41cm深さ60cmである。小穴は径45cm深さ37cmである。

遺物 少量の土師器の甑と坏が出土している。



第148図 217号住居跡実測図



第149図 217号住居跡出土遺物実測図

217号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
149-1 87	土 師 器 小 型 甕	床面+16 1/2残存	口(15.0) 高 14.5 底 7.7	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部の器肉が厚い。
149-2	土 師 器 甕	床面直上 1/2残存	口(25.8) 高(29.4) 底(8.4)	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面灰褐色	胴外面強いヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面密。同一個体であると思われるため図上で一個体とする。
149-3	土 師 器 甕	床面直上 破片	口(26.0) 高(29.8) 底(8.2)	①粗、1~2mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。同一個体であると思われるため図上で一個体とする。
149-4 87	土 師 器 坏	床面+6 完形	口 14.0 高 4.9 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器肉が厚く無骨な感じの坏である。
149-5 87	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 14.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑は認められない。胎土はやや粉状。
149-6 87	土 師 器 坏	床面直上 口縁部一部 欠損	口 15.4 高 4.7 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。底部周辺ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底面はヘラナデにより、ナデの部分の器表面密。

220号住居跡 (第150・151図、図版22・87)

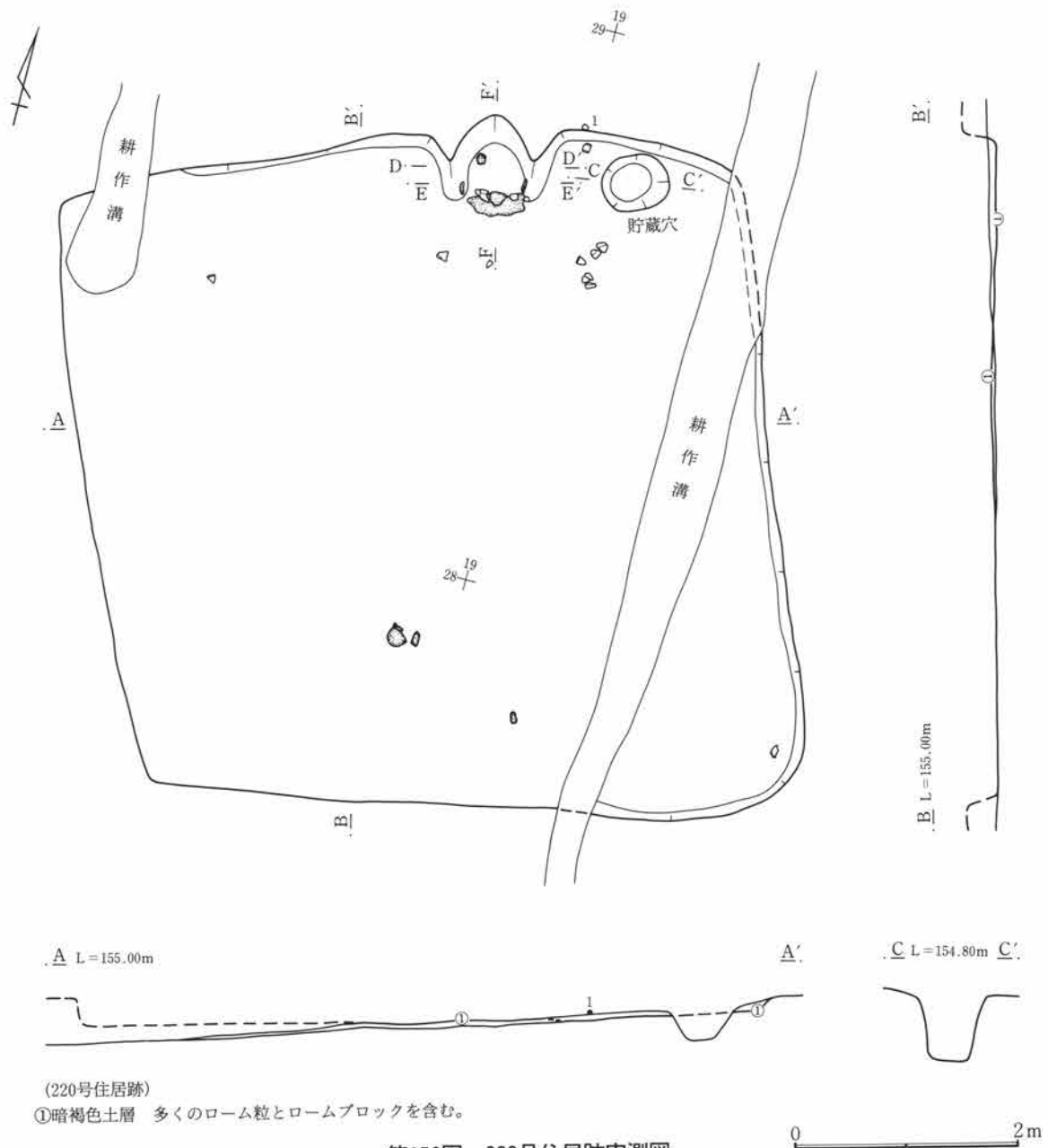
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、29-19・20グリッドに位置する。

概要 残りが悪く覆土の大部分が削られており、壁面は東側部分以外では残っていなかった。床面も西側はほとんど残っていなかったため、床下部分の調査により住居範囲を確認した。

構造 僅かに残っていた床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。住居規模は大きいが、柱穴は掘られていなかった。通常この規模の住居には柱穴が伴うため、住居の範囲確認に疑問が残る。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西6.07m、南北5.99mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で17cmである。貯蔵穴は径60cm深さ51cmである。

遺物 出土量が少なく図示できたのは土師器の坏1点だけである。破片を含めても42点である。

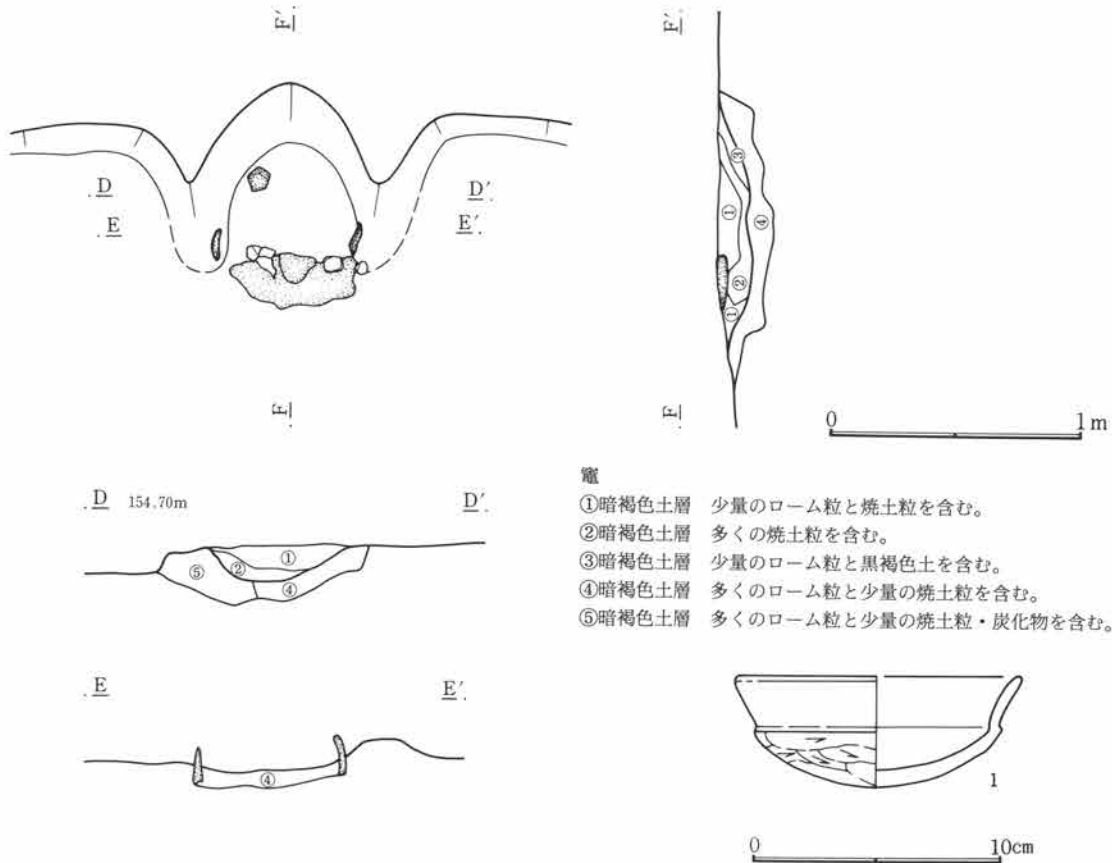


(竈)

位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に上部の大部分は削り取られて残っていなかった。焚口部分に袖石に使われていた石がほぼ据えられていた状態で出土し、袖石の手前部分に天井石が割れて落ちていた。燃烧部付近に多くの焼土粒の出土が認められた。

規模 煙道方向74cm、燃烧部幅55cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 少量のローム粒と黒褐色土を含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。

第151図 220号住居跡竈・出土遺物実測図

220号住居跡出土遺物観察表

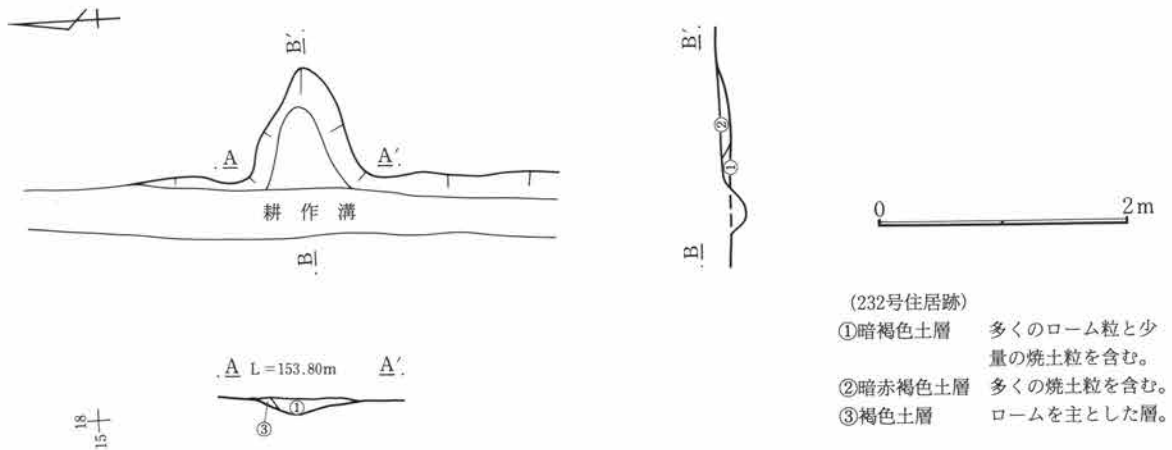
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
151-1 87	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(11.4) 高 4.4 底 丸底	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面がやや粗い。稜は明瞭である。黒斑認められず。

232号住居跡 (第152・153図、図版23)

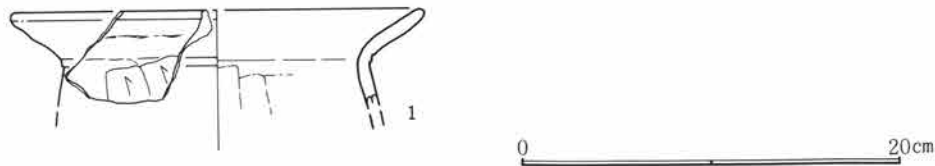
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、15-19グリッドに位置する。

概要 西側に向かって低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている東壁面付近に住居と竈の痕跡が残っていたが、他の部分は床下部分まで削り取られて残っていなかった。さらに竈焚口付近に耕作溝が掘られており非常に残りが悪くなっている。竈も僅かに下部が残っていただけであった。貯蔵穴や柱穴も確認できなかった。出土遺物としては竈内より土師器の甕の破片が2片出土している。時代は出土破片より古墳時代と想定したが明らかでない。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第152図 232号住居跡実測図



第153図 232号住居跡出土遺物実測図

232号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
153-1	土師器 甕	覆土 口縁部破片	口(22.0) 高— 底—	①やや粗、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体に大量の砂粒が目立つ。

238号住居跡 (第154~156図、図版23・108・109)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、16・17-18グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている東側部分は比較的良好に残っていたが、低い西側の部分は床下部分まで削られており住居の範囲は不明である。南東部分で平安時代の237号住居と重複しており覆土上面が削られている。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。南壁面下に壁溝が確認された。浅い貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北4.59mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で50cmである。貯蔵穴は径79cm深さ14cmで浅い。

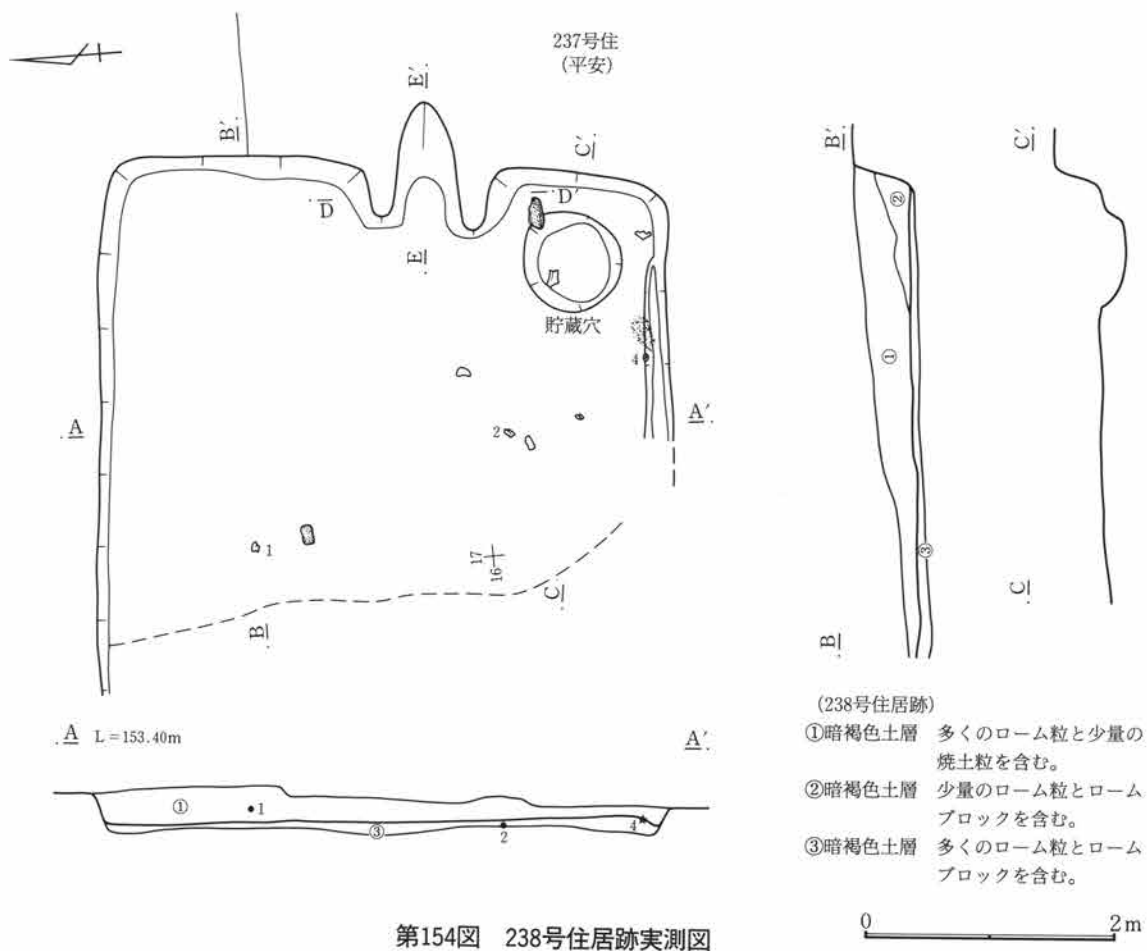
遺物 出土量が少ない。紡錘車と土玉が出土している。

(竈)

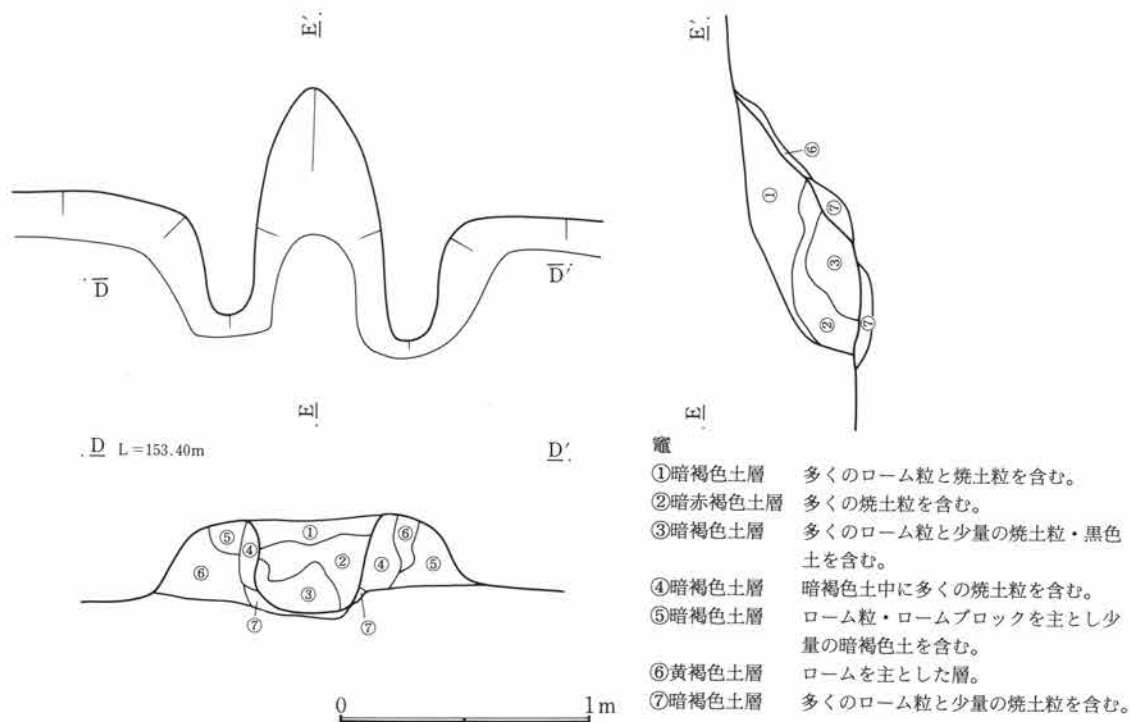
位置 住居東壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖部分と燃焼部が良好に残っていた。袖石等の竈に使われたと思われる石は出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。燃焼部を中心として多くの焼土粒が出土した。

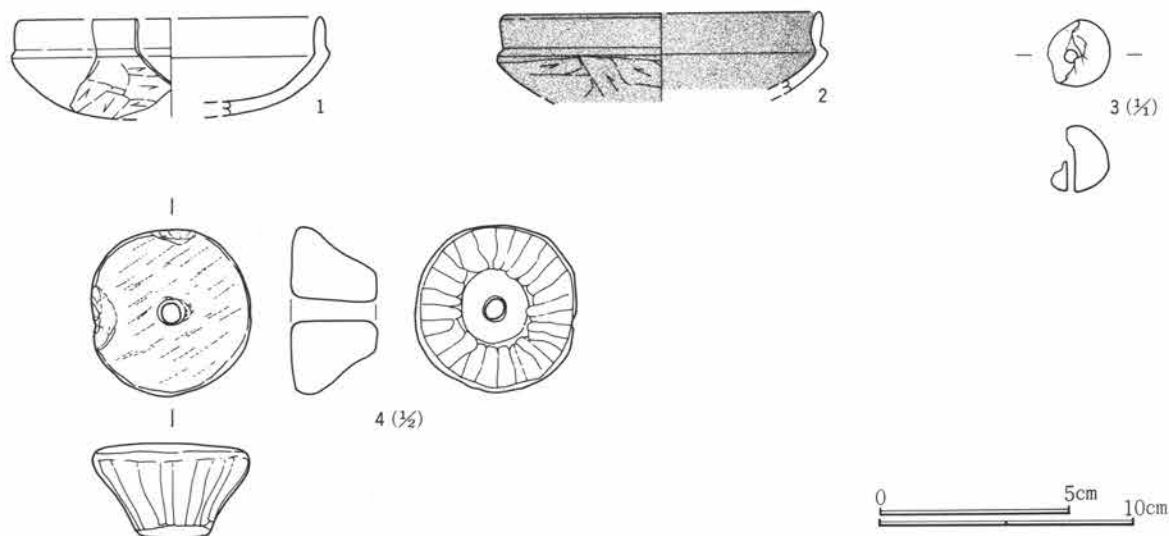
規模 煙道方向102cm、燃焼部幅43cmである。



第154図 238号住居跡実測図



第155図 238号住居跡竈実測図



第156図 238号住居跡出土遺物実測図

238号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
156-1	土 師 器 坏	床面+10 破片	口(12.2) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 光沢を持つ雲母状の小さな砂粒を多く含む。
156-2	土 師 器 坏	床面直上 破片	口(12.8) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。口縁部は短く稜は明瞭である。 口縁部外側～内側底面黒漆か。底部外面吸炭により黒色。
156-3 108	土 製 品 土 玉	覆土 一部欠損	径 0.9 孔径 0.1 厚 0.8 重 0.5	①密 ③黒色	丸く作り乾燥前に軸穴を穿孔している。軸穴は中央よりずれている。吸炭により全体が黒色を呈している。
156-4 109	石 製 品 紡 錘 車	床面+2 完形	径 4.3/1.8 孔径 0.7 厚 2.5 重 56.4		滑石片岩。側面が凹状を呈し、刀子等の刃物で細く削られている。上下面磨きにより光沢。荒砥削りの痕跡は認められない。

239号住居跡 (第157～159図、図版23・24・87)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、16—17グリッドに位置する。

概要 小さな住居で掘り込みも深く、残りの良好な住居である。この地域は低地に近いためかロームの堆積が少なく、ローム粒の混入している灰褐色土を掘り込んで住居が造られている。

構造 床面はローム粒の混入している灰褐色土で造られているが、柔らかく明瞭でない。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.38m、南北3.47mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で52cmである。

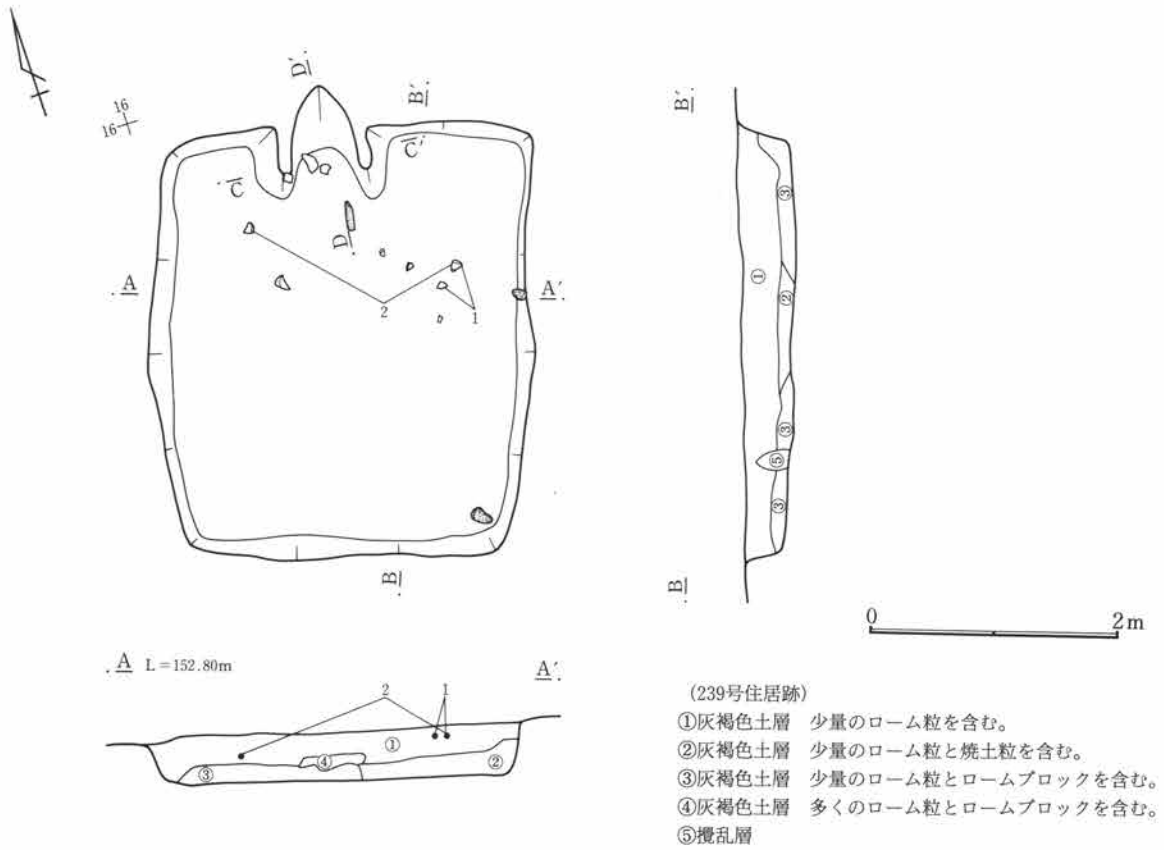
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の甕と坏の2点である。

(竈)

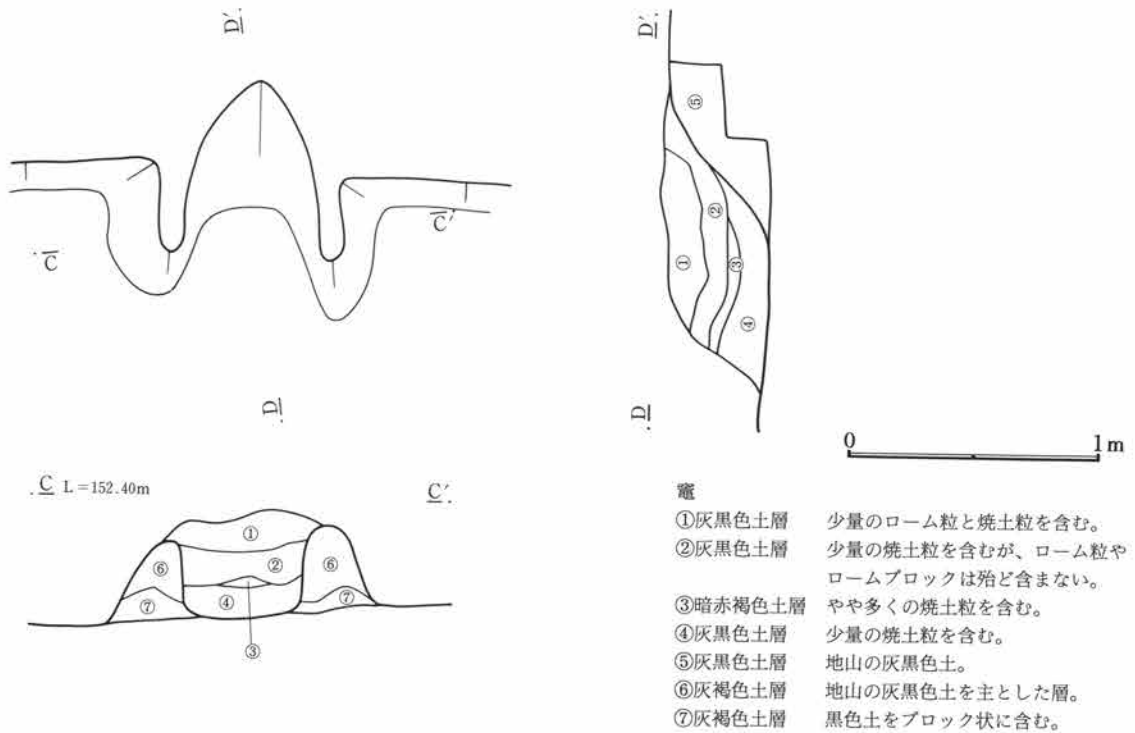
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖部分と燃焼部が良好に残っていた。袖石等の竈に使われたと思われる石は出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。燃焼部を中心として焼土粒が出土したが、ロームが少ないためか全体的に少なかった。

規模 煙道方向98cm、燃焼部幅49cmである。



第157図 239号住居跡実測図



第158図 239号住居跡竈実測図



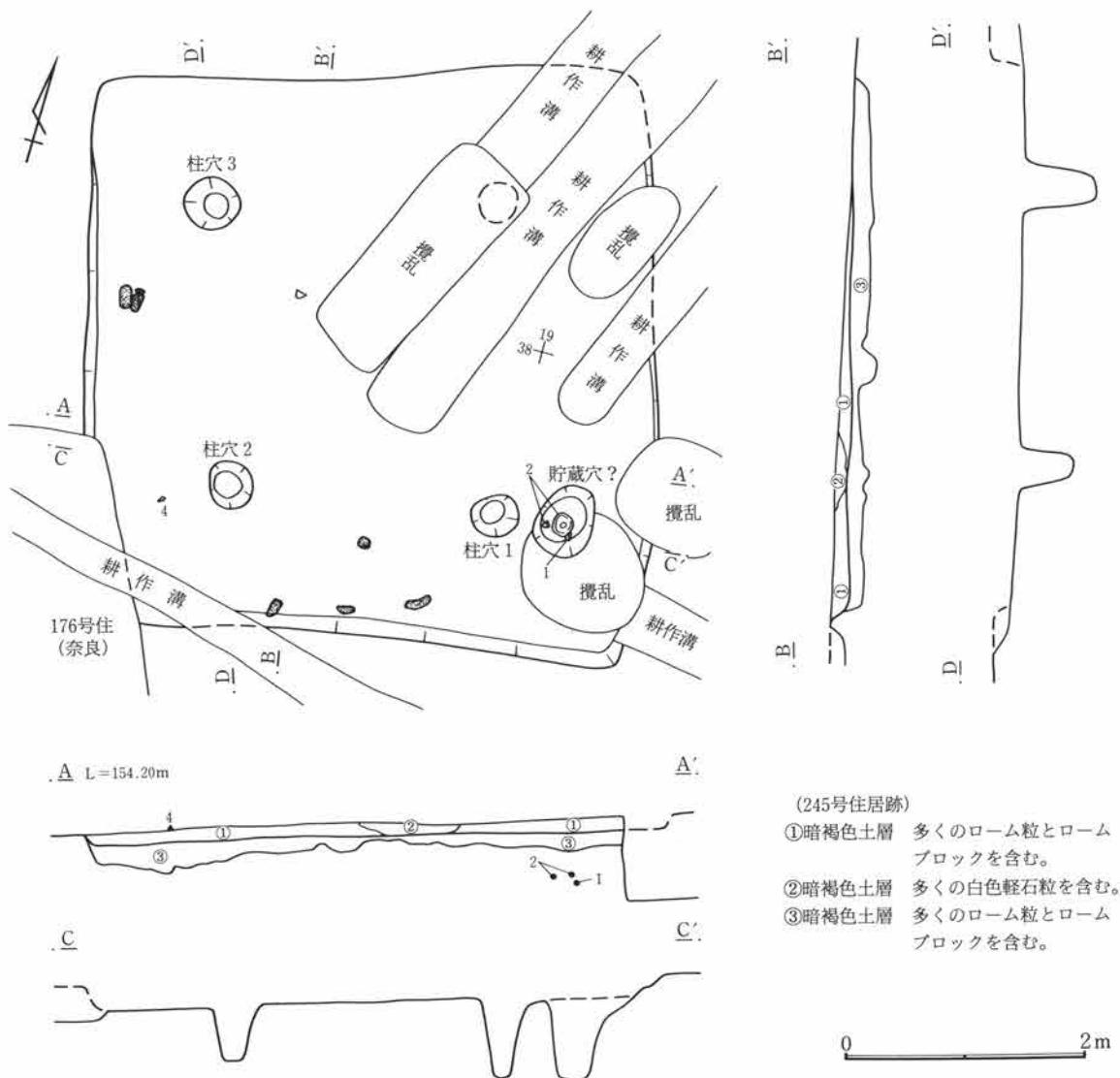
第159図 239号住居跡出土遺物実測図

239号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
159-1	土師器 甕	覆土 破片	口 — 高 — 底 (6.0)	①粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③外面明赤褐色・内面にふい橙色	底面へら削り。胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗れている。内面ナデにより器表面密。小さな甕と思われる。
159-2 87	土師器 坏	覆土 1/3残存	口 11.0 高 3.2 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	底面へらナデ。器表面密でへらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全くなし。胎土が粉状を呈する。

245号住居跡 (第160・161図、図版24・87・108)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、38・39—19グリッドに位置する。



(245号住居跡)
 ①暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

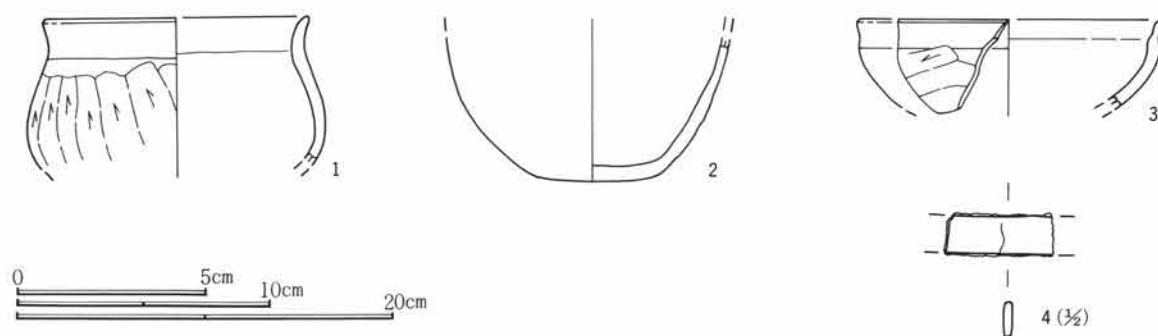
第160図 245号住居跡実測図

概要 北側に向かって低くなるなだらかな傾斜面に位置し、低い北側部分の一部の床面は削られており、床下調査によって住居の範囲が確認された。東側は多くの耕作溝や攪乱土坑等により削られて残りが悪く、南側で明瞭な床面や壁面が確認された。南西コーナー部分で奈良時代の176号住居と一部重複しており、176号住居により重複部分が掘り込まれていた。竈は残っていなかったが、南東コーナー部分に貯蔵穴とも思える小穴が掘られていたため、耕作溝により削り取られている東壁面に竈の造られていた可能性がある。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が3本掘られていたが、柱穴4は攪乱土坑により掘り取られていたためか不明である。南東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が掘られていた。

規模 東西4.67m、南北4.75mである。壁高は残りの良い南壁面部分で22cmである。貯蔵穴は径50cm深さ62cmである。柱穴1は径40cm深さ60cm、柱穴2は推定径31cm深さ46cm、柱穴3は径42cm深さ68cmである。

遺物 出土量が少なく、図示できた遺物を含めて総数はわずか9点である。



第161図 245号住居跡出土遺物実測図

245号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
161-1	土 師 器 小 型 甕	覆土 1/2残存	口(14.4) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴外面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。外側の表面全体が少し粗れている。
161-2 87	土 師 器 甕	覆土 胴下半~底部ほぼ完形	口 — 高 — 底 6.7	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい橙色	底面ナデ。胴外面ナデ。へら削りの痕跡も認められるが、明瞭でない。器表面が非常に粗い。内面ナデ。
161-3	土 師 器 坏	覆土 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面にぶい赤色・外面橙色	底部へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ後赤色顔料が塗布されている。
161-4 108	鉄 製 品 小 刀 ?	床面直上 小片	長 (2.8) 幅 1.0 厚 0.2 重 1.1		名称及び用途不明。

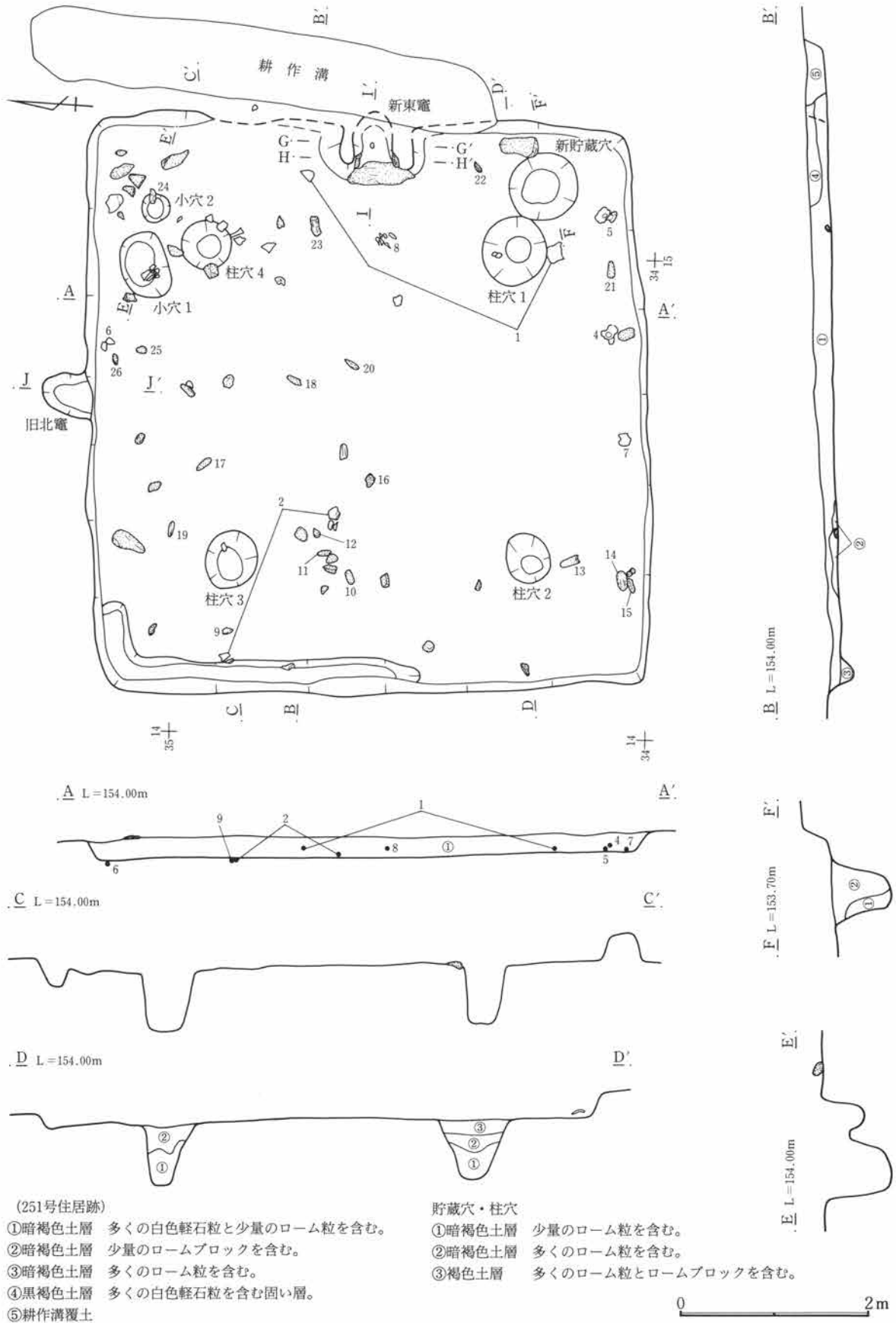
251号住居跡 (第162~166図、図版24・87・113)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、35-15・16グリッドに位置する。

概要 東側壁面部分を耕作溝により掘り込まれており、袖石や天井石の残っていた新東竈の燃焼部の一部と煙道部が掘り取られていた。竈は北壁面にも造られており、床面上に位置する燃焼部や袖部分は取り外されて残っていなかったためこの竈は旧竈である。

構造 床面はローム粒の混入している灰褐色土で造られていた。新東竈の右側に新貯蔵穴が掘られていた。旧竈の右側には小穴が2本掘られていたが、位置や大きさが不自然なため旧竈に伴うと思われる貯蔵穴は不明である。柱穴が4本と北西コーナー部分に壁溝が掘られていた。

規模 東西5.94m、南北5.96mである。壁高は残りの良い東壁面南側部分で27cmである。新貯蔵穴は径70cm



第162図 251号住居跡実測図

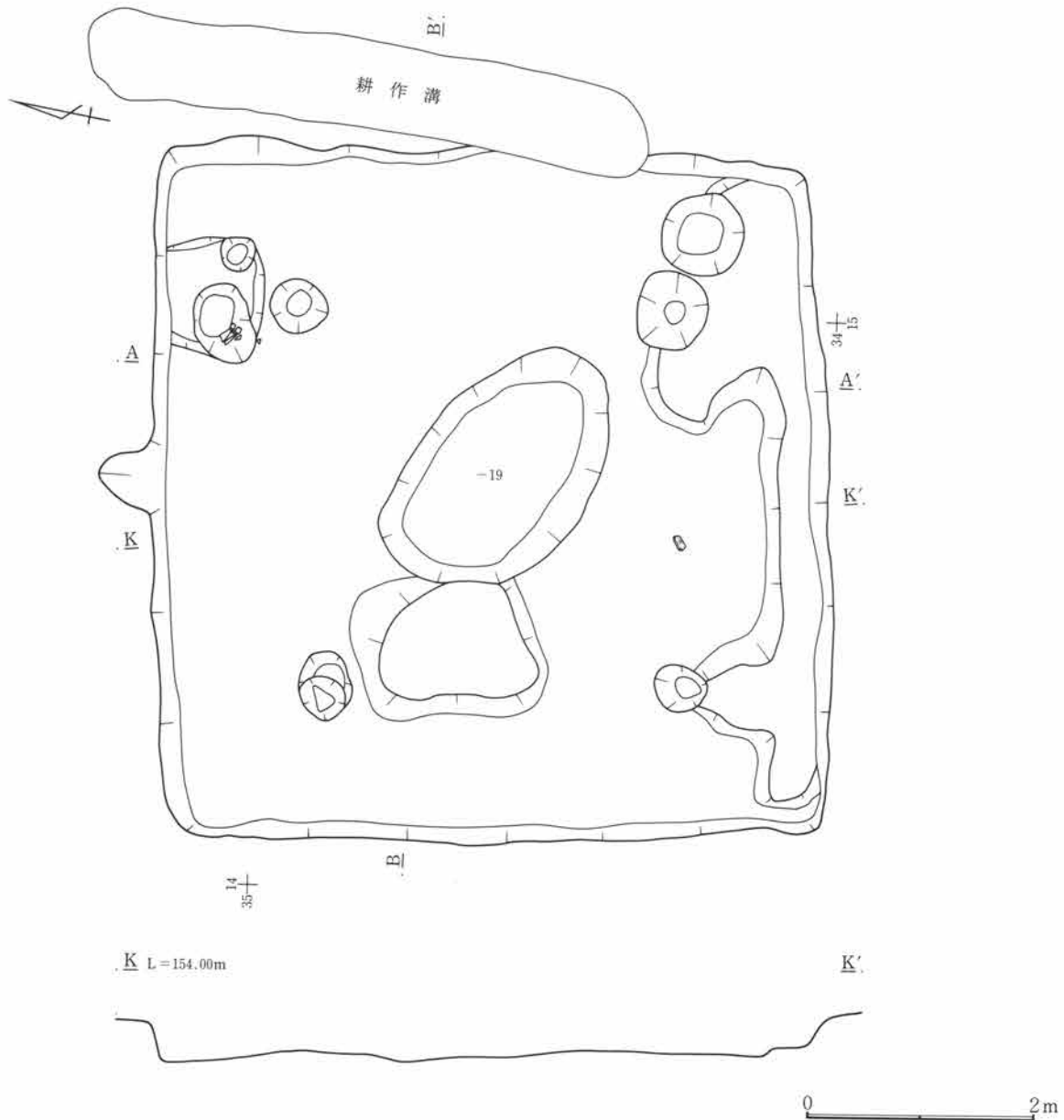
深さ57cm、柱穴1は径70cm深さ52cm、柱穴2は推定径60cm深さ66cm、柱穴3は径56cm深さ68cm、柱穴4は径52cm深さ59cmである。小穴1は70×50cmの楕円形で深さ68cm、小穴2は径31cm深さ38cmである。
 遺物 竈周辺から多くの遺物が出土したが、図示できた遺物は少ない。須恵器の高坏と坏の破片が出土している。

(新東竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 燃烧部の一部と煙道部は耕作溝により削り取られて残っていなかったが、燃烧部の大部分から焚口部分にかけては残っていた。袖部分の残りは良くないが、両袖の石はほぼ使用時の状態を保ち、天井石が焚口部分に落ちた状態で残っていた。また燃烧部中央に細長い支脚石が据えられた状態で残っていた。燃烧部を中心として多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向不明、燃烧部幅37cmである。



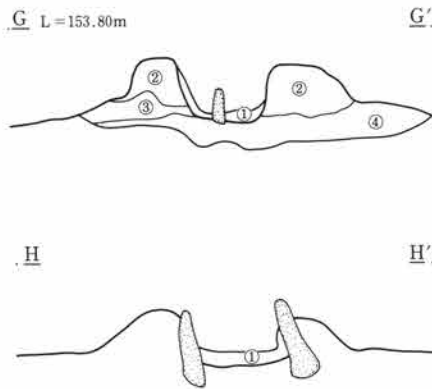
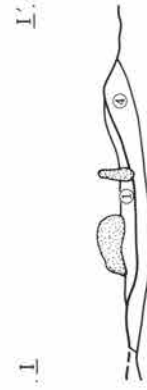
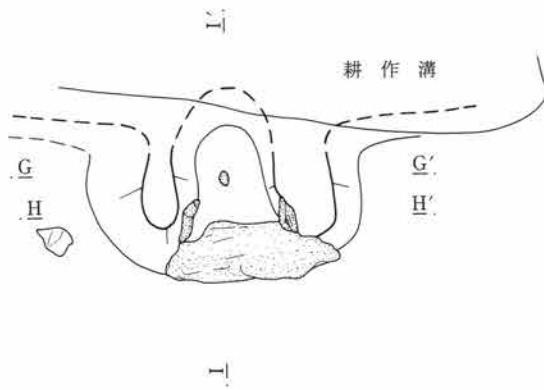
第163図 251号住居跡床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(旧北竈)

位置 住居北壁に造られている。

概要 床面上に位置する両袖と燃烧部の多くは取り外されて残っていなかった。壁面を掘り込んで造られている煙道部分と床面下に位置する燃烧部下部分から多くの焼土粒が出土した。

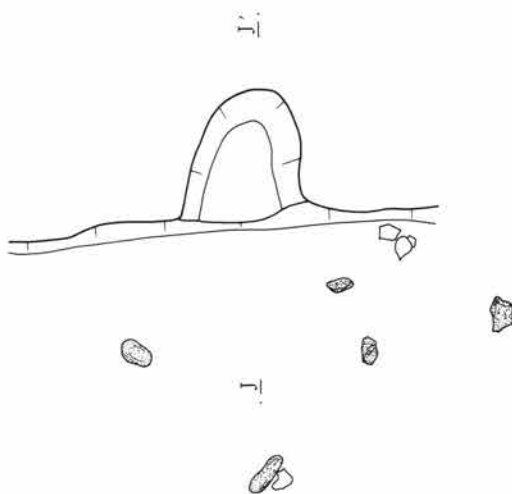


新東竈

- ①暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ②暗灰色粘質土層 多くの暗灰色粘質土と焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 ローム粒を殆ど含まないやや砂質の層。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第164図 251号住居跡新東竈実測図

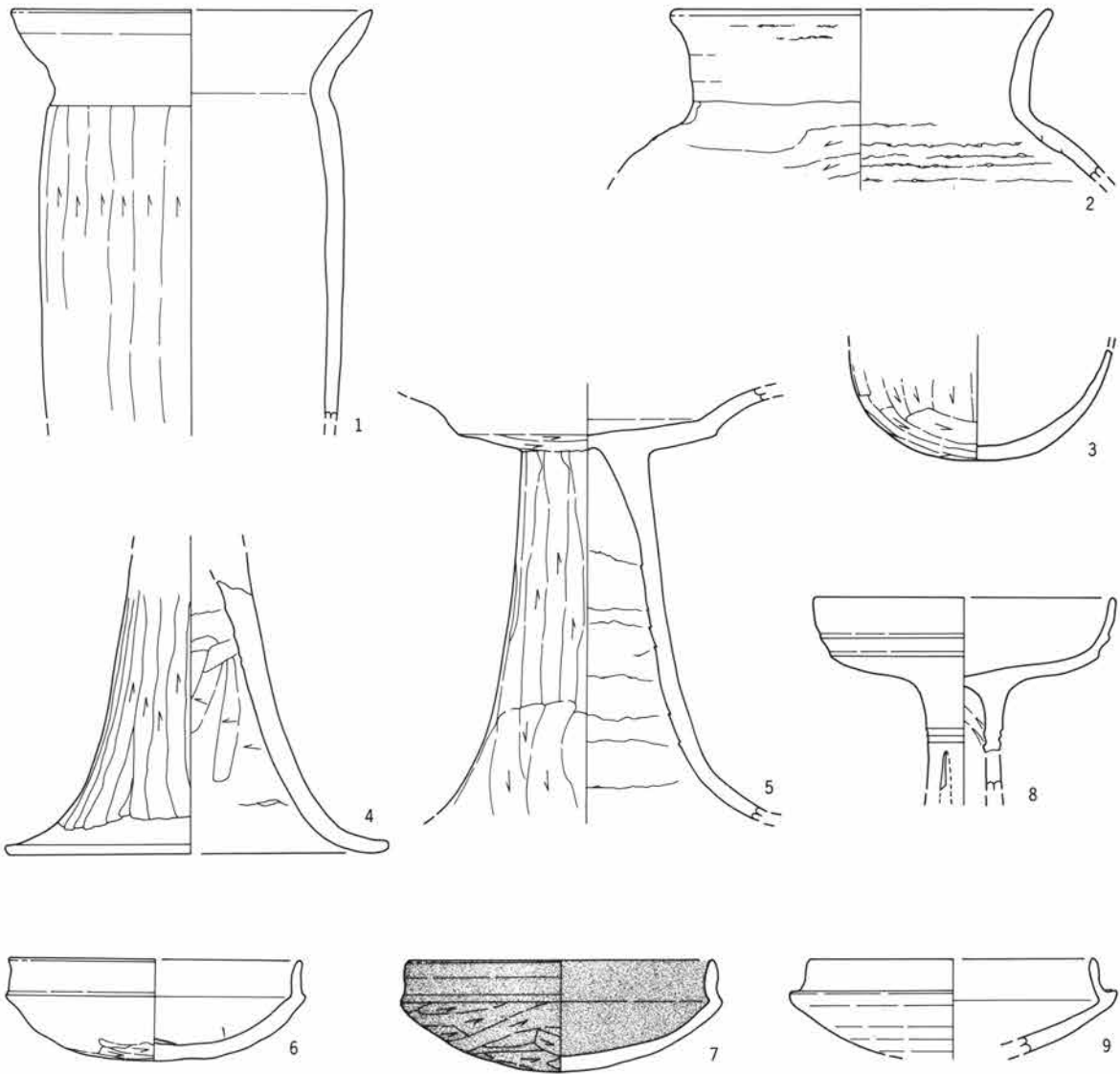


旧北竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第165図 251号住居跡旧北竈実測図



第166図 251号住居跡出土遺物実測図

0 10cm 20cm

251号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
166-1 87	土 師 器 甕	床面+3 口縁部~胴 上部1/3残存	口(20.0) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒 を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 断面を含めて赤色の強い色調である。
166-2	土 師 器 壺	床面直上 1/2残存	口(21.2) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く、 2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。肩部内側に多くの輪積 痕が残る。
166-3 87	土 師 器 小型 甕	床面直上 胴下半1/2 底部完形	口— 高— 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤色	底面~胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
166-4 87	土 師 器 高 坏	床面直上 脚筒部1/2 下端部1/2	口— 高— 底(16.0)	①密、1mm前後の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。器表面の多くの部分密。部分的にササラ 状になって粗い面もある。 筒内側わずかにヘラ削り。輪積痕の多くを消している。
166-5 87	土 師 器 高 坏	床面直上 口縁・脚下 端欠 他完	口— 高— 底—	①密、1mm前後の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚筒部外面ヘラナデ。筒内面に多くの輪積痕が残る。 坏底面ヘラ削り。内面ナデにより器表面密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
166-6 87	土師器 坏	床面直上 1/3残存	口(12.1) 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面中央部ヘラ削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
166-7 87	土師器 坏	床面+1 1/3残存	口 13.0 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色を主とし、表面の黒色部分多し	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。口縁部と内面の器表面密。口縁部外側～内側内面黒漆の痕跡多し。
166-8 87	須恵器 高坏	床面直上 坏口縁1/10 他1/3残存	口(12.4) 高 一 底 一	①密、砂粒ほとんど含まず。②還元焰、硬質 ③外面灰色・内面にぶい赤褐色	長脚2段三方透しの小さな高坏の破片と思われる。坏底部ロクロ目。坏・脚部とも2条の凹線あり。
166-9	須恵器 坏	床面直上 破片	口(12.0) 高 一 底 一	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	口縁部は内傾後直立気味に立ち上がる。底部右回転ロクロ痕。口縁部横ナデ。
10 113	こも編み石	床面+3	長 14.4 幅 7.1 厚 2.4 重 370		絹雲母石墨片岩。両側面に小さな凹凸部が認められる。隋円で偏平な石である。
11 113	こも編み石	床面+4	長 14.2 幅 6.3 厚 3.2 重 500		点紋石墨緑泥片岩。両側面中央部に僅かな凹状部を呈する。隋円形で肉厚な石である。
12 113	こも編み石	床面直上	長 13.4 幅 7.2 厚 3.2 重 450		絹雲母石墨片岩。隋円で偏平な石で、片側の側面に打ち欠かれたような凹状部を持つ。
13 113	こも編み石	床面+6	長 15.1 幅 6.5 厚 3.0 重 540		絹雲母石墨片岩。断面が隋円状を呈し、両側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
14 113	こも編み石	床面+4	長 14.8 幅 7.1 厚 3.3 重 600		緑簾緑泥片岩。隋円形を呈し、両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
15 113	こも編み石	床面+4	長 13.2 幅 8.0 厚 3.7 重 570		絹雲母石墨片岩。やや不定形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
16 113	こも編み石	床面+1	長 11.8 幅 8.2 厚 2.5 重 430		絹雲母石墨片岩。偏平で幅広い石である。片側の側面に小さな凹状があり、他の側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
17 113	こも編み石	床面直上	長 15.8 幅 7.0 厚 3.2 重 510		点紋絹雲母石墨片岩。やや偏平な石である。片側の側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
18 113	こも編み石	床面-2	長 14.6 幅 5.7 厚 3.3 重 400		緑簾緑泥片岩。断面は緩やかな三角形を呈する石である。片側の側面に小さな凹凸部が認められる。
19 113	こも編み石	床面直上	長 13.8 幅 4.8 厚 4.2 重 400		絹雲母石墨緑泥片岩。中央部が肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
20 113	こも編み石	床面直上	長 15.3 幅 5.9 厚 3.1 重 490		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部に小さな凹状部を数個持つ。他の側面にわずかな凹状部が認められる。
21 113	こも編み石	床面+1	長 15.2 幅 6.1 厚 3.5 重 530		緑簾緑泥片岩。片側の側面に小さな凹状部を数個持つ。他の側面はゆるやかな凹状を呈している。
22 113	こも編み石	床面+3	長 13.7 幅 4.9 厚 2.7 重 280		絹雲母石墨緑泥片岩。断面は菱形を呈する石である。側面わずかに凹状部が認められる。
23 113	こも編み石	床面+1	長 16.0 幅 7.5 厚 1.6 重 350		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面中央部に打ち欠かれた凹状部がある。
24 113	こも編み石	床面直上	長 13.7 幅 6.0 厚 4.5 重 640		絹雲母石墨片岩。肉厚の石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
25 113	こも編み石	床面+3	長 16.5 幅 7.0 厚 2.8 重 500		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
26 113	こも編み石	床面-1	長 9.9 幅 6.5 厚 3.6 重 490		紅簾絹雲母石墨片岩。短く肉厚な石である。明瞭な凹状部は認められない。
27 113	こも編み石	床面直上	長 15.8 幅 6.2 厚 2.2 重 380		絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない。偏平な石である。側面に明瞭な凹状部は認められない。

255号住居跡 (第167～169図、図版24・25)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、29・30—17グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集して造られている地区の住居であり、本住居は5軒重複中の1軒である。住居北東部分を奈良時代の254号住居が、南側を平安時代の324号住居が、北西部分を奈良時代の248号住居がそれぞれ床下部分まで深く掘り込んで住居が造られていた。また住居中央部の覆土を掘り込んで平安時代の249号住居が造られていた。このように多くの住居により掘り込まれている残りの悪い住居であった。新旧関係は255→254→249→324号住居、及び255→248号住居である。

構造 床面の残りは悪かったが、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は明らかでなく、小穴が3本掘られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西4.37m、南北4.62mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で35cmである。貯蔵穴は径48cm深さ64cmである。小穴1は径32cm深さ42cm、小穴2は径36cm深さ43cm、小穴3は径30cm深さ57cmである。

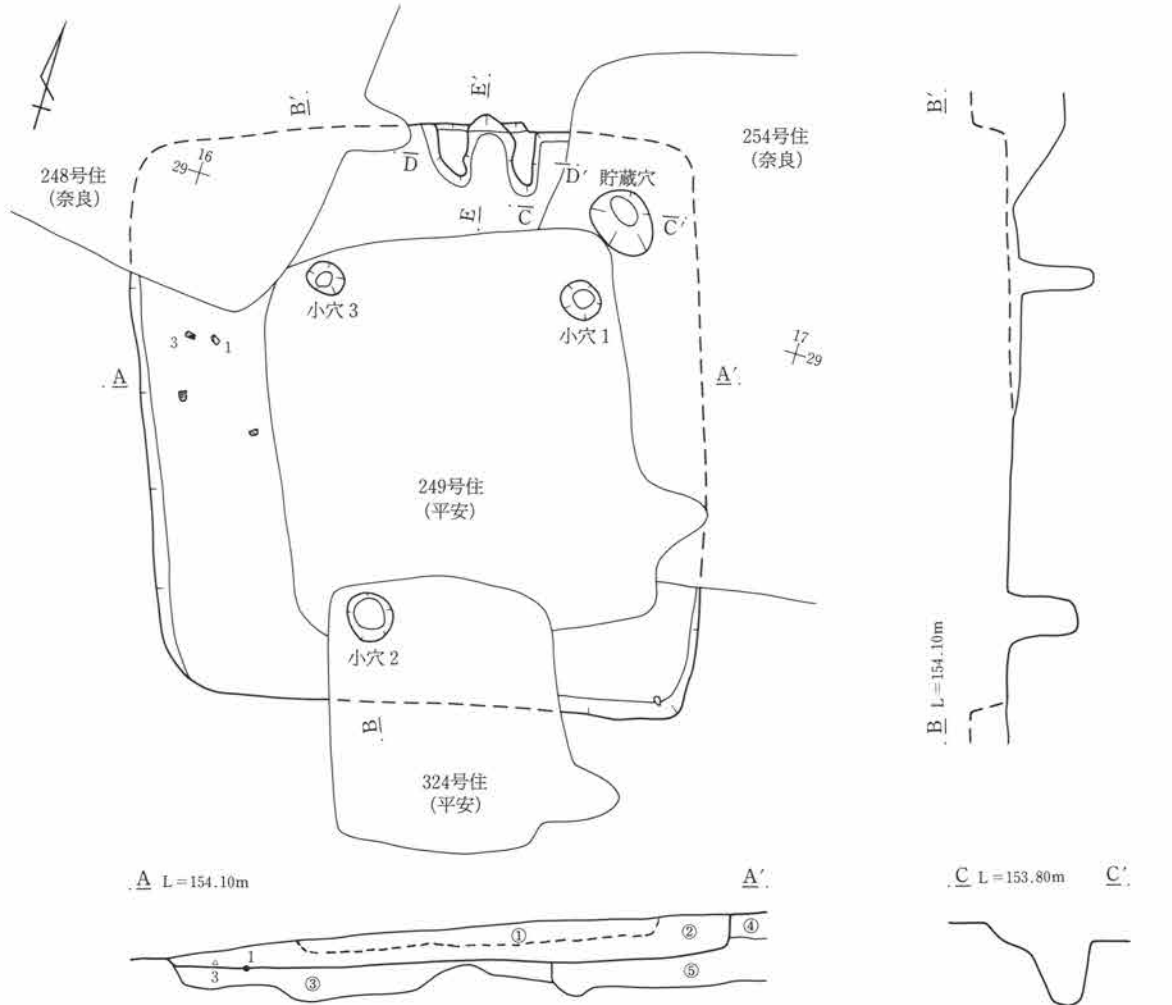
遺物 出土量が少なく図示できたのは、土師器の坏2点と錘である。

(竈)

位置 住居北壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

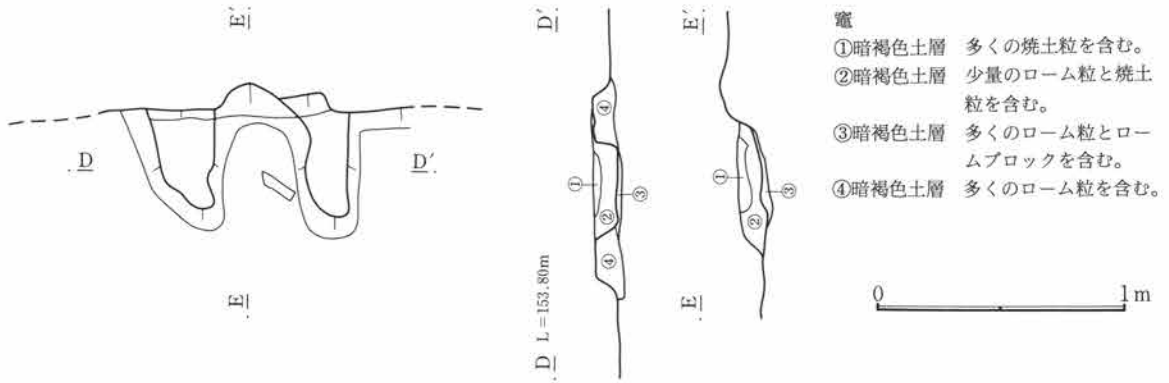
構造 良好ではないが、両袖部分と燃烧部が残っていた。袖石等の竈に使われたと思われる石は出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。燃烧部を中心として多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向62cm、燃烧部幅36cmである。



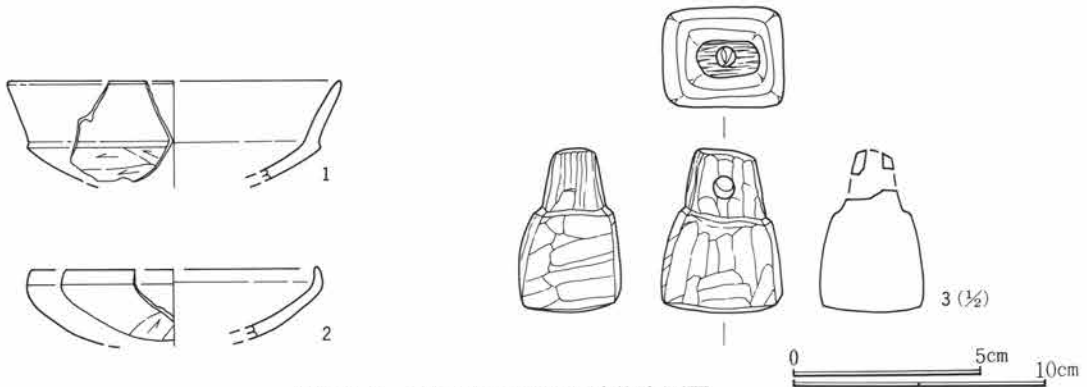
- (255号住居跡)
- ①249号住居覆土
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ④254号住居覆土
 - ⑤254号住居床下覆土

第167図 255号住居跡実測図



第168図 255号住居跡竈実測図

- 竈
- ①暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒を含む。



第169図 255号住居跡出土遺物実測図

255号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
169-1	土師器 坏	覆土 破片	口(13.2) 高・底一	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
169-2	土師器 坏	覆土 破片	口(11.7) 高・底一	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。器表面全体密である。
169-3	石製品 錘	床直 完形	高4.4 広横3.3 狭横2.6 重63 孔径0.5 蛇紋岩		はかりに使用される錘と思われる。上部は造り出しており、横方向と天井部から穿孔されている。整形は天井部荒砥削り。他は刃物によるていねいな削り。

256号住居跡 (第170~172図、図版25)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31・32-14グリッドに位置する。

概要 北西部分で同じ古墳時代の321号住居と重複しており、本住居より新しい321号住居により重複部分は深く掘り込まれている。竈も多くの部分が削り取られ残りが悪い。

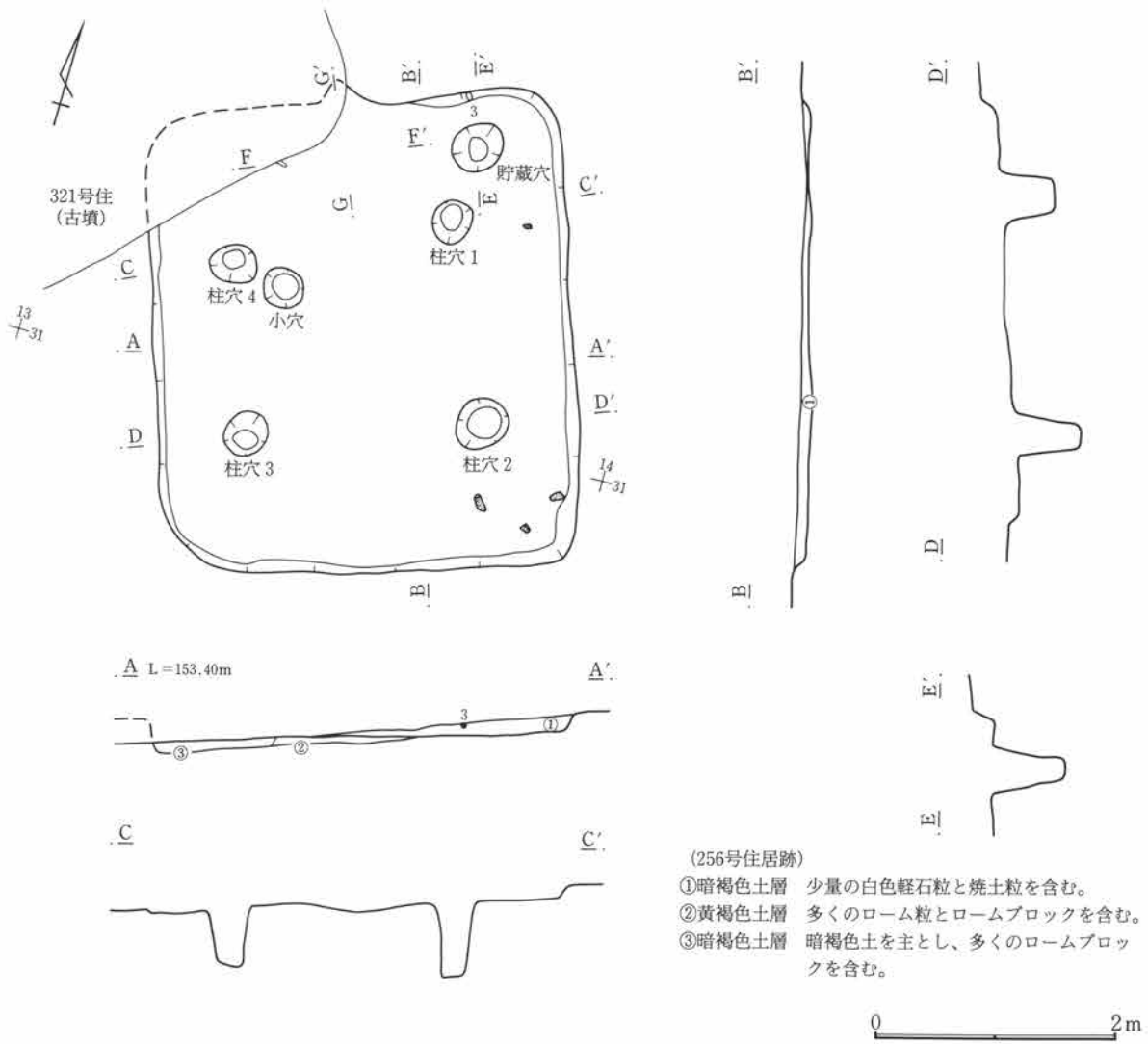
構造 床面の残りは悪く、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本と小穴が1本及び竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西3.47m、南北3.94mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で22cmである。貯蔵穴は径56cm深さ53cmである。柱穴1は径32cm深さ56cm、柱穴2は径44cm深さ42cm、柱穴3は径34cm深さ63cm、柱穴4は径39cm深さ49cmである。小穴は径32cm深さ21cmである。

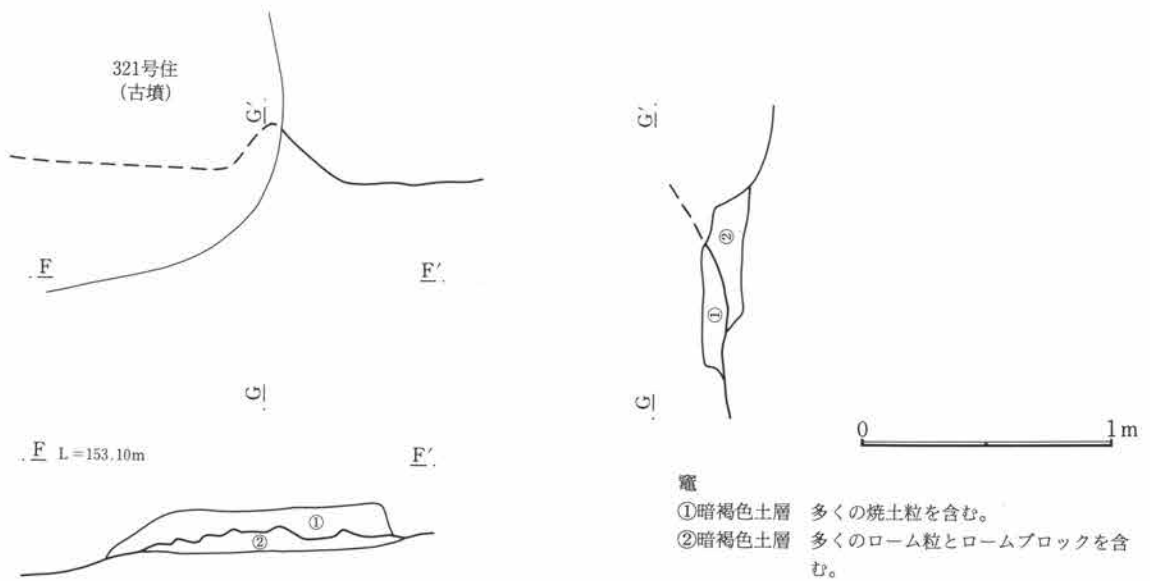
遺物 出土量が少なく図示できたのは、土師器の甕と坏の3点である。

(竈)

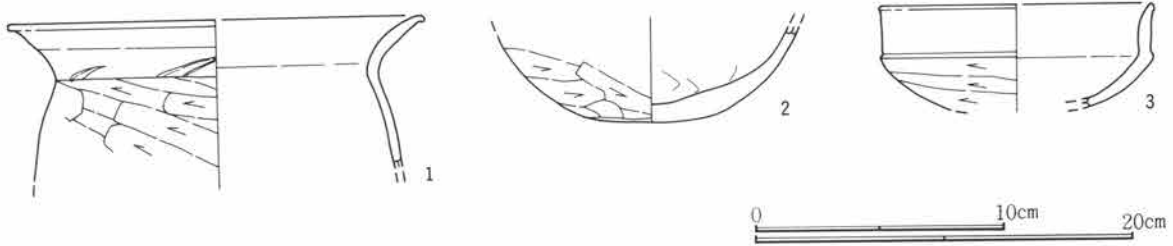
概要 住居北壁に造られている。もともと残りの悪い竈であり袖部分は残っていないが、その部分には多くの焼土粒の出土が認められた。さらに321号住居により左側の燃焼部や煙道部は削り取られて残っていなかった。残された燃焼部付近に多くの焼土粒が出土した。



第170図 256号住居跡実測図



第171図 256号住居跡竈実測図



第172図 256号住居跡出土遺物実測図

256号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
172-1	土師器 甕	覆土 破片	口(22.2) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴上部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器内の薄い甕である。
172-2	土師器 甕	覆土 胴下半½ 底部完形	口— 高— 底7.0	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。胴部ヘラ削り。いずれも砂粒の移動少なく器表面密。内面ナデ。大きな丸胴の甕と思われるが、1mm以上の砂粒は含まない。
172-3	土師器 坏	床面+5 破片	口(11.0) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面密。

258号住居跡（第173～176図、図版25・87）

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、29・30—15・16グリッドに位置する。

概要 全体に残りの悪い住居であり特に西側の残りが悪く、調査段階において住居範囲を誤認した。南東部分で奈良時代の248号住居と重複しており、248号住居により重複部分を床下部分まで掘り込まれている。そのためその部分の住居範囲は不明である。さらに2本の耕作溝により南東部分は床面下まで深く掘り込まれていた。

構造 床面の残りは悪いが、床面中央部分の点線で表現した部分は比較的堅い床面として残っていた。その床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本と壁を掘り込んだ小穴が3本、及び竈の右側に少し位置的に不自然ではあるが、貯蔵穴が掘られていた。

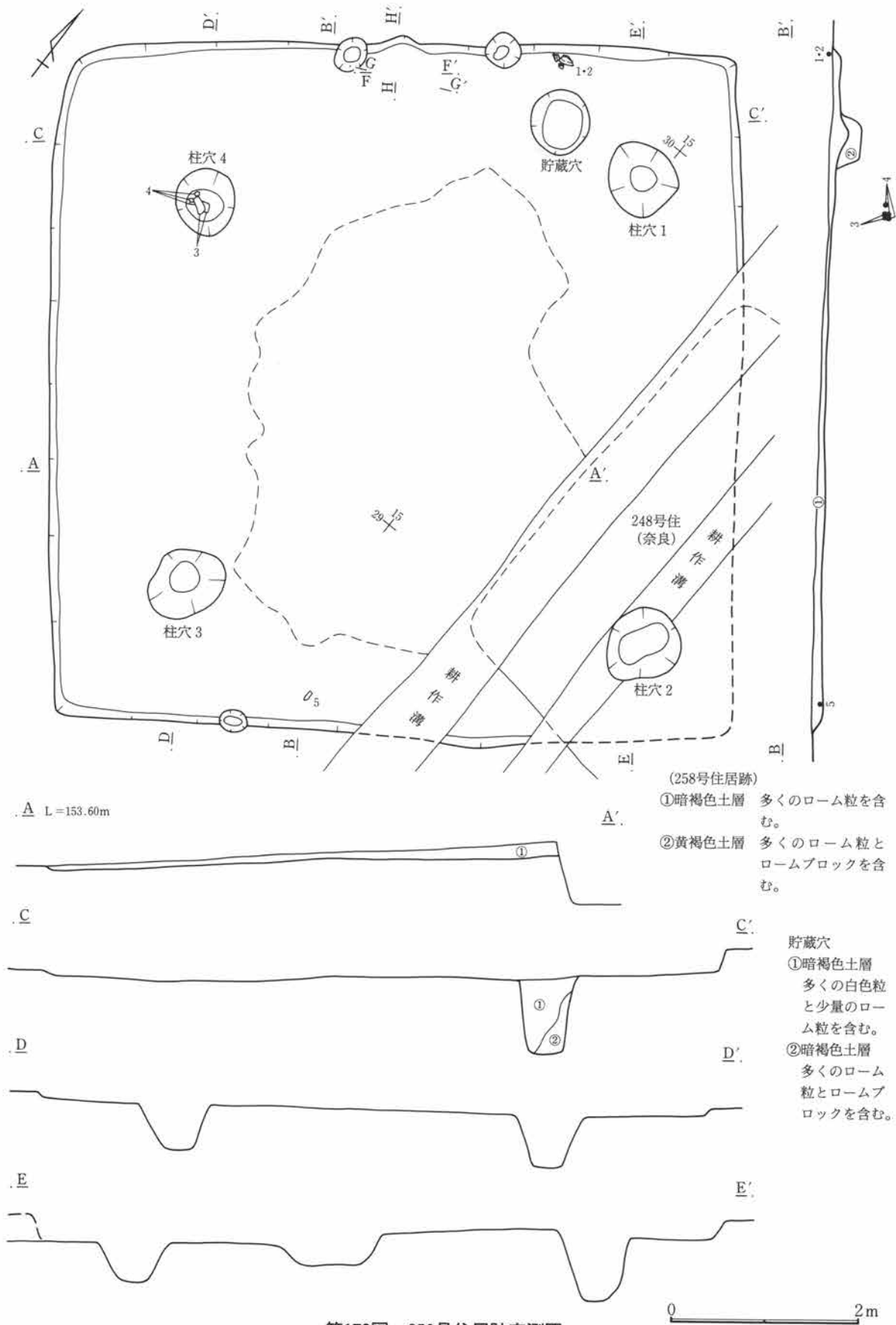
規模 東西7.36m、南北7.15mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で28cmである。貯蔵穴は径66cm深さ85cmである。柱穴1は径70cm深さ66cm、柱穴2は径75cm深さ55cm、柱穴3は径80cm深さ58cm、柱穴4は径63cm深さ72cmである。

床下 床下に貯蔵穴や柱穴以外の多くの床下土坑や小穴等が掘られていた。

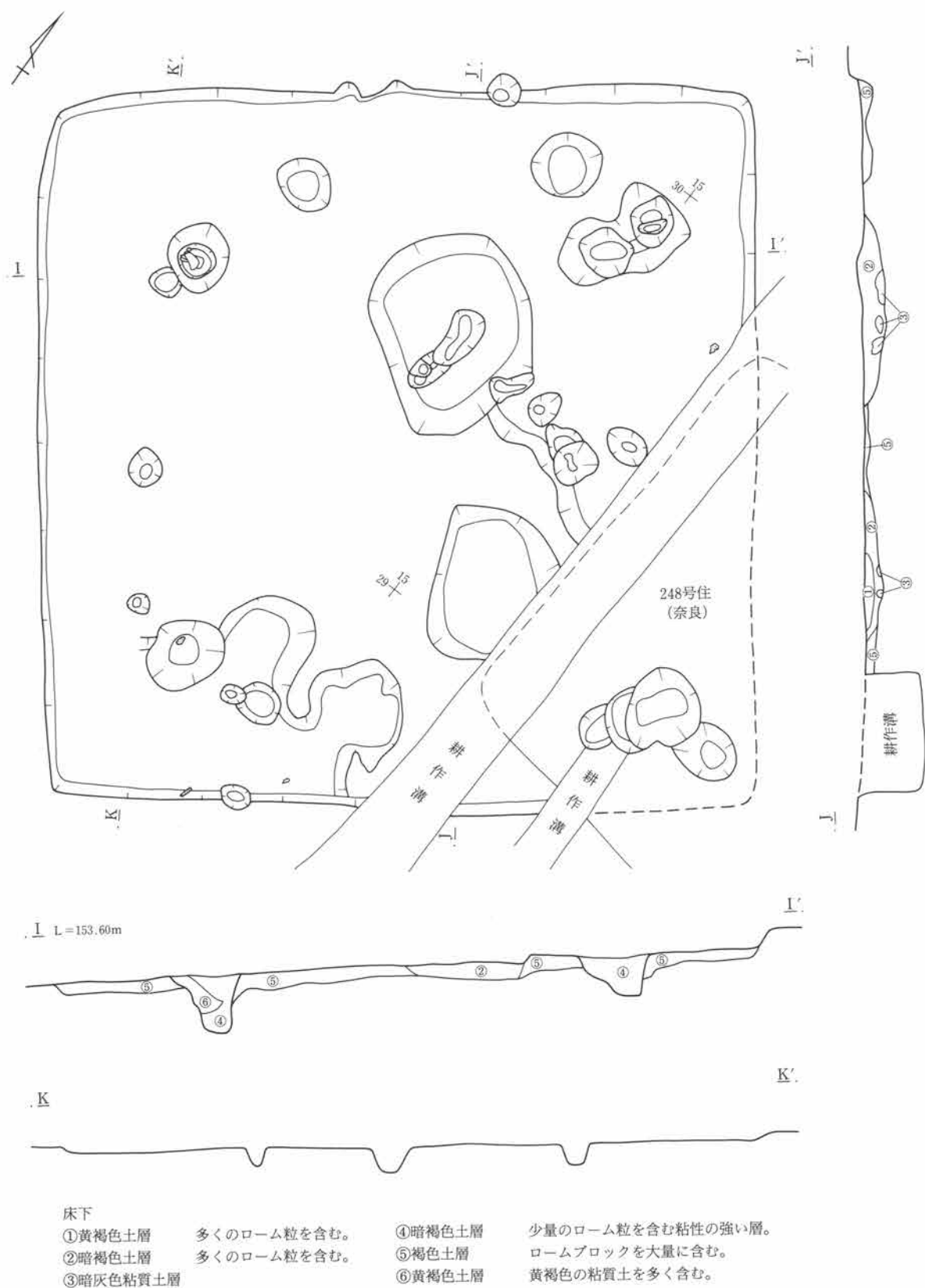
遺物 出土量が少なく、図示できた遺物を含めても総量で89点である。

（竈）

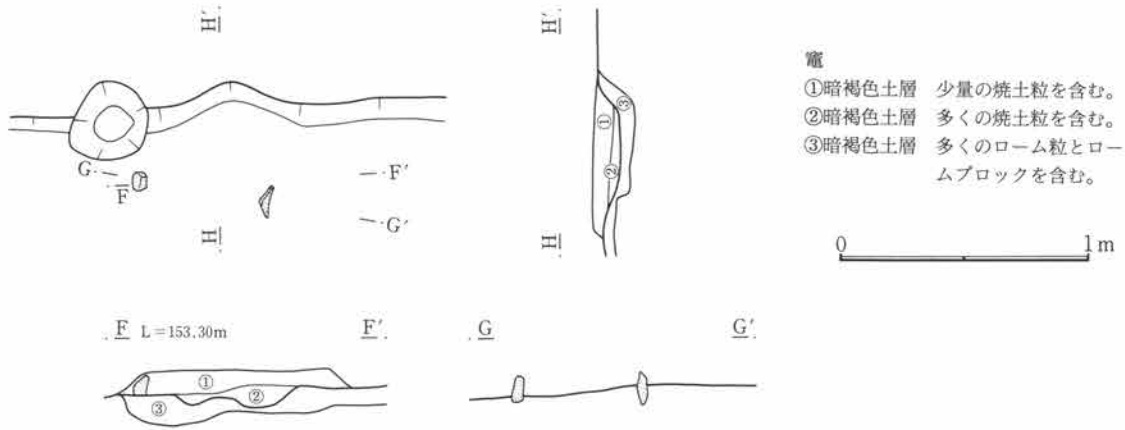
概要 住居北壁に造られている。袖部分のロームの残りが悪く、住居覆土との区分は明瞭でなかった。そのため袖部分はほとんど確認できなかった。通常袖石が据えられている部分に、2個の立石が残っていたため、おそらくこの2石が袖石であったものと思われる。燃焼部付近を中心に多くの焼土粒が出土した。



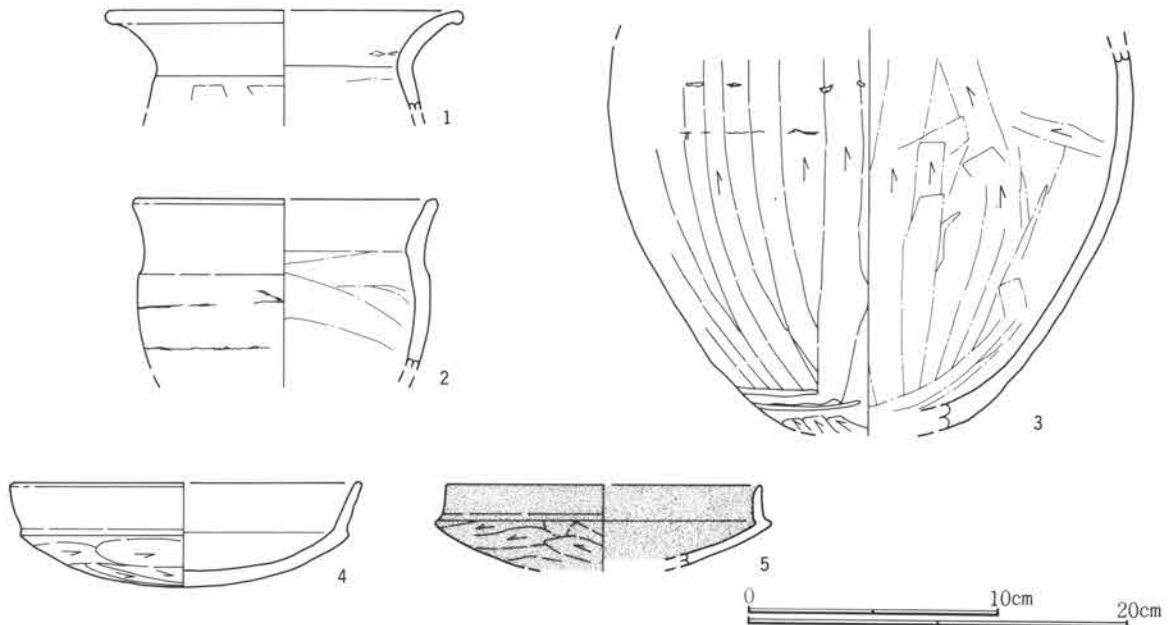
第173図 258号住居跡実測図



第174図 258号住居跡床下実測図



第175図 258号住居跡竈実測図



第176図 258号住居跡出土遺物実測図

258号住居跡出土遺物観察表

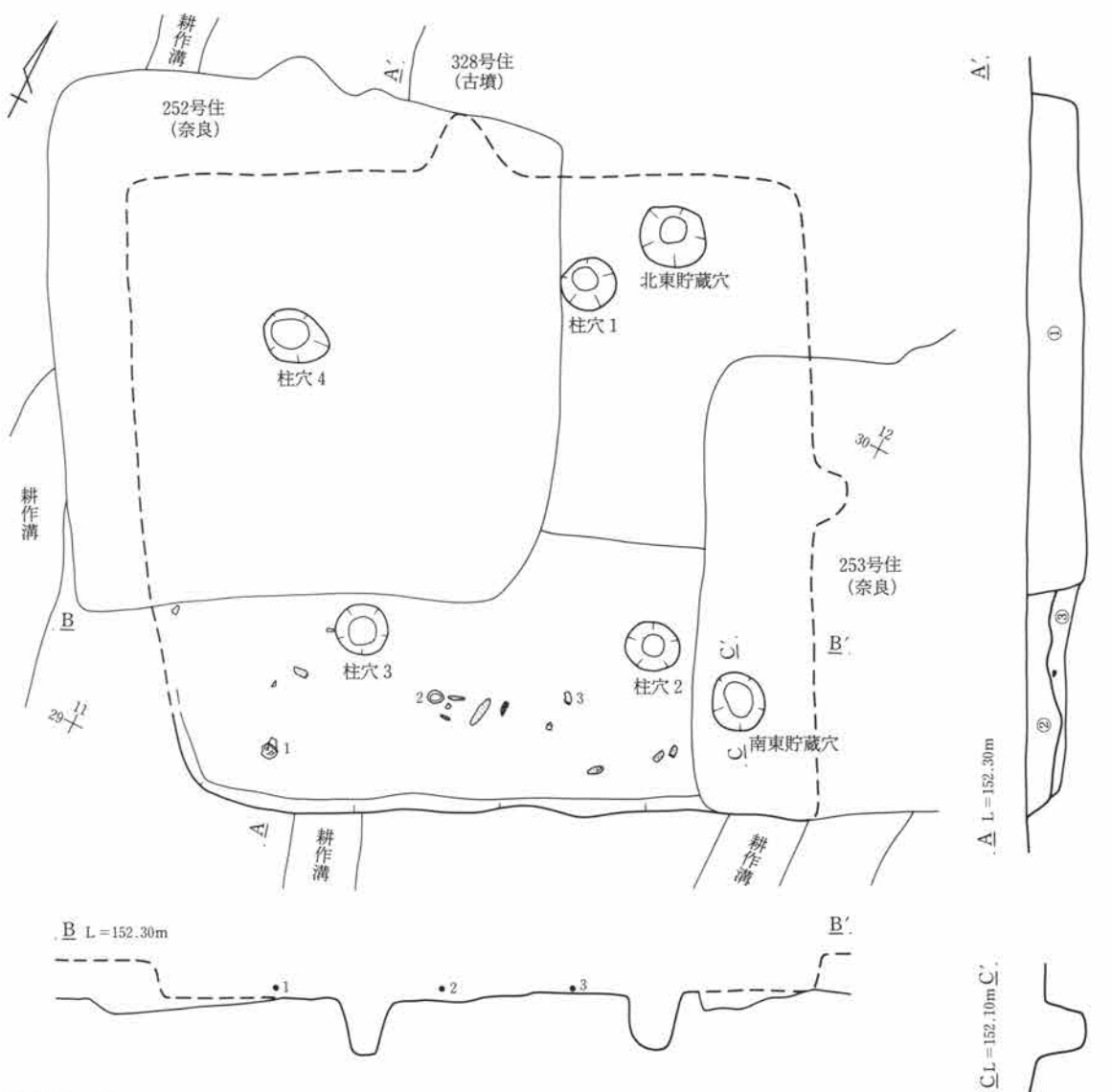
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
176-1	土 師 器 甕	柱穴内 破片	口(19.0) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。
176-2 87	土 師 器 小型 甕	床面+6 口縁~胴上 部1/3残存	口(16.2) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ナデ。輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
176-3	土 師 器 壺	柱穴内 破片	口 — 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し、粘土もササラ状となり器表面が粗い。内面ナデであるが器表面は密でない。
176-4 87	土 師 器 杯	柱穴内 1/3残存	口(13.8) 高 4.5 底 丸底	①密、少量の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面浅いヘラ削り。ヘラの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑が認められない。
176-5	土 師 器 杯	床面+6 小破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。稜は高く口縁部は短い。内面の黒色は黒漆と思われる。

259号住居跡 (第177・178図、図版26・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、30-12グリッドに位置する。

概要 4軒の重複している住居の中の1軒であり、4軒中最も古い住居である。住居北側を同じ古墳時代の328号住居と奈良時代の252号住居に、また東側を奈良時代の253号住居により、床下部分まで深く掘り込まれていた。そのため住居の約2/3の部分は残っていなかった。床下部分の調査から4本の柱穴と思われる掘り込みと2個の貯蔵穴と思われる掘り込みが確認されており、それらを柱穴と貯蔵穴として扱った。竈については不明であるが、2個の貯蔵穴が想定されることにより、北と東壁面に造られていた可能性が考えられる。東・北の竈と貯蔵穴の新旧関係は不明である。重複している4軒の新旧関係は259→328→253号住居、及び259→252号住居である。

構造 床面は残りが悪く、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本、



- (259号住居跡)
- ①252号住居覆土
 - ②暗褐色土層 多くの白色粒と少量のローム粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。

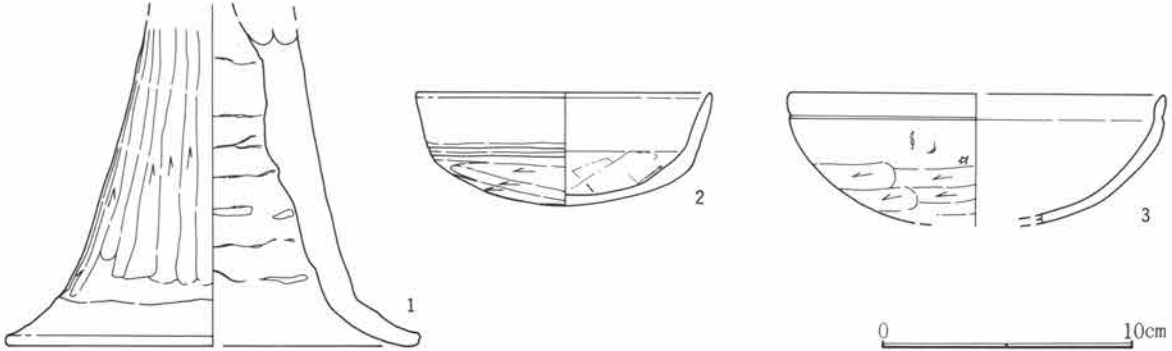
0 2m

第177図 259号住居跡実測図

北東と南東コーナー部分に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で33cmである。北東貯蔵穴は径56cm深さ82cm、南東貯蔵穴は径40cm深さ47cmである。柱穴1は径46cm深さ62cm、柱穴2は径46cm深さ45cm、柱穴3は径40cm深さ51cm、柱穴4は径42cm深さ55cmである。

遺物 図示できた遺物は少ないが、土師器の甕の胴部破片が多く出土している。



第178図 259号住居跡出土遺物実測図

259号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
178-1 88	土師器 高坏	床面+1 脚部完形 下端部1/3	口— 高— 底(16.3)	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚筒部外面ヘラナデ。脚下部横ナデ。脚筒部内面横ナデ。多くの輪積痕が残る。内側のヘラ削りなし。
178-2 88	土師器 坏	床面+1 完形	口11.8 高4.5 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。器表面が密でヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕あり。稜の部分は2条の沈線となっている。
178-3 88	土師器 坏	床面直上 1/3残存	口(15.0) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は不明瞭。口縁部横ナデ。底部との境は沈線で区画。黒斑は認められない。

262号住居跡 (第179~181図、図版26・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、13・14—15グリッドに位置する。

概要 残りの悪い住居であるが、かろうじて住居範囲の確認は可能であった。調査段階において床面の確認を一層上面で誤認し調査を進め、その後床面を再調査した。

構造 床面の残りは悪かったが、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西4.40m、南北5.02mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で20cmである。貯蔵穴は径55cm深さ70cmである。柱穴1は径42cm深さ29cm、柱穴2は径41cm深さ33cm、柱穴3は径30cm深さ16cm、柱穴4は径47cm深さ15cmである。

遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏2点である。

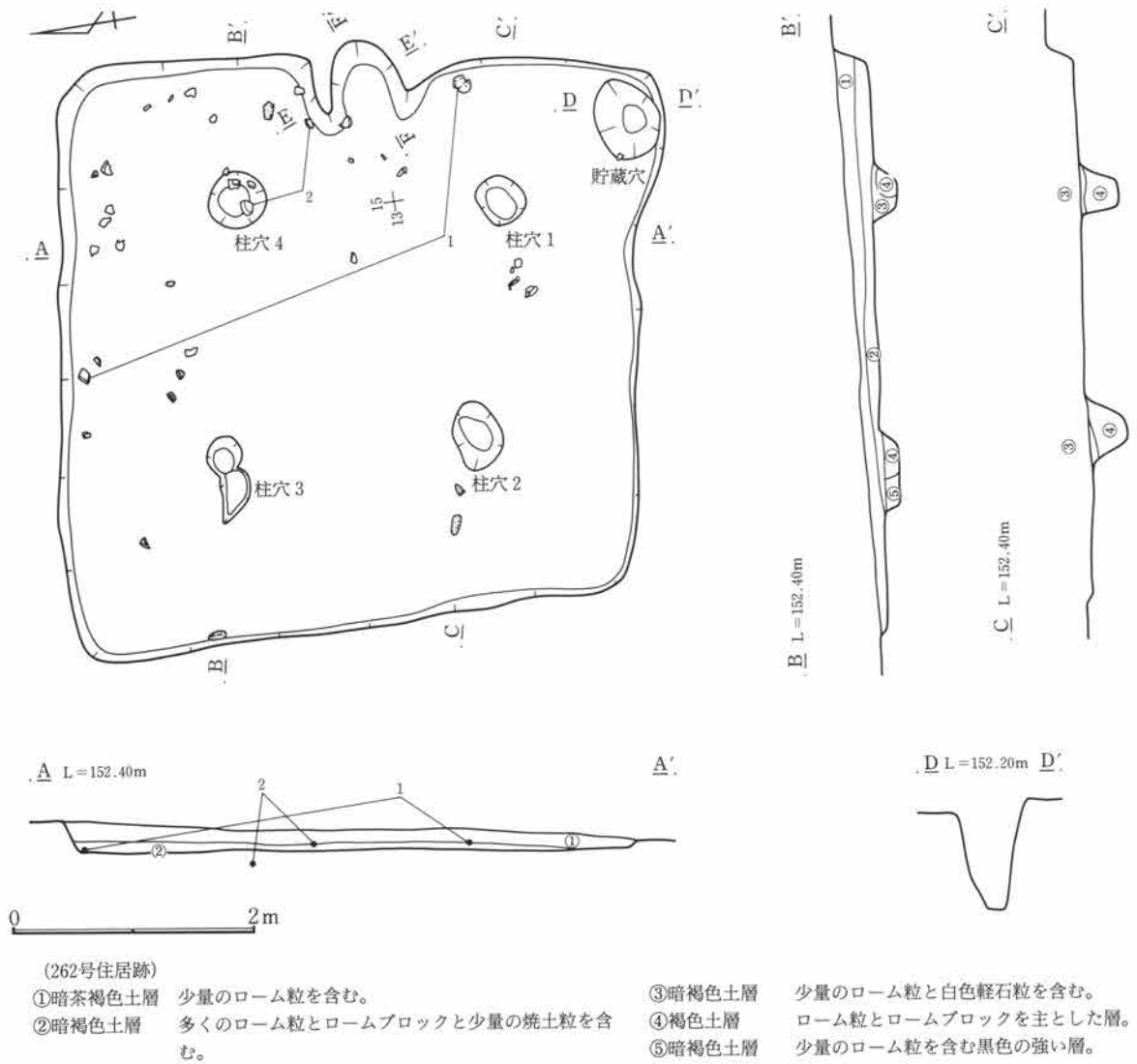
(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

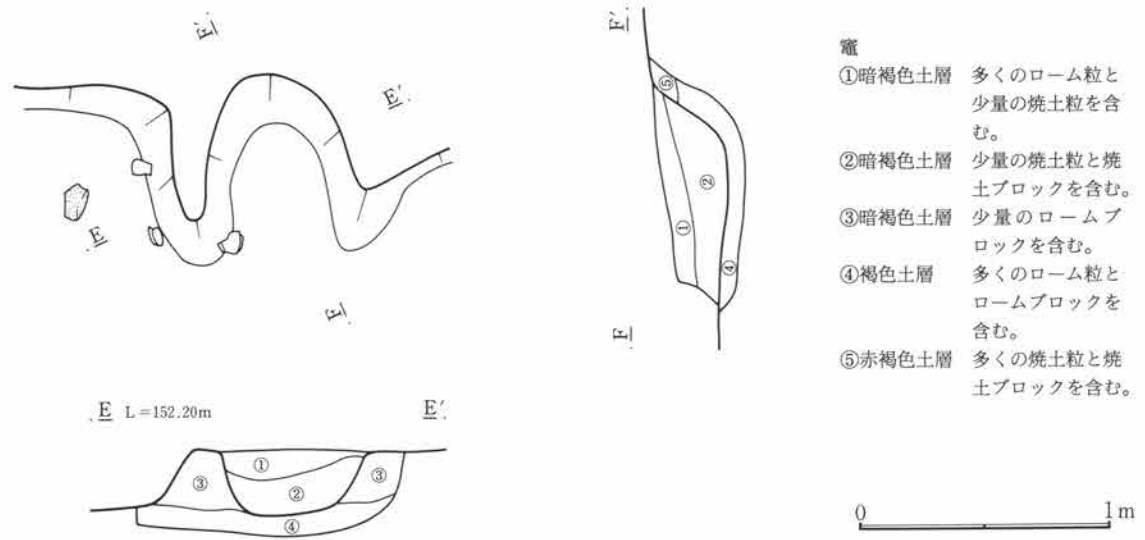
構造 良好ではないが、両袖部分と燃烧部が残っていた。袖石等の竈に使われたと思われる石は出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。燃烧部を中心として少量の焼土粒が出土し、煙道先端部は特に焼土化していた。

規模 煙道方向78cm、燃烧部幅54cmである。

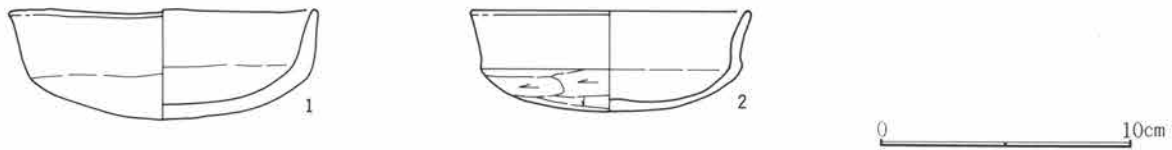
第3章 古墳時代の遺構と遺物



第179図 262号住居跡実測図



第180図 262号住居跡竈実測図



第181図 262号住居跡出土遺物実測図

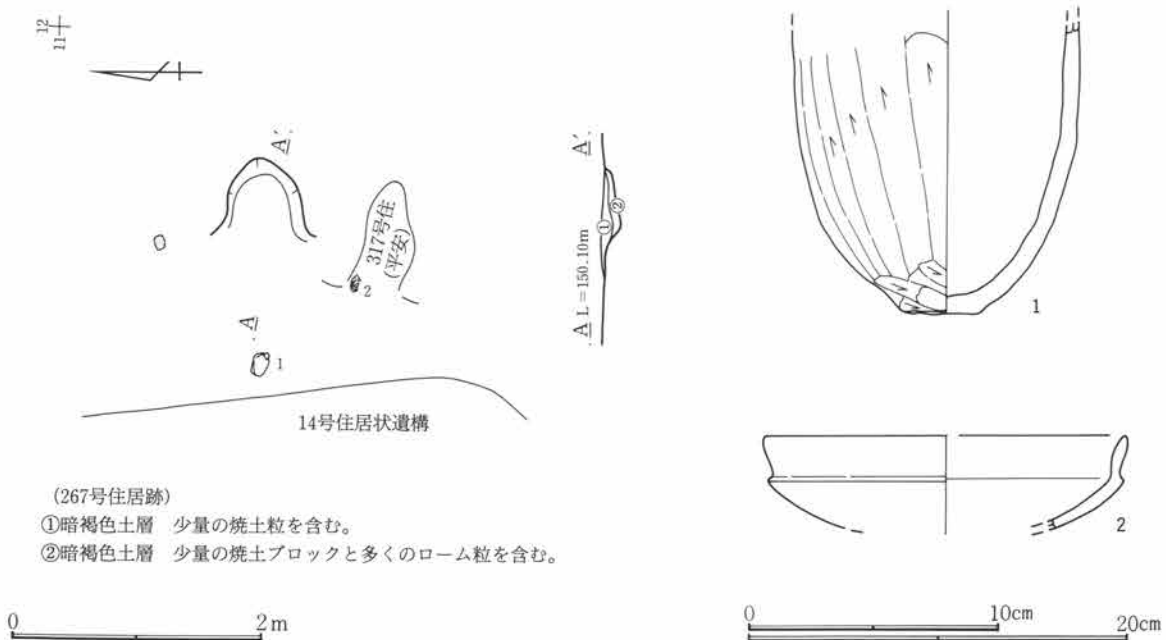
262号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
181-1 88	土師器 坏	床面-3 床面+6 1/2残存	口 12.2 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	器表面が密でヘラ等の整形技法不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
181-2 88	土師器 坏	床面-12 1/2残存	口 11.2 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全く認められず胎土がやや粉状を呈する。

267号住居跡 (第182図、図版26・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、11-12グリッドに位置する。

概要 竈の下部と竈手前部分に僅かの遺物が残っていただけの極めて残りの悪い住居であった。住居南側にはやはり竈しか残っていなかった317号住居があり、西側には14号住居状遺構がある。いずれも残りが悪いため明確ではないが、お互いに重複していたものと思われる。竈部分から少量の焼土粒が出土した。出土遺物も僅かである。



第182図 267号住居跡・出土遺物実測図

267号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
182-1 88	土師器 甕	覆土 胴部下半1/2 底部完形	口 — 高 — 底 4.0	①粗、2~4mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラナデ。大小の砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデにより器表面密。
182-2 88	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(14.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	磨滅が著しくヘラ削りの単位は確認できない。

278号住居跡 (第183～185図、図版26・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、11・12-9グリッドに位置する。

概要 残りの悪い住居であり、南部分周辺の壁面と床面は削られて残っていなかった。竈は北壁面と東壁面に造られており、北壁面の竈の両袖部分は残っていたが、東壁面の竈の両袖部分は残っていなかった。そこで北竈が最後まで使われていた新北竈で、東竈が使われなくなった旧東竈である。旧竈は床面上に位置する袖部や燃焼部は取り除かれていたが、床下部分と壁面部分に多くの焼土粒が残っていた。

構造 床面の残りは悪かったが、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴と貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.85m、南北不明である。壁高は残りの良い東壁面部分で15cmである。

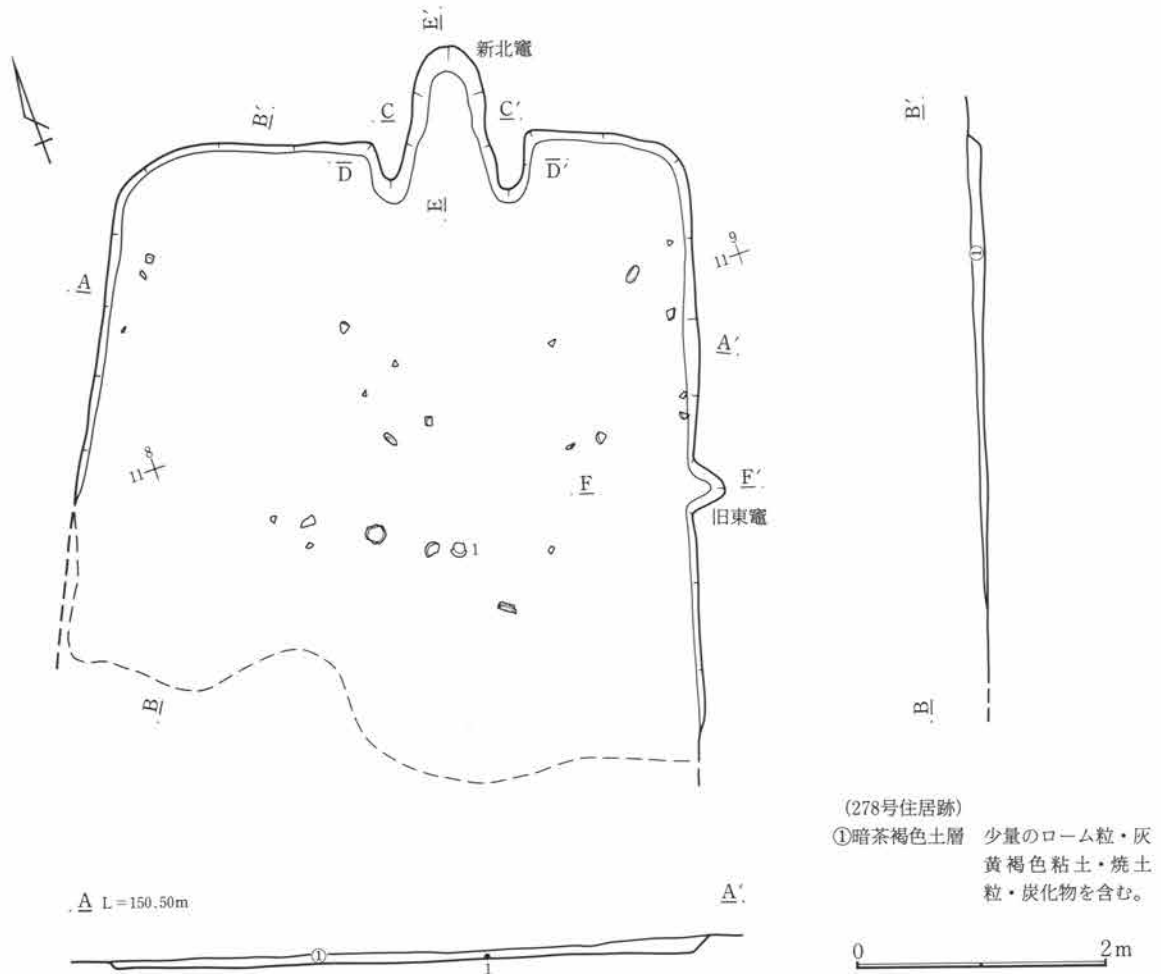
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏2点である。

(新北竈)

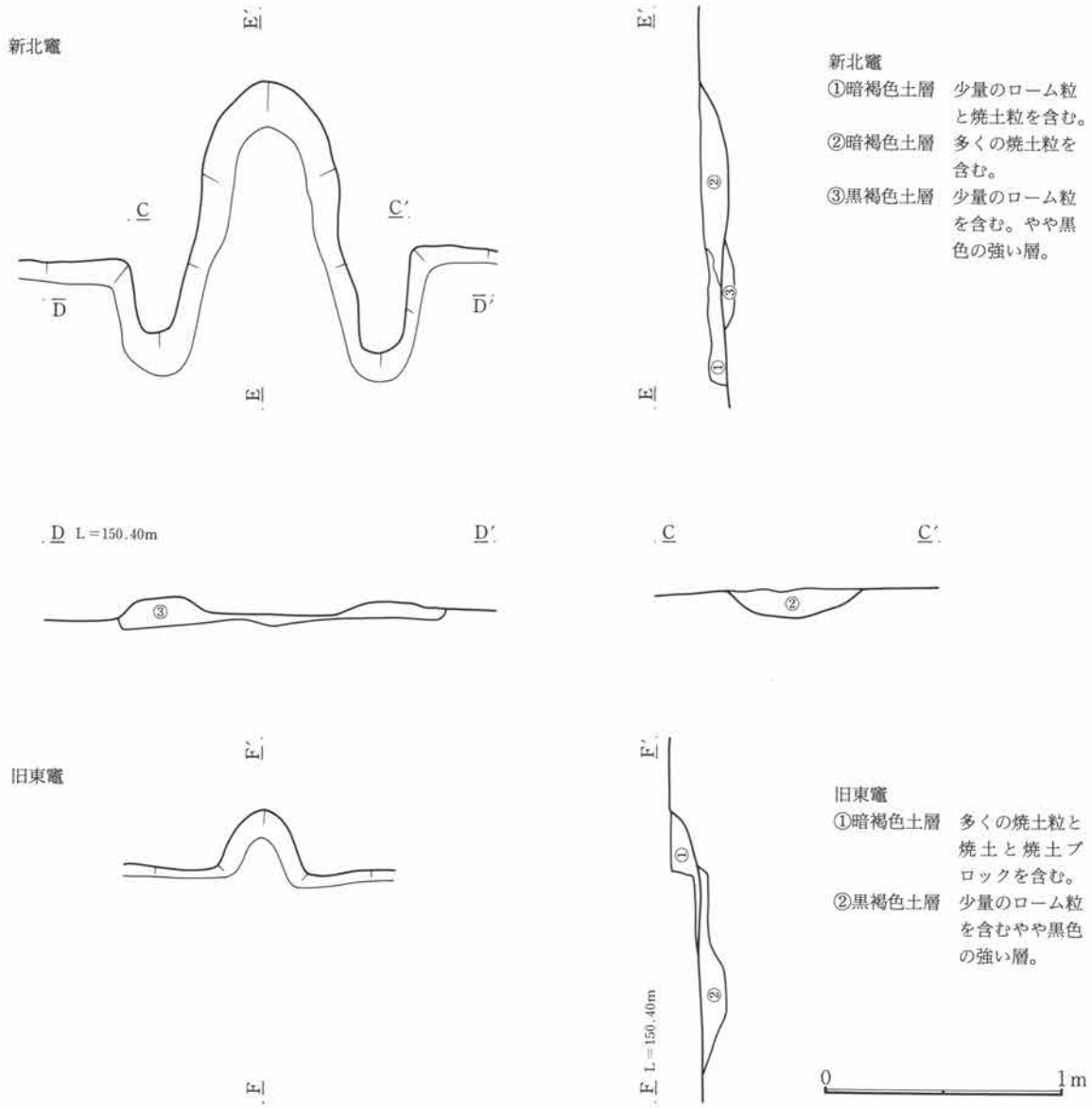
位置 住居北壁に造られている。両袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りが悪いが、両袖部分と燃焼部は残っていた。袖石等の竈に使われたと思われる石は出土していないため、ロームや黒褐色土を主とした土で造られた竈と思われる。燃焼部を中心として多くの焼土粒が出土した。

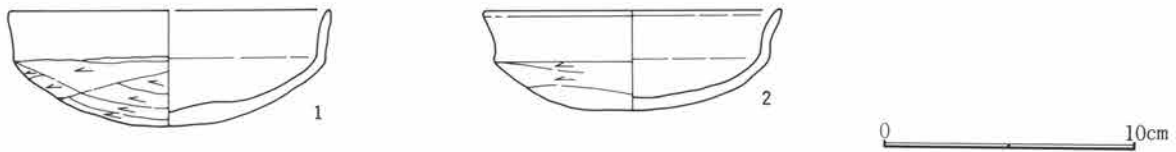
規模 煙道方向124cm、燃焼部幅72cmである。



第183図 278号住居跡実測図



第184図 278号住居跡新北竈・旧東竈実測図



第185図 278号住居跡出土遺物実測図

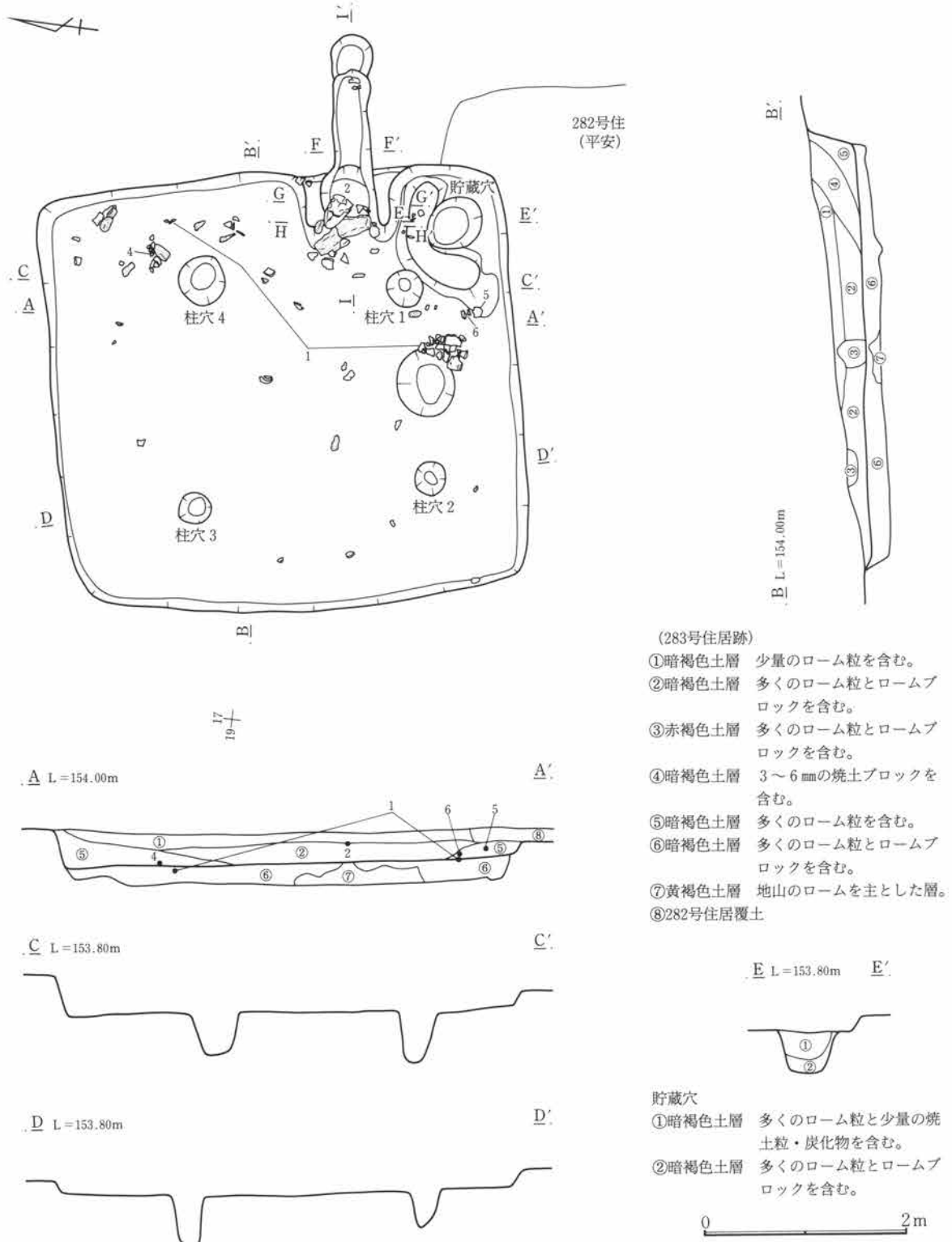
278号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
185-1 88	土 師 器 坏	床面+3 %残存	口(12.2) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土がやや粉状を呈し、黒斑は全く認められない。
185-2 88	土 師 器 坏	覆土 %残存	口 11.9 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③橙色	底面へら削り。器表面密でへらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全く認められず胎土が粉状を呈する。

283号住居跡 (第186~188図、図版27・28・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、19・20-18グリッドに位置する。

概要 南壁面付近で平安時代の282号住居と重複しており、重複部分は覆土上面が削られている。しかし壁面下部や床面は良好に残っており、他の部分も比較的残りの良い住居であった。



第186図 283号住居跡実測図

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈の右側に、また柱穴が4本掘られていた。貯蔵穴の北と西側部分に貯蔵穴を囲むように帯状の僅かな高まりが認められた。また柱穴1と2の間に浅い小穴が掘られていた。

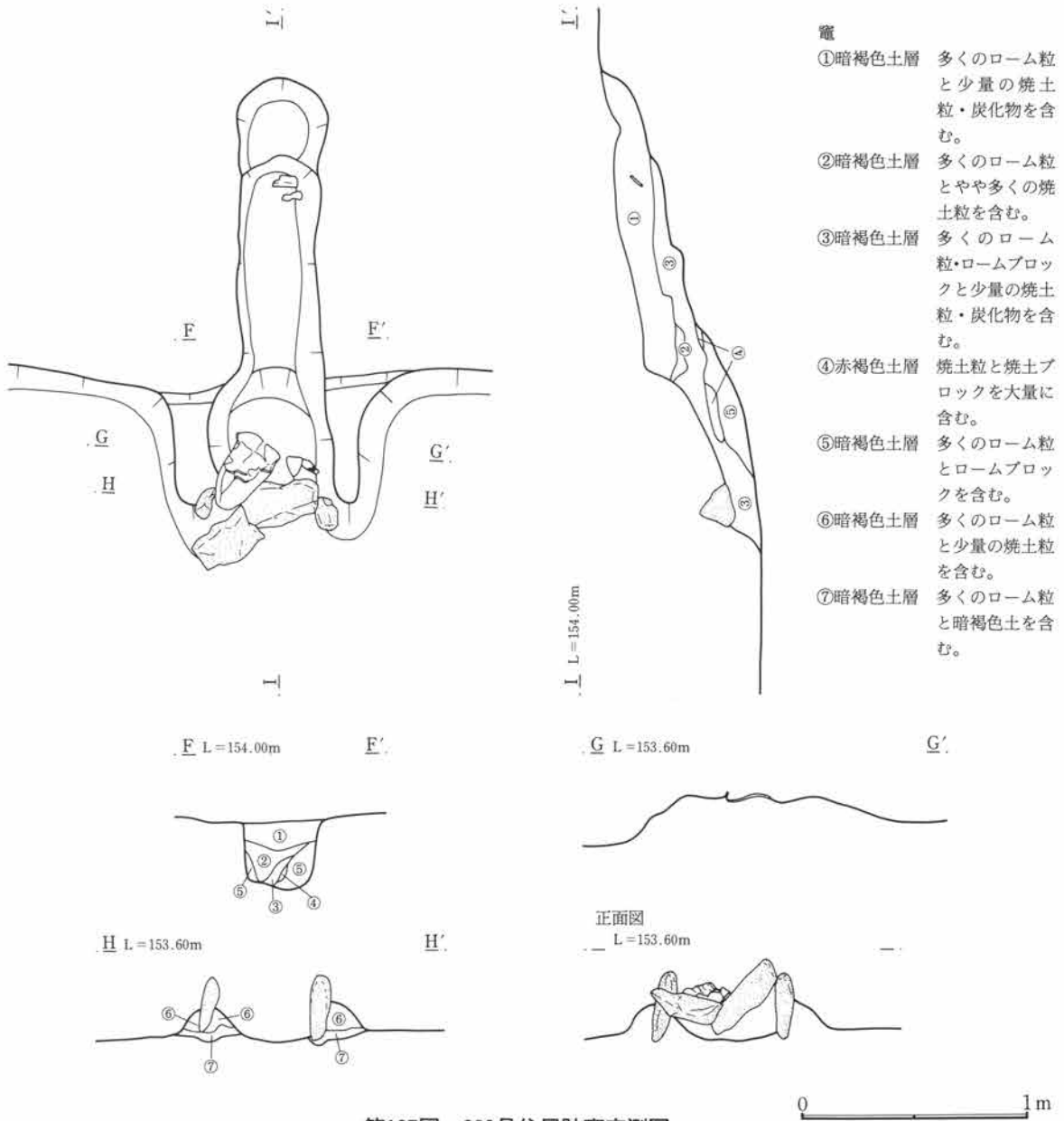
規模 東西4.32m、南北4.54mである。壁高は残りの良い東壁面部分で51cmである。貯蔵穴は径56cm深さ32cm、柱穴1は径37cm深さ45cm、柱穴2は径31cm深さ38cm、柱穴3は径31cm深さ52cm、柱穴4は径46cm深さ41cmである。

遺物 竈周辺から多くの遺物が出土している。また覆土中より土師器の甕胴部の破片が大量に出土している。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

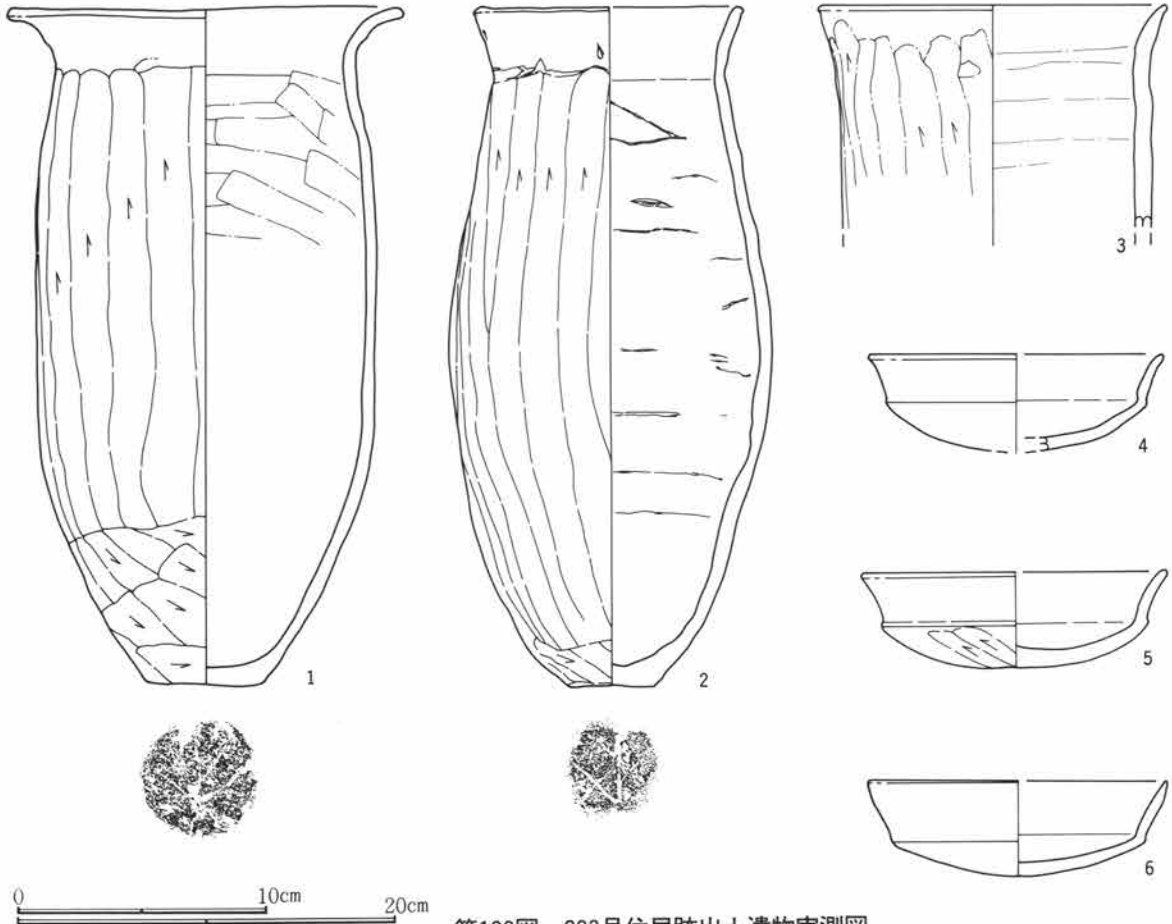
構造 焚口の両袖石が据えられた状態で、また天井石が割れて焚口部分に落ち込んだ状態で出土した。燃烧部や煙道部に石は使われていなく、燃烧部床面の支脚石は残っていなかった。燃烧部に口縁部と胴部



第3章 古墳時代の遺構と遺物

を約1/2欠損しているが胴部以下がほぼ完形の甕が残っていた。煙道部先端に浅い小穴が確認された。これはこの地点から煙道部を垂直方向に立ち上げるために、上から新たに掘った時にできた煙道部の痕跡の可能性を考えたい。

規模 煙道方向212cm、燃焼部幅48cmである。



第188図 283号住居跡出土遺物実測図

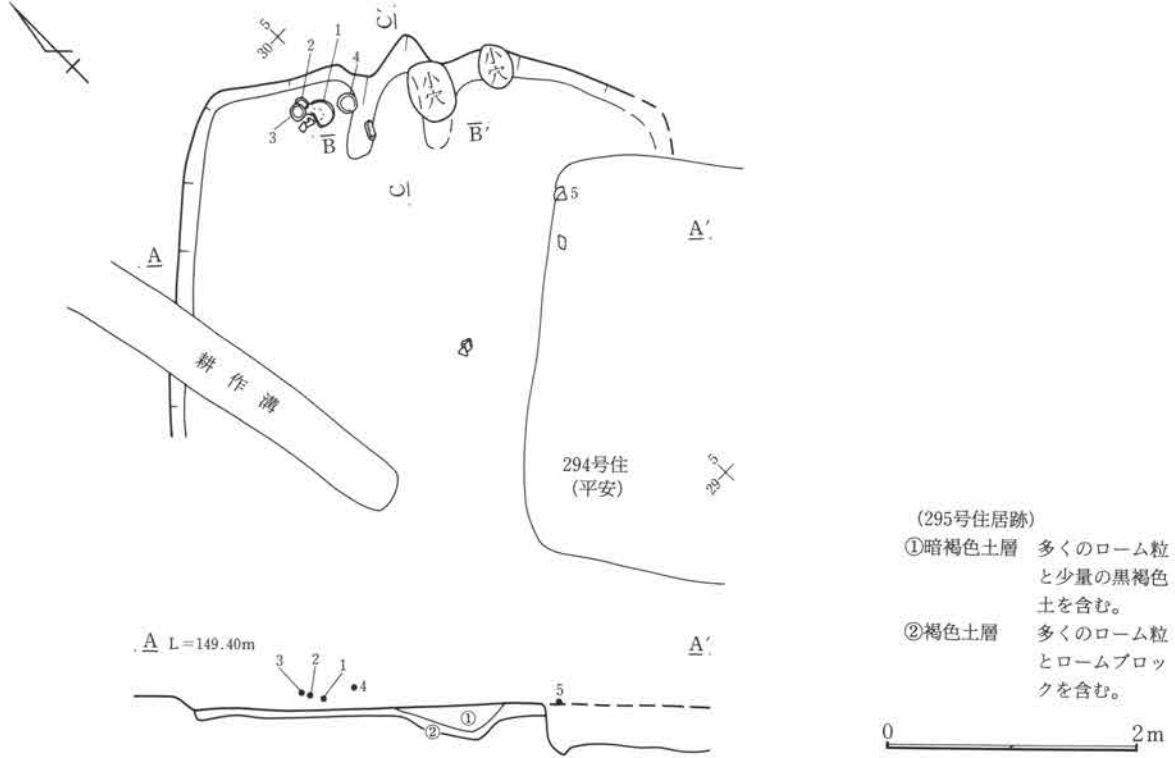
283号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
188-1 88	土 師 器 甕	床面直上 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴 $\frac{2}{3}$ 底完形	口 21.2 高 35.6 底 6.4	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色・外面の一部黒色	底面木葉痕。胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面にも多くの砂粒が目立つが、ナデで器表面密。全体に歪んでおり雑な感じの甕である。
188-2 88	土 師 器 甕	床面+11 口縁~胴上 部 $\frac{1}{6}$ 他完形	口(14.2) 高 35.9 底 4.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面にぶい黄橙色・外面黒褐色	底部中央へら削り、周辺部へら削り。胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。胴部内面に多くの輪痕が残る。口径の小さな甕である。
188-3 88	土 師 器 甕	覆土 口縁~頸部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.6 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面と断面橙色・外面の一部黒色	胴外面へらナデ。砂粒の移動少なく一部に光沢を持つ。内面ナデにより器表面密。
188-4 88	土 師 器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胎土が粉状を呈し底面のへら削りの単位不明瞭。黒斑認められず胎土が粉状を呈する。
188-5 88	土 師 器 坏	床面+5 口縁部 $\frac{1}{10}$ 底部 $\frac{2}{3}$	口(12.2) 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へら削り。胎土が粉状を呈しへらの単位不明瞭。内面ナデにより器表面密。黒斑認められず胎土が粉状を呈する。
188-6 88	土 師 器 坏	床面直上 $\frac{1}{4}$ 残存	口(12.0) 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りと思われるが、胎土が密でへらの単位不明瞭。黒斑は認められない。胎土が粉状を呈する。

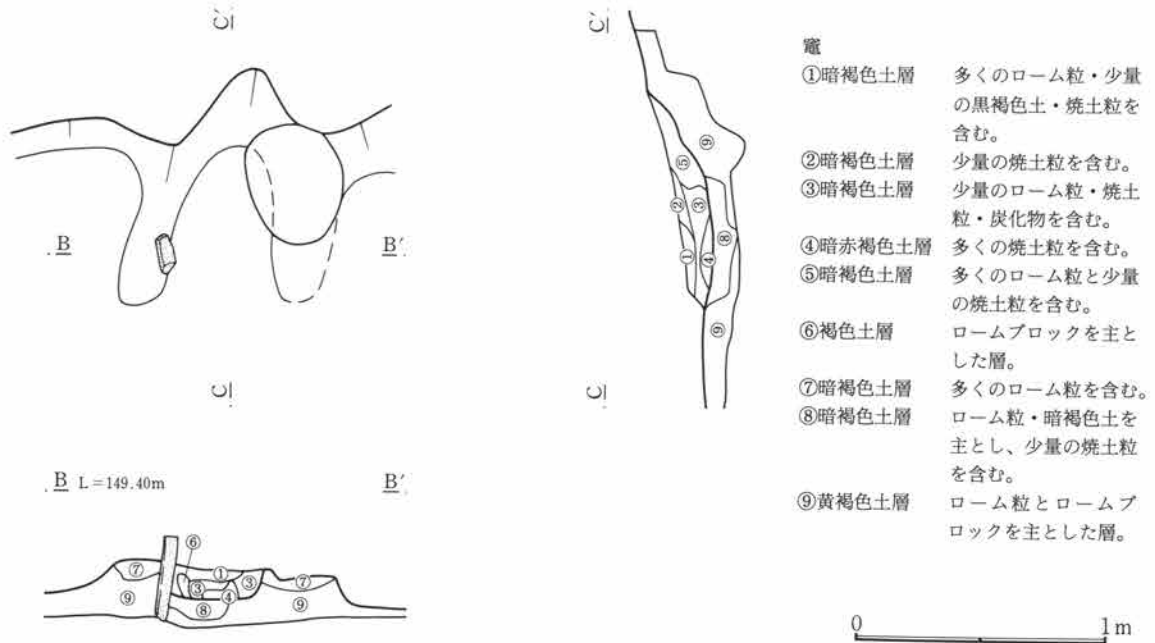
295号住居跡 (第189~191図、図版28・88)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、30-4・5グリッドに位置する。

概要 竈の造られている壁面付近で住居の範囲は確認できたが、南西部分は削られて残っていなかった。さらに南東部分で平安時代の294号住居と重複しており、その部分は床下部分まで深く掘り込まれていた。また西側で耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれている。住居の周辺には多くの小穴が掘られており、その小穴により本住居も掘り込まれていた。このように極めて残りの悪い住居であった。



第189図 295号住居跡実測図



第190図 295号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面は残りが悪かったが、ローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかったものと思われる。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で22cmである。

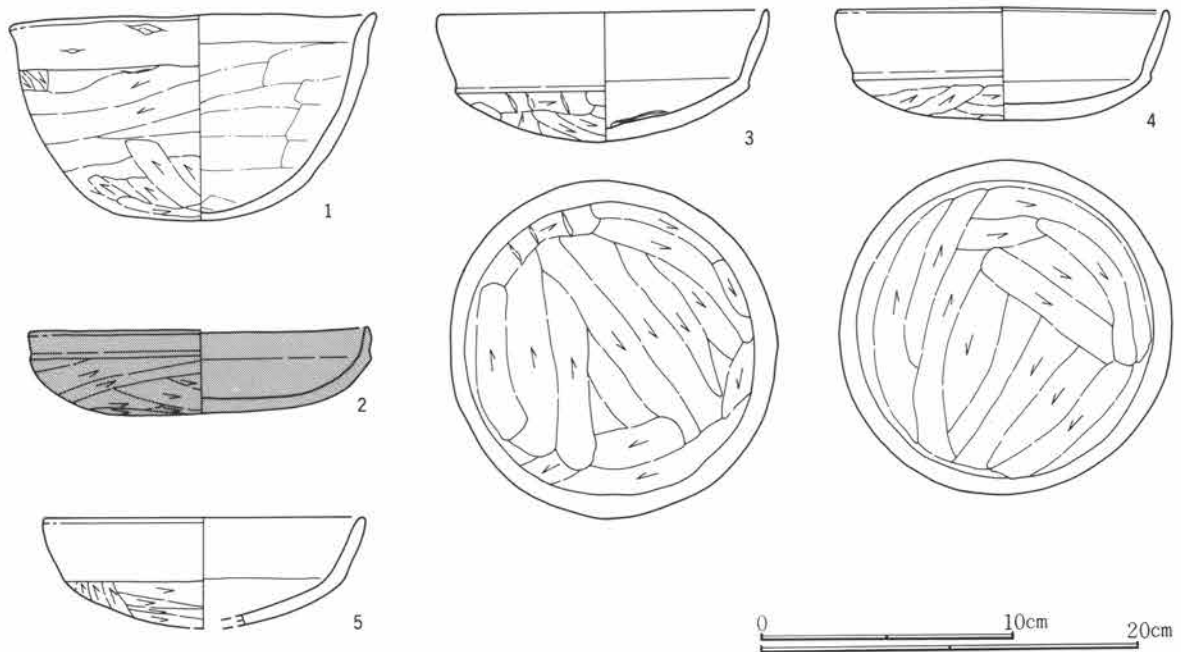
遺物 出土量が少なく、図示できた遺物を含めても総量で17点である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。両袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りの悪い竈であった。右袖部分に小穴が掘り込まれており、その部分は壊されていたが、左側の袖石と僅かな袖部、右袖部分に残された僅かな痕跡等が確認された。燃烧部を中心として多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向92cm、燃烧部幅42cmである。



第191図 295号住居跡出土遺物実測図

295号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
191-1 88	土 師 器 鉢	床面直上 ほぼ完形	口 19.6 高 10.8 底 8.5	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部～胴部外面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
191-2 88	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.5 高 3.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③黒色・底部外面の一部にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部外側～内側底面吸炭により黒色を呈する。内側底面は黒光りしている。
191-3 88	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.1 高 5.0 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕が放射状にある。
191-4 88	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
191-5 88	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.9 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒が少し移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

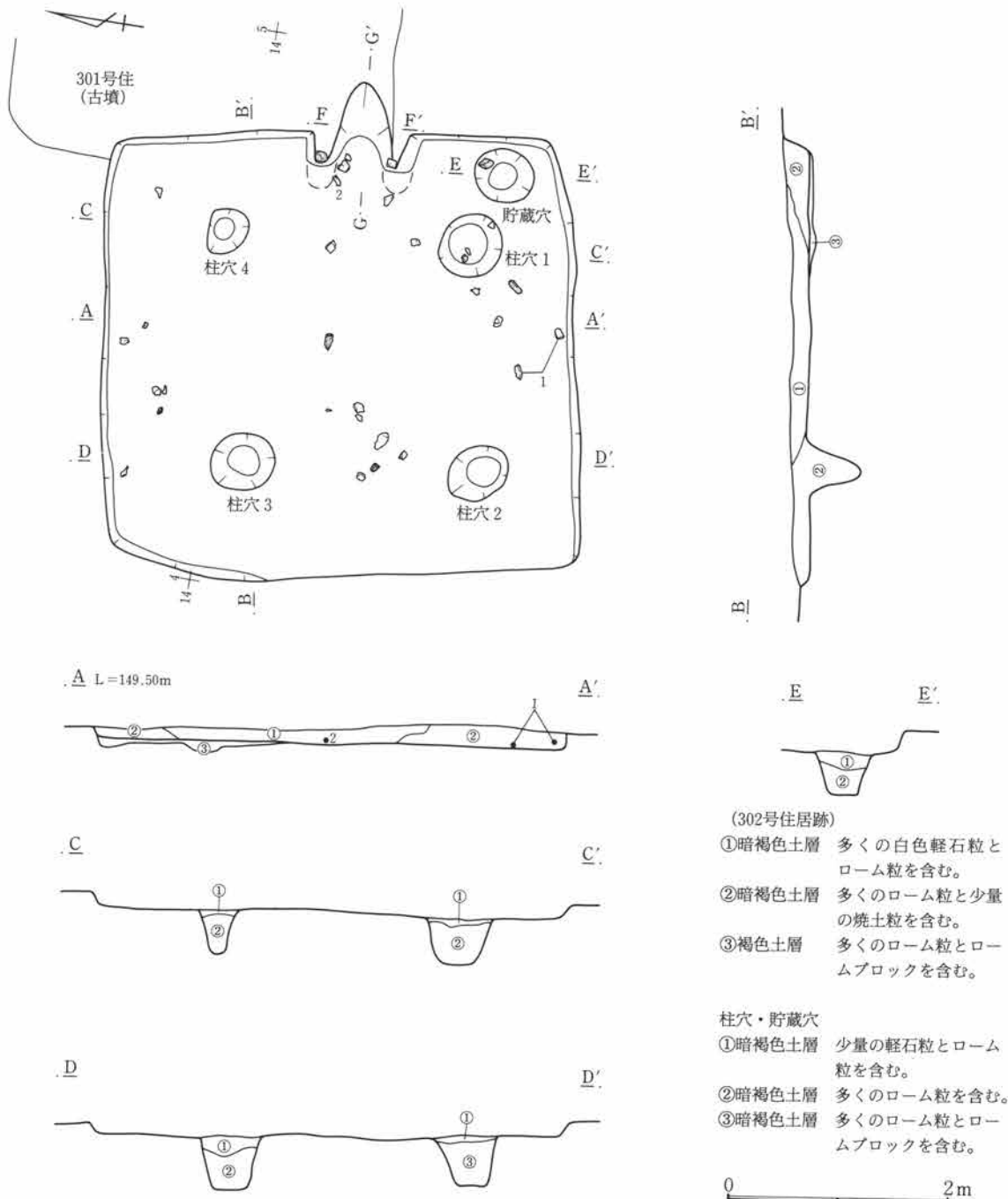
302号住居跡 (第192・193図、図版28・29・89)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、14-5グリッドに位置する。

概要 竈の造られている東壁面部分で古墳時代の301号住居と重複しており、本住居の竈が301号住居の覆土を掘り込んで造られている。そのため本住居は301号住居より新しい。低い西壁部分は西谷川の川岸に接し、覆土や壁面の多くは削られており残りが悪かった。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は4本掘られており、竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西4.02m、南北4.32mである。壁高は残りの良い南東コーナーの壁部分で24cmである。貯蔵穴は径



第192図 302号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

53cm深さ33cmである。柱穴1は径58cm深さ41cm、柱穴2は径50cm深さ45cm、柱穴3は径52cm深さ53cm、柱穴4は径41cm深さ33cmである。

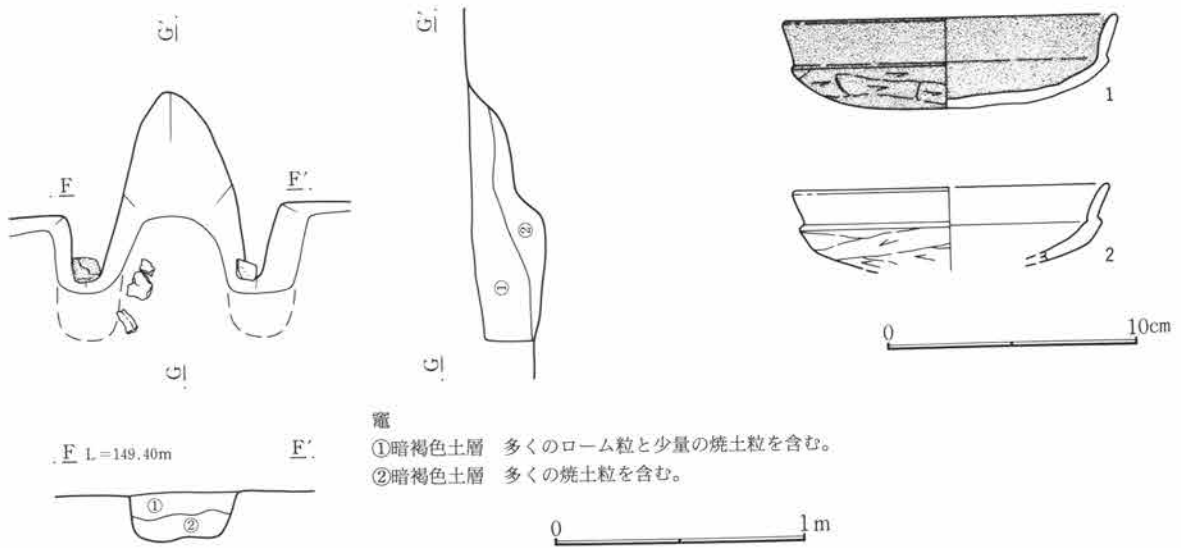
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏2点である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 焚口部分の袖部は削られて残っていなかった。左袖部分に小さな石が置かれたような状態で出土したが、袖石ではない。ロームを多く使用して造られた竈である。焼土粒は燃烧部付近から多く出土したが、301号住居の覆土を掘り込んで造られた煙道部分には少なかった。

規模 煙道方向96cm、燃烧部幅54cmである。



竈

①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。

第193図 302号住居跡竈・出土遺物実測図

302号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
193-1 89	土師器 坏	床面+1 3/4残存	口 13.2 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に少し歪んでいる。口縁部外面～内面底部まで黒漆。底部外面吸炭。
193-2	土師器 坏	床面+3 小破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面強いヘラ削り。小さな砂粒が多く移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。砂質の胎土である。

303号住居跡 (第194～197図、図版29)

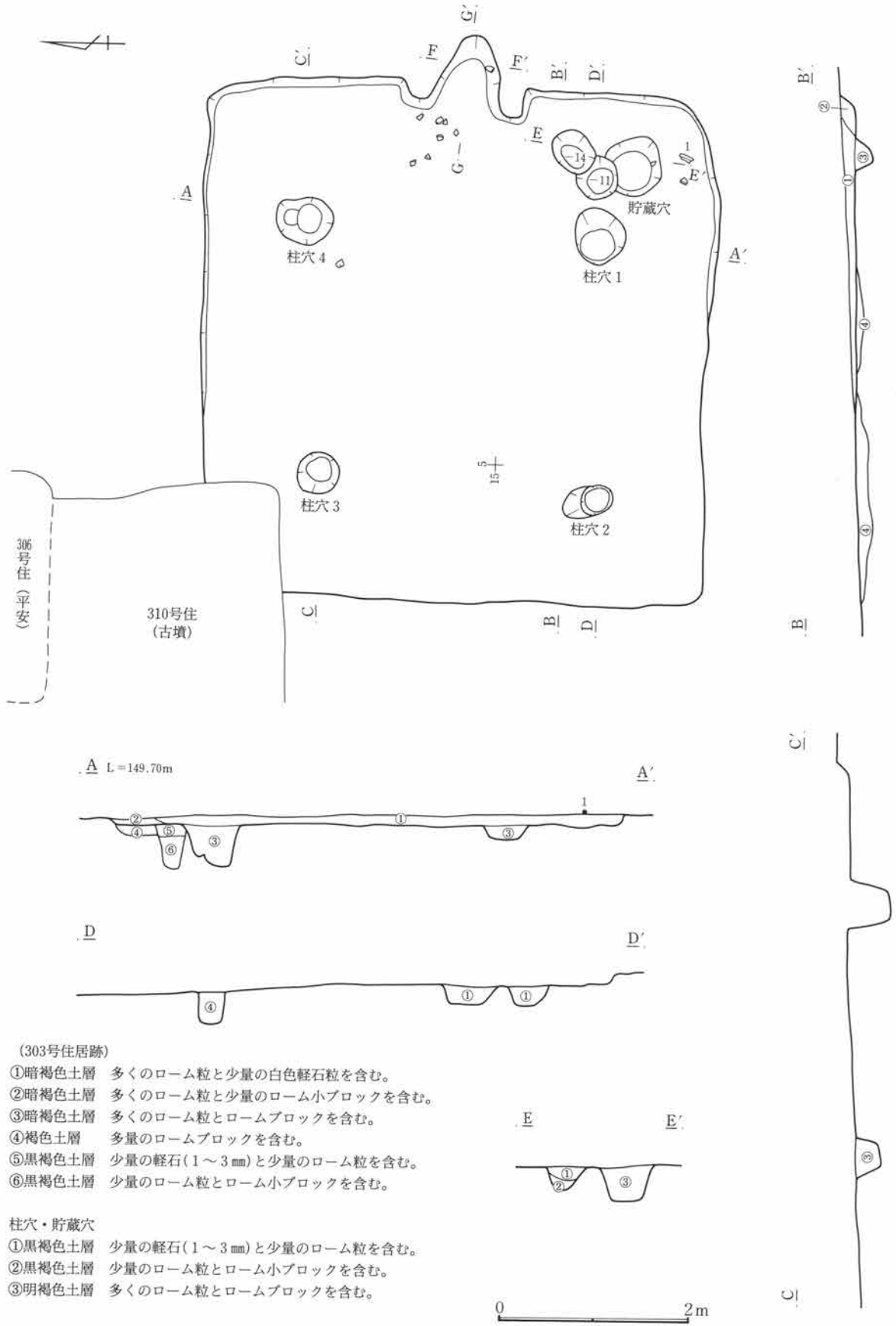
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、16-6グリッドに位置する。

概要 北西部分で古墳時代の310号住居と重複しており、310号住居により床下部分まで掘り込まれている。住居の残りが悪く、竈の造られている住居東側の壁面は残っていたが、西側は残っていなかった。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は少し歪んでいるが、4本確認された。貯蔵穴が竈の右側に掘られており、貯蔵穴の北側にも浅い小穴が2本掘られていた。

規模 東西5.43m、南北5.43mである。壁高は残りの良い北壁部分で12cmである。貯蔵穴は径59cm深さ21cmでほぼ円形を呈する。柱穴1は径53cm深さ12cm、柱穴2は径65cm深さ37cm、柱穴3は径45cm深さ37cm、柱穴4は径41cm深さ43cmである。小穴の床面からの深さは数字で示した。

遺物 出土量が極めて少なく、図示できた土師器坏を含めても破片総量で61点である。



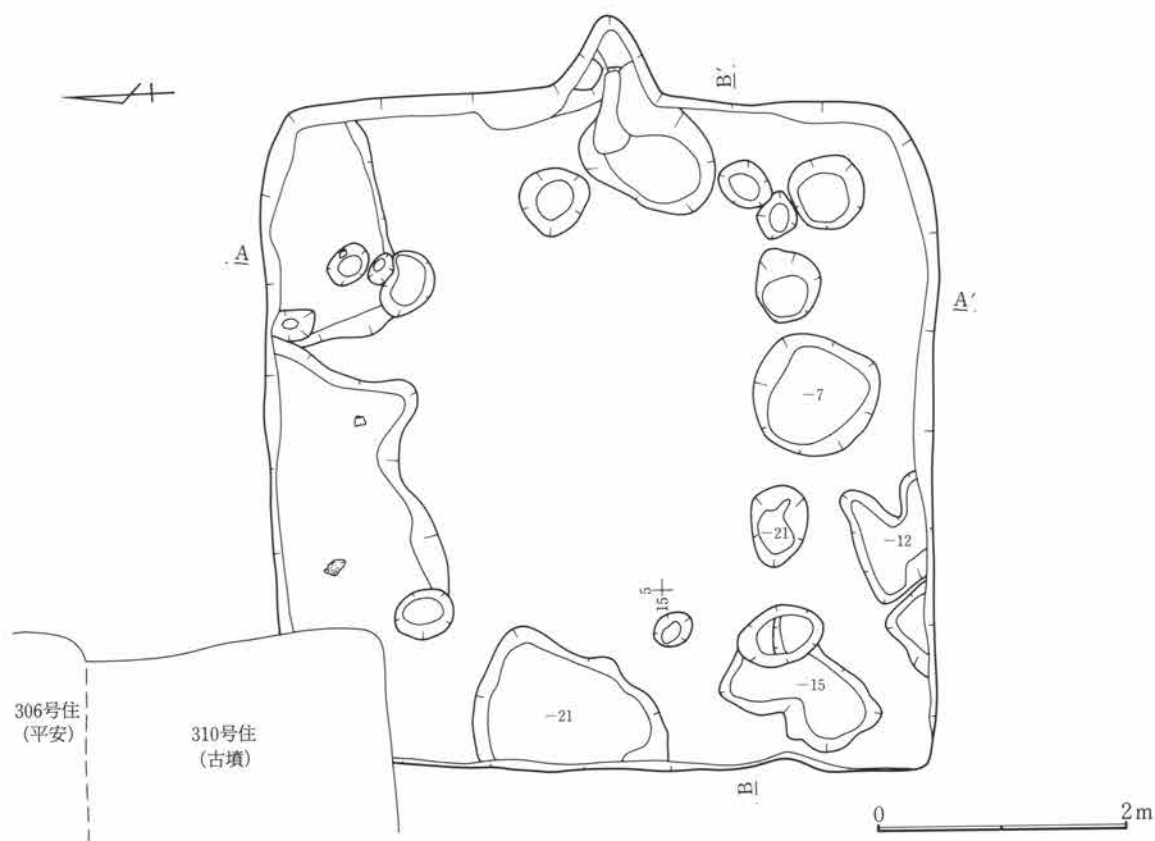
(303号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④褐色土層 多量のロームブロックを含む。
- ⑤黒褐色土層 少量の軽石(1~3mm)と少量のローム粒を含む。
- ⑥黒褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。

柱穴・貯蔵穴

- ①黒褐色土層 少量の軽石(1~3mm)と少量のローム粒を含む。
- ②黒褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③明褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第194図 303号住居跡実測図



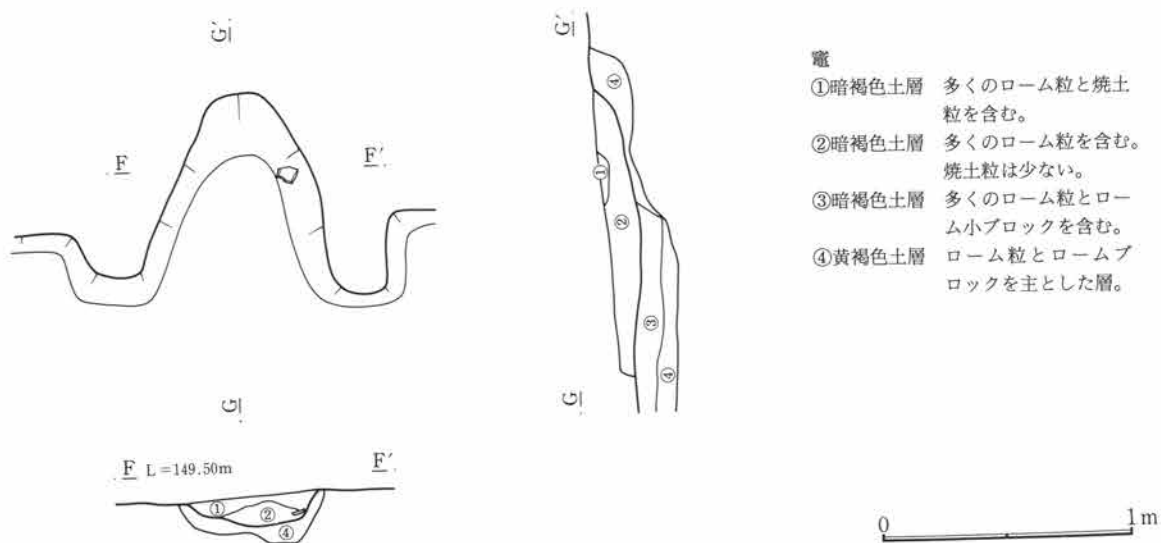
第195図 303号住居跡床下実測図

(竈)

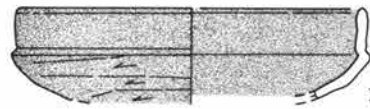
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 竈上部の多くは削り取られ、全体に残りの悪い住居であった。竈内から土器は出土したが、石は出土していない。煙道部付近で一部攪乱も受けている。その付近より多くの焼土粒が出土しているが、燃焼部付近からの焼土粒の出土は少なかった。

規模 煙道方向83cm、燃焼部幅74cmである。



第196図 303号住居跡竈実測図



0 10cm

第197図 303号住居跡出土遺物実測図

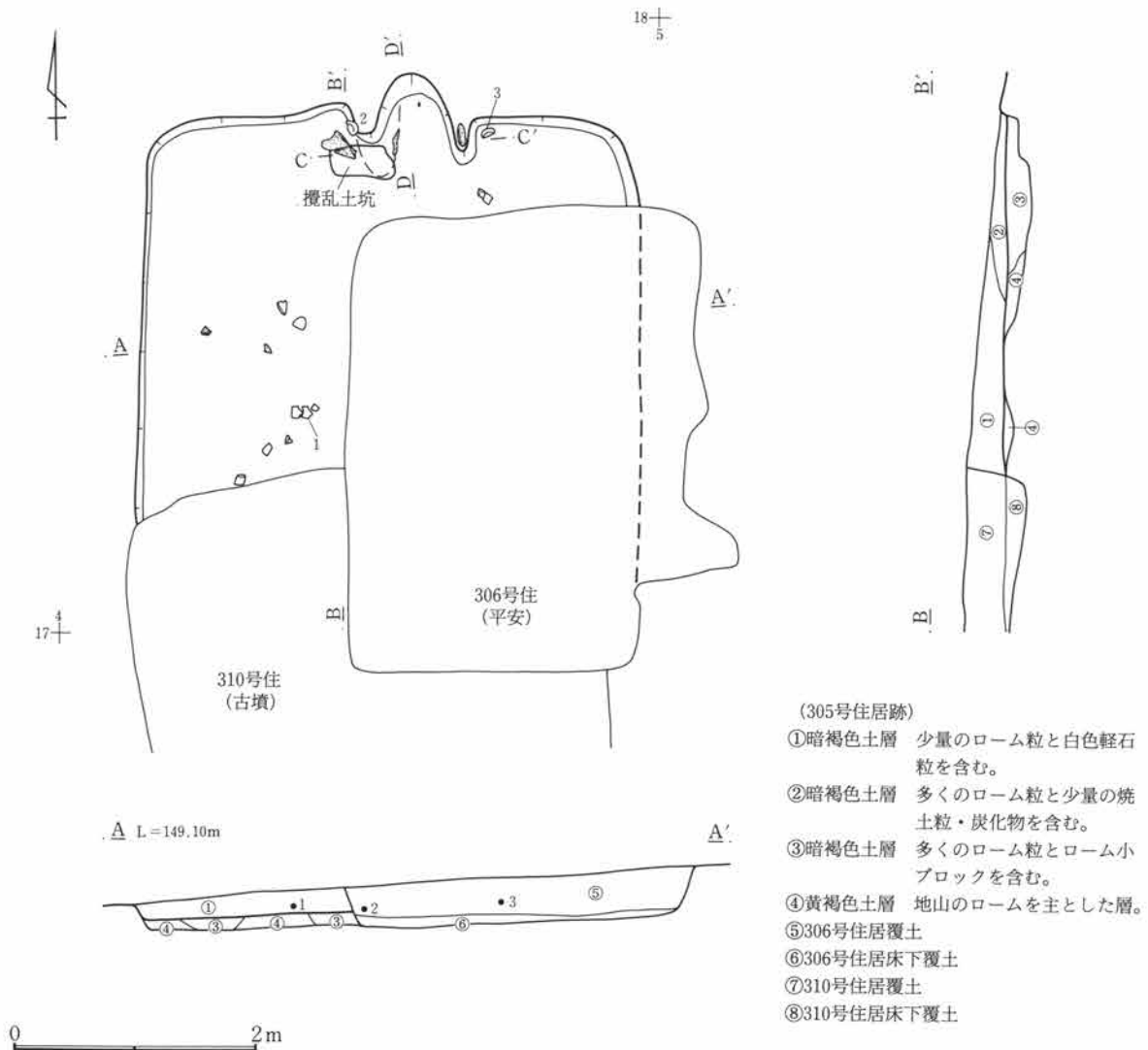
303号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
197-1	土師器 坏	床面+5 破片	口(13.6) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面にふい橙色	底面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部外面～内側底面黒漆。底部外面吸炭により黒色。

305号住居跡 (第198～200図、図版29・89)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、17-5グリッドに位置する。

概要 3軒の重複している住居の中の1軒である。南側の一部を古墳時代の310号住居に、東側の多くの部分を平安時代の306号住居により床下部分まで掘り込まれていた。床面の高さがほぼ同じであり、覆土の違いも明瞭でない部分も多いため不確実な部分も認められたが、以上の切り合い関係から新旧関係は305→310→306号住居である。



- (305号住居跡)
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
 - ⑤306号住居覆土
 - ⑥306号住居床下覆土
 - ⑦310号住居覆土
 - ⑧310号住居床下覆土

第198図 305号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴と思われる掘り込みは床下調査段階においても掘られていなかったためないものと思われる。床下調査により竈右側に深さ17cmの掘り込みが認められたが、浅く形も不定形であるため貯蔵穴ではないと考えられた。

規模 東西4.06m、南北不明である。壁高は残りの良い西壁部分で17cmである。

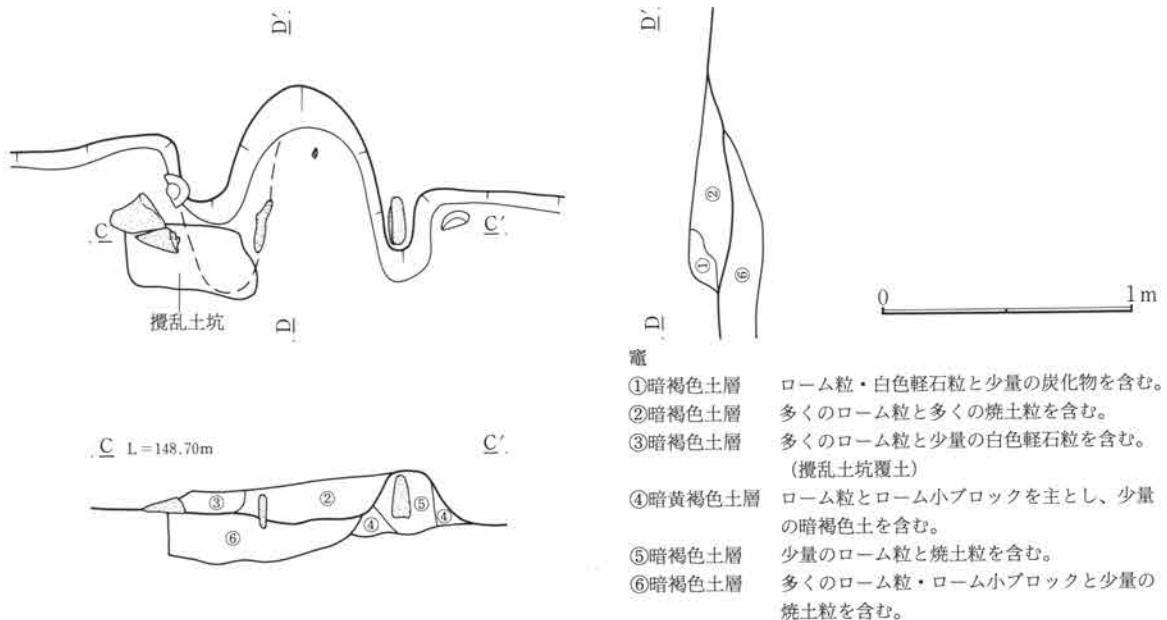
遺物 図示できた遺物の他に、須恵器の坏や甕の破片が少量出土している。

(竈)

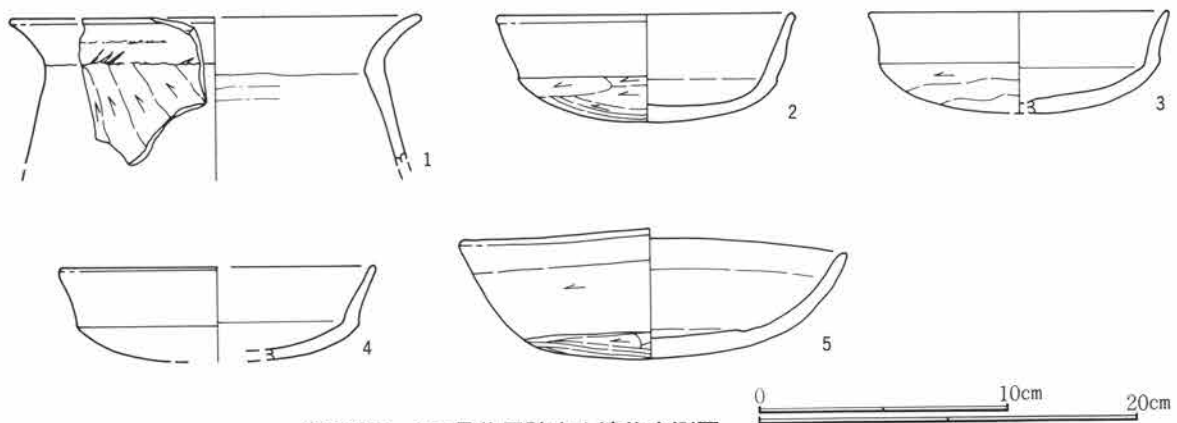
位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 左袖部分が攪乱されており、多くの部分が削られていた。左袖部分に袖石と思われる石が立てられた状態で出土し、右袖の中には袖石が埋め込まれていた。左袖部分外側には天井石に使われていたと思われる大きな石が出土した。竈内からの焼土粒の出土も少なく、残りの悪い竈であった。そのためか調査段階で一部掘り間違えた部分もあった。

規模 煙道方向79cm、燃烧部幅48cmである。



第199図 305号住居跡竈実測図



第200図 305号住居跡出土遺物実測図

305号住居跡出土遺物観察表

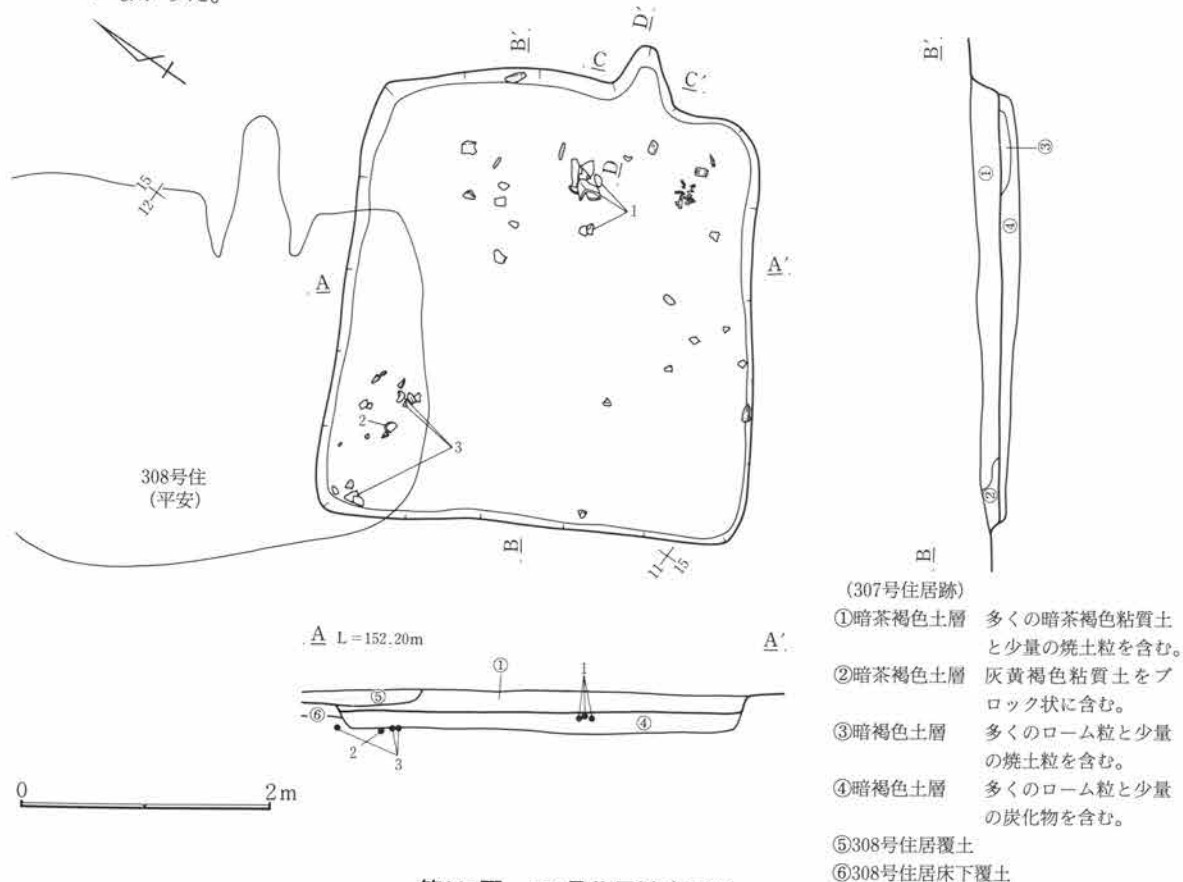
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
200-1	土師器 甕	床面+6 小破片	口(22.0) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。 ②酸化焰、 硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。頸部にヘラの圧痕あり。 口縁部横ナデ。
200-2 89	土師器 杯	床面+5 3/4残存	口12.0 高4.2 底丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が密でヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 黒斑認められず、胎土が粉状を呈する。
200-3 89	土師器 杯	床面+9 1/2残存	口11.9 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が粉状を呈しヘラの単位不明瞭。 黒斑全く認められず、胎土が粉状を呈する。
200-4 89	土師器 杯	覆土 1/4残存	口(12.5) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が粉状を呈しヘラの単位不明。 黒斑認められず、胎土が粉状を呈する。
200-5 89	土師器 杯	覆土 口縁一部欠 損 他完形	口15.4 高5.2 底丸底	①密、1~2mmの赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。胎土が密でヘラの単位不明瞭。内側底 部と体部との境に一条の沈線あり。黒斑全くなし。胎土が粉 状を呈する。

307号住居跡 (第201・202図、図版30・89)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、12-16グリッドに位置する。

概要 北西部分で平安時代の308号住居と重複しており、308号住居が本住居の覆土上面を掘り込んでいる。しかし308号住居の掘り込みは浅いため本住居の残りは悪くない。この周辺はロームの堆積が少なく、多くの住居は暗茶褐色の土を掘り込んで造られている。

構造 床面は暗茶褐色土を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。



第201図 307号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西3.52m、南北3.48mである。壁高は残りの良い東壁部分で30cmである。

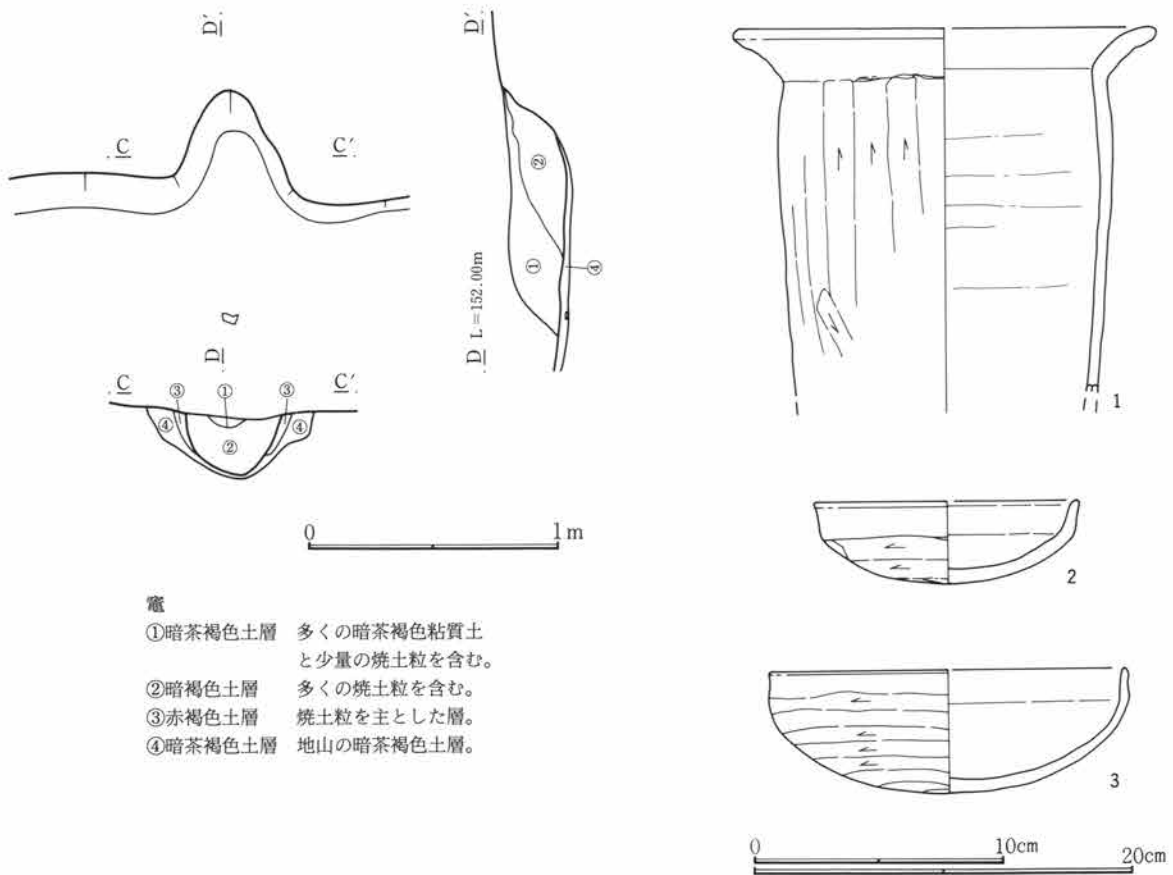
遺物 南東コーナーに近い床面に炭化材がまとまって出土している。木材ではないようであるが、崩れており材質等は不明である。出土土器は少量である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。残りは悪いが、袖と燃烧部の多くは床面上に位置するものと思われる。

構造 住居規模が小さいためか、壁面を掘り込んで燃烧部の多くが造られているようである。そのため床面上に袖の造りだしは少ないようである。竈内や竈の周辺から石の出土はなかったため、ロームを主として、造られた竈であると思われる。燃烧部壁面上部に焼土化している箇所が認められ、覆土中より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向48cm、燃烧部幅43cmである。



第202図 307号住居跡竈・出土遺物実測図

307号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
202-1 89	土 師 器 甕	床面+5 口縁部1/4 胴上部1/3	口(22.4) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色・一部黒色	胴部外面でいねいなヘラ削り。器表面はやや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
202-2 89	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口(10.6) 高 3.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体にやや砂質である。
202-3 89	土 師 器 坏	床面+3 1/3残存	口(14.0) 高 4.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

310号住居跡 (第203~206図、図版30・89・113)

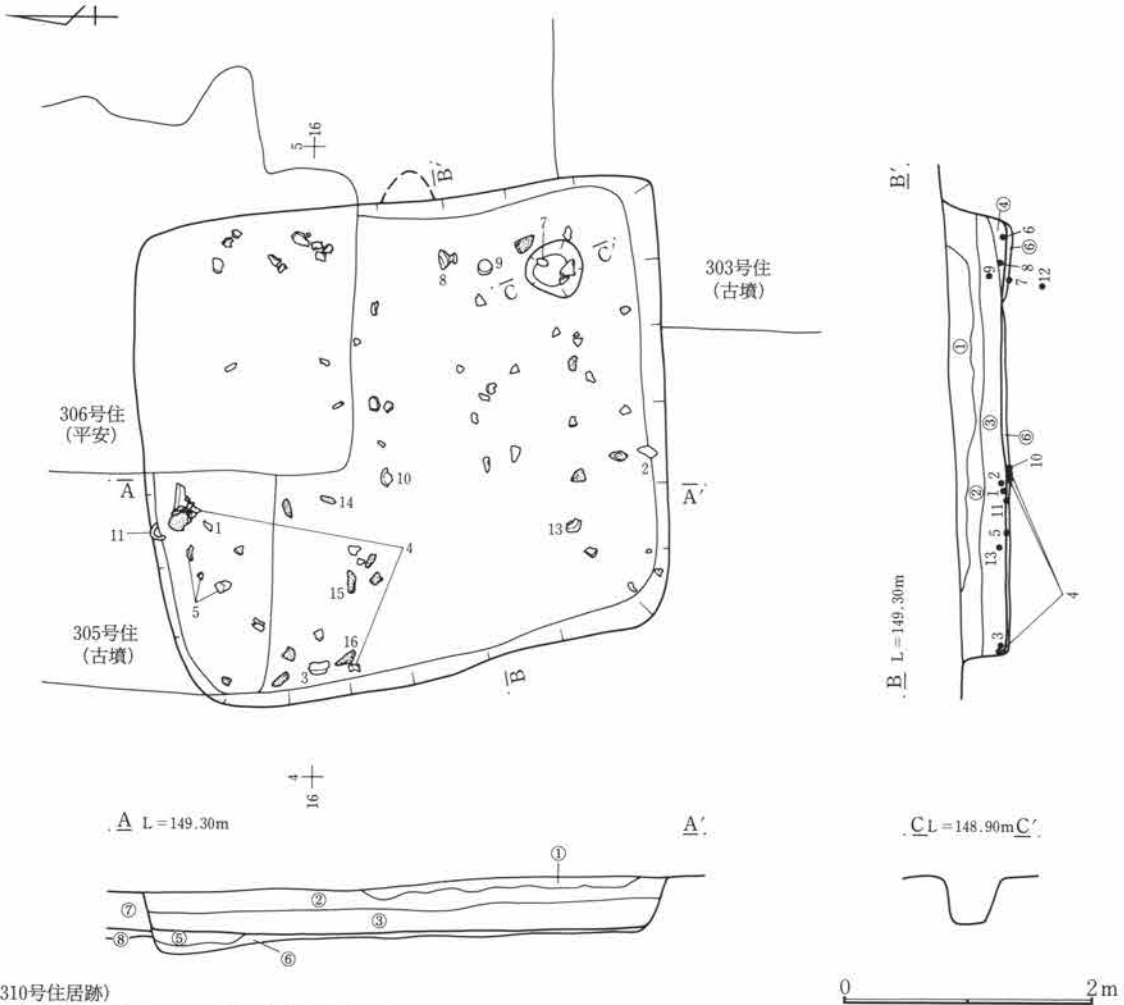
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、16-5グリッドに位置する。

概要 4軒の重複している住居の中の1軒である。南東部分で古墳時代の303号住居の北西部分を床下部分まで掘り込んでおり、北側部分では古墳時代の305号住居の南側を床面付近まで掘り込んでいる。また北東部分では平安時代の306号住居により床下部分まで掘り込まれていた。以上の切り合い関係から新旧関係は305→310→306号住居、及び303→310号住居である。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は床下調査段階においても掘られていなかった。床下調査により南東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が確認された。小穴の北西部分には小穴を囲むように僅かな高まりが認められた。この小穴が貯蔵穴であるなら、竈は東壁中央部付近に造られていた可能性が高い。その部分の覆土中から少量の焼土粒が出土しているため、東壁面に竈が築かれていたものと思われる。

規模 東西3.80m、南北4.17mである。壁高は残りの良い南壁部分で39cmである。

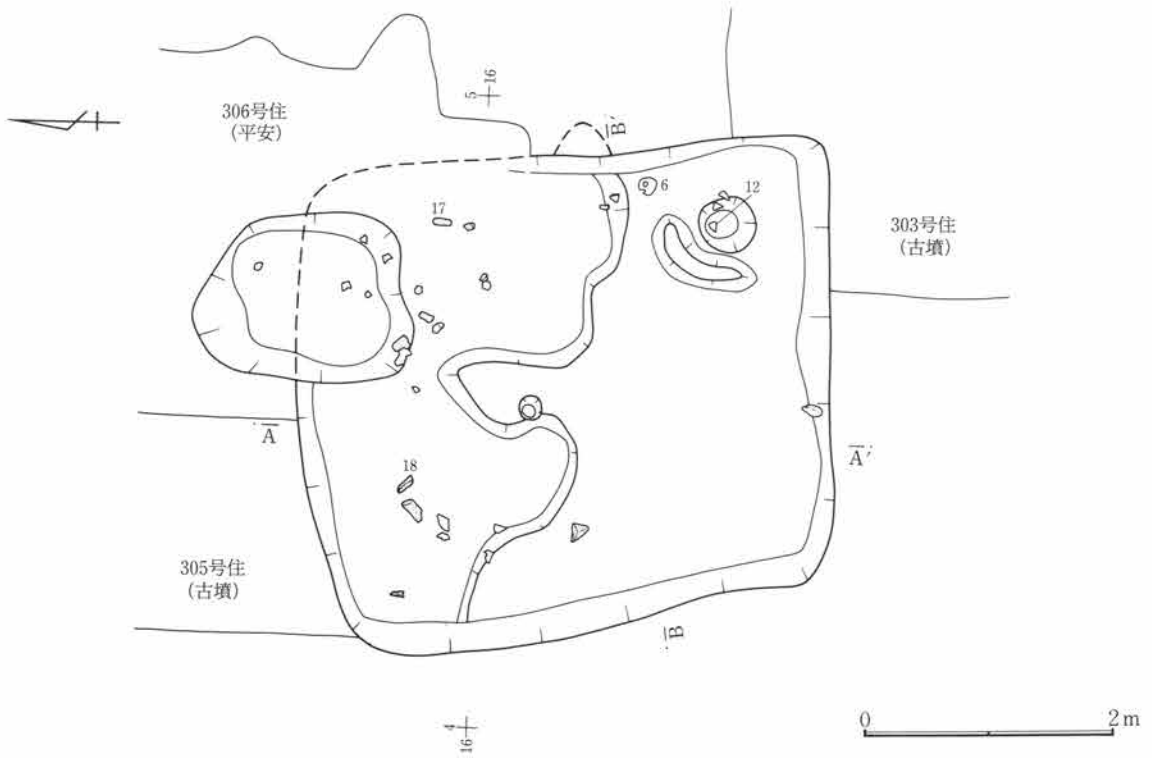
遺物 6~8の高坏は出土例が少なく貴重な遺物である。



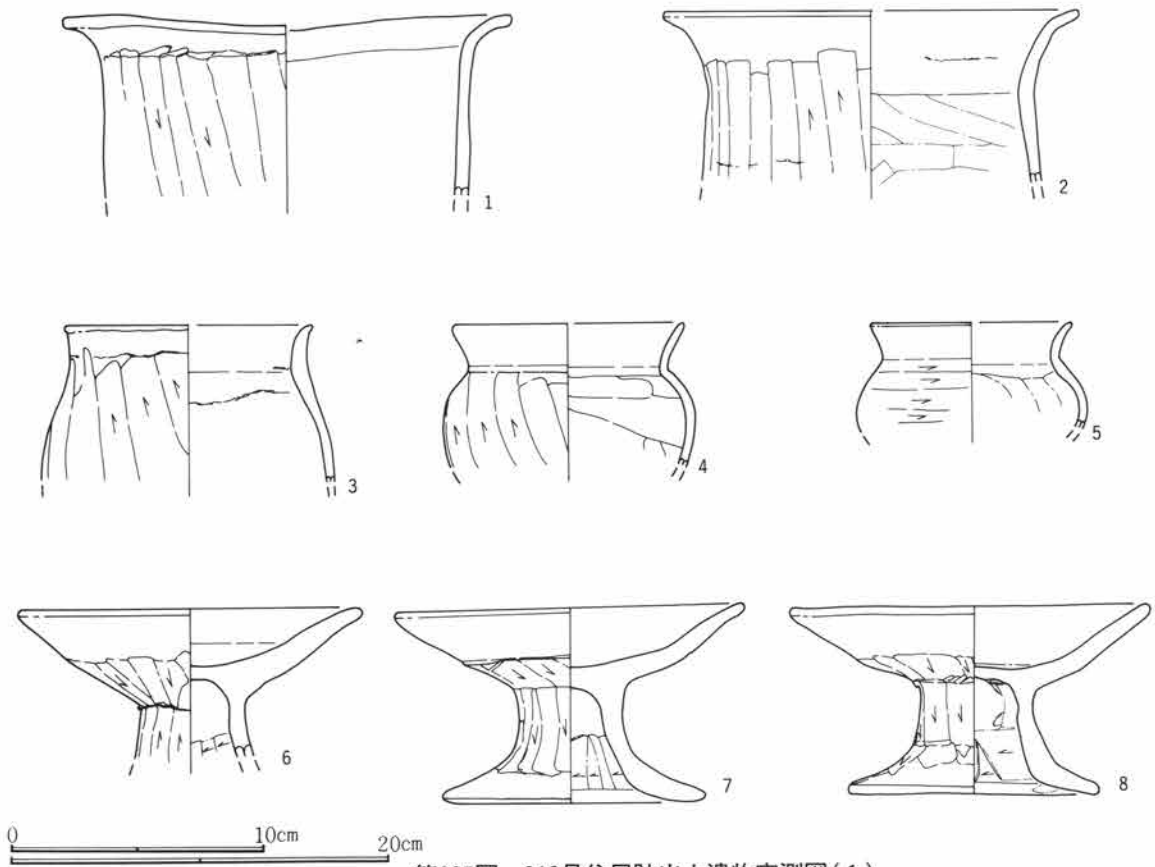
(310号住居跡)

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④明褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑤明褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑦305号住居覆土
- ⑧305号住居床下覆土

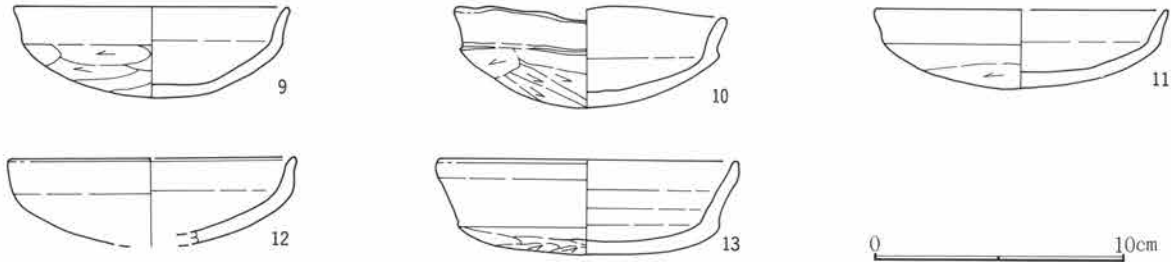
第203図 310号住居跡実測図



第204図 310号住居跡床下実測図



第205図 310号住居跡出土遺物実測図(1)



第206図 310号住居跡出土遺物実測図(2)

310号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
205-1	土 師 器 甕	床面+7 破片	口(26.0) 高 — 底 —	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
205-2	土 師 器 甕	覆土 口縁~胴上 部1/2残存	口(22.0) 高 — 底 —	①粗、3~4mmの片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部ていねいな多くのヘラ削り。砂粒の移動は多いが、器表面はひどく粗れていない。内面ナデ。
205-3	土 師 器 小型 甕	床面+8 1/2残存	口(13.2) 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰黄褐色	胴部外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
205-4 89	土 師 器 小型 甕	床面+3 口~胴上部 1/2残存	口(12.3) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面に砂粒目立つ。
205-5	土 師 器 小型 甕	床面+1 破片	口(10.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部外面横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められず。胎土がやや粉状を呈する。
205-6 89	土 師 器 高 坏	覆土 坏部残存	口 13.7 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面強いヘラ削り。内面上部ナデ、中~下部横方向ヘラ削り。坏部底面ヘラ削り。内面ナデにより器表面密。
205-7 89	土 師 器 高 坏	床面直上 坏部1/2 脚部1/2残存	口 13.8 高 7.6 底 10.4	①密、1mm以下の砂粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	脚部外面強いヘラ削りで、削り面の幅が広い。脚部内面ヘラ削りで輪積みの痕跡を削り取っている。脚部内面上部はナデ。坏外面ヘラ削り。
205-8 89	土 師 器 高 坏	床面直上 1/2残存	口 14.2 高 7.4 底 10.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内面の一部黒褐色	脚部外面強いヘラ削りで、削り面の幅が広い。下部横ナデ。脚部内面ヘラ削りで輪積みの痕跡を削り取っている。
206-9 89	土 師 器 坏	床面+4 完形	口 11.0 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を僅かに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が粉状を呈しておりヘラの単位不明瞭。
206-10 89	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 10.8 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。胎土がやや粉状を呈する。全体に歪んでいる。
206-11 89	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口(11.6) 高 3.1 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、削りの単位不明瞭。口縁部横ナデ。胎土がやや粉状を呈するが、9ほどでない。
206-12	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口(11.5) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	器表面全体がわずかに剥落しているため、ヘラ削りの単位不明。口縁部横ナデ。
206-13 89	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 12.1 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。
14 113	こも編み石	床面-3	長 13.8 幅 5.1 厚 3.9 重 410		点紋絹雲母石墨片岩。断面が三角形を呈す石である。側面に小さな凹凸部が認められる。
15 113	こも編み石	床面-9	長 15.3 幅 6.4 厚 2.3 重 430		絹雲母石墨片岩。断面が長方形の偏平な石である。片側の側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
16 113	こも編み石	床面-4	長 16.8 幅 6.3 厚 4.2 重 640		緑簾緑泥片岩。断面は緩やかな三角形を呈す。側面中央部の幅が広く、やや凹凸を呈す。
17 113	こも編み石	床面-6	長 16.0 幅 6.3 厚 2.3 重 440		雲母片岩。偏平な石である。両側面にわずかな凹状が認められる。
18 113	こも編み石	床面-1	長 15.3 幅 6.0 厚 4.8 重 610		絹雲母石墨片岩。細長く肉厚な石である。2側面に明瞭な凹状部が認められる。

312号住居跡 (第207~209図、図版30・31)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、17-7グリッドに位置する。

概要 南壁面に接して平安時代の277号住居が、東側に近接して平安時代の316号住居がある。

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈右側に貯蔵穴が掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.33m、南北3.48mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で26cmである。貯蔵穴は径52cm深さ30cmである。

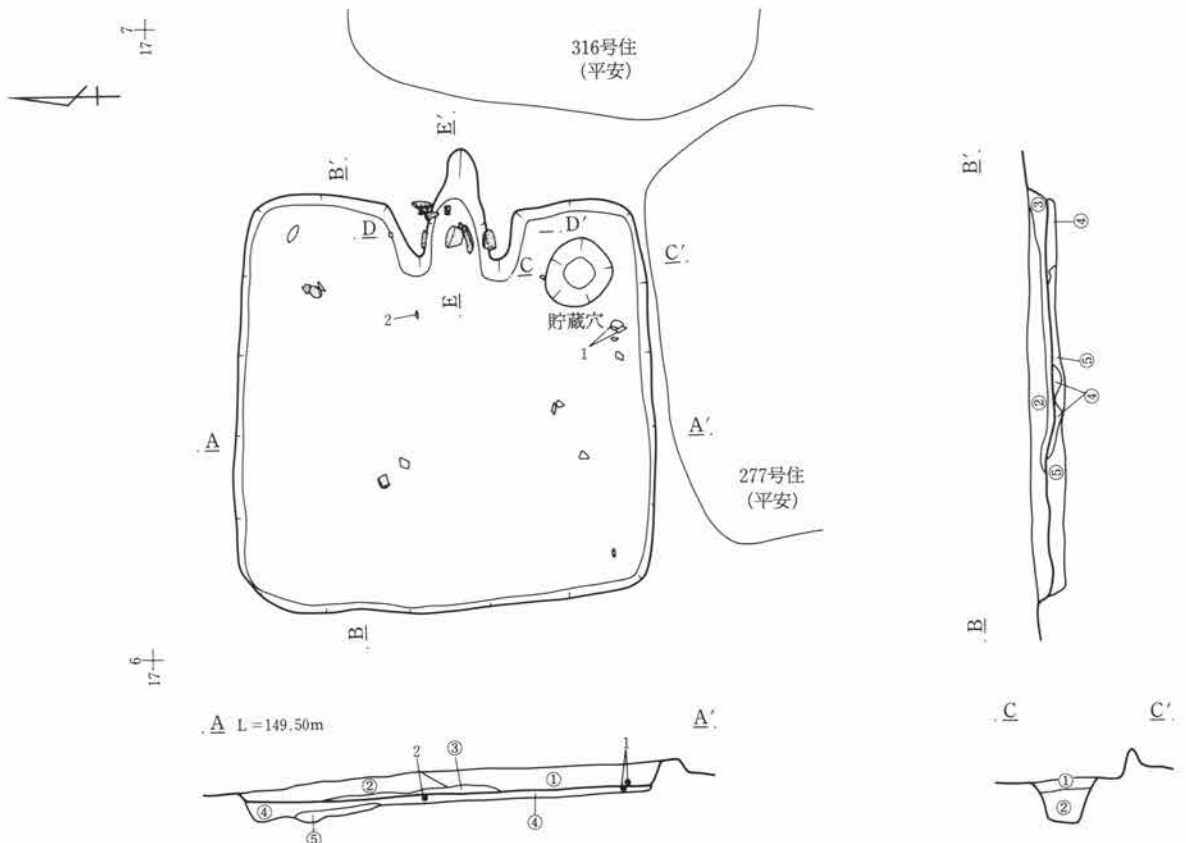
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の壺と坏の2点である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 左右の両袖石がほぼ据えられた状態で、また焚口覆土上面に天井石が多くの破片に割れた状態で出土した。煙道部に近い燃烧部の左側には細長い支脚石がほぼ据えられた状態で出土した。このように袖部分と天井部に石を用いた竈である。燃烧部を中心に他の住居の竈には見られないほど多量の焼土粒が出土した。

規模 煙道方向104cm、燃烧部幅48cmである。



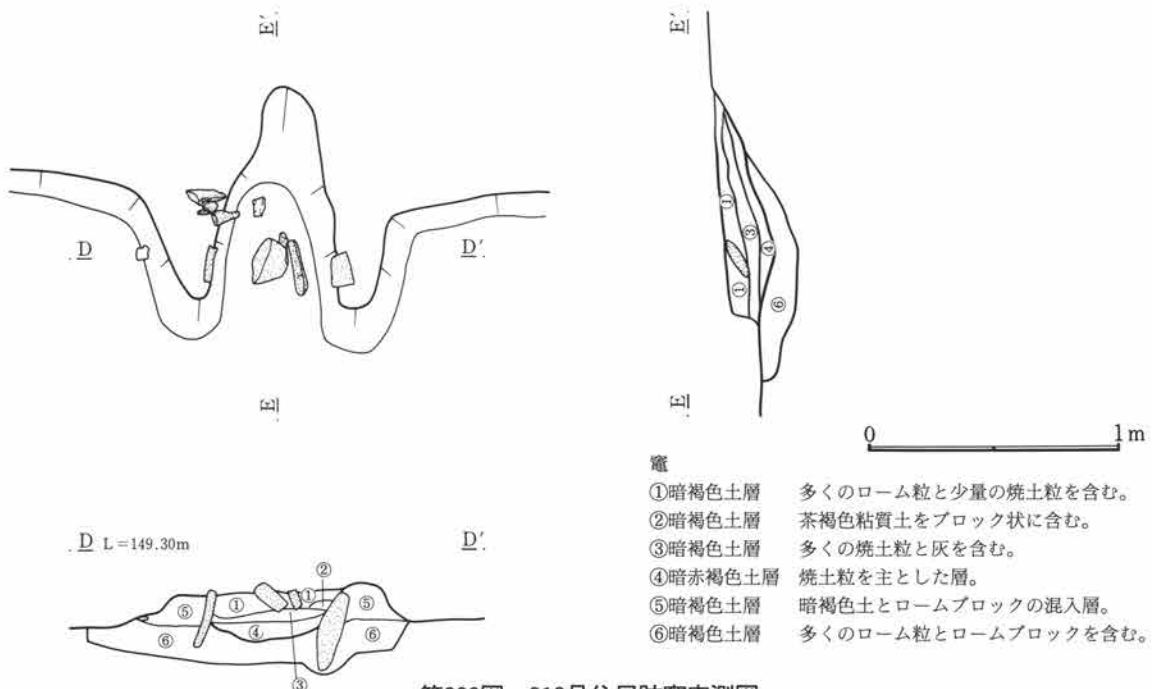
(312号住居跡)

- ①暗茶褐色土層 灰黄褐色粘土と多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くの暗茶褐色粘質土を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒と軽石粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

貯蔵穴

- ①暗茶褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗茶褐色土層 多くのローム粒を含む。

第207図 312号住居跡実測図



第208図 312号住居跡竈実測図



第209図 312号住居跡出土遺物実測図

312号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
209-1	土 師 器 壺	床面直上 破片	口(18.8) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の多くの砂粒と3~4mmの少量の片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面は粗い。内面ナデ。口唇部ヘラナデにより平らに仕上げている。8×4mmの大きな片岩粒も含む。
209-2	土 師 器 坏	床面直上 破片	口(12.8) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。光沢を持つ雲母状の小粒子を多く含む。

319号住居跡 (第210~212図、図版31・89)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、18-16グリッドに位置する。

概要 南西部分の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、北東部分の残りは良いが、西から南西部分の多くは削られて残っていなかった。また南側で本住居の覆土を掘り込んで平安時代の285号住居が造られていた。両住居とも残りが悪く、西側の住居範囲は残っていなかった。

構造 床面は灰褐色や灰白色粘土質の土と少量のロームブロックが混入した土で造られていた。竈の右側に小さな貯蔵穴が掘られていた。柱穴は4本掘られており北東部分の柱穴は残っていたが、住居の西側

第3章 古墳時代の遺構と遺物

は残っていないため、床下の調査により北西部分の柱穴を確認した。しかし地形的に低い南西部分の柱穴は残っていなかった。貯蔵穴手前の柱穴1は痕跡として確認されたが、平面形は不明である。

規模 東西不明、南北5.10mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で46cmである。貯蔵穴は径39cm深さ51cmである。柱穴1は径不明深さ24cm、柱穴2は径45cm深さ43cm、柱穴3は径41cm深さ31cmである。

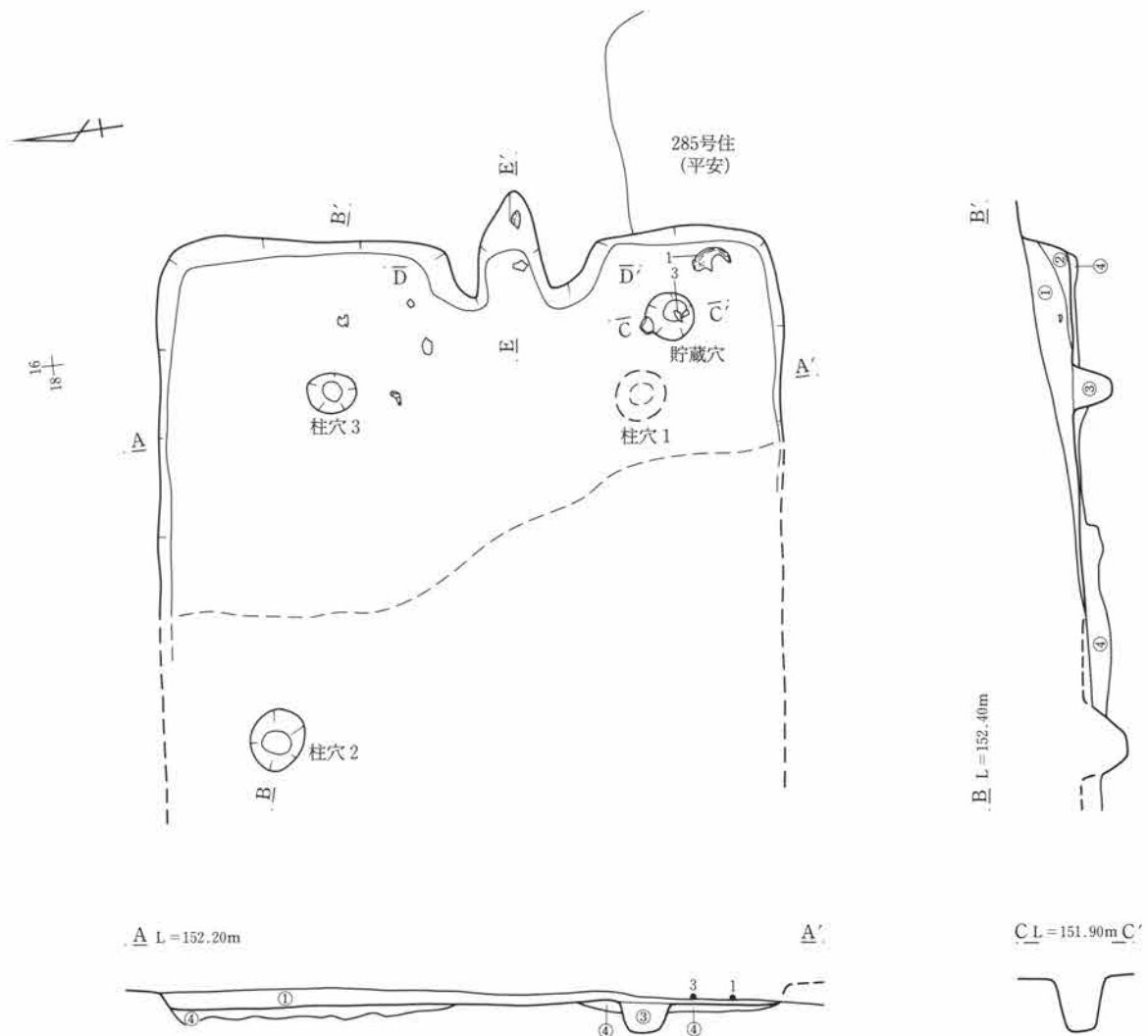
遺物 出土量が少なく図示できたのは土師器の壺と坏の3点である。破片総数としても29片と少量である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 竈材として使用されたと考えられる石は出土しなかった。袖部分は灰褐色粘質土を中心に用いて造られていた。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向94cm、燃烧部幅52cmである。

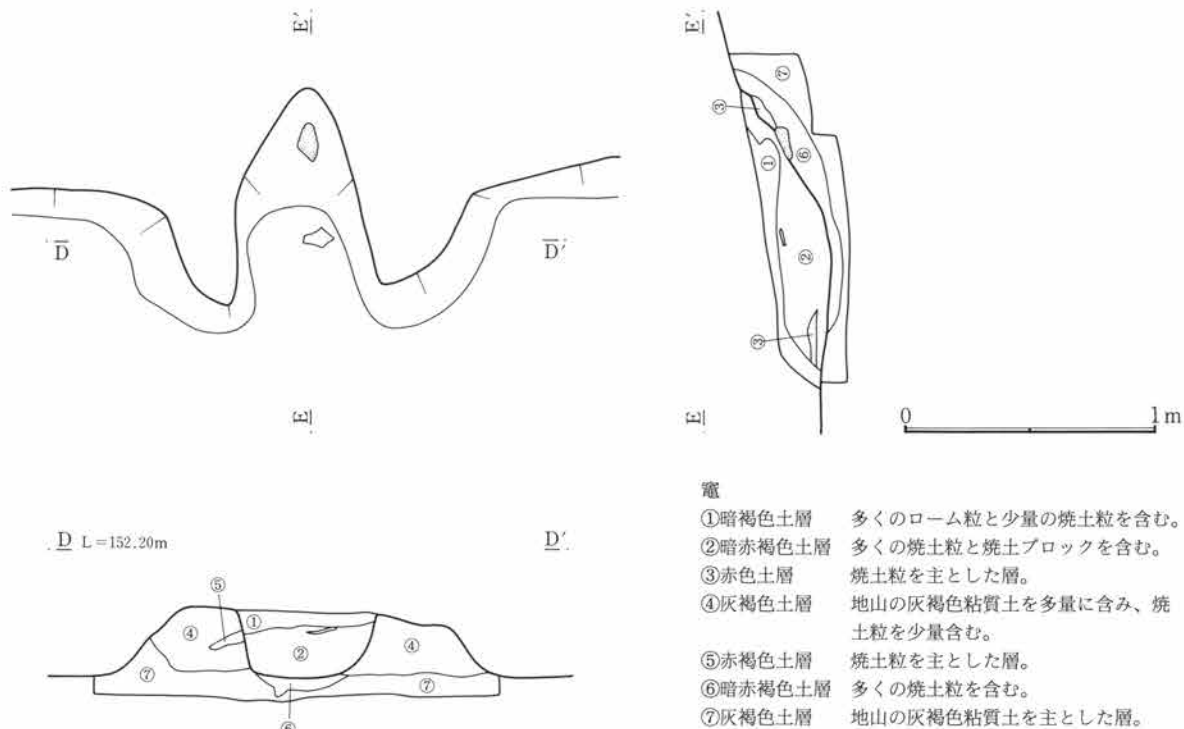


(319号住居跡)

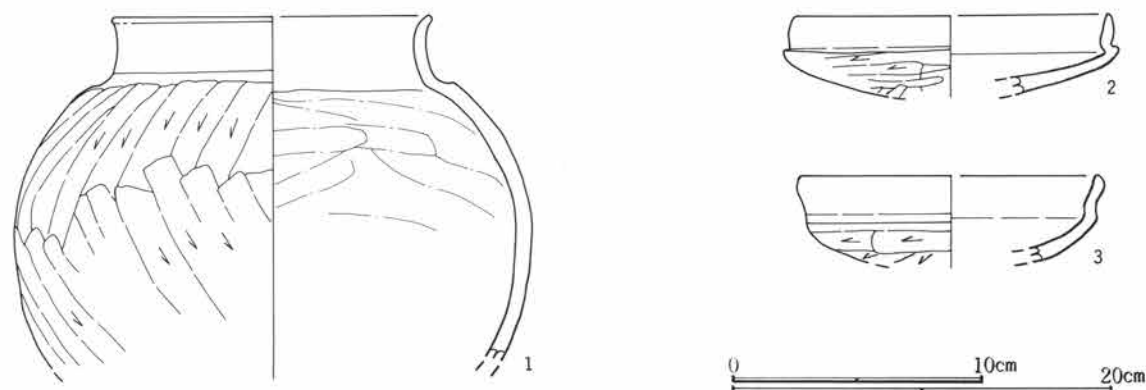
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒と灰白色粘質土を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒・灰褐色土・灰白色粘質土を含む。

第210図 319号住居跡実測図

0 2m



第211図 319号住居跡竈実測図



第212図 319号住居跡出土遺物実測図

319号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
212-1 89	土 師 器 壺	床面+3 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{2}$	口(17.0) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。小さな砂粒の移動と粘土がササラ状になっており、器表面粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴部外面にナデはない。
212-2	土 師 器 坏	床面+10 $\frac{1}{6}$ 残存	口(12.6) 高・底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。稜は高く口縁部は短い。
212-3	土 師 器 坏	覆土 破片	口(11.8) 高・底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

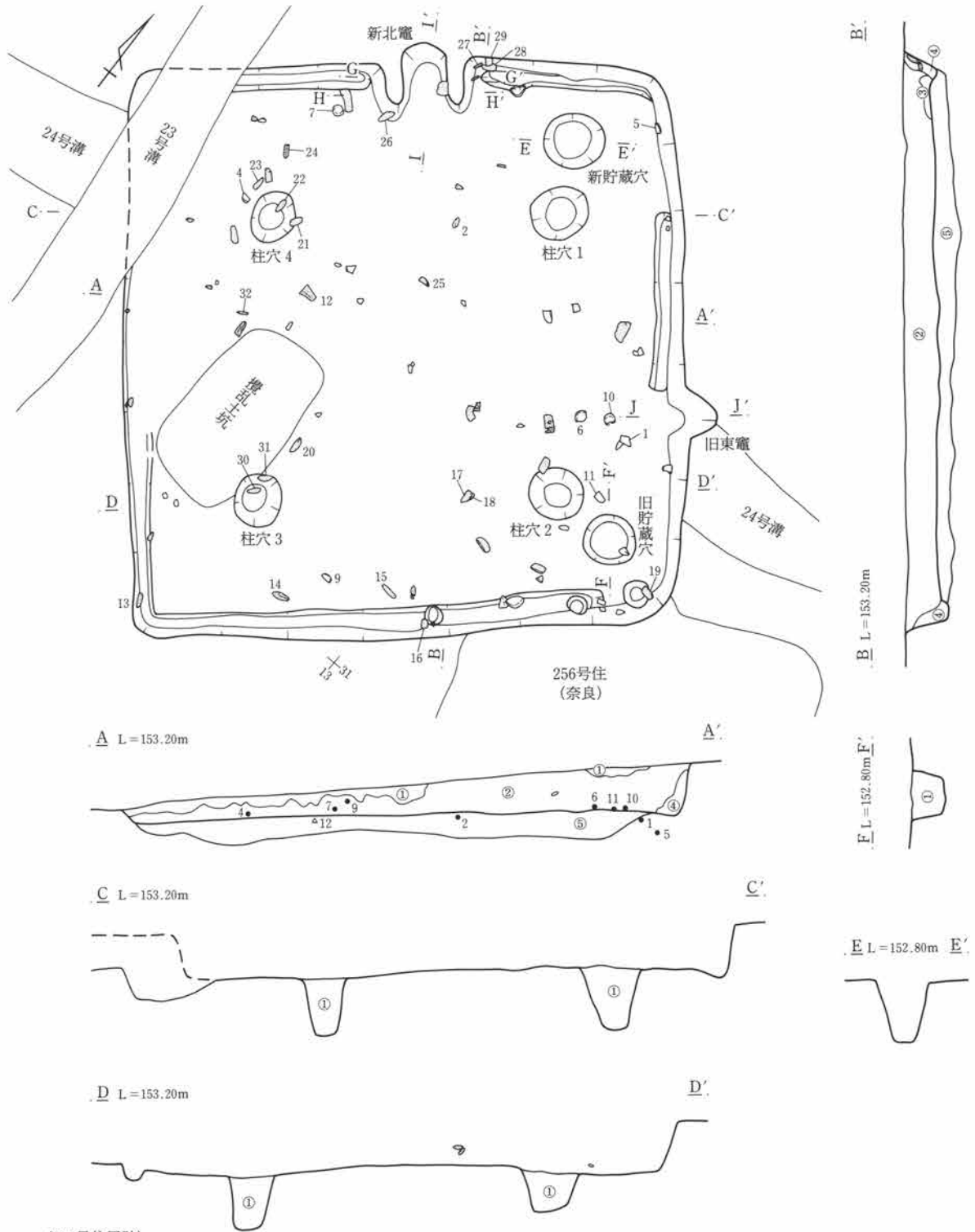
321号住居跡 (第213~215図、図版31・32・89・110・114)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、32-13・14グリッドに位置する。

概要 西側に向かって低くなるなだらかな傾斜面に位置し、東側の壁面は残りが良いが、西側は削られて残りは悪かった。南東部分で奈良時代の256号住居と重複しており、256号住居により覆土上面が削られていた。東西方向の24号溝により住居中央の覆土上面が、南北方向の23号溝により北西コーナーの床

第3章 古墳時代の遺構と遺物

下部分までが、南西部分は攪乱土坑により床面までが掘り込まれていた。竈は床面に袖部の残っている新北竈と床面の袖部は取り除かれていた旧東竈が造られていた。



(321号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くの焼土粒を含む粘性の強い層。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

貯藏穴・柱穴
①暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。

0 2m

第213図 321号住居跡実測図

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。新旧の竈の右側に貯蔵穴が、また床面には4本の柱穴が掘られていた。壁溝が多くの部分で掘られていた。

規模 東西5.48m、南北5.56mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で46cmである。新貯蔵穴は径62cm深さ53cm、旧貯蔵穴は径51cm深さ41cmである。柱穴1は径40cm深さ61cm、柱穴2は径55cm深さ52cm、柱穴3は径48cm深さ62cm、柱穴4は径43cm深さ65cmである。

遺物 多くの土師器の坏が出土している。

(新北竈)

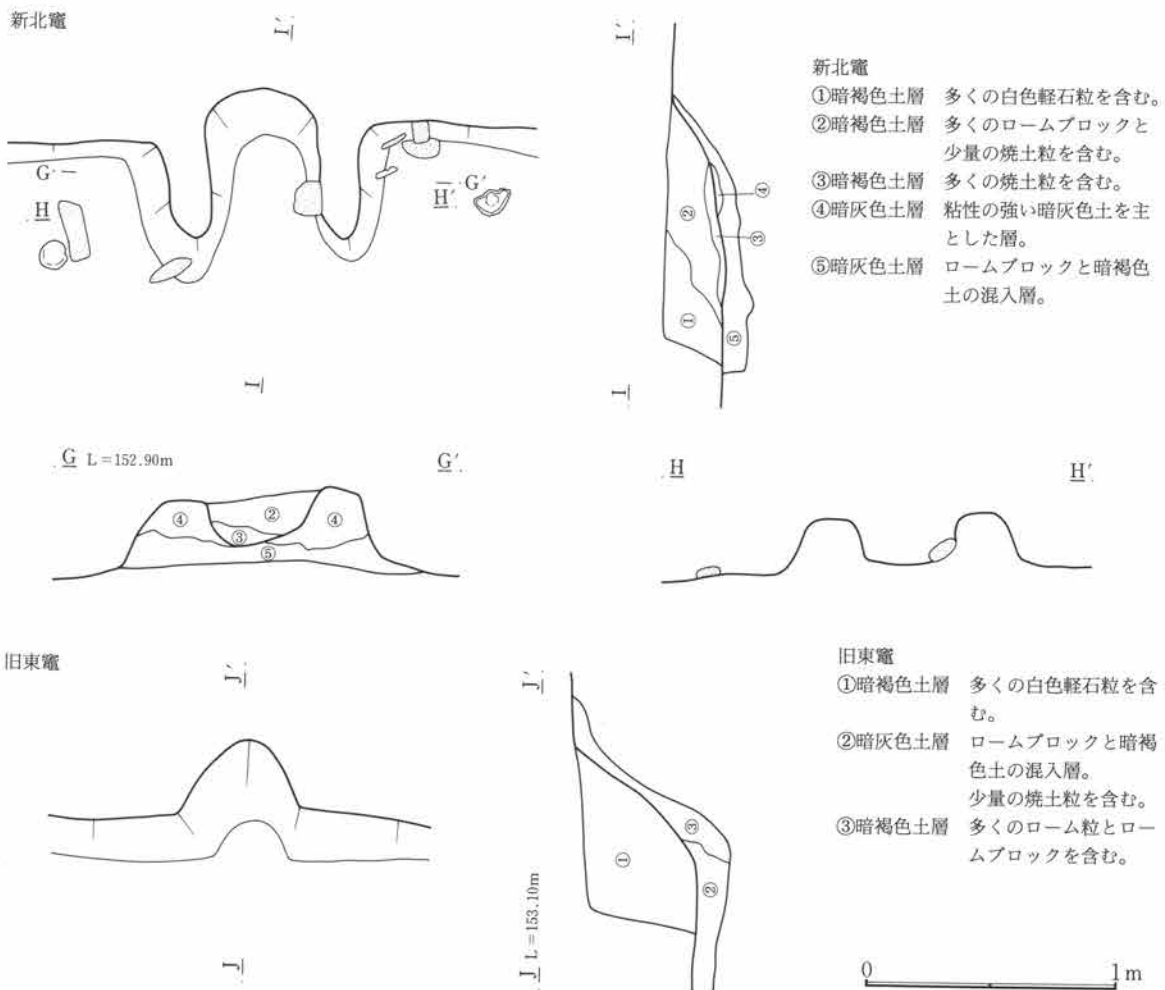
位置 住居東壁に造られており、袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 竈材として使用されたと考えられる焼けた石が、竈内と左袖外側部分から出土した。材質や形から天井石の破片と考えられる。袖石の有無は確認されなかった。袖部分は粘性の強い暗灰色土を中心に用いて造られていた。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向74cm、燃烧部幅44cmである。

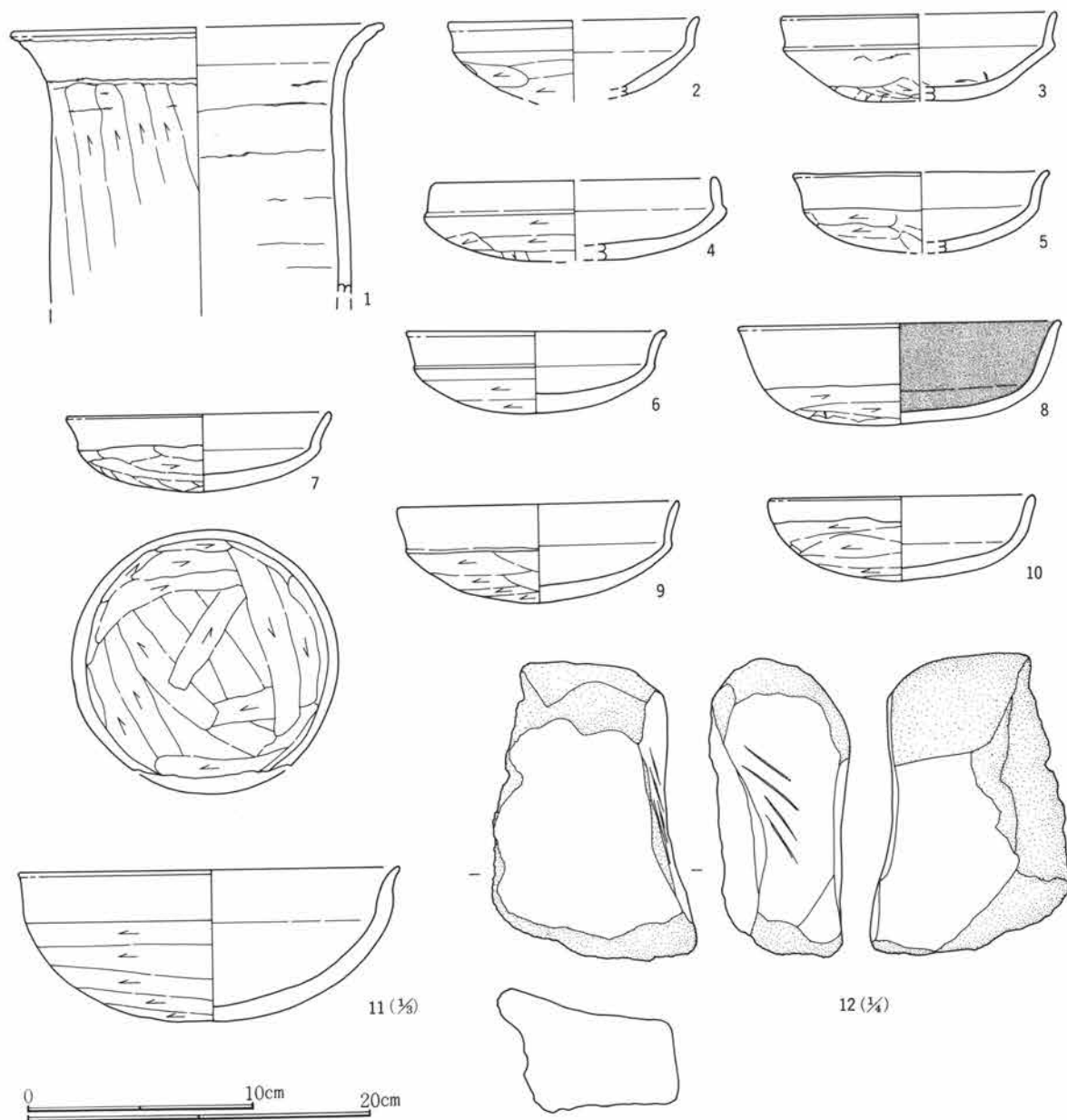
(旧東竈)

概要 東壁面の南寄りに造られていた。床面上に位置する袖部分や燃烧部はすべて取り除かれていた。壁面を掘り込んで造られた煙道部は残っていたが、その部分に焼土粒はほとんど出土しなかった。燃烧部のあった床下部分より少量の焼土粒が出土した。



第214図 321号住居跡新北竈・旧東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第215図 321号住居跡出土遺物実測図

321号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
215-1	土師器 甕	覆土 破片	口(22.0) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面 ナデにより器表面密。
215-2	土師器 坏	床面直上 破片	口(11.0) 高 — 底 —	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体が密で ある。黒斑認められず。
215-3	土師器 坏	覆土 破片	口(12.0) 高 3.7 底(12.0)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部中央へら削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内側底面に 多くのへらの圧痕あり。
215-4	土師器 坏	床面+5 1/2残存	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削りと思われる。へらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 底部の器表面の多くは剥離している。
215-5 89	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(11.2) 高 3.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。器表面の粗れは少なくへらの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 全体に少し歪んでいる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
215-6 89	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.4 高 3.5 底 丸底	①密、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。胎土が粉状を呈しており、へらの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 黒斑は全く認められない。
215-7 89	土 師 器 坏	床面+3 口縁部一部 欠損	口 11.6 高 3.4 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面にぶい橙色・外面橙色	底面へラ削り。へらの単位は明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ により器表面密。 光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。
215-8 89	土 師 器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2残存	口(14.2) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面黒色	底面へラ削り。砂粒の移動少なくへらの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内面の黒色は吸炭による。
215-9 89	土 師 器 坏	床面+9 1/2残存	口 12.4 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。胎土がやや粉状を呈し密なため、へら削りの 単位不明瞭。器表面全体に密。 黒斑は全く認められず、胎土がやや粉状を呈する。
215-10 89	土 師 器 坏	床面+10 ほぼ完形	口 11.8 高 3.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面弱いへら削り。砂粒の移動少なくへらの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
215-11 89	土 師 器 鉢	床面+7 完形	口 16.8 高 6.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
215-12 110	石 製 品 砥 石	床面直上	長 17.4 幅 10.0 厚 5.4 重 1590		砂岩。3面を砥石として使用している。1側面と底面は打ち 欠かされている。
13 114	こも編み石	床面直上	長 15.2 幅 7.0 厚 2.6 重 450		点紋絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない。片側の側面が大 きく欠損している。他の側面中央部が2ヶ所打ち欠かされている。
14 114	こも編み石	床面+9	長 16.2 幅 6.6 厚 5.7 重 870		点紋絹雲母石墨片岩。断面が三角形を呈すその一面が、大き く欠損している。
15 114	こも編み石	床面+7	長 16.0 幅 5.6 厚 3.6 重 590		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がゆるやかな凹状を呈す。
16 114	こも編み石	床面+14	長 10.0 幅 6.5 厚 3.7 重 380		絹雲母石墨片岩。欠けて短い石である。両側面とも凹状は認 められない。
17 114	こも編み石	床面+15	長 12.8 幅 6.5 厚 3.5 重 450		緑簾緑泥片岩。両側面中央部にごくわずかな凹凸部がみられ る。
18 114	こも編み石	床面+13	長 12.6 幅 5.5 厚 2.4 重 280		絹雲母石墨片岩。側面にわずかな凹状部が認められる。
19 114	こも編み石	床面+10	長 14.4 幅 7.1 厚 3.6 重 620		緑簾緑泥片岩。片側の側面が縦に欠損している。他の側面に わずかに凹凸部が認められる。
20 114	こも編み石	床面直上	長 15.7 幅 6.1 厚 4.0 重 600		絹雲母石墨片岩。肉厚の石である。片側の側面中央部に深い 凹状部が認められる。
21 114	こも編み石	床面直上	長 13.3 幅 6.5 厚 3.3 重 440		輝緑岩。一部が大きく欠損している。両側面にごくわずかに 凹凸部が認められる。
22 114	こも編み石	床面直上	長 18.5 幅 7.8 厚 3.6 重 740		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が打ち欠かれ、凹状 を呈す。
23 114	こも編み石	床面直上	長 13.1 幅 5.8 厚 3.3 重 390		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈 する。
24 114	こも編み石	床面直上	長 14.8 幅 5.5 厚 4.7 重 590		絹雲母石墨片岩。肉厚の石である。両側面とも明瞭な凹状部 は認められない。
25 114	こも編み石	床面+20	長 12.8 幅 5.4 厚 3.0 重 320		絹雲母石墨片岩。両側面とも凹状部は認められない。
26 114	こも編み石	床面+12	長 18.3 幅 6.2 厚 4.4 重 670		点紋緑泥片岩。細長い肉厚の石である。片側の側面中央部に 幅広く凹凸部が認められる。
27 114	こも編み石	床面+8	長 17.7 幅 6.9 厚 2.6 重 540		緑簾緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部に凹凸部が認 められる。
28 114	こも編み石	床面+9	長 15.3 幅 7.7 厚 4.0 重 780		緑簾緑泥片岩。断面は三角形に近い肉厚の石である。片側の 側面に打ち欠いたような凹状部がある。
29 114	こも編み石	床面+14	長 15.1 幅 6.9 厚 3.6 重 710		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状を呈する。
30 114	こも編み石	覆土	長 14.9 幅 5.7 厚 3.6 重 470		緑簾緑泥片岩。断面は三角形に近い石である。側面に明瞭な 凹状部は認められない。
31 114	こも編み石	覆土	長 14.2 幅 7.2 厚 2.6 重 500		緑簾緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部に幅広く凹凸 部が認められる。
32 114	こも編み石	覆土	長 14.8 幅 4.2 厚 2.0 重 230		絹雲母石墨片岩。細長い石である。片側の側面中央に凹凸部 が認められる。

325号住居跡（第216・217図、図版32・90）

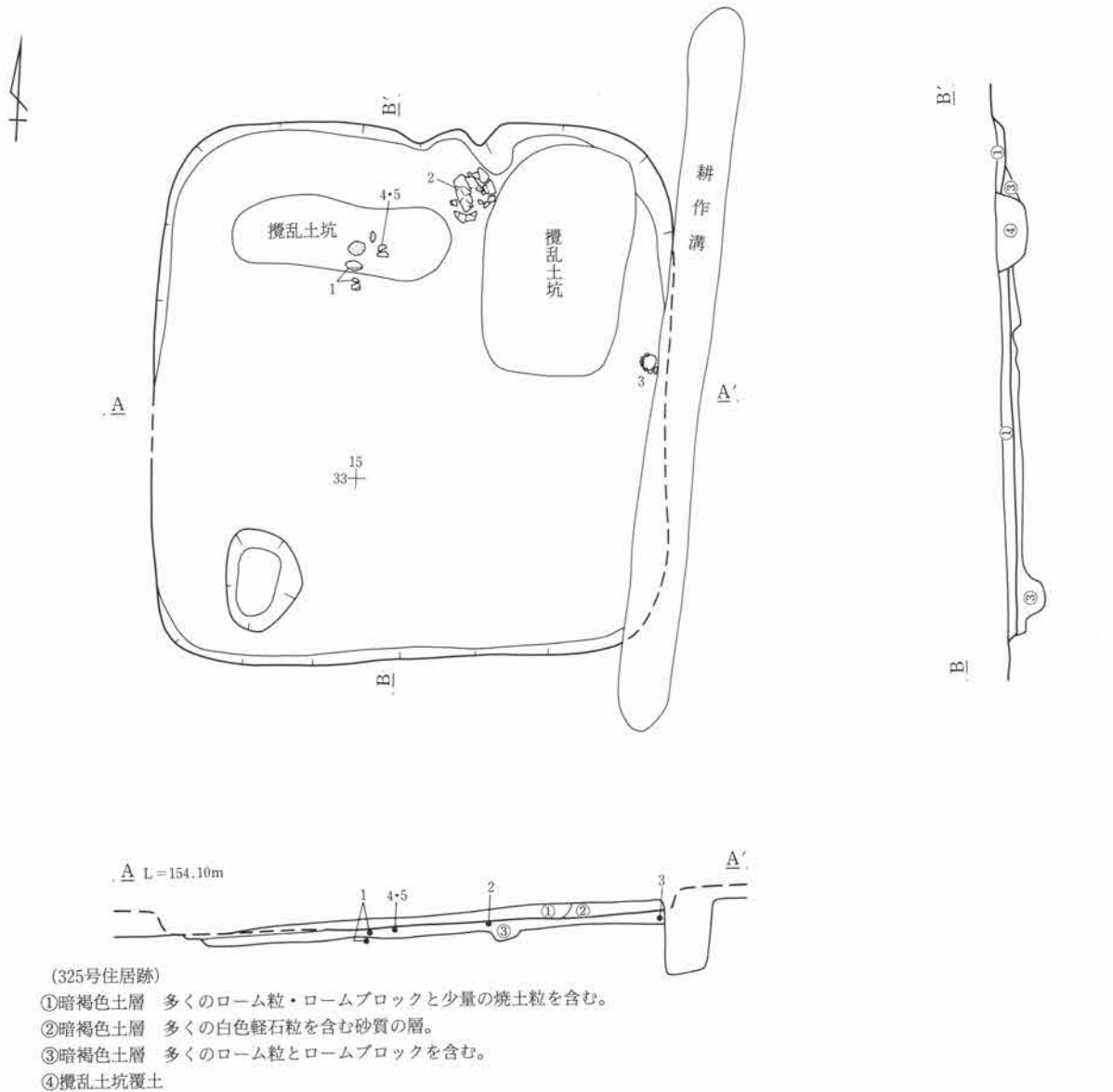
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、34-15・16グリッドに位置する。

概要 残りの悪い住居であり覆土の多くは残っていなかった。西側の一部の床面や壁面は残っていなかった。東壁の多くは耕作溝に削られていた。住居内にも2つの攪乱土坑が掘られており、南西の小穴も本住居に伴うものか不明である。竈の所在について詳細に調査したが、焼土粒の出土もほとんど無く確認できなかった。遺物の出土状態と住居プランから、北壁面中央部に造られていた可能性を考えたい。

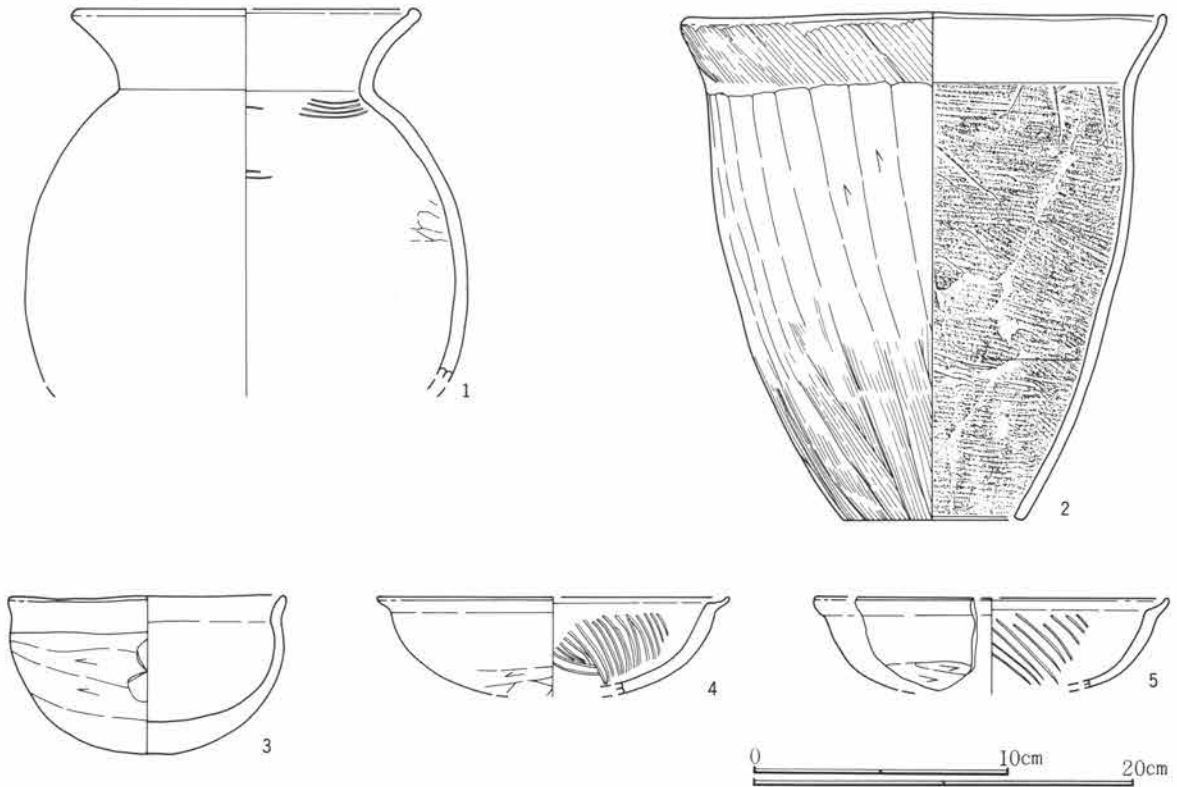
構造 良好な床面は確認できなかったが、多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.38m、南北4.63mである。壁高は残りの良い北東壁面コーナーで14cmである。

遺物 2の甑は内面に刷毛目を持つ出土例の少ない土器である。



第216図 325号住居跡実測図



第217図 325号住居跡出土遺物実測図

325号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
217-1 90	土師器 壺	床面-5 口縁部1/2 胴上部1/2	口(18.6) 高— 底—	①粗、3~4mmの片岩粒と2mm前後の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面でいねいなヘラナデにより器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑認められない。ていねいなつくりである。
217-2 90	土師器 甑	床面-5 口縁部3/4 胴部ほぼ完	口 25.8 高 25.7 底 9.6	①やや粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒色	胴部外面下半刷毛目。上半ヘラ削り。口縁部刷毛後横ナデ。胴部内面全体刷毛目。刷毛後ナデはなし。胴下端ヘラ削り。刷毛で全面整形後ヘラ削りと横ナデ。胎土は在地。
217-3 90	土師器 坏	床面-5 1/2残存	口 11.1 高 6.2 底 丸底	①密、砂粒はほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色・一部黒色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内側の表面が斑点状に剥離している。
217-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底部下半ヘラ削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。内面に多くのヘラ磨き。特に硬質の質感を持つ。
217-5	土師器 坏	床面+5 小破片	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	底部下半ヘラ削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。内面に多くのヘラ磨き。特に硬質の質感を持つ。

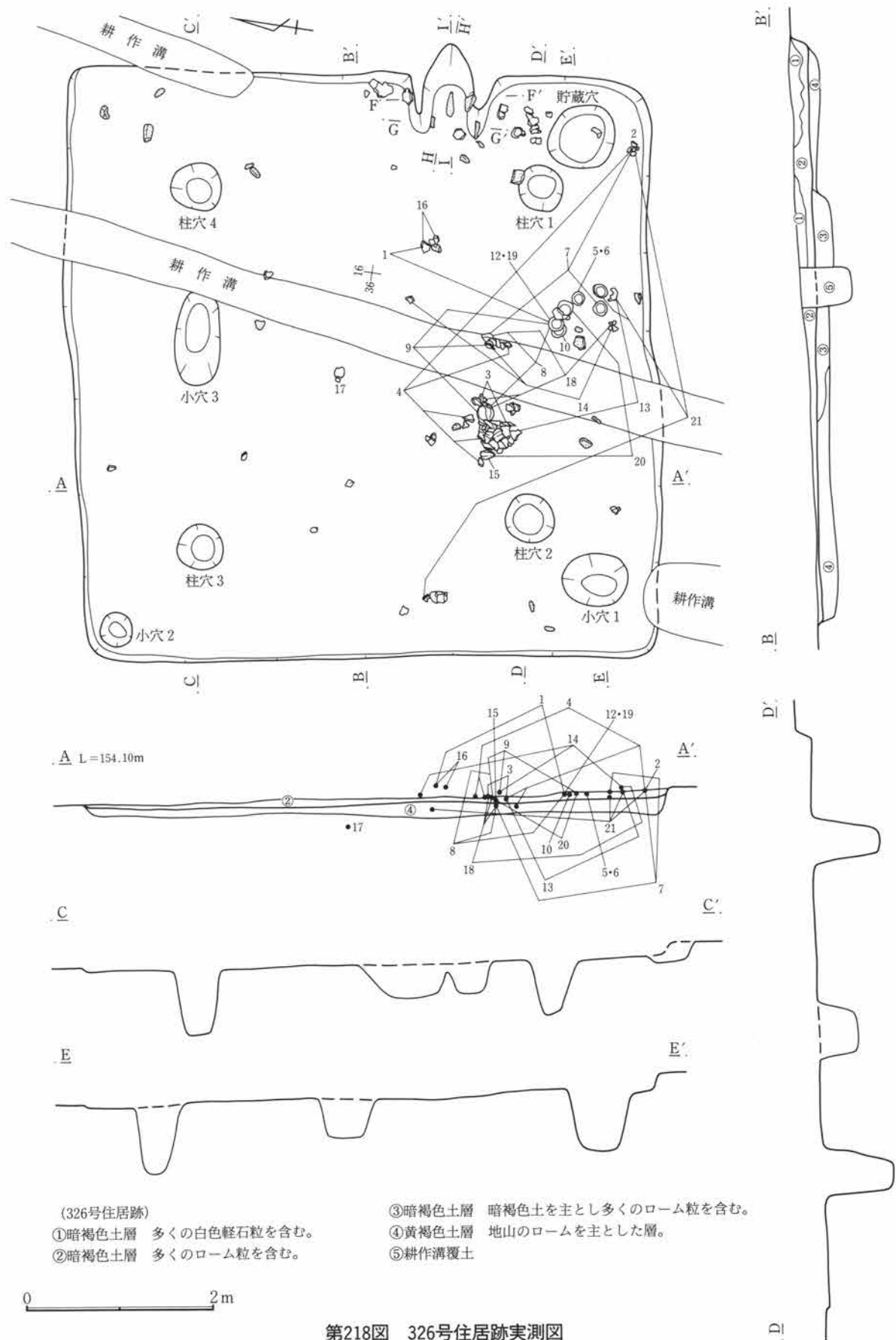
326号住居跡 (第218~222図、図版32・33・90・91)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、36・37-16・17グリッドに位置する。

概要 耕作溝により壁面や床面の一部が掘り込まれている。柱穴2の南西部に小穴1が、柱穴3の北西部に小穴2が掘られている。また柱穴3と4の間に小穴3が掘られているが、本住居に伴うものか不明である。

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



- (326号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ③暗褐色土層 暗褐色土を主とし多くのローム粒を含む。
 - ④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
 - ⑤耕作溝覆土

第218図 326号住居跡実測図

規模 東西6.18m、南北6.22mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で25cmである。貯蔵穴は径75cm深さ56cm、柱穴1は径54cm深さ63cm、柱穴2は径48cm深さ74cm、柱穴3は径50cm深さ77cm、柱穴4は径47cm深さ65cmである。小穴1は径72cm深さ76cm、小穴2は径33cm深さ47cm、小穴3は45×92cmの楕円形で深さ41cmである。

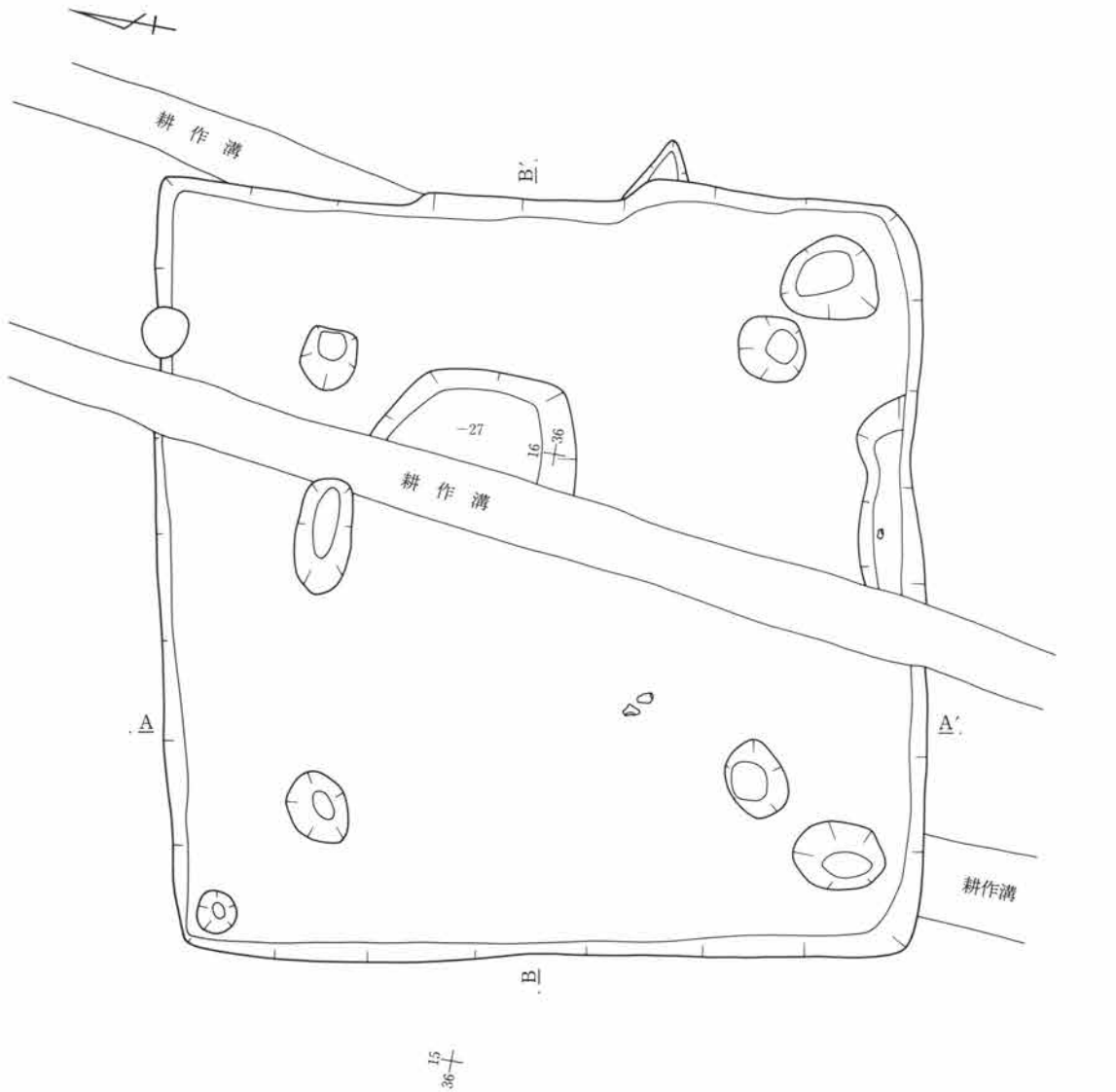
遺物 南側中央の床面付近から、多くの土師器の甕や甔や坏がまとまって出土している。

(竈)

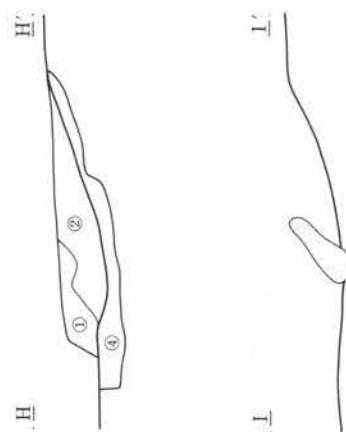
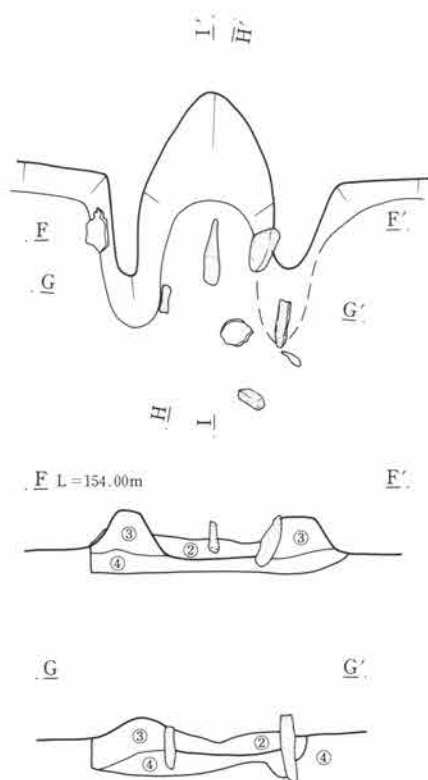
位置 住居東壁の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 左右の袖部に細長い袖石が、燃烧部の右壁面に1個の石が側壁のように埋められていた。また燃烧部のほぼ中央に支脚石が、煙道部方向に倒れかかった状態で出土した。天井石は出土しなかったが、石を多く用いた竈であった。燃烧部全体に他の住居の竈に見られないほど多くの焼土粒が残っていた。

規模 煙道方向98cm、燃烧部幅43cmである。



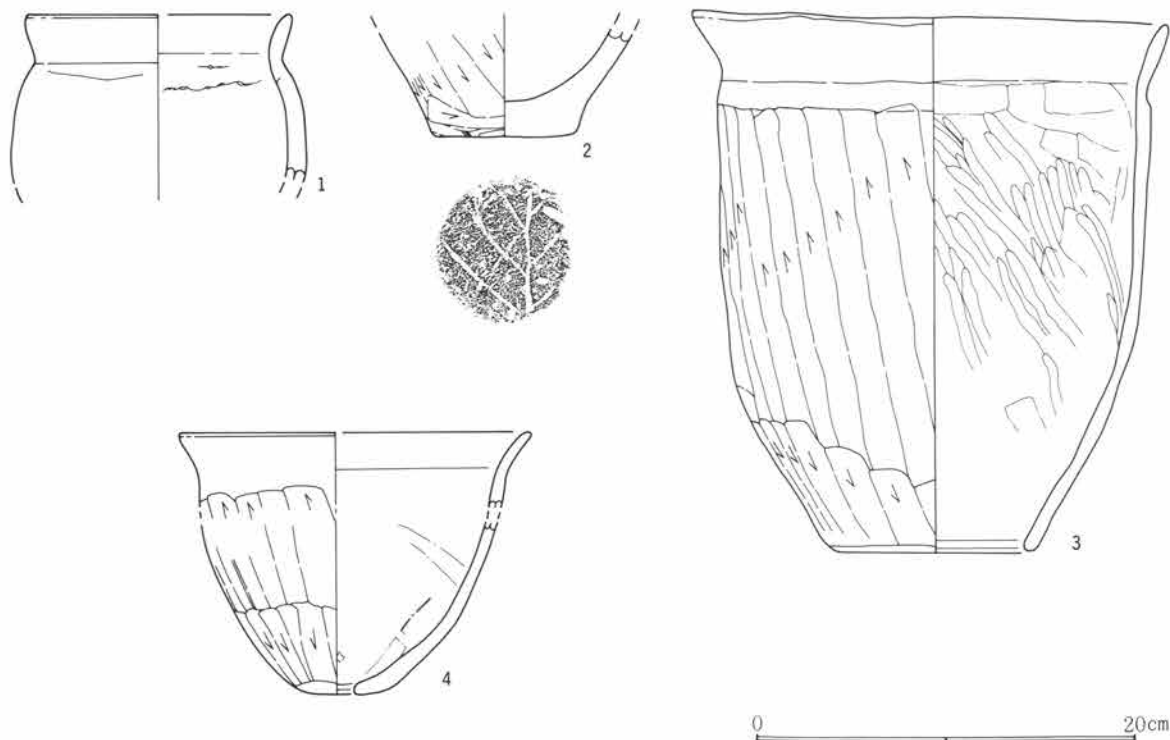
第219図 326号住居跡床下実測図



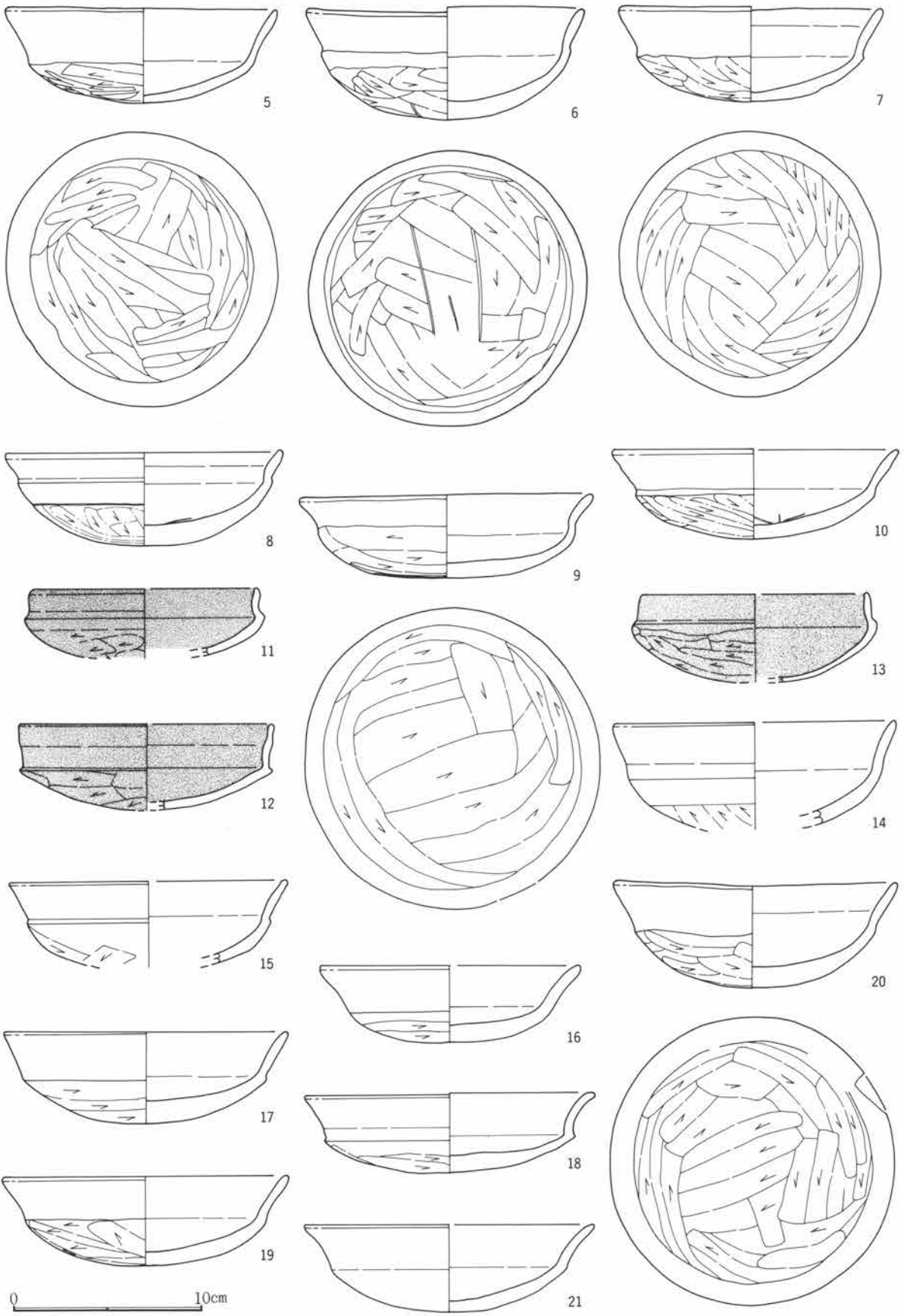
- 竈
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②赤色土層 多量の焼土層。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ④褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m

第220図 326号住居跡竈実測図



第221図 326号住居跡出土遺物実測図(1)



第222図 326号住居跡出土遺物実測図(2)

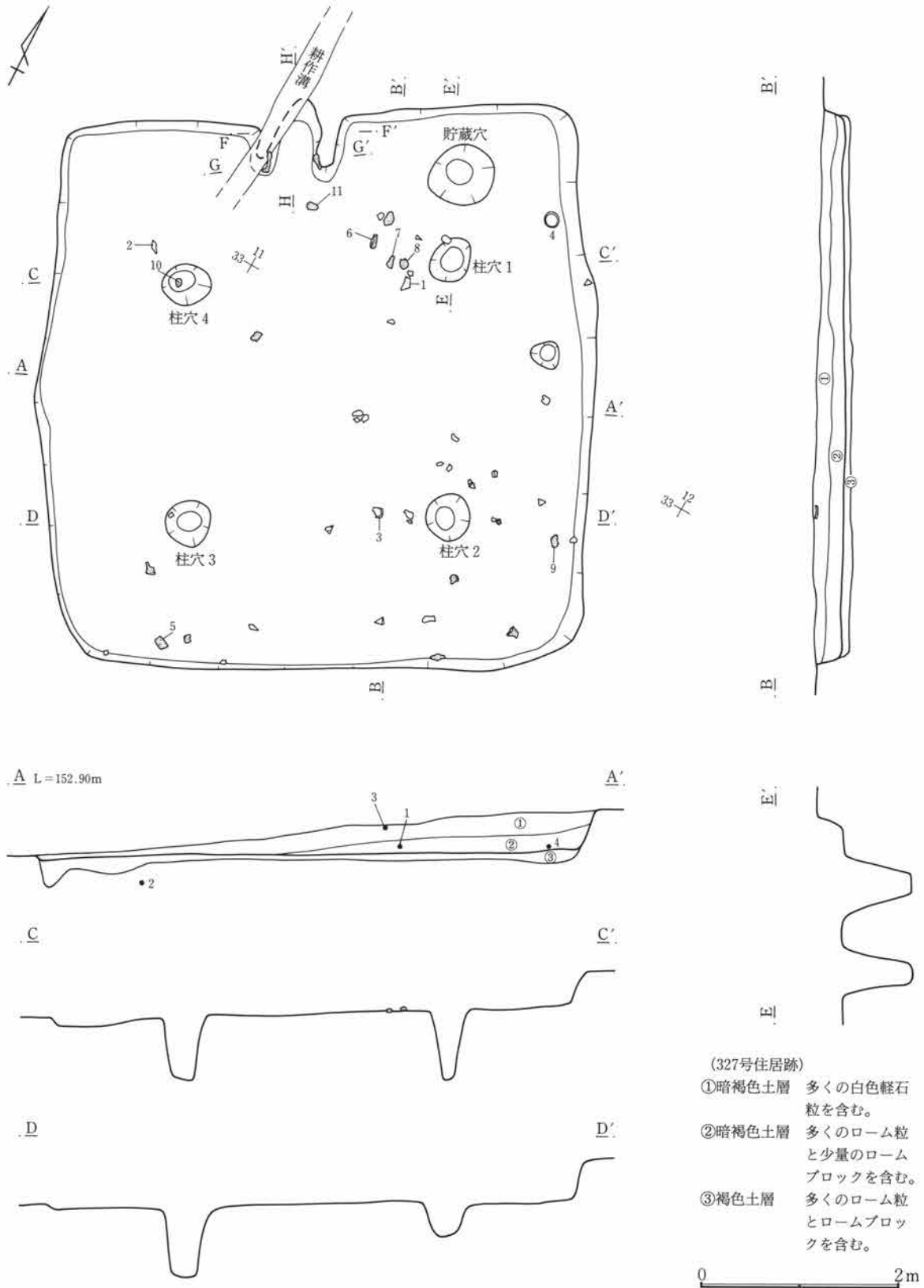
第3章 古墳時代の遺構と遺物

326号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
221-1	土 師 器 小 型 甕	床面+4 口縁部~肩 部1/2弱残存	口(14.2) 高 一 底 一	①粗、2~4mmの多くの砂粒と 片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬 質 ③にぶい黄橙色・一部黒色	胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 全体に歪んでいる。
221-2	土 師 器 甕	床面+1 胴下半2/3 底部完形	口 一 高 一 底 7.6	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面木葉痕。胴部下半ヘラ削り。器表面は特に粗い。内面ナ デ。底部の器内が厚い。
221-3 90	土 師 器 甕	床面+1 胴一部欠損 ほぼ完形	口 25.4 高 28.4 底 10.2	①やや粗、2~3mmの砂粒を多 く、5mmの片岩粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 口縁部横ナデ。内面ヘラ磨きにより光沢を持つ。 均整のとれた甕である。
221-4	土 師 器 小 型 甕	床面-8 口縁~胴1/3 底部完形	口(18.8) 高(13.8) 底 4.8	①粗、2~3mmの砂粒を大量に 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナ デにより器表面密。 胴部外面に多くの砂粒が目立つ。穴径1.8cm。図上復元
222-5 90	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 14.2 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの部分がわずかに凹状を呈する。 口縁部横ナデ。内側底面に多くのヘラの圧痕。 黒斑は全く認められない。
222-6 90	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 14.6 高 5.8 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面ヘラナデ。器表面が密でヘラの単位は明瞭でない。ヘラ ナデの一部は光沢を持つ。 底部外面の一部に吸炭による黒色部分がわずかに認められる。
222-7 90	土 師 器 坏	床面+2 床面-8 完形	口 13.8 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの部分がわずかに凹状を呈する。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 器表面の一部が斑点状に剝離している。
222-8 90	土 師 器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 14.6 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面下半ヘラナデ、上半ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 内側底面中央にヘラの圧痕あり。 黒斑全く認められない。胎土は粉状でない。
222-9 90	土 師 器 坏	床面+4 完形	口 15.4 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側の器表面の多くが斑点状に剝離している。 黒斑は全く認められない。
222-10 90	土 師 器 坏	床面+1 ほぼ完形	口 15.1 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器 表面密。 底面の整形方法がやや異質。
222-11	土 師 器 坏	覆土 破片	口(11.8) 高・底一	①密、砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内外とも器表面密。 口縁部外面~内側底面黒漆。断面にぶい橙色。
222-12 90	土 師 器 坏	床面+4 1/2残存	口(13.4) 高 一 底 一	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。稜は鋭角で明瞭。 口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭。
222-13 90	土 師 器 坏	床面+3 1/2残存	口(11.8) 高 一 底 一	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③断面明赤褐色・表面黒色	底面ヘラナデ。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 底部外面を含めた表面全体に黒漆が塗られている。
222-14	土 師 器 坏	床面+7 1/2残存	口(12.6) 高・底一	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 表面全体がわずかに剝離している。
222-15	土 師 器 坏	床面+3 破片	口(14.6) 高・底一	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。 内面全体が剝離している。
222-16 90	土 師 器 坏	床面+8 口縁部1/4 底部1/2残存	口(13.2) 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面が斑点状に剝離している。
222-17 91	土 師 器 坏	床面+7 1/2残存	口 15.0 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なくヘラの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデ。
222-18 91	土 師 器 坏	床面+7 1/2残存	口 15.2 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内側の器表面が剝離している。
222-19 91	土 師 器 坏	床面+4 1/2残存	口 15.0 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。ヘラの単位明瞭でない。 内面ナデにより器表面密。 黒斑認められない。
222-20 91	土 師 器 坏	床面+3 完形	口 14.8 高 5.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ。ナデの部分がわずかに凹状を呈する。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
222-21 91	土 師 器 坏	床面+1 1/2残存	口(15.2) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ナデ。一部ヘラ削りの痕跡が残るが単位不明。 口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面が剝離している。

327号住居跡 (第223~225図、図版33・91・114)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、33・34-11グリッドに位置する。



第223図 327号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

概要 覆土上面を多くの耕作溝により掘り込まれており、竈の左袖から煙道部にかけても一部が掘り込まれている。住居周辺には新しい多くの小穴が掘られており、本住居もそれらの小穴により数多く掘り込まれている。

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。東壁中央部付近の床面に小穴が1本掘られていた。

規模 東西5.42m、南北5.68mである。壁高は残りの良い東壁面部分で42cmである。貯蔵穴は径65cm深さ71cm、柱穴1は径38cm深さ71cm、柱穴2は径43cm深さ33cm、柱穴3は径43cm深さ74cm、柱穴4は径43cm深さ70cmである。

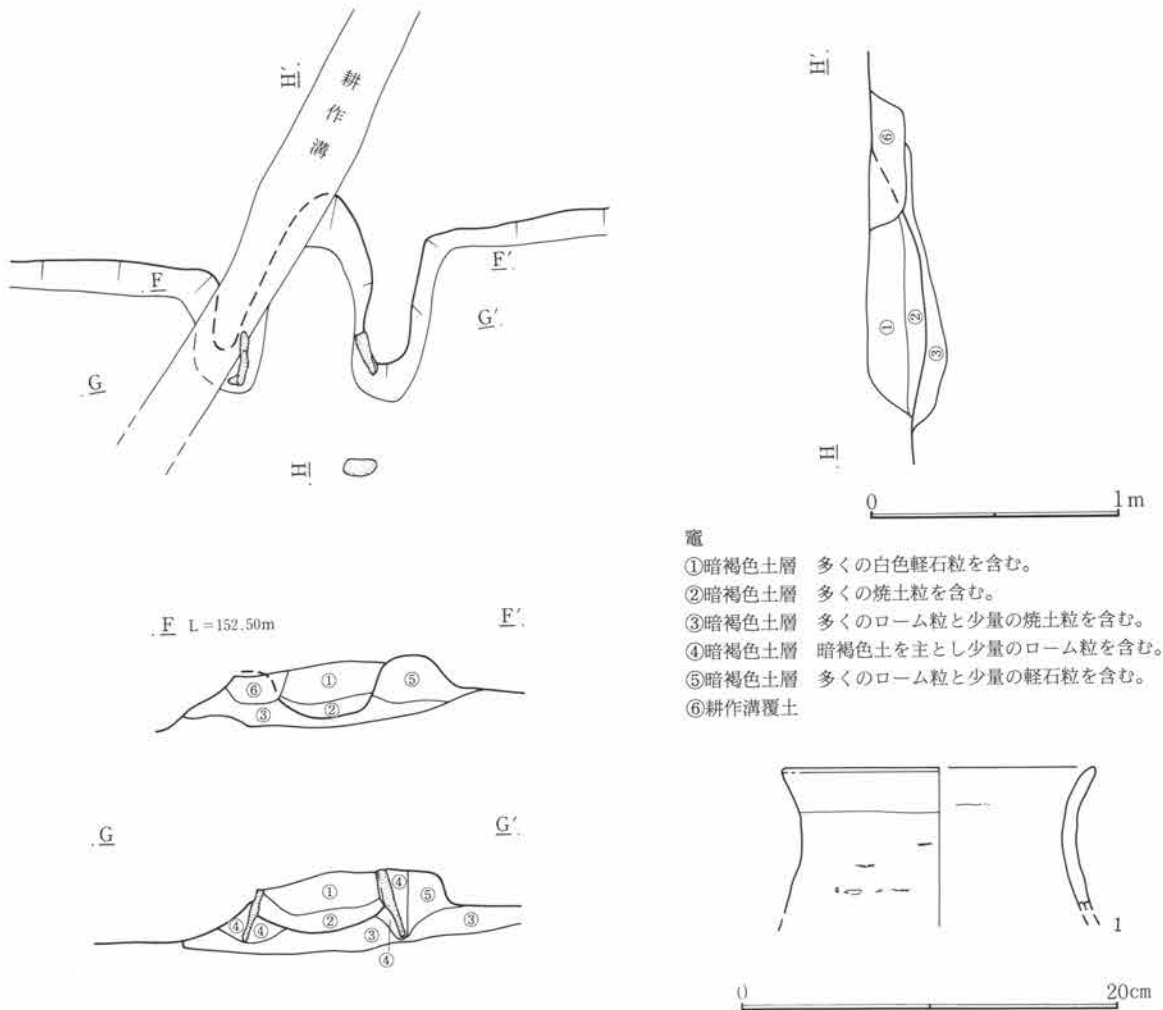
遺物 破片の出土は多いが、図示できた遺物は4点と少量である。

(竈)

位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

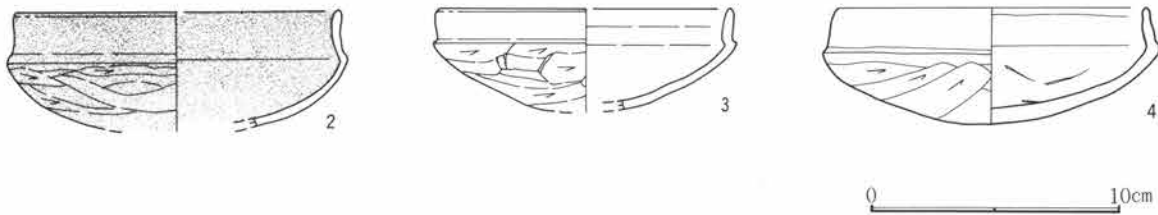
構造 左袖から煙道部の一部は耕作溝により上部が掘り込まれていた。袖や燃烧部は残っているが、良好ではなかった。右の袖部に細長い袖石がほぼ据えられた状態で出土した。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向85cm、燃烧部幅46cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 暗褐色土を主とし少量のローム粒を含む。
 - ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の軽石粒を含む。
 - ⑥耕作溝覆土

第224図 327号住居跡竈・出土遺物実測図



第225図 327号住居跡出土遺物実測図

327号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
224-1	土師器 甕	床面+11 小破片	口(17.0) 高— 底—	①粗、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい橙色	胴外面ナデ。輪積痕がわずかに残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
225-2 91	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.4) 高— 底—	①密 ②酸化焰、硬質 ③表面暗褐色・断面明赤褐色	底面ヘラナデ。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部外面を含めた表面全体に黒漆が塗られている。
225-3 91	土師器 坏	床面+25 1/2残存	口(12.2) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面の黒色部分は吸炭による。
225-4	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.3 高 4.7	①密 ②酸化焰、硬質 ③内外面とも橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕あり。
5 114	こも編み石	床面+10	長 12.8 幅 7.5 厚 2.8 重 500		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面にわずかな凹状部が認められる。
6 114	こも編み石	床面直上	長 13.7 幅 5.3 厚 4.0 重 430		輝緑岩。断面は三角形を呈し、片側の側面に粗い凹凸部が認められる。
7 114	こも編み石	床面直上	長 11.7 幅 6.4 厚 2.3 重 340		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に、打ち欠かれたような凹状を呈し、他の側面は細かな凹凸部が認められる。
8 114	こも編み石	床面-21	長 11.8 幅 6.7 厚 2.6 重 310		点紋絹雲母石墨片岩。折れた石で不定形を呈す。側面に明瞭な凹状部は認められない。
9 114	こも編み石	床面+1	長 12.4 幅 6.2 厚 2.8 重 320		絹雲母石墨片岩。両側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
10 114	こも編み石	柱穴内-35	長 10.0 幅 5.5 厚 2.6 重 270		絹雲母石墨片岩。短くやや偏平な石である。片側の側面が緩やかな凹状を呈している。
11 114	こも編み石	床面+16	長 13.0 幅 6.1 厚 3.3 重 460		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面が縦長に凹状を呈し、他の側面は細かい凹凸が認められる。

328号住居跡 (第226・227図、図版33・91)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、30・31-12グリッドに位置する。

概要 他の4軒の住居と重複している。南側に位置する古墳時代の259号住居を掘り込み、西・北東・南東部分を奈良時代の252・322・253号住居により床下部分まで掘り込まれていた。重複していない部分も残りが悪く、住居範囲も充分確認できない住居であった。新旧関係は259(古墳時代)→328(古墳時代)→252・253・322(奈良時代)号住居である。

構造 床面の残りは悪かったが、多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。貯蔵穴と柱穴はいずれも位置が少し不自然である。

規模 東西推定4.40m、南北4.80mである。壁高は残りの良い北壁面部分で37cmである。貯蔵穴は径82cm深さ33cm、柱穴1は径48cm深さ53cm、柱穴2は径46cm深さ54cm、柱穴3は径38cm深さ59cm、柱穴4は径58cm深さ43cmである。

遺物 竈内から2点の土師器の甕が出土している。

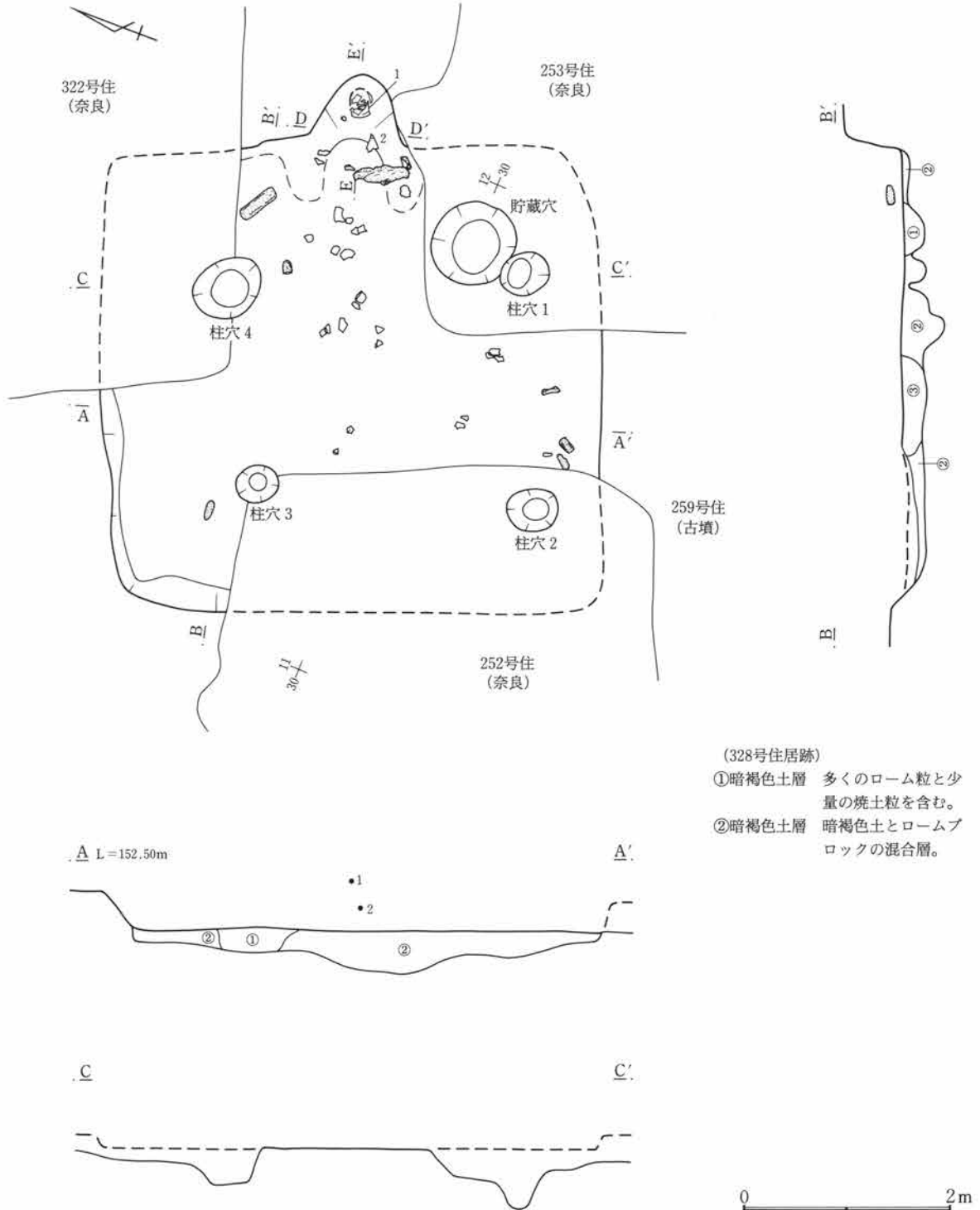
(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

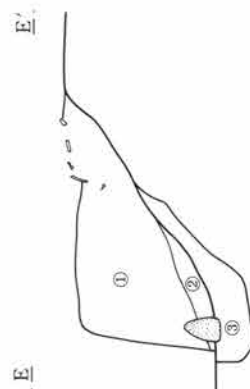
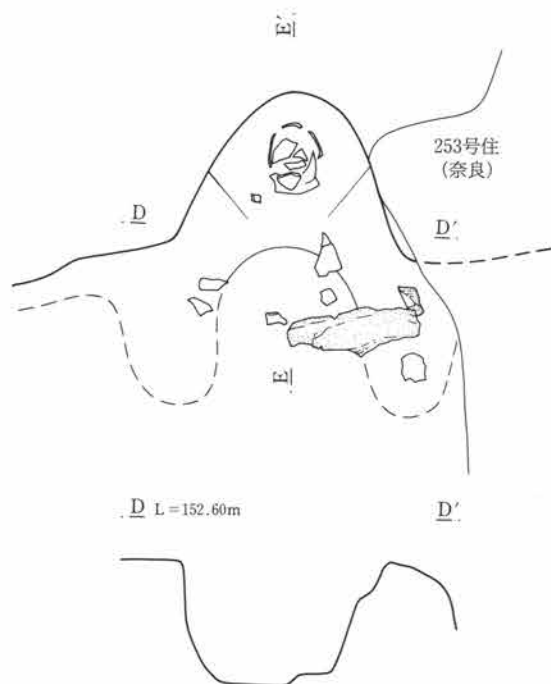
第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 天井石が燃焼部から右袖部分にかけての床面に落ちたような状態で出土した。右側の袖はその時はすでに取り外されていたと考えられる。袖石はなく、左側の袖も残っていなかったため、左右の袖部分は壊されていた可能性が考えられる。煙道部に土師器の甕が口縁部を下にして煙突として使用されていた。燃焼部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向不明、燃焼部幅推定56cmである。



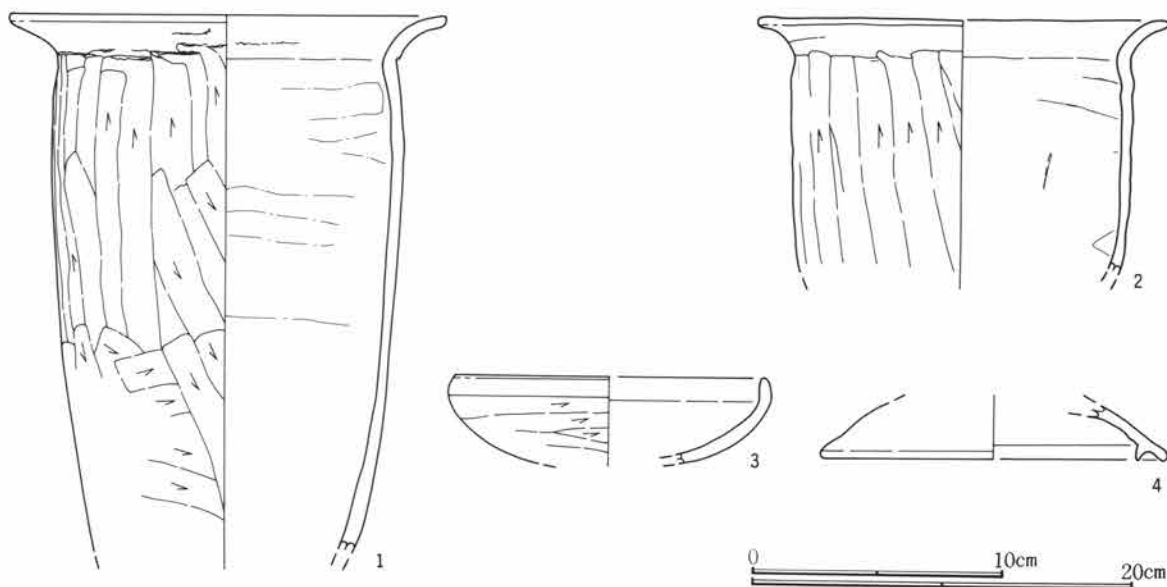
第226図 328号住居跡実測図



竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m



第227図 328号住居跡竈・出土遺物実測図

328号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
227-1 91	土師器 甕	竈内 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴上 部 $\frac{1}{5}$ 下部 $\frac{1}{6}$ 底	口 23.2 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。砂粒の移動は少ない。頸部にヘラの削痕が残る。
227-2	土師器 甕	竈内 破片	口(22.3) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③におい赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が非常に粗い。内面ナデにより器表面密。
227-3	土師器 坏	覆土 破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
227-4	須恵器 蓋	竈内 $\frac{1}{6}$ 残存	高 — 高 — 口(13.8)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面におい黄橙色	カエリを持つ蓋である。カエリと口縁端部の高さは同じ。天井部右回転ヘラ削り。

330号住居跡 (第228～230図、図版34)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、15・16-5グリッドに位置する。

概要 西側が西谷川に接する台地の西端に位置し、住居の西端は川に伴う谷により削り取られて残っていなかった。本住居跡は同じ古墳時代の332号住居と平安時代の331号住居と北壁部分で重複しており、331号住居によりその部分は大きく掘り込まれている。新旧関係は332→330→331号住居である。

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。小穴は多く掘られていたが、柱穴は掘られておらず、貯蔵穴も確認することはできなかった。

規模 東西不明、南北4.69mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で26cmである。

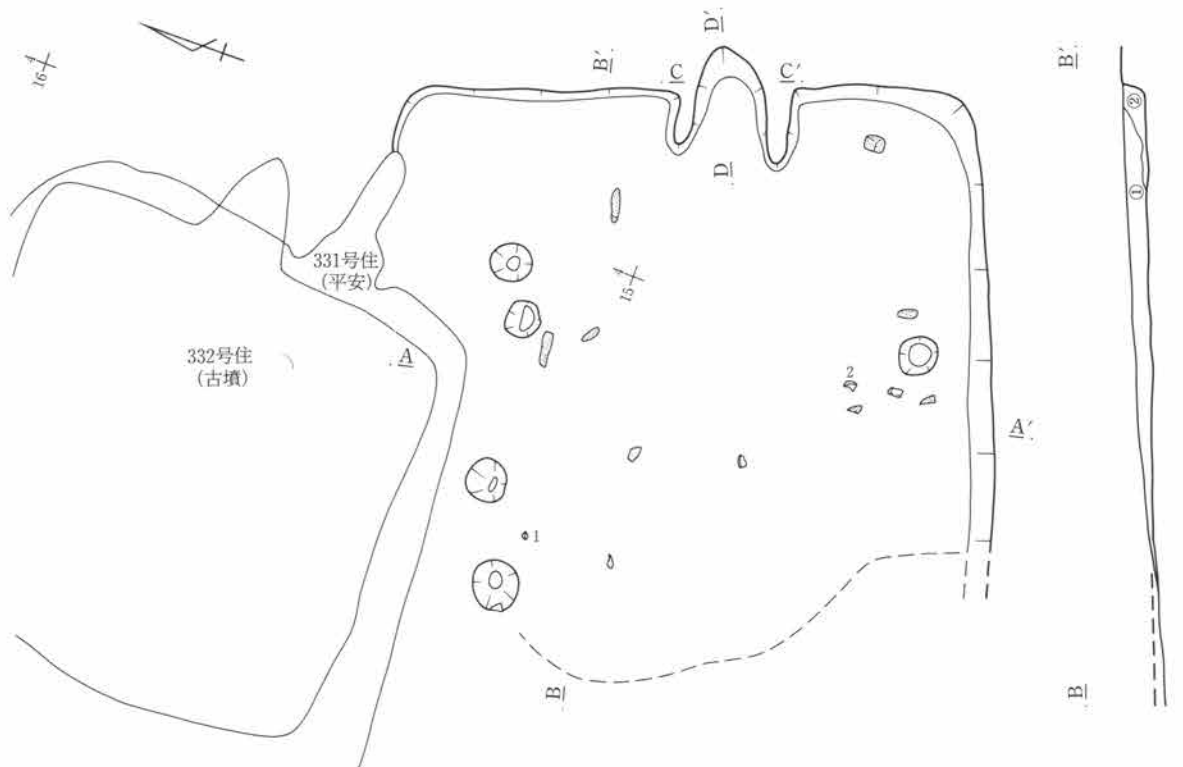
遺物 出土量が少なく、図示した2点の土師器の坏の他は破片が19片である。

(竈)

位置 住居東壁の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

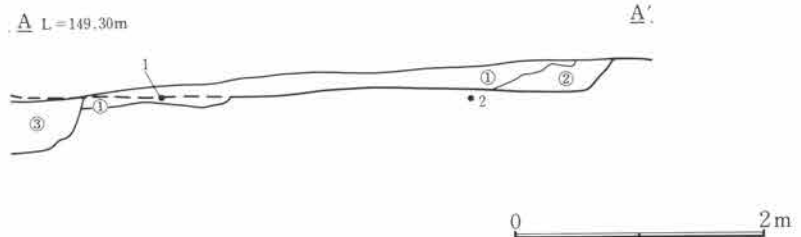
構造 上部の多くは削り取られている残りの悪い竈であり、床面上に位置する袖の残りも悪い。竈内より石等の出土は認められなかった。焼土粒の出土も少なかった。

規模 煙道方向98cm、燃烧部幅62cmである。

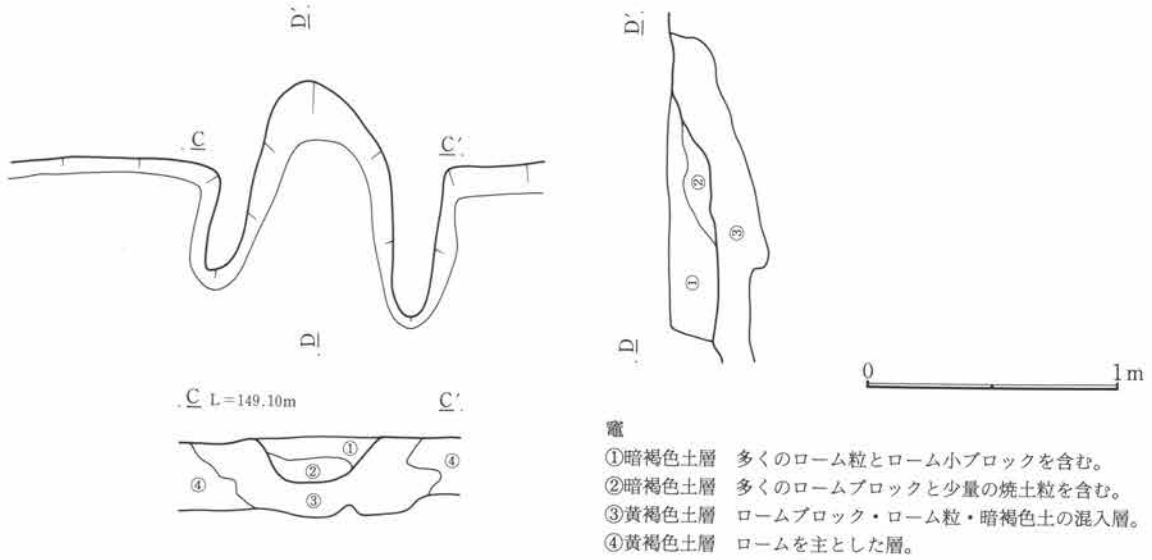


(330号住居跡)

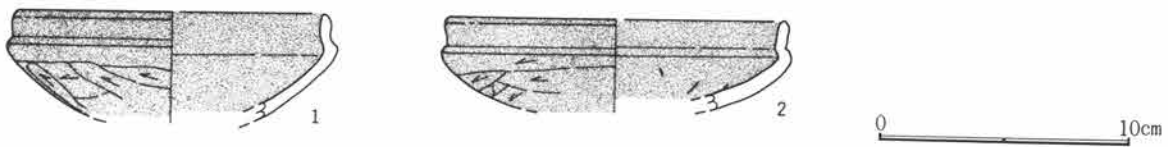
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
- ②暗黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ③331・332号住居覆土



第228図 330号住居跡実測図



第229図 330号住居跡竈実測図



第230図 330号住居跡出土遺物実測図

330号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
230-1	土師器 杯	床面+6 破片	口(12.4) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面におい橙色・一部黒色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部外面～内側底面黒漆か。
230-2	土師器 杯	床面+4 小破片	口(13.8) 高— 底—	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面におい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動がなく器表面密。口縁部横ナデ。 表面の一部が剝離している。 口縁部外面～内側底面黒漆か。底部外面吸炭により黒色。

332号住居跡 (第231・232図、図版34・91)

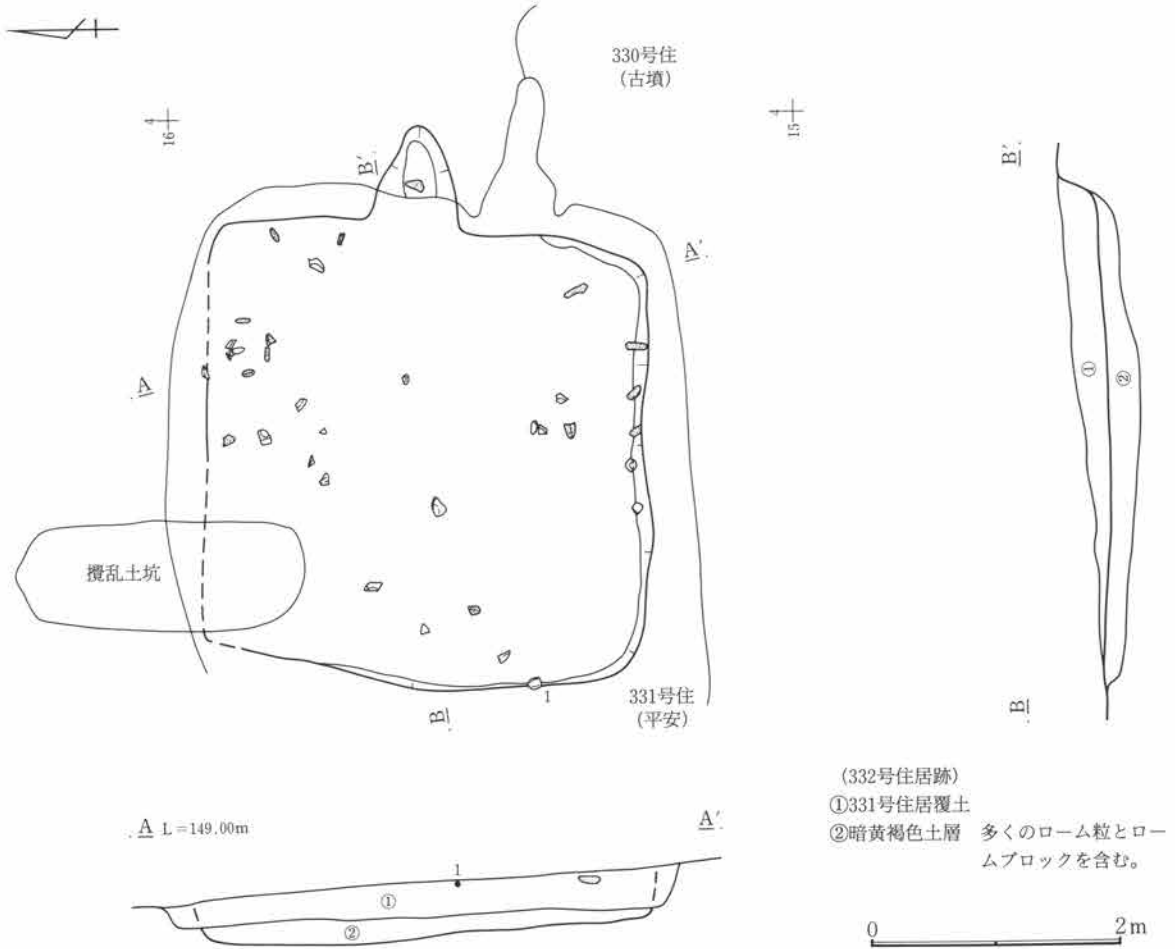
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、16-4グリッドに位置する。

概要 西側が西谷川に接する台地の西端に位置し、他の2軒の住居と重複している。本住居跡の南東部分の覆土上面を、同じ古墳時代の330号住居が掘り込み住居が造られている。さらに一回り大きな平安時代の331号住居が真上に重なって造られている。新旧関係は332→330→331号住居である。本住居の掘り込みが最も深いため、住居範囲の確認は可能であったが、残りは悪かった。竈は東壁面を掘り込んで造られているが、燃焼部や焚口部分は331号住居により削り取られて残っていなかった。竈内より石が1個出土している。

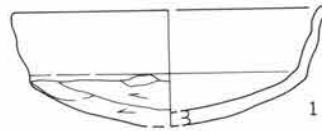
構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られており、表面に少量の焼土粒が認められた。柱穴は掘られていなく、貯蔵穴も確認することはできなかった。

規模 東西3.62m、南北3.49mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナーで40cmである。

遺物 出土量が少なく、図示した土師器の杯の他は破片が50片である。



第231図 332号住居跡実測図



第232図 332号住居跡出土遺物実測図

332号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
232-1 91	土師器 坏	床面+3 1/2残存	口(12.4) 高— 底丸底	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全く認められない。胎土が粉状を呈する。

333号住居跡 (第233~235図、図版34・91・114)

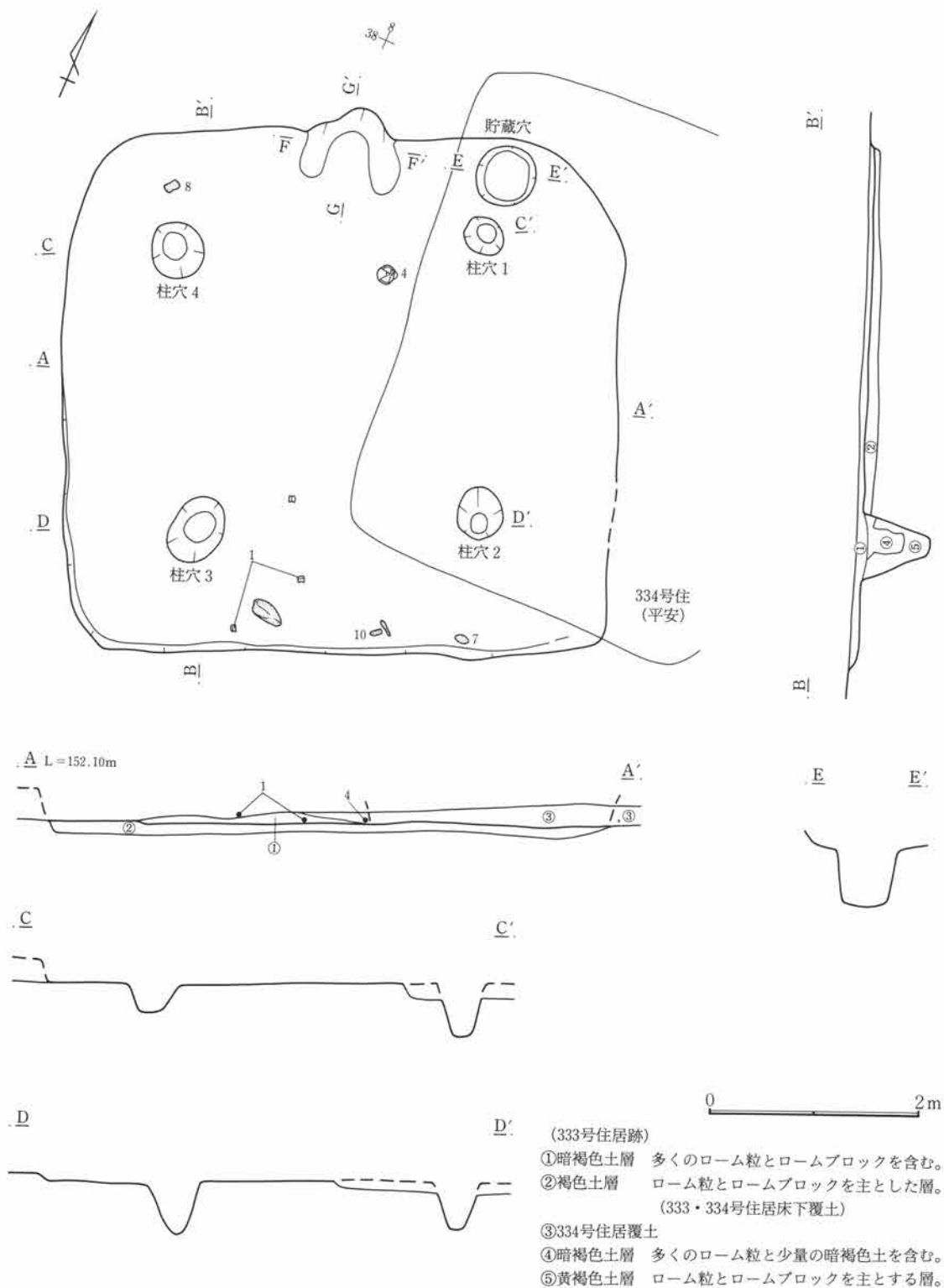
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、38-8・9グリッドに位置する。

概要 住居の残りが全体に悪く、南側の壁面は少し残っているが、他の部分はほとんど残っていなかった。東側を平安時代の334号住居と重複しており、334号住居により本住居の床面から上の部分が削り取られている。2軒の床面の高さはほぼ同じであり、僅かに残った土層での断面観察では切り合い関係は確認できなかった。

構造 残りの悪い床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。

規模 東西5.29m、南北4.89mである。壁高は残りの良い南壁面で15cmである。貯蔵穴は径56cm深さ64cm、柱穴1は径37cm深さ46cm、柱穴2は径40cm深さ42cm、柱穴3は径50cm深さ63cm、柱穴4は径52cm深さ66cmである。

遺物 出土量が少なく図示した土器も4以外はすべて破片である。



第233図 333号住居跡実測図

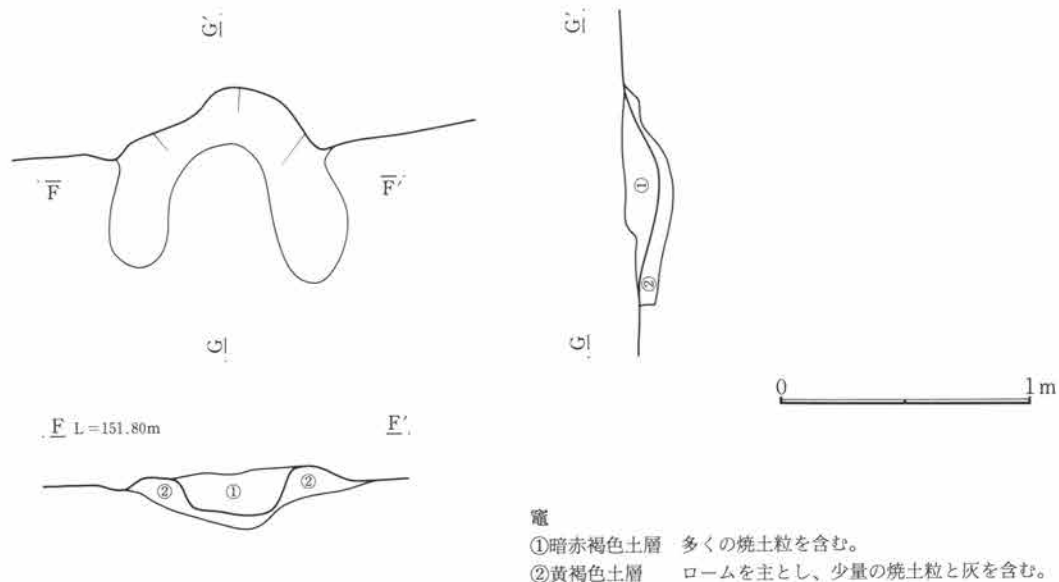
第3章 古墳時代の遺構と遺物

(竈)

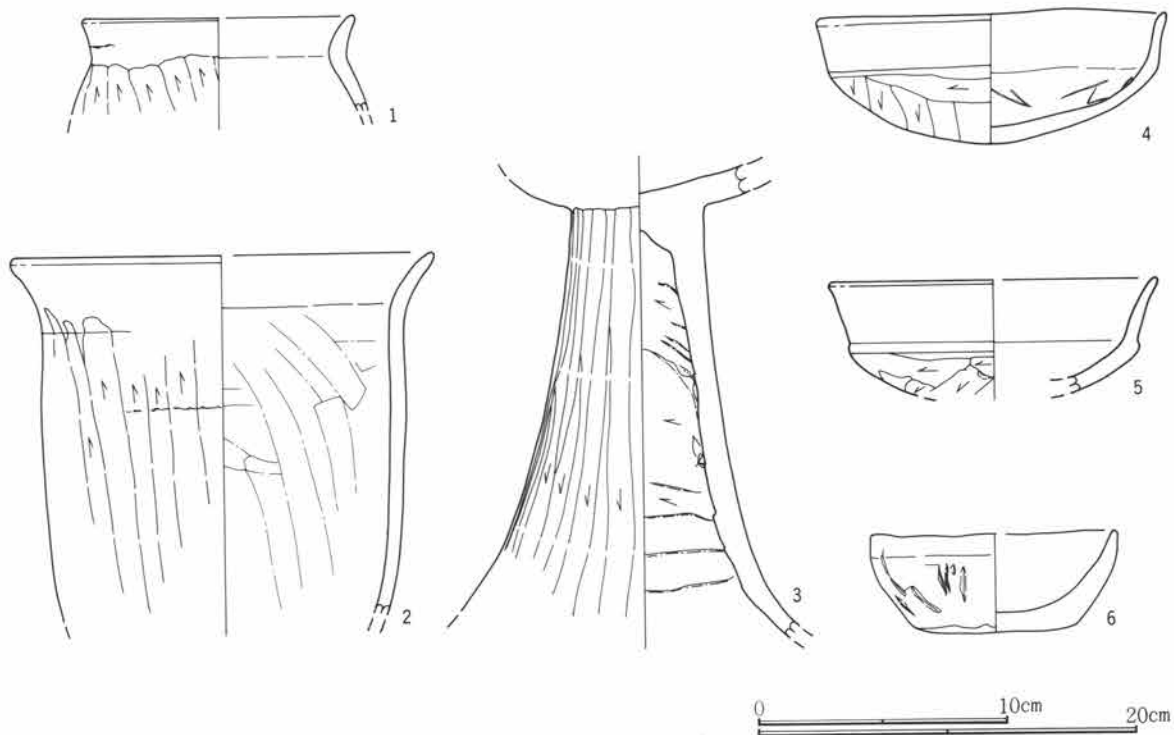
位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に上部の多くの部分は削り取られており、僅かな高まりとして残っていた状態の悪い竈である。竈内より石や土器等の出土は認められなかった。焼土粒の出土も少なかった。

規模 煙道方向76cm、燃烧部幅44cmである。



第234図 333号住居跡竈実測図



第235図 333号住居跡出土遺物実測図

333号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
235-1	土師器 小型甕	床面+2 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.4) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴部外面の器表面に多くの砂粒が目立ち粗い。
235-2	土師器 甕	覆土 小破片	口(22.4) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へら削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
235-3 91	土師器 高坏	覆土 脚部のみ	口— 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚筒部外面へらナデ。内面ナデ。一部へら削り。多くの輪積痕が残る。
235-4 91	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 14.0 高 5.0 底 丸底	①密、1~2mmの赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面浅いへら削り。器表面密でへらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。少し歪んでいる。
235-5 91	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部へら削り。粘土が一部ササラ状を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
235-6 91	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(9.8) 高 3.9 底 6.3	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。体部外面ナデ。凹状の刻目があるが、へらによるものではなさそうである。口縁部弱い横ナデ。
7 114	こも編み石	床面直上	長 13.4 幅 7.9 厚 2.7 重 437		点紋絹雲母石墨片岩。楕円形で偏平な石である。側面中央部の凹状はほとんど認められない。
8 114	こも編み石	床面直上	長 12.4 幅 8.0 厚 4.1 重 666		絹雲母石墨片岩。断面が緩やかな三角形を呈した石で、片側の側面中央部が一部欠損し、他の側面にわずかな凹状部を認める。
9 114	こも編み石	覆土	長 15.5 幅 3.6 厚 2.4 重 241		緑簾緑泥片岩。1面きれいに剝離している為、細長い石である。凹凸部は認められない。
10 114	こも編み石	覆土	長 14.7 幅 7.0 厚 2.7 重 485		点紋絹雲母石墨片岩。楕円形で偏平な石である。片側の側面がわずかに凹状を呈している。

338号住居跡 (第236・237図、図版34・35・91)

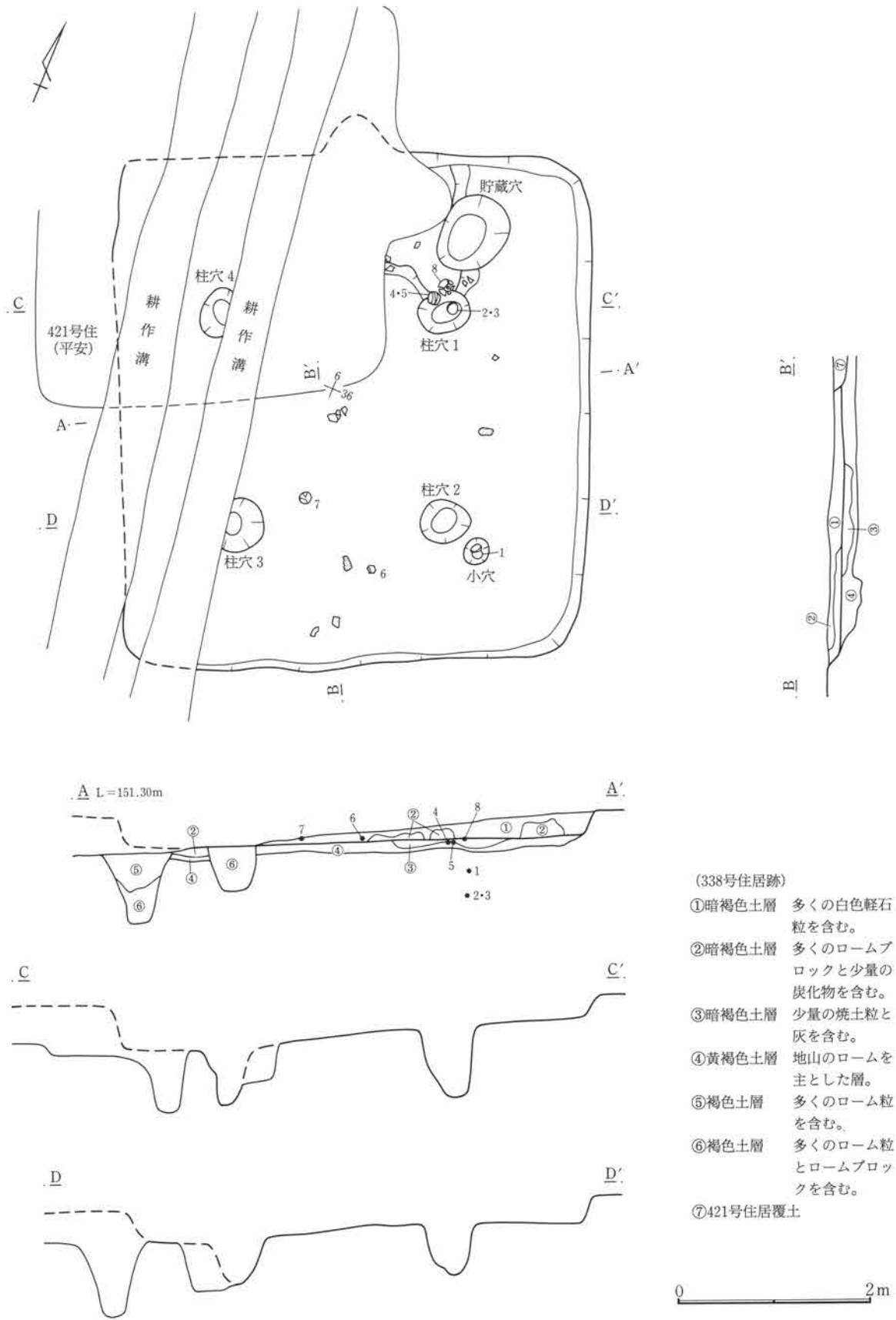
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、36・37-7グリッドに位置する。

概要 北西部分で平安時代の421号住居と重複している。421号住居の竈の造られている部分に接して、本住居の貯蔵穴と思われる小穴が掘られている。柱穴1と貯蔵穴の間付近に竈の袖の一部と思われる土の堆積が認められ、またそこから多くの遺物が集中して出土している。このようなことから421号住居の竈の造られた部分を中心に、本住居の竈が造られていたことが考えられる。西壁部分に2本の耕作溝が掘られており、その溝により床下まで深く掘り込まれている。その部分の住居範囲は不明である。

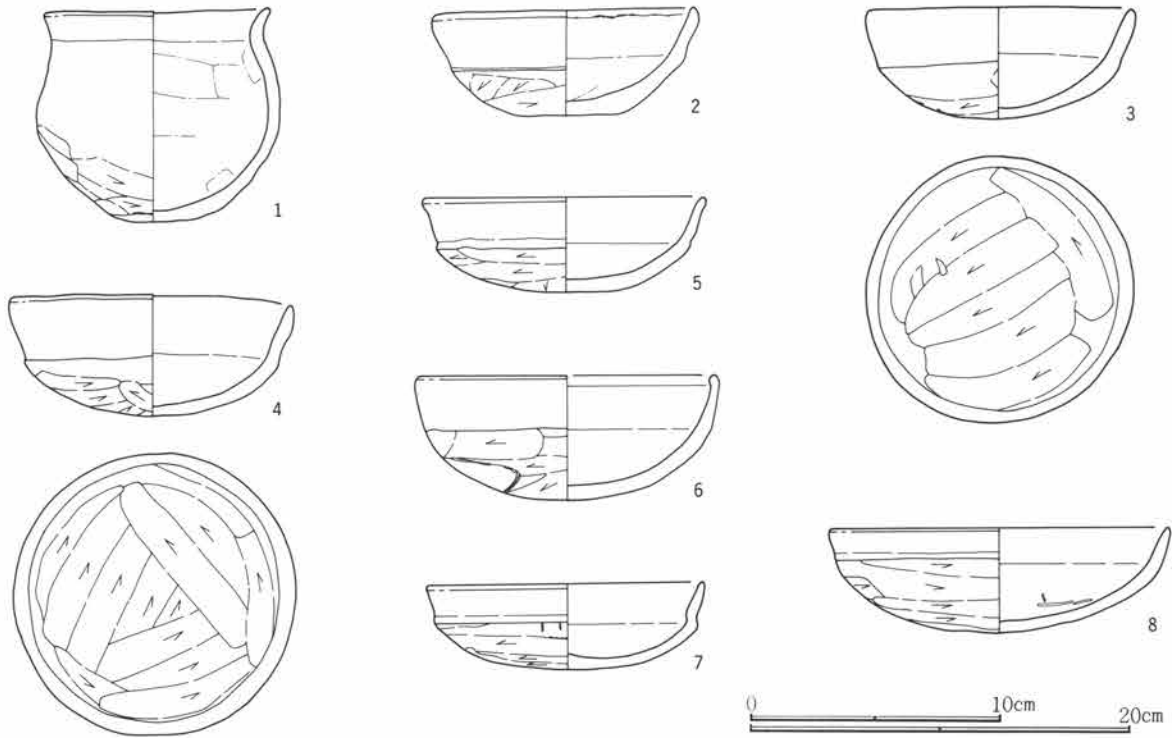
構造 残りの悪い床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。北壁中央部分で想定される竈の右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が、また柱穴2の南東部分にはほぼ完形な小型甕の埋められていた小穴が掘られていた。

規模 東西推定4.65m、南北5.17mである。壁高は残りの良い東壁面で26cmである。貯蔵穴は63×82cmの楕円形で深さ58cm、柱穴1は径52cm深さ73cm、柱穴2は径48cm深さ48cm、柱穴3は径54cm深さ56cm、柱穴4は径48cm深さ75cmである。小穴は径25cm深さ35cmである。

遺物 貯蔵穴と柱穴1の間付近より多くの土師器の坏が出土している。



第236図 338号住居跡実測図



第237図 338号住居跡出土遺物実測図

338号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
237-1 91	土師器 小型甕	小穴内覆土 ほぼ完形	口 12.0 高 11.2 底 5.4	①粗、2～3mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③赤橙色・黒褐色	底面ヘラ削り。胴下半ヘラ削り、上半ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。粗く雑なつくりの甕である。
237-2 91	土師器 坏	柱穴内-73 1/2残存	口 10.6 高 4.4 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③口縁部橙色・底面黒色	底面ヘラ削り。ヘラ削りの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底面が平底となっている。
237-3 91	土師器 坏	柱穴内-73 完形	口 10.5 高 4.4 底 丸底	①やや粗、1～2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。底面周辺はナデでヘラ削りなし。口縁部横ナデ。内側ナデにより器表面密。口径の小さな坏である。
237-4 91	土師器 坏	柱穴内-71 完形	口 11.2 高 4.8 底 丸底	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③褐色・一部橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
237-5 91	土師器 坏	柱穴内-71 完形	口 11.4 高 3.8 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑全く認められず、胎土がやや粉状を呈する。
237-6 91	土師器 坏	床面直上 口縁部1/2 底部1/2残存	口(12.0) 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面弱いヘラ削り。削りが弱くヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面一部が吸炭により黒褐色を呈している。
237-7 91	土師器 坏	床面+9 ほぼ完形	口 11.0 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。内面ナデにより器表面密。黒斑認められず胎土がやや粉状に近い。
237-8 91	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 13.6 高 4.1 底 丸底	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒が目立ち器表面やや粗い。内面ナデにより器表面密であるが、砂粒は目立つ。わずかに黒斑が認められる。

342号住居跡 (第238・239図、図版35・92)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、27-9グリッドに位置する。

概要 4軒の重複している住居の中の1軒で最も古い住居である。西側部分と南東部分を奈良時代の286号住居と341号住居により掘り込まれており、286号住居には床下部分まで、341号住居には床面上まで掘り

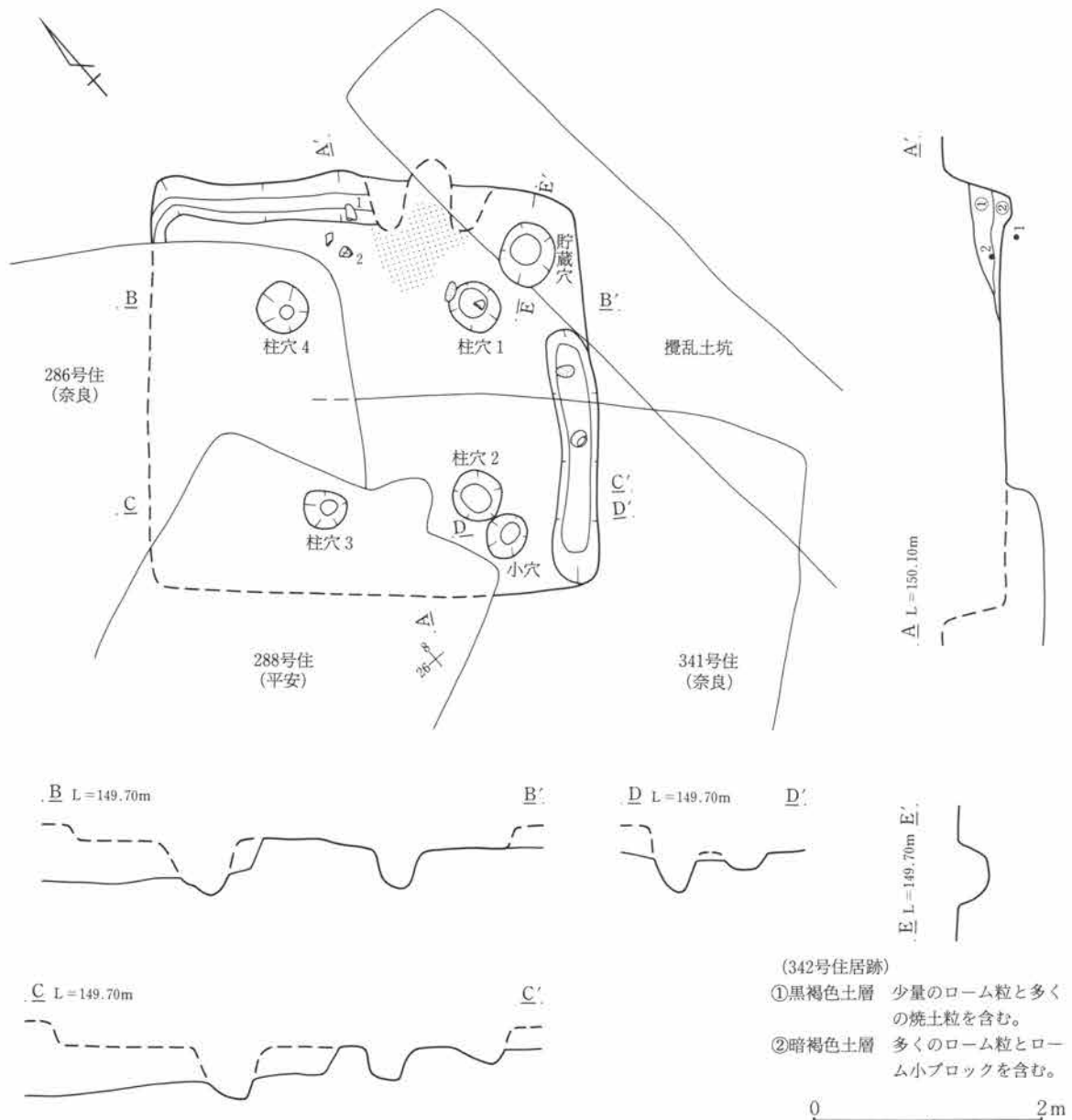
第3章 古墳時代の遺構と遺物

込まれていた。南側では平安時代の288号住居により床下部分まで掘り込まれていた。新旧関係は342→286→341→288号住居の順である。また東側コーナー部分を掘り込んで長方形の細長い大きな土坑が掘られており、本住居と重複している部分は床面近くまで掘り込まれていた。竈は残っていなかったが、北壁面東よりの床面に多くの焼土粒が出土しており、その右側には貯蔵穴が掘られていたため、北壁面に竈が造られていたものと思われる。

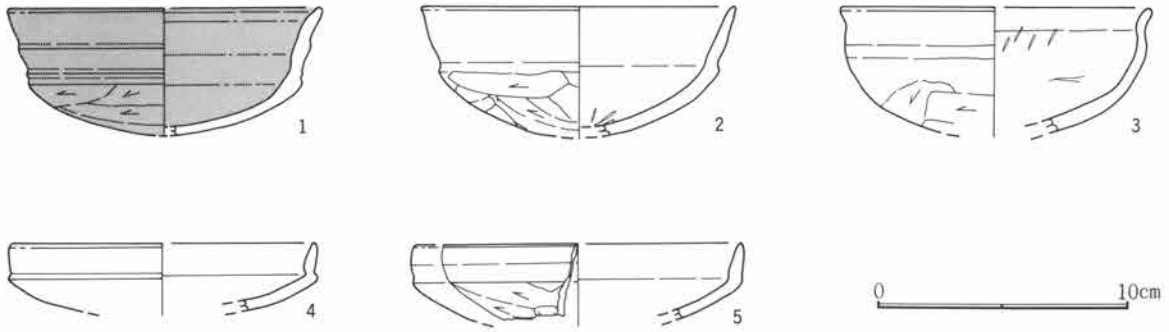
構造 残りの悪い床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。北壁部分で想定される竈の右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が、また柱穴2の南東部分に小穴が掘られていた。

規模 東西推定3.75m、南北3.51mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で55cmである。貯蔵穴は径49cm深さ23cm、柱穴1は径42cm深さ30cm、柱穴2は径42cm深さ45cm、柱穴3は径42cm深さ46cm、柱穴4は径44cm深さ41cmである。小穴は径38cm深さ36cmである。

遺物 竈左部分より土師器の環が出土している。



第238図 342号住居跡実測図



第239図 342号住居跡出土遺物実測図

342号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
239-1 92	土師器 坏	床面直上 1/3残存	口(12.4) 高— 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 有段口縁の坏である。 表面の黒色は吸炭による。
239-2 92	土師器 坏	床面+5 1/3残存	口12.5 高— 底—	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナ デにより器表面密。
239-3	土師器 坏	覆土 破片	口(12.2) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内面に多くのヘラの圧痕あり。
239-4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.2) 高— 底—	①密 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗くヘラの単位不明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
239-5	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.2) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑は認められない。

344号住居跡 (第240・241図、図版35・36・92)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、25・26—8グリッドに位置する。

概要 南の低地に向かって低くなるなだらかな傾斜面に位置し、本住居の南約30mの間が低地となり、その部分には竪穴住居は造られていない。梅雨時には住居床下から湧水が認められた。低地のためにロームの堆積が薄く、住居は黒褐色土や灰白色土を掘り込んで造られていた。北壁の一部で平安時代の287号住居と重複し、本住居の覆土上面が掘り込まれていた。

構造 残りの悪い床面は粘性の強い黒褐色土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は3本掘られていたが、西北部分の柱穴は確認できなかった。

規模 東西4.36m、南北4.06mである。壁高は残りの良い東壁面で19cmである。貯蔵穴は径62cm深さ55cm、柱穴1は径28cm深さ63cm、柱穴2は径37cm深さ66cm、柱穴3は径36cm深さ57cmである。

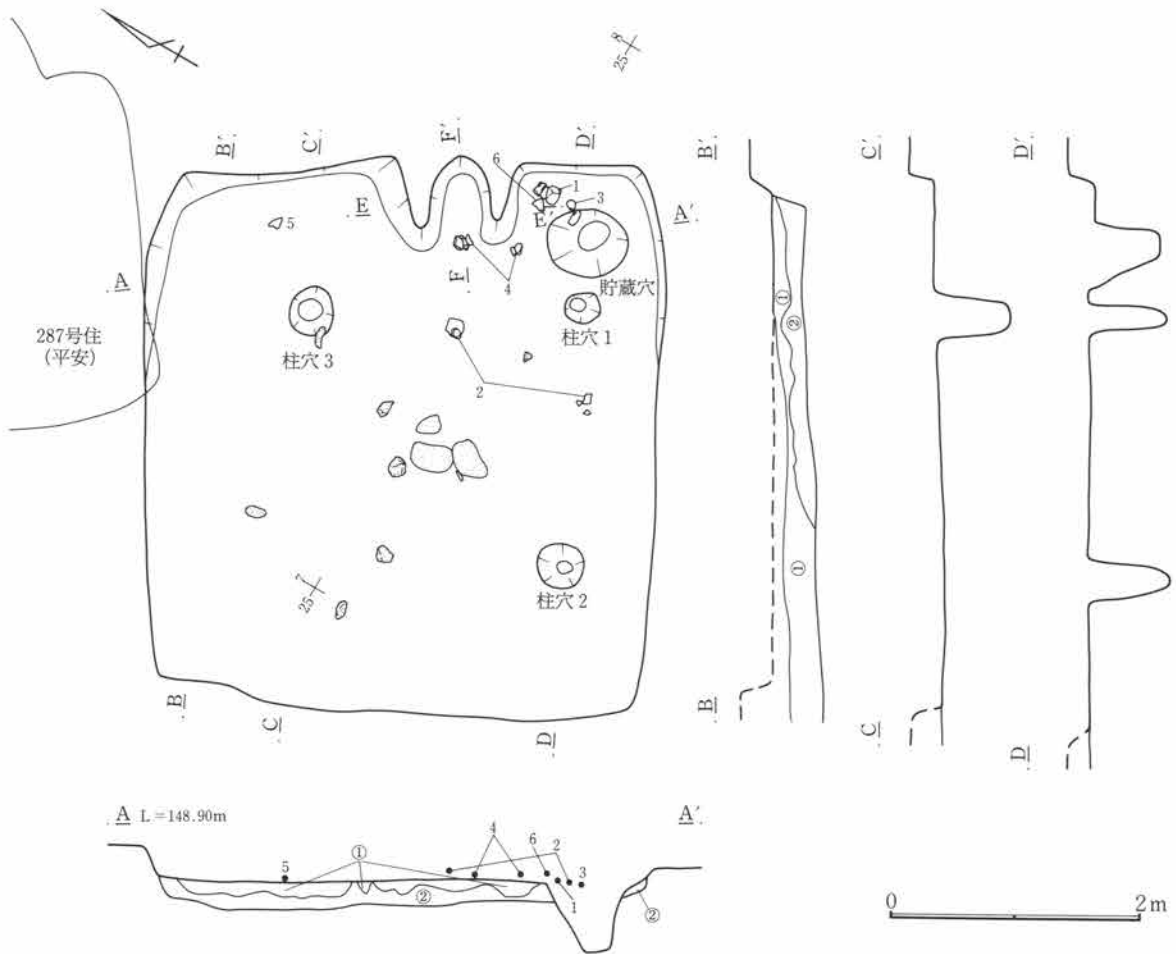
遺物 竈付近より土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

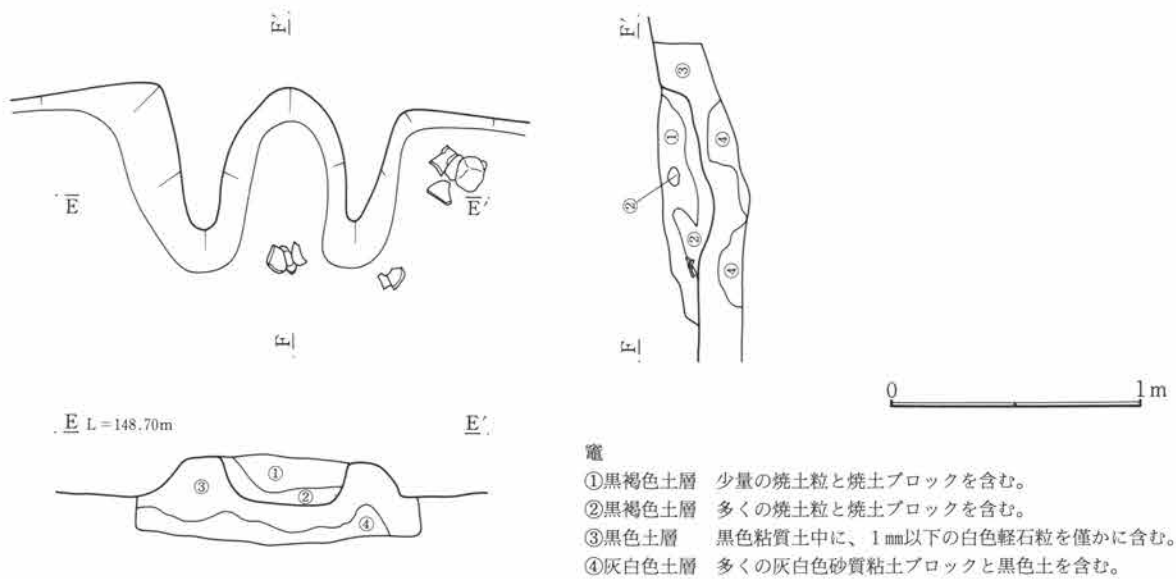
構造 上部の多くの部分は削り取られている残りの悪い竈であった。袖は粘性の強い黒色土で造られており、石は使用されていないため全く出土しなかった。燃焼部に多くの焼土粒と焼土ブロックが認められた。

規模 煙道方向72cm、燃焼部幅52cmである。

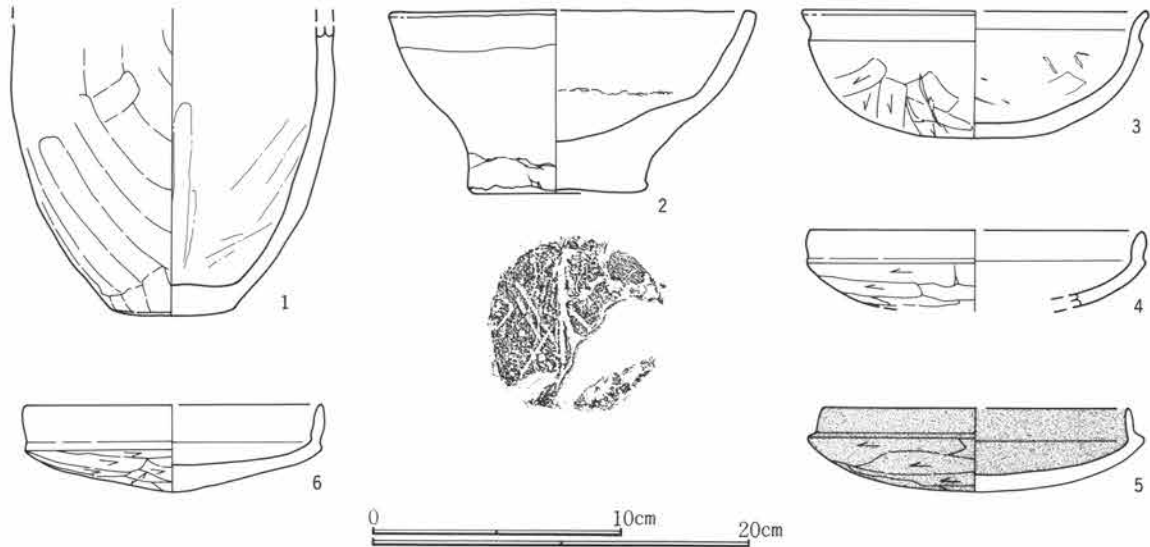


(344号住居跡)

- ①黒褐色土層 ローム粒を含まない。1mm内外の白色軽石粒を僅かに含む粘質土。
- ②灰白色土層 灰白色砂質粘土をブロック状に多く、黒褐色土を少量含む。



第240図 344号住居跡・竈実測図



第241図 344号住居跡出土遺物実測図

344号住居跡出土遺物観察表

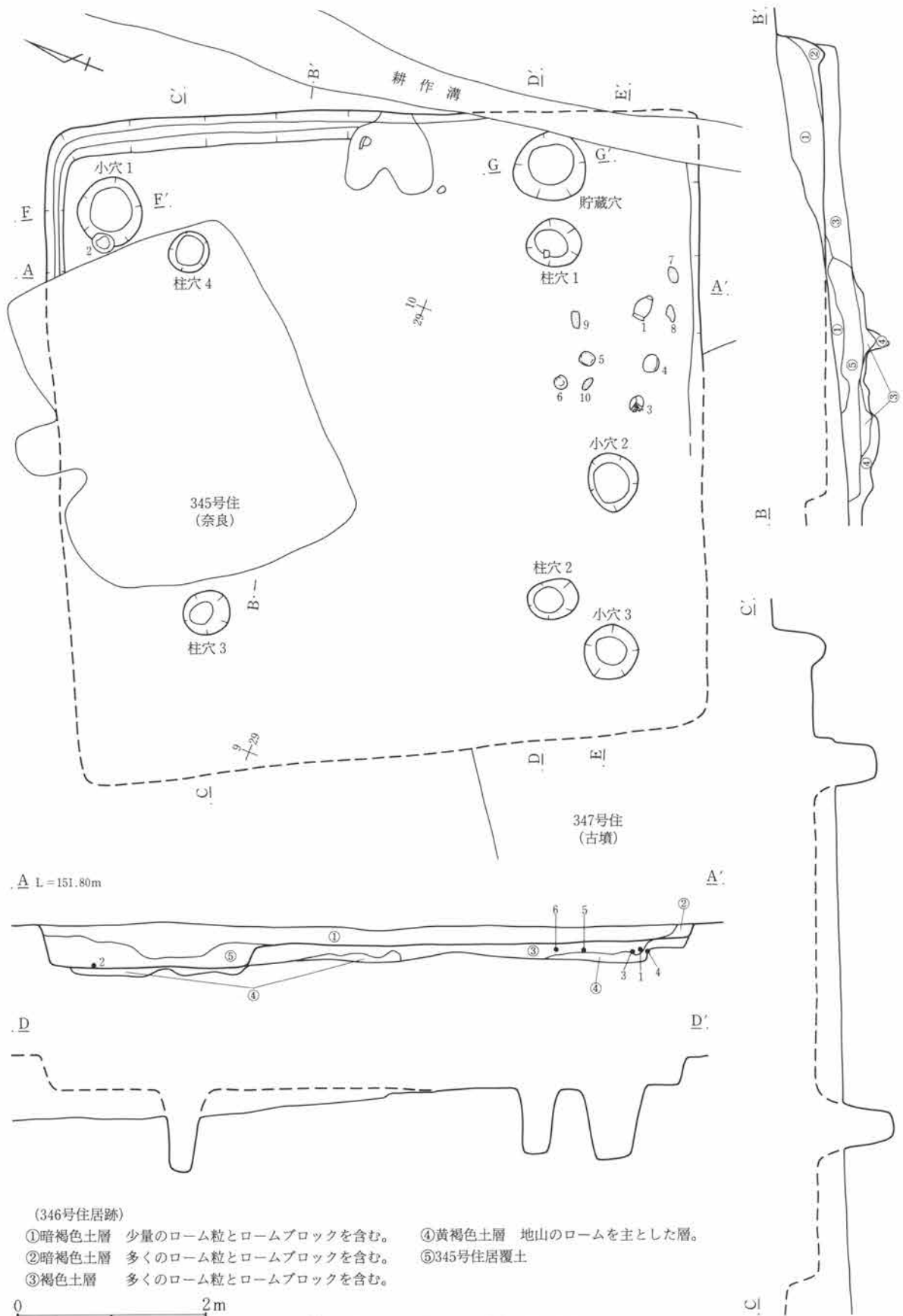
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
241-1 92	土 甕 器	床面+7 胴下半 $\frac{1}{2}$ 残 存底部完形	口 — 高 — 底 6.5	①粗、3×6mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面灰褐色	底面と胴部外面すべてヘラナデ。ヘラ削りは行なわれていないようである。内面はナデにより器表面密。
241-2 92	土 甕 坏	床面+8 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部完形	口(14.7) 高 7.1 底 7.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面にふい橙色・内面黒褐色	一見して甕の胴下半~底部と思われるが、口縁部があるため坏である。底面には木葉痕あり。口縁部横ナデ。内面は吸炭により黒褐色を呈する。
241-3 92	土 甕 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.8) 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、粘土がササラ状を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
241-4 92	土 甕 坏	床面+5 破片	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。浅い坏である。
241-5 92	土 甕 坏	床面+2 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.3) 高 3.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色・一部黒褐色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。稜は高く明瞭。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒褐色。
241-6 92	土 甕 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.0) 高 3.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。粘土の一部がササラ状に粗れている。黒斑全く認められず胎土がやや粉状を呈する。

346号住居跡 (第242~244図、図版36・92・114)

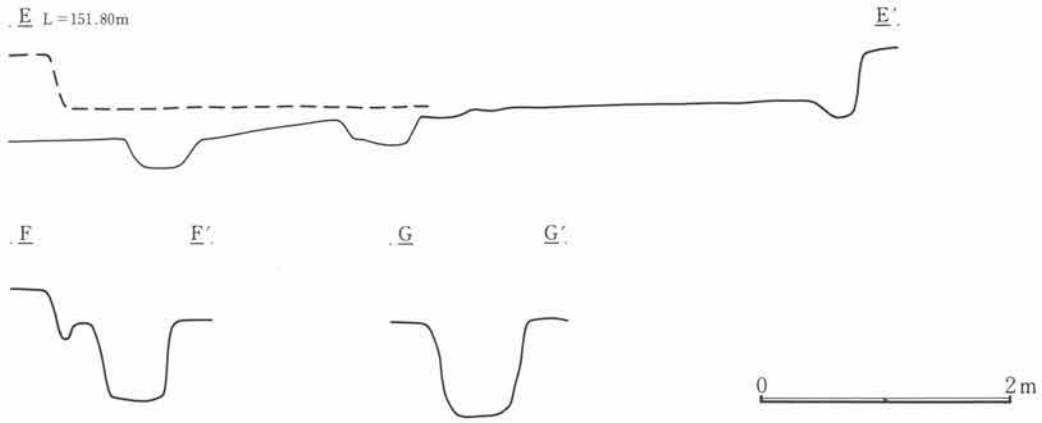
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、29・30—10・11グリッドに位置する。

概要 3軒の重複している住居の中の1軒である。南西部分で同じ古墳時代の347号住居と重複しており、本住居が347号住居の床面と竈を掘り込んでいる。床面の高さはほとんど同じである。北側では奈良時代の345号住居と重複しており、345号住居により本住居の床下部分まで深く掘り込まれている。新旧関係は347→346→345号住居である。竈は東壁面の中央部から床面にかけて痕跡として残っていたが、袖部分は住居の放棄された段階では取り除かれていたので、旧竈であったものと思われる。最終段階まで使用されていた竈は不明であるが、北東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が掘られていること、北壁面中央部を奈良時代の345号住居により深く掘り込まれていたこと、またこの部分に他の多くの住居では竈が造られていることから、この位置に竈が造られていた可能性を考えたい。

構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られていた。旧東竈の右側に貯蔵穴が掘られて



第242図 346号住居跡実測図(1)

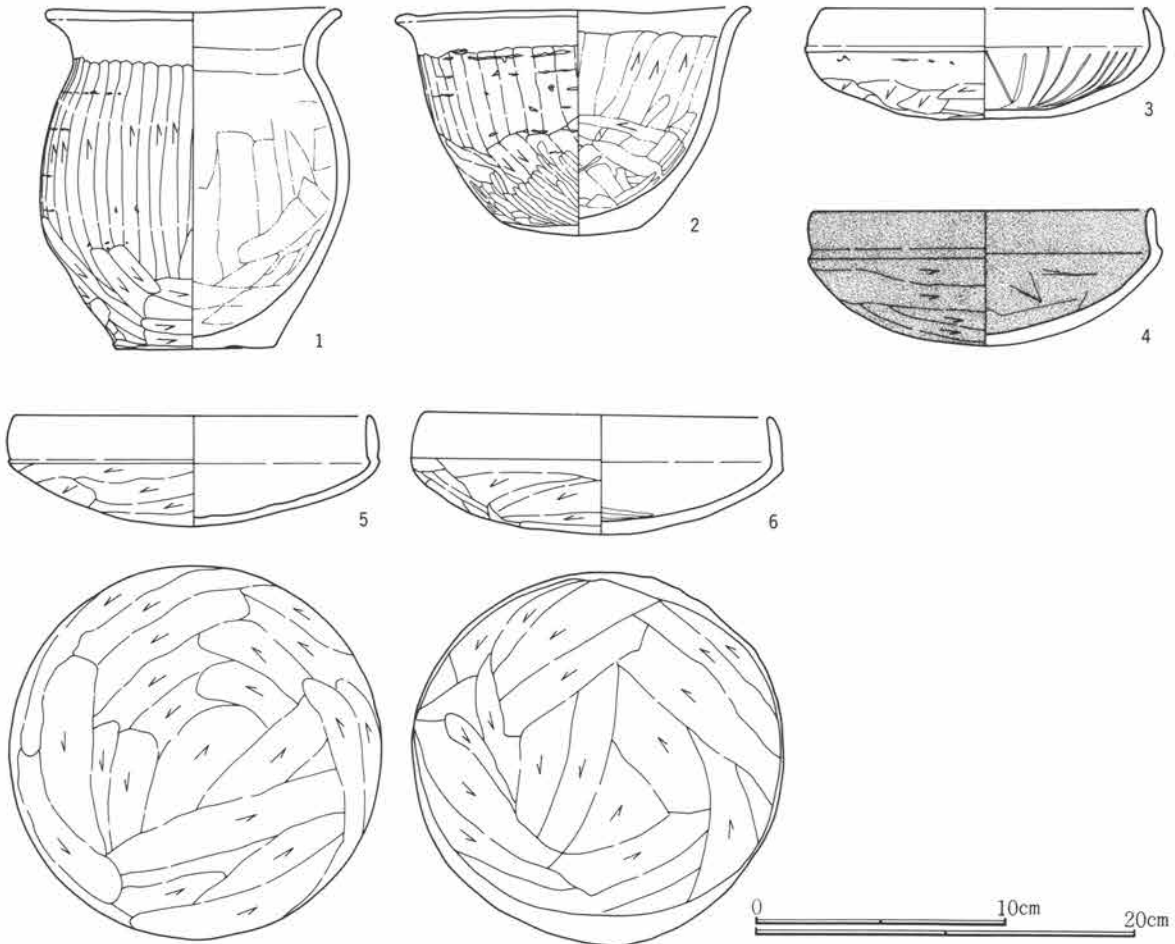


第243図 346号住居跡実測図(2)

いた。また北東コーナー部分に貯蔵穴と思われる小穴が、さらに柱穴2の近くに小穴2と3が掘られていた。柱穴は4本掘られていた。

規模 東西6.87m、南北6.90mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分の壁面で46cmである。貯蔵穴は径80cm深さ73cm、柱穴1は径57cm深さ69cm、柱穴2は径55cm深さ83cm、柱穴3は径46cm深さ81cm、柱穴4は径41cm深さ65cmである。

遺物 南壁面近くから土師器の甕や坏が出土している。



第244図 346号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

346号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
244-1 92	土師器 小型甕	床面+3 完形	口 15.6 高 17.7 底 8.4	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴部外面細いへら削り。小さな砂粒と粘土が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。外面に輪積痕が残る。
244-2 92	土師器 鉢	床面直上 完形	口 19.0 高 11.9 底 8.0	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へらナデ。器表面は密である。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面下部へら削り、上部ナデ。
244-3 92	土師器 坏	床面+6 3/4残存	口(12.8) 高 4.3 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。削りの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面に放射状のへら磨きあり。
244-4 92	土師器 坏	床面+5 口縁部一部 欠損	口 13.6 高 5.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・底面にぶい橙色	底面へら削り。小さな砂粒は移動しているが、器表面比較的密。口縁部横ナデ。内側底面にへらの圧痕あり。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭。
244-5 92	土師器 坏	床面+5 完形	口 14.4 高 4.4 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒と赤色粒を含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にぶい橙色	底面幅の広いへら削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部外面の一部に吸炭による黒斑あり。
244-6 92	土師器 坏	床面+7 完形	口 14.0 高 4.7 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③断面と底面橙色・内面黒色	底面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底面は吸炭により黒色を呈する。
7 114	こも編み石	床面直上	長 14.9 幅 7.0 厚 3.3 重 470		絹雲母石墨片岩。楕円形で偏平な石である。側面中央部にわずかな凹状を持つ。
8 114	こも編み石	床面直上	長 13.1 幅 4.7 厚 3.5 重 360		絹雲母石墨片岩。細長く肉厚な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
9 114	こも編み石	床面直上	長 12.4 幅 6.8 厚 2.8 重 370		絹雲母石墨片岩。楕円形で偏平な石である。両側面とも明瞭な凹状は認められない。
10 114	こも編み石	床面直上	長 15.5 幅 6.3 厚 3.0 重 390		緑簾緑泥片岩。片側の側面がわずかな凹状を呈し、他の側面に細かな凹凸が認められる。

347号住居跡 (第245・246図、図版36・92)

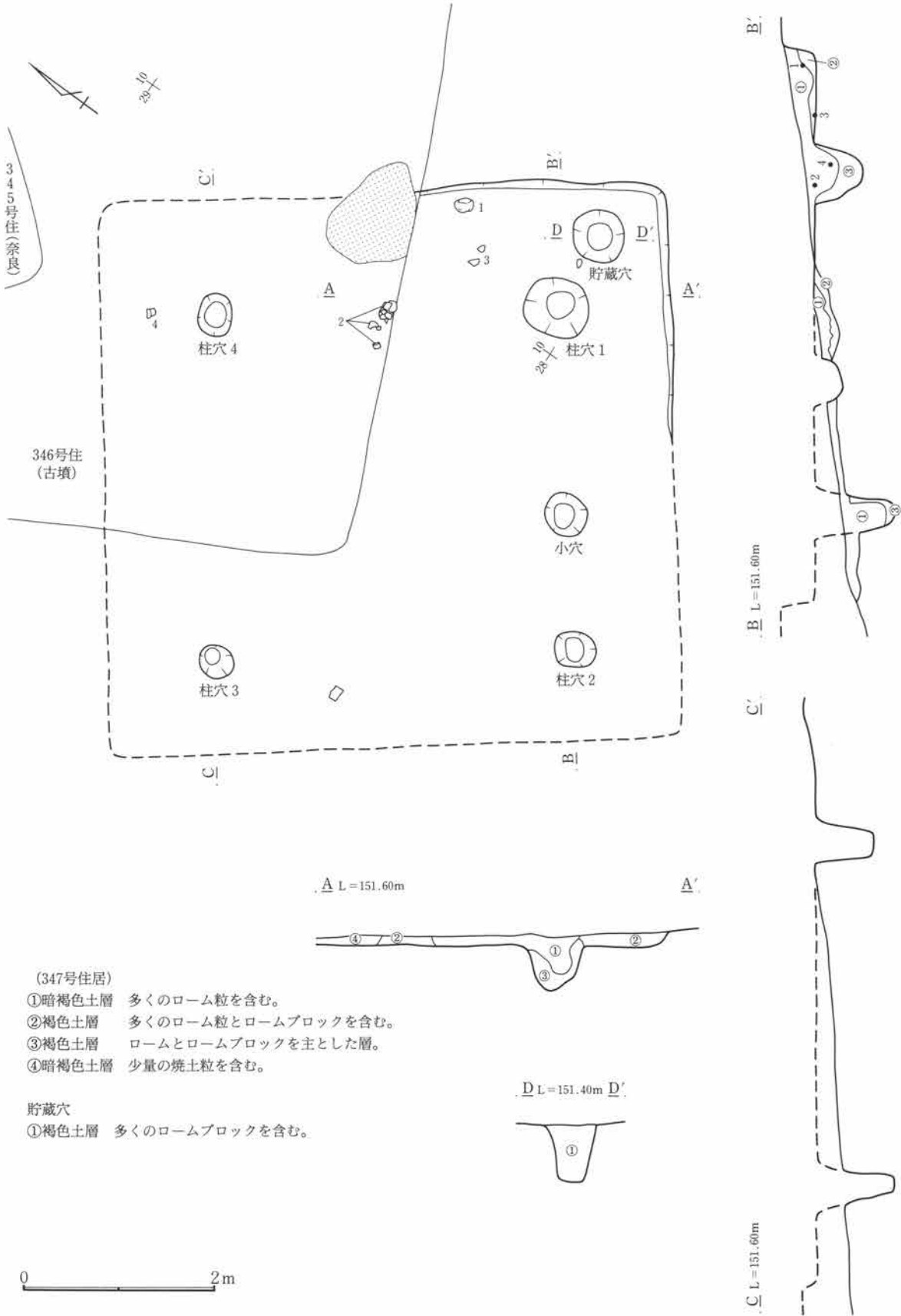
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、28・29-10グリッドに位置する。

概要 北東部分で同じ古墳時代の346号住居と重複しており、その部分の床面と竈が削り取られている。東側の壁面と床面は残っていたが、西側は削られて残っていなかった。住居範囲は残っていた柱穴から推定した。竈は346号住居によりほとんど削り取られていたが、床面に少量の焼土粒と僅かな掘り込みが確認された。

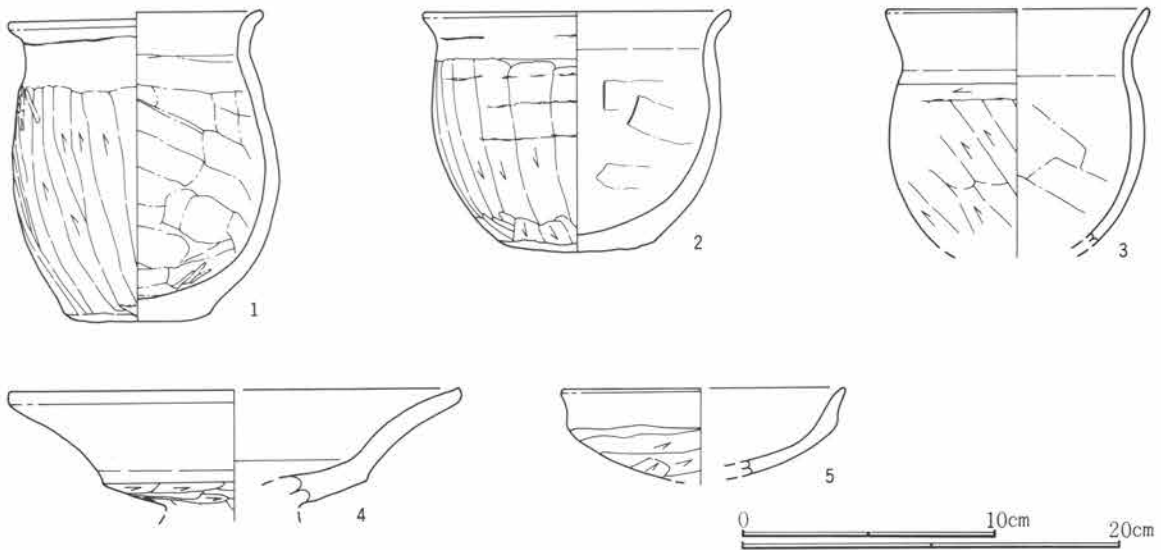
構造 床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られていた。東竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は4本掘られており、柱穴2の東側に小穴が掘られていた。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で31cmである。貯蔵穴は径53cm深さ52cm、柱穴1は径70cm深さ52cm、柱穴2は径44cm深さ81cm、柱穴3は径33cm深さ84cm、柱穴4は径34cm深さ63cmである。小穴は径44cm深さ33cmである。

遺物 削り取られた竈周辺から土師器の甕や坏が出土している。



第245図 347号住居跡実測図



第246図 347号住居跡出土遺物実測図

347号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
246-1 92	土師器 小型甕	床面+7 口縁部1/2 底部完形	口 13.6 高 16.3 底 7.7	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部の器肉が厚い。
246-2 91	土師器 小型甕	床面直上 1/2残存	口 16.4 高 12.6 底 8.0	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラナデ。胴部外面ヘラナデ、一部ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
246-3	土師器 小型甕	床面直上 破片	口(14.9) 高 — 底 —	①やや密、1mm以下の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外側弱いヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面は比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
246-4	土師器 高杯	床面直上 破片	口(18.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	杯底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
246-5	土師器 杯	覆土 破片	口(11.2) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデにより器表面密。

348号住居跡 (第247~249図、図版36・92)

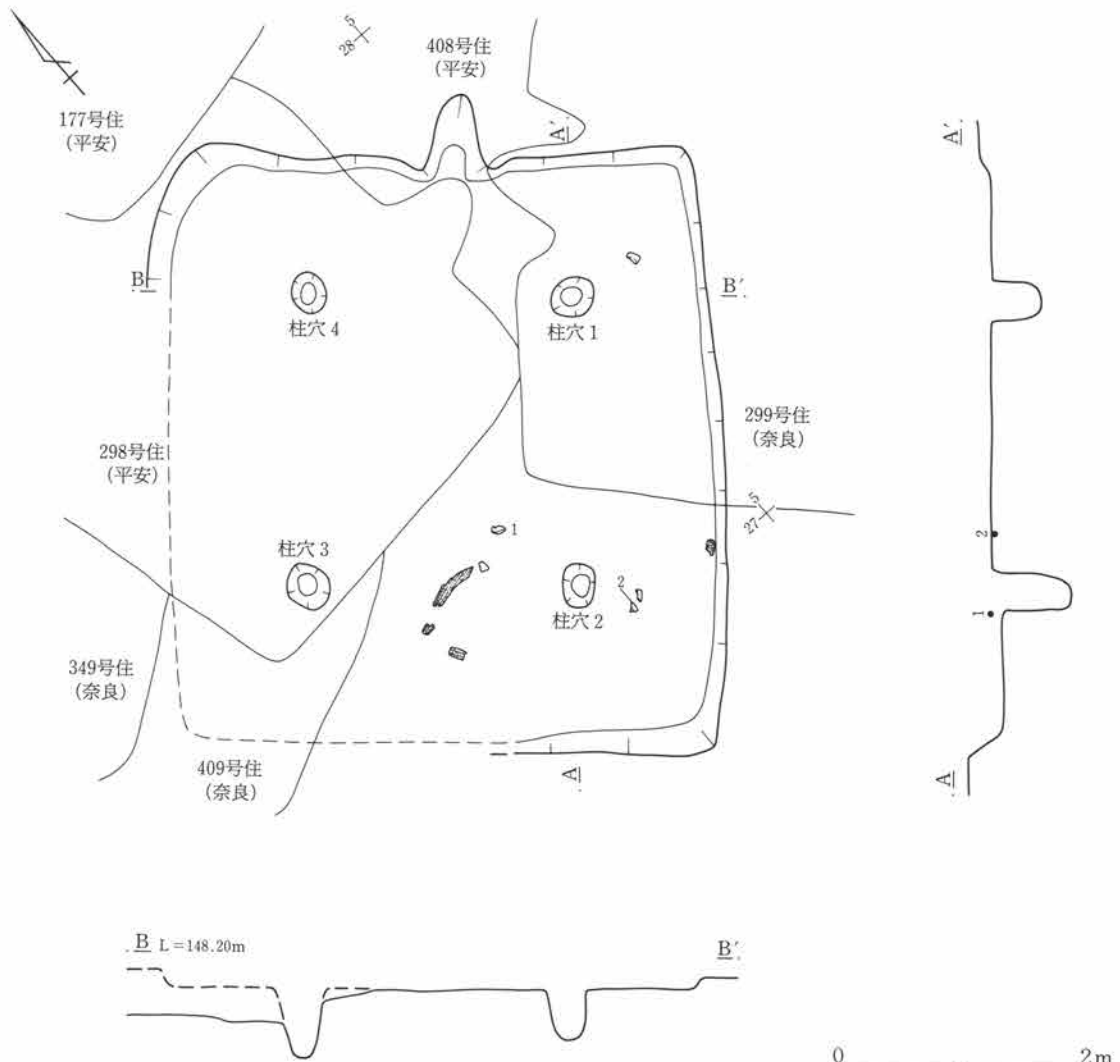
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、28-5グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居は直接には6軒の重複であり、6軒中最古である。新旧関係は348(古墳時代)→409(奈良時代)→349(奈良時代)→298(平安時代)号住居、及び348(古墳時代)→299(奈良時代)→408(平安時代)号住居の順である。上部分を多くの住居により削られており、竈を含め残りが悪かった。

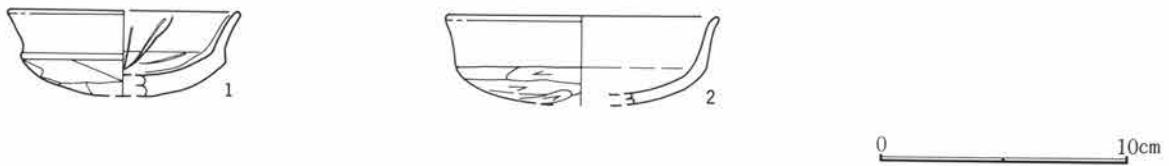
構造 残りの悪い床面はロームではなく粘性の強い灰白色土で造られていた。柱穴は4本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.42m、南北4.81mである。壁高は残りの良い南東部分で19cmである。柱穴1は径33cm深さ39cm、柱穴2は径35cm深さ63cm、柱穴3は径38cm深さ74cm、柱穴4は径32cm深さ62cmである。

遺物 図示できた遺物は少ないが、土師器の甕胴部の破片は大量に出土している。



第247図 348号住居跡実測図



第248図 348号住居跡出土遺物実測図

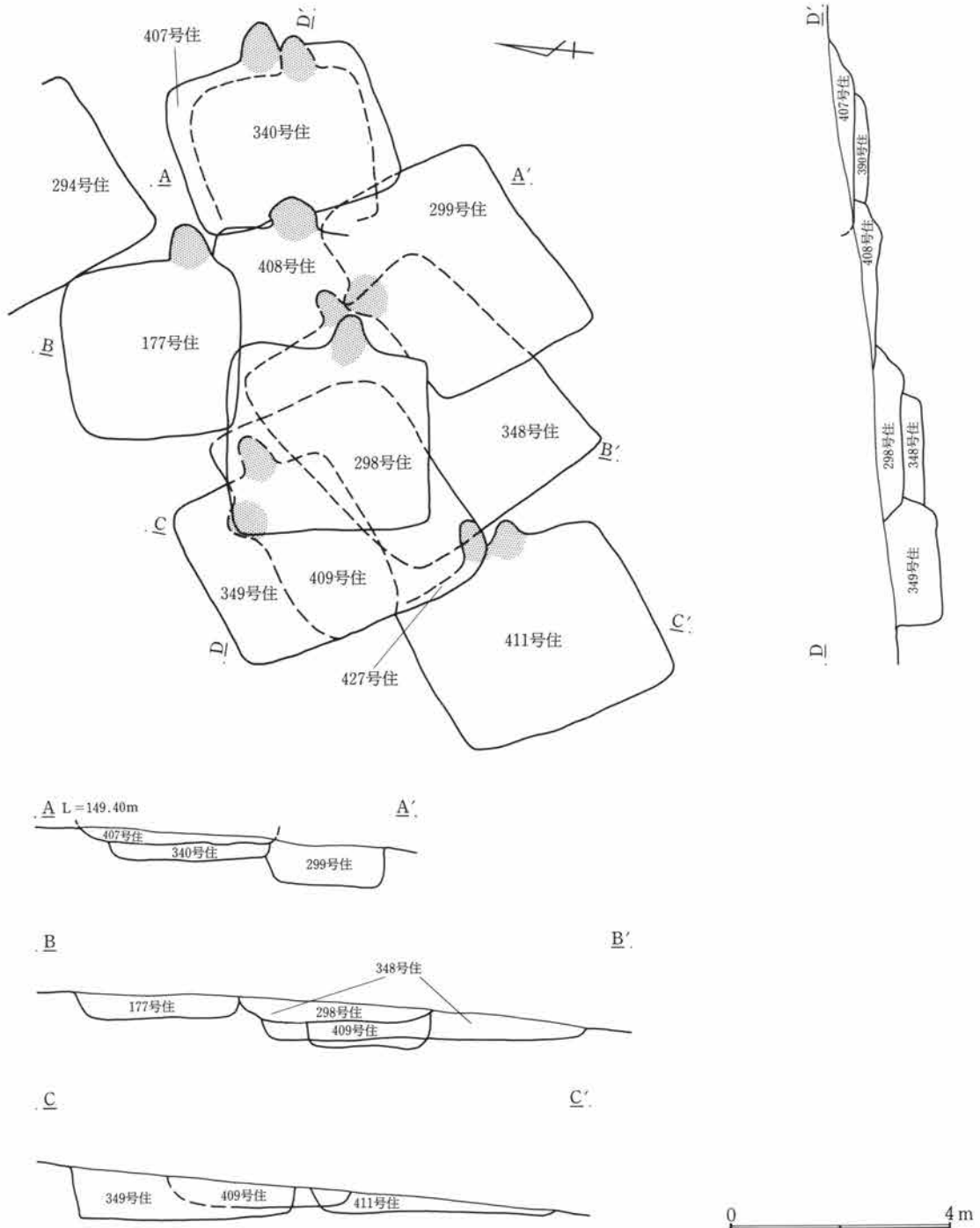
348号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
248-1	土 篩 器 坏	床面+5 1/2残存	口 (9.2) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いへら削り。口縁部横ナデ。内側底面に放射状のへら磨き。
248-2 92	土 篩 器 坏	床面+3 1/2残存	口 11.0 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色・一部黒褐色	底面へら削り。砂粒の移動は少ないがへらの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる。

- ◎古墳時代348号住居跡 (今回報告)
- ◎奈良時代.....299・349・409・411号住居跡 (矢田遺跡Ⅶ報告予定)
- ◎平安時代.....177・294・298・340・407・408号住居跡 (矢田遺跡Ⅱ報告済)
- ◎時期不明427号住居跡 (矢田遺跡Ⅶ報告予定)



第249図 348号住居跡周辺遺構重複関係図

350号住居跡 (第250~253図、図版37・92)

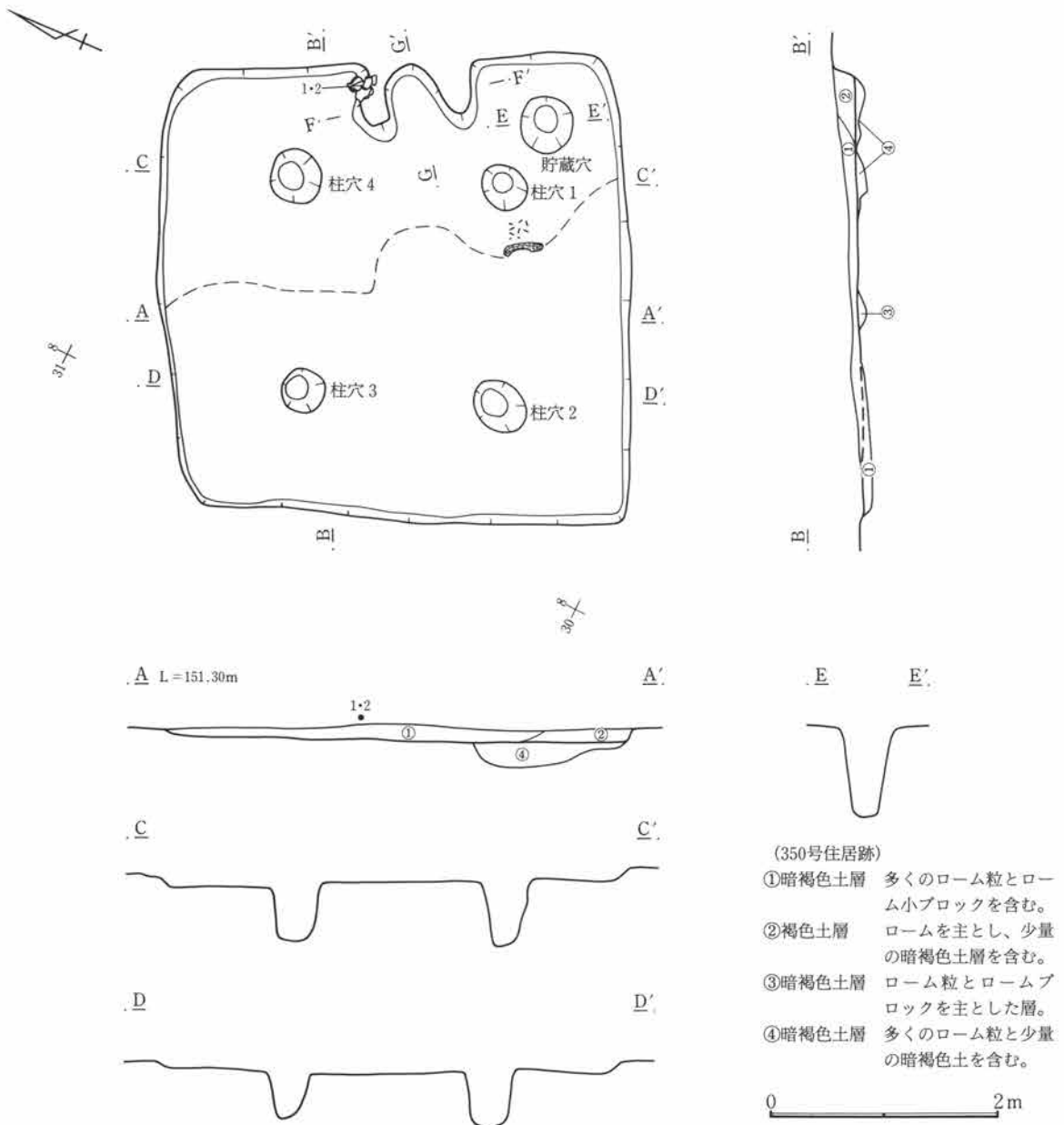
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、31-9グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の床面は残っていなかった。住居範囲は床下調査により確認できた。

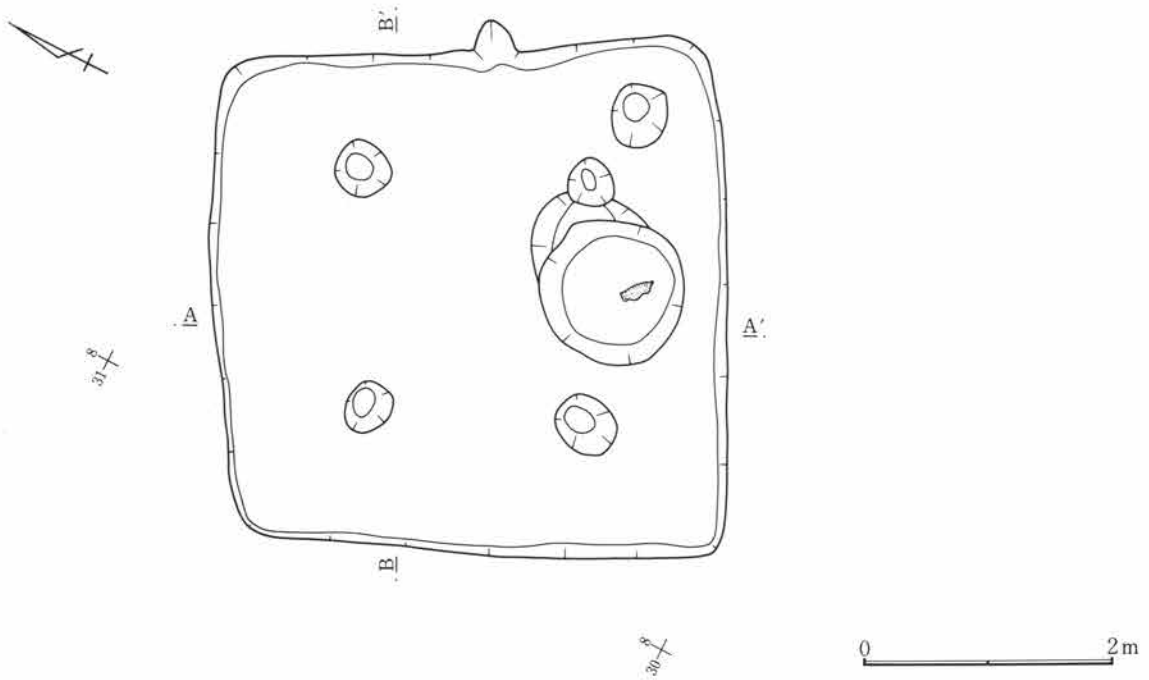
構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は4本ほぼ正方形に配置され掘られていた。貯蔵穴が竈の右側で南東の壁面コーナーに掘られていた。

規模 東西4.10m、南北4.16mである。壁高は残りの良い北東コーナーで22cmである。柱穴1は径43cm深さ47cm、柱穴2は径44cm深さ55cm、柱穴3は径36cm深さ46cm、柱穴4は径44cm深さ43cmである。貯蔵穴は径45cm深さ70cmである。

遺物 出土量が少なく図示できたのは、竈左袖石部分より出土した土師器の甕と高杯の破片である。



第250図 350号住居跡実測図



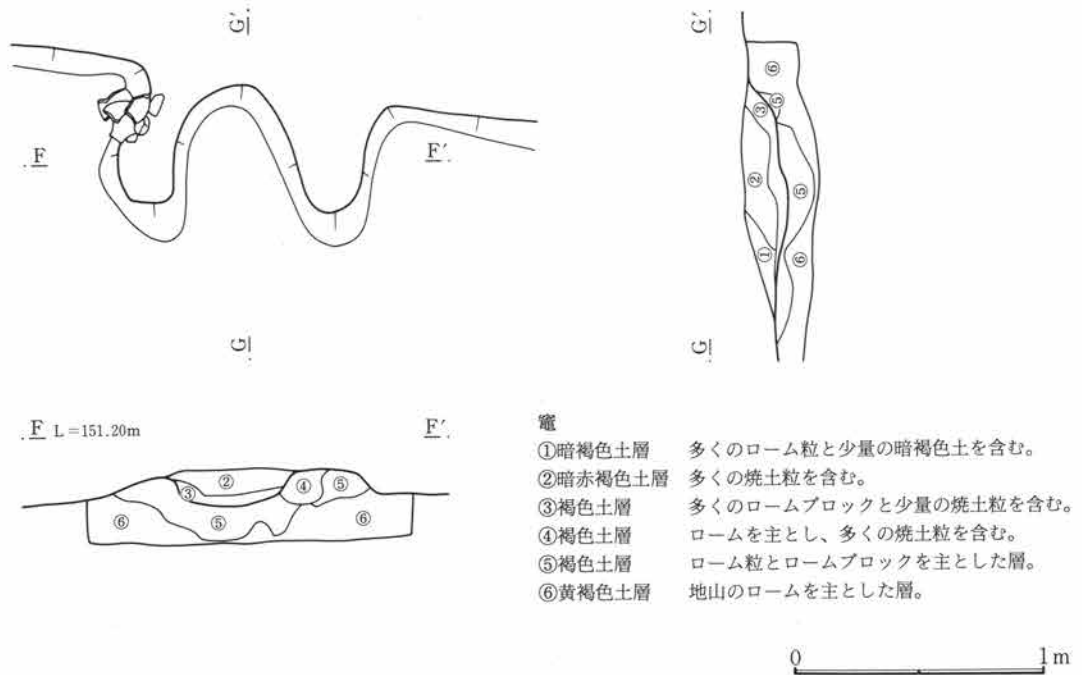
第251図 350号住居跡床下実測図

(竈)

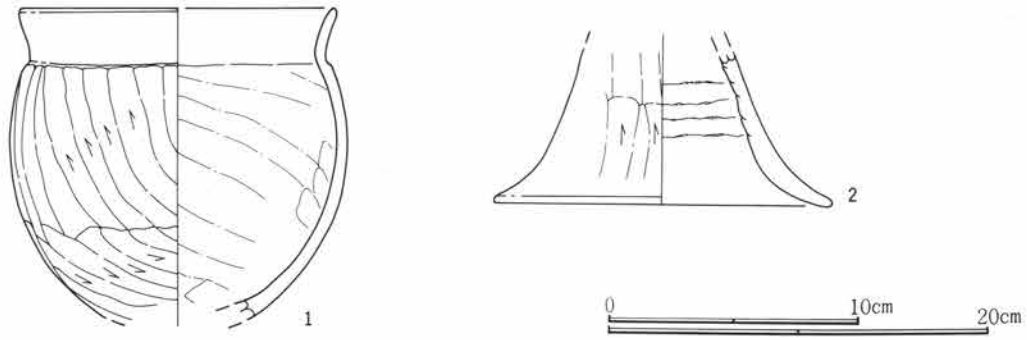
位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の多くの部分は削り取られており、残りの悪い竈であった。竈内より石の出土は認められなかった。ロームを主として造られた竈であると思われる。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向66cm、燃烧部幅46cmである。



第252図 350号住居跡竈実測図



第253図 350号住居跡出土遺物実測図

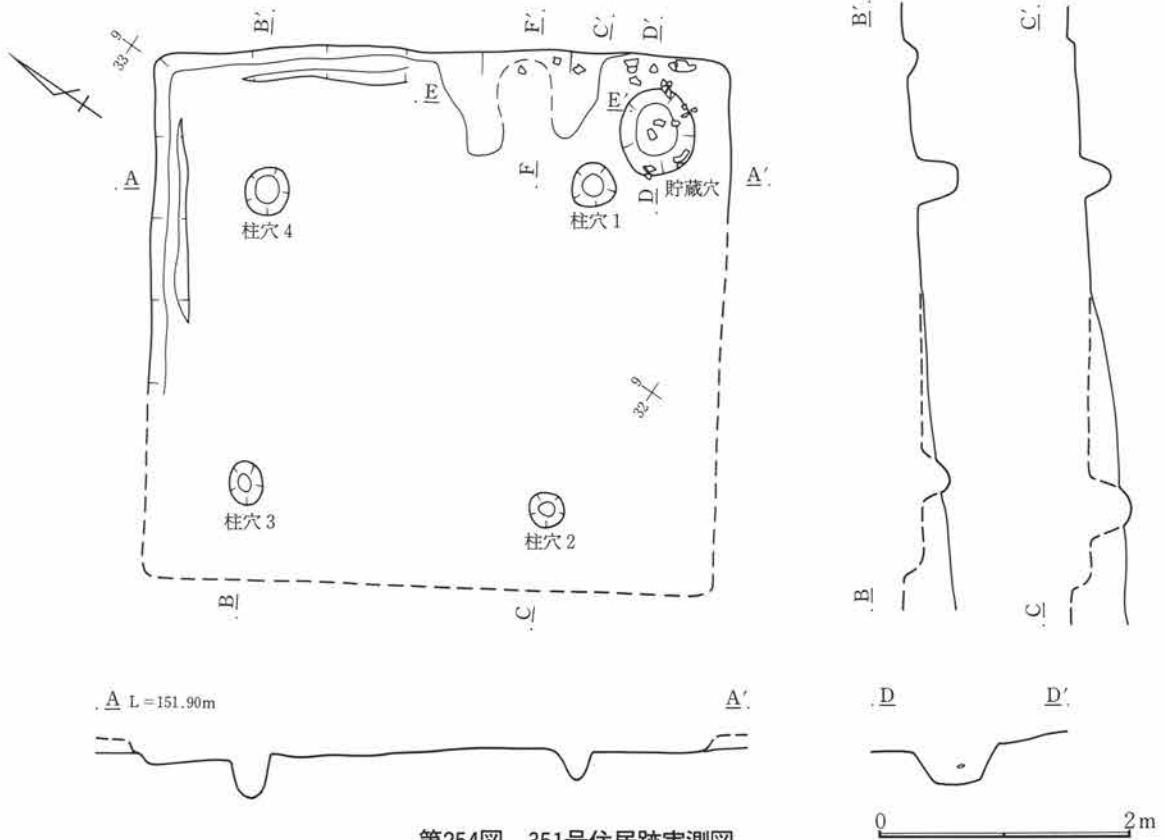
350号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
253-1 92	土師器 小型甕	床面直上 残存	口(17.0) 高— 底—	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色・一部黒褐色	胴部外面ヘラナデ。ナデの一部に光沢を持つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
253-2 92	土師器 高坏	床面直上 脚下部残存	口— 高— 底13.4	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部吸炭による黒色	外面ヘラナデ。内面に多くの輪積痕が残る。短脚の高坏の脚部か。

351号住居跡 (第254~256図、図版37)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、33-9・10グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の床面は残っていなかった。住居範囲は確認できなかった。図で示したのは残っていた柱穴から推定復元したものである。



第254図 351号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面の残りは悪かったが、ロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈の右側に、また床面に柱穴が4本掘られていた。

規模 東西不明、南北4.59mである。壁高は残りの良い北東壁面コーナーで13cmである。貯蔵穴は径63cm深さ28cmである。柱穴1は径35cm深さ21cm、柱穴2は径28cm深さ36cm、柱穴3は径31cm深さ29cm、柱穴4は径36cm深さ35cmである。

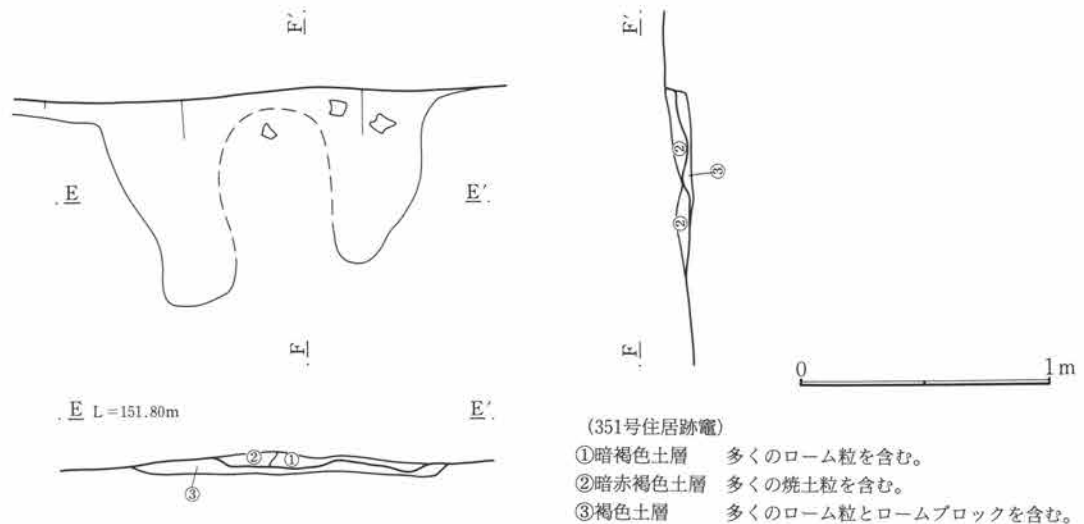
遺物 貯蔵穴周辺から少量出土しているが、図示できたのは土師器の甕と坏の小さな破片である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の多くの部分は削り取られており、竈の造られた場所全体に多くの焼土粒が散乱したような状態が残っていた。そのためどの位置に袖や燃烧部が造られていたのか明確でない部分が多い。非常に残りの悪い竈であった。

規模 煙道方向推定83cm、燃烧部幅推定46cmである。



第255図 351号住居跡竈実測図



第256図 351号住居跡出土遺物実測図

351号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
256-1	土 師 器 甕	覆土 口縁/残存	口(19.2) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部外面ヘラナデ。内面ナデ。
256-2	土 師 器 坏	覆土 破片	口(12.0) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体が斑点状に剝離している。

352号住居跡 (第257・258図、図版37・38)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、32-6グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の壁面や床面は残っていなかった。北側を後世の8号井戸により深く掘り込まれており、さらに井戸の西側を25号溝により掘り込まれていた。このように残りの悪い住居であった。

構造 床面の残りは悪かったが、ロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。貯蔵穴の西側に小穴が1本掘られており、位置から見て柱穴の可能性が考えられるが、他の柱穴が掘られていなかったため用途は不明である。

規模 東西不明、南北3.67mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で16cmである。貯蔵穴は径46cm深さ44cmで、小穴は径33cm深さ21cmである。

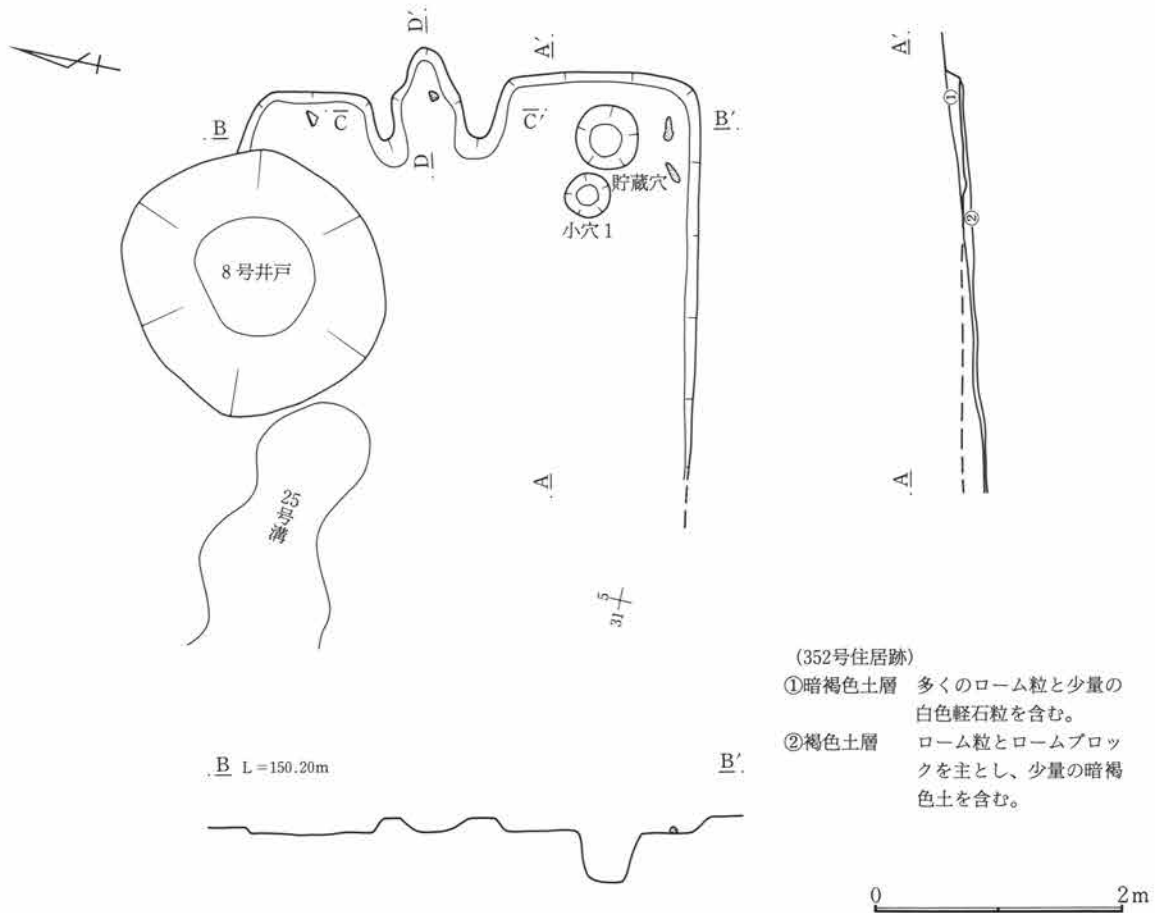
遺物 出土量が少なく図示できる遺物は無い。土師器の破片12片と須恵器の坏の破片1片が全出土量である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

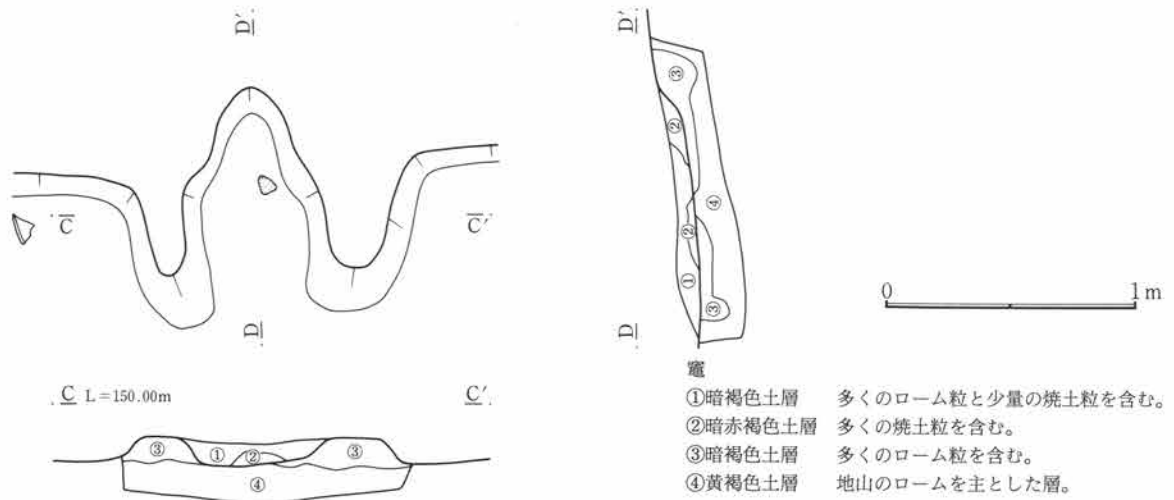
構造 住居同様に残りは良好でなかったが、袖部分や燃烧部は残っていた。袖部分はロームを主として造られていた。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向88cm、燃烧部幅推定54cmである。



第257図 352号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第258図 352号住居跡竈実測図

361号住居跡 (第259～261図、図版38・92)

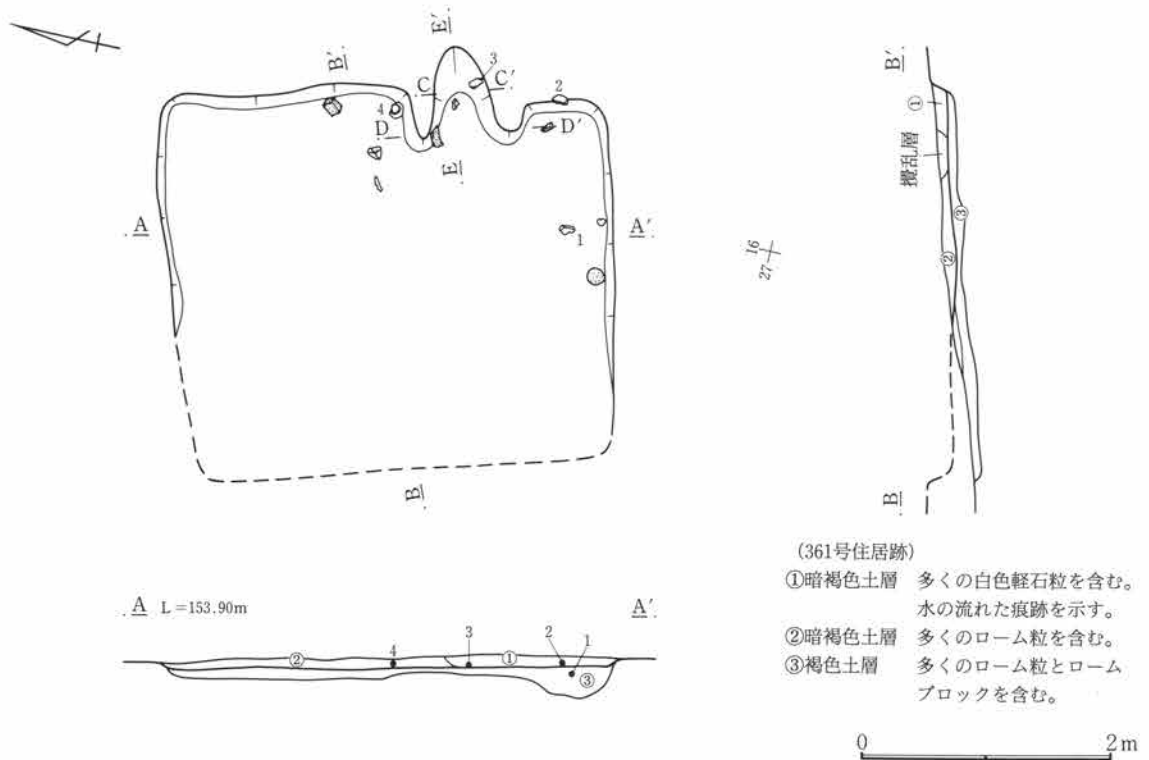
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、28-16・17グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の多くの壁面や床面は残っていなかった。

構造 床面の残りは悪かったが、ロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。床下調査によっても貯蔵穴や柱穴の確認はできなかつたため、掘られていなかったものと思われる。

規模 東西不明、南北3.58mである。壁高は残りの良い東壁面コーナーで13cmである。

遺物 出土量が少ない。竈左袖部分より出土した須恵器の坏が注目される。



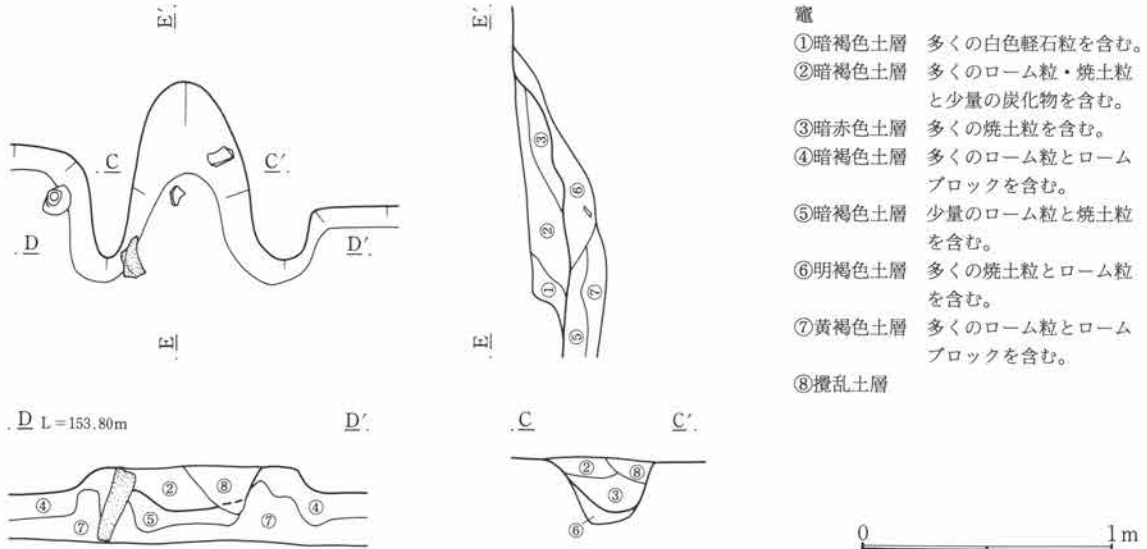
第259図 361号住居跡実測図

(竈)

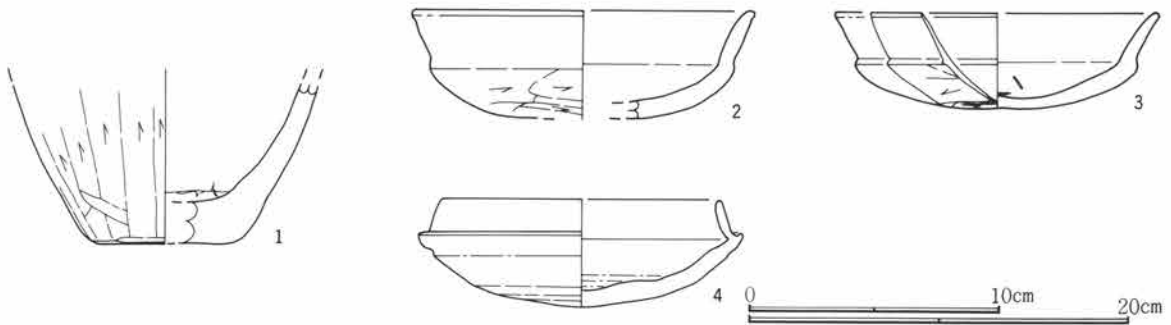
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りは良好でなかったが、袖部分や燃焼部は残っていた。左袖部分に袖石がほぼ据えられた状態で出土した。右袖部分は攪乱が入り一部乱れており、袖石は残っていなかった。燃焼部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向80cm、燃焼部幅48cmである。



第260図 361号住居跡竈実測図



第261図 361号住居跡出土遺物実測図

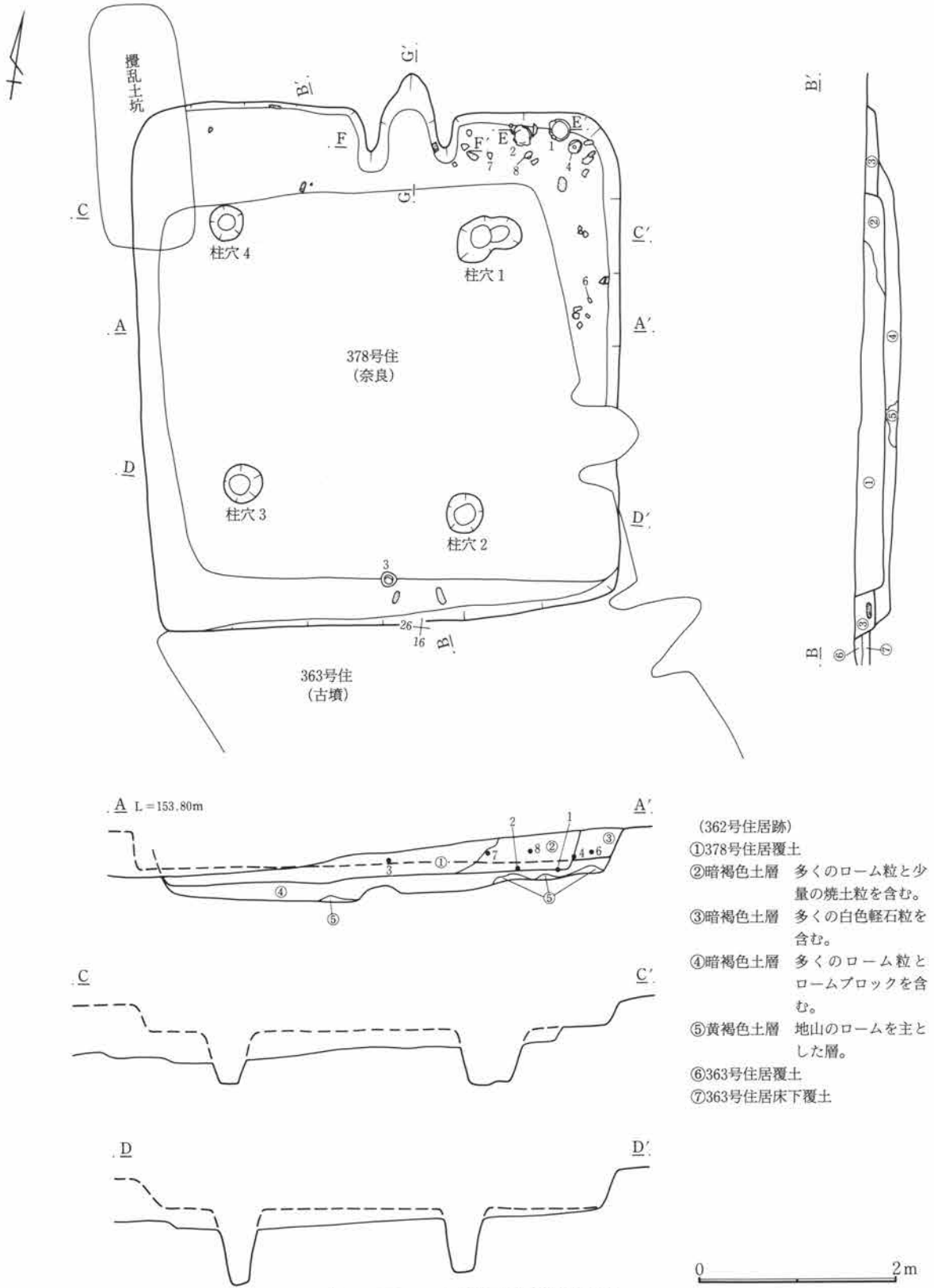
361号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
261-1	土 節器 甕	覆土 胴下半~底 部1/2残存	口 — 高 — 底 (7.4)	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面灰褐色・内面黒褐色	底面へら削り。外面弱いへら削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデ。 底面の器肉が特に厚い。
261-2	土 節器 坏	覆土 破片	口 (13.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
261-3	土 節器 坏	覆土 破片	口 (12.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
261-4 92	須恵器 坏	覆土 1/2残存	口 (11.2) 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部中央へら削り。口縁部横ナデ。口唇部は丸く仕上げている。底部の器肉が厚い。 底部の一部降灰による自然釉あり。やや雑なつくりである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

362号住居跡 (第262~264図、図版38・39・93・108)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、27-16・17グリッドに位置する。



(362号住居跡)

- ① 378号住居覆土
- ② 暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③ 暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ④ 暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤ 黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 363号住居覆土
- ⑦ 363号住居床下覆土

第262図 362号住居跡実測図(1)

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の床面の一部は残っていなかった。3軒重複の住居で、本住居は同じ古墳時代の363号住居の北側を掘り込んでいる。また本住居より一回り小さな奈良時代の378号住居が本住居の内側に造られ、本住居の床面と覆土は掘り取られていた。新旧関係は363→362→378号住居である。北東コーナー部分は土坑により掘り込まれていた。

構造 床面の残りは悪かったが、ロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。他の多くの住居では貯蔵穴が造られる竈の右側に、本住居では底部の欠損した2個の長胴の甕が約半分ほど床面上に出た状態で据え付けられていた。貯蔵穴は掘られていなかった。柱穴は重複している378号住居と本住居の床下調査段階で調査した。位置的に少し不自然ではあるが、4本確認された。

規模 東西4.91m、南北4.94mである。壁高は残りの良い東壁面部分で46cmである。柱穴1は径40cm深さ43cm、柱穴2は径38cm深さ55cm、柱穴3は径38cm深さ70cm、柱穴4は径36cm深さ40cmである。

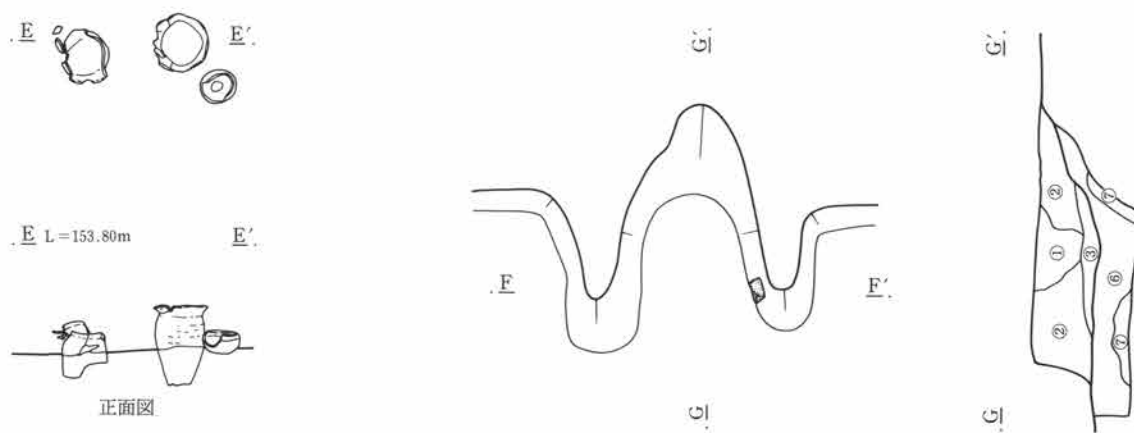
遺物 竈右側に多くの土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

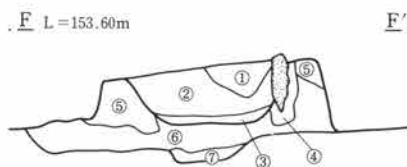
構造 左側の袖石は残っていなかったが、右側の袖石がほぼ据えられた状態で残っていた。ほかに支脚石や天井石は残っていなかった。竈内から焼土粒の出土は僅かであった。

規模 煙道方向97cm、燃烧部幅49cmである。



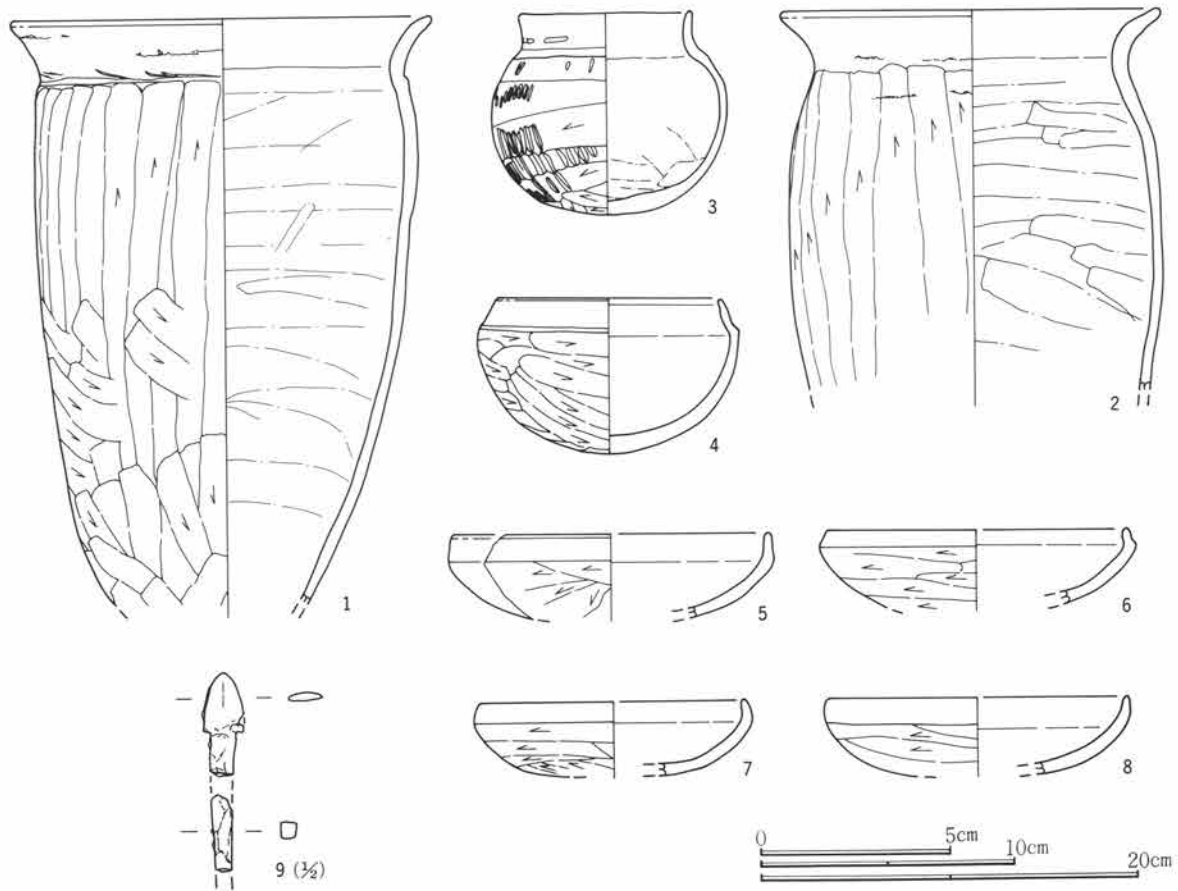
竈

- ①黒褐色土層 ローム粒を殆ど含まず。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量の焼土粒とローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。



第263図 362号住居跡(2)・床下実測図

0 1m



第264図 362号住居跡出土遺物実測図

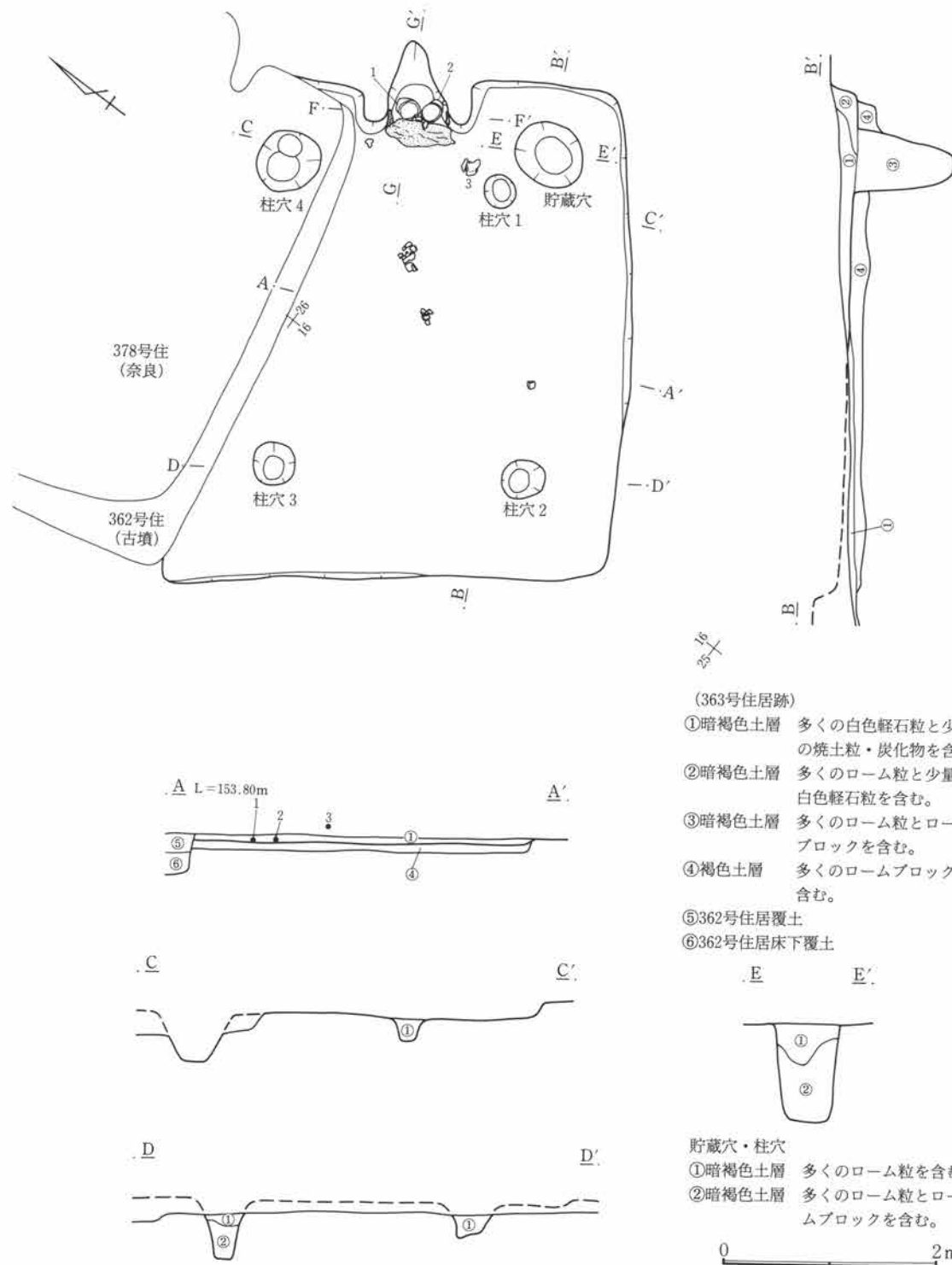
362号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
264-1 93	土 師 器 甕	床面-22 底部欠損 他完形	口 22.6 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの小さな砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにより器表面密。胴部はヘラ削りにより器肉を薄く削っている。
264-2 93	土 師 器 甕	床面+16 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。ヘラ削りにより胴部の器肉は薄くなっている。
264-3 93	土 師 器 小型壺	床面-3 完形	口 9.2 高 10.6 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色・胴部外面の一部黒色	底部～胴部外面全体でいねいなヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。ていねいなつくりと整形である。
264-4 93	土 師 器 小型壺	床面+5 ほぼ完形	口 12.0 高 8.2 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面全体ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を大量に含む。
264-5	土 師 器 坏	覆土 破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。光沢を持つ雲母状の小粒子を含む。
264-6	土 師 器 坏	床面+4 破片	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
264-7	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口(10.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。胎土は粉状でなく砂状である。
264-8	土 師 器 坏	床面+6 破片	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面に多くの黒斑あり。
264-9 108	鉄 器 鉄 鎌	竈内	長 (5.2) 幅 0.5 厚 0.4 重 2.24		鉄鎌の鎌身部と頸部分である。残りが悪い。刀身部が小さい。

363号住居跡 (第265~267図、図版39・40・93)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、26-16・17グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西側部分の多くの壁面や床面は残りが悪かった。3軒重複の住居であり本住居が最も古い。本住居の北側を古墳時代の362号住居が、また362号住居の覆土を奈良時代の378号住居が掘り込んで造られていた。新旧関係は363→362→378号住居である。



第265図 363号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面の残りは悪かったが、ロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、また床面に柱穴が4本掘られていた。柱穴4は362・378号住居の床下部分から確認された。

規模 東西4.61m、南北不明である。壁高は残りの良い東南壁面コーナーで26cmである。貯蔵穴は径60cm深さ92cmである。柱穴1は径25cm深さ24cm、柱穴2は径39cm深さ28cm、柱穴3は径37cm深さ63cm、柱穴4は径58cm深さ56cmである。

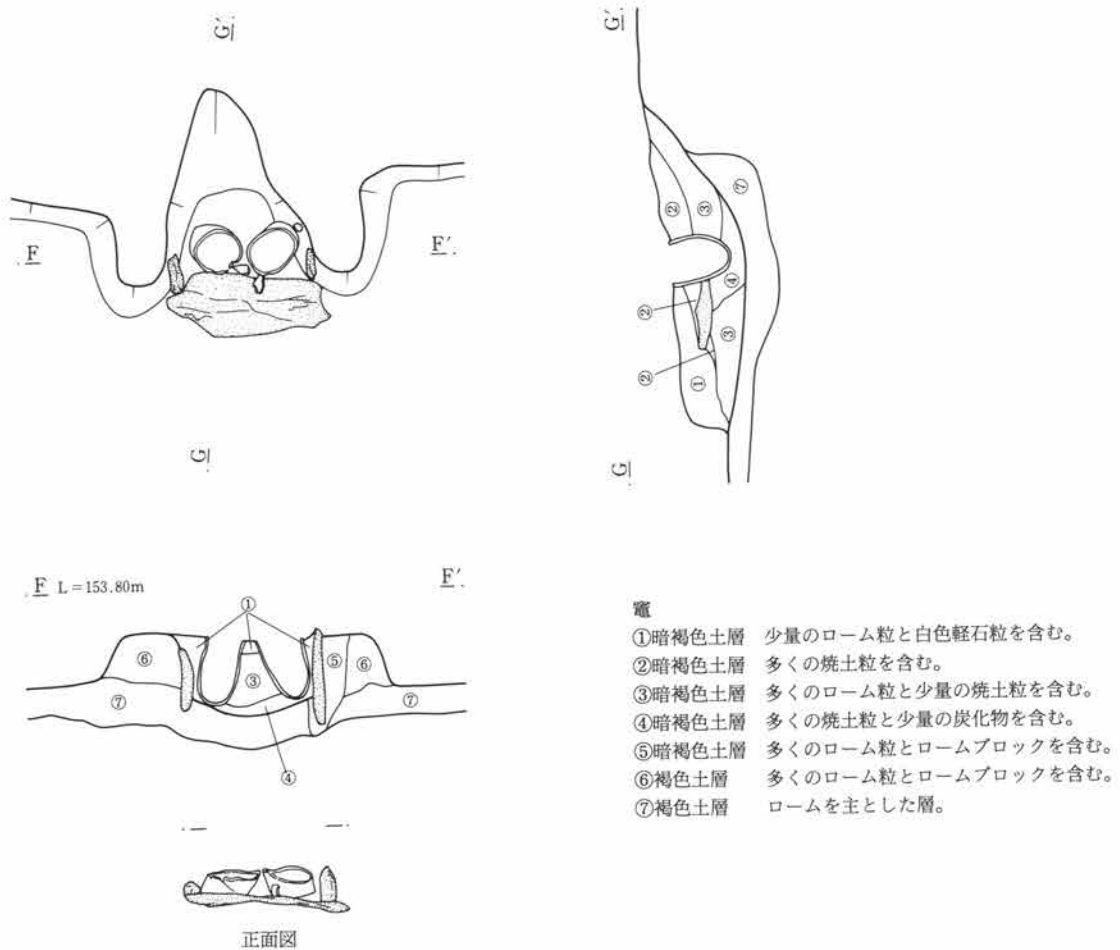
遺物 竈内の2点の甕以外は出土が少なく、破片を含めても59点である。

(竈)

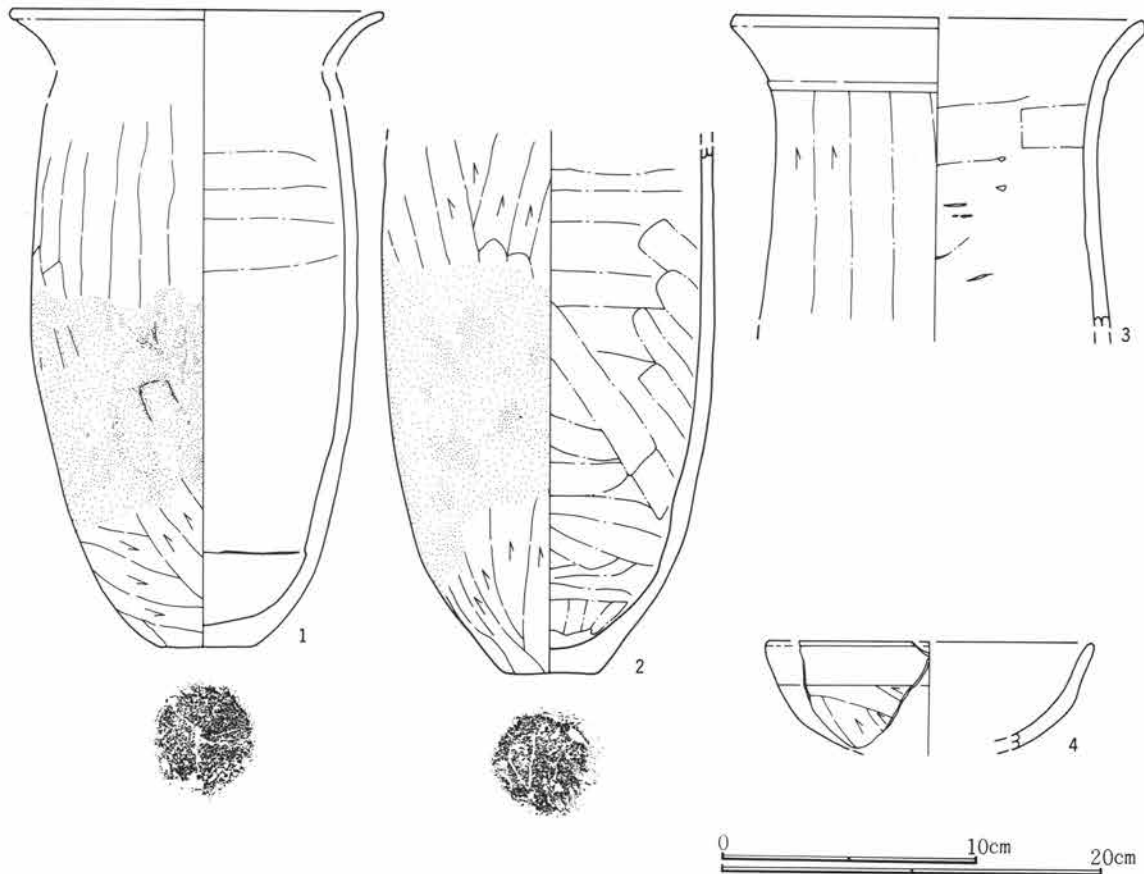
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 左右に袖石がほぼ据えられた状態で出土し、焚口部分に天井石が外れ落ちた状態で出土した。支脚石は残っていなかった。燃焼部に口縁部の欠けた細長い甕が2個、燃焼部の床面に置かれたような状態で出土した。かなり使用時の状態を留めているが、支脚石のないこと・甕が燃焼部床面に置かれたような状態で出土したこと・完形の天井石が外されたような状態で焚口部分に置かれていたこと等から、この竈は最終段階では竈としての機能が停止された状態で放棄されたものと考えたい。

規模 煙道方向91cm、燃焼部幅47cmである。



第266図 363号住居跡竈実測図



第267図 363号住居跡出土遺物実測図

363号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
267-1 93	土 甕 甕	竈内 口縁部破片 胴以下完形	口(19.8) 高(33.6) 底 5.4	①粗、2～6mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色・胴下半黒褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。内外面とも大きな砂粒が多く目立つ。胴部外面下半に多くの粘土が付着。図上復元。
267-2 93	土 甕 甕	竈内 口欠胴上部 ～底部完形	口 — 高 — 底 4.8	①粗、4～6mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデにより器表面密。
267-3	土 甕 甕	床面+16 破片	口(21.8) 高 — 底 —	①粗、1～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒はわずかに移動。器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデ。10mm前後の小石をわずかに含む。
267-4	土 甕 坏	覆土 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①やや粗、2mm前後の片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面の器表面粗れている。

368号住居跡 (第268～270図、図版40・93)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、27-15グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている東側で壁面と床面が残っていたのみで、低い西側部分の床面は残っていなかった。北側と東側を耕作に伴う溝により、竈付近の床面を耕作に伴う土坑により削られていた。また本住居の竈を取り囲むように6号掘立柱建物跡が造られており、4本の柱穴により床面と壁面が掘り込まれていた。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はほとんど残っていなかったが、他の住居同様にロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 南北約4.75m、東西不明である。壁高は残りの良い東壁面で46cmである。貯蔵穴は径83cm深さ62cmである。

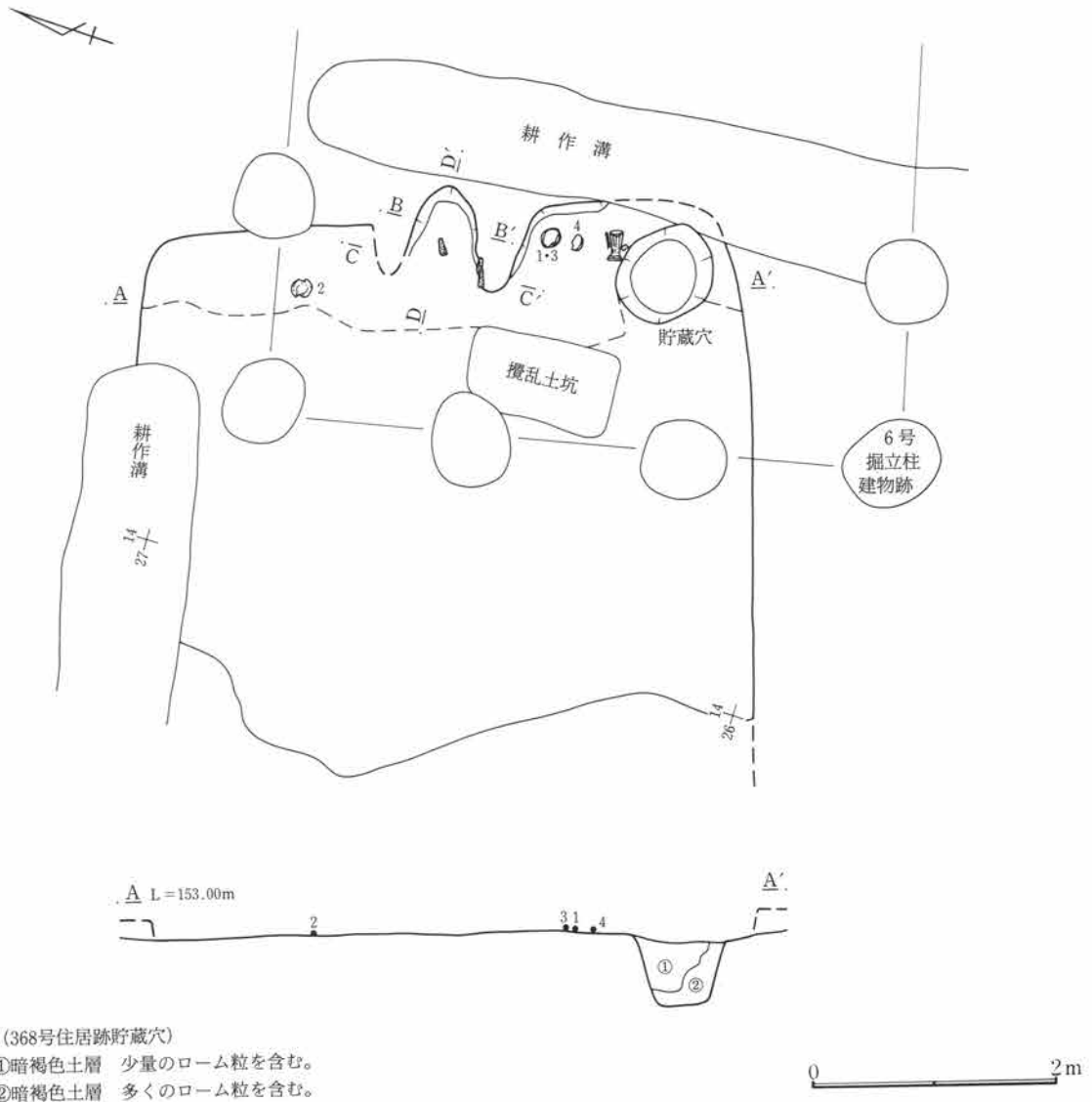
遺物 竈周辺から少量の土師器の坏が出土している。破片を含めても出土量は少なく総数31点である。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 住居同様に残りが悪かった。右の袖石が2個ほぼ据えられた状態で出土したが、左の袖石は残っていなかった。燃烧部中央部分に支脚石がほぼ据えられたと思われる状態で残っていた。竈内から出土する焼土粒は全体に多くなかった。

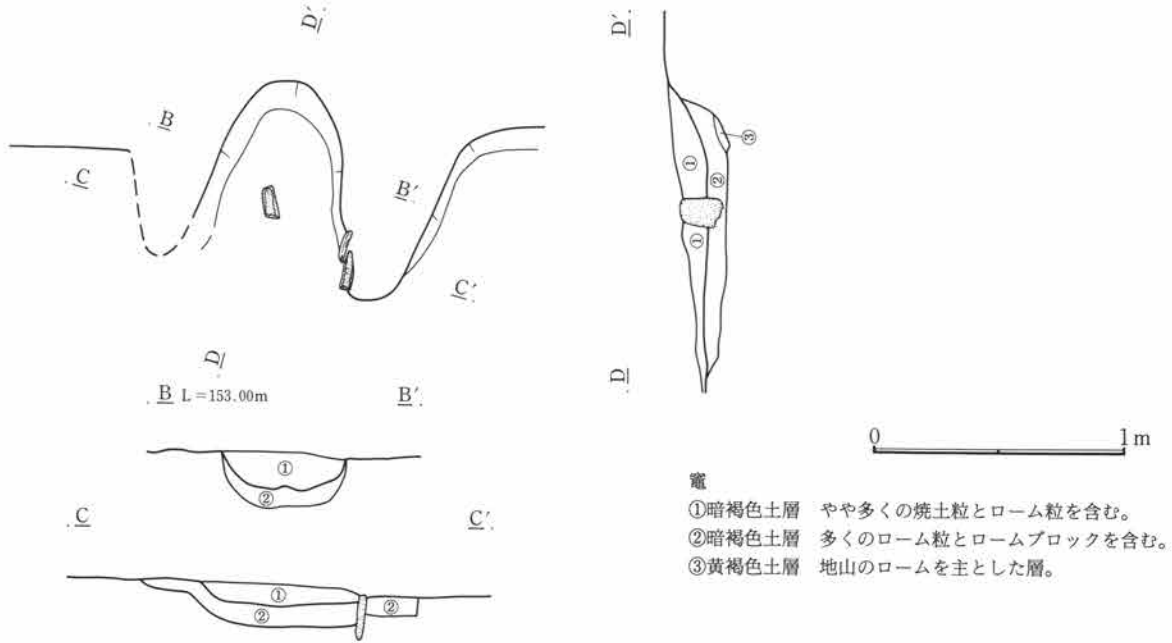
規模 煙道方向76cm、燃烧部幅58cmである。



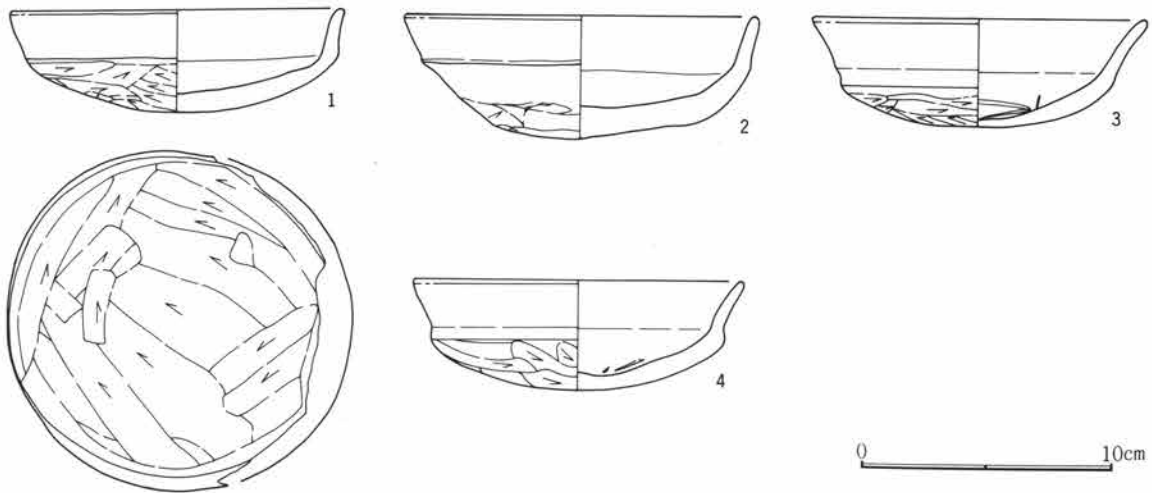
(368号住居跡貯蔵穴)

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

第268図 368号住居跡実測図



第269図 368号住居跡竈実測図



第270図 368号住居跡出土遺物実測図

368号住居跡出土遺物観察表

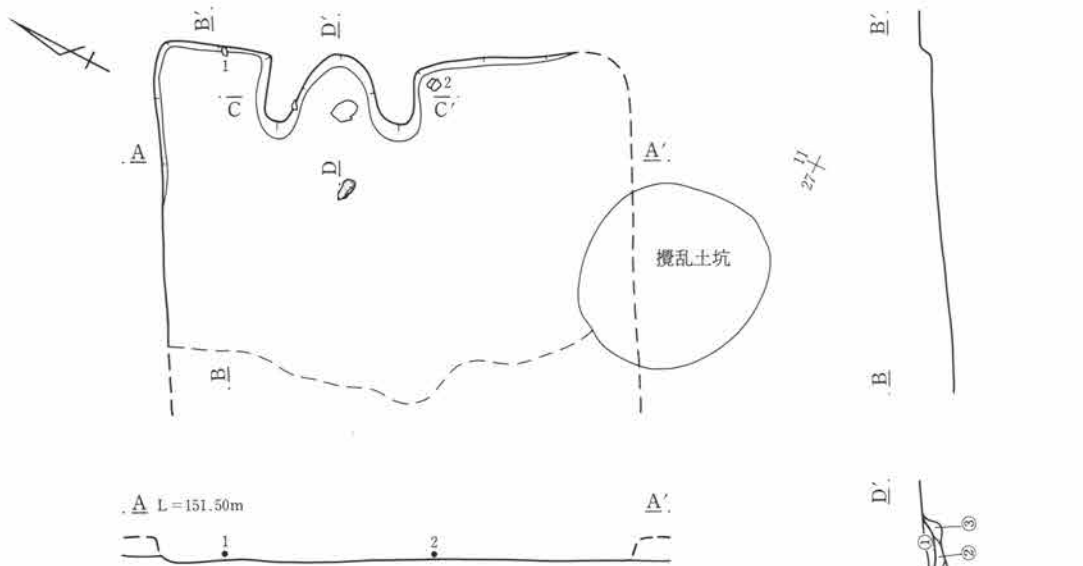
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
270-1 93	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 13.3 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰褐色・一部黒褐色	底面深いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕。 胎土の粒子が特に密である。
270-2 93	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 14.2 高 4.8 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面一部黒色	底部中央の一部ヘラ削り、他の底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土中に粘土ブロックが認められる。
270-3 93	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 13.3 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
270-4 93	土 師 器 坏	床面直上 1/3残存	口 13.2 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、粘土がササラ状を呈している。口縁部横ナデ。内面ナデ。

370号住居跡 (第271・272図、図版40)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、28-11グリッドに位置する。

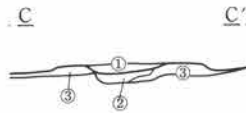
概要 住居の大部分が削り取られており、東側の竈周辺部分がほとんど床下部分に近い状態で残っていた。そのため住居範囲も多くの部分が不明である。北壁部分が発掘調査段階で確認されているが、竈に近すぎるため、おそらくもっと北に壁面があったものと考えたい。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。住居規模も不明である。東壁面に造られている竈は住居同様に大部分が削り取られており、僅かな袖部分と少量の焼土粒の存在から竈が確認された。焼土粒の出土も少なかった。

遺物 竈周辺に少量の土師器の甕や坏が出土したが、破片を含めても出土量は少なく総量で56点である。

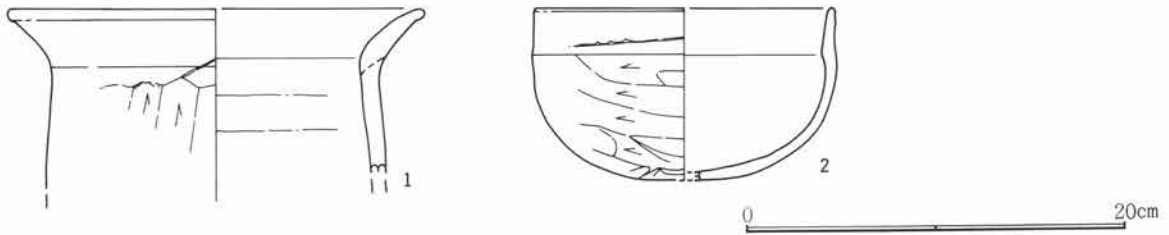


(370号住居跡竈)

- ①暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。



第271図 370号住居跡実測図



第272図 370号住居跡出土遺物実測図

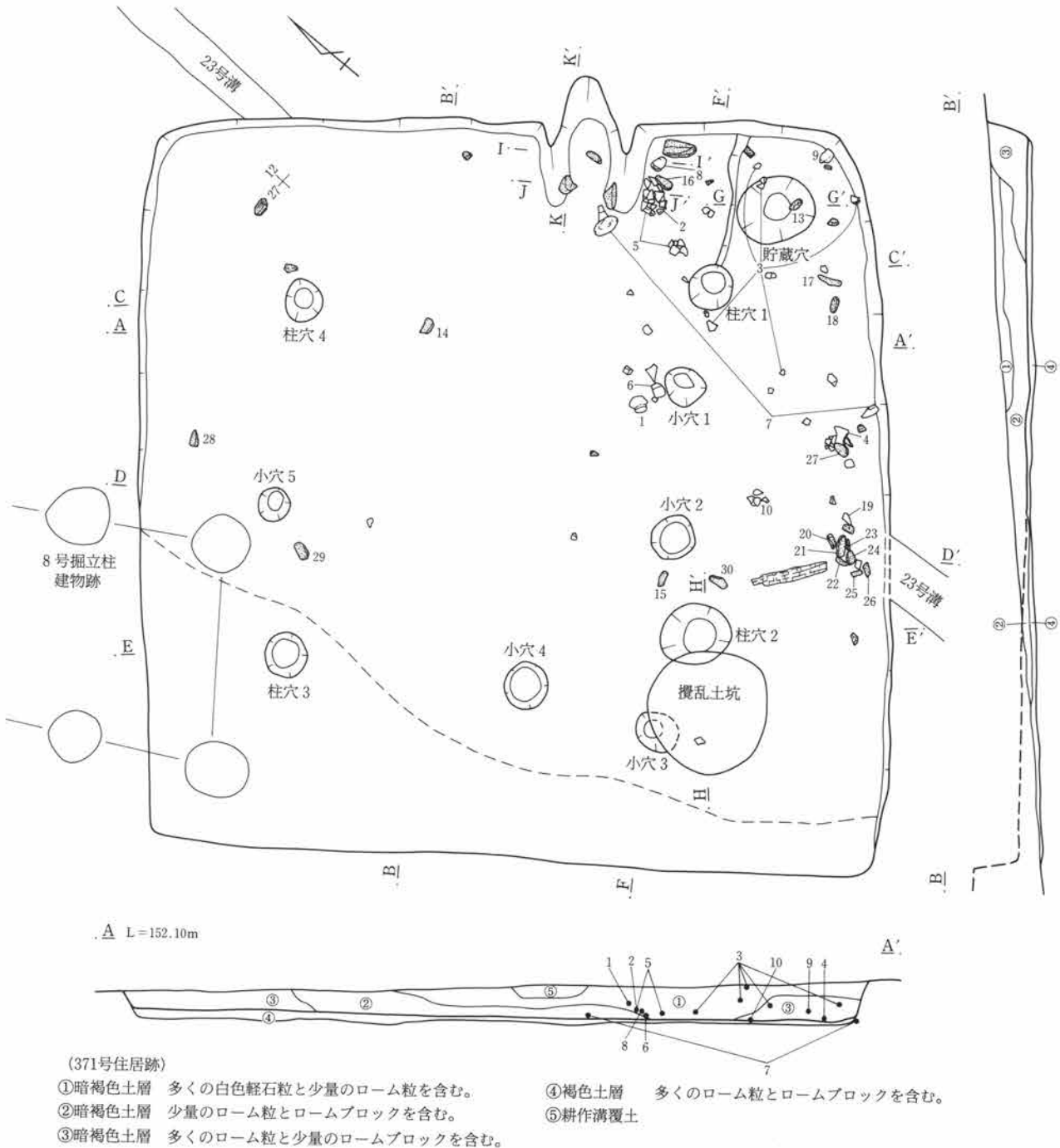
370号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
272-1	土師器 甕	床面+3	口(21.8) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。多くの砂粒が目立つ。
272-2	土師器 小型壺	床面直上 口縁部~体 部小片	口(16.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

371号住居跡 (第273~277図、図版40・41・93・94・108・114)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、26・27-12・13グリッドに位置する。

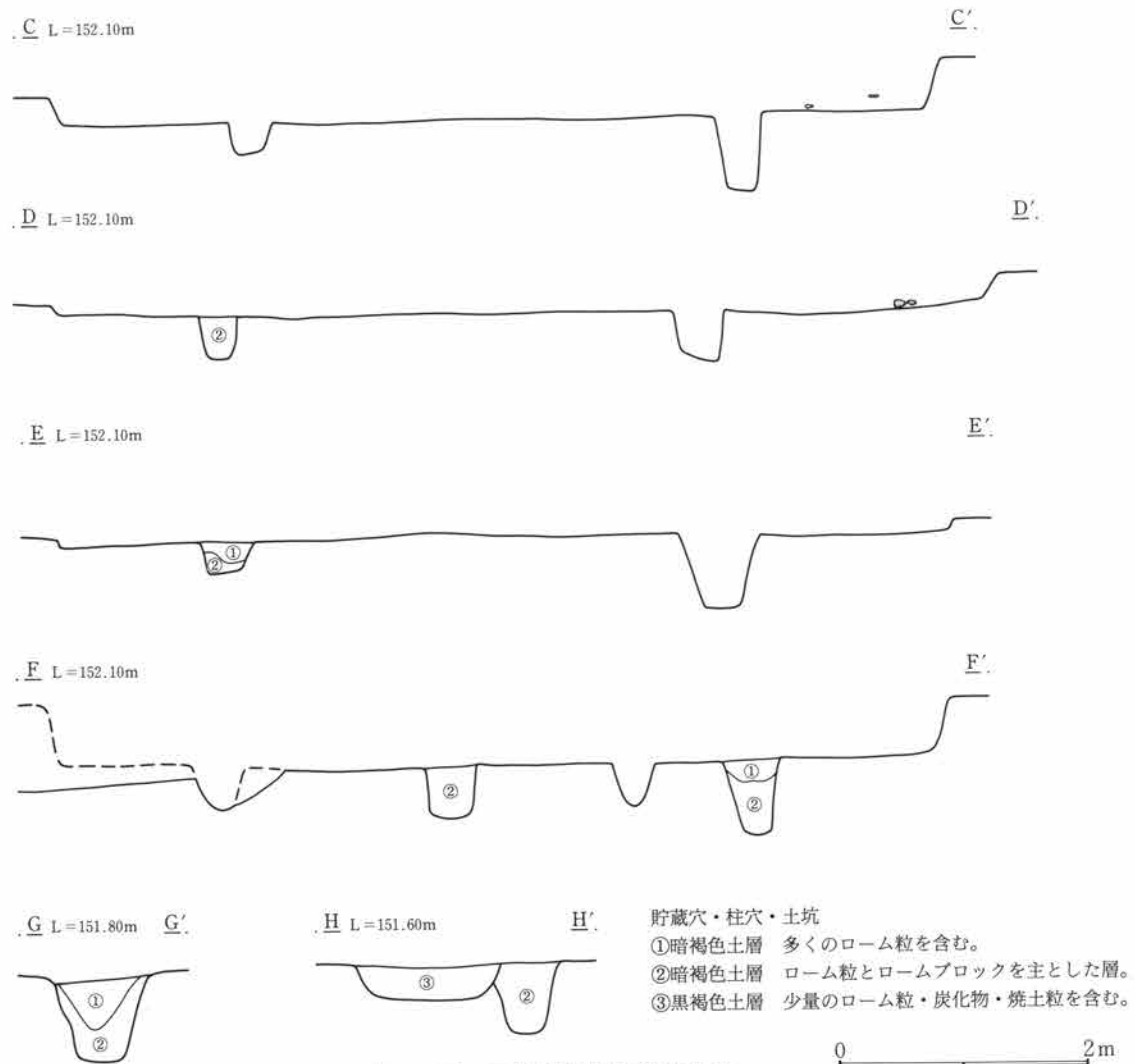
概要 住居の対角線を結ぶ線がほぼ東西・南北の軸線と一致するため、竈の造られている壁面が東壁面なのか北壁面なのか迷う住居である。僅かに東側に傾いているため竈の造られている面を東壁面と呼称した。住居は南側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている東側の残りは良いが、西壁面部分の床面と壁面は残っていなかった。23号溝により覆土と壁面が一部掘り込まれ、また西側で8号掘立柱建物跡と重複し、2本の柱穴が覆土を掘り込んでいた。



第273図 371号住居跡実測図(1)

0 2m

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第274図 371号住居跡実測図(2)

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られており、貯蔵穴の北側で直線的で帯状に僅かに高くなっている部分が認められた。柱穴が4本と柱穴に似た小穴が5本掘られていた。

規模 南北7.21m、東西不明である。壁高は残りの良い東壁面で40cmである。貯蔵穴は径75cm深さ65cmである。柱穴1は径43cm深さ57cm、柱穴2は径66cm深さ63cm、柱穴3は径41cm深さ36cm、柱穴4は径34cm深さ27cmである。小穴1は径40cm深さ34cm、小穴2は径40cm深さ40cm、小穴3は径41cm深さ35cm、小穴4は径42cm深さ42cm、小穴5は径30cm深さ39cmである。

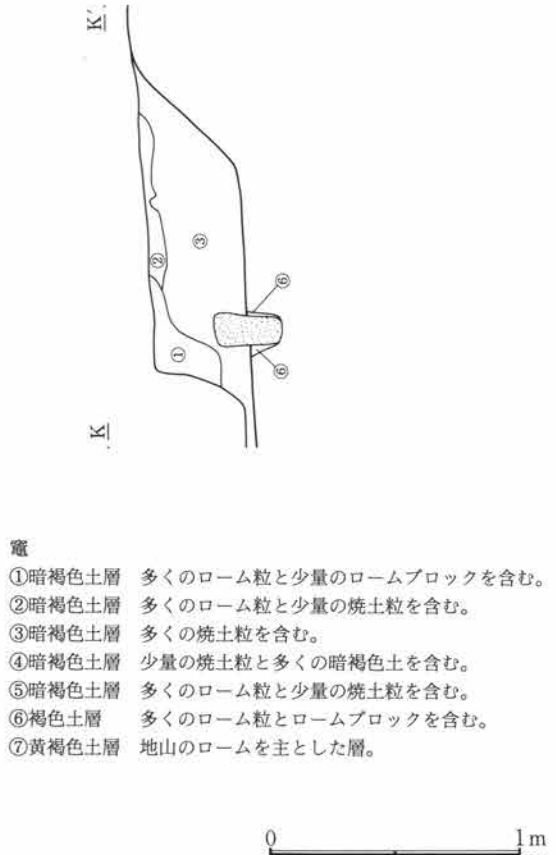
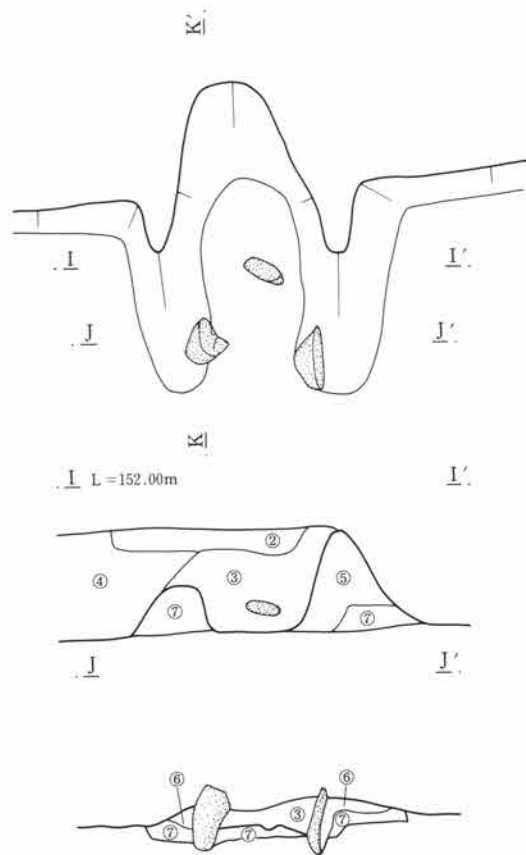
遺物 竈右側から南壁面近くの床面付近より、多くの土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

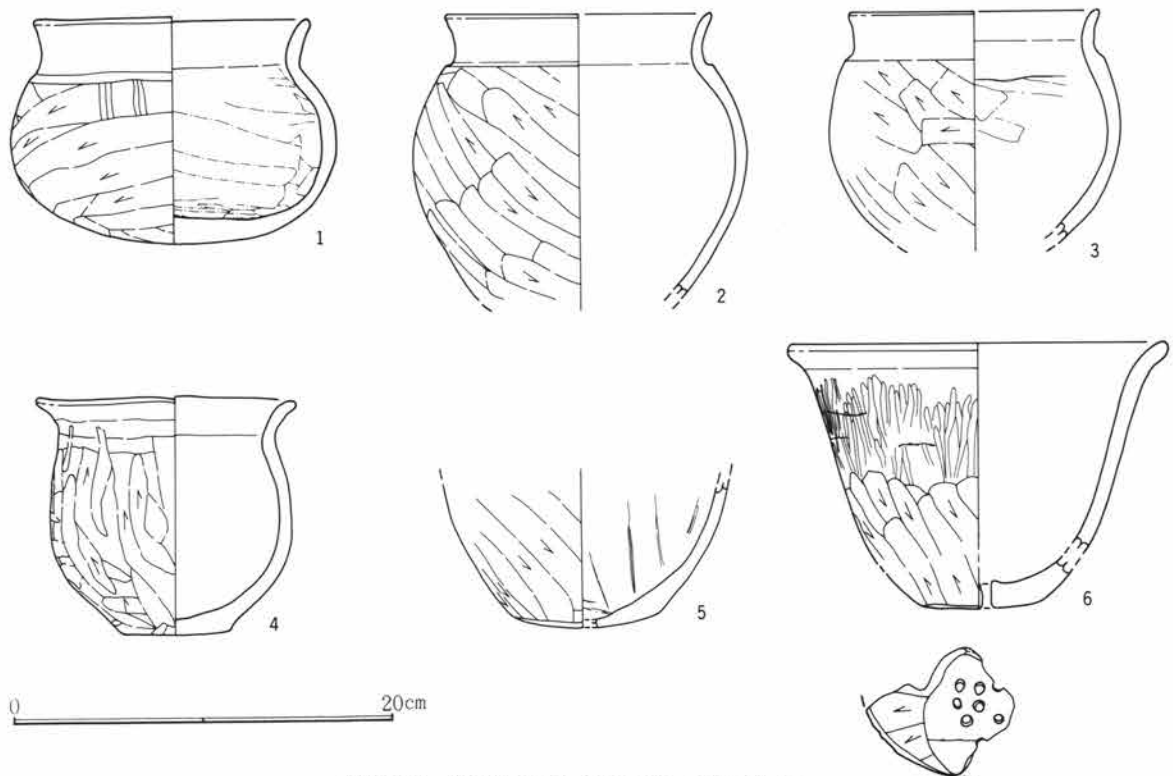
構造 左右の袖石は残っていたが、全体に残りが悪く良好な調査はできなかった。残りが悪いため平面図は2回取り直しており、整理段階でその図面から合成して作成した。竈内から出土する焼土粒は散在的に存在したが、まとめて燃烧部付近から出土するといった状態ではなかった。

規模 煙道方向122cm、燃烧部幅48cmである。

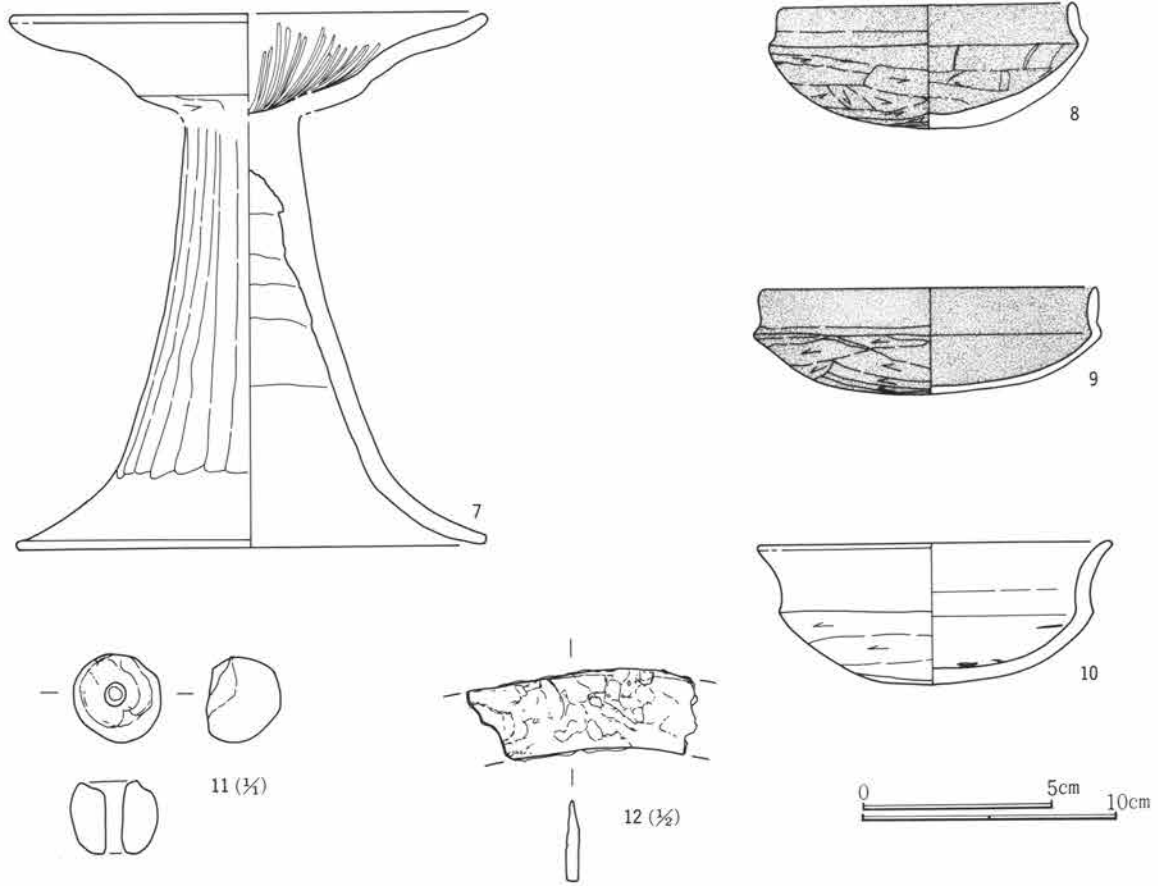


- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 少量の焼土粒と多くの暗褐色土を含む。
 - ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第275図 371号住居跡竈実測図



第276図 371号住居跡出土遺物実測図(1)



第277図 371号住居跡出土遺物実測図(2)

371号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
276-1 93	土 師 器 小 型 甕	床面直上 完形	口 14.6 高 11.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・外面一部黒褐色	底部～胴部ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。重量感のある壺である。
276-2 93	土 師 器 小 型 甕	床面直上 1/2残存	口(14.2) 高 — 底 —	①粗、2～4mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。少し歪んでいる。
276-3 93	土 師 器 小 型 甕	床面+4 1/2残存	口(13.2) 高 — 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒と粘土がササラ状になり、器表面が非常に粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。外面の一部に黒斑が認められる。
276-4 94	土 師 器 小 型 甕	床面+2 ほぼ完形	口 13.7 高 12.6 底 5.7	①粗、2～3mmの砂粒をやや多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒褐色	底面ナデ。胴部外面ナデ。部分的に光沢を持つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。やや粗雑な感じのつくりである。
276-5	土 師 器 甕	床面+4 胴部下半 底部ほぼ完	口 — 高 — 底 7.4	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	底面ヘラ削り。胴下半ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗れている。内面ナデ。ヘラの圧痕あり。底部中央がヘラ削りで薄くなり欠損している。
276-6 94	土 師 器 小 型 甕	床面+3 口～胴部 底部破片	口 20.0 高(14.0) 底(5.6)	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴下部ヘラ削り、上部棒状工具によるヘラナデ。一部輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部に径4mmの小穴が多く穿孔されている。2個体図上復元。
277-7 94	土 師 器 高 坏	床面直上 坏部1/4 脚部完形	口(18.0) 高(21.0) 底 18.6	①密、多くの雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ、下部横ナデ。筒内側下部ナデにより輪積痕を消しているが、上部にわずかに残る。坏内部ヘラ磨き。光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。坏と脚は図上で合成。
277-8 94	土 師 器 坏	床面+3 1/2残存	口 11.5 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面にぶい黄褐色	底面強いヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面がやや粗い。口縁部外面～内側底面黒漆。底部外面吸炭により黒色。

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
277-9 94	土 師 器 坏	床面+8 3/4残存	口 13.2 高 4.2 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。砂粒や粘土の移動少なく器表面密。ヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。 口縁部外面～内側底面黒漆か。底部外面吸炭。
277-10 94	土 師 器 坏	床面直上 3/4残存	口 14.0 高 5.6 底 丸底	①やや粗、1～3mmの砂粒を少 量含む。 ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部内面にヘラの圧痕。 黒斑が一部に残る。
277-11 108	石 製 品 白 玉	覆土 一部欠損	径 1.1 孔径 0.2 厚 1.0 重 1.7	③灰白色	滑石片岩。他の白玉と異なり、上下面もていねいに整形し、表面全体を磨いている。中央が穿孔されている。
277-12 108	鉄 製 品 鎌	覆土 小破片	長 (6.1) 幅 2.2 厚 0.3 重 9.15		鎌の小破片と思われる。錆化は進行しているが、原形は比較的良好に留めている。
13 114	こも編み石	貯蔵穴内	長 13.0 幅 5.3 厚 3.6 重 470		安山岩。側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
14 114	こも編み石	床面直上	長 13.1 幅 5.5 厚 3.0 重 430		緑簾緑泥片岩。断面は菱形を呈する石である。片側の側面に凹状部が認められる。
15 114	こも編み石	床面+1	長 11.6 幅 5.5 厚 2.8 重 360		緑簾緑泥片岩。断面は長方形を呈す。両側面にわずかな凹状部が認められる。
16 114	こも編み石	床面+4	長 14.6 幅 7.0 厚 3.5 重 670		緑簾緑泥片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が認められる。
17 114	こも編み石	床面直上	長 16.8 幅 6.7 厚 2.9 重 560		絹雲母石墨片岩。やや扁平な石である。片側の側面中央部にわずかな凹凸部が数個認められる。
18 114	こも編み石	床面直上	長 16.1 幅 6.4 厚 3.3 重 510		絹雲母石墨片岩。断面は三角形を呈する石である。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
19 114	こも編み石	床面-2	長 14.3 幅 7.0 厚 2.6 重 480		緑簾緑泥片岩。両側面にわずかな凹凸部が認められる。
20 114	こも編み石	床面+1	長 15.2 幅 6.2 厚 2.9 重 540		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
21 114	こも編み石	床面-1	長 15.2 幅 6.2 厚 2.4 重 340		絹雲母石墨片岩。両側面ともわずかな凹凸部が認められる。
22 114	こも編み石	床面直上	長 16.7 幅 5.5 厚 3.0 重 530		緑簾緑泥片岩。細長い石である。片側面に打ち欠かれた大きな凹凸部を持つ。
23 114	こも編み石	床面直上	長 11.4 幅 6.0 厚 3.6 重 440		点紋緑泥片岩。短く肉厚の石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
24 114	こも編み石	床面直上	長 12.5 幅 6.5 厚 1.8 重 290		点紋絹雲母石墨片岩。楕円形を呈する扁平な石である。片側の側面がわずかに凹凸を呈している。
25 114	こも編み石	床面-1	長 11.7 幅 5.6 厚 3.5 重 400		絹雲母石墨片岩。厚みのある石である。片側の側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
26 114	こも編み石	床面+21	長 11.7 幅 6.7 厚 4.2 重 520		絹雲母石墨片岩。肉厚な石である。片側の面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
27 114	こも編み石	床面+2	長 17.3 幅 7.5 厚 3.7 重 680		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈する。
28 114	こも編み石	床面+15	長 13.0 幅 7.5 厚 3.4 重 550		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかな凹状を呈する。
29 114	こも編み石	床面+11	長 15.8 幅 6.8 厚 3.7 重 790		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚の石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
30 114	こも編み石	床面+18	長 14.6 幅 5.6 厚 2.5 重 400		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。

382号住居跡 (第278～283図、図版41・42・94・95・110・114)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、35-13・14グリッドに位置する。

概要 住居の西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている東側の残りは良いが、西壁面部分の床面と壁面は残りが悪かった。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側で通常貯蔵穴の掘られている位置に貯蔵穴は掘られていなく、やや南側に下がった位置に掘られていた。竈の右側には胴下部が欠損している丸胴甕の胴上部分が置かれていた。柱穴は掘られていなかった。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西4.51m、南北4.18mである。壁高は残りの良い東北コーナー部分で29cmである。貯蔵穴は径42cm
深さ38cmである。

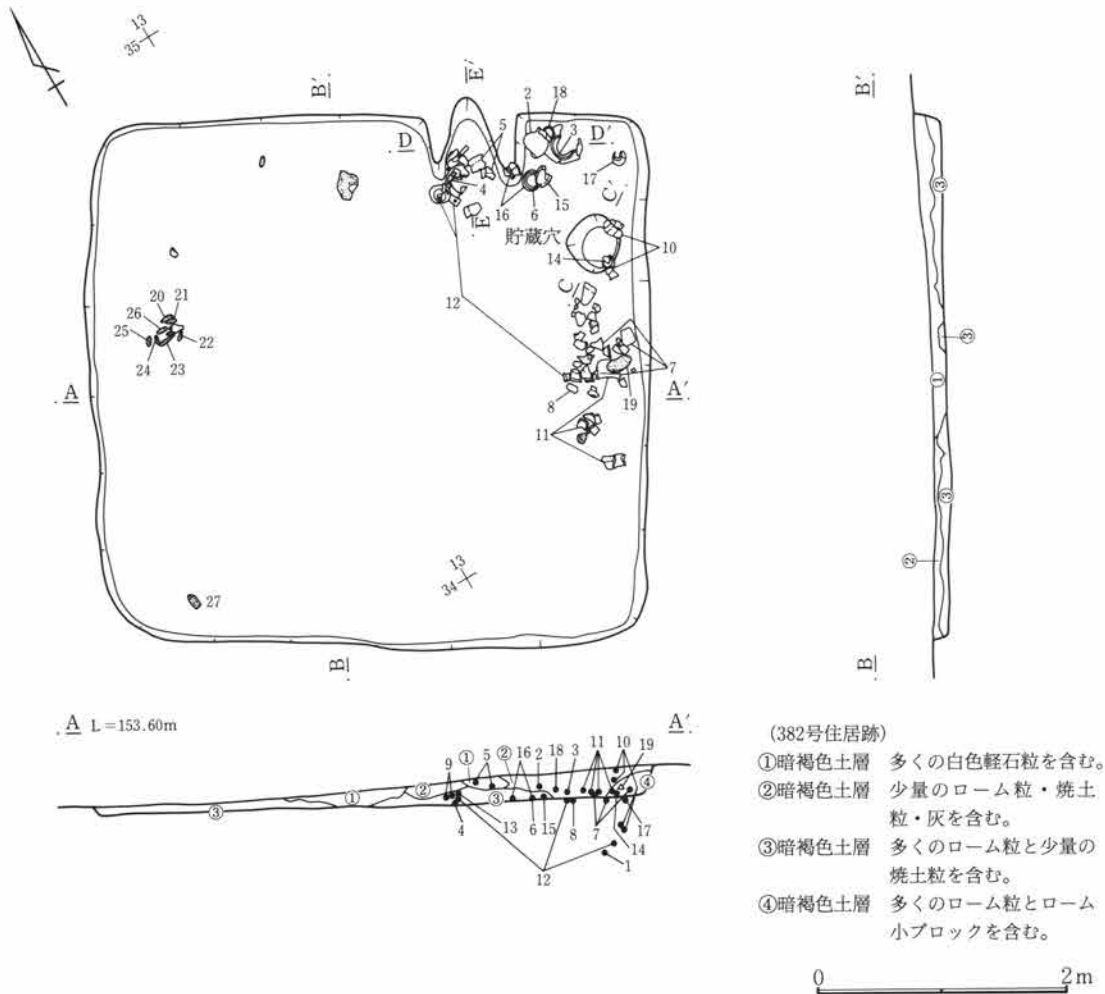
遺物 竈左袖手前と竈内より高坏が、竈内や竈周辺から多くの土師器の甕が出土している。貯蔵穴内からは
ほぼ完形の丸胴の甕が小型甕と高坏の破片とともに出土している。

(竈)

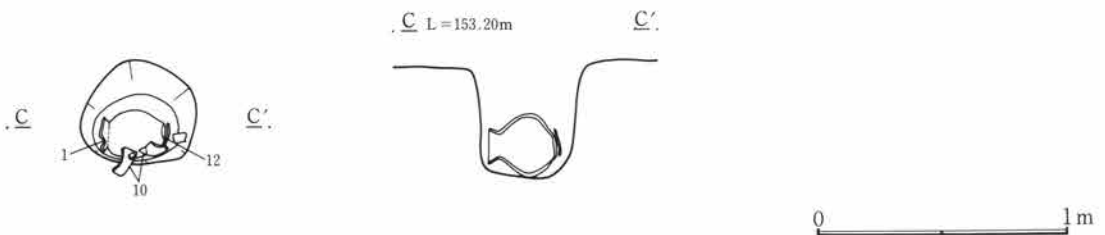
位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 袖石や天井石等に使われていない。多くのローム粒とロームブロックを含む灰褐色粘質土を使用して
造られた竈である。残りは比較的良好であった。竈内から出土する焼土粒は多くなかった。

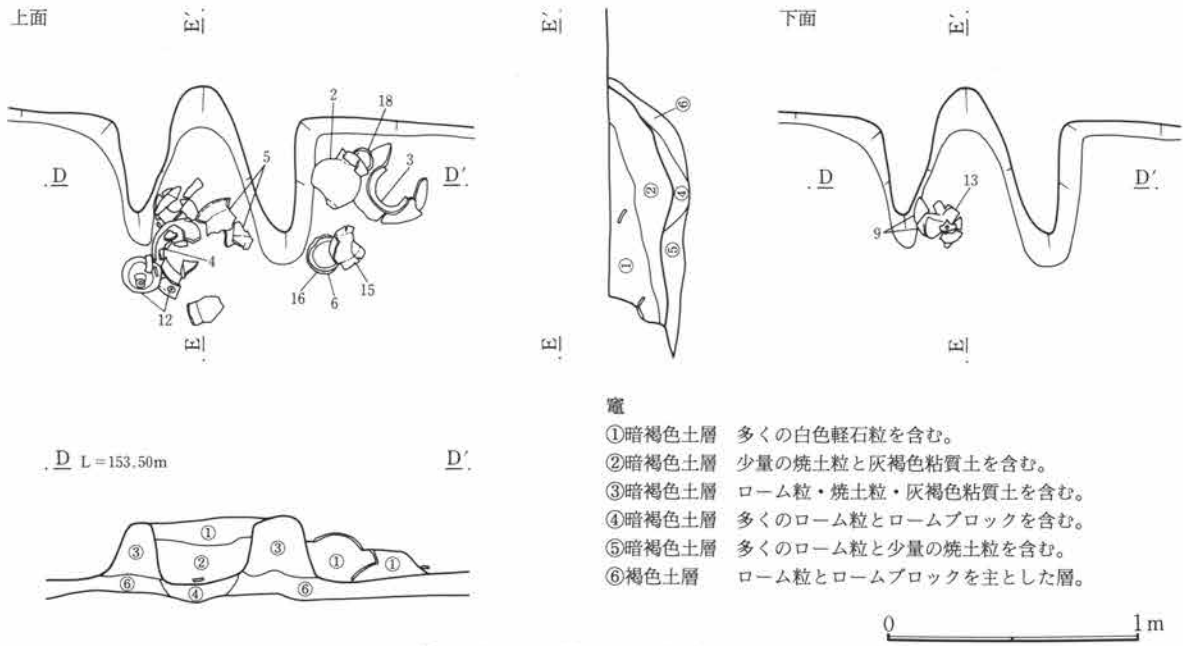
規模 煙道方向72cm、燃烧部幅40cmである。



第278図 382号住居跡実測図



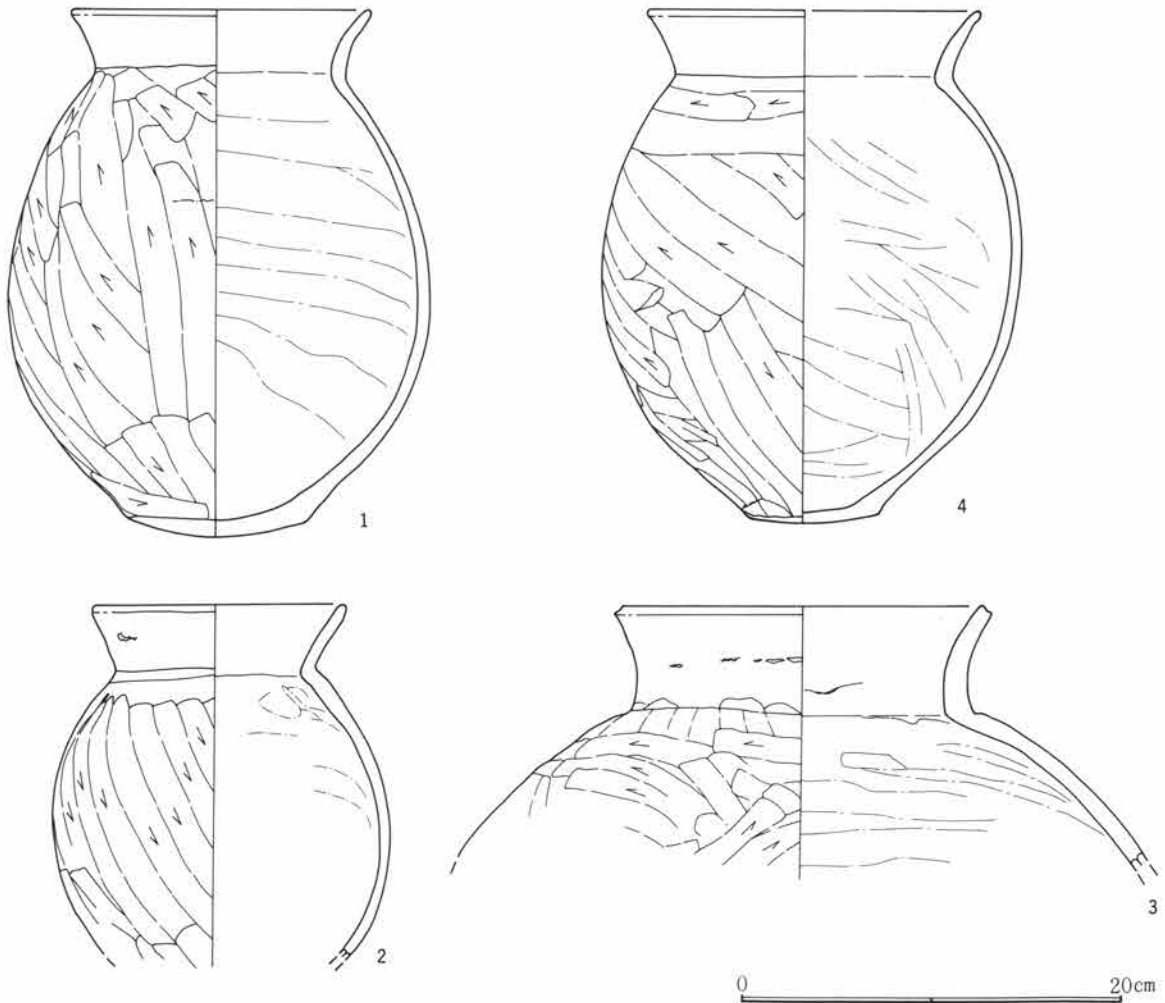
第279図 382号住居跡貯蔵穴実測図



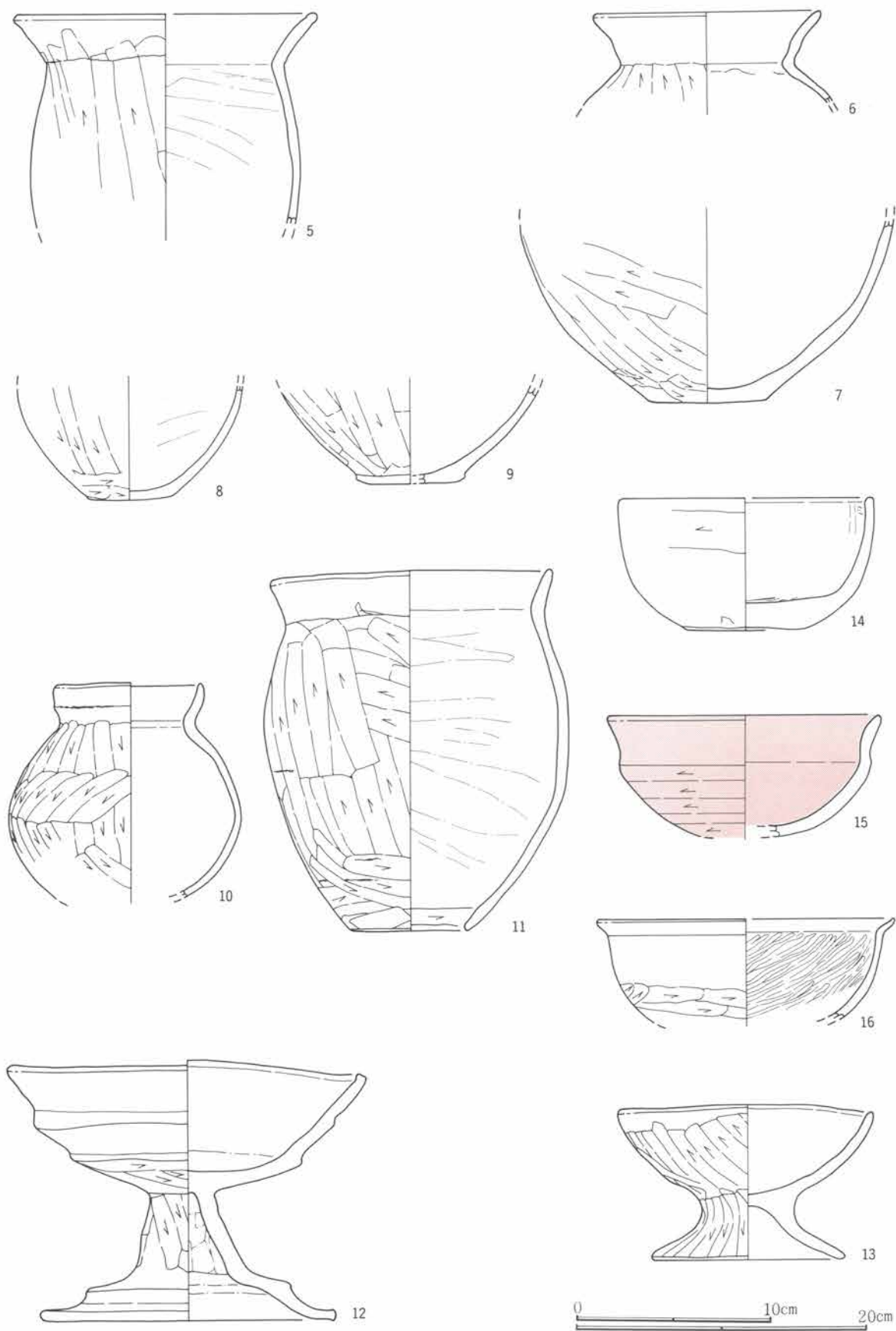
竈

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の焼土粒と灰褐色粘質土を含む。
- ③暗褐色土層 ローム粒・焼土粒・灰褐色粘質土を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。

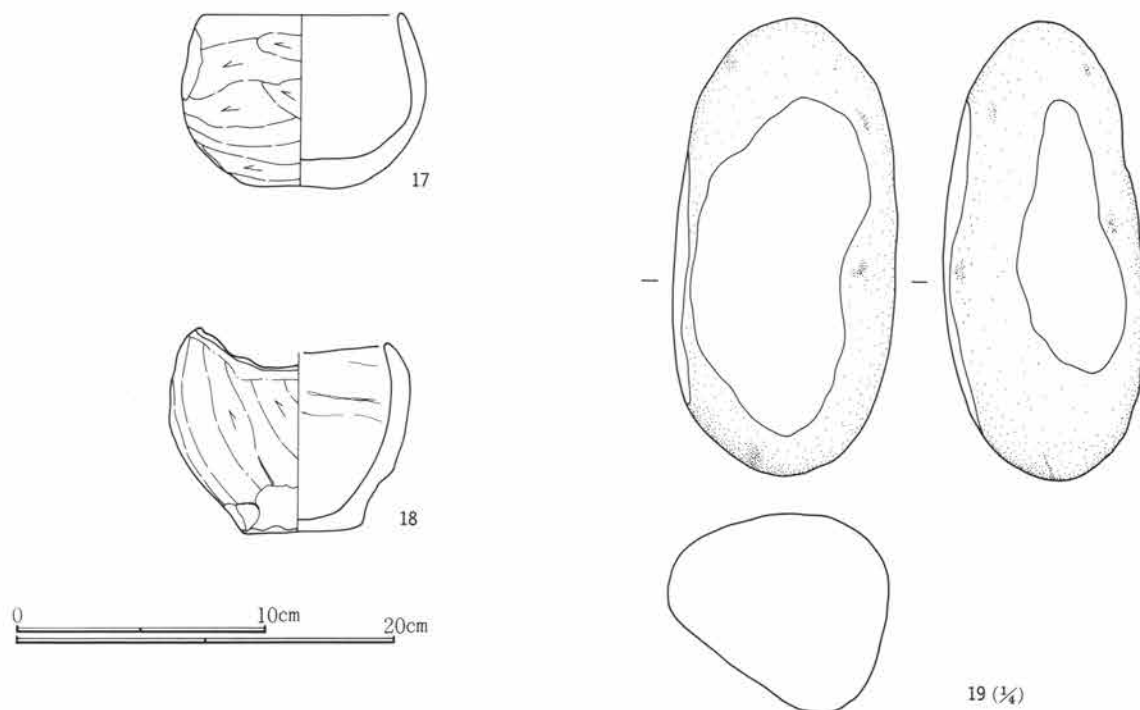
第280図 382号住居跡竈実測図



第281図 382号住居跡出土遺物実測図(1)



第282図 382号住居跡出土遺物実測図(2)



第283図 382号住居跡出土遺物実測図(3)

382号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
281-1 94	土 師 器 甕	床面+44 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴 $\frac{3}{4}$ 底完形	口 16.0 高 28.1 底 9.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密。
281-2 94	土 師 器 甕	床面+12 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.7 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。少し歪んでいる。
281-3 95	土 師 器 甕	床面+8 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上部 $\frac{1}{3}$	口 20.2 高 — 底 —	①粗、3~4mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ナデ。ヘラ削りやヘラナデは観察できない。口縁部横ナデ。口唇部は平らで中央部がやや凹状を呈する。内面ナデ。ヘラ削りやヘラナデの痕跡を残さないでいねいな整形。
281-4 94	土 師 器 甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴 部 $\frac{1}{2}$ 底完形	口(17.6) 高 27.5 底 7.0	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・胴部下半にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。
282-5	土 師 器 甕	床面+10 $\frac{1}{2}$ 残存	口(21.4) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの赤色粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
282-6 94	土 師 器 甕	床面直上 口縁ほぼ完 胴部 $\frac{1}{3}$ 残存	口 16.0 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。胴内面ナデ。一部に輪積痕が残る。
282-7 95	土 師 器 甕	床面直上 胴下半 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 — 高 — 底 8.3	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色・一部黒色	底面ナデ。砂粒が多く一見砂底を思わせる。胴部外面ヘラナデにより器表面密。内側表面は多く剝離している。
282-8	土 師 器 小型 甕	床面直上 胴下部破片 底部完形	口 — 高 — 底 6.0	①粗、1mm前後の砂粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部ヘラ削り。器表面は比較的密である。
282-9 94	土 師 器 甕	床面+3 胴下半~底 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 (7.5)	①粗、3~4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り。胴外面強いヘラ削りにより器内を薄くしている。砂粒の移動は少なく器表面の粗れも少ない。
282-10 94	土 師 器 小型 甕	床面+13 床面-20 底部欠損	口 10.4 高 — 底 —	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部上半が直立気味に立ち上がる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
282-11 94	土師器 甗	床面+2 1/2残存	口 19.5 高 25.1 底 8.0	①やや粗、2~3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部黒褐色	胴部外面下半ヘラ削り、上面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。胴部下端ヘラ削り。胴部中央に最大径を持つ出土例の少ない甗である。
282-12 95	土師器 高坏	床面+2 床面-39 完形	口 19.0 高 13.2 底 15.6	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色・内側底部黒色	脚筒部外面ヘラナデ。脚下部横ナデ。坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口唇部中央がやや凹状を呈する。
282-13 95	土師器 高坏	床面+5 1/2残存	口 13.0 高 8.0 底 10.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	脚部外面ヘラナデ。内面ナデ。坏部外面ヘラナデ。内面は器表面が斑点状に剥離している。
282-14 95	土師器 坏	床面+7 口縁部小破 片底部完形	口(13.5) 高 6.7 底 6.2	①密、1mm前後の赤色粒を大量に含む。②酸化焰、硬質③暗赤褐色	底面ナデ、一部ヘラナデ。体部ナデ、一部ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器形・整形・胎土とも異質の坏である。
282-15 95	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 14.2 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③外面赤色・断面橙色	底面粗れているが、残りの良好な器面はヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。風化部分が多いが、内外面赤色塗彩されている。
282-16	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(15.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③明赤褐色	底面下部ヘラ削り、上部ナデ。口縁部横ナデ。内面全体ヘラ磨き。
283-17 95	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 8.2 高 6.9 底 5.0	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色・一部黒褐色	底面ナデ、一部ヘラ削り。体部弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
283-18 95	土師器 手捏坏	床面+5 1/2残存	口(8.0) 高 7.0 底(4.8)	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③内面橙色・外面にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部ヘラナデ。内面ナデ。全体に歪んでいる小さな坏である。
283-19 110	石製品 砥石	床面+6	長 24.1 幅 11.8 厚 10.3 重 4020		流紋岩。三面を砥石として使用している。自然石で他に加工痕なし。
20 114	こも編み石	床面直上	長 11.1 幅 3.5 厚 1.6 重 110		点紋絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない。片側の側面中央部にわずかな凹凸が認められる。
21 114	こも編み石	床面直上	長 11.0 幅 3.4 厚 1.5 重 110		絹雲母石墨片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈する。
22 114	こも編み石	床面直上	長 9.5 幅 2.6 厚 1.4 重 70		絹雲母片岩。一部赤色を帯びている。やや弓形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
23 114	こも編み石	床面直上	長 10.8 幅 3.2 厚 1.4 重 90		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部に小さくわずかな凹凸部が認められる。
24 114	こも編み石	床面直上	長 9.3 幅 2.7 厚 1.8 重 80		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
25 114	こも編み石	床面直上	長 8.8 幅 2.6 厚 1.6 重 70		緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
26 114	こも編み石	床面直上	長 10.0 幅 3.4 厚 1.5 重 70		点紋緑泥片岩。楕円形の偏平な石である。一面全体が剥離している。側面わずかに凹凸部が認められる。
27 114	こも編み石	床面直上	長 10.3 幅 2.3 厚 2.0 重 80		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。

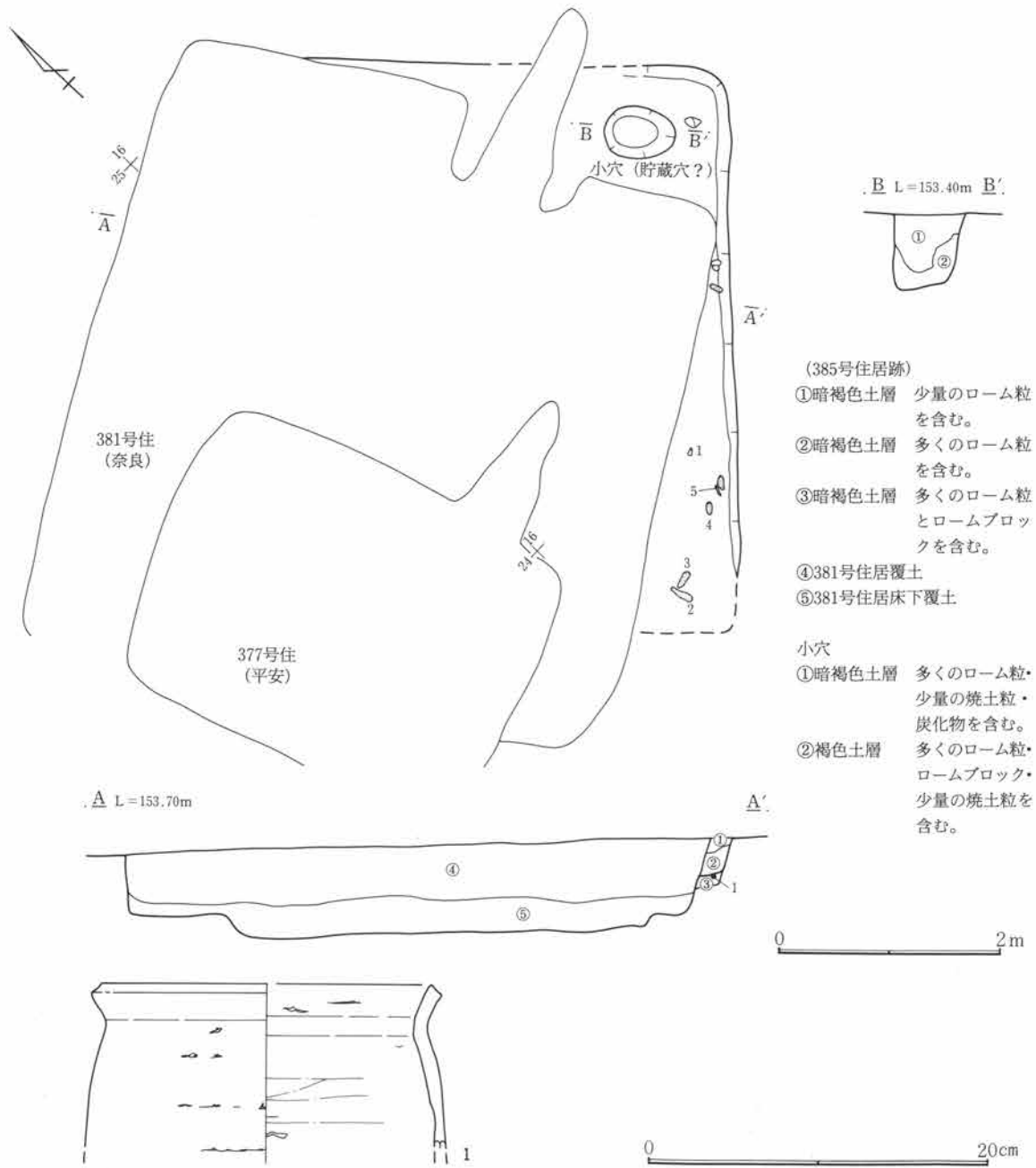
385号住居跡(第284図、図版42・115)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、24・25-17グリッドに位置する。

概要 本住居の大部分は西側に重複している奈良時代の381号住居により、床下部分まで深く削りとられており、南東部分が僅かに残っているだけであった。また381号住居は西側で平安時代の377号住居と重複しており、その部分は床下土坑まで深く掘り込まれていた。新旧関係は385→381→377号住居であった。竈も残っていなかったが、南東コーナー部分に貯蔵穴とも思われる小穴が掘られていたため、東壁面に造られていたことも考えられるが不明である。柱穴も不明である。

規模 東西南北とも不明である。壁高は南東コーナー部分で38cmである。

遺物 図示できたのは土師器の甗1点である。破片総数は10片と少ない。



第284図 385号住居跡・出土遺物実測図

385号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
284-1	土 師 器 甕	覆土 破片	口(20.8) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質③にぶい橙色	胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴部外面に輪積痕が残る。
2 115	こも編み石	床面+1	長 17.8 幅 7.3 厚 3.4 重 770		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に打ち欠かれたような凹状部が認められる。
3 115	こも編み石	床面直上	長 17.4 幅 8.3 厚 3.4 重 700		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面は縦に大きく剝離し、他の側面はわずかに凹状部が認められる。
4 115	こも編み石	床面直上	長 18.2 幅 7.9 厚 3.3 重 810		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹凸状を呈している。
5 115	こも編み石	床面+2	長 16.5 幅 6.8 厚 2.9 重 530		絹雲母石墨片岩。1/4程度欠損。側面に明瞭な凹状部は認められない。

387号住居跡 (第285・286図、図版42・95)

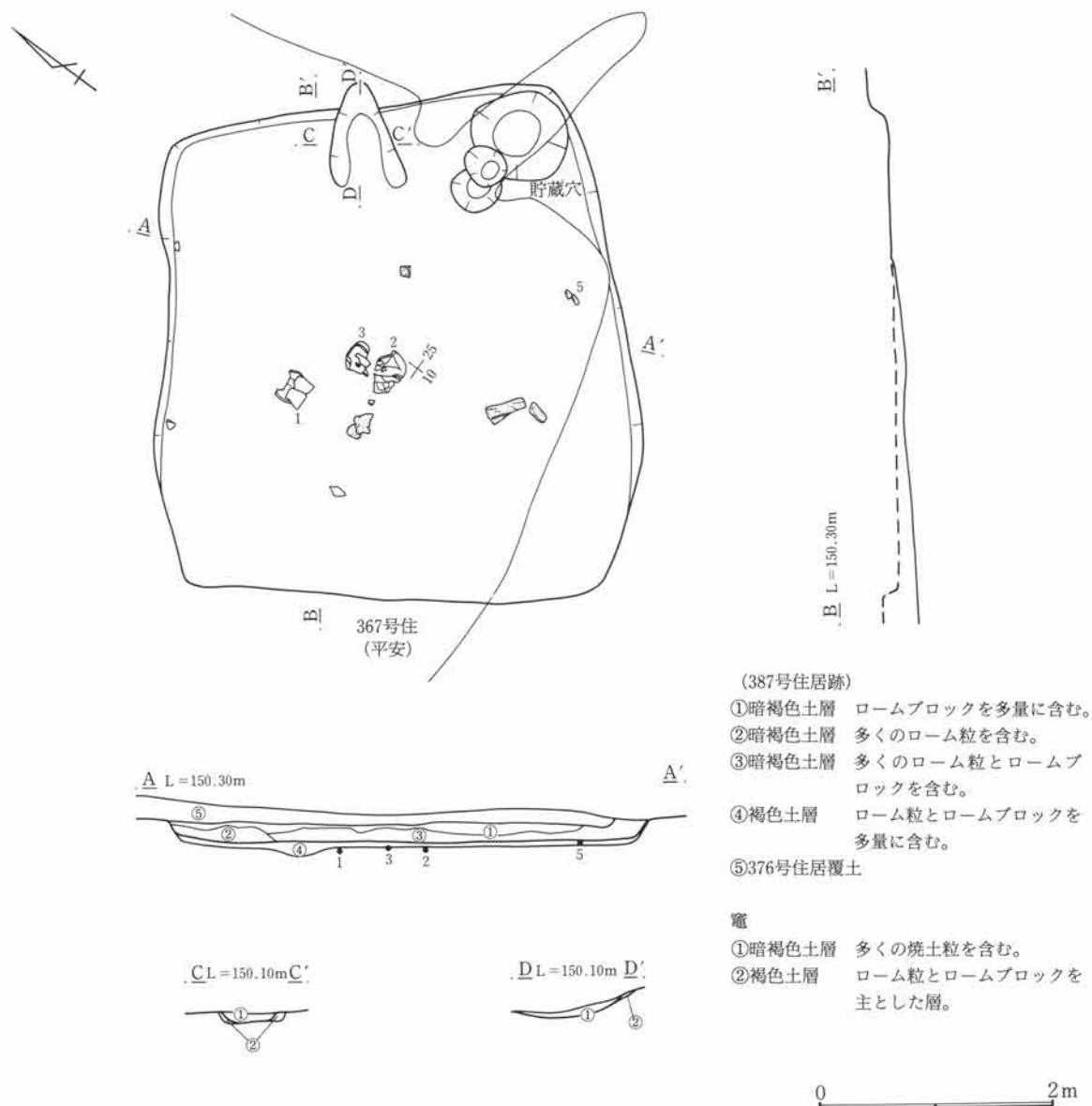
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、25・26—10・11グリッドに位置する。

概要 住居の大部分が平安時代の367号住居と重複しており、367号住居により覆土の多くが削り取られていた。竈も上面が削られてほとんど残っていなかったが、東壁面中央部に下部が残っており、多くの焼土粒が出土した。

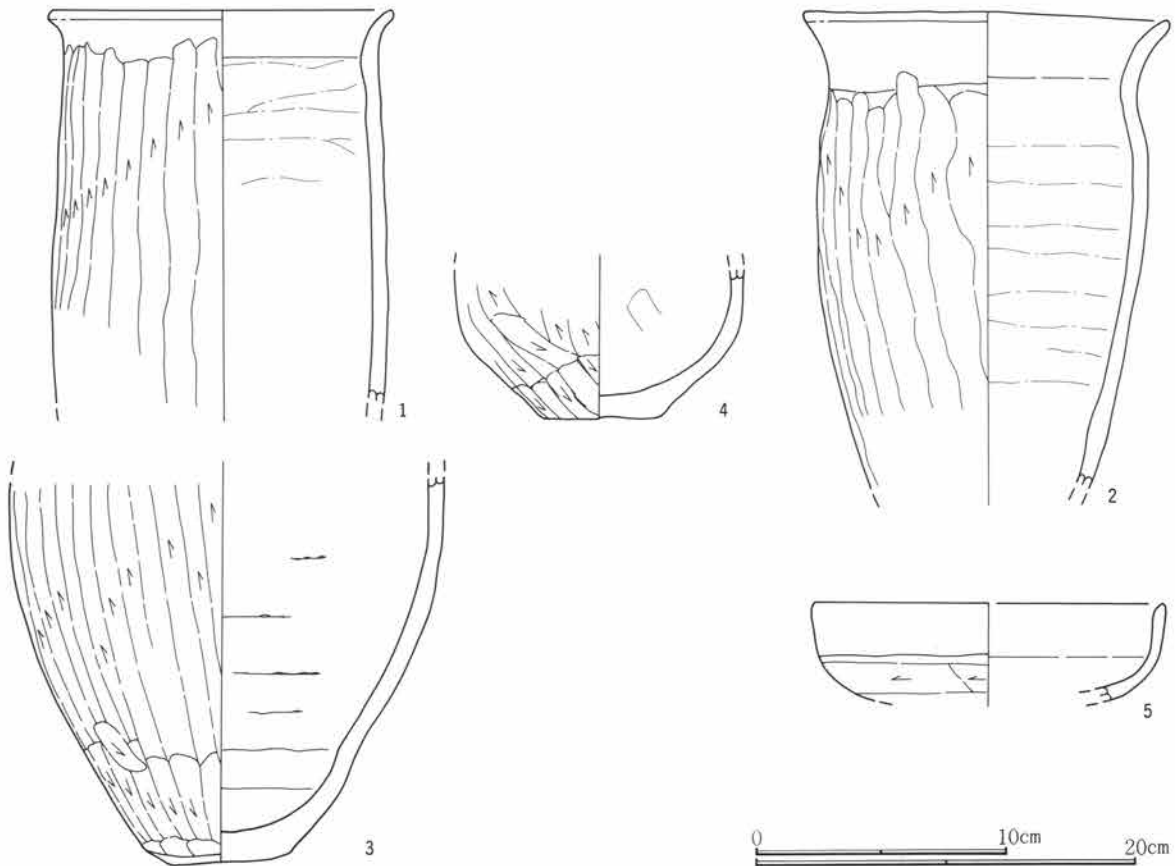
構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られており、貯蔵穴の西に接して2本の小穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西推定4.10m、南北推定3.70mである。壁高は残りの良い南壁面で36cmである。貯蔵穴は径75cm深さ30cmである。

遺物 床面中央部から土師器の甕がまとまって出土している。破片の出土量は少ない。



第285図 387号住居跡実測図



第286図 387号住居跡出土遺物実測図

387号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
286-1 95	土師器 甕	床面直上 1/5残存	口 18.4 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③にぶい橙色・一部外面黒褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒や粘土が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
286-2 95	土師器 甕	床面直上 1/5残存	口 19.4 高 — 底 —	①密、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焙、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなし。器表面密でヘラの単位明瞭。内面ナデにより器表面密。胎土にわずかな砂粒しか含まないやや異質な甕。
286-3 95	土師器 甕	床面直上 胴部1/3 底部完形	口 — 高 — 底 7.5	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③内面橙色・外面にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面細かな数多くのヘラ削り。ヘラの単位は明瞭でない。器表面に多くの砂粒が目立つ。内面ナデにより器表面密。
286-4	土師器 甕	覆土 胴下半1/3 底部完形	口 — 高 — 底 6.2	①やや粗、1mm前後の石英と長石粒を少量含む。 ②酸化焙、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴外面ヘラナデ。砂粒の移動は少なく器表面密。内面ナデにより器表面密。
286-5	土師器 坏	床面直上 口縁部1/3 底部1/5残存	口(16.0) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③灰黄色	底面ヘラ削り。多くの砂粒と粘土が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。色調が還元に近い。

388号住居跡 (第287~289図、図版42・43・96・108)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、36・37-13・14グリッドに位置する。

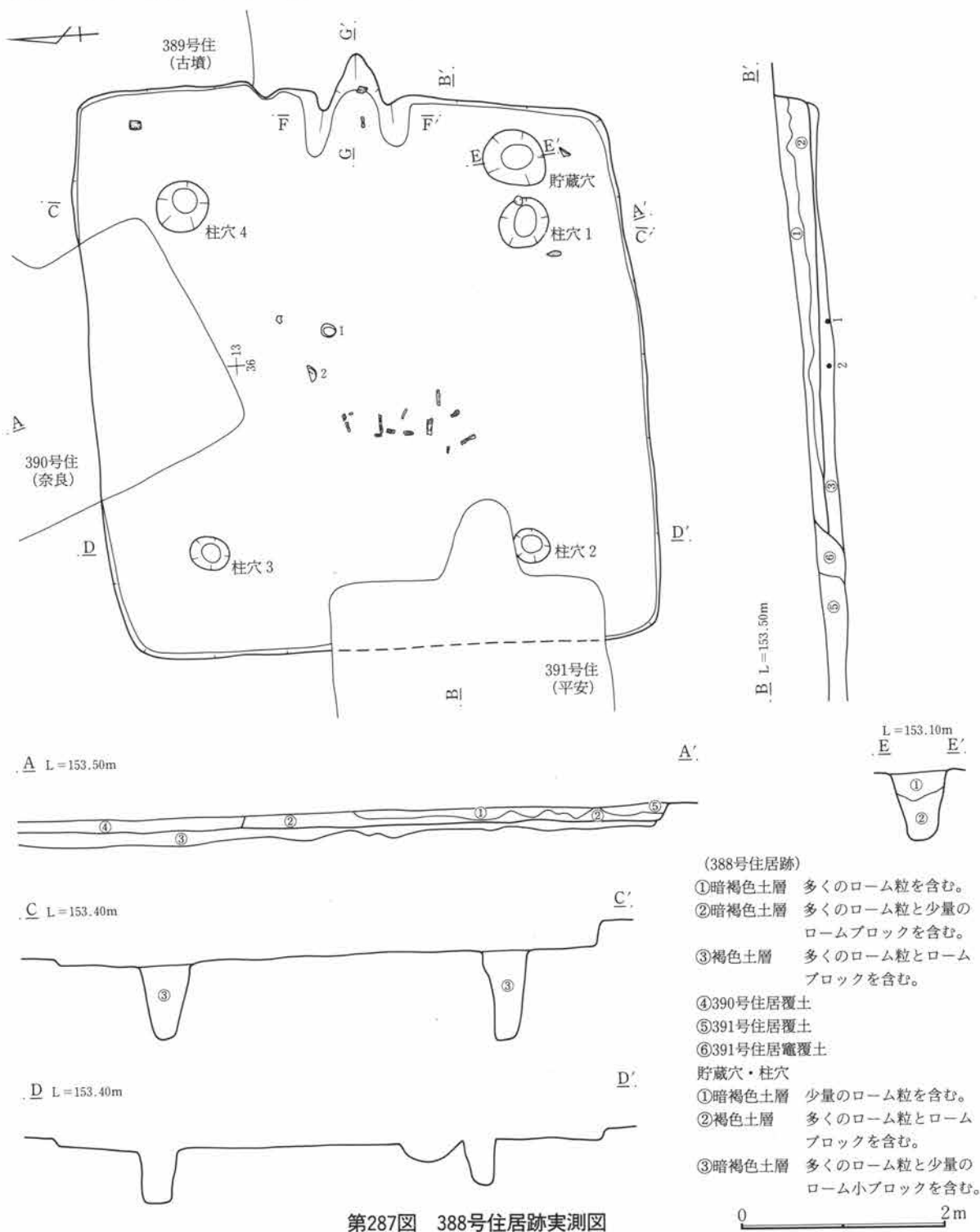
概要 4軒の重複している住居の中の1軒である。北東部分で同じ古墳時代の389号住居の南西部分を掘り込み、北壁中央部付近を奈良時代の390号住居により床面の一部と覆土が掘り込まれていた。さらに西壁付近を平安時代の391号住居により床下部分まで掘り込まれていた。新旧関係は389→388→390→391号住居である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。

規模 東西5.52m、南北5.30mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で37cmである。貯蔵穴は径58cm深さ76cmである。柱穴1は径48cm深さ83cm、柱穴2は径36cm深さ48cm、柱穴3は径38cm深さ58cm、柱穴4は径50cm深さ86cmである。

遺物 少量の土師器の坏と甕が出土している。破片の出土も少なく破片総数は40片である。



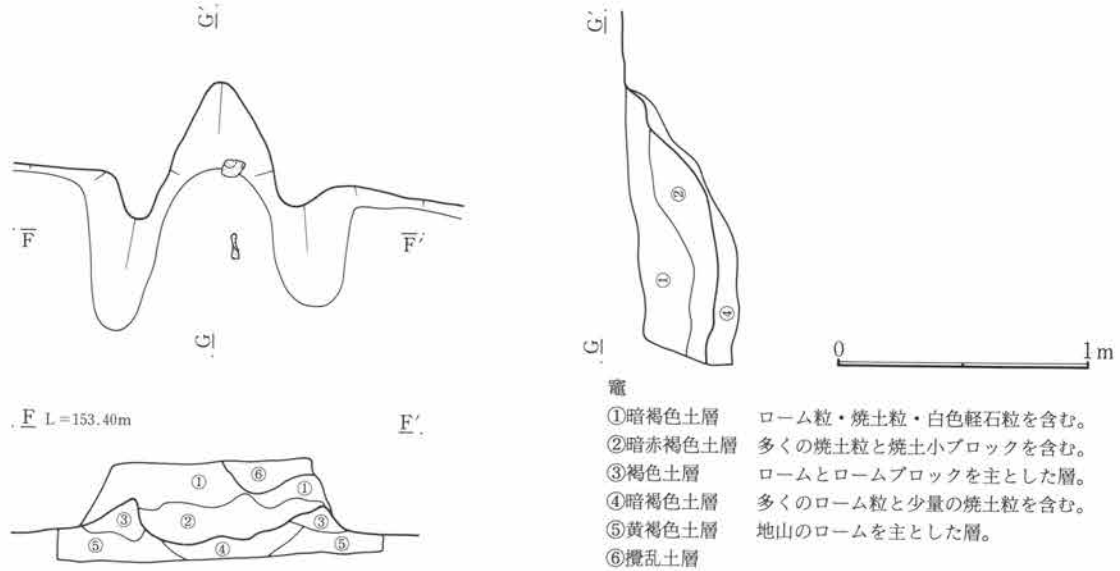
第287図 388号住居跡実測図

(竈)

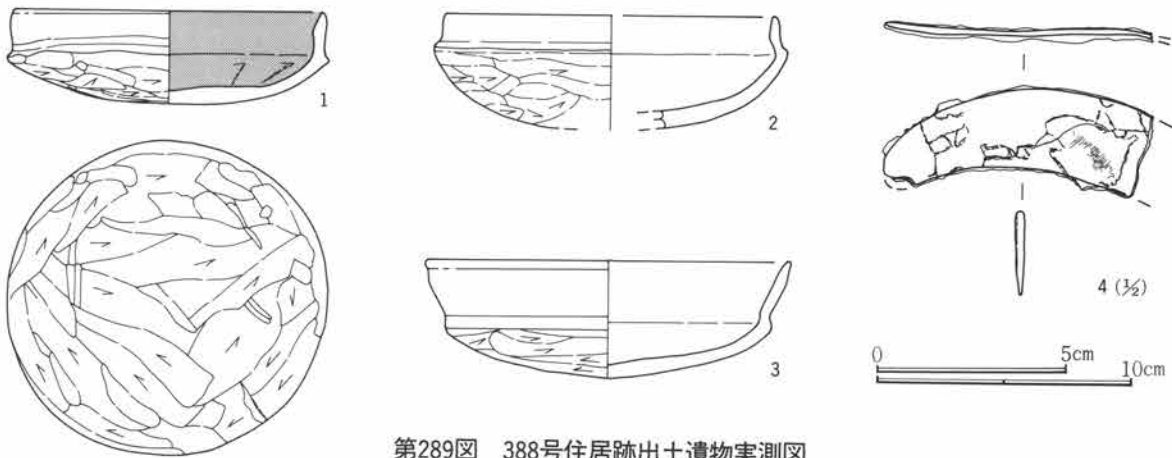
位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 両方の袖部分の残りが悪く、特に左袖部分の残りが悪かった。煙道部付近に小さな石が1個出土したが、袖石や天井石等は全く出土していない。燃烧部を中心として竈内から多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向98cm、燃烧部幅48cmである。



第288図 388号住居跡竈実測図



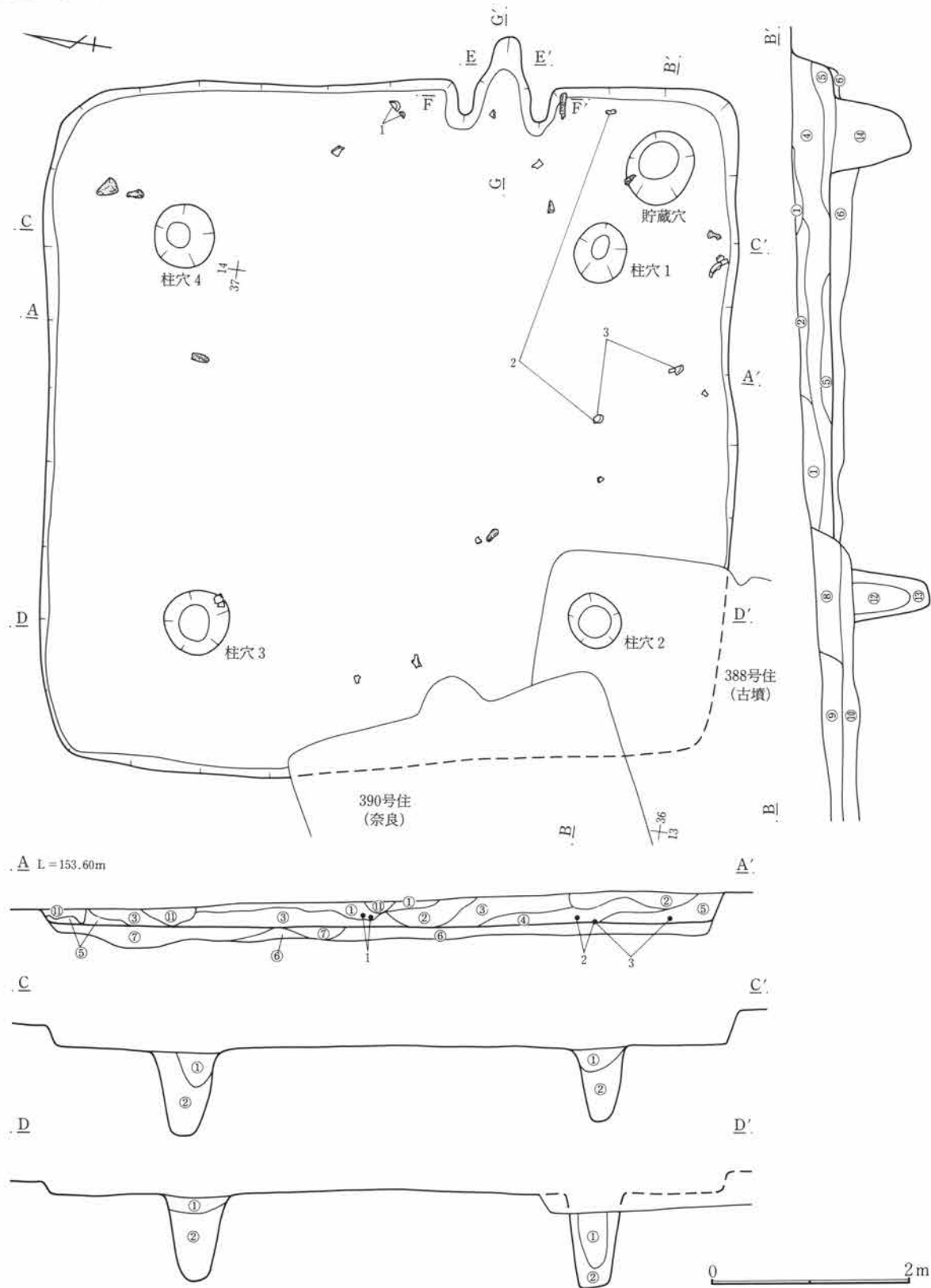
第289図 388号住居跡出土遺物実測図

388号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
289-1 96	土 師 器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 12.4 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・断面黒褐色・底面橙色	底面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面にヘラの圧痕あり。内面の黒色は吸炭による。吸炭は断面にも及ぶ。
289-2 96	土 師 器 坏	床面+3 1/2残存	口(13.4) 高 一 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラナデにより器表面密。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕あり。
289-3 96	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 14.5 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く白色粘土を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく、ヘラの単位明瞭でない。外側口縁部上端に弱い沈線を持つ。光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
289-4 108	鉄 製 品 鎌	覆土 先端部	長 (7.1) 幅 2.4 厚 0.25 重 11.81		鎌の先端部分である。錆化が進んでいるが、原形を比較的良好的に留めている。右端は旧時欠損。右上部が少しめくれている。

389号住居跡 (第290~293図、図版42・43・96)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、37・38-14・15グリッドに位置する。



第290図 389号住居跡実測図

(389号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④黒褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。
- ⑦褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑧388号住居覆土

⑨390号住居覆土

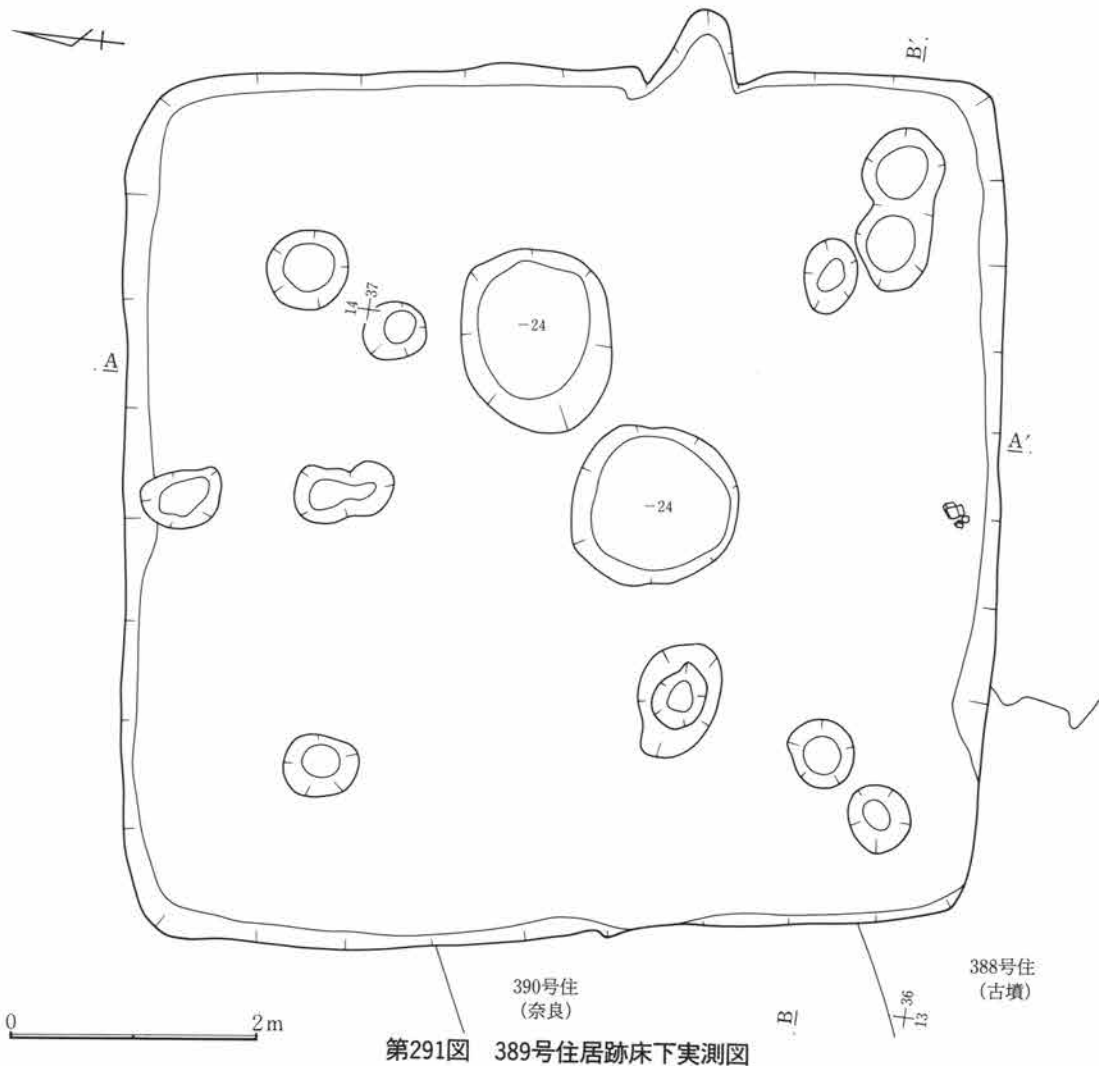
- ⑩388・390号住居床下覆土
 - ⑪攪乱土層
 - ⑫暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ⑬褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑭暗褐色土層 少量のローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
- 柱穴
- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ②褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

概要 3軒の重複している住居の中の1軒である。南西部分で同じ古墳時代の388号住居により床下部分まで、また西側部分を奈良時代の390号住居により床面から覆土にかけて掘り込まれていた。新旧関係は389→388→390号住居である。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が、床面には4本の柱穴が掘られていた。

規模 東西6.80m、南北7.00mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で40cmである。貯蔵穴は径76cm深さ76cmである。柱穴1は径56cm深さ75cm、柱穴2は径56cm深さ98cm、柱穴3は径68cm深さ89cm、柱穴4は径64cm深さ86cmである。

床下 床下部分に多くの小穴と2個の床下土坑が確認された。



第3章 古墳時代の遺構と遺物

遺物 南壁面に近い床面付近から、少量の土師器の坏と多くの甕の破片が出土している。

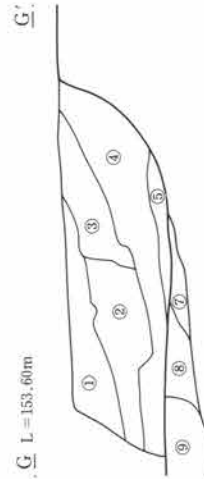
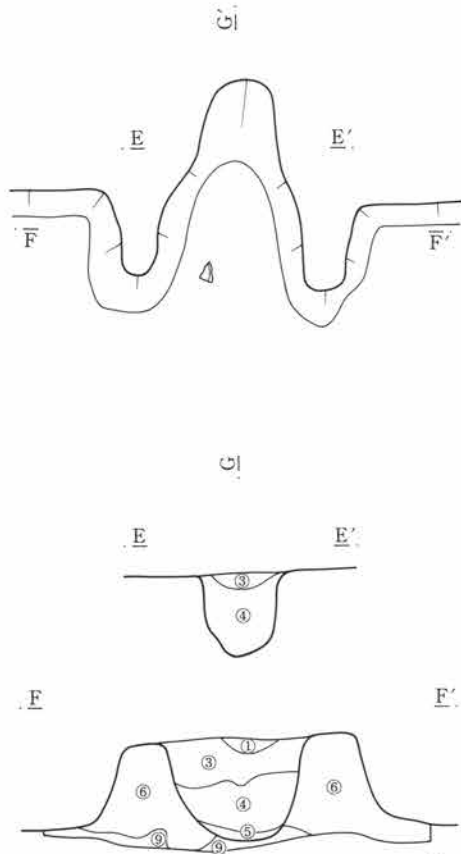
(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 袖石や天井石等は全く出土していない。ロームとロームブロックを主に使用して造られた竈である。

比較的残りは良好であった。燃焼部を中心として竈内から多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向97cm、燃焼部幅52cmである。

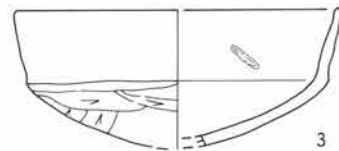
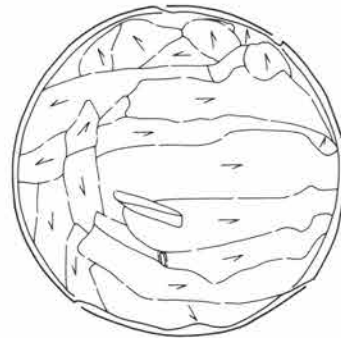
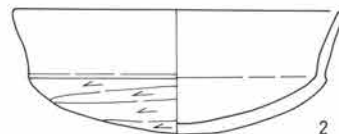
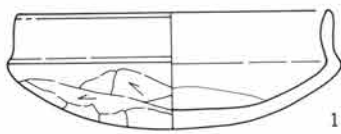


竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
- ②黄褐色土層 ロームを主とした層。(天井部の一部?)
- ③暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑤黒褐色土層 少量の焼土粒と多くの灰を含む。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
- ⑧褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑨黄褐色土層 ロームを主とした層。

0 1m

第292図 389号住居跡竈実測図



0 10cm

第293図 389号住居跡出土遺物実測図

389号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
293-1 96	土師器 坏	床面+3 口縁部 $\frac{3}{4}$ 底部完形	口 12.4 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面へら削り。へらの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面底部にへらの圧痕あり。 口縁部外面～内側底面は黒漆か。
293-2 96	土師器 坏	床面+2 $\frac{3}{4}$ 残存	口 13.2 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面の一部黒色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 器肉の薄い均整のとれた坏である。
293-3 96	土師器 坏	床面+2 $\frac{3}{4}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。器表面密でへらの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデ。 黒斑は認められないが、胎土は粉状でない。

393号住居跡 (第294・295図、図版44)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、38-12グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西壁部分の壁面と床面は残っていなかった。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北3.93mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で6cmである。

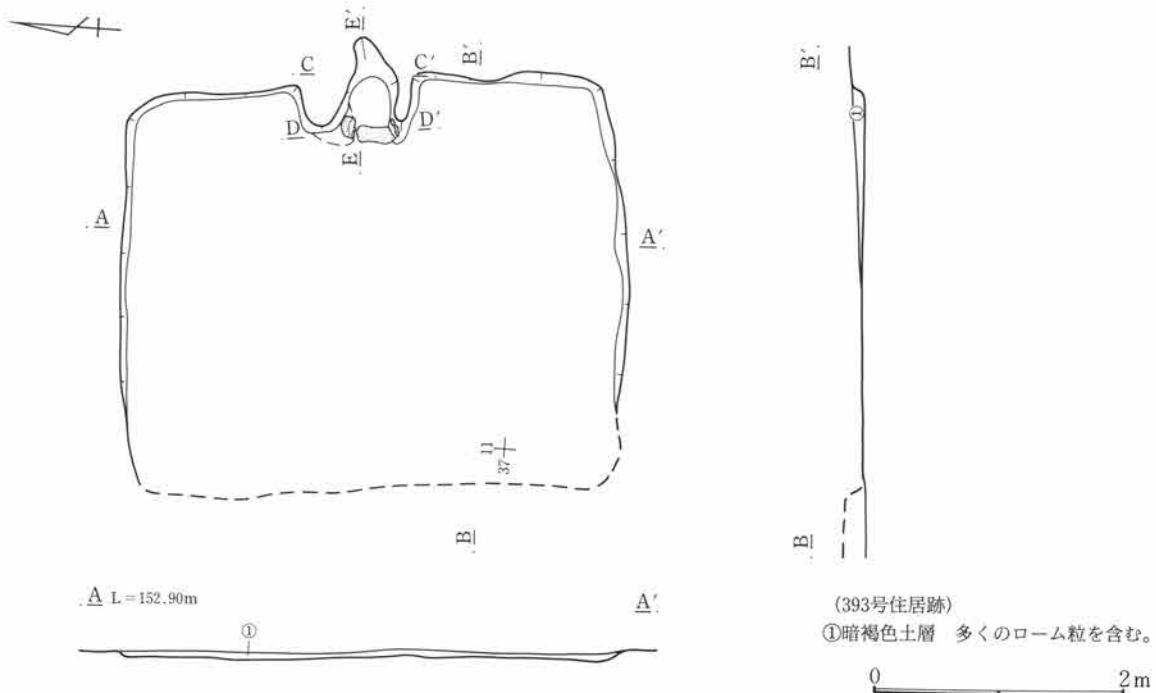
遺物 出土した遺物は破片を含めて図示した土師器の甕1点以外にはない。

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

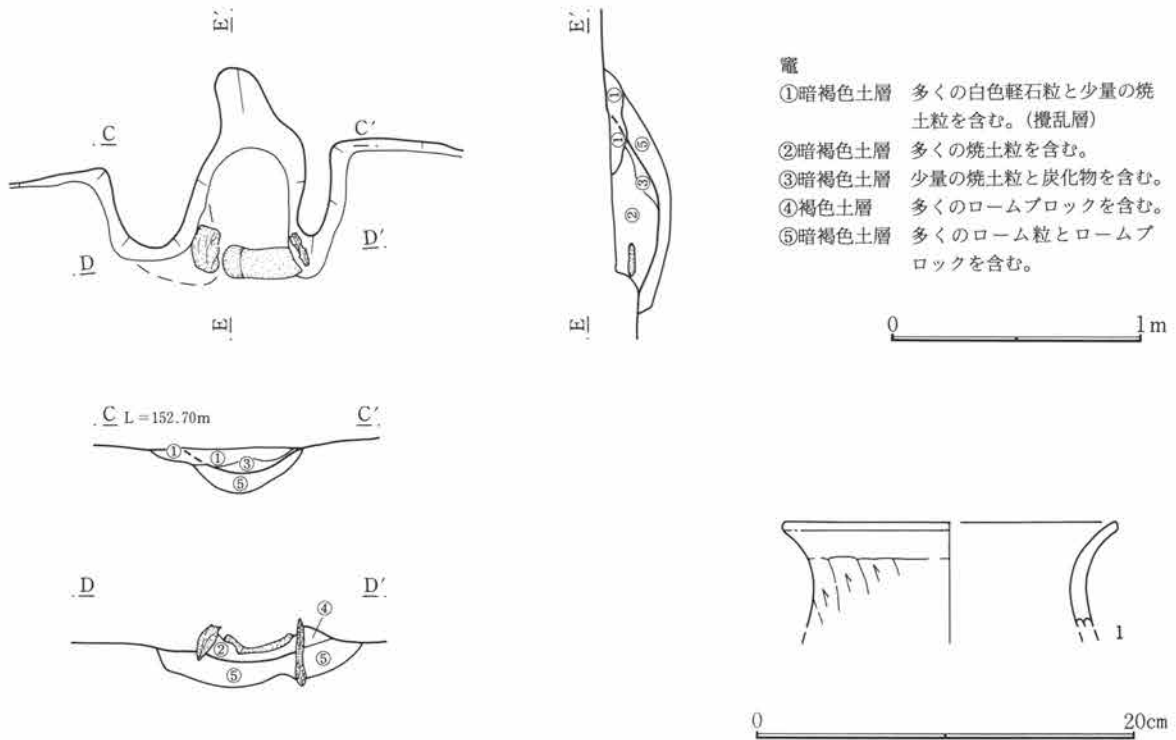
構造 上部の多くの部分は削り取られており、残りの悪い竈であったが、右の袖石がほぼ据えられた状態で、また左の袖石も一部残っていた。天井石と思われる石が焚口部分に落ちた状態で出土した。この石は風化が激しく残りが悪かった。煙道部付近が一部攪乱を受けていた。燃焼部付近から多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向82cm、燃焼部幅37cmである。



第294図 393号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第295図 393号住居跡竈・出土遺物実測図

393号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
295-1	土師器 甕	竈覆土 破片	口(17.9) 高— 底—	①粗、1~2mmの石英・長石粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焙、硬質 ③橙色	胴部外側ヘラナデ。口縁部横ナデ。小破片であるが内外面とも器表面密。

394号住居跡 (第296~298図、図版44・96)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、34・35-11グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、低い西壁面と床面の残りは悪かった。西壁に近い床面は残っていなかった。また多くの耕作溝により床下部分まで掘り込まれていた。北東コーナー部分に多くの灰白色粘土がまとまって出土した。中央部を耕作溝により掘られているため、本来はもっと多くの粘土が堆積していたものと思われる。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.31m、南北4.27mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で19cmである。貯蔵穴は径60cm深さ80cmである。

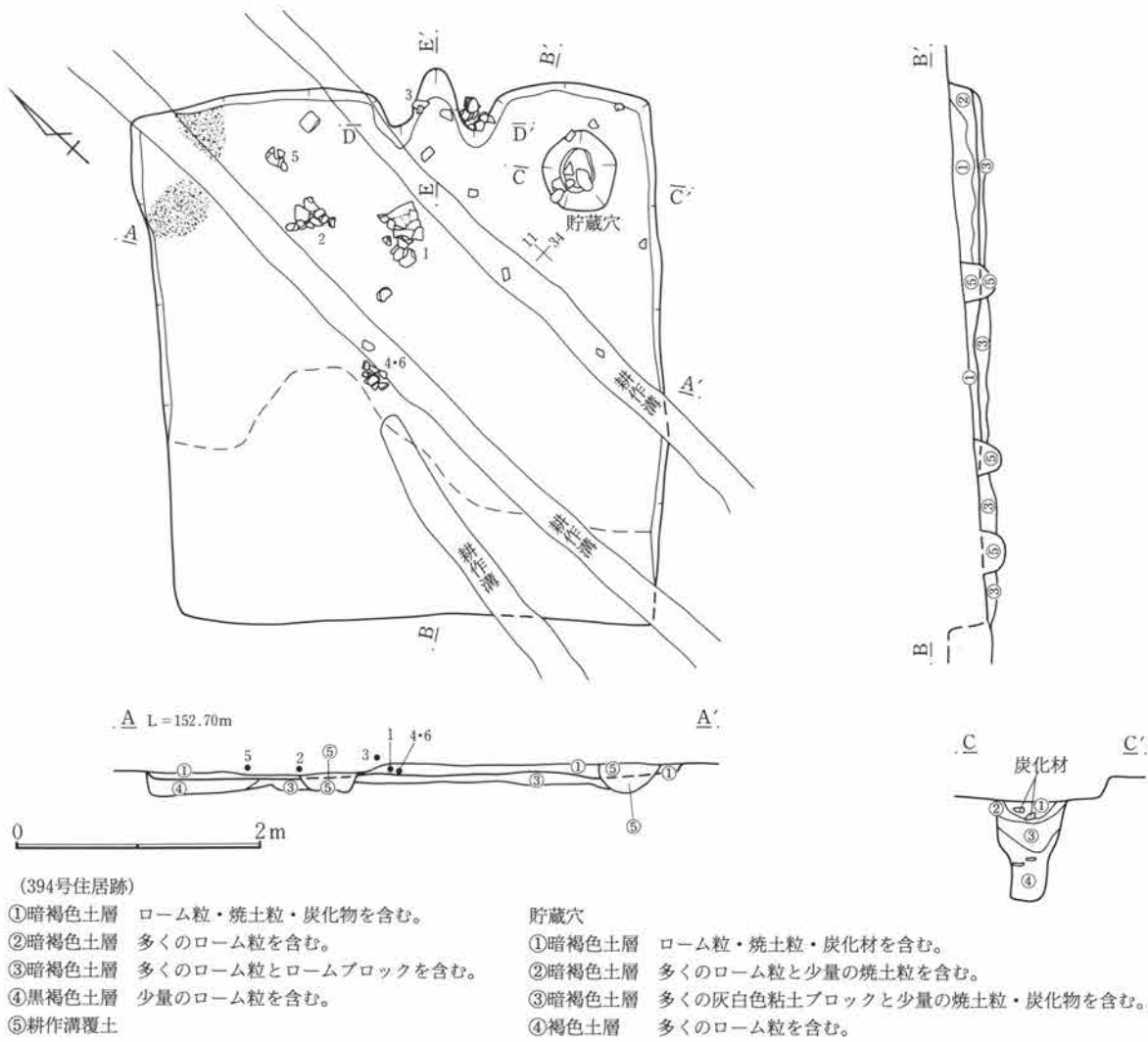
遺物 竈周辺に多くの土師器の甕が出土している。

(竈)

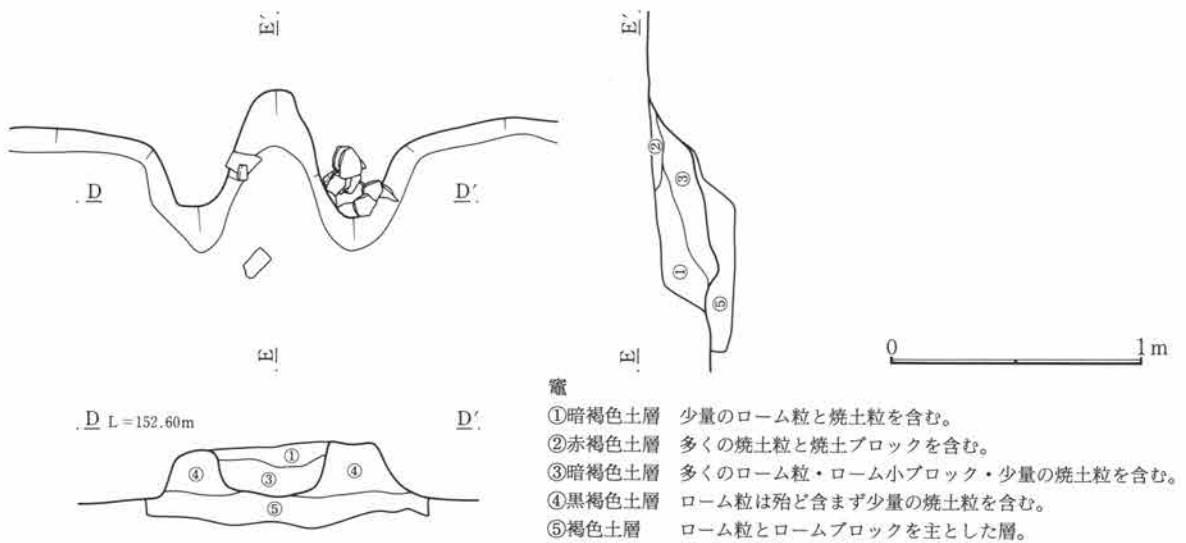
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 調査段階において両袖部分が良好に残っていると判断し、調査を進めたようであるが、焼土粒の出土が煙道上部に最も多く燃焼部に少ないことや、袖部分の土にほとんどロームを含んでいないこと等の様子から、袖部分を中心としてかなり壊されていた竈であった可能性も考えられる。

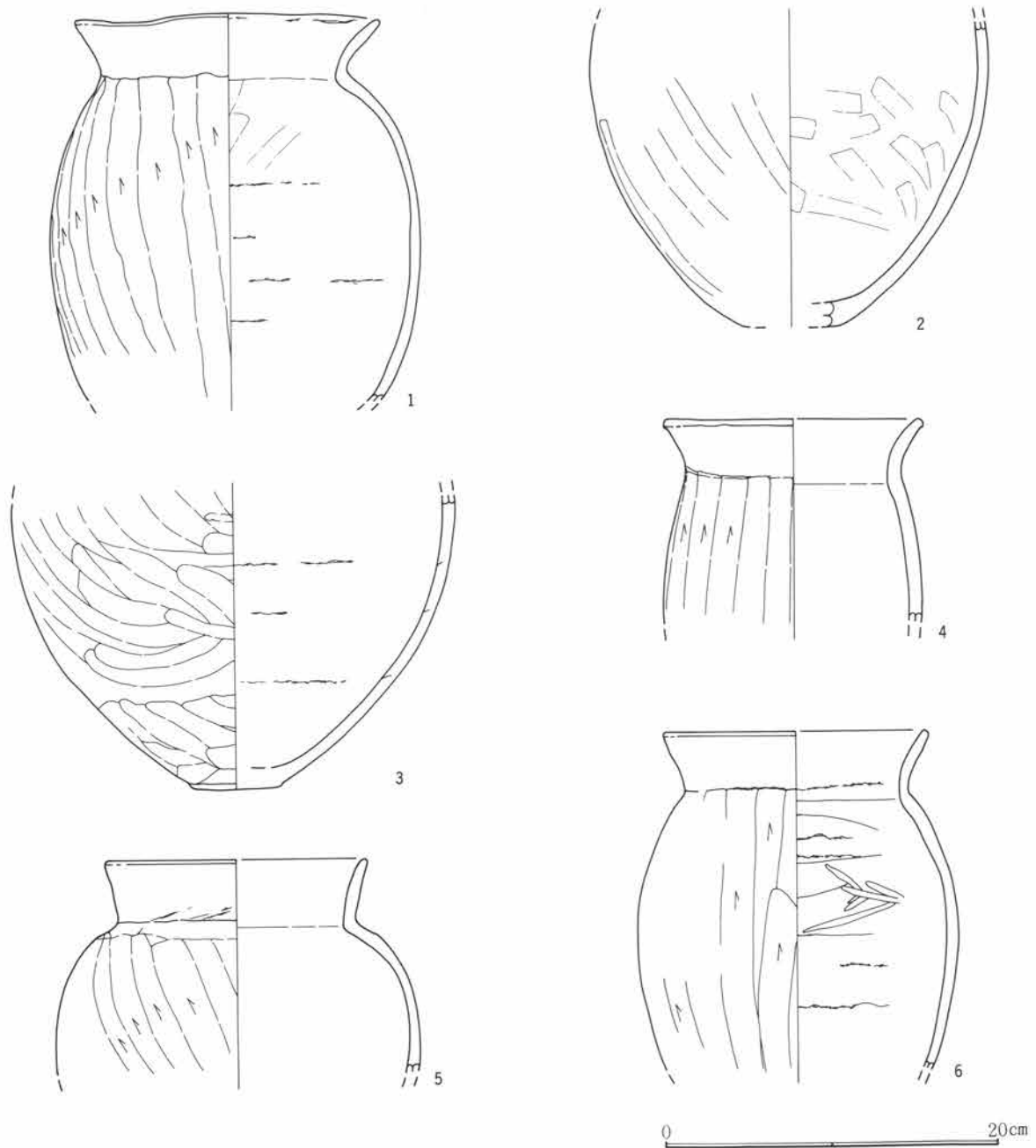
規模 煙道方向61cm、燃焼部幅43cmである。



第296図 394号住居跡実測図



第297図 394号住居跡竈実測図



第298図 394号住出土遺物実測図

394号住居跡出土遺物観察表

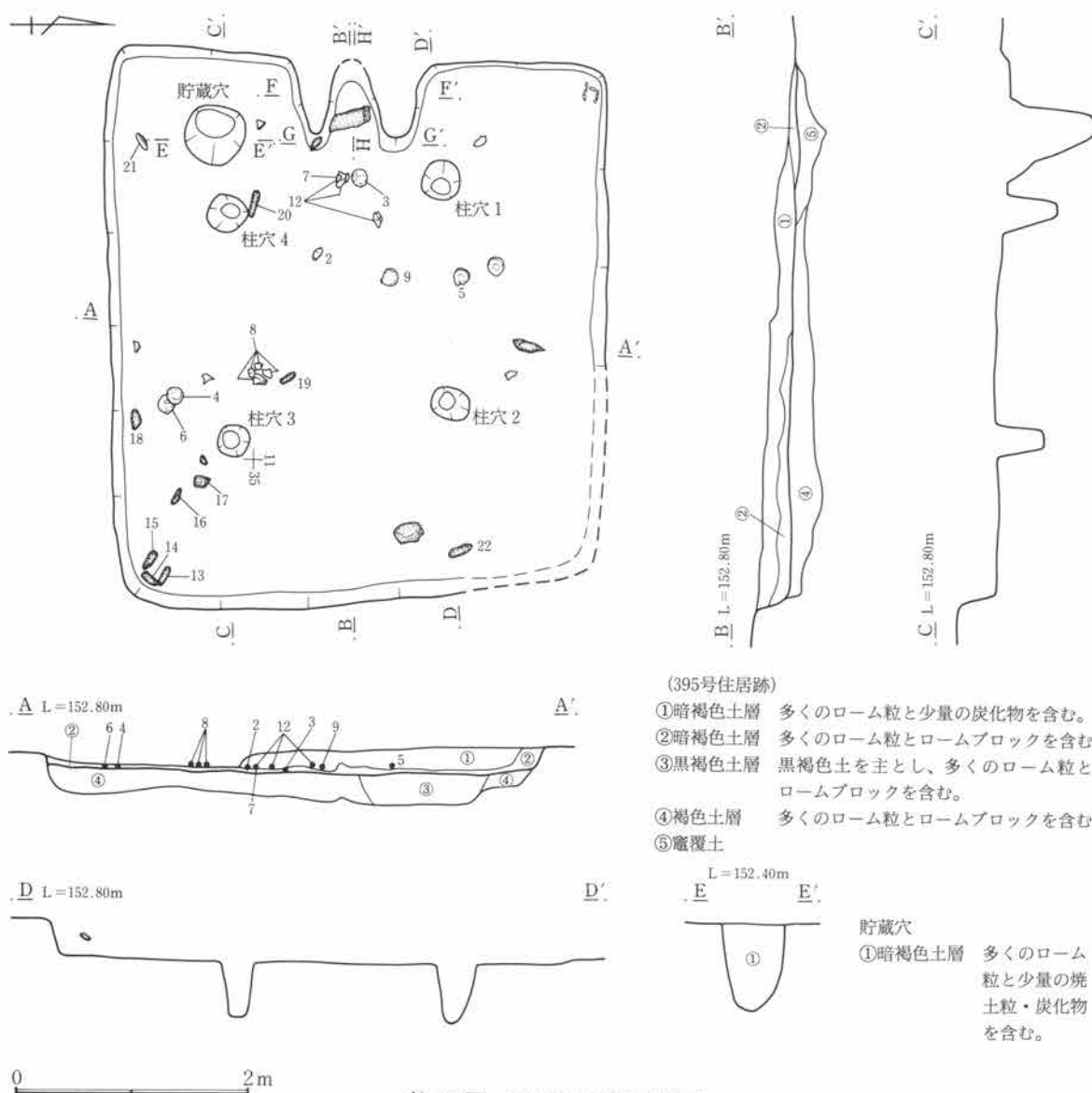
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
298-1 96	土 師 器 甕	床面+4 口縁部 $\frac{2}{3}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.4 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	胴部外面細かなヘラ削り。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。ヘラの単位明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
298-2 96	土 師 器 甕	床面+4 胴下半 $\frac{1}{4}$ 底部小破片	口 — 高 — 底 (6.0)	①粗、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面明赤褐色	胴部外面ナデ。器表面全体密。内面ナデにより器表面密。大きな砂粒が目立つ。
298-3	土 師 器 甕	覆土 胴~底部破片	口 — 高 — 底 (5.2)	①粗、2~4mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴下半ヘラ削り。胴中央部ナデ。内面ナデにより器表面密。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
298-4 96	土師器 甕	床面+5 破片	口(15.6) 高— 底—	①粗、1~4mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
298-5 96	土師器 甕	床面+2 口縁部小片 胴上部1/4	口(15.8) 高— 底—	①特に粗、6×5mmの片岩粒を 含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。器表面に多くの砂粒が目立つ。 口縁部横ナデ。内面は密であるが多くの砂粒が目立つ。 2~4mmの片岩粒も多く含む。
298-6	土師器 甕	覆土 破片	口(16.0) 高— 底—	①粗、1mm前後の片岩・長石・ 石英粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削りで多くの砂粒目立つ。口縁部横ナデ。内面 ていねいなナデにより器表面密。一部にヘラ磨きあり。

395号住居跡 (第299~303図、図版44・45・96・115)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、36-11グリッドに位置する。

概要 西側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、竈の造られている西壁付近の覆土の多くは削り取られて残りが悪かった。また北東コーナー部分を深い耕作溝により掘り込まれ、その部分の住居範囲は確認できなかった。



第299図 395号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面は多くのロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は床面調査の段階では明確に確認できなかったが、床下調査により6本の小穴が確認され、その中から4本を柱穴と考えたが、少し配置が不自然なため疑問も残る。それらの小穴は床下平面図にすべて記載した。竈が南壁面に近いためか、貯蔵穴が竈左側に掘られていた。

規模 東西4.77m、南北4.30mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナーで39cmである。貯蔵穴は径53cm深さ84cmである。柱穴1は径33cm深さ52cm、柱穴2は径34cm深さ48cm、柱穴3は径28cm深さ40cm、柱穴4は径36cm深さ52cmである。

床下 床面中央部を楕円形に掘り残し、壁面付近を深く掘っている。掘り残された部分の縁部に6本の小穴が掘られていた。

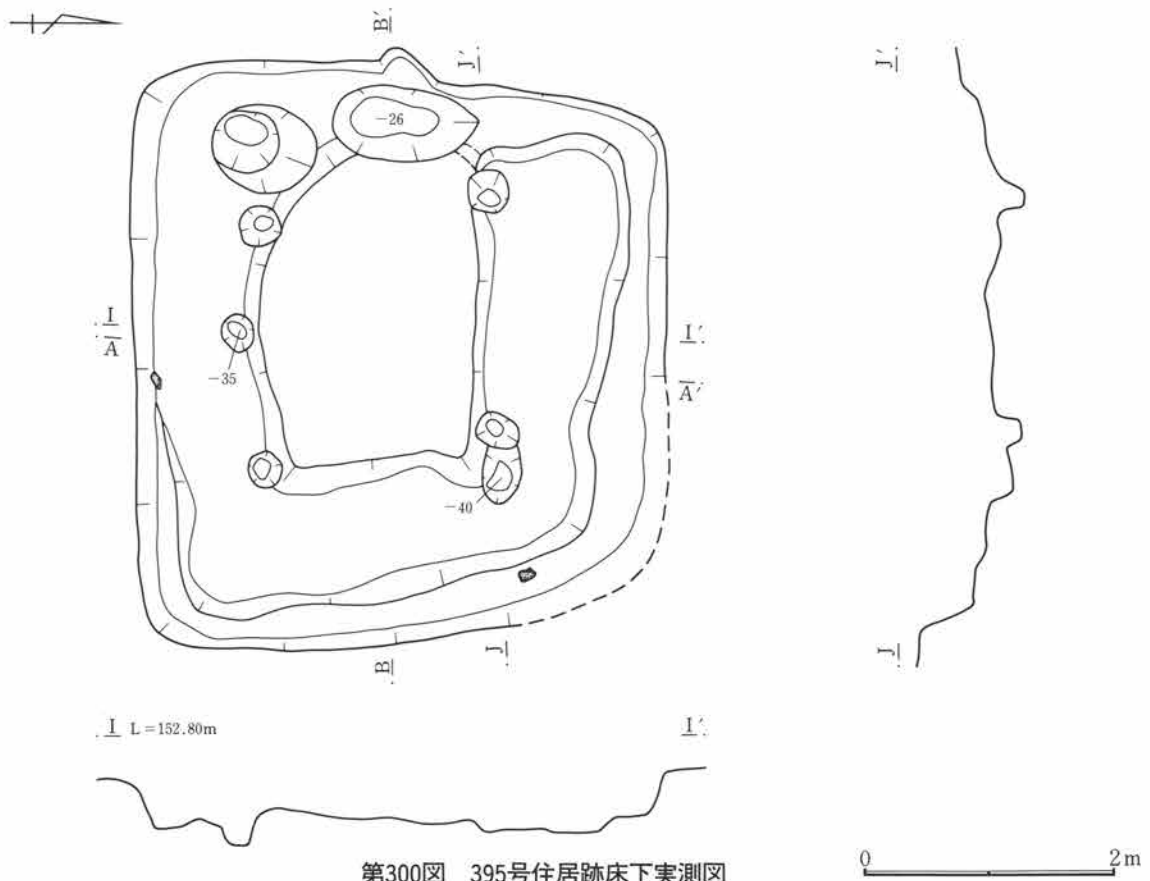
遺物 竈周辺と南側壁面に近い床面に土師器の坏が多く出土している。土師器甕胴部破片も多く出土している。

(竈)

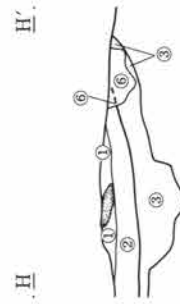
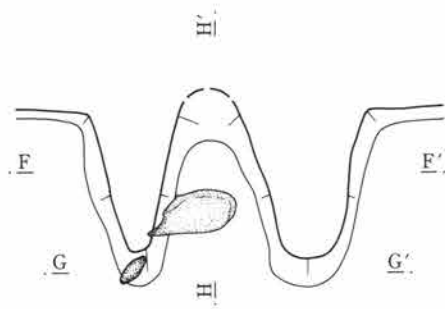
位置 住居西壁の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の多くの部分は削り取られている残りの悪い竈であった。燃烧部の中に天井部に使用したと思われる石の破片が残されていた。また左袖部分に上部分は割れているが、袖石と思われる細長い石が埋められた状態で出土した。このような状態から両袖と天井部に石が用いられた竈であった。燃烧部付近から多くの焼土粒が出土した。

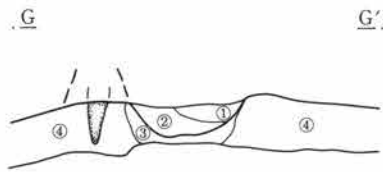
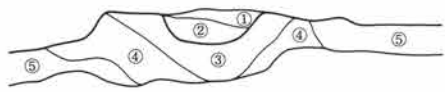
規模 煙道方向78cm、燃烧部幅44cmである。



第300図 395号住居跡床下実測図



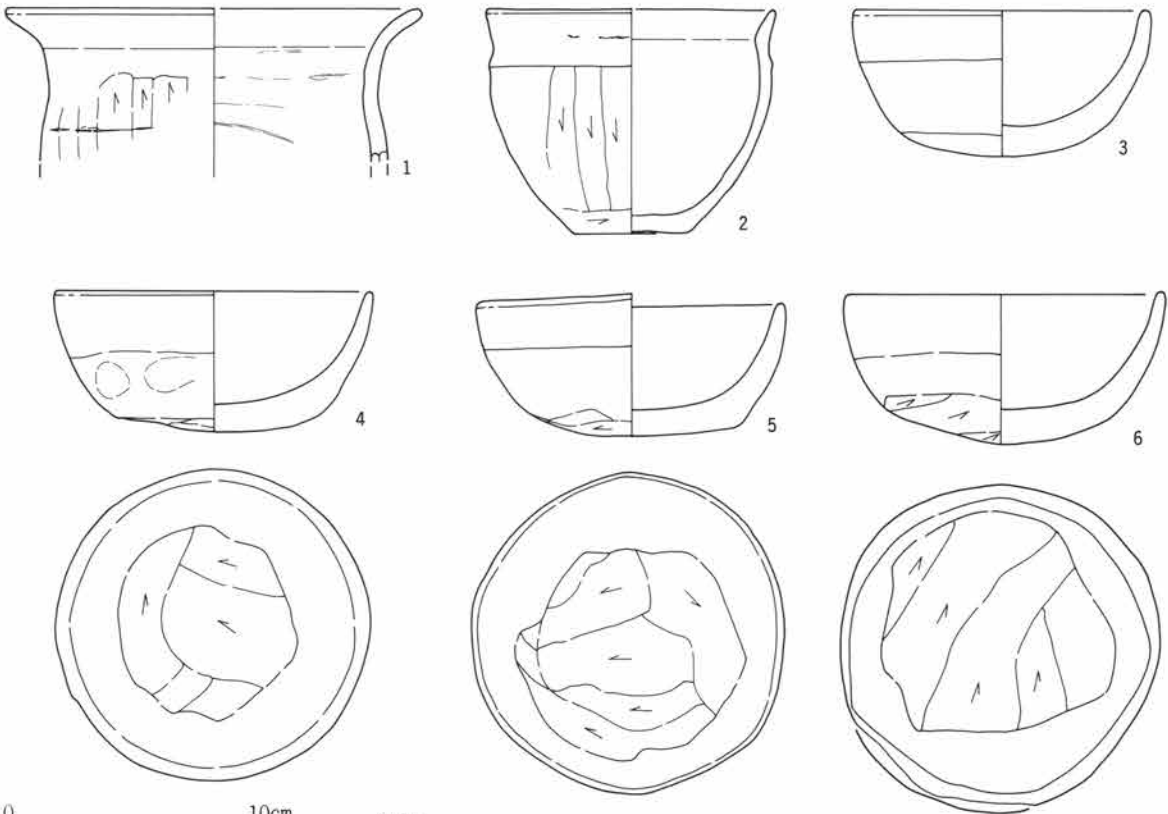
F L=152.60m



- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
 - ②暗赤褐色土層 焼土粒を多く含む。
 - ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑤黄褐色土層 ロームブロックを主とした層。
 - ⑥攪乱土層

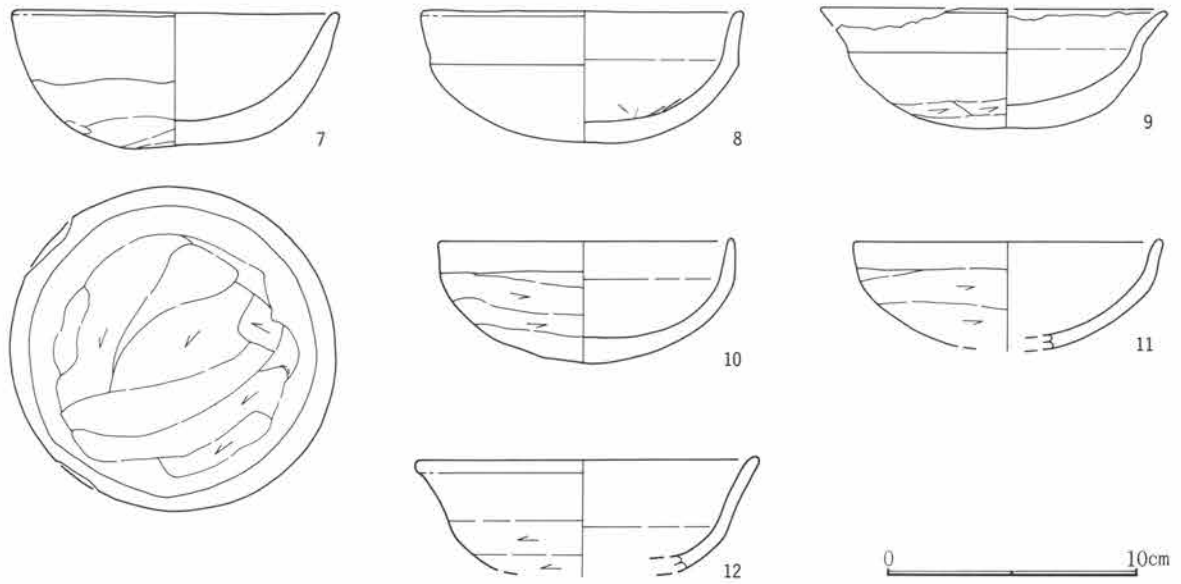
0 1m

第301図 395号住居跡竈実測図



第302図 395号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第303図 395号住居跡出土遺物実測図(2)

395号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
302-1	土師器 甕	覆土 破片	口(21.8) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。小さな破片であり、器形に不明な点が多い。
302-2	土師器 小型甕	床面+7 口縁~胴部 1/2 底部1/2	口(15.4) 高11.8 底6.0	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面に砂粒は目立つがナデにより器表面密。
302-3 96	土師器 坏	床面+8 完形	口11.7 高5.7 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底・体部外面いずれもナデでへら削りなし。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器内の厚い坏である。
302-4 96	土師器 坏	床面+6 完形	口12.6 高5.5 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部中央へら削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
302-5 96	土師器 坏	床面+10 ほぼ完形	口12.3 高5.2 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部中央へら削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器内の厚い異質の坏である。
302-6 96	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口12.8 高5.9 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・底面の一部黒褐色	底部中央へら削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器内の厚いや異質の土器である。
303-7 96	土師器 坏	床面+11 完形	口13.0 高5.2 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。粘土がササラ状になりきわめて粗い。口縁部~内側底面横ナデにより器表面密。器内の厚い坏である。
303-8 96	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口12.8 高5.2 底丸底	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へらナデの痕跡が残るが明瞭でない。内側底面にへらの圧痕あり。口縁部の一部に黒斑あり。大きな砂粒が目立つ。
303-9 96	土師器 坏	床面+8 口縁部小片 底部ほぼ完	口(14.6) 高4.7 底丸底	①粗、1~3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央部へら削り、周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。5~10mmの片岩粒も含む粗い胎土である。
303-10 96	土師器 坏	覆土 1/2 残存	口11.8 高4.8 底丸底	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へらナデ。砂粒の移動はほとんど認められない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。明確なへら削りは認められない。やや異質な坏である。
303-11 96	土師器 坏	覆土 1/2 残存	口12.2 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へらナデか。明瞭なへら削り不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
303-12 96	土師器 坏	床面+9 口縁部1/2 底部1/2	口13.8 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。①酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底部の器表面粗れており、へら削りかへらナデか不明確。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に赤味を帯びた坏である。

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴・備考
			長	厚	幅	重		
13 115	こも編み石	床面+6	長 16.7 厚 3.4	幅 6.2 重 740				点紋緑簾緑泥片岩。断面がクサビ形を呈する細長い石である。三面の中央部がわずかに凹状を呈する。
14 115	こも編み石	床面+8	長 16.8 厚 3.8	幅 6.2 重 640				絹雲母石墨片岩。長く肉厚な石である。両側面にゆるやかな凹凸部が認められる。
15 115	こも編み石	床面+7	長 14.8 厚 3.4	幅 7.2 重 670				絹雲母石墨片岩。断面が不定形な長方形を呈す。側面中央部がわずかに凹状を呈する。
16 115	こも編み石	床面+19	長 13.4 厚 3.3	幅 5.8 重 410				点紋緑泥片岩。断面が三角形を呈し、上下の幅が同一でない。片側の側面が大きくゆるやかに凹状を呈する。
17 115	こも編み石	床面+12	長 12.9 厚 4.4	幅 7.7 重 640				安山岩。断面が三角形を呈する。両側面に粗い凹凸部が数個認められる。
18 115	こも編み石	床面+2	長 14.6 厚 4.6	幅 6.2 重 830				緑簾緑泥片岩。断面が丸く厚みのある石で、両側面とも明瞭な凹状部は認められない。一部欠損している。
19 115	こも編み石	床面+1	長 13.2 厚 3.0	幅 6.8 重 370				流紋岩。楕円形でやや扁平な形の整った石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
20 115	こも編み石 支 脚 石	床面+7	長 23.2 厚 3.7	幅 5.5 重 900				緑簾緑泥片岩。断面が台形を呈す細長い石である。長さの1/3程度は赤色化している。支脚石として使用されたものと思われる。
21 115	こも編み石	床面+3	長 17.2 厚 3.5	幅 6.5 重 610				絹雲母石墨片岩。一面全体が剥離している。片側の側面に凹凸部が認められる。
22 115	こも編み石	床面+16	長 15.6 厚 4.2	幅 7.1 重 750				チャート。断面は不定形な長方形を呈し、側面全体が複雑な凹凸状を呈している。

396号住居跡（第304～306図、図版45・97・115）

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、42-16・17グリッドに位置する。

概要 北側がなだらかに低くなる傾斜面に位置し、住居北側は耕作土下に黒色土が厚く堆積しロームの堆積の少ない小さな谷地となっている。本住居より北側に住居が造られるのは、谷地の対岸で耕作土下に再びローム堆積の厚くなるなだらかな斜面からである。

構造 床面はロームを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は4本ほぼ正方形に配置され掘られていた。貯蔵穴が竈の右側で南東の壁面コーナーに掘られていた。貯蔵穴の北西側に貯蔵穴を囲むように、床面より4～5cm程高いL字状の高まりが造られていた。

規模 東西5.72m、南北5.63mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で34cmである。貯蔵穴は径63cm深さ63cmである。柱穴1は径32cm深さ61cm、柱穴2は径26cm深さ61cm、柱穴3は径35cm深さ78cm、柱穴4は径33cm深さ81cmである。

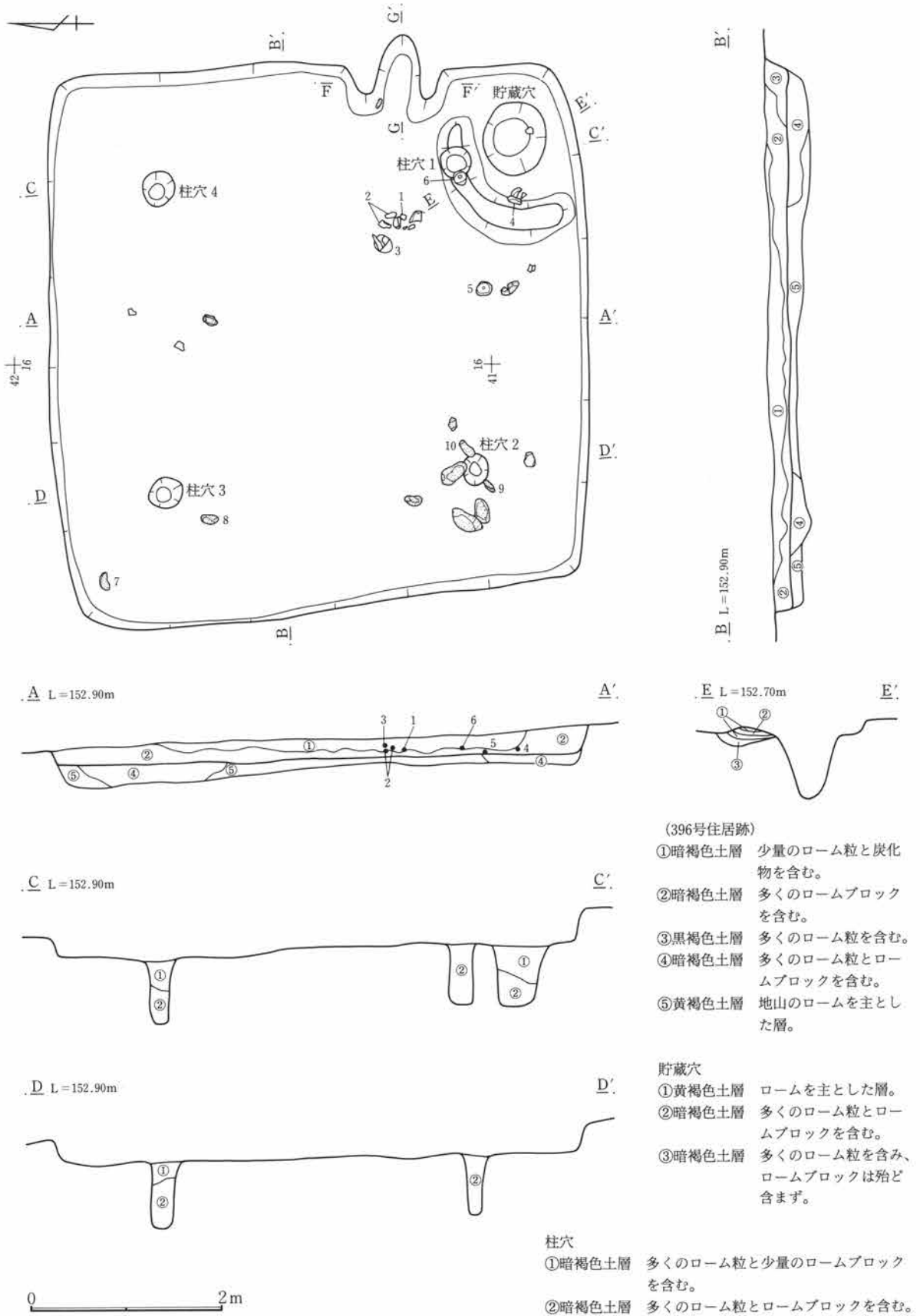
遺物 竈から貯蔵穴周辺にかけて、少量の土師器の坏や甕が出土している。

(竈)

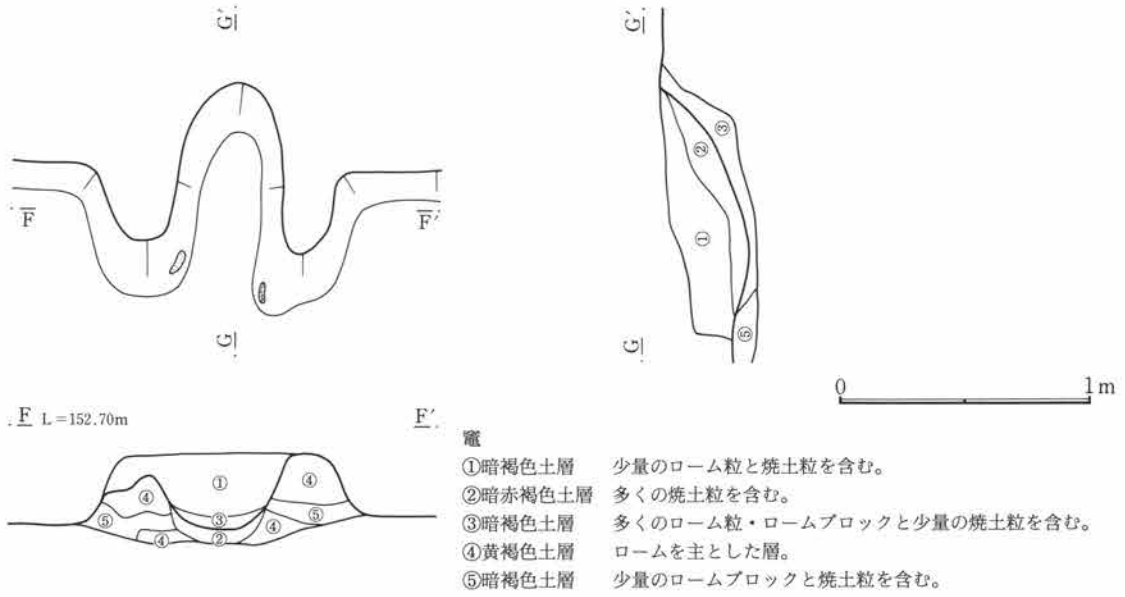
位置 住居東壁の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の多くの部分は削り取られており、残りの悪い竈であった。左右の焚口部分に細長い石が各々1個出土している。細いため疑問も残るが、位置的にみて袖石の可能性も考えられる。竈内の燃焼部付近から多くの焼土粒が出土した。

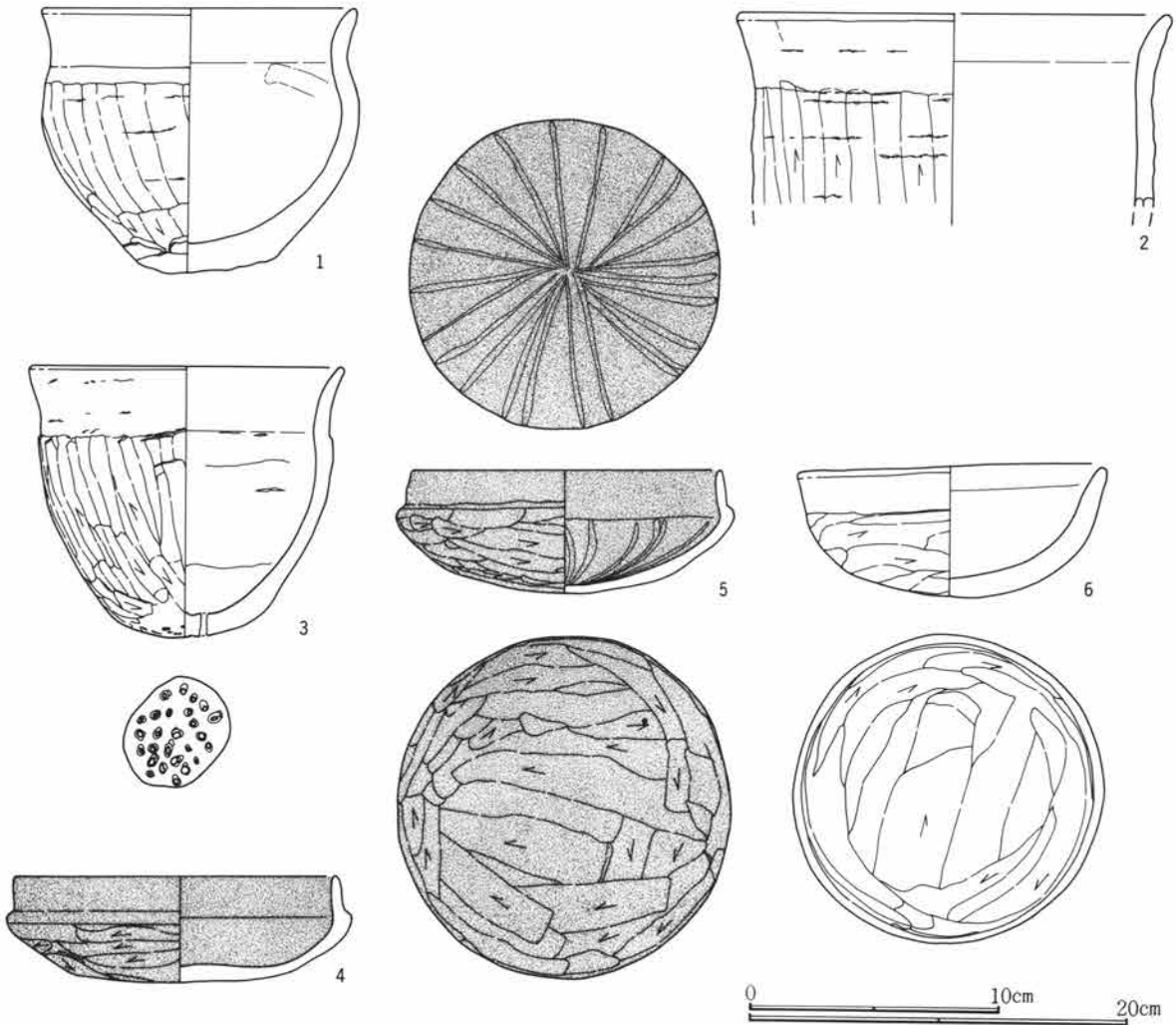
規模 煙道方向88cm、燃焼部幅46cmである。



第304図 396号住居跡実測図



第305図 396号住居跡竈実測図



第306図 396号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

396号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
306-1 97	土師器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口 16.8 高 14.0 底 7.0	①粗、2～3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底部ヘラ削り。胴部外面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面に多くの砂粒が目立つ。
306-2 97	土師器 甕	床面+6 口縁～胴上部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(23.1) 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。胴部に輪積痕が残る。内面ナデにより器表面密。明確ではないが甕と思われる。
306-3 97	土師器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口 16.9 高 14.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴部外面ヘラナデ。ヘラの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部に3～4mmの小穴が27個穿孔されている。
306-4 97	土師器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.8 高 4.2 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面ヘラ削り。底部中央の一部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。薄くなっているが、黒漆の痕跡が多く残る。
306-5 97	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.4 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③断面にぶい赤褐色・表面黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少ない。ヘラの単位明瞭。内側底面に放射状のヘラ磨き。
306-6 97	土師器 坏	床面+3 完形	口 12.2 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒色	底面ヘラナデ。ナデの部分わずかに凹状を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
7 115	こも編み石	床面+5	長 15.4 幅 5.7 厚 2.8 重 520		緑簾緑泥片岩。扁平な石である。両側面中央部にわずかな凹凸部が認められる。
8 115	こも編み石	床面+12	長 17.6 幅 7.6 厚 4.4 重 950		緑簾緑泥片岩。断面はゆるやかな三角形を呈す大きな石である。側面に明瞭な凹凸部は認められない。
9 115	こも編み石	床面+7	長 16.8 幅 6.0 厚 4.0 重 560		緑簾緑泥片岩。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
10 115	こも編み石	床面+7	長 19.7 幅 8.7 厚 2.3 重 620		点紋絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない扁平な石である。片側の側面中央部に打ち欠かれたような凹状部がある。

397号住居跡 (第307～309図、図版45・46・97)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、39・40—15グリッドに位置する。

概要 平安時代の398号住居と南西部分で重複しており、398号住居により重複部分は床面に近い覆土上面を削り取られている。北に向かって低くなる緩やかな傾斜面に位置し、南側の壁面は低いながら残っていたが、北側の一部の壁面と床面は削られて残っていなかった。覆土上面に大量の白色軽石の混入した攪乱層が認められ、竈燃焼部にも厚く堆積していた。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、柱穴2の西側に一部重なって、柱穴2の半分以下の浅い新たな柱穴が掘られていた。その柱穴には扁平な石が床面とほぼ同じ位置に据えられていた。柱穴2に埋めた柱が腐ったため、少しずらした位置に新たな浅い柱穴を掘り、扁平な石を置いて柱受けとしたものと考えたい。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西5.87m、南北5.57mである。壁高は残りの良い南壁部分で35cmである。貯蔵穴は径67cm深さ70cmである。柱穴1は径44cm深さ65cm、柱穴2は径40cm深さ71cm、柱穴3は径42cm深さ71cm、柱穴4は径41cm深さ71cmである。

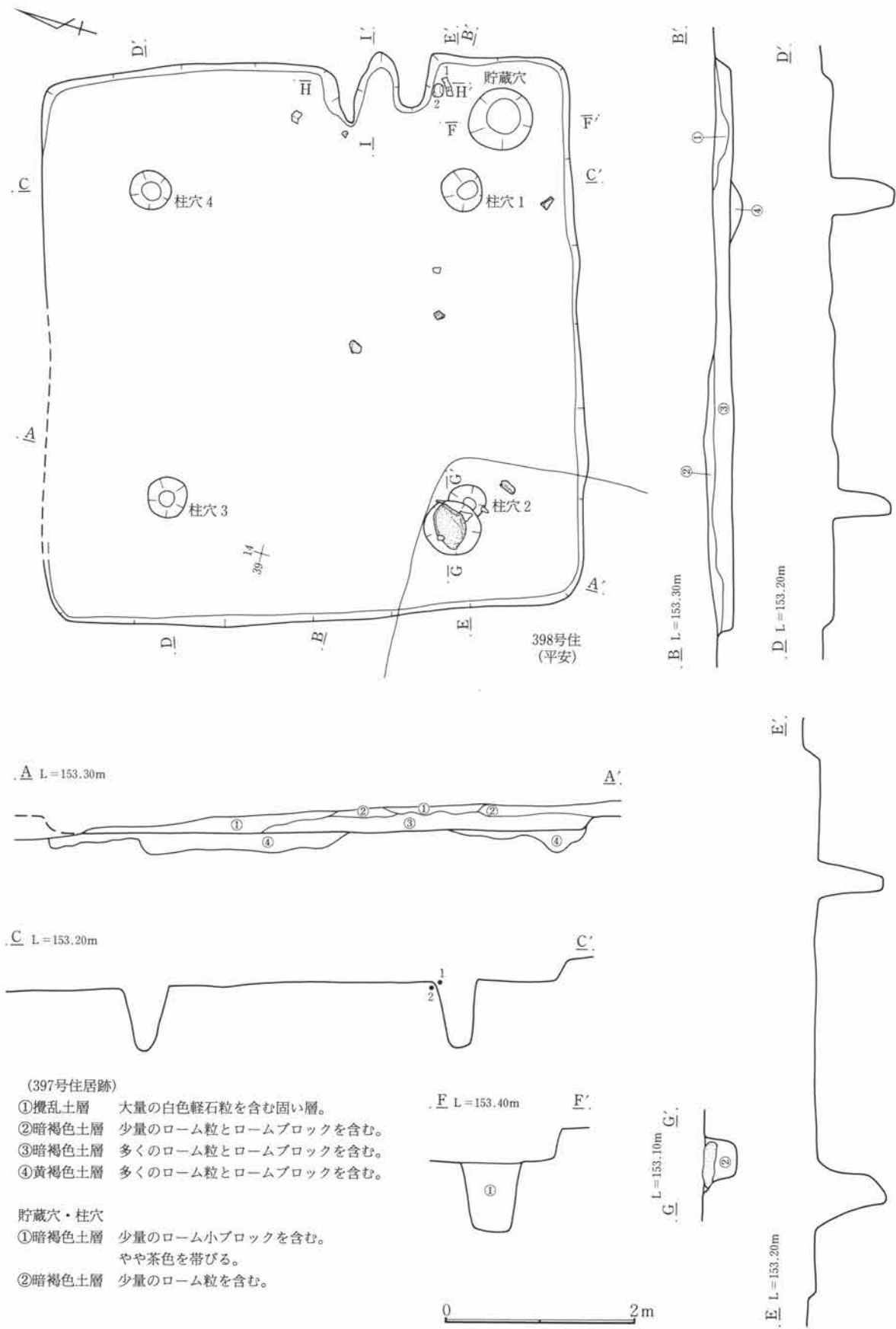
遺物 竈周辺に少量の土師器の甕や坏が出土している。破片の出土も少量である。

(竈)

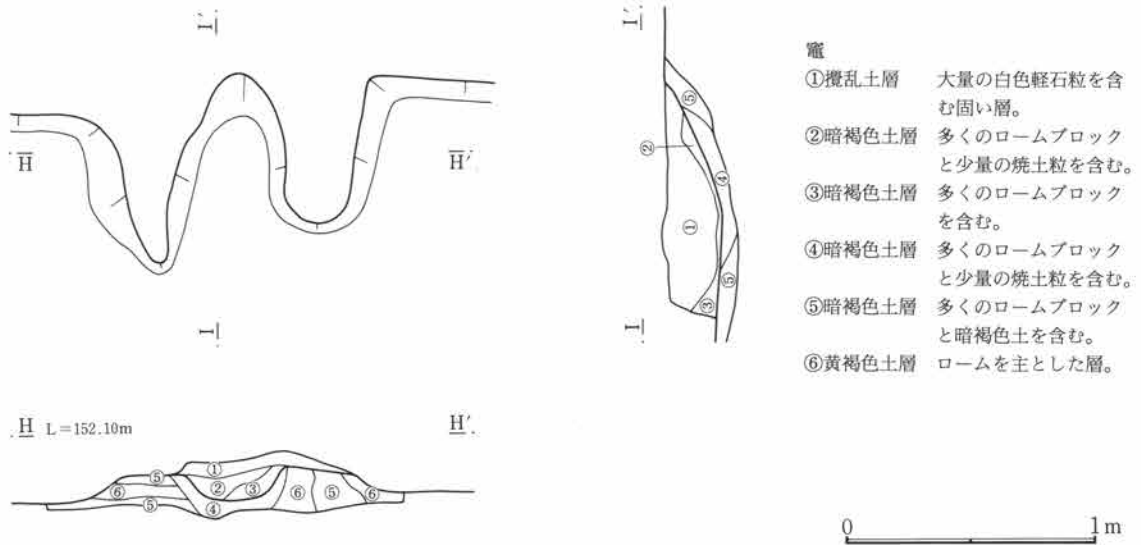
位置 住居東壁の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 燃焼部の中に多くの攪乱土が堆積している残りの悪い竈である。袖部分の残りも悪く、多くの攪乱を受けている。煙道部床面付近の土が焼けて焼土化していた。しかし燃焼部付近からの焼土粒の出土量は少なかった。

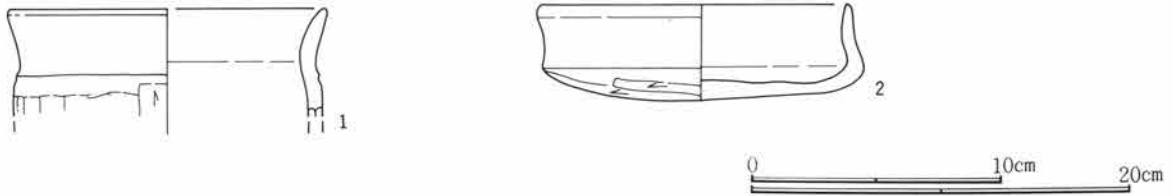
規模 煙道方向76cm、熱焼部幅45cmである。



第307図 397号住居跡実測図



第308図 397号住居跡竈実測図



第309図 397号住居跡出土遺物実測図

397号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
309-1	土師器 小型甕	床面直上 口縁~胴上 部残存	口(16.8) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焙、硬質 ③外面にふい赤褐色・内面黒褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。ヘラ削りの後に口縁部横ナデ。
309-2 97	土師器 坏	床面直上 口縁部残 底部残存	口12.4 高3.8 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	底面は幅の広いヘラ削り。器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面全体が密であり、やや異質の坏である。

401号住居跡 (第310・311図、図版46)

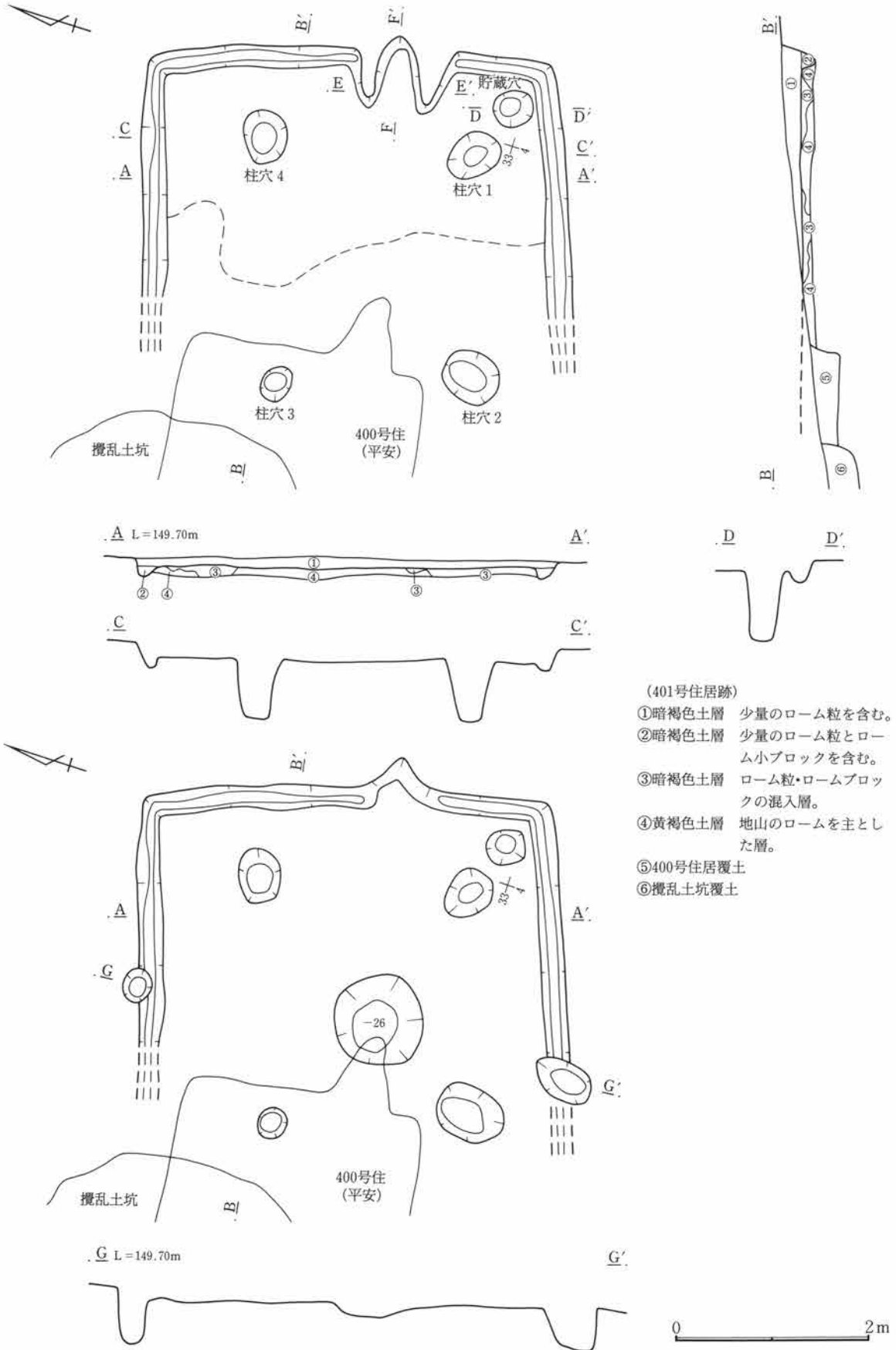
位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、34-4グリッドに位置する。

概要 住居西側で平安時代の400号住居と重複している。西側の低いなだらかな傾斜面に位置するため、東側の壁面は低いながら残っているが、400号住居と重複している西側約半分の床面や壁面は耕作により、削り取られて残っていなかった。3片の土師器坏の破片から古墳時代と推定した。

構造 床面の良好な状態での検出はできなかった。床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られていた。柱穴は床面調査段階では明らかでなかったが、床下調査により柱穴と思われる小穴を4本確認できた。また貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。

規模 東西不明、南北4.41mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分の壁面で18cmである。貯蔵穴は径41cmでほぼ円形を呈し、深さ70cmである。柱穴1は径53cm深さ62cm、柱穴2は径59cm深さ79cm、柱穴3は径32cm深さ63cm、柱穴4は径45cm深さ61cmである。

遺物 わずか3点の遺物しか出土していない。



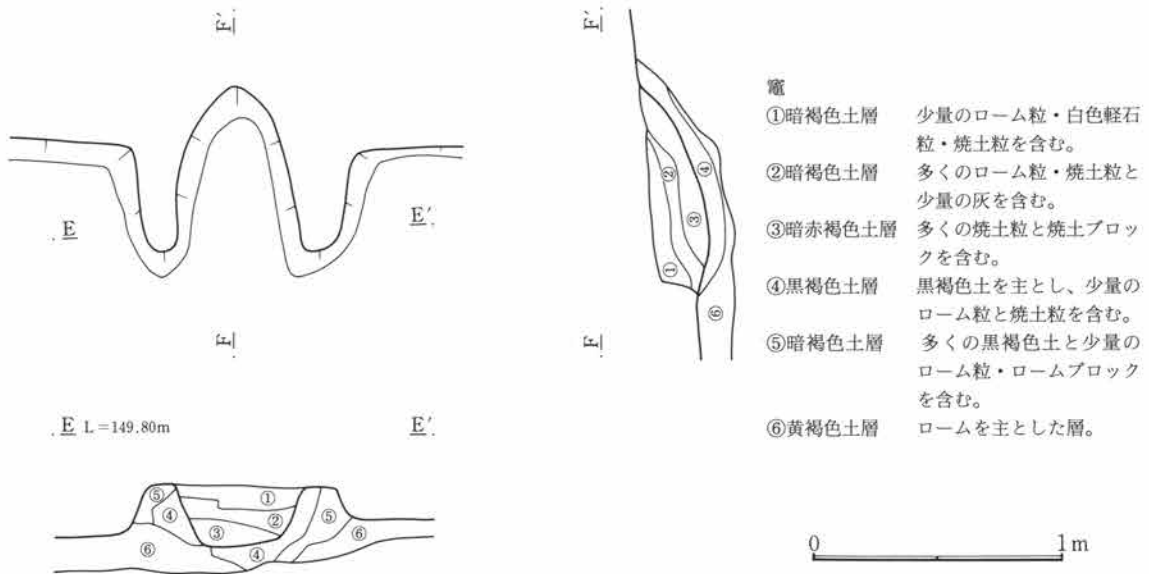
第310図 401号住居跡・床下実測図

(竈)

位置 住居東壁面の南寄りに造られている。袖部や燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 竈内より石の出土はなく、袖部にロームが大量に使われていた状態も示していないため、暗褐色土に少量のロームを混入した土で竈が造られていたものと思われる。他の竈はロームを多く使用して造られているため、やや異質な竈である。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向72cm、燃焼部幅48cmである。



第311図 401号住居跡竈実測図

404号住居跡 (第312～314図、図版46・47・97)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、33—8グリッドに位置する。

概要 住居北側で平安時代の402号住居と重複しており、402号住居により本住居の覆土上面を削り取られている。西側の低いなだらかな傾斜面に位置するため、東側の壁面や床面の残りは良いが、西側の壁面の多くは耕作により削り取られてほとんど残っていない。

構造 床面中央部の一部は堅く踏み固められていたが、そのほかの部分は良好な状態での検出はできなかった。床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られていた。柱穴が4本、また貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。

規模 東西5.44m、南北5.45mである。壁高は残りの良い東壁面で31cmである。貯蔵穴は径72cmでほぼ円形を呈し、深さ61cmである。柱穴1は径45cm深さ49cm、柱穴2は径42cm深さ51cm、柱穴3は38cm深さ51cm、柱穴4は径31cm深さ55cmである。

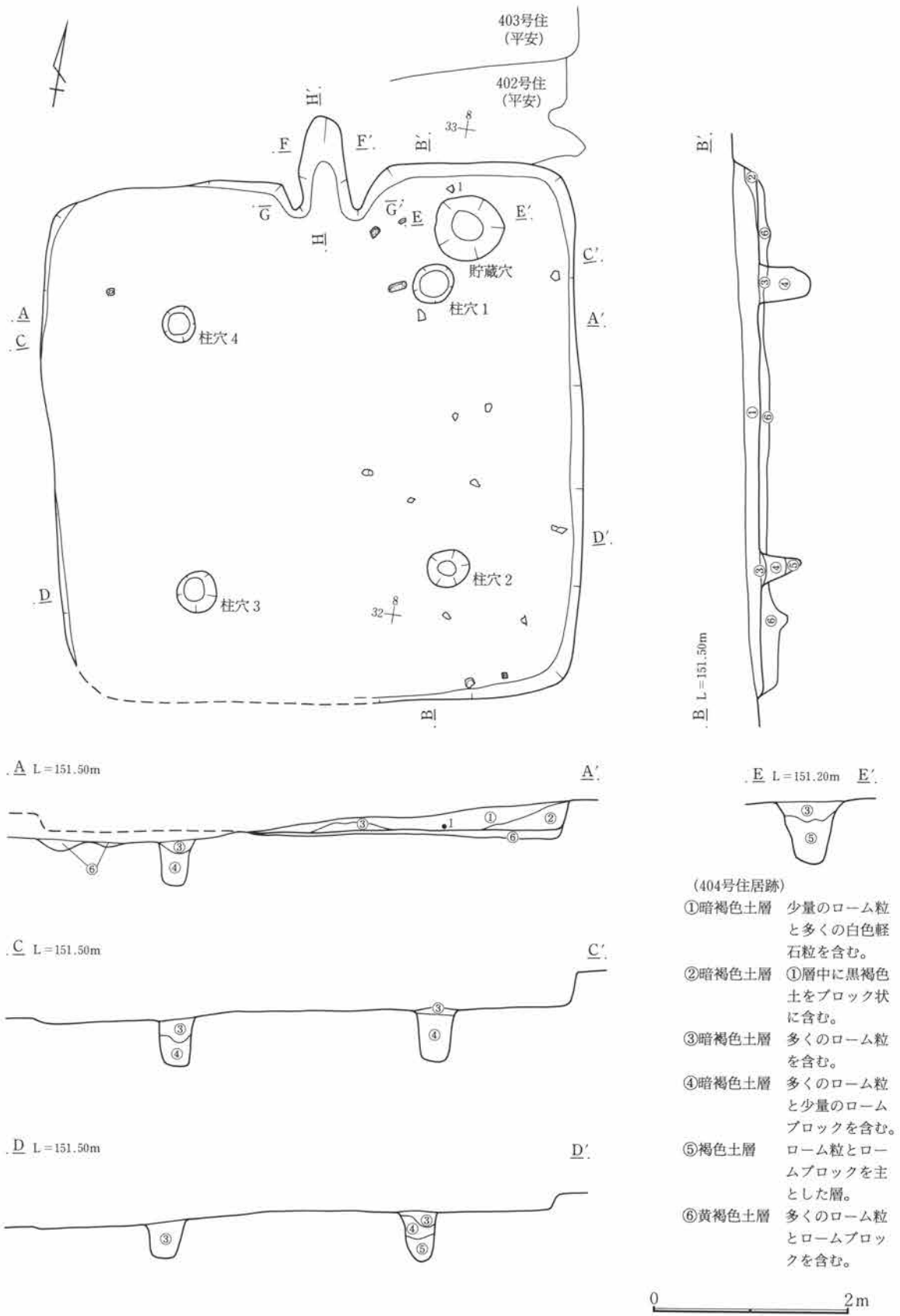
遺物 竈周辺に少量の土師器の甕や坏が出土している。土師器の甕の破片は多く出土している。

(竈)

位置 住居北壁面に造られている。袖部は床面上に造られているが、燃焼部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。この時期の多くの竈は大部分が床面上に造られているため、やや異質な竈である。

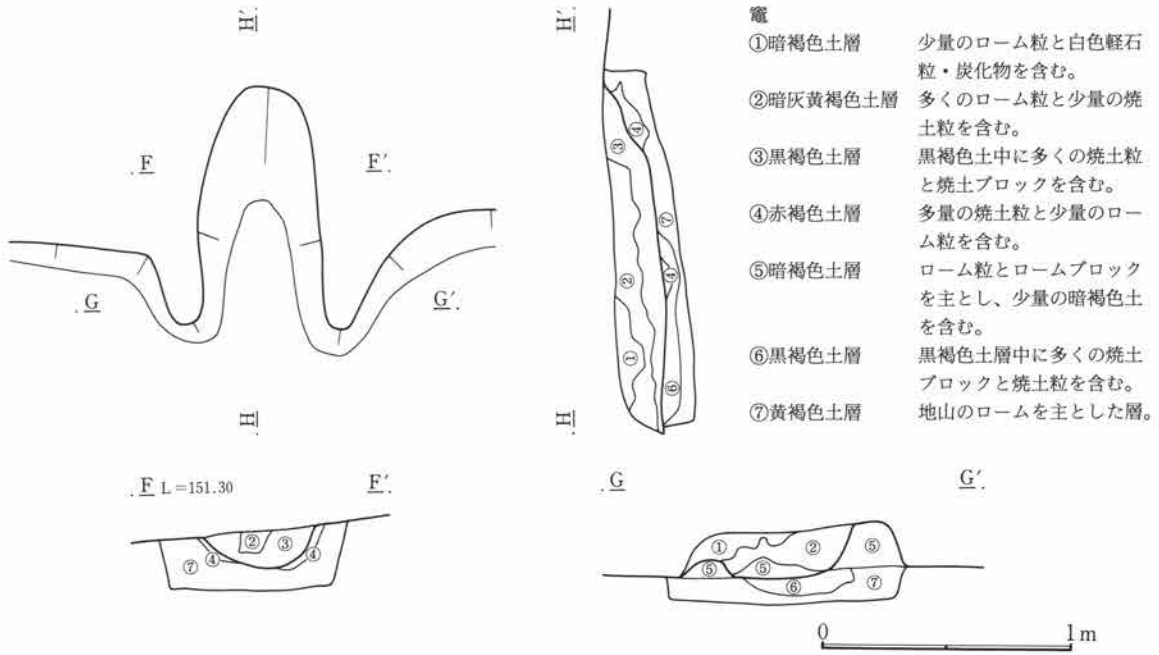
構造 竈内より石の出土はなく、多くのロームが出土しているため、主としてロームを用いて造られた竈と思われる。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向105cm、燃焼部幅48cmである。



第312図 404号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第313図 404号住居跡竈実測図



第314図 404号住居跡出土遺物実測図

404号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
314-1	土師器 高坏	床面直上 坏部破片	口(16.3) 高— 底—	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焙、硬質③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器肉が全体に厚い。1mm以下の赤色粒を多量に含む。
314-2 97	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.6) 高4.4 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焙、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底面へら削り。砂粒の移動少ない。へらの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭。

416号住居跡 (第315~317図、図版47・108)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、34-3グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなる傾斜面に位置し、西約30mは西谷川の流路となっている。竈を含む住居南東部分は残っているが、その部分以外は耕作により削られてほとんど残っていなかった。さらに住居西側を2号方形区画溝・耕作溝・攪乱土坑により深く掘り込まれていた。このようにきわめて残りの悪い住居であった。

構造 床面は良好な状態での検出はできなかった。床面はローム粒を主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られていた。床面の確認できた南東部分の柱穴のほかに、他の遺構により削り取られている部分からも柱穴と思われる小穴が3本確認された。また貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。

規模 東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分の壁面で26cmである。貯蔵穴は径59cm 深さ62cmである。柱穴1は径37cm深さ63cm、柱穴2は径25cm深さ94cm、柱穴3は径31cm深さ71cm、柱穴4は径31cm深さ71cmである。

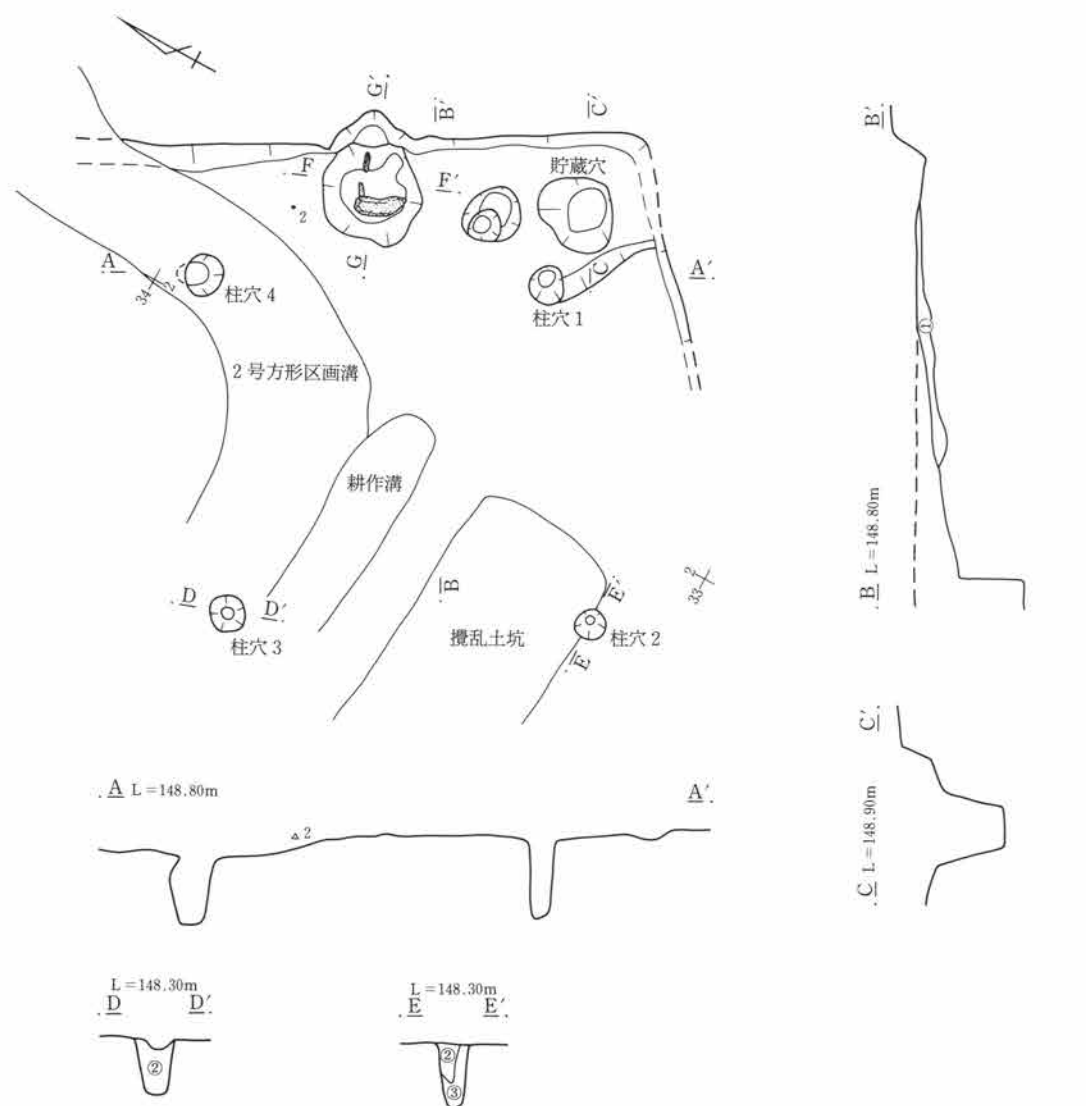
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏の小破片と白玉1点である。破片は多く出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の大部分は床面上に位置する。

構造 大部分が壊されて残っていなかった。竈内より細長い立石が2個と天井石と思われる大きな石が1個出土した。一部に石を使用し、ロームを主として造られた竈と思われる。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向推定70cm、燃焼部幅56cmである。



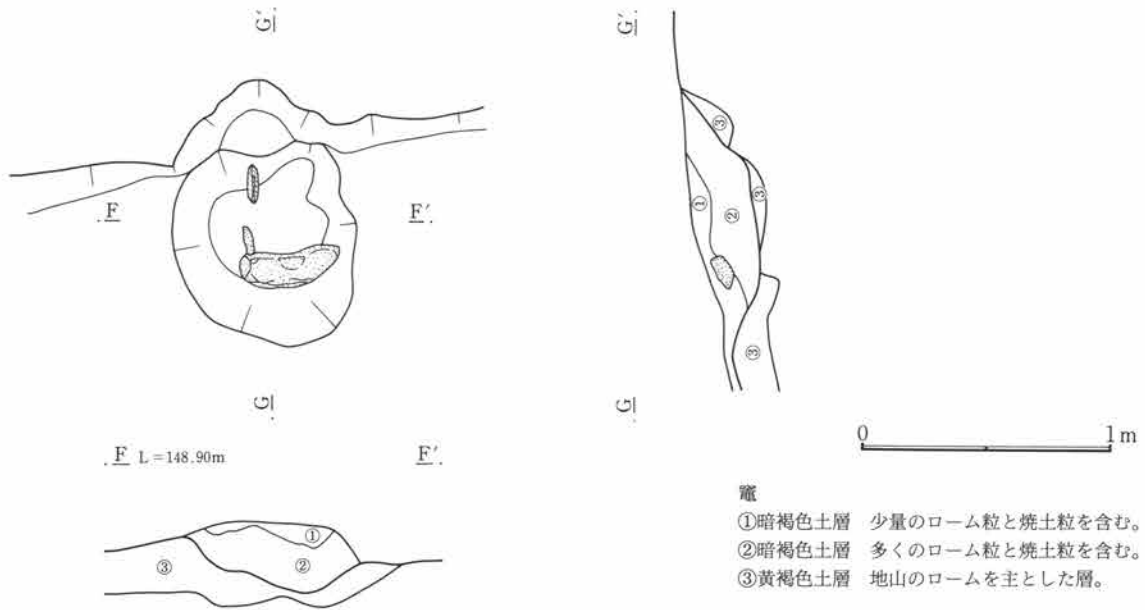
(416号住居跡)

- ①黄褐色土層 地山のロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とする層。

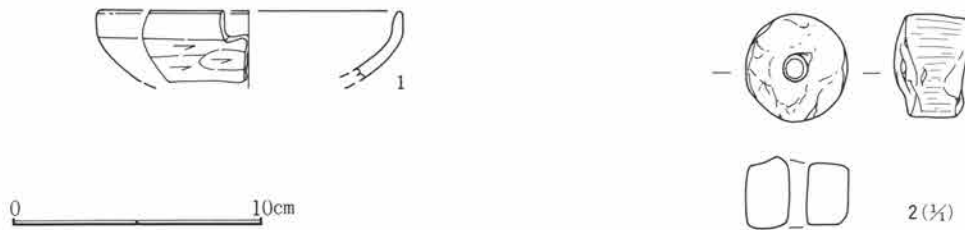
第315図 416号住居跡実測図

0 2m

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第316図 416号住居跡竈実測図



第317図 416号住居跡出土遺物実測図

416号住居跡出土遺物観察表

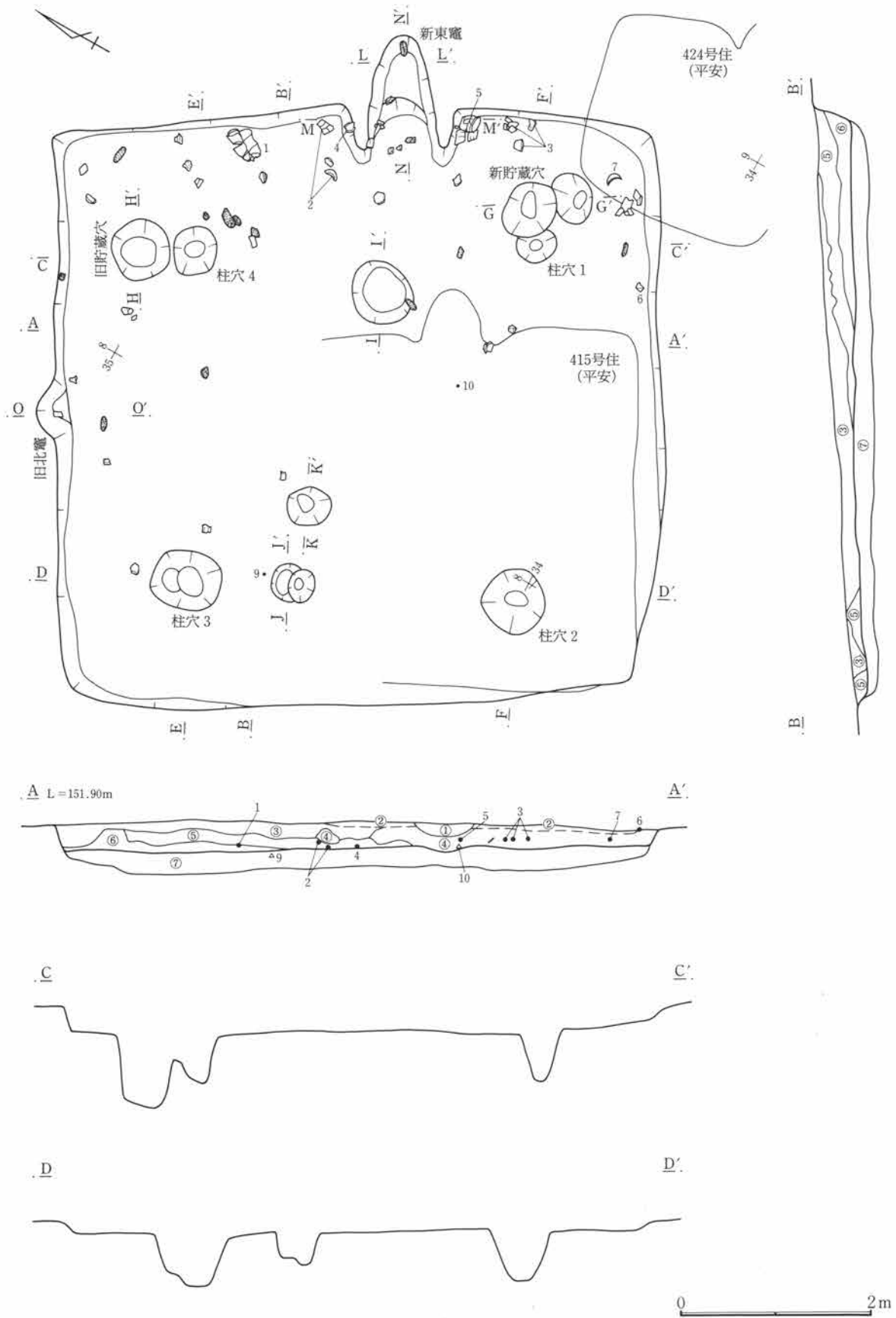
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
317-1	土 師 器 坏	竈覆土 破片	口(12.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。小さな坏の破片である。
317-2 108	石 製 品 白 玉	覆土 完形	径 1.3 厚 0.9	孔径 0.2 重 3.0 ③灰白色	滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後、わずかに調整している。

417号住居跡 (第318~322図、図版47・48・97・108)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、35-8・9グリッドに位置する。

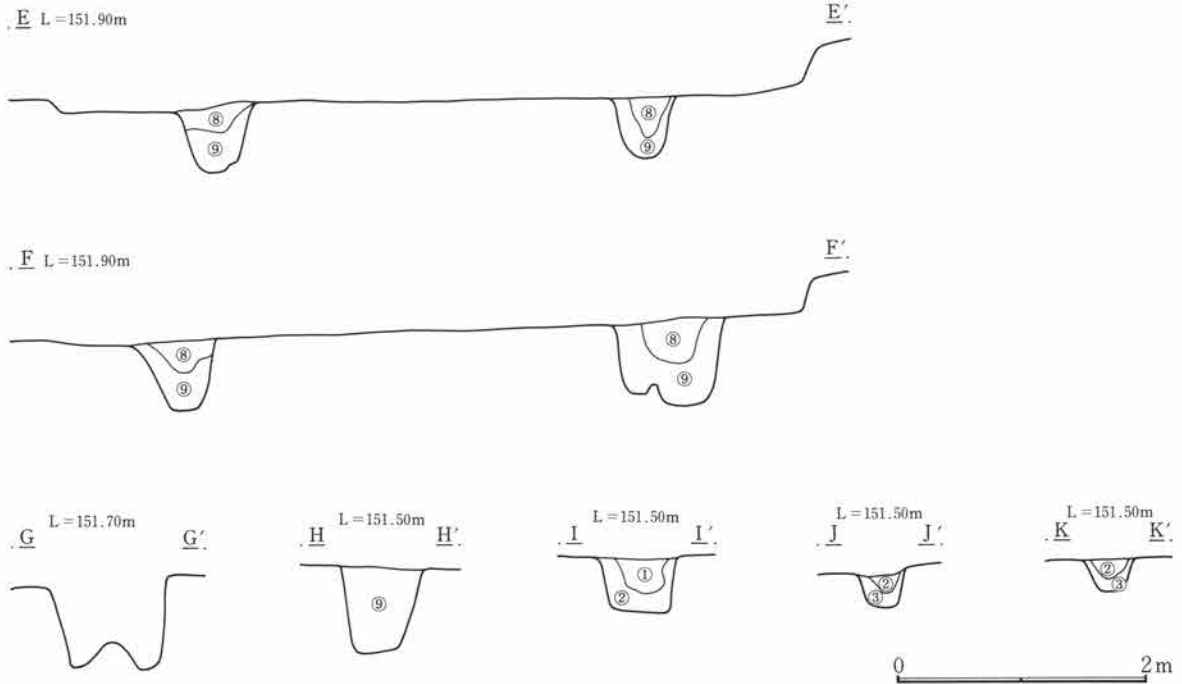
概要 住居南側覆土上面を掘り込んで平安時代の415号住居が、また南東コーナー部分の覆土上面を同じ平安時代の424号住居により掘り込まれている。しかしいずれも覆土上面を掘り込んでいるため本住居の床面は残っていた。竈が東壁と北壁面に造られていたが、北壁面の竈は床面上に位置する袖や燃焼部はすべて取り外されており、土層断面からも竈が削り取られた状態が確認された。東壁面に造られていた竈は両袖部とも残っていたため新東竈とし、北壁面の竈を旧北竈とした。

構造 床面中央部の一部は強く踏み固められていた。床面は多量のローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られていた。柱穴が4本、また貯蔵穴が新旧の竈の右側にそれぞれ掘られ



第318図 417号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(417号住居跡)

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| ①415号住居覆土 | ⑧暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の灰を含む。 |
| ②暗褐色土層 415号住居覆土と思われるが、③層との区別は明瞭でない。 | ⑨黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。 |
| ③暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。 | |
| ④暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒・灰を含む。 | 小穴 |
| ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の白色軽石粒を含む。 | ①暗褐色土層 多くの灰と少量の焼土粒を含む。 |
| ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。 | ②暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。 |
| ⑦褐色土層 多量のローム粒とロームブロックを含む。 | ③暗黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。 |

第319図 417号住居跡実測図(2)

ていた。新貯蔵穴は2個連結したような状態で掘られており、2個同時に使われていたのか、新旧関係の有無についての確認はできなかった。また柱穴のほかに4本の小穴が床面上に掘られていた。

規模 東西6.15m、南北6.31mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分の壁面で27cmである。北寄りの新貯蔵穴は径53cm深さ61cmで、南寄りの新貯蔵穴は径42cm深さ39cmである。旧貯蔵穴は径61cm深さ73cmである。柱穴1は径43cm深さ49cm、柱穴2は径69cm深さ59cm、柱穴3は径55cm深さ60cm、柱穴4は径45cm深さ53cmである。

遺物 竈周辺と竈の造られている東壁面に近い床面付近から、多くの土師器の坏や甕が出土している。

(新東竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖部と燃烧部の多くは床面上に造られ、煙道部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

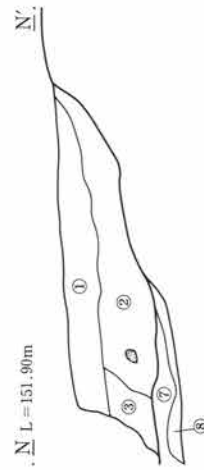
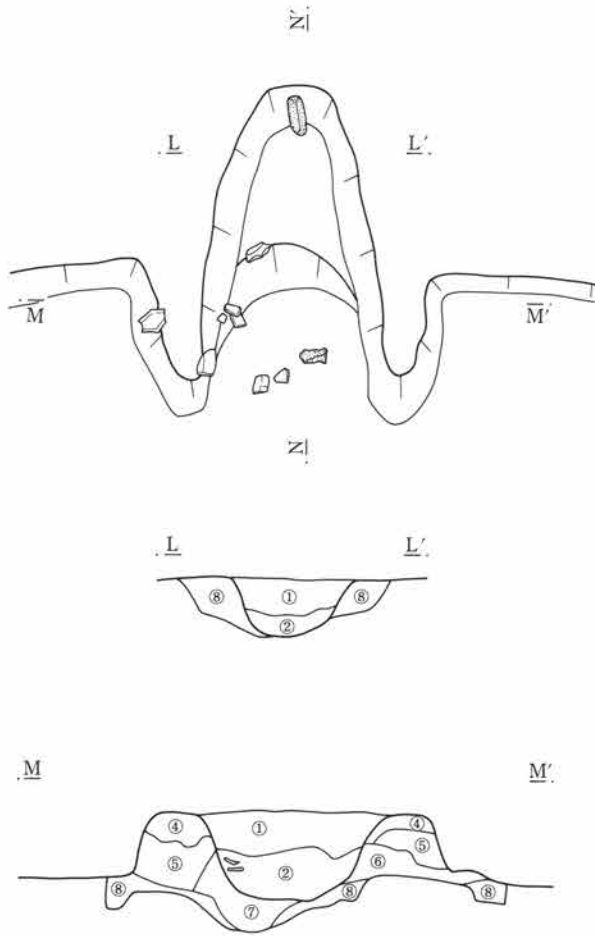
構造 竈内より2個の小さな石の出土はあったが、袖や天井部の石の出土はないため、ロームを主として造られた竈と思われる。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向131cm、燃烧部幅67cmである。

(旧北竈)

位置 住居北壁面のほぼ中央部に造られている。

概要 床面上に造られていた袖部と燃烧部の多くは取り外されており、壁面を掘り込んで造られた煙道部の一部と床面下に位置する燃烧部下が残っていた。その部分より多くの焼土粒が出土した。

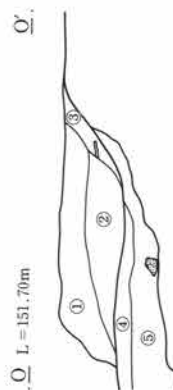
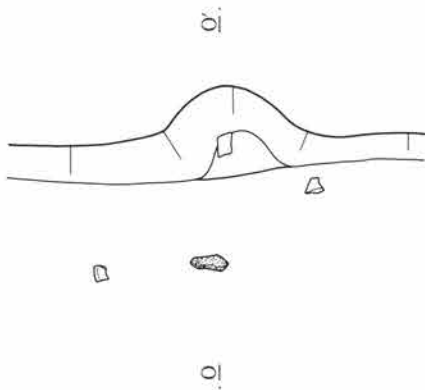


新東竈

- ①暗褐色土層 少量のロームブロックと僅かな焼土粒を含む。
- ②暗赤褐色土層 多くのロームブロックと焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の灰を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑥暗黄褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑧黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第320図 417号住居跡新東竈実測図

0 1m

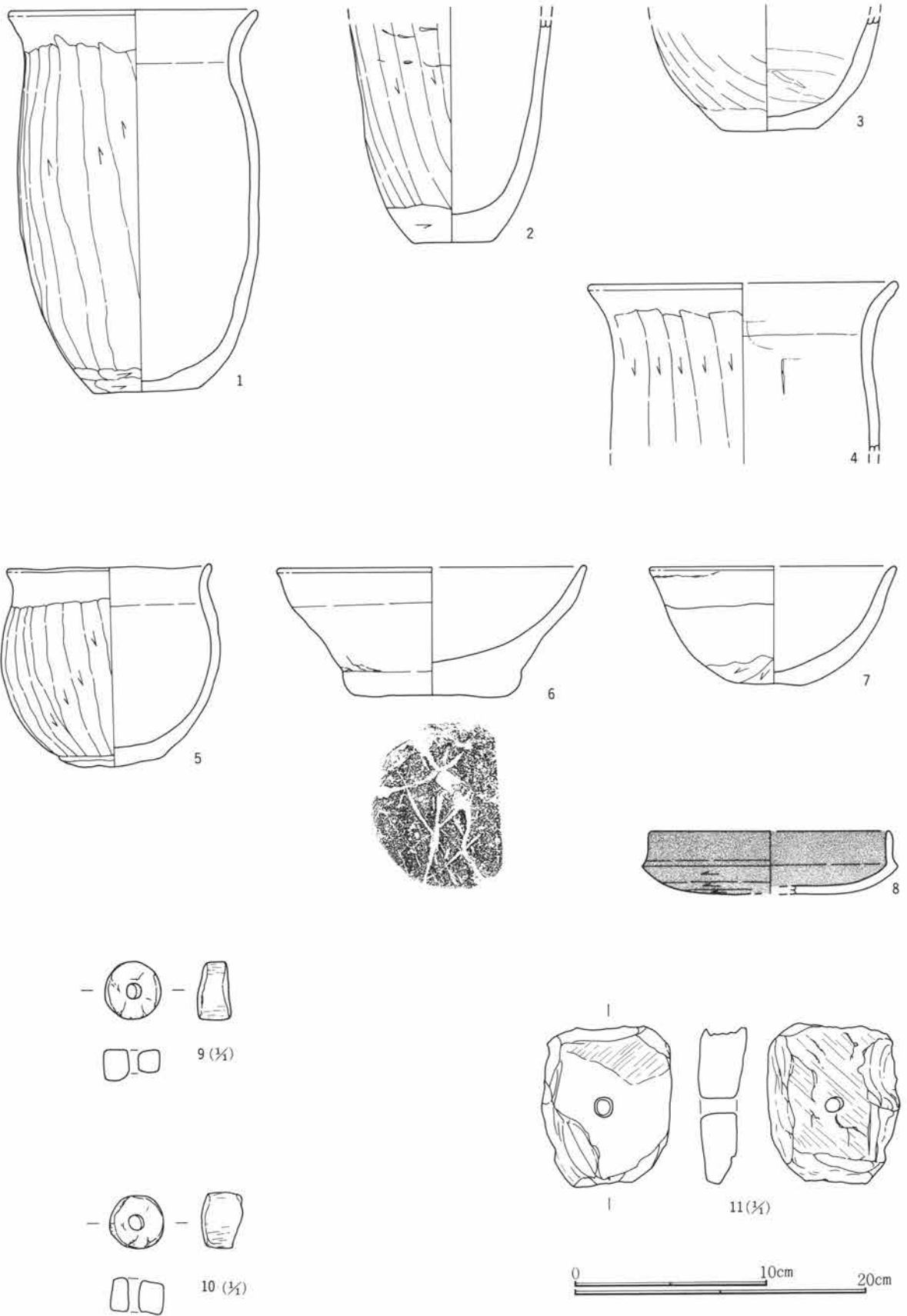


旧北竈

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④暗赤褐色土層 多くの焼土粒とロームブロックを含む。
- ⑤暗黄褐色土層 多くのロームブロックとローム粒を含む。

第321図 417号住居跡旧北竈実測図

0 1m



第322図 417号住居跡出土遺物実測図

417号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
322-1 97	土師器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 17.4 高 26.3 底 7.4	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③口縁と内面橙色・外面黒褐色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
322-2 97	土師器 甕	床面直上 胴下半 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 6.0	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焙、硬質 ③褐色	底部ヘラ削り。胴部ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。輪積痕が残る。内面ナデにより器表面密。
322-3 97	土師器 甕	床面直上 胴下半 $\frac{1}{4}$ 底部完形	口 — 高 — 底 6.6	①粗、2~4mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焙、硬質 ③内面にふい橙色・外面明赤褐色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。内面ナデにより器表面密。
322-4	土師器 甕	新東竈内 破片	口(21.5) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。甕の破片と思われるが明確でない。
322-5 97	土師器 小型壺	床面+11 口縁部 $\frac{1}{2}$ 他ほぼ完形	口 14.2 高 13.8 底 7.2	①やや粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③黒褐色・口縁部の一部橙色	底部ヘラナデ。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面吸炭により黒褐色を呈している。
322-6 97	土師器 坏	床面+7 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部完形	口(16.0) 高 6.5 底 8.0	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③外面褐色・断面橙色	底部木葉痕。胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。甕の底部に似ているが、胎土は坏用で密である。
322-7 97	土師器 坏	床面+10 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.9) 高 6.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焙、硬質 ③にふい橙色	底部ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は全く認められない。
322-8	土師器 坏	覆土 破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密 ②酸化焙、硬質 ③表面黒色・断面にふい橙色	底部ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面漆により黒光りしている。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
322-9 108	石製品 白玉	床面-5 完形	径 1.0 孔径 0.2 厚 0.5 重 0.7 ③灰色		滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後、わずかに調整している。
322-10 108	石製品 白玉	床面+5 完形	径 0.9 孔径 0.2 厚 0.6 重 1.0 ③灰色		滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後、わずかに調整している。
322-11 108	石製品 白玉	覆土	横 2.3 縦 2.7 孔径 0.2 厚 0.8 重 7.9 ③灰黄褐色		滑石片岩。側面に多くのノミの加工痕がある。1枚の板状剥片から、白玉を作成する段階の未製品か？

420号住居跡 (第323~326図、図版48・97)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、36-3グリッドに位置する。

概要 西に向かって低くなる傾斜面に位置し、西約30mは西谷川の流路となっている。住居東側は残りが良いが、低い傾斜面に位置する西側の床面や壁面は耕作により削り取られて残っていなかった。さらに西端は2号方形区画溝により掘り込まれている。このように残りの悪い住居であった。

構造 床面中央部は堅く踏み固められていたが、そのほかの部分は良好な状態での検出はできなかった。床面はローム粒を主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られていた。南側の柱穴付近に多くの小穴が掘られていたが、本住居跡に伴うものなのかの確認はできなかった。柱穴が4本、また貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。

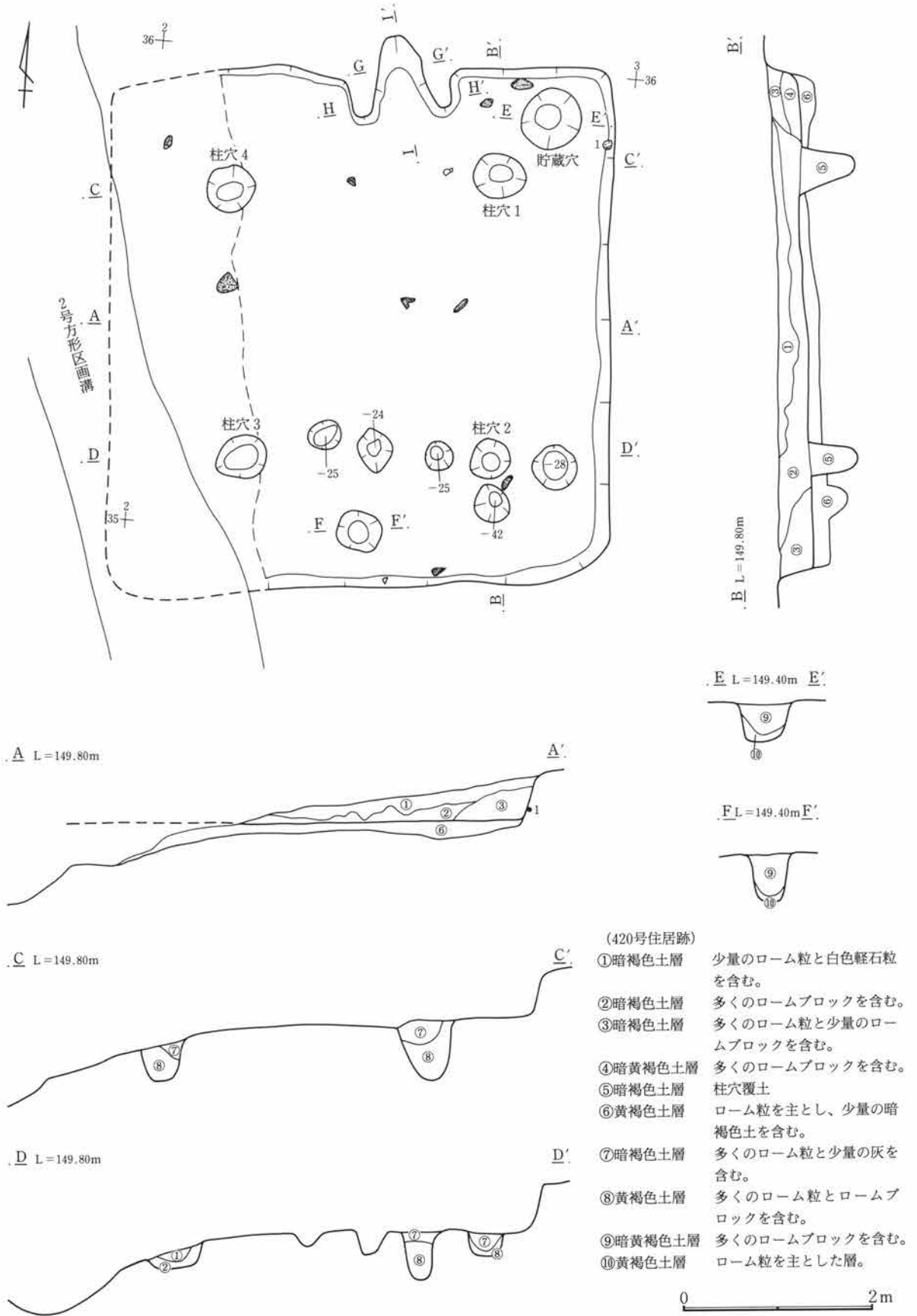
規模 東西不明、南北5.37mである。壁高は残りの良い東壁面で59cmである。貯蔵穴は径56cmでほぼ円形を呈し、深さ33cmである。柱穴1は径60cm深さ54cm、柱穴2は径41cm深さ55cm、柱穴3は径55cm深さ41cm、柱穴4は径59cm深さ54cmである。

床下 床下土坑は掘られていなかったが、多くの小穴が掘られていた。

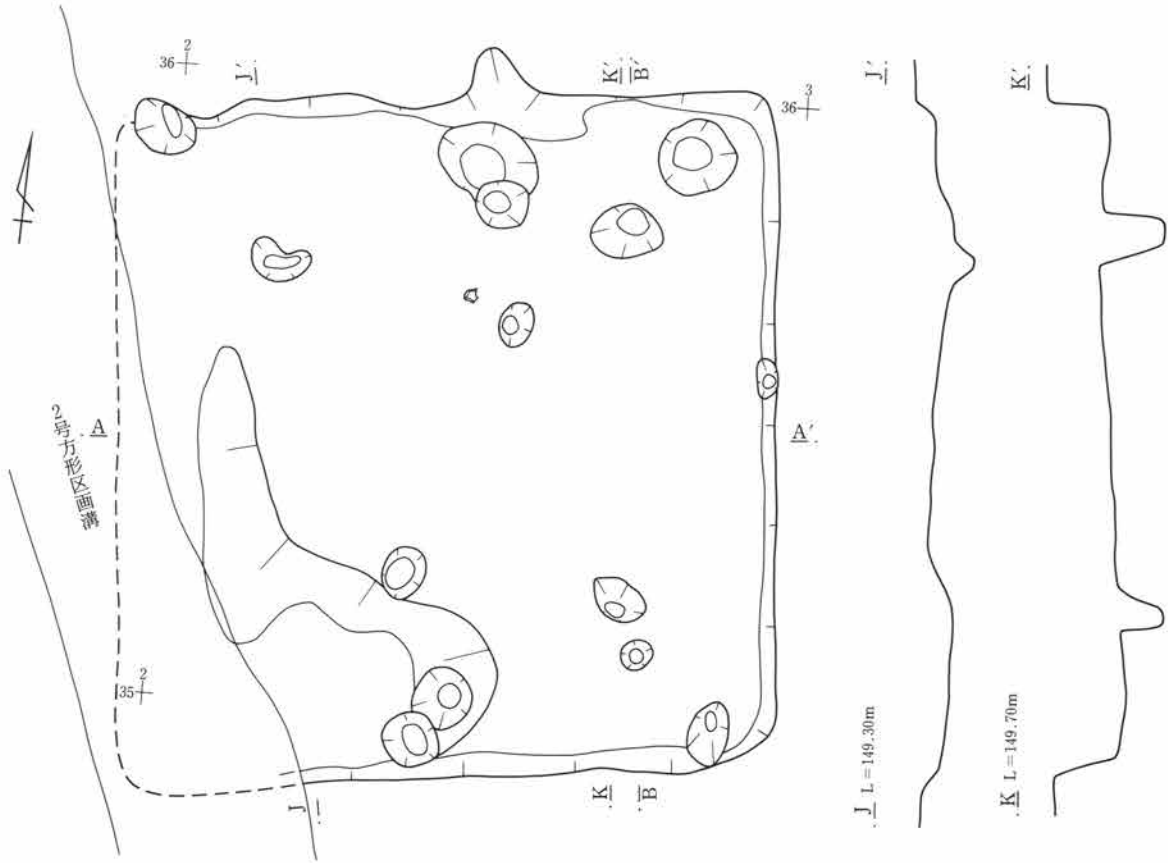
遺物 少量の遺物しか出土していないため、図示できたのは土師器の坏1点である。

(竈)

位置 住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の大部分は床面上に位置する。

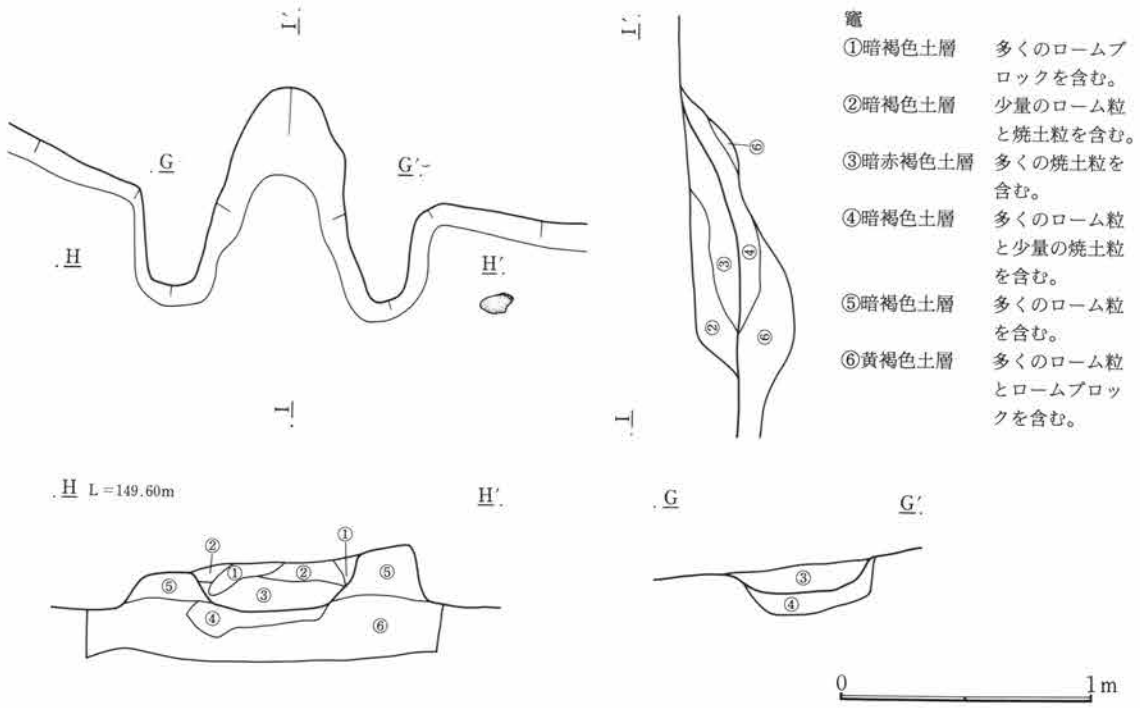


第323図 420号住居跡実測図



第324図 420号住居跡床下実測図

0 2m



第325図 420号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 竈内より石の出土はなく、多くのロームが出土しているため、主としてロームを用いて造られた竈と思われる。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向87cm、燃焼部幅65cmである。



第326図 420号住居跡出土遺物実測図

420号住居跡出土遺物観察表

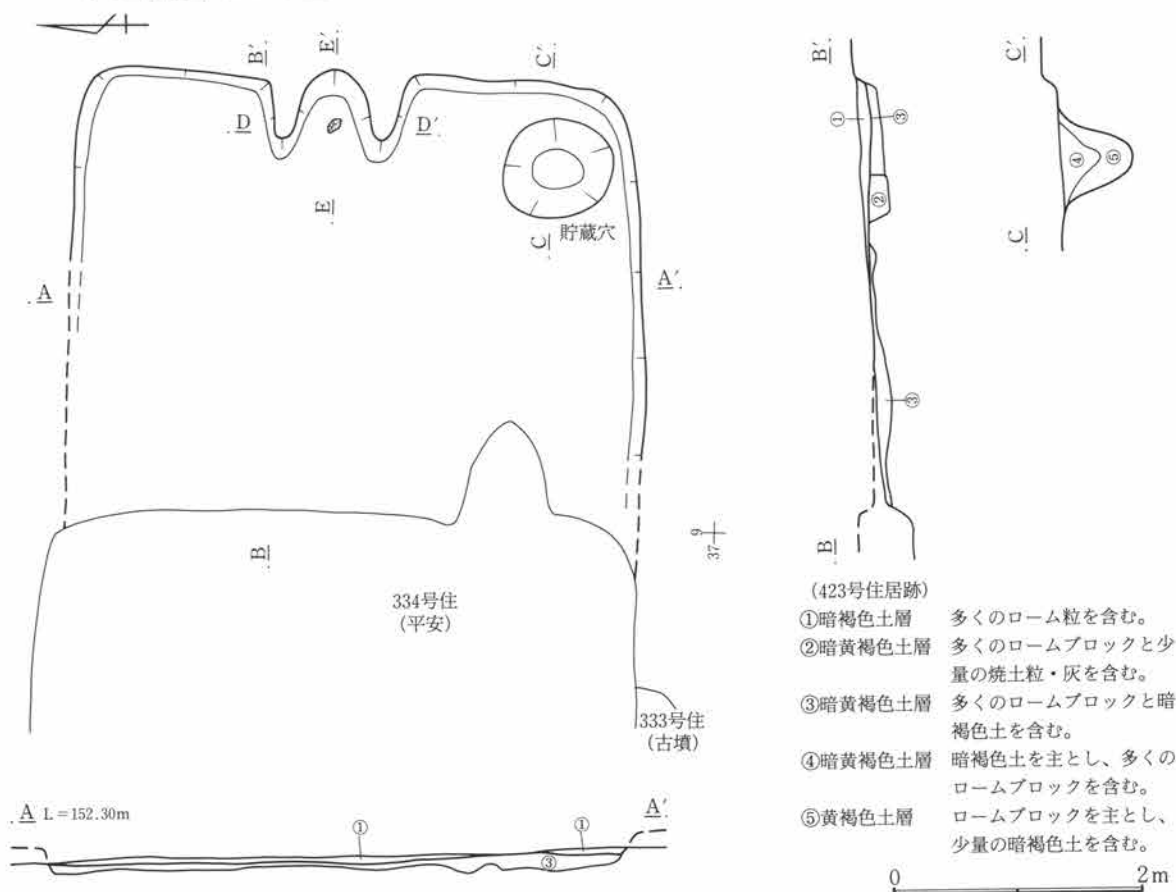
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
326-1 97	土師器 坏	床面直上 1/3残存	口(11.8) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面灰色	底面ヘラ削り。器表面密で削りの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。表面の黒色は吸炭による。

423号住居跡 (第327・328図、図版48)

位置 本住居跡は、第5次調査区にあり、38-10グリッドに位置する。

概要 住居東側の壁面と床面は僅かに残っているが、西端は耕作により削り取られて残っていなかった。また残りの悪い西側は平安時代の334号住居により深く掘り込まれていた。このように残りの悪い住居であった。

構造 床の表面部分は耕作により削られており、多くの部分が残っていなかった。床面は多くのロームブロックと暗褐色土により造られていた。柱穴は掘られていなかった。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。



第327図 423号住居跡実測図

規模 東西不明、南北4.55mである。壁高は残りの良い東壁面で10cmである。貯蔵穴は径88cmでほぼ円形を呈し、深さ54cmである。

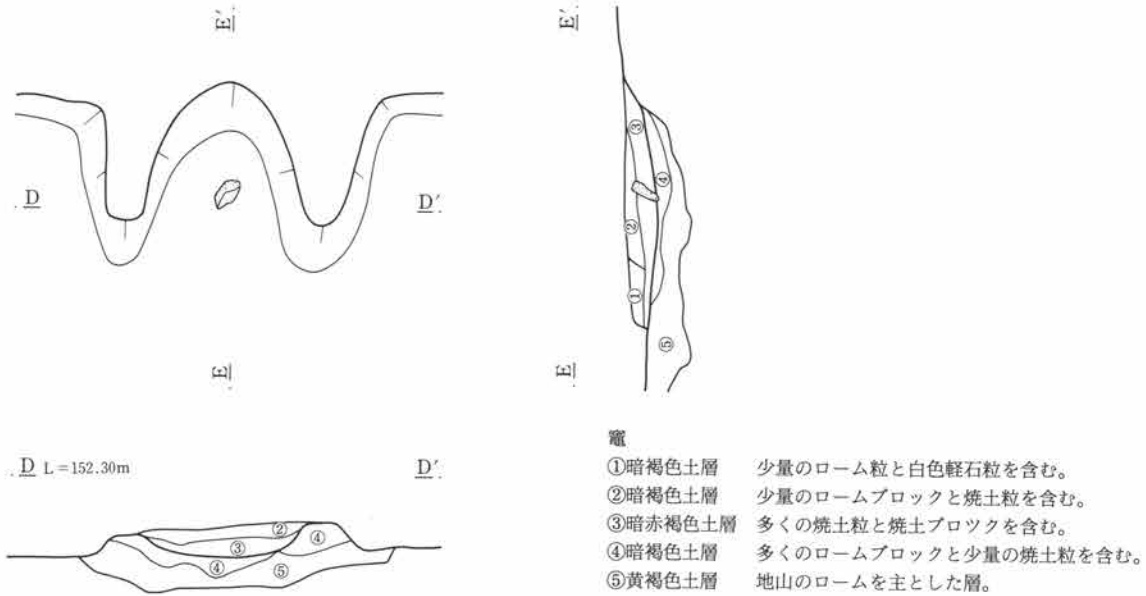
遺物 出土量が少なく図示できる遺物はない。破片は総数で15片である。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の大部分は床面上に位置する。

構造 燃焼部床面に支脚石が据えられた状態で出土した。他に石の出土はなかった。僅かに残る袖部分の状態からロームを多く使用して造られた竈であると思われる。竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向72cm、燃焼部幅62cmである。



第328図 423号住居跡竈実測図

0 1m

538号住居跡 (第329～331図、図版48・49・97)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、54・55-16グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の687号住居と重複しており、本住居が687号住居の南東部分を床下部分まで掘り込んで住居が造られていた。竈手前部分で床面から約15cm程高い位置に灰褐色の粘土が、厚さ約10cm幅80cmの範囲で確認された。

構造 床面は堅く踏み固められていなく、良好な状態での検出はできなかつた。床面は大小のロームブロックを多く用いた土で造られていた。床下調査段階で竈の下の部分を含めて小穴が4本検出されたが、いずれも柱穴の可能性は低いと思われる。貯蔵穴や壁溝も掘られていなかった。

規模 東西3.14m、南北2.86mである。壁高は残りの良い北壁部分で19cmである。

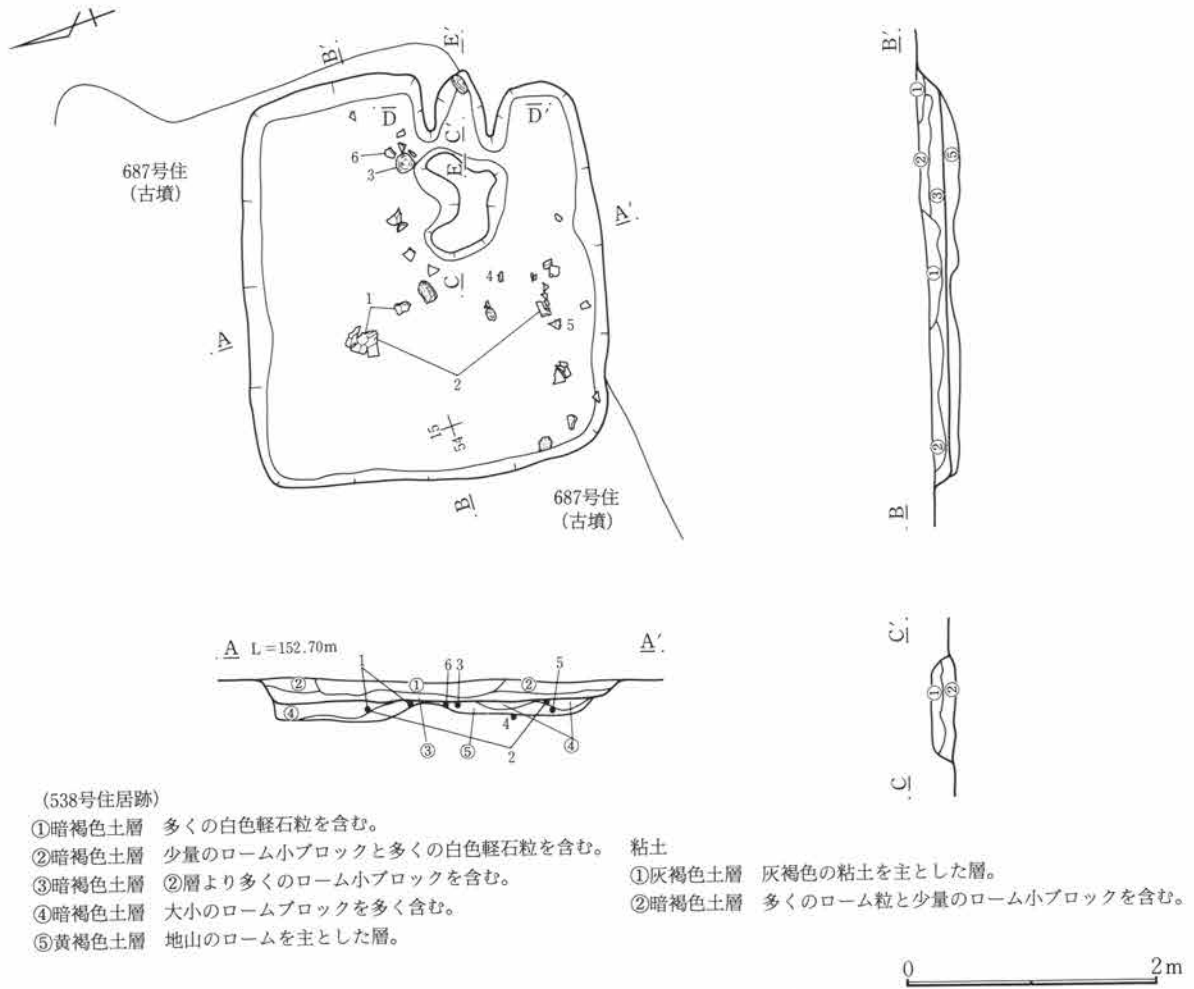
遺物 破片を含め出土量は少ないが、6点の土師器の甕と坏を図示することができる。

(竈)

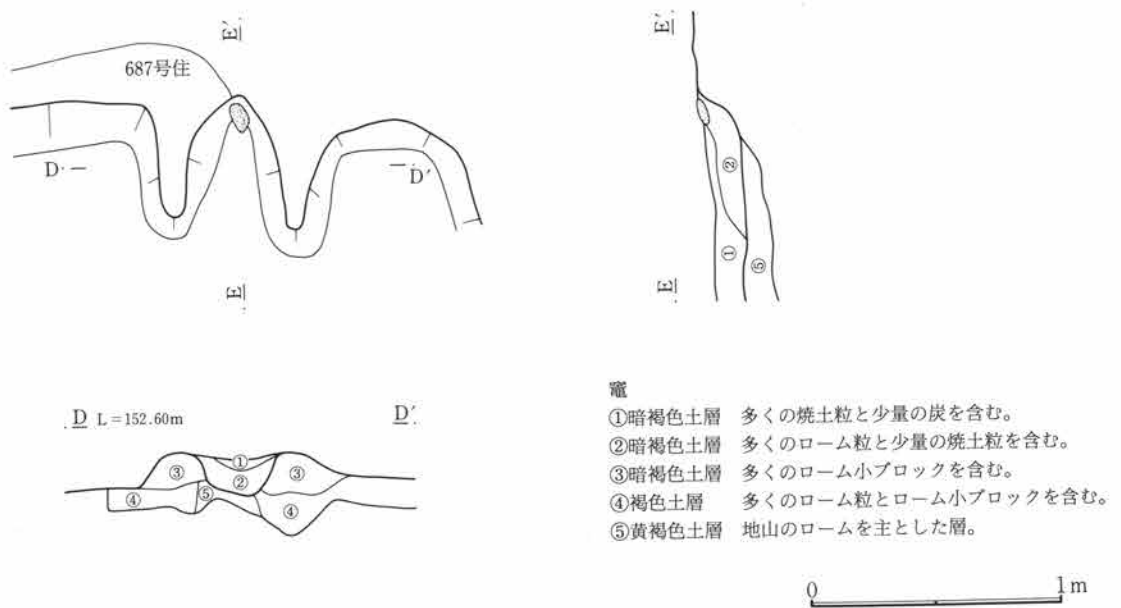
位置 住居東壁の南寄りに造られている。袖と燃焼部の大部分は床面上に位置する。

構造 煙道部に1個の石が残されていたが、ほかに石は出土しなかつた。左右の袖ともロームを多く用いて造られていたものと思われるが残りは悪い。竈内の焼土粒の出土も多くはなかつた。

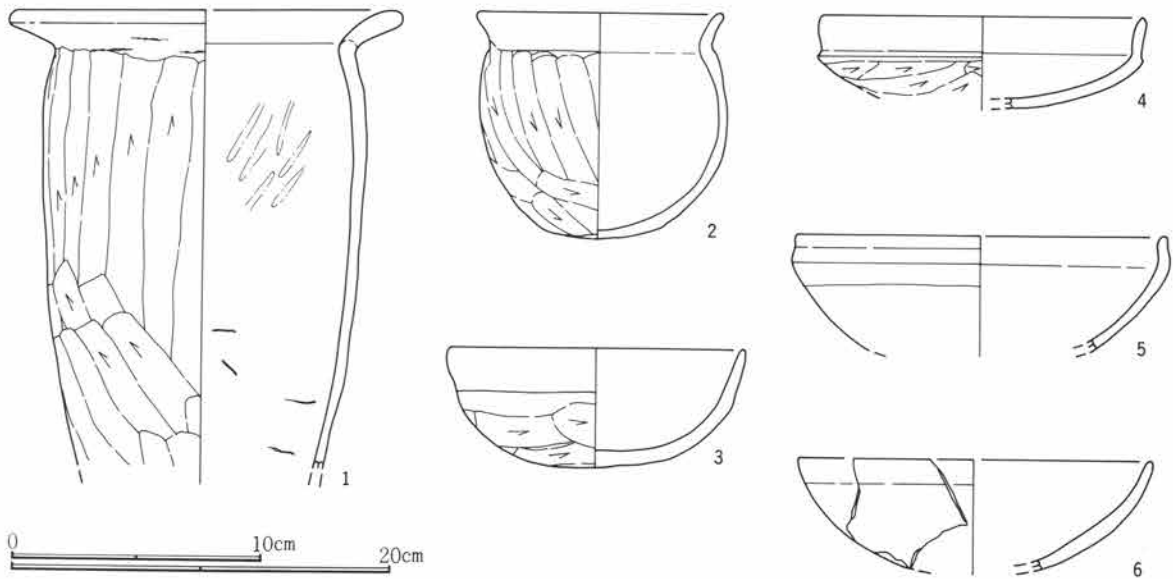
規模 煙道方向64cm、燃焼部幅42cmである。



第329図 538号住居跡実測図



第330図 538号住居跡竈実測図



第331図 538号住居跡出土遺物実測図

538号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
331-1 97	土師器 甕	床面+4 1/3残存	口(21.0) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側に輪積痕がわずかに残る。
331-2 97	土師器 小型甕	床面+5 口縁部1/2 胴~底部1/3	口 13.1 高 11.9 底 6.3	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③内面黒色・外面にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器肉の薄い小さな甕である。
331-3 97	土師器 坏	床面+10 ほぼ完形	口 12.0 高 4.6 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。外面全体的に粗れている。内面ナデにより器表面密。一部吸炭により黒色を呈する。
331-4 97	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 13.0 高— 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面明赤褐色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
331-5	土師器 坏	床面+5 破片	口(14.8) 高— 底—	①密、砂粒はほとんど含まず。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削りであると思われるが粉状の胎土のため、削りの単位不明。口縁部横ナデ。黒斑は認められない。
331-6	土師器 坏	床面+7 破片	口(14.2) 高・底—	①密、少量の砂粒を含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面はヘラ削りと思われるが、器表面密でヘラの単位不明。口縁部横ナデ。内面ナデ。胎土がやや粉状を呈する。

539号住居跡 (第332~334図、図版49・50・98)

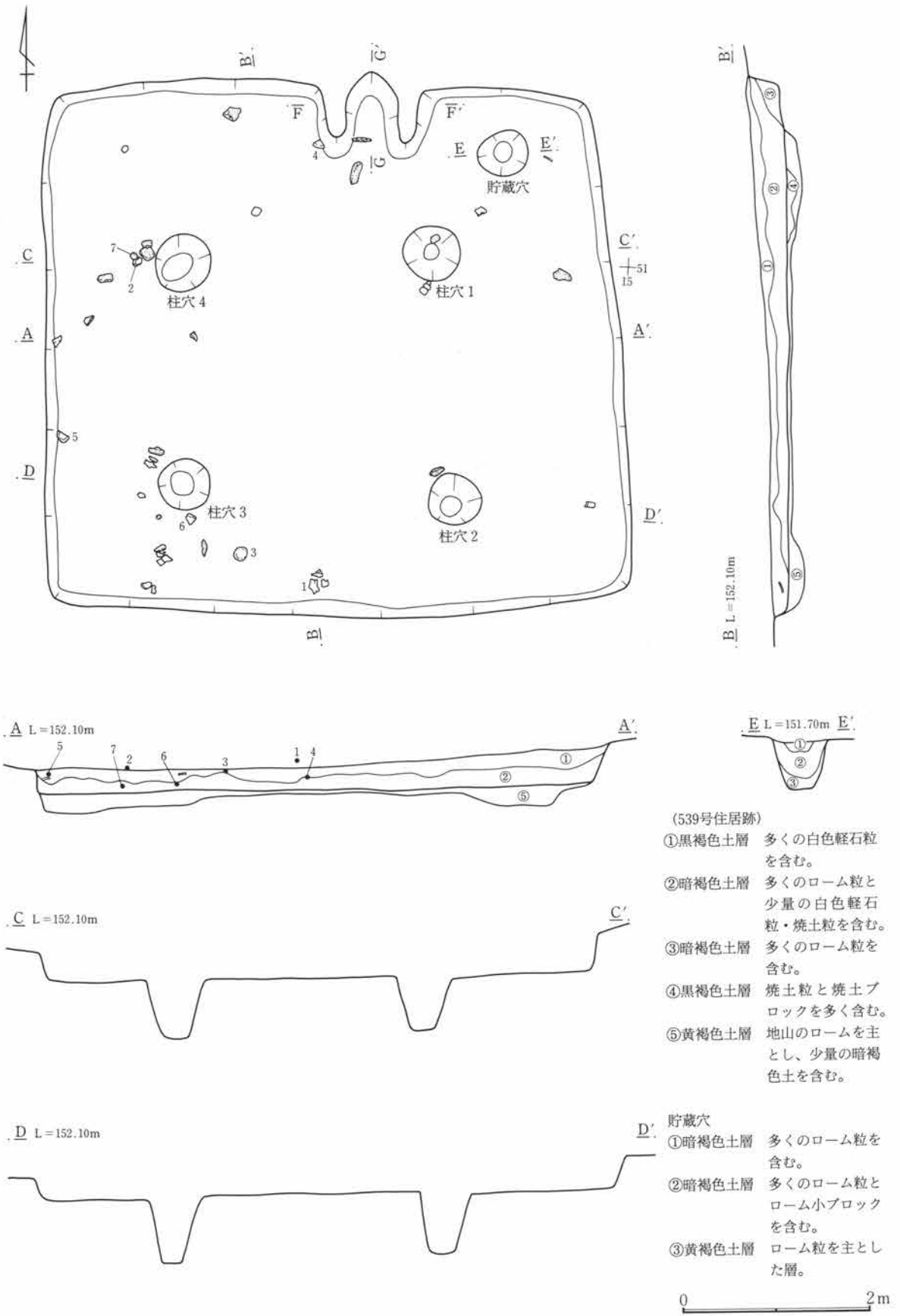
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、51-15グリッドに位置する。

概要 他の住居と重複していない残りの良好な住居である。

構造 床面は多くのロームブロックと少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本と貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、壁溝は掘られていなかった。

規模 東西6.10m、南北5.58mである。壁高は残りの良い東壁部分で46cmである。柱穴1は径62cm深さ57cm、柱穴2は径56cm深さ65cm、柱穴3は径54cm深さ75cm、柱穴4は径60cm深さ64cmである。貯蔵穴は径56cm深さ46cmでほぼ円形を呈する。

床下 床下調査の結果、東と北側の壁面近くの床面が一段高い状態で検出された。この高い部分は南と西側には認められないため、住居が部分的に拡張されたことを示していると思われる。柱穴の掘り直しは行われなかったようであり、竈の掘り直しは考えられるが、確認できなかった。床面下で確認された



第332図 539号住居跡実測図

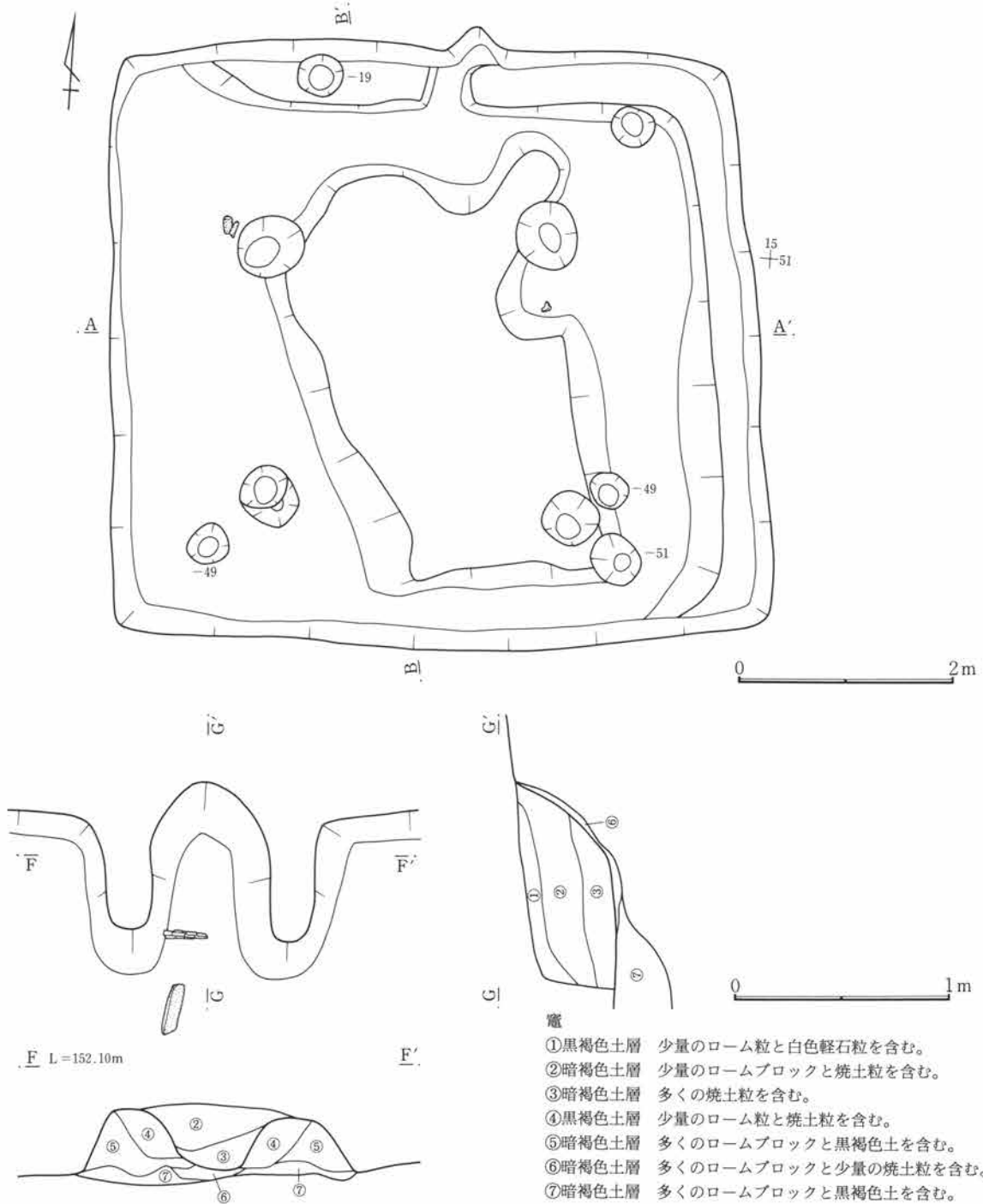
小穴の床面からの深さは数字で示した。

遺物 図示できたのは8点であるが、西壁面に近い床面周辺から破片を含めた多くの遺物が出土している。

(竈)

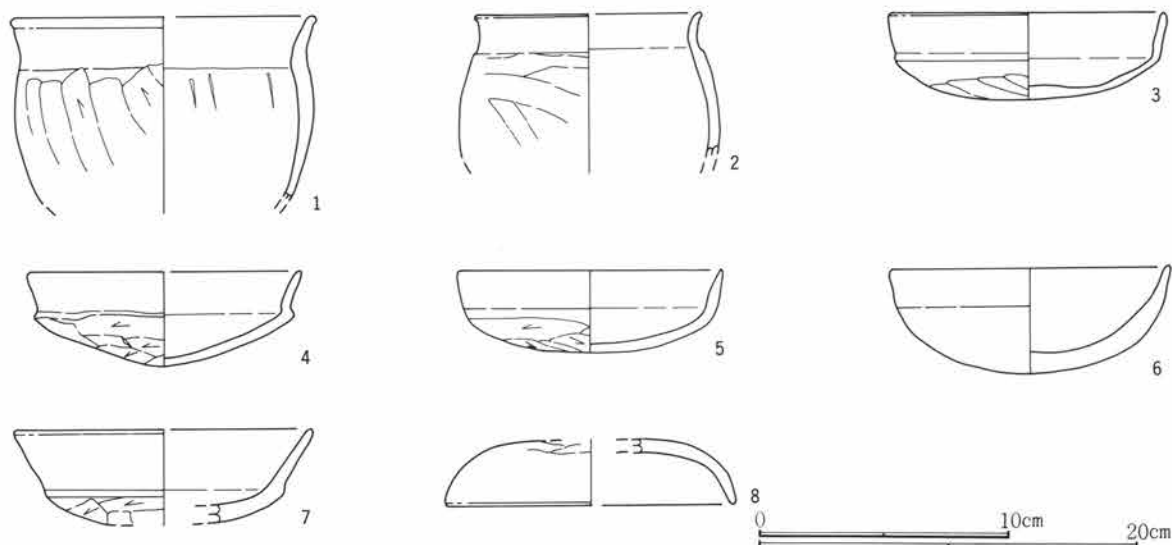
概要 住居北壁中央部やや東寄りに造られている。袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃烧部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは袖石や天井石は確認されなかった。竈は黒褐色土とロームの混入した粘性の強い土で築かれていた。

規模 煙道方向116cm、燃烧部幅91cmである。



第333図 539号住居跡床下・竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第334図 539号住居跡出土遺物実測図

539号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
334-1	土器 小型甕	床面+8 破片	口(15.8) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く4~5mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面全体に多くの砂粒が目立つ。胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。砂粒が多く目立つ胎土である。
334-2	土器 小型甕	床面+9 破片	口(12.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に器表面密。黒斑認められず、胎土がやや粉状を呈する。
334-3 98	土器 杯	床面直上 完形	口10.9 高3.4 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削りであるが、胎土が粉状を呈しておりへらの単位不明瞭。黒斑認められず、胎土が粉状を呈する。
334-4	土器 杯	床面直上 1/2残存	口(10.8) 高3.7 底丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。稜は明瞭である。黒斑認められず、胎土が粉状を呈する。
334-5 98	土器 杯	床面+4 1/2残存	口10.6 高3.2 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜はなし。黒斑なし。胎土がわずかに粉状を呈する。
334-6 98	土器 杯	床面+7 1/2残存	口12.2 高4.2 底丸底	①密、少量の砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へらナデか。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底部表面がわずかに剝落している。
334-7	土器 杯	床面+13 破片	口(11.8) 高— 底—	①密、雲母粒を多く、赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
334-8	須恵器 蓋	覆土 破片	摘— 高— 口(11.4)	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部手持ちへら削り。口縁部横ナデ。

544号住居跡 (第335・336図、図版50・51)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、53-14グリッドに位置する。

概要 4軒が重複する住居群の中の1軒であり、浅く小さな住居である。住居北側と東側部分を古墳時代の545号住居と古墳時代と思われる547号住居、及び奈良時代の543号住居により床下部分まで深く掘り込まれていた。最も古い段階の住居と思われ、新旧関係は544→547→545→543号住居の順と思われる。竈は明らかでないが、547号住居と重複している北壁中央部に焼土粒が検出され、またその部分の床下に他の住居の竈で多く認められる掘り込みが確認されたため、この部分に竈が造られていたものと思われる。

構造 床面は堅く踏み固められていなく、良好な状態での検出はできなかった。柱穴は掘られていなかった。貯蔵穴は不明である。

規模 東西不明、南北2.57mである。壁高は北壁部分で14cmである。

遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器坏の小破片である。破片総量でもわずか17片である。

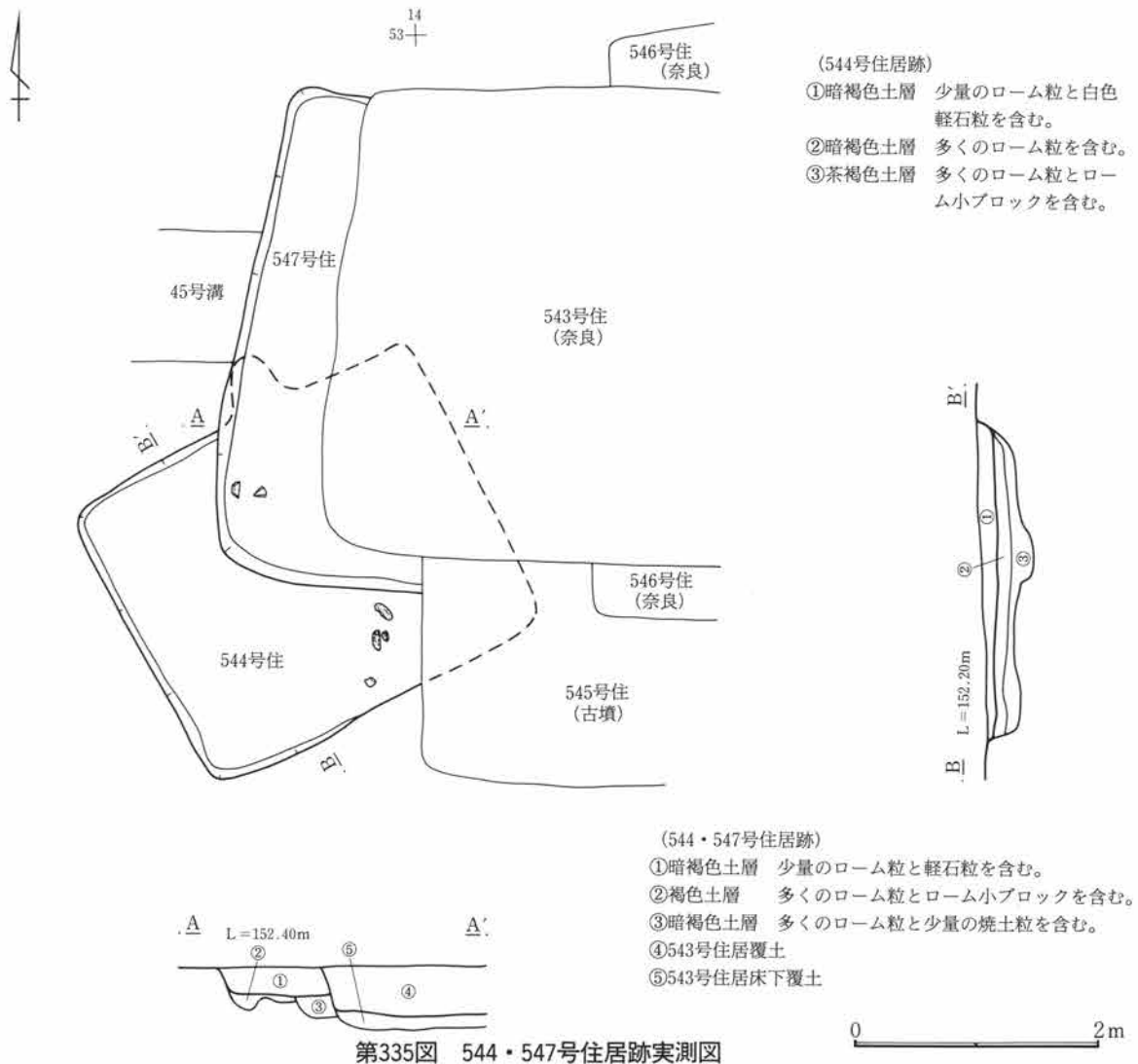
547号住居跡 (第335・337図、図版51)

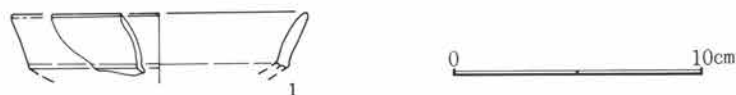
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、53—14グリッドに位置する。

概要 4軒が重複する住居群の中の1軒で掘り込みの浅い住居である。住居東側部分を古墳時代の545号住居と奈良時代の543号住居により、床下部分まで深く掘り込まれていた。また南側に位置する544号住居を掘り込んで、そこに造られていたと思われる544号住居の竈も削り取っている。新旧関係は544→547→545→543号住居の順と思われる。床面は堅く踏み固められていなく、良好な状態での検出はできなかった。本住居に伴う竈や柱穴また貯蔵穴等は、重複する543号住居により削り取られたためか不明である。

規模 東西不明、南北3.98mである。壁高は北壁部分で29cmである。

遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器坏の小破片である。破片総量でもわずか15片である。

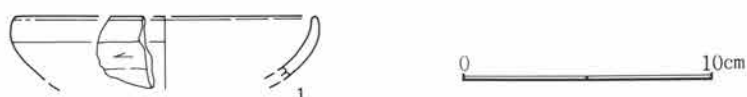




第336図 544号住居跡出土遺物実測図

544号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
336-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(11.8) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	口縁部横ナデ。 胎土が粉状を呈する。坏の小さな破片である。



第337図 547号住居跡出土遺物実測図

547号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
337-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。 わずかな坏の破片である。

545号住居跡 (第338・339図、図版51・98・108)

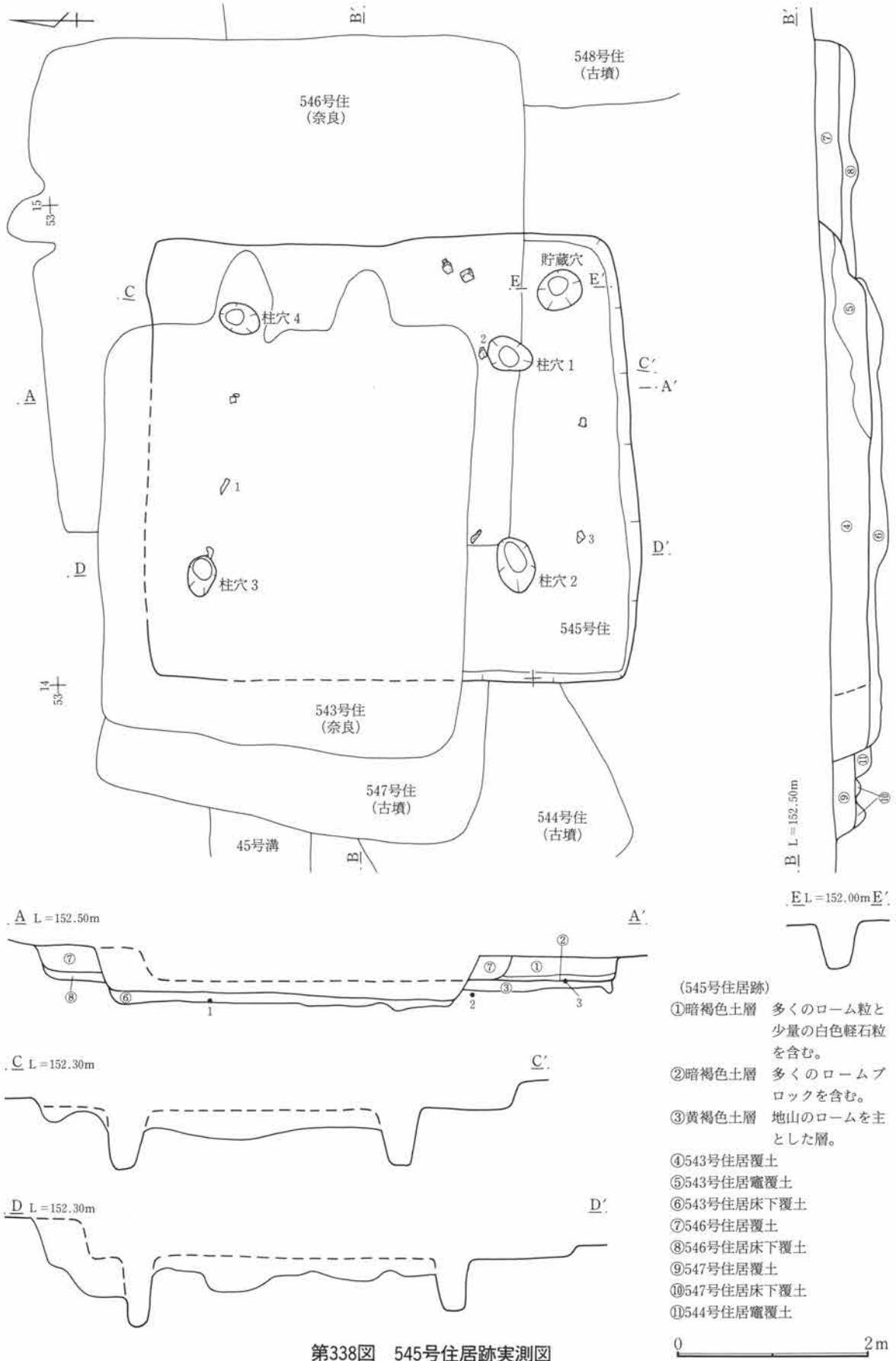
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、52・53-15グリッドに位置する。

概要 5軒が重複する住居群の中の1軒である。住居北側を奈良時代の8世紀後半代の543号住居と8世紀前半代の546号住居により床面下まで掘り込まれている。その部分は柱穴の一部が残っているのみであった。また本住居西側に重複して544号住居と547号住居が造られている。両住居とも掘り込みが浅く、土器の出土が少ないため時期の決定は困難であるが、調査段階において両住居とも本住居により、掘り込まれていると判断された。また547号住居の床下部分から544号住居の竈が確認されたため、547号住居は544号住居より新しいことが明らかである。以上の切り合い関係から新旧関係は544→547→545→546→543号住居の順と思われる。

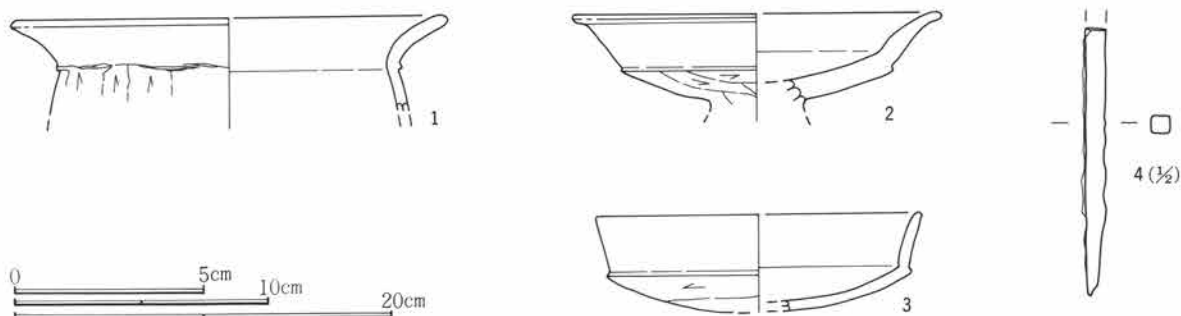
構造 床面は堅く踏み固められていなく、良好な状態で検出はできなかった。柱穴は床面調査段階では確認できなかったが、床下調査段階により他の住居と重複していない部分で2本、543・546号住居と重複している部分で2本確認された。北東部の柱穴4が少しずれていた。竈はすべて削り取られており、どの位置に造られたのか不明であるが、住居南東部分に貯蔵穴と考えられる掘り込みが認められたため、東壁面に造られていた可能性が認められる。

規模 東西4.65m、南北不明である。壁高は南壁部分で26cmである。貯蔵穴は径45cmでほぼ円形を呈し、深さ57cmである。柱穴1は径45cm深さ62cm、柱穴2は径37cm深さ64cm、柱穴3は径28cm深さ73cm、柱穴4は径39cm深さ66cmである。

遺物 出土量が少なく図示できたのは4点である。ほかに覆土中より多くの土師器坏の破片が出土している。



第338図 545号住居跡実測図



第339図 545号住居跡出土遺物実測図

545号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
339-1	土 師 器 甕	床面-8 破片	口(23.2) 高 - 底 -	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面縦方向の強いヘラ削りで、頸部に段が出来ている。口縁部横ナデ。光沢を持つ雲母状の砂粒を含む。
339-2	土 師 器 高 坏	床面直上 坏部1/4残存	口(14.8) 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	坏底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。高坏の坏部の破片である。
339-3 98	土 師 器 坏	床面+7 2/3残存	口(13.0) 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。胎土がやや粉状を呈する。黒斑全く認められず。
339-4 108	鉄 製 品 鉄 鍬	覆土	長 (7.0) 幅 0.6 厚 0.5 重 4.8		鉄鍬の茎部分である。断面はほぼ方形を呈している。下端部はほぼ完形である。

548号住居跡 (第340~342図、図版50・98)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、52・53-16グリッドに位置する。

概要 耕作により多くの部分が削られて、壁面の残りは僅かであった。奈良時代の546号住居と重複しており、546号住居により本住居の北西部分を床下部分まで深く掘り込まれている。

構造 床面は堅く踏み固められていなく、良好な状態での検出はできなかった。床面は多くのローム粒とローム小ブロックを多く用いた土で造られていた。床面調査段階で貯蔵穴は確認できたが、柱穴は確認できなかった。床下調査段階により柱穴と思われる4本の小穴が確認された。北西部の柱穴3が少しずれていた。竈右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西4.72m、南北5.02mである。壁高は残りの良い北壁部分で8cmである。貯蔵穴は径64cmでほぼ円形を呈し、深さ50cmである。柱穴1は径41cm深さ50cm、柱穴2は径30cm深さ41cm、柱穴3は径37cm深さ41cm、柱穴4は径32cm深さ54cmである。

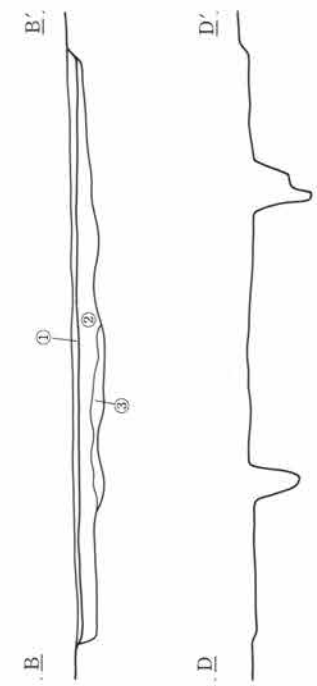
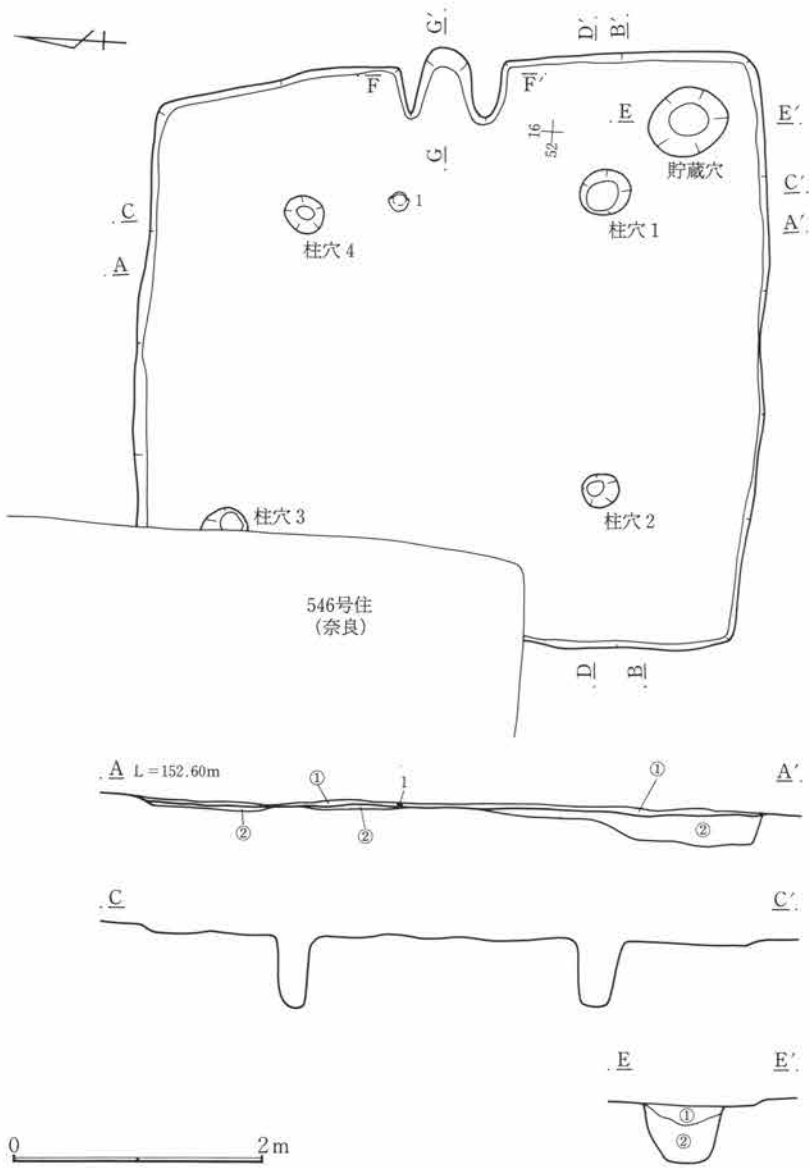
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏1点である。破片総量でもわずか20片である。

(竈)

位置 住居東壁の中央部に造られている。上部の多くの部分は削り取られて、下半部が残っていた。

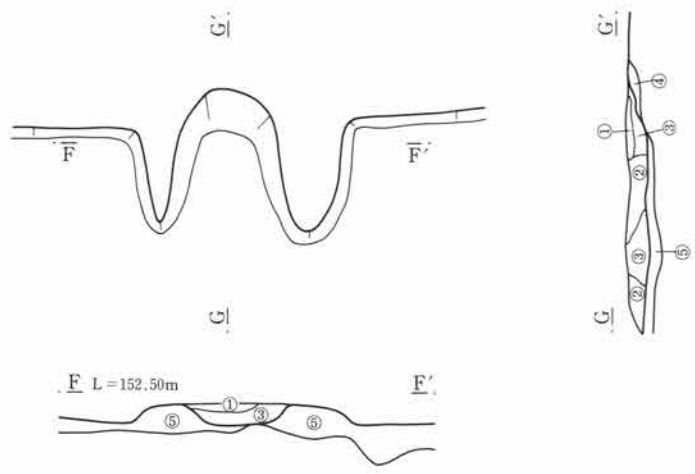
構造 竈内から石は全く出土しなかった。残りが悪いため不明な点が多いが、ロームを主として造られた竈であったと思われる。燃焼部からは多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向71cm、燃焼部幅42cmである。



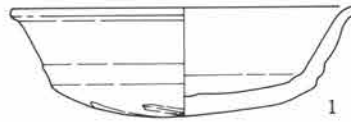
- (548号住居跡)
- ①暗褐色土層 暗褐色土中に多くのローム粒を含む。
 - ②暗褐色土層 暗褐色土中に多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ③黒褐色土層 少量の炭化物を含む。
- 貯蔵穴
- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第340図 548号住居跡実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多量の焼土粒を含む。
 - ④褐色土層 多くのロームブロックを含む。
 - ⑤黄褐色土層 ロームを主とした層。

第341図 548号住居跡竈実測図



0 10cm

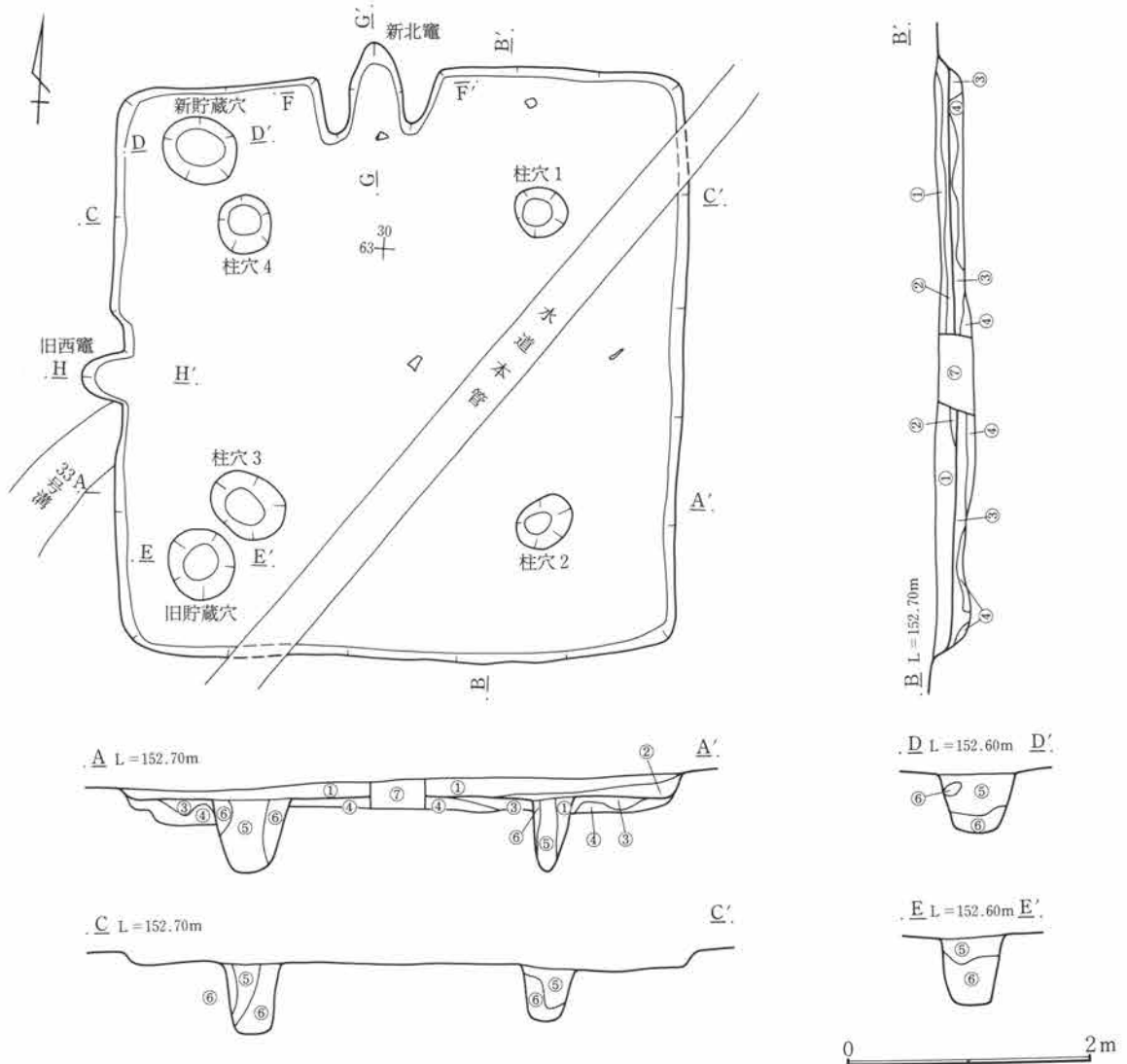
第342図 548号住居跡出土遺物実測図

548号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
342-1 98	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口 13.7 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焙、硬質 ③橙色	底部中央のみへら削り。他の底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の小さな粒子を多く含む。

579号住居跡 (第343~345図、図版52)

位置 本住居跡は、第7次調査区にあり、63・64-30・31グリッドに位置する。



(579号住居跡)

- ①暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ③褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。

- ④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑤暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑥褐色土層 ローム粒を主とし僅かに暗褐色土を含む。
- ⑦水道本管理設覆土

第343図 579号住居跡実測図

概要 覆土上面を33・34号溝が掘り込み、34号溝にほぼ平行して水道本管が埋設されており、本住居の床面下まで深く掘り込まれていた。竈が西壁面と北壁面に造られており、西壁面の竈は床面上に位置する袖部や燃焼部はすべて取り除かれていたため旧西竈とし、北壁面に造られていた竈を新北竈とした。

構造 床面の中央部で堅く踏み固められていた部分が認められたが、他の多くの部分では堅い床面の確認はできなかった。床面は多くのロームブロックと少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本、貯蔵穴が北西コーナーと南西コーナー部分の床面に掘られていた。北西コーナー部分の貯蔵穴が新竈に伴う新貯蔵穴で、南西コーナー部分の貯蔵穴が旧貯蔵穴と思われる。

規模 東西4.73m、南北4.86mである。壁高は残りの良い東壁部分で18cmである。新貯蔵穴は径61cm深さ45cmで、旧貯蔵穴は径53cm深さ50cmである。柱穴1は径45cm深さ44cm、柱穴2は径43cm深さ61cm、柱穴3は径62cm深さ58cm、柱穴4は径43cm深さ53cmである。

遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器坏の破片1点である。破片総量でもわずか43片である。

(新北竈)

位置 住居北壁の西寄りに造られている。燃焼部の大部分は床面上に造られ、煙道部が壁面を掘り込んでいる。上部の多くの部分は削り取られて残りが悪い。

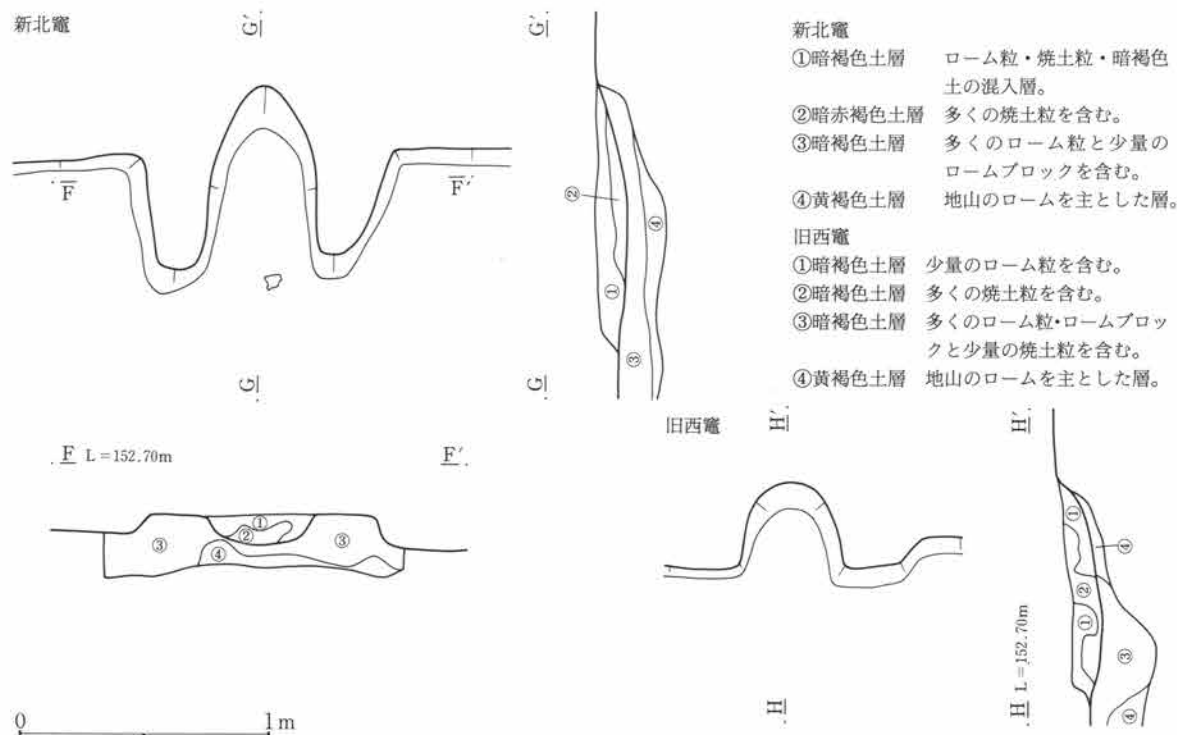
構造 竈内から石は全く出土しなかった。残りが悪いため不明な点が多いが、袖部に多くのロームを使用しているためロームを主として造られた竈であったと思われる。燃焼部からは多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向81cm、燃焼部幅44cmである。

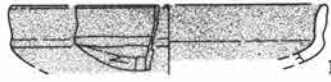
(旧西竈)

位置 住居西壁のほぼ中央部に造られている。

概要 床面上に位置する袖部や燃焼部はすべて取り除かれている。壁面を掘り込んで造られていた煙道部と床面より下に位置する燃焼下部が僅かに残っており、その部分から焼土粒が出土した。



第344図 579号住居跡新北竈・旧西竈実測図



0 10cm

第345図 579号住居跡出土遺物実測図

579号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
345-1	土師器 坏	掘り方覆土 破片	口(12.6) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口縁部外面～内側底面黒漆。底面吸炭による黒色。

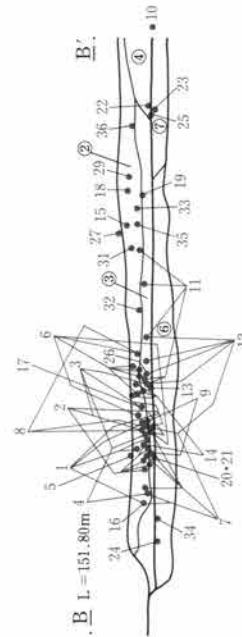
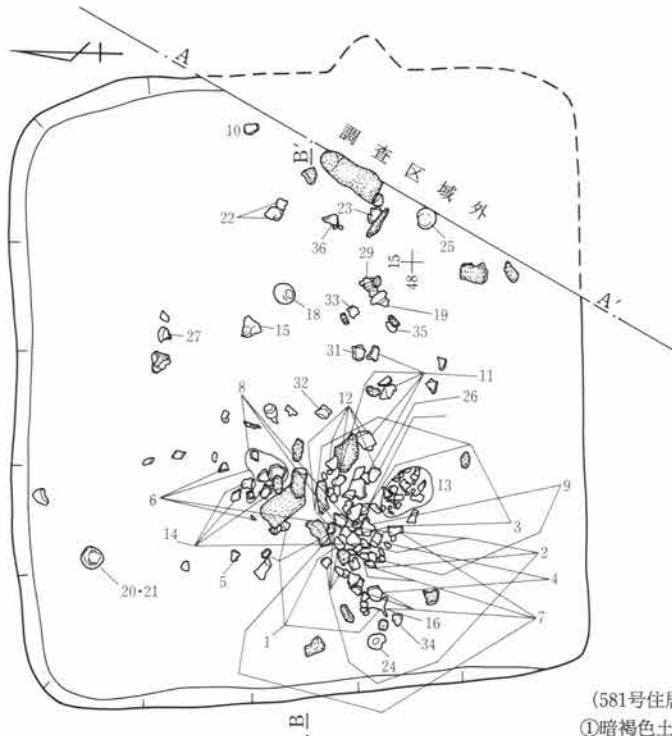
581号住居跡 (第346～349図、図版52・53・98・99)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、48・49—15グリッドに位置する。

概要 南側の低くなる傾斜面に位置するため北側は残りが比較的良好であるが、南側の壁面と床面の一部は残っていなかった。南東部分は調査範囲外のため調査はできなかった。調査範囲内で壁面に竈は築かれておらず、調査できなかった南東部分に近い床面上より、天井石と思われる石と焼土粒が出土しているため、東壁面に竈が造られていたものと思われる。

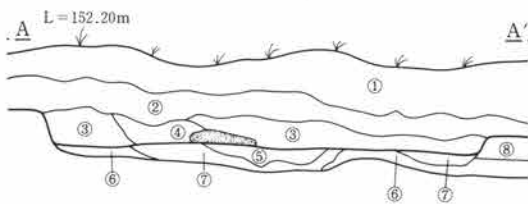
構造 床面は堅く踏み固められておらず、良好な状態で検出はできなかった。床面はロームを主とし、多くの暗褐色土を含む土で造られていた。床下調査段階で竈の下の部分を含めて小穴が2本検出されたが、いずれも柱穴の可能性は低いと思われる。貯蔵穴は調査範囲外の南東部分のため確認できなかった。

規模 東西4.98m、南北4.56mである。壁高は残りの良い北壁部分で28cmである。



(581号住居跡)

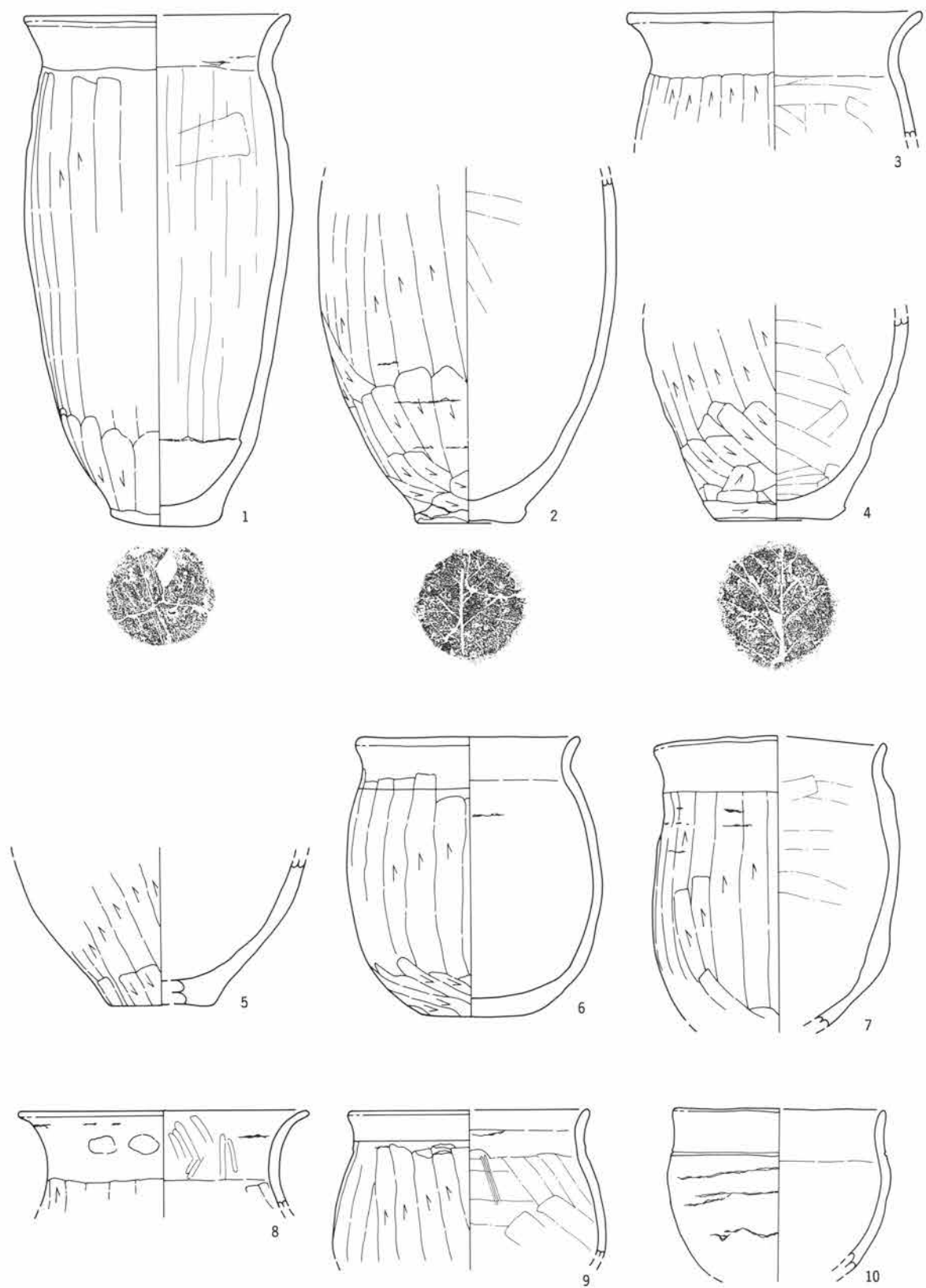
- ①暗褐色土層 耕作土。
- ②暗褐色土層 少量のローム小ブロックと多くの白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 少量の焼土粒を含む。
- ⑥暗黄褐色土層 ロームを主とし、多くの暗褐色土を含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑧暗黄褐色土層 ロームを主とし、多くの暗褐色土を混入する。



第346図 581号住居跡実測図

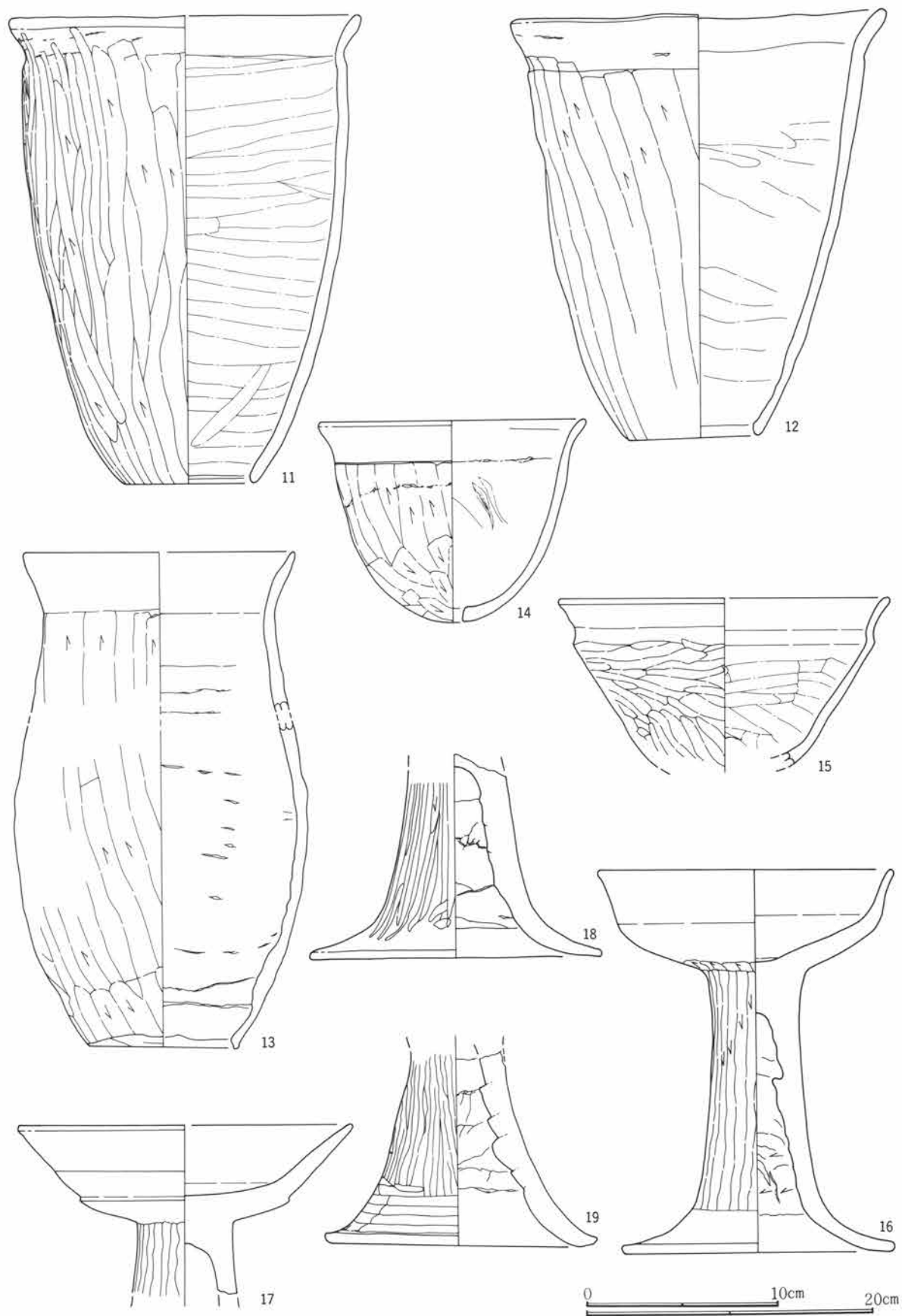
0 2m

遺物 床面に接した遺物もあるが、多くの遺物は床面から10cm以上浮いた状態で大量に出土している。

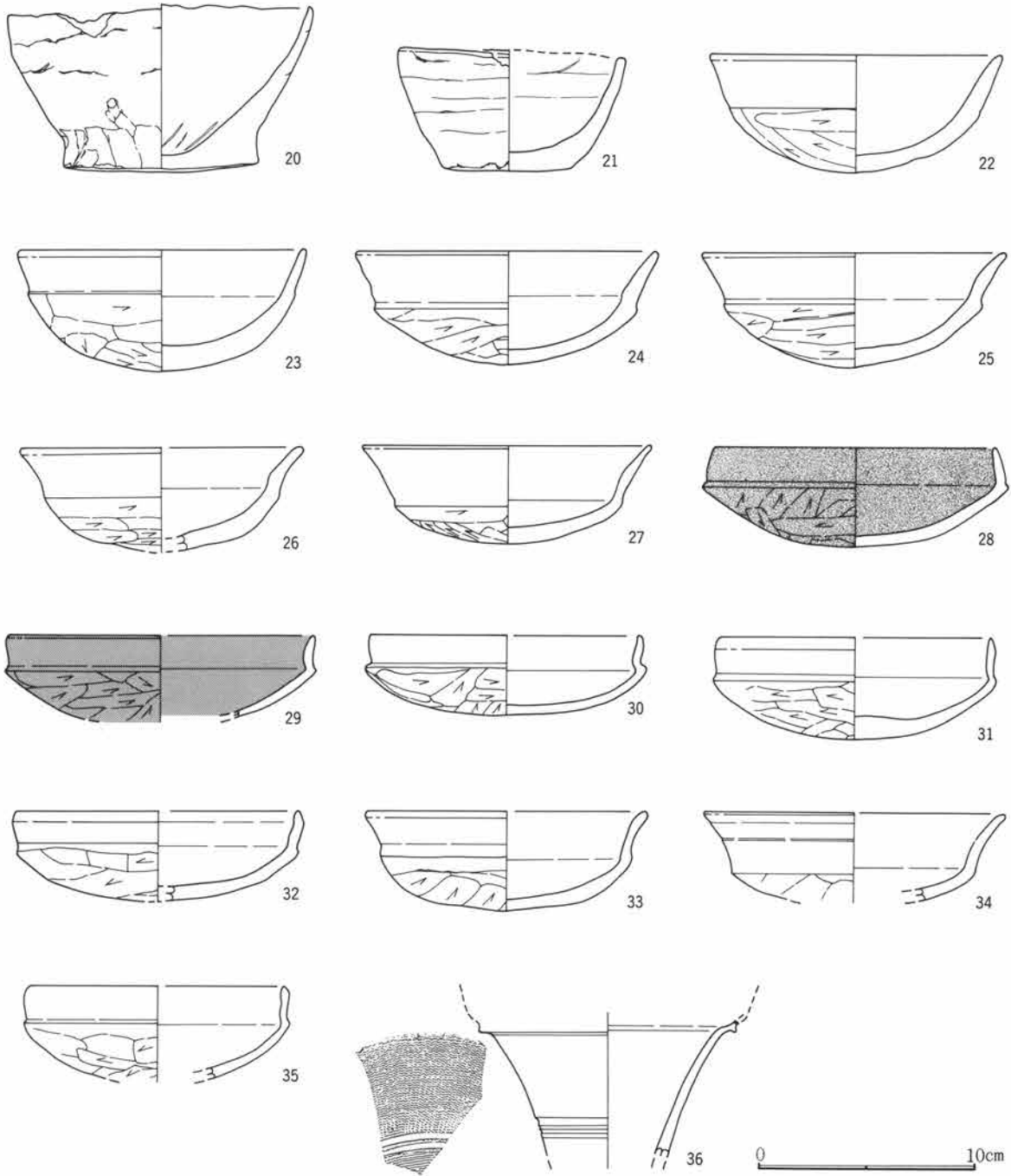


第347図 581号住居跡出土遺物実測図(1)

0 20cm



第348図 581号住居跡出土遺物実測図(2)



第349図 581号住居跡出土遺物実測図(3)

581号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
347-1 98	土師器 甕	底面+10 口 $\frac{1}{2}$ 胴 $\frac{1}{2}$ 底完形	口(18.0) 高 34.2 底 7.0	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい 橙色・外面胴下半黒褐色	底面へら削り。胴部外面へら削り。1~2mmの砂粒が多く目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 全体的に雑なつくりの甕である。
347-2 98	土師器 甕	床面+10 胴下半 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 — 高 — 底 7.0	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい橙色	胴部外面へら削り。胴部中央の表面に粘土の付着が多く、削りの単位不明瞭。内面ナデにより器表面密。 底面に木葉痕。
347-3	土師器 甕	床面+12 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴上半 $\frac{1}{2}$	口 19.8 高 — 底 —	①粗、3~6mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が目立ち器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデ。いずれも砂粒が目立つ。 多くの小さな破片に割れている。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
347-4 98	土 師 器 甕	床面+18 胴部下半 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 — 高 — 底 7.8	①粗、3～6mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。底部の器肉が厚い。
347-5	土 師 器 甕	床面+20 胴下半～底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 (7.0)	①粗、3～6mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。
347-6 98	土 師 器 小型甕	床面+12 $\frac{1}{2}$ 残存	口 5.2 高 18.6 底 7.0	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、一部ナデ。胴部ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。器表面に多くの砂粒が目立つ。内面ナデにより器表面密。
347-7 98	土 師 器 小型甕	床面+10 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴中央部 $\frac{1}{2}$	口 (15.6) 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く、片岩粒少量含む。②酢化焰、硬質 ③上半褐色・下半黒褐色	胴部外面ヘラナデにより器表面を密に仕上げている。輪積痕が一部に残る。口縁部録ナデ。内面の器表面の一部剥離。
347-8	土 師 器 甕	床面+10 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 19.6 高 — 底 —	①粗、2～4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内外面とも多くの砂粒が目立つ。やや雑な感じのつくりである。
347-9 98	土 師 器 小型甕	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口 (16.4) 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
347-10	土 師 器 小型甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 (14.8) 高 — 底 —	①粗、3～5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ナデ。輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁と胴部との境に1条の沈線あり。
348-11 98	土 師 器 甕	床面+8 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 (24.8) 高 32.5 底 9.3	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒褐色	胴部外面ヘラナデにより器表面全体が密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土が全体にやや粉状を呈している。
348-12 99	土 師 器 甕	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口 26.4 高 30.0 底 9.0	①粗、3～5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴部下端ヘラ削り。多くの破片に割れており、軟質な焼成である。歪んでいる。
348-13 99	土 師 器 甕 (甕転用)	床面+12 口～胴 $\frac{1}{2}$ 胴下半完形	口 (19.2) 高 (34.5) 底 10.6	①粗、5～8mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。内面雑なナデ。多くの輪積痕が残る。図上接合復元。器形、胎土、整形の特色は甕である。甕を転用した甕と思われる。
348-14 98	土 師 器 小型甕	床面+11 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.8 高 14.0 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面黒褐色	胴部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部中央の小穴は $\frac{1}{2}$ 欠損しているため径不明。
348-15	土 師 器 鉢	床面+22 $\frac{1}{2}$ 残存	口 (23.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。ナデ部分がわずかに凹状を呈する。内面ナデ。歪んでいて全体の器形が明確でない。
348-16 98	土 師 器 高 環	床面+18 口縁部 $\frac{1}{2}$ 脚部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 15.5 高 19.8 底 14.2	①密、脚部と坏部の胎土がやや異なる。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚筒部ヘラナデ。脚下端横ナデ。坏底部中央ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
348-17 99	土 師 器 高 環	床面+12 坏部～脚上部ほぼ完形	口 17.5 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。坏底部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土がやや粉状を呈する。
348-18 99	土 師 器 高 環	床面+21 脚部完形	口 — 高 — 底 15.2	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚下部横ナデ。筒部外面ヘラナデ。内面に輪積痕残る。脚の器肉が厚い。黒斑認められず。
348-19 99	土 師 器 高 環	床面+16 脚部ほぼ完形	口 — 高 — 底 14.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚内面に多くの輪積痕。脚外面ヘラナデ、下部横ナデ。短脚の高環と思われる。
349-20 99	土 師 器 環	床面直上 ほぼ完形	口 14.0 高 7.7 底 9.0	①粗、2～4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部下端指頭圧痕。胴部～口縁部ナデ。輪積痕が残る。内面ナデにより器表面密。胴部にヘラ削りなし。甕に近い胎土と底部である。
349-21 99	土 師 器 環	床面直上 口縁 $\frac{1}{2}$ 胴 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 (10.6) 高 5.6 底 5.8	①粗、2～5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラ削りは全く認められない。
349-22 99	土 師 器 環	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.2 高 5.4 底 丸底	①粗、1～3mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。底面は多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
349-23 99	土 師 器 環	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.1 高 5.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデにより器表面密。底部の器肉が厚い。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
349-24 99	土師器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 13.8 高 5.1 底 丸底	①粗、3～5mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色・一部に黒斑	底面ヘラ削り。多くの砂粒が目立ち粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-25 99	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.0 高 5.2 底 丸底	①粗、3～5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面にぶい黄褐色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。器表面は粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-26	土師器 坏	床面+17 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラナデ。ナデの部分がわずかに凹状を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-27 99	土師器 坏	床面+28 $\frac{1}{2}$ 残存	口 13.2 高 4.5 底 丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	底面幅の狭いヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく底面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-28 99	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.8) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。口縁部外側～内面底部に黒漆の痕跡。
349-29	土師器 坏	床面+20 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。表面の黒色は吸炭による。
349-30	土師器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.6) 高 3.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部表面黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-31 99	土師器 坏	床面+20 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.6) 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③黄褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-32 99	土師器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく底面密。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデにより器表面密。
349-33	土師器 坏	床面+16 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラナデ。その部分は平らでなく凹凸状を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
349-34	土師器 坏	床面+10 口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部中央にわずかな沈線を1条持つ。内面ナデにより器表面密。
349-35	土師器 坏	床面+16 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。光沢を持つ雲母状の砂粒を多く含む。
349-36 99	須恵器 破片	床面+18 破片	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③断面灰白色・内面黒色・外面灰色	上部に凸帯、下部に2条の凹帯、その間は全面波状文で埋められている。内側に降灰による自然釉が多く付着している。

582号住居跡 (第350～353図、図版53・100・115)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、53・54-11グリッドに位置する。

概要 住居の北東部分を耕作溝により床下部分まで掘られ、南側の壁面部分を45号溝により床面部分まで削り取られていた。しかし新旧2つの竈をもつ比較的残りの良好な住居である。

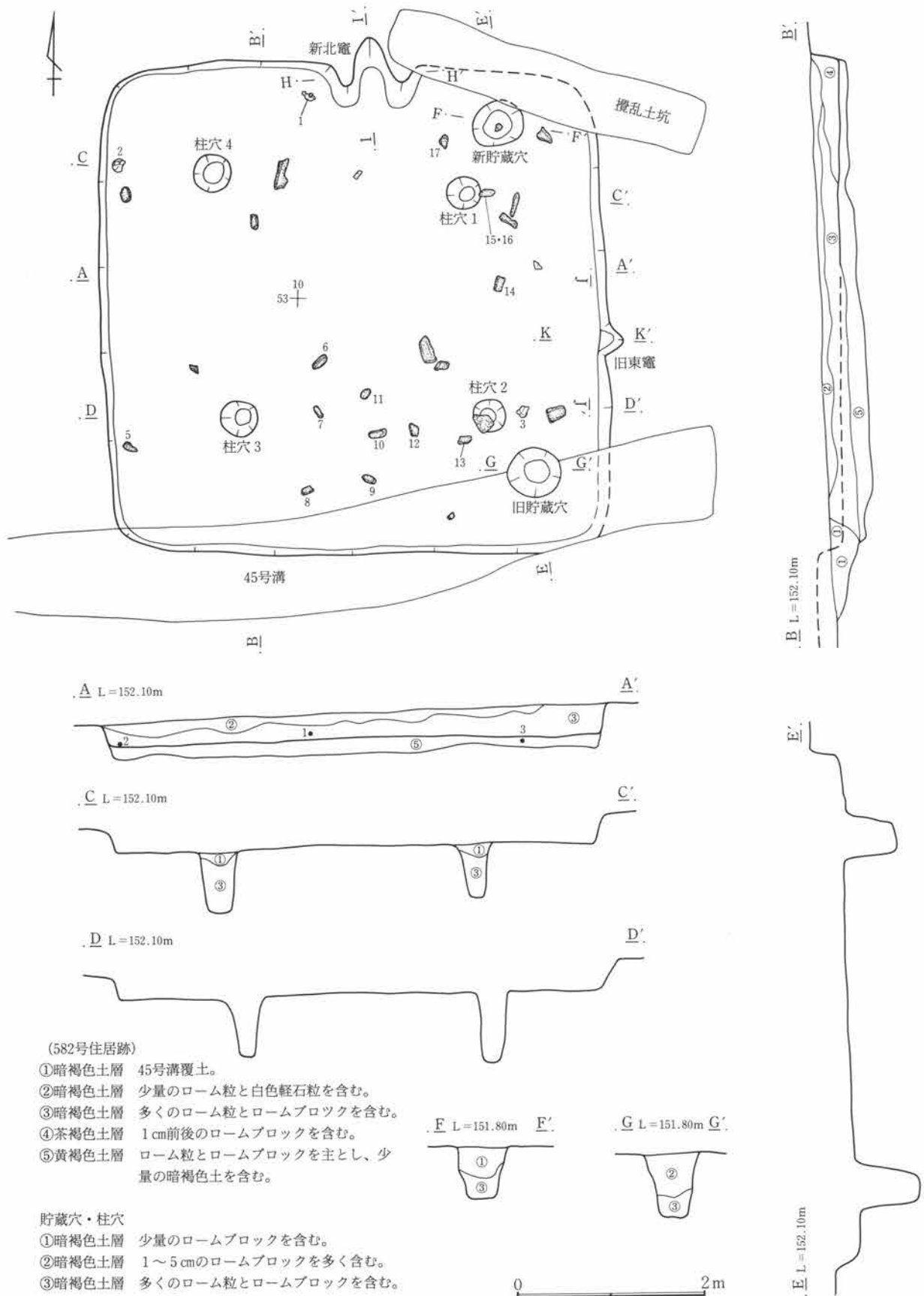
構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む土で造られており、床面中央部は堅く踏み固めてあった。柱穴が4本掘られており、新北竈と旧東竈に伴う貯蔵穴がそれぞれの竈の右側に掘られていた。

規模 東西5.42m、南北5.20mである。壁高は残りの良い北壁部分で26cmである。柱穴1は径32cm深さ57cm、柱穴2は径34cm深さ81cm、柱穴3は径40cm深さ74cm、柱穴4は径42cm深さ70cmである。新貯蔵穴は径50cm深さ55cm、旧貯蔵穴は径58cm深さ76cmである。

床下 床面に凹凸面は認められるが、明確な床下土坑は掘られていなかった。

遺物 比較的多くの遺物が出土しているが、図示できたのは土師器の坏4点と少ない。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(582号住居跡)

- ①暗褐色土層 45号溝覆土。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④茶褐色土層 1cm前後のロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

貯蔵穴・柱穴

- ①暗褐色土層 少量のロームブロックを含む。
- ②暗褐色土層 1～5cmのロームブロックを多く含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

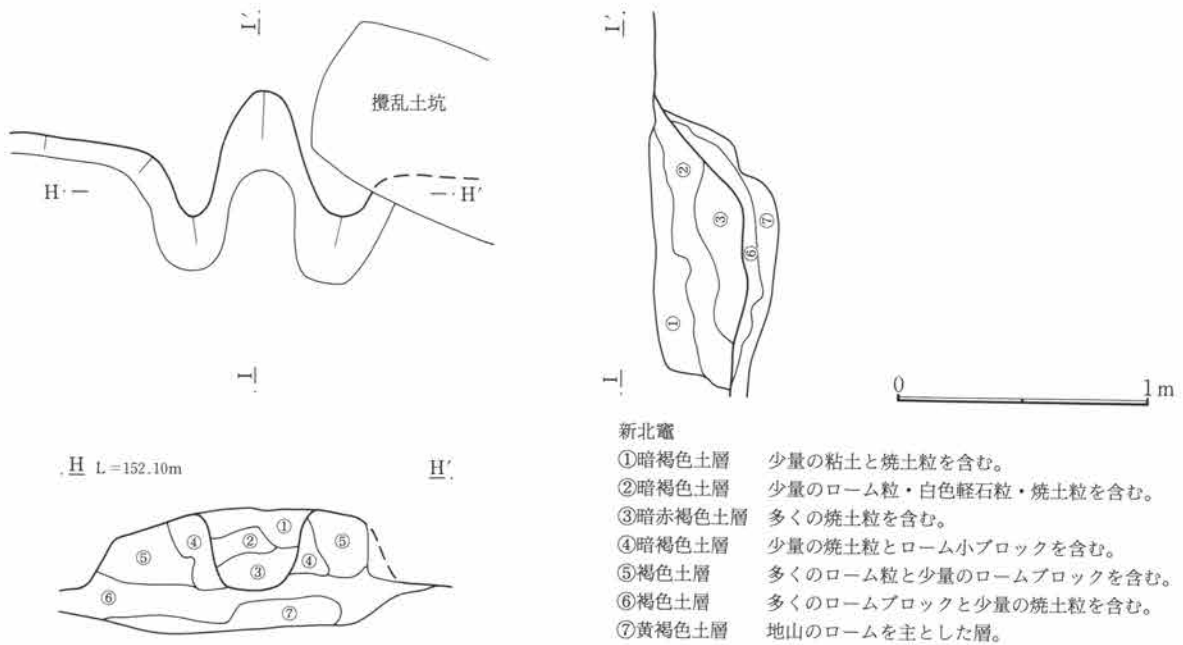
第350図 582号住居跡実測図

(新北竈)

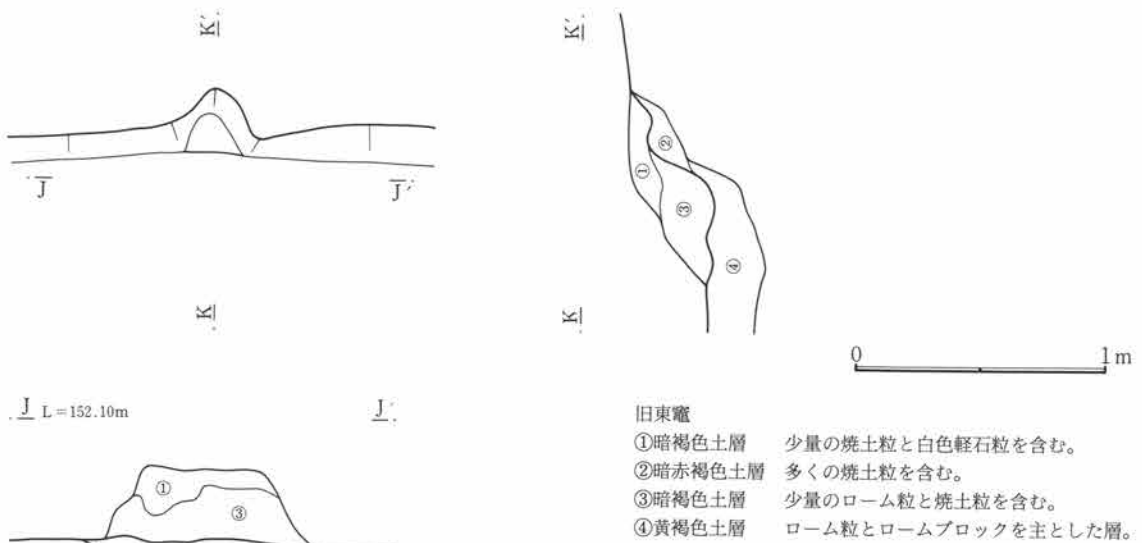
位置 住居北壁に造られている。燃烧部の大部分は床面上に造られ、煙道部が壁面を掘り込んでいる。
 構造 竈内より石は全く出土していないため、石を用いないでロームを主として造られた竈である。燃烧部より多くの焼土粒が出土した。右袖部分の残りが悪いため、その部分は壊されている可能性がある。
 規模 煙道方向76cm、燃烧部幅38cmである。

(旧東竈)

概要 住居東壁南寄りに造られている。床面上に位置する焚口や燃烧部はすべて削り取られており、掘り込まれた壁面に造られた燃烧部と煙道部の一部が残っていた。削り取られた竈の様子は土層断面からも明らかである。掘り込まれた壁面に残る覆土中から多くの焼土粒が出土した。

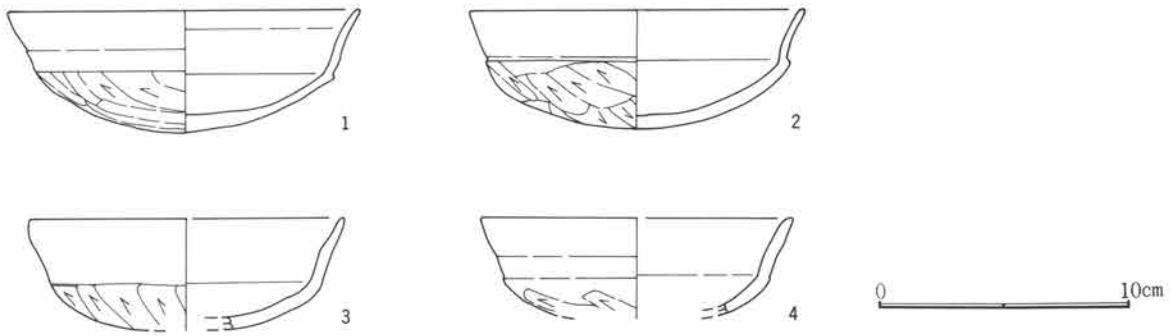


第351図 582号住居跡新北竈実測図



第352図 582号住居跡旧東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第353図 582号住居跡出土遺物実測図

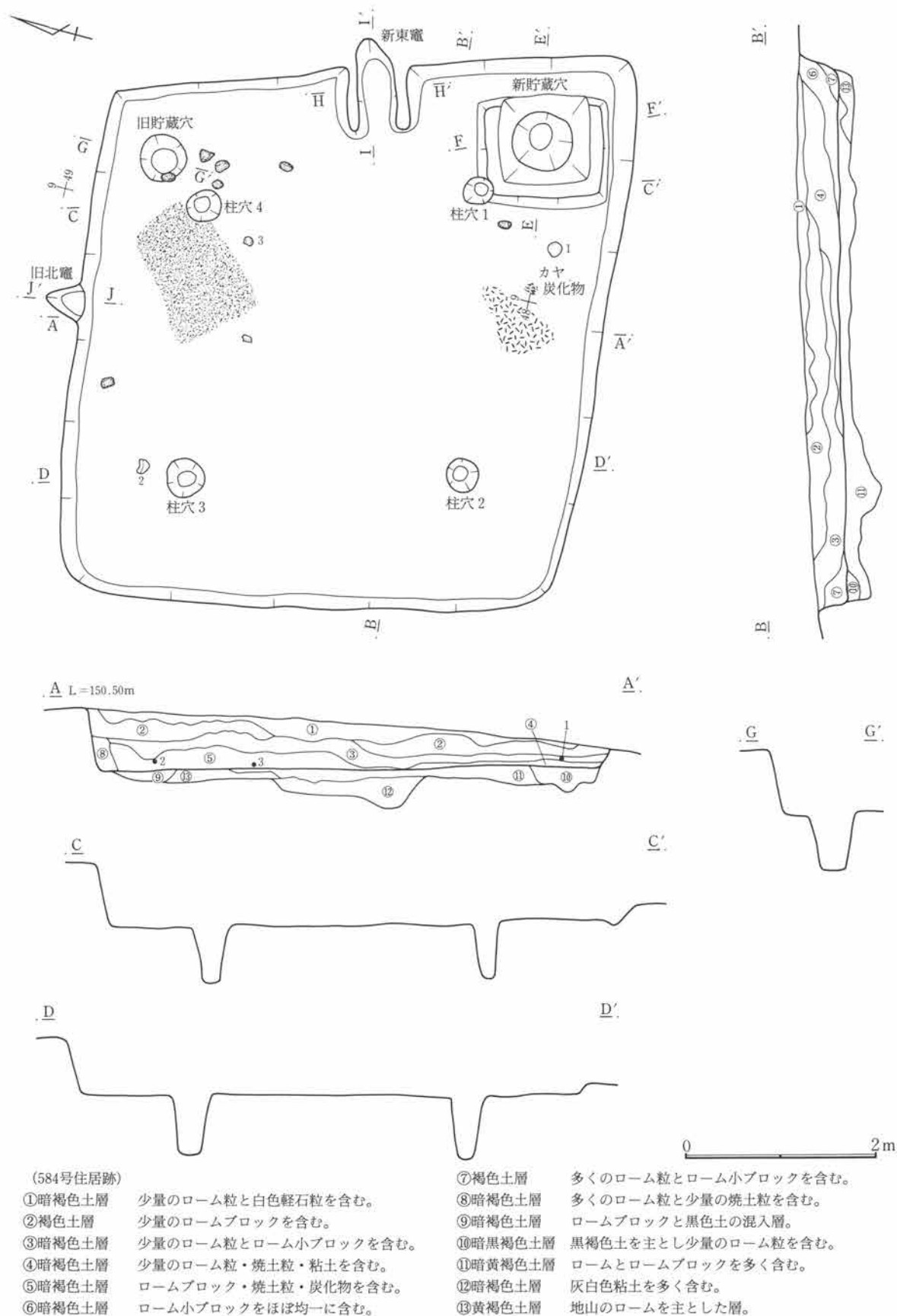
582号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
353-1 100	土 師 器 杯	床面+9 完形	口 14.0 高 4.8 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面黒褐色	底面ヘラナデ。部分的にヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部中央に1条の沈線あり。器肉の薄い杯である。
353-2 100	土 師 器 杯	床面+5 1/2残存	口 13.2 高 4.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。1の杯と同様に器肉の薄い杯である。
353-3 100	土 師 器 杯	床面+2 1/2残存	口(12.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が粉状でヘラの単位不明瞭。
353-4	土 師 器 杯	覆土 1/2残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁の中段に1条の沈線あり。器表面全体に斑点状の剝離あり。
5 115	こも編み石	床面+8	長 14.4 幅 7.2 厚 2.9 重 370		点紋緑泥片岩。約1/2欠損している。片側の側面に打ち欠かれた凹状部が認められる。
6 115	こも編み石	床面+2	長 18.5 幅 6.0 厚 4.2 重 660		緑簾緑泥片岩。断面が三角形を呈する細長い石である。両側面中央部に凹状を呈する。
7 115	こも編み石	床面+3	長 13.6 幅 6.7 厚 3.8 重 560		緑簾緑泥片岩。両側面とも凹状部は認められない。
8 115	こも編み石	床面+9	長 12.2 幅 6.0 厚 3.2 重 400		絹雲母石墨片岩。断面がクサビ形を呈す。片側中央部にわずかな凹状部が認められる。
9 115	こも編み石	床面直上	長 14.6 幅 8.3 厚 4.0 重 610		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈する。
10 115	こも編み石	床面直上	長 18.8 幅 7.7 厚 5.2 重 1,110		安山岩。片側の側面は緩やかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が数個認められる。
11 115	こも編み石	床面直上	長 13.6 幅 6.7 厚 3.8 重 480		絹雲母石墨片岩。両側面に明瞭な凹凸部は認められない。
12 115	こも編み石	床面+4	長 11.9 幅 7.0 厚 3.3 重 450		硅質板岩。片側の側面に明瞭な凹状部が認められる。
13 115	こも編み石	床面+2	長 14.3 幅 6.2 厚 3.5 重 580		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部にゆるやかな凹状を呈す。
14 115	こも編み石	床面+4	長 17.3 幅 7.0 厚 2.8 重 660		安山岩。両側面中央部に大きくゆるやかな凹状部を呈する。
15 115	こも編み石	床面+5	長 14.2 幅 7.0 厚 2.6 重 440		絹雲母石墨片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈している。
16 115	こも編み石	床面+5	長 14.0 幅 6.5 厚 3.7 重 720		絹雲母石墨片岩。片側の側面にゆるやかな凹状部が認められる。
17 115	こも編み石	床面+4	長 11.0 幅 7.8 厚 2.4 重 380		緑簾緑泥片岩。扁平で短い石である。両側面にわずかな凹凸部が認められる。

584号住居跡 (第354~359図、図版53・54・100)

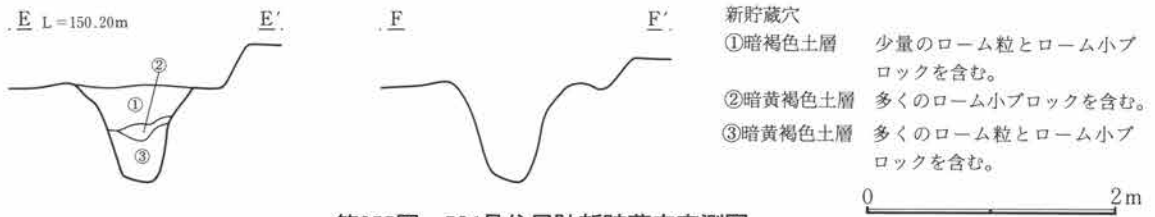
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、49-9・10グリッドに位置する。

概要 少し菱形状に歪んではいるが、新旧2つの竈をもつ比較的残りの良好な住居である。旧北竈に近い床面上と新貯蔵穴西側の床面上に、多くの焼土粒が認められ、床面も一部焼土化していた。



第354図 584号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



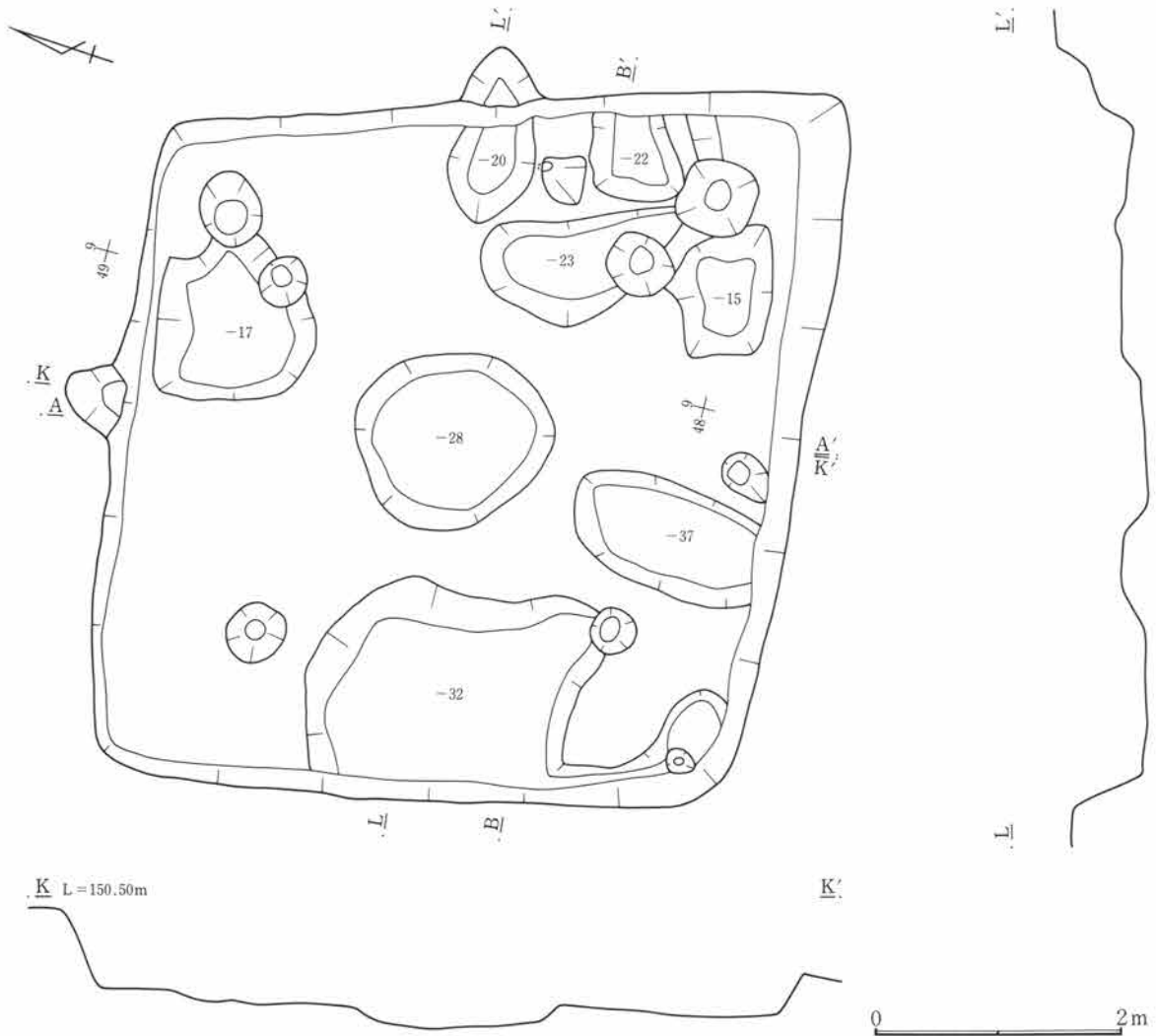
第355図 584号住居跡新貯蔵穴実測図

構造 床面はロームとロームブロックを多く含む暗黄褐色土で造られており、床面中央部は強く踏み固められていた。柱穴が4本掘られており、新東竈と旧北竈に伴う貯蔵穴がそれぞれの竈の右側に掘られていた。新貯蔵穴を方形に囲むように高さ3cm前後の堤状の高まりが、東側壁面以外の部分に造られていた。丸く掘られた貯蔵穴を覆う方形の蓋の外側の堤と考えたい。

規模 東西5.62m、南北5.51mである。壁高は残りの良い北壁部分で60cmである。柱穴1は径32cm深さ56cm、柱穴2は径34cm深さ71cm、柱穴3は径40cm深さ66cm、柱穴4は径38cm深さ60cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ74cm、旧貯蔵穴は径48cm深さ60cmである。

床下 床面下に床下土坑が1基、また多くの小穴が掘られていた。

遺物 多くの土師器の甕の破片が出土しているが、図示できた遺物は少ない。



第356図 584号住居跡床下実測図

(新東竈)

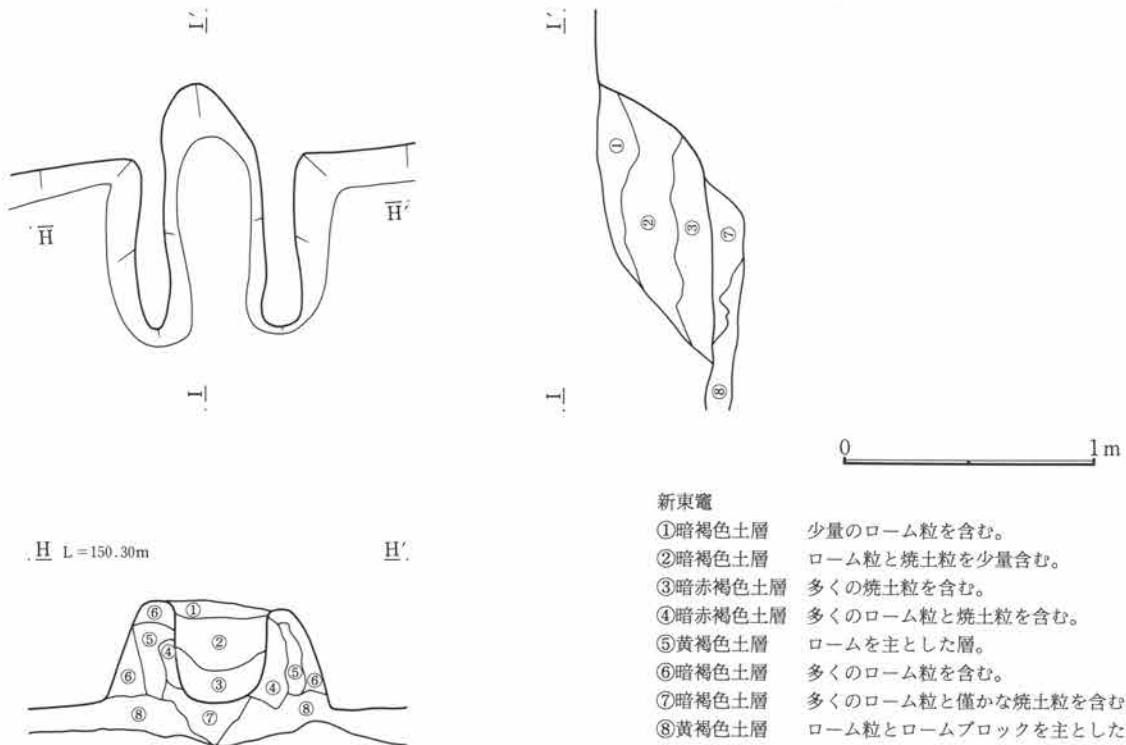
位置 住居東壁に造られている。燃烧部の大部分は床面上に造られ、煙道部が僅かに壁面を掘り込んでいる。

構造 竈内より石は全く出土していないため、石を用いないでロームを主として造られた竈である。燃烧部より多くの焼土粒が出土した。

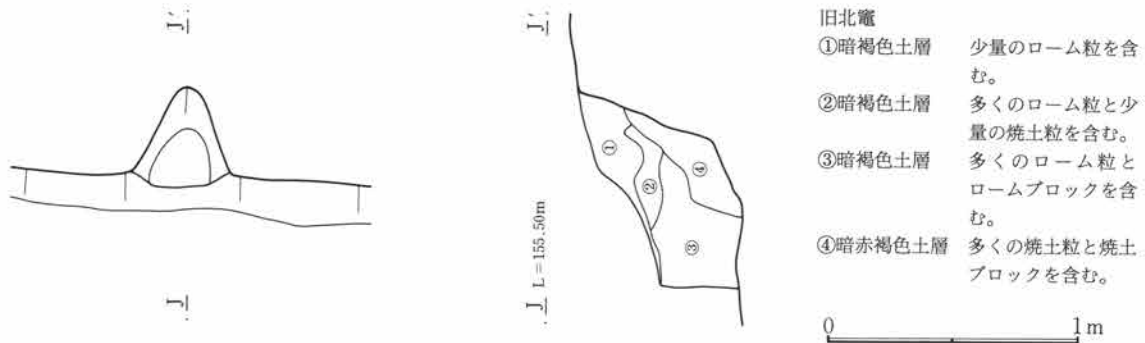
規模 煙道方向106cm、燃烧部幅37cmである。

(旧北竈)

概要 住居北壁中央部に造られている。床面上に位置する焚口や燃烧部はすべて削り除かれており、掘り込まれた壁面に造られた燃烧部と煙道部の一部が残っていた。削り取られた竈の様子は土層断面からも明らかである。掘り込まれた壁面に残る覆土中から多くの焼土粒が出土した。

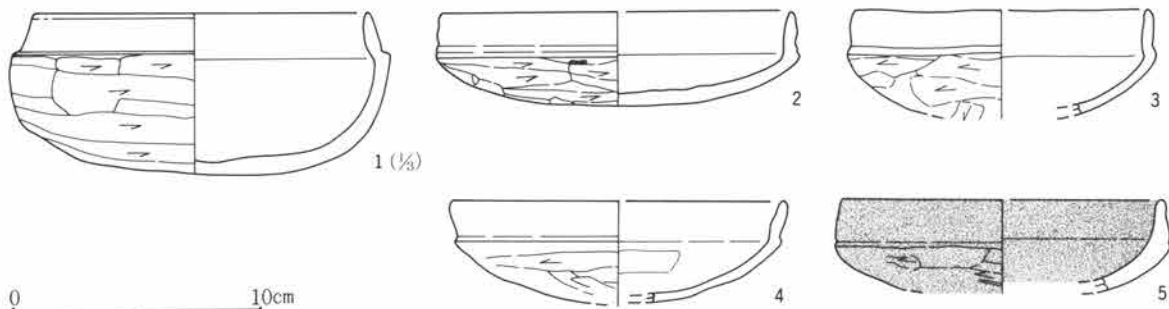


第357図 584号住居跡新東竈実測図



第358図 584号住居跡旧北竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第359図 584号住居跡出土遺物実測図

584号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
359-1 100	土師器 小型壺	床面+5 ほぼ完形	口 13.2 高 6.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面明赤褐色・外面黒褐色・断面橙色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。稜は明瞭。内面ナデにより器表面密。
359-2 100	土師器 坏	床面直上 口縁部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.0) 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面にぶい赤褐色・断面橙色	底面弱いヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
359-3	土師器 坏	床面+4 小片	口(11.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面暗赤褐色・外面黒色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面黒漆。内面にも黒漆の痕跡残る。底部外面吸炭。
359-4	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面強いヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外側~内側底面まで黒漆。底部外面吸炭。
359-5	土師器 坏	覆土 破片	口(12.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面橙色・内面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面黒漆。内面は薄くなっているが黒漆と思われる。

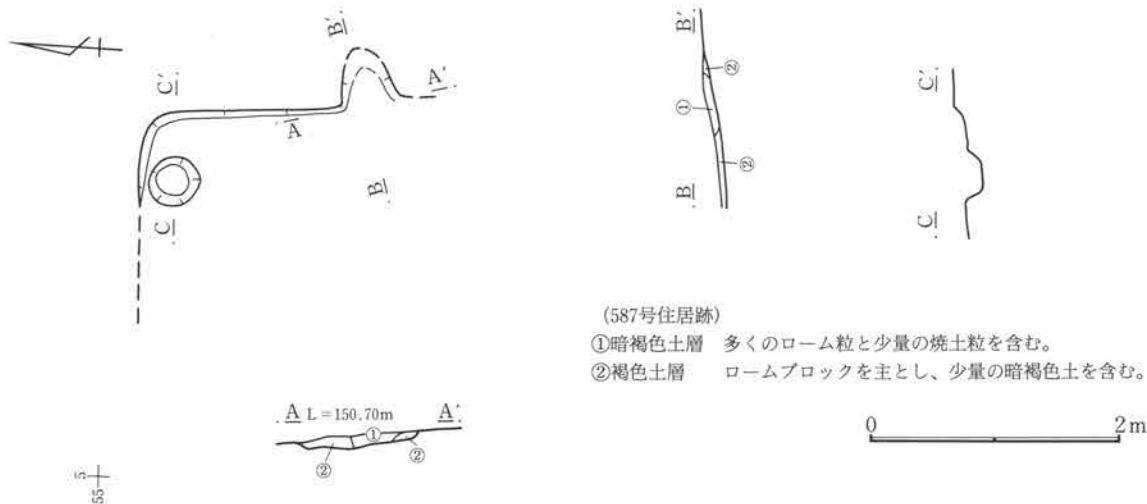
587号住居跡 (第360図、図版54)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、55-6グリッドに位置する。

概要 本住居は住居群の中で最も西側に造られており、住居の西側は西谷川となっている。西側が低くなる傾斜面に位置し、住居北東部分以外は削り取られて残っていなかった。東壁に竈が確認されたが、大部分は削り取られており、燃焼部付近に僅かな焼土粒が検出された。北東コーナー部分に貯蔵穴とも思われる小穴が確認されたが、浅いため疑問である。

規模 東西南北とも不明である。壁高は北東壁コーナー部分で9cmである。小穴は径42cm深さ8cmである。

遺物 土師器の甕の口縁部破片2片しか出土していなく、図示できる遺物はない。



第360図 587号住居跡実測図

588号住居跡 (第361・362図、図版54)

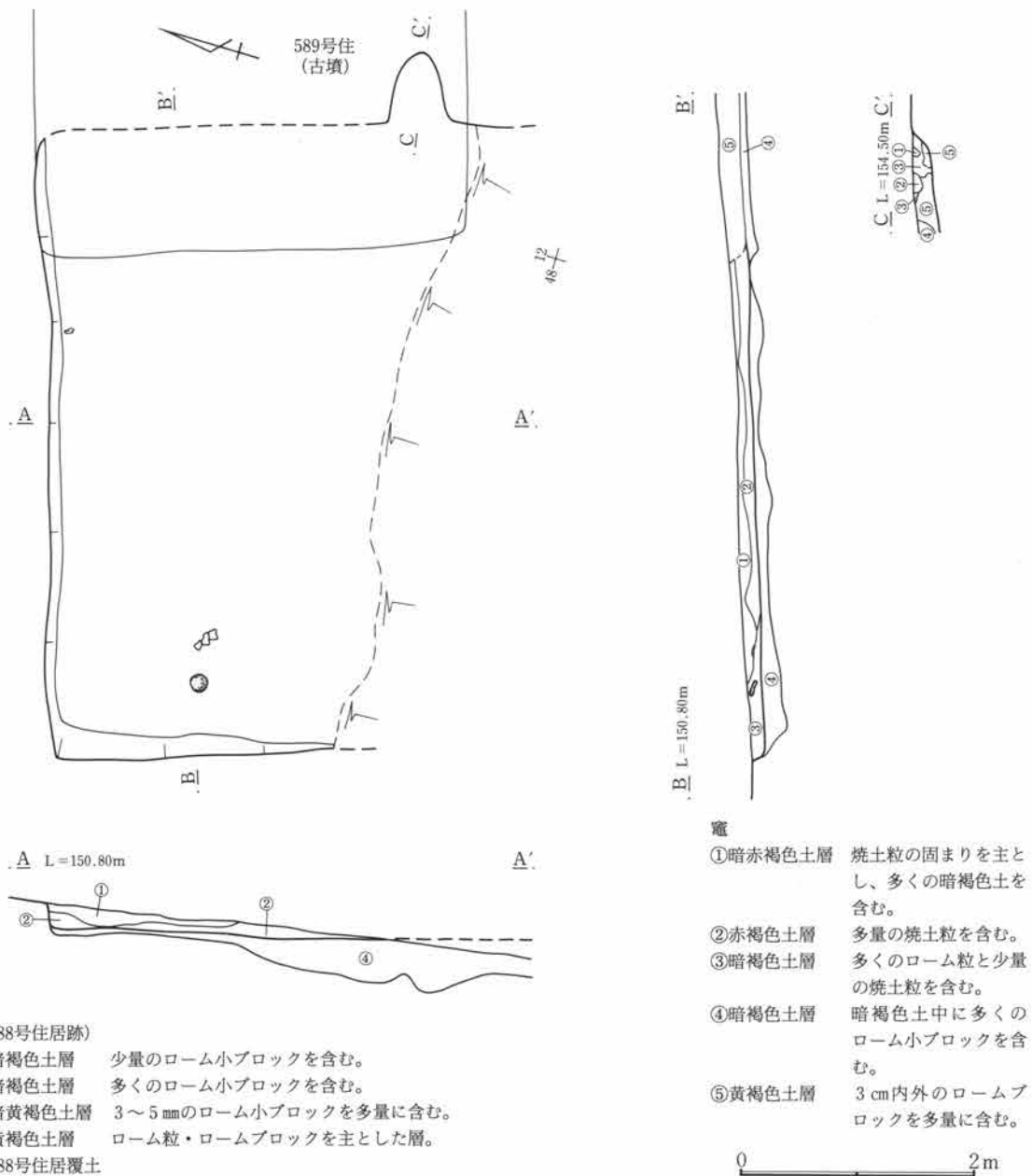
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、49-12グリッドに位置する。

概要 南西側の低くなる傾斜面に位置するため、北側の壁面は残っているが、南側の壁面と床面は残っていなかった。同じ古墳時代の589号住居と重複しており、589号住居により本住居の東側部分を床面まで掘り込まれていた。竈は東壁面に造られており、589号住居により上部が削り取られていた。竈の下部は残っており、その部分から多くの焼土粒が出土した。

構造 床面の残りは全体に悪く、特に南側の床面の残りが悪かった。柱穴や貯蔵穴は床下調査段階においても確認されないため、掘られていなかったと思われる。

規模 東西推定5.35m、南北不明である。壁高は北壁面で20cmである。

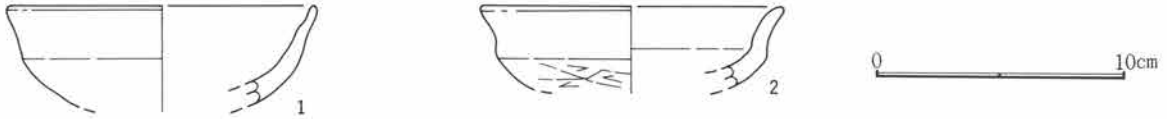
遺物 少量の遺物しか出土していない。図示できたのは土師器の坏の破片2点である。



(588号住居跡)

- ①暗褐色土層 少量のローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 3~5mmのローム小ブロックを多量に含む。
- ④黄褐色土層 ローム粒・ロームブロックを主とした層。
- ⑤588号住居覆土

第361図 588号住居跡実測図



第362図 588号住居跡出土遺物実測図

588号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
362-1	土師器 坏	覆土 破片	口(12.4) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい褐色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。全体に少し歪んでいる。
362-2	土師器 坏	掘り方覆土 破片	口(12.1) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。器肉の厚い小さな坏である。

589号住居跡 (第363～367図、図版54・55・100・101)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、49-13グリッドに位置する。

概要 南西側の低くなる傾斜面に位置するため、北側の壁面は残っているが、南側の壁面と床面の残りは悪く、特に南西部分の壁面と床面は残っていなかった。平安時代の590号住居により、南東部分を床面近くまで掘り取られている。本住居の床面が3cm程低いので住居の輪郭は確認できた。また同じ古墳時代の588号住居と重複しており、本住居が588号住居の竈を含む住居東側部分を床面まで掘り込んでいる。新旧関係は588→589→590号住居である。

構造 床面の残りは比較的良好であり、ロームを主とした土で造られていた。貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は床面調査段階では確認されなかった。床下調査段階において3本の小穴が確認されたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.68m、南北3.52mである。壁高は北東コーナー部分で47cmである。貯蔵穴は東西方向100cm南北方向56cmで深さは58cmである。

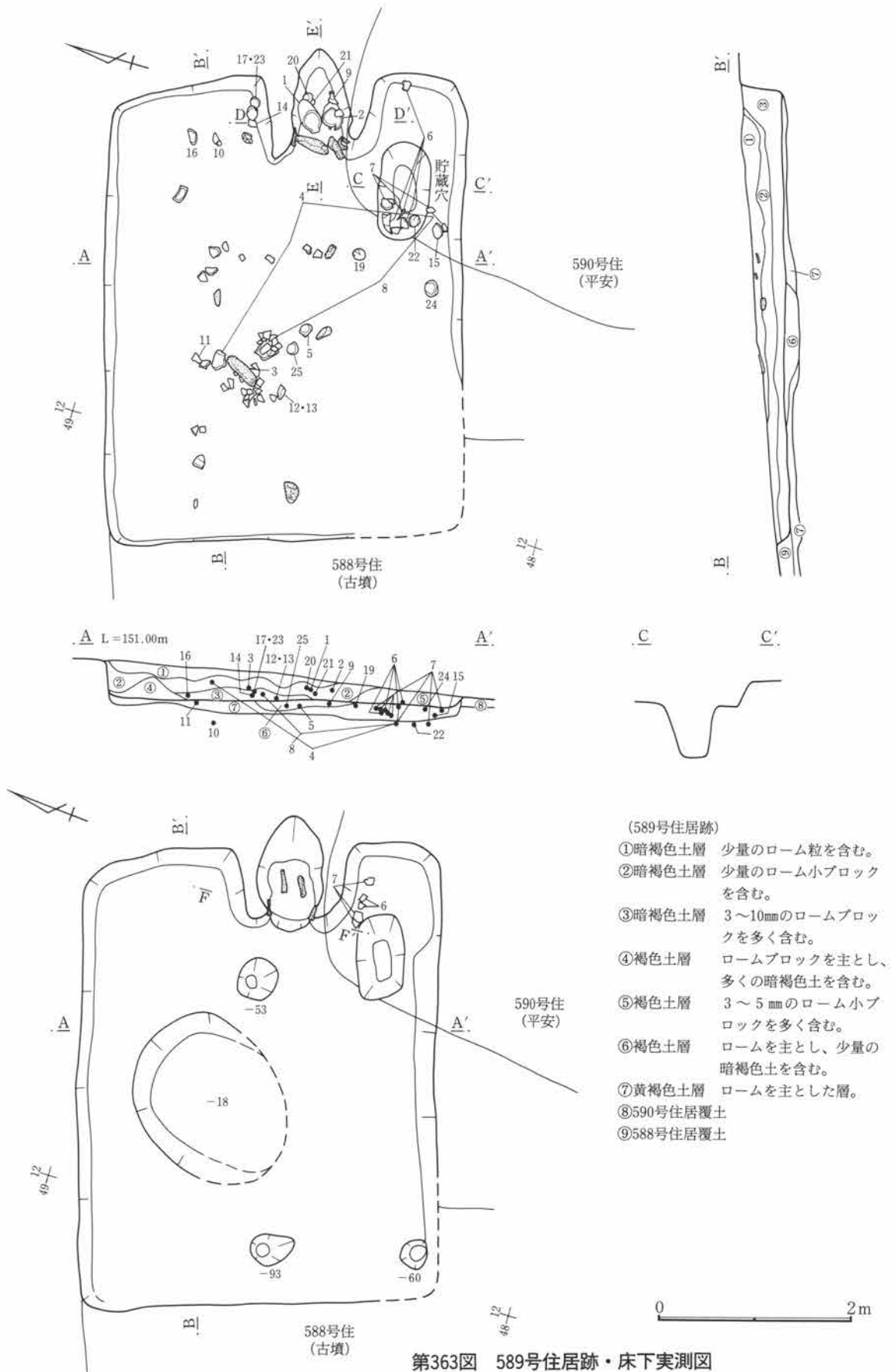
床下 床下に3本の小穴と床面中央部に楕円形を呈し床面からの深さ18cmの床下土坑が掘られていた。

遺物 中央部分の床面より10cmほど高い位置で多くの甕や高坏が、また貯蔵穴西側に甕や坏が出土している。(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

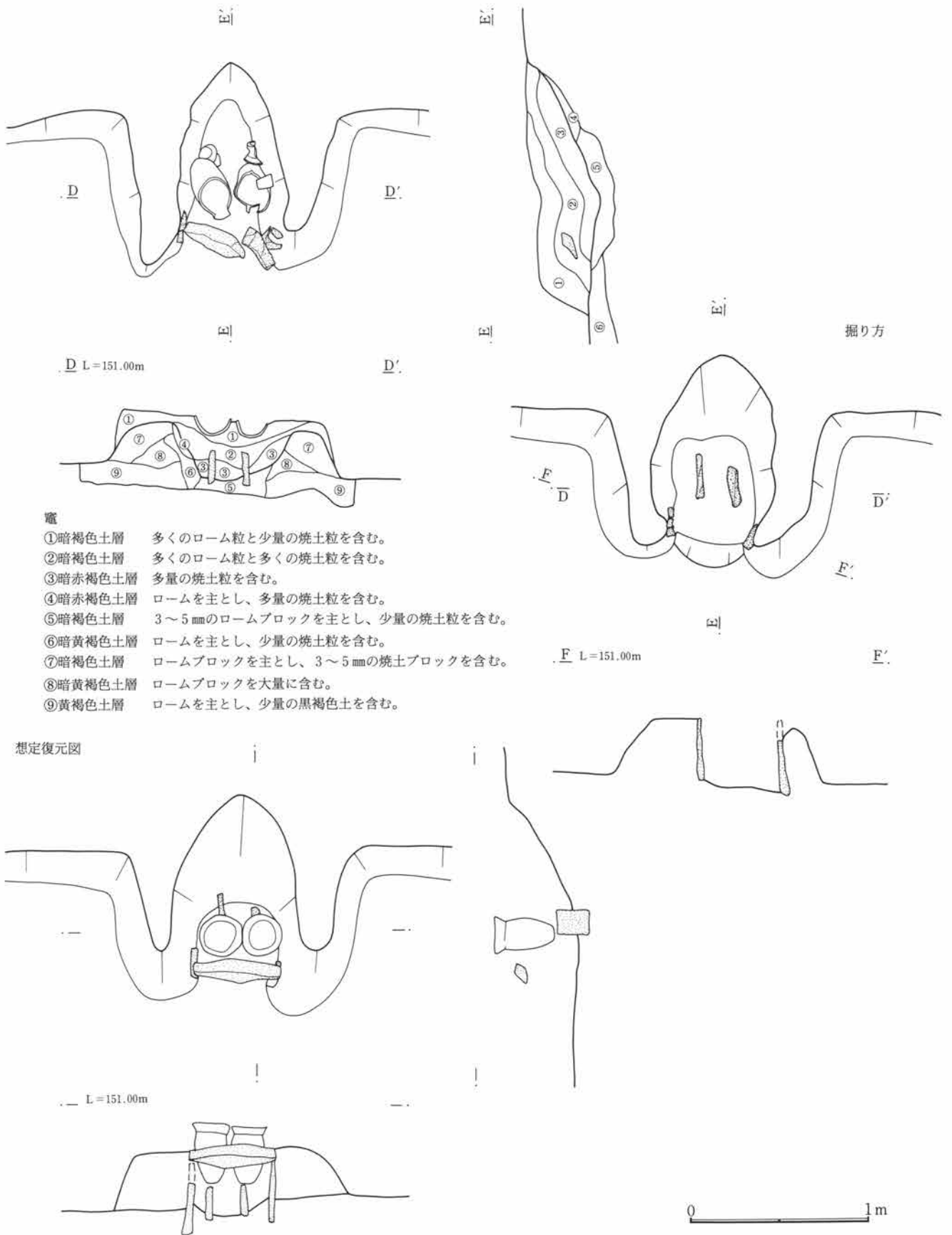
構造 残りの良い住居であり、焚口部分の両袖石(右側の袖石の上部は割れていた)と燃焼部の2個の支脚石がほぼ使用時の状態で残っていた。また焚口の天井石が2個に割れて焚口部分に倒れかかっていた。燃焼部には2個の甕が焚口部分に向かって崩れ落ちたように倒れていた。一定の高さ以上の口縁部から上を耕作等により欠損しているが、竈放棄段階では2個とも完形の甕であったと思われる。このように竈は一部崩れてはいるが、ほぼ使用時の状態で放棄されたことが推定できる。なお竈内より完形の土師器の坏が2個と脚底部を欠く高坏が甕底部に接して出土している。これは竈上に置かれていたものが、竈の崩壊段階に竈内に落ち込んだものと理解したい。竈内の残りは良好で多くの焼土粒が出土している。

規模 煙道方向115cm、燃焼部幅62cmである。

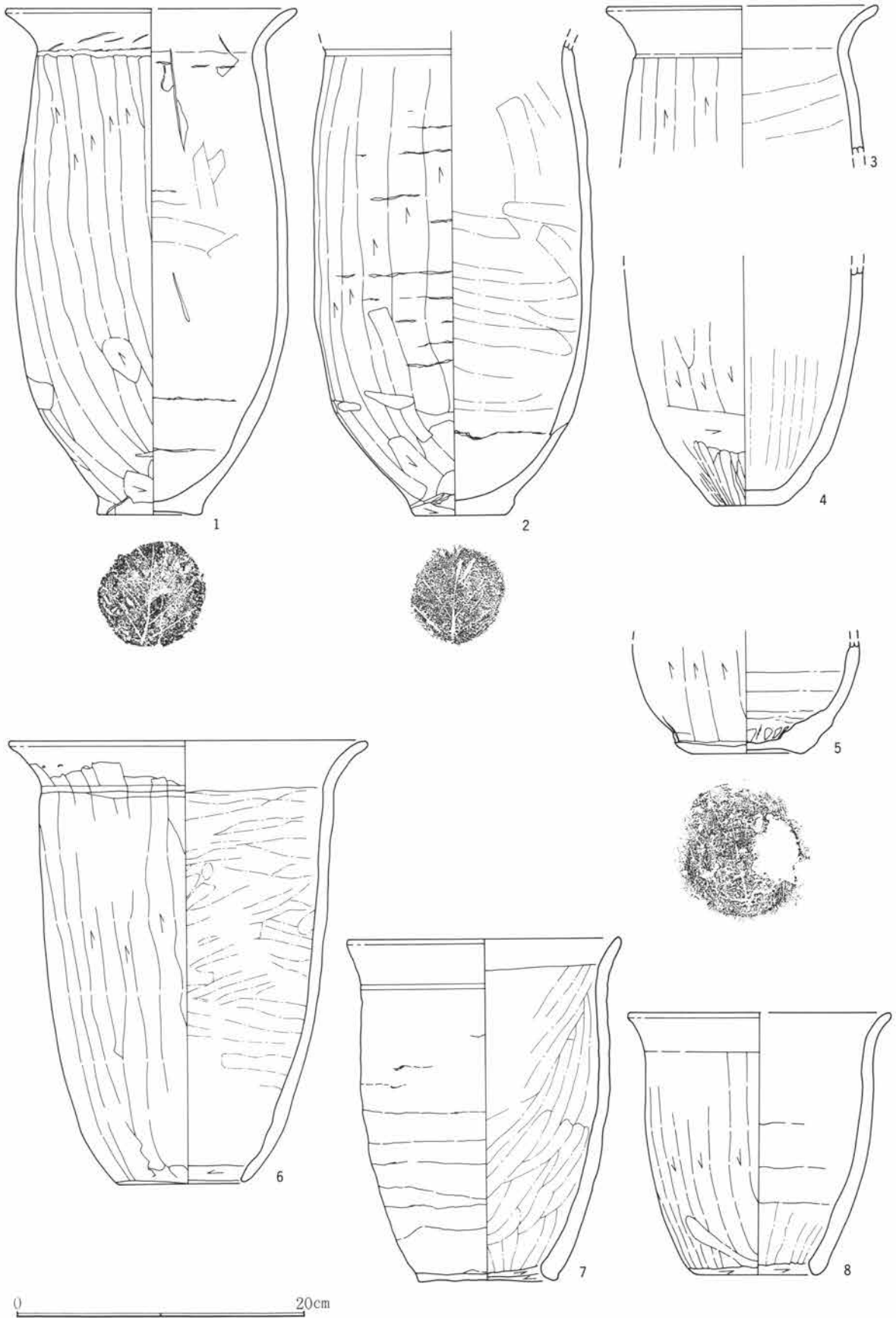


第363図 589号住居跡・床下実測図

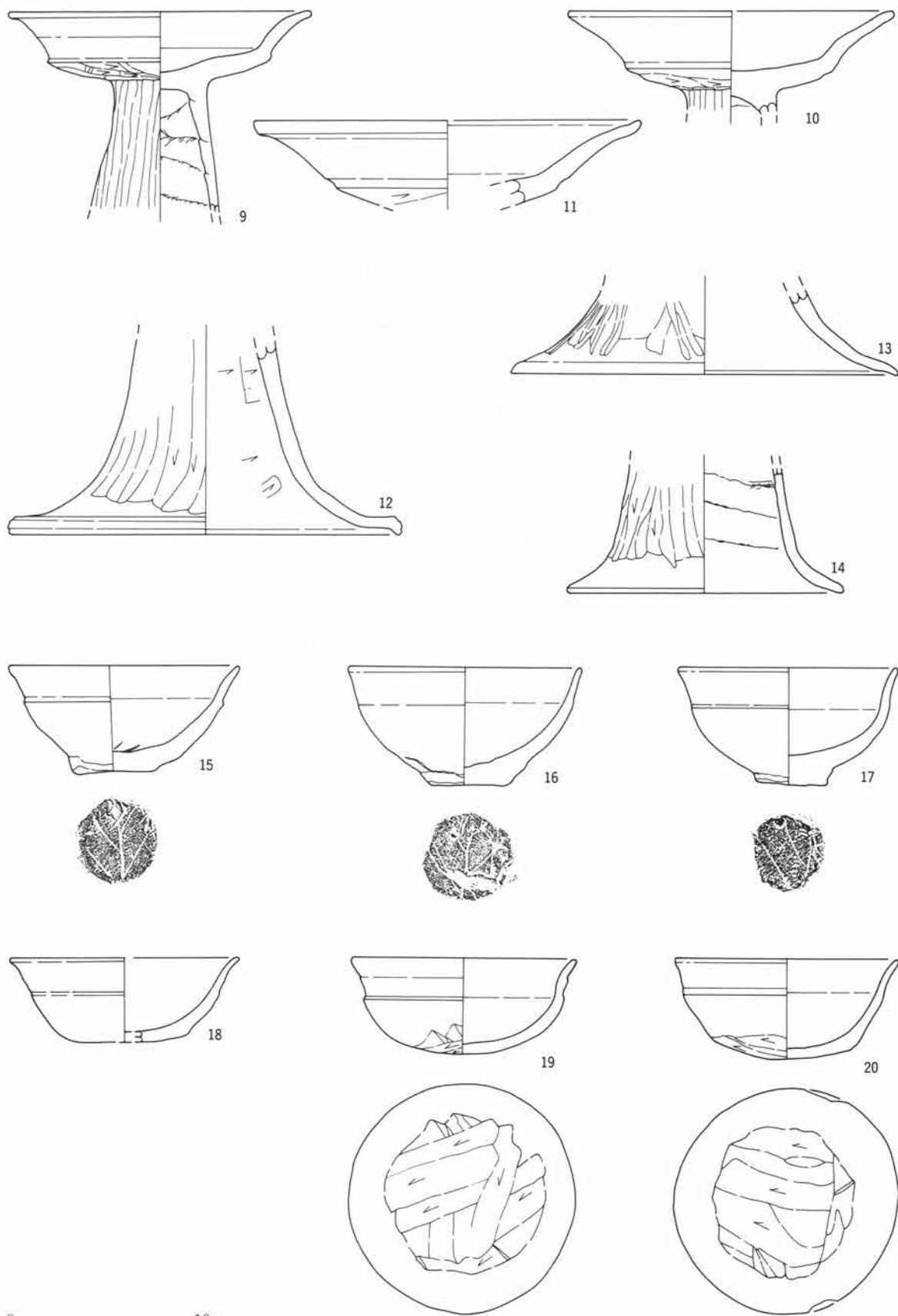
第3章 古墳時代の遺構と遺物



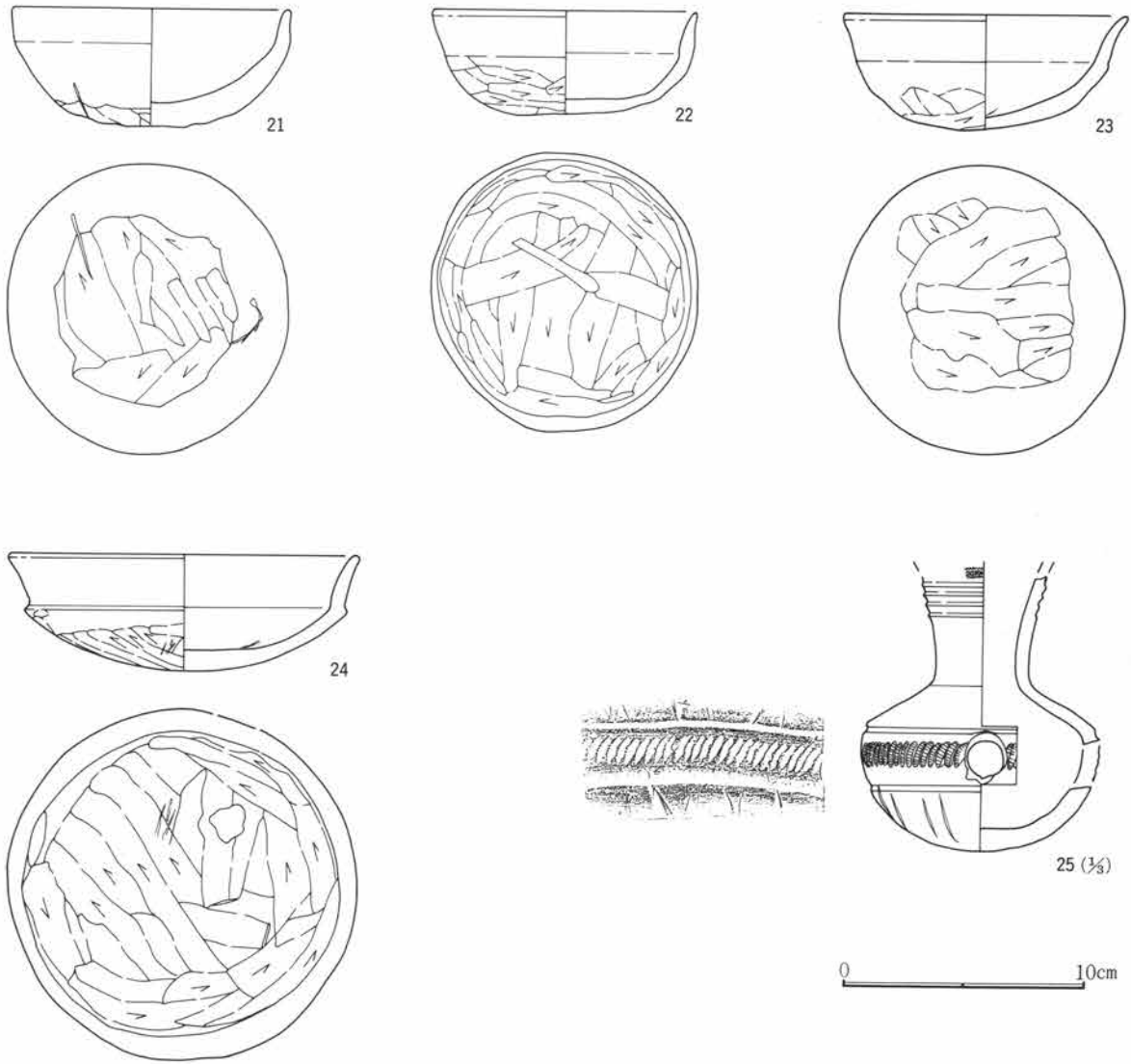
第364図 589号住居跡竈実測図



第365図 589号住居跡出土遺物実測図(1)



第366図 589号住居跡出土遺物実測図(2)



第367図 589号住居跡出土遺物実測図(3)

589号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
365-1 100	土師器 甕	竈内+12 口 $\frac{1}{2}$ 胴上 $\frac{1}{3}$ 他完形	口(20.6) 高 35.2 底 7.2	①粗、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底面木葉痕。胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動している。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴下半に接合痕あり。
365-2 100	土師器 甕	竈内+12 胴上 $\frac{1}{2}$ 胴中 ~底部完形	口 — 高 — 底 6.4	①粗、3~5mmの砂粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	底面木葉痕。胴部下半へら削り、上半へらナデ。砂粒の移動は少ない。多くの輪積痕が残る。胴部内面ナデ。胴下半で胴上部との接合痕あり。
365-3	土師器 甕	床面+18 破片	口(18.8) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒多く、3~5mmの片岩粒少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内外面とも砂粒の移動少なく比較的器表面密。
365-4 100	土師器 甕	床面+23 胴~底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 (4.7)	①粗、1~3mmの砂粒多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色・一部黒褐色	底面ナデ。胴外面へら削り、下端部密なへらナデ。内面ていねいなナデにより器表面密。
365-5	土師器 甕	床面直上 底部ほぼ完形	口 — 高 — 底 8.8	①粗、3~10mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。底部周辺へら削り。胴部外面へら削り。胴部内面ナデ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
365-6 100	土 師 器 甗	床面+7 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 25.0 高 31.2 底 8.8	①粗、2~5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③赤橙色・外面の一部黒色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少なく器表面の一部は密。胴部内側下端ヘラ削り。胴部内面ナデ。胴部内側は特に器表面密である。
365-7 100	土 師 器 甗	床面+3 床面-5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 19.0 高 23.7 底 9.6	①粗、5mm前後の長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③黄橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ナデで多くの輪積痕残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
365-8 100	土 師 器 甗	床面+14 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.2) 高 18.2 底 8.4	①粗、1~2mmの砂粒を多く、6~8mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	胴部下端ヘラ削り。胴部外面弱いヘラ削り。砂粒は目立つが、移動は少なく器表面密。内面ナデにより器表面密。
366-9 101	土 師 器 高 坏	甗内+10 口~脚上半 部ほぼ完形	口 15.5 高 — 底 —	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。脚内面に多くの輪積痕が残る。坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。坏内面中央剥離。坏の稜径が大きい。
366-10	土 師 器 高 坏	床面+32 坏部破片	口(16.7) 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚と坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
366-11	土 師 器 高 坏	床面+21 坏部破片	口(19.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む、片岩粒含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。坏内側の表面は剥離し多くの砂粒が目立つが密である。
366-12 101	土 師 器 高 坏	床面+9 脚部下端ほ ぼ完形	口 — 高 — 底 20.2	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラ削り。下端部に2本の沈線あり。脚内面ヘラ削り。
366-13	土 師 器 高 坏	床面+9 脚部破片	口 — 高 — 底(20.0)	①密、1mm以下の砂粒を多く、2~3mmの片岩粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面ナデ。
366-14	土 師 器 高 坏	床面直上 脚部破片	口 — 高 — 底(15.0)	①密、砂粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。端部横ナデ。脚内面に輪積の痕跡が残る。
366-15 101	土 師 器 坏	床面-6 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.8 高 5.4 底 4.0	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色・一部吸炭により黒褐色	底面木葉痕。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの圧痕あり。
366-16 101	土 師 器 坏	床面+3 口縁 $\frac{1}{2}$ 残存 底部完形	口 12.0 高 6.0 底 4.2	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色・一部吸炭により黒褐色	底面木葉痕。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。表面の一部が剥離している。
366-17 101	土 師 器 坏	床面-3 口縁~底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.2 高 6.0 底 3.6	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色・一部吸炭により黒褐色	底面木葉痕。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
366-18 100	土 師 器 坏	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
366-19 101	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.5 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部吸炭により黒褐色	底部中央ヘラ削り、周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。
366-20 101	土 師 器 坏	甗内+12 ほぼ完形	口 11.4 高 5.1 底 丸底	①密、1~3mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ていねいな横ナデにより器表面密。
367-21 101	土 師 器 坏	甗内+8 完形	口 11.4 高 4.9 底 丸底	①やや粗、3~6mmの片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部中央ヘラ削り、周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面横ナデにより器表面密。器肉の厚い坏である。
367-22 101	土 師 器 坏	貯穴内-22 完形	口 10.9 高 4.2 底 丸底	①やや粗、2~4mmの片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の狭いヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面横ナデ。
367-23 101	土 師 器 坏	甗内 完形	口 11.6 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。内部底面にヘラの圧痕あり。
367-24 101	土 師 器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 14.6 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの圧痕あり。
367-25 101	須 恵 器 甗	床面直上 頸部下半~ 底部完形	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面ヘラによる刻痕10本あり。体部には2本の凹線によって区画した間に櫛描き列点文を巡らした文様帯あり。頸部には4本の凹線とその上部には波状文らしき痕跡あり。

601号住居跡 (第368・369図、図版55・115)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、45・46-69グリッドに位置する。

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面に位置し、西側の壁面は少し残っているが、竈の築かれる東側の床面や壁面はほとんど残っていなかった。東に近接し同じ古墳時代の602号住居が築かれていた。重複関係の確認はできなかったが、おそらく竈部分は重複していたものと思われる。出土遺物から602号住居が6世紀後半で601号住居が7世紀後半と考えられるため、本住居が新しいものと思われる。

構造 西側の床面は残っていたが、東側は残っていなかった。床面はロームを主とし、多くの暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。

規模 東西推定2.70m、南北3.93mである。壁高は西壁面で16cmであった。

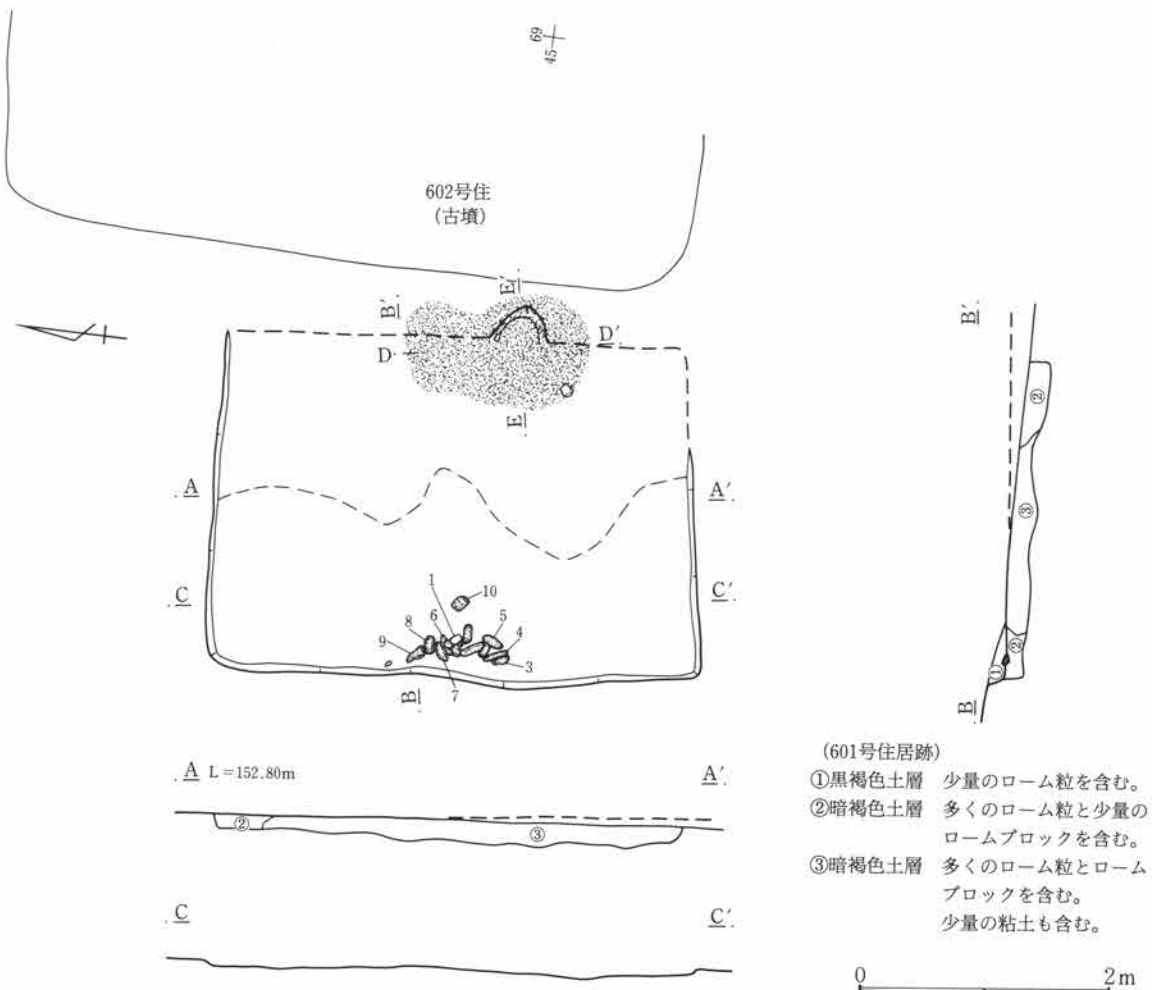
遺物 西壁面中央部に近い床面に多くのこも編み石がまとまって出土している。

(竈)

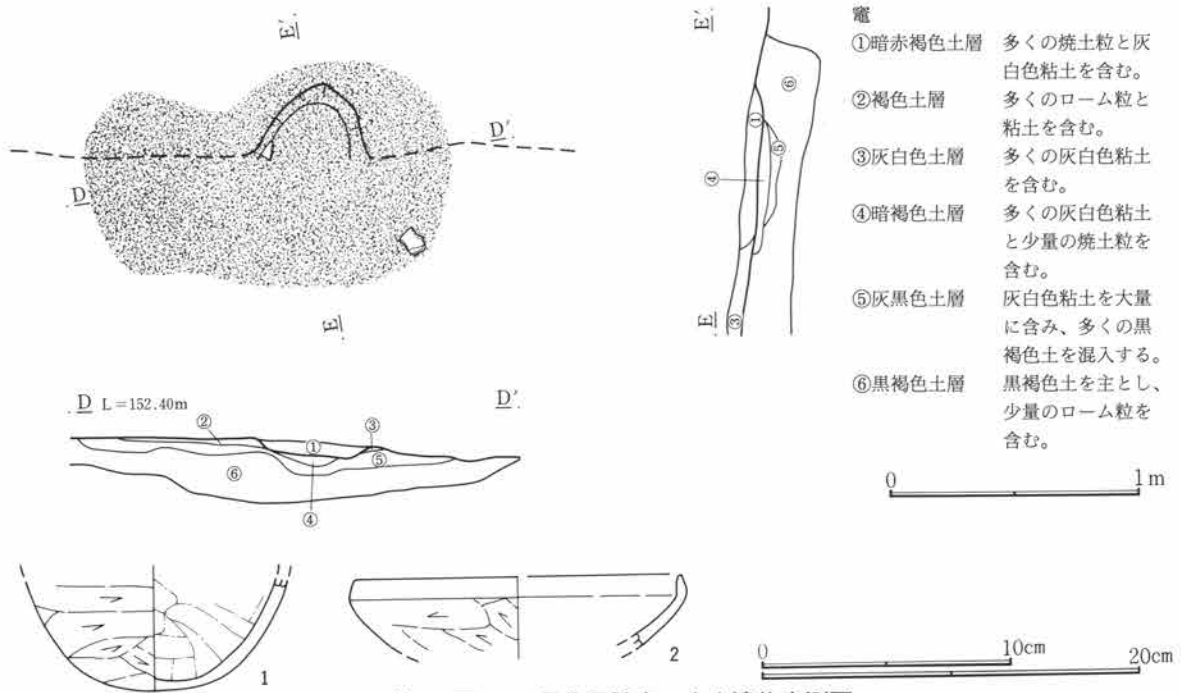
位置 住居東壁の南寄りに造られている。残りが悪く明確でないが、袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の大部分は削り取られて残っていなかった。竈内より石の出土はなかった。竈の築かれる部分は黒褐色土で、ほとんどロームがない。そのため多くの灰白色粘土と少量のロームと黒褐色土を混ぜ合わせた土を造り、その土を用いて竈が築かれていた。

規模 煙道方向不明、燃烧部幅推定35cmである。



第368図 601号住居跡実測図



第369図 601号住居跡竈・出土遺物実測図

601号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
369-1	土 師 器 甕	覆土 胴下半～底 部1/2残存	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色・一部黒褐色	底面と胴部外面へラ削り。内面ナデ。 小型丸胴甕の底部と思われる。
369-2	土 師 器 坏	堀り方覆土 1/2残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いへラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑認められず。
3 115	こも編み石	覆土	長 13.5 幅 6.2 厚 3.5 重 510		緑簾緑泥片岩。片側の側面に打ち欠かれた凹凸部を持ち、他の側面はゆるやかな凹状部が認められる。
4 115	こも編み石	覆土	長 17.9 幅 4.6 厚 2.6 重 410		石墨絹雲母片岩。細長い石である。両側面中央部に打ち欠かれた凹状部が認められる。
5 115	こも編み石	覆土	長 16.9 幅 6.1 厚 3.3 重 660		絹雲母石墨片岩。断面が長方形を呈す偏平な石である。火を受けて1/2程度赤色を帯びている。支脚石の転用と思われる。
6 115	こも編み石	覆土	長 16.7 幅 6.4 厚 4.1 重 810		緑簾緑泥片岩。細長く肉厚な石である。両側面に凹状を呈する。
7 115	こも編み石	覆土	長 16.6 幅 6.8 厚 4.1 重 800		安山岩。断面が台形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
8 115	こも編み石	覆土	長 13.4 幅 7.0 厚 2.8 重 460		絹雲母石墨片岩。片側の側面が大きく欠損している。他の側面に打ち欠かれた凹凸部が認められる。
9 115	こも編み石	覆土	長 17.5 幅 7.0 厚 4.3 重 800		緑簾緑泥片岩。片側の側面が凹凸を呈し、他の側面は一部欠損している。
10 115	こも編み石	覆土	長 12.0 幅 7.0 厚 3.4 重 490		絹雲母石墨片岩。断面がクサビ形を呈する石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。

602号住居跡 (第370・371図、図版55)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、46-69・70グリッドに位置する。

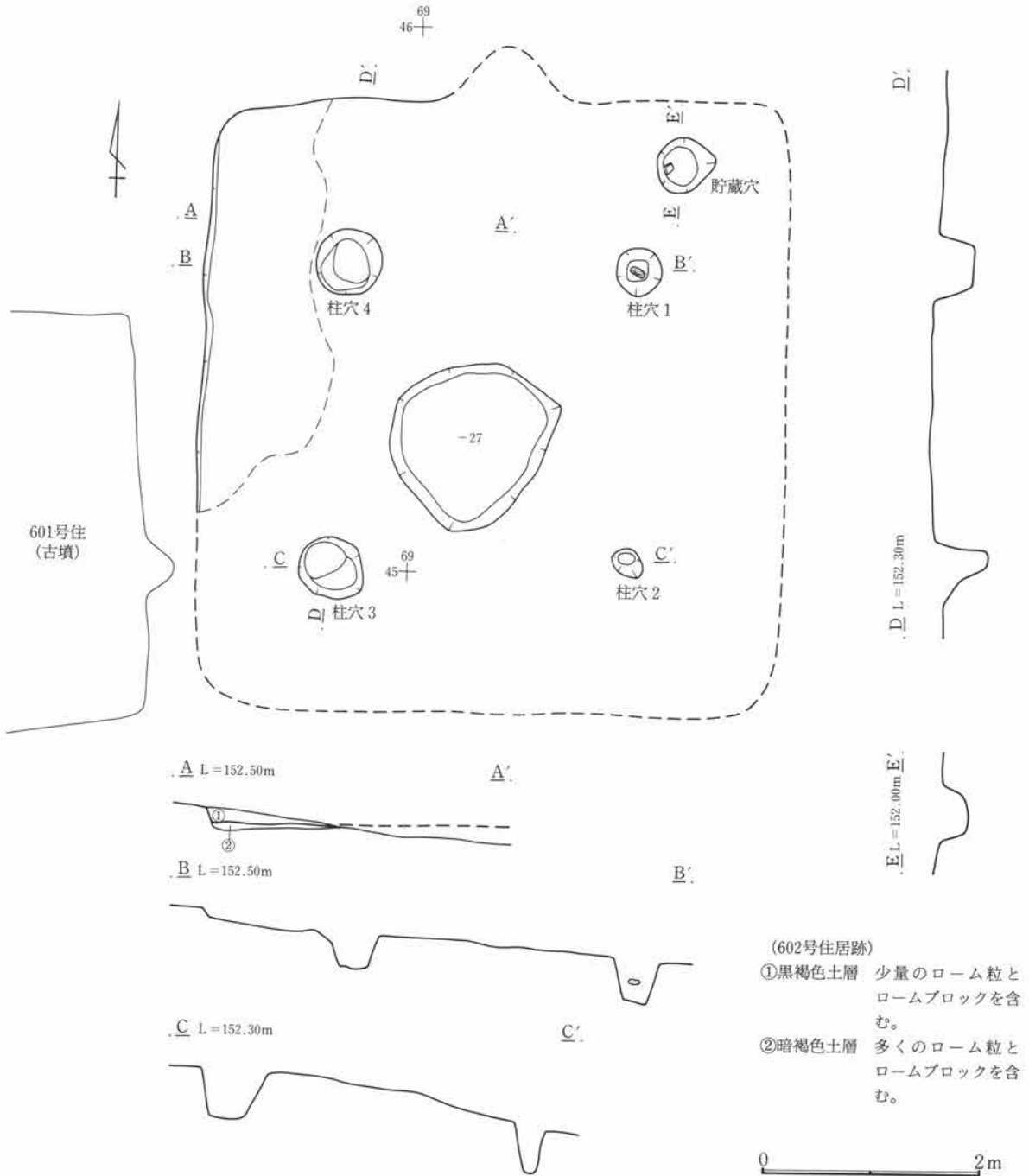
概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面に位置し、西側の壁面と床面が僅かに残っていたが、他の部分の床面は残っていなかった。柱穴と貯蔵穴の下部分が残っていたため住居の範囲は推定できたが、極めて残りの悪い住居であった。竈は痕跡も残っていなかったが、貯蔵穴の位置から北壁面に造られていた可能性が考えられる。西に近接し同じ古墳時代の601号住居が築かれており、601号住居で説明したように本住居が古いと思われる。

構造 西側の床面が僅かに残っていたが、東側は残っていなかった。床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られていた。柱穴が4本、貯蔵穴が北東部分に掘られていた。

規模 東西南北とも不明である。壁高は西壁面で9cmである。柱穴の上面の多くは削り取られており、径は明らかでないものが多い。そのため検出面での径を測定した。柱穴1は径42cm深さ67cm、柱穴2は径29cm深さ102cm、柱穴3は径59cm深さ52cm、柱穴4は径61cm深さ38cmである。貯蔵穴は径54cm深さ67cmである。

床下 床下中央部に径1.5m床面からの深さ27cmの床下土坑が掘られていた。

遺物 出土量が少なく図示できた遺物は土師器の坏1点であり、破片総量でも26片と少ない。



第370図 602号住居跡実測図



第371図 602号住居跡出土遺物実測図

602号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
371-1	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高— 底—	①密 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 光沢を持つ雲母状の粒子を含む。

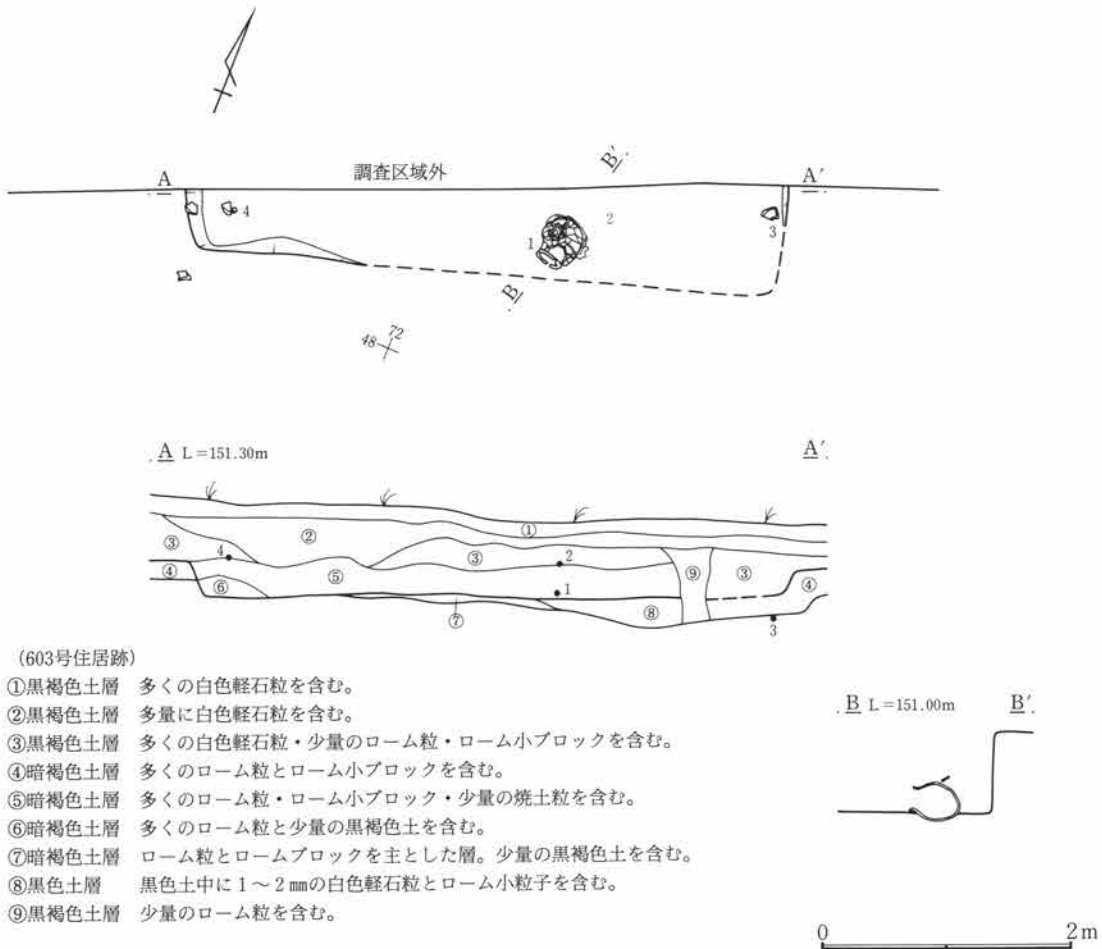
603号住居跡 (第372・373図、図版55・56・101)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、49-72・73グリッドに位置する。

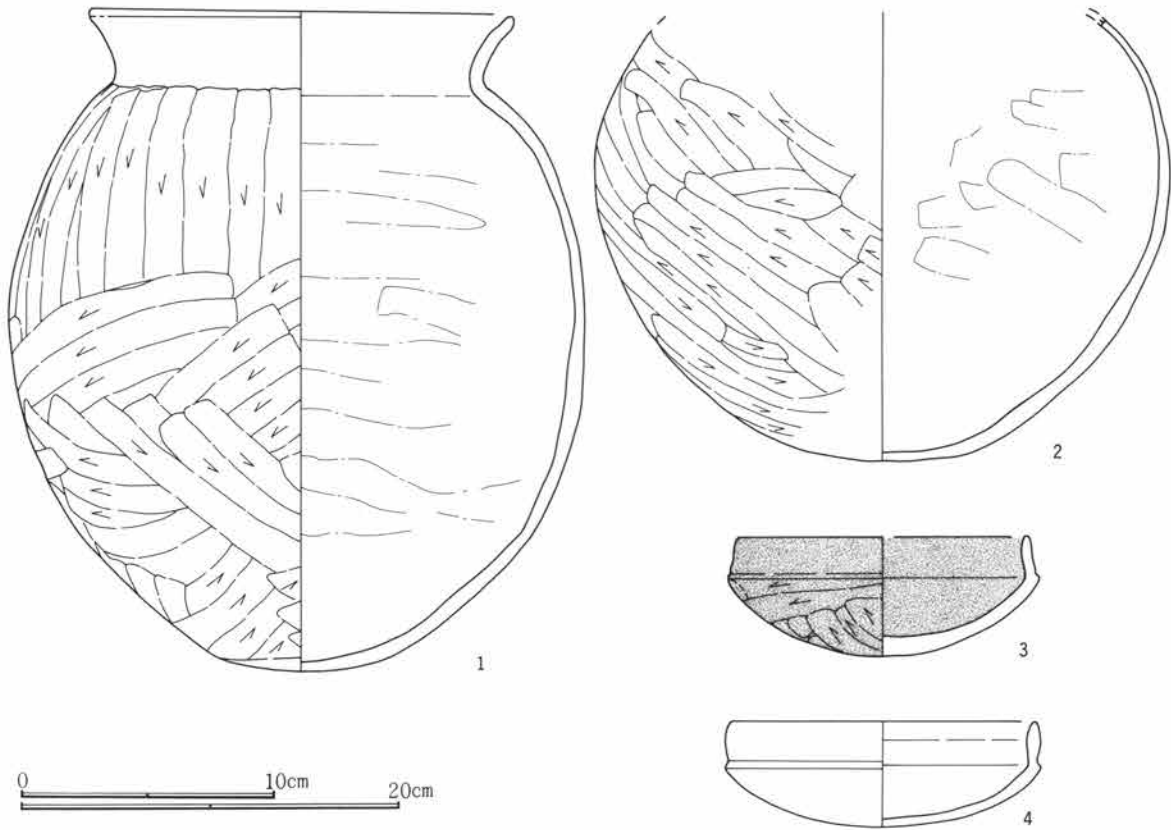
概要 住居の大部分は調査範囲外のため、南端部以外は調査できなかった。調査できた部分の西側の床面は主にロームを掘り込んで造られていたが、東側は黒色土を床面にしており、明瞭な床面の確認はできなかった。竈・柱穴・貯蔵穴等は全く不明である。

規模 東西4.82m、南北不明である。壁高は西壁の土層断面で28cmである。

遺物 ほぼ完形の1の甕の上に2の甕が重なるように出土している。



第372図 603号住居跡実測図



第373図 603号住居跡出土遺物実測図

603号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
373-1 101	土 師 器 壺	床面+10 ほぼ完形	口 22.4 高 35.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。胴部～底部ヘラ削りにより器肉を薄くほぼ均一に仕上げている。
373-2 101	土 師 器 壺	床面+13 胴部 ノ 残存 底部完形	口 — 高 — 底 7.8	①密、胎土が粉状を呈し、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部～胴部外面ヘラ削り、器表面は密である。内面ナデにより器表面きわめて密、ナデの単位不明瞭。
373-3 101	土 師 器 坏	床面直上 ノ 残存	口(11.9) 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面暗赤褐色・断面明赤褐色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面が粗い。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。表面全体黒漆。底部吸炭なし。
373-4 101	土 師 器 坏	床面+28 ノ 残存	口 12.3 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	表面全体が粗れており、整形方法不明。

606号住居跡 (第374～377図、図版56・102・108)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、49-74グリッドに位置する。

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の東側で次第にロームの堆積がなくなり、黒色土を覆土とする深い谷となっている。谷地部分を平らにし耕作するためと傾斜面からの浸水や谷地の湧水を下方に流すために、谷地部分と傾斜面との境に溝が掘られた。この溝により本住居の竈付近が南北方向に掘り込まれていた。このように本住居は傾斜面にあるため西側の壁面と床面が僅かに残っていたが、低い東側は残っていなかった。深く掘り込まれている柱穴の確認により住居の範囲は推定できた。北東コーナー部分に貯蔵穴とも思われる小穴が確認され

第3章 古墳時代の遺構と遺物

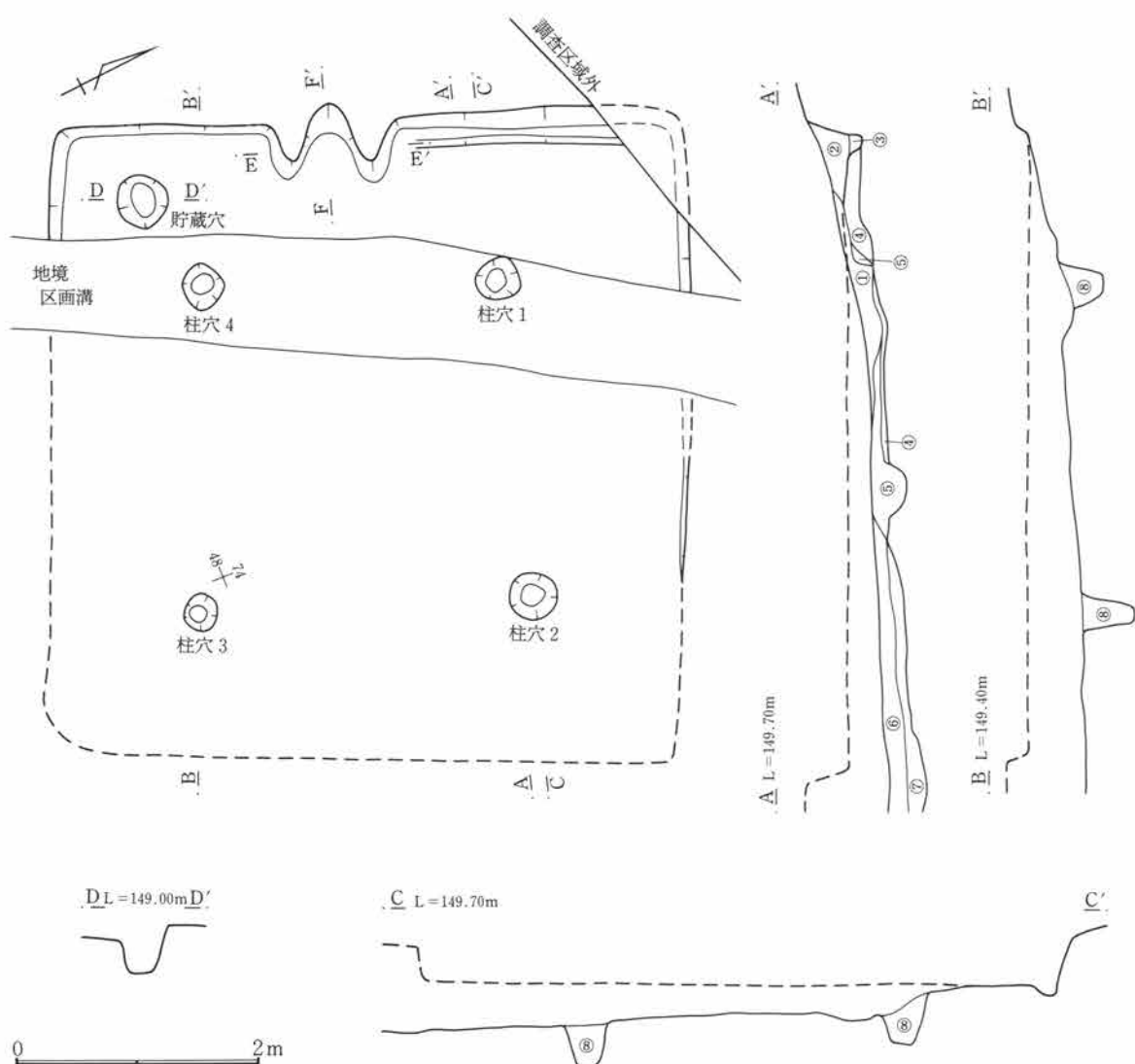
ていることから、竈が西壁面のほかに北壁面にも造られていた可能性も考えられる。しかしその面は深く削り取られているため、焼土粒等の散布は全く確認できなかった。

構造 西側の僅かに残っていた床面は、ロームを主とし多くの暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴は竈東側に掘られており、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西不明、南北5.28mである。壁高は西北壁面で38cmであった。柱穴は上面の多くが削り取られており、径は明らかでないものが多いため、径は検出面での数値である。柱穴1は径37cm深さ48cm、柱穴2は径39cm深さ68cm、柱穴3は径28cm深さ88cm、柱穴4は径36cm深さ61cmである。貯蔵穴は径42cm深さ63cmである。

床下 床下中央部に径100cm床面からの深さ47cmの床下土坑が、また柱穴のほかに多くの小穴が確認された。

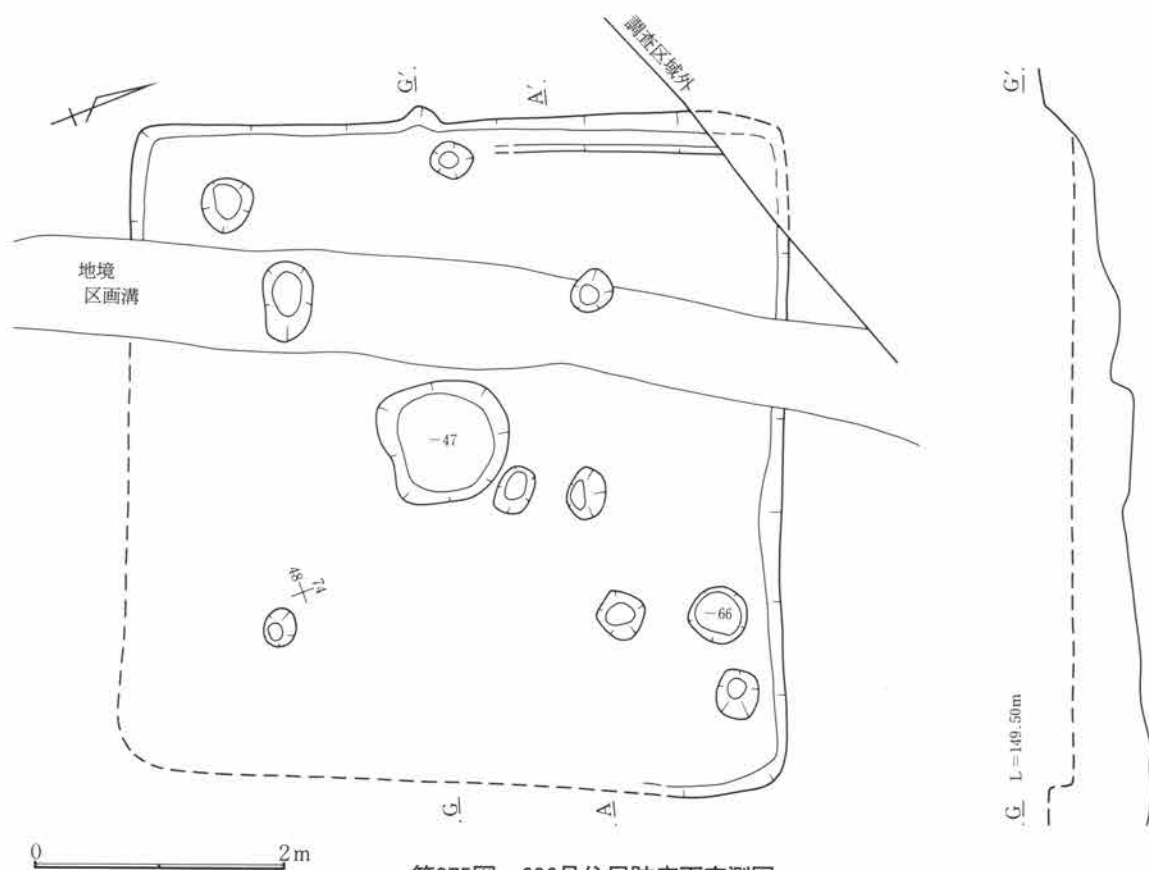
遺物 須恵器の高坏や鉄製の耳環等、やや珍しい遺物を出土している。



(606号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。(地境区画溝覆土)
- ②黒褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③黒褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ④黄褐色土層 ロームを主とした層。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑥黒褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑧暗褐色土層 少量のローム粒を含む。

第374図 606号住居跡実測図



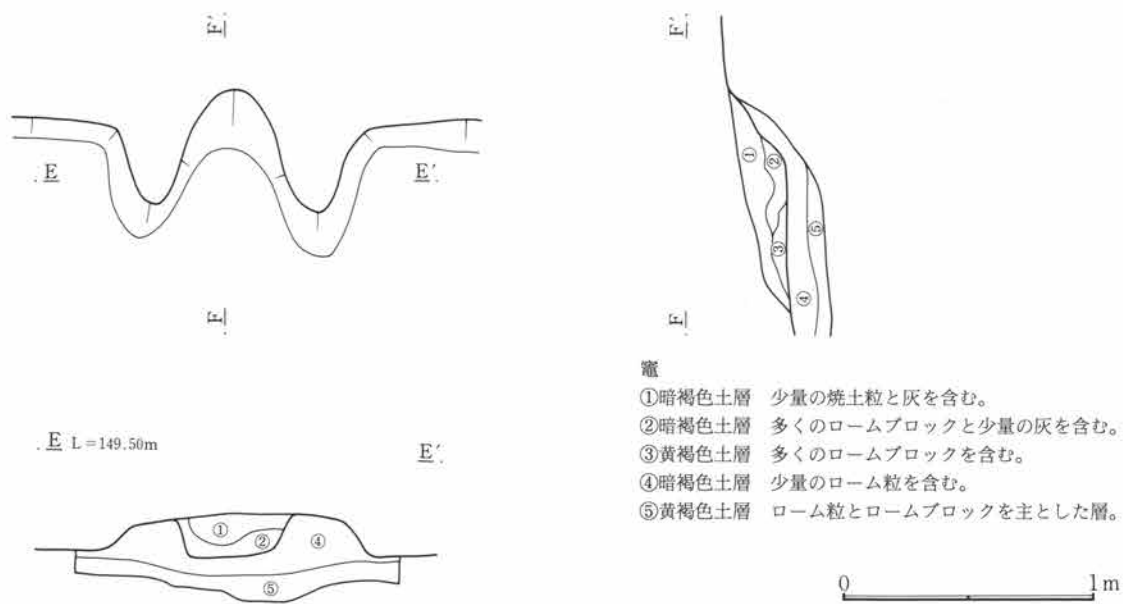
第375図 606号住居跡床下実測図

(竈)

位置 住居西壁の南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 上部の大部分は削り取られて残っていなかった。袖部は少量の暗褐色土で造られており、ロームの混入は少なかった。竈内から焼土粒の出土も多くなかった。

規模 煙道方向62cm、燃烧部幅42cmである。

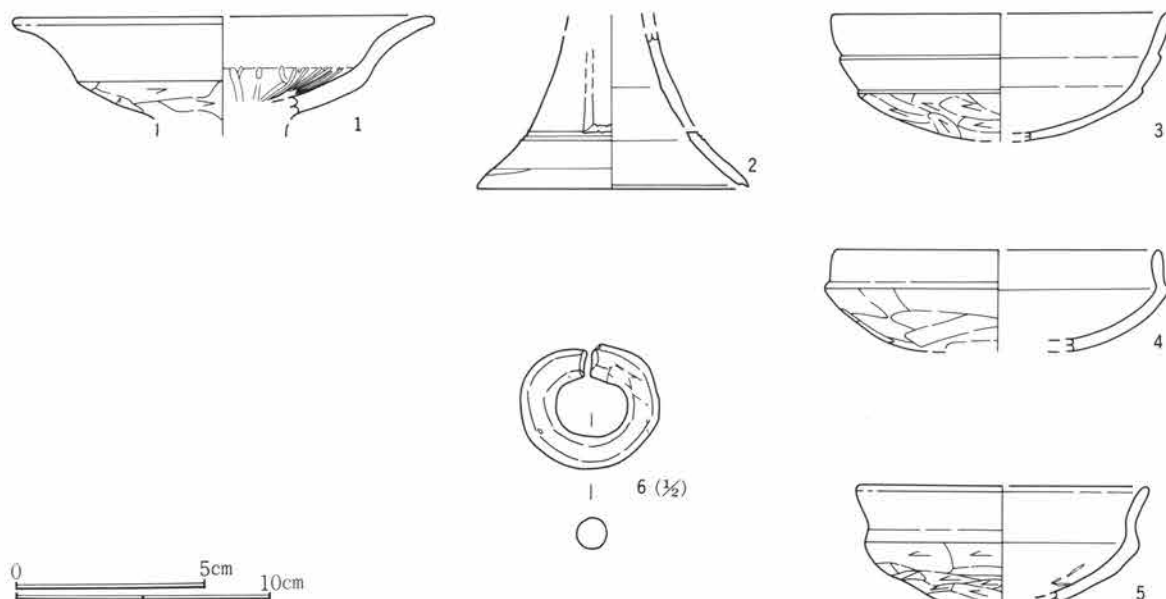


竈

- ①暗褐色土層 少量の焼土粒と灰を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の灰を含む。
- ③黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑤黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。

第376図 606号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第377図 606号住居跡出土遺物実測図

606号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
377-1	土師器 高坏	覆土 坏部1/4残存	口(17.0) 高— 底—	①密、多くの雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	坏部底面へら削り。口縁部横ナデ。内側底面に多くの放射状のへら磨き。
377-2	須恵器 高坏	覆土 脚部下半1/3 残存	口— 高— 底 11.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	長脚2段透しの高坏の脚部と思われる。透しの下端部に2条の凹線を持つ。脚下端に1条の凹線。
377-3 102	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.6) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。小さな砂粒が多く移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。口縁部中段に1条の沈線。有段口縁の坏である。
377-4 102	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(13.4) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面密。内面ナデ。
377-5	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(11.9) 高— 底—	①密、1mm前後の大きな赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面強いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面中央部にへらの圧痕あり。大きな赤色粒が特徴的。
377-6 108	鉄製品 耳環	覆土	広径 3.7 狭径 3.2 厚 0.8 重 17.1		鉄製の耳環である。錆化がひどい。表面に金や漆等の痕跡は認められない。軽いため中空か。

607号住居跡 (第378・379図、図版56・102)

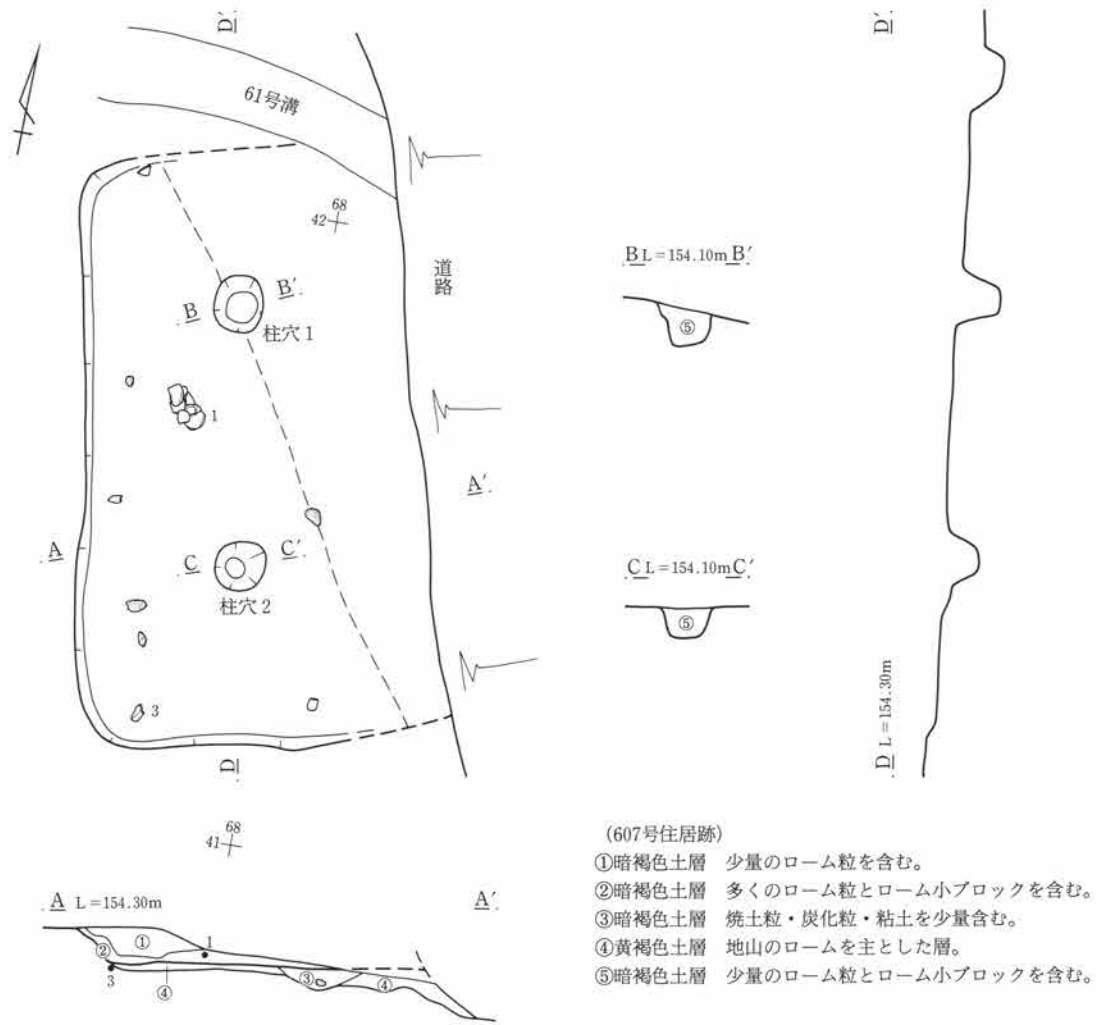
位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、42-68グリッドに位置する。

概要 比較的平坦な第2次調査区から東側の谷地に向かって低くなる第10次調査区にかけて地形の変換する部分に造られ、谷地と平地との境にある道路により住居の東側が削り取られていた。柱穴の一部と竈や貯蔵穴は削り取られた部分に造られていたためか不明である。北壁や南壁の多くも削りとられ残りが悪かった。

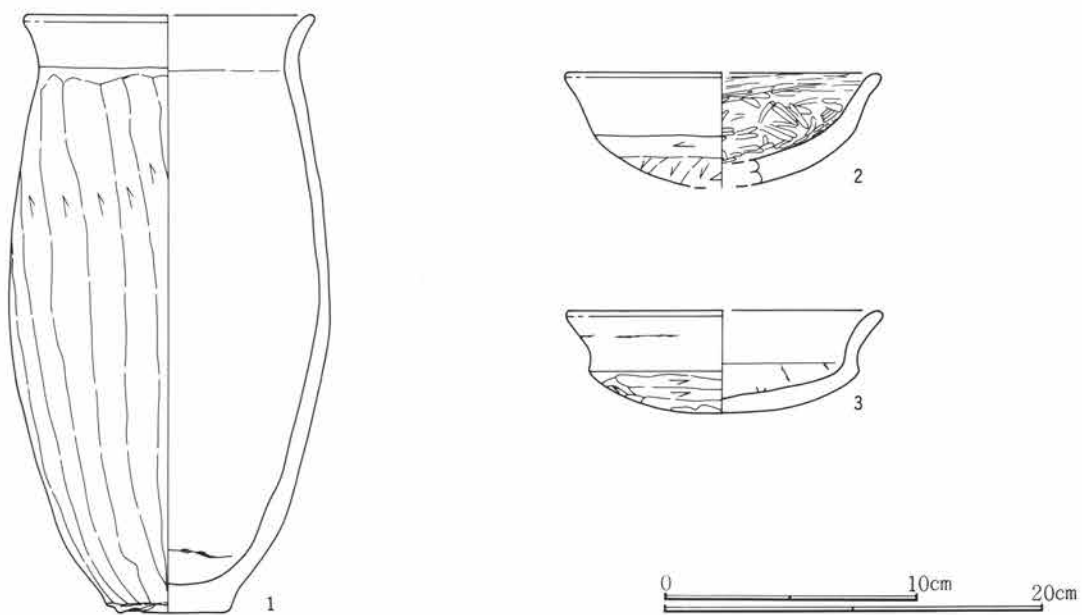
構造 床面はロームを主とし、多くの暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が西側で2本掘られていたが、東側の2本は削り取られているためか不明である。

規模 東西不明、南北4.64mである。壁高は西南壁面で31cmであった。柱穴1は径40cm深さ45cm、柱穴2は径41cm深さ49cmである。

遺物 土師器の甕と坏を少量出土している。



第378図 607号住居跡実測図



第379図 607号住居跡出土遺物実測図

607号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
379-1 102	土師器 甕	床面+6 1/2残存	口(15.5) 高 31.5 底 6.5	①粗、2~4mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
379-2	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(12.6) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多 く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削りにより、多くの砂粒と粘土がササラ状に移動し 器表面が粗い。内面全体ヘラ磨き。 胎土やヘラ磨き等において、他の土器と異質である。
379-3 102	土師器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/2残存	口(12.6) 高 4.0 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を多 く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ により器表面密。

650号住居跡 (第380・381図、図版56)

位置 本住居跡は、第8次調査区にあり、76-44グリッドに位置する。

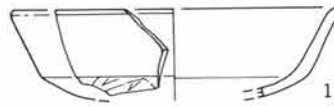
概要 東西に細長いトレンチ状の地区であり、住居の南側の大部分は調査区域外であった。同じ古墳時代の708号住居と北側壁面付近で僅かに重複している。新旧関係は明確でないが、重複関係や出土遺物から本住居跡が新しいと思われる。住居の東側は一段と低くなっており、地境の溝(46号溝)が掘られていた。この溝により、住居の東側の大部分が深く掘り込まれていた。竈や貯蔵穴は不明であり、柱穴と思われる小穴が2本掘られており、位置関係から西側の小穴が柱穴1であると思われるが、東側の小穴1は用途不明である。このように極めて残りの悪い住居であった。

規模 東西南北とも不明である。壁高は西壁面で39cmであった。柱穴1は径31cm深さ47cm、小穴1は径30cm深さ52cmである。

遺物 出土量が少なく図示できたのは土師器の坏の小破片1点であり、破片総数も27片と少量である。



第380図 650号住居跡実測図



第381図 650号住居跡出土遺物実測図

650号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
381-1	土師器 坏	覆土 破片	口(12.8) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 坏のわずかな破片である。

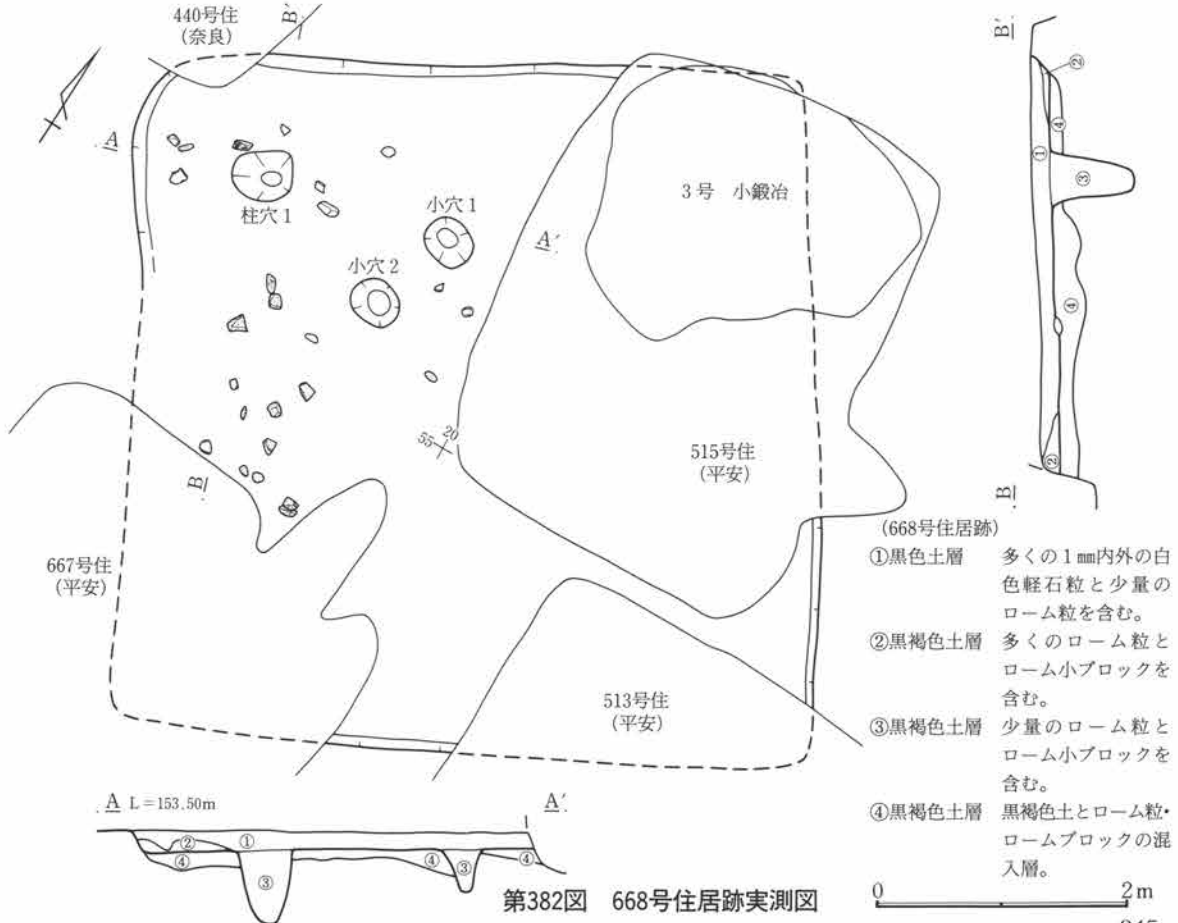
668号住居跡 (第382・383図、図版57)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、56-20グリッドに位置する。

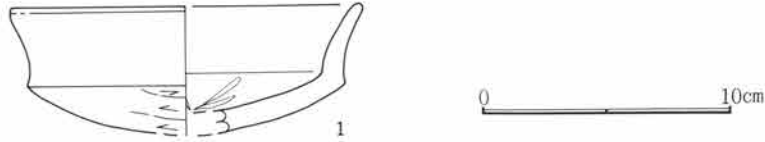
概要 住居密集地に位置し、重複している後世の4軒の住居により床面の半分以上を削り取られている。平安時代の住居により北東部分を515号住居、南東部分を513号住居、南西部分を667号住居により大きく掘り込まれている。また北西部分を奈良時代の440号住居により僅かに掘り込まれている。竈は重複している住居により削り取られたためか不明であるが、515号住居の竈の造られている付近に造られた可能性が高い。貯蔵穴は不明であるが、柱穴と思われる小穴が1本と小穴が2本掘られていた。このように極めて残りの悪い住居であった。

規模 東西推定5.40m、南北推定5.41mである。壁高は北壁面で24cmであった。柱穴1は径49cm深さ57cm、小穴1は径39cm深さ26cm、小穴2は径42cm深さ31cmである。

遺物 出土した遺物は図示した土師器の坏の破片1点が全てである。



第382図 668号住居跡実測図



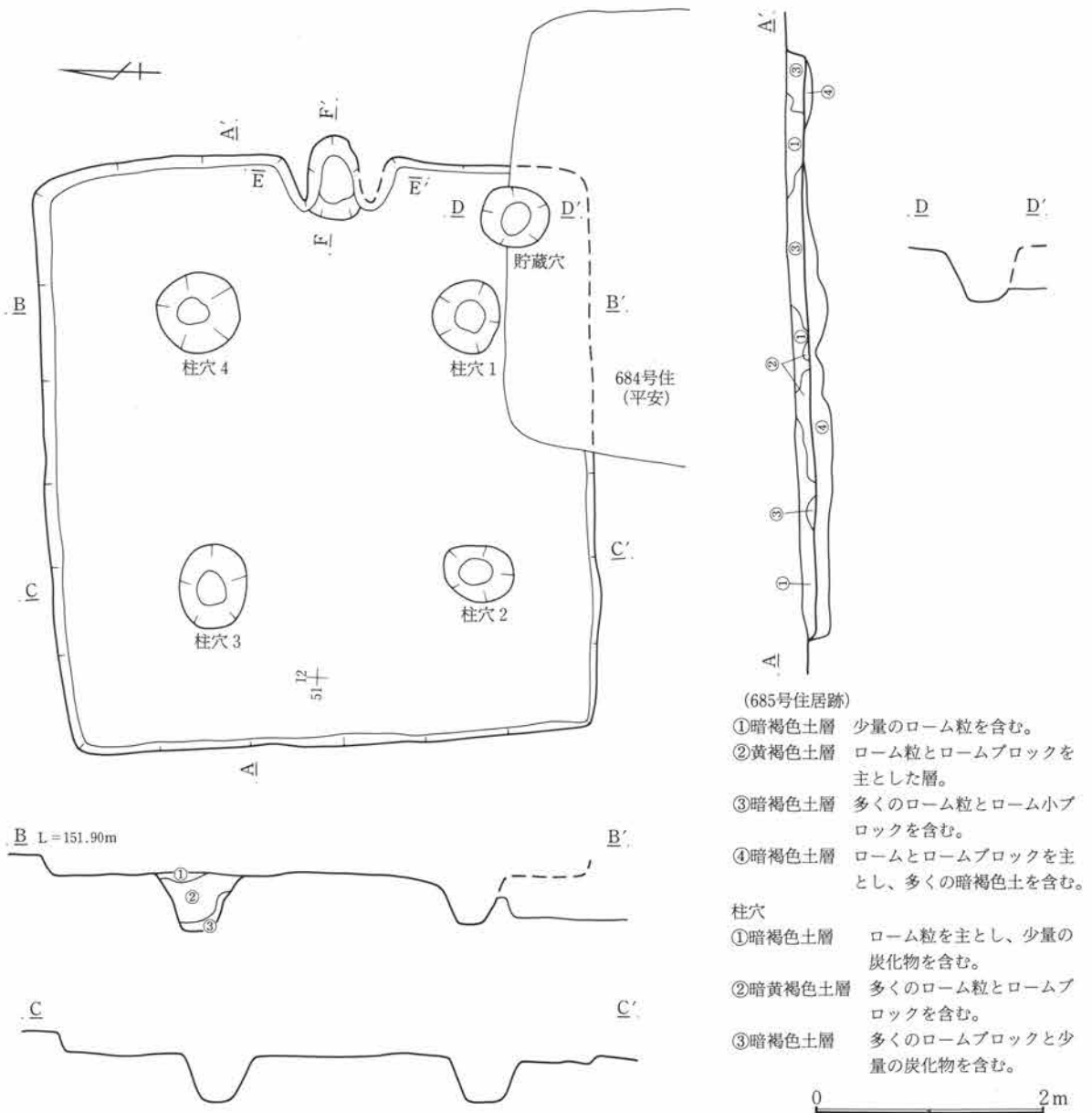
第383図 668号住居跡出土遺物実測図

668号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
383-1	土師器 坏	覆土 破片	口(14.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③外面黒褐色・内面橙色	底面へラ削り。粘土がササラ状に粗れている。口縁部横ナデ。内側底面に放射状のへら磨きあり。器肉の厚い坏である。

685号住居跡 (第384~386図、図版57・108)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、51・52-13グリッドに位置する。



第384図 685号住居跡実測図

概要 南西部分を平安時代の684号住居により床下部分まで掘り込まれている。東壁中央部に造られている竈の右袖部分は耕作溝により削られて残っていなかった。

構造 床面の残りは比較的良好であり、ロームを主とし多くの暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴が竈の右側で684号住居と重複している部分に、また床面に柱穴が4本掘られていた。

規模 東西5.14m、南北4.74mである。壁高は北東コーナー部分の壁面で20cmである。貯蔵穴は径60cm深さ49cmである。柱穴1は径58cm深さ42cm、柱穴2は径62cm深さ46cm、柱穴3は径60cm深さ47cm、柱穴4は径74cm深さ50cmである。

床下 床下中央部に床面からの深さ23cmの床下土坑が掘られていた。

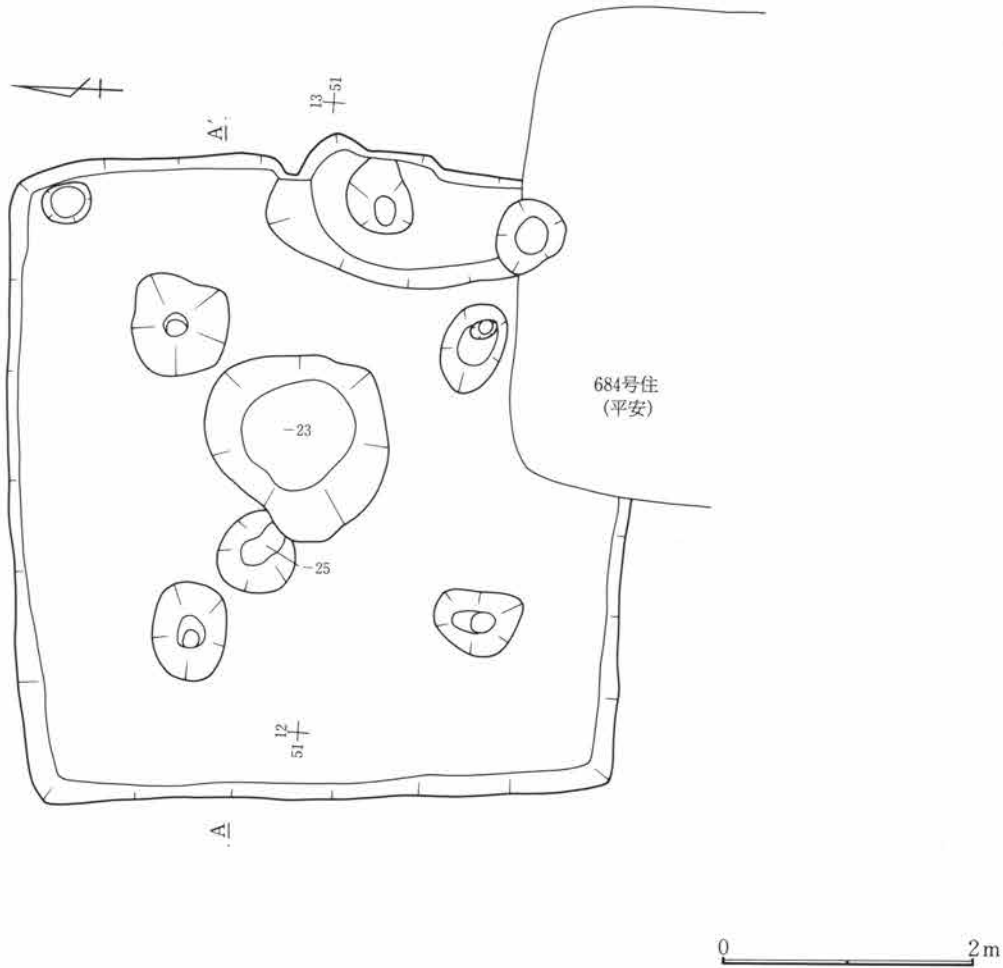
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の甕と釘のみである。破片も総量で48片と少ない。

(竈)

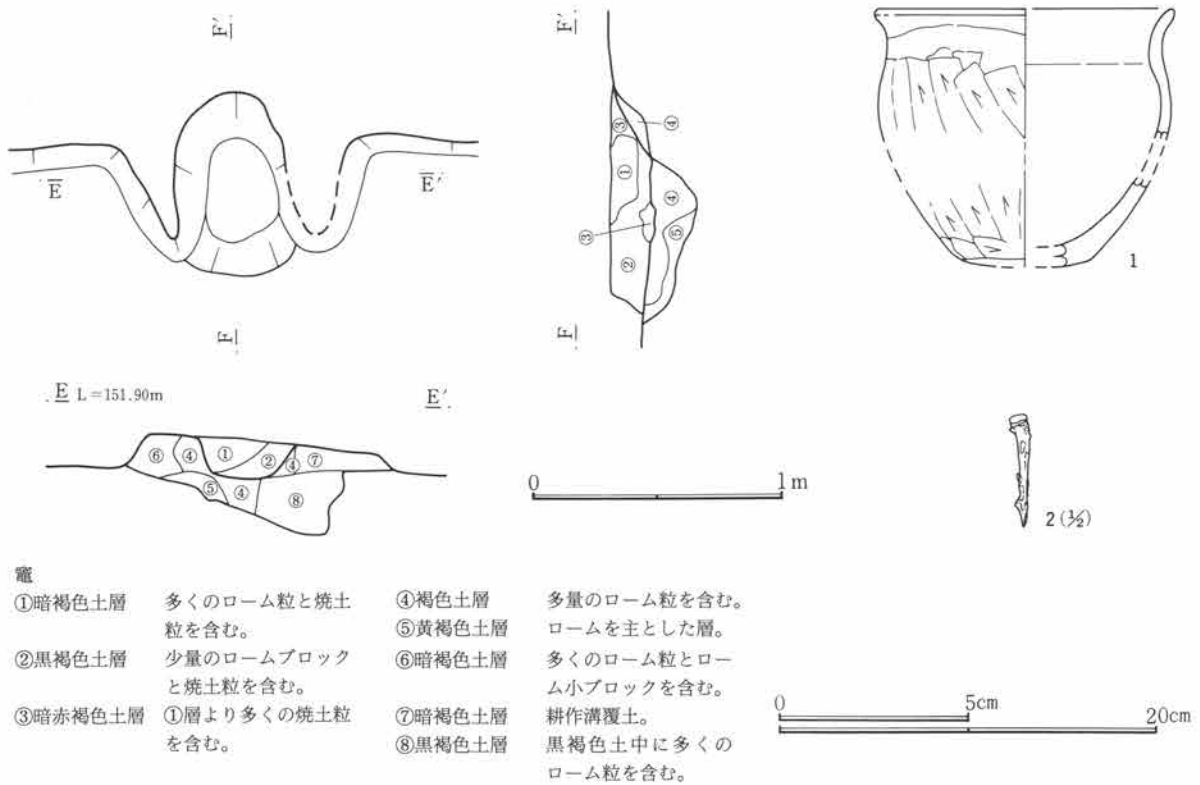
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの悪い竈であり、右袖部分は耕作溝により削り取られていた。また右袖部分の下部は住居の造られる前に掘り込まれており、黒褐色土が多く出土した。

規模 煙道方向66cm、燃焼部幅39cmである。



第385図 685号住居跡床下実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と焼土粒を含む。
 - ②黒褐色土層 少量のロームブロックと焼土粒を含む。
 - ③暗赤褐色土層 ①層より多くの焼土粒を含む。
 - ④褐色土層 多量のローム粒を含む。
 - ⑤黄褐色土層 ロームを主とした層。
 - ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ⑦暗褐色土層 耕作溝覆土。
 - ⑧黒褐色土層 黒褐色土中に多くのローム粒を含む。

第386図 685号住居跡竈・出土遺物実測図

685号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
386-1	土 師 器 小 型 甕	覆土 破片	口(16.0) 高(13.5) 底(7.0)	①やや粗、1~3mmの砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密。図上復元。
386-2 108	鉄 製 品 鉄 釘	覆土	長 2.9 幅 0.5 厚 0.2 重 0.82		鉄釘と思われる。 錆化がはげしいが、頭部と思われる部分が明瞭に残る。

687号住居跡 (第387図、図版57)

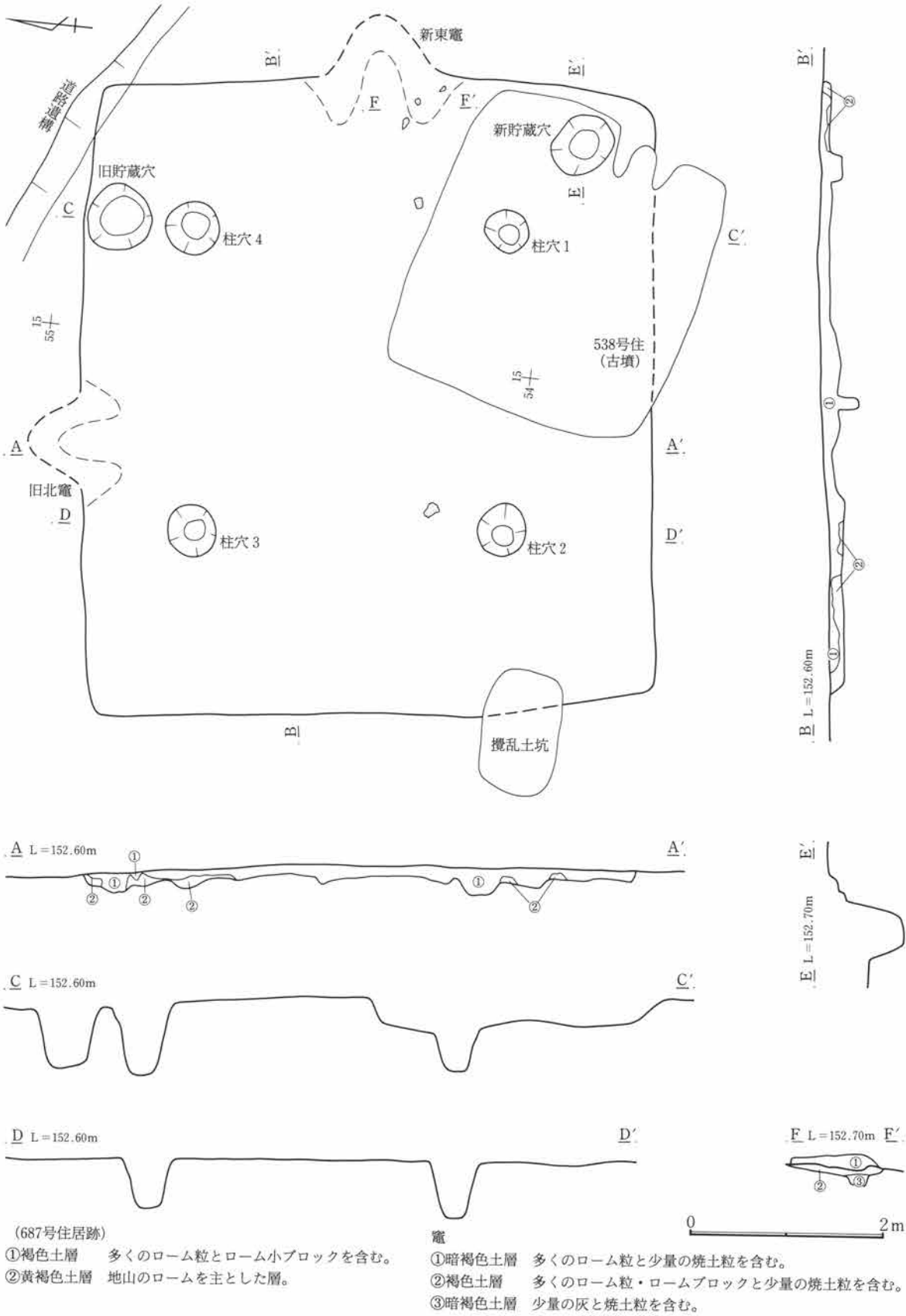
位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、55-15・16グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の538号住居と重複しており、538号住居により本住居の南東部分は床下部分まで掘り込まれていた。住居の残りが非常に悪く、床面の多くと竈の大部分が残っていなかった。竈は焼土粒の出土状況から、東壁中央部と北壁やや西寄りの壁面に造られていたものと思われる。東竈の燃焼部付近に多くの焼土粒と竈に使用されたとと思われる火を受けて崩れかけた石が出土し、また僅かではあるが土器も出土していることにより、東竈が最後まで使用されていた新竈と思われる。出土した焼土粒と床下調査段階で検出された掘り込み等から旧北竈の存在が考えられる。

構造 床面は大部分が残っていなかった。柱穴は多くの小穴が掘られていたため明確でなかったが、床下調査段階で確認された4本の小穴を柱穴と推定した。新東竈の右側に掘られていた小穴が新貯蔵穴で、旧北竈の右側の小穴が旧貯蔵穴であると思われる。

規模 東西6.44m、南北5.90mである。壁高はほとんど残っていなかった。柱穴1は径44cm深さ78cm、柱穴2は径50cm深さ66cm、柱穴3は径50cm深さ57cm、柱穴4は径56cm深さ81cmである。新貯蔵穴は径64cm深さ72cm、旧貯蔵穴は径64cm深さ71cmである。

遺物 破片が僅かに出土している。

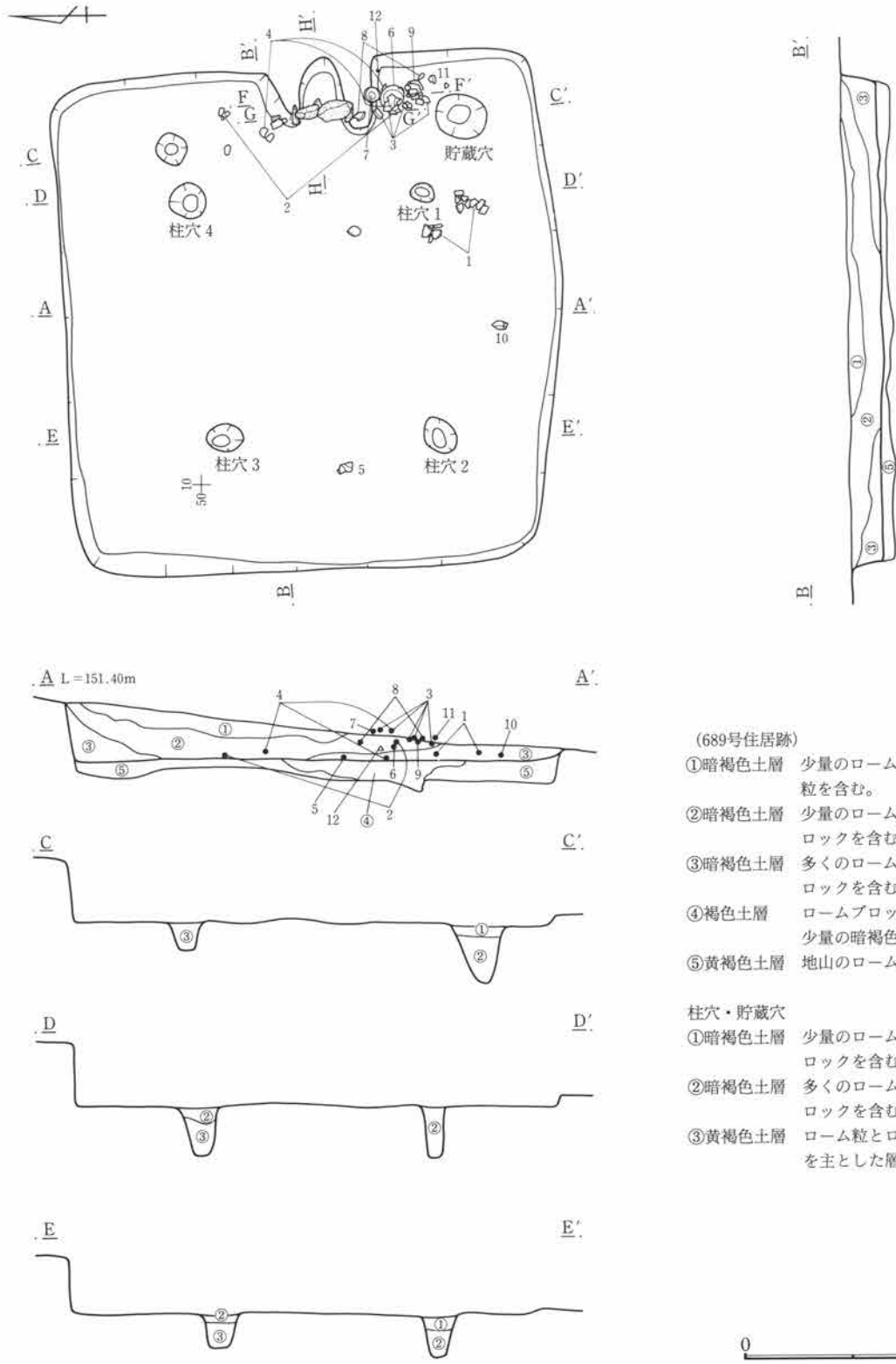


第387図 687号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

689号住居跡 (第388~392図、図版57・58・102・108)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、50-11グリッドに位置する。

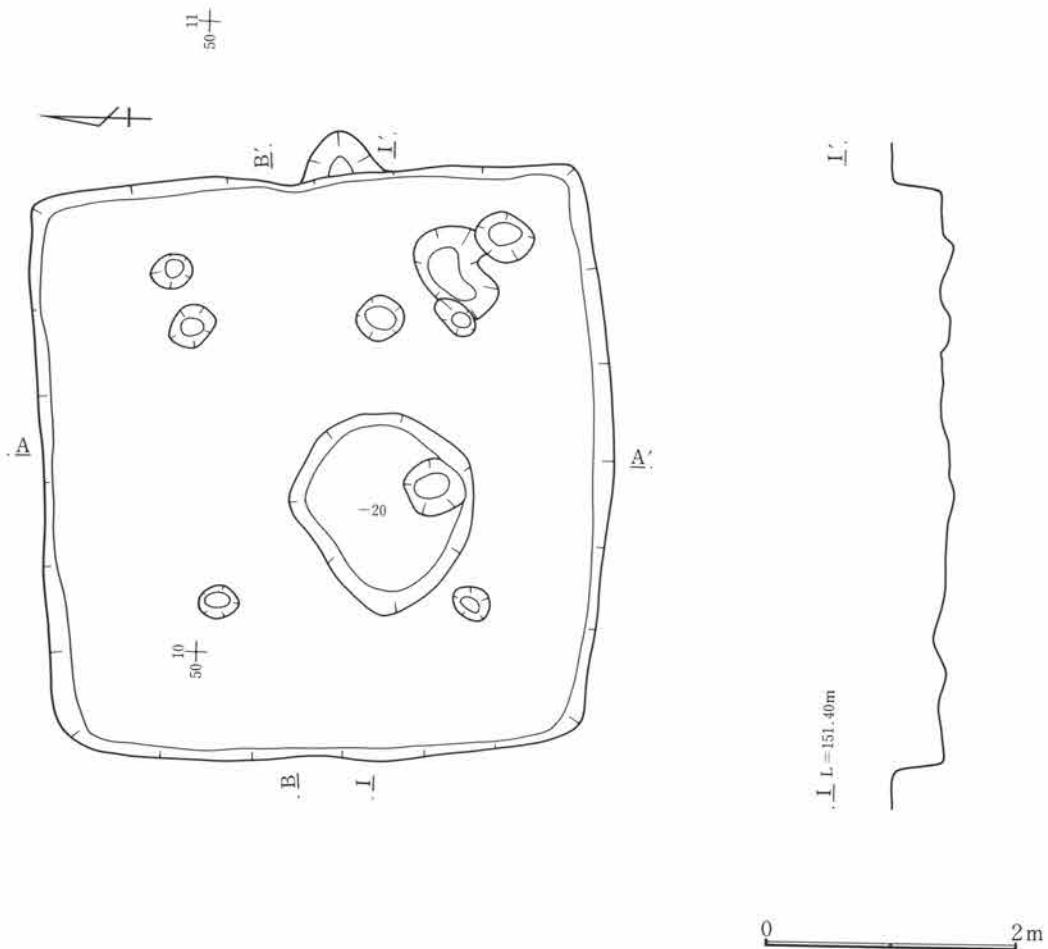


第388図 689号住居跡実測図

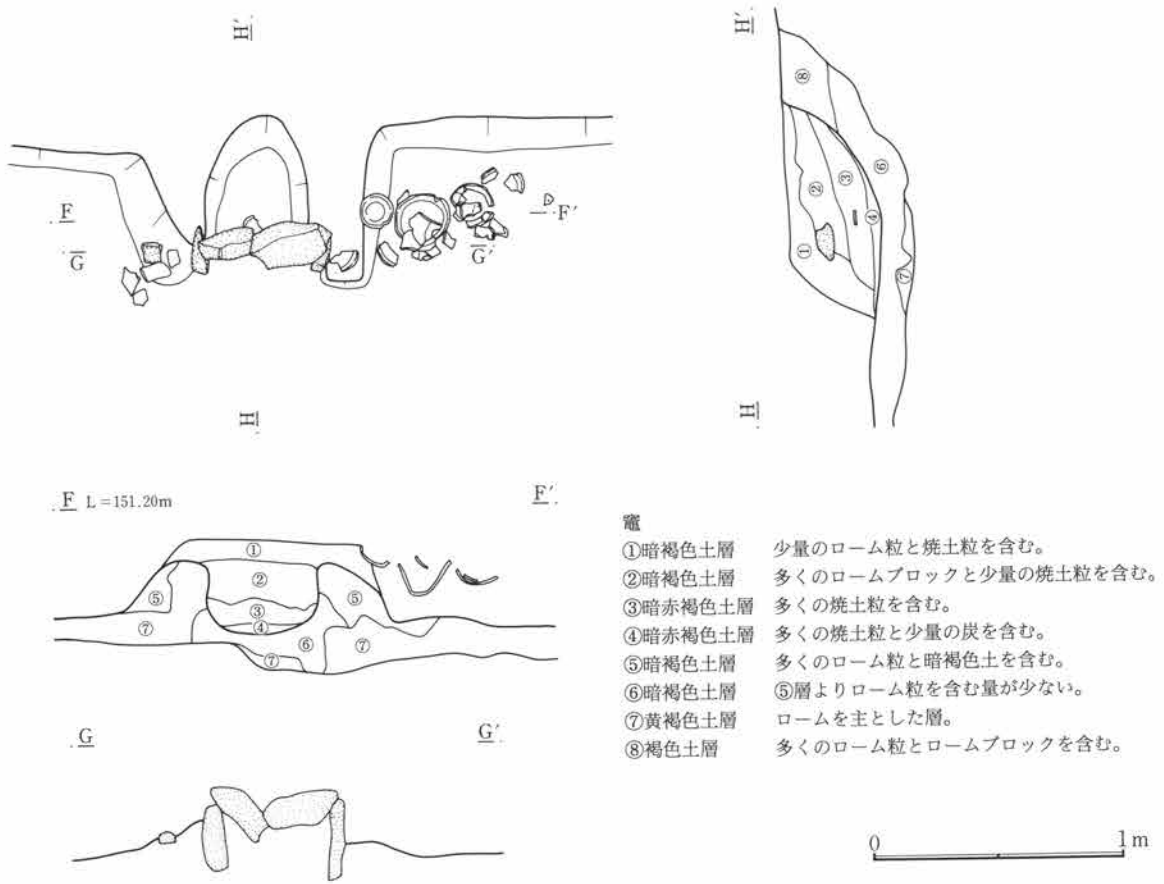
- 概要** 他の住居や溝と重複していない住居であるが、南側の低くなる緩やかな傾斜面に造られているため、北側の残りは良好であるが、南側の壁面は削り取られ残りが悪かった。
- 構造** 床面はロームを主とした土と僅かな暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、柱穴4の東に柱穴に似た浅い小穴が掘られていたが、用途は不明である。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。
- 規模** 東西4.52m、南北4.50mである。壁高は残りの良い北壁部分で55cmである。柱穴1は径22cm深さ50cm、柱穴2は径32cm深さ42cm、柱穴3は径34cm深さ34cm、柱穴4は径36cm深さ38cmである。貯蔵穴は径48cm深さ55cmである。
- 床下** 床面下に床下土坑が掘られていた。
- 遺物** 竈袖石の近くに多くの土師器の甕や坏がまとまって出土している。

(竈)

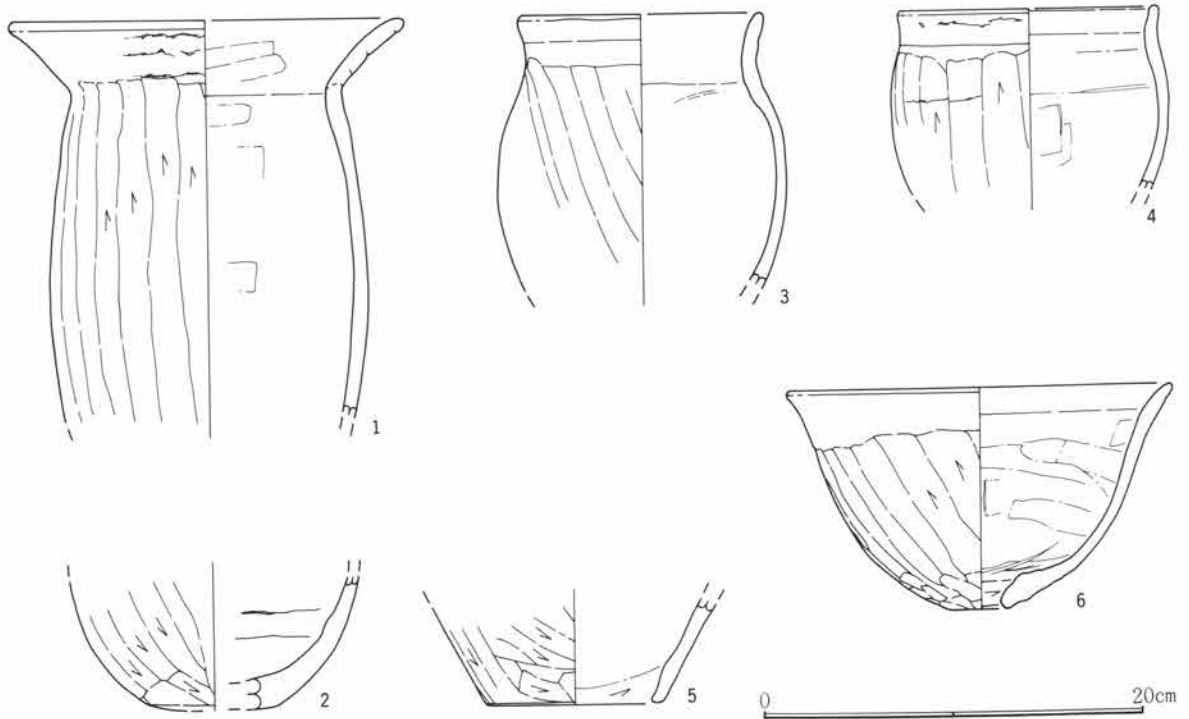
- 位置** 住居東壁南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。
- 構造** 両袖石がほぼ使用時の状態で、その上に架けられた天井石の中央部が割れて焚口部に落ちかけている状態で発掘された。竈右袖の外側部分には、竈の上からこぼれ落ちたようにほぼ完形の坏が3個体出土したが、竈内に甕や支脚石は残されていなかった。竈内から多くの焼土粒が出土した。
- 規模** 煙道方向64cm、燃烧部幅45cmである。



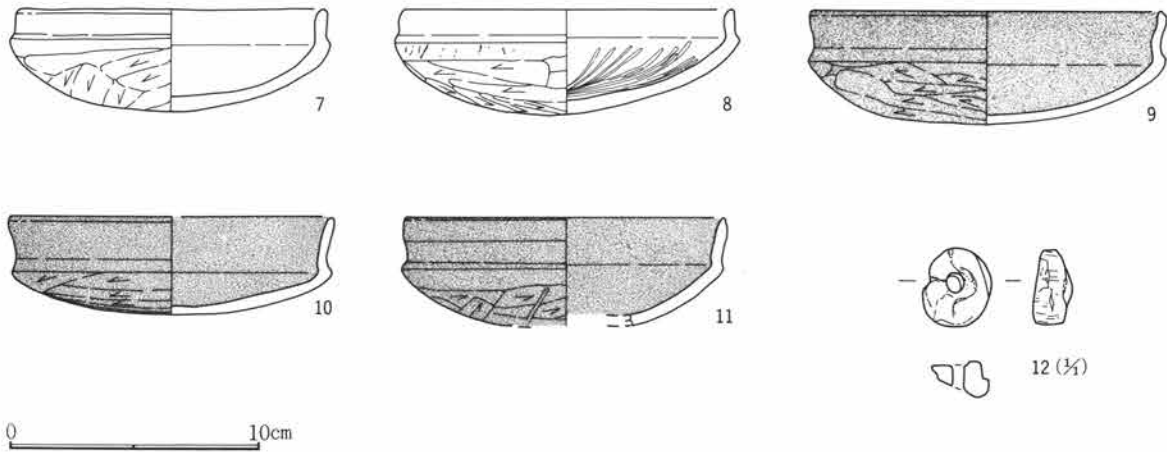
第389図 689号住居跡床下実測図



第390図 689号住居跡竈実測図



第391図 689号住居跡出土遺物実測図(1)



第392図 689号住居跡出土遺物実測図(2)

689号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
391-1 102	土 師 器 甕	床面+5 口縁~胴上 部1/3残存	口(21.0) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
391-2	土 師 器 甕	床面直上 覆土、胴下 2/3 底部1/4	口 — 高 — 底(7.0)	①粗、3~4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面弱いヘラ削り。器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密。
391-3	土 師 器 小型甕	床面+12 1/3残存	口(13.0) 高 — 底 —	①やや粗②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴外面強いヘラ削り。砂粒が多く移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
391-4	土 師 器 小型甕	床面+2 覆土 1/3残存	口(13.8) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③灰褐色	胴外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが器表面は粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。粗雑な質感の甕である。
391-5	土 師 器 甕	床面+3 底部片	口 — 高 — 底(9.4)	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴下端部ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。胴内側下端部ヘラ削り。
391-6 102	土 師 器 小型甕	床面+10 ほぼ完形	口 20.4 高 11.7 底 3.1	①粗、2~5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。底面に径3.7cmの小穴が穿孔されている。
392-7 102	土 師 器 坏	床面+23 完形	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。ヘラの単位は比較的明瞭である。黒斑がわずかに認められる。
392-8 102	土 師 器 坏	床面+20 1/3残存	口 13.2 高 4.1 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面弱いヘラ削り。器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ後放射状のヘラ磨き。
392-9 102	土 師 器 坏	床面+15 覆土 1/3残存	口 14.0 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
392-10 102	土 師 器 坏	床面+6 覆土 1/3残存	口(12.8) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
392-11 102	土 師 器 坏	床面+18 口縁部2/3 底部1/3残存	口 12.3 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭による黒色。
392-12 108	石 製 品 白 玉	覆土 一部欠損	径 1.0 孔径 0.2 厚 0.5 重 0.5 ③灰白色		滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離し後、無調整。製作段階ですでに一部は欠損していたものと思われる。

690号住居跡 (第393～395図、図版58・59)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、54-4グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の691号住居と西側部分で重複しており本住居が新しい。重複部分では本住居が691号住居の床面上約25cmの覆土上面を掘り込んでいる。691号住居に近い規模の住居であるが、本住居には柱穴は掘られていなかった。

構造 床面はロームを主とした土と僅かな暗褐色土の混入した土で造られていた。691号住居の覆土を床面としている部分は、踏み固めて良好な床面としていた。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.71m、南北3.35mである。壁高は残りの良い北壁部分で17cmである。貯蔵穴は径44cm深さ31cmである。

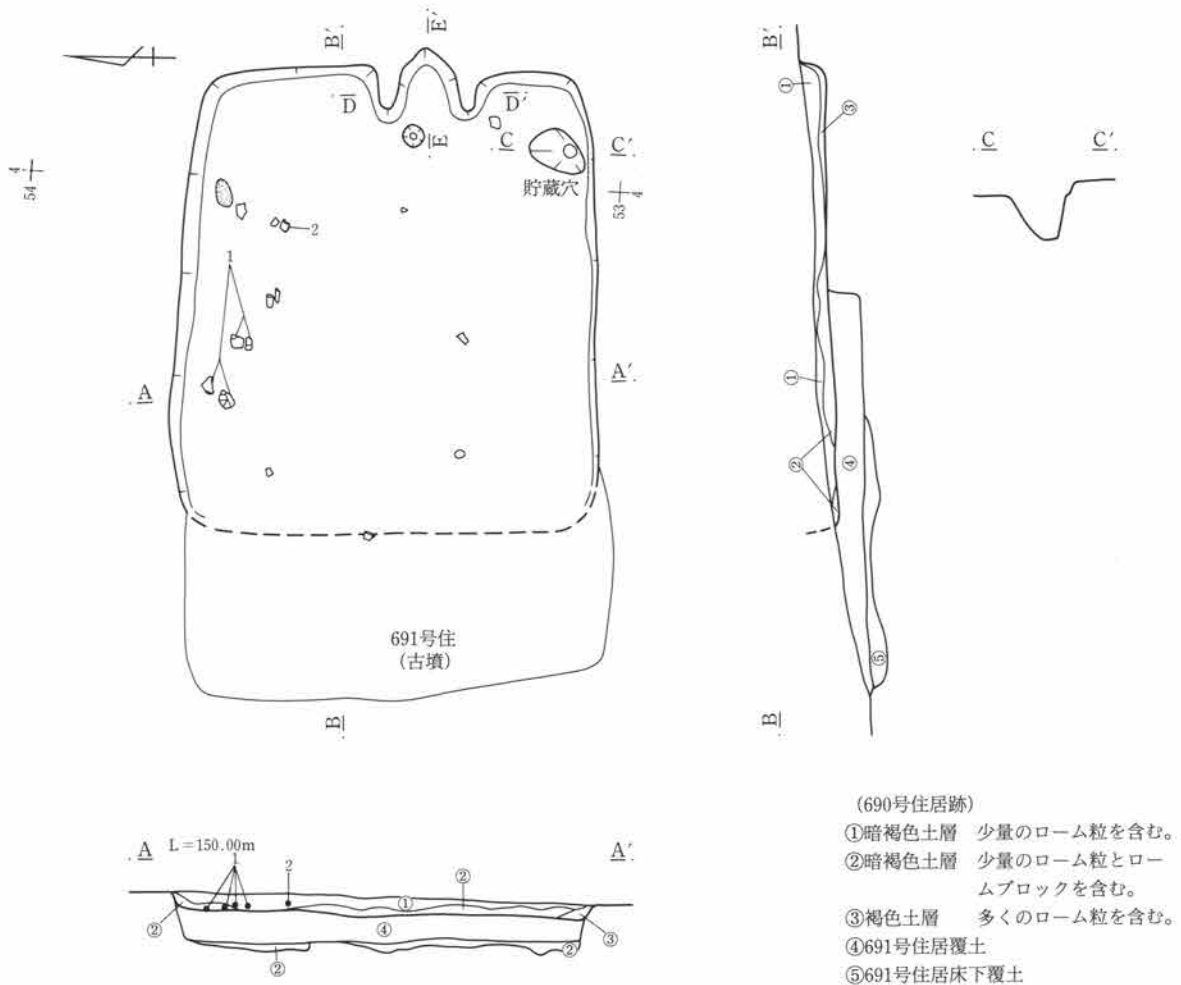
遺物 北壁面に近い床面付近から土師器の甕が出土している。覆土中より甕の破片も多く出土している。

(竈)

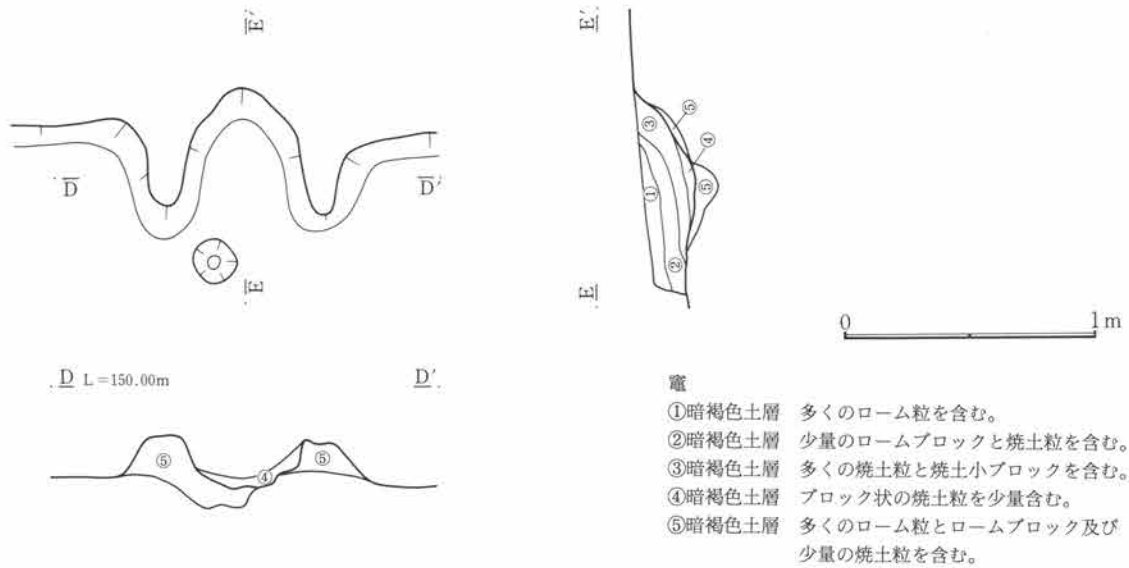
位置 住居東壁やや南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りは悪く上面は耕作により削り取られていた。竈内より石の出土はなく、多くのロームブロックを用いて袖部は造られていた。竈内より焼土粒が出土したが、多くはなかった。

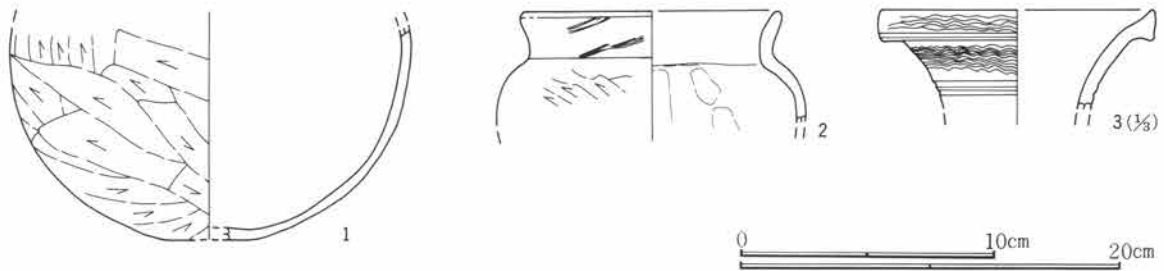
規模 煙道方向58cm、燃烧部幅46cmである。



第393図 690号住居跡実測図



第394図 690号住居跡竈実測図



第395図 690号住居跡出土遺物実測図

690号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
395-1	土 節 器 壺	床面+3 胴部下半~ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 - 高 - 底 (5.0)	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面へら削り。胴外面へら削り。砂粒の移動は少ないが器表面は粗い。内面ナデにより器表面密。 2~3mmの砂粒をわずかに含む。
395-2	土 節 器 小型 甕 破片	床面+2 口縁~胴部 破片	口(13.8) 高 - 底 -	①密、砂粒はほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	胴部外面へら削り。粘土がササラ状に移動し器表面やや粗い。口縁部にへらの圧痕あり。内面ナデ。 光沢を持つ雲母状の粒子を多く含む。
395-3	須 恵 器 小型 壺 破片	覆土 破片	口(10.8) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③にぶい赤褐色・一部灰色	口縁部波状文。口縁部下端に1条の沈線、頸部に波状文と2本の沈線あり。 小破片のため器種名不明。壺類の一種と思われる。

691号住居跡 (第396~398図、図版58・59・102)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、54-4グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の690号住居と東側部分で重複している。690号住居が本住居の床面上約25cmの位置に造られている。そのため竈の上面は削り取られており、690号住居の床面に本住居の竈の痕跡は僅かしか認められなかった。そのため本住居は690号住居より古い。また本住居は西側の低くなる緩やかな傾斜面に造られているため、西側は耕作により削られ残りが悪かった。

構造 床面はロームを主とした土と僅かな暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、竈右側に貯蔵穴が掘られていた。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 東西3.28m、南北3.43mである。壁高は残りの良い北壁部分で37cmである。柱穴1は径32cm深さ48cm、柱穴2は径31cm深さ66cm、柱穴3は径31cm深さ62cm、柱穴4は径32cm深さ48cmである。貯蔵穴は径48×64cm深さ49cmである。

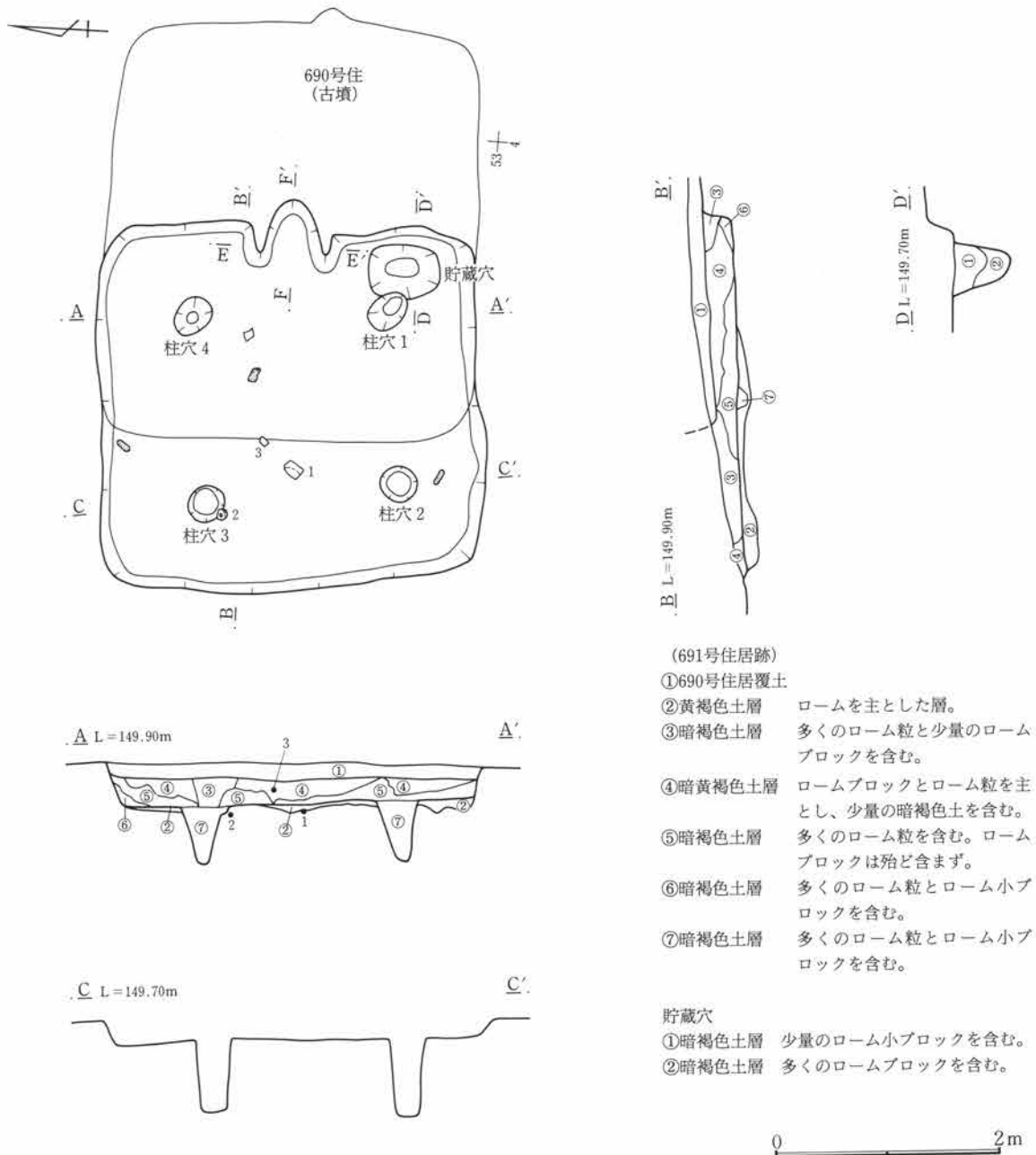
遺物 出土量が少なく図示した遺物のほかは、破片6片で全てである。

(竈)

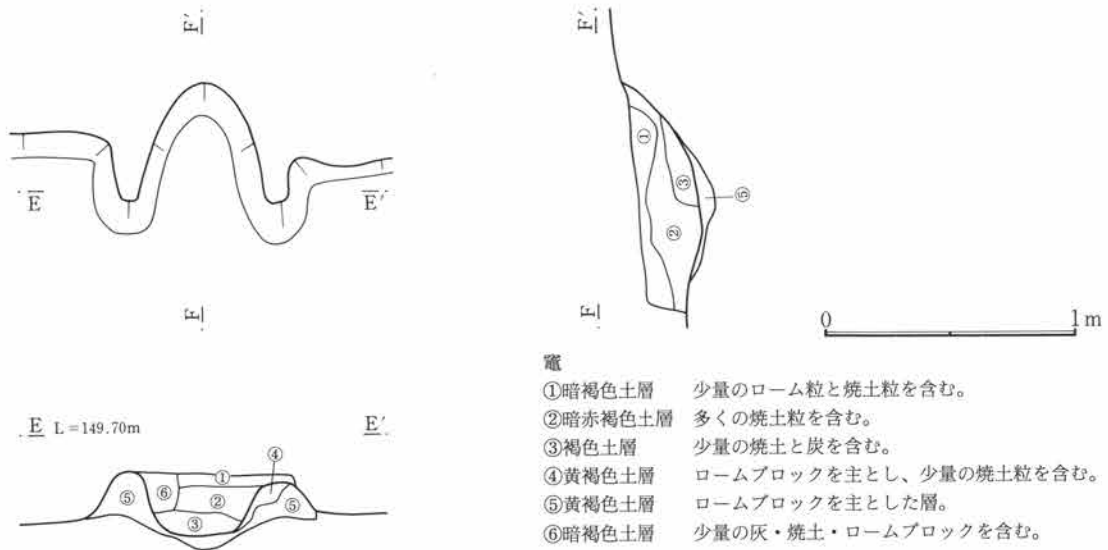
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 上面は690号住居により削り取られていた。竈内より石の出土はなく、多くのロームを用いて造られていた。竈内より多くの焼土粒が出土した。

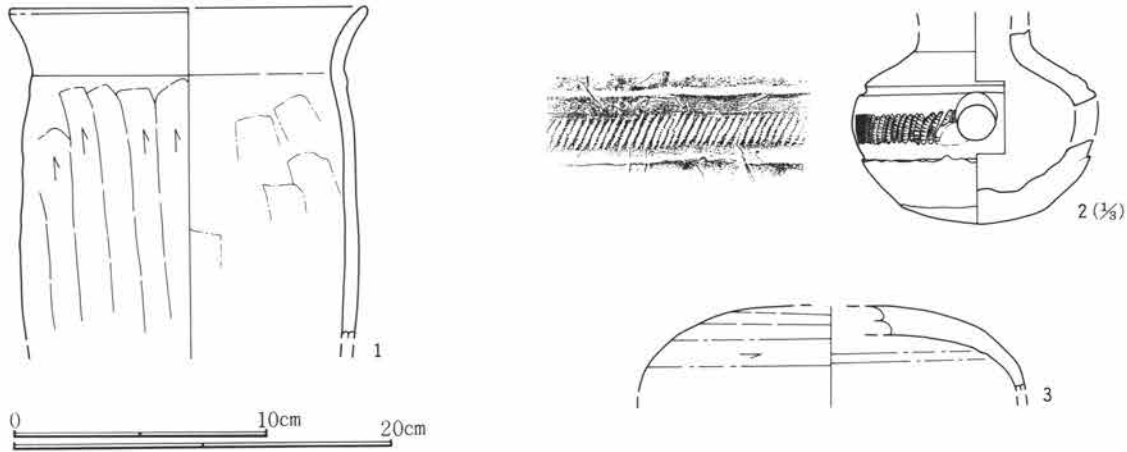
規模 煙道方向64cm、燃焼部幅46cmである。



第396図 691号住居跡実測図



第397図 691号住居跡竈実測図



第398図 691号住居跡出土遺物実測図

691号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
398-1	土師器 甕	覆土 破片	口(18.8) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色・一部灰白色	胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。
398-2 102	須恵器 甗	床面+3 体部~底部 完形	口— 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部へラ削り。体部には2本の凹線によって区画した間に、櫛描き列点文を巡らした文様帯あり。589住25の甗によく似ている。
398-3	須恵器 蓋	床面+18 破片	摘— 高— 口—	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部全面右回転へラ削り。

692号住居跡 (第399~403図、図版59・102・103)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、54-13グリッドに位置する。

概要 他の住居や溝と重複していない住居であるが、覆土上面の多くは攪乱されており残りは良好でない。床面調査段階で新西竈は確認されたが、東竈は袖部のすべてが取り除かれており確認できなかった。床下調査により東壁中央部が少し掘り込まれており、焼土粒も僅かに出土していた。また床下部分からも多くの竈の掘り方に伴う掘り込みが確認され、旧東竈の存在が明らかになった。

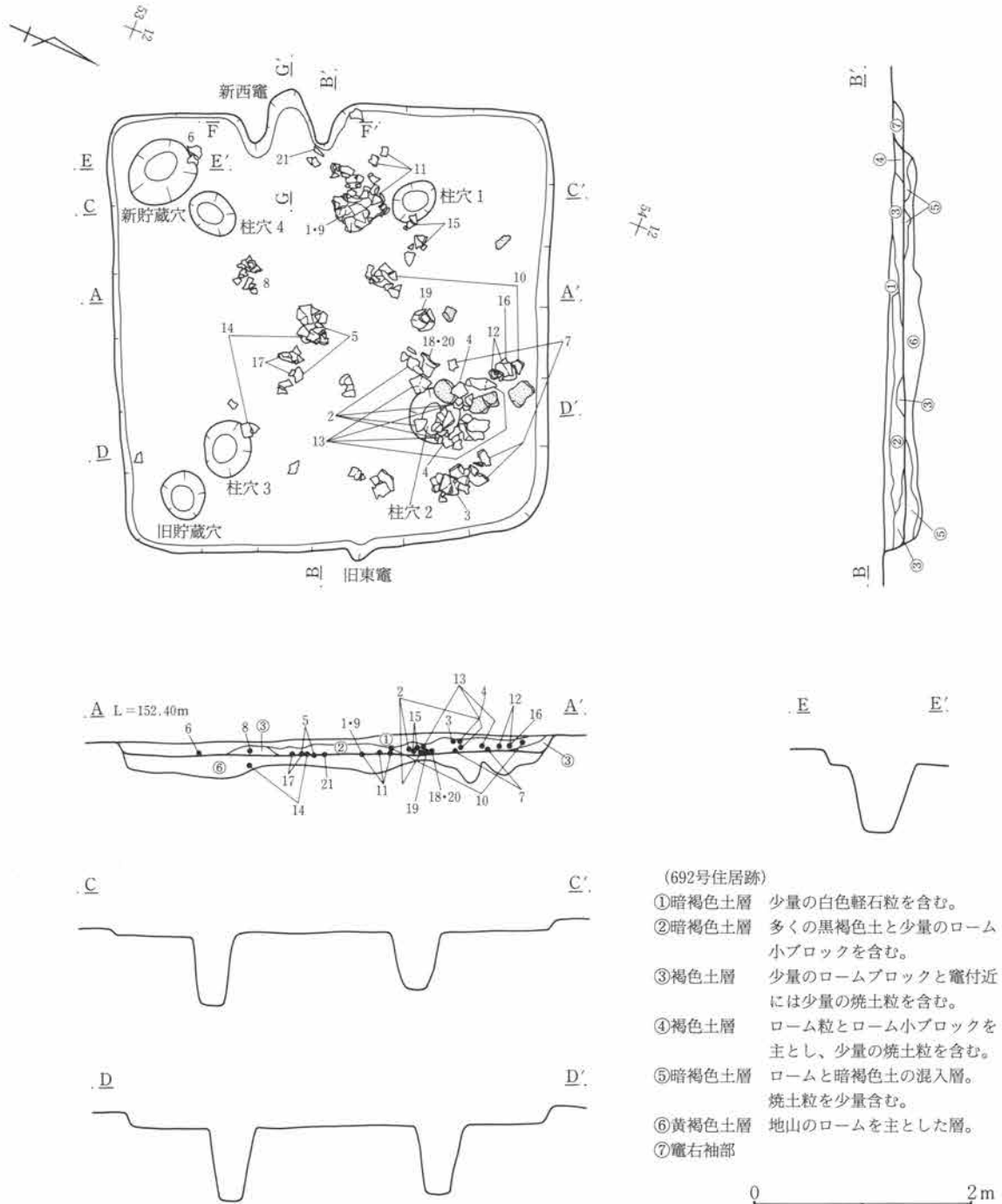
第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はロームと僅かな焼土粒の混入した暗褐色土で造られていた。柱穴が4本掘られており、新西竈に伴うと思われる新貯蔵穴が竈左側に、旧東竈に伴う旧貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

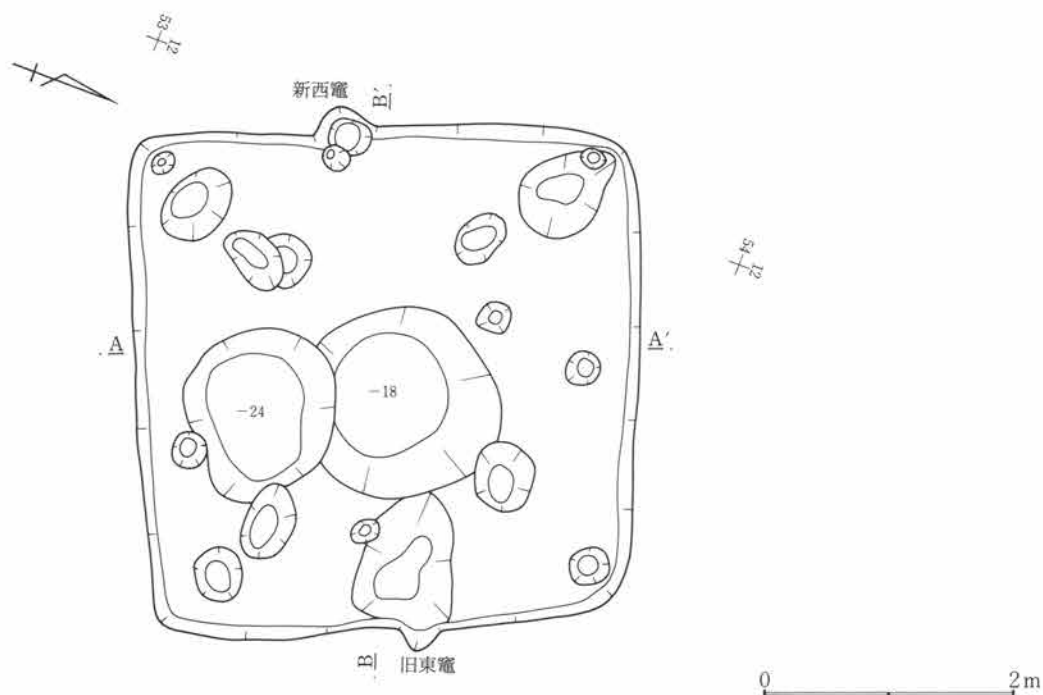
規模 東西4.04m、南北4.00mである。壁高は残りの良い東壁部分で17cmである。柱穴1は径40cm深さ52cm、柱穴2は径46cm深さ61cm、柱穴3は径42cm深さ69cm、柱穴4は径40cm深さ67cmである。新貯蔵穴は径64cm深さ74cm、旧貯蔵穴は径40cm深さ65cmである。

床下 床面下に床下土坑が2基、また多くの小穴が掘られていた。

遺物 床面に近い状態で多くの土師器の甕や坏が出土している。



第399図 692号住居跡実測図



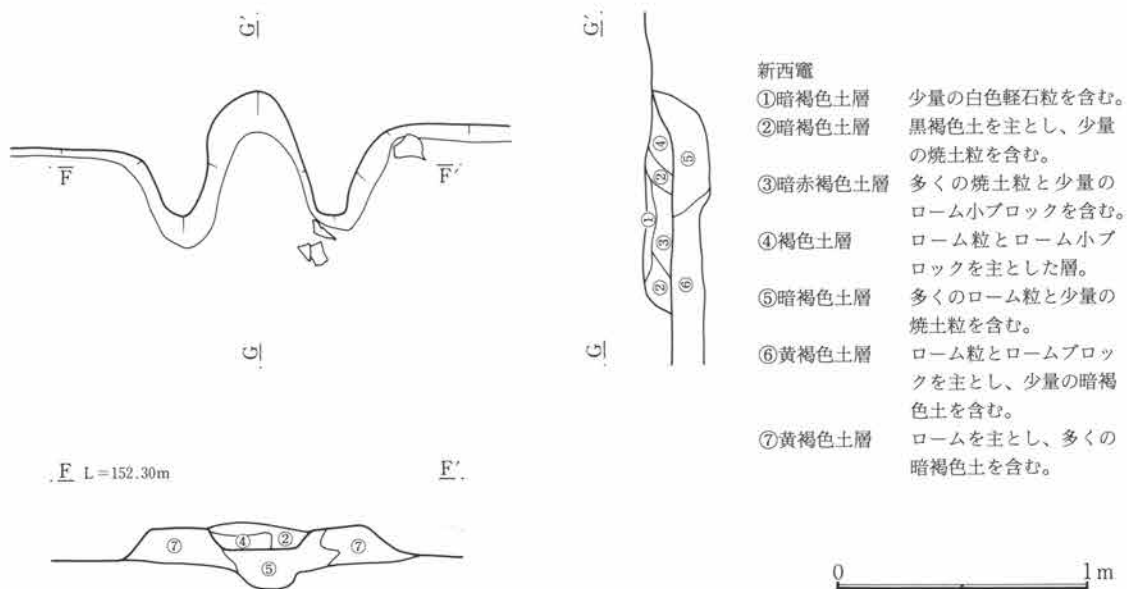
第400図 692号住居跡床下実測図

(新西竈)

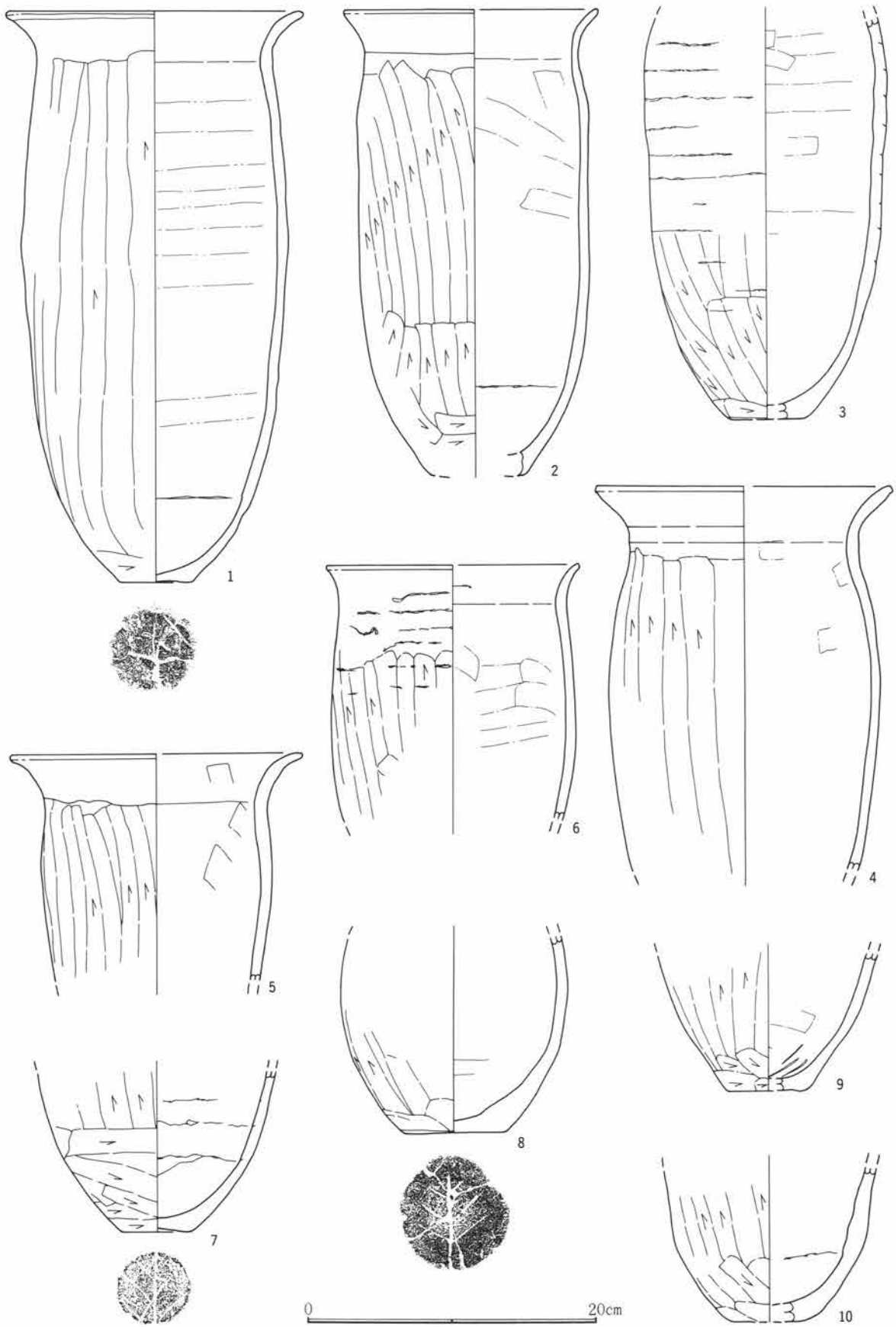
位置 住居西壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 左袖石がほぼ使用時の状態を示しているが、右袖の石は少し外側に移動されていた。天井部として使われた部材は不明である。竈覆土上面には住居の覆土が多く堆積しているため、竈上面は多くの部分が削り取られていた。そのため燃焼部床面付近には焼土粒が検出されたが、覆土全体の焼土粒の出土量は少なかった。

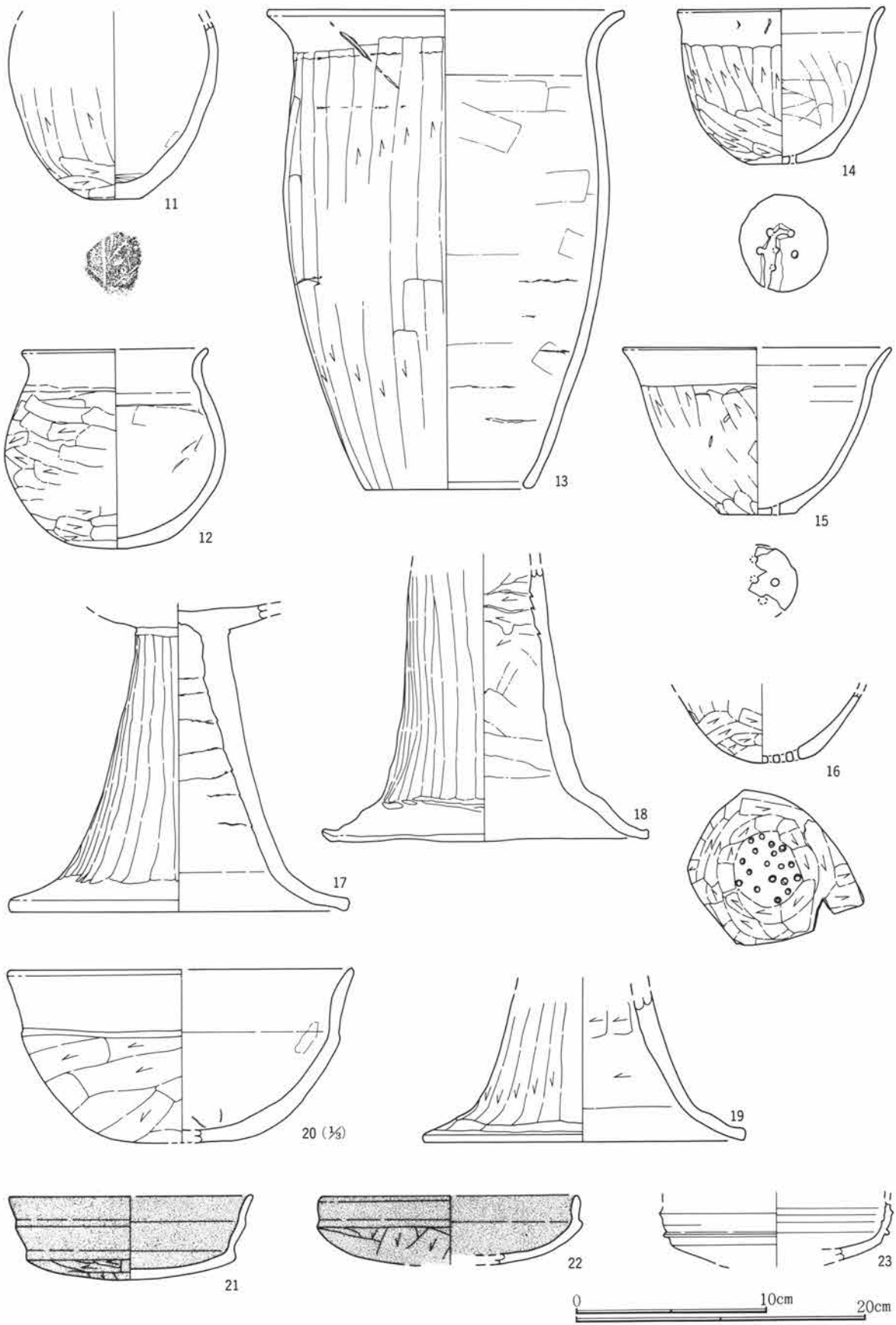
規模 煙道方向75cm、両袖方向95cmである。



第401図 692号住居跡新西竈実測図



第402図 692号住居跡出土遺物実測図(1)



第403図 692号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

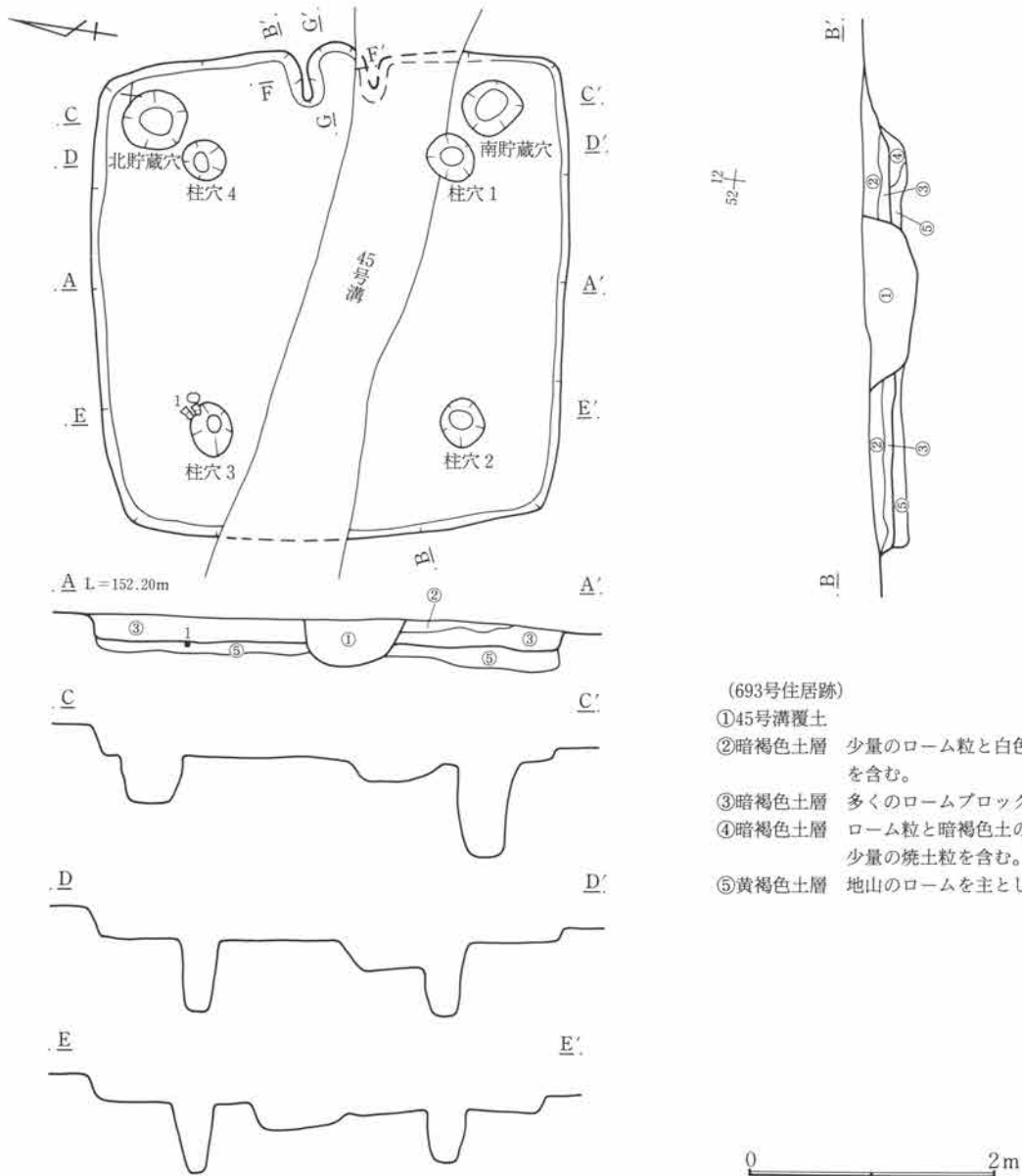
692号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
402-1 102	土 師 器 甕	床面直上 1/2残存	口 20.7 高 39.4 底 5.0	①粗、2～5mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・胴部外面下半褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。多くの砂粒が目立つ。 長胴の甕である。底部を含め器肉が薄い。
402-2 102	土 師 器 甕	床面+3 1/2残存	口(17.6) 高 32.9 底 (6.8)	①やや粗、2～3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴部下1/2黒褐色	胴部弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。外面胴部下半に多くの粘土が付着している。内面ナデにより器表面密。 器肉の薄い甕である。
402-3	土 師 器 甕	床面+7 胴部1/2 底部1/2残存	口 — 高 — 底 (5.4)	①粗、1mm内外の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③胴部外面下半黒褐色・他にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削りにより多くの砂粒が移動し器表面粗い。多くの輪積痕が残る。 内面ナデにより器表面密。
402-4 102	土 師 器 甕	床面+10 口縁1/4胴上 部1/2下部1/2	口(20.6) 高 — 底 —	①粗、2～4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が器表面に目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
402-5 103	土 師 器 甕	床面+1 口～胴上部 1/2残存	口(20.7) 高 — 底 —	①粗、3～4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面弱いヘラナデ。数多くのヘラでていねいに撫でている。器表面の粗れは少ない。 内面の多くは黒褐色を呈している。
402-6	土 師 器 甕	床面+8 破片	口(18.0) 高 — 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、上半ナデで多くの輪積痕が残る。 内面ナデにより器表面密。
402-7	土 師 器 甕	床面+4 胴下半1/4 底部完形	口 — 高 — 底 5.0	①粗、1～2mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・底部黒色	底面木葉痕。胴部外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにより器表面密。
402-8 103	土 師 器 甕	床面+3 胴部1/2 底部完形	口 — 高 — 底 7.5	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面灰褐色・外面橙色と黒色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデか。器表面が粗く砂粒が多く、ヘラの単位不明瞭。内面ナデ。
402-9	土 師 器 甕	床面直上 胴～底部1/2 残存	口 — 高 — 底 5.6	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。 内側底部付近にヘラの圧痕あり。
402-10 103	土 師 器 甕	床面+3 胴下半～底 部1/2残存	口 — 高 — 底 (5.5)	①やや粗、1mm前後の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面と内面灰色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削りにより多くの砂粒が移動し、器表面がきわめて粗い。内面ナデにより器表面密。
403-11 103	土 師 器 小型甕	床面直上 胴下半1/2 底部完形	口 — 高 — 底 3.6	①粗、1～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③外面明赤褐色・内面にぶい橙色	底面木葉痕。胴部外面強いヘラ削り。多くの砂粒が目立ち器表面粗い。内面ナデにより器表面密。
403-12 103	土 師 器 小型甕	床面+3 口縁～胴部 1/2底部完形	口(13.2) 高 13.6 底 7.5	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。器表面の粗れは少ない。 口縁部横ナデ。 底部はヘラ削りにより広くなり、胴部との境に段差なし。
403-13 103	土 師 器 甕	床面+6 1/2残存	口(24.8) 高 33.7 底(11.6)	①やや粗、2～3mmの砂粒と片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動少なく一部光沢を持つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴部下端ヘラ削り。胴部外面の一部吸炭により黒色を呈している。
403-14 103	土 師 器 小型甕	床面+5 口縁部1/4 底一部欠損	口 14.5 高 10.7 底 6.2	①やや粗、1～2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。一部欠損しているが、6個の小穴が確認できる。胴部外面ヘラ削り。内面ナデにより器表面密。 ていねいなつくりの甕である。
403-15 103	土 師 器 小型甕	床面+6 1/2残存	口(18.6) 高 11.8 底 (5.4)	①密、わずかに砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底面に4個の小穴が確認される。
403-16 103	土 師 器 小型甕	床面+4 底部1/2残存	口 — 高 — 底 6.0	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下半ヘラ削り。底部に18個の小穴が穿孔されている。
403-17 103	土 師 器 高 坏	床面+1 脚部1/2残存	口 — 高 — 底 18.0	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。砂粒の移動少なく器表面密。内面上部ナデ、下部ヘラ削り後ナデ。 脚部内面に多くの輪積痕が残る。
403-18 103	土 師 器 高 坏	床面直上 脚上半～下 端部ほぼ完	口 — 高 — 底 17.2	①やや粗、2～3mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	脚筒部外面ヘラナデ。下端部横ナデ。内面ヘラ削り後下部横ナデ。上部はヘラ削り後横ナデなし。 脚筒部内面上部に輪積の痕跡が残る。
403-19 103	土 師 器 高 坏	床面直上 脚下部ほぼ 完形	口 — 高 — 底 17.0	①密、1mm以下の砂粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面ヘラ削りにより輪積痕を消している。 器肉は薄く削られている。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
403-20 103	土師器 鉢	床面直上 1/3残存	口(18.4) 高— 底丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・底部外面の一部黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面がやや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
403-21 103	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(12.8) 高4.3 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面強いヘラ削り。砂粒の移動は少ないが器表面やや粗い。口縁部中段に稜を持つ。口唇部平らでやや内傾。口縁部外面～内面黒漆。底面吸炭による黒色。
403-22 103	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(13.6) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面灰色	底面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部外面黒漆。内面と底面の黒は吸炭による。断面観察により口縁部外面のみ黒漆の可能性大である。
403-23	須恵器 無蓋高坏	覆土 破片	口— 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面橙色	細く高い稜を下半に、上半にやや低い稜を持つ。小破片であるが無蓋高坏の坏部か？

693号住居跡 (第404～407図、図版59・103)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、53-12グリッドに位置する。



第404図 693号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

概要 住居中央を東西方向に流れる45号溝により、床下土坑部分まで深く掘り込まれている。この溝により竈の右袖部分も削り取られていた。

構造 床面はロームと暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。竈左側にも貯蔵穴と思われる小穴が掘られていたため、2つの貯蔵穴をもつ住居の可能性が認められる。右側を南貯蔵穴、左側を北貯蔵穴として扱った。

規模 東西3.82m、南北3.80mである。壁高は残りの良い北壁部分で24cmである。柱穴1は径38cm深さ61cm、柱穴2は径35cm深さ46cm、柱穴3は径34cm深さ56cm、柱穴4は径35cm深さ57cmである。南貯蔵穴は径47cm深さ75cm、北貯蔵穴は径53cm深さ33cmである。

床下 柱穴や貯蔵穴のほかに小穴が掘られていた。

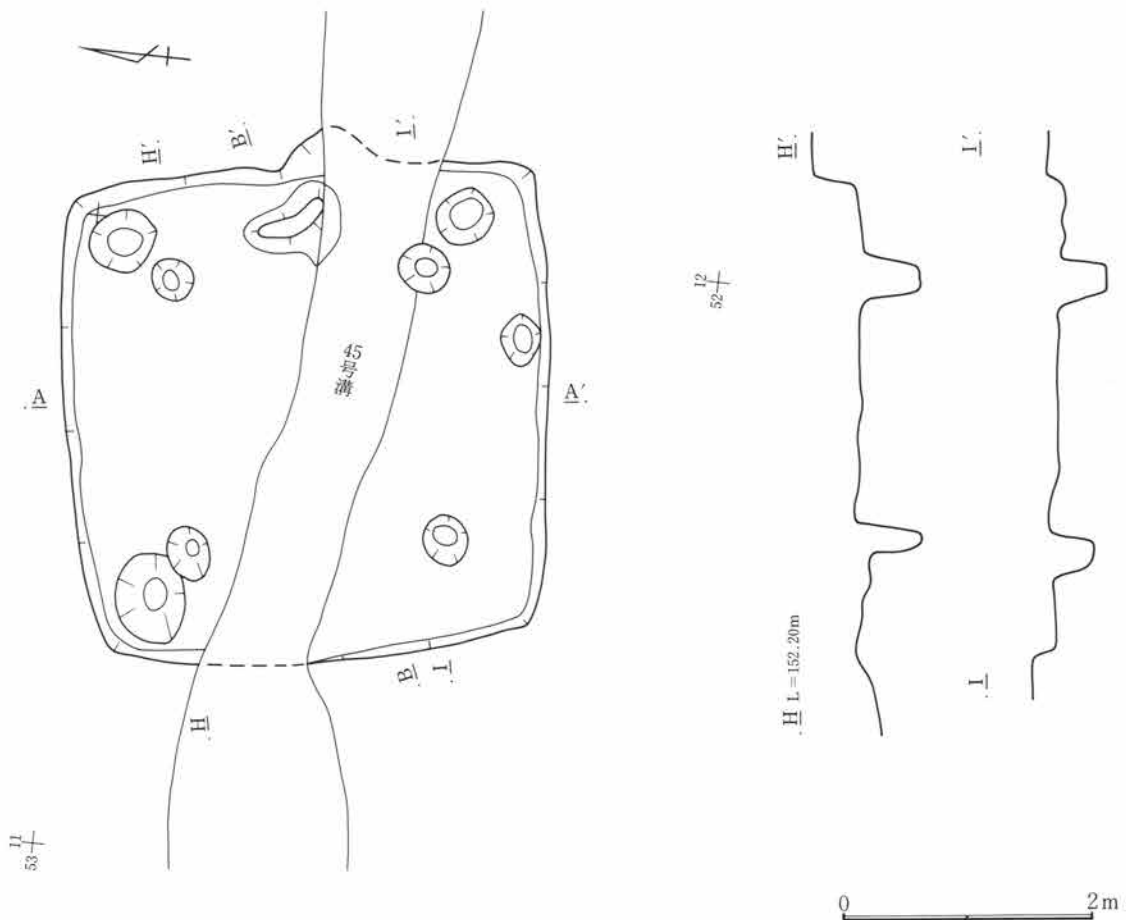
遺物 出土量が少なく、図示できたのは土師器の坏2点である。

(竈)

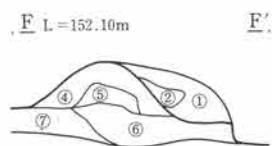
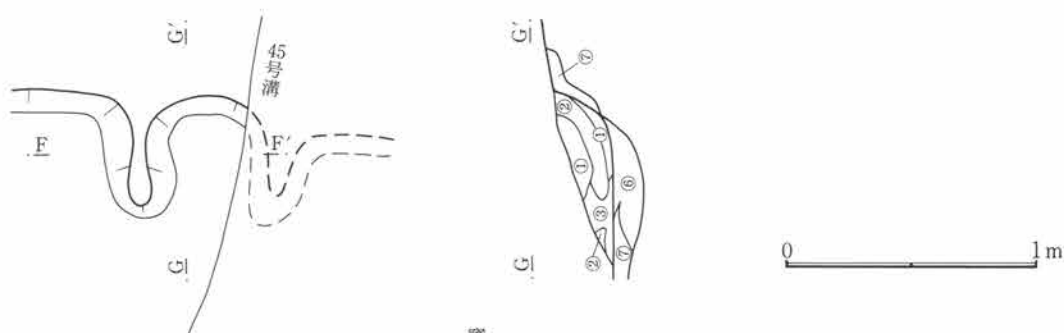
位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 右袖部分は45号溝により削り取られており、煙道部も多くが残っていない残りの悪い竈であった。竈内より石は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈と思われる。

規模 煙道方向52cm、燃烧部幅推定35cmである。

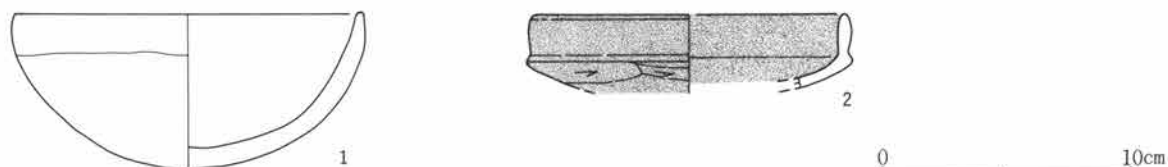


第405図 693号住居跡床下実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム小ブロックを含む。焼土粒は含まず。
 - ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ③褐色土層 多くの大小のロームブロックを含む。
 - ④暗褐色土層 少量のロームブロックと焼土粒を含む。
 - ⑤黄褐色土層 ロームを主とした層。
 - ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
 - ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第406図 693号住居跡竈実測図



第407図 693号住居跡出土遺物実測図

693号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
407-1 103	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.9 高 6.1 底 丸底	①粗、1~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面黒色	底面部分的にヘラ削りの痕跡が残るが、器表面が粗くヘラの単位不明瞭。多くの砂粒が目立つ。 口縁部~内側底面横ナデにより器表面密。
407-2	土師器 坏	覆土 破片	口(12.6) 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面にぶい赤褐色・一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口縁部外面~内側底面黒漆。底部外面吸炭。

694号住居跡 (第408~410図、図版60・104・115)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、52-12グリッドに位置する。

概要 他の住居や溝と重複しない単独で比較的残りの良好な住居である。

構造 床面はロームと僅かな暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。明確な壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.04m、南北4.02mである。壁高は残りの良い北壁部分で30cmである。柱穴1は径34cm深さ63cm、柱穴2は径36cm深さ66cm、柱穴3は径34cm深さ65cm、柱穴4は径34cm深さ55cmである。貯蔵穴は径50cm深さ67cmである。

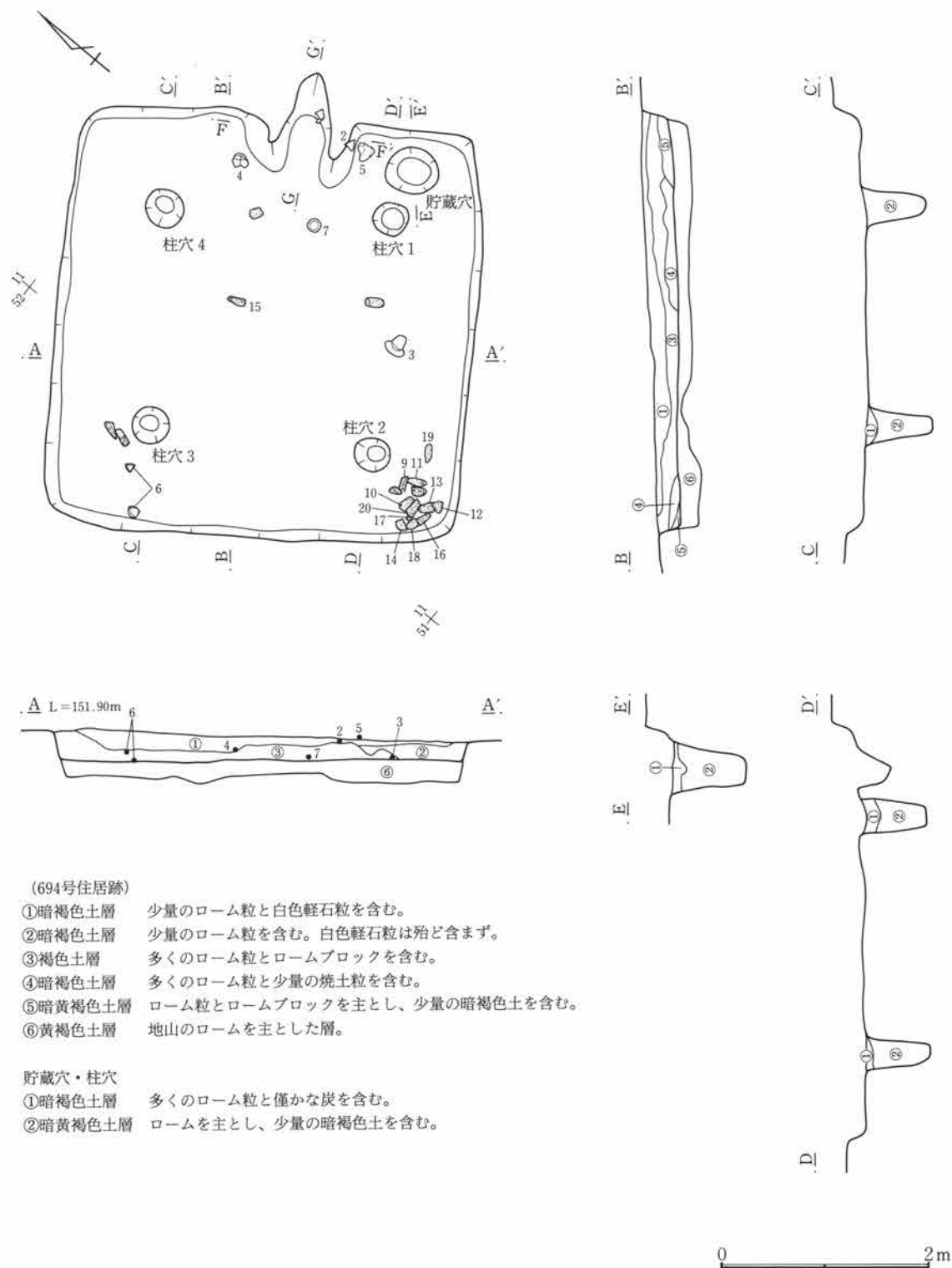
遺物 南西コーナー部分に多くのこも編み石がまとめて出土している。

(竈)

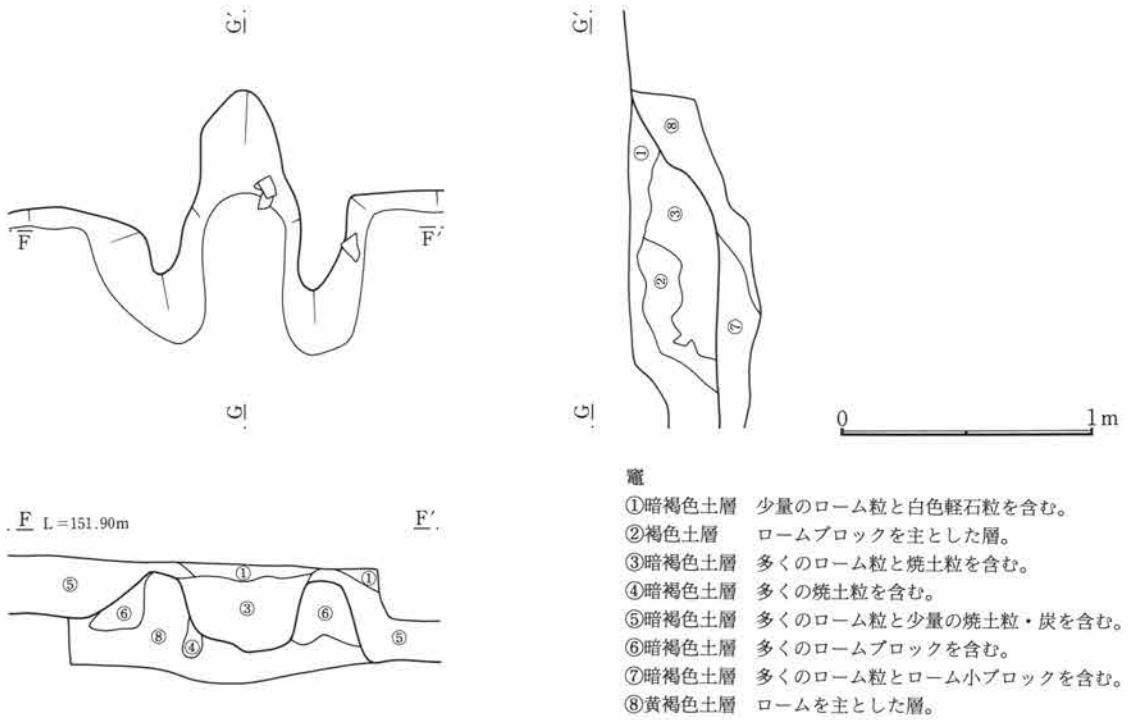
位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

概要 竈内から石は全く出土していなく、多くのロームが袖部を中心に使われており、ロームを主として造られた竈である。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

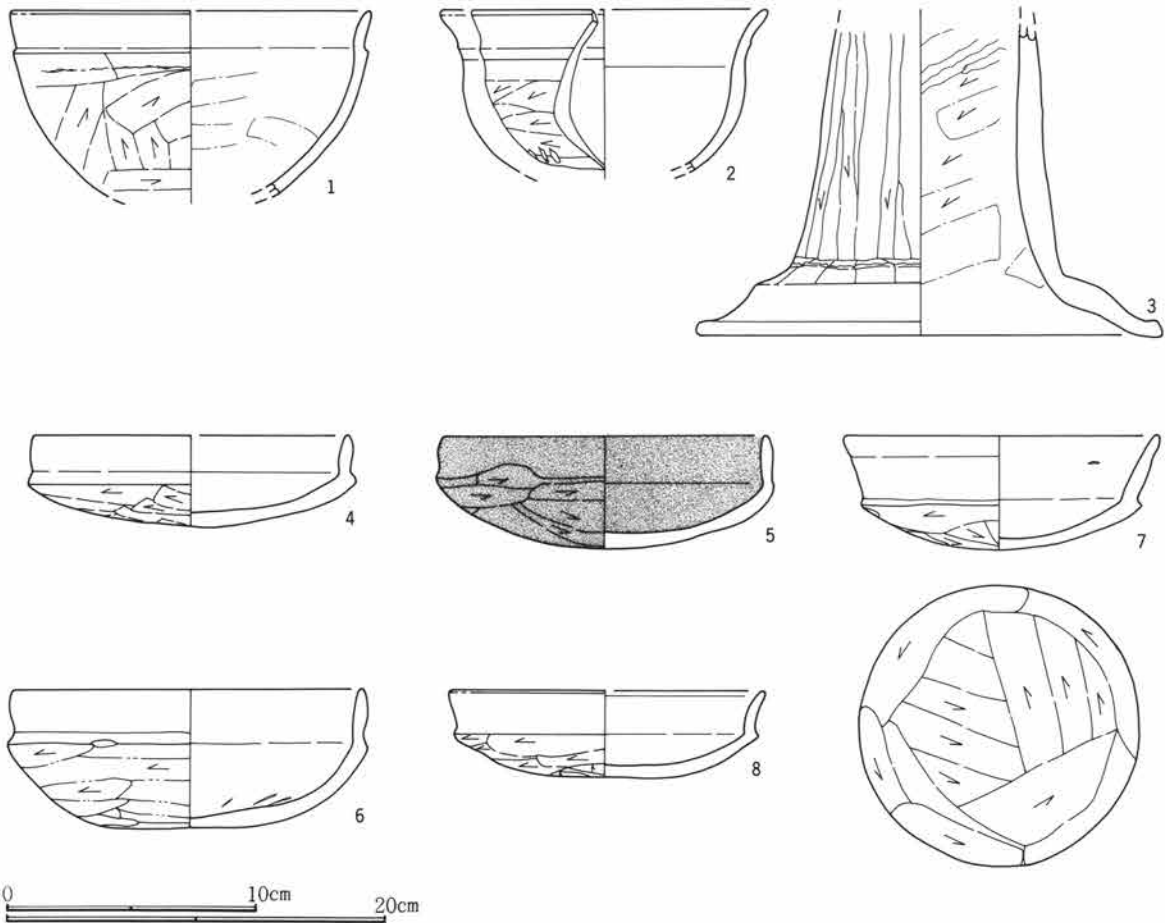
規模 煙道方向102cm、燃烧部幅49cmである。



第408図 694号住居跡実測図



第409図 694号住居跡竈実測図



第410図 694号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

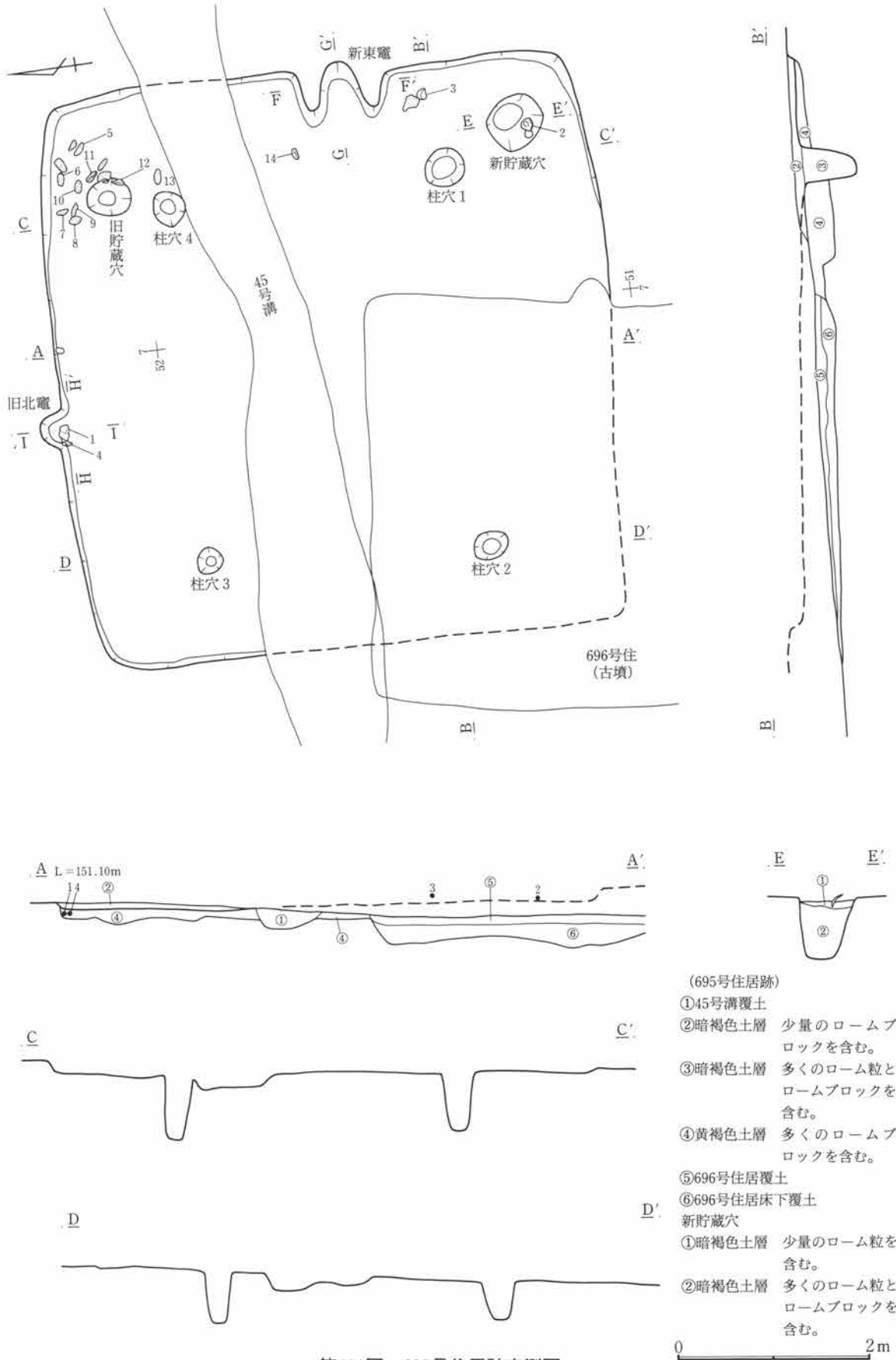
694号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
410-1	土師器 鉢	覆土 破片	口(19.2) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。
410-2	土師器 鉢	竈内+12 破片	口(17.4) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	体部強いへら削り。粘土がササラ状になり器表面がやや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
410-3 104	土師器 高 杯	床面直上 脚下半部 ほぼ完形	口— 高— 底18.4	①密、2~3mmの砂粒をごくわ ずかに含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	筒外面へらナデ。器表面の多くの部分密。下端部横ナデ。 筒内面へら等を用いたへら削り。 太い脚部であり、出土例は少ない。筒部の器内は削りて薄い。
410-4 104	土師器 杯	床面+3 口縁部1/2 底部1/2残存	口(12.6) 高3.6 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにより器表面密。 黒斑全く認められない。
410-5 104	土師器 杯	床面+7 1/2残存	口13.0 高4.4 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面橙色	底面幅の広いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表 面密。 口縁部外面~内側底面まで黒漆。
410-6 104	土師器 杯	床面+2 ほぼ完形	口14.0 高5.6 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒と砂粒 を含む。②酸化焰、硬質③外面 にぶい赤褐色・内面にぶい褐色	底面へらナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側底面中央部にへらの圧痕あり。
410-7 104	土師器 杯	床面+3 完形	口12.3 高4.5 底丸底	①粗、2~3mmの砂粒を少なく、 雲母を多く含む。②酸化焰、硬 質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動は少ない。稜は端部が鋭い。 内面底部中央にへらの圧痕あり。
410-8 104	土師器 杯	覆土 1/2残存	口(13.0) 高3.6 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面橙色	底面へら削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 外面の黒褐色は吸炭による。
9 115	こも編み石	床面+1	長 15.2 幅 6.1 厚 2.5 重 400		絹雲母石墨片岩。両側面にわずかな凹凸が認められる。
10 115	こも編み石	床面+2	長 15.5 幅 8.2 厚 2.8 重 560		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈し、 他の側面に小さな凹凸部が認められる。
11 115	こも編み石	床面+3	長 17.4 幅 7.6 厚 4.5 重 840		熱変成岩。断面が三角形を呈する石である。片側の側面中央 部がゆるやかな凹状を呈する。
12 115	こも編み石	床面+3	長 12.3 幅 8.4 厚 4.2 重 750		緑簾緑泥片岩。上下の幅が一定しない。断面が台形を呈する 石である。両側面中央部にわずかに凹状部が認められる。
13 115	こも編み石	床面+3	長 15.4 幅 7.8 厚 5.0 重 840		安山岩。片側の側面はゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小 さな凹凸部が認められる。やや不定形な石である。
14 115	こも編み石	床面+3	長 16.4 幅 7.6 厚 2.6 重 690		安山岩。扁平な石である。両側面にやや大きめの凹状部が認 められる。
15 115	こも編み石	床面+6	長 15.6 幅 8.8 厚 3.4 重 710		絹雲母石墨片岩。片側の側面に打ち欠いた凹状部が認められ る。
16 115	こも編み石	床面+2	長 14.3 幅 8.7 厚 4.0 重 640		絹雲母石墨片岩。両側面にわずかな凹凸部が認められる。
17 115	こも編み石	床面+3	長 15.0 幅 7.4 厚 2.8 重 490		緑簾緑泥片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈する。
18 115	こも編み石	床面+3	長 15.0 幅 7.4 厚 4.4 重 720		絹雲母石墨片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈している。
19 115	こも編み石	床面+2	長 14.8 幅 5.4 厚 4.4 重 520		緑簾緑泥片岩。細長い肉厚の石である。両側面中央部が大き く凹状を呈している。
20 115	こも編み石	床面+5	長 16.3 幅 7.3 厚 4.5 重 760		絹雲母石墨片岩。断面がクサビ形を呈す。不定形な石である。 両側面ともに顕著な凹凸は認められない。

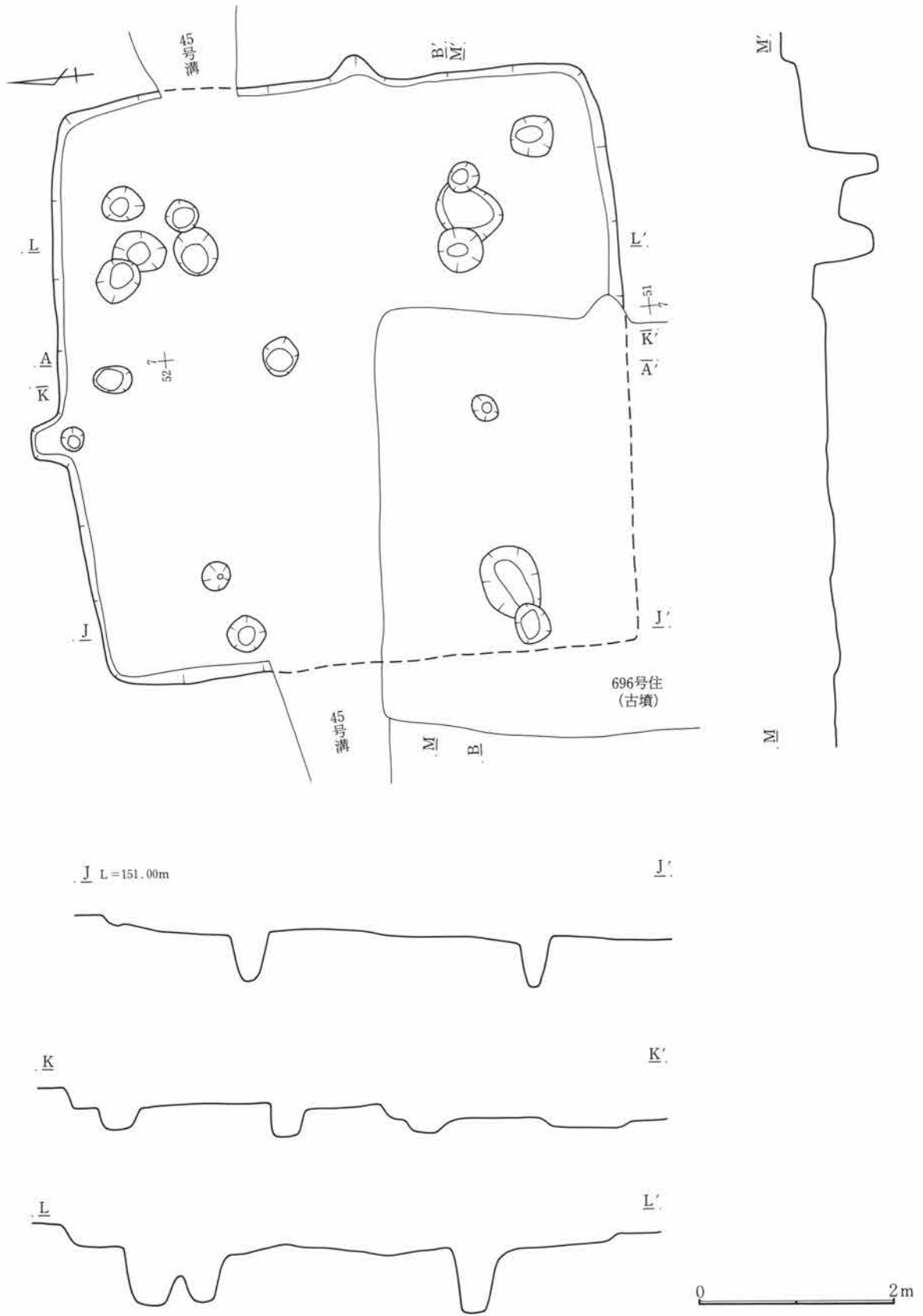
695号住居跡 (第411~414図、図版60・61・104・115)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、52-7・8グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の696号住居と重複しており、696号住居により本住居の南西部分を床下部分まで掘り込まれている。両住居とも南西方向に向かって低くなる地形に造られており、南西部分は削り取られ残りが悪かった。また住居中央部を45号溝により、東西方向に床下部分まで掘り込まれていた。竈は東と北の壁面に造られており、北竈は床面上に位置する袖部や燃焼部が取り除かれていたため、旧北竈とし、袖部や燃焼部の残る東竈を新東竈とした。



第411図 696号住居跡実測図



第412図 695号住居跡床下実測図

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴が4本、貯蔵穴が新旧の竈の右側にそれぞれ掘られていた。

規模 東西5.96m、南北5.80mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で17cmである。柱穴1は径32cm深さ62cm、柱穴2は径34cm深さ72cm、柱穴3は径26cm深さ70cm、柱穴4は径34cm深さ68cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ63cm、旧貯蔵穴は径46cm深さ71cmである。

床下 床下部分に土坑は掘られていなかったが、多くの小穴が掘られていた。

遺物 北東コーナー部分に多くのこも編み石がまとまって出土している。

(新東竈)

位置 住居東壁南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

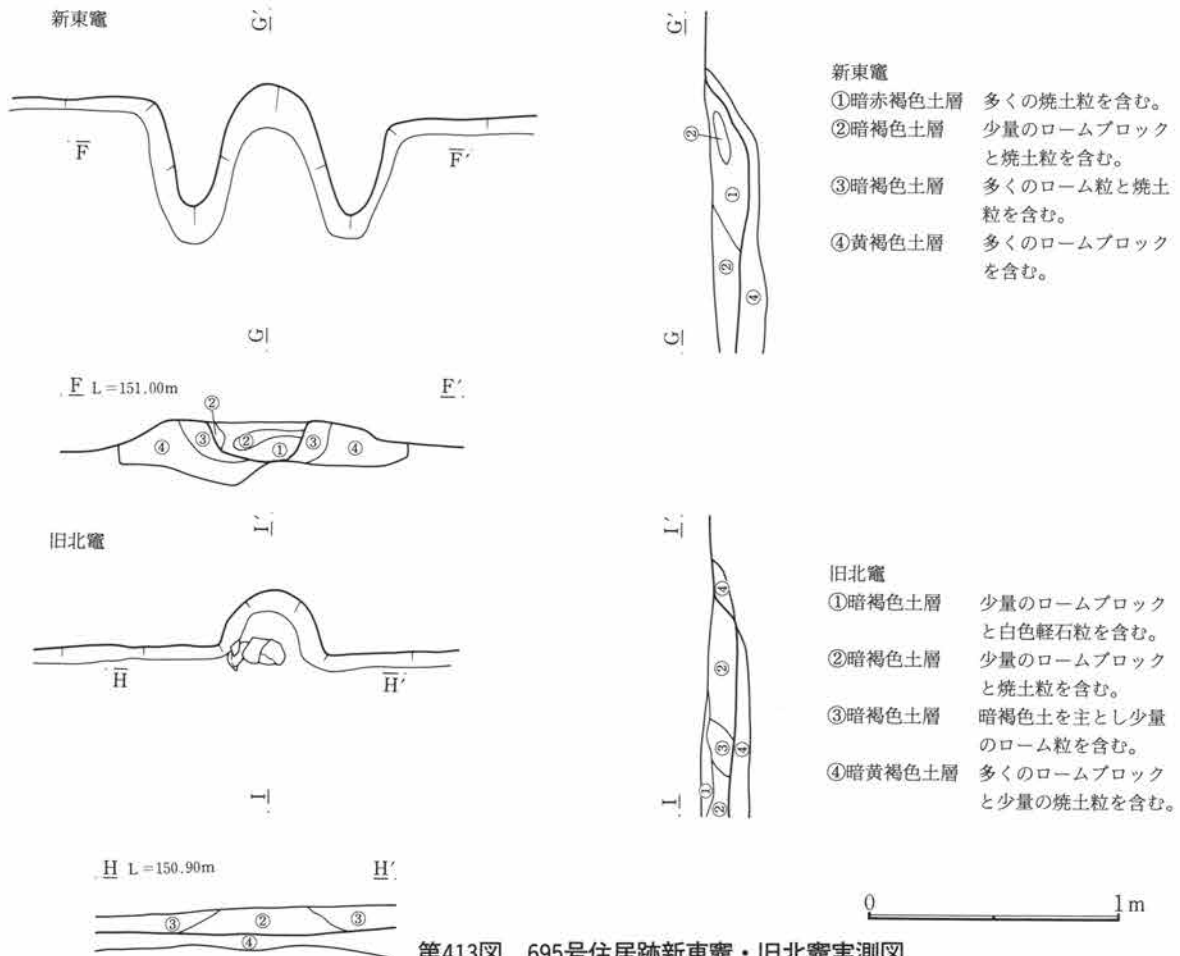
構造 住居同様残りの悪い竈である。袖部は多くのロームを用いて造られており、石は使われていなかった。竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向63cm、熱焼部幅41cmである。

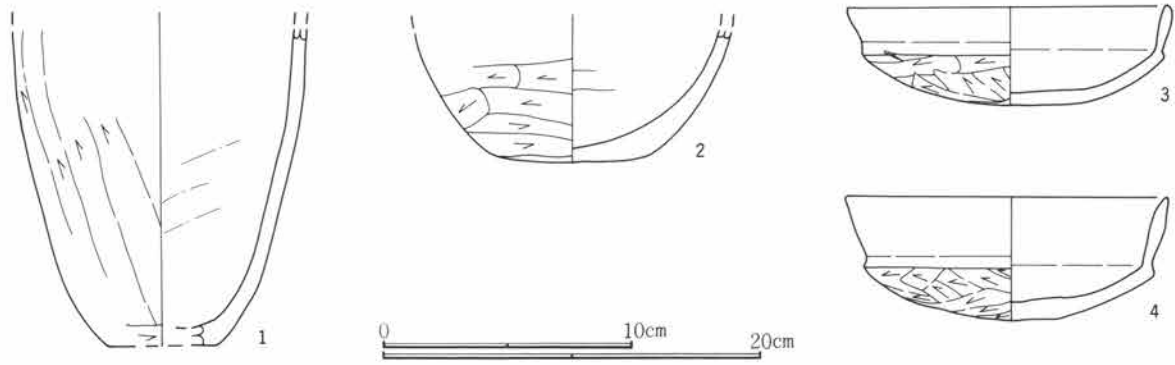
(旧北竈)

位置 住居北壁やや東寄りに造られている。

概要 残りの悪い竈であり、床面上に位置する袖と燃烧部の多くは取り外されており、壁面を削り造られた燃烧部の一部と煙道部が残っていた。その部分から土師器の甕の破片が出土した。燃烧部床下部分や取り除かれた燃烧部付近から少量の焼土粒が出土した。



第3章 古墳時代の遺構と遺物



第414図 695号住居跡出土遺物実測図

695号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
414-1	土 節 器 甕	旧北竈+3 破片	口 — 高 — 底 (4.0)	①粗、2~4mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラナデ。一部ヘラ削り。多くの砂粒が目立ち器表面粗い。内面ナデ。内面にも多くの砂粒が目立つ。
414-2	土 節 器 甕	貯蔵穴-1 胴下半3/5 底部完形	口 — 高 — 底 8.0	①粗、2~3mmの砂粒を大量に 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗れている。内面ナデにより器表面密。 5×11mmの大きな片岩粒も含む。
414-3 104	土 節 器 坏	床面+5 1/2残存	口 13.0 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面浅いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑は認められない。
414-4 104	土 節 器 坏	旧北竈+3 1/2残存	口 13.0 高 5.0 底 丸底	①やや粗、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 稜が高く明瞭である。
5 115	こも編み石	床面+3	長 14.6 幅 6.2 厚 3.7 重 470		絹雲母石墨片岩。側面中央部にわずかな凹状が認められる。
6 115	こも編み石	床面+1	長 15.0 幅 7.2 厚 3.7 重 520		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
7 115	こも編み石	床面+2	長 13.8 幅 7.8 厚 3.0 重 480		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面が凹状を呈する。
8 115	こも編み石	床面直上	長 14.9 幅 7.0 厚 2.5 重 430		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部は凹状を呈し、他の側面は打ち欠かれて欠損。火を受けて赤味を帯びている。
9 115	こも編み石	床面直上	長 17.3 幅 5.6 厚 4.3 重 530		絹雲母石墨片岩。片側の側面は打ち欠かれて大きな凹状を呈している。
10 115	こも編み石	床面-1	長 14.0 幅 8.0 厚 3.3 重 640		点紋絹雲母石墨片岩。側面が一部凹状を呈している。
11 115	こも編み石	床面直上	長 14.1 幅 5.5 厚 3.9 重 390		緑簾緑泥片岩。大きく欠けた不均衡な石である。
12 115	こも編み石	床面-3	長 13.3 幅 6.3 厚 5.0 重 560		絹雲母石墨片岩。断面は三角形を呈し、両側面中央部に凹状が認められる。
13 115	こも編み石	床面-3	長 15.2 幅 5.9 厚 2.3 重 350		絹雲母石墨片岩。細長い石である。片側の側面中央部がゆるやかな凹状を呈している。
14 115	こも編み石	床面-1	長 13.0 幅 5.4 厚 4.8 重 530		輝緑岩。中央部の厚い石である。片側の側面が打ち欠かれた凹状を呈している。

696号住居跡 (第415・416図、図版61)

位置 本住居跡は、第9次調査区にあり、52-7グリッドに位置する。

概要 同じ古墳時代の695号住居と重複しており、本住居が695号住居の南西部分を床下部分まで掘り込んで造られている。両住居とも南西方向に向かって低くなる地形に造られており、南西部分は削り取られほとんど残っていなかった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴が4本、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西推定4.15m、南北4.10mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で9cmである。柱穴1は径26cm深さ56cm、柱穴2は径24cm深さ66cm、柱穴3は径24cm深さ68cm、柱穴4は径24cm深さ57cmである。貯蔵穴は径56cm深さ36cmである。

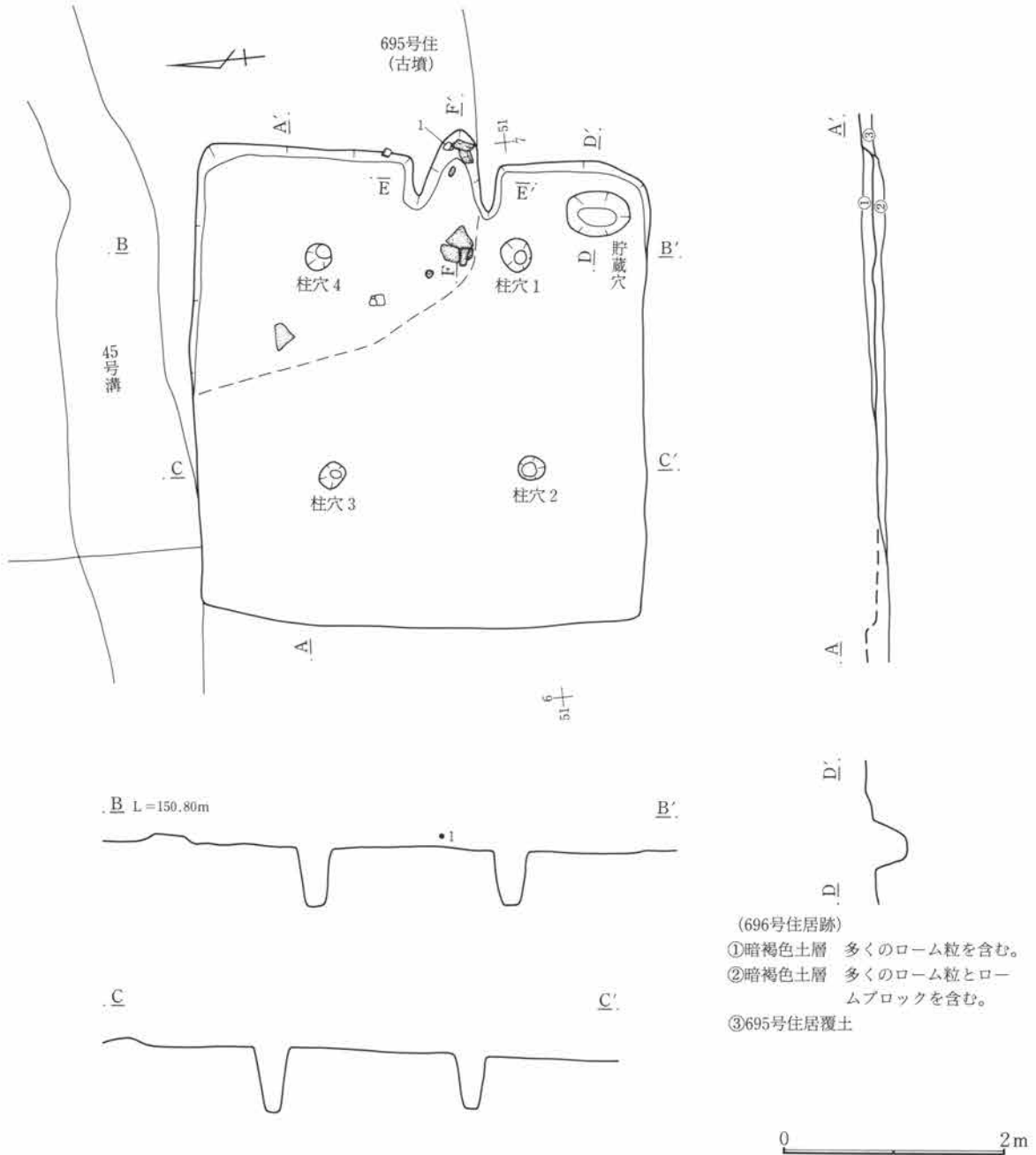
遺物 出土量が少なく図示できたのは1点の土師器の甕の破片であり、破片総数も21片と少ない。

(竈)

位置 住居東壁南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

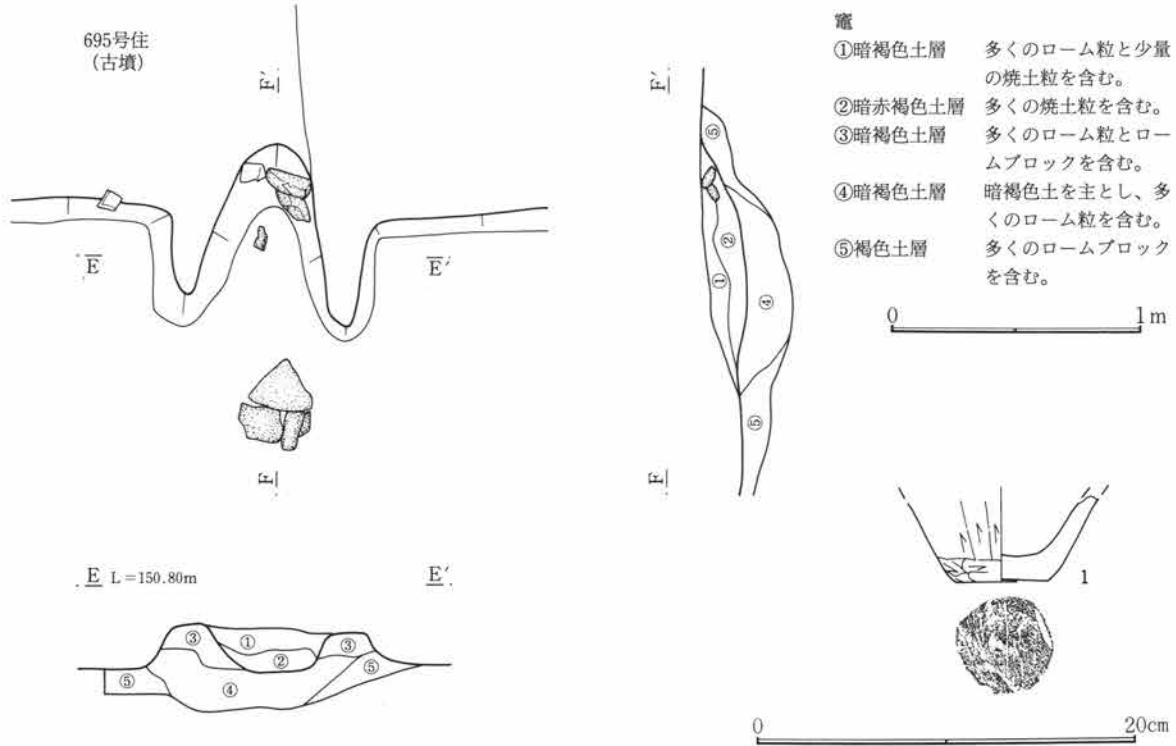
構造 袖部に石は使われていなかったが、煙道部より割れた砂岩の石が2個出土した。また支脚石と思われる細長い石が、燃焼部奥壁付近に直立して発掘された。竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向72cm、熱焼部幅47cmである。



第415図 696号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第416図 696号住居跡竈・出土遺物実測図

696号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
416-1	土師器 甕	竈内+9 胴下半破片 底部完形	口 — 高 — 底 5.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③明赤褐色	底面ヘラ削り。胴部下半強いヘラ削り。砂粒の移動少なく、器表面比較的密。内面ナデにより器表面密。

698号住居跡 (第417~420図、図版61・62・104・105)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、43-73グリッドに位置する。

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の東側で次第にロームの堆積がなくなり、黒色土を覆土とする谷地となっている。住居を埋めている土は平地上の住居と異なり、黒褐色土が多くロームの流入は少ない。同じ古墳時代の700号住居と重複しており、本住居が700号住居の北東部を床下部分まで掘り込んで造られている。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴は掘られてなく、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.44m、南北3.42mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で45cmである。貯蔵穴は径42cm深さ71cmである。

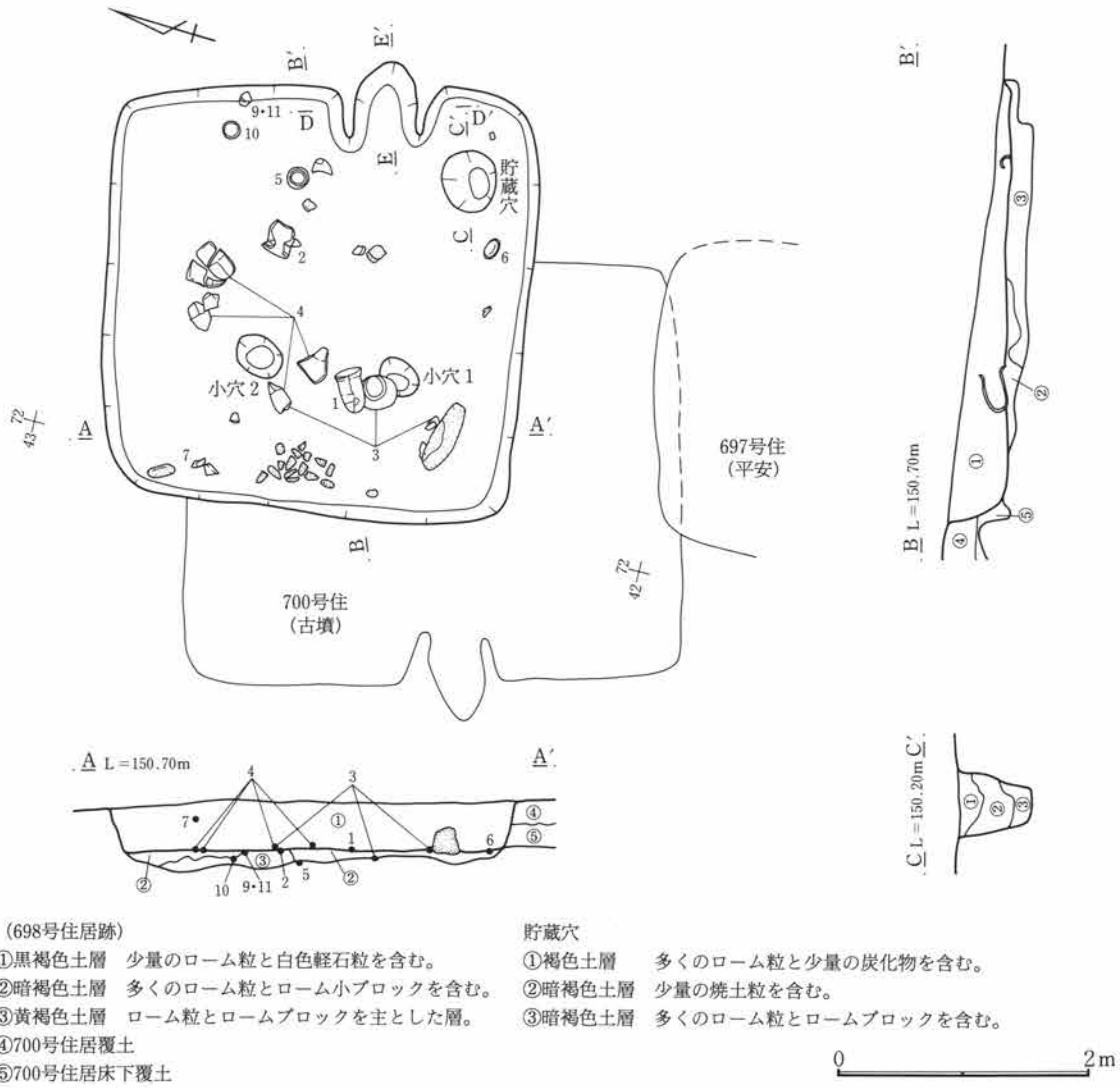
遺物 西壁面に近い床面に3点の完形の土師器の甕が出土している。

(竈)

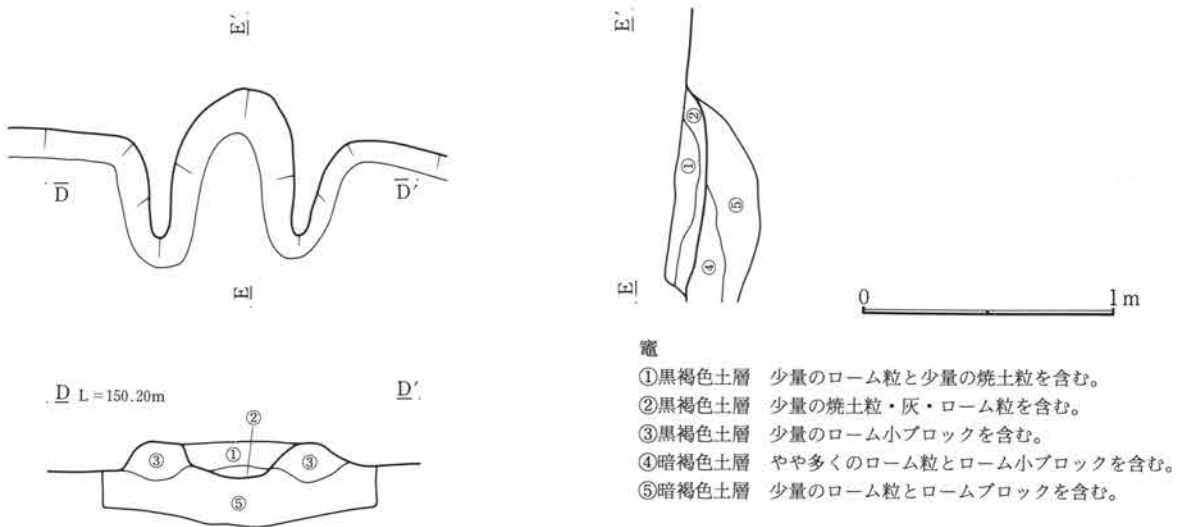
位置 住居東壁南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 僅かにローム粒の混入した土で造られており、良好な状態での検出はできなかった。石は使用されていないためか出土しなかった。ロームや粘土の使用が少ないためか竈内の焼土粒も少なかった。

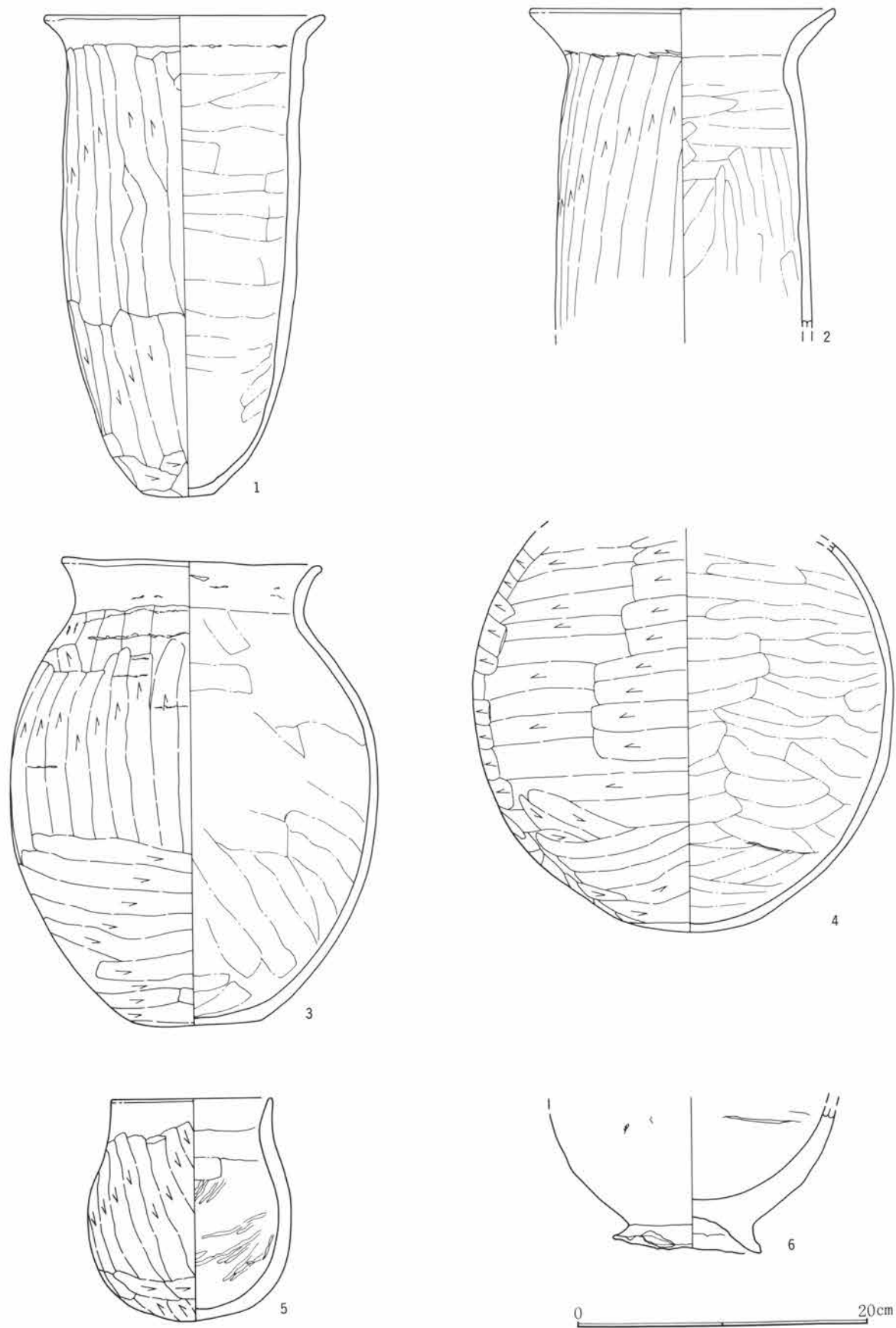
規模 煙道方向73cm、燃焼部幅48cmである。



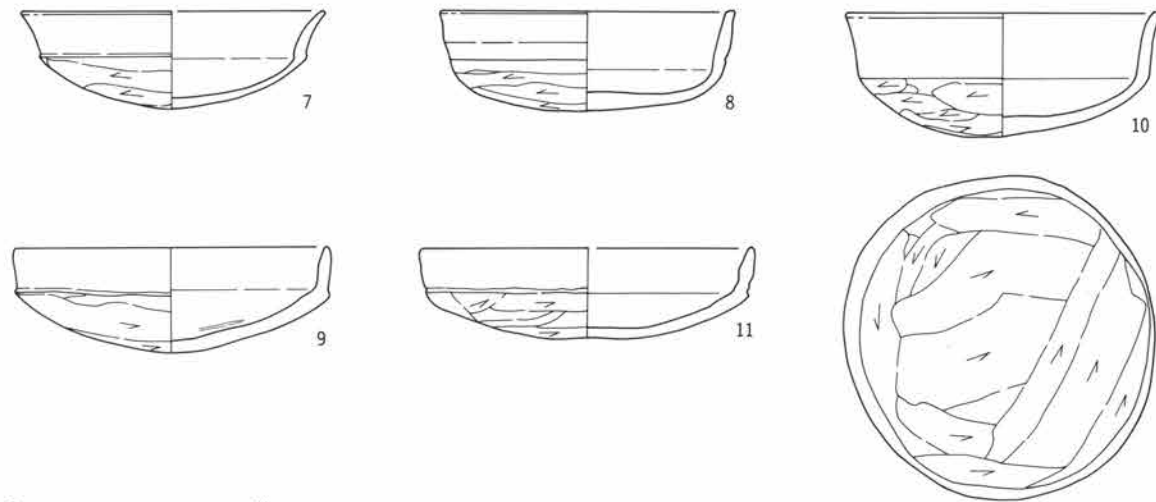
第417図 698号住居跡実測図



第418図 698号住居跡竈実測図



第419図 698号住居跡出土遺物実測図(1)



第420図 698号住居跡出土遺物実測図(2)

698号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
419-1 104	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 19.4 高 33.6 底 5.0	①やや粗、1~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面へら削り。胴部外面へら削り。へらの単位明瞭。小さな砂粒が移動し、器表面やや粗い。内面ナデにより器表面密。
419-2 104	土 師 器 甕	床面+6 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 21.2 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。へらの単位は明瞭である。内面ナデにより器表面密。胴部の器肉はへら削りにより薄くなっている。
419-3 104	土 師 器 壺	床面+3 ほぼ完形 胴一部欠損	口 18.2 高 32.5 底 8.6	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面 橙色・外面胴下半黒褐色	底面へら削り。胴部外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。胴部内面ナデにより器表面密。大きな砂粒を含む丸胴甕で、やや異質。
419-4 104	土 師 器 壺	床面+3 胴~底部完 形	口 — 高 — 底 9.0	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面胴下半~底部黒色	底部~胴部外面へら削り。小さな砂粒が多く移動しているが、器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密。底部と胴部の器肉が薄い。
419-5 104	土 師 器 小型 甕	床面-9 完形	口 11.5 高 15.2 底 丸底	①粗、2~4mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③赤褐色・一部黒褐色	底面へら削り。胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデとへら磨き。力強い感じの甕である。
419-6 105	土 師 器 塊?	床面+2 口縁部欠損 他ほぼ完形	口 — 高 — 底 7.8	①粗、3~4mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。②酸化焰、硬 質③外面にふい橙色・内面黒色	胎土が粗く、肉厚で雑なつくりであることから甕と思われるが、高台が付いているため塊の可能性はある。実に無骨なつくりである。
420-7 104	土 師 器 坏	床面+24 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.2) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胎土が密でへらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑認められず。胎土が粉状を呈する。
420-8 105	土 師 器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.0 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いへら削り。器表面密でへらの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
420-9 105	土 師 器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.5 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。黒斑は全く認められない。胎土は粉状でない。
420-10 105	土 師 器 坏	床面+5 完形	口 12.6 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底部強いへら削り。へらの単位明瞭。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部のへら削りは幅広く大胆である。
420-11	土 師 器 坏	床面+9 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.3) 高 3.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。砂粒の移動は少ないが、多く目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

699号住居跡 (第421~423図、図版62・105)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、42-72グリッドに位置する。

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の東側で次第にロームの堆積がなくなり、黒色土を覆土とする谷地となっている。住居を埋めている土は平地上の住居と異なり、黒褐色土が多くロームの流入は少ない。住居南東部分で奈良時代の701号住居と、また北東部分で平安時代の697号住居と重複しており、その部分は床下まで深く削り取られていた。

構造 床面はローム粒と少量の焼土粒の混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。小穴が2本掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。東西方向に細長い貯蔵穴が竈左側に掘られていた。

規模 東西不明、南北3.71mである。壁高は北壁面で23cmである。貯蔵穴は76×48cmの楕円形を呈し深さ69cmである。

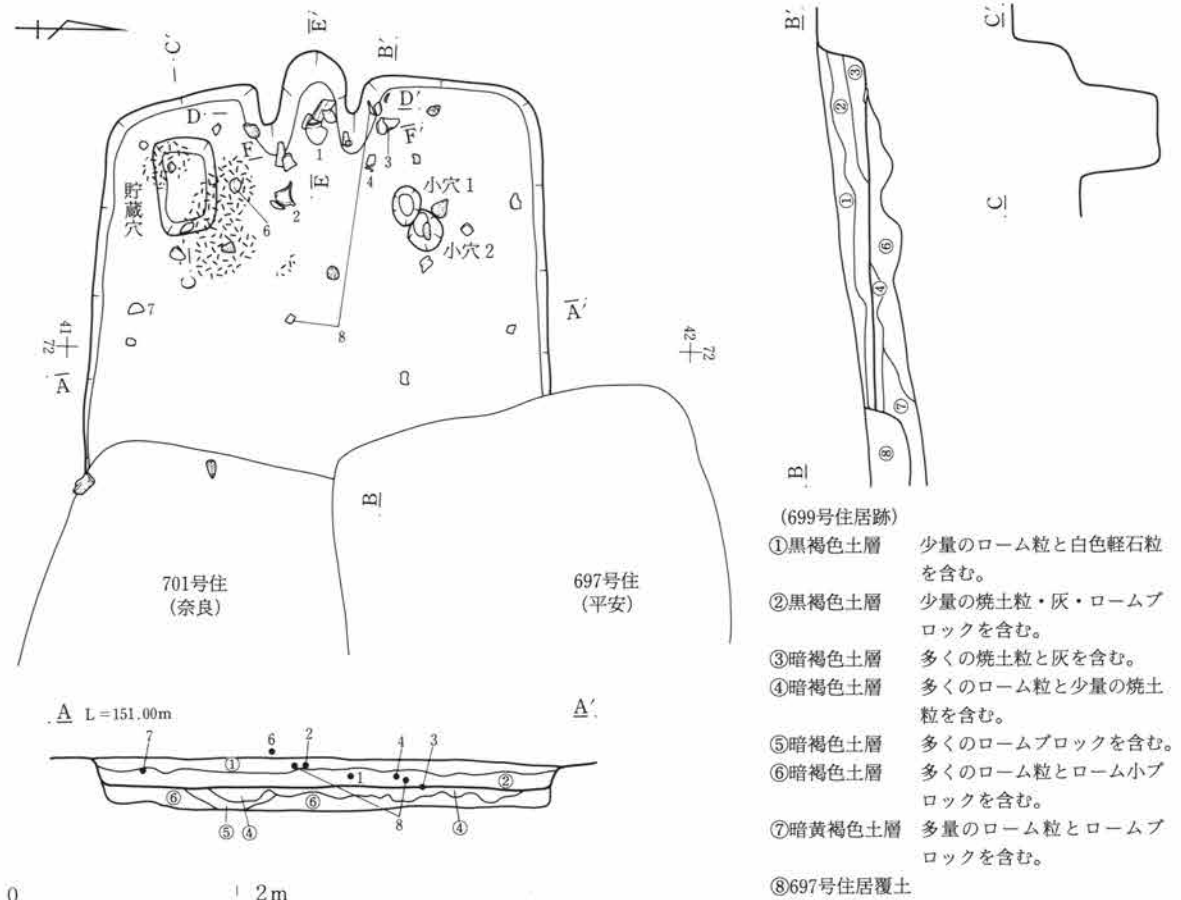
遺物 竈周辺に多くの土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

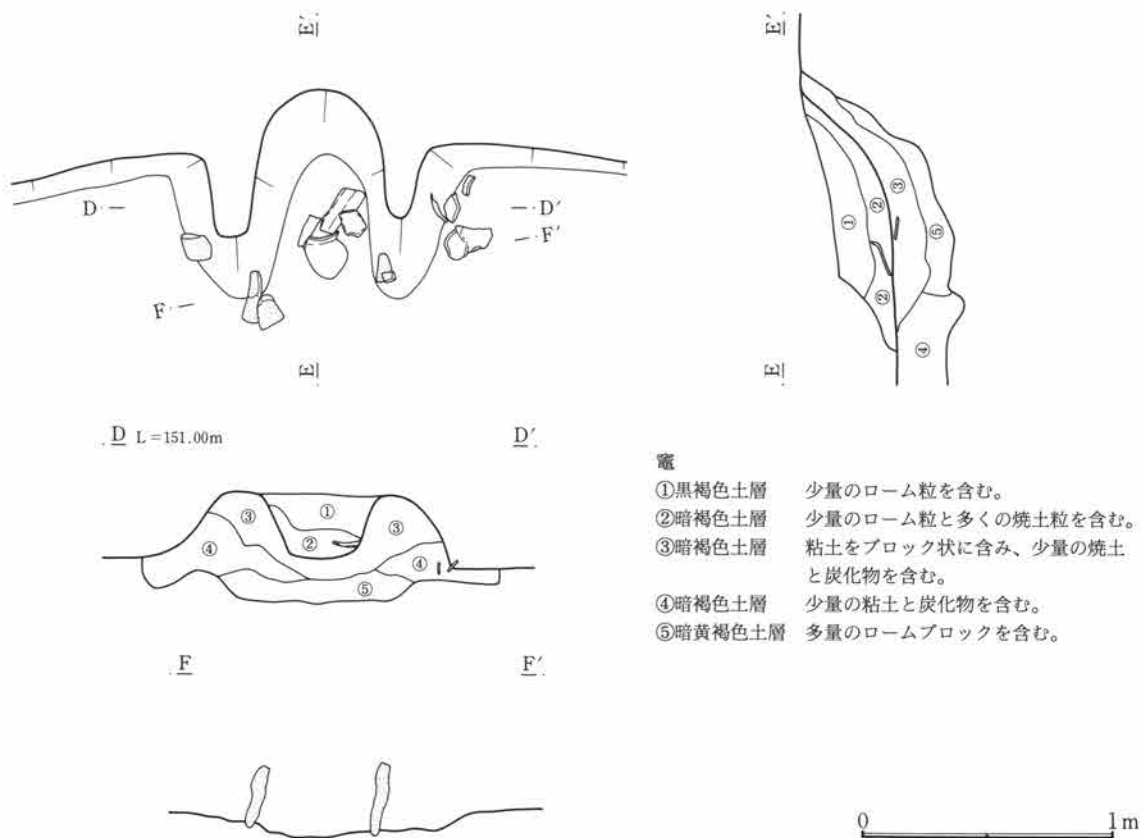
位置 住居西壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 少量のローム粒と粘土の混入した土で造られていた。焚口の左右の袖石と思われる細長い石が据えられた状態で確認された。ほかにも少量の石が出土しているため石を用いて竈が造られていたものと思われる。粘土が使用されているため竈内から多くの焼土粒が出土した。

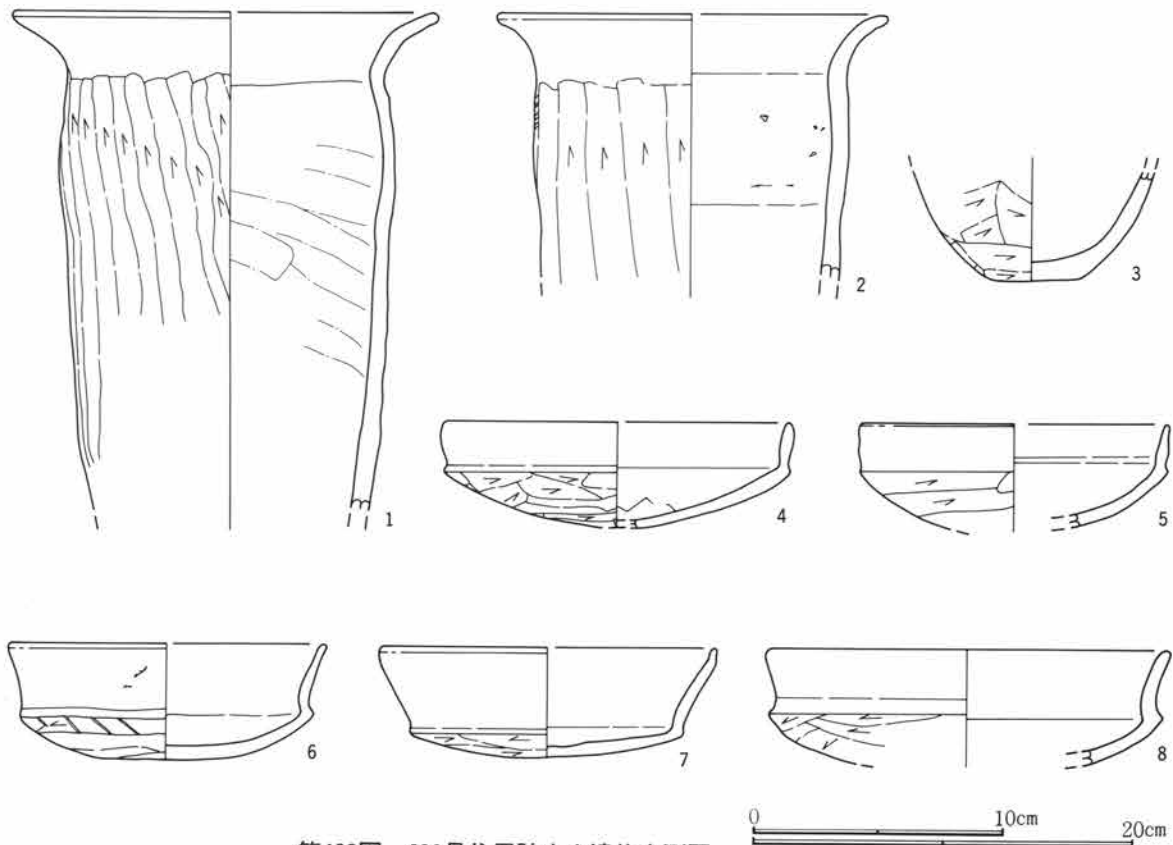
規模 煙道方向79cm、燃烧部幅44cmである。



第421図 699号住居跡実測図



第422図 699号住居跡竈実測図



第423図 699号住居跡出土遺物実測図

699号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
423-1 105	土 師 器 甕	竈内-9 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(22.5) 高 - 底 -	①粗、2~4mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色・胴部下半黒褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。
423-2	土 師 器 甕	床面+14 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(21.0) 高 - 底 -	①やや粗 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面弱いヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
423-3	土 師 器 甕	竈内+1 胴部下半 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 - 高 - 底 4.8	①粗、1~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③におい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部下半ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、多く目立つ。内面ナデ。
423-4	土 師 器 坏	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(14.2) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③底面黒褐色・内面明赤褐色	底面強いヘラ削り。削りの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は高く明瞭である。
423-5 105	土 師 器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。
423-6 105	土 師 器 坏	床面+20 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.8) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが胎土が粉状を呈し、ヘラの単位不明瞭。
423-7 105	土 師 器 坏	床面+13 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.6) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面と断面橙色・外面赤灰色	底面ヘラ削り。砂粒や粘土の移動少なくヘラの単位不明瞭。底部が浅く口縁部の深い坏である。
423-8 105	土 師 器 坏	床面+3 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 16.2 高 - 底 -	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③底面黒色・外面橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底面の黒斑は吸炭による。

700号住居跡 (第424図、図版62・63)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、43-72グリッドに位置する。

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の東側で次第にロームの堆積がなくなり、黒色土を覆土とする谷地となっている。住居を埋めている土は平地上の住居と異なり、黒褐色土が多くロームの流入は少ない。同じ古墳時代の698号住居と重複しており、北東部を床下部分まで掘り込まれている。また南側を平安時代の697号住居により壁面と床面の一部が掘り込まれていた。谷地に面する東側の床面や壁面は残っていなかった。

構造 床面はローム粒とロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴と思われる付近に4本の小穴が掘られていたが、明確でなく小穴1~4として扱った。貯蔵穴が竈左側に掘られていた。

規模 東西不明、南北4.04mである。壁高は残りの良い西壁面部分で20cmである。貯蔵穴は径48cm深さ53cmである。小穴1は径33cm深さ41cm、小穴2は径30cm深さ50cm、小穴3は径31cm深さ30cm、小穴4は径12cm深さ52cmである。

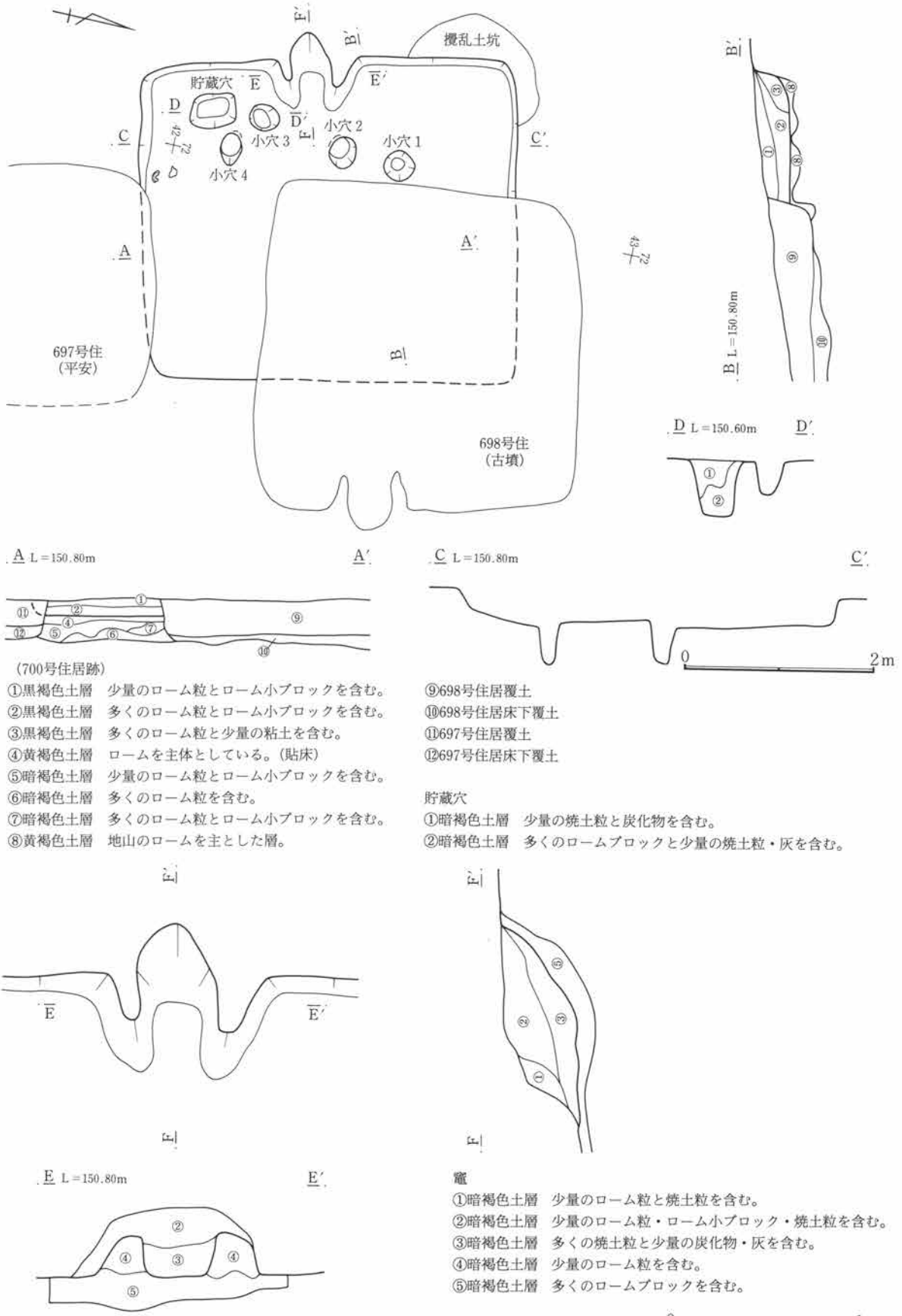
遺物 出土量が少なく図示できる遺物はなかったが、土師器の坏や甕の破片が17片出土している。

(竈)

位置 住居西壁南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 僅かにローム粒の混入した土で造られており、良好な状態での検出はできなかった。石は使用されていないためか出土しなかった。ロームや粘土の使用が少ないためか竈内の焼土粒も少なかった。

規模 煙道方向76cm、燃焼部幅42cmである。

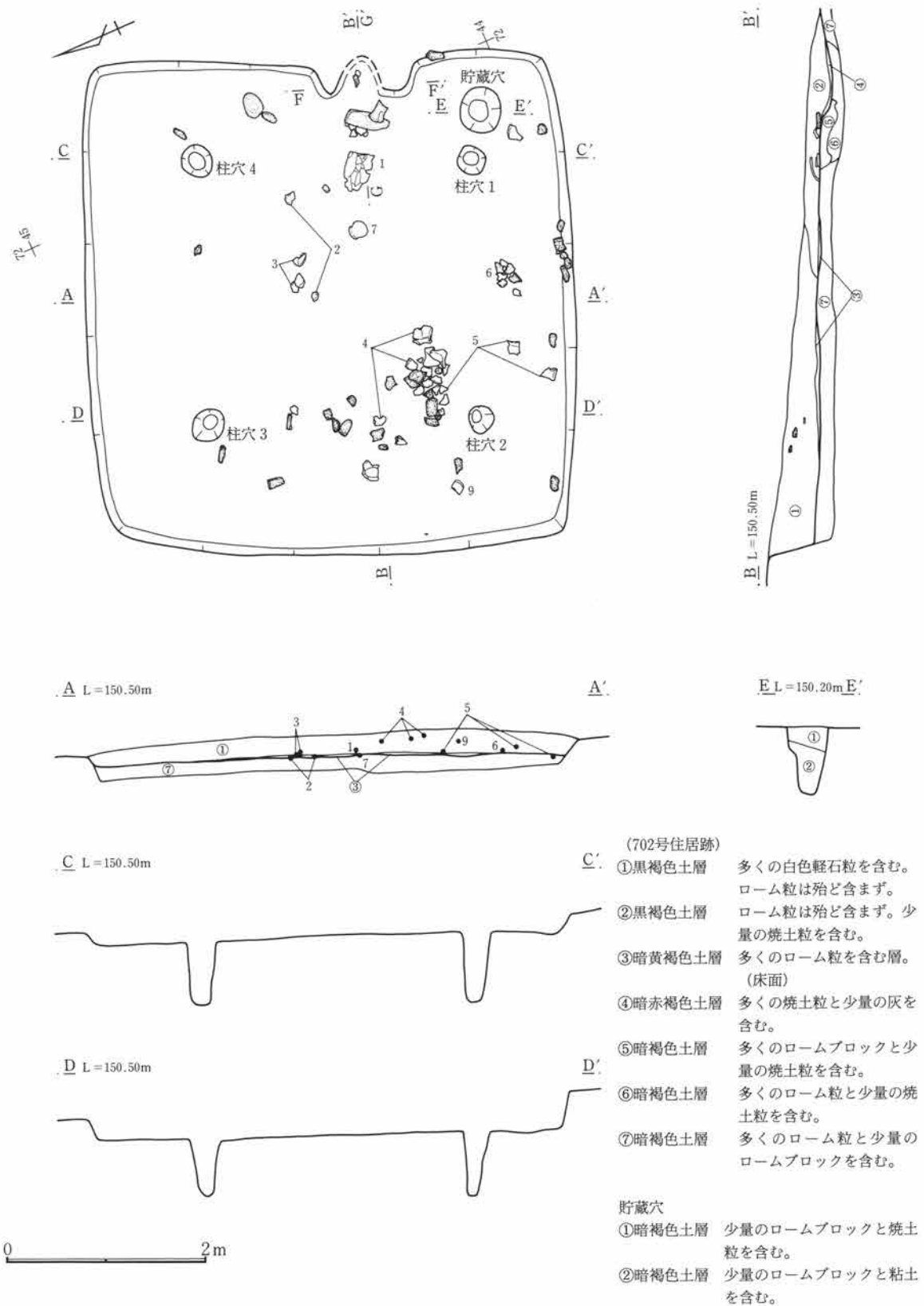


第424図 700号住居跡・竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

702号住居跡 (第425~427図、図版63・105)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、45-72グリッドに位置する。



第425図 702号住居跡実測図

概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の西南の壁面や床下部分にはロームが認められるが、北東側部分からロームは深くなり床下調査でロームを確認することはできなかった。谷地は黒色土を覆土としこの土が住居の上面を埋めており、平地上の住居と異なり黒褐色土が多くロームの流入は少ない。谷地に面する東側の床面や壁面の残りは悪かった。

構造 床面の一部はローム粒とロームブロックを多く含む土により、薄く貼床状に造られていた。柱穴が4本、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。

規模 東西4.86m、南北4.92mである。壁高は残りの良い南壁面で29cmである。貯蔵穴はほぼ円形を呈し径43cm深さ67cmである。柱穴1は径29cm深さ67cm、柱穴2は径23cm深さ60cm、柱穴3は径31cm深さ59cm、柱穴4は径30cm深さ71cmである。

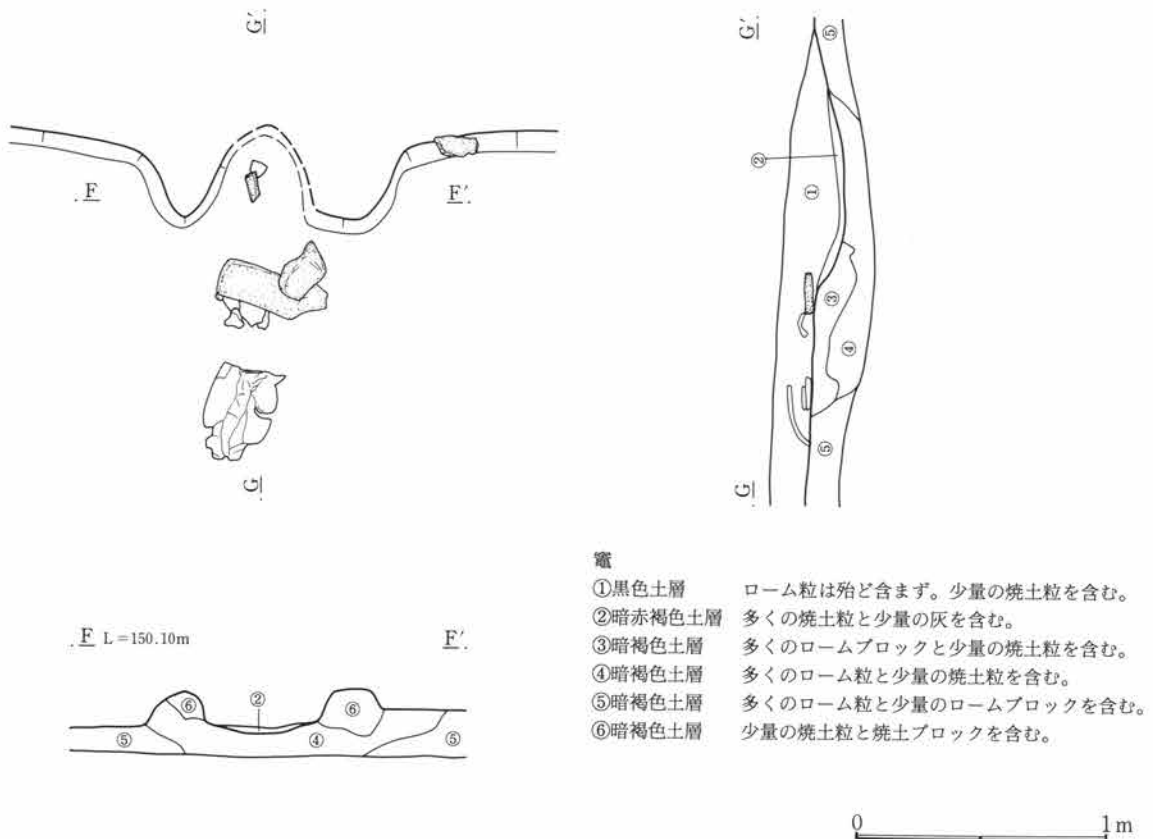
遺物 竈周辺や南側の床面付近から多くの土師器の坏や甕の破片が出土している。

(竈)

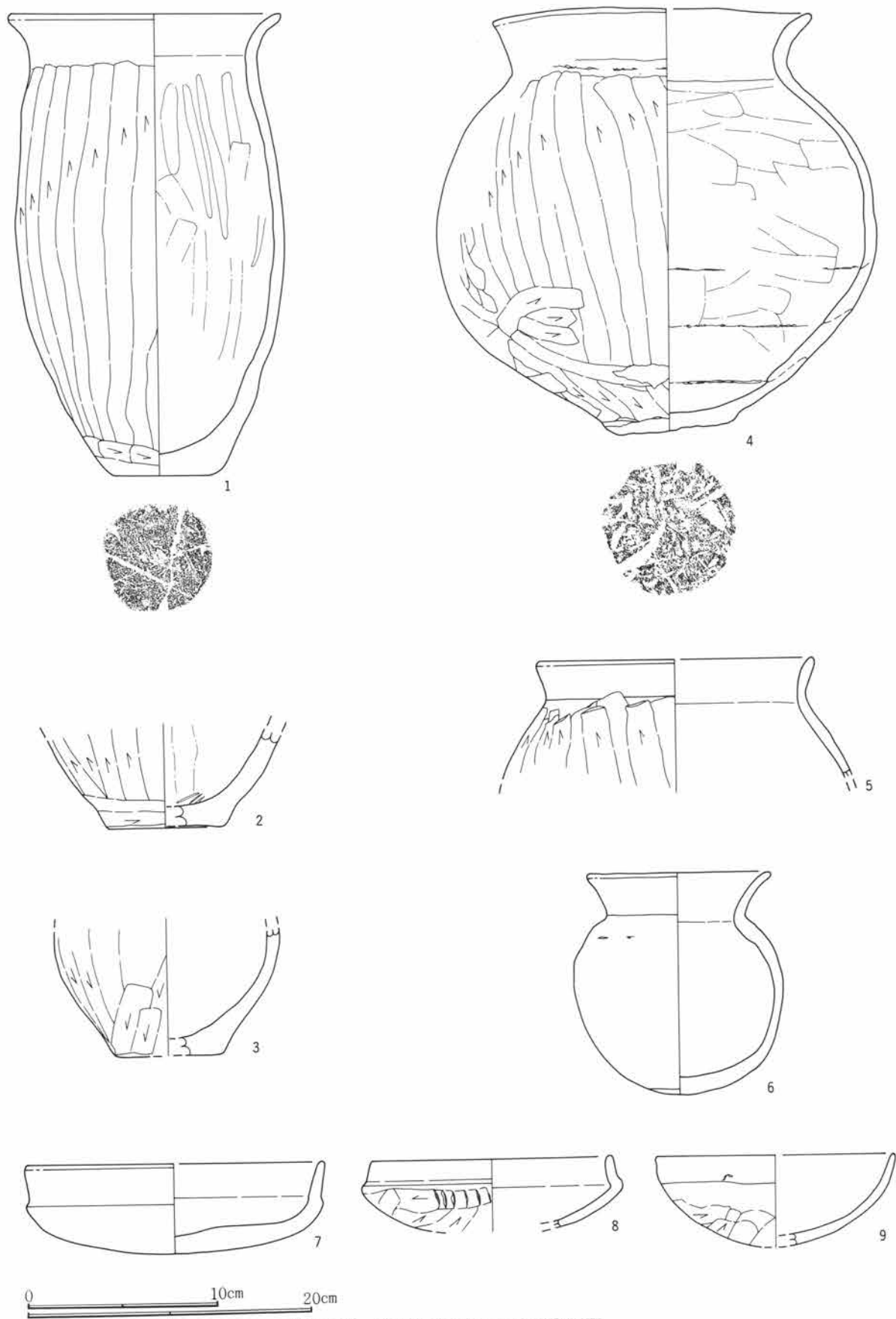
位置 住居東壁南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 残りの悪い東壁面に竈が築かれているため、竈は燃烧部下部が残っていたが、そのほかの部分の多くは削り取られて残りは悪かった。焚口部分手前の床面上に天井石が、また燃烧部中央やや左部分に支脚石と思われる細長い石が、ほぼ据えられた状態で確認された。袖石等については不明である。袖部分から多くのロームや粘土は出土していない。

規模 煙道方向は削られて残りが悪いが現状で42cm、燃烧部幅52cmである。



第426図 702号住居跡竈実測図



第427図 702号住居跡出土遺物実測図

702号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
427-1 105	土師器 甕	床面+7 1/3残存	口 19.3 高 33.0 底 7.0	①粗、2～6mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 均整のとれたきれいな甕である。
427-2	土師器 甕	床面直上 底部破片	口 — 高 — 底 (8.2)	①粗、2～3mmの砂粒と片岩粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面にぶい橙色・内面灰褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。 内面ナデにより器表面密。 器肉が全体に厚い。
427-3	土師器 甕	床面+3 胴下半～底 部1/3残存	口 — 高 — 底 (7.8)	①粗、2～3mmの多くの砂粒と 片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。 内面ナデにより器表面密であるが、砂粒は目立つ。 底部の器肉は厚い。
427-4 105	土師器 壺	床面+14 口縁1/2胴部 1/2底部完形	口(22.5) 高 30.0 底 9.4	①粗、2～5mmの砂粒と片岩粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底部に植物の茎の圧痕。胴部ヘラ削り。底部と胴下半を最初に 作り、一定時間経過後幅3cm前後の粘土帯が追加されている。 底部と胴下半部に追加される胴部粘土の状態が明瞭に残る。
427-5 105	土師器 甕	床面+1 1/3残存	口(20.0) 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの砂粒を多 く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、粘土がササラ状 になり器表面がやや粗い。口縁部横ナデ。
427-6 105	土師器 小型甕	床面+8 口～胴部1/3 底部完形	口 13.2 高 15.5 底 丸底	①特に粗、2～3mmの砂粒を大 量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③内外面ともにぶい赤褐色	底部や胴部の外面は多量の砂粒が目立ち、整形方法不明。 口縁部横ナデ。内面密であるが砂粒は目立つ。 3～4mmの片岩粒を少量含む。
427-7 105	土師器 坏	床面+3 口縁部1/3 底部1/2残存	口(16.0) 高 4.8 底 丸底	①粗、1～4mmの砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒色・断面と内面黒褐色	底面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。底部の器肉が厚い。 底部の整形方法・口径が大きいこと等異質の坏である。
427-8 105	土師器 坏	覆土 口縁部1/2 底部1/3残存	口 13.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③断面橙色・表面黒褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないがヘラの単位明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
427-9	土師器 坏	床面+18 1/3残存	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にぶい橙色	底面ヘラ削り。器表面密なためヘラの単位不明瞭。口縁部横 ナデ。内面ナデにより器表面密。

703号住居跡 (第428～431図、図版63・64・106・108)

位置 本住居跡は、第10次調査区にあり、41-73グリッドに位置する。

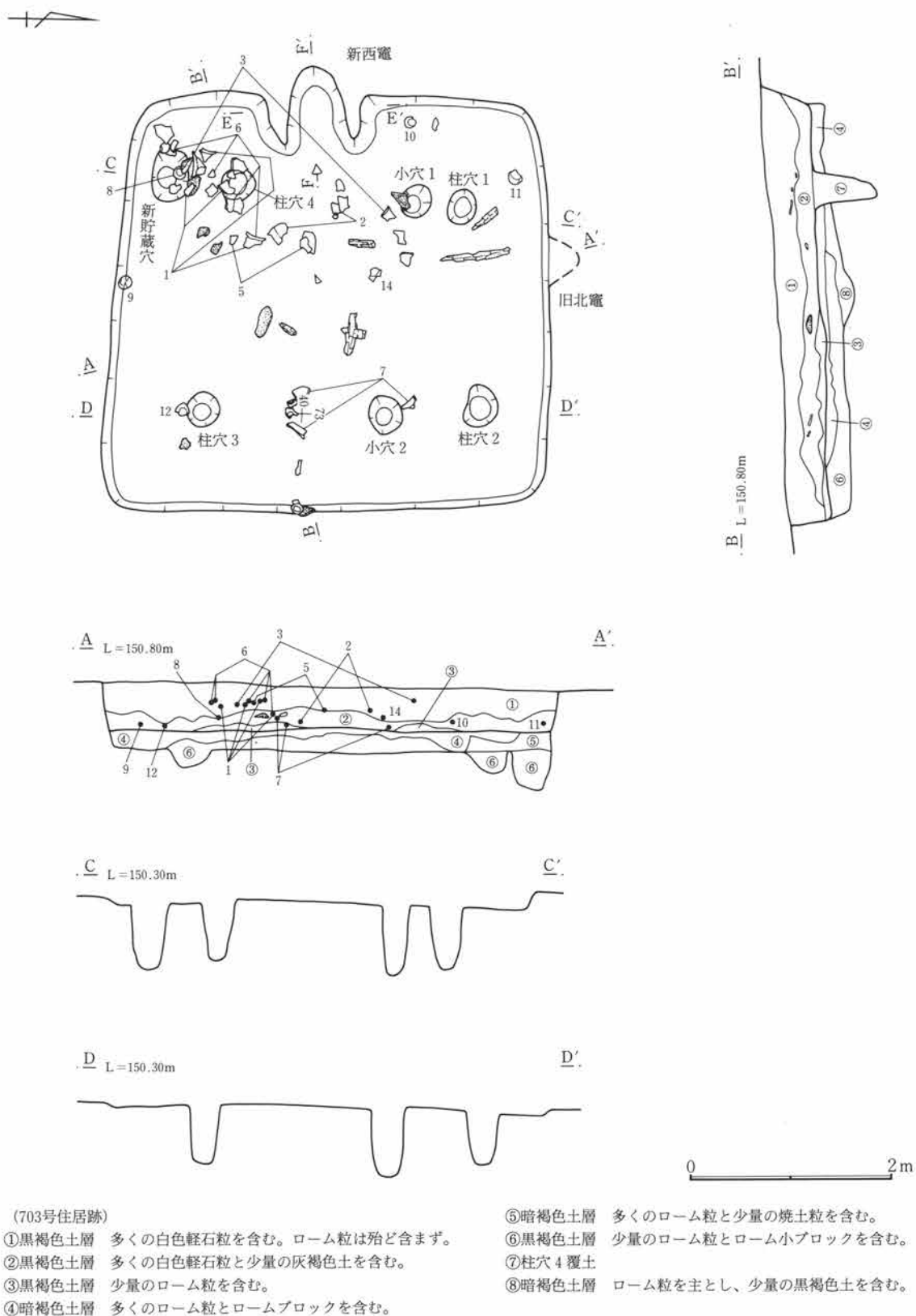
概要 東側の谷地に向かって低くなる傾斜面の最も低い位置に造られている住居であり、本住居の西側の壁面や床下部分にはロームが認められるが、東側部分からロームは深くなり床下調査でロームを確認することはできなかった。谷地は黒色土を覆土としこの土が住居の上面を埋めており、平地上の住居と異なり黒褐色土が多くロームの流入は少ない。谷地に面する東側の床面や壁面の残りは悪かった。竈は西壁面に造られていたが、北壁中央部付近の床下から焼土粒が出土したことや、その部分に他の多くの竈に認められる掘り込みが確認されたことにより、北壁面にも旧北竈が築かれていたものと思われる。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴が4本、貯蔵穴が新竈の左側に掘られていた。旧竈に伴う貯蔵穴は不明である。また柱穴のほかにも多くの小穴も掘られていた。

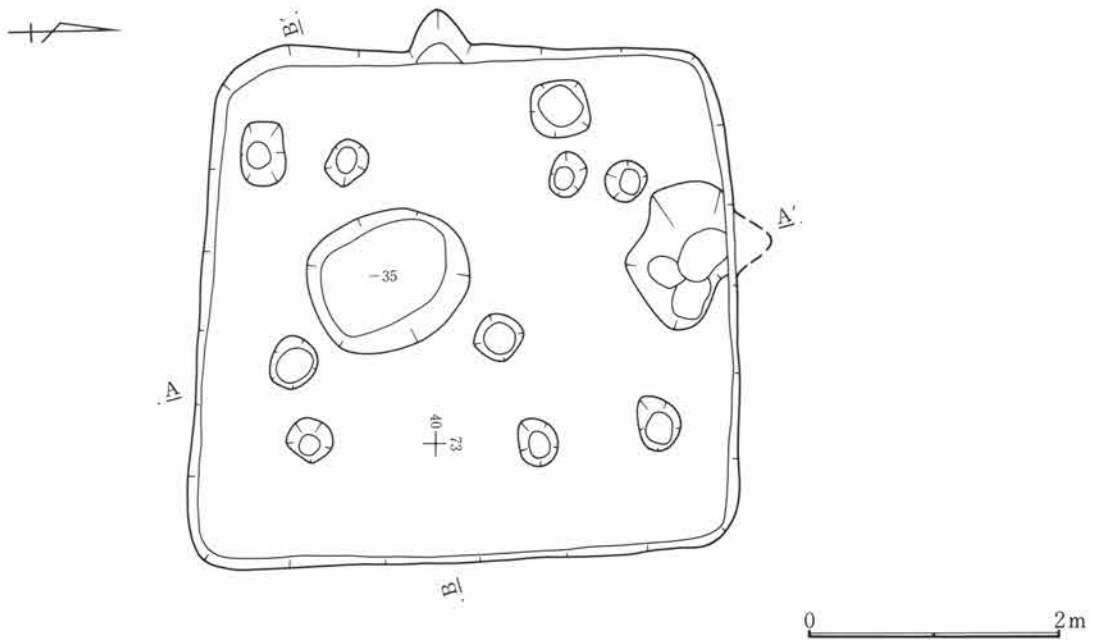
規模 東西4.13m、南北4.42mである。壁高は残りの良い北東部分で18cmである。貯蔵穴はやや楕円形を呈するが、径50×36cm深さ65cmである。柱穴1は径33cm深さ61cm、柱穴2は径33cm深さ65cm、柱穴3は径37cm深さ62cm、柱穴4は径34cm深さ50cmである。小穴1は径30cm深さ65cm、小穴2は径33cm深さ78cmである。

床下 床下土坑のほかにも多くの小穴が確認された。

遺物 新貯蔵穴周辺に多くの土師器の坏や甕が出土している。



第428図 703号住居跡実測図



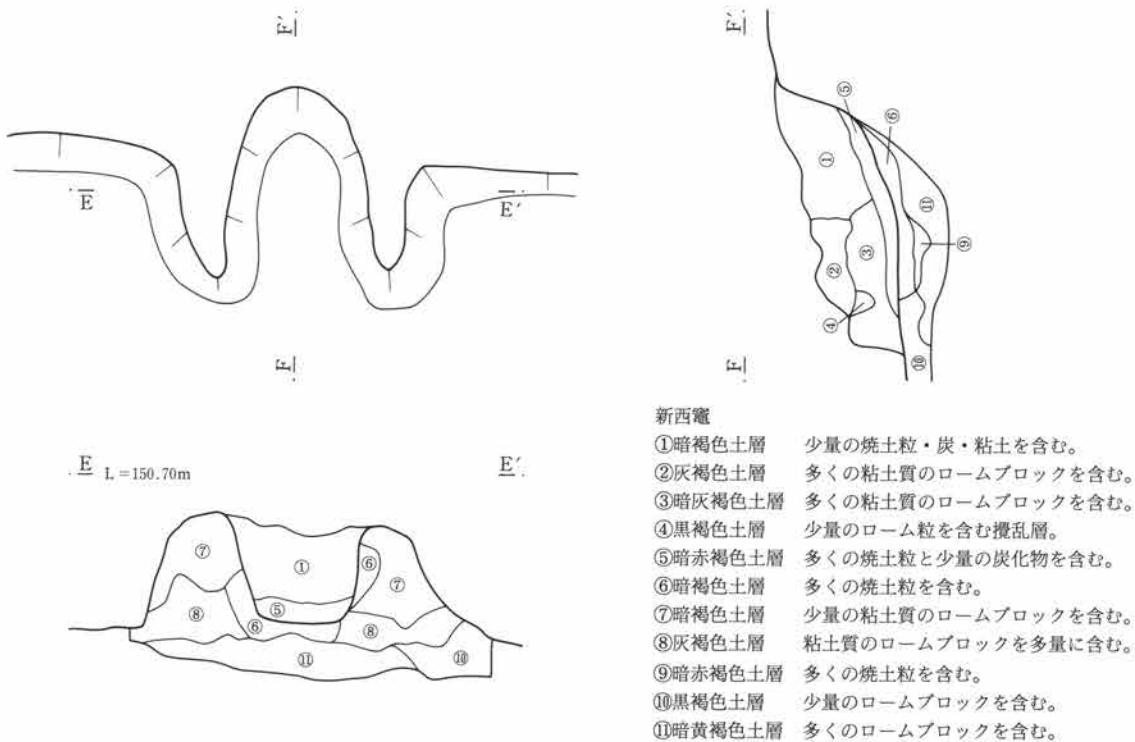
第429図 703号住居跡床下実測図

(新西竈)

位置 住居西壁南寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 粘土質のロームブロックを多く含む土で造られていた。粘土質の土を使用しているため竈内より多くの焼土粒が出土した。

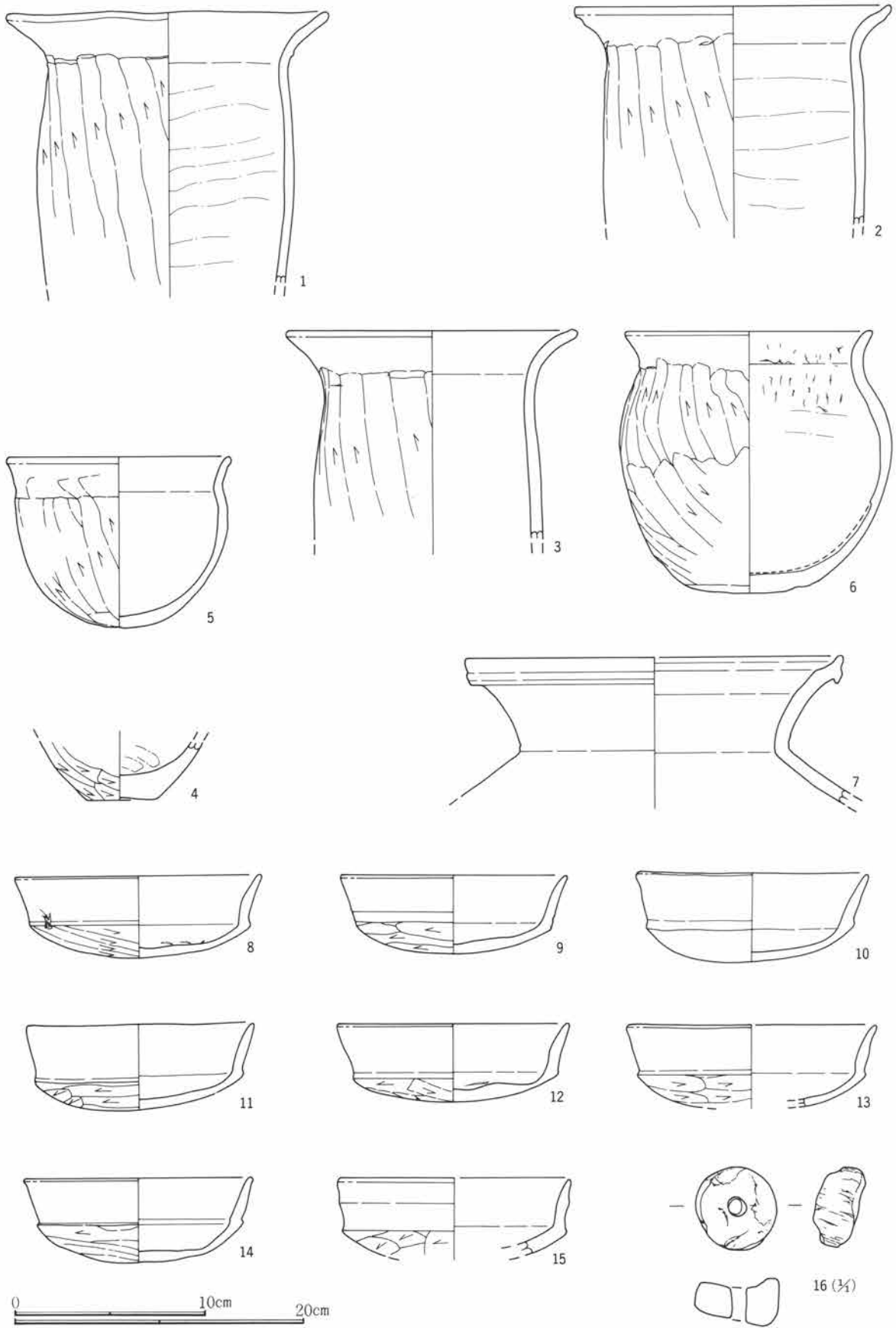
規模 煙道方向84cm、燃烧部幅52cmである。



新西竈

- ①暗褐色土層 少量の焼土粒・炭・粘土を含む。
- ②灰褐色土層 多くの粘土質のロームブロックを含む。
- ③暗灰褐色土層 多くの粘土質のロームブロックを含む。
- ④黒褐色土層 少量のローム粒を含む攪乱層。
- ⑤暗赤褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑦暗褐色土層 少量の粘土質のロームブロックを含む。
- ⑧灰褐色土層 粘土質のロームブロックを多量に含む。
- ⑨暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑩黒褐色土層 少量のロームブロックを含む。
- ⑪暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。

第430図 703号住居跡新西竈実測図



第431図 703号住居跡出土遺物実測図

703号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
431-1 106	土師器 甕	床面+10 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴 上部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 22.3 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し大量に目立つ。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内面にも多くの砂粒が目立つ。
431-2 106	土師器 甕	床面+2 口縁部ほぼ 完形胴部 $\frac{1}{2}$	口 22.1 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
431-3 106	土師器 甕	床面+18 口縁~胴上 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 20.2 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く、3~4mmの砂粒少量含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。器表面全体が粗れており多くの砂粒が目立つ。ヘラの単位不明瞭。口縁部横ナデ。
431-4	土師器 甕	覆土 底部ほぼ完 形	口 — 高 — 底 5.0	①粗、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・内面にぶい赤褐色	底面ナデ。胴下半ヘラ削り。内面ナデ。内外面とも砂粒の移動は少ないが、多く目立つ。
431-5 106	土師器 小型甕	床面+14 $\frac{1}{2}$ 残存	口 15.5 高 11.8 底 丸底	①粗、1~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③暗赤褐色	底面~胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動は少ないが、多く目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
431-6 106	土師器 小型甕	床面+10 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 17.2 高 18.1 底 8.5	①粗、2~3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面の一部黒褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭。砂粒の移動は少ない。内面のナデはわずか。 内面底部の表面が剥離している。
431-7 106	須恵器 甕	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(26.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面雑なナデ。
431-8 106	土師器 坏	床面+6 完形	口 12.8 高 4.2 底 丸底	①粗、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。多くの砂粒が目立つ。 黒斑は全く認められない。胎土が粉状を呈する。
431-9 106	土師器 坏	床面+2 完形	口 11.8 高 4.0 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。 1~3mmの赤色粒が目立つ。 黒斑全く認められず。胎土が粉状を呈する。
431-10 106	土師器 坏	床面+3 完形	口 12.2 高 4.5 底 丸底	①やや粗、1mm前後の赤色粒を多く含む。粉状を呈する。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、胎土が粉状を呈しヘラの単位不明。内側全体の表面が剥離し、赤色粒が目立つ。 黒斑は全く認められず。11の坏にほぼ同じ。
431-11 106	土師器 坏	床面+3 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.8 高 4.5 底 丸底	①やや粗、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が粉状を呈し、ヘラの単位明瞭でない。内側全体の表面が剥離し、赤色粒が目立つ。 黒斑は全く認められず。胎土が粉状を呈する。
431-12 106	土師器 坏	床面+7 ほぼ完形	口 12.1 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ、器肉の厚さが一定していない。
431-13 106	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 黒斑は認められない。胎土がやや粉状を呈する。
431-14 106	土師器 坏	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.9 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。 稜は明瞭で鋭角。口縁部横ナデ。 黒斑は全く認められず。胎土が粉状を呈する。
431-15	土師器 坏	覆土 破片	口(12.2) 高 — 底 —	①密、多くの雲母粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部の中段に弱い稜を持つ。 内面ナデにより器表面密。
431-16 108	石製品 臼	覆土 完形	幅 1.4 孔径 0.2 厚 0.8 重 2.4	③灰色	滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離し後無調整。

708号住居跡 (第432・433図、図版64)

位置 本住居跡は、第8次調査区にあり、76・77-44グリッドに位置する。

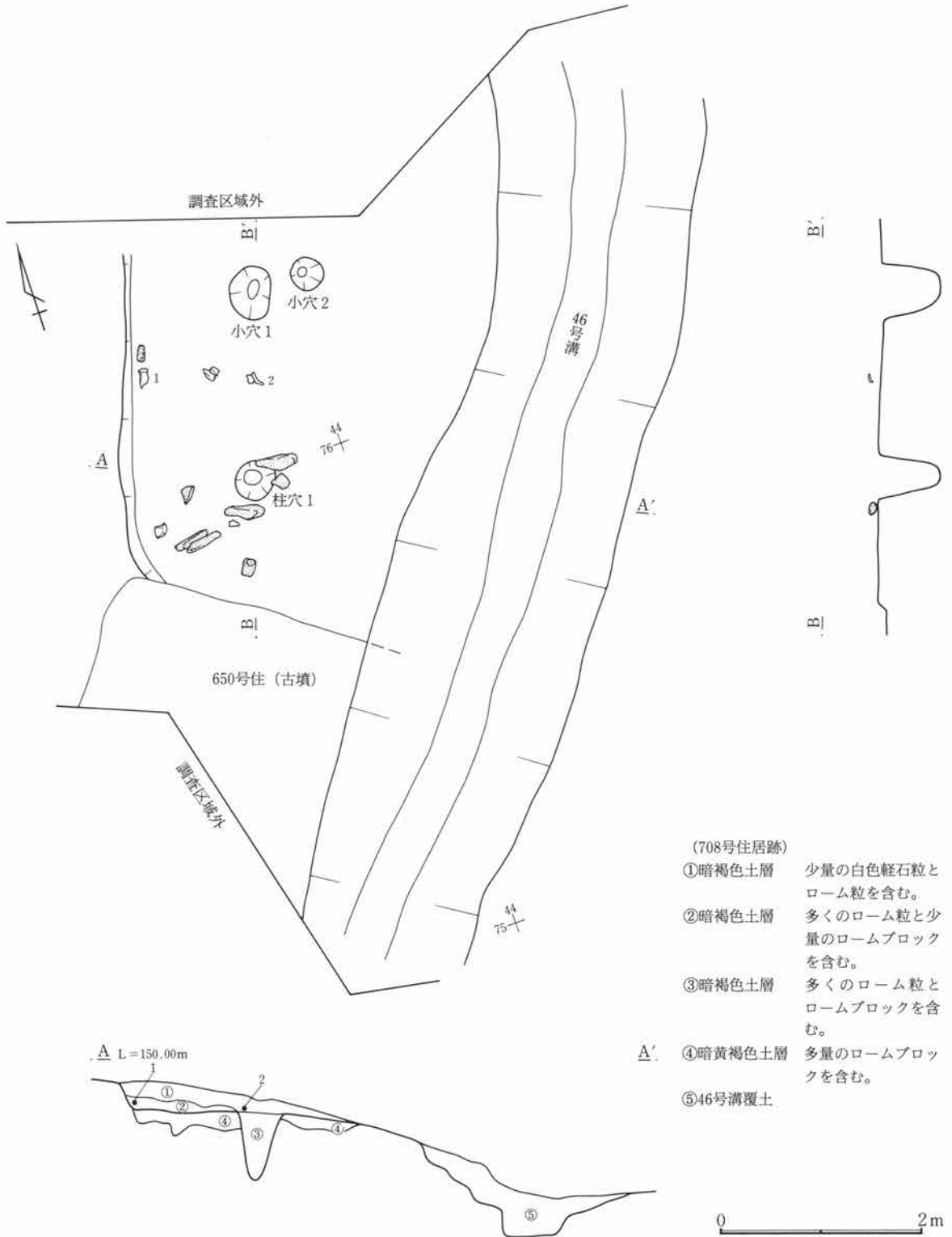
概要 東西に細長いトレンチ状の調査区域であり、住居の北側部分は調査区域外であった。同じ古墳時代の650号住居と南側部分で僅かに重複している。新旧関係は明確でないが、重複関係や出土遺物から本住居が古いと思われる。住居の東側は一段と低くなっており、地境の溝(46号溝)が掘られていた。この溝により、住居の東側の大部分が深く掘り込まれて残っていなかった。竈や貯蔵穴は不明であり、柱

第3章 古墳時代の遺構と遺物

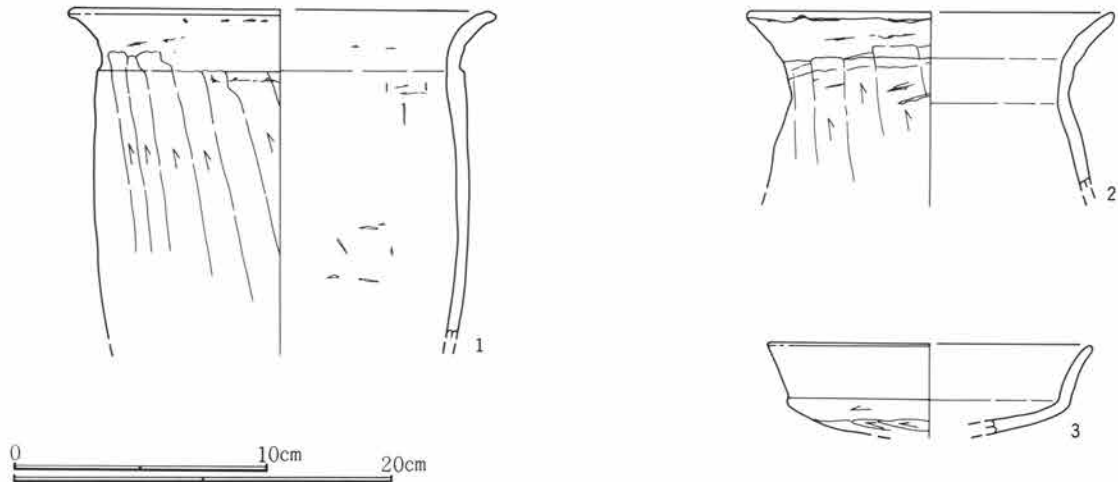
穴と思われる小穴が1本とほかに小穴が2本掘られていた。このように残りの悪い住居であった。

規模 東西南北とも不明である。壁高は西壁面で30cmである。柱穴1は径39cm深さ62cm、小穴1は径41cm深さ62cm、小穴2は径33cm深さ59cmである。

遺物 破片は多く出土しているが、図示できたのは土師器の甕と坏の3点である。



第432図 708号住居跡実測図



第433図 708号住居跡出土遺物実測図

708号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
433-1	土師器 甕	床面+10 破片	口(22.6) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③明褐色	胴部外面へラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
433-2	土師器 甕	床面+8 破片	口(19.7) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③明褐色	胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。外面の一部に輪積痕残る。
433-3	土師器 坏	覆土 破片	口(13.8) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面弱いへラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。胎土が粉状を呈する。

718号住居跡 (第434・435図、図版64・106)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、40-82グリッドに位置する。

概要 西側の谷地に向かって低くなる傾斜面に造られている。本住居から西側はさらに傾斜が強くなるためか住居は造られていない。同じ古墳時代の719号住居と重複しており、本住居が719号住居の北西部分の床面上の覆土を掘り込んで造られている。住居西側に62号溝が掘られており、この溝により718・719号住居の西側が削り取られ、溝の西側は傾斜面で低くなり両住居とも残っていなかった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られていたが、明瞭でなかった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北3.10mである。壁高は残りの良い北壁面部分で18cmである。

遺物 多くの破片は出土しているが、図示できたのは土師器の甕と坏の破片2点である。

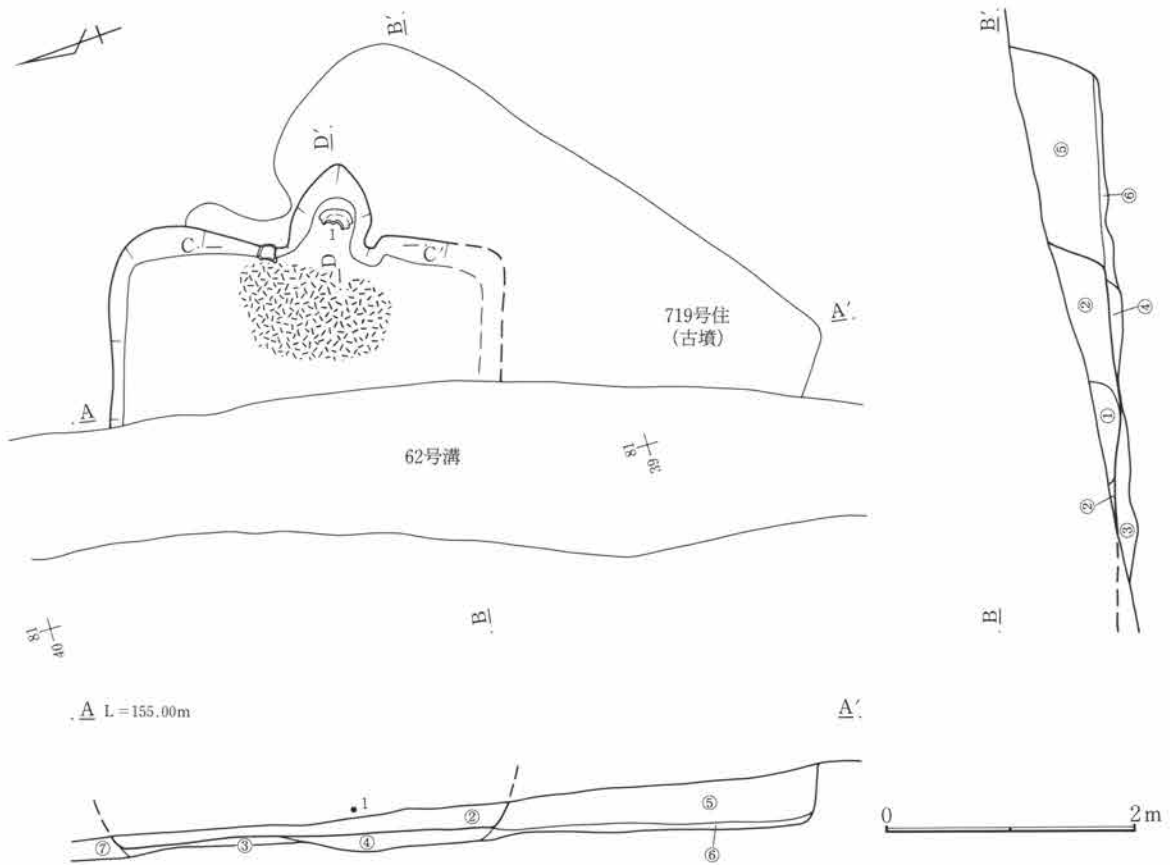
(竈)

位置 住居東壁に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

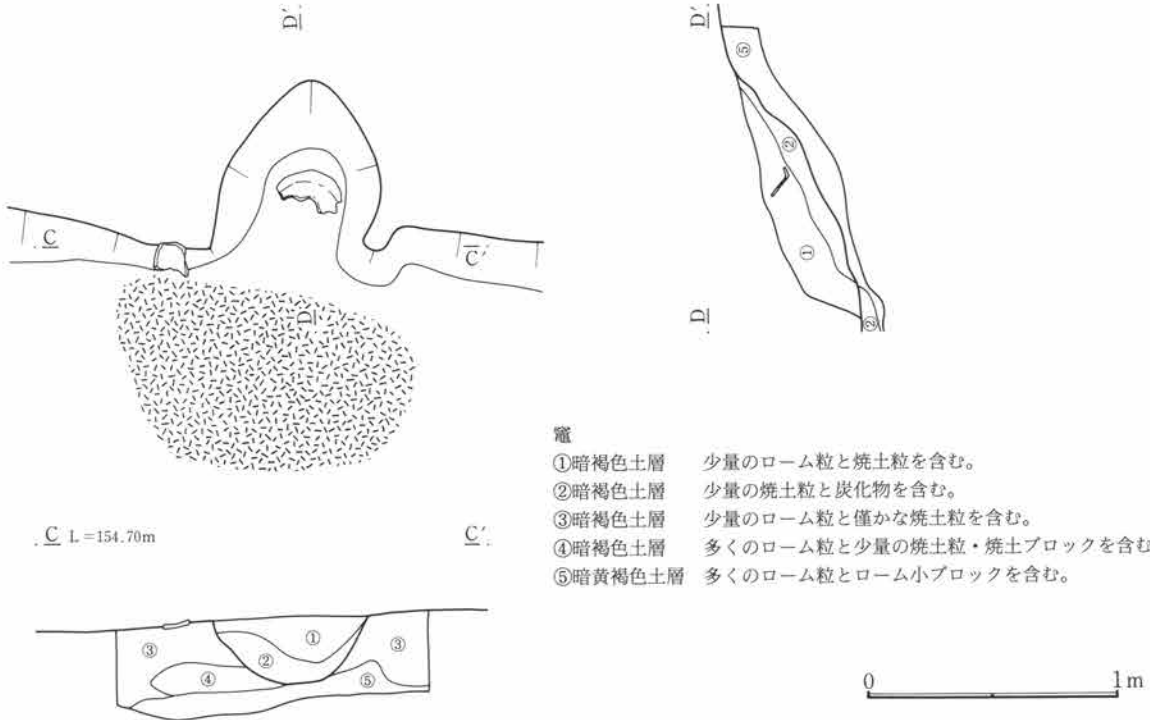
構造 ローム粒の混入した土で造られており、耕作面に近いためか良好な状態での検出はできなかった。竈内より土師器の甕が出土したが、袖石や天井石等は出土しなかった。焼土粒は全体に少量認められたが、竈内からまとまった出土は認められなかった。焚口付近の床面に多くの炭と少量の焼土粒の散布が認められた。

規模 煙道方向78cm、燃焼部幅56cmである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



- (718号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒を含む。(耕作溝覆土)
 - ②暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
 - ③暗黄褐色土層 ロームを主体とした層。少量の炭化物を含む。
 - ④暗黄褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
 - ⑤719号住居覆土
 - ⑥719号住居床下覆土



- 竈
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
 - ③暗褐色土層 少量のローム粒と僅かな焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・焼土ブロックを含む。
 - ⑤暗黄褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第434図 718号住居跡・竈実測図



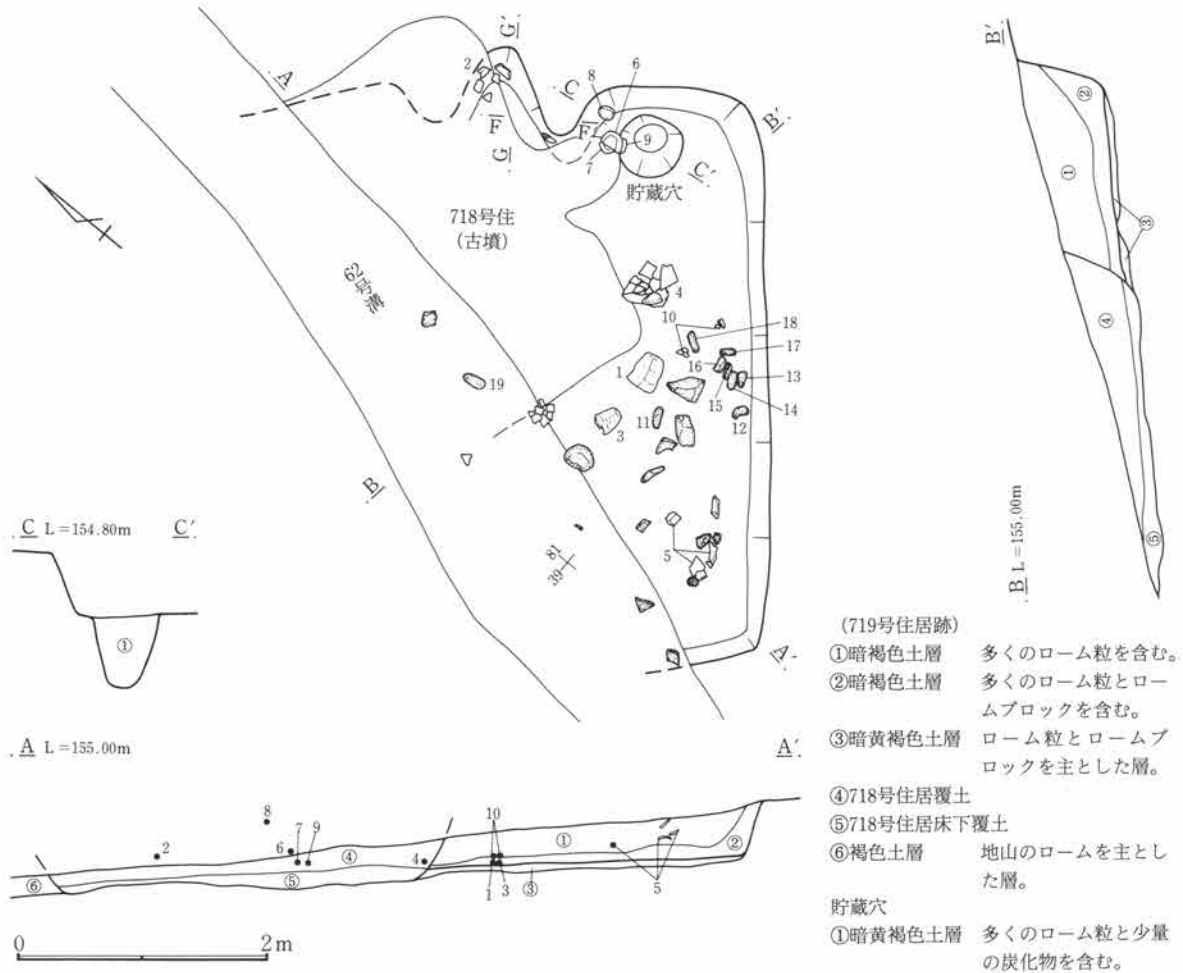
第435図 718号住居跡出土遺物実測図

718号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
435-1 106	土師器 甕	竈内+25 口縁~胴上 部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(21.4) 高— 底—	①粗、3~4mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面やや斜め方向のへら削り。多くの砂粒が目立ち表面粗い。口縁部に輪積痕が一部残る。
435-2	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.2) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細かいへら削り。口縁部横ナデ。口縁部が短い。内面ナデにより器表面密。黒斑認められない。

719号住居跡 (第436~440図、図版64・106・107・115)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、40-82グリッドに位置する。



第436図 719号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

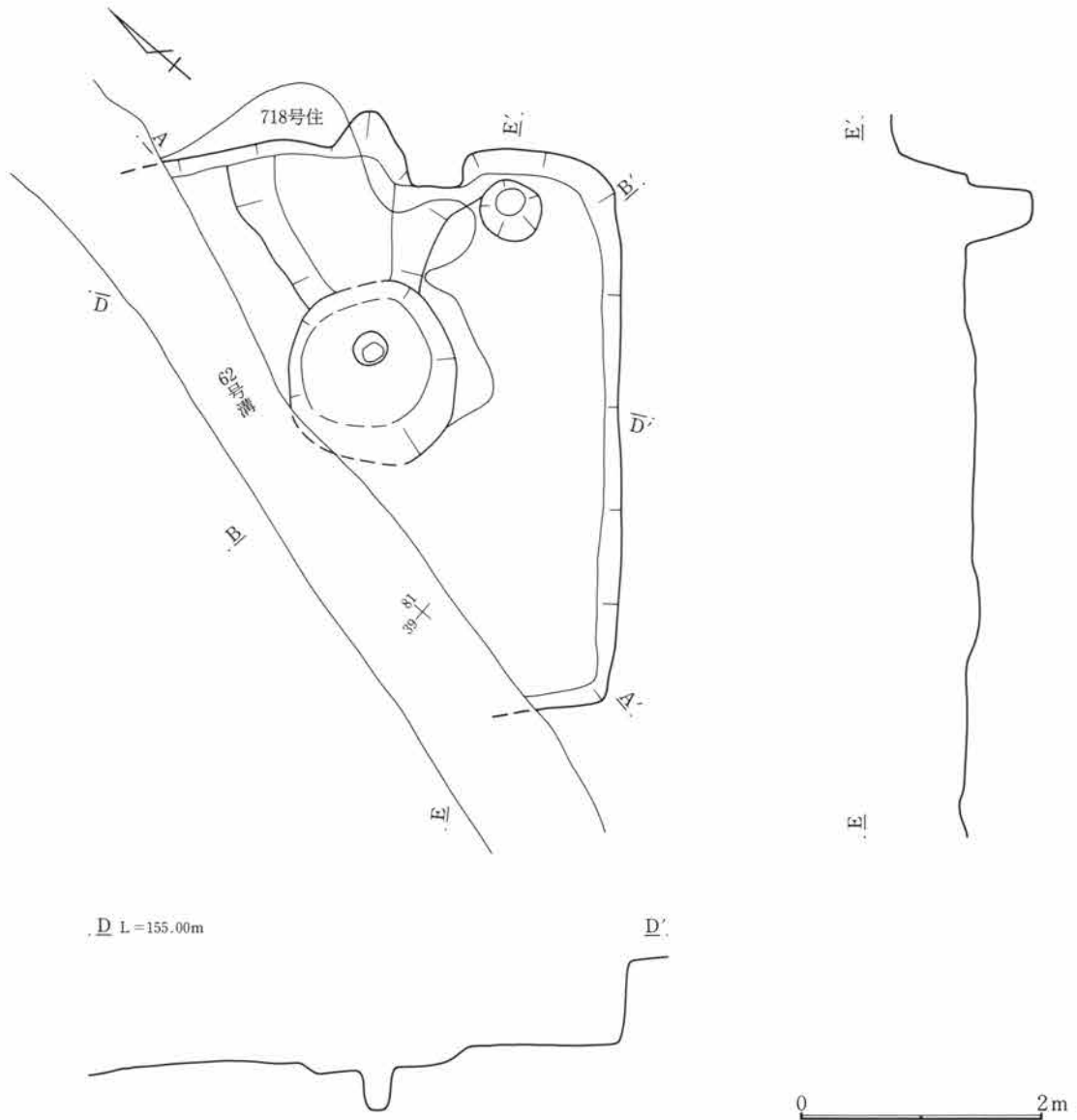
概要 西側の谷地に向かって低くなる傾斜面に造られている。本住居から西側はさらに傾斜が強くなるためか住居は造られていない。同じ古墳時代の718号住居と重複しており、718号住居により本住居の竈部分を含む北西部分を床面上まで掘り込まれている。住居西側に62号溝が掘られており、この溝により718・719号住居の西側が削り取られ、溝の西側は傾斜面で低くなり両住居とも残っていなかった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られており、比較的良好な状態で確認された。柱穴は掘られていなかったが、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西不明、南北4.54mである。壁高は残りの良い東壁面部分で59cmである。貯蔵穴は径50cm深さ46cmである。

床下 竈焚口付近に径1.5m床面からの深さ16cmの床下土坑が、またこの床下土坑の中央に径38cm床面からの深さ61cmの小穴が1本掘られていた。

遺物 多くの遺物が出土している。5は一部を欠損している提瓶で、住居からの出土は珍しい。



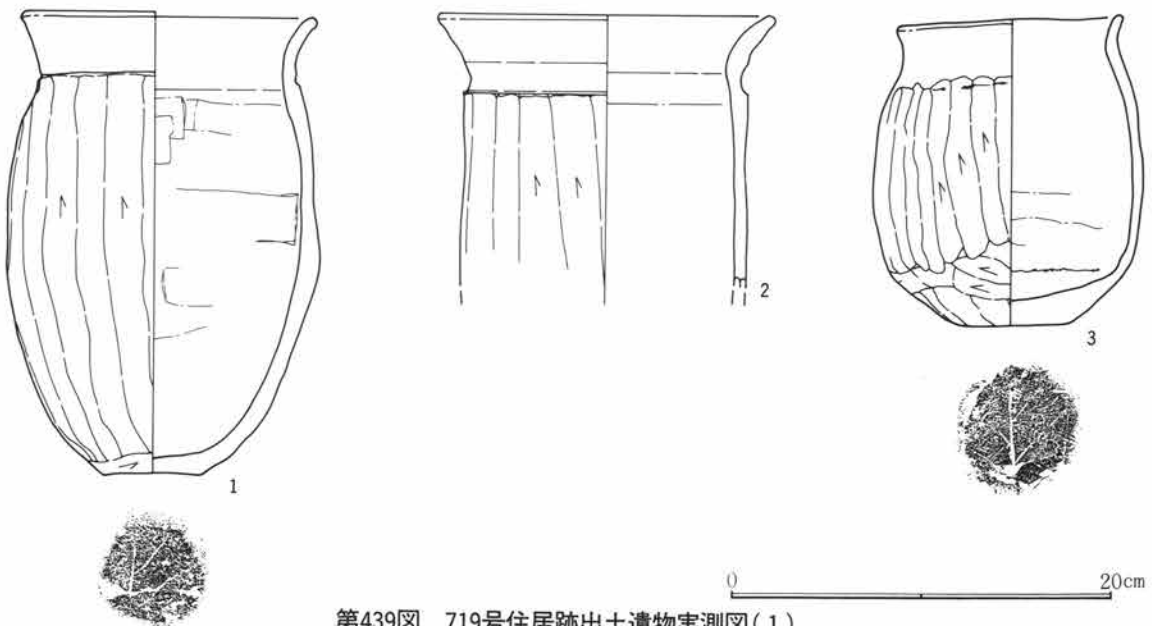
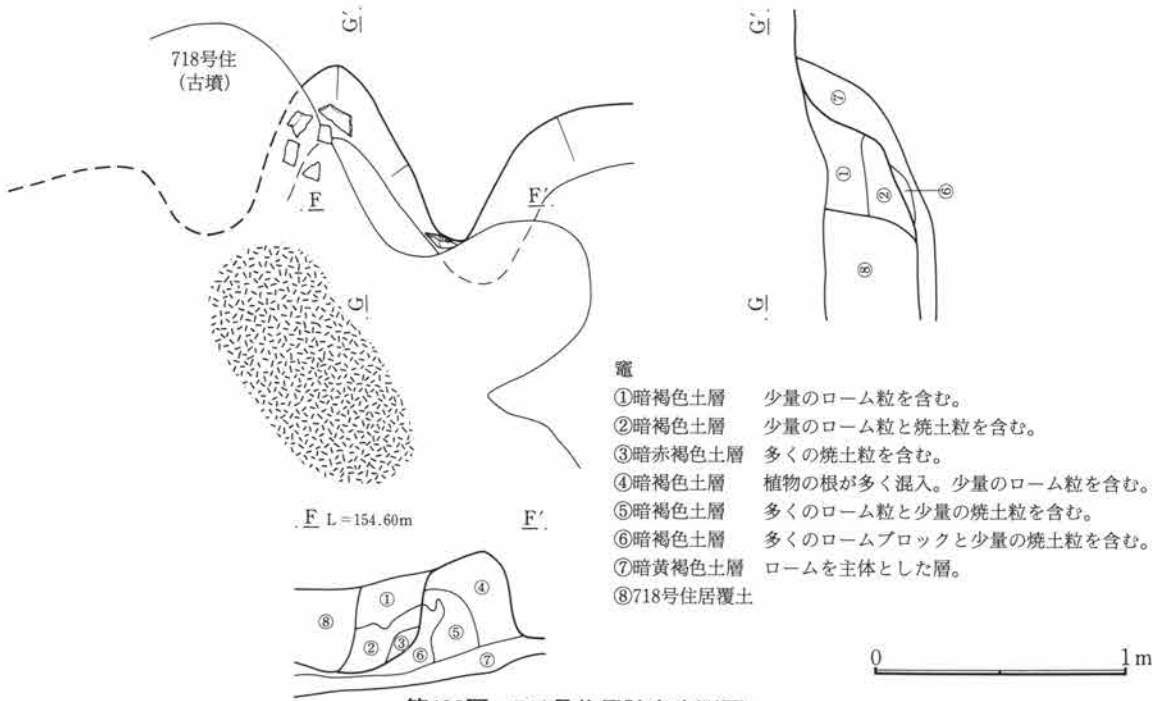
第437図 719号住居跡床下実測図

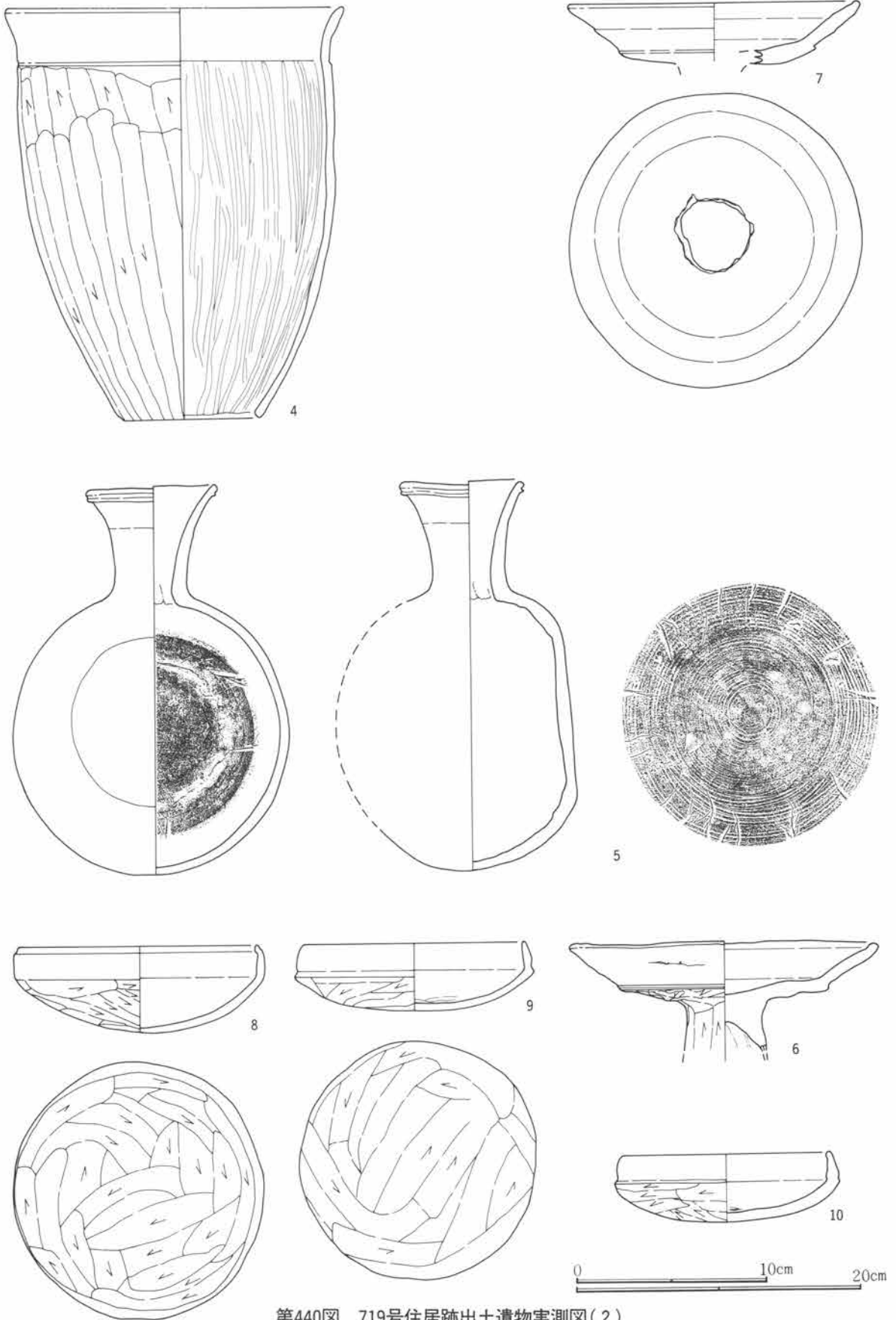
(竈)

位置 住居北壁面に造られている。燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒の混入した土で造られていたが、燃焼部の多くや竈左袖部分が718号住居により削り取られており残りは悪かった。竈内より土師器の甕の破片は出土したが、袖石や天井石等は出土しなかった。焼土粒は全体に少量認められたが、竈内からまとまった出土は認められなかった。718号住居により削り取られた左袖部分周辺に多くの炭の散布が認められた。

規模 煙道方向推定83cm、燃焼部幅は不明である。





第440図 719号住居跡出土遺物実測図(2)

719号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
439-1 106	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 15.6 高 24.7 底 5.2	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・外面一部黒褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒は目立つが、移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴中央部の器肉が厚い。
439-2 106	土 師 器 甕	甕内+2 口縁部 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.2 高 一 底 一	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面強いヘラ削りにより器肉を削っている。ヘラ削り後頸部を強く横ナデし凹状を呈する。口縁部横ナデ。
439-3 106	土 師 器 小 型 甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.2 高 16.4 底 6.0	①やや粗、1～2mmの砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラナデ。1mm以下の砂粒が多く移動している。口縁部横ナデ。内面ナデ。
440-4 107	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 24.0 高 29.3 底 10.0	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。表面の一部が斑点状に剝離している。
440-5 107	須 恵 器 提 瓶	床面+16 口縁部完形 胴～底部 $\frac{1}{2}$	口 9.5 高 27.3 底 一	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②還元焰、硬質 ③断面明褐色・表面灰色	長頸の口縁部に、横瓶に似た胴～底部を持つ。平らな部分と周辺にカキ目が明瞭に残る。表面に多くの自然釉が認められる。
440-6 106	土 師 器 高 坏	床面+8 坏部残存	口 16.5 高 一 底 一	①やや粗、1～2mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③外面橙色・内面の一部黒色	脚部外面強いヘラ削り。内面指によるナデ。坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。7の高坏の坏部と似ている。
440-7 107	土 師 器 高 坏	床面直上 坏部完形	口 15.5 高 3.1 底 丸底	①やや粗、1～2mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。口縁部横ナデ。底部中央は壺状に小穴のなっており、面取りしている。坏底部にヘラ削りなし。高坏の脚部との接合前の坏である。
440-8 107	土 師 器 坏	床面+32 完形	口 13.0 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。口縁部上端の両面に1条の沈線あり。ていねいなつくりの坏である。
440-9 107	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 12.0 高 3.5 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。ヘラの単位明瞭。口縁部横ナデ。硬い焼成であり、砂質の坏である。
440-10 107	土 師 器 坏	床面+3 $\frac{3}{4}$ 残存	口 11.4 高 3.6 底 丸底	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒と粘土が移動し器表面やや粗い。口縁部横ナデ。内側底面にヘラの庄痕あり。黒斑認められない。胎土が砂質である。
11 115	こも編み石	床面+4	長 13.6 幅 7.0 厚 5.2 重 700		安山岩。断面が台形を呈し、肉厚である。片側の側面中央部にわずかな凹状を持つ。
12 115	こも編み石	床面+4	長 13.8 幅 7.2 厚 4.0 重 600		流紋岩。不定形な石である。片側面中央部が大きく凹凸を呈する。
13 115	こも編み石	床面+3	長 14.9 幅 6.9 厚 4.5 重 700		安山岩。形の整った石である。両側面とも明瞭な凹状は認められない。
14 115	こも編み石	床面+4	長 16.1 幅 6.8 厚 5.5 重 850		安山岩。断面が三角形に近い肉厚の石である。側面に明瞭な凹状部は認められない。
15 115	こも編み石	床面+4	長 14.8 幅 6.1 厚 5.2 重 650		絹雲母石墨片岩。断面が三角形に近い肉厚の石である。側面にわずかな凹状が認められる。
16 115	こも編み石	床面直上	長 15.5 幅 6.2 厚 5.7 重 780		玢岩。断面が台形に近い形の石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
17 115	こも編み石	床面+3	長 15.0 幅 6.9 厚 4.7 重 680		流紋岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈す。
18 115	こも編み石	床面+6	長 15.9 幅 6.8 厚 3.6 重 620		安山岩。楕円形の偏平な石である。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。
19 115	こも編み石	床面+5	長 15.7 幅 7.8 厚 4.5 重 830		安山岩。楕円形の肉厚な石である。片側の側面がわずかな凹状を呈する。

723号住居跡 (第441~444図、図版65・107)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、41-82・83グリッドに位置する。

概要 西側の谷地に向かって低くなる傾斜面に造られている。南側部分の残りは良いが、低い北側、特に北西部分は床面の一部まで削られて残っていなかった。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られており、比較的良好な状態で確認された。柱穴は掘られていなかったが、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.88m、南北3.14mである。壁高は残りの良い南壁面部分で43cmである。貯蔵穴は径60cm深さ51cmである。

床下 中央付近に2つの床下土坑が掘られていた。

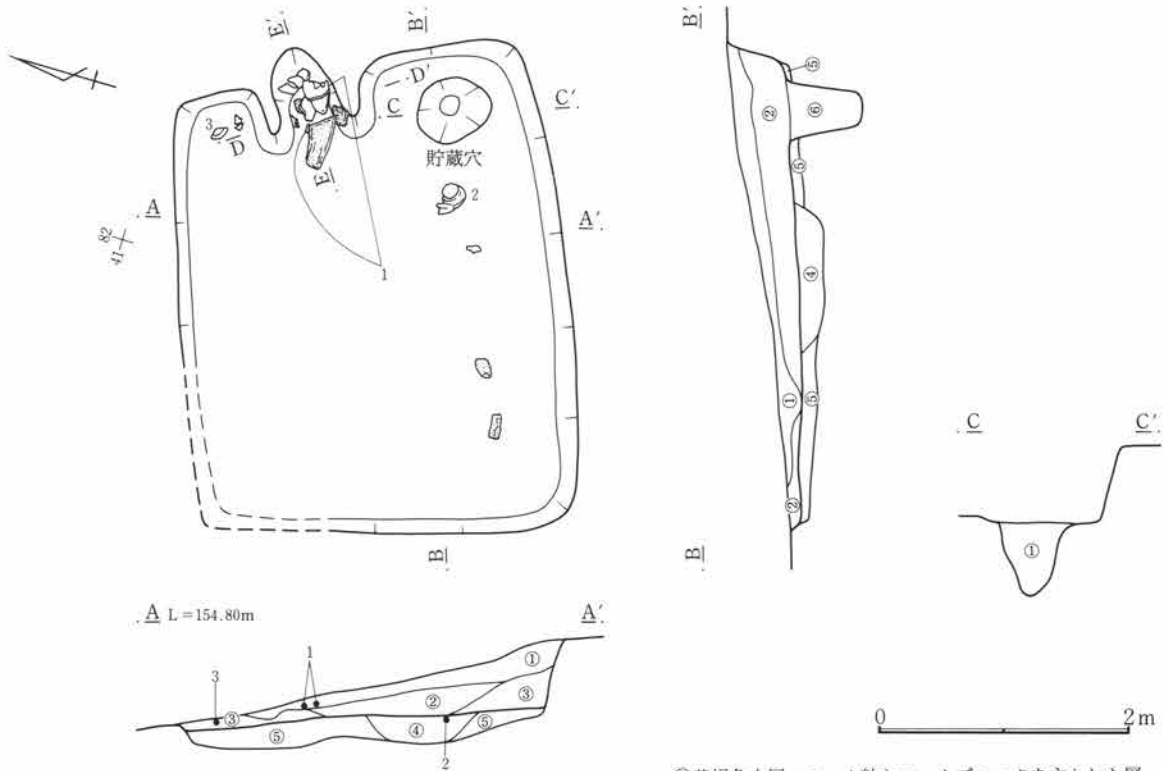
遺物 竈内や貯蔵穴周辺から少量の土師器の甑や甕等が出土している。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。燃烧部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。

構造 右袖部分に袖石がほぼ据えられた状態で出土したが、左の袖石は残っていなかった。焚口部分に天井石が落ちていた。袖石部分はローム粒の混入した土で造られていた。焼土粒は全体に少量認められたが、竈内からまとまった出土は認められなかった。

規模 煙道方向85cm、燃烧部幅38cmである。



(723号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。

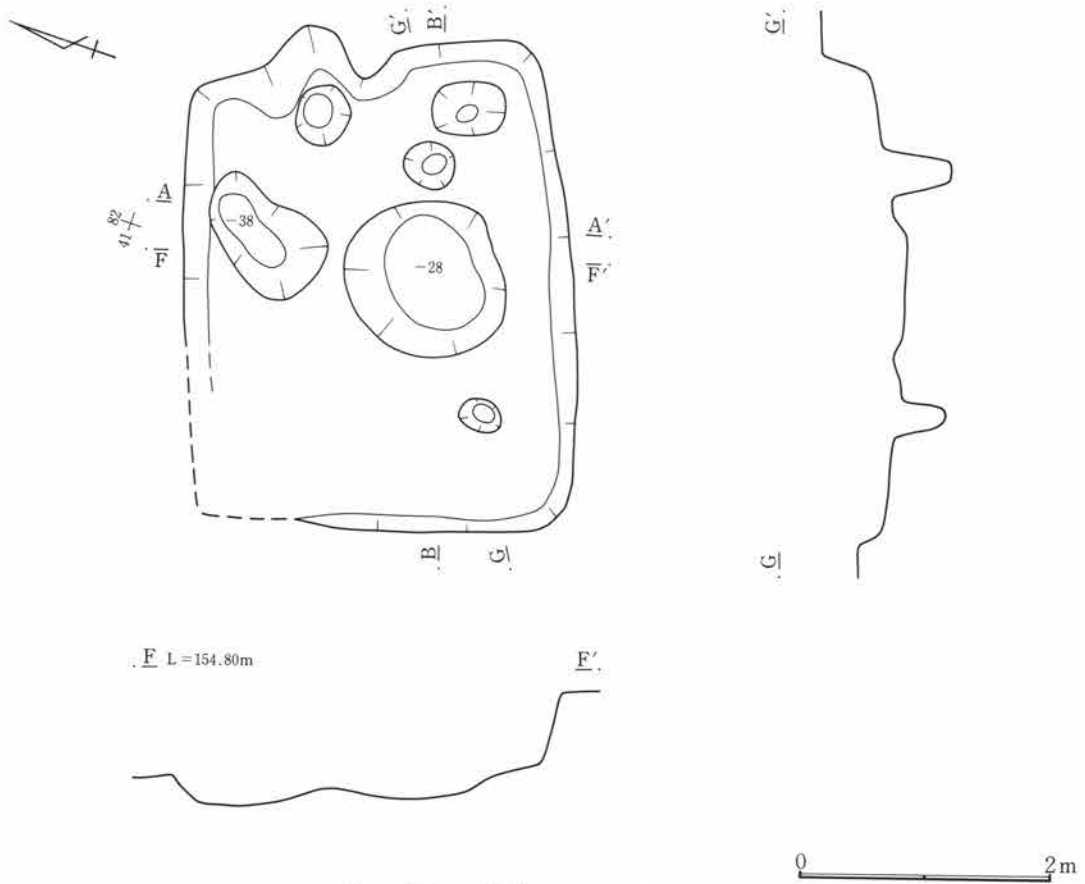
⑤黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。

⑥貯蔵穴覆土

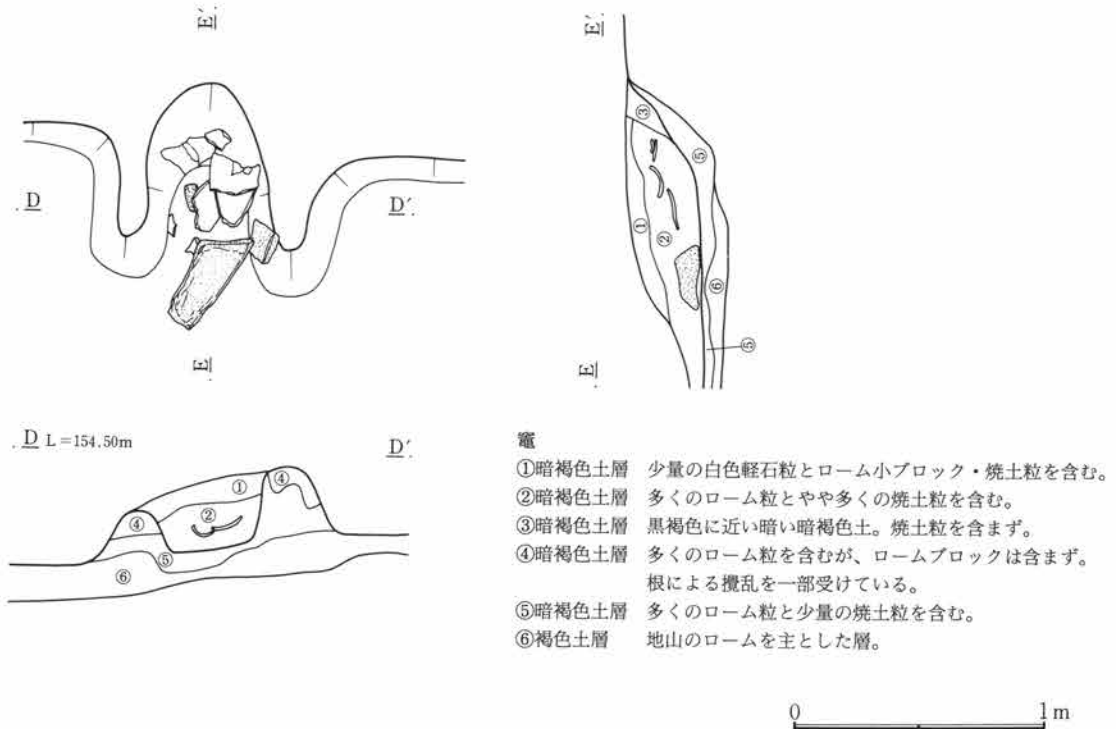
貯蔵穴

①暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第441図 723号住居跡実測図



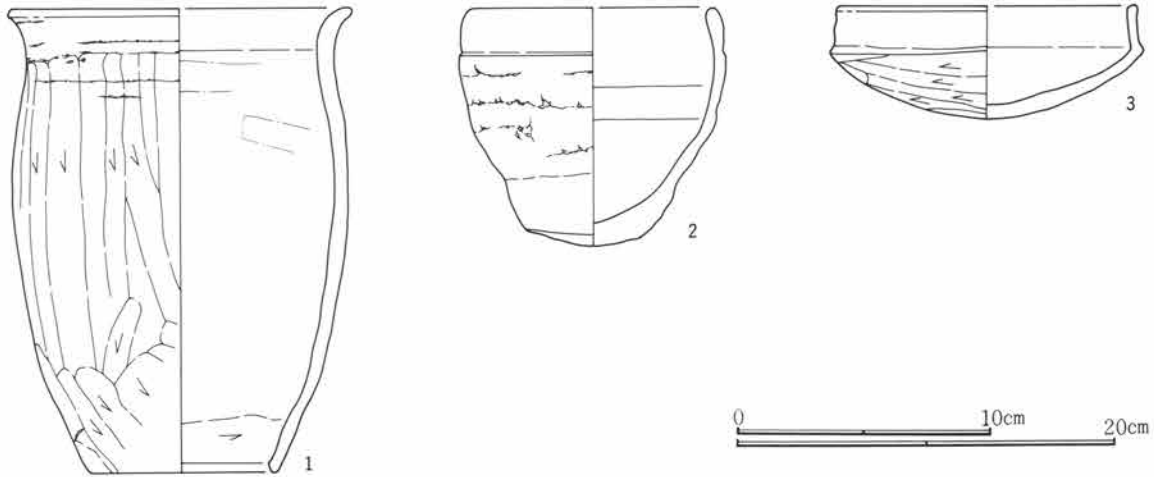
第442図 723号住居跡床下実測図



- 竈
- ①暗褐色土層 少量の白色軽石粒とローム小ブロック・焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒とやや多くの焼土粒を含む。
 - ③暗褐色土層 黒褐色に近い暗い暗褐色土。焼土粒を含まず。
 - ④暗褐色土層 多くのローム粒を含むが、ロームブロックは含まず。根による攪乱を一部受けている。
 - ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ⑥褐色土層 地山のロームを主とした層。

第443図 723号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第444図 723号住居跡出土遺物実測図

723号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
444-1	土 師 器 甕	竈内+12 1/2残存	口(18.3) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	胴部外面へラ削りで、多くの砂粒が移動し粗い。口縁部横ナデ。頸部付近に輪積痕残る。内面でいねいなナデ。
444-2 107	土 師 器 小型 甕	床面直上 1/2残存	口(12.5) 高 12.5 底 6.0	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面明赤褐色・外面赤褐色	底面ナデ。胴部外面ナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。他に出土例を見ない特異な器である。
444-3 107	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口(14.0) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面へラ削り。砂粒の移動は少ないが、器表面は粗い。口縁部横ナデ。口唇部は平らで内傾している。

725号住居跡 (第445～447図、図版65・107・110)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、42-84グリッドに位置する。

概要 西側の谷地に向かって低くなる傾斜面に造られている。南側部分の残りは良いが、低い北側部分は壁面と床面が削られて残っていなかった。3軒の重複する住居であり、本住居が最も古い。東壁面の竈右側部分で同じ古墳時代の726号住居と重複し、床面部分まで掘り込まれていた。また住居中央部北側を奈良時代の724号住居により、床下部分まで深く掘り込まれていた。新旧関係は725→726→724号住居である。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られており、比較的良好な状態で確認された。貯蔵穴は確認できなかったが、柱穴が4本掘られていた。

規模 東西4.24m、南北は不明である。壁高は残りの良い南壁面部分で48cmである。柱穴1は径39cm深さ54cm、柱穴2は径36cm深さ75cm、柱穴3は径33cm深さ56cm、柱穴4は径27cm深さ63cmである。

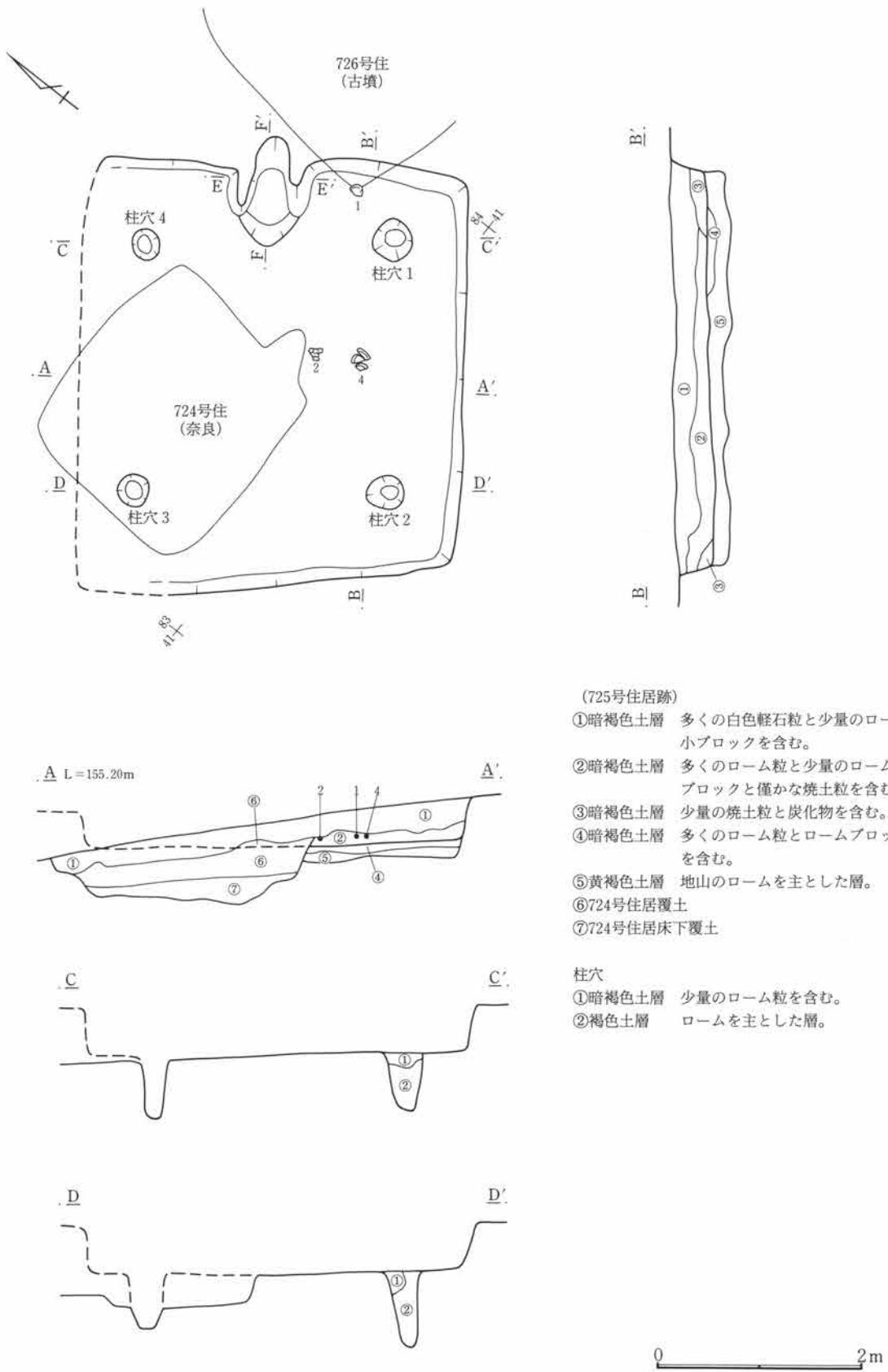
遺物 4の須恵器の坏は出土例が多くなく貴重である。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。

構造 袖部は袖石等を使用しないで、灰褐色粘土を多く用いて造られていた。粘土が使われていたためか燃焼部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向74cm、燃焼部幅43cmである。



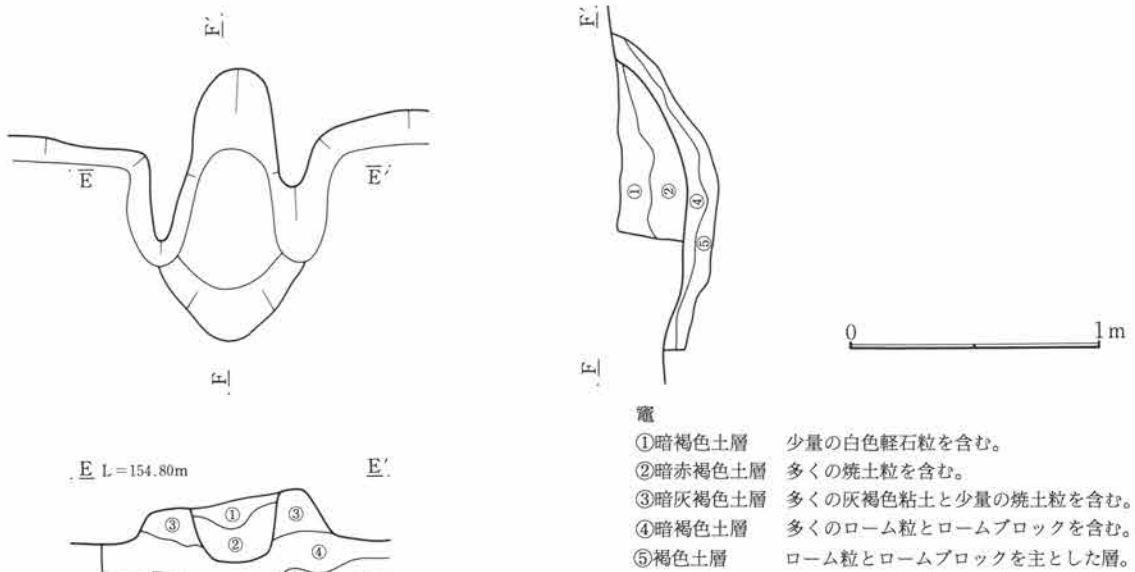
(725号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブロックを含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックと僅かな焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑥724号住居覆土
- ⑦724号住居床下覆土

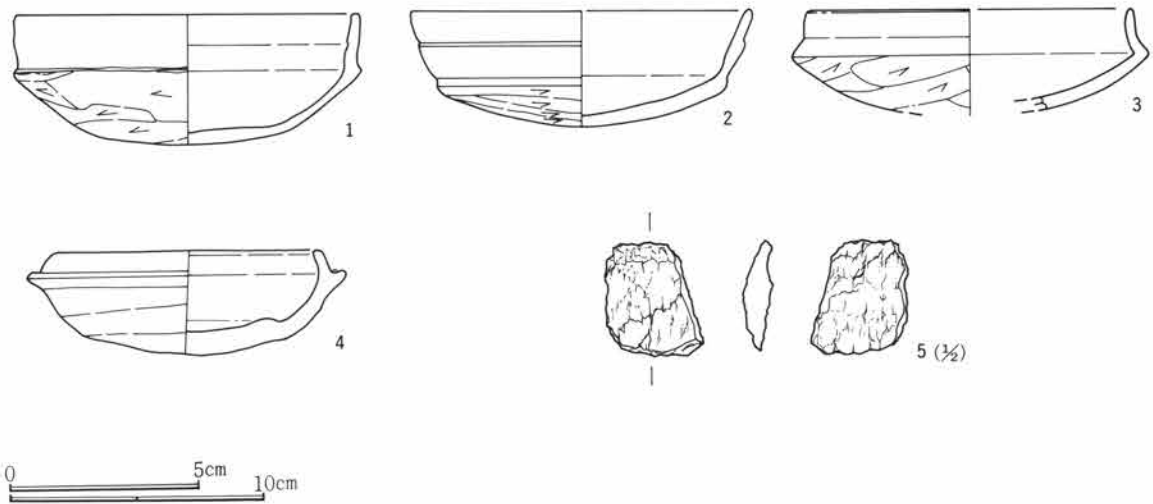
柱穴

- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ②褐色土層 ロームを主とした層。

第445図 725号住居跡実測図



第446図 725号住居跡竈実測図



第447図 725号住居跡出土遺物実測図

725号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
447-1 107	土 師 器 坏	床面直上 1/2残存	口 13.8 高 5.1 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面幅の広いヘラによる削り。砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 内側底面中央部にヘラの圧痕あり。
447-2 107	土 師 器 坏	床面直上 3/4残存	口(13.6) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒色・断面にぶい橙色	底面幅の広いヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、器表面がやや粗い。有段口縁の坏である。
447-3	土 師 器 坏	覆土 口縁~底部 周辺1/2残存	口(12.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい 橙色・口縁~内面部分的に黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。 口縁部外面~内面全体に黒漆と異なる痕跡あり。
447-4 107	須 恵 器 坏	床面直上 1/2残存	口 10.4 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③灰色	外面底部中央にヘラ切時に出来る凸凹面あり。底面中央部へ 削り。内側底面横方向ナデ。 全体に雑な感じの坏である。
447-5 110	石 製 品 火打石?	覆土 完形	長 2.8 幅 2.6 厚 0.8 重 8.4	③浅黄橙色	小さな石英(?)の破片である。火打石の可能性もあるが不明。 角は使用されていなく鋭利である。

726号住居跡 (第448～450図、図版65・66・107)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、42—85グリッドに位置する。

概要 南西コーナー部分で同じ古墳時代の725号住居と重複し、本住居が725号住居の壁面部分を床面近くまで掘り込んでいる。非常に小さな住居であり、室内が狭いためか竈は南東コーナー部分に造られていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られており、比較的良好な状態で確認された。柱穴と貯蔵穴は掘られていなかった。床下調査により南西コーナーに近い部分に浅い小穴が確認された。

規模 東西2.80m、南北2.46mである。壁高は残りの良い東壁面部分で32cmである。

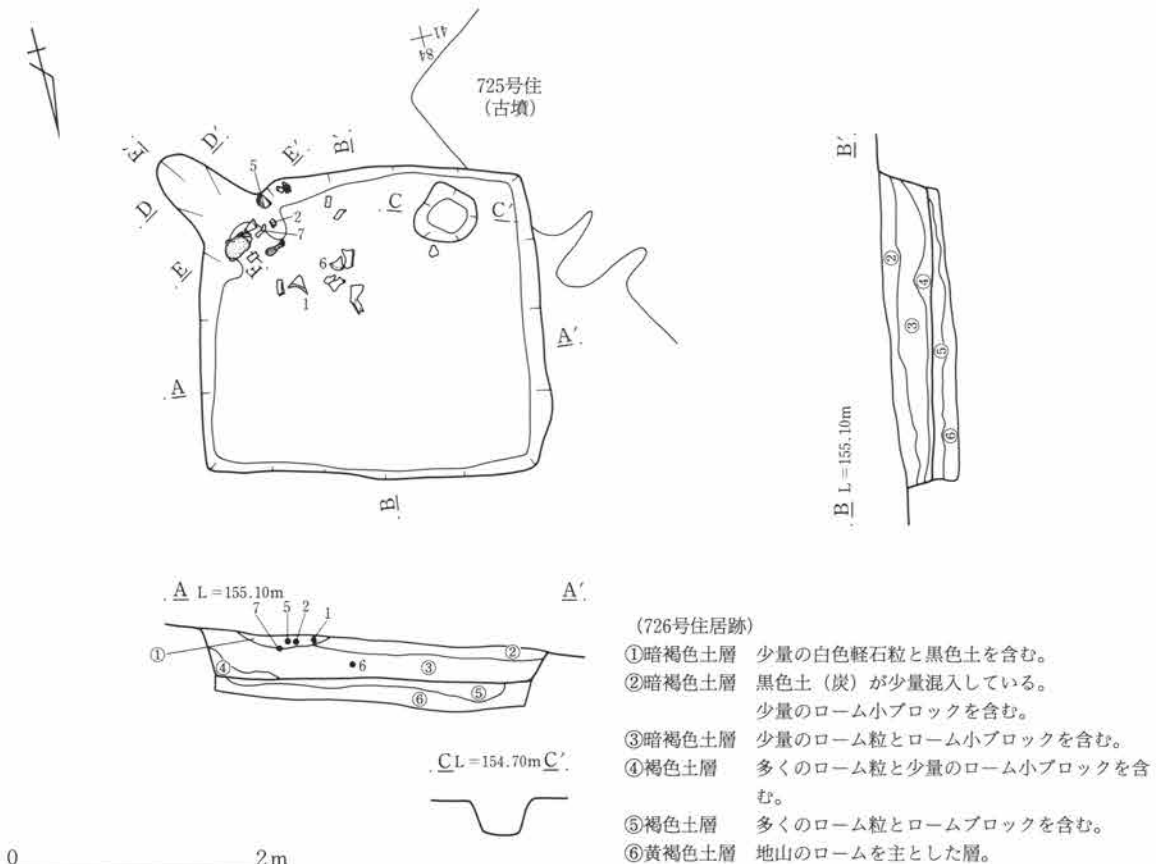
遺物 竈周辺に多くの土師器の甕や坏の破片が出土したが、図示できた遺物は多くない。

(竈)

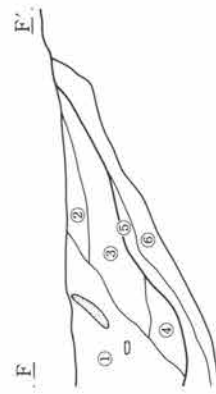
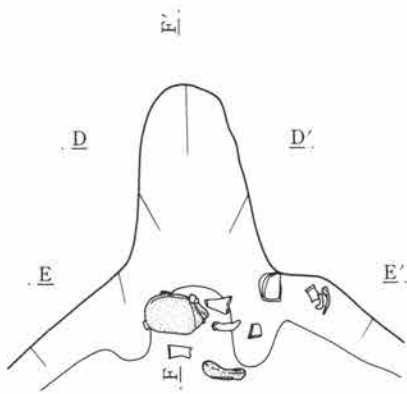
位置 住居南東コーナー部分に造られている。燃烧部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を深く掘り込んで造られていた。

構造 短い袖部は袖石等を使用しないで、ロームを多く用いて造られていた。覆土上面に天井石とも思われる石が出土したが明らかでない。竈の造られた部分は壁面も深く残りが良好であったにもかかわらず、床面上に位置する袖部の多くは残っていない、竈内の焼土粒の出土も少なかった。住居が放棄された段階で、すでに竈は壊されたのではないだろうか。

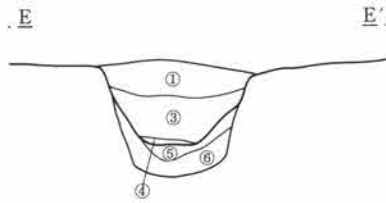
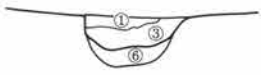
規模 煙道方向114cm、燃烧部幅58cmである。



第448図 726号住居跡実測図



D L = 155.10m D'

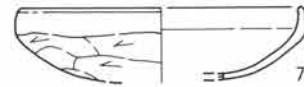
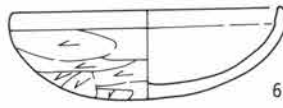
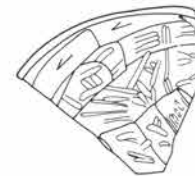
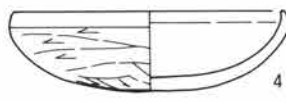
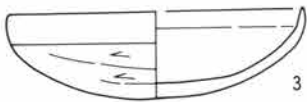
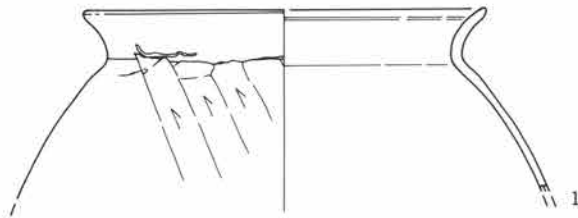


竈

- ①暗褐色土層 黒色土（炭）が少量混入している。少量のローム小ブロックと焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とやや多くの焼土粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 ローム粒を主とし少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 ローム粒と暗褐色土がほぼ一様に混入した層。少量の焼土粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

0 1m

第449図 726号住居跡竈実測図



0 10cm 20cm

第450図 726号住居跡出土遺物実測図

726号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
450-1	土師器 壺	床面+22 破片	口(21.7) 高— 底—	①やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部外面弱いヘラ削り。砂粒の移動少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
450-2	土師器 坏	竈内+26 口縁~体部 1/3残存	口(15.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り後ヘラ磨き。口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。
450-3 107	土師器 坏	竈内覆土 1/3残存	口(12.0) 高3.3 底丸底	①密 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにより器表面密。 黒斑は認められない。胎土がやや粉状を呈する。
450-4 107	土師器 坏	掘り方覆土 1/3残存	口11.0 高3.1 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 胎土は粉状でない。
450-5 107	土師器 坏	竈内+28 1/3残存	口(11.0) 高3.7 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが器表面やや粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 底部外面に吸炭による黒斑あり。
450-6 107	土師器 坏	床面+10 1/3残存	口11.0 高3.5 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位明瞭。短い口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 黒斑は全く認められず。胎土が粉状を呈する。
450-7	土師器 坏	床面+14 1/3残存	口(13.2) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面強いヘラ削り。削りの単位明瞭。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 黒斑は認められない。

738号住居跡(第451~453図、図版66)

位置 本住居跡は、第11次調査区にあり、38・39—86グリッドに位置する。

概要 住居の南側は調査区域外にあたるため、その部分の調査はできなかった。北側を65・66号溝により、覆土と一部床面及び壁面が掘り込まれていた。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は掘られていなく、貯蔵穴は南東コーナー部分が調査区域外のため、掘られていたかは確認できなかった。

規模 東西4.72m、南北不明である。壁高は残りの良い東壁面部分で36cmである。

床下 床下調査により床面中央部に床下土坑が、また壁面近くの床下に多くの小穴が確認された。

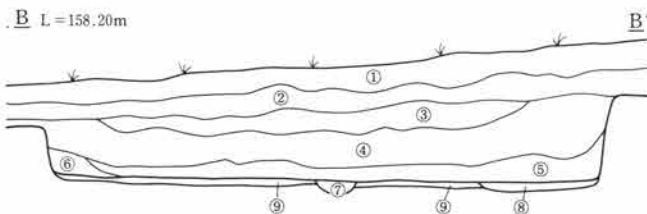
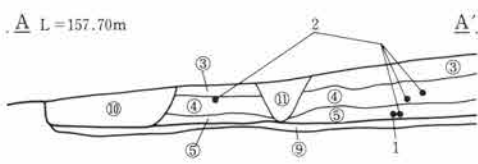
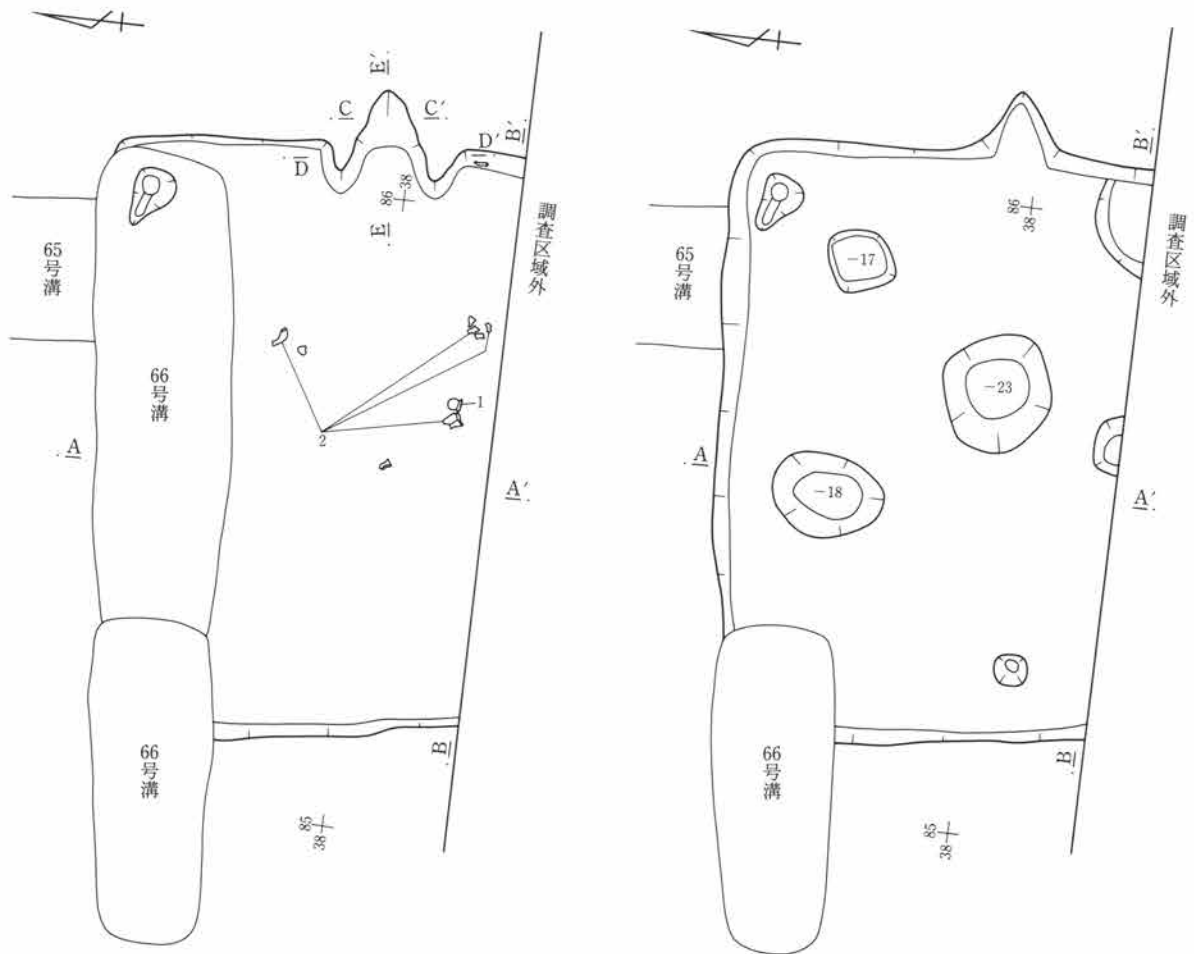
遺物 竈手前部分に土師器の甕が出土している。図示した甕と破片全てを含めても総数は10点と少ない。

(竈)

位置 住居東壁面に造られている。燃烧部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られていた。

構造 竈の造られていた部分の壁面の残りは良好であったが、竈の袖部分や燃烧部の残りは悪かった。残りの悪い袖部分はロームを主に用いて造られていたようである。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。

規模 煙道方向86cm、燃烧部幅52cmである。

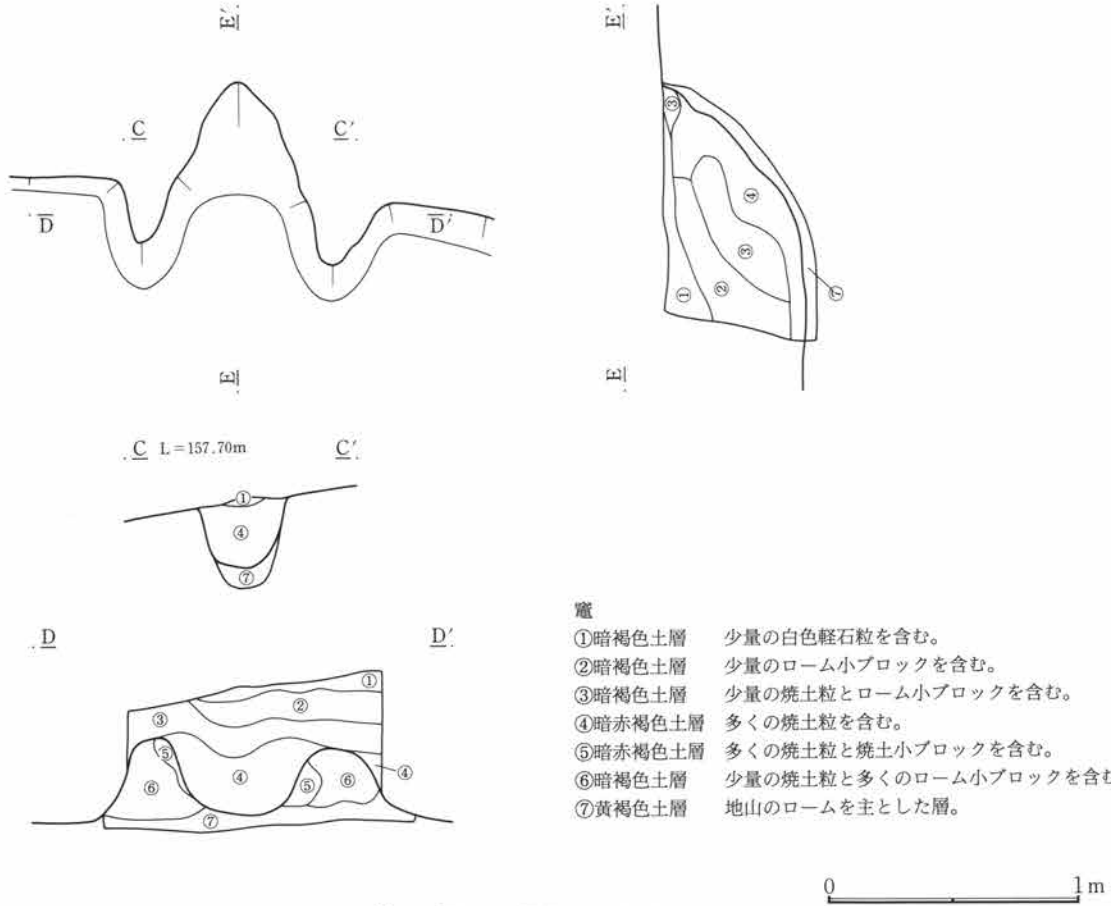


(738号住居跡)

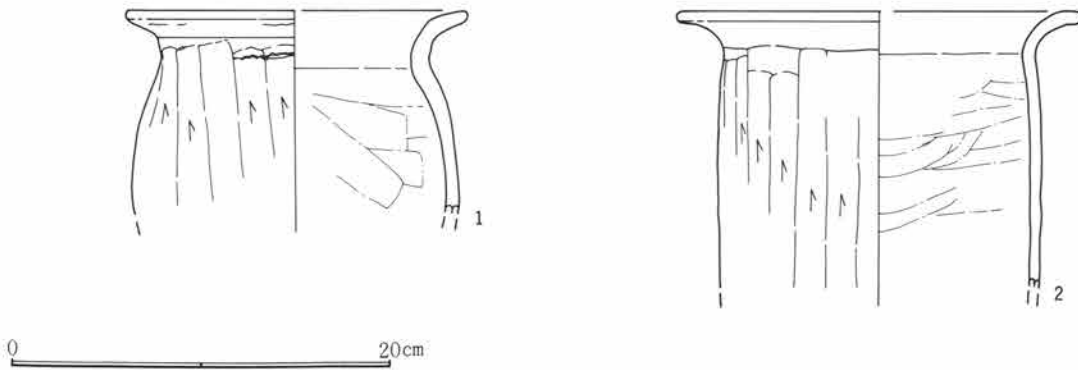
- ①耕作土
- ②暗褐色土層 少量の白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 ②層に近い。少量のローム粒を含む。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土層 少量のローム粒を含むが、ロームブロックは殆ど含まず。
- ⑥褐色土層 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑧暗褐色土層 少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ⑨黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑩66号溝覆土
- ⑪攪乱土層

0 2m

第451図 738号住居跡・床下実測図



第452図 738号住居跡竈実測図



第453図 738号住居跡出土遺物実測図

738号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
453-1	土 師 器 壺	床面+3 破片	口(18.5) 高— 底—	①粗、3~5mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
453-2	土 師 器 甕	床面+3 口縁部、胴 上部小片	口(22.0) 高— 底—	①やや粗、1mm内外の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。小さな砂粒が多く移動し、器表面がやや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。

741号住居跡 (第454・455図、図版66・107・108)

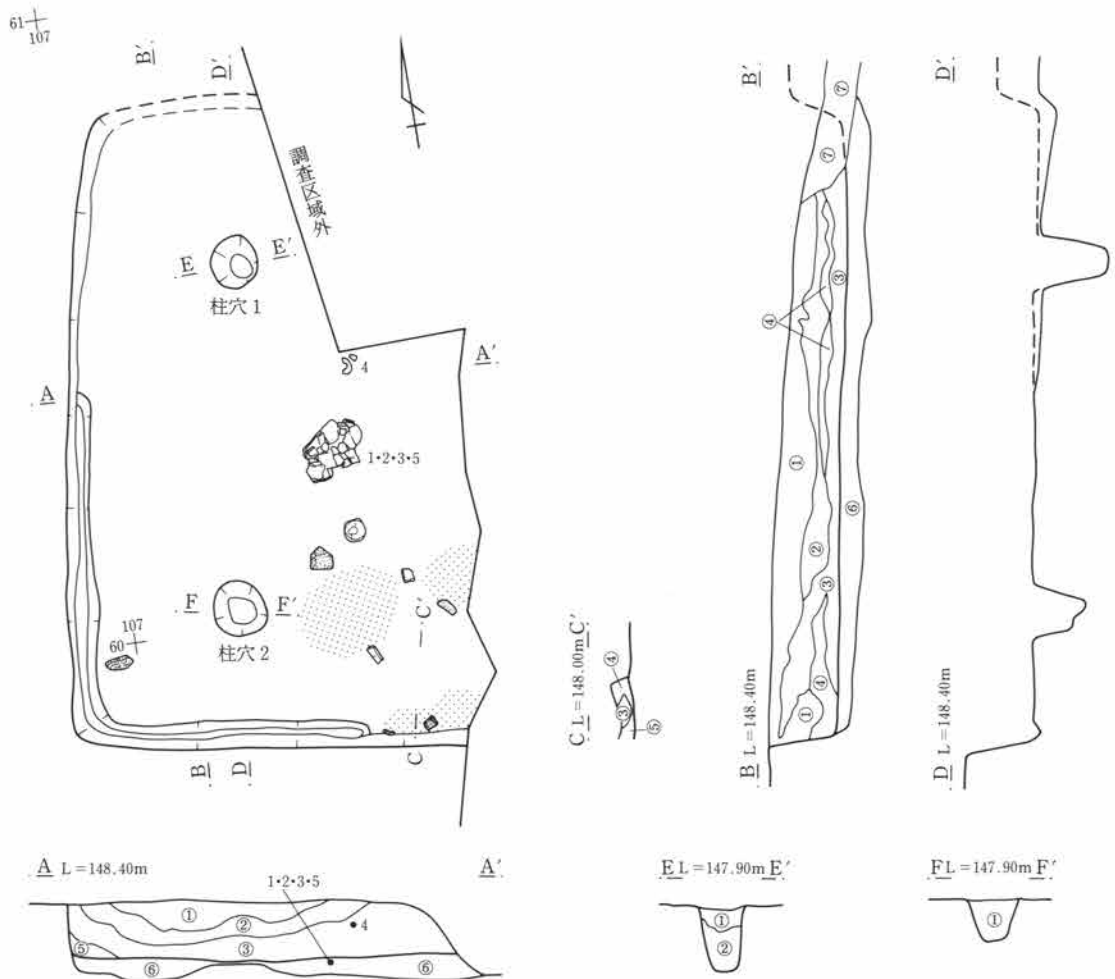
位置 本住居跡は、第12次調査区にあり、61—108グリッドに位置する。

概要 住居の東側は調査区域外にあたるため、その部分の調査はできなかった。また北側は県道に接し低くなっており、壁面と床面は削られて残っていなかった。竈は東または北壁面に造られていたと思われるが、調査範囲外のため不明である。南壁面に近い床面上に投げ込まれたような状態で焼土粒が出土した。

構造 床面はローム粒・ロームブロックと少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は調査範囲内から2本確認された。貯蔵穴は不明である。

規模 東西不明、南北推定5.18mである。壁高は残りの良い西壁面部分で41cmである。柱穴1は径38cm深さ59cm、柱穴2は径38cm深さ40cmである。

遺物 床面中央部に土師器の甕や甑や坏がまとめて出土している。



(741号住居跡)

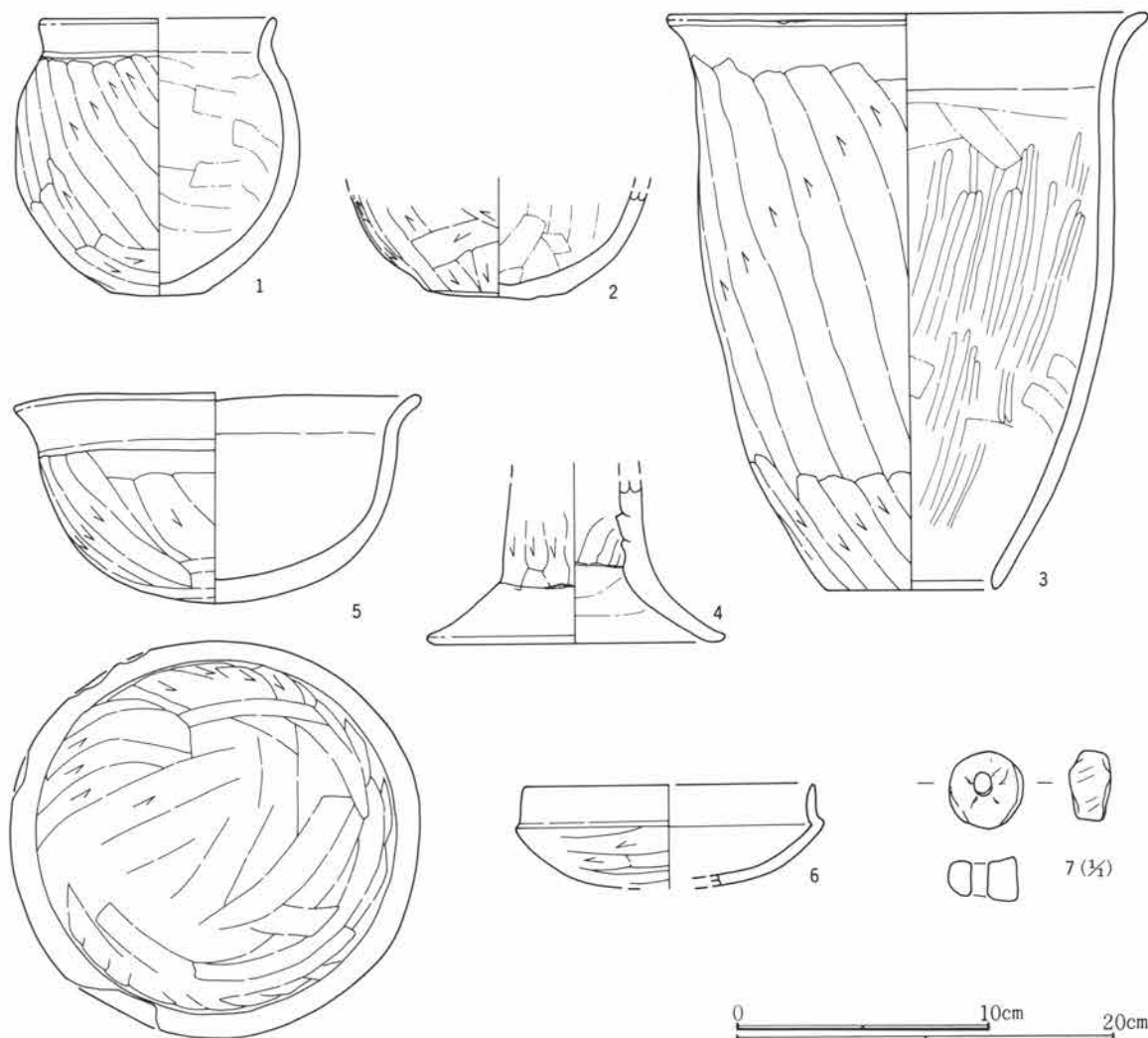
- ①暗褐色土層 少量のローム粒を含む細かい胎土。
- ②暗褐色土層 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒を含む。ロームブロックは殆ど含まず。
- ④暗褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑥黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ⑦耕作土

柱穴・焼土堆積部分

- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ②褐色土層 ローム粒を主とした層。
- ③赤褐色土層 焼土粒を主とした層。
- ④褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。

第454図 741号住居跡実測図





第455図 741号住居跡出土遺物実測図

741号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
455-1	土器 小型甕	床面直上 口縁~胴部 1/3 底部1/2	口(13.0) 高14.7 底5.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴部ヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、全体に器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底面ナデ。
455-2	土器 甕	床面直上 底部1/3残存	口— 高— 底7.6	①粗、3~6mmの砂粒を含む。②酸化焰、硬質③灰黄褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立ち器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。
455-3 107	土器 甕	床面直上 ほぼ完形	口25.6 高30.6 底9.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色・外面一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒と粘土が移動し器表面が粗い。内面ナデ後全面ヘラ磨き。器表面の残りは悪い。胴部下端に1本の棧が作られていたが欠損している。
455-4 107	土器 高脚杯	床面+26 脚部1/3残存	口— 高— 底12.1	①密②酸化焰、硬質③外面にぶい橙色・内面橙色	脚部に明瞭な輪積痕が残る。脚外面幅の広く強いヘラ削り。短脚の高脚杯か。
455-5 107	土器 杯	床面直上 完形	口16.2 高8.4 底丸底	①粗、2~5mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面ヘラナデ。大小の多くの砂粒が目立つが砂粒の移動は少ない。内面ナデにより器表面密。胎土中に含まれる多くの砂粒が特色である。
455-6	土器 杯 破片	覆土 破片	口(11.4) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③灰褐色	底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいいいなナデ。棧は鋭角。
455-7 108	石製品 白玉	覆土 完形	径1.0 孔径0.2 厚0.8 重0.8	③灰白色	滑石片岩。横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後無調整。

第4章 調査成果の整理とまとめ

第1節 古墳時代の住居について

矢田遺跡の古墳時代の住居は『矢田遺跡IV』・『矢田遺跡V』として報告を続け、本報告書の『矢田遺跡VI』をもって一応の報告を終了する。矢田遺跡で古墳時代の住居が造られ初めたのは4世紀前半からであり、以後7世紀後半までの400年間にわたり268軒が造られ続けてきた。その内訳は4世紀前半—2軒 4世紀後半—3軒 5世紀前半—3軒 5世紀後半—3軒 6世紀前半—10軒 6世紀後半—123軒 7世紀前半—76軒 7世紀後半—20軒 6～7世紀であるが時期の特定出来ない住居が28軒ある。

住居数の少ない7世紀後半の住居は、現在整理が進行している住居の中に奈良時代として区分され含まれていることが明らかになっており、20軒以上増加の見込みである。また他の時期の住居も奈良時代とされた住居の中に含まれている可能性もある。それらの住居は、奈良時代の住居でまとめられる『矢田遺跡VII』の中に整理して掲載する。

次の表は矢田遺跡で調査され、報告された古墳時代の時期別住居の一覧である。住居番号の後の番号は本報告書を含む刊行された報告書の番号である。

1 古墳時代の268軒の住居の出現と展開

古墳時代前期（4世紀前半・後半）

前述のように矢田遺跡では、4世紀前半の段階から古墳時代の住居が造られ始める。住居数はわずか2軒であるが、縄文時代後期・晩期と弥生時代の住居は1軒も造られていないため、縄文時代中期以来久しぶりにこの地に住居が造られるようになった。この2軒は調査区北側に位置し、ほぼ同時期と思われるがなぜか約120mほど離れている。4世紀後半代の住居は3軒となりほぼ南北方向に並ぶ。3軒は前半代の2軒に近接して造られているが、3軒間の距離は90mと180mとやはり遠く離れている。

前半と後半の住居5軒とも、覆土はこの時代の特長である黒色の濃い土であった。

古墳時代中期（5世紀前半・後半）

5世紀前半になると4世紀前半に住居の造られた近くに、3軒の住居が20mという近い距離に造られるようになる。5世紀後半になると調査区南西部分に移動し3軒が近接して造られる。3軒の距離はいずれも10m以内である。なぜか4世紀代の住居はお互いに遠く離れた場所に造られ、5世紀代になると近接して造られるようになる。住居覆土はやや黒色土を含むが、古墳時代前期と異なり黒色の強い覆土ではなくなる。

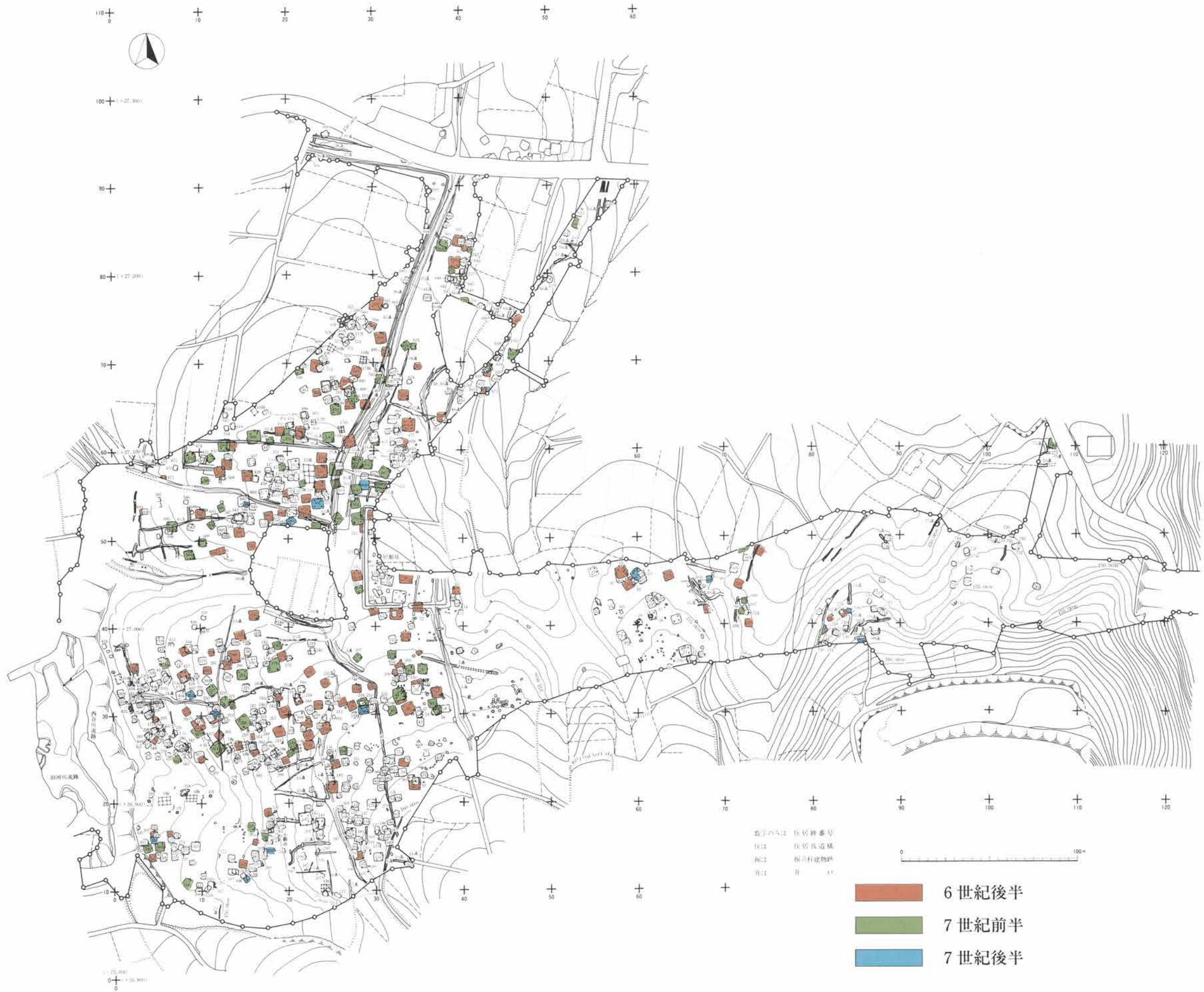
古墳時代後期（6世紀前半・後半、7世紀前半・後半）

6世紀前半になると10軒の住居が造られるようになり、それ以前の住居の数倍と増えていく。住居は微高地上や低地にも造られており、ほぼ調査区全体に広がっている。6世紀後半になると123軒が造られるようになる。この数は古墳時代を8時期に分けた中で最も多く、全体の約1/2を占めるのである。この段階の住居も6世紀前半と同様に調査区ほぼ全域で造られている。

7世紀前半の住居は76軒である。6世紀後半の住居と比較すると少ないが、他の時期と比較するなら非常に多い住居数である。やはり同じように調査区全体に造られている。7世紀後半になると20軒と少なくなる。住居の造られている場所に特に変化は認められない。



第456図 古墳時代住居分布図(1)



第457図 古墳時代住居分布図(2)

矢田遺跡古墳時代住居一覧表 (矢田遺跡Ⅳ・矢田遺跡Ⅴ・矢田遺跡Ⅵでの報告住居)

時期	住居番号 該当する住居番号および報告書番号	軒数
4世紀前半	638-V 643-IV	2
4世紀後半	43-IV 54-IV 591-IV	3
5世紀前半	359-IV 633-IV 659-IV	3
5世紀後半	325-VI 382-VI 394-VI	3
6世紀前半	31-VI 53-VI 326-VI 332-VI 442-V 548-VI 561-IV 610-IV 660-IV 669-V	10
6世紀後半	5-V 7-V 14-VI 15-VI 17-VI 38-V 39-V 56-V 58-V 59-V 62-V 65-V 68-V 77-VI 89-VI 100-V 102-V 105-VI 106-V 111-V 114-VI 117-VI 119-VI 127-VI 129-VI 148-VI 152-V 155-V 157-VI 160-VI 162-VI 164-VI 165-VI 167-VI 168-VI 171-VI 173-VI 199-VI 214-VI 217-VI 220-VI 239-VI 259-VI 262-VI 283-VI 295-VI 302-VI 305-VI 312-VI 333-VI 342-VI 346-VI 348-VI 350-VI 361-VI 363-VI 368-VI 370-VI 387-VI 388-VI 389-VI 393-VI 395-VI 396-VI 397-VI 417-VI 419-IV 420-VI 443-V 444-V 445-V 453-IV 460-V 462-IV 467-IV 469-IV 471-V 478-IV 481-IV 489-V 492-V 498-IV 499-IV 500-V 505-IV 508-V 511-IV 518-V 521-V 523-V 524-V 528-V 529-V 539-VI 540-IV 553-IV 556-IV 558-IV 567-IV 580-V 581-VI 582-VI 588-VI 589-VI 592-IV 606-VI 607-VI 609-IV 619-IV 623-IV 642-IV 658-IV 668-VI 673-IV 678-V 683-V 691-VI 702-VI 703-VI 706-IV 719-VI 723-VI 725-VI	123
7世紀前半	6-V 34-V 41-V 44-V 45-V 49-V 104-V 107-VI 149-VI 150-V 153-V 156-VI 175-VI 194-VI 210-VI 238-VI 245-VI 251-VI 256-VI 258-VI 267-VI 278-VI 303-VI 319-VI 321-VI 327-VI 330-VI 338-VI 344-VI 347-VI 371-VI 432-V 433-V 446-V 448-V 450-IV 456-V 466-IV 485-V 486-V 491-V 502-V 504-V 506-V 509-V 510-V 520-V 533-V 536-IV 564-IV 566-IV 575-IV 576-IV 584-VI 603-VI 613-IV 615-IV 620-IV 625-IV 626-IV 631-IV 632-IV 635-IV 637-V 666-V 674-IV 677-V 682-V 686-V 689-VI 692-VI 694-VI 695-VI 698-VI 699-VI 741-VI	76
7世紀後半	18-VI 108-VI 147-VI 232-VI 307-VI 310-VI 328-VI 351-VI 362-VI 416-VI 501-V 538-VI 601-VI 640-V 672-IV 680-V 681-V 718-VI 726-VI 738-VI	20
6世紀	30-VI 544-VI 545-VI 602-VI 650-VI 685-VI 690-VI 693-VI 696-VI	9
7世紀	22-VI 255-VI 404-VI 547-VI 579-VI	5
6～7世紀	67-V 352-VI 385-VI 401-VI 423-VI 437-V 441-V 562-IV 587-VI 612-IV 644-IV 687-VI 700-VI 708-VI	14
合計軒数		268

2 住居規模の違いと立地との関係

住居規模の明らかな150軒を時期別・規模別に調べてその結果を以下に示した。表で明らかなように、大規模の家が最も多く、小規模の家が少なかった。時期別に見るなら住居数は少ないが、4～5世紀代の家は小・中の規模の家が多く、6～7世紀の家は中～特大の規模の家が多い傾向を示した。古墳時代だけの比較では明瞭な傾向が指摘できないため来年度整理される奈良時代の住居の整理が終わった段階で、古墳時代～平安時代を時期別の住居規模の変化について検討を加える予定である。また住居の大小で立地に違いが認められるかについても調べてみた。大と特大規模の住居が傾斜がゆるやかな微高地に多く、湿気の多い低地には造られていないことが指摘できそうである。中小規模の家は遺跡のほぼ全域に造られている。

時期別・規模別住居一覧表（規模の明確な住居を対象とした。）

時期 \ 規模	小 (0～16㎡未満)	中 (16～25㎡未満)	大 (25～36㎡未満)	特大 (36㎡以上)	合計軒数
4世紀前半	1	0	0	0	1
4世紀後半	1	0	0	0	1
5世紀前半	0	1	0	0	1
5世紀後半	0	3	0	0	3
6世紀前半	2	0	1	3	6
6世紀後半	11	20	23	20	74
7世紀前半	9	12	20	12	53
7世紀後半	4	1	4	1	10
合計軒数	28	37	48	36	149

3 炉と竈と貯蔵穴の問題について

古墳時代において4世紀代から5世紀前半の住居には一般的に炉が伴う例が多い。しかし矢田遺跡では該当する時期の住居7軒の中で炉の確認された住居は2軒であった。炉の確認されなかった住居は重複により炉の造られた部分が削られていたり、残りが悪かったため基本的に炉は造られていたものと思われる。竈は5世紀後半から多くの住居に導入されてくる。矢田遺跡でも5世紀後半以降の住居で面積の検出可能な146軒中143軒に竈が築かれている。竈が確認されなかった3軒中1軒は不明で他の2軒は重複により削り取られていた。このように5世紀後半から7世紀に至る住居には竈が伴っている。

貯蔵穴については近接する甘楽町の天引向原遺跡では炉を持つ4世紀代の住居の南東コーナー部分に貯蔵穴が掘られていたが、矢田遺跡では住居の残りが悪いためか4世紀の住居に貯蔵穴は残っていなかった。5世紀前半代の359号住居にそれと思われる掘り込みが確認された。中期前半以前で貯蔵穴が掘られる場合は、炉の造られる位置に近い壁面と反対側の壁面に接して造られる例が多い。竈は中期中頃より採用されるかもしれないが、遺構として確認されたのは後半段階の甘楽条里遺跡96号住居からである。この住居の竈は両袖を持つが、煙道は壁面を掘り込でいない。貯蔵穴は竈の造られた壁面の反対側の壁面に接して掘られており、前半代の炉を持つ時期の伝統をひきついでいることが考えられる。96号住居以降の甘楽条里遺跡54号住居や矢田遺跡382号住居では、貯蔵穴が竈の右側に掘られて、煙道は壁面を掘り込んでおり竈導入後の定形化された形となっている。しかし貯蔵穴を持たない住居も存在している。炉・竈・貯蔵穴の有無については以下に一覧表で内容を示した。

時期別・炉・竈・貯蔵穴一覧表

区分 時期	住居数	面積の明らかな 住居数（時期不明の住居除外）	面積の明らかな 住居で炉を持つ 住居数	面積の明らかな 住居で竈を持つ 住居数	面積の明らかな 住居で貯蔵穴を 持つ住居数	備 考
4世紀前半	2	1	1	0	0	
4世紀後半	3	1	0	0	0	3軒とも炉未確認
5世紀前半	3	1	1	0	0	
5世紀後半	3	3	0	2	2	
6世紀前半	10	6	0	6	5	
6世紀後半	123	74	0	72	69	1軒は竈不明、2軒は竈想定部分が重複により削られている。
7世紀前半	76	53	0	53	50	
7世紀後半	20	10	0	10	4	
合計軒数	240	149	2	143	130	

4 竈の造られる壁面の位置の問題について

竈は住居の壁面を一部掘込んで造られている。造られるのは東壁面が多いが、北や西壁面にも造られている。矢田遺跡の218軒中の246基（竈の造り替えの認められる住居があるため、竈を持つ住居数より竈数が多い）についてどの壁面に最も多く造られているのか、また時期別に分けて調べるなら一定の時期にいずれかの壁面に集中するような特徴があるのか等について以下の表で調べてみた。その結果246基中156基が東壁面に造られており最も多く、次に北壁面が81基であり、西壁面はわずかに15基であった。それらの竈はいずれの時期とも東壁面に造られる例が最も多く、一定の時期に特定の壁面方向に集中するような傾向は認められなかった。これは従来から言われていたことであるが、冬場に西方向から東方向に吹く風を考え、風上に向かって煙突が造られることを避け風下方向に煙突が位置するように造られたためと思われる。自然な選択と思われる。しかし、風上方向と思われる西壁面に煙突の造られている住居が15基もあることも事実であり、この住居は理解できない。なぜか南壁面に竈の造られた例は全く認められない。この方向に出入口を想定したい。

時期別に見た竈の造られている位置の一覧表

時期	位置	東 竈	北 竈	西 竈	合計竈数
5世紀後半		1	1	0	2
6世紀前半		6	4	1	11
6世紀後半		81	40	5	126
7世紀前半		48	30	9	87
7世紀後半		14	6	0	20
合計軒数		150	81	15	246

5 造り替えの認められる竈について

竈は住居規模の大小にかかわらず、最低1基は造られているのが一般的な例である。しかし使われていた竈を壊して、新たに別の壁面に造り替えられている例が矢田遺跡では古墳時代の住居268軒中16%にあたる42軒で確認されている。新たな竈には竈の新設のほかにも新たな貯蔵穴の掘り直しや、火棚の作成また屋根の一部にも工夫が行われたとも考えられる。竈の補修で済むならこのような面倒な作業をしなくてよいわけで、なぜこのような造り替えが行われているのであろうか。この問題について少し考えてみたい。

原因は複数考えられるが、これらの住居はいずれも規模が大きいが指摘できる。複数の竈を持つ規模の明らかな住居は30軒存在する。小規模な家にはこの竈の造り替えは認められない。中規模の家で3軒、大規模な家で11軒、特大の家で16軒であり規模が大きくなるほど造り替えの比率が高くなっている。以下が30軒の住居である。

竈の造り替えの認められる住居の時期別・規模別一覧表

時期 \ 規模	小規模	中規模	大規模	特大規模	合計軒数
6世紀前半				1	1
6世紀後半			5	8	13
7世紀前半		2	6	8	16
7世紀後半		1			1
合計軒数	0	3	11	17	31

竈が造り替えられる場合、東壁面から北壁面またはその逆といったような一定の傾向が認められるだろうか。以下の表はその点について調べたものである。以下の表で明らかなように、造られる竈の壁面に一定の傾向は認められなかった。

造り替えの認められる竈の移動例一覧表

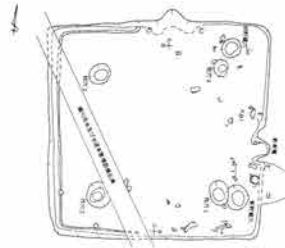
時期 \ 移動例	北→東	東→北	北→西	東→西	南→東	北→北	東→北 →西	西→東 →北	北→東 →北	東→北 →東	合計軒数
6世紀前半			1								1
6世紀後半	6	9	1			1	1		1		19
7世紀前半	7	5	1	1	1	1	1	1		1	19
7世紀後半		1									1
合計軒数	13	15	3	1	1	2	2	1	1	1	40

このように竈の造り替えが認められる住居は規模の大きな住居にほぼ限られているようである。それでは規模の大きな住居の中で造り替えの認められる住居はどのくらいの比率で存在しているのであろうか。それを表したのが次の表である。小規模住居には竈の造り替えは、認められなかった。中規模の住居以降に竈の造り替えの住居が出現し(10%)、大規模(22%)と増加し、特大規模の住居では、約半数に近い(45%)住居に造り替えが認められるようになる。

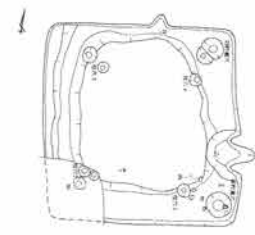
大規模住居



152号住居



7号住居



580号住居



164号住居

特大規模住居



524号住居



417号住居



489号住居



528号住居



15号住居



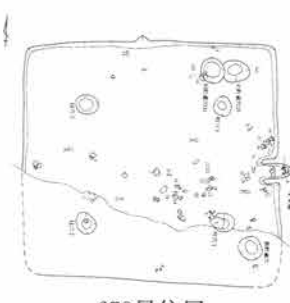
38号住居



444号住居



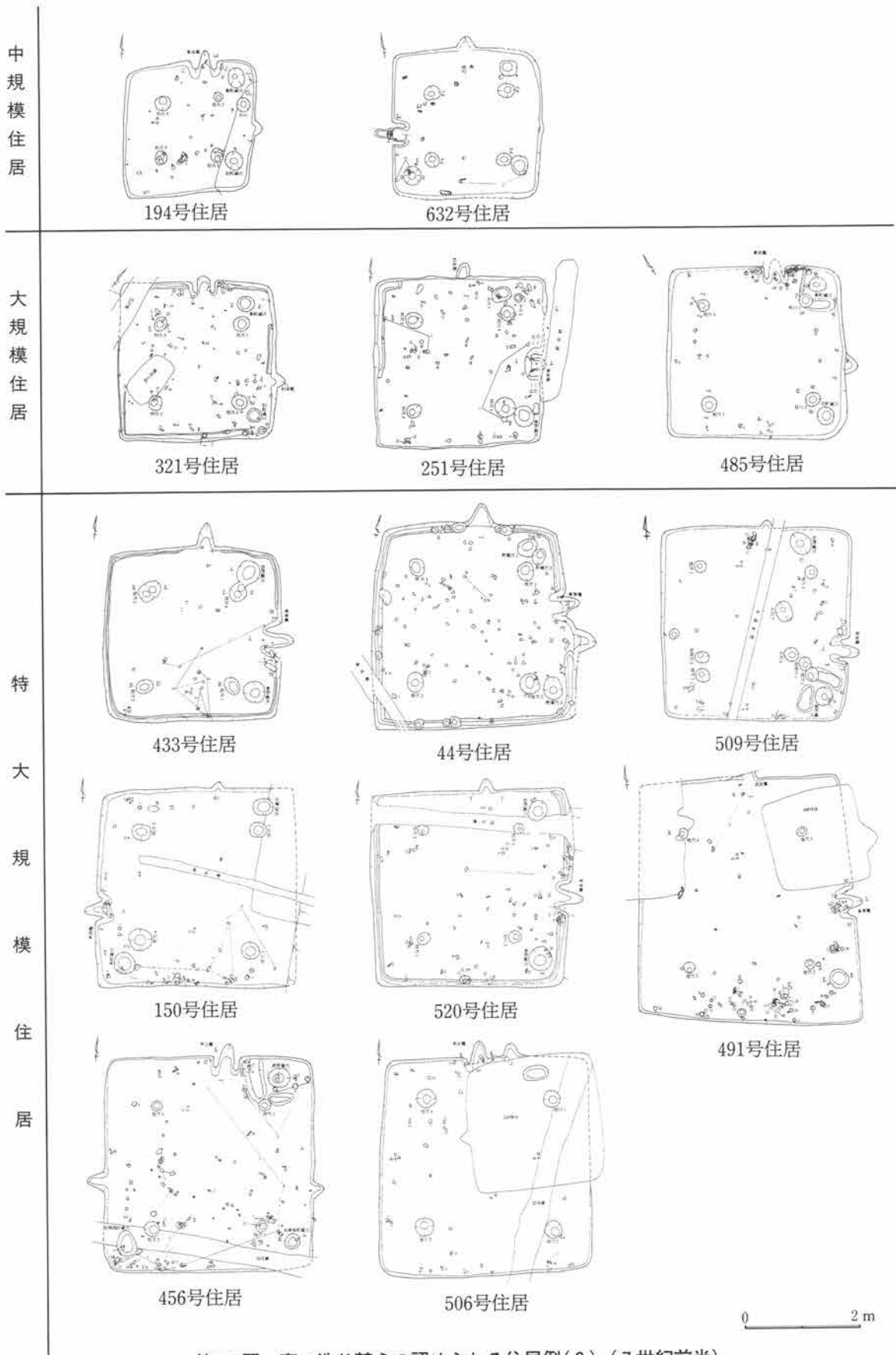
417号住居



678号住居

0 2 m

第458図 竈の造り替えの認められる住居例(1) (6世紀後半)



第459図 竈の造り替えの認められる住居例(2) (7世紀前半)

竈の造り替えの認められる住居と規模との関係表

時期 \ 区分	面積の明らかな住居軒数	面積の明らかな住居中で造り替えの竈を持つ住居軒数	面積の明らかな住居中造り替えの竈を持つ住居の比率(%)
特大規模	37	17	46
大規模	49	11	22
中規模	41	4	10
小規模	30	0	0

以上の傾向から竈の造られる壁面に、時期による一定の傾向は認められることは出来なかった。また、竈の造り替えられる住居は中規模以上の住居に限られており、規模が大きくなるほど造り替えられる傾向が高くなる。いずれの場合でも竈の造られる壁面方向に、一定の傾向は認められなかった。

古墳時代268軒住居規模一覧表 (I矢田遺跡III～VI 報告分)

住居No.	時期コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規区分	壁高 (cm)	主軸方向	位置	電		貯蔵穴		柱穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書番号		
								位置	天井	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ		直径	深さ
5	6C後062	37・38-35・36	2.80 × 2.80	7.75 小	27	N-59°-E	東1	-	-	2	円形 楕円形	30 48	26 41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	
6	7C前071	36-35・36	5.68 × 5.80	31.44 大	21	N-91°-E	東1	-	-	1	円形	45	78	4	34	44	56	38	72	40	72	V		
7	6C後062	33-37・38	5.82 × 5.78	33.44 大	25	N-85°-E	東・北2	-	石	2	円形 円形	70 52	64 53	4	52	57	62	57	58	45	60	V		
14	6C後062	46-64	5.40 × 5.25	28.33 大	26	N-18°-W	北?	-	-	-	-	-	-	4	52	83	45	68	53	58	44	72	VI	
15	6C後062	46・47-58・59	6.45 × 6.40	42.62 特大	42	N-70°-E	東・北	-	-	2	円形 円形	61 67	76 73	4	71	75	64	79	86	70	73	68	VI	
17	6C後062	45-59・60	6.54 × 6.18	39.38 特大	10	N-30°-W	北・東?	-	-	2	円形 円形	69 54	67 64	4	64	61	51	68	62	72	68	88	VI	
18	7C後072	46・47-60・61	6.03 × 6.01	35.93 大	31	N-43°-W	北1	-	-	1	円形	51	74	4	85	76	66	72	68	72	82	76	VI	
22	7C後070	46-61	5.18 × -	-	34	N-65°-E	東1	-	-	1	円形	72	53	4	54	48	57	66	49	79	30	80	VI	
30	6C後060	39-59	- × 3.65	-	-	N-73°-E	東1	-	-	1	円形	46	44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
31	6C前061	46-58・59	6.33 × 5.99	-	26	N-12°-W	北?	-	-	1	円形	67	86	4	70	79	63	53	60	57	56	83	VI	
34	7C前071	31-37・38	- × 4.80	-	18	N-26°-W	北1	石	石	1	円形	45	78	4	42	60	44	64	50	78	46	64	V	
38	6C後062	31-32-34	6.96 × 6.45	43.56 特大	43	N-26°-W	北・東2	-	-	2	円形 円形	58 48	90 84	4	48	79	54	88	44	44	78	53	78	V
39	6C後062	34-35	6.12 × 6.22	(38.0)	32	N-81°-E	東1	-	-	1	円形	66	112	4	50	64	50	54	44	58	53	53	V	
41	7C前071	35・36-34・35	5.40 × 5.40	28.88 大	27	N-5°-W	北・東2	-	-	2	円形 円形	52 50	80 74	4	42	62	48	58	48	68	43	72	V	
43	4C後042	28・29-34・35	3.72 × 4.65	(14.09)	24	N-3°-E	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	
44	7C前071	33-33・34	7.20 × 7.10	47.25 特大	68	N-15°-W	東・北・東3	-	-	3	円形 円形 円形	52 68 62	56 86 61	4	54	84	64	76	64	62	62	94	V	
45	7C前071	32-37	5.10 × 5.15	25.63 大	38	N-86°-E	東1	-	-	1	円形	65	54	4	44	70	54	62	43	62	52	75	V	
49	7C前071	31-32・33	5.20 × 5.30	27.44 大	40	N-74°-E	東1	長壁	石	1	円形	50	48	4	36	56	32	72	48	78	36	62	V	
53	6C前061	46-32	6.50 × 6.20	40.13 特大	41	N-15°-E	北1	-	-	1	円形	62	82	4	52	80	55	81	48	72	58	72	V	
54	4C後042	46-30・31	-	-	-	N-23°-E	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV		
56	6C後062	46-34	7.40 × -	-	30	N-91°-E	東1	-	石	1	楕円形	86	85	2	50	66	53	52	-	-	-	-	V	

住居 No	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	竈			貯蔵穴			柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置	天井	袖	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径		深さ
58	6C後 062	42-30・31	5.62 × -	-	35	N-16°-W	-	-	-	-	-	4	50	98	52	88	48	78	48	71	V	
59	6C後 062	42-33	7.10 × (7.20)	(50.88)	40	N-92°-E	東1	石	石	円形 円形	78 76	102 96	4	66	88	65	86	62	76	62	102	V
62	6C後 062	43-35	5.58 × 5.62	31.31 大	31	N-94°-E	東1	-	-	円形	56	80	4	53	87	52	87	52	73	56	98	V
65	6C後 062	45-40	(4.30) × 4.40	-	25	N-4°-W	北1	-	-	円形	105	28	4	30	86	36	57	43	53	46	59	V
67	6~7C 060~070	51-27	2.70 × 3.08	7.88 小	-	N-82°-E	東1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
68	6C後 062	53-30	(7.30) × (6.50)	-	52	N-91°-E	東1	-	-	円形	66	88	4	56	60	52	25	54	44	56	68	V
77	6C後 062	25-34	5.95 × 4.62	26.96 大	15	N-94°-E	東1	石	-	円形	89	49	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
89	6C後 062	22-23-35	6.62 × 7.14	46.51 特大	38	N-95°-E	東1	-	-	円形	67	86	4	52	42	51	50	47	35	48	43	VI
100	6C後 062	35-33	3.30 × 3.30	9.94 小	30	N-101°-E	東1	-	-	方形	42	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
102	6C後 062	36-33	4.55 × 4.34	19.25 中	25	N-37°-W	北1	-	石	-	-	-	4	36	30	40	49	-	-	38	37	V
104	7C前 071	37-32-33	4.45 × 4.65	20.69 中	44	N-85°-E	東1	-	-	円形	70	85	4	40	58	46	56	49	68	39	61	V
105	6C後 062	34-30	- × 3.98	-	22	N-12°-W	-	-	-	-	-	-	4	36	68	37	78	33	62	40	33	VI
106	6C後 062	32-33-33	6.50 × (6.30)	-	34	N-24°-W	北・東 2	-	-	円形 円形	52 53	65	4	43	-	55	60	53	52	52	-	V
107	7C前 071	37-27-28	4.15 × 4.51	18.25 中	27	N-42°-E	北1	石	石	円形	76	70	4	51	30	50	35	66	50	52	39	VI
108	7C後 072	31-29	5.88 × 5.58	30.38 大	52	N-85°-E	東1	-	-	円形	46	98	4	46	94	43	92	52	3	46	88	VI
111	6C後 062	39-40-34	5.45 × 5.25	28.56 大	26	N-89°-E	東1	-	-	円形	78	58	4	48	44	-	-	43	72	56	62	V
114	6C後 062	33-34-28	5.03 × 4.71	22.90 中	39	N-3°-W	北1	-	石	円形	37	57	4	56	53	63	50	46	66	66	67	VI
117	6C後 062	32-26-27	4.72 × 4.83	23.29 中	39	N-77°-E	東1	-	-	円形	45	90	4	31	88	40	56	41	74	39	77	VI
119	6C後 062	31-32-28	5.23 × 5.46	28.17 大	35	N-22°-W	北1	-	-	円形	69	58	4	58	58	59	83	58	95	48	59	VI
127	6C後 062	22-23-25-26	- × 6.95	-	46	N-8°-W	北1	-	石	円形	58	84	4	61	62	61	78	61	87	48	92	VI
129	6C後 062	25-26	4.75 × 4.73	22.82 中	39	N-77°-E	東1	石	石	円形	75	71	4	39	61	48	61	39	68	36	67	VI
147	7C後 072	25-26-25	3.65 × -	-	17	N-92°-E	東1	-	石	円形	57	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵穴				柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 電	天井 袖	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径		深さ
148	6 C後 062	27-23	6.02 × 4.80	29.45 大	32	N-7°-W	北 ₁	石	無	1	円形	67	63	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
149	7 C前 071	27-21	4.85 × 5.16	23.96 中	28	N-66°-E	東 ₁	-	無	1	円形	54	59	4	66	50	48	53	68	74	58	56	VI
150	7 C前 071	53-28-29	(7.00) × 6.90	-	42	N-98°-W	西 ₂	石	無	2	円形 円形	76 68	76 73	4	59	66	55	78	58	58	78	96	V
152	6 C後 062	46-47-28-29	5.80 × 6.00	34.44 大	37	N-98°-W	西・北 ₃	石	無	3	円形 円形 円形	58 46 81	86 81 73	4	55	73	58	79	62	73	68	73	V
153	7 C前 071	45-29	4.36 × 4.06	17.06 中	34	N-66°-E	東 ₁	石	無	1	円形	46	43	4	38	35	40	37	38	67	42	50	V
155	6 C後 062	52-29	- × 4.60	-	25	N-88°-E	-	-	無	-	-	-	-	2	45	48	48	45	-	-	-	-	V
156	7 C前 071	26-21	4.36 × 3.51	14.54 小	17	N-60°-E	東 ₁	-	無	1	円形	56	43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
157	6 C後 062	25-26-20	4.03 × 4.05	16.0 中	9	N-75°-E	東 ₁	-	無	1	円形	65	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
160	6 C後 062	31-32-23	4.94 × 4.85	23.44 中	2	N-82°-E	東 ₁	-	無	1	円形	68	67	4	58	61	40	65	50	56	46	57	VI
162	6 C後 062	34-25	5.01 × 4.91	-	15	N-25°-W	北?・東 ₂	-	無	2	円形 円形	41 39	70 86	4	46	84	39	86	58	62	49	62	VI
164	6 C後 062	28-29-23	5.65 × 5.47	31.14 大	19	N-30°-W	北・東 ₂	-	無	2	円形 円形	59 45	97 73	4	31	76	54	48	47	38	30	69	VI
165	6 C後 062	29-30-22-23	6.17 × 6.31	-	28	N-72°-E	東 ₁	-	無	1	円形	62	88	4	46	77	46	83	58	84	64	91	VI
167	6 C後 062	31-20	6.33 × 6.15	38.20 特大	32	N-70°-E	東 ₁	石	無	1	円形	80	50	4	46	42	52	61	36	48	49	49	VI
168	6 C後 062	32-21-22	4.41 × 3.97	18.56 中	23	N-57°-E	東 ₁	-	無	1	楕円形	48	70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
171	6 C後 062	32-33-19	3.93 × 4.03	15.43 小	15	N-65°-E	東 ₁	-	無	1	楕円形	32	39	4	23	43	35	56	31	55	21	36	VI
173	6 C後 062	37-20	5.23 × 5.12	-	15	N-70°-E	-	-	無	1	円形	55	91	4	45	60	49	59	41	60	35	22	VI
175	7 C前 071	36-19	6.99 × 7.01	-	15	N-84°-E	東 ₁	石	無	1	円形	53	76	4	54	66	36	40	49	69	40	63	VI
194	7 C前 071	26-27-27	4.51 × 4.51	20.45 中	25	N-3°-W	北・東 ₂	-	無	2	円形 円形	59 62	56 65	4	28	77	43	67	38	60	55	70	VI
199	6 C後 062	14-15-29	- × 4.58	-	27	N-71°-E	東 ₁	石	無	1	円形	58	54	4	51	38	41	69	25	51	54	62	VI
210	7 C前 071	32-29	5.75 × -	30.85 大	34	N-69°-E	東 ₁	石	無	1	円形	53	80	4	57	77	51	56	55	72	58	54	VI
214	6 C後 062	29-24-25	6.45 × 6.25	38.92 特大	50	N-68°-E	東 ₁	-	無	1	円形	66	17	4	54	68	40	70	48	84	56	71	VI
217	6 C後 062	35-36-23	5.34 × 5.37	29.75 大	17	N-55°-E	-	-	無	-	-	-	-	4	51	43	41	44	45	24	41	60	VI

第1節 古墳時代の住居について

住居No	時期コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規模区分	壁高(cm)	主軸方向	電		貯蔵穴				柱穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 数	天井 袖	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ		直径
220	6C後 062	29-19-20	6.07 × 5.99	38.27 特大	17	N-20°-W	北 1	石	無	1	円形	60	51	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
232	7C後 072	15-19	—	—	—	N-90°-E	東 1	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	V
238	7C前 071	16-17-18	— × 4.59	—	50	N-98°-E	東 1	—	—	有	1	円形	79	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
239	6C後 062	16-17	3.38 × 3.47	—	52	N-18°-E	北 1	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
245	7C前 071	38-39-19	4.67 × 4.75	—	22	N-18°-W	—	—	—	無	1	円形	50	62	3	40	60	31	46	68	—	—	—	VI
251	7C前 071	35-15-16	5.94 × 5.96	34.99 大	27	N-89°-E	東・北 2	石	有	1	円形	70	57	4	70	52	60	66	66	68	52	59	—	VI
255	7C 070	29-30-17	4.37 × 4.62	—	35	N-19°-W	北 1	—	—	無	1	円形	48	64	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
256	7C前 071	31-32-14	3.47 × 3.94	13.54 小	22	N-16°-W	北 1	—	—	無	1	円形	56	53	4	32	56	44	42	34	63	39	49	VI
258	7C前 071	29-30-15-16	7.36 × 7.15	53.73 特大	28	N-40°-W	北 1	—	—	無	1	円形	66	85	4	70	66	75	55	80	58	63	72	VI
259	6C後 062	30-12	—	—	33	N-26°-W	北?・東? 2?	—	—	無	2	円形 円形	56 40	82 47	4	46	62	46	45	40	51	42	55	VI
262	6C後 062	13-14-15	4.40 × 5.02	22.46 中	20	N-95°-E	東 1	—	—	無	1	円形	55	70	4	42	29	41	33	30	16	47	15	VI
267	7C前 071	11-12	—	—	—	—	東 1	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
278	7C前 071	11-12-9	4.85 × —	—	15	N-24°-E	北・東 2	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
283	6C後 062	19-20-18	4.32 × 4.54	20.12 中	51	N-79°-E	東 1	石	無	1	円形	56	32	4	37	45	31	38	31	52	46	41	—	VI
295	6C後 062	30-4-5	—	—	22	N-46°-E	東 1	—	石	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
302	6C後 062	14-5	4.02 × 4.32	16.85 中	24	N-79°-E	東 1	—	—	無	1	円形	53	33	4	58	41	50	45	52	53	41	33	VI
303	7C前 071	16-6	5.43 × 5.43	28.58 大	12	N-91°-E	東 1	—	—	無	1	円形	59	21	4	53	12	65	37	45	37	41	43	VI
305	6C後 062	17-5	4.06 × —	—	17	N-2°-E	北 1	石	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
307	7C後 072	12-16	3.52 × 3.48	11.77 小	30	N-60°-E	東 1	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
310	7C後 072	16-5	3.80 × 4.17	15.55 小	39	N-86°-E	東? 1	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
312	6C後 062	17-7	3.33 × 3.48	15.62 小	26	N-91°-E	東 1	石	無	1	円形	52	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI
319	7C前 071	18-16	— × 5.10	—	46	N-98°-E	東 1	—	—	無	1	円形	39	51	3	—	24	45	43	41	31	—	—	VI

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No.	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	電		周溝	貯蔵穴				柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 数	天井 袖		数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径		深さ
321	7C前 071	32-13-14	5.48 × 5.56	29.92 大	46	N-43°-W	北 ₂ 東 ₂	石	有	2	円形 円形	62 51	53 41	4	40	61	55	52	48	62	43	65	VI
325	5C後 052	34-15-16	4.38 × 4.63	19.76 中	14	N-3°-E	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
326	6C前 061	36-37-16-17	6.18 × 6.22	38.84 特大	25	N-83°-E	東 ₁	-	無	1	円形	75	56	4	54	63	48	74	50	77	47	65	VI
327	7C前 071	33-34-11	5.42 × 5.68	30.06 大	42	N-30°-W	北 ₁	-	無	1	円形	65	71	4	38	71	43	33	43	74	43	70	VI
328	7C後 072	30-31-12	4.40 × 4.80	-	37	N-72°-E	東 ₁	石	無	1	円形	82	33	4	48	53	46	54	38	59	58	43	VI
330	7C前 071	15-16-5	- × 4.69	-	26	N-70°-E	東 ₁	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
332	6C前 061	16-4	3.62 × 3.49	13.03 小	40	N-93°-E	東 ₁	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
333	6C後 062	38-8-9	5.29 × 4.89	25.56 大	15	N-23°-W	北 ₁	-	無	1	円形	56	64	4	37	46	40	42	50	63	52	66	VI
338	7C前 071	36-37-7	4.65 × 5.17	25.70 大	26	N-25°-W	北 ₁	-	無	1	円形	63	58	4	52	73	48	48	54	56	48	75	VI
342	6C後 062	27-9	3.75 × 3.51	-	55	N-41°-E	北 ₁	-	有	1	円形	49	23	4	42	30	42	45	42	46	44	41	VI
344	7C前 071	25-26-8	4.36 × 4.06	17.32 中	19	N-62°-E	東 ₁	-	無	1	円形	62	55	3	28	63	37	66	36	57	-	-	VI
346	6C後 062	29-30-10-11	6.87 × 6.90	-	46	N-68°-E	-	-	無	1	円形	80	73	4	57	69	55	83	46	81	41	65	VI
347	7C前 071	28-29-10	-	-	31	N-55°-E	-	-	無	1	円形	53	52	4	70	52	44	81	33	84	34	63	VI
348	6C後 062	28-5	4.42 × 4.81	-	19	N-41°-E	北 ₁	-	無	-	-	-	-	4	33	39	35	63	38	74	32	62	VI
350	6C後 062	31-9	4.11 × 4.16	15.98 小	22	N-60°-E	東 ₁	-	無	1	円形	45	70	4	43	47	44	55	36	46	44	43	VI
351	7C前 071	33-9-10	- × 4.59	-	13	N-57°-E	東 ₁	-	有	1	円形	63	28	4	35	21	28	36	31	29	36	35	VI
352	6~7C 060~070	32-6	- × 3.67	-	16	N-78°-E	東 ₁	-	無	1	円形	46	44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
359	5C前 051	64-37-38	- × 4.74	-	23	N-59°-E	0	-	無	1	円形	72	63	3	42	54	36	58	45	53	-	-	IV
361	6C後 062	28-16-17	- × 3.58	-	13	N-74°-E	東 ₁	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
362	7C後 072	27-16-17	4.91 × 4.94	25.80 大	46	N-5°-W	北 ₁	-	無	-	-	-	-	4	40	43	38	55	38	70	36	40	VI
363	6C後 062	26-16-17	4.61 × -	-	26	N-53°-E	東 ₁	-	無	1	円形	60	92	4	25	24	39	28	37	63	58	56	VI
368	6C後 062	27-15	4.75 × -	-	46	N-45°-E	東 ₁	-	無	1	円形	83	62	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI

第1節 吐蕃時代の住居について

住居 No.	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規程区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵穴			柱穴 数	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 数	天井	袖	数	形状	径(cm)		深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径		深さ
370	6 C後 062	28-11	—	—	—	N-66°-E	東 ₁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI	
371	7 C前 071	26・27-12・13	7.21 × 6.98	50.45 特大	40	N-48°-E	東 ₁	—	石	—	1	円形	75	65	43	66	63	41	36	34	27	VI	
382	5 C後 052	35-13・14	4.51 × 4.18	18.72 中	29	N-32°-E	北 ₁	—	—	—	1	円形	42	38	—	—	—	—	—	—	—	VI	
385	6~7 C 060~070	24・25-17	—	—	38	N-65°-E	—	—	—	—	1	円形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI	
387	6 C後 062	25・26-10・11	3.70 × 4.10	16.16 中	36	N-49°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	75	30	—	—	—	—	—	—	—	VI	
388	6 C後 062	36・37-13・14	5.30 × 5.52	29.20 大	37	N-92°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	58	76	48	83	36	48	38	58	50	86	VI
389	6 C後 062	37・38-14・15	6.80 × 7.00	47.38 特大	40	N-83°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	76	76	56	75	56	98	68	89	64	86	VI
393	6 C後 062	38-12	3.93 × 6.00	—	6	N-86°-E	東 ₁	石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VI	
394	5 C後 052	34・35-11	4.31 × 4.27	17.64 中	19	N-47°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	60	80	—	—	—	—	—	—	—	VI	
395	6 C後 062	36-11	4.77 × 4.30	19.33 中	39	N-90°-W	西 ₁	石	—	—	1	円形	53	84	33	52	34	48	28	40	36	52	VI
396	6 C後 062	42-16・17	5.72 × 5.63	31.29 大	34	N-88°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	63	63	32	61	26	61	35	78	33	81	VI
397	6 C後 062	39・40-15	5.87 × 5.57	34.55 大	35	N-76°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	67	70	44	65	40	71	42	71	41	71	VI
401	6~7 C 060~070	34-4	— × 4.41	—	18	N-73°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	41	70	53	62	59	79	32	63	45	61	VI
404	7 C 070	33-8	5.44 × 5.45	29.30 大	31	N-7°-W	北 ₁	—	—	—	1	円形	72	61	45	49	42	51	38	51	31	55	VI
416	7 C後 072	34-3	—	—	26	N-60°-E	東 ₁	石	—	—	1	円形	59	62	37	63	25	94	31	71	31	71	VI
417	6 C後 062	35-8・9	6.15 × 6.31	39.42 特大	27	N-61°-E	東・北 ₂	—	—	—	3	円形 円形 円形	53 42 61	61 39 73	43	49	69	55	60	45	53	VI	
419	6 C後 062	66・67-34	5.91 × 6.00	30.22 大	36	N-97°-E	東 ₁	石	—	—	1	楕円形	51	60	51	57	36	54	42	51	45	57	VI
420	6 C後 062	36-3	— × 5.37	—	59	N-5°-W	北 ₁	—	—	—	1	円形	56	33	60	54	41	55	41	59	54	VI	
423	6~7 C 060~070	38-10	— × 4.55	—	10	N-92°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	88	54	—	—	—	—	—	—	—	VI	
432	7 C前 071	60-12	4.52 × 4.42	19.0 中	40	N-55°-E	東 ₁	—	石	—	1	円形	50	64	45	42	44	56	33	66	38	37	V
433	7 C前 071	60-9・10	6.10 × 6.08	36.1 特大	51	N-81°-E	東・北 ₂	石	—	—	2	円形 円形	72 79	83 88	58	82	54	85	62	88	58	70	V
437	6~7 C 060~070	59-16・17	4.45 × 4.54	19.5 中	25	N-82°-E	東 ₁	—	—	—	1	円形	70	86	40	48	42	46	38	20	30	43	V

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵 穴	柱穴 数	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号				
							位置 電	天井	袖			数	形状	径(cm)	深さ(m)	直径	深さ	直径	深さ		直径	深さ	直径	深さ
441	6~7C 60~070	56-19	- × 4.52	-	5	N-8°-W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V				
442	6C前 061	59-21	6.38 × 6.30	38.75 特大	38	N-82°-E	東 ₁	-	石	1	円形	58	82	4	48	80	40	61	38	75	52	79	V	
443	6C後 062	60-24-25	5.58 × 5.52	31.06 大	57	N-94°-E	東 ₁	-	-	1	円形	82	71	4	42	67	43	63	42	65	40	62	V	
444	6C後 062	58-24-25	7.05 × 7.30	50.38 特大	60	N-1°-W	北・東 ₂	-	-	2	円形 円形	68 67	74 69	4	56	62	55	52	64	59	60	60	69	V
445	6C後 062	58-16	6.30 × 6.18	38.31 特大	38	N-2°-W	北・東 ₂	石	石	2	円形 円形	60 78	62 71	4	42	71	60	63	58	75	62	62	69	V
446	7C前 071	62-25	6.67 × 6.05	39.31 特大	46	N-90°-E	東 ₁	-	-	1	円形	56	90	4	30	57	28	55	26	36	28	28	61	V
448	7C前 071	62-18-19	4.25 × 4.40	18.56 中	28	N-80°-E	東 ₁	-	-	1	円形	44	51	4	48	68	40	59	36	56	43	69	V	
450	7C前 071	65-66-26	6.06 × 6.18	31.86 大	44	N-2°-W	北 ₁	-	-	1	楕円形	63	54	4	55	66	42	60	51	75	48	72	IV	
453	6C後 062	66-29-30	5.58 × 5.64	26.12 大	40	N-1°-W	北 ₁	石	石	1	円形	51	63	4	30	42	30	48	36	54	36	38	IV	
456	7C前 071	62-16-17	7.34 × 7.40	54.13 特大	48	N-6°-W	北・東・西 ₃	-	-	3	円形 円形 円形	76 52 88	96 33 65	4	41	88	38	74	52	45	36	60	V	
460	6C後 062	62-63-22	4.30 × 5.00	20.56 中	45	N-1°-E	北 ₁	-	-	1	円形	52	86	4	44	86	48	77	54	63	40	88	V	
462	6C後 062	67-24	4.80 × 4.50	17.68 中	44	N-82°-E	東 ₁	石	石	1	円形	57	90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	
466	7C前 071	66-67-28	6.15 × 6.42	34.94 大	55	N-20°-W	北?	-	-	1	円形	57	51	4	54	78	57	72	60	72	72	75	IV	
467	6C後 062	65-66-28	6.06 × 5.91	22.86 中	47	N-93°-E	東 ₁	-	-	1	方形	69	70	4	48	66	39	54	39	60	55	58	IV	
469	6C後 062	68-27-28	7.26 × 6.96	46.49 特大	35	N-109°-E	-	-	-	-	-	-	-	4	30	60	27	48	33	54	30	48	IV	
471	6C後 062	58-6-7	- × 2.60	-	28	N-90°-E	東 ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V	
478	6C後 062	63-64-34-35	7.11 × 7.56	51.08 特大	49	N-0°-E	北 ₁	-	-	1	円形	63	100	4	75	96	84	84	72	78	66	66	IV	
481	6C後 062	69-70-28-29	6.12 × 5.70	30.47 大	50	N-26°-E	北 ₁	石	石	1	円形	51	84	4	39	66	36	66	27	60	39	84	IV	
485	7C前 071	58-31-32	6.02 × 5.88	35.06 大	36	N-31°-E	北・東 ₂	-	-	2	円形 円形	60 62	64 61	4	48	45	50	54	50	52	44	52	V	
486	7C前 071	56-31	6.02 × 6.18	36.06 特大	16	N-95°-W	西 ₁	-	-	1	円形	54	78	4	51	67	58	88	52	51	60	72	V	
489	6C後 062	63-22	5.95 × -	-	31	N-96°-E	東・北 ₂	石	石	2	円形	60 50	63 63	4	54	73	56	65	44	66	42	59	V	
491	7C前 071	62-20-21	7.74 × 8.40	62.38 特大	41	N-91°-E	東・北 ₂	石	石	1	円形	68	89	4	34	61	38	91	37	85	32	89	V	

第1節 古墳時代の住居について

住居 No	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規区分	壁高 (cm)	主軸方向	電		貯蔵穴				柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号		
							位置 数	天井 袖	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ		直径	深さ
492	6 C後 062	63-19-20	5.14 × 5.12	26.26 大	50	N-90°-E	東 1	-	無	1	円形	60	76	4	23	42	28	45	26	53	30	61	V
498	6 C後 062	73-74-31-32	6.51 × 6.60	38.77 特大	55	N-7°-W	北 1	-	無	1	円形	54	93	4	48	66	60	66	42	66	39	72	IV
499	6 C後 062	72-32	4.83 × 5.16	21.11 中	36	N-94°-E	東 1	-	無	1	楕円形	51	60	4	42	48	33	66	45	60	33	54	IV
500	6 C後 062	55-23	5.35 × 4.70	23.56 中	21	N-86°-E	東 1	石	無	1	円形	44	44	4	38	65	45	51	44	58	46	58	V
501	7 C後 072	54-55-24	6.90 × 6.00	40.38 特大	27	N-3°-W	北 1	石	無	1	円形	50	81	4	50	83	52	82	50	73	50	78	V
502	7 C前 071	57-26	5.04 × 5.03	25.06 大	25	N-12°-W	北 1	石	無	-	-	-	-	4	48	57	42	52	37	52	32	47	V
504	7 C前 071	54-55-28	5.58 × 5.95	32.88 大	21	N-8°-W	北 1	-	無	1	円形	38	74	4	35	39	38	23	50	69	38	69	V
505	6 C後 062	64-65-38	- × 5.04	-	35	N-0°-E	北・北 2	-	無	1	円形	54	72	4	57	60	48	42	54	66	45	66	IV
506	7 C前 071	58-59-26	7.46 × 7.52	55.25 特大	34	N-1°-W	北・北 2	-	無	-	-	-	-	4	60	87	58	89	66	84	68	89	V
508	6 C後 062	61-62-28	6.62 × 6.76	44.38 特大	34	N-77°-W	東 1	-	無	1	円形	60	76	4	30	52	42	49	40	45	32	53	V
509	7 C前 071	59-28-29	6.55 × 6.72	43.44 特大	32	N-93°-E	東・北 2	-	無	1	円形	72	67	4	48	77	48	74	41	83	46	75	V
510	7 C前 071	57-22	3.80 × 3.82	14.0 小	20	N-72°-E	東 1	石	無	1	円形	58	53	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
511	6 C後 062	67-68-27-28	4.08 × 3.63	11.88 小	25	N-68°-E	東 1	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
518	6 C後 062	65-13	-	-	62	N-86°-E	東 1	-	無	1	円形	40	71	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
520	7 C前 071	61-13	7.00 × 6.90	46.94 特大	43	N-88°-E	東・北 2	-	有	2	円形 円形	85 73	62	4	38	74	43	73	48	78	38	70	V
521	6 C後 062	61-14	- × 5.40	-	22	N-100°-E	東 1	-	無	1	円形	52	62	4	40	42	32	53	31	76	43	64	V
523	6 C後 062	59-14	6.00 × 6.10	36.56 特大	28	N-3°-E	北? 1	-	無	1	円形	70	42	4	73	84	72	80	54	98	76	85	V
524	6 C後 062	58-13	6.10 × 6.00	36.06 特大	21	N-10°-W	北・東・北 3	石	無	2	円形 円形	68 70	64	4	68	79	46	70	51	66	50	70	V
528	6 C後 062	56-57-24	6.32 × -	-	32	N-100°-W	西・北 2	-	無	2	円形 円形	57 64	91	4	56	71	46	65	52	52	42	80	V
529	6 C後 062	56-57-24	- × 4.05	-	32	N-81°-W	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
533	7 C前 071	59-20	3.87 × 4.18	15.5 小	25	N-89°-E	東 1	-	無	1	円形	43	65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
536	7 C前 071	69-70-22	5.07 × -	-	41	N-76°-E	東 1	-	無	1	円形	66	59	2	45	36	42	45	-	-	-	-	IV

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No	時期 コード	グッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			周溝	貯 蔵 穴			柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号
							位置 電数	天井	軸		数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	
538	7 C後 072	54・55-16	3.14 × 2.86	8.64 小	19	N-71°-E	東 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
539	6 C後 062	51-15	6.10 × 5.58	33.12 大	46	N-4°-W	東 1	-	-	無	1	円形	56	62	57	56	65	54	75	60	64	VI
540	6 C後 062	77・78-30・31	7.59 × 7.80	49.41 特大	62	N-102°-E	東 1	-	-	無	1	円形	72	60	72	45	60	45	72	45	72	IV
544	6 C 060	53-14	- × 2.57	-	14	N-24°-E	北? 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
545	6 C 060	52・53-15	4.65 × -	-	26	N-89°-E	0	-	-	無	1	円形	45	45	62	37	64	28	73	39	66	VI
547	7 C 070	53-14	- × 3.98	-	29	-	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
548	6 C前 061	52・53-16	4.72 × 5.02	(22.57)	8	N-88°-E	東 1	-	-	無	1	円形	64	41	50	30	41	37	41	32	54	VI
553	6 C後 062	70・71-24	6.90 × 6.69	31.12 大	55	N-100°-E	-	-	-	無	-	-	-	39	57	45	54	45	69	42	72	IV
556	6 C後 062	74-28	-	-	22	-	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
558	6 C後 062	74・75-30・31	4.65 × 4.20	10.26 小	31	N-116°-E	東 1	-	-	無	1	円形	39	30	54	36	30	33	48	36	48	IV
561	6 C前 061	74・75-29・30	5.70 × 5.73	-	57	N-82°-E	東 1	-	石	無	1	円形	45	48	66	48	72	39	30	48	42	IV
562	6~7 C 060~070	75-27・28	5.34 × 5.19	-	40	N-64°-E	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
564	7 C前 071	83・84-38・39	6.51 × 6.60	22.64 中	18	N-104°-E	東? 1	-	-	無	1	円形	78	66	66	57	66	60	66	45	42	IV
566	7 C前 071	83-42	-	-	20	N-19°-E	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
567	6 C後 062	83・84-41	-	-	17	N-72°-E	-	-	-	無	-	-	-	-	-	44	45	36	36	-	-	IV
575	7 C前 071	77・78-41	-	-	41	N-90°-E	東 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
576	7 C前 071	81-39・40	3.75 × 3.78	11.84 小	49	N-92°-W	西 1	石	石	無	1	円形	39	62	-	-	-	-	-	-	-	IV
579	7 C 070	63・64-30・31	4.73 × 4.86	22.28 中	18	N-5°-W	北・西 2	-	-	無	2	円形 円形	61 53	45 50	44	43	61	62	58	43	53	VI
580	6 C後 062	53-18	5.25 × 5.30	27.56 大	3	N-81°-E	東・北 2	-	-	無	2	円形	66 60	77 68	52	30	68	30	65	30	72	V
581	6 C後 062	48・49-15	4.98 × 4.56	(22.25)	28	N-87°-E	東? 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
582	6 C後 062	53・54-11	5.42 × 5.20	27.83 大	26	N-2°-E	北・東 2	-	-	無	2	円形 円形	50 58	32	57	34	81	40	74	42	70	VI
584	7 C前 071	49-9・10	5.62 × 5.51	31.32 大	60	N-79°-E	東・北 2	-	-	無	2	方形 円形	60 48	32	56	34	71	40	66	38	60	VI

住居 No.	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規格区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵穴				柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 数	天井 数	袖 数	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ		直径
587	6~7C 060~070	55-6	-	-	9	N-87°-E	東1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
588	6C後 062	49-12	5.35 × -	-	20	N-73°-E	東1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
589	6C後 062	49-13	4.68 × 3.52	-	47	N-75°-E	東1	石	無	1	楕円形	56	58	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
591	4C後 042	85-42	3.84 × 3.12	9.77 小	25	N-34°-W	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	
592	6C後 062	84-85-40-41	6.72 × 6.30	24.80 中	-	N-15°-E	北1	石	無	1	楕円形	63	79	4	63	66	72	54	78	66	66	IV	
601	7C後 072	45-46-69	2.70 × 3.93	-	16	N-87°-E	東1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
602	6C 060	46-69-70	-	-	9	N-1°-E	北? 1	-	-	-	-	54	67	4	42	67	102	59	61	38	38	VI	
603	7C前 071	49-72-73	4.82 × -	-	28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
606	6C後 062	49-74	- × 5.28	-	38	N-67°-W	西1	-	有	1	円形	42	63	4	37	48	39	68	28	88	61	VI	
607	6C後 062	42-68	- × 4.64	-	31	N-13°-W	-	-	-	-	-	-	-	2	40	45	41	49	-	-	-	VI	
609	6C後 062	75-47	-	-	27	N-34°-W	-	-	-	-	-	-	-	4	57	42	36	24	57	42	36	42	IV
610	6C前 061	88-89-57-58	3.36 × 3.87	10.31 小	34	N-19°-E	北1	石	無	1	円形	51	50	4	36	48	33	36	33	24	39	36	IV
612	6~7C 060~070	87-54	- × 4.59	-	18	N-114°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	
613	7C前 071	86-87-54	- × 5.94	-	15	N-32°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	
615	7C前 071	71-72-46-47	- × 6.48	-	24	N-79°-W	西1	-	無	1	円形	66	60	2	60	76	51	62	-	-	-	IV	
619	6C後 062	69-70-43-44	-	-	29	N-80°-W	西1	-	無	1	-	-	-	4	29	56	40	56	24	54	39	42	IV
620	7C前 071	69-70-43-44	4.86 × -	-	13	N-148°-E	東・南 2	-	無	1	円形	54	45	2	30	32	33	28	-	-	-	IV	
623	6C後 062	70-35-36	3.81 × 4.02	13.91 小	30	N-92°-W	東1	-	無	1	円形	54	66	4	27	48	30	54	30	63	30	54	IV
625	7C前 071	72-35	3.33 × 3.93	11.30 小	34	N-87°-E	東1	-	無	-	-	-	-	4	36	40	45	30	39	30	37	8	IV
626	7C前 071	72-73-34-35	4.92 × 4.65	19.98 中	40	N-33°-W	北1	-	無	1	円形	41	104	4	84	54	39	32	36	51	54	60	IV
631	7C前 071	68-69-32	- × 6.48	-	36	N-11°-W	-	-	無	-	-	-	-	4	33	58	42	54	36	54	72	45	IV
632	7C前 071	68-69-31	5.19 × 5.22	24.23 中	60	N-79°-W	西・北・東 3	-	無	3	円形 円形 方形	60 54 63	75 72 72	4	54	60	57	66	51	60	51	60	IV

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No.	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(㎡) 規区分	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵穴			柱穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号
							位置 数	天井 袖	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	
633	5 C前 051	64-32-33	5.13 × 4.80	21.15 中	18	N-9°-E	0	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
635	7 C前 071	61-62-31	4.86 × -	-	35	N-97°-E	東 1	-	無	円形	57	36	2	45	54	48	60	-	-	-	-	-	IV
637	7 C前 071	59-30	5.02 × 5.28	26.44 大	38	N-94°-E	東 1	-	石	円形	60	49	4	32	70	44	65	44	77	44	73	-	V
638	4 C前 041	60-30	3.90 × 3.58	13.13 小	21	N-20°-W	0	-	無	-	-	-	4	62	63	40	52	48	43	58	100	-	V
640	7 C後 072	56-57-29-30	5.55 × 5.65	31.25 大	31	N-1°-E	北? 1	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V
642	6 C後 062	81-82-40	6.51 × 6.57	37.64 特大	36	N-88°-E	東 1	-	-	円形	66	71	4	60	42	51	42	57	42	60	42	-	IV
643	4 C前 041	82-41	4.53 × 4.32	-	31	N-25°-W	0	-	-	-	-	-	4?	30	42	30	42	30	42	-	-	-	IV
644	6~7C 060~070	82-41	- × 6.42	-	29	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
650	6 C 060	76-44	-	-	39	N-35°-E	-	-	無	-	-	-	1	31	47	-	-	-	-	-	-	-	VI
658	6 C後 062	61-62-34	4.62 × 4.89	13.93 小	48	N-107°-E	東 1	-	石	円形	48	48	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
659	5 C前 051	61-33-34	4.89 × -	-	34	N-86°-E	東? 1	-	-	方形	54	74	4	39	60	48	52	39	35	42	43	-	IV
660	6 C前 061	59-60-33-34	7.20 × 7.29	-	34	N-89°-W	西・北? 2	-	有	円形 楕円形	42 39	85	4	40	54	57	102	66	96	66	93	-	IV
666	7 C前 071	56-28-29	6.02 × 5.38	32.31 大	20	N-10°-W	北 1	-	-	円形	34	71	4	38	97	38	75	42	59	42	67	-	V
668	6 C後 062	56-20	5.40 × 5.41	-	24	N-25°-E	-	-	無	-	-	-	1	49	57	-	-	-	-	-	-	-	VI
669	6 C前 061	56-18	5.64 × 5.90	32.63 大	23	N-83°-E	東 1	-	石	円形	76	87	4	40	51	42	51	28	63	32	57	-	V
672	7 C後 072	67-43	-	-	38	N-3°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
673	6 C後 062	67-43	-	-	33	N-41°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
674	7 C前 071	67-43	-	-	33	N-3°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
677	7 C前 071	52-24	5.40 × -	-	27	N-90°-E	東 1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	46	68	42	67	V
678	6 C後 062	54-22-23	6.78 × 6.46	43.49 特大	42	N-88°-E	東・北 2	-	-	円形 円形	64 62	91 93	4	52	91	58	98	62	89	54	84	-	V
680	7 C後 072	52-53-21	4.82 × 4.28	20.5 中	14	N-34°-W	北・東 2	-	-	円形 円形	50 46	60	4	36	58	32	55	38	52	28	52	-	V
681	7 C後 072	52-20	-	-	42	N-1°-E	北 1	-	長壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	V

第1節 土墳時代の住居について

住居 No	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規区分	壁高 (cm)	主軸方向	竈			貯蔵穴			柱穴 数	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号
							位置 数	天井	袖	形状	径(cm)	深さ(cm)		直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	
682	7C前 071	53-26	5.40 × 5.65	30.19 大	36	N-43°-W	北? 1	-	-	円形	52	80	4	38	49	53	59	48	82	39	86	V
683	6C後 062	53-54-20	4.56 × -	-	-	N-92°-E	東 1	-	-	円形	54	62	4	34	54	70	30	68	34	55	55	V
685	6C 060	51-52-13	5.14 × 4.74	24.37 中	20	N-86°-E	東 1	-	-	円形	60	49	4	58	42	62	46	60	47	74	50	VI
686	7C前 071	57-11-12	6.06 × 6.50	37.5 特大	20	N-85°-W	西・東 2	石	-	凹形 凹形	48 54	84 101	4	66	83	56	89	50	90	70	101	V
687	6~7C 060~070	55-15-16	6.44 × 5.90	39.34 特大	-	N-84°-E	東・北? 2	-	-	凹形 凹形	64 64	72 71	4	44	78	50	66	50	57	56	81	VI
689	7C前 071	50-11	4.52 × 4.50	20.16 中	55	N-89°-E	東 1	石	-	円形	48	55	4	22	50	32	42	34	34	36	38	VI
690	6C 060	54-4	3.71 × 3.35	(12.13)	17	N-86°-E	東 1	-	-	楕円形	44	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
691	6C後 062	54-4	3.28 × 3.43	10.72 小	37	N-86°-E	東 1	-	-	楕円形	48	49	4	32	48	31	66	31	62	32	48	VI
692	7C前 071	54-13	4.04 × 4.00	15.76 小	17	N-110°-W	西・東 2	-	石	凹形 凹形	64 40	74 65	4	40	52	46	61	42	69	40	67	VI
693	6C 060	53-12	3.82 × 3.80	14.65 小	24	N-80°-E	東 1	-	-	凹形 凹形	47 53	75 33	4	38	61	35	46	34	56	35	57	VI
694	7C前 071	52-12	4.04 × 4.02	15.84 小	30	N-56°-E	東 1	-	-	円形	50	67	4	34	63	36	66	34	65	34	55	VI
695	7C前 071	52-7-8	5.96 × 5.80	34.13 大	17	N-95°-E	東・北 2	-	-	凹形 凹形	60 46	63 71	4	32	62	34	72	26	70	34	68	VI
696	6C 060	52-7	4.15 × 4.10	17.28 中	9	N-98°-E	東 1	-	-	円形	56	36	4	26	56	24	66	24	68	24	57	VI
698	7C前 071	43-73	3.44 × 3.42	11.26 小	45	N-80°-E	東 1	-	-	円形	42	71	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
699	7C前 071	42-72	- × 3.71	-	23	N-90°-W	西 1	-	石	方形	48	69	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
700	6~7C 060~070	43-72	- × 4.04	-	20	N-103°-W	西 1	-	-	円形	48	47	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
702	6C後 062	45-72	4.86 × 4.92	23.65 中	29	N-115°-E	東 1	石	-	円形	43	67	4	29	67	23	60	31	59	30	71	VI
703	6C後 062	41-73	4.13 × 4.42	17.60 中	18	N-91°-W	西 1	-	-	楕円形	36	65	4	33	61	33	65	37	62	34	50	VI
706	6C後 062	77-42	-	-	25	N-10°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV
708	6~7C 060~070	76-77-44	-	-	30	-	-	-	-	-	-	-	1	39	62	-	-	-	-	-	-	VI
718	7C後 072	40-82	- × 3.10	-	18	N-108°-E	東 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
719	6C後 062	40-82	- × 4.54	-	59	N-49°-E	東 1	-	-	円形	50	46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI

住居 No.	時期 コード	グリッド	規模(m) 東西×南北	面積(m ²) 規模区分	壁高 (cm)	主軸方向	竈			貯蔵穴			柱穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		報告書 番号	
							位置 竈数	天井	袖	周溝	数	形状	径(cm)	深さ(cm)	数	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径		深さ
723	6 C後 062	41-82-83	3.88 × 3.14	11.41 小	43	N-68°-E	東 1	石	石	無	1	円形	60	51	-	-	-	-	-	-	-	-	VI	
725	6 C後 062	42-85	4.24 × -	-	48	N-53°-E	東 1	-	-	無	-	-	-	-	4	39	54	36	75	33	56	27	63	VI
726	7 C後 072	42-85	2.80 × 2.46	6.90 小	32	N-103°-E	東 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
738	7 C後 072	38-39-86	4.72 × -	-	36	N-85°-E	東 1	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	VI
741	7 C前 071	61-108	- × 5.18	-	41	-	-	-	-	有	-	-	-	-	2	38	40	38	59	-	-	-	-	VI

〈注〉 規模()は推定、竈は新旧関係のはっきりしているものについては左より新→旧、新旧関係の不明のものについてはその限りでない。貯蔵穴は上より新→旧
規模区分の小は面積0~16m²未満、中は16~25m²未満、大は25~36m²未満、特大は36m²以上の面積による区分を意味する。

第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について

矢田遺跡では古墳時代の住居が268軒造られていた。当然ながらこれらの住居は約400年間にわたり延々と造られてきたわけである。古墳時代の集落を理解するには、これらの住居がどの時期に何軒どのような位置関係で造られてきたかを理解する必要がある、それには時間軸となる土器の編年的研究が不可欠である。この土器の研究は従来より多くの研究者により行われているが、古墳時代の土器も地域により様相が異なり、地域に対応した研究が行われないと時間軸としての役割は充分には果たせなくなる。そこでこれまでの県内外の研究成果を活用しながら、矢田遺跡の出土土器を中心に、吉井町出土の土器を使い土器編年図の作成を試みた。出土土器の少ない古墳時代前期と中期に関しては西に近接する甘楽町と富岡市の土器を、また東の藤岡市の土器も一部使用した。住居出土の一括資料を基本としたが、良好な資料が少なく共伴遺物の存在から、系統的にこの時期に存在するであろうと考えた土器も用いた。そのため不自然な部分も多いと思われる。

今後現在整理されている甘楽町の白倉下原遺跡・天引向原遺跡をはじめとした多くの遺跡で、報告書の刊行が予定されている。その段階でさらに内容が明らかにされてゆくものと思われる。

以下の土器編年は坏類の変化を主に、鉢や埴の存在に注目し編年の軸とし大きく9段階に区分した。

1段階を弥生時代終末期（3世紀後半）、2・3段階を古墳時代前期（4世紀前・後半）、4・5段階を古墳時代中期（5世紀前・後半）、6～9段階を古墳時代後期（6世紀前・後半、7世紀前・後半）と想定している。9段階を古墳時代とするには不自然ではあるが、奈良時代ではないという単純な理由から古墳時代を含めた。

時代や時期区分また実年代の扱いに多くの問題を含むと思うが、土器理解のための便宜的な区分とする。

1段階（矢田遺跡では、この段階の住居や土器は確認されていない。）

この段階は在来の弥生土器が多くを占めるが、小型器台や小型高坏の存在に見られるように、次の段階で中心となる外来系の土師器を新しい文化として受け入れた段階である。

小型器台は在地弥生土器には基本的に含まれない器種であり、外来系の新器種である。この段階から出土し、3段階まで使われてゆく。鉢は高坏A（坏部より脚部が小さい）とともに弥生時代中期後半からしだいに使われ、弥生時代後期には出土量が増加し基本的な器種となっている。土師器が主体となる2段階以降になると急激に使用量が減少してゆく。高坏B（小型高坏・坏部より脚部が大きい）は脚部に円孔を持ち、脚端部が大きく外側に開く。高坏Aと異なり弥生土器には基本的に含まれない器種であり、外来系の新器種である。この段階から出土し、2段階でも使用されている。

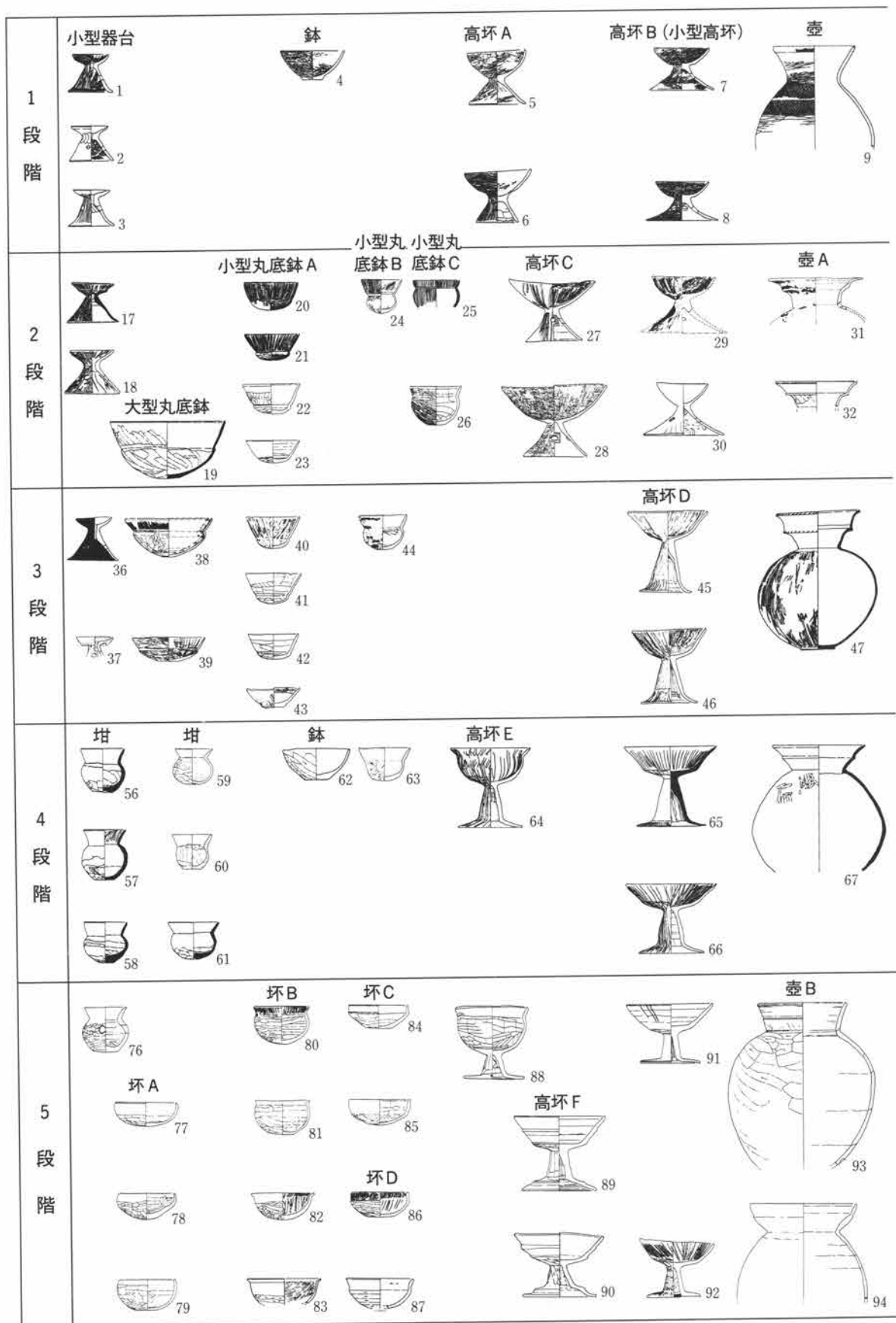
壺は縄文施文の赤井戸式又は吉ヶ谷式が多い。甕は在地系の他に外来系の単口縁台付甕が確認されている。しかしS字状口縁台付甕は確認されていない。

弥生時代後期頃になると、樽式土器を主としていた鑄川流域に赤井戸式又は吉ヶ谷式の土器を持つ住居が多く出現するようになる。

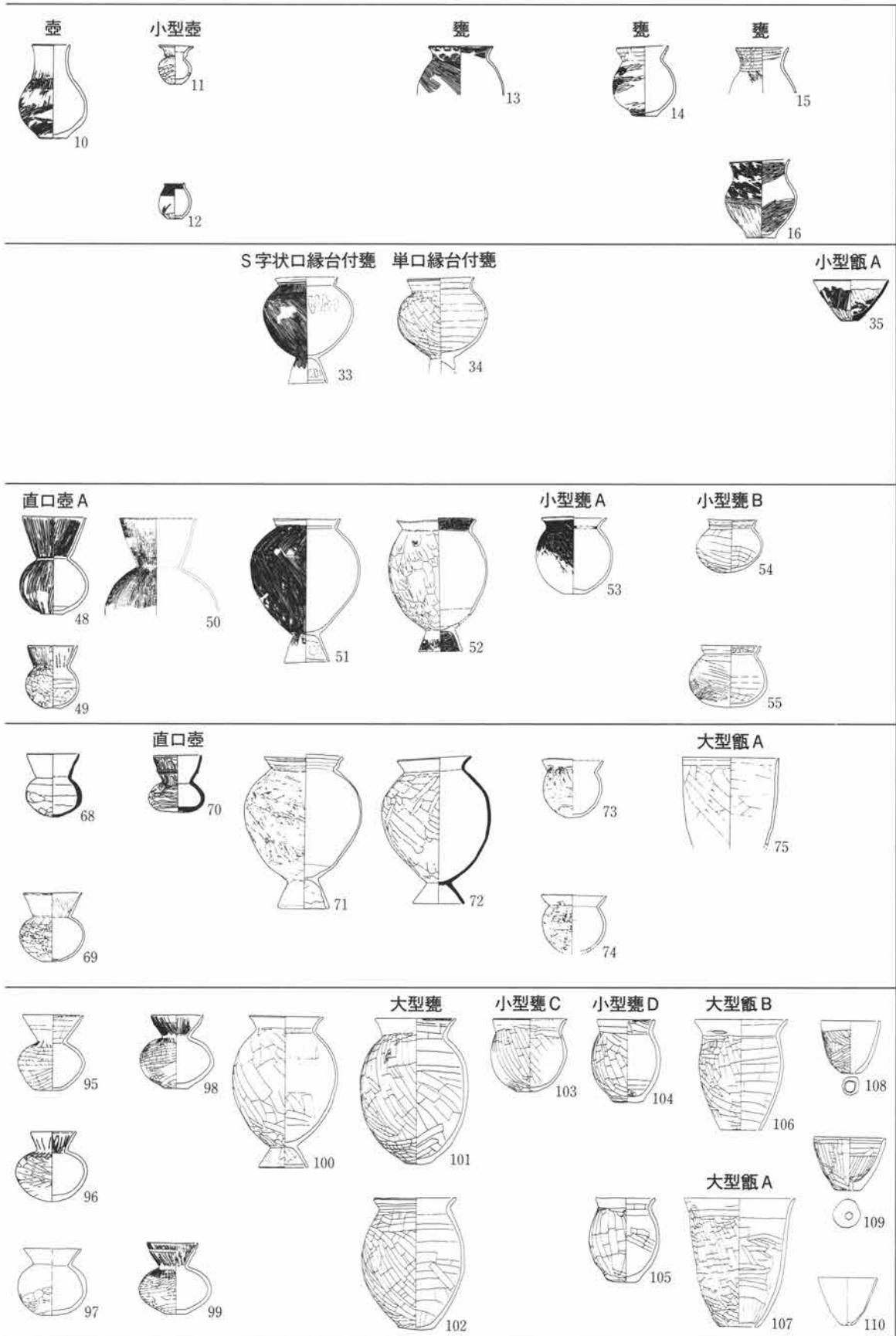
2段階（矢田遺跡では2軒確認されている。）

矢田遺跡で集落の造られる時期は、この段階からである。この時期からは弥生時代の系統を引く土器はほとんど姿を消して、外来系の影響下で成立したと思われる古墳時代前期の土師器が出揃う段階である。

小型器台・大型丸底鉢・小型丸底鉢A（底部が浅く口縁部が長い）・小型丸底鉢B（底部が深い）・小型丸



第460図 矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(1)



第461図 矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(2)

第4章 調査成果の整理とまとめ

底鉢C（胴部が大きく口縁部が短い）・高坏C（脚部より坏部が大きい）・高坏Bが使われている。大部分の土器の内外面又はいずれかの面にヘラ磨きが行われている。そして胎土が密で造りの丁寧なものが多い。

壺は口縁部が複合口縁を呈する壺Aが僅かに確認されているが、全体に出土量は少ないようである。

甕はS字状口縁台付甕・単口縁台付甕が、甗は小型品がある。単口縁台付甕は、S字状口縁台付甕に比較すると出土例が少ないようである。

3段階（矢田遺跡では3軒確認されている。）

小型器台や小型丸底鉢と刷毛整形の甕がこの時期をもってほぼ終了し、新たに直口壺や筒状を呈する長脚の高坏Dが登場してくる。

小型器台・大型丸底鉢・小型丸底鉢A・小型丸底鉢Bはこの段階まで使用され、やがて使われなくなるようである。脚部が三角形でなく、筒状を呈する長脚の高坏D類が多く出現してくる。鉢や高坏に多くのヘラ磨きが多く行われている。

壺Aは頸部が直立しなくなり、口縁端部の外反も少なくなっている。大小の直口壺Aもほぼこの段階から使われはじめており、口縁部内外面や胴部外面に多くのヘラ磨きがある。胴部外面のヘラ磨きはやがて行われなくなる。大型の直口壺Aの使われる時期は短いようである。

甕はS字状口縁台付甕・単口縁台付甕・小型甕A（丸底に近い底部を持ち、口縁部が長く外反する）・小型甕B（丸底で口縁部が僅かにS字状を呈する）等が使われている。

S字状口縁台付甕はやや長胴化を呈し、肩部に横刷毛を持つものは少なくなるようである。単口縁台付甕は出土量が少ないためか目立たないが、S字状口縁台付甕とともに使われているようである。S字状口縁台付甕と異なり台部下端内側に折り返しはなく横方向のヘラ削りとなっている。新たにこの段階頃から小型甕Aが出現する。底部にススの付着を持つものも存在するため、煮炊用として使用されているようである。

4段階（矢田遺跡では3軒確認されている。）

小型器台や大型丸底鉢また小型丸底鉢Aは姿を消し、埴が多く使用されてゆく。

1段階で使用されていた鉢がわずかながら4段階まで使用され続けているようである。

小型丸底鉢Bは基本的にヘラ磨きが伴い、ヘラ削りは認められない。この段階より出土する埴はこの小型丸底鉢Bに似てはいるが、基本的にヘラ削りであり胎土も粗い。底部は丸底も認められるが平底が多いようである。この小型の土器を埴と呼称する。新しい器種として高坏の坏部に小型丸底鉢Bを載せたような土器が出現してくる。どのように呼称したらよいか困るが、脚部の変化は高坏と共通しているため、高坏の中に入れて考え高坏Eとした。高坏Dは前段階同様に長脚でヘラ磨きが多く行われている。坏底部が大きく平底化し、脚部はしだいに短くエンタシス状の脚部になってゆくようである。脚下端は長く大きく外側に開くようになる。

壺Aは口縁部が外傾しさらに短くなっている。口縁部の段は少なくなり稜が認められる程度となる。直口壺Aと直口壺の口縁部に段を持つ須恵器の臑を真似たと思われる直口壺Bが出土している。直口壺Bは口縁部にヘラ磨きの行われるものが多く、直口壺Aより造りがいねいなものが多いようである。

甕はS字状口縁台付甕と単口縁台付甕及び小型甕Aと大型甗Aが使われている。S字状口縁台付甕はS字口縁の簡略化と刷毛の整形をやめてヘラ削りとなっている。単口縁台付甕も一部では引き続き使用されている。小型甕Aも使用されている。大型甗Aの出土が認められる。おそらく小型甗も存在すると思われるが不

明である。完形品ではないが図示した甗は、口縁部が短く直立気味に立ち上がっている。出土例は非常に少ないようである。この時期以降多くなる大小の甗と甗の存在から、甗がこの時期に造られている可能性は高いが、一般化するのには5段階以降と考えたい。

5段階（矢田遺跡では3軒確認されている。）

この時期以降住居内に炉でなく甗が導入されてくる。この甗の導入に伴うようにこの時期以降大量に使用されてゆく坏・甗・甗がほぼセットとして出現してくる。

坏はA・B・C・Dの4種類、高坏はD・E・Fの3種類が存在する。坏Aは口縁部が底部から丸味をもって半球形に立ち上がり口縁部が内屈する形態、坏Bは内斜口縁の坏であり深いものと浅いものがある。坏Cは口縁部が直立気味に立ち上がり、底部中央が平底を呈する。そして口縁部と底部との境に須恵器模倣坏を意識させる稜を持つ坏である。坏Dは口縁部に稜を持つ須恵器坏蓋の模倣坏とも思われるが明らかでない。いずれも放射状のヘラ磨きが行われているものが多い。坏A・坏Bの出土量が多く坏C・坏Dの出土量は少ない。坏A・坏Bは次の6段階まで使用されるが、坏Cと坏Dはほとんどこの時期で姿を消している。

高坏Eの脚はより短くなっている。高坏Fは脚部坏部とも稜を持つ坏で、この段階以降ではほとんど出土しないようである。高坏Dは前段階より脚が短くなり、柱状の脚部から裾部がほぼ水位方向に大きく外側に広がる。高坏E・Fの出土量は少なく、主体を占めるのは高坏Dである。

壺Aはほとんど姿を消して、口縁部中段付近に稜を持つ壺Bが出現する。新たな粘土を積み上げた壺Aとは作りが異なるため、複合口縁の甗の影響下で作られた壺ではなくて、模倣坏や甗の口縁部同様に須恵器の甗の影響下に作られた壺とも考えられるが出土例が少ないため明らかでない。この壺の胎土はやや粗いものも含むが、ヘラ削りが丁寧で甗と異なり黒斑が少なく底部は厚く平底を呈する。この壺Bは5・6段階を中心に使われているようである。直口壺の口縁部に段を持つ須恵器の甗を真似たと思われる直口壺B類も使われている。いずれの直口壺とも作りは丁寧である。

S字状口縁台付甗は、大きく変化しつつ一部この段階まで残るようである。図示した甗は口縁部は単口縁であるが、台部内側下端に折り返しが認められ、S字状口縁台付甗の特徴を持っている。またS字状口縁台付甗の胴部外面に特徴的な刷毛の整形が全く認められずにヘラ削りを主としている。

甗で多く使用される大小の甗と甗がこの段階から基本的なセットとして多く登場してくる。甗は丸胴を呈し器肉が厚くヘラ削りは胴部がやや丸いために斜め方向が多いようである。小型甗も丸底の小型甗Cと平底の小型甗Dが使われている。小型甗Cは縦方向のヘラ削りもあるが横方向のヘラ削りが多い。最大径は7段階頃までは口縁部に持つが、8段階以降になると胴中央部となる。両者は同一住居から出土する例も認められるため、使い分けが行われていたものと思われる。甗は大型甗A・大型甗Bと小型甗Aを含む。大型甗Aは胴部がほぼ直線的に立ち上がり口縁部が緩やかに外反する。大型甗Bは丸胴で口縁部が大きく外反する。時期が新しくなるにつれてA類が増加し長胴化の傾向を示しているようである。小型甗Aは出土例が少なく、前段階に比較して口径が狭くなり鉢に似た形から小型甗に似た形に変化している。しかし口縁部の外反は認められない。

4段階より直口壺の口縁部に段を持つ須恵器の甗を真似たと思われる直口壺C類が出土し、須恵器の影響がうかがえる。県内では5段階より須恵器の坏や高坏も出土しているが、6段階以降に比較すると数は少ない。矢田遺跡の付近でこの時期の須恵器を出土した遺跡は、高崎市上滝遺跡・藤岡市温井遺跡・藤岡市掘ノ内遺跡・甘楽町笹遺跡等である。

6段階（矢田遺跡では10軒確認されている。）

坏・甕・甔が多く使用されてくる段階である。坏の中で主体を占める坏Eは、須恵器の坏蓋でなく無蓋高坏の坏部分に似ており口縁が大きく外反している。⁽¹⁾

坏A・坏Bは5段階から出土する土器であるが、少量ながらこの時期にも引き続き使われている。坏Eはこの段階の最も特徴的な坏であり、口縁部が長く大きく外反する。古い段階では口唇端部が少し上に立ち上がるものもある。多くの坏の内面にヘラ磨きが行われており、新しい段階になるとヘラ磨きは行われなくなる。出土量はこの坏Eが多く、この時期の主体を占めている。この時期に近いTK47段階前後と思われる須恵器の坏蓋は、口縁部がほぼ直立しておりこの坏Eとは大きく器形が異なっている。同じ時期の須恵器としては無蓋高坏の坏部に似ている。また共伴している土師器と須恵器の高坏の坏部により近い。そのため須恵器無蓋高坏からの影響が強く考えられる。しかし現在のところ坏Eの出自は不明である。坏Eは稜から上の口縁部の高さが高く、2.5cm以上のものが多い。坏蓋ではなく坏身を模倣した坏は、2段階から少しずつ使われているがこの段階での出土は少ないためか現在のところ明らかでない。

高坏は中期の5段階で4種が使われていたが、この段階になると前段階の4種はほとんど姿を消して、新たに集落内より出土する須恵器の無蓋高坏に似た短脚の高坏Gが出現する。脚部は出現段階では短いだが次の7段階に近づくと長脚化した高坏Hが出土している。この出現期の高坏Gの坏内面には放射状のヘラ磨きが行われている物が多い。

大きな鉢がこの段階から出現する。この鉢は大型壺とほぼ近い時期に出現し8世紀後半代まで使用され続ける。

5段階に出現した壺Bがこの段階でも使用されているが量は少ないようである。大型壺がこの段階から出現し、この地域の基本的なセットとして登場してくる。口縁部は直立気味に立ち上がり上端部で少し外反する。底部は厚く胴部下端との境に明瞭な段を持つ。この大型壺は底部の厚い平底から底部の薄い丸底へ、長い口縁部から短い口縁部へという基本的な変化をしながら、奈良時代の8世紀後半代まで使われている。煮沸に使用しないためか黒斑は少なく、作りが丁寧である。この大型壺は鎭川流域の遺跡に特に多く、他の地域では少ないようである。

直口壺Aは存在するが口縁部に段を持つ甔に似た直口壺Bは前段階で消滅しこの段階では存在しないようである。直口壺Aは数が減少し基本的にこの段階で消えてゆく。

直口壺の口縁部の長さは、出現段階を省くとおおむね5cm以下である。その口縁部がこの段階と次の段階初頭で7～11cmと長い製品が少量ながら出現する。前からの伝統であるヘラ磨きが多く認められるため直口壺の延長上での変化と考えられる。高崎市観音山古墳出土遺物の中にこの口縁部の長い土師器の直口壺（報告では甔としている）と須恵器の有蓋台付壺が出土している。この須恵器の有蓋台付壺の影響下での出現も考えられるが明らかでない。

甕は長胴化の傾向を持つ大型甕と小型甕C・小型甕Dが、また甔は大型甔Bと小型甔Bが存在する。甕は長胴化の傾向を示している。胎土に5～8mmと粒の大きな砂粒を多く含み、ヘラで削る量は少ないらしく、ヘラ削りの単位は明瞭に確認できないものが多い。器肉は厚く底部と胴下端との境に明瞭な段を持つ。口縁部は「く」の字状に外反するが、この外反の角度は時期が新しくなるにつれて鋭角となり口縁部が水平に近付く傾向を示す。小型甕Cは丸底で器肉が薄い。小型甕Dは前段階と大きな変化は無いようであるが、大型の甕と同様に器肉は厚く、底部と胴下端との境に明瞭な段を持つ物が多い。大型甔は甕同様に長胴化の傾向を持つ。小型甔は前段階まで口縁部が胴部と同じ傾斜で作られ、口縁部の外反は認められなかったが、この

段階で口縁部が外反し器形が変化している。

矢田遺跡周辺の鑄川流域の集落遺跡からも、この時期から少量ながら TK47段階から TK10段階に近いと思われる須恵器が出土してくる。何故か坏ではなくて高坏の出土が多いようである。

7段階（矢田遺跡では123軒確認されている。）

住居数が一気に増加し、古墳時代の中で最も住居数の多い段階である。坏Eはほとんど姿を消して、須恵器の坏蓋を模倣したと思われる坏Fが多く使用されている。この段階以降になると集落遺跡からも、以前より多くの須恵器の坏や坏蓋が出土してくる。

これまで坏の主体を占めていた坏Eが前段階でほとんど姿を消して、須恵器の坏蓋を模倣したと思われる坏Fが多くなる。坏Fは稜から上の口縁部の高さが、2.0~2.7cmの範囲の中にほぼ集中するようである。坏Fの採用と共に坏身の模倣と思われる坏Gがこの段階から少量ながら採用されてゆく。さらに口縁部外面から内側内面まで漆が塗られ、外面底部は吸炭により黒色を呈する黒色土器が坏Fの中で多く出現してくる。一方漆でなく炭素を吸収させて、内外面を黒色に仕上げている土器も少量であるが存在する。漆を用いた黒色土器は断面が橙色で、吸炭による黒色土器は表面から一部断面まで炭素を吸収しており黒色を呈しているため区別は容易である。また口縁部に段を持つ有段口縁と呼ばれている坏Hも少量ながら使用されている。このようにこの段階の坏は旧来の坏A・坏B・坏Eがほとんど姿を消して新たな坏Fと入れ替わっている。

高坏Hはさらに長脚となり脚部が筒状を呈し、脚内側に多くの輪積跡が残る。口縁部は大きく外側に開き、口唇部付近でさらに外に向かって開いている。口径と稜径の差が大きくなっている。

鉢はこの段階から多く使用されてゆくようである。口径や器高は大きくなり、胴部下端と底部との境に明瞭な段を持つ厚い底部が、しだいに薄くなり平底から丸底へと変化してゆく。

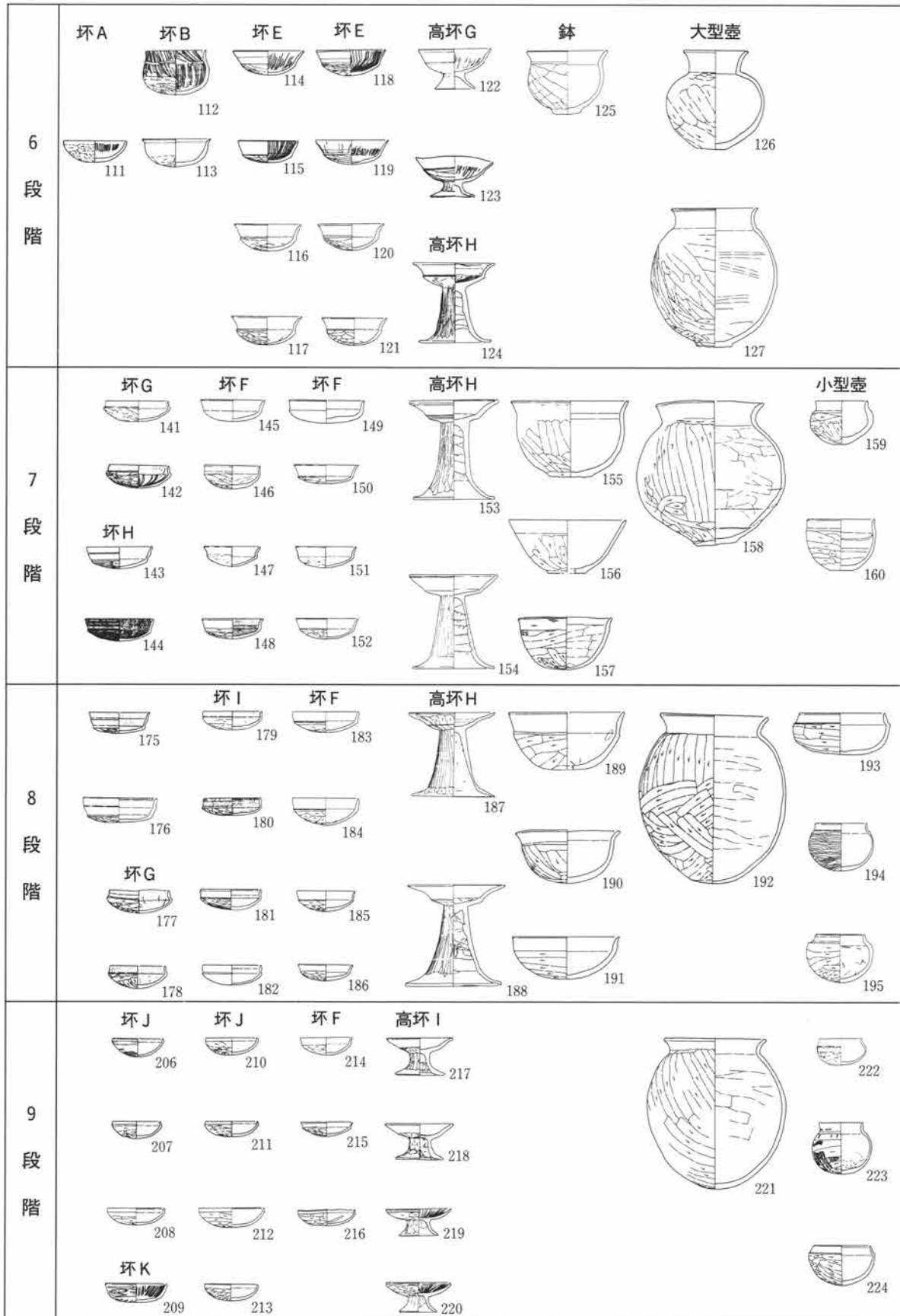
大型壺は前段階で口縁部が一度直立してから外反していたが、この段階では直立しないで緩やかに外反している。底部はやや厚く胴部下端との境に明瞭な段を持つ物が多く、底部の薄い丸底の大型壺も登場しているようである。小型壺は短い口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部との境に模倣坏に似た稜を持つ。少量ではあるがこの段階頃から登場し8世紀まで使われる。橙色で黒斑は少なく作りや整形が丁寧である。口縁部は蓋を受ける形であると思われる。わずかではあるが直口壺Aがこの段階でも存在し、この段階の中で消えてゆくようである。図示した直口壺の口縁部の長さは約10cmである。

大型甕は次の8段階とともに最も長胴化する。最大径を胴中央部と口縁部に持ち、径がほとんど同じになっている。胴部の最大径は依然として、丸味を持つ胴中央部である。器肉が厚くヘラ削りが少なく、輪積跡の残る物も認められる。6段階で認められた厚い底部と、胴部下端との境に明瞭な段を持つ物は少なく、底部が少し薄くなり胴部下端との境の段は薄くなる。小型甕Cは前段階からの変化は小さいようである。小型甕Dは頸部のくびれが少ない。大型甕の底部と共通して底部が厚く胴部下半との境に明瞭な段を持つ物は少なくなっている。大型甕Aは口縁部が長く「く」の字状に外反する。胴下端に棧を持つものも存在する。小型甕Bは底部が広くなり、穿孔は1つでなく10個以上の小穴を持つものも現れる。

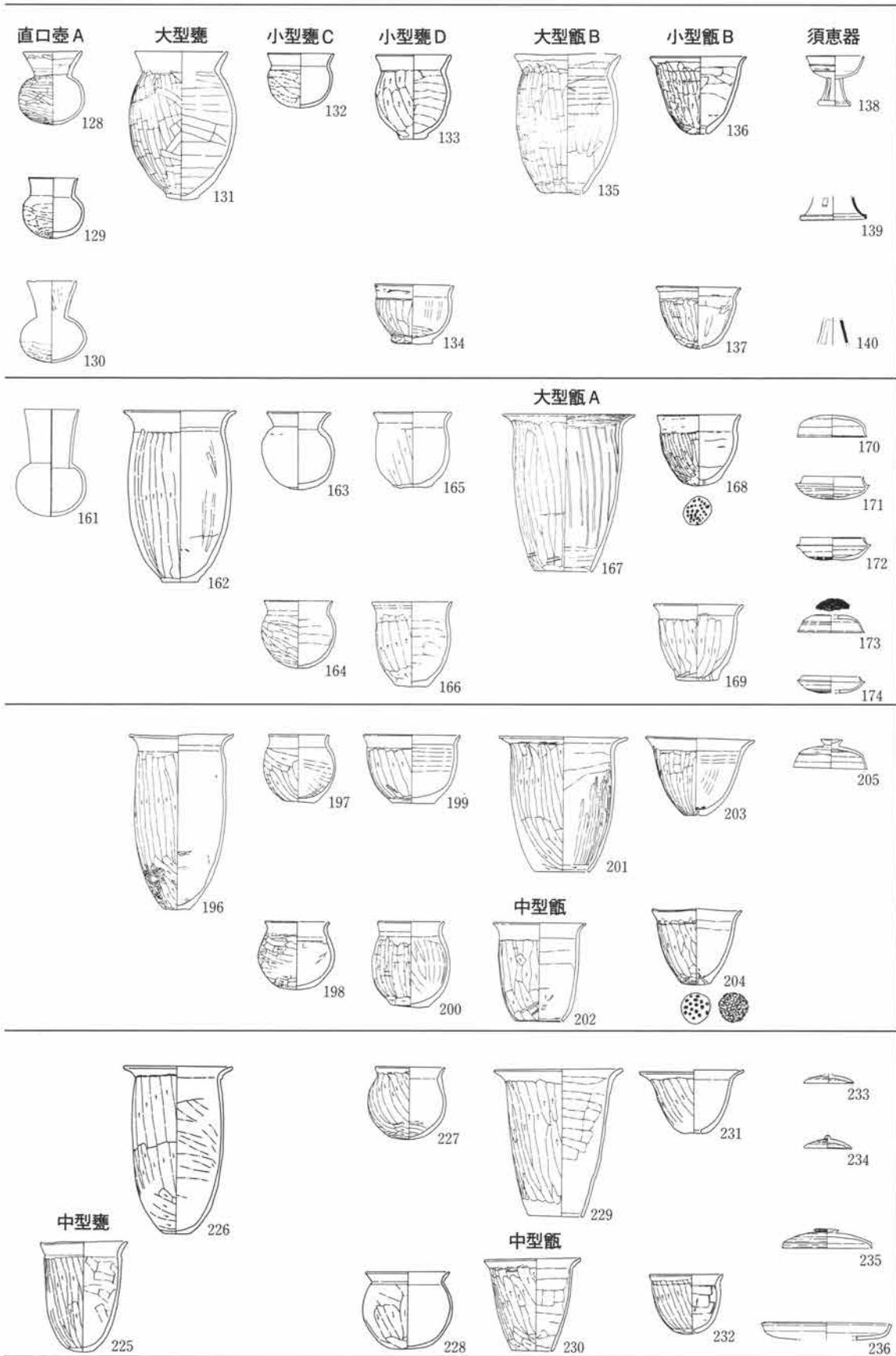
TK10段階に近いと思われる須恵器の坏身と坏蓋が、この段階から少量ながら出土するようになる。

8段階（矢田遺跡では76軒確認されている。）

坏身は前段階で出土するが、出土量は非常に少ない。この段階になると稜の部分で口縁部が内屈しその後直立する坏Iが多く出土する。



第462図 矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(3)



第463図 矢田遺跡周辺における古墳時代土器編年図(4)

第4章 調査成果の整理とまとめ

坏は坏G・坏F・坏H・坏Iが使われている。坏身である坏Gの出土は前段階同様に少ない。主体を占める坏Fは稜から上の口縁部の高さがさらに低くなり、1.5～2.2cmの範囲の中にほぼ集中するようである。また稜径も小さくなる傾向を示してくるため全体に小型化する。この坏Fは黒斑がほとんど無く、橙色を呈しているものが多い。中には胎土が粉状を呈し手に付着するものも含む。またこの段階になると稜の部分で口縁部が内屈しその後直立する坏Iが多く出土する。坏Gのように口縁部が内屈はしていないが、坏身の範疇で考えている。坏Iの中には漆の塗布の認められる黒色土器となっている物も多く、一軒の住居の中で坏Iが土器の大部分を占める住居も出現するようになる。炭素の吸着による黒色土器の坏Iも少量ながらこの時期でも使用されている。この坏Fと坏Iが大部分を占めて、少量の有段口縁の坏Hと坏身の坏Gが使用されている。

高坏Gはさらに長脚となり脚部が筒状を呈し、脚内側の輪積跡はヘラ削りにより大部分が削り取られて残っていない物が多い。そのため脚部の器壁も薄くなっている。口縁部は湾曲しながら大きく外側に開いている。そのため坏の器高はさらに低くなり、口径と稜径の差はさらに大きくなっている。

大型壺はこの段階でも多く使用されている。口縁部は緩やかに外反し、前段階に多く認められたやや厚い底部は僅かとなり、底部は丸く削られて薄くなっている。しかし胴部とは削りが違うために胴部との境は確認できるものが多い。肩部から胴上部のヘラ削りは縦方向を主に持つものと横方向を主とするものが存在する。小型壺はこの段階でも使われている。

甕は大型甕と小型甕が存在する。大型甕はさらに細長くなり、前段階とともに最も長胴化する。器肉はしだいに薄くなり、輪積跡はほとんど残らない。底部は薄くなり、胴部下半との境に明瞭な段は認められなくなる。口縁部の外反の傾斜は大きくなる。小型甕Cの口縁部は短くなっており、最大径は口縁部でなく胴中央部となる。小型甕Dは頸部がやや狭くなりくびれが大きくなるものもある。大きな甕の底部と共通して底部が薄くなり、底部と胴部下半との境に明瞭な段は認められない。大型甕は大型甕に似て、胴上部は直線的になり胴下部が胴下端に向かい緩やかに内傾する。そのため底部の孔の大きさは相対的に大きくなっている。口縁部はしだいに短くなり強く外反する。この段階頃から数は少ないが大型甕を小型化したような中型甕が存在する。小型甕は底部が広くなり、穿孔は1つでなく10個以上の小穴を持つものも多く使われている。

須恵器は前段階と異なりこの段階からの出土量は少ない。

9段階(矢田遺跡では現段階で20軒であるが、現在整理を進めている200軒以上の住居の中にこの時期の住居が20軒以上確認されているため、40軒以上が存在していたものと思われる。)

この段階の中で模倣坏が消滅し、内弯口縁の坏が主体を占めてゆく。坏の形や胎土で区分するなら古墳時代ではなくて奈良時代の土器に近い。

坏Fは口径・稜径・器高とも小さくなり、全体に小振りとなっている。口縁部は短く僅かに外反しており、この段階の中で坏Fは消えてゆく。稜から上の口縁部の高さは低く、大部分が1.7cm以下となっている。内弯口縁の坏Jが新たに出現し坏の主体を占めてゆく。坏Kは内面に暗文を持つ坏であり、畿内で使われている暗文土器の坏Aの模倣と思われる。

高坏Gは姿を消して小型で短脚の高坏Hが出現する。脚部分は短くヘラ削りの幅が広く、8段階の高坏の脚部と大きく異なる。そのため前段階からの変化により出現した高坏ではなく、他の高坏の影響下で出現したものである。羽田倉遺跡では内面に暗文の認められる高坏が出土しており、古墳時代の高坏の出現は暗文土器同様に畿内からの影響で出現した物と思われる。短い脚部の内側は8段階と異なりヘラ削りはなく指に

よる整形痕が残っている。

大型壺の口縁部はさらに短くなり外反する。底部は丸く薄く削られており、厚い底部を持つ壺は使われていない。小型壺が少量ではあるがこの段階でも使われており、大型壺同様に奈良時代まで使われている。

甕の長胴化は前段階で終了する。明らかに口縁部に最大径を持ち胴部の最大径は前段階にみられた胴部中央ではなく、肩部に持つようになっている。大きな甕を小型化した甕が少量ながら出現する。この甕は器形や整形方法が大型甕とほぼ共通し、一時的に使用されたものであり次の段階ではほとんど使用されていないようである。前段階に大型の甕を小さくしたような中型甕が出現しているため、中型甕も前段階に存在が想定されるが、現在のところ確認されていない。大型の甕は口縁部の外反傾斜がますます大きくなり、胴部はヘラ削りで薄く仕上げ、口縁部は削らないため厚い。ヘラ削りの行われている胴部と行われていない口縁部との境に明瞭な段を持つ甕が多く認められる。

小型甕Dは大型壺や大型甕の底部が薄く丸くなるように底部が薄く丸底となり、小型甕Cに似てくる。しかしヘラ削りの方向が異なるため、何らかの使い分けは存在するのかも知れない。出土量は減少している感がある。大型甕は大型甕に似て、口縁部の器肉が厚く胴部は薄く仕上げている。しかし甕のようにヘラ削りの行われている胴部と行われていない口縁部との境に明瞭な段は認められない。胴上部から下端にかけて僅かに内湾するがほぼ直線的になっている。そのため底部の孔の大きさは相対的にさらに大きくなっている。口縁部はしだいに短くなり外反する。甕と同様に大きな甕を3/4程にした中型の甕も使われている。小型甕は底部の穿孔が1つのものが確認されているが、多孔のものも存在していると思う。しかしいずれにしても甕は大・小とも出土量が極端に少なくなり明らかでない部分が多い。次の奈良時代では甕はほとんど出土しなくなる。

須恵器は8段階での出土量は少なかったが、この9段階になると口径10cm前後の坏蓋や坏身の出土が少量ながら出土するようになり、8世紀に近付くと口径16~18cmの大きな坏蓋や盤が、少量ながら出土するようになる。しかし出土量は少なく、須恵器の坏蓋や坏身が多く出土するようになるのは奈良時代の8世紀以降である。

この9段階の住居は現在整理している住居の中に多く含まれており、「矢田遺跡VII」として報告される。その整理が終わった段階で再検討を行いたい。

矢田遺跡の古墳時代住居編の担当として整理作業に着手したが、古墳時代の土器についての知識が少なく、どの土器が新しくどのように変化してゆくのかの理解が出来なかった。そこで従来の研究成果をもとに、矢田遺跡を中心とした鎭川流域の、古墳時代前期から後期までの約400年間の土器の理解と編年図の作成に努めた。しかし不十分で問題の多いことも明らかであり、現在整理作業の進んでいるこの地域の報告書の刊行を待って、何らかの形で修正してゆきたい。

なおこの編年図や本文の作成にあたり、次の方々から多くのご教示を得た。

石塚久則 大木紳一郎 神谷佳明 岸田治男 木津博明 木村 收 坂口 一 桜岡正信
佐藤明人 下城 正 田口一郎 友廣哲也 長谷川 厚 服部敬史 山口逸弘 綿貫邦男

(1)

古墳時代後期を代表する土器として、須恵器坏蓋を模倣したと言われているいわゆる模倣坏がある。この模倣坏は古墳時代中期段階から出現し、高崎市や群馬町においては榛名山二ツ岳噴出のテフラ Hr-FA によって覆われた遺跡からも多く出土する。しかしこの段階の模倣坏は客体であり、他の坏から見ると出土量は少ない。6世紀以降になると他の坏を圧倒し大

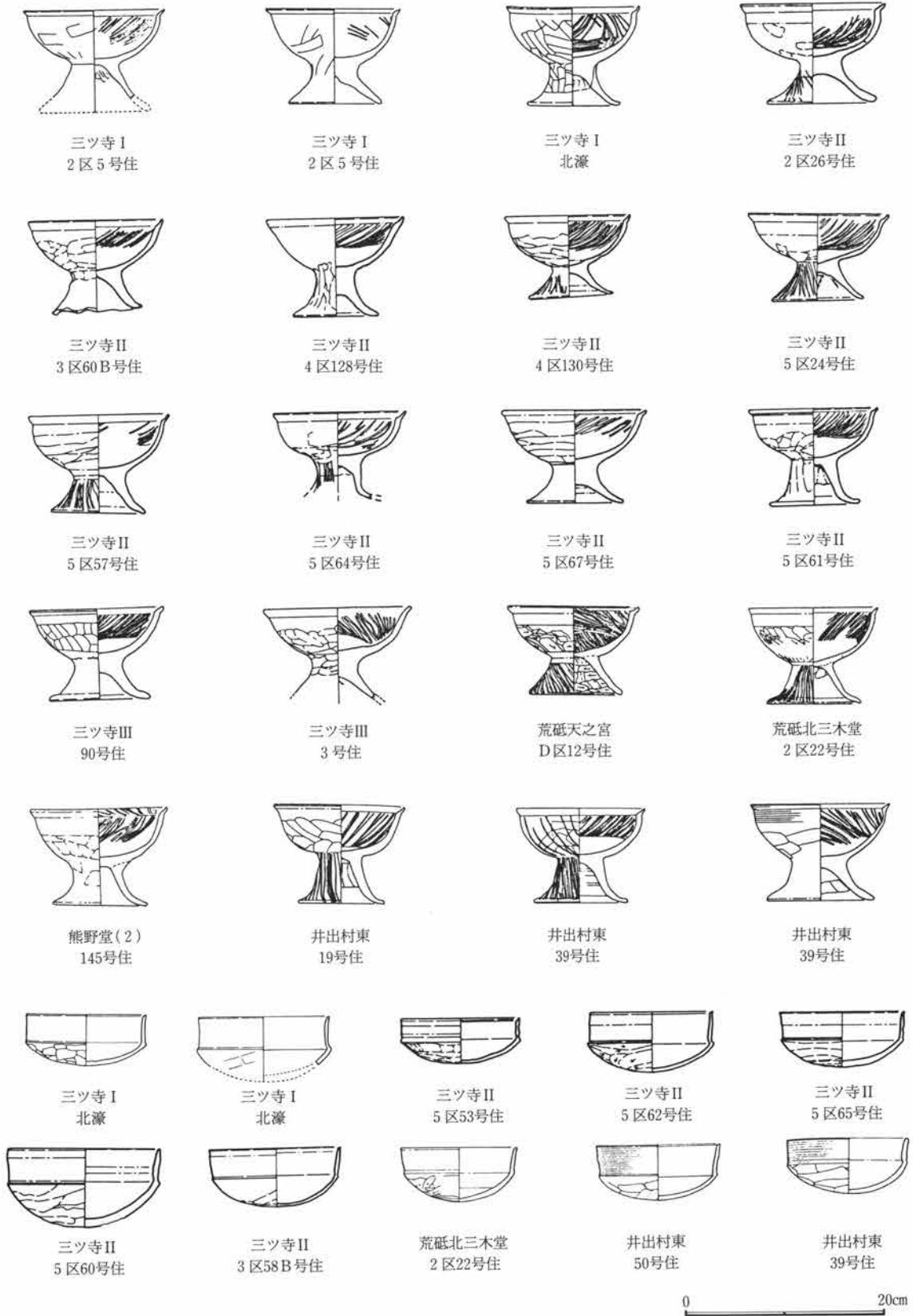
第4章 調査成果の整理とまとめ

量に使われてゆくようになり、8段階の7世紀前半までは主体をなす坏として使用され続ける。9段階の7世紀後半になると内湾口縁の坏が現れ模倣坏はしだいに減少してゆくが、7世紀後半代まで使用されている。約200年間の長期にわたり使われてきた最も指標となりうる特徴を持った坏である。この模倣坏は、出現段階において平底の坏Cと口縁部に明瞭な稜を持つ坏Dの2種類が存在する。両者の新旧関係は坏Dが新しいと思われるが明らかでない。6段階になると鐺川流域では須恵器の無蓋高坏の坏部または土師器の高坏の坏部に似た坏Eへと変化し、7段階になると須恵器の坏蓋・坏身に似た坏F・坏Gが出現し、以後はこの坏Fが小型化しつつ9段階まで使われてゆく。この器形の変化は県西や県北の遺跡でも似た変化を示しているようである。この坏Cや坏Dは、県央の群馬町・高崎市・前橋市周辺でも最初の段階で出土するが、県央地区ではその後坏Eではなく口縁部が長く直立し、口唇部は鋭利に削られやや内傾している須恵器の坏蓋(TK23段階前後と思われる)に非常によく似た坏が出土している。(第464図参照) このように県内でも模倣坏の出現とその後の変化は同一でなく、県央地区とその他の地区に大きく分かれているようである。県央地区の遺跡として群馬町三ツ寺遺跡・保渡田遺跡、前橋市荒砥地区の北三木堂遺跡が代表される。この地区の坏蓋模倣の坏は口縁部が長く直立し、口唇部は鋭利に削られやや内傾している。焼成は硬質で丁寧な作りである。坏の内外面にヘラ磨きは基本的に認められない。周辺地区の模倣坏は口縁部が大きく外反し、口唇部にヘラ削りは行われていない。坏内面に多くのヘラ磨きが認められる。内面が磨かれ吸炭により黒色を呈する坏も県北地域には存在する。県央以外の周辺地域においては県央地区の模倣坏の出土はまれである。矢田遺跡は鐺川流域で県央の周辺部であり、本遺跡の位置する吉井町や甘楽町では前述の県央地区のTK23段階前後と思われる須恵器の坏蓋に似た模倣坏は、存在したとしてもごく少量であろう。さらに県央地区に存在し矢田遺跡周辺から出土しない器種として内斜口縁の高坏がある。(第464図参照) この内斜口縁の高坏の坏内面と脚部外面には多くのヘラ磨きの行われているものが多い。口縁部が直立し口唇部が削られている県央の模倣坏と内斜口縁の高坏は分布圏においてかなりの部分で共通しているようである。

参考文献

- 坂口 一 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
〃 「土器形式変化の要因」—群馬県における出現期の須恵器模倣土師器の様相— 『研究紀要』8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
〃 「古墳時代後期の土器編年」—三ツ寺III遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係— 『群馬文化』208 群馬県地域文化研究協議会 1986
- 茂木由行 「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬県考古談話会 1984
〃 「群馬県における鬼高式土器の編年II」『群馬文化』211 群馬県地域文化研究協議会 1987
- 小林敏夫 「出土遺物について」『長根羽田倉遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 松本 保 「古墳時代後期における群馬県北部の土器様相」—黒色土師器の検討から— 『東国史論』第3号 1988
- 友廣哲也 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2 群馬土器観会 1991
- 桜岡正信 「群馬県内出土の暗文土師器について」—在地産を中心として— 『群馬県史研究』第30号 1989
- 神谷佳明 「律令的土器様相の検討」—古代の高坏について— 『群馬考古学手帳』4 群馬土器観会 1994
- 服部敬史 「東国における古墳時代須恵器生産の特質」『東国土器研究』第4号 1995
- 長谷川 厚 「関東」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 1991
〃 「黒い土器・赤い土器」『翔古論聚』1993
〃 「東国における律令制成立以前の土師器の特徴について」—東国の土師器の生産・流通のあり方を中心にして— 『東国土器研究』第4号 1995
- 田中広明 「古墳時代後期の土師器生産と集落平安時代の供給」—有段口縁坏の展開と在地社会の動態— 『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
〃 「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」—群馬・埼玉を中心にして— 『東国土器研究』第4号 1995
- 田口一郎 「XI 遺物の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981
- 次山 淳 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』158 1993
- 大木紳一郎 「弥生土器」『中高瀬観音山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 友廣哲也 「古墳時代前期土器」『中高瀬観音山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 石塚久則・深澤敦仁 「古墳時代中期土器」『中高瀬観音山遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995

第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について



第464図 矢田遺跡周辺から出土しない内斜口縁の高環と模倣環

第4章 調査成果の整理とまとめ

編年図で用いた土器一覧表

1段階	西原29号住居 (1・4・5・7・9・14・15・16) 西原27号住居 (2・3・6・8・10・11・12・13)
2段階	天引向原13号住居 (17・20・21・25) 天引向原11号住居 (19・35) 甘楽条里31号住居 (18・26・27・30・33・34) 矢田V638号住居 (22・23・24・32) 一ノ宮押出6号住居 (28・29) 一ノ宮押出7号住居 (31)
3段階	一ノ宮押出5号住居 (36・39) 一ノ宮押出19号住居 (37・43・44) 一ノ宮押出14号住居 (38・50・52・53) 甘楽条里52号住居 (40・46・48・54) 甘楽条里38号住居 (42) 天引向原114号住居 (47) 甘楽条里47号住居 (41・45・49・51・55)
4段階	天引向原142住居 (56・57・58・61) 天引向原131号住居 (65・67・68・70・72) 一ノ宮押出32号住居 (59・69・73・74) 一ノ宮押出9号住居 (63・71) 矢田IV633号住居 (60・75) 矢田IV359号住居 (62・64・66)
5段階	甘楽条里54号住居 (76・78・82・89・91・95・98・99・100・103) 甘楽条里96号住居 (77・101) 甘楽条里75号住居 (79・81・84・85・88・92・102・104・105・106・107) 甘楽条里111号住居 (80・86・108・109) 矢田VI382号住居 (83・87・90) 森13・14号住居 (93) 温井31号住居 (94) 下高瀬上之原5号古墳 (96) 下高瀬上之原4号古墳 (97) 温井23号住居 (110)
6段階	羽田倉15号住居 (111・115・129・132・133・136・139・140) 羽田倉6号住居 (113・126) 甘楽条里84号住居 (112・114・118・119・122・128・131・135・138) 甘楽条里71号住居 (123・125・130) 矢田V669号住居 (116・117・120・121・127・134・137) 矢田VI53号住居 (124)
7段階	矢田IV469号住居 (141・146・150・155・159) 矢田VI396号住居 (142・168) 矢田V443号住居 (144) 矢田V444号住居 (145・153・171・172) 矢田IV481号住居 (147・151・154・164・166・167) 矢田V528号住居 (148) 矢田VI702号住居 (149・158・163) 矢田V111号住居 (152・162・173・174) 矢田IV419号住居 (156) 矢田VI295号住居 (157) 多胡蛇黒2号住居 (160・165・169) 富岡5号古墳 (161) 矢田VI725号住居 (143) 矢田V56号住居 (170)
8段階	矢田VI692号住居 (175・189・198) 矢田VI603号住居 (178・182・192) 矢田V637号住居 (183・184・195・197・199・203) 矢田V491号住居 (188・194・201・205) 矢田V49号住居 (196) 多胡蛇黒8号住居 (176) 矢田V456号住居 (179) 矢田VI741号住居 (190) 矢田VI175号住居 (204) 矢田V446号住居 (177・181) 矢田V150号住居 (180・187・200) 矢田VI321号住居 (185・186・191) 矢田VI584号住居 (193) 矢田V520号住居 (202)
9段階	矢田VI147号住居 (206・207) 多胡蛇黒81号住居 (208・212・236) 多胡蛇黒17号住居 (209・235) 矢田VI726号住居 (210・211) 矢田VI108号住居 (213・215・216・221・225・226・227・231・232・233・234) 矢田VI310号住居 (214・217・218) 羽田倉16号住居 (219・220) 多胡蛇黒133号住居 (222) 矢田VI362号住居 (223・224) 羽田倉62号住居 (228・229・230)

編年図で用いた報告書

- 〔天神I遺跡・天神II遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡〕甘楽町遺跡調査会 1994
- 〔白倉下原・天引向原遺跡〕III 〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 〔甘楽条里遺跡〕甘楽町教育委員会 1989
- 〔一ノ宮押出遺跡〕富岡市教育委員会 1994
- 〔矢田遺跡〕I～VI 〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990～1996
- 〔矢田遺跡〕I～VI 〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990～1996
- 〔森・中I・中II遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 〔温井遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 〔下高瀬上之原遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 〔長根羽田倉遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 〔多胡蛇黒遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 〔富岡5号古墳〕群馬県立博物館 1972
- 〔三ツ寺I遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 〔三ツ寺II遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 〔三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 〔荒砥天之宮遺跡〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 〔荒砥北三木堂遺跡I〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 〔熊野堂遺跡(2)〕〔鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 〔井出村東遺跡〕群馬町井出村東遺跡調査会 1983

第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について

古墳時代住居跡出土遺物一覧表

住居No.	遺物											出土総数	時期				
	土師器					須恵器					その他			非版組総数	版組		
	高坏		坏		甕	坏		甕		羽釜					土器	石器	総数
	底	口縁部	底	口縁部		脚	口縁部	底	口縁部								
14	23	1	3	105	1	1	1	1	1	1	141	2	1	3	144	6 C後	
15	64	74	1	19	239	4	1	2	5		409	8		32	40	449	6 C後
17	20	9		6	79	5			1	3	124	4		4	128	6 C後	
18	84	160	2	1	75	640	7	28	19	5	1,057	10	1	11	22	1,079	7 C後
22	1	1	1	2	46		1	1			52	1		1	1	53	7 C
30					9					4	13	1		1	1	14	6 C
31											0	1		14	15	15	6 C前
53	118	80	2	3	40	283	16	16	1	2	1	3	3	2	6	39	6 C前
77	24	4			24	260	2	1	2	8		8		2	6	27	6 C後
89	3	4			2	12		2		2	35	7		7	7	42	6 C後
105											0	2		2	2	2	6 C後
107	7	3			7		4	1	1	1	32	9		9	41	7 C前	
108			2	1	90	1,504	39	4	1	8	1,653	57		57	114	1,767	7 C後
114	4		1	4	11	2				1	24	5		5	29	6 C後	
117	15	10	1	1	12	109	1			1	150	7		7	14	164	6 C後
119	12	3			22	163	17	1	5		223	4		9	13	236	6 C後
127	20	20	2	1	25	223	10	3	7	8	353	15		15	368	6 C後	
129	9	6			5	135	15	4	5		179	15		10	25	204	6 C後
147	36	14			21	239	7	5	5		362	5		5	367	7 C後	
148	241	160	10	28	14	361	15	4	1	16	859	35		1	36	895	6 C後
149	2				1	60					64	7		11	18	82	7 C前
156					2	12	1	1			16	2		2	2	18	7 C前
157	5	5			11	89		2	16	19	147	11		11	158	6 C後	
160	21	68			21	186	8	1	1	9	317	6	2	8	16	333	6 C後
162	15	24			8	87		8	1	2	147	2		14	16	163	6 C後
164	25	72			14	222	2				342	16		1	17	359	6 C後
165	42	28		1	40	275	7	2	1	2	412	9		15	24	436	6 C後
167	46	32		1	15	188	3	2	3	1	303	9		9	312	6 C後	

第4章 調査成果の整理と検討

住居No	遺物														非版組総数	版組			出土総数	時期																			
	器															土器	鉄器	石																					
	須																																						
	蓋																																						
	土				師				器				須				蓋				その他	非版組総数	土器	鉄器	石	出土総数	時期												
	環		高		脚		底		口縁		口縁		底		口縁		口縁		底									口縁		口縁		底		口縁		口縁		底	
	環	底	高	環	脚	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁								底	口縁	口縁	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁	底	口縁	口縁
	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部								部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部

第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について

住居 No	遺											物				時 期				
	土 師 器						須 恵 器					そ の 他	非 版 組 總 数	版 組			出 土 總 数			
	高 環		甕		甔		高 環		須 恵 器		羽 壺			土 器	鉄 器			石		
	環	底 部	脚	口 縁 部	底 部	口 縁 部	脚	口 縁 部	口 縁 部	口 縁 部	口 縁 部								底 部	
312	4	4	1	5	45	2								69	2		2	71	6C後	
319	2		2	1	19	3								29	3		3	32	7C前	
321	34	9		22	243	8			1					329	11	21	32	361	7C前	
325	8	1		4	60	1								77	5		5	82	5C後	
326	24	32	1	31	247	13	2	4						370	21		21	391	6C前	
327	23	52			160	8			1					249	3	7	10	259	7C前	
328	19	17		18	171	2			4	2				235	4		4	239	7C後	
330	2	9		3	6									20	2		2	22	7C前	
332	7			5	36						1			50	1		1	51	6C前	
333	4				45									53	6	4	10	63	6C後	
338	16	3		31	223		3				14	19	6	315	8		8	323	7C前	
342	5	6			43									54	5		5	59	6C後	
344	14	3	1	11	92	4								128	6		6	134	7C前	
346	11	22	1	10	96	2								145	6	4	10	155	6C後	
347	6	7		4	23	1								43	5		5	48	7C前	
348	27	5		23	263	4			6	4				337	2		2	339	6C後	
350	2	3		8	34	1								48	2		2	50	6C後	
351	1			5	70									76	2		2	78	7C前	
352		2			10					1				13			0	13	6~7C	
361	5	2		1	23									32	4		4	36	6C後	
362	18	20	2	23	268	6		4			1			351	8	1	9	360	7C後	
363	5	9		5	36									55	4		4	59	6C後	
368	3		3		20				1					27	4		4	31	6C後	
370				2	48				1					54	2		2	56	6C後	
371	21	2	2	37	204	6								276	10	1	19	306	7C前	
382	12	4		20	360	5								404	18		9	431	5C後	
385				1	4									6	1		4	5	11	6~7C
387	11	10	1	7	93	8								132	5		5	137	6C後	
388	5			8	25	2								40	3	1	4	44	6C後	

第4章 調査成果の整理とまとめ

住居 No	遺物												出土 総数	時期						
	土器						須恵器								非版 組総 数	版組				
	高		平		坏		高		平		坏					土 器	鉄 器	石 数		
	口 縁 部	底 部	口 縁 部	底 部	口 縁 部	底 部	口 縁 部	底 部	口 縁 部	底 部	口 縁 部	底 部								
389	31	11	46	180	11												283	3	286	6C後
393			1														1	1	2	6C後
394	10	7	9	271	4												327	6	333	5C後
395	16	13	9	128	2			1									173	12	195	6C後
396	6	15	6	27	1			1									64	6	74	6C後
397	7		2	73	4					4							87	2	89	6C後
401	3																3	0	3	6~7C
404	27	2	22	243	19			2									323	2	325	7C
416	8	22	4	84													122	1	124	7C後
417	17	10	24	162	3			2			1						219	8	230	6C後
420	5	40		14				3			2						77	1	78	6C後
423		4	2	9													15	0	15	6~7C
538	4		2	1													7	6	13	7C後
539	32	42	23	165	6			1			1						275	8	283	6C後
544	1			14													16	1	17	6C
545	57	2									2	25	1				88	3	92	6C
547	1																15	1	16	7C
548	2	4	2	12													20	1	21	6C前
579	2	1	2	32													42	1	43	7C
581	29	74	49	392	14			2			1						592	36	628	6C後
582	11	28	5	55				3			2						104	4	121	6C後
584	18	43	18	149	4												246	5	251	7C前
587			2														2	0	2	6~7C
588	1	4	7	50													62	2	64	6C後
589	38	102	30	244	5			2									435	25	460	6C後
601	4	8	5	40	1			1									60	2	70	7C後
602	2		4	16													26	1	27	6C
603	1			1								1					4	4	8	7C前
606	25	29	7	84	4			2									156	5	162	6C後

第2節 矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について

住居No	遺物															出土総数	時期													
	土師器					須恵器					その他	非版組総数	版組																	
	坏		高坏		坏	高坏		坏		高坏			土器	鉄器	石															
	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部																				
607	5	21														3	75	6C後												
650																1	28	6C												
668																	1	1	6C後											
685	11	32														1	2	49	6C											
687																	1	1	16~7C											
689	4																11	12	81	7C前										
690	3																3	3	77	6C										
691																	6	3	9	6C後										
692	6	15	8	4													23	23	444	7C前										
693	4	7															2	2	51	6C										
694	7																8	8	51	7C前										
695	18																4	10	101	7C前										
696	1	3															21	1	22	6C										
698	13	10															11	11	296	7C前										
699	23	35															8	8	246	7C前										
700																		0	17	6~7C										
702	19	18															9	9	382	6C後										
703	56	2															15	16	1,048	6C後										
708	13	33															3	3	163	6~7C										
718	11	25															2	2	118	7C後										
719	5	5															10	9	78	6C後										
723	10	2															3	3	151	6C後										
725	7	2															4	1	79	6C後										
726	19	1															7	7	318	7C後										
738																	8	2	10	7C後										
741	6																6	6	1	7	133	7C前								
計	2,082	2,138	51	85	1,571	17,736	498	11	61	18	209	214	31	2	22	18	15	6	75	529	22	52	18	31	25,495	869	12	375	1,256	26,751

第3節 まとめ

矢田遺跡の調査対象面積は約90,000㎡である。発掘調査は昭和61年度から開始され、平成3年度まで、途中土地問題の未解決等により引き続き調査が出来なかったこと等もあり、都合6年度にわたって行われた。整理事業は平成元年度より調査と平行して行うこととし、これまでに『矢田遺跡』『矢田遺跡II』『矢田遺跡III』『矢田遺跡IV』『矢田遺跡V』の5冊の報告書が刊行されてきた。本報告書の『矢田遺跡VI』をもって旧石器時代から古墳時代と平安時代の住居の報告の大部分が終了する。残りは来年度刊行される奈良時代の住居編『矢田遺跡VII』と住居以外の遺構と遺物を扱う『矢田遺跡VIII』である。残された整理期間は約1年であり、忙しい整理作業に追われている。このような厳しい中でも、これまでの成果をまとめるように努力した。

古墳時代の住居の多くは本報告をもって終了する為、『矢田遺跡IV～VI』の成果を第4章第1節の中で以下のようにまとめた。

(1)古墳時代の268軒の住居の出現と展開 (2)住居規模の違いと立地との関係 (3)炉と竈と貯蔵穴の問題について (4)竈の造られる壁面の位置の問題について (5)造り替えの認められる竈について

この中で268軒の住居を時期別に一覧表でまとめ、報告書の番号も表示したので住居の時期と報告書番号の検索が可能となっている。

出土土器については第2節「矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について」の中で弥生時代終末期から古墳時代前期・中期・後期の約400年間にわたる土器の変化と特長について約50年を単位として文章と編年図を用いてまとめた。7世紀後半段階の住居の整理が一部残っている段階での編年作業のため不備も多いと思われるが、これまでの成果であり、今後修正しつつ土器や集落研究の時間軸として活用してゆくつもりである。

厳しい整理期間の中、残された整理事業とこれまでの調査成果をまとめるためにさらに一層の努力をしてゆくつもりである。

最後に、関係機関はもとより、酷暑や厳寒の中で実際の調査に従事した発掘作業員及び遺構・遺物の整理作業に携わった整理補助員等多くの方々の協力に感謝してまとめたい。

発掘報告書抄録

フリガナ	ヤタイセキ
書名	矢田遺跡VI
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第34集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第197集
編著者名	中沢 悟
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦1996年1月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° . ' "	東経 ° . ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢田	多野郡吉井町大字矢田	103632	10005— 00124	361427	1385945	19860401— 19900827 19911105— 19911126	90,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田	集落	古墳時代中期 古墳時代後期	竪穴住居跡 3 竪穴住居跡138	土師器甕・坏 須恵器坏 須恵器坏蓋	古墳時代後期～奈良・平安時代を中心とした集落址 今回は古墳時代の遺物、遺構を報告

写 真 图 版



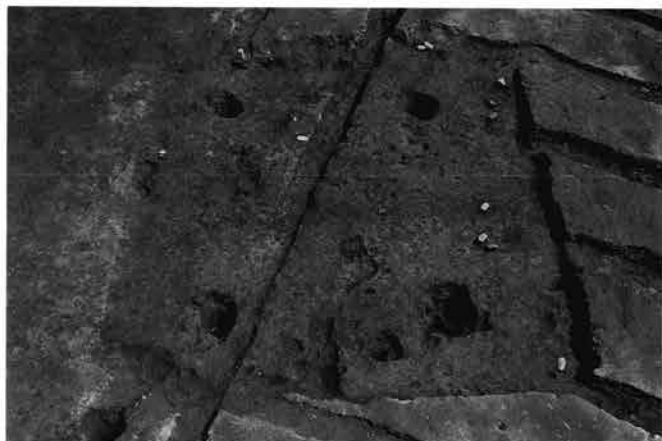
矢田遺跡全景航空写真（合成）（上が東）



第 5 次調査区住居群 (北から)



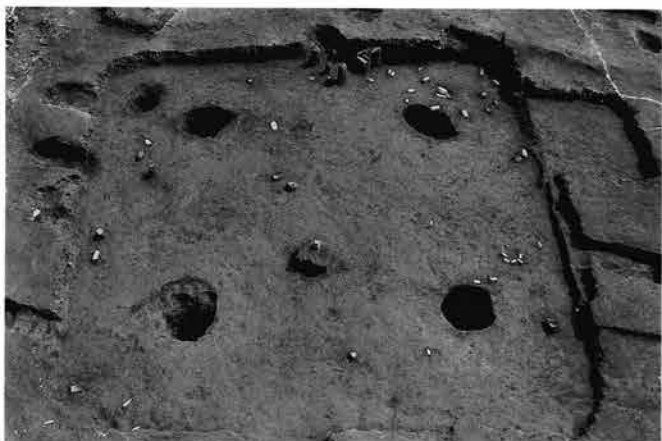
第 4 次調査区住居群 (西から)



14号住居跡全景（西から）



14号住居跡床下全景（南から）



15号住居跡全景（西から）



15号住居跡遺物出土状況（西から）



15号住居跡新東竈付近切子玉出土状況



15号住居跡新東竈全景（西から）



15号住居跡床下セクション（西から）



15号住居跡床下全景（西から）



17号住居跡全景（南から）



17号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況（南から）



17号住居跡床下全景（西から）



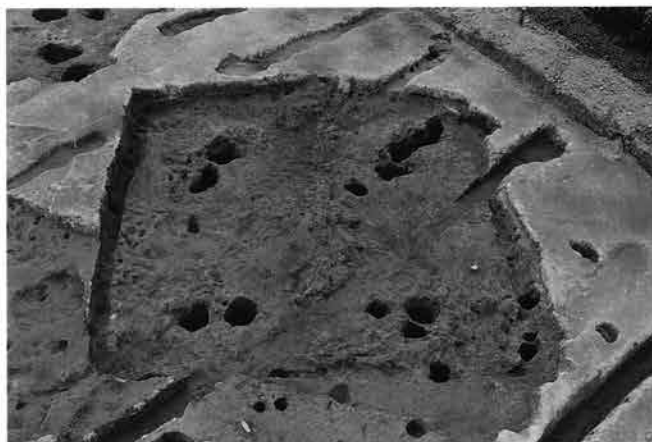
18号住居跡全景（南から）



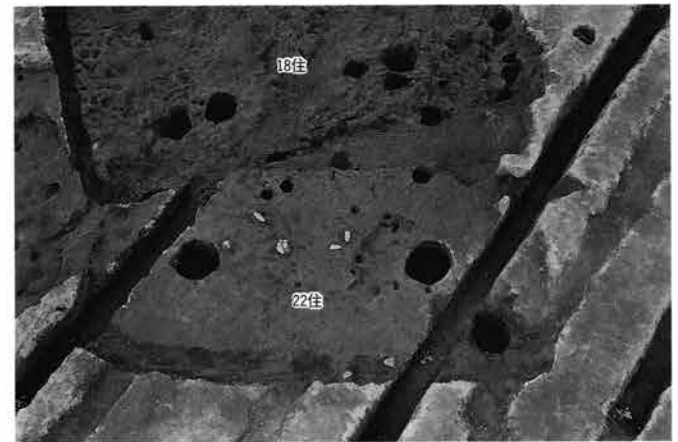
18号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（南から）



18号住居跡南西部床面付近遺物出土状況（北から）



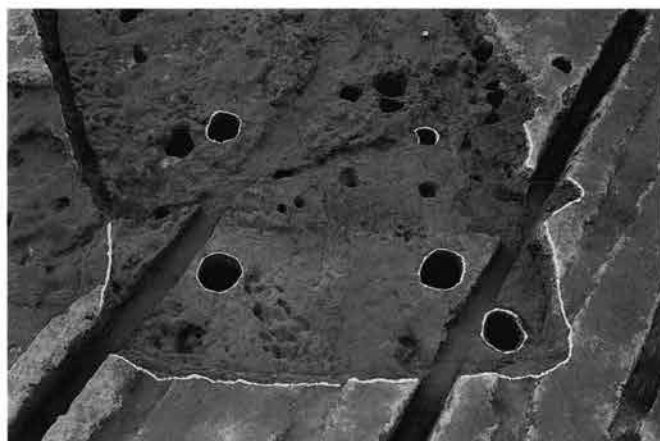
18号住居跡床下全景（南から）



22号住居跡全景（南から）



22号住居跡竈（西から）



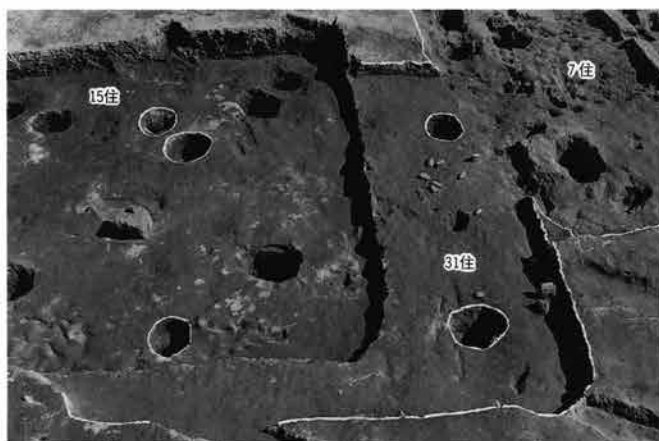
22号住居跡床下全景（南から）



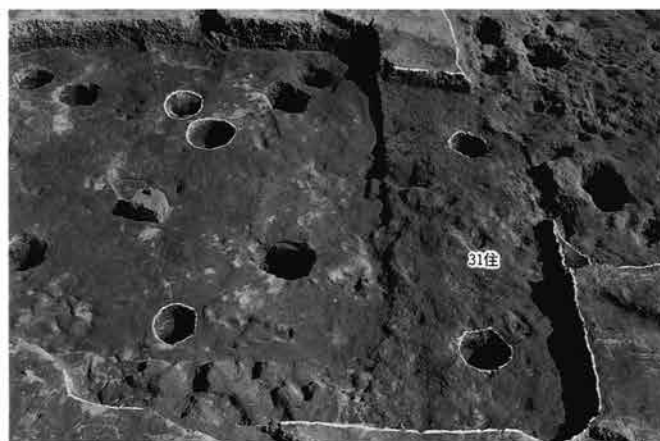
30号住居跡全景（西から）



30号住居跡床下全景（西から）



31号住居跡全景（西から）



31号住居跡床下全景（西から）



53号住居跡全景（南から）



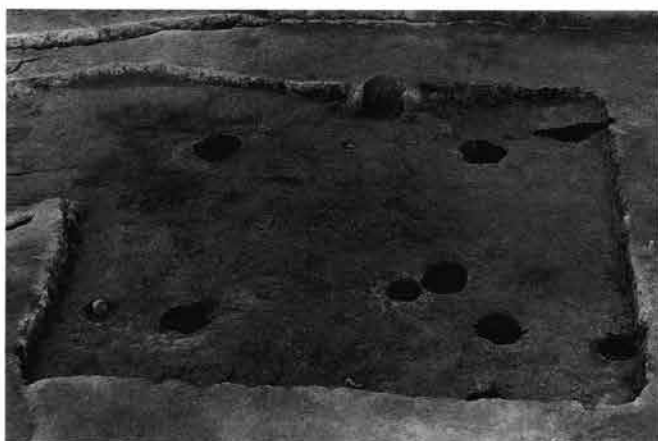
53号住居跡セクション（南から）



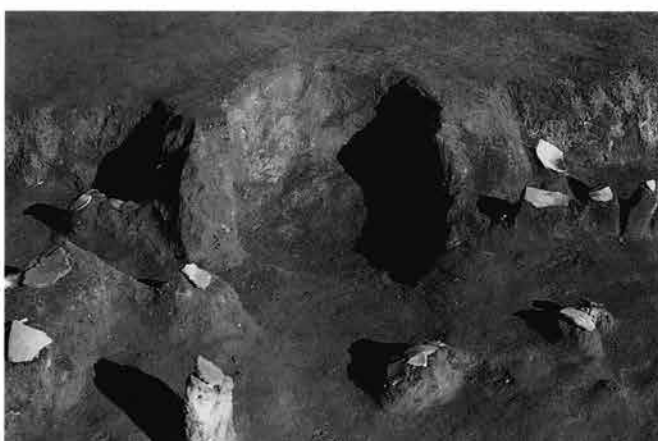
53号住居跡東側床面遺物出土状況（南から）



53号住居跡北東床面焼土堆積状況（南から）



53号住居跡遺物除去後全景（南から）



53号住居跡竈（南から）



53号住居跡竈セクション（南から）



77号住居跡全景（西から）



77号住居跡竈手前遺物出土状況（北から）



77号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



77号住居跡竈 (西から)



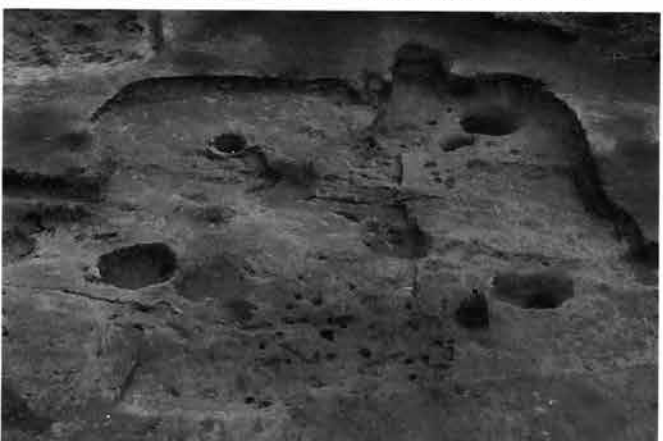
89号住居跡全景 (西から)



89号住居跡床面中央付近遺物出土状況 (西から)



89号住居跡竈 (西から)



89号住居跡床下全景 (西から)



105号住居跡全景 (西から)



105号住居跡床下全景 (西から)



107号住居跡全景 (西から)



107号住居跡竈セクション (西から)



107号住居跡竈周辺遺物出土状況 (西から)



107号住居跡竈 (北から)



107号住居跡竈 (西から)



107号住居跡床下全景 (西から)



108号住居跡全景 (西から)



108号住居跡遺物出土状況 (南東から)



108号住居跡遺物出土状況 (南西から)



108号住居跡遺物出土状況（北西から）



108号住居跡遺物出土状況（北東から）



108号住居跡南側床面遺物出土状況（南から）



108号住居跡北側床面遺物出土状況（北から）



108号住居跡南西隅遺物出土状況（北東から）



108号住居跡北東隅遺物出土状況（南西から）



108号住居跡遺物除去後全景（南から）



108号住居跡床下全景（西から）



114号住居跡全景（西から）



114号住居跡竈（南から）



114号住居跡竈セクション（南から）



114号住居跡床下全景（西から）



117号住居跡全景（西から）



117号住居跡竈（北から）



117号住居跡竈断面状況（西から）



117号住居跡床下全景（西から）



119号住居跡全景（西から）



119号住居跡セクション（南から）



119号住居跡竈セクション



119号住居跡竈（南から）



119号住居跡床下全景（西から）



127号住居跡全景（西から）



127号住居跡南壁付近遺物出土状況（北から）



127号住居跡竈（南から）



127号住居跡全景（西から）



129号住居跡全景（西から）



129号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



129号住居跡竈遺物出土状況（西から）



129号住居跡竈遺物出土状況（北から）



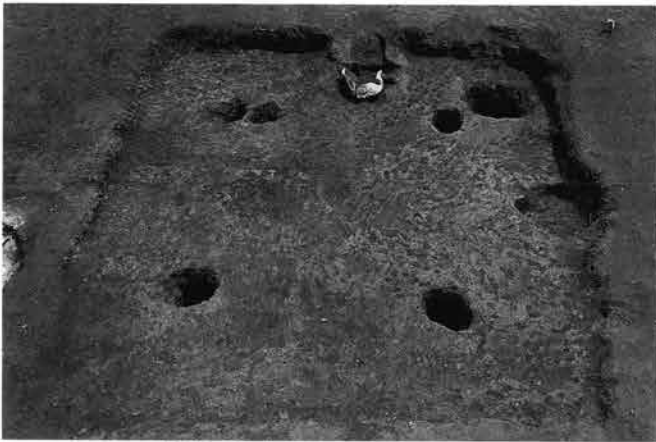
129号住居跡竈遺物出土状況（東から）



129号住居跡竈（西から）



129号住居跡竈セクション（西から）



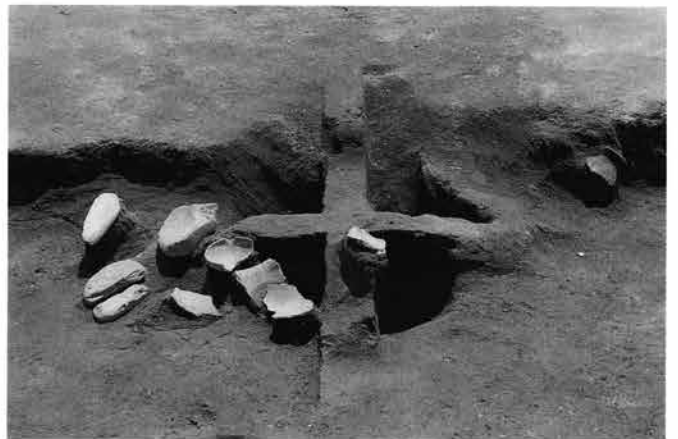
129号住居跡遺物除去後全景（西から）



129号住居跡床下全景（西から）



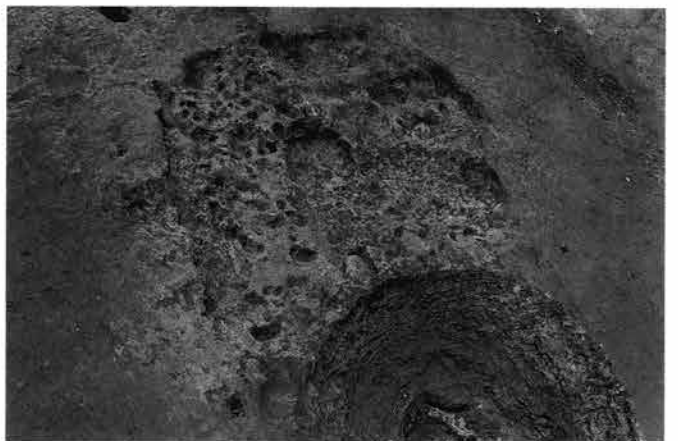
147号住居跡全景（西から）



147号住居跡竈セクション（西から）



147号住居跡竈（西から）



147号住居跡床下全景（北から）



148号住居跡全景（南から）



148号住居跡遺物出土状況（西から）



148号住居跡床面中央部付近遺物出土状況（西から）



148号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



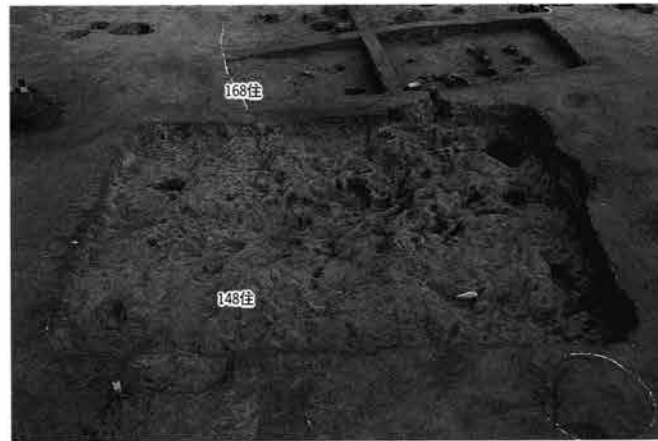
148号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況（南から）



148号住居跡竈（南から）



148号住居跡竈（西から）



148号住居跡床下全景（南から）



149号住居跡全景（西から）



149号住居跡南側床面遺物出土状況（西から）



149号住居跡南西隅遺物出土状況（北から）



149号住居跡竈（西から）



149号住居跡竈（南から）



149号住居跡床下セクション（南から）



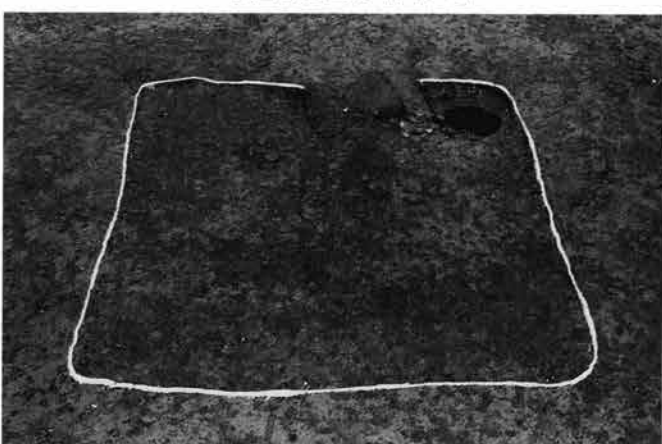
149号住居跡床下全景（西から）



156号住居跡全景（西から）



156号住居跡床下全景（西から）



157号住居跡全景（西から）



157号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）



157号住居跡小穴内遺物出土状況（南から）



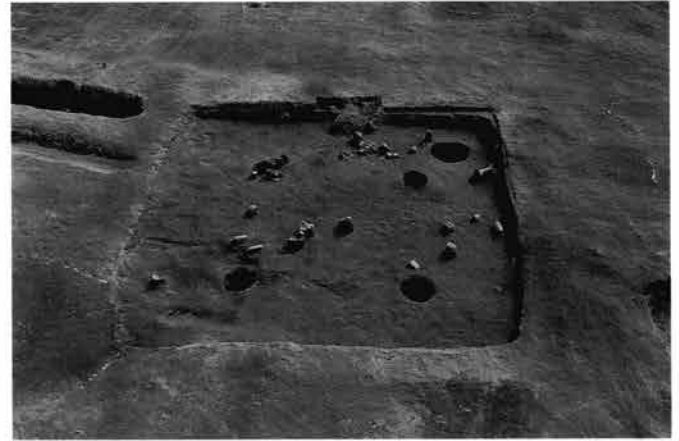
157号住居跡小穴内遺物出土状況（北から）



157号住居跡竈（西から）



157号住居跡床下全景（西から）



160号住居跡全景（西から）



160号住居跡セクション（南から）



160号住居跡床下全景（西から）



162号住居跡全景（西から）



162号住居跡床下全景（西から）



164号住居跡全景（南から）



164号住居跡南東隅遺物出土状況（北西から）



164号住居跡竈セクション（南から）



164号住居跡床下全景（南から）



165号住居跡全景（西から）



165号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



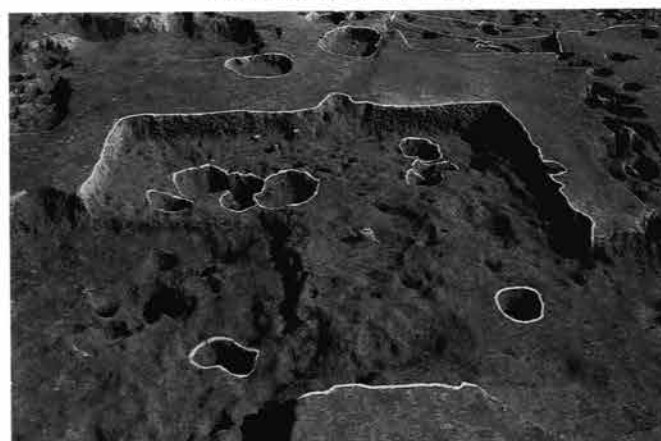
165号住居跡竈セクション (西から)



165号住居跡竈 (西から)



165号住居跡竈断面調査状況 (西から)



165号住居跡床下全景 (西から)



167号住居跡全景 (西から)



167号住居跡遺物除去後全景 (西から)



167号住居跡竈(1) (西から)



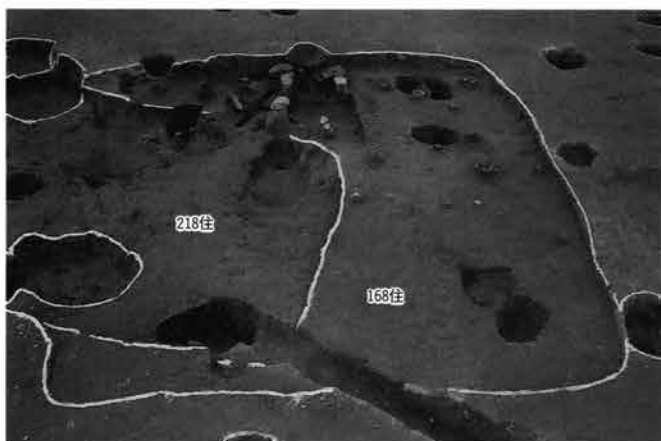
167号住居跡竈(2) (西から)



167号住居跡竈断面調査状況（西から）



167号住居跡床下全景（西から）



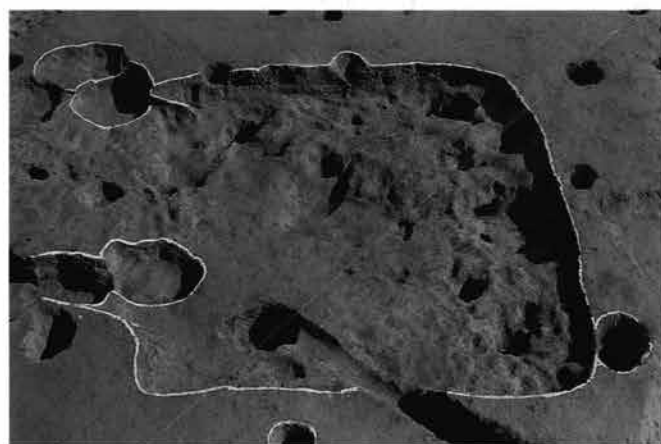
168号住居跡全景（西から）



168号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（東から）



168号住居跡竈（南から）



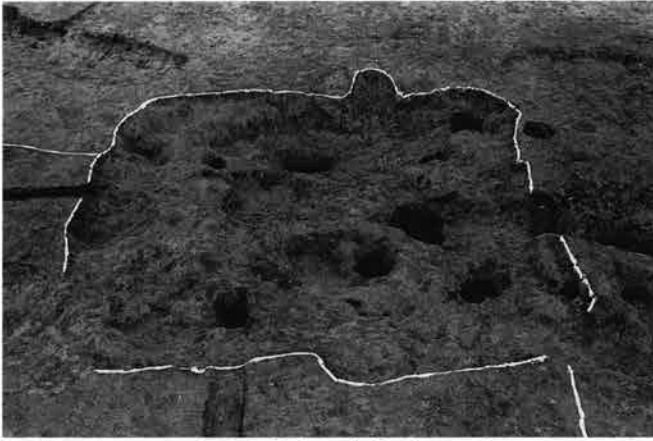
168号住居跡床下全景（西から）



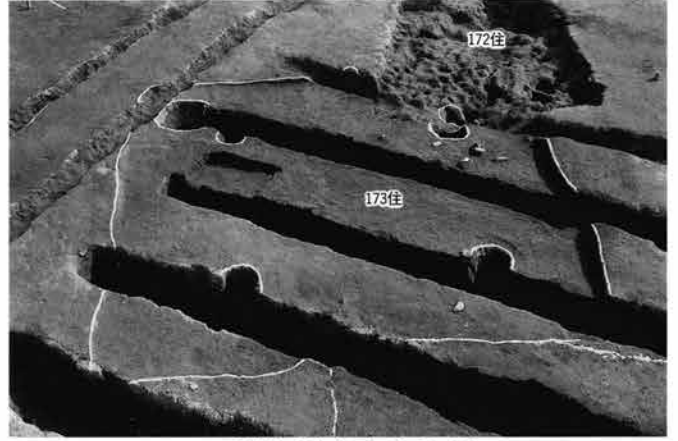
171号住居跡全景（西から）



171号住居跡竈（西から）



171号住居跡床下全景（西から）



173号住居跡全景（西から）



173号住居跡床下全景（西から）



175号住居跡全景（西から）



175号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



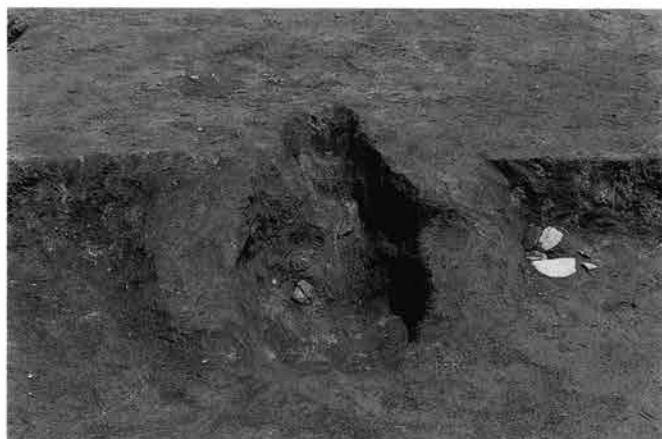
175号住居跡竈付近（西から）



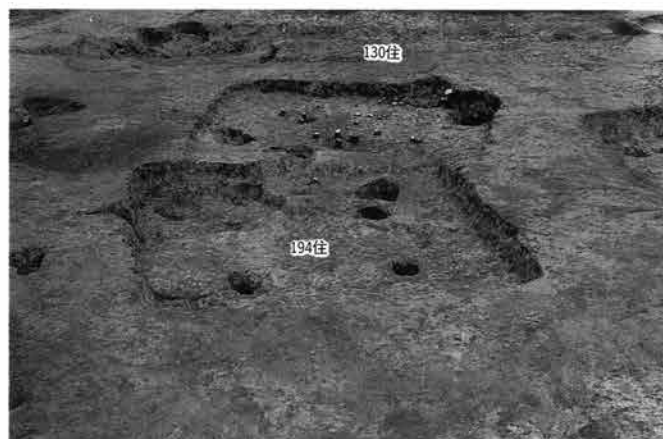
175号住居跡床下全景（西から）



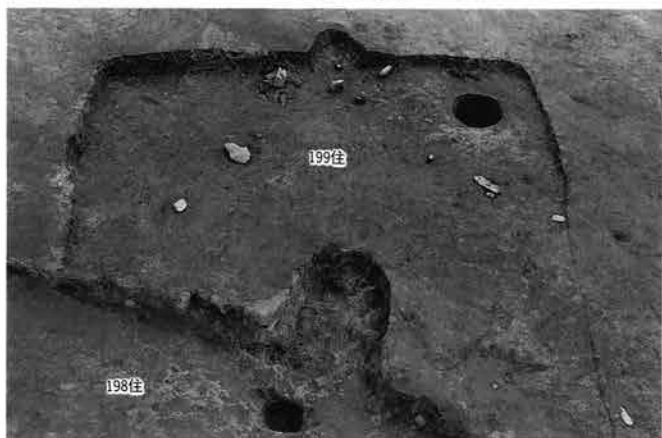
194号住居跡全景（西から）



194号住居跡竈 (南から)



194号住居跡床下全景 (西から)



199号住居跡全景 (西から)



199号住居跡遺物除去後全景 (西から)



210号住居跡全景 (西から)



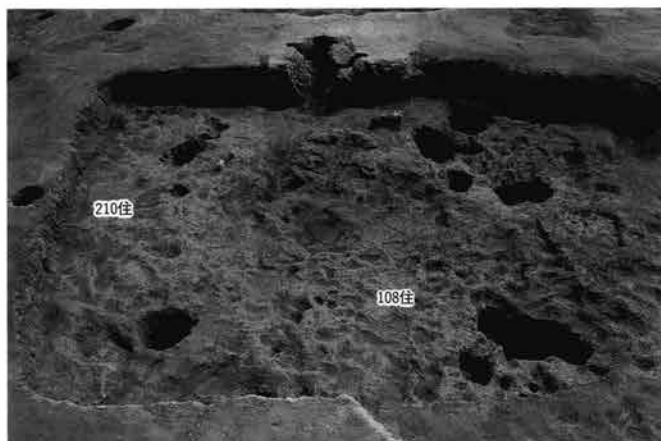
210号住居跡竈(1) (西から)



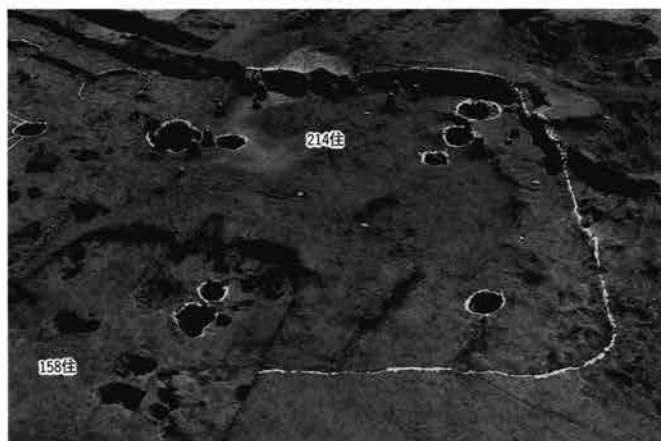
210号住居跡竈(2) (南西から)



210号住居跡竈断面調査状況 (南西から)



210号住居跡床下全景 (西から)



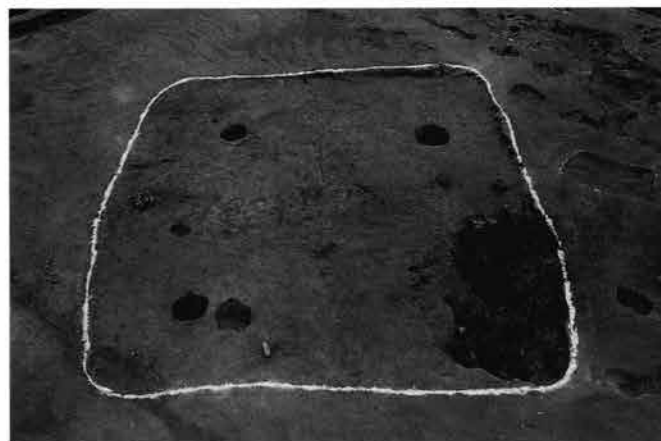
214号住居跡全景 (西から)



214号住居跡竈 (南西から)



214号住居跡床下全景 (西から)



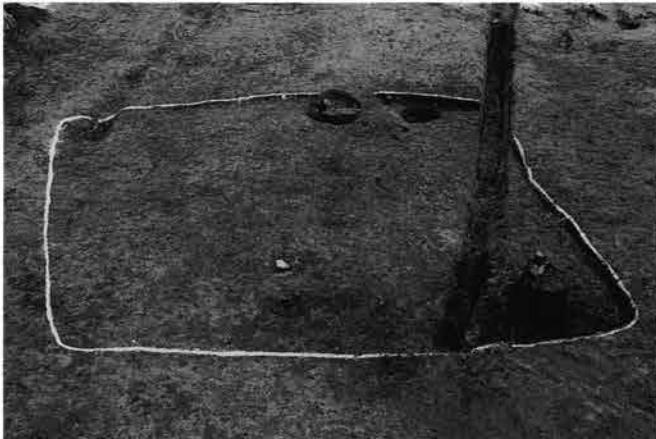
217号住居跡全景 (西から)



217号住居跡南壁中央付近遺物出土状況（北西から）



217号住居跡床下全景（西から）



220号住居跡全景（南から）



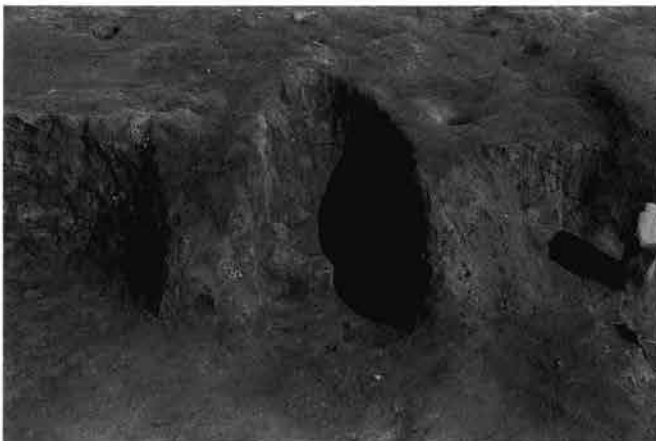
232号住居跡全景（西から）



238号住居跡全景（西から）



238号住居跡南東隅遺物出土状況（西から）



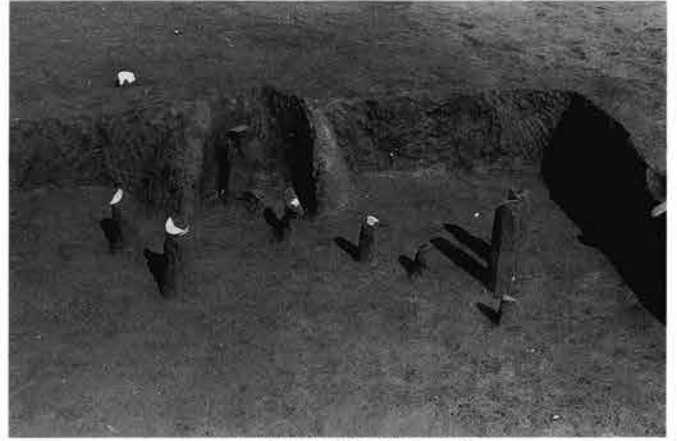
238号住居跡竈（西から）



239号住居跡全景（南から）



239号住居跡セクション (南から)



239号住居跡竈 (南から)



245号住居跡全景 (西から)



245号住居跡床下全景 (西から)



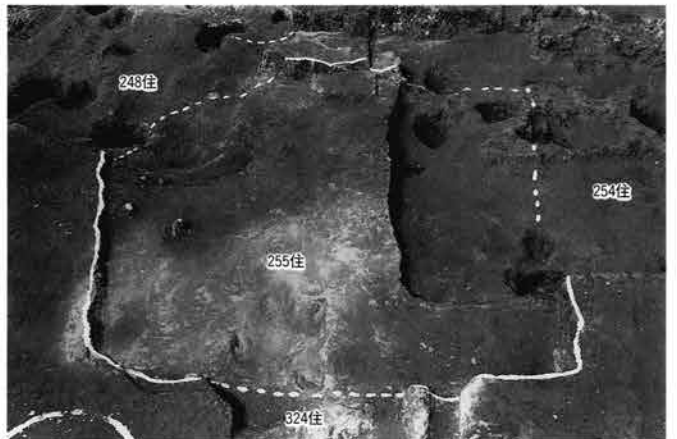
251号住居跡全景 (西から)



251号住居跡新東竈 (西から)



251号住居跡床下全景 (西から)



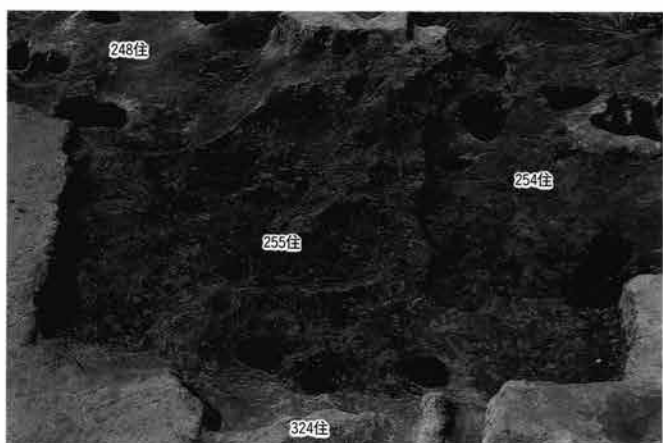
255号住居跡全景 (南から)



255号住居跡竈セクション (南から)



255号住居跡竈 (南から)



255号住居跡床下全景 (南から)



256号住居跡全景 (南から)



256号住居跡床下全景 (南から)



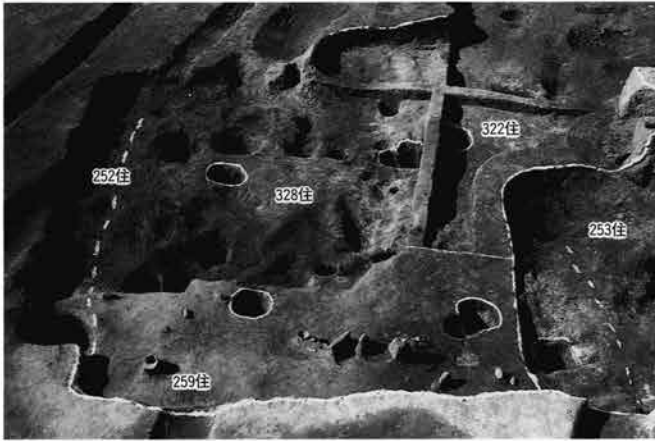
258号住居跡全景 (南から)



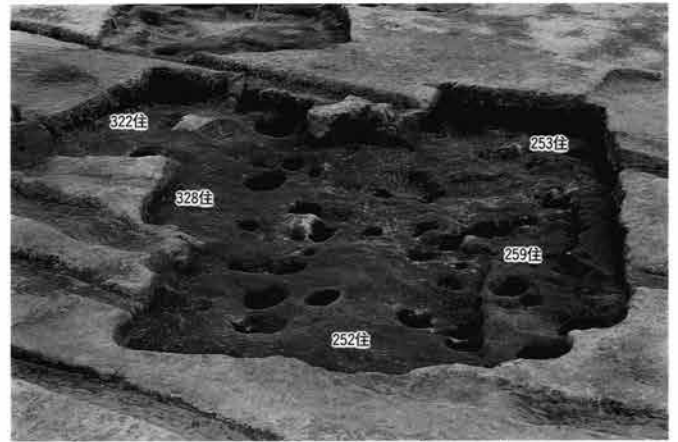
258号住居跡竈セクション (南から)



258号住居跡床下全景 (南から)



259号住居跡全景（南から）



259号住居跡床下全景（西から）



262号住居跡全景（西から）



262号住居跡竈（西から）



262号住居跡床下全景（西から）



267号住居跡全景（西から）



278号住居跡全景（南から）



278号住居跡新北竈セクション（南から）



283号住居跡全景（西から）



283号住居跡遺物除去後全景（西から）



283号住居跡竈周辺遺物出土状況（西から）



283号住居跡竈セクション（西南から）



283号住居跡竈(1)（西から）



283号住居跡竈(2)（北から）



283号住居跡竈(3)（東から）



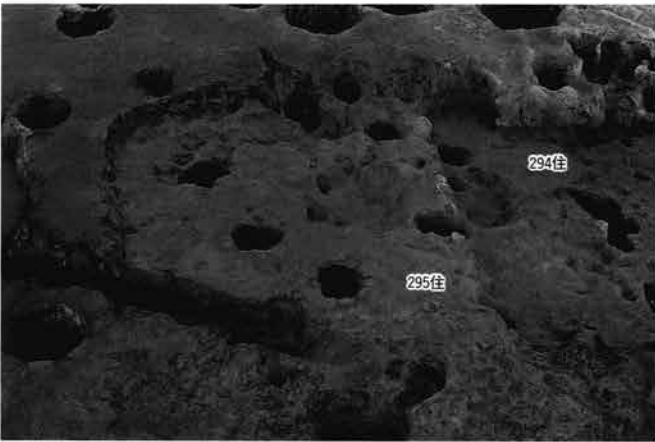
283号住居跡竈(4)（西から）



283号住居跡竈(5) (西から)



283号住居跡床下全景 (西から)



295号住居跡全景 (西から)



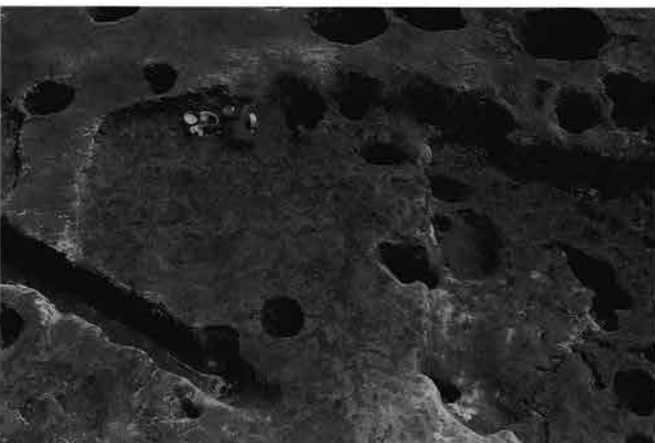
295号住居跡竈左袖付近遺物出土状況 (西から)



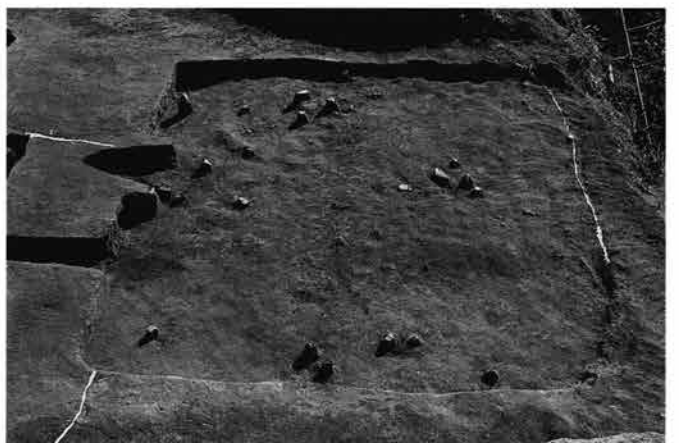
295号住居跡竈左袖付近遺物出土状況 (北から)



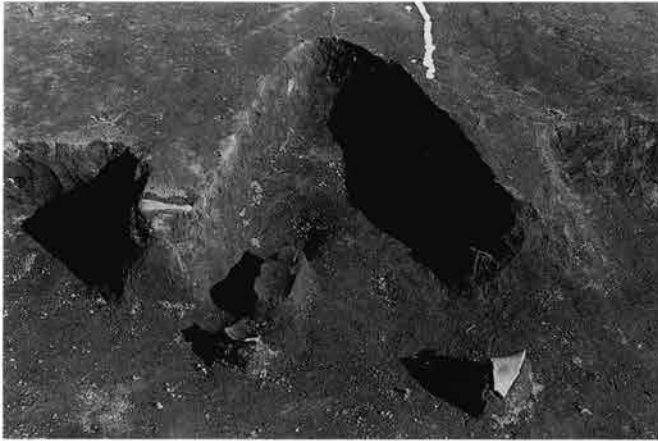
295号住居跡竈 (西から)



295号住居跡床下全景 (西から)



302号住居跡全景 (北から)



302号住居跡竈 (西から)



302号住居跡床下セクション (北から)



302号住居跡床下全景 (北から)



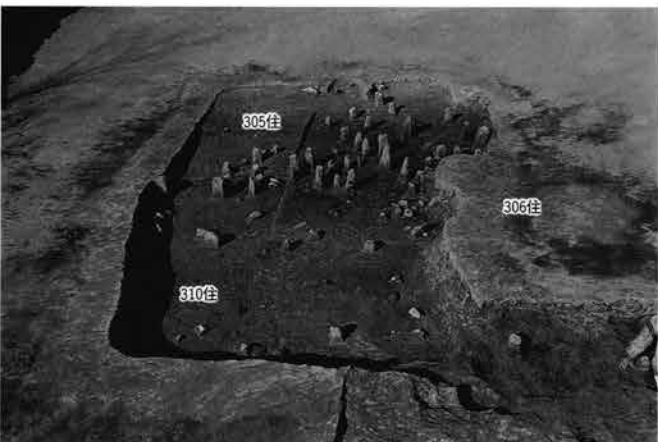
303号住居跡全景 (南から)



303号住居跡竈 (西から)



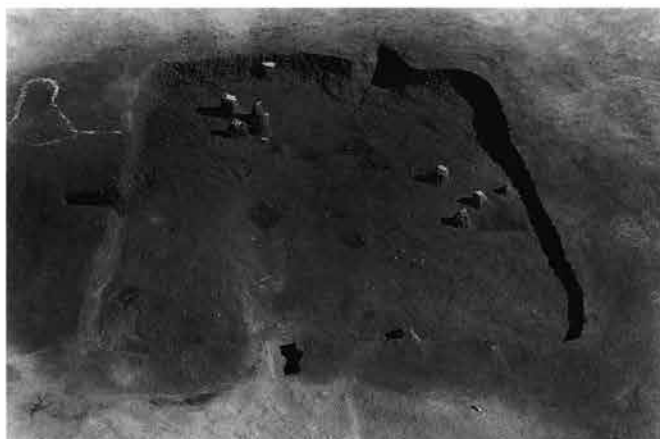
303号住居跡床下全景 (南から)



305号住居跡全景 (南から)



305号住居跡竈 (南から)



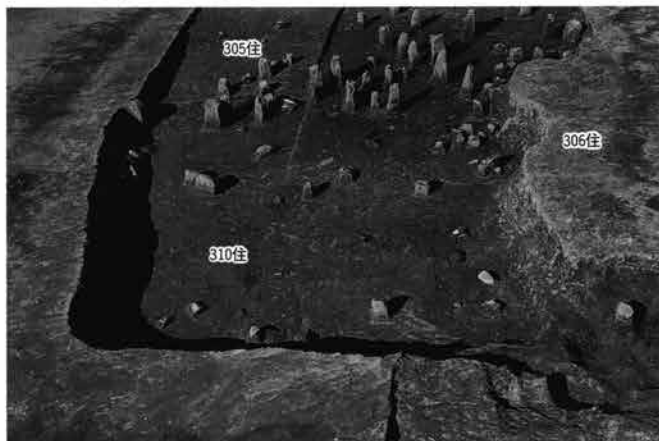
307号住居跡全景（西から）



307号住居跡北東部分床面出土の炭化物（南東から）



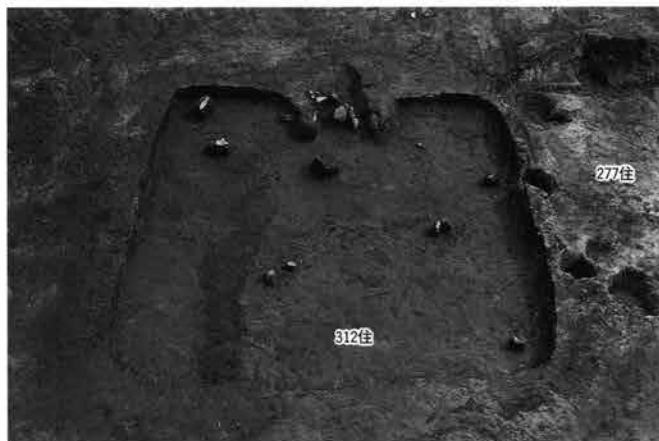
307号住居跡竈セクション（南西から）



310号住居跡全景（南から）



310号住居跡遺物出土状況（西から）



312号住居跡全景（西から）



312号住居跡竈（西から）



312号住居跡竈解体状況（西から）



312号住居跡床下全景（西から）



319号住居跡全景（西から）



319号住居跡竈（西から）



319号住居跡床下全景（西から）



321号住居跡全景（南から）



321号住居跡南東部分遺物出土状況（西から）



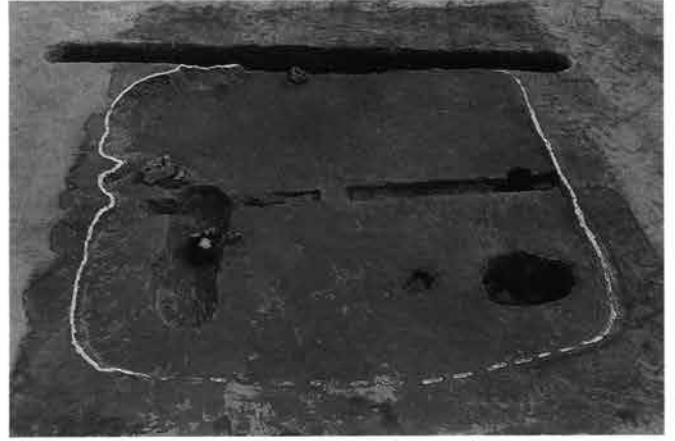
321号住居跡新北竈（南から）



321号住居跡旧東竈（西から）



321号住居跡床下全景（南から）



325号住居跡全景（西から）



325号住居跡竈想定部遺物出土状況（西から）



325号住居跡床下全景（西から）



326号住居跡全景（西から）



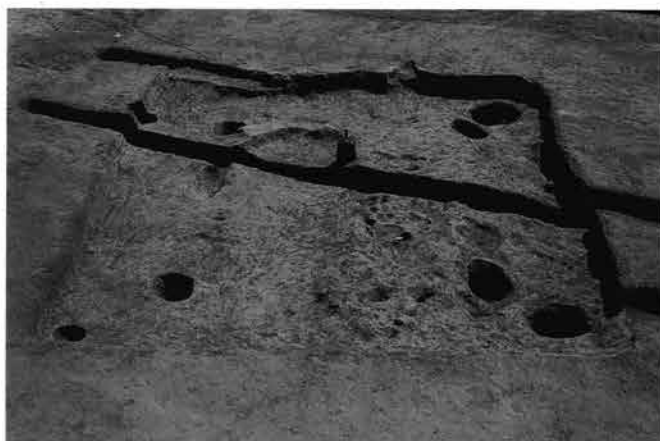
326号住居跡南壁中央部付近遺物出土状況（北から）



326号住居跡床面中央部付近遺物出土状況（北東から）



326号住居跡竈（西から）



326号住居跡床下全景（西から）



327号住居跡全景（南から）



327号住居跡竈（南から）



327号住居跡床下全景（南から）



328号住居跡全景（西から）



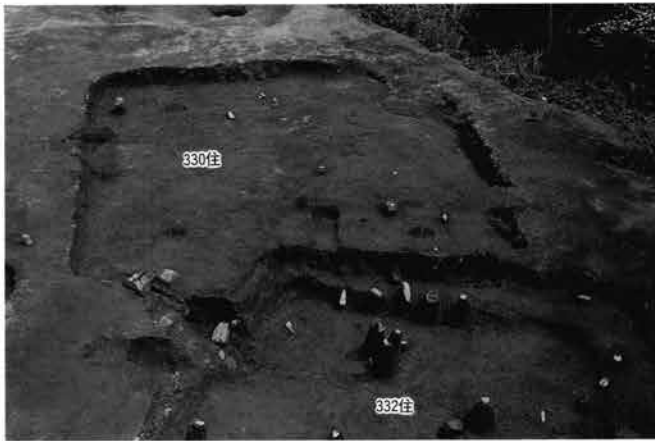
328号住居跡竈（西から）



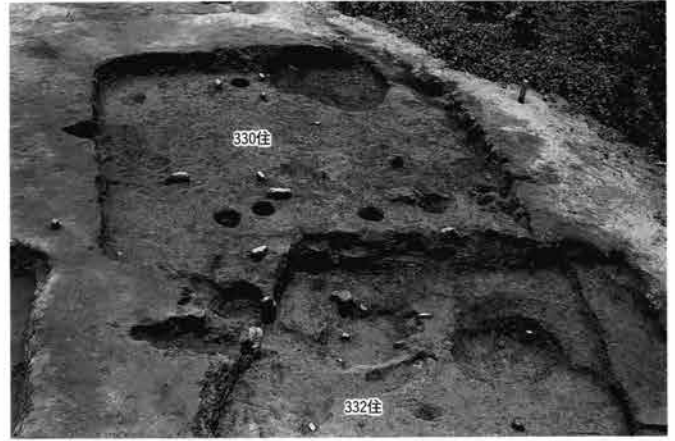
328号住居跡竈（北から）



328号住居跡床下全景（西から）



330号住居跡全景（北から）



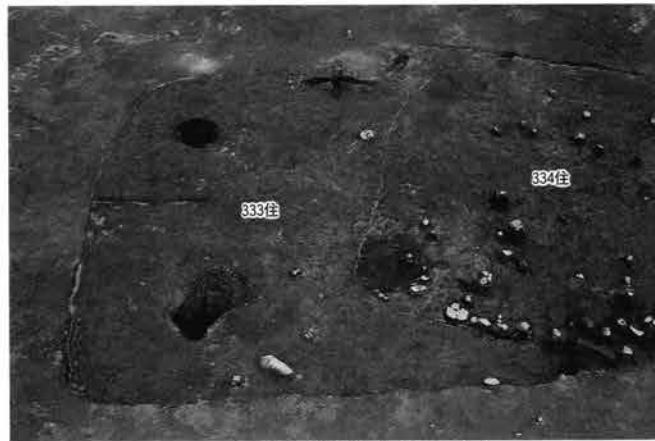
330号住居跡床下全景（北から）



332号住居跡全景（北から）



332号住居跡竈（西から）



333号住居跡全景（南から）



333号住居跡竈掘り方（南から）



333号住居跡床下全景（西から）



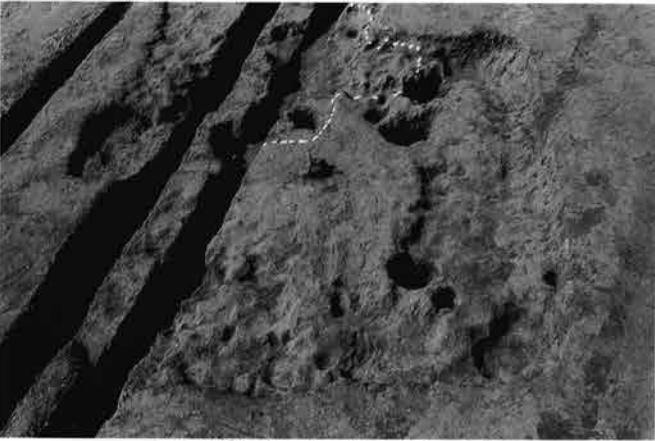
338号住居跡全景（南から）



338号住居跡竈付近遺物出土状況（南から）



338号住居跡南東部分小穴内出土遺物（東から）



338号住居跡床下全景（南から）



342号住居跡全景（西から）



342号住居跡遺物出土状況（東から）



344号住居跡全景（西から）



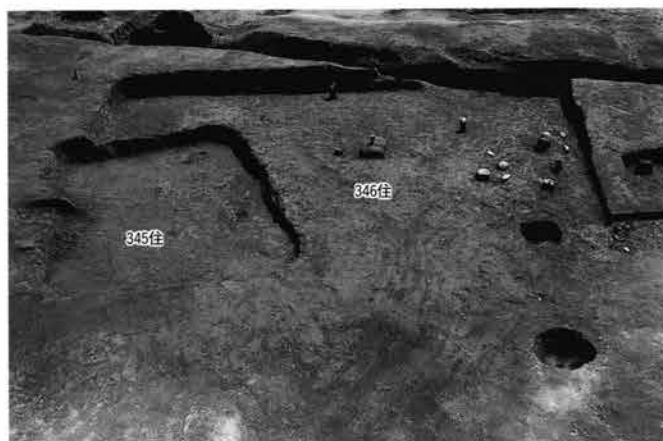
344号住居跡竈（西から）



344号住居跡遺物出土状況（南から）



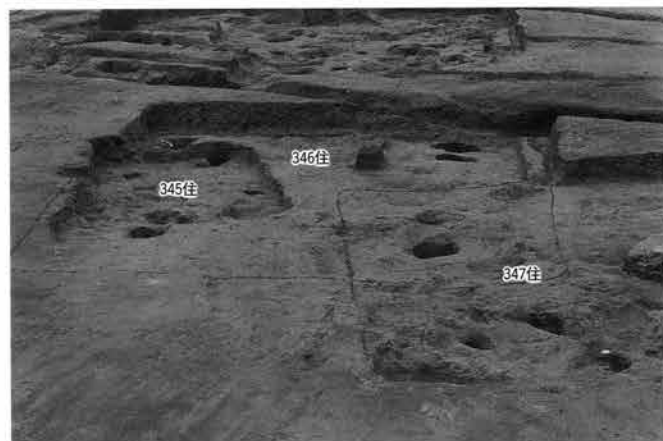
344号住居跡床下セクション (西から)



346号住居跡全景 (西から)



346号住居跡竈掘り方セクション (西から)



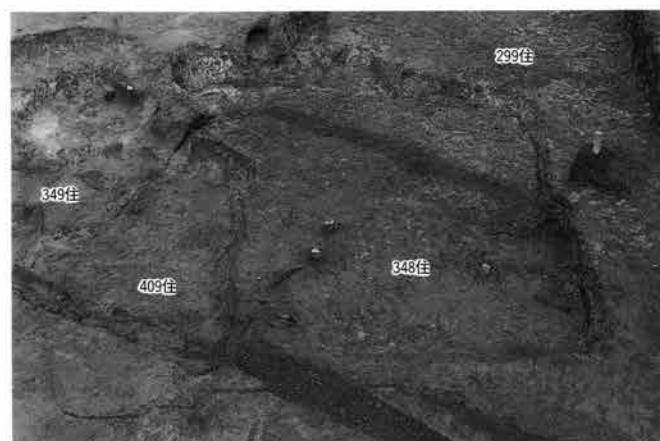
346号住居跡床下全景 (西から)



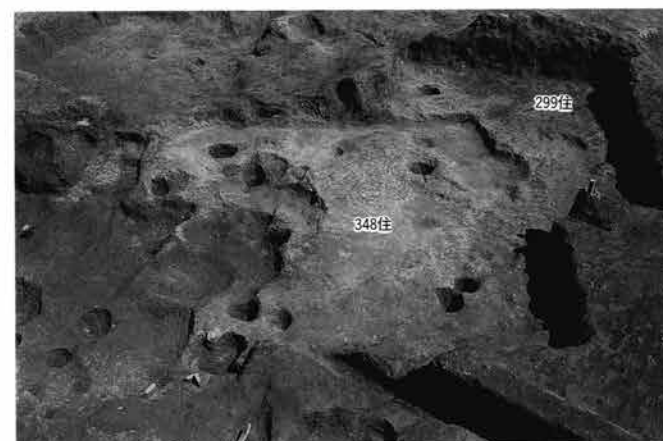
347号住居跡全景 (西から)



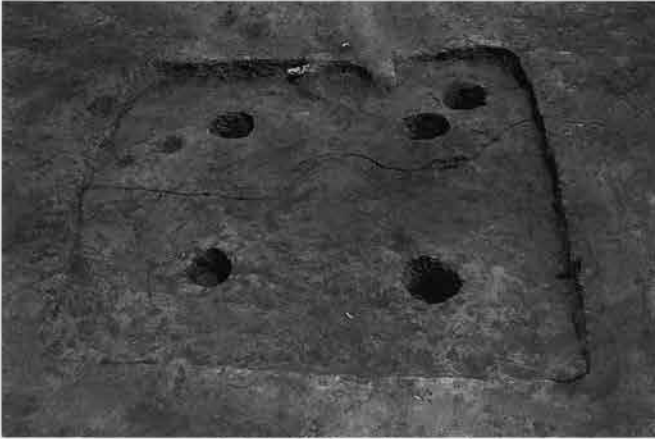
347号住居跡床下全景 (西から)



348号住居跡全景 (南西から)



348号住居跡床下全景 (南西から)



350号住居跡全景（西から）



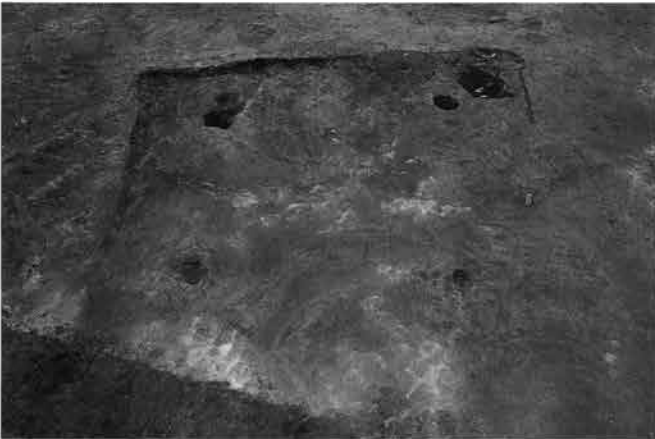
350号住居跡竈（西から）



350号住居跡竈（北から）



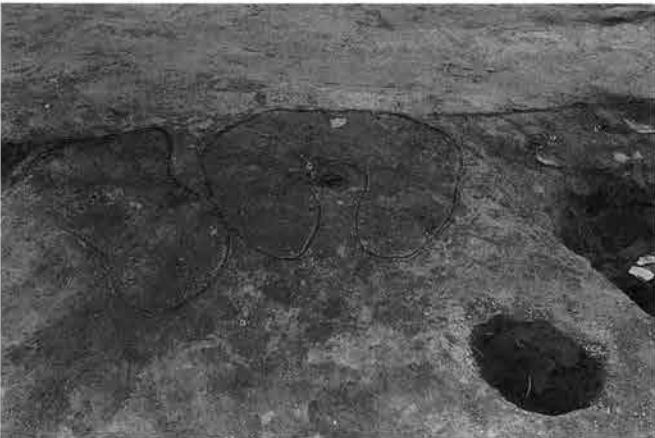
350号住居跡床下全景（西から）



351号住居跡全景（西から）



351号住居跡貯蔵穴（西から）



351号住居跡竈（西から）



352号住居跡全景（西から）



352号住居跡竈（西から）



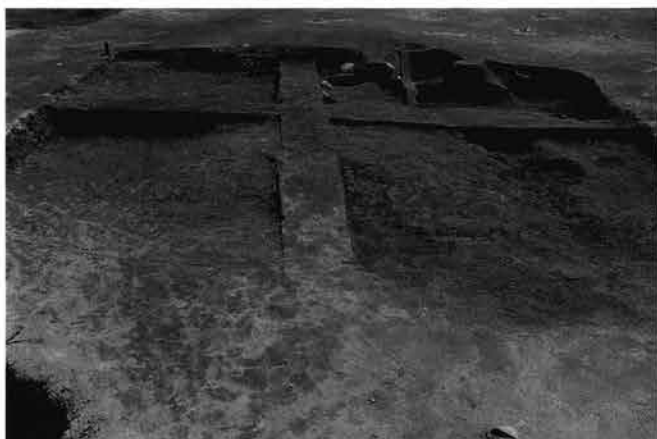
352号住居跡竈掘り方セクション（西から）



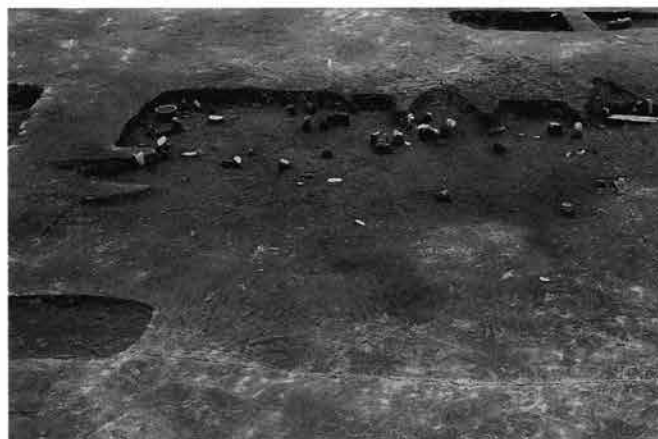
361号住居跡全景（西から）



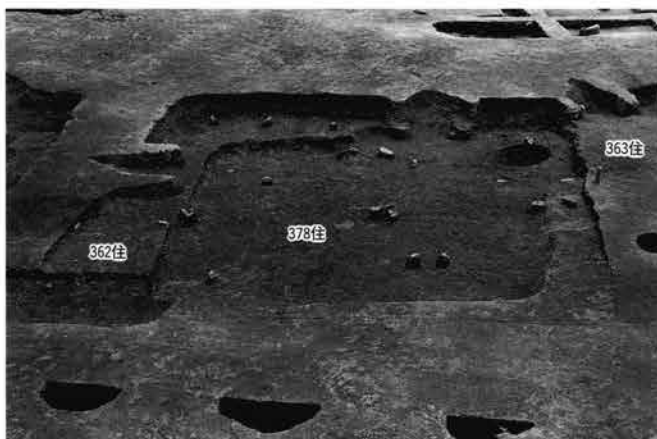
361号住居跡竈（西から）



361号住居跡床下セクション（西から）



362号住居跡全景（西から）



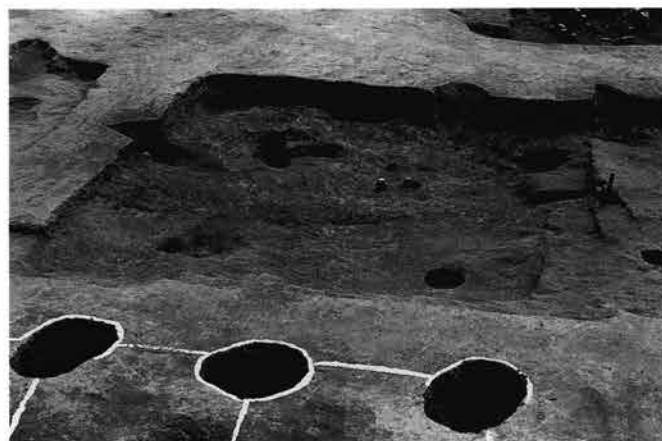
362号住居跡全景（西から）



362号住居跡北東隅遺物出土状況（南から）



362号住居跡竈掘り方セクション (南から)



362号住居跡床下全景 (西から)



363号住居跡全景 (西から)



363号住居跡遺物出土状況 (西から)



363号住居跡竈セクション (西から)



363号住居跡竈 (西から)



363号住居跡竈 (西から)



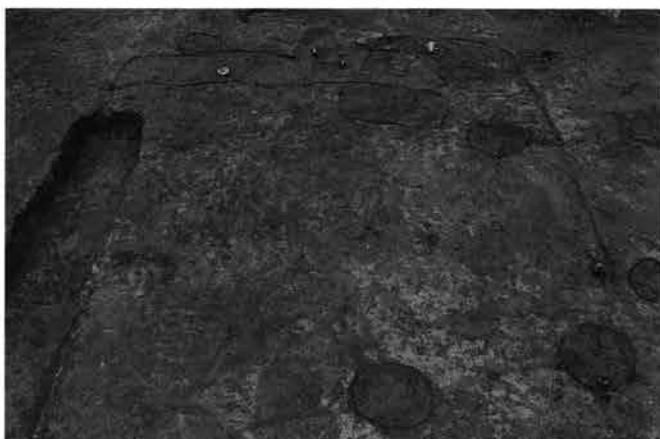
363号住居跡竈天井石復元 (西から)



363号住居跡竈掘り方セクション (西から)



363号住居跡床下全景 (西から)



368号住居跡全景 (西から)



368号住居跡遺物出土状況 (西から)



368号住居跡竈 (西から)



370号住居跡全景 (西から)



370号住居跡竈 (西から)



371号住居跡全景 (西から)



371号住居跡北東部分遺物出土状況（西から）



371号住居跡柱穴1付近遺物出土状況（北から）



371号住居跡竈（西から）



371号住居跡床下全景（西から）



382号住居跡全景（南から）



382号住居跡東側部分遺物出土状況（南から）



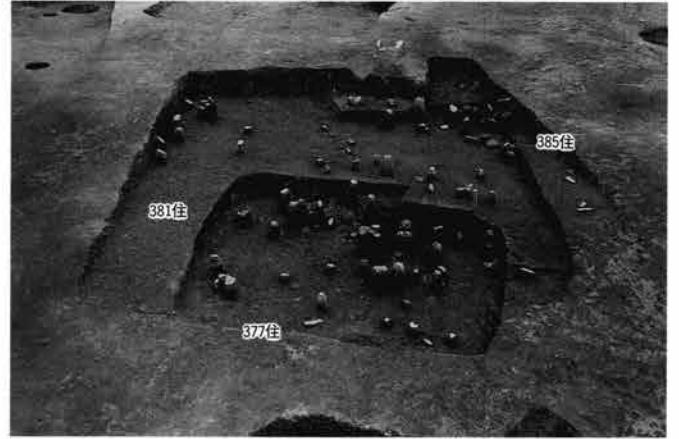
382号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況（西から）



382号住居跡竈周辺遺物出土状況（南から）



382号住居跡竈（南から）



385号住居跡全景（西から）



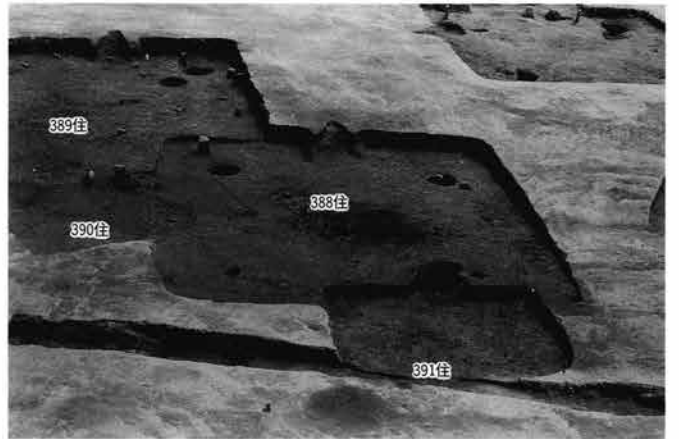
387号住居跡全景（西から）



387号住居跡遺物出土状況（北から）



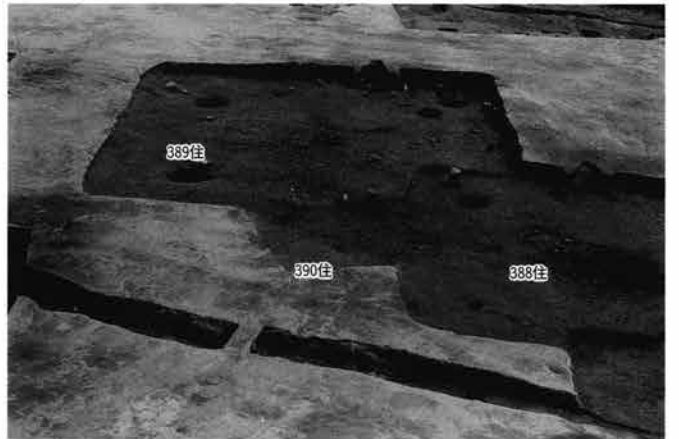
388号住居跡～391号住居跡セクション（南から）



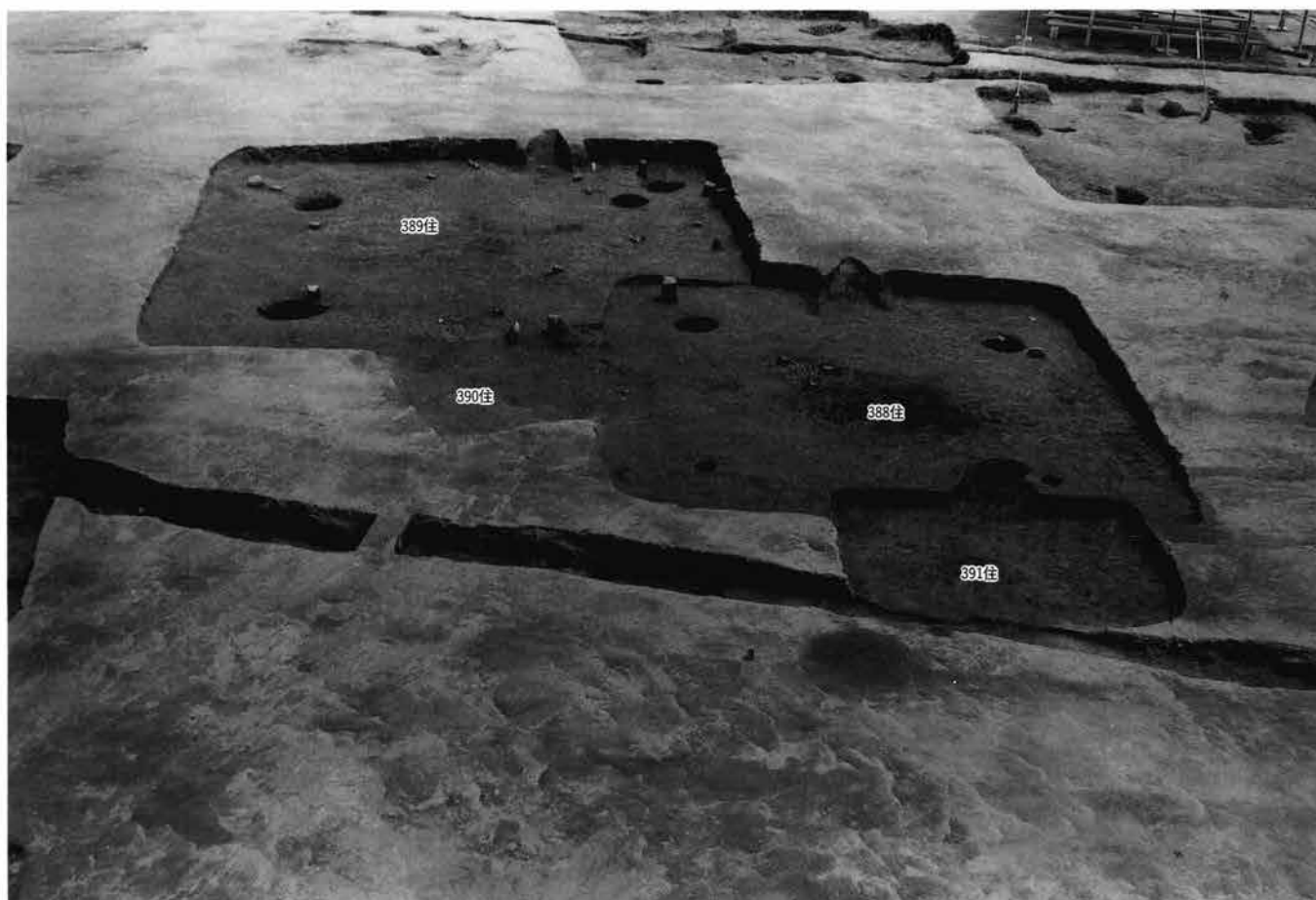
388号住居跡全景（西から）



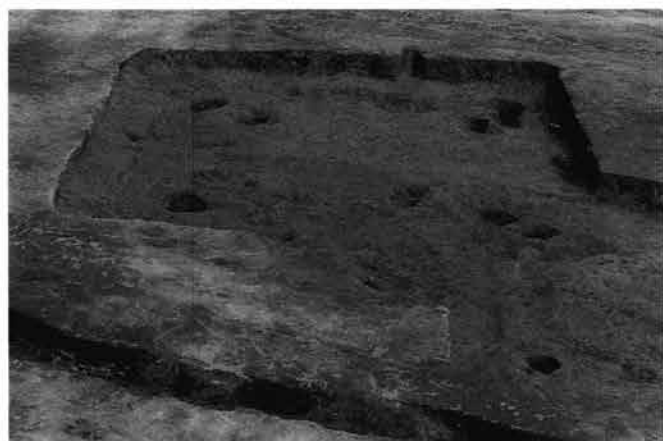
388号住居跡竈（西から）



389号住居跡全景（西から）



388・389・390・391号住居跡全景（西から）



389号住居跡床下全景（西から）



389号住居跡遺物出土状況（南から）



389号住居跡竈セクション（南から）



389号住居跡竈（西から）



393号住居跡竈（西から）



394号住居跡全景（西から）



394号住居跡遺物出土状況（南から）



394号住居跡竈（西から）



394号住居跡床下全景（西から）



395号住居跡全景（東から）



395号住居跡竈（東から）



395号住居跡床下セクション（東から）



395号住居跡床下全景（東から）



396号住居跡遺物出土状況全景（西から）



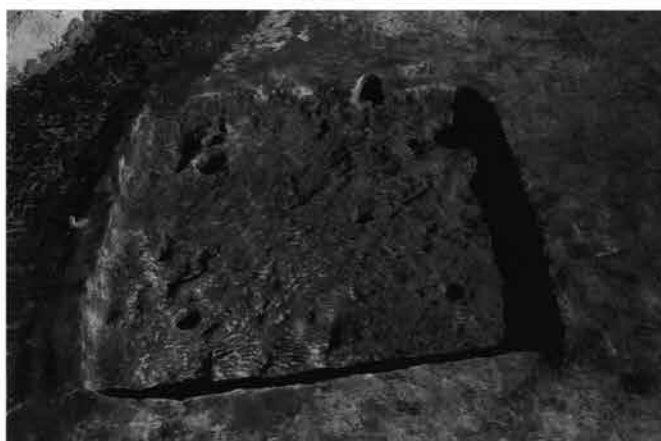
396号住居跡遺物出土状況（西から）



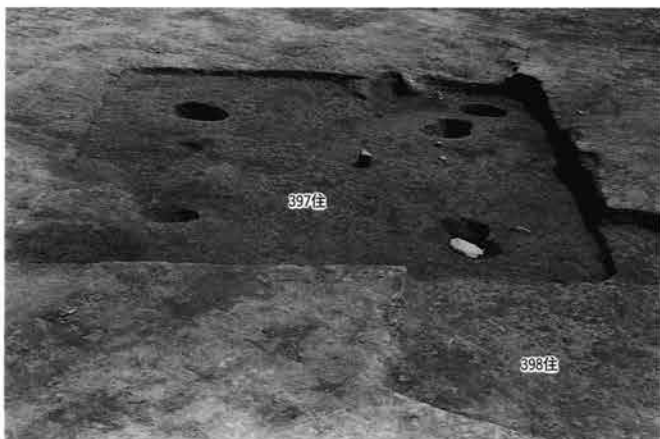
396号住居跡全景（西から）



396号住居跡竈全景（西から）



396号住居跡床下全景（西から）



397号住居跡全景（西から）



397号住居跡礎石埋設状況（南から）



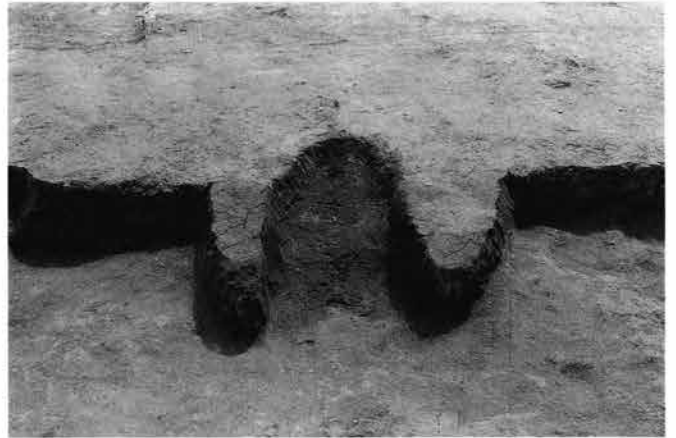
397号住居跡竈セクション (西から)



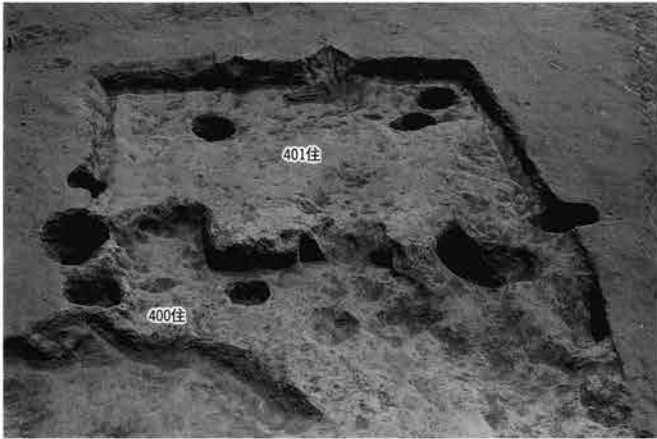
397号住居跡床下全景 (西から)



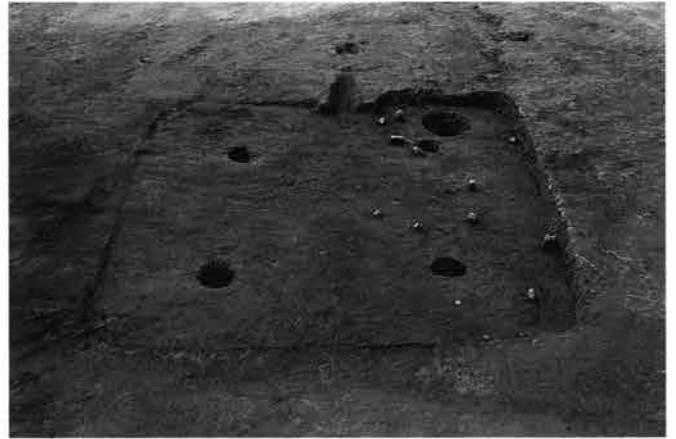
401号住居跡全景 (西から)



401号住居跡竈 (西から)



401号住居跡床下全景 (西から)



404号住居跡全景 (南から)



404号住居跡竈セクション (西から)



404号住居跡竈 (南から)



404号住居跡床下全景（南から）



416号住居跡全景（西から）



416号住居跡床下全景（西から）



417号住居跡全景（西から）



417号住居跡遺物出土状況（南から）



417号住居跡新東竈（西から）



417号住居跡旧北竈掘り方（南から）



417号住居跡床下セクション（南から）



417号住居跡床下全景 (西から)



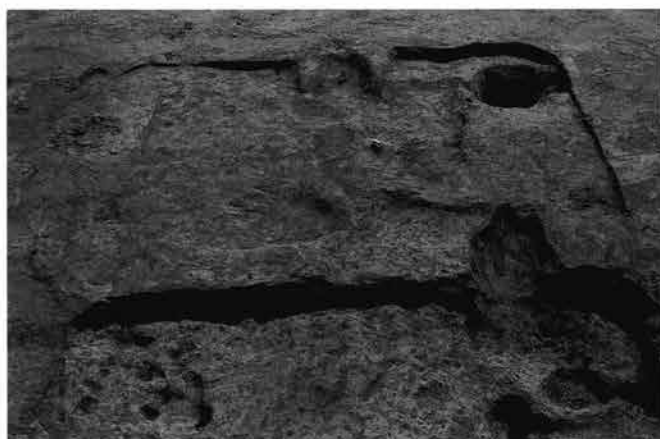
420号住居跡全景 (南から)



420号住居跡竈 (南から)



420号住居跡床下全景 (南から)



423号住居跡全景 (西から)



423号住居跡竈 (西から)



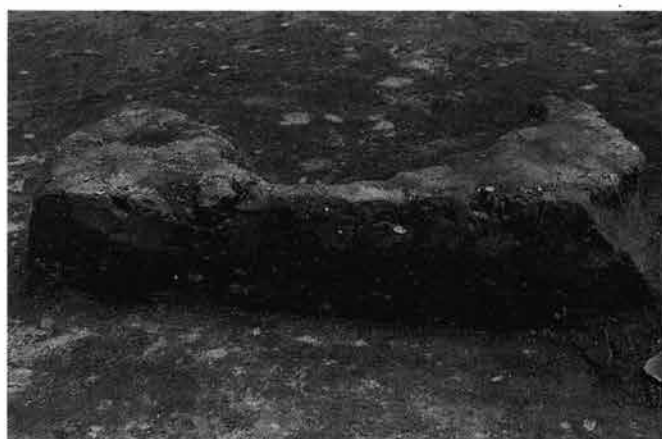
423号住居跡床下全景 (西から)



538号住居跡全景 (西から)



538号住居跡遺物出土状況（北から）



538号住居跡竈手前粘土層セクション（南から）



538号住居跡竈（西から）



538号住居跡全景（西から）



538号住居跡床下全景（西から）



539号住居跡全景（南から）



539号住居跡セクション（南から）



539号住居跡竈（南から）



539号住居跡床下セクション (東から)



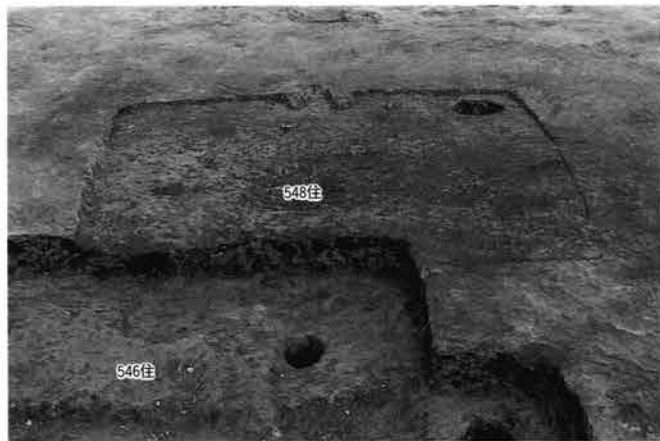
539号住居跡床下全景 (南から)



544号住居跡セクション (東から)



544号住居跡床下セクション (東から)



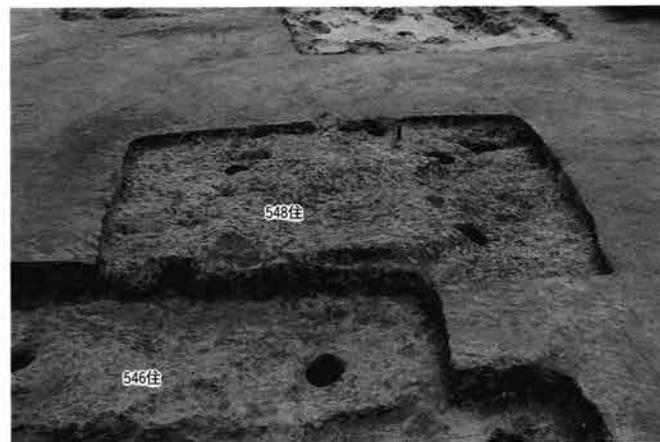
548号住居跡全景 (西から)



548号住居跡セクション (南から)



548号住居跡竈 (西から)



548号住居跡床下全景 (西から)



543・544・545・546・547号住居跡掘り方全景（西から）



543・544・545・546・547号住居跡全景（東から）



579号住居跡全景（南から）



579号住居跡新北竈セクション（南から）



579号住居跡新北竈（南から）



579号住居跡旧西竈掘り方セクション（南から）



579号住居跡旧西竈掘り方全景（東から）



579号住居跡床下全景（南から）



581号住居跡全景（西から）



581号住居跡遺物出土状況（南から）



581号住居跡床下全景（西から）



582号住居跡全景（南から）



582号住居跡新北竈（東から）



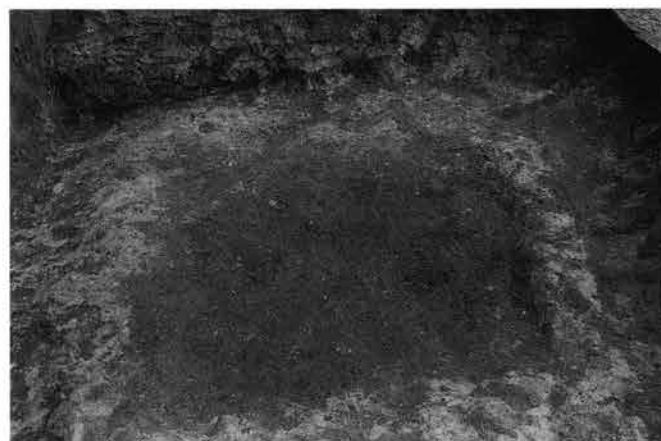
582号住居跡新北竈（南から）



582号住居跡床下全景（南から）



584号住居跡全景（西から）



584号住居跡貯蔵穴確認状況（西から）



584号住居跡貯蔵穴（西から）



584号住居跡新東竈（西から）



584号住居跡新東竈掘り方（西から）



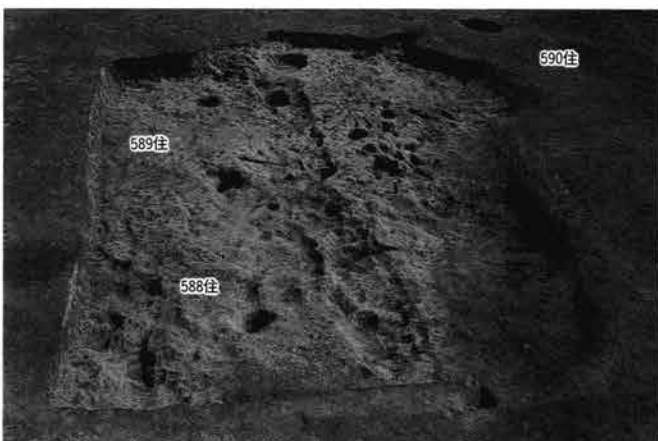
584号住居跡旧北竈（南から）



584号住居跡床下全景（西から）



587号住居跡全景（西から）



588号住居跡床下全景（西から）



588号住居跡竈痕跡（西から）



589号住居跡全景（西から）



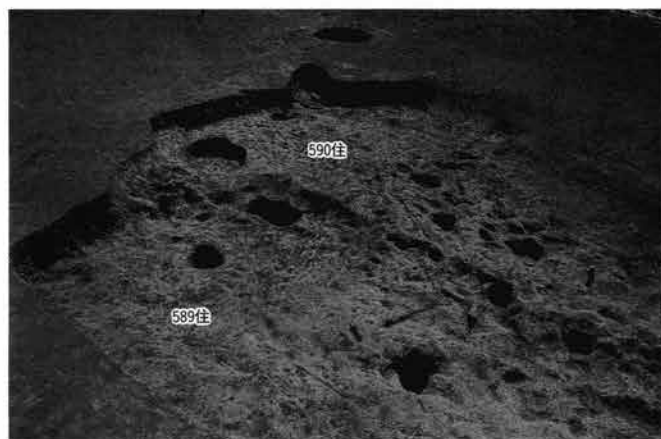
589号住居跡竈（西から）



589号住居跡竈（北から）



589号住居跡竈掘り方（西から）



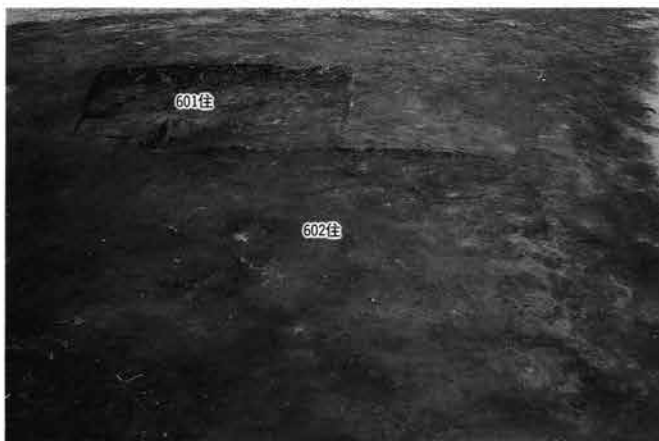
589号住居跡床下全景（北西から）



601号住居跡全景（西から）



601号住居跡竈（西から）



602号住居跡全景（東から）



603号住居跡全景（東から）



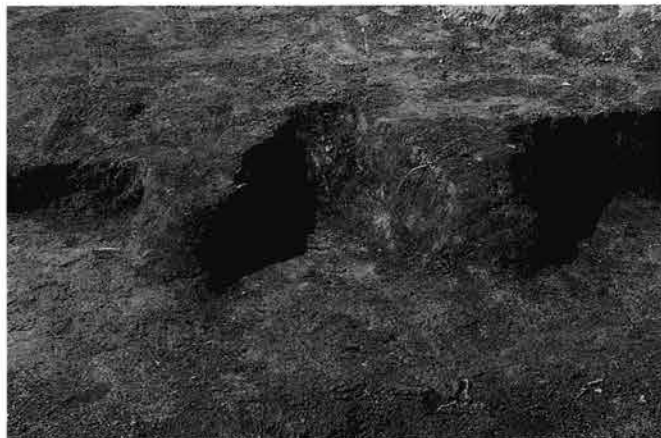
603号住居跡遺物出土状況（南から）



603号住居跡遺物出土状況（南から）



606号住居跡全景（東から）



606号住居跡竈（東から）



607号住居跡全景（南から）



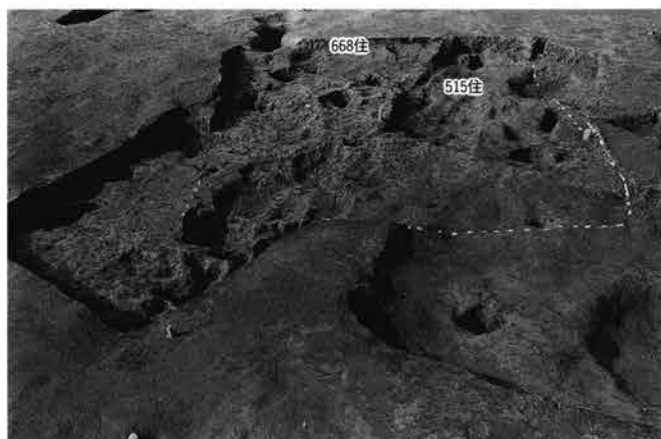
607号住居跡床下全景（南から）



650号住居跡全景（東から）



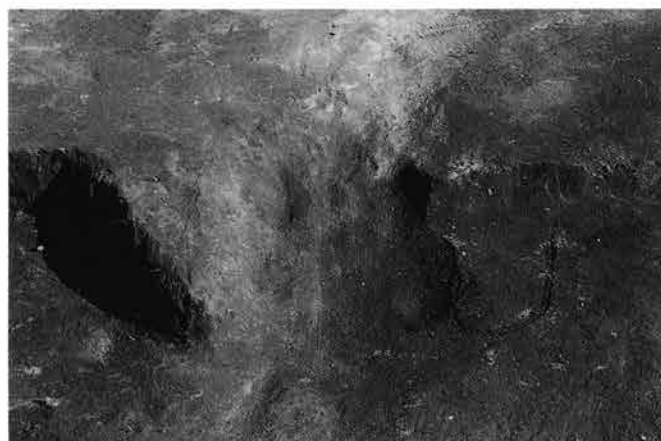
650号住居跡全景（西から）



668号住居跡全景（南から）



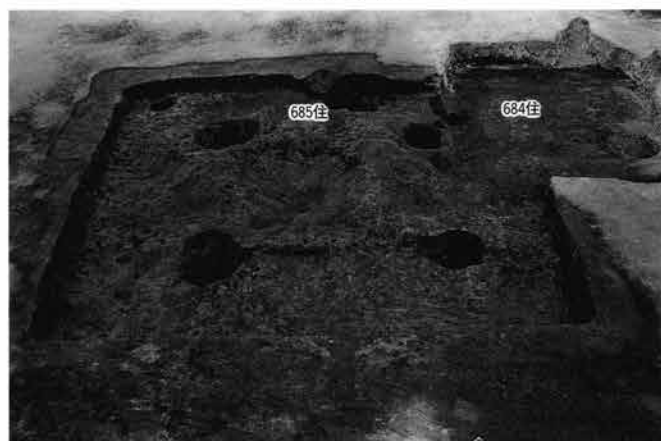
685号住居跡全景（西から）



685号住居跡竈（西から）



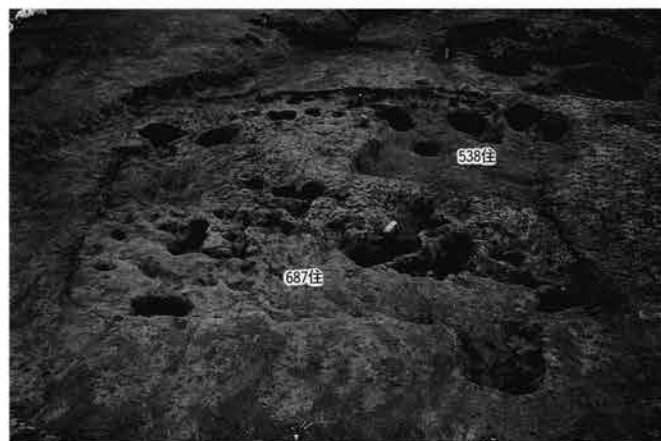
685号住居跡セクション（西から）



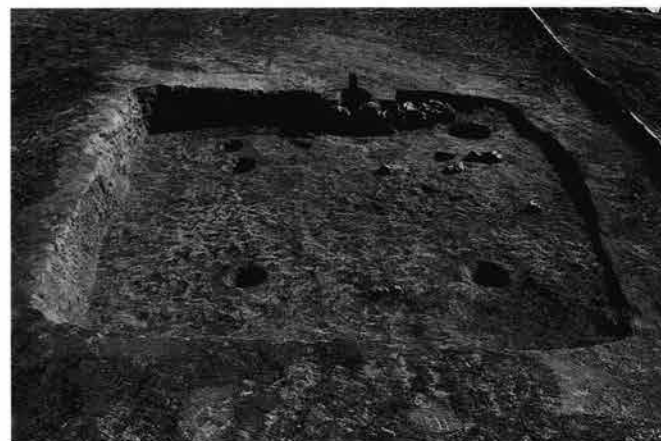
685号住居跡床下全景（西から）



687号住居跡竈セクション（西から）



687号住居跡床下全景（西から）



689号住居跡全景（西から）



689号住居跡竈右袖付近遺物出土状況（南西から）



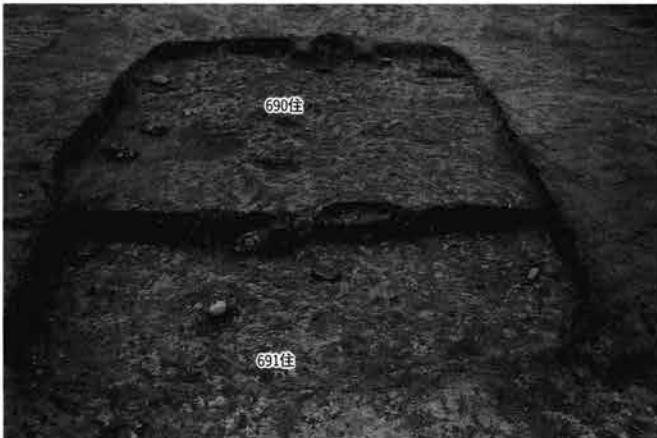
689号住居跡竈（西から）



689号住居跡竈掘り方セクション（西から）



689号住居跡床下全景（西から）



690号住居跡全景（西から）



690号住居跡竈（西から）



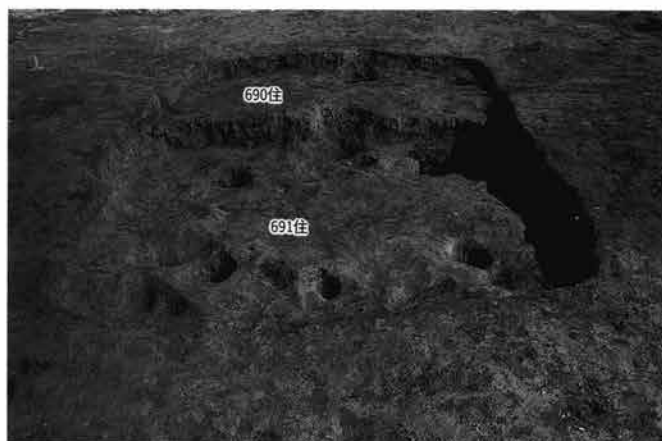
691号住居跡全景（西から）



691号住居跡全景（北から）



691号住居跡竈（西から）



690・691号住居跡床下全景（西から）



692号住居跡全景（東から）



692号住居跡竈周辺遺物出土状況（南から）



692号住居跡竈（東から）



692号住居跡床下全景（東から）



693号住居跡全景（西から）



693号住居跡床下全景（西から）



694号住居跡遺物出土状況全景（西から）



694号住居跡全景（西から）



694号住居跡竈付近遺物出土状況（西から）



694号住居跡竈セクション（南から）



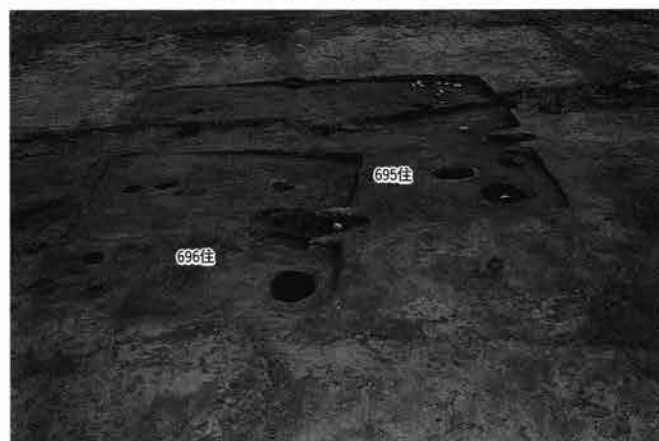
694号住居跡竈（西から）



694号住居跡床下全景（西から）



695号住居跡全景（西から）



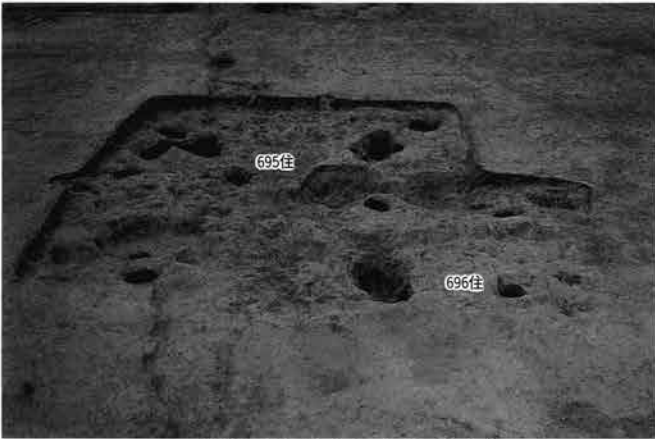
695号住居跡全景（南から）



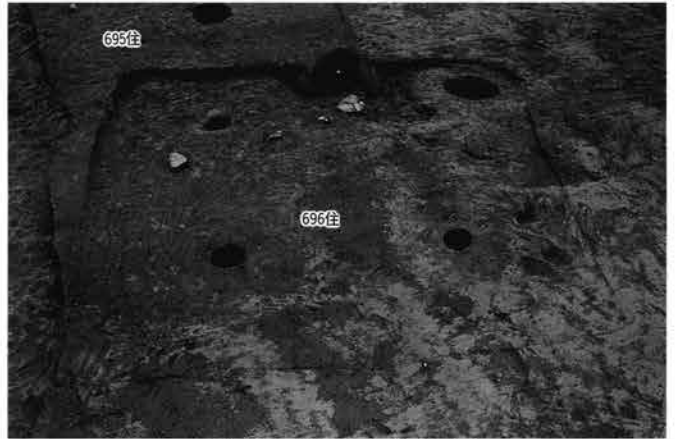
695号住居跡新東竈（西から）



695号住居跡旧北竈（南から）



695号住居跡床下全景（西から）



696号住居跡全景（西から）



696号住居跡竈（西から）



698号住居跡全景（西から）



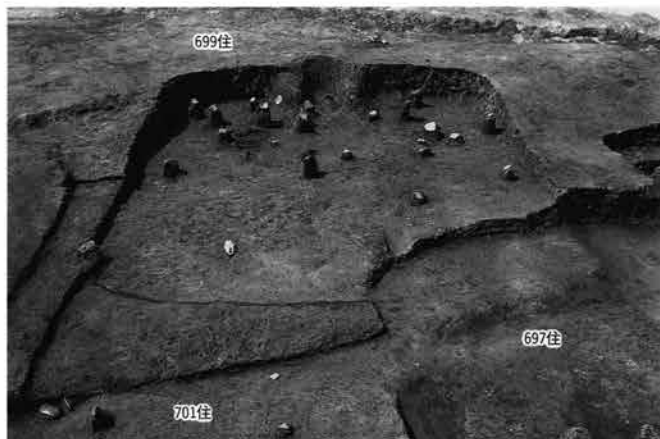
698号住居跡竈セクション（西から）



698号住居跡竈全景（西から）



698号住居跡床下全景（西から）



699号住居跡全景（東から）



699号住居跡西側遺物出土状況（南から）



699号住居跡竈（東から）



699号住居跡床下全景（東から）



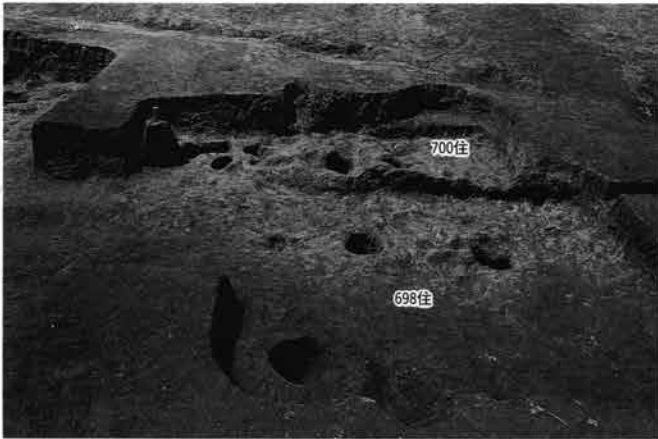
700号住居跡全景（東から）



700号住居跡セクション（東から）



700号住居跡竈（東から）



700号住居跡床下全景（東から）



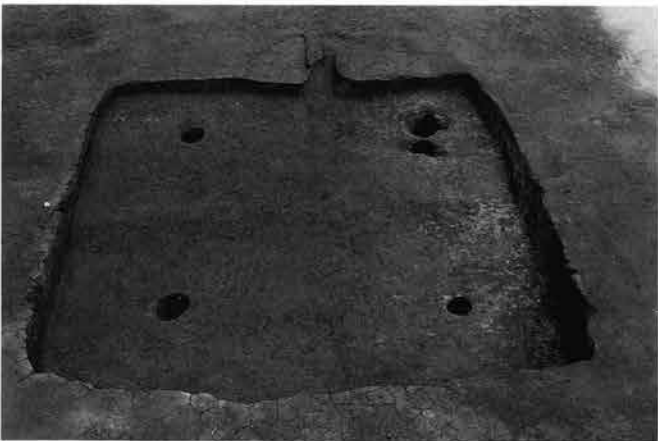
702号住居跡全景（西から）



702号住居跡竈付近遺物出土状況（西から）



702号住居跡竈（西から）



702号住居跡床下全景（西から）



703号住居跡全景（東から）



703号住居跡竈付近遺物出土状況（東から）



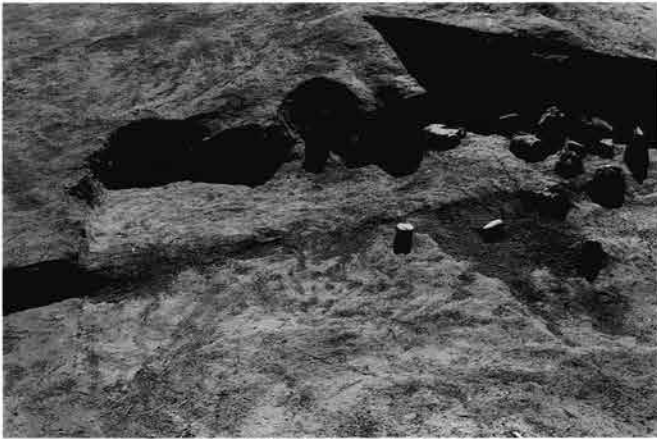
703号住居跡竈（東から）



703号住居跡床下全景（東から）



708号住居跡遺物出土状況全景（北から）



718号住居跡全景（西から）



718号住居跡竈（西から）



718号住居跡竈掘り方（西から）



719号住居跡全景（西から）



719号住居跡竈（西から）



719号住居跡床下全景（西から）



723号住居跡全景（西から）



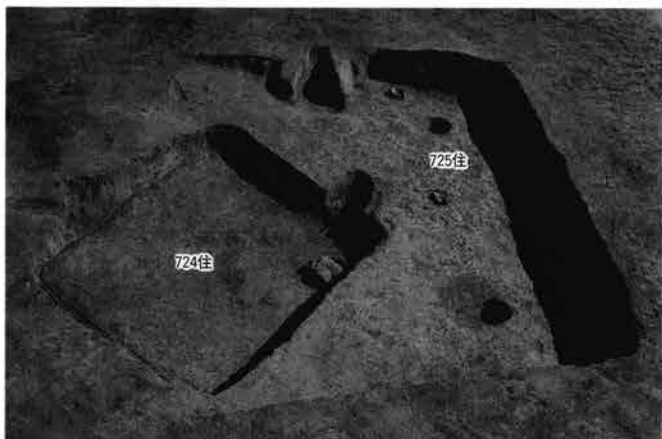
723号住居跡竈全景（西から）



723号住居跡竈掘り方セクション（北西から）



725号住居跡床下全景（西から）



725号住居跡全景（西から）



725号住居跡床下全景（西から）



726号住居跡全景（西から）



726号住居跡竈遺物出土状況（北から）



726号住居跡竈全景（北から）



726号住居跡床下全景（西から）



738号住居跡全景（西から）



738号住居跡竈（西から）



738号住居跡床下全景（西から）



741号住居跡遺物出土状況全景（南から）



741号住居跡全景（南から）



741号住居跡床下全景（南から）





77住-1



77住-4



77住-5



77住-7



77住-2



77住-8



77住-9



77住-10



77住-11



77住-12



77住-13



77住-14



77住-15



77住-16



77住-17



77住-20



89住-6



89住-2



89住-3



89住-4



89住-5



89住-7



107住-1



107住-2



107住-3



107住-4



107住-6



107住-7



107住-8



107住-9





108住-4



108住-5



108住-6



108住-7



108住-9



108住-10









108住-28



108住-34



108住-36



108住-30



108住-19



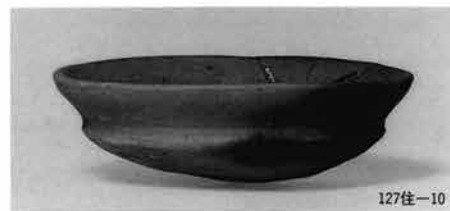
108住-37

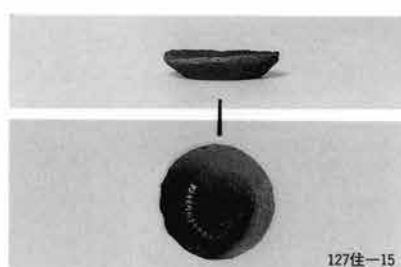


108住-20

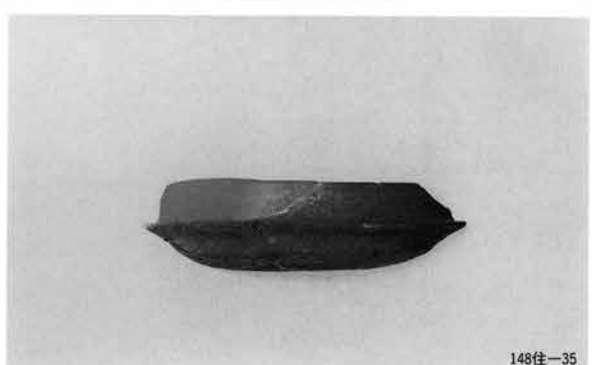






















175住-5



175住-6



175住-7



175住-8



175住-9



175住-10



175住-11



175住-12



175住-13



175住-14



199住-2



199住-4



194住-1



199住-3



199住-5



194住-4



210住-1



210住-3



194住-5



210住-7

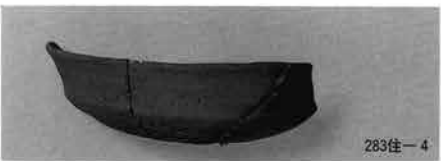


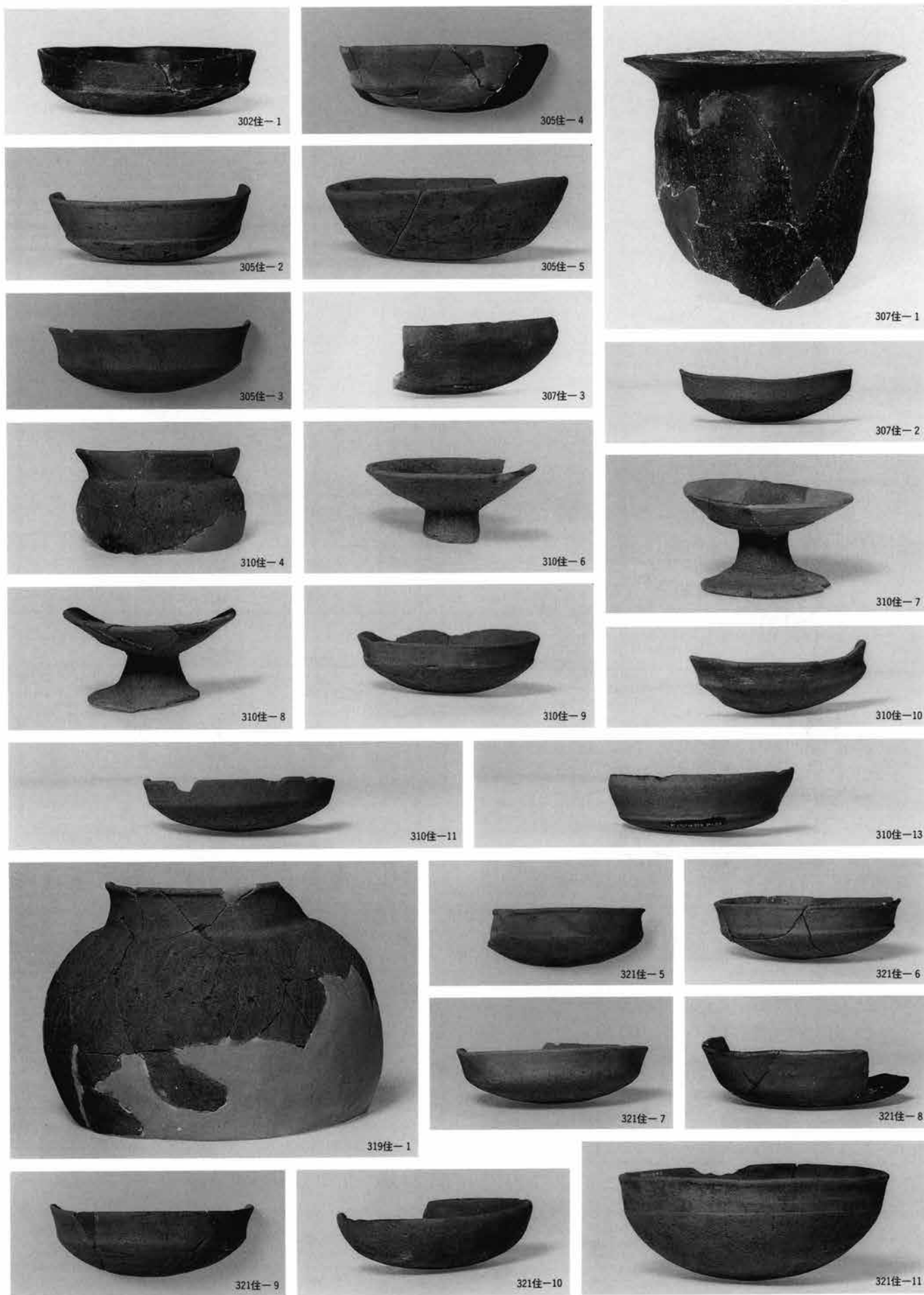
194住-7



210住-5









325住-1



325住-2



325住-3



326住-3



326住-5



326住-6



326住-7



326住-8



326住-10



326住-13



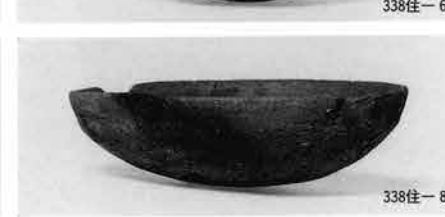
326住-9



326住-12



326住-16











382住-3



382住-12



382住-13



382住-14



382住-15



382住-18



382住-17



387住-2



382住-7



387住-1

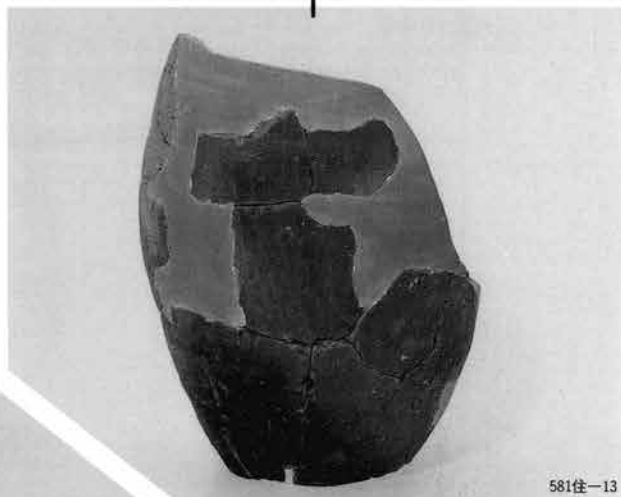


387住-3











582住-1



582住-2



582住-3



584住-1



584住-2



589住-1



589住-2



589住-4



589住-8



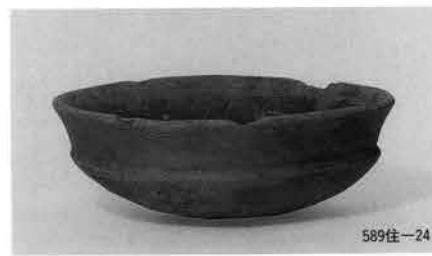
589住-6



589住-7



589住-18







692住-5



692住-8



692住-10



692住-11



692住-12



692住-20



692住-13



692住-14



692住-15



692住-16



692住-17



692住-18



692住-19



692住-21



692住-22

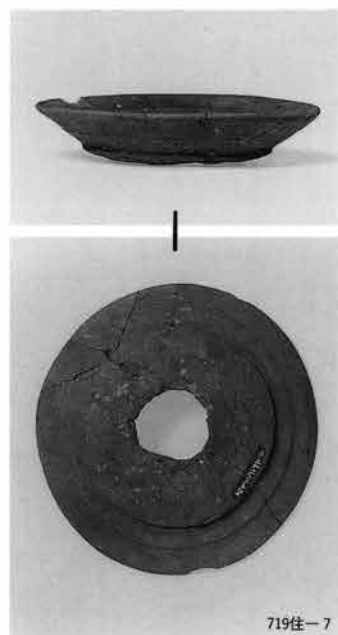


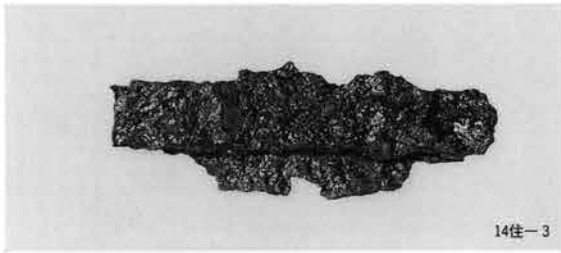
693住-1



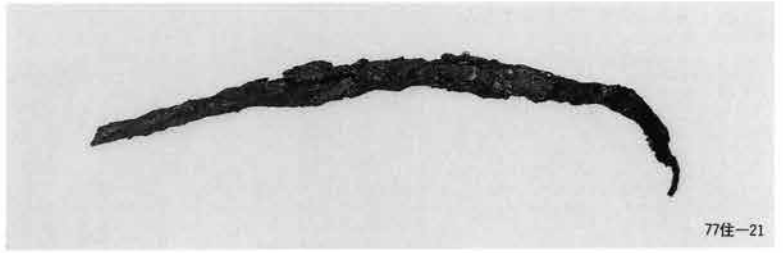








14住-3



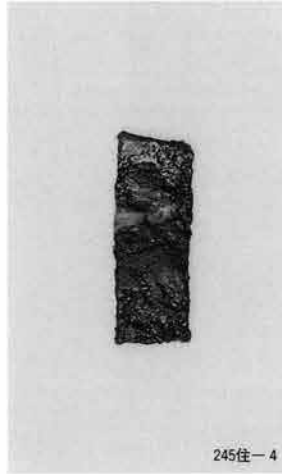
77住-21



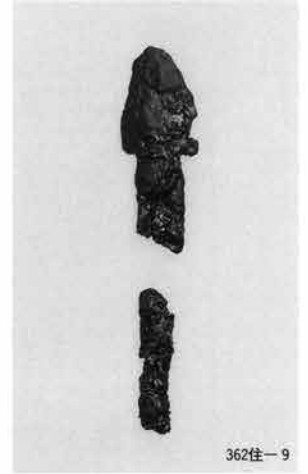
18住-11



160住-7



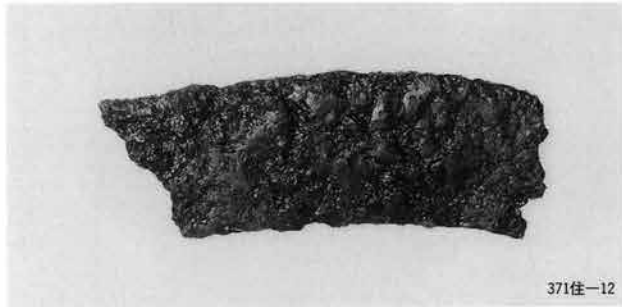
245住-4



362住-9



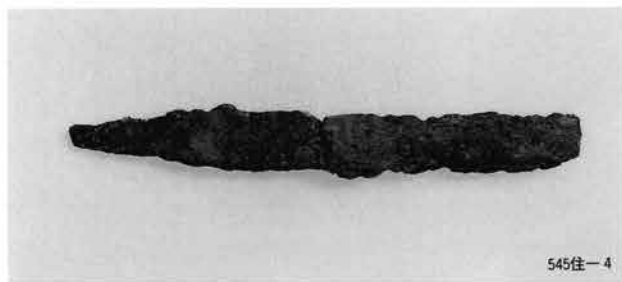
160住-8



371住-12



388住-4



545住-4



606住-6



685住-2



15住-9



53住-33



108住-58



148住-36



371住-11



415住-2



238住-3



417住-10



689住-12



703住-16



741住-7



417住-11



417住-9



417住-10



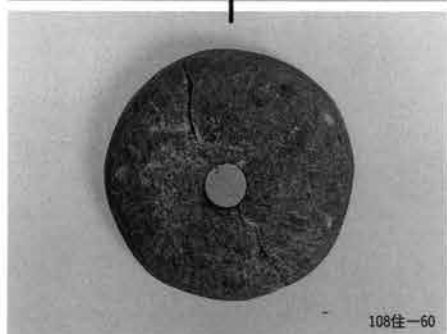
689住-12



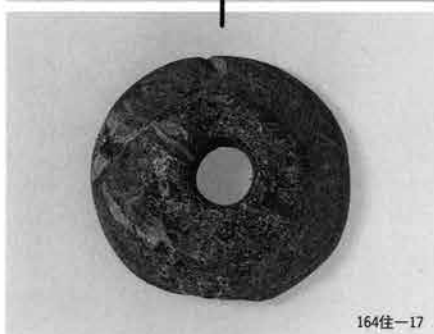
703住-16



741住-7



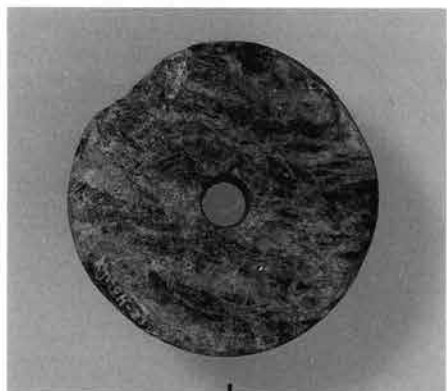
108住-60



164住-17



168住-5



238住-4



18住-12

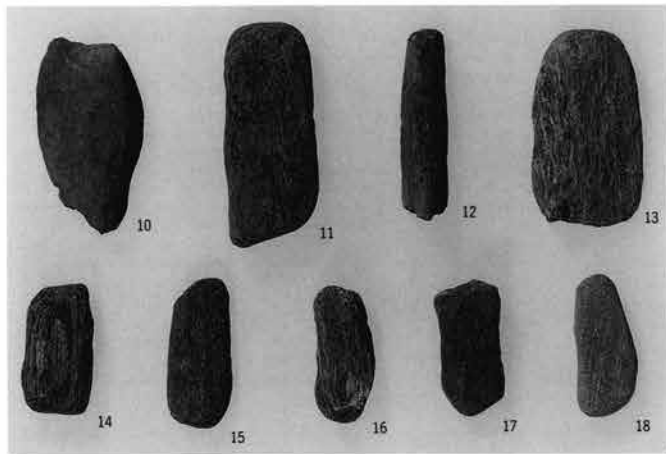
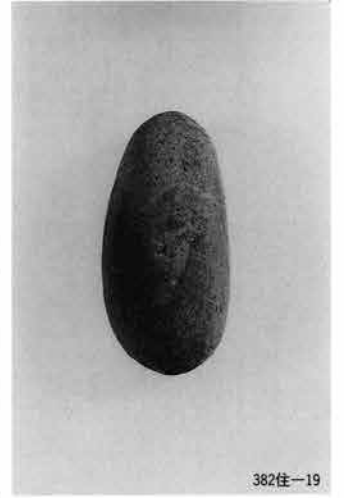


129住-16

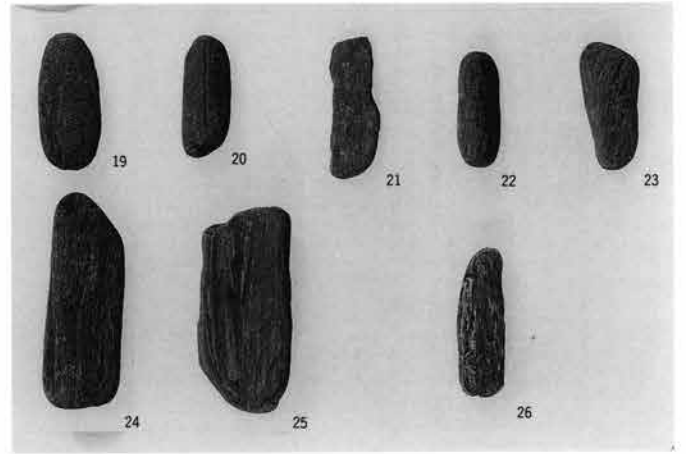


108住-59

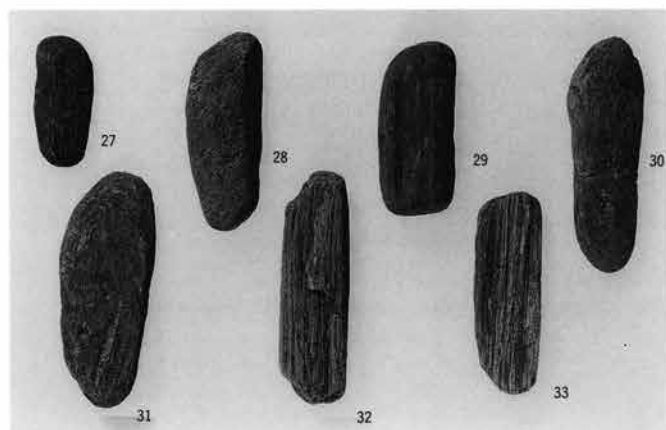
图版110



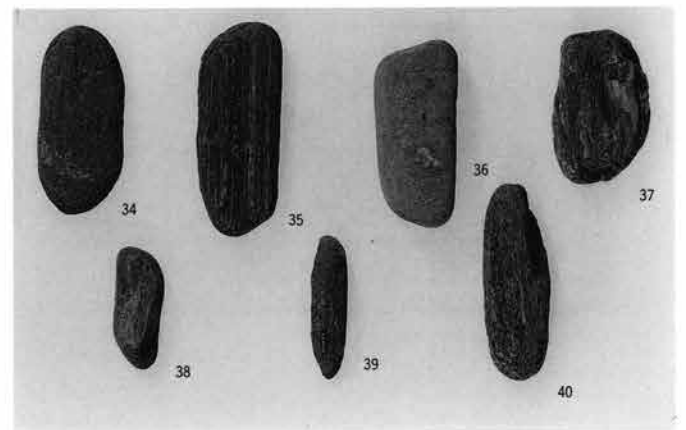
15住



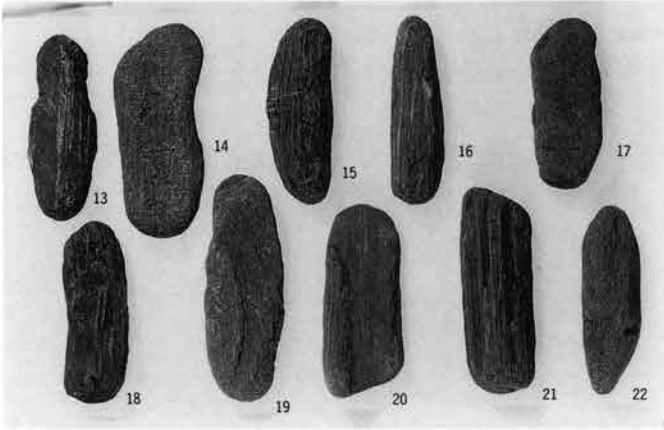
15住



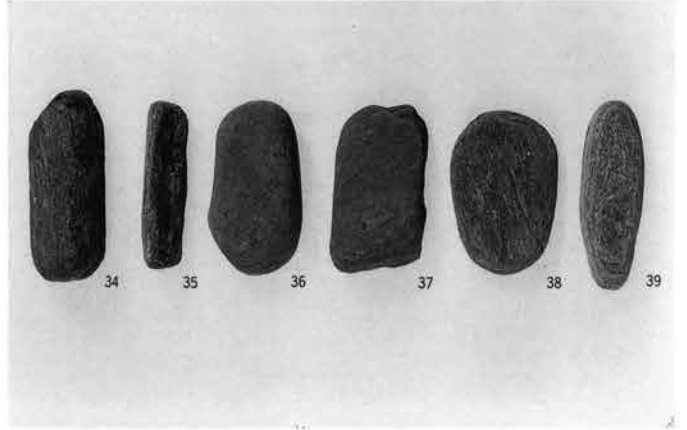
15住



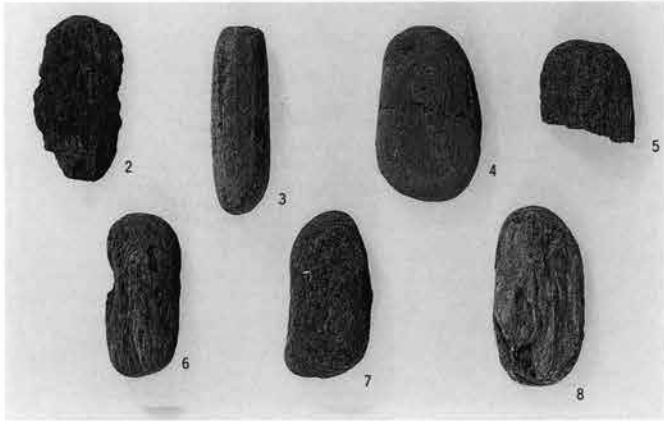
15住



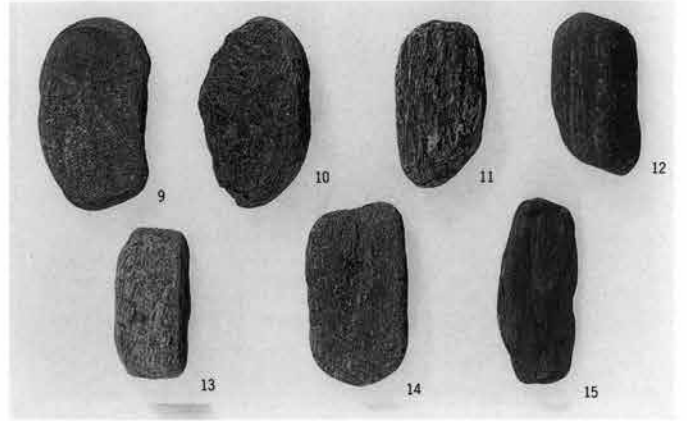
18住



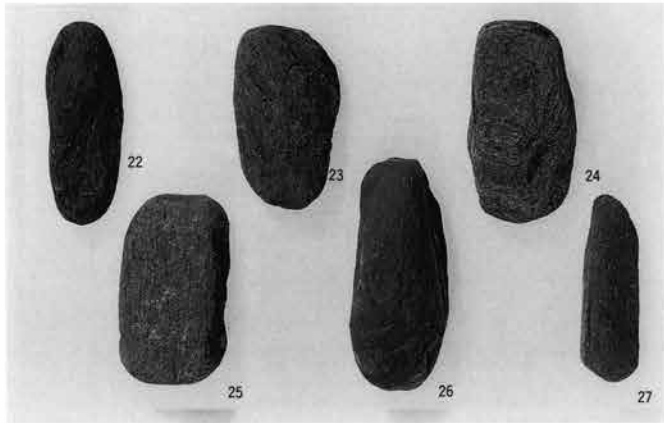
53住



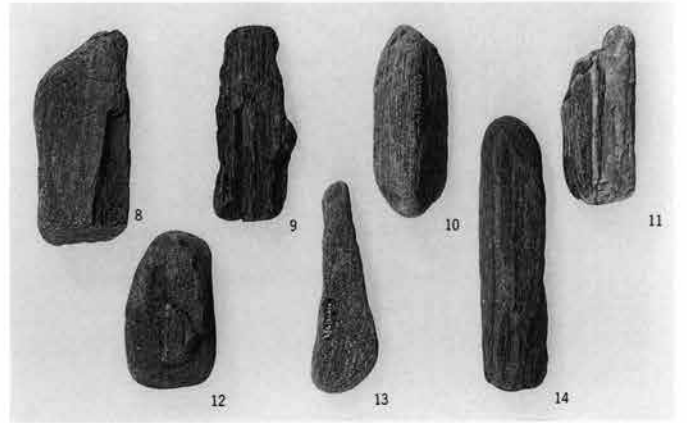
31住



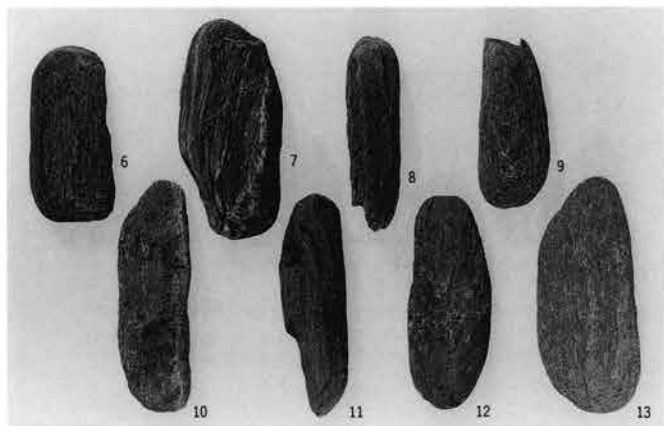
31住



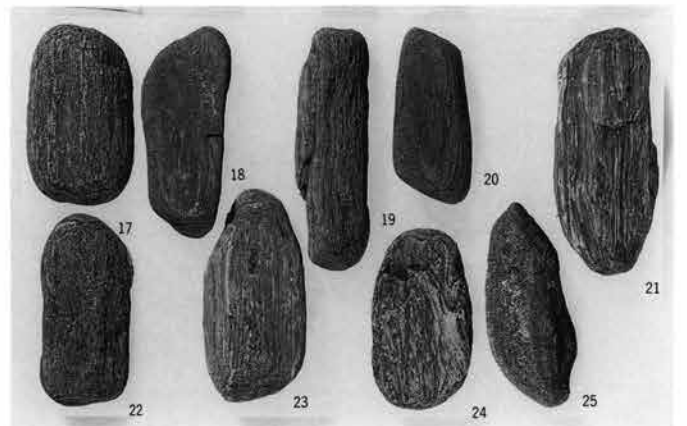
77住



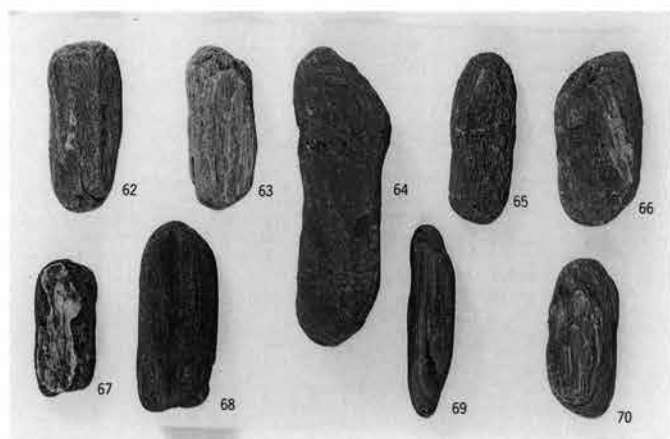
117住



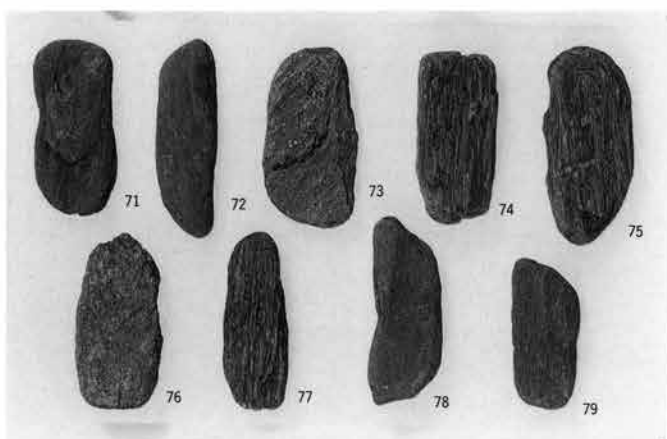
119住



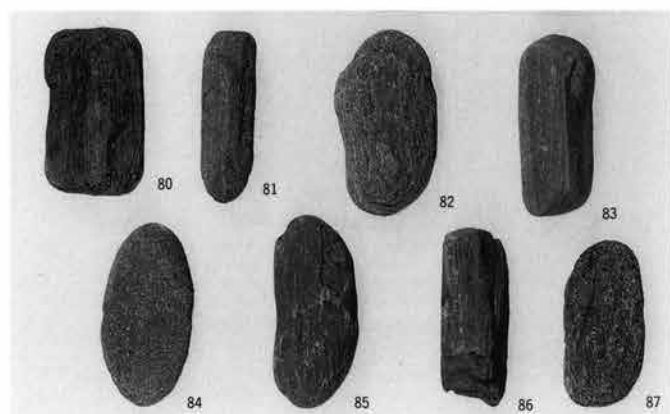
129住



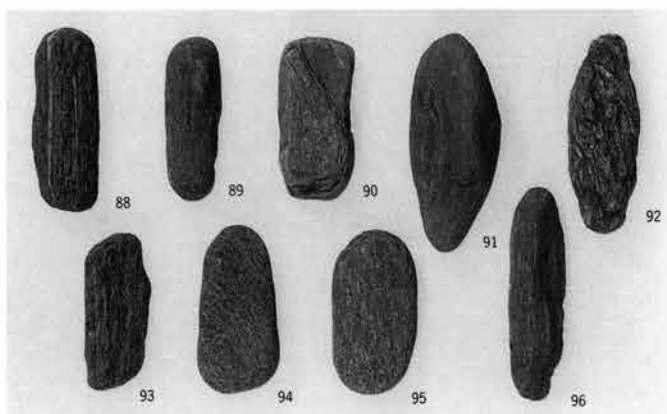
108住



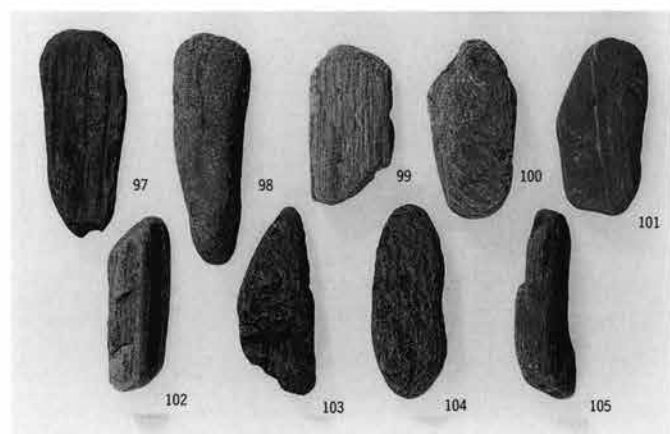
108住



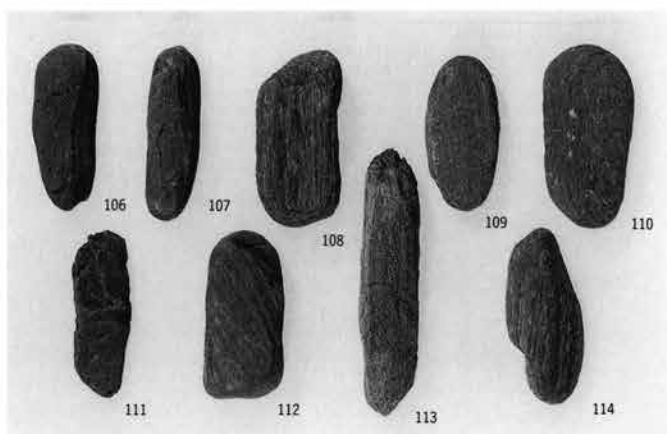
108住



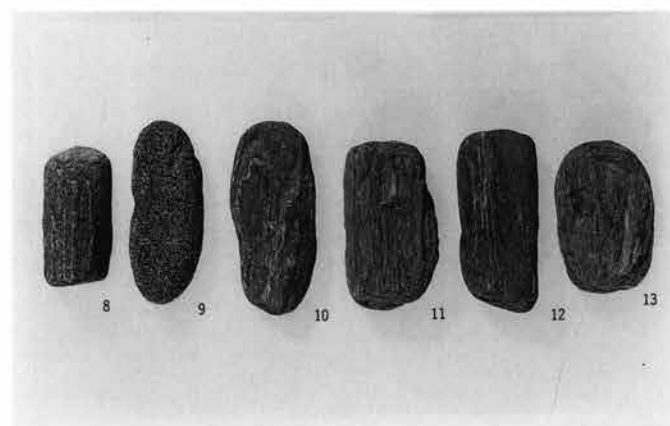
108住



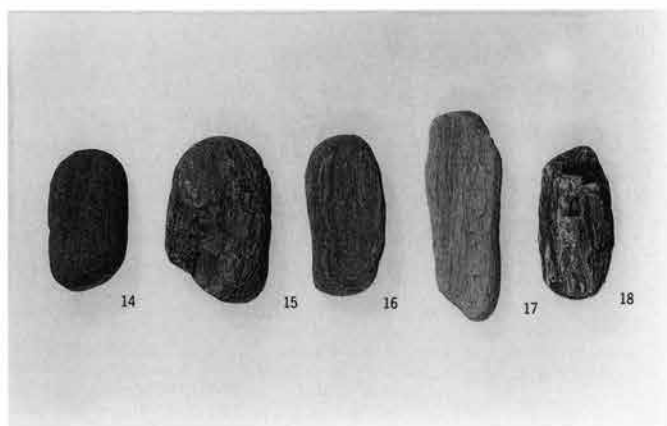
108住



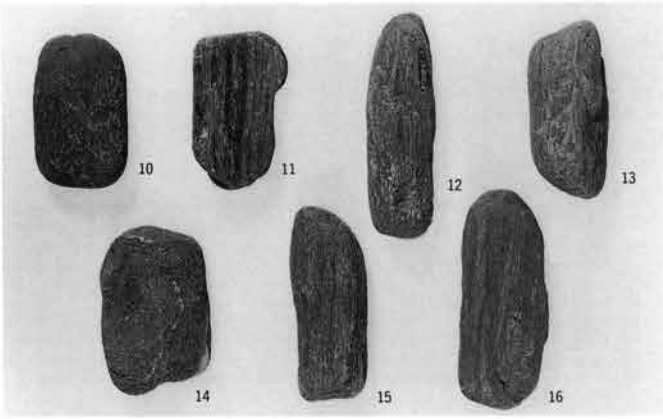
108住



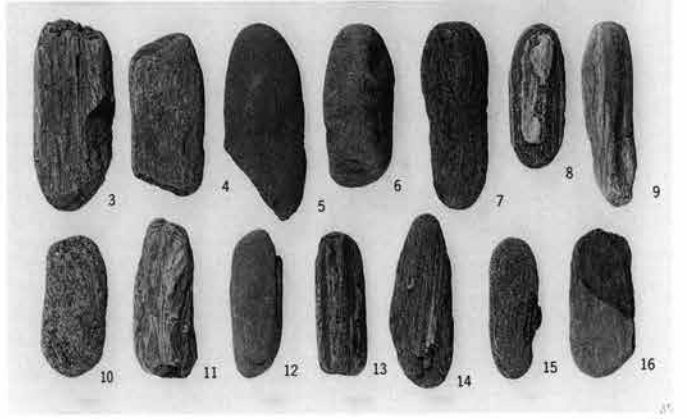
149住



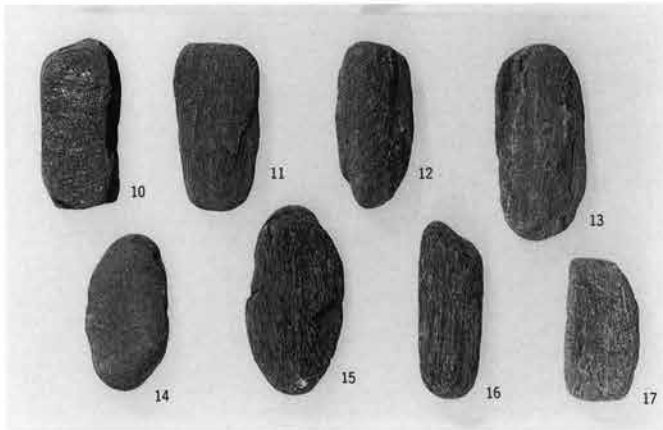
149住



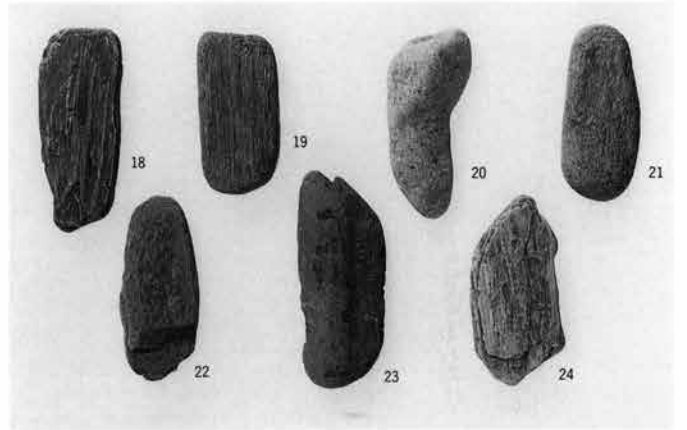
160住



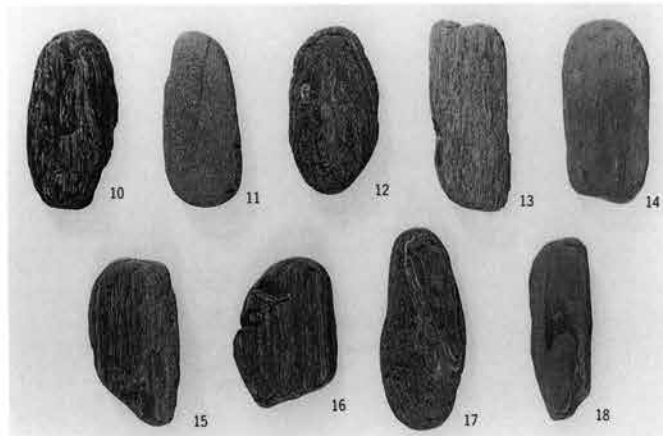
162住



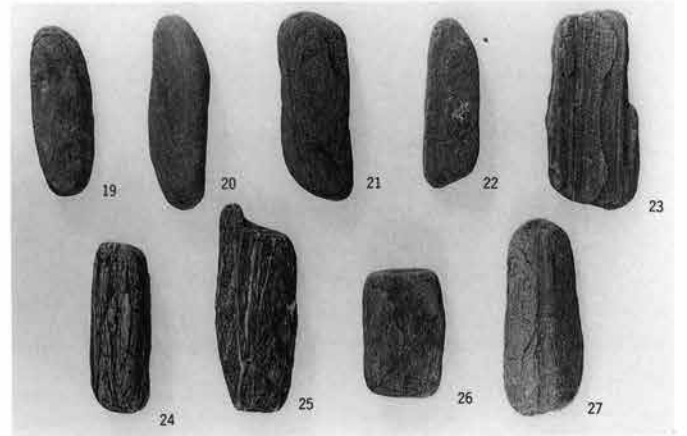
165住



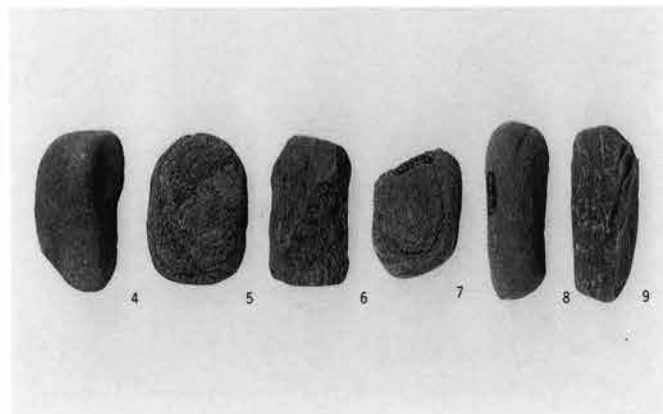
165住



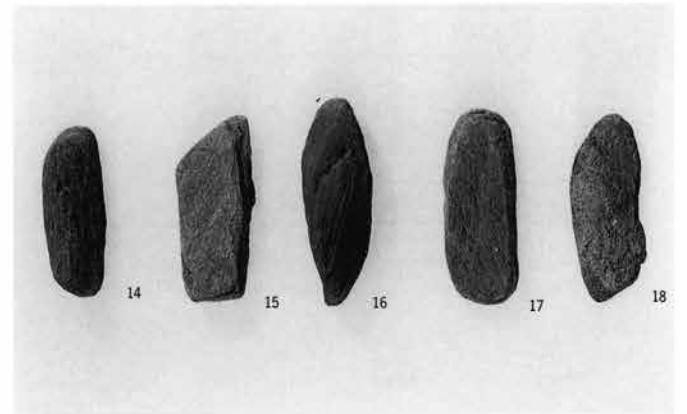
251住



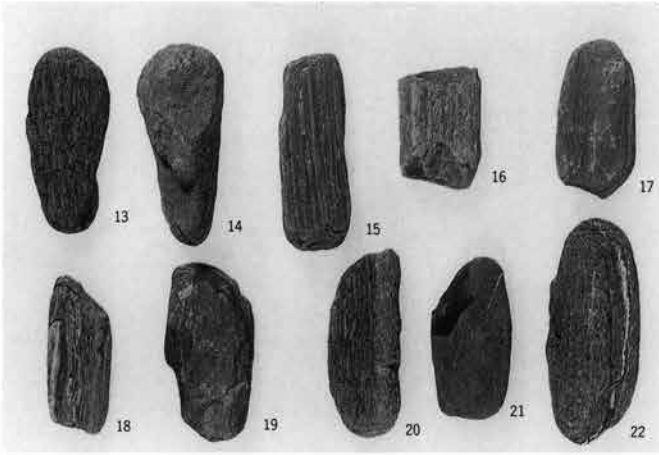
251住



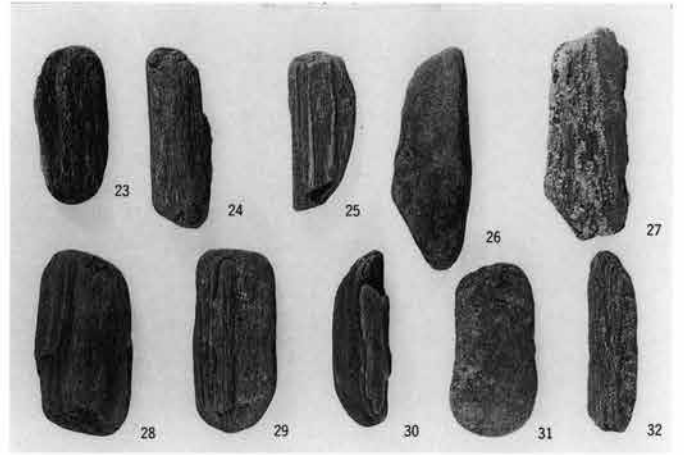
173住



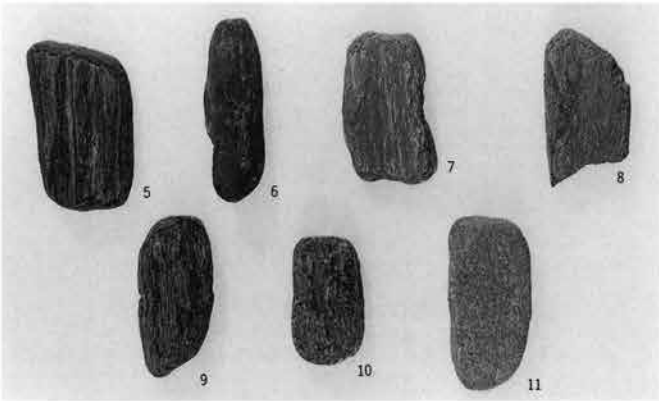
310住



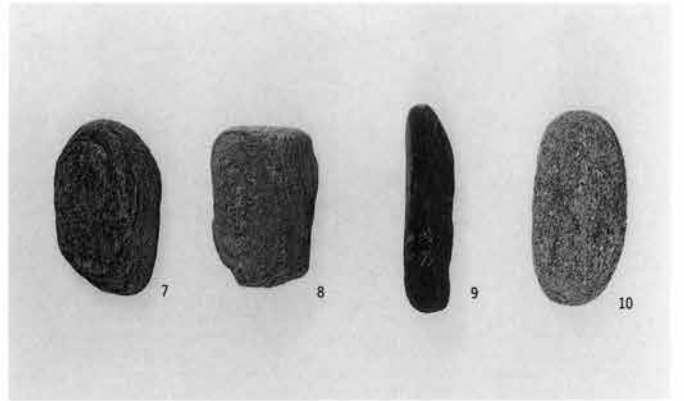
321住



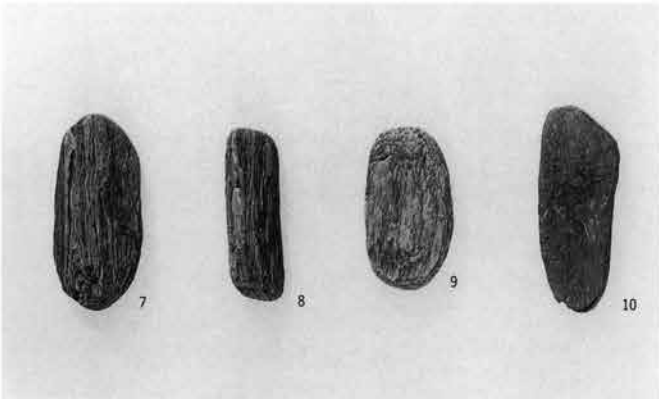
321住



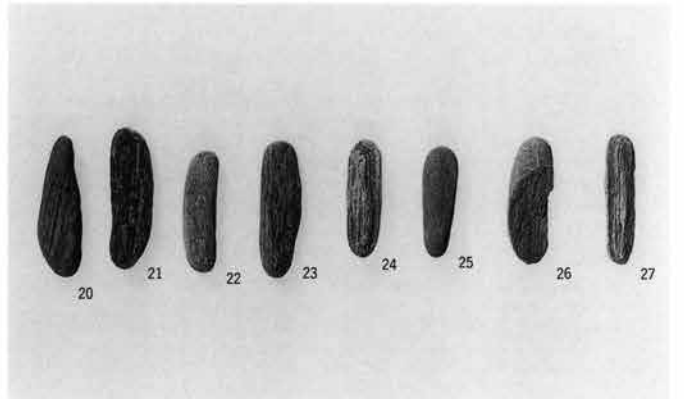
327住



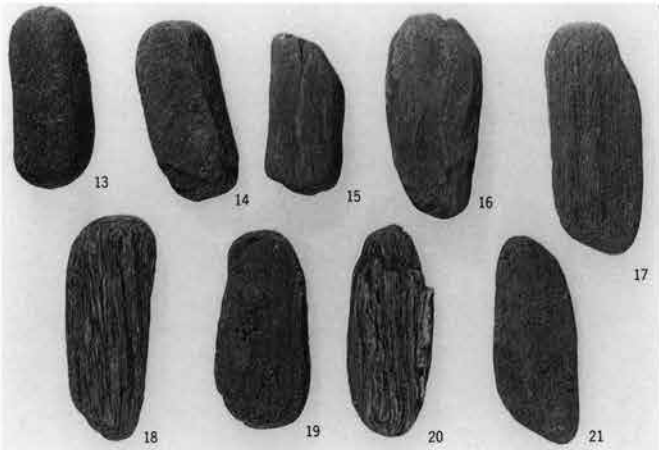
333住



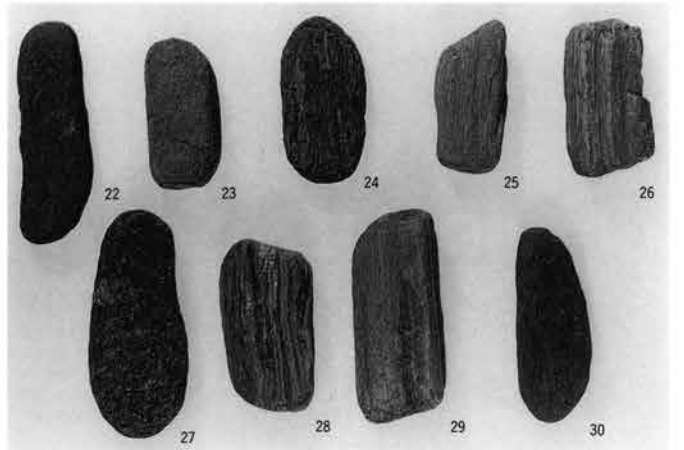
346住



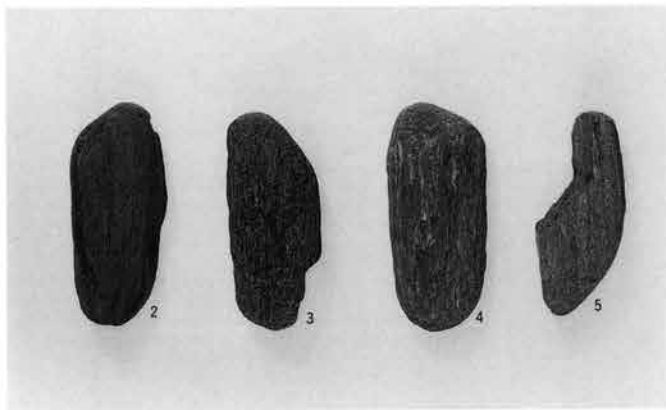
382住



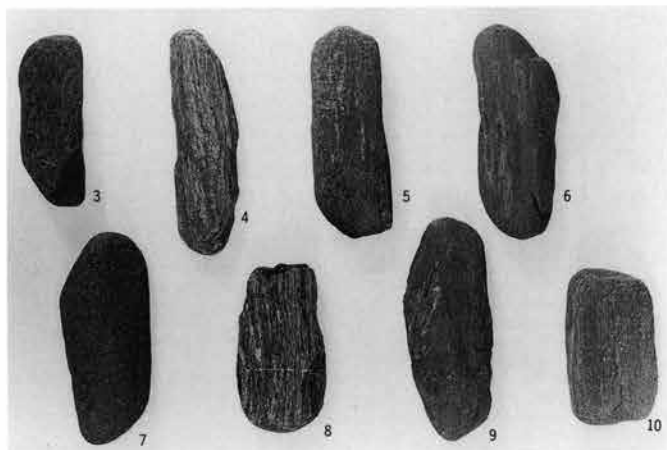
371住



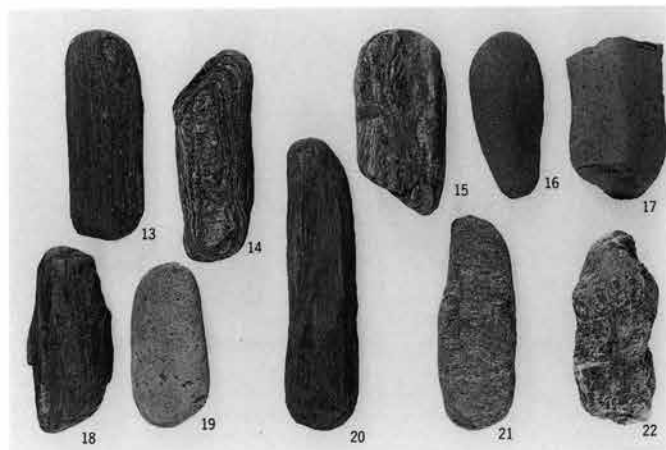
371住



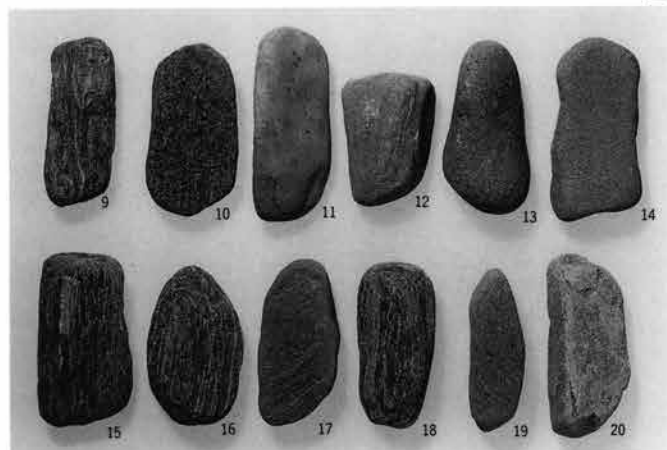
385住



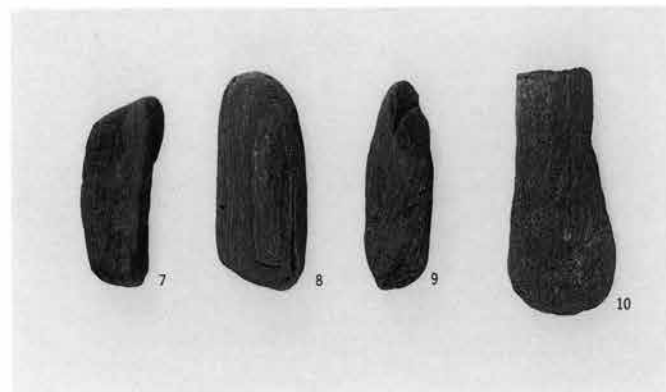
601住



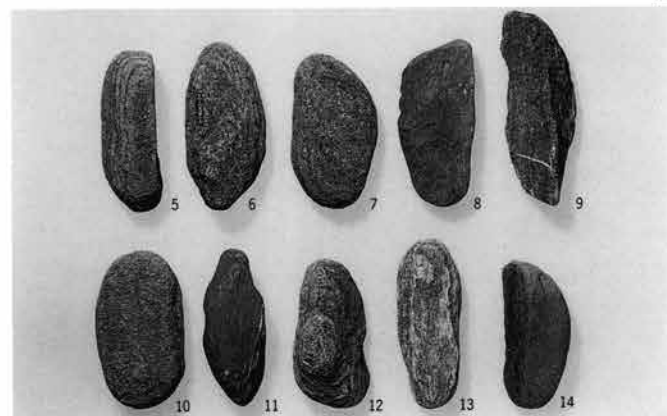
395住



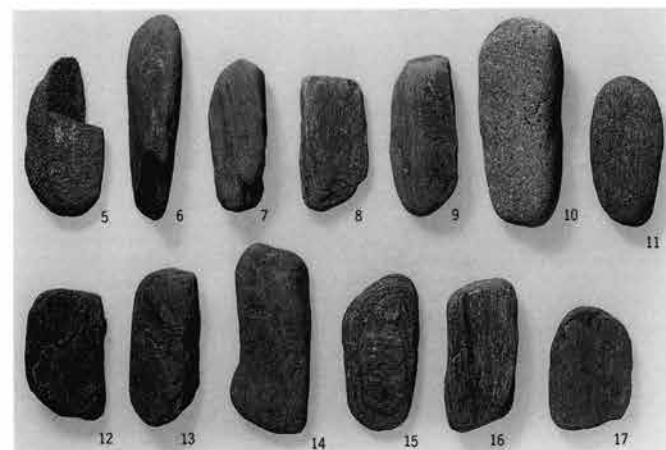
694住



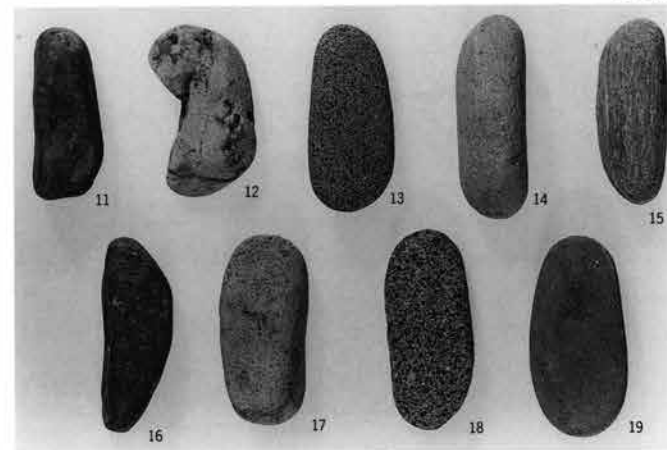
396住



695住



582住



719住

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第197集

矢田遺跡 VI

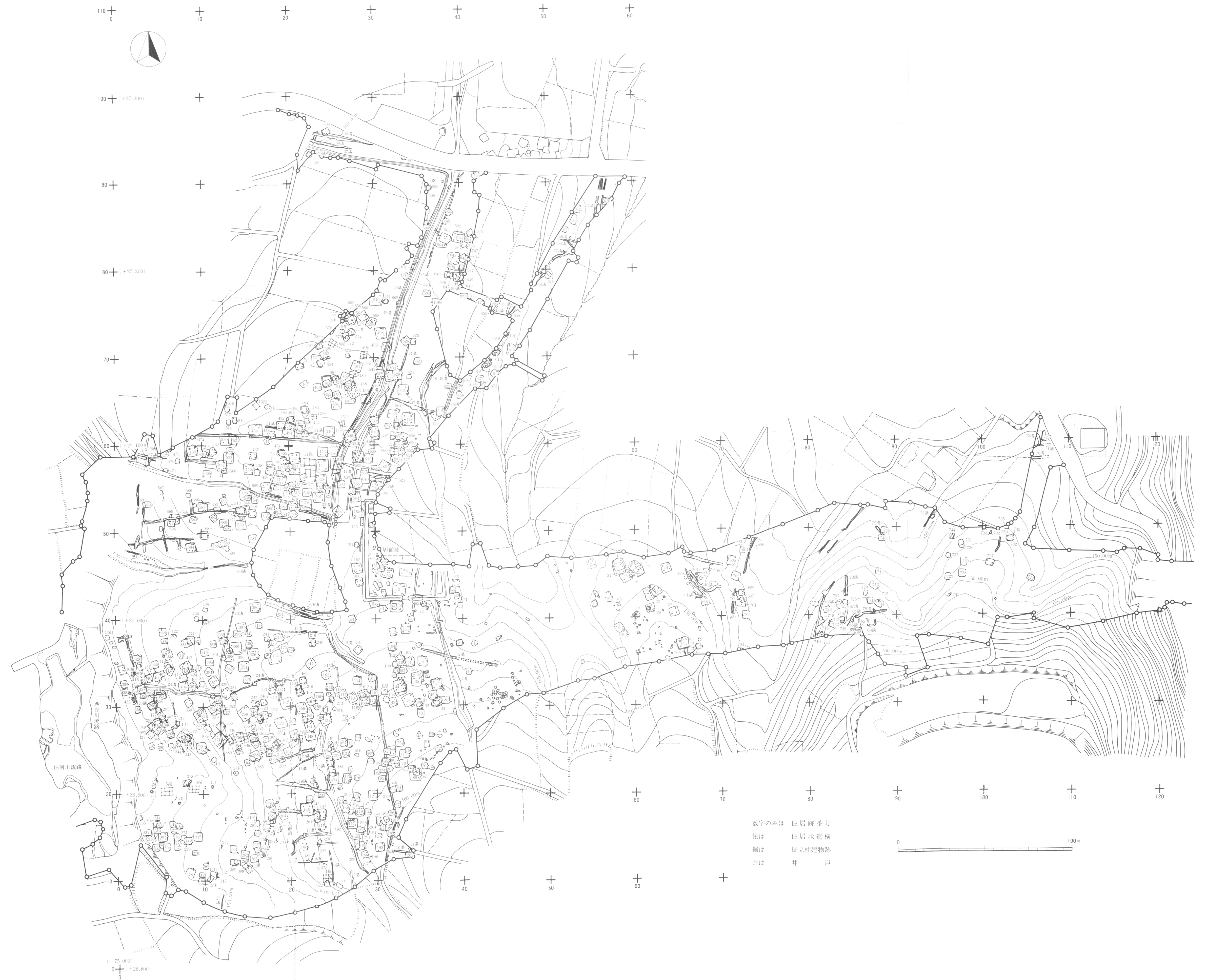
関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第34集

平成8年1月24日 印刷
平成8年1月31日 発行

編集/群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社



矢田遺跡遺構分布図(1/1000) 平成7年9月